終焉の詩姫

立川マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終焉の詩姫

【Ｎコード】
Ｎ５１９９Ｈ

【作者名】
立川マナ

【あらすじ】
『パンドラの箱』が開かれ、世界に神の『裁き』が始まった。
それぞれの使命に縛られる二人の神の子孫。全てを失い、使命を見失った人類の王。
そして――犯罪都市トーキョーで、『無垢な殺し屋』として生きる一人の少年・和幸。ある秘密を抱える彼は、神とは最も遠い存在のはずだった。カヤという少女と出会うまでは……。
神々の仕組んだ争い、トーキョーの陰謀、純粋な愛――全ては終焉へと導かれていく。

少女は過酷な運命を背負い、少年は究極の選択を迫られる。
――世界が滅んでも、君を守りたいと思った――
世界の終焉をめぐる、シリアス恋愛ファンタジーです。

＊スピンオフ小説「鈴木くんの平均的な非日常」公開中です。ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６３２５ｒ／
＊更新再開いたしました（２０１１／８／１８）

プロローグ（前書き）

ある神話をもとに書いていますが、実際の神話とはまったく関係はありません。
また、実在の都市も登場しますが、全てフィクションです。実在の国、都市とはまったく関係はありません。

プロローグ

薄暗い神殿。石造りの冷たい壁に囲まれ、ゆれる蝋燭の火がぼんやりと内部を照らしている。

そこにたたずむ少年が一人。小さい体に重々しい黒いマントを着込む、浅黒い肌をした幼子だ。彼は、じっと中央の大きな箱を見つめていた。

少年の周りには、同じく黒いマントに身を包んだ、なんとも怪しい老人たちが息をのんで箱を見つめている。少年は、老人たちを見回す。マントでしっかりとは見えないが、皆、どこか、見覚えのある老人たちだ。

ふと、ぽん、と誰かが少年の肩をたたく。

「大丈夫？」

少年が振り返ると、やはり黒いマントに身を包んだ女性が微笑んでいる。フードで頭を隠しているが、下から覗けば、その優しい顔を確認することができる。少年は、彼女の顔を見ると、安堵して微笑む。

「少し寒いだけだよ、母さん」

「そう」

彼女は、ぎゅっと息子の肩をつよく握り締めた。

少年には、母親がなぜ急に表情をこわばらせたのか分からなかった。四歳の少年には、運命を知るにはまだ幼すぎたのだ。

「フォックス」

箱のほうから、低い声が聞こえた。フォックス、と呼ばれた少年は、名前を呼ばれて振り返る。箱の傍に立ち、こちらを見つめている男は、おもむろにフードをおろす。二十代後半の若い顔立ち。浅黒い肌に彫りの深い整った顔。顎の無精ひげが、清潔感のある顔立ちに似合っていない。

「フォックス、お父さんのところへ行きなさい」

母はそう言って、少年の背中をそっと押した。周りの老人たちもその様子をじっと見守っている。フォックスは、多くの視線を浴びながら、箱のほうへと歩みを進める。

「フォックス・アトラハシス」

少年の父親は、息子の名前をゆっくりと、呪文を唱えるかのように口にした。異様な緊張感に包まれ、フォックスの歩みはなんだか遅くなる。

フォックスは、父親に促されるまま、箱の前に立つ。この箱の存在は昔から知っていた。かくれんぼをしたとき、何度かこの箱の中に隠れようとしたことがある。しかし、そのたびに、どこからともなく『誰か』が現れ、フォックスを止めた。そして、すぐに父親の元へ連れて行かれ、何時間も説教をされたものだ。三、四回それを繰り返し、やっとこりたというのに、なぜいまさらこの箱の前に立たせるのだろうか。フォックスには分からなかった。

父親は、そんな息子に説明をする様子もなく、周りを囲む、二十人近くの老人たちを見回す。

「アトラハシスの子供たちよ。
我らが偉大なる神、エンキからの神託がくだった。
再び、我々、人類に罰が下されようとしている」

「……父さん？」

父親の、こんなに恐ろしく深刻な声は聞いたことがない。フォックスは、おびえた表情で父親を見上げた。しかし、どうやらおびえているのはフォックスだけではないようだ。周りの老人たちからも不安の声がもれるのが聞こえてくる。

「『パンドラの箱』は、日の出とともに開かれる」

父親はそういうと、箱を見つめた。フォックスははっとして父親と同じく、箱を見つめた。

「パンドラの……箱？」

「我々人類は、今一度……神の『裁き』を受けることになる。人間を憎む神、エンリルによって」

父親のその言葉で、老人たちは一気に戸惑いの声をあげた。

「アトラハシスの子孫たる我々の使命は、人類を滅ぼさんとする者たちの手から、この『パンドラの箱』を守ることである。　そして……エンキはさらに私に命じた」

父親はそういうと、難しい表情でフォックスを見下ろす。

「私に、アトラハシスの王から退き……」

その言葉で、老人たちのざわめきはどよめきに変わった。

「なんと！」

「まさか？」

老人たちの視線は、フォックスに集まった。

「……え？」

父親は、覚悟をきめた表情で息子を見下ろしている。

「新しいアトラハシスの王に、我が息子、フォックスをすえよ、と」

「……王？」

時がとまったかのように、その場は静まりかえった。フォックスには、わけが分からなかった。アトラハシスという言葉は、彼にとってはただの名前にすぎなかった。アトラハシスの子供が何を意味するのか見当もつかない。ましてや、王とはどういうことなのか。

父親は、詳しい説明をするそぶりもなく、ただしゃがみこみ、フォックスを見つめた。

「フォックス。『パンドラの箱』が開いたとき、お前に、エンという名を授ける」

「……エン？」

「王、という意味だ」

「父さん、よく分からないよ。いったい、どういう……」

フォックスがすべてをいい終わらぬうちに、父親はまくしたてるように言葉を続ける。

「アトラハシスの王となるお前の役割は、この世界にふりかかる災いをしりぞくことだ」

フォックスの頭は、父親が言葉を発するごとに、どんどんこんが

らがっている。その後ろで、彼の母親は、王となる息子の背中をじっとせつない表情で見つめていた。

「アッシュ。日の出だ」

神殿の東側にある小さな窓から外を眺めていた、一人の若い男が父親につぶやいた。彼もやはり黒いマントに身を包んでいる。

父親は、すっと立ち上がると、再び箱を見つめた。

「フォックス・エン・アトラハシス」

フォックスは、その新しい名前に違和感を覚えながらも、父親をゆっくりと見上げる。

「箱が開くぞ」

「！」

窓から日の光が入るとともに、箱から不思議な光がもれはじめる。がたっと大きくゆれ、フォックスは思わず後ろにとびはねた。

「……動いた？」

周りの老人たちも、箱の異様な様子にたじろいでいる。ある者は、急に思い立ち、祈りをささげ始め、ある者はただ呆然と箱を見つめていた。

一瞬、爆発するかのように、まぶしい光が箱からあふれ、急に何事もなかったかのように静かになった。それを見届けると、父親はフォックスの背中を押した。

「今日から、これを預かるのが、お前の使命だ」

ぎいっと、きしむ音とともに、ひとりでに箱が開き始める。フォックスは、目を見開いた。ごくりとつばをのみ、じっと開いていく箱の中を見つめる。

「……え」

箱の中に眠る『運命』に、フォックスはそんな間の抜けた声しかだせなかった。

＊　＊　＊

神殿の外。止めてある黒いバイクによりかかり、男は日の出を見つめながら、タバコをすっていた。歳は十九。あごには、剃りのこしのひげが無造作に生えている。髪はかるく肩にふれるほどの長さで、ぼさぼさだ。たくましい二の腕をみせびらかすように、白いTシャツの袖をまくしあげている。彼を知らない人間が彼を見れば、ワイルドだ、という印象を受けるだろうが、実際はただズボラなだけだった。

「やれやれ、アトラハシスに先をこされるとはねぇ」

「タール！」

タールと呼ばれた男は、思わずタバコを落とした。あわてて振り返ると、そこには神秘的な顔立ちをした、黒髪の少年がふくれっつらで立っている。その鋼のような黒髪は、少年の腰まで伸び、真ん中で分けた前髪も胸にかかるほどの長さがある。瞳も黒真珠のように、漆黒で大きくクリっとしている。

タールはそのまっすぐな瞳に見つめられて、まぬけな笑顔をもらした。

「レッキ。なに怒ってんだ？」
「ちゃんと伝えたよね？　我らが神、エンリルの神託！」
タールは、やれやれ、とタバコの火を消し、ため息をつく。
「分かってるよ。心配するな」
そういうと、天に手を差し伸べる。空気をつかむように、ぐっと手を握ると、一筋の光とともに、大きな剣が現れる。タールは、力強く剣の柄を握り締め、肩にのせた。
「邪魔なアトラハシスの一族には滅んでもらおうか」
その言葉に、レッキは視線をそらした。
「どうした？　レッキ」
「……」
「罪悪感は必要ないだろ。エンリルは、すべての人類を消し去るつもりなんだからな。
そして俺は……その神、エンリルの僕（しもべ）。人類を滅ぼすお手伝いをする運命だ」
タールは、剣を肩におき、神殿へと歩みを進める。
「今から何人殺そうが、何も変わらないだろ」
レッキは何も答えず、落ちているタバコを見つめた。
「タバコ……ポイ捨てしないで」

プロローグ（後書き）

「あれ？　思っていたのと違う」と、思われた方、ぜひ、あと二、三話、読んでいただけたら嬉しいです。
本編はまた違ったテイストになっております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

kazuyuki1：1

トーキョー。大都会。犯罪都市。いつからか、この街は様々な顔をもつようになった。

少年は、いつ崩れるともしれない錆びたタワーから、その街を見下ろしていた。このタワーにもコフィンタワーという新しい名前がついた。寂れたタワーに自分の姿を見、ここで最期のときをむかえようという人間が登ってくるからだ。このタワーの下には普通の人は寄ってこない。上から落ちてくる『もの』の巻き添えになりたくないからだ。しかし一方で、飛び降りる覚悟が決まらず、そのままここで白骨化した死体もここにはあふれている。

少年は、周りを見渡した。ねずみに話しかけている老女、生きているのか死んでいるのかも分からない若者。そんな人間ばかりだ。少年はせつない表情で彼らを見つめていた。自分がなぜ、このコフィンタワーに登ってくるのか彼にもわからなかった。彼にはここにくる理由はない。

「いや……」

ふと、少年は言葉を出した。いや……もしかしたら、この世界に居場所を見出せず、ただ『死』を待つだけの彼らに、自分を見ているのかもしれない。目的も夢もなく、ただ生きているだけの自分は、彼らとなんら変わりはないのかもしれない。だから、こうして死の塔に引き寄せられるのだろうか。

少年は枠しか残っていない窓から、また外を見下ろした。光があふれるトーキョーで、なぜこのコフィンタワーにだけ光はあたらないのだろうか。

不意に、静まり返ったタワーに、携帯電話の音が鳴り響いた。少年はあわてる様子もなく、ポケットから携帯を取り出し、耳に当て

る。

「もしもし」

しばらく携帯の向こうの声に耳をかたむけ、少年は表情を変えた。大都会の夜景が映りこむ漆黒の瞳がぎらりと鋭く光る。

「了解。すぐに取り返すよ」

＊　＊　＊

トーキョーのはじにある、寂れた教会。そこはもう、教会としての役目を終え、今はある人物の事務所になっている。もう六十になるその男は、教会の奥に増築した自分のオフィスで、黒い革のイスに座っていた。

男は電話を置くと、ため息をついた。男の頭には、これまでの彼の人生の苦労をあらわすかのような薄い白髪がかぶさっている。顔には、蚕が紡いだ繭のような白い眉毛と、深いしわがきざまれ、同年代のほかの人間よりもふけて見える。少なくとも、男の『子供達』はよくそう言うのだった。

彼の部屋は写真につつまれている。壁には幾多もの彼の『子供達』の写真が飾られ、机の上には、幸せそうに微笑んでいる一人の少女の写真がある。皮肉な話だ。男は心の中でそうつぶやくと、その写真を手に取った。写真の少女を懐かしそうに見つめると、低い声でつぶやく。

「フィリオの死は、私に生きがいとなる使命を与えてくれた」

男は三十年前に亡くした娘の顔をなでた。フィリオは、なでられても表情ひとつ変えない。彼女は永遠にそこで笑っている。

「運命とは、そういうものじゃないですかね、藤本さん」

それまで黙って藤本の様子を伺っていた青年が軽い調子でそう答えた。青年は、長髪を後ろで一つに結び、ラフな格好をしている。一見、そのへんでチャラチャラ遊んでいるだけの男にもみえるが、目つきだけはするどく、ヘラヘラしているときでさえ目だけはいつも真剣だ。

この男と藤本は長い付き合いだ。だが、それは仕事上仕方がないだけで、本音をいえば、藤本は彼をどうも好きにはなれないでいた。運命、という重い言葉を、こう簡単に言い放つところも気に食わない。

藤本は写真から目を離し、机の向こうで膝を組んで座っている青年を見つめる。

「三神くん。君、いくつになった？」

三神はその質問が意外そうに目を丸くした。

「歳ですか？　二十三になりましたよ」

「二十三か。その若さで、この裏社会でビジネスを立ち上げるとは……脱帽だよ」

どこか皮肉にも聞こえるトーンで藤本がそう言うと、三神は特に気にする様子もなく肩をすくめる。

「さあ。それより、そのお歳で子供たちを束ねて暗躍されている藤本さんのほうが、脱帽に値すると思いますけど」

弧を描く三神の眉がぴくりと上がる。口元にはにんまりと妖しげ

な笑みが浮かび、鋭い眼光が藤本に向けられていた。その眼差しは、獲物を狙う鷹のそれに似ている。さては、自分に口を滑らせて何か情報を引き出そうとしているな――藤本は苦笑し、どこか気を許せないこの軽い男から目を離した。

「それで、今回の情報、どれくらい確かなんだね？」

再びビジネスの話に話題が戻ると、三神は身を乗り出す。

「いやですね。トーキョーに三神アリ、といわれるこの情報屋を疑うんですか？」

「若者はつめが甘いからな」

三神はふっと鼻で笑った。そしてすかさず言葉を返す。

「それを言うなら、あなたの部下は僕よりずっと若いじゃないですか」

「彼らは特別だよ」

藤本は表情ひとつ変えずにそう答えた。そして貝のように固く口を閉ざす。これ以上、餌はやらんぞ。藤本の態度からはその意志がはっきりと見て取れる。

情報屋の三神の前では、言葉に慎重にならなくてはならない。軽口をたたくわけにはいかない。特に、『子供』たちにかかわることとなれば、細心の注意を払わなくてはならない。でなければ、いつそれが情報として誰かに売られ、自分の足元がすくわれるか分かったものではない。

三神はそんな藤本を観察するようにじっと見つめてから、微笑した。「特別……確かに、特別ですね」とさらりと流すようにつぶやいて、電話に目をやる。

「さっきの電話の相手は？」
「あぁ。和幸だよ」
その名前に、お、と三神は声をあげた。
「彼ですか。そういえば、ずいぶん会ってないなぁ。元気ですか？」
教科書に書いてあるような典型的な質問に、藤本はフッと笑った。
「元気じゃなければ、仕事を頼んだりしないよ」
「それもそうだ」三神は、ははは、と明るい笑い声をあげてそう言って、すぐにその笑顔を消し去った。「でも、ほら……」
彼の声色が顕著に変化したことに気付き、藤本は三神に目をやる。若き裏世界の情報屋は、試すような視線で藤本をじっと睨みつけていた。恐れなど知らない、若いエネルギーがみなぎる瞳で。
「彼も特別な子供だから。きっと、もう長くはないんじゃないかと思って」
藤本は白い眉をぴくりと動かしただけで、口を開く様子はなかった。

＊　＊　＊

トーキョーのトシンから離れたところに、高級住宅がならぶ一角がある。このご時勢、金持ちになれるのは大抵、裏の仕事にたずさわっている連中だ。人にいえないことをしていながら、堂々と屋敷を建てる。それはいつのまにか常識になり、暗黙の了解となった。

金持ちに質問するな。それが、トーキョーで生き残る方法だ。
和幸は、ある屋敷の前で立ち止まると、高層ビルにはさまれて不気味に聳え立っているコフィンタワーをながめた。さっきまで自分があそこにいたとは思えないほど、それは遠い存在に思える。求める人にのみ、扉を開く。まるで教会のような場所かもしれない。和幸は、ふとそう思った。

「さて……」

ため息混じりにそう言って、和幸はそれまでかぶっていた帽子をはずし、ズボンの腰に乱暴にさしこんだ。帽子のせいでへんな癖のついた髪を、和幸はぐしゃぐしゃと手で適当に整える。その黒い髪は、女性だったら自慢になるくらい、サラサラとした直毛だ。ショートだというのに、そのきれいな髪は人に強い印象を与える。だが、彼の際立った身体的特徴といえば、それくらいだ。背の高さも同年代の平均だし、顔も平均的だとよくいわれる。一体、平均的な顔とは何だ、と和幸は友人に聞いたことがあるのだが、そのとき言われた言葉といえば、「かっこよくもないし、かっこわるくもないのよね」だった。もしかしたら、それはショックなことだったのかもしれないが、和幸にはどうでもよかった。彼は、見た目を気にしたことはない。彼にとって、生まれ持ったものは、自分には関係ないものだからだ。
なぜか、と彼に尋ねれば、きっとこう答えるだろう。もともと、全て自分に与えられたものではないのだから――と。
和幸は膝や腕を回し、簡単にストレッチを施すと、屋敷を見上げた。

「『お迎え』の時間だ」

ため息混じりにそう言い残し、目の前にそびえる門を、和幸は軽

々と飛び越えた。それはジャンプというより、飛翔に近かった。庭に降り立つと、背を低くして、玄関まで音もたてずに走っていく。走りながら、黒の皮手袋をはめ、玄関につくやいなや、ドアノブに手をかけた。鍵がかかっているのは分かっている。でも、彼には、そんなことは問題ではなかった。

ドアノブをまわすこともなく、そのまま後ろにひっぱると、ガキン、という鈍い音とともに鍵がこわれ扉が開いた。その音で、誰かがおきたかもしれないが、それも和幸にはどうでもよかった。ポケットから携帯を取り出すと、ある画像を見る。それは、ある少女の写真だ。

＊　＊　＊

二階の子供部屋は、人形であふれていた。少女には、一体ここがどこなのかよく分からなかった。天蓋のあるかわいいベッドの中で、ぼうっと頭上につるされている星を見つめる。このベッドも、この部屋も、何も見覚えはない。気づいたら、ここに暮らしていた。でも、ここは自分の部屋だ。なんとなく、その意識ははっきりしていた。

ママとパパは優しくて、私の名前はユウ。七歳の少女は、その言葉をいつも頭の中で繰り返していた。なぜなのかは彼女にも分からない。なぜ、毎晩、さびしくなるのかも分からない。ぽろっと少女は、自分の目から涙が落ちるのに気づいた。しかしそれでも、目をつぶって眠りにつくことしかできない。分からないことだらけなのに、理由を聞こうという気持ちはどこからもわくことはなかった。

少女は、ベッドに鼻までもぐると、ただ目をつぶった。ふと、部屋のドアが開く音がした。少女は、また目を開いた。相変わらず星が頭上でゆれている。

「ママなの？」

誰かがベッドに腰を下ろしたのを感じた。ギイっとベッドがきしむ音がする。少女はゆっくりと体を起こした。

「ママ？」

少女は『誰か』を見つめた。暗くて顔がよく分からない。しかし、その影がママとは違うことは明らかだった。では……

「パパ？」

人影は、スッと少女に手をのばした。

「小夜子ちゃん」

「え？」

少女は確信した。その人影は、ママでもパパでもない。差し伸べられた手におびえながら、少女は声をしぼりだす。

「誰？」

「俺は和幸」

「かず……ゆき？」

「小夜子ちゃんを迎えにきたんだ」

和幸はにこりと優しく微笑んだ。

「小夜子？　私はユウよ」

「……」

少女の言葉に、和幸は表情を曇らせる。差し伸べた手をゆっくり

と戻すと、ため息をついた。

「催眠術か」

ふと、下で物音がした。それに続いて誰かが騒ぐ声が聞こえる。どうやら、和幸が侵入したことに気づいたようだ。

「お兄ちゃん、悪い人？」

少女の純粋な問いに、和幸は苦笑した。

「難しい質問だ」でも、と和幸は続ける。「少なくとも、君の偽者のパパとママよりはマシだと思うよ」

「え？」

和幸は戸惑う少女の目の前に手のひらを広げる。

「？」

「本当のパパとママは、小夜子ちゃんの帰りを待ってる。だから、帰ろう」

「どういうこと？」

「強い催眠術で、記憶を変えられてしまってるんだ。今から、解いてあげる。怖がらないで」

そう言うと、少女の目の前で開いていた手のひらを、フィンガースナップの形に変える。――そのとき、ドアが勢いよく開いた。

「誰だ！？」

「パパ！」

少女は入ってきた人物に声をあげる。和幸は振り返りもせず、少女の肩を別の手でおさえた。

「ユウ！」

パパと呼ばれた男は、状況を把握すると血相をかえた。

「お前、何してる？」

「分かってるだろ」

男は和幸の手を見つめた。少女の前でフィンガースナップの準備をしている。男の額からはいやな汗がふき出し始める。

「まさか……」

男の後ろから、寝巻きにカーディガンを羽織った女がかけよってきた。女も部屋の中の様子に気づき、悲鳴をあげる。

「ユウ！？」

「落ち着け、ミドリ」

男は、部屋に入ろうとした女を止めた。そしてじっと和幸を観察する。

「お前……カインか」

その言葉に、女はハッと目を見開いて和幸を見た。

「カイン……『無垢な殺し屋』！？　彼が？」

「……」

和幸は何も言わずに、フィンガースナップの指に力をいれる。少女は、おびえて黙り込んでいる。

「待ってくれ。金を払う！」

男はすがるようにそう怒鳴った。

「そうよ、お金、払うわ。だから……ユウを」

「この子は、ユウじゃない。小夜子だ」

和幸は、冷たい視線で二人に振り返る。

「悪いな」

「やめて！」

和幸は、パチンと指をならした。小夜子は、一瞬、目を開けたまま固まった。ミドリは、その場にくずれるように座り込む。

「せっかく、ユウを取り戻したのに……」

男は怒りに震える拳を握り締め、和幸にとびかかるように向かっていく。小夜子は相変わらず、ぼうっとしている。和幸は男に気づくとさっと身を翻し、男の腕をとってぐいっと後ろにまわした。

「ぐわあっ」

無表情のまま、和幸は腰にしまっていた銃をとりだし、男につきつける。

「俺をカインと分かっていながら、いい度胸だ」
「ぐあ……」
和幸の指が引き金に置かれたのに気が付くと、ミドリはハッとして震える足で立ち上がった。
「やめて！お願い！　ユウを失って、その人まで失ったら……。つらかったのよ。娘が死んで、寂しくて……もう、私たちには子供がうめないのに。だから」
ミドリは、自分のお腹をさすった。そこに子宮はない。誰にでも分かることだった。和幸が銃をつきつけているこの男にも、生殖機能はもうないだろう。それが、この世界のとりきめだ。人口を抑制するための、人工的な自然淘汰だ。子供は一人。一人生んだ夫婦は、避妊手術を受けるのが義務だ。
「だからって……」和幸の銃を握る手に力がはいる。「金で人の子供を買うのか」
高級住宅街に銃声が鳴った。でも、誰も気にはしない。
理由を聞くな。それが、ここで生き残る方法だ。

kazuyuki1：2

「小夜子！！」

みすぼらしい格好の女性が、化粧もしていない顔を涙でぬらして微笑んだ。和幸の手を離し、彼女にむかって小夜子が跳ねるようにしてかけていった。

何度見ても飽きることのない親子の再会。和幸はその瞬間を目を細めて見守った。

トーキョーのはじにそれはある。通称『カインノイエ』と呼ばれる組織の隠れ家だ。元は教会だったものを、事務所のように改装した。

何を隠そう、和幸もカインノイエの一員。カイン――別名『無垢な殺し屋』で知られる子供たちの一人だ。

「和幸」と、不意に、低い声があたりに響いた。

はっとして声のしたほうに目をやると、祭壇の左、その奥にある小部屋に続くアーチ天井の廊下から男が現れたところだった。薄い白髪頭の初老の男だ。たまごのような輪郭の顔に、優しげな笑みを浮かべてこちらに向かって歩いてくる。――藤本マサル。カインノイエの創立者であり、カインと呼ばれる少年たちを束ねるリーダーである。

その傍らには、よれたスーツ姿の青白い顔をした男。和幸にはすぐに分かった。あの、今にも倒れそうな男こそ、小夜子の父親だ、と。

父親は急に立ち止まると、まっすぐに和幸を見てきた。その瞳には涙が浮かんでいる。堪えるようにぐっと唇を噛み、深々と頭を下げた。

和幸は目を細め、ため息混じりに微笑んだ。
父親は頭を下げたままぴくりとも動かない。放っといたらいつまでもこのままでいそうだ。やがて、隣にいた藤本が父親の背中をさすり、「さあ」と促す。そうして、やっと父親は遠慮がちに頭をあげた。藤本の手を握り、何度も「ありがとうございます」と繰り返した。よほど不安だったに違いない。毎晩のように泣いていたに違いない。声はひどくかすれ、弱々しく震えていた。
父親はくるりと振り返り――小夜子の姿を見るやいなや、母親と同じように涙をこぼして駆けだした。

「小夜子！」と叫ぶ彼の声が、教会に響き渡る。床にひざをついて、小夜子をぎゅっと抱きしめる。「パパ？」とあどけない少女の戸惑った声が聞こえてきた。たまらず、母親もしゃがみこみ、父親ごと小夜子を抱きしめる。
この教会では今や『お馴染み』の光景だ。
藤本はそんな三人の様子を見守りながら、和幸に歩み寄る。

「ご苦労だった」とねぎらうと、和幸は「たいしたことないよ」と無表情で答えた。その視線は、念願の再会を果たした家族へと向けられてぴたりと固定されている。
幼いときから和幸を育ててきた藤本には、彼は実の息子のようなものだ。表情からその心情を推し量ることもたやすい。じっと彼の様子を見つめて、足元に目をやる。和幸の足元には血のあとがあった。和幸にはどこにも傷はない。藤本は心配そうなまなざしで和幸を見る。

「撃ったのか」

その言葉に、和幸ははっとして藤本に振り返った。

「……」
「殺したのか」
藤本の声にどこも怒っている様子はなかった。もちろん、怒ってなどいないからだ。彼の部下であるカインと呼ばれる子供たちには、どこか倫理という点でかけているところがあった。その原因は容易に分かる。だからこそ、藤本は彼らに対して、常識を押し付けようとはしていなかった。
和幸は、ふと自分の足元を見つめると、首を横にふる。
「殺してない」
「……」
「足を撃っただけだよ」
そう小さく言うと、藤本に微笑みかけた。
「そうか」
和幸はほかのカインとは違っていた。命というものに、異常な執着があるようにみえた。それは、自分の命だけでなく、他人の命に対してもだった。命というものに、彼は常に問いかけているようだった。だからこそ、『無垢な殺し屋』とも言われるカインの中で、唯一、人を殺したことがなかった。
「和幸くん」
間の抜けた明るい声でそう呼んだのは、三神だった。藤本は用が済んだら帰れ、と何度も言ったのだが、結局、彼はずっとここに居座っていた。

「三神さん？」どこからともなく現れた情報屋に――実際にはトイレで用を足していたのだが――和幸は目を丸くした。「お久しぶりです」
「やあやあ、久しぶり。元気そうだね」
近づいてくる三神を避けるように、藤本は小夜子の家族のほうへ向かった。三神はそれを横目でみながら、和幸に近づく。
「三神さんも元気そうで」
「いやいや、情報集めて売ってるだけだからね。君みたいに命の綱渡りはしてないから」
「……」
「あ、気に障ったかな」
三神はいたずらをした子供のような笑顔をみせる。和幸は藤本と違って、このつかめない性格をした男は嫌いじゃなかった。
「いえ」
「君の情報もよく回ってくるよ。いまだに、誰も殺せてないみたいだね。人を殺さないカイン……天然記念物だよ」
和幸はその皮肉に、ただ口元だけ笑って答えた。
「お兄ちゃん」
不意に、袖が引っ張られるのを感じて、和幸は振り返る。そこには、いつの間にか、小夜子がちょこんと立っていた。頬を赤らめ、満面の笑みを浮かべている。
「小夜子ちゃん」和幸は頬を緩めて、しゃがみこんだ。小夜子の頭

に手を乗せて、優しく撫でる。「元気でね」

もう二度と会うことはないだろう。少女の笑顔を目に焼き付けるようにじっと見つめ、和幸はそうつぶやいた。――願うような気持ちで。

「うん！」と、元気よく小夜子は頷き、和幸に小さな手をふる。「ばいばい」

それだけ言って、小夜子は両親のもとへとかけていった。まだ幼い彼女には、自分の身に何が起きたのかまだ理解はできないだろう。いや、それでいいのかもしれない。そのほうがいい。できることなら、このまま、彼女が全てを忘れてくれればいいと思う。大人になって、この全ての出来事を不思議な夢だった、と思ってくれればいい。そのほうが、きっと幸せなのだから。

そんなことを考えながら、和幸は立ち上がる。教会の扉の前で、小夜子と手をつないだ両親が深々と頭を下げていた。和幸はただ微笑んで、心の中で祈っていた。もう二度と、彼らがこの教会に現れないように、と。もう二度と、彼らが自分に頭を下げることなどないように、と。

この教会の扉を叩く者、カインである自分を頼る者、それはすなわち、この理不尽なトーキョーという世界の犠牲になった者たちなのだから。

「人身売買は増え続ける一方だな」

家族が教会からでていくのを見送る和幸の隣で、三神はポケットに手をつっこんで冷たく言った。

「貧富の差が広がり続ける限り、犠牲になる子供はもっと増える。

今でさえ、半分も取り返せてないんだろ」
「……」
「君たちカインだけじゃ、どうにもできない」
藤本が戸締りを始めている。和幸は三神の忠告に耳を傾けながら、ただ見ていた。
「それに……君たちカインの時間は限られてる。とても盗まれた子供たち、全員を迎えにいけるとは思えない」
「！」
三神が珍しく遠慮がちに言った。和幸はなぜか、言われた内容よりもそちらのほうが気になっていた。
そんなこととは露知らず、三神は黙っている和幸を見て申し訳ない表情を浮かべる。自分の言葉がまだ十七の少年を傷つけた、と思ったからだ。
「久しぶりに会って、言いすぎたかな」
そんなことを言う三神は心底意外だった。和幸はフッと思わずふき出していた。それに驚いたのは三神だ。怒らせるようなことは言ったが、笑わせるようなことは何もなかったはず。
「なんだ？」
「いえ。反省する三神さん、初めて見た気がします」
「な……」
そんなことを言われるとは夢にも思っていなかった三神は、きょとんとしてしまった。

「ははは、失礼だな」
「すみません」
「まあ、君の人生だ。好きなように使えばいいさ。僕も手伝えることはなんでもする」

親切な言葉のように聞こえるが、真意は安易に分かる。和幸はため息混じりに微笑んだ。

「そうやってお得意さんを増やしてるわけですね」
「ばれたか。まあね。ベンチャーは姑息にならなきゃやってられないよ」

三神はまた、ははは、と明るく笑い飛ばした。

「裏社会でベンチャー、ですか」

やはり、この人は嫌いじゃない。和幸は心の中でつぶやいた。

殺し屋の劇

少女Ａは、差し出された手をじっと見つめた。期待と不信感。自分の中でうずまく感情は複雑に混ざり合って、それが何なのか自分でも分からない。ただ、この手をとれば、全てが変わる。それだけは確信していた。そして、確実に何かを失うことを彼女は知っていた。

少年Ａは、少女Ａに微笑んだ。

「大丈夫。俺は、君を迎えに来たんだ」

迎えに来た…どうして、彼がこんな表現をしたのか、彼女には分からない。彼こそ、人の家に侵入してきて自分を連れ去ろうとしている張本人なのに。でも、彼の笑顔はどこか不思議な優しさをもっていて、彼女は信じたくなった。

「あなた、誰なの？」

静かにそういうと、少年Ａは答える。

「俺は、カイン」

＊　＊　＊

なんなんだ、これは？　俺は渡された台本を途中でやめて閉じた。台本をゆっくりおろすと、目の前にはブレザーの制服姿の少女が。ショートヘアの、人懐っこい猫みたいな顔だちをした女。くりっとした大きな瞳を爛々と輝かせ、俺に熱い視線――期待の眼差しを送りつけている。

とぼけてしまいたいところだが……何を期待しているのかは明白。この台本の感想だ。何を隠そう、こいつ……クラスメイトの近江アンリこそ、この台本――どちらかといえば小説のような気もするが――を執筆した張本人。

「で？　どうだった？　和幸」

ぐいっと身を乗り出して、アンリは俺にそう迫ってくる。目は大きく見開かれ、長いまつ毛は上下に別れてぴたりと待機。重なりあう様子はない。瞬きの仕方を忘れてしまったんじゃないか、と心配になる。

やけに抑揚のある声からも、興奮しているのが手に取るように分かるのだが、期待に応えられそうにはない。

どうだった？　と聞かれてもだな……こんな、カインをヒーローに仕立て上げる話を、カインの俺にみせて、どう反応しろって言うんだよ。

「さあ。どうだろう」

まあ、アンリはそんなこと知っているわけはない。とりあえず、言葉をにごすことにした。

そもそも、俺がカインであることは極秘。誰が、殺し屋です、なんて自己紹介するもんか。といっても……俺は、誰も殺したことはないけど。

こうして普通の高校に通って普通の生活をすることができるのも、カインである事実を隠しているからだ。

「どうだろう、じゃないでしょ。何かしら、感想はあるはずよ」

授業前のあわただしい教室で、ひときわ高い声をあげるアンリ。

なぜだか知らないが、こいつはことあるごとに俺にちょっかいをだしてくる。明るくてうそがつけない性格は、自然と人を集める。彼女の才能だろう。嘘をつくしか生きる方法がない俺とは正反対だ。映画研究会なんていう変人の集まりを組織できるのも、そんな彼女くらいだろう。俺も、その変人の一人だけど。高校にはいってすぐに、アンリに目をつけられ、しつこく勧誘されたのだ。同じクラスになったのが運のつきか。それからというもの、こいつの趣味につき合わされている。

俺はまた厄介ごとに巻き込まれるのか、とため息をついた。

「感想……」

正直に言おうか？俺はカインだが、こんなロマンティックな出来事にでくわしたことは一度もない。現実的じゃない。当然、そんなことはいえない。

「カインを題材に、こんなラブロマンスな映画つくったら、怖い人たちに目つけられるぞ」

「あら、どうして？」

絶対に心当たりがないわけじゃないだろう。俺に言われて、アンリは目をそらしてごまかしている。彼女もわかっているのだ。俺たちカインは、誰にとっても悪者だ。唯一、俺たちを支持しているのは、虐げられている人々。被害者。弱者。そういう人たちだけだ。権力を持つものは俺たちを嫌う。だが、世の中の常識をつくっているのは、そういう奴らだ。

「知ってるだろ？　カインはただの人殺しだよ」

裏の世界では、俺たちカインは有名人だ。だが、表では、まるで

都市伝説かのように語られている。殺し屋として裏の世界で育てられた少年少女。それが表で語られるカインだ。
だが、アンリは、俺の言葉にむっとした表情をみせた。
「そんなことないわよ。カインはただの人殺しじゃないわ」
「まぁた、お前はそういうこと言って……」
アンリは、どうもカインを神格化している節があった。今回だけじゃないのだ。こうして、カインを題材にした台本をもってきたのは。そのたびに、俺が難癖つけてボツにしてきたんだけど。
「いろいろ調べたのよ、これでも。カインのこと」アンリは、ぐいっと身をのりだしてきた。「知ってる？　裏では、人身売買が当たり前のように行われてるって」
「……」
おいおい。どこからそんな情報ききだしたんだ？　俺は、何も答えられない。そんなこと、ただの高校生が調べ上げられることじゃない。
「じ、じんしんばいばい？」
しぼりだした演技は、無残なものだ。だが、夢中になって話しているアンリは、そんなこと気に留めることもない。
「そう。それで、カインはね、その売られた子供たちを取り返しているの。世間では、ただの殺し屋だなんていわれてるけど……本当は、子供たちを守るために……」
俺は、変な胸騒ぎを覚えた。

「アンリ、お前、もしかして……」
「え？」

俺の問いに、アンリは丸い目をこちらに向けた。身を乗り出したアンリの顔は驚くほど近くで、俺は思わず言葉を詰まらせた。

「なに？」
「い、いや……」

自然を装って、俺はイスの背もたれによりかかった。

「なんていおうとしたの？」
「なんでもない」

窓の外を見る。夕べと違うトーキョーの姿だ。太陽は、コフィンタワーにもその光をおしみなくそそいでいる。昼と夜で、姿を変えるのは俺も同じか。俺は、嘘をついて暮らしている。嘘をつかないと、昼の世界で生きていけない。でも、それは俺だけじゃないのかもしれない。

アンリにまた目をやる。彼女はまた台本を自分で読んでいる。高校に入学してから二年間、同じクラスでよく一緒にいた。カインに興味をもっているのは知っていた。でも、なぜ今までその理由に気づかなかったんだろう。

「アンリ、台本、見せて」
「見せて、て……もう見たでしょ」

戸惑うアンリをよそに、俺はうばうようにアンリの手から台本を取った。また中を読み返す。

「……なによ？」

本当に、どうして気づかなかったんだろう。俺は、自然と笑みがこぼれているのに気づいた。アンリは、気味悪そうに俺のことを見ている。

「感想、言ってなかったよな、まだ」さっき読んだときに、なぜ気づかなかったのか。「すごく現実味のあるストーリーだよ」

アンリは、俺の感想に目をぱちくりさせた。

そう。俺たちカインが迎えに行った子供たちは、今もどこかで生きているんだ。彼らもきっと、権力を恐れて、その過去を隠しているに違いない。俺が、カインだということを隠しているのと同じように。

たとえ、私は売られたんだ、と警察に言っても、何も正しいことはなされないだろう。皆、知ってるんだ。このトーキョーでは、正しいことをしても自分の首をしめるだけだ、と。黙っているしかないんだ。

「いつから撮影するんだ？」

「へ……」

「なんだよ、そのまぬけな顔は」

「だって、あんたがこういうことに前向きな姿勢みせたことないから」

「……まあ、ちょっとな」

断るには、ストーリーが現実的すぎたんだ。

ガラッと扉が開く音がして、担任が入ってくる。アンリは、あわてて席を立った。

「ちなみに」自分の席に戻る寸前、アンリは俺に言った。「これ、映画じゃなくて、文化祭の劇よ」
「……は」

アンリが自分の席に戻って、アンリがさっきまで座っていた席には中村が座った。中村は、後ろに振り返って俺ににやついた。

「相変わらず仲いいな。アンリとお前」
「……」

担任が、出席を取り始めた。俺は、アンリが言い残した言葉がひっかかって仕方がない。中村のセリフが頭に入ってこなかった。

「おい、藤本？」
「なあ、中村。文化祭の劇、てなんだよ」
「あぁ。アンリがはりきってるやつだろ。何やるのか知らないけど」

中村は、はは、と笑って、前に向き直った。
文化祭の劇で、あんな話をやるのか？　カインのラブストーリーを？　劇で？　どんな笑いものになるのか分かったもんじゃない。それよりも……大問題になるに決まってるだろう。てっきり、あいつの趣味でおわる話だと思っていた。あいつの撮影はただの遊びで、つくった映画はアンリのコンピューターで一生眠りにつく。今回もそうだと思っていたのに。
俺はため息をついて頭をかかえた。

「藤本！」

担任が、俺の苗字を呼んでいるのが聞こえた。声の調子からして、

ずいぶん呼んでいたみたいだ。アンリの劇のことで頭がいっぱいで気づかなかった。そもそも、藤本、という苗字は、カインの皆が使っている苗字だ。俺の苗字じゃない。カインの苗字なんだ。藤本さんには悪いけど、俺はこの苗字を好きにはなれなかった。

「はい」

もう遅いだろうが、とりあえず、返事をする。担任は、眉をひそめて俺を見る。

「元気そうじゃないな。何、悩んでる？」

「何も悩んでませんよ」

たとえ悩んでたとしても、そう聞かれて答える奴があるか。この担任は、典型的な世襲教師だ。親のコネではいってきただけ。高校でも、かわいい女生徒ばかりに目をつけてはなんだかんだといちゃもんつけて、職員室に呼び出している。

「おそらく来週の期末試験の心配かな」

そう切り出して、担任は期末試験の話を始めた。

急に隣のクラスがざわつくのが聞こえてきた。何人かが気になって、顔を見合わせる。ホームルームで何か盛り上がれることがあるだろうか。

「転校生？」

誰かがそうささやくのが聞こえてきた。

『パパ』からの伝言

昼休みになって、やっとその話題がでてきた。
このクラスになって話すようになった平岡が俺の席に近づいてくる。

「なあ！　転校生だってよ」

平岡は、噂話が大好きな奴だ。野球部みたいな頭して、ガタイもいいのだが、スポーツとは全く縁がない。女みたいに噂話をひろってきては、こうして俺に報告しに来る。会って一週間で、ちょっとした三神さんみたいな奴だな、という感想をもった。もちろん、三神さんほど腹黒くはないけど。

「転校生？」

正直、そこまで興味があるわけでもない。それよりも、早く売店でメロンパンでも買いたかった。
話に興味があるふりをしながら、立ち上がり、とりあえず平岡をそのまま売店へと誘導する。

「隣のクラスに入ってきたんだってよ」

どうも、よく聞くセリフだ。

「パンでもくわえて遅刻してきたのか？」
「ははは、なんだよ、それ」

教室から出るとき、アンリとすれ違った。アンリは、親友のコト

ミと夢中で話しこみながら教室へ入っていく。

「超きれい」アンリは、いつもの甲高い声ではしゃいでいる。

「モデル？」

俺は、いつのまにか脚を止めていた。

「どうした、藤本？」平岡が俺の背中にぶつかってそう言った。

「いや……」興味がないふりをそのまま続けながら、平岡に聞く。

「で、転校生って？」

その言葉に、平岡の目が輝いたのがよくわかった。

売店へ行くまで、何人かがやはり転校生の話をしているのを耳にした。しばらくは、彼女の話題でもちきりになるだろう。平岡の情報だと、彼女はイラン人。完璧な容姿と頭脳で、前の学校でも注目の的だったとか。転校してきた理由は、親の仕事の関係。

だが、実は、彼女にしつこく言い寄ってきた男たちが、何者かにボコボコにされ、病院送りにまでなり、学校から追い出された……なんていうホラ話も校内をめぐっていた。転校してきた数時間で、ゴシップの餌食だ。

「きっと、彼女のストーカーかなんかだよ。そいつが、ほかの男たちをボコボコに……」

そのゴシップに見事に振り回されているのが、この平岡という男。しかし、そこまでのうわさを作り上げるほどの女性とはどんな美人なのか。悔しいが、確かに興味がでてきた。

「それで」売店で、どのパンを食べようか一通り目を通しながら、平岡に言う。「その子、名前は？」

平岡が、うれしそうに微笑むのが目の片隅で見えた。そして、次の瞬間――

「かーずゆき」

「え？」

いきなり、誰かが背中から俺を思いっきり突き飛ばした。俺はそのままバランスを崩して、パンの山に顔をつっこむ。平岡の笑い声と、まわりの嘲笑が聞こえてくる。

俺には犯人の目星がついた。あの調子のよいきゃぴきゃぴ声と、後先を考えない浅はかな行動。

パンから顔をぬき、勢いよく振り返る。そこには、やはり彼女がいた。

「へろー、和幸」

自分のせいで俺が笑いものになったことをまったく自覚していない。俺は、自分がひどいひきつり笑顔になっているのに気づいた。

「砺波（となみ）、どういうつもりだよ？」

彼女の名前は、砺波。俺と同じ、カインの一人。

またパーマをかけなおしたんだろう。胸まである黒髪は、どっかのお嬢様みたいにくねくねカールしている。髪型だけみれば大人っぽいのだが、こいつはいわゆる童顔、てやつだ。本人はそれを嫌がっているんだが。そんな幼い顔立ちは、『守ってあげたい妹』タイプ、てところかな。こいつをなにも知らない奴が初めて見たら、清楚な和風美人だと思うだろう。ま、その勘違いもこいつと会話していけば、すぐに消え去るだろうけど。

「どういうつもりもなにも、『パパ』から伝言預かってきたのよ」
周りの目も彼女に集中している。そりゃそうだ。彼女のセーラー服は、他の女生徒のブレザーとまったくの別物なんだから。だが、それよりも注目を集めているのは、彼女のあまりに短いスカートかもしれない。
平岡が俺の隣できょとんとして立ち尽くしているのが分かる。
「伝言ってなぁ、電話すればいいだろ。ちょっとこっちこい」
周囲の目が気になって、俺は砺波を下駄箱のほうへとひっぱっていく。
「ひどぉい。せっかく、こうして会いに来てあげたのに」
「会いにこなくていい！」俺はめんどうくさそうにため息をついた。
砺波はそんな様子にかまうことなく、不満そうにふくれっつらをしている。
「どうしてそういう寂しいこと言うかなぁ。最近、全然会ってなかったから、こうしてわざわざ学校にまでおもむいて……」
「だから、学校に会いに来る必要ないだろ、て」
彼女は、カインの中でも緊張感と慎重さが大いに欠けている人物だった。ノリと気分で行動し、エンターテイメントを優先する危なっかしい女だ。
「それで、藤本さんからの伝言って？」
「そうだった、そうだった。まずはじめに、携帯、『実家』に置き忘れてるから取りに来い、て」

そこで、俺ははっとした。そういえば、携帯がない。ここで、砺波がずっと俺をからかっていたことに気づく。俺に会いにきた？携帯がないから、直接言いにくるしかなかったんだろ。

ちなみに、『実家』というのは、俺たちカインの中でつかっている暗号だ。俺たちカインの隠れ家。あの教会を改装した事務所のことを意味している。そして、彼女が言う『パパ』というのも、藤本さんのことだ。

ほとんどのカインは、藤本さんのことを、『父さん』とか『親父』と呼ぶ。俺は、どうもそれが心地よくなかった。藤本さんには、もちろん感謝している。俺の父親代わりであることは確かだ。だが、それでも、本当の父親ではない。どうしても、それをゆずれなかった。

「そんで、次は」砺波は急に真剣な表情になり、声を低くした。「『おつかい』よ」

俺は、はっとした。『おつかい』は、つまり、カインの仕事を意味していた。藤本さんからの指令である。

砺波は、真剣な表情のまま、話をつづける。

「ここの学校に、人身売買を斡旋している疑いのある男の娘がいるの」

「え？」

「彼女に近づいて、その男の情報を探って」

俺はそれを聞き、あわてて砺波につめよった。

「ちょっとまてよ。どういうことだ、それ？」

「分からない？　女を利用してスパイしろ、てことよ」

はっきりと言う砺波には、どこにもうしろめたさは感じられない。藤本さんの『おつかい』に、ひとつの疑いもないのだ。

「そんなことできるかよ。男の家に潜入して調べればいいだろ」

「馬鹿ね。そう言ってるんでしょ」

「は？」

「娘と仲良くなって、家に招待してもらうのよ。そしたら、堂々と入り込めるでしょ」

入り込めるでしょ、てな。当然のように言い放たれても……。

「今回は複雑なのよ」と砺波はため息を漏らして、腰に手をあてがう。「その男が、全ての黒幕だっていう保障がないの。だから、こっそり調査したいの。――分かる？」

「つまり、しばらく、監視下で泳がせたい、てことか」

「そういうこと」

なんとなく、理由は理解した。そいつが十中八九、トーキョーの人身売買を牛耳っている黒幕なら、さっさと始末すればいい話だ。だが、まだその確信はない。だから、その確信をとりたい。もし違うなら、せめてその黒幕にたどりつくヒントを得たい。

「でも、それなら、こっそり盗聴器とかハッキングとか仕掛ければ……」

「それができれば楽なんだけど……その男の屋敷は、もはや武装地帯なの。簡単には入り込めないのよ。まずは、内部の構造と、屋敷のセキュリティシステムを調べる必要があるわ。

だ・か・ら」言って、砺波は俺を指差した。「まずは、お色気作戦よ」

俺は口をあけたまま、立ち尽くした。砺波は、俺がなにも答えないのを気にすることもなく、当たり前のように話を続ける。

「女心は私に任せて。アドバイスしてあげる」

「ちょっとまってくれよ。俺は、そんなことでき……」

「できる、できないは聞いてないわよ」砺波は、するどい視線を向けた。「『パパ』がそういうなら、やるだけよ。分かる？」

「……」

藤本さんは、俺たちカインにとって絶対的な存在だ。俺たちの命を救ってくれた恩人。俺たちを育ててくれた親。俺たちに生きる使命を与えてくれた……神だった。藤本さんは、絶対だ。

「分かってる」俺は静かに言った。

「よし」にこりと微笑んだ砺波に、さきほどの冷たい雰囲気は消えていた。

「それで……その娘って？」

俺は覚悟を決めて砺波を見つめた。砺波は、ウェーブのかかった長い髪を右手ではらうと、はっきりとした口調で答える。

「神崎……神崎カヤよ」

神崎カヤ。その名前に、聞き覚えはなかった。

「神崎カヤ、ね」

「確かに、伝えたからね？」砺波はそういうと、まるでおもちゃのような腕時計を見た。「さて、そろそろ私も戻らないと。遅刻しちゃう」

砺波の高校は、ここから電車をつかって十分ほどいったところにある。そこまで急がなくてもいいのだが、あわただしいのは砺波の特徴だ。

「それじゃあ、また『実家』でね！」

そういうと、砺波はローファーに勢いよく足をはめ、こちらに手を振りながら校舎からでていった。

「相変わらず、嵐みたいな奴だなぁ」

とりあえず挙げた手をぶっきらぼうに振りながら、俺はつぶやいた。

砺波が去って、教室へ戻る途中、売店をちらりと見た。メロンパンは売り切れだった。「砺波の奴……」と、俺はぼそっとつぶやいた。

＊　　＊　　＊

教室で、やきそばパンを一口食べて、俺はすぐにそれをふき出した。

「うわ、きったねぇ」

「なにやってんのよ、和幸」

平岡とアンリが叫んだ。俺は、むせながら、とりあえず水を口に含んだ。しかし、パンが変なところにはいって、せきがとまらない。

「神崎カヤだって？」かろうじてしぼりだせたのは、その一言だった。

アンリは、怪しい視線を俺に向けた。

「なぁに、和幸。あんた、女の子に興味ないのかと思ったら……ちゃっかり、チェック済みってこと？」

「そんなんじゃねぇよ」そんなことより、と俺はアンリにせまる。

「神崎カヤが例の転校生なのかよ？」

俺の言葉に、平岡もアンリもきょとんとしている。

「何いってんのよ。そこに反応したわけ？」

当然のように「そうよ」と言い放つアンリ。俺は愕然とした。

当然のことだけど、この二人にこの重要性はわかるまい。神崎カヤが例の転校生？　つまり、前の学校を追い出される（という噂が流れる）ほどの絶世の美女？

「冗談じゃねぇよ」俺は、頭をかかえる。そんな女をだまして、家に招待されるまでの関係になれ、ていうのか？

「和幸、変ね」

アンリは、俺の様子に首をかしげた。まあ、自然な反応だよな。

一方で、平岡は興味津々でアンリを見つめる。

「で、アンリ。何、たくらんでるんだ？」

「あら、分からない？」アンリは、ふふふ、ともったいぶった笑顔をみせた。

彼女まで、何かまきこむつもりなのか？　俺には大事な『おつかい』があるんだ。勘弁してくれ。しかし、そんなこと、いえるわけはない。とりあえず、少なくとも、俺の『おつかい』の邪魔にならないような企画にしてくれ。俺は心の中でそう祈っていた。

アンリは、腰に手をあてがい、クラスを見渡した。

「神崎カヤは、今度の文化祭の劇に参加しまぁす」アンリの声はクラス中に響き渡った。

「……は！？」

クラス中がざわついた。特に、男連中が顔色をかえたのは言うまでもない。平岡は、たちあがり、アンリの手を握り締めた。

「まじか？」

「ほんとよーん。もう許可とったもん」

「すっげー。俺、俺も参加する」

その平岡の言葉を皮切りに、ほかの男連中もアンリの下へ集まってきた。

「俺も俺も」「まだ、役あいてる？」なんていう下心丸見えの言葉を口々にとなえている。

見事に、アンリの術中にはまりやがって。俺はそう思った。

「あんたは映研所属なんだから、強制的に参加よ。ありがたく思いなさい」

アンリは、罠にかかった男たちを軽くあしらいながら、俺にボソッと言った。

「え」

平岡が、横で俺ににやついた。

「やったな！　これで、神崎カヤとおちかづきになれるぜ」

「なにを、くだらな……」くだらないか？　俺は、はっとした。そうだ、これはついてるかもしれない。初めて、アンリに感謝した。

「なあなあ、こういう言葉知ってるか？　文化祭ラブ」平岡は、両手で器用にハートマークをつくって俺に見せてきた。俺は鼻で笑った。

「くだらない」

kaya　1：1

トーキョーの高級住宅街に佇む一軒の屋敷。そこは、万全のセキュリティと雇われた大勢のボディガードで固められた要塞となっている。何のためにそこまでのセキュリティが必要なのか、少女は常に疑問に思っていた。新しい制服に袖を通し、鏡を見つめた。そこには、あきらかにこの国――ニホン――の人間ではない娘がいる。くっきりとした顔立ち。ぱっちりとした目。浅黒い肌。どう見ても、中東の出身だ。

少女は鏡を見つめながら、左手で自分の髪をぎゅっとつまんだ。つい最近ばっさりと切った髪は、もう肩にふれることはない。斜めに流すように分けている前髪も、眉までしかなく、視界を邪魔することはなくなった。確かにすっきりした。気分転換に髪をきったのは正解だったかもしれない、と彼女は思った。だが、それでもまだ足りない。きっと、何を試しても、心のもやもやは消えることはないだろう。少女は、ふうっとため息をついて、鏡から目をそらした。

「カヤ？　準備できたの？」

急に、ドアのむこうからノックとともに声がした。カヤはあわててバッグをとり、ドアにかけつける。

「はいはい！　すぐ行く」ドアを勢いよく開けると、そこには母親が立っていた。首や耳、手首、指、いたるところに宝石が見つかる。カヤは宝石は好きではなかった。

「おはよう、お母さん」

「新しい制服もよく似合ってるわね」

母親はカヤを誇らしげに見つめた。カヤは自分が彼らの実の娘でないことは知っていた。でも、だからといってなにか不満を感じたことはない。満足していた。彼らは親として、充分以上のことをしてくれていた。愛情も注いでくれている。だが、彼女のどこかで何か納得できていない部分があった。自分は何者で、どこから来たのか。そして……

「どうしたの？」母親はぼうっとしているカヤの顔をのぞいた。
「え、いえ……今度の学校では…うまくいくかな、て」カヤは廊下の窓から外を見つめた。
「もう、誰にも呪われてるなんて言われたくないから」

母親はハッとして、カヤに振り返る。カヤは落ち込んだ表情でうつむいている。

「カヤ……かわいそうに」せつない表情で、カヤの頬をなでる。「あなたは呪われてなんかいない。何度も言ったでしょ。ただのストーカーなのよ」

カヤは母親の優しさが身にしみた。だが、同時に申し訳なかった。

「そう。そして、何度も引っ越したわ。私のわがままで……」
「カヤ。気にしないでいいの。私たちはあなたにとってベストの環境を与えたいの。それだけなんだから」

本当の娘でもない自分に、どうしてこの両親はこんなにも親切なんだろう。カヤは、胸があつくなった。自分は充分幸せだ。だから、わざわざ両親に自分が何者かなんて聞く必要はない。そんな失礼なことはできない。カヤはいつもそう自分に言い聞かせていた。
でも、心のどこかで、それでも真実を知りたい、という好奇心が

うずいているのは隠せなかった。

「さ、初日から、そんなしけた顔でどうするの？」母親はカヤのおしりをたたいた。

「ちょっと、お母さん？」

カヤは母との友達のような関係が好きだった。母親は私服とは思えないドレスの裾をあげ、階段をおり始める。

「朝食がさめるわよ」

母の後姿を眺めながら、カヤはまた窓の外を見た。

「お願い。今度こそ、そっとしておいて」

自分でも、誰に言っているのか分からなかった。でも、それでも、『誰か』に言いたくて仕方なかった。今度こそ、なにもしないで、と。

カヤは母親の後を追うように、階段を降り始めた。

一階には、朝食のいい香りが漂っている。カヤが横を通り過ぎるたびに、屋敷のガードマンたちが頭をさげていった。カヤはそのたびに、おちつかない笑顔を見せた。物心ついたときからこんな感じだ。何度もやめて、と頼んだが無駄だった。さすがに慣れたが、好きになれない。

「カヤ！　おはよう」

丁度、テーブルにつこうかというときに、父親が新聞を手に部屋にはいってきた。

「新しい制服だね。よく似合うな」
「あら、カヤには何でも似合うわよ」
両親はにこやかにカヤをほめた。
「もうやめてよ。恥ずかしいな。私も、あと半年で十七なんだし。子供じゃないんだから」
その言葉に両親は、ハッとした。その妙な雰囲気に、カヤも手をとめた。
「……なに？」
「え、いえ」母親はひきつった笑顔で、キッチンのほうへ逃げるように去っていく。
「どうしたの？」おそるおそるカヤは父親に聞いた。父親も、作り笑顔を顔にはりつけていた。
「さあ。なんだろうな。カヤ、初日に遅刻はよくないぞ」
父親は思い出したかのように席を立ち、トイレへと去っていった。残されたカヤはぽかんとしながら、卵焼きを口に運んだ。
「誕生日に何か企んでるのかな。まだずいぶん先なのに」

＊　＊　＊

カヤが学校へ出かけ、朝食の片付けがおわったダイニングで、カヤの母親は一人、座っていた。メイドが用意した紅茶には目もくれず、深刻な面持ちで電話を見つめている。
時計の針が八時を刻み、鐘がなるとともに、電話が鳴り始める。母親はあわてて電話をとった。

「もしもし！」

受話器の向こうの声は、しばらく何も言わない。

「カヤは学校に行ったよ」母親はせっぱつまった声をしぼりだした。

「そうか」受話器の奥の声は、静かにそう言う。

「もうちょっと私たちを信用してくれてもいいんじゃないの？」母親の声は、ヒステリックに近くなっていた。

「あんたが何を企んでいるのか知らないけどね。余計なことされると、こっちもやりにくくなるんだよ」

受話器からはなにも聞こえない。母親は落ち着かないため息をはいた。

「あんたのことは、ストーカーってことにしてる。頼むから、もう余計なことはしないでちょうだい！　あの子があやしんだらどうするの？」

相手がなにも答えないのをいいことに、母親は責め立てる声を一層荒立てた。

「あの子にバレたら、困るのはそっちもなんでしょ？」

「愚かだな」受話器の向こうの声は、やっと一言だけそう言った。

「な……なによ？」

「約束の日、無傷で健康なカヤを渡すこと。条件はそれだけだ」

「！」

冷たい声に、母親は寒気がした。

「また明日、連絡する」

電話はあっけなく切られた。母親は呆然と受話器をもったまま固まった。じわじわとなんだか気持ち悪い感情が沸き起こってくる。

「なんなのよ、この男は」

母親は、おもいっきり受話器を床にたたきつけた。

その音に驚いて腰がぬけそうになったのは、忘れ物を取りに戻っていたカヤだった。

「なに……今の電話？」

自分が震えているのが分かった。

カヤは学校へ行く途中、上履きを忘れたことに気づいた。あわてて取りに戻り、水だけ飲もうとダイニングに立ち寄ろうとしたのだった。しかし、まさか、こんな会話を聞くことになるなんて。カヤはぎゅっと自分のひじを握り締めた。

「お嬢様？」

呼ばれてカヤはハッとした。いつのまにか、そこにはメイドが立っていた。

「てっきり、もう学校にいかれたのかと……」

「え、ええ。上履き忘れちゃって」カヤはあわてて、右手にもっている上履きをみせた。

「遅刻じゃありません？」

「大丈夫、これでも足は速いから」

言いながら、メイドの腕をひっぱり、ダイニングから遠ざける。とりあえず、母親にあの会話を自分が聞いていたことは隠さなきゃいけない。カヤはそういう気持ちにかられていた。真実を知りたい気持ちと、それを恐れる気持ちがうずまいている。

逃げるように玄関から飛び出すと、心臓の鼓動がおどろくほど大きな音をたてているのを感じた。深呼吸をすると、カヤは走り出した。

とりあえず、遅刻はさけよう。カヤが冷静に考えられるのはそれだけだった。

kaya 1：2

彼女が現れたのは、昼休みになってすぐだった。

「劇に興味はない？」

初めまして、の挨拶もなく、まっすぐに私に向かってきてそう言い放った。ショートヘアの彼女は、目が大きくて、ハツラツとした雰囲気だ。

「はい？」それ以外の返事が思いつかなかった。

「今度の文化祭で、ウチの学年は、劇とお化け屋敷とファッションショーやるの。

で、私は、劇のほうの責任者」

彼女は、私がぽかんとしているのにもかまわず、話を続けていく。彼女の隣にいる友人らしき子は、申し訳なさそうな笑顔を私に向けている。こちらの彼女は、ロングヘアですらりとした落ち着いた子だ。対照的な二人ね。

「ていうか、この子がやりたいって言い出して、無理やり、劇を候補にいれたんだけどね」

友人は、こそっと私に言った。もちろん、隣にいる『責任者』にも聞こえてただろうけど、彼女はまったく気にする様子もなく、私に期待の目を向けている。

「どう？」

「……どう、て」私も、苦笑いするしかできない。「考えてみるわ」

とりあえず、その場は流そう、と私は席を立ち上がった。しかし、彼女はあきらめる様子もなく、台本を押し付けてきた。

「読んでみて」

「え」

「ちょっと、アンリ」

さすがにこれには、友人が耐えかねて口をはさんだ。そう、ショートヘアの子はアンリっていう名前なのね。

「なによ、コトミ。いいじゃない。せっかく、ウチに転校してきたんだし。楽しんでもらわなきゃ」

「そう言うと聞こえはいいけど……」

アンリって子、悪い子ではないみたい。二人の様子を見ていて、それは分かった。でも、だからといって、劇に参加するのがいいアイディアかどうかは分からない。確かに、文化祭には興味あるし、参加できたら楽しいだろうけど。

「ね、どう？　神崎さん」

私の名前は知ってるのね。転校生はすぐに有名になる。もう慣れた。

「どうって、初めまして、もしてないのよ？」

「あ……」二人は、唖然とした。夢中で気づいていなかったみたいね。

「ごめんね！　そうだよねぇ」台本をもちながら、あはは、と照れ笑い。

「私は、アンリ。近江アンリよ。初めまして」
「私は、町田コトミ。よろしくね」隣の子も、すかさず付け加えた。
うん、これがもっともな順序よね。私はやっとすっきりした気分になった。
「神崎カヤです」
私がそういうと、二人はにやっとした。
「知ってるよ～ん」
「噂どおりの美人」
「え……」
それを言われて、ずきっとした。これ、いつもと一緒だ。また、今までみたいなことを繰り返すの？　急に、二人の笑顔が怖くなった。
「あの、ごめんなさい。お昼、買いに行かなきゃ」
私は、あわてて二人の横を通り過ぎ、教室からでようとした。それに驚いたのは、近江さんだ。
「ちょっとまって！　せめて、台本だけでも読んでみて」
「え……」振り返ると同時に、胸には近江さんの台本がおしつけられた。
「ね、読んでみて！」
近江さんはそう言って、町田さんと一緒に教室から出て行った。

「……」

私の手元には、台本が残った。これって、どういうことになるのかしら。読んで、感想次第できめていいってことかな。まさか、これ受け取ったから参加決定ってわけじゃ…ないよね。

すぐに返しに行くべきか迷っていると、「神崎さん」と後ろから呼びかけられた。

今度は誰？　振り返ると、今朝も話しかけてきた加原くんだ。だらっとした制服の着方は、きっと彼なりのおしゃれね。

「お昼、どうするの？」

「売店」これもいつものこと。とりあえず、つくり笑顔でしのぐ。

「売店？　せっかくなら、近くの…」

「お昼に外出るのは校則違反でしょ？」

「え？　そんな、堅いこと…」校則、という言葉に一瞬、身をこわばらせた。

「初日だから。問題おこしたくないの」早口で言って、教室をでようとする。

「じゃ、屋上で」

なかなかしぶとい。私は振り返って、台本を彼に見せた。

「これ、読まなきゃいけないから」

「へ……」

これは有効だったみたいね。私は、台本に心の中でお礼を言って、教室を出た。確か、売店は下駄箱の前だったよね。周りの視線が集まってるのを感じつつ、なるべく目立たないように廊下の端を歩く。今度の学校は、前よりも新しい。校舎はよく掃除されているし、窓は透き通っているみたいにきれい。

「あれが、転校生？」

ふと、誰かがささやくのが聞こえた。分かってる。いつものこと。私はそう思いつつも、自然とため息がでた。

私のわがままで繰り返している転校。これくらい、我慢しなきゃ。両親は、私の新しい制服をみるのが楽しい、なんて言ってくれるけど…無理して明るくふるまっているのはなんとなく分かる。

ストーカー……両親は、そう結論付けた。今までの学校での騒動は、私のストーカーが引き起こしたこと。私が気に病む必要はない。でも…本当は？

ふと、足をとめた。上履きに目を落とす。

「あの電話……」

上履きを取りに戻ったときのことを思い出す。偶然聞いてしまった母の電話。今まで聞いたことのないような母の口調だった。

『ストーカーってことにしてる』という母の言葉を頭の中で繰り返してみる。どういうこと？　お母さんは、何か知っている？　今までの事件を引き起こしてきた人物を？

いつのまにか強く握り締めていた台本は、変に折れ曲がっていた。

「……」

よれてしまった台本をじっと見つめた。これ、見覚えある。私の教科書。

気づくと、台本が私の涙でぬれていた。

「うそ」

周りにばれないように、コンタクトがずれたかのように目をおさえ、トイレにかけこんだ。
ばたん、と個室のドアをしめると、深く深呼吸をした。台本は、もう「ありがとう」の一言で近江さんに返せる状態じゃなくなっていた。
まだ自分が気にしていることに驚いた。両親の権力は、それを『嫌がらせ』でとめた。でも、『嫌がらせ』は止まらなかった。誰がしているのか、はっきりとは分からなかったから。その子が、襲われるまで……

「あの子にばれたらって、どういうことなの？」

私は、確信していた。あのお母さんの言葉を聞けば、誰でも予想はつく。お母さんは、真相を知ってる。それよりも……

「何を隠しているの？」

私は天井をみあげた。新しいはずの校舎で、なぜか天井だけはきれいではなかった。

出会い

それは放課後のことだった。慌しくクラスメイトたちが部活へと向かう中、アンリはとんでもないことをカミングアウトしてきた。

「台本を渡しただけなのか？」

俺がそう声を出すと、アンリはあわてて「シー！」と文句を言ってきた。

なんと、驚いた……いや、呆れたことに、アンリは神崎カヤに台本を押しつけただけらしい。おい、あんだけ公に神崎カヤが参加するっていったのは誰だよ。

「だから、とりあえず、サクラで釣ろうかな、て」

「は？　サクラ？」

「あんたよ」

得意げににんまり笑んで、当然のように俺に指さす。って、いやいや、ちょっと待て。

「どういうことだよ？」

「彼女のところにいって、劇のすばらしさを自然に語るのよ」

「……『自然』だ？」呆れて頬がひきつる。

「あんたも映画研究会でしょ。演技はできるはずよ」

「俺がいつ演技したよ？　もっぱら照明係だ」

「あら、不満だった？」

「そういう意味じゃない」

アンリは、なんでもかんでも自分に都合のいいように解釈する。

だからこその、この明るさなんだろうけど。こっちにしてみれば、迷惑この上ない。少しは、反省することを覚えてほしいものだ。

「お願い！」パンっと手をあわせるアンリ。作戦を変えたな。

「……」

こんな馬鹿らしいことは本来なら絶対にやらないんだが。今回は、『おつかい』のこともある。アンリの遊びを最大限利用するのが利口か。

「わかったよ」

アンリが、ぱあっと表情を変えるのが分かった。

「で、どこにいるの？」

「……さあ。教室じゃないかなぁ」

本当に計画性のない……俺はため息をついた。アンリはかまうことなく、にやにやしながら手をパンパンたたいた。

「ほらほら、帰っちゃう前につかまえなきゃ」

「なんで、上から目線なんだかなぁ」納得いかないまま、アンリの言うとおり、教室に神崎カヤを探しに向かう。

「にしても、サクラとは……」よく思いつくものだ。

神崎カヤが転入してきた隣のクラスに顔をのぞかせる。ほとんど皆、部活へとでかけていなくなっていた。

「どこだ？」

そういえば、自分が神崎カヤの顔を知らないことをいまさら思い出す。丁度、教室から出てきたサッカー部らしき奴をつかまえ、「神崎は…」というと、そいつは呆れた顔で俺を見てきた。

「またかよ。神崎なら……ほら、戻ってきたよ」とサッカー部員は俺の後ろを、あごをしゃくって指した。

「え？」

サッカー部員は、俺をおしのけ、なにも言わずに教室を出て行った。

俺は、ゆっくりと振り返る。

「あ」まぬけな声がこぼれた。

そこには、確かに、神話からでてきたかのような美しさをもった女がいた。夕方の廊下に立つ彼女は、夕焼けをあびて、より神秘的な雰囲気をかもしだしている。噂どおりの美人だ。だが、想像とは少し違っていた。俺はもっと、モデルやアイドルのような美人を想像していた。オヤジっぽい言い方をすれば『今風の子』だ。だが、彼女は違う。ルネサンスの絵画に描かれるような女神みたいだ。俺はそう思った。愛らしい丸い輪郭は、女性らしい柔らかな曲線をもっている。眉は、筆で書いた線のようにすうっと伸びて、長いまつ毛はくっきりとした目を強調している。すっきりとした鼻筋。桜を思わせる淡いピンクの唇。俺は、絵画を鑑賞するかのように、じっくりと彼女を見つめていた。これが、「見とれる」ってやつか。

神崎カヤは、俺の視線に気づくと、立ち止まった。ひとつ、ゆっくりとまばたきをすると、落ち着いた様子で口を開く。

「週番？」

それが、彼女が初めて俺に言った言葉だった。

ファーストコンタクト

「え？　週番？」

俺はハッと我に返って頭をかく。

「うん。野村先生が、週番の人に頼んだ、て言ってたから。私の学校見学」

野村。二組の担任だったな。社会科のブルドッグと呼ばれている男。かわいい目をしたおっさんだ。

「へえ、そっか」と、落ち着かない様子で返事をする。神崎のこと……直視してられねぇ。美人だと聞いてはいたが、その言葉だけでかたづけられないんじゃないか？　なんというか、神秘的。絵画だ、絵画。それに、見つめられるだけで誘惑されているような気さえする。

「それで、週番なの？」

神崎の戸惑った声が聞こえた。俺は、あ、と苦笑い。

「いや、違う」

「そう」

それじゃ、あなたは誰？　という表情だ。どこか、疲労さえうかがえる。転入初日だしなぁ。いろんな奴にたかられたんだろう。こんなにきれいだし。

にしても……と、俺は神崎のクラスをちらりとのぞく。

「週番、帰ったんじゃねぇの？」

そう、クラスにはもうだれもいない。結構、部活がさかんな学校だからな、ここは。皆、授業がおわるとさっさと部活にむかってしまう。

「え、うそ」と、神崎はこちらに駆け寄り、ぐいっとクラスの中をのぞいた。見ているものは同じはず。誰もいない教室だ。神崎はがっくりと肩を落とした。

「じゃあ、一人で探検でもしようかな」

神崎はがっかりした様子はあるものの、微笑してそう言った。

いやいや、その前に言うことがあるだろ。転校生の学校案内頼まれといて、さっさと帰ったんだぞ、週番は。文句のひとつも言わないとは……絶滅危惧種、『美人で性格もいい女』か、こいつは？

「えっと……」と、神崎が俺のほうに振り返る。そういえば……と口が動いた。

「週番じゃないなら、どちらさま？」

首をかしげてそう尋ねてきた。ああ、そっか。そういえば、名前も名乗ってなかったな。

「隣のクラスの藤本」

俺は自分のクラス、三組の教室のほうに、目をやってそういった。神崎も俺の視線をたどって三組のネームプレートに目をやると、「

ああ」とつぶやく。

「神崎、だよな」と、俺は眉をひそめて確認する。神崎はイラン人だ、て聞いたし。こんな中東系の顔してる時点で神崎に間違いはないんだが。

「神崎カヤ。初めまして」

神崎は、絵に描いたような屈託のない笑顔を浮かべた。俺は、なにか……胸の辺りでうずくのを感じた。くすぐったいような、気持ち悪いような。……落ち着かない。

「私に何か用だった？」

ふと、神崎が真顔に戻ってそう聞いてきた。あぁ、そういえば……なんだっけな。そうそう、『これからお前を騙して父親をおとしいれるから、よろしく』。はは。言えるかよ。やっぱ、悪役の仕事だよなぁ、これって。まあ、そもそも、こんな美少女とお近づきになる方法なんてさっぱり分からねぇ。彼氏とかもういるんじゃないのか。いないとすれば、ハードルが高すぎるんだ。俺の見た目は、どうやら中の上（アンリ調べ）。神崎とつりあうとは思えない。さらに、俺は恋愛は専門外。今回の『おつかい』、俺は果たせるんだろうか。

「藤本くん？」という神崎の戸惑った声が聞こえる。

「あ、いや……」

今、そんなこと考えている場合じゃないだろ、と自分で自分を叱る。とりあえず、今は『おつかい』はおいとこう。やることやらな

きゃな。
俺は、あ、と思い出したように手をたたく。神崎は、いきなりの俺の行動に目を丸くした。
「劇って、いいよなぁ」
俺のひどい棒読みが廊下に響いた。
＊　＊　＊
「え？」
私はつい、間の抜けた声を出していた。なに、急に？　しかも、すごい棒読みだ。私がぽかんとしていると、藤本という三組の生徒は、ひきつり笑顔で頭をかいた。
「俺、すげぇ劇好きなんだよね」
「……」
私は、返す言葉が見つからない。一体、なんなんだろう？　すごく、不自然。なんで急に劇が好きだなんていう話を始めるの？
「そういえば」と彼は、ひきつった笑顔をはりつけたまま続ける。
「文化祭で劇があるんだよな。絶対、参加したほうがいいぜ」
「……」
藤本くんはそこで一時停止。私も……思考が止まった。意味が分からないよ。
「あのぅ」と、私はなんとか言葉をしぼり出す。「一体、何の話？」

聞かれて、藤本くんは大きなため息をはいた。ぐったりと頭を垂れる。

「ああ……だから嫌だったんだ」

「え？」

嫌だった？　何が？　私に話しかけるのが？

「大丈夫？」

私は藤本くんの顔を覗き込む。今日、いろんな人に話しかけられたけど、彼が一番変わっている。

「いいか！」と、いきなり藤本くんは顔をあげ、私に人差し指を突き出した。

「はい！？」

思わず私は、背筋を伸ばして返事をしていた。今度は何？

「隣のクラスの近江アンリ。俺はあいつの差し金で来た」

「へ？」

近江、アンリ？　ええと……と、私は記憶を呼び起こす。確かに、聞いたことある名前だ。どの子だっけ？

「劇の勧誘に来ただろ、うるさい女が」

藤本くんの呆れたような声が聞こえた。そして私はハッとする。劇！　そうだ、そうだ。昼休みに来たショートヘアの女の子。劇に

興味ない？　て言って……台本を渡してきた。

「あいつに、劇のすばらしさをあんたに訴えろ、とか言われてな」

「なんで？」

「あんたを劇に引き込むためだよ」

「あぁ……」

なるほど。納得。それで、急に劇が好きだどうだ、という話をしだしたんだ。

それにしても……私は、フッと思わず噴きだして、笑い出してしまった。

「え？　なんだよ？」

「ごめんなさい。あまりにも、変だったから」

「へ？」

さっきのあれは演技だったんだな。すごく不自然でわざとらしくて……思い出しただけで、自然と笑いがこみがえる。もっとほかにいろいろ方法はあったはずなのに。

「笑いすぎだろ」

藤本くんがため息混じりにそう言った。あ、いけない。失礼だよね。私は、ハッとして笑いを止めようとした。すると……

「ひどい演技だったよな」

「え」

彼の爽やかな笑い声が廊下に響きだした。あれ？　笑うな、て言わなかったっけ？

藤本くんは頭をかいて恥ずかしそうに笑っていた。
気づくと私は、彼の笑顔に見とれていた。彼は、目立ってかっこいいわけではない……と思う。きれいな黒髪は際立っているけど、全体的におちついた感じ。でも、笑った顔はすごく魅力的。爽やかな笑顔、てこういうことをいうのかな。

「俺、劇とか全然興味ないんだ」

しばらく笑ってから、藤本くんはそうカミングアウトしてきた。

「嘘ついて悪かったな」
「え」

私は目を丸くした。一瞬、何のことを言っているのか分からなかった。『嘘』？　もしかして……あの演技のこと？
私がぽかんとしていると、藤本くんは「そうだ」と腰に手をあてがった。

「学校、案内しようか」
「！」
「お詫びというか、ついでというか」
「……」

学校を案内？　今から？　二人で校舎をまわるってこと？

「どうした？」

あ、いけない。私ったら、ついぼうっとしちゃった。

「あ、えっと……」

断ったほうがいいかな。だって、もし男の子と二人きりになったら……またアレが起こるかもしれない。
でも……と、彼を見上げる。藤本くんは穏やかな微笑を浮かべて私の返事を待っている。
ダメだ。せっかくの親切な申し出を断るなんてできない。

「じゃあ……」と、私は遠慮がちに微笑む。「お願いしようかな」

そういいつつも、内心不安でいっぱいだ。でも……大丈夫だよね？　転校初日だし、校舎の案内くらいじゃ……アレは起きないよね。

「よし……とりあえず、上からみてくか」

そう言って歩き出した藤本くんの背中を見ながら、私は胸元をおさえた。心臓が騒いでる。鼓動が早い。喉がしめつけられる。緊張してる。転入して初めて男の子と行動を共にするんだもん。当然だ。これでまたアレが起きれば、転入初日で私の学校生活は終わりだ。大丈夫だよね。これくらいで、彼を怪我させたりしないよね？　ただの校舎の案内だもの。デートとかそういうわけじゃない。
だから、お願い……と、私は廊下の窓を見つめた。お願い、どうか、何もしないで。今度は放っておいて。もう、あんな目に遭うのはたくさん。私は、姿も名前も分からない『誰か』にそう心の中で懇願した。

学校案内

「と、まあこんなところかな」一通り学校を回って、俺は昇降口で立ち止まった。「覚えきれた？」

くるりと振り返ると、浅黒い肌をした転校生が微笑を浮かべて立っていた。真っ直ぐに俺を見つめて「なんとか」と頷く。

薄暗くなった廊下に差し込む夕日。それに照らされる彼女。そこらの厚化粧の女よりもきれいでなめらかな肌。肌荒れなんて経験したことないんだろうな。目鼻立ちがはっきりしていて、影が濃く落ちている。聡明で繊細な美を感じる。彫刻のような、蝋人形のような、とにかく計算された美のように思える。それほど、完璧だと思った。その上、落ち着きはなった雰囲気に聡明な笑み。同じ歳とは思えない。

神崎カヤ……不思議な女だ。まさか、こいつを騙してお近づきにならなきゃいけないとは。――無理だろう。どうしろっていうんだ。

そもそも、学校を案内している間だって、会話はほぼなかった。「ここが理科室」「ここが家庭科室」「ここが音楽室」。俺が言ったことといえばそれだけだ。外人のツアーガイドでももっと気の利いたことをいえるはずだ。神崎も、「へえ」とか「そっか」、「そうなんだ」くらいしか言わないし。まあ、俺が何も話さないんだから仕方ないよな。気まずい空気を押し付けて申し訳ないくらいだ。

ほらな、だから絶対無理なんだよ。女を騙して家に転がり込むなんて、俺には向いてない。

そんなことを考えてぼうっと見つめていると、神崎は首をかしげて口を開いた。

「どうかした？」

ゆっくりと動く唇にも目が釘付けになる。って、馬鹿じゃないのか。俺はとっさに目をそむけた。

「あ、いや……」

これじゃ、俺が『色仕掛け』されてるみたいだろ。なにあたふたしてるんだよ。それも話しかけられたくらいで。

ああ、くそ。前途多難だ。一体どうやって仲良くなればいい？どう話を広げればいいのかもわかんねぇし。学校案内を持ちかけただけでも、俺にしてはよくやったと思う。次に繋がらなきゃ意味ねぇけど。

だが……たとえ、無理だと思っても、俺はどうしてもこいつを騙して仲良くならなきゃいけない。それが藤本さんからの『おつかい』なんだから。

「わざわざ、ありがとね」

気づけば、神崎は別れの挨拶を始めようとしていた。え、と振り返ると、目を細めてほがらかな笑顔を浮かべている。

「お陰で明日は迷わないですみそう」と冗談交じりに言って、肩をすくめた。

神崎のほうが、会話に余裕があるな。男として、情けない。俺はつい苦笑する。

「それじゃ。そろそろ、帰ろうかな」

神崎は足元に視線を落とし、顔にかかった髪を耳にかけた。一挙一動に目がひかれる。動きも優雅だ。この魅力は……なんなんだ？

こいつの父親は人身売買を斡旋している疑いがかけられている。少なくともこいつは金持ちのお嬢さまってことだ。そのせいなんだろうか。仕草一つ一つに女性らしさを感じるのは。

「また、明日……かな、藤本くん」

言われてハッとする。まずい。本当にこのまま「さよなら」の流れになりそうだ。せっかく、二人きりになれたってのに……何も成果がないまま、別れるのか？　これじゃ、「そういえば学校を案内してくれた人」になりなねない。何かいい印象を与えておかないと。次に繋がなきゃ意味無いんだ。

何か言わなきゃ。気の利いたことを……と、俺は慌てて思考をめぐらせる。

「そういえば、ここ昔は墓地だったらしい！」

「……え？」

なに言ってんだ、俺？　出てきた言葉に俺も驚いてぽかんとしてしまった。無論、神崎はあっけにとられて呆然としている。

やっぱり、俺には向いてない。

＊　＊　＊

墓地？　いきなり、何？　私は言葉がでず、じっと彼を見つめた。学校を案内してくれた、隣のクラスの藤本くん。出会ったときから、どこか変わってるな、とは思っていたけど……やっぱり、独特だ。だって、別れ際に墓地の話なんて、普通切り出さないもの。それも、言った本人である彼まで唖然として固まっている。頬がひきつっているのがよく分かる。

「墓地だったんだ？」と、私はなんとか相づちを搾り出した。私の笑顔もきっとひきつっている。墓地だった、といわれて……どう反応したらいいかも分からない。事実なら、騒ぎ立てるのも不謹慎だろうし。そもそも、学校が元墓地っていうのはあまりいい話ではない。

「ああ。墓地だったんだ」

なぜか、彼はがっくりと頭を垂れてそうつぶやいた。諦めのような、落胆のような、そんな声色で。どうしたんだろう、と私が首をかしげていると、藤本くんは頭をかいて顔を上げる。

「悪い」ため息混じりに一言謝って、「慣れてないんだよな」

「え？」

慣れてない？　何が？　学校案内だろうか。

「こういうの」藤本くんは不自然にも見える、ぎこちない笑顔を浮かべた。「普通に女子と話すの、あんまなくてさ」

あ……ドキッと心臓が揺れた。思わず、「私も！」と声をあげていた。考えるよりも先に、言葉が飛び出していた。

「私も、そうなんだ。友達、つくるの苦手で……特に、男の子とは」

そこまで言って、ハッとして言葉をきった。浮かべていた笑顔を消し、うつむく。

今、何を言おうとしてたの？　まさか、あのことを話そうとした？　自分の軽率さが恥ずかしくなる。せっかく、またやり直そうとしているのに、自らバラしたら元も子もないじゃない。何してるん

だ。

「そうなのか？」という戸惑った彼の声がした。

私は慌てて顔を上げ、できる限りの満面の笑みを顔にはりつけた。

「ごめん、もう帰るね」

「え？」

突然の私の言葉に、彼はきょとんとしていた。申し訳なく思いつつも、勢いよく下駄箱へ走り出す。

「あ、おい。家まで送っていこうか？」

家まで……？　ダメ。咄嗟に足を止めて振り返った。

「大丈夫！　気にしないで。また明日ね」

早口でそういいきって、私は踵を返す。彼の視線を背中に感じながらも早歩きで下駄箱へ向かう。

一緒に帰るなんて絶対ダメ。二人きりで歩いたりなんかしたら、アレが起きる。『誰か』は黙ってはいない。初日にそんな危険は冒せない。それも、学校をわざわざ案内してくれた親切な人を……。

下駄箱に新品の上履きを入れ、横目で彼が突っ立ているのを見ながら、下穿きに手を伸ばした。

「また……明日な！」

ぎこちなく上擦った彼の返事が昇降口に響いた。

学校案内（後書き）

大幅に加筆中です。多少、続きとくいちがうかもしれませんが、今後修正する予定です。更なる加筆まで、しばらくお待ちください。

Liszt　1：1

遠く離れた島国。代々女王が治める誇り高き国、イギリス。その北部、小さな村のとある墓地。低い空には厚い雲が浮かんで太陽を隠している。広大な青々と茂る芝生に並ぶ十字架は、そこに眠る躯（からだ）の生きた証。手向けられた花束は、遺された者からの愛の証。

そんな中、金髪の少年がある墓を前に立っていた。手には花束も何もない。ただ呆然と墓を見つめている。そこに眠る躯に何も証明する必要はなかった。彼こそが、抜け殻となった躯の生きた証。彼こそが、躯が生けるものたちへ遺した愛の証。

一筋の風が墓地を通り抜けた。少年のブロンドがなびいて目元をくすぐり、少年は目をつぶる。髪をはらうようにゆるやかに顔を横に振って、透き通るような白い左手で前髪を掻き揚げた。ぱちりと開いたアクアマリンのような碧眼に、ある名前が飛び込んでくる。それは他でもない、土の中で静かに眠る躯が血を通わせていたときに呼ばれていた名前。――リチャード・マルドゥク。それが、目の前の墓に刻まれている名だ。

「リストちゃん」

少女の声が後ろから聞こえた。少年――リストは、振り返ると微笑んだ。

「ナンシェ。どうしたの？」

その笑顔は優しさに満ち溢れている。美少年という言葉がよく当てはまる少年は、猫のような可愛らしい印象の顔。もうすぐで十六になる彼なのだが、その愛らしい顔立ちと小柄な体のせいでずっと年下に見られてしまう。くりっとした碧眼に、それに覆いかぶさる

ような長いまつ毛。高い鼻。透き通るような白い肌。微笑んだ口からは、とがった八重歯がのぞく。顔は小さく、全体的に、まるで少女のようだ。

「ううん」少女――ナンシェはそう言って、リストの隣に歩み寄る。リストが少女だったなら、こうなっていただろう。そんな想像図が、ナンシェの見た目そのものだ。唯一違うのは、風になびく、その長いストレートのブロンドヘア。

そう。二人はよく似ていた。輝くような金髪も、宝石のような青い目も似ていた。まるで兄妹のようで、いつも間違えられた。

「リチャードおじいさま……悔しそうでしたね」

ナンシェと違い、リストは懐かしむ表情を一切うかべていない。

「ねばりすぎだよ」リストはつめたく言い放つ。「もっと早く、王位を継承するべきだった」

ナンシェはせつない表情でリストを見つめる。

「リストちゃんも、王位がほしかったの？　ほかの皆みたいに……」

「いや。あんな老体じゃ結局なにもできなかったのに、て意味だよ」

そもそも、王位なんてほしくなかった。リストは喉まできていたその言葉をのみこんだ。

ナンシェはしばらく黙って、ため息まじりに微笑むと、また口を開く。

「きっと、見ていたかったんじゃないかな」

「え？」
「リストちゃんが育っていく様子を。できる限り、長く見ていたかったんだよ」ナンシェは優しい笑顔をうかべた。
「だって……」リチャードの墓に、同意を求めるように視線を向ける。「一生懸命、リストちゃんを、騎士として訓練してたもの」

その言葉に、リストが余計につらい表情をうかべたのに、ナンシェは気づかなかった。

「いや、きっと、あいつはナンシェを見ていたかったんだと思う」

その声は小さすぎて、独り言にしかならない。

「でも」急に、ナンシェは厳しい表情になる。「なんだか、納得いかない」
「なにが？」

ナンシェは、リチャードの墓の前で座り込んだ。

「王位継承は、命と引き換えに行われる。そんなルール、おかしいよ」
「……」
「リストちゃんは……」

そこまで言って、ナンシェはぎゅっと服をにぎりしめ、その続きを言おうとしなかった。リストは、ナンシェが何を言いたかったのか、なんとなく分かった。ナンシェの隣にひざをつくと、落ち着いた声で諭すようにナンシェに話しかける。

「王に選ばれたものは、不死になれる。

『王位継承は命と引き換え』。でもそれは、王位継承をしない限り、なにがあっても死なないってこと」

リストはナンシェの頭に手をのせた。

「だから、心配すんな」

その言葉に、ナンシェはなにも返事をしなかった。

リストは、もう一度リチャードの墓を見つめ、立ち上がる。ナンシェの寂しい背中を残し、リストは身を翻し歩きだした。

ナンシェを残して去ることには、胸がいたんだ。彼にとって唯一の心残りと言ってもいい。彼女が自分を慕っているのは、よく分かっていた。だが、それでも自分は……リストは、ぐっと足に力を入れた。

「……行くんだね」

リストはハッとして足を止め、振り返った。ナンシェは、背中を向けたまま、決してこちらを見ようとはしない。リストの様子が気になる素振りさえみせない。そこには、寂しさの中にも甘えを捨てた彼女の姿があった。リストは目を細めて、妹のようにかわいがっていたナンシェの背中を見つめた。いつのまにか、立派なマルドゥク家の女になっていたんだな、と心の中で問いかける。

「王に選ばれたからね」リストは、穏やかにそう言った。彼女に、説得や言い訳の必要はもうないんだ、と悟ったのだ。子ども扱いはもうおわりだ、と。

「『収穫の日』は近い。エンリルの裁きを止めるためには……」

「うん、分かってる」ナンシェは、リストの言葉をさえぎった。聞かずにも分かる。

王は不死であって不老不死になれるわけではない。リチャードは、老いていく体を酷使して、リストを継承者として育てていた。そして、『収穫の日』が近づき、彼は王位を手放した。自分の命とともに。

すべては、『収穫の日』のために。

「待ってるからね」

ナンシェは、やっとのことでその言葉だけしぼりだした。リストは、ただうなずくと、その場を去っていった。墓地には、ナンシェのすすり泣く声だけが響いていた。

墓地を背にし、リストはたくましく歩をすすめる。

「ケット」

静かにそういうと、リストの横に、光が現れる。その光はやがて、ブロンドの幼い少年に姿を変えた。リストの金髪とは違い、少年の髪は、本物の黄金のように光り輝いている。

「はーい」

にこにこしてはしゃいでいる様子は、ただの子供にしか見えない。リストは、少年に振り返ることもなく、言葉を続ける。

「『収穫の日』まであと半年……」

幼い少年はそんなリストの言葉に、場違いなほど明るい笑顔をうかべた。

「うん。まずは、『収穫』を阻止しなきゃね」

リストは、ちらっと少年をみる。

「リチャードのときみたいに、助けてくれな。ケット」

にこっと微笑んでそういうと、ケットはうれしそうに満面の笑みをみせる。

「もちろん。そのために、ケットはいるんだよ、リスト・マルドゥク」

「そうだね」そして、オレは……とリストはふと思った。「そのために創られたんだ」

Liszt 1：2

二週間前のことだ。ハノーヴァー家の屋敷にある、めったに使われることのない広い食堂に、久しぶりに一族が集まっていた。いや、正しくは……集められた、だ。といっても、再会を喜ぶ、というような和やかな様子はない。身内でなにやらひそひそ、こそこそ話しているくらいだ。

リチャードは、皆が静まるのを待つこともなく、一族に言った。

「王位をリスト・ロウヴァーに譲る」

一気に、食堂はざわついた。

マルドゥク一族は、ハノーヴァー家、アブキール家、エリオット家、モンロー家、そしてロウヴァー家に分かれていた。ハノーヴァーが本家、ほかは分家だ。中でも、ロウヴァー家は、イリーナ・ロウヴァーとその息子、リスト……俺だけだった。だからこそ、リチャードのこの宣言は、ほかの一族の人間を混乱させた。

もちろん、リチャードが、オレを未来の後継者として育てていたのは周知の事実だった。だが、実際にこうして宣言されるまでは、皆も半信半疑だったに違いない。なぜなら、オレの母、イリーナには、売春婦という過去があったからだ。

「リチャードおじい様。納得いきません」言い出したのはハノーヴァー家の、チャーリーだ。リチャードの息子である。「正しい順番でいけば、わたしのはずです。神託をお聞き間違いになったのではないですか？」

「あら……」と隣に座っていたエリオット家のセシルは笑う。「大学も卒業できなかったあなたが、王に選ばれるとお思い？　それよ

りも、ウチのリディアのほうが……」そう言って、隣で行儀よく座る愛娘のリディアを誇らしげに見つめた。

大体、こうなるのはよめていた。それから、食堂は嫌みであふれた。

オレは、イリーナの横で黙って座っていた。彼らはなにもわかっちゃいない。なぜ、あいつがオレを選んだのか。それは、リチャードなりの一族へのいたわりだったというのに。

「遅れてごめんなさい」

その晴れやかな声は食堂に響き渡り、静寂をつくりだした。皆が、食堂の入り口へ振り返る。大きな扉の前で、彼女は、皆の視線をあびて、えへへ、と頭をかいた。

「もうはじまっちゃってますね」

彼女は、アブキール家のナンシェ。正装をしてきたほかの連中と違い、彼女は高校の制服のまま、息をきらせて食堂にはいってくる。学校帰りにまっすぐ来たのだろう。それに、ほかの連中は唖然としている。

「ナンシェ、こっちよ」

リチャードの隣の席で、ナンシェの母、ウェンディが手をふった。母の姿を見つけると、ナンシェはあわててそちらへ向かった。

しかし、ウェンディは、ナンシェが席につくのを待つことなく、ついさっき宣言された重大ニュースを告げる。

「リストちゃんが選ばれたのよ！」

ナンシェはそれを聞いて、目を丸くし、オレを探した。

「うそ！　リストちゃんが！」オレを見つけると、彼女はとびっきりの笑顔で駆け寄ってきた。その勢いで、オレの手を握ると、「おめでとう」と騒ぎ出した。

そう、彼女はこういう子なんだ。周りは、その勢いに負けてしまったようで、困った表情を浮かべていた。

「ありがとう、ナンシェ」いろんな意味で、だな。

しかし、ふとナンシェは真顔になった。何かを思い出したかのように、顔を曇らせる。

「あ……」力ない声をもらし、リチャードのほうに振り返る。

「王位継承、てことは」

リチャードは、ナンシェが言いたいことを察したのか、優しく微笑んだ。

「ありがとう、ナンシェ」

ナンシェは相変わらずオレの手を握ったまま、リチャードを見つめている。

「マルドゥクの女なら、その先の言葉は言ってはいけないよ」リチャードは優しく、だが厳しい声でそういった。

ナンシェは、その言葉にハッとし、ゆっくりとうなずいた。

「はい」

ナンシェが、オレの手をぎゅっと強く握り締めた。彼女だけだ。この中で、リチャードのことを気にしたのは。オレには分かる。きっと、だからリチャードは、オレに彼女を頼む、と言ったんだろう。

そう、リチャードはオレに言った。オレがここにいる理由は、『パンドラの箱』が開かれ、エンリルの裁きが行われるこのとき、マルドゥクの王となり、一族の使命を果たすこと。そして、ナンシェを守ること。

リチャードは、特別ナンシェを愛していた。一族の中で一番、大事にしていた。それはきっと、彼女のこの純粋な優しさに救われていたからだろう。オレも、ナンシェの世話をしていたつもりだったが、逆に助けられていた気がする。

「リスト・ロウヴァー。お前に、リスト・マルドゥクの名を与える」

オレは、立ち上がった。ナンシェは、無理した笑顔を浮かべている。複雑な心境なんだろう。オレが王位を継承したとき、大好きな祖父はこの世を去るのだ。名残惜しそうに、ナンシェは俺の手を離し、一歩下がった。

「新しいマルドゥクの王に、栄光あれ」静かにそう言うと、ひざを曲げ、オレに丁寧にお辞儀をしてみせた。

「ありがとう」

隣でイリーナも目を細めてナンシェを見つめている。頭をさげたままのナンシェの横を通り過ぎ、ほかの連中の後ろを歩いていく。

ナンシェがあんなパフォーマンスをしたもんだから、ほかの連中

もぼうっとしてるわけにはいかない。納得いかないようだが、うわべだけのお辞儀をしてみせた。きっと、ナンシェの狙いはこれだったんだろう。彼女は、ただ優しいだけでなく、そういう頭の良さももっている。そう、彼女こそ、本当はマルドゥクの王にふさわしい人材だ。オレも、そしてリチャードもそれは分かっていた。だが…だからこそ、オレが継がなきゃいけなかったんだ。

リチャードの前に立つと、オレはじっと奴の目を見つめた。

分かってる。オレが王を継ぐのは、一族を守るため。いや…ナンシェをマルドゥクの運命から守るためなんだ。

「ケット」リチャードが静かにその名を呼んだ。

リチャードの横に、光があらわれ、やがてそれは少年の姿になった。彼こそ、オレたちマルドゥクの主であり、ニビルという名の聖域に住まう神・エンキの使者だ。姿かたちは子供だが、確かにどこか神聖な雰囲気がある。その瞳に見つめられると、全てを見通されているような不安にさえ、おそわれる。

「リスト・ロウヴァー？」ケットはにこりと微笑み、オレに言った。

オレは、ただうなずいた。ケットはそれを見届け、今度はリチャードを見つめる。

「彼に決めたの？　リチャード」

「はい」

「そう」ケットはせつない表情で静かにつぶやいた。

神の使者といっても、ケットはとても幼い。見た目もだが、中身も子供のようだ。純粋無垢とはこのことだろう、と思わせる。

「リチャード」ケットは、無理した笑顔をうかべた。その笑顔は、さっきのナンシェのそれに似ていた。

「今まで、ありがとう。主、エンキの代わりに、お礼を言うよ」

リチャードは、その言葉に、とても丁寧で尊敬に満ちたお辞儀で返事をした。

「楽しかったよ、ケット」頭を下げたまま、リチャードは小声で言った。

その声は、きっとケットとオレにしか聞こえなかっただろう。ケットは涙ぐみながら、手を天に挙げた。

「エンキがエミサリエス、ケットは……リスト・ロウヴァーに、マルドゥクの剣を継承することを認める」

リチャードは、最期に微笑んだ。オレにはそれが見えた。

ケットの言葉とともに、オレの目の前に光の筋が現れ、それは大きな剣へと姿を変えた。これが、マルドゥクの王たる証。力強くその剣の柄を握る。この瞬間、オレの名は、リスト・マルドゥク・ロウヴァーになった。

リチャードは、ゆっくりと、その場に倒れた。どよめく食堂の中で、ナンシェだけは、まだお辞儀をしたまま、小さく震えていた。一族の男連中が、あわててリチャードのそばにかけよった。もちろん、皆、知っている。リチャードは使命を終えたのだ。

「リスト……」ケットは、涙を目にためて、オレを見つめた。

「ケットは君がなにものなのか知っている」ケットのその言葉は、

オレにだけ聞こえる程度の小さいものだった。
オレは、ドキッと心臓が一瞬大きく波打つのを感じた。まさか、今更、オレの王位を取り下げるのか？
しかし、ケットはすぐに表情を和らげた。
「それでも……リチャードが決めたことだ。ケットは、君を支持する」
「……！」オレは、言葉がでなかった。きっと、ホッとしたんだ。
ケットは、あどけない笑顔をうかべ、手を差し出した。
「よろしくね、リスト」
剣を左手にもちかえ、ひざまずくと、オレはその小さい手をとった。
「リスト、君の使命は、エンリルの裁きからルルを守ること。つまり」
「『彼女』を見つけ出し……」オレは剣を強く握り締め、ケットをにらむように見つめた。
「殺すこと」
ケットはオレの言葉に一瞬、表情をこわばらせた。
「全ては、ルルを裁きから守るため」
オレは、ケットをなぐさめるように言った。そして、多分、自分自身の存在を正当化するために。

「それが、エンキの願いなんだろ」

そして、マルドゥクはそのために、地上におりてきたんだ。エンリルの暴挙を防ぐために。

そう、オレは、『彼女』の詩をとめなければならない。

預言者　エノク？

「リスト、着いたよ」

言われて、目を開く。リストはいつの間にか、眠っていた。周りの乗客は足早に電車を降りていく。

「いつから寝てた？」

目をこすりながら、リストは体を起こした。ケットはくすっと笑って「ニューカッスルから」と答える。

うきうきとしているケットと違い、リストはおもりでも背負っているかのようにのっそりと立ち上がった。持ち物は、一週間分の衣服と金だけ。小さなスーツケースを引きずりながら、電車から降りた。

八月だが、もう肌寒い。腰に巻いていた上着を着ると、駅を見回した。

「エディンバラか……」

「リスト、リスト！」

駅で、そんな高い声が響いた。振り返ると、ケットが出口ではしゃいでいる。

「あれで、神の使者なんだからなぁ」

リストは、目を細めた。スーツケースをひきずると、駅から出て行く。

エディンバラは、イギリスの北部、スコットランドの首都である。

街全体が世界遺産という、歴史ある街。

「うっわー！　お城だぁ」

駅をでて、開口一番、ケットはそう言った。まわりの通行人は、そんなケットをほほえましく見つめた。

「エディンバラ城だよ」

後ろから、リストはそうケットに教えた。

駅から遠く離れたところにみえる城。崖の上にそびえたつ姿は、印象的な美しさだ。誰もが、その姿に目を奪われる。城のまわりだけ、まるで別の時間がながれているようである。時間に置いていかれた城。リストにはそうも思えた。

「あそこに行くの？」

「え？」

ケットは目を輝かせている。リストはため息をついた。ケットは、ただ単に観光がしたいだけだ。そう分かったからである。

「ああ、あそこに行くんだよ。でも……」そういってしゃがむと、ケットを見つめた。「観光しにきたんじゃないんだよ」

「分かってるよ」

ケットは、得意げに笑った。

「エノクに……助言をもらいにきたんでしょ」

急に、ケットは真剣な表情になり、そう静かに言った。

「そう、エノクを探す」
リストは立ち上がり、またエディンバラ城を見上げた。
「きっと、あそこにいるはずだ」
「確かなの？」
リストが歩き出すと、ケットはあわててあとについて歩き出す。
「リチャードが青春をかけて探し出したらしいからな」
その言葉に、ケットはぷっと吹き出す。
「リチャードの初恋の人かなぁ」
「そういう意味じゃないよ。必要だと思ったからさ」
「永遠の秩序を知る者、エノク。確かにエノクは全てを知っている。でも、だからといって、それを教えてくれる保証はないよ」
「……」
神の使者の忠告に、リストは耳をかそうとしなかった。ケットは、ため息をつく。
「それは承知の上、だよね」
しばらく、二人は黙って旧市街へと歩いていった。
エディンバラには、旧市街と新市街がある。旧市街は、歴史的建造物が残る、伝統的な街だ。一方で、新市街は、計画的につくられた都市計画の傑作といわれている。
リストは以前、ナンシェとともにここに旅行に来たことがあった。

旧市街のB&Bに泊まっていたのだが、ナンシェはなぜか怖がっていた。旧市街の雰囲気が不気味に感じたらしい。伝統的な建造物は美しく、ナンシェも気に入ってたはずだったが、夜になるとその重苦しい空気がナンシェをおびえさせたのだ。暗くて冷たい、寂しい感情に満ち溢れている。ナンシェはそういった。

遺産とは、遺された産物。考え方によっては、その時代の部外者。置いていかれた、といってもいい。それは、疎外感なのかもしれない。リストは、そのときそう思った。

「なんだか静かだね」旧市街を歩きながら、ケットは言った。

「うん。残ったのか、遺されたのか、どっちなんだろう」

「……リスト？」

自分でも分かっていた。リストは、この街と自分を照らし合わせていたのだ。時代の部外者。その言葉が頭をよぎったとき、リストは自分の存在に疑問をもつようになった。

リストの寂しそうな横顔にケットは気づいていた。ケットには、その理由もなんとなく見当はついていた。だが、それをわざわざ口にだすことはない。それは、彼自身が答えを見つけなければいけないことだ。一生かかってでも、見つけなければならない答えだ。

「あ」

突然、リストは声をあげた。

「なに？」

通りの向こうで、一人の老婆が大荷物をかかえて歩いている。よたつき歩いては、荷物を降ろして休んでいる。

「あんな様子でどこまで行くつもりだ？」リストは、心配そうに老婆を見つめた。
「どうするの？」

ケットの言葉に、リストは微笑んで振り返る。

「このスーツケース、運べる？」
「うん！」
「よし」

リストからスーツケースを受け取ると、ケットはリストが老婆の元へ駆け寄るのを見つめた。

「荷物、持ちましょうか」後ろから老婆に尋ねる。「重そうなので」と、警戒されないように付け加えたが、そんな必要はなかった。老婆はリストの申し出を大喜びで受けた。
「すみませんね」とニコニコしながら言う老婆。リストは、老婆の荷物を背負い、彼女に言われたとおりに歩いている。その後ろで、ケットはリストのスーツケースをひきずってついてきていた。

「あの子」老婆が突然、リストに問いかける。
「はい？」
「後ろからついてきてる子、弟さん？」
「ああ……いえ、違います」
「あら」

老婆は振り返り、ケットを見つめた。

「確かに、似てないわねぇ。きれいな髪だこと」
「特徴的でしょう」

「服装もおもしろいわね」そこで、老婆はハッとした。「もしかして、フェスティバルにきたの？」
「え？」
「エディンバラ・フェスティバルにでるんでしょ」
リストは、ははは、と笑った。

「まさか」
「あら。残念ねぇ」
「でも、フェスティバルにはいきますよ」
「そうよねぇ。この時期にくるんですもの。それはそうよねぇ」

彼女は誇らしげにうなずいた。
ここのフェスティバルは、毎年この時期、八月にひらかれている。大勢の人が訪れる。大道芸人やミュージシャン。様々なパフォーマンスが道のあちらこちらで披露されるのだ。
確かに、ナンシェと来たときは、このフェスティバル目当てだった。とても楽しい“旅行”だった。だが、今回は違う。旅行じゃない。楽しんじゃいけない。使命を果たすための旅だ。
リストは荷物を運びながら、ナンシェとの思い出を思い出さないようにしていた。懐かしんではいけない。この命は、マルドゥクのためだけにあるのだから。リストは、自分にそう言い聞かせていた。

＊　＊　＊

それは別れ際だった。老婆の家まで荷物を運ぶと、老婆はリストにカードを渡してきた。
「これは？」
「フェスティバルに行くんでしょう？　そこにね、有名な占星術師

がいるのよ」
「占星術師」
「ぜひ、いってみるといいわ」
「いえ、でも……用事があるので」
「あら、やあね。一分一秒を争う用事？」

リストは、ため息混じりに微笑んだ。その笑みは、とても皮肉をふくんでいた。

「はい」

老婆は、リストのその返事に笑い出す。

「やあねぇ、若者なのに。そんなんじゃ、大事なチャンスを見逃すわよ」
「え」

戸惑うリストをよそに、老婆はその手にしっかりとカードを握らせた。

「必ず行きなさい。出会いやチャンスというものを大切にするべきよ。
全ては……」そこまでいうと、老婆は食い入るようにリストの顔をのぞきこんだ。

急に雰囲気のかわった老婆に、リストは戸惑った。変な胸騒ぎがした。
その様子に老婆は満足したかのような笑みを浮かべ、ゆっくりとまた口をひらく。

「全ては、運命のヒントなのだから」
「！」
老婆は最後に、ふふ、と笑い、ウィンクをして家へ入っていった。
残されたリストは、ただきょとんと立ち尽くしていた。
「どうしたの？」
ふと、リストの耳に、そんなのんきなケットの声がはいってきた。ケットは、ぽかんと突っ立っているリストを見上げて首をかしげている。
「それ、なに？」ケットはリストが握っているカードを指差す。
「……運命のヒント」
リストは無意識のうちに、そうぽつりとつぶやいた。
「へ？」と、ケットが目をぱちくりとさせて聞き返す。「どうしたの？」
「フェスティバルだ」
ケットに見向きもせず身を翻すと、リストは足早にフェスティバルが行われている通りへと進みだす。彼は何かを感じていた。それは変な胸騒ぎだった。でも、嫌なものじゃない。漠然と何かが分かったような気分だ。
「リストー、まってよ」後ろからケットの呼ぶ声がして、リストは立ち止まって振り返る。
「ごめん、ケット」

ケットはぱたぱたとリストのもとへ走ってくる。彼には、リストがなぜ急ぎ始めたのかさっぱり分からなかった。

「とにかく、フェスティバルにいこう」リストは、ただそれを繰り返す。

「何度も、それはきいてるよ。一体、なにがあったの？」

二人はまた足並みをそろえて歩き出した。今度は、リストもケットをおいていかないようにゆっくりと歩いている。

リストはしばらく黙り、またさっきのカードを見つめた。

「エノクは、きっと、気づいている」

「！」エノク、という言葉にケットの顔つきがかわった。しかし、リストはそれに気づくこともない。緊張しているようなこわばった表情でカードをみつめていた。

「きっと、全部、分かってるんだ。もしかしたら、オレが会いに来ようと思うもっと前から……オレが来ることを知ってたのかもしれない」

「……そうだね」ケットは、静かに言って、微笑んだ。「それが、エノクというものだからね」

預言者　エノク？

エノク、という存在がいることは、リチャードから幼いときからきいていた。きっと、それはあいつには分かっていたからだ。オレが、エノクを必要とする日がくることを。

オレには情報がたりなかった。使命も運命もわかってる。ただ、それをなすための情報が欠けていた。

「リスト！　あそこじゃない？」

ケットはそう言って坂の上を指差した。坂には大勢の観光客と大道芸人がいる。この風景、見覚えがある。

――すごいね、リストちゃん！

オレの頭の中で、ナンシェのそんな声が響いた。もう、あのときのように、ナンシェと旅をすることはないのかもしれない。今度、ナンシェと会えるのはいつなんだろう。というより……また会うことはできるのか？

「リスト？　どうしたの？」

「え？」

急に、ケットの声が耳にはいってきた。

「いや、ちょっと考え事」言って、ケットがさっき指差した『占星術の館』なるものに足を運ぶ。占星術、というから、もっと怪しげな店かなんかだと思ったが……どうやら普通の家みたいだ。

扉を開けると、リビングには、歳も国も様々な客がイスに座って

いた。入ってきたオレを、皆がいっせいに見つめてきた。

「……どーも～」小声でそう挨拶するが、誰も答えることなくまた顔をもとにもどした。

「なんだか、変な雰囲気だね」

「そうだなあ」

それにしても、これは皆、客なのか？　だとしたら、本当に有名な占星術師だ。

だが、それらしき人はどこにもいないし。そもそも、受付、とかはないのか？　部屋はただのリビングで、イスやソファがあるだけ。オレはあたりを見回し、とりあえず、近くに座っているめがねをかけた少女に聞くことにした。

「ごめん。聞きたいことがあるんだけど……」

少女は黙って、めがねをとった。なんか、妙な雰囲気の子供だ。人形のようにかわいらしい顔をしているのだが、服は黒いワンピース。魔女っ子気分か？　白に近いブロンドの髪を、なぜか左半分だけみつあみにしている。右半分は、何もせず、ストレートのまま下ろしている。腰まであるロングヘアだ。だが、気になるな。なんで左だけなんだ？

「ここに有名な占星術師がいるってきいて」

「あそこの部屋に行きましょう」

「え？」

少女はめがねをささっとふくと、またつけた。なんなんだ、この子は？

「部屋って……あぁ、そこが受付なの？」
「ふふふ」
笑い声はオレの後ろから聞こえた。振り返ると、そこにはソファに座っている老婆いた。なにも、笑われることは言わなかったと思うけど。
「何か、変？　おばあちゃん？」
すると、老婆は得意そうに微笑んだ。
「ここの占星術師様には、受付なんていらないんだよ。誰が来るかなんてもうわかってらっしゃるんだから」
「へ……」
「アイーダおばあさんには何度も言ってるのよ。あまり一度に物を買うな、て」
少女は高い声でそう言った。ため息まじりだが、どこか楽しそうに話している。
「アイーダおばあさん？」
何の話だ？　誰かと人間違いでもしてるのか？
しかし、少女はなにも疑いも迷いもない、自信に満ち溢れた表情をしている。
「会ったんでしょ？　手伝ってあげたのよね」
少女はくりっとした目でオレを見上げた。不思議な光をもつ、碧眼の目だ。

じっと、その目を見つめていると、ふと、さっき助けたあのおばあさんのウィンクがうかんだ。

「あ！」

あわててポケットにしまっていたカードを取り出す。『占星術の館　ポリー・マッコーネル』。

「ポリー……マッコーネル？　君が？」

まさか、この女の子が占星術師？　少女は、ただニコッと微笑んだ。それは、ただの子供の笑顔にしかみえない。

「ポリー・エノク・マッコーネル」

それまで、おとなしくしていたケットがいきなりそういった。オレは驚いてケットに振り返る。

「エノク？」

ケットは真剣な表情で少女を見つめている。ポリー・『エノク』・マッコーネル？　ケットは今、そう呼んだよな。ということは、この子がエノクってことか？

でも、確かに、それなら納得できる。彼女が有名な占星術師であることも、そしてオレがここにたどりついたことも。

「驚くことないはず。マルドゥクの子。どこか、予想はしてたんでしょ？　ここで私と会えるだろう、て」

「え……」

オレを、マルドゥクの子と呼んだ。やはり、オレのことも全部分かってる。この少女が、エノク。
呆然としているオレを気にする様子もなく、エノクはケットへと視線をうつした。

「エンキのエミサリエス……ようこそ、いらっしゃいました」
「ケット、でいいよ」

少女は口元だけ笑みをうかべた。しかし、その視線は真剣そのものだ。二人の間に、妙な緊張感がはりつめている。
二人はしばらく黙って見つめ合っていた。まるで視線で会話をしているみたいだ。オレは、ただそれをみているしかできなかった。

「さて」と、少女の高い声がその沈黙をやぶった。「ここで話していても仕方ない」

少女はイスから立ち上がると、にこりと微笑んだ。その笑顔は、無邪気な子供にもどっている。

「ごめんなさい、皆。もう少し、待っていてね」

周りに座っている客にそういうと「皆には、先約がいるからって待ってもらってたのよ」とオレに小声で言った。
「せんやく……」

オレはハッとした。そうか、ここで待っている客は、オレのせいで待たされてたんだ。彼女は、オレがこの時間にここに来ることを知っていたから。そして……オレは気づいた。オレは偶然、エノクに声をかけたわけじゃない。彼女は、オレがこの席で座っている『少女』に話しかけるのも、知っていたから、そこに座っていただけ

だ。
でも、意外だ。オレは少女の背中を見つめて思った。
「もっと、おばあさんだと思った？」いきなり、エノクはそう言って振り返る。
「え？」あっけにとられた。
少女は、いたずらっぽく、クスっと笑い、奥の部屋へと歩いていく。
「今……心を、読んだの？」オレはふとつぶやいていた。
「違うよ、リスト」すかさず、ケットが答えた。
「違う？」
「リチャードから聞いてるでしょ。エノクは、永遠の秩序を知る者。彼女はただ、知ってたんだよ。君が何を考えるのか」
「……」
知ってた？　オレが何を考えるかも？　本当に、エノクは全てを知ってるのか。でも、それってどういう感覚なんだ？
でも、だとしたら…やっぱ、彼女なら、オレの答えも知ってるのかもしれない。
「ケット、行こう」
力強く、足を踏み出し、彼女が入って行った部屋へ向かう。

預言者　エノク？

「今日、あなたが得られる答えはひとつよ」

部屋に入るなり、彼女はそういった。こちらの部屋はただの子供部屋だ。窓のそばに白いテーブルと、それをはさんでかわいいアンティークのようなイスがおいてある。彼女はその奥のイスに座った。

「ひとつって……そういう決まりなんですか？」

オレの言葉に、エノクはくすっと微笑んだ。「とりあえず、座ったら？」ともう一つのイスを指した。言われるまま、エノクに向かい合って座る。やはり、どうみても子供だ。でも、それはケットも同じか。

「あれ」

ふと、ケットがいないことに気づいた。

「ケット？」立ち上がろうとすると、それをとめるように、エノクがわざとらしい咳払いをした。

「質問があるのは、あなたでしょ？」

「……」

「あれがエンキのエミサリエスだとは……思ったより、小柄ね」

エノクは、小柄、という言葉を強調して言った。きっと、皮肉だったんだろう。

オレは彼女をじっと見つめた。やはり、ケットと一緒だ。見た目

は子供でも、どこか重い空気がある。これは、なんだろう？　畏怖？

「エミサリエス……神の細胞でつくられたバイオロボット。天使と呼ばれるもの」エノクはそこまで言ってひじをついた。「とても、そうは見えないわね。子供にしかみえない」

「……」君もだよ、といいたいのをこらえた。でも、きっと彼女はそれも知ってるんだろう。オレが言おうと思って、そしてそれをやめるのも。

「リスト・マルドゥク・ロウヴァー」

ふと、エノクは、表情をかえ、するどい視線をオレに向けた。

「私は、永遠の秩序を知る者・エノク。私に、何を聞きに来たの？」

「……それも、知ってるんだろ？」全てを知ってる、といわれると、なんだかわざわざ言うのが馬鹿らしくなってきてしまう。失礼なのかもしれないけど、そんないやみが口からこぼれていた。

エノクは気を害した様子もなく、くすっと笑った。

「知ってるよ。でも、あなたが私に質問をするという行為に意味があるの。答えだけだすのは、本当は誰にでもできるんだから」

「え？」

よく、言われた意味が分からなかった。エノクはそれも分かってるのだろう。無邪気な笑顔で、オレをごまかした。

「さ、何を聞きたいの？」

「……オレは、どこに行けばいいんです？」

シンプルで、そしてストレートな質問だった。オレに必要な情報

は、それだけなんだ。

「『収穫の日』が、近づいている」エノクは、窓の外をながめた。でも、窓の外はただの路地裏。別にいい風景というわけではない。

「『災いの人形』は、今は幸せに暮らしている」

「！」

「『収穫の日』まで、少し変わった環境だけど、ただ普通に過ごすわ」

やはり、エノクは『人形』のことも知っている。オレは、つい、体をのりだしていた。

「『人形』はどこに？」

「少年とであった」

「え？」

エノクは、窓に向けていた視線をゆっくりとこちらへ向けた。

「彼も、あなたと同じ」

「オレと……？」

「迷いながらも……自分を認めようとしている」

「！」

「驚いた顔をしないで。私はエノク。全てを知っている、といったはずよ。あなたが何者なのかもわかってる。本当は、『誰』なのかも……」

確かに。だが、オレは調子が狂った。なんだか、ルール違反だ。全てを知っている…『全て』って、どこまでが『全て』なんだよ。

「それで」気を取り直して、オレは続ける。「その少年……邪魔に

なるんですか？」
「邪魔……それは難しい質問ね。誰の立場からの話かによるもの」
なんだか、理屈っぽいな。だんだん、エノクと会話をするのがめんどうくさくなってきた。だが、彼女しか今頼れる人間はいない。根気強く聞き続けるしかない。
「じゃあ、『収穫の日』の妨げになるかだけでも……」
「いいえ。それは大丈夫。『収穫の日』は誰にも邪魔されない」
誰にも？　その言葉には違和感があった。なぜなら、オレこそが、『収穫の日』を阻止する役目をもつ人間だからだ。
「それはつまり……オレは、失敗するってことですか」
「失敗もなにもない。『収穫の日』は神の意思に反する手順で行われる。これは、違反よ」
「どういう意味？」
「彼は……己の神を見限った」
彼……オレはハッとした。心当たりがあるからだ。
「彼って、まさか」
「アトラハシスの生き残り。王をつぎ、『災いの人形』と『箱』を持ち出した者」
「フォックス・エン・アトラハシス」オレはつぶやくようにその名を口にした。
彼こそ、パンドラの箱が開いた日、アトラハシスの王を継ぎ、姿を消した少年だ。そして、アトラハシスの一族の、おそらくたった一人の生き残り。

「やはり……生きていたんですね」

アトラハシスの一族は、『ルル』と呼ばれる種族。つまり、『人類』の王。そして、オレたちマルドゥク家の主たる神・エンキが信頼する賢者の一族。だから、アトラハシスとマルドゥクは協力し合っていた。アトラハシスは、『ルル』の王として、パンドラの箱を管理することを任され、そしてオレたちマルドゥク家をサポートする立場にあった。だが……

「あの箱が開いた日、ニヌルタの王が、アトラハシスの一族を惨殺した」

オレは、ぐっと拳を握り締めて、搾り出すように言った。

「タール・ニヌルタ・チェイス……『ルル』を嫌う神・エンリルの僕」

「あの日、リチャードは遅れてアトラハシスの神殿についたんだ。あいつは言ってた。『箱』は消え、そして王を継いだはずの少年の姿が見当たらなかった、て」

まさか、誰もニヌルタの王が、アトラハシスの一族を殺すとは思っていなかった。それは、ニヌルタの一族の使命にないはずだったからだ。おそらく、王であるタール・ニヌルタ・チェイスが、使命を勝手に解釈したんだろう。今度のニヌルタの王は、ひどく乱暴な性格をしている、という噂は聞いていた。あの恐ろしい出来事は奴の勝手な暴走によるものだろう、とリチャードはオレに言った。

だからこそ、リチャードはオレを必死に訓練した。オレは、そんなわけわからない男と戦う運命だからだ。

「本来なら、『収穫の日』、オレはニヌルタの王と、パンドラの箱を前に決闘するはずだった」
「それが、今や、『箱』の場所さえ分からない」
オレはただうなずいた。だから、オレはここに来たんだ。
「パンドラの箱は、彼が持っている」
「本当ですか！」
少し、安心した。少なくとも、あの日、ニヌルタに奪われたわけではなかった。それだけでも、ずいぶんマシな状況だ。
「『人形』は？」オレはすかさず聞いた。
「彼の元にはない」
「どういう意味です？」
オレは首をかしげた。てっきり、フォックス・エン・アトラハシスが『人形』ももち出し、守っているのだと思ったのだが……。
「『災いの人形』は、彼の手を離れ、大切に守られている」
「じゃあ、フォックス・エン・アトラハシスは……どこに？」
「『収穫の日』、『災いの人形』を迎えに、『箱』とともに現れる」
「！」
「彼は、監督者としての立場を忘れている。もう、神の意見を求めていない。あなたたち、神の僕を必要とするのもやめ、ただの人間として神の創造物を私物化している」
「……ちょっとまってくれ、エノク」
大きな疑問があった。フォックス・エン・アトラハシスが、あのアトラハシス一族惨殺の日、たった一人いきのび、そのとき『パン

ドラの箱』と『人形』を連れ出した。おそらく、タール・ニヌルタ・チェイスからうまく逃げのびたのだろう。そして、『人形』から離れ、『収穫の日』にまた『パンドラの箱』を持って『人形』の前に現れるという。

「フォックスの狙いはなんです？　『箱』を持って『人形』の前に現れるって、まるで…」

「彼は、『災いの人形』に『テマエの実』を与えるわ」

「そんな！」オレの鼓動が大きく高鳴った。「……それじゃ、やっぱり……」

「彼はあなたたちマルドゥクにもニヌルタにもつく気はない。ただ、『箱』を開けることを選んだ」

「『箱』を開ける！？」オレの声はかすれていた。

冗談じゃない。アトラハシスの一族は、その昔、『最高の賢者』と呼ばれたエンキのお気に入りのルルの末裔。そして、ルルの王として認められた一族だ。それからというもの、オレたちと同じく、エンキを崇拝し、エンキのために使命を全うしてきた。なのに……『箱』を開けようとしているのか？

「それじゃ、アトラハシスは、ルルを滅ぼすつもりなんですか」

「……」

エノクは答えなかった。しばらく沈黙が続き、いつからかけていたのか、どこからかタイマーがなる音が聞こえた。

エノクは、ひとつため息をつき、立ち上がった。

「話しすぎたかな」

「え？」

「時間。次の人、早くしないと電車を逃しちゃうから」

「ちょっとまってくれ。まだ聞きたいことが」

そう、オレはエノクに聞きたいことがあった。それは、とても個人的な話だけど…

でも、エノクは知っているんだろう。

「神は人に命を与える」

「え」

エノクは急に脈絡のないことを言い放った。

「でも、そのときに、その命に意味までは与えてくれないの」

「！」

「それは……人が生きる意味は、生きているうちに自分で作り出すものだから」

エノクは、やはりケットと同じように、全てを見通すような瞳でオレをじっと見つめて言った。

「あなたには命がある。私に分かるのはそれだけよ」

それは、遠まわしないい方だった。エノクは、呆然とするオレの横を通り過ぎ、何も言わずに部屋から出て行った。

「つまり……」一人残された部屋で、なんだか変に力がぬけた。「意味は自分で作り出せばいいだろ、てことか」

でも、エノクは答えてくれなかった。この命が、果たして神から与えられたものなのか。そして、そんなオレに神の使命を果たす資格があるのか……。

まあきっとそれも、自分でつくりだせ、といわれるような気がした。

「あ」ふと、最初に彼女がこの部屋で唐突に言った言葉を思い出した。

「今日、オレが得られる答えはひとつ。このことだったのか」

オレの命の意味はオレで作り出せ。彼女がくれた答えはそれだけ。だが、それが果たして『答え』といえるものなのかは微妙だ。期待はずれで気がぬけたが、それでもどこか、安心した気分になった。

「よし」

ため息交じりに勢いをつけ、イスから立ち上がった。

＊　＊　＊

リストはエノクに別れを告げ、占星術の館を出た。

「どうだったの？　リスト」

ケットは、好奇心に満ち溢れた表情でリストを見上げた。二人は、周りの大道芸に目をくれることもなく、坂を軽い足取りで下っている。

「いろいろ教えてもらえたよ。意外と答えてくれるもんだな」

「へえ、そっか。よかったね、リスト」

「とりあえず、『収穫の日』までに『人形』を探そう。エノクは、フォックス・エン・アトラハシスが『パンドラの箱』を持って『人形』のもとに現れると言ってた」

「フォックス・エン・アトラハシス？　王をついだっていう少年？」
「ああ。やっぱり、生きてたんだ」リストは、ケットにそう言って微笑んだ。

その言葉に、ケットの表情はぱあっと明るくなる。

「そっか。よかった！」

ケットはリチャードと共に、あの日、アトラハシスの神殿で惨殺の跡を見た。リチャードは、自分がもっと早く着いていれば、と嘆き、その場で泣き崩れた。ケットはその背中に投げかける言葉もみつからず、ただアトラハシスの一族の無残な姿を、無力感におしつぶされそうな気持ちで見つめるしかなかった。

「亡骸の中に、王を継いだはずの子供の姿が見当たらなかったから……つれさられたか、もしくはどこかで殺されたんじゃないか、て思ってたけど……」

ケットは胸元に手を置き、祈るように目をつぶった。

「よかった」とケットは、もう一度、深いため息とともにつぶやいた。リストは、そんな神の使者の頭に優しく手をのせた。

「でも、皮肉だよな」ふと、リストは表情を変えた。
「え？」
「あの事件がなければ、オレは創られることはなかったんだ」
「！」

ケットは、リストのその一言で、フェスティバルが一瞬、静まったかのように感じた。そういえば…そうリストが考えるのもおかし

くはなかったのだ。ケットはぐっと喉がくるしくなった。

「リスト、それは……」

また、ケットにはリストに投げかける言葉が見つからなかった。

「つまり、だ！」ケットの頭から手を離すと、リストは急に明るい表情に戻り、そう声をはりあげた。「要は、『人形』のとこで、フォックスを待ち構えればいいわけだ！　そしたら、『人形』もパンドラの箱も手に入り、一件落着！」

にこりと微笑むリストの笑顔に、ケットは余計につらくなった。やはり、彼の悩みまではエノクは解決してはくれなかったのだろう。ケットにはそれが分かった。

「リスト……」

「ん？」

何かを言ってあげたいのに、なにも思いつかない。ケットはうつむいた。

「ケット？」

リストの心配そうな声がケットの耳にはいってきた。

「なんでもない」ケットにいえるのはそれだけだった。

「それで……今から、どこに行くの？　『人形』の場所は教えてくれた？」

ケットも気持ちを切り替え、リストを見上げた。だが、その言葉に、リストは表情を曇らせた。

「あ」
「え？　どうしたの？」
「忘れてた！」
「ええ？！　一番大事なことでしょお？」

つい、新事実が明らかになるなかで、彼は具体的な行き先を聞くのを忘れていたのだ。

「どうするの？　戻ろうか、リスト？」
「いや……あ、電話だ！」
「え？　電話？」

リストは、携帯とカードをポケットから取り出す。

「きっと、どっかに電話番号くらいかいてあるだろ？」とあわてた様子でカードの隅々を調べる。だが、そこには名前と地図しか書いていない。

「う、嘘だろ？　いまどき書いてないの？」

がっくりと肩を落とし、「もう一度戻って聞くしかないか」とリストは坂を見上げた。その横で、ケットはカードを下からのぞき、「あ」と声をあげた。そこには、手書きのメモのようなものが書かれている。しばらく見つめて、ケットはため息まじりに微笑をうかべた。それが何か分かったのだ。

「ねえ、リスト」

「ん？」
「裏、見てみて」
言われて、リストは眉をあげる。
「裏？　なんで？」
「いいから、ほら」
言われたとおりにリストはカードをめくった。
「あ」
その手書きのメモは、どこかの住所だった。
「……」
やはり、エノクは『全て』を知っているのだ。リストは恐怖すら覚えた。
「これって……」
ひきつった笑顔で聞いてくるリストに、ケットは自信満々の笑みで答える。
「ケットたちの目的地だよ」
「……ははは。もう笑うしかないな。エノク様さまだ」
「で、どこ？」
しかし、そこに書いてある住所も信じられないものだった。リストは、眉をひそめながら、もう一度見直してみる。

「ニホン」
「え？」
「ニホンのトーキョーだ」
「トーキョー？　なんで、そんな遠くに？」

リストはただ首を横にふった。

「ほかには何か書いてある？」
「詳しい住所と、名前だ」
「名前？」

二人はふと黙り込んだ。名前……それは、一体、誰の名前だろうか。

「オレは、今から『人形』のもとに行こうとしてた」
「うん。ということは…エノクはきっと『人形』の居場所をそこに書いてくれてるはずだよね」
「……つまり」リストはごくりとつばをのみこんだ。「この名前は『人形』の名前」

ケットも、緊張の面持ちでうなずく。

「『災いの人形』……『パンドラ』の名前だね」
「ああ」

リストは、カードをぎゅっと握り締めた。そこにある名前は、ルルを滅ぼす『災いの人形』。そして……自分が殺す運命にある女性だ。

「カヤ……カンザキ」

放課後の雨宿り？

「アンリちゃん、ここのシーンなんだけど」

一応、このふざけた劇の監督であるアンリに、台本をもって神崎カヤがかけよった。

当たり前のようにカヤがこの映画研究会の部屋にいるようになって、二ヶ月がたった。一体、台本の何にほれたんだか……すっかり、この変人の集まりの一員だ。

主人公・少女Aの役作りも着実にこなしているし、演技のほうも見事というしかない。

この二ヶ月間。彼女は俺たちを驚かせてばかりだ。勉強も運動神経も、何をやらせてもぬきんでている。俺は違うクラスだから実際にその場にいたわけではないが……平岡の情報によると、音楽の授業でもクラスメートたちを驚愕させる才能を発揮したとか。

そもそも、イラン人である彼女が日本語をぺらぺらしゃべってる時点で賞賛に値するってのに。なにものなんだ？　この女は？

「藤本！　なに、神崎をじろじろみてるんだよ？」

「え？　ああ、平岡か。別にみてねえよ」

本当はみてたけどな。がんみしてたけど……

「それより、聞いたかよ？」

平岡が目を輝かせている。また噂話か？

「主役の少年A役の小倉」

「小倉？　ああ、新入部員で主役大抜擢のあいつか」

というか……この劇の主役をやることを条件に入部した、下心みえみえの男。見た目は確かに人並み以上にかっこいいからな。アンリが頼み込んだに違いない。

「小倉がどうしたんだよ？」

「どうやら、神崎にほれてるらしいぜ」

「は？」

平岡は、ほんとうにくだらない噂話までもちこんでくるな。

「そんなの誰の目からみても明らかだろうが」

「え、お前、分かってたのか？」

そんなことをビッグニュースかのように言ってきたお前の目を疑うよ。

正直、神崎が転校してきてからくだらない奴が一気に増えた。神崎がこの劇に参加すると聞いて、大量の男子生徒が『俺も参加する』ってアンリのもとにつめよったし……練習中に、いろんな男がこの部室をのぞきにくる。二ヶ月経ってやっとその人数も減ってきたが。

だが、同時に問題もある。神崎目当てに劇に参加するといった男子生徒が、だんだんめんどうくさくなったのか、勝手に辞めていくのだ。今じゃ、重要な役をあてられた奴が数人のこってるくらい。

その点、小倉はマシなほうか。二ヶ月たった今もちゃんと続けてるし。

「そういえば……」ふと、部屋を見渡す。「その小倉が来てないな」

「確かに。まあ、いつもそんなに早く来る奴でもないしな」

「……」

主役をもらい、皆の注目をあびれる。小倉には、それはどうやら魅力的な条件らしく、まじめに稽古に励んでいた。しょっちゅう神崎にちょっかいをだし、彼女を困らせていたのはおいといて。練習はしっかりしてる、てとこだけは尊敬したんだがな。

「あいつ、いつまでもつかな」俺は小声でそうつぶやいた。

「え？　なんか言ったか？」

「いや、別に……」

一方で、俺だ。

台本を読んでいる神崎の横顔に目をやる。この二ヶ月。神崎とろくに接触はできていない。彼女に近づき父親を調べる、という『おつかい』は一切進展していないのだ。

「はあ……」なんで俺がこんな『おつかい』をまかされなきゃいけないんだ。俺は、そういう心理戦のようなものは苦手だ。まして、同い年の女の子を騙して近づくなんて、悪役のすることだろ。

考えようによっては、カインである俺は悪者なのかもしれないけど。

「はあ……」

「？　なんだよ、藤本。はあ、はあ、うるせえな」

ガラッ！　という音がして、扉が開いた。現れたのは小倉だった。まさに、噂をすれば、てやつか。

「小倉！　丁度よかった。聞きたいことがあったんだ」小倉が現れてすぐ、アンリがそう言って立ち上がった。

「悪者をやっつけるシーンをね、いれたいんだけど……」

「冗談じゃねえ！」
「え？」

小倉の叫び声に皆、静まり返った。

「なんだ？」平岡がまた目を輝かせている。こいつは、野次馬根性というものを生まれもってきたのだろうか。
しかし、小倉の奴、どうしたってんだ？　あんなに声をあらだてるような奴だとは思わないけど。一番驚いているのはアンリだろう。呆然と突っ立っている。

「え？　なに？　悪者やっつけるの……無理？」
「俺は……おりる」
「ええ！？」
「うそだろ」というどよめきがおきた。
主役がここにきてやめるといいだしたんだから当然だな。やっぱり小倉も飽きたのか、と思ったのだが……どうも、様子がおかしい。小倉の顔色は青く、さらに体にはところどころ怪我がある。おまけに……右足だ。包帯まきで、そして松葉杖までついている。アンリもそれに気づいて、目を丸くした。

「小倉……あんた、その足どうしたの？　事故にでもあったの？」
「う、うるせえ！　とにかく、俺は劇をおりる！」言って、小倉は神崎をにらみつけた。「お前には、二度とかかわらねえ！」
「……え」神崎が消え入りそうな声でつぶやく。

捨て台詞をはいて、小倉は部屋をでていった。扉を力強くしめるもんだから、部屋にその余韻が残った。残された俺たちはただ呆然とした。一体、なんなんだ？　最後のセリフからすると……もしかして、神崎と何かあったのか？

俺は、神崎の様子を伺う。彼女も顔色が悪い。やっぱ、何か心当たりでもあるんだろうか。

「カヤっち……あいつとケンカでもした？」

そんな聞きにくい質問をなげかけたのはアンリだった。こいつは遠慮というものをしらんのか。

「……」

神崎は黙りこくっている。しばらく沈黙がつづき、アンリがためいきをついた。

「ま、やりたくないっていうなら、仕方ないしね。新しい主役候補を探さなきゃ。

こら！　小道具担当！　なに、ぼうっとしてるのよ！」

アンリのいいところ。この転換の早さだ。アンリに怒鳴られた小道具担当の二人はあわてて作業を再開した。それを皮切りに、ほかの連中も自分の作業を始めた。

また教室に活気が戻った。皆、小倉のことは気になってるんだろうが……神崎の手前、知らんふりをきめている。当の神崎は、教室のはじで窓の外をみていた。

「……」

その横顔は、すごく寂しそうだった。

「神崎」

気づくと、俺は話しかけていた。自分でも驚いた。こんなに自然と彼女に話しかけられたのは初めてだ。

「大丈夫……か？」とぎこちなく聞いた。それ以外にも気の利いた質問はあるのだろうが……アンリ以外、普通の女と話すことのない俺にはこれが限界だ。

「……うん。雨、ふりそうだな、て思ってただけ」

「雨？」

確かに、雲行きはあやしいな。俺も窓から空を見上げた。

「嬉しい」急に、神崎はそういった。

「え？」

「藤本くん、やっと話しかけてくれた」

「は？」

「アレ以来、全然話しかけてくれなかったから……」

「アレ以来？」

「ほら、初めて会ったとき。私が藤本くんを週番だと間違って……覚えてない？」

ああ……二ヶ月前のあれか。アンリが俺に神崎の勧誘をおしつけてきたあの一件。確かに、あれ以来まともに話してなかったかもな。そりゃ、無理な話だよ。俺には『下心』があるんだ。話しかけるという行為にさえ、抵抗があった。

本来なら、藤本さんのために、積極的に彼女に話しかけなきゃいけないとこなんだけど……

「覚えてるよ」

「てっきり、私、何か嫌われることしたかな、て心配してたの」

「いや、そういうんじゃ……」
「よかった」神崎は笑顔で言った。
なんだ、意外と話せるな。今まで変に気を張っていたのが馬鹿らしくなった。
「あのね」声をおとして神崎は言った。「今夜、一緒に帰れないかな？」
「……え？」

放課後の雨宿り？

アンリちゃんが言ってた。『和幸はああ見えて実はとんでもなく強い奴なんだ』、て。半信半疑だった。失礼かもしれないけど……藤本くんはそんな風に見えないから。物静かで、いつも部屋の隅でイスに座って平岡くんと何か話してる。たまに私のほうを見てることもあるけど、特に話しかけてくるわけでもなく、目があうとすぐ目をそらされる。

でも、アンリちゃんはあるエピソードを教えてくれた。それは、彼女が高校に入ってまもなくのこと。アンリちゃんは、帰り道に不良にからまれてしまった。しつこくされ困っていると、藤本くんが偶然通りがかって、あっという間にやっつけちゃったらしい。

それがきっかけになって、アンリちゃんは藤本くんを映画研究会に誘ったらしいんだけど。

とにかく……もし、藤本くんが本当にそんなに強いなら……こんなことして、私はずるいかもしれない。でも、小倉くんの様子で、またアレが始まるって確信した。同じこと、何度も繰り返してたまるか。今度は、たちむかうわ。どんな手をつかっても…自分でなんとかする。そう決めた。だから、藤本くんを誘った。

二人きりで帰るために、ばらばらに練習をはや引きして待ち合わせをすることにした。まず、私が先に早退。昇降口で十分ほど待ってる。相変わらず、雲の様子はあやしい。すぐにでも雨がふる……そう直感的に分かった。

「神崎」

藤本くんの声が後ろからした。振り返ると、藤本くんが走ってくるところだった。

「早退するっつったら、アンリがぶーぶー言いやがって……ちょっと遅くなった？」
「ううん。十分ぴったり。打ち合わせどおりだよ」
「そっか」と彼はぎこちなく笑った。

藤本くんは、よくこのぎこちない笑顔をみせる。シャイな人なのかな？

「帰るか」

二人で靴を履き替え、昇降口をでた。

「そういえば、神崎、家はどこ？」
「あ、そっか！　もしかしたら、家の方向全然違うかも！」

思わず私は立ち止まった。そういえば、そこんとこなにも考えてなかった。

「うちは西通り三丁目のほうなんだけど。藤本くんは？」
「え？　うちは…反対側、かな。まあ、とりあえず神崎の家まで歩こう。どっちにしろ、送っていくつもりだったし」
「でも、なんか悪い」
「いいっていいって」

あ、今度は普通の笑顔だ。
藤本くんは「気にすんな」といいながら歩き出した。その背中は、なんだかがっしりしてて……頼もしかった。

「それで……」

校門をでて、しばらく歩いてから藤本くんが言いにくそうに切り出した。

「小倉と何かあったの？　いや、言いたくなかったらいいんだけど……」

「……」

それは……気になるよね。当然、聞かれるかな、とは思ってた。そうね。そろそろ、本題にうつらなきゃ。私はごくりとつばをのみ、藤本くんをじっと見上げた。

「そのことで、相談があるの」

「相談？」

「噂……聞いたことあるかもしれないけど。私ね、何度も転校を繰り返してるの」

「たしか、お父さんの仕事の関係だよね？」

「え……」

ふと、藤本くんの声のトーンが変わった気がした。表情はさっきとなにも変わってない。でも、どこか雰囲気が違う。なんだろう、この感覚。こわい？

「ううん」戸惑いながらも、私も今まで通りにふるまう。「そういうことにしてはいるんだけど……本当は、父とはなにも関係ないの」

「……そう」

藤本くんは、がっかりしたような、安心したような、変な表情をみせた。

確かに、学校には父の仕事の関係、てことにしてるけど、何かし

ら。さっきの藤本くん。急に真剣な表情で、まるで脅すような声だった。私の、気のせいだよね……。

「全部、転校は私のせいなの」

「君の『せい』？」

「どこの学校にいっても、必ずけが人がでたの。それも、決まって私に近づいた男の子だった」

「……あ！」藤本くんは、なぞなぞの答えが分かったかのような大きな声をだした。

「そういえば、そんな話、平岡から……」

「やっぱり、噂ながれてるんだね」

分かってはいたけど、実際にそうだと言われると悲しいものである。いつも私は噂の人。私の周りには、あることないことといろんな話がとびかってる。廊下を歩くだけで、まわりがざわつく。ずっとそうだったからもう慣れたけど……好きにはなれない。

「いや、噂っつうか……」

藤本くんは、私が落ち込んだのに気づいたのか、あわてている。慰めようとがんばっているのが良く分かった。

なんだか藤本くんってかわいい人だな。私はつい笑ってしまった。

「え？　どうした？」

「ごめん。なんでもない」私は一呼吸おいて、また話を戻す。「噂を知ってるなら、話ははやいね。いつもなの。私と仲良くしようとする男の子は皆、怪我をするの。そして、皆、私を避けるようになる」

「……じゃ、前の学校で誰かが病院送りになった、ていうのは」

「うん。本当。それも前の学校だけじゃない。どの学校に行っても、誰かが病院送りの大怪我になって、私は転校せざるをえなくなるの」
「でも、その怪我をした奴に聞けば、犯人なんてすぐ分かるだろ？」
「それが……誰も話そうとしないの。なんでもないって言って、それきり皆、口をふさいでしまう」

藤本くんは、眉をひそめた。分かってる。私だって、意味がわからないもの。

「俺は、ストーカーだ、て聞いたんだけど」
「……多分」

二ヶ月前のことが頭によぎった。転校してきた日の朝、忘れ物をして家に戻ったら、私は母の変な電話を聞いてしまった。そのとき、受話器の向こうの相手に母は言った。『あんたのことは、ストーカーってことにしてる』と。あれから、母に何度か聞こうと思ったけど、言い出せなかった。怖かった。どんな答えが返ってくるのか。だって……あの会話からして、電話の相手がそのストーカー（てことにしている人物）。

私がうつむいて黙っていると、足元の地面にぽつりと水滴がおちてきたのが見えた。

「あ」
「雨だ」藤本くんがそういった。

放課後の雨宿り？

突然の雨に、俺と神崎は雨宿りをすることにした。丁度近くに古いバス停があった。運よく天井つきだ。二人でそのバス停にかけこんだ。

「助かったな」

俺はそう言って、びしょぬれの制服を見下ろした。明日までにかわくかな。隣の神崎に目をやると、俺におとらず上から下までびしょぬれだ。雨にぬれた横顔に、俺はつい見とれてしまった。

「分かってたんだけどな……」神崎はつぶやいた。

「え？」

「雨ふるの……分かってたの。朝、家でたときから」

そこまで言って、神崎は俺に振り返る。にこっと微笑むとバス停のベンチに腰をおろした。

「小さい頃からね、天気とか……予想できたの。『分かった』ていったほうがいいのかな。雨がふる、とか……雪がふる、とか……直感的に『分かった』の」

一体、何の話をしてるんだ？　俺はいまいち話についていけてなかった。

「つまり……」言いながら俺もベンチに腰をおろす。「予知能力？」

予知能力……ね。自分で言ってておかしかったが、こんな世の中だ。遺伝子操作とかでそんな人間がつくられてもおかしくはないだろう。

「そういう超能力みたいなものではないと思う。才能、にちかいのかなあ」

「才能……」

やっぱり、神崎の言っていることは理解ができない。

俺がぽかんとしているのに気づいたのか、神崎は、あはは、とつくり笑顔をうかべた。

「ごめん、変な話しして。聞き流して」

「……」

と、いわれてもな……どう反応していいのやら。

俺が戸惑っているのに気づいたのだろう。神崎は無理やり、前の話題に戻した。

「それで、さっきの続きなんだけどね。小倉くんも今までと同じ目にあっちゃったんだと思うの」

同じ目……？

「つまり……小倉は、神崎に近づいたために、神崎の『ストーカー』にやられたってことか？」

「うん」

神崎は思いつめた表情でびしょぬれの革靴を見つめている。

外の雨は激しさを増している。俺も神崎もしばらくなにも言わな

かった。神崎はどういう気持ちだったのか分からないけど……俺はとりあえず神崎が話し出すのを待っていた。沈黙は雨の音にかきけされ、特に気にならなかった。

かすかだが、神崎の息をすう音が聞こえた。俺は神崎に振り返る。丁度そのとき、神崎の口が開いた。

「夕べね……小倉くんにつきあってくれ、て言われたの」

「え！？」

きゅ、急にそんなこと告白されても……俺はどう反応したらいいのやら。

「断ったんだけど……しつこく迫ってきて」言いながら、神崎はうつむいた。「うやむやにして、逃げちゃって」

「……そっか」

俺に言えるのはそれくらいしかなかった。こんな『普通の恋愛話』、聞く機会なんてないんだ。俺に気のきいた反応をしろ、というほうがおかしい。

「それで、今日小倉くんと顔をあわせたらどうしようかな、て悩んでたの。そしたら！」

神崎は顔をあげて、こちらを見た。泣きそうな表情だった。

「……あの怪我……それに、あの捨て台詞、か」俺は続きを言った。

「うん」

神崎が、この一連のストーカー事件に相当参ってることがよく分かった。転校をつづけてる彼女だ。こんな話ができるような近い友

人がいるとも思えない。両親はこのことを知ってるみたいだが……彼女の様子をみると、転校以外に何か手をうってくれているとは思えない。きっと……ずっと、一人で抱え込んでいたんだろうな。

「それで……俺はどうしたらいいの？」

「え」

ここまできたら、神崎が俺になんでこんな話を打ち明けてきたのかは大体予想できる。神崎に近づいた男は大怪我をする。彼女はそれを知っているのに、俺とわざわざ二人きりで会った。つまり……

「おとり捜査……したいんだろ」

「！」

神崎は目を丸くした。俺に言い当てられたのにびっくりしたんだろう。

「なんで俺を選んだのかはわからねぇけど…もう、終わりにしたいんだろ？　そのストーカー騒ぎをさ」

「……」

う……。神崎にそんなに見つめられると、俺もどうしたらいいのか。

彼女は俺をじっと見つめていた。それも、潤んだ瞳で。俺はいてもたってもいられず、目をそらした。

「だったら、おびきよせて捕まえるのが一番手っ取り早いもんな！」

それに……と俺は思った。これは俺にとっても好都合だ。このストーカー捜査を理由に神崎に堂々と近づける。うまくいけば、家を

調べることもできるかもしれない。

「ごめんね」

雨にかきけされるくらい小さな声で神崎が言った。

「え」

「ありがとう……」

なぜか、神崎は泣いていた。

それから、神崎は俺に、今までのことを話してくれた。

彼女の容姿や才能が他の女子の嫉妬をまねき、ひどいいたずらがあとをたたかなかったこと。一連のストーカー事件で、彼女に近づくと怪我をするという変な噂がたち、皆に避けられていたこと。前の高校では、呪われている、とまで言われていたこと。

話を聞いていて分かった。彼女は、『きれい』とか『かわいい』とか、褒められることに嫌悪感をもっている。それは、恐怖感なのかもしれない。彼女を孤独にしているのは、その完璧さだからだ。

「でも……」と俺はつぶやいていた。

「え？」

「でも……やっぱ、うらやましいよ」

「うらやましい？」

雨がこぶりになってきていた。雲の間から、太陽がほんのすこしだけ顔をだした。

「それは、与えられたものだから」

「……？」

「見た目も、才能も……神崎がもっているものは全て神様に与えられたものだ。たとえ、それで嫌な目にあったとしてもさ……」

神様、という言葉に神崎は驚いたようだった。一瞬、目を丸くしたのが視界の片隅にみえた。

そりゃそうだろうな。神様、なんて本気で語る男だとは思ってなかっただろうし。急にそんな単語を会話に出されたら驚くに決まってる。でも……俺にとって、それは大事な存在なんだ。本当にいるかどうかは別として……

「与えてもらったものをどう使うかは自分次第だ。神崎はそれをうらんでるみたいだけど……俺は、もったいないと思うよ。全部、神崎しか持ってないものなんだ。それだけで、充分、価値があるものだよ」

神崎はきょとんとしている。俺の言ってる意味が分からないんだろう。それでもいい。別に、分かってもらおうと思って話したわけじゃない。この感覚は神崎に分かるはずがないんだ。カイン以外の誰にも……分かるはずはない。

とにかく、と俺は微笑んだ。

「神崎は、もっとそれを有効活用すべきだよ。せっかくの贈り物なんだから」

「……」

神崎はぽかんとしている。俺……くさすぎたか？　なんだか照れくさくなり、いてもたってもいられなくなった。そわそわと立ち上がると、雨のやんだ明るい空を見上げる。

「いやあ、通り雨だったなあ」なんて、気のぬけたことを言ってみ

る。
すると、「驚いた」と神崎がぽつりとつぶやいた。
＊　＊　＊
「驚いた」と、つい口をでていた。
藤本くんは、振り返って私を見つめた。顔は少し赤らんでいる。
「え？　ああ、確かに。いきなりやんだなしな」
あはは、と笑う彼の表情はぎこちない。また、あの笑顔だ。
「あ、うん」と私はごまかしたが……驚いたのはそこじゃなかった。
彼のさっきの話……。あれは、前、アンリちゃんが私を劇に誘ったときにしてくれた話と一緒だ。私が劇を断り続けていたある日、アンリちゃんは私の家を訪ねてきた。どうしても、劇の注目度をあげたいんだ、と懇願する彼女に、私は注目をあびたくない、と話した。正直に、今までのことを、さっき藤本くんに話したように打ち明けた。
すると、彼女も藤本くんと同じことを言ったのだ。それがなんだ！　と彼女は一蹴し、せっかくの容姿なんだから有効活用しろ、と私に言った。そして、ある秘密を話してくれた。あの劇に隠された秘密を……。
「ねえ、もしかして……藤本くんもアンリちゃんに聞いたの？」
思い切って私は藤本くんに問いかけた。
「え？　何が？」

「だから、さっきの話…」
「さっきの……？　どこ？　なんで、急にアンリ？」
「……ううん。やっぱり、勘違いだった」

私は、両手を振って笑って見せた。藤本くんはきょとんとしている。本当に、アンリちゃんから聞いたわけじゃない……みたいね。じゃあ……偶然？　それとも……

「さて、雨もやんだし、帰るか」藤本くんは、そう言ってのびをした。

放課後の雨宿り？

カヤの家までの道、和幸とカヤはこれからの打ち合わせをした。とりあえずは、カヤの『ストーカー』をおびきよせるために、二人はなるべく一緒にいる時間をつくることに決めた。

「ごめんね。こんなことに巻き込んで」

家にちかづいたとき、カヤは急に言った。

「気にすんなよ。どうってことない」

それに、和幸にとってはおいしい話だった。そこらのストーカーなら、カインである和幸にはなんの問題もない。実際に襲われたってすぐに取り押さえられる。うまくいけば、カヤとの距離も縮まるし、絶対なる信頼も得られる。彼にとって、ノーリスク・ハイリターンといってもいい話だ。これでなんとかこの『おつかい』もうまくいきそうだ、と内心、ほっとしていた。

しかし、ひとつだけ疑問があった。

「でも……」と和幸は切り出す。「なんで、俺？」

そう。今まで一度しかまともにはなしたことのない和幸に、なぜカヤがこんな話を持ちかけてきたのか。それが分からなかった。

「あ、それはね……アンリちゃんから聞いたの。藤本くんって、本当はすごく強いんだ、て」

「え？」

和幸はきょとんとした。確かに強いが……なぜ、アンリがそれを知っているのか、まったく分からなかったからだ。

「なんで、あいつが？」

「やっぱり、覚えてないんだね」

カヤはくすっと笑った。

「高校はいってすぐのとき、アンリちゃん、不良にからまれたんだって。で……そのとき、藤本くんが偶然通りがかって、一瞬でやっつけちゃったって」

和幸は、なおもぽかんとしていた。彼には心当たりがなかった。しばらく、ううん、と考え、高校に入学したときのことを思い出す。しばらくして、「あ！」と声をあげた。

「思い出した！　そういえば！　え……でも、あの女の子、アンリだったのか！？」

それを聞いて、カヤは笑い出した。

「アンリちゃんの言ったとおりだ。ずっと知らなかったんだね」

そこでやっと和幸は分かったような気がした。高校はいってすぐ、アンリにしつこくつきまとわれるようになった理由が。和幸にとってはアンリは見知らぬ変な女だったが、アンリにとって和幸は白馬の王子様だったわけだ。

「アンリちゃん、その日、風邪ひいててマスクしてたし、コンタクトもつけてなかったからめがねだったんだって。髪もきる前だった

らしくて……」

つまりは、高校デビュー前だったというわけだ。

「……なんで、あいつ、ずっと俺にいわねえんだよ」

「おもしろいからこのままでいいや、て思ったらしいよ」

「アンリらしいといえば、アンリらしいか……」

ひとつため息をつき、和幸はまた真剣な表情でカヤを見た。

「そっか。その話を聞いて……俺になら頼める、て思ったんだな？」

「……うん」

いつのまにか、カヤの家についていた。カヤは立ち止まり、うつむいた。

「本当に、ごめんね」

「だから、いいって」

「藤本くんを利用するみたいで、すごく申し訳なくて……」

「え……」

その言葉に、和幸の胸が痛んだ。『利用』……それは、自分もだ。和幸は、口ごもった。

「それは……」和幸は、「お互い様だから」という言葉を喉の奥に押し込んだ。いえるわけがない。自分は闇に生きる子供、カイン。光の中で、普通の関係を望むことも許されてはいない。

和幸は、笑顔をつくった。

「気にするなって」

それは、嘘にまみれた笑顔。和幸は、吐き気がした。だが、嫌だからってそれがやめられるわけでもない。カインには光の中に居場所はない。闇にしか生きることが許されていない。嘘をつかなければ、存在することも許されないんだ。

和幸は、ぐっと拳をにぎりしめた。

「そうだ」という明るいカヤの声が聞こえた。

「呼び方、変えようか」

「え？」

「変なきっかけにしろ、せっかく打ち解けてきたんだし！」

カヤの笑顔は、和幸にはまぶしく思えた。なぜだか分からないが……和幸は、この笑顔に救われた気がした。カヤには、不思議な魅力がある。和幸には、それだけは確かに分かった。

「そう、だな。ストーカーをだますためにも、親密にみせなきゃいけないし」

「私のことはカヤでいいよ」

「じゃあ……俺は和幸、で」

二人は、しばらく見詰め合うと、照れくさくなって笑った。

「あ」とカヤは空を指差す。

「天使のはしご」

「え？」

言われたほうをみると、分厚い雲の切れ間から太陽の光がいくつかの線になって地上にふりそそいでいる。それは、薄明光線といわ

れるものだ。

「天使の……はしご」

和幸は、何度かこんな光景は見たこともあったが、そんな名称でよばれているとは知らなかった。新しい名前でそれを呼ぶと、薄明光線がより魅力的に見えた。

「Ｆｉｎｇｅｒ　ｏｆ　Ｇｏｄだね」

ふと、誰かが後ろでそういうのが聞こえた。

＊　　＊　　＊

聞いたこともない声がして、俺は振り返った。そこには、金髪に碧眼の少年がにこにこして立っていた。背はだいぶ低い。中学生か？

「Ｆｉｎｇｅｒ　ｏｆ　Ｇｏｄ？」

カヤが戸惑いつつも少年に聞いた。この様子だと、どうやら、カヤの知り合いってわけでもないみたいだな。迷子か？それとも…観光客？

「そうそう。英語では、そうとも呼ぶんですよ」

少年は無邪気に微笑んだ。なんだろう、見た目はただの少年なんだが……こいつを見てると、変に背筋がぞっとする。

「あの……」

カヤが遠慮がちに言った。なんだか、カヤの様子もおかしい。おびえてるようにもみえる。

「私、あなたに会ったことあります？」

ふと、まさか！　と思った。この少年、まったくそうは見えないが…こいつが、例の『ストーカー』だとしたら？　俺は少年をにらみつけた。少年は相変わらずにこにこしている。

「いやあ……僕はないと思いますけど」

少年は、あはは、と笑って頭をかいた。やっぱ、無邪気な少年だ。とても『ストーカー』するような奴には見えない。

「なあ、あれがまさかお前の『ストーカー』？」

カヤに聞こえるくらいの小声できく。すると、カヤはびっくりした様子で俺に振り返った。

「え！？」

「いや、会ったことあるか、て聞いたから……そうなのか、と思って」

「さあ、どうだろう。会ったことあるような気がしただけで……」

カヤは困った表情でうつむいた。

「あのお……」

少年は、俺たちがこそこそ話しているのでおそるおそる声をかけてきた。

「どうかしました？」
「いや、なんでもないよ。君は、どこの子？」
俺は少年に何でもないかのように、微笑んで聞いた。

「いや、知人を探してまして」というと、少年はカヤの後ろにそびえたつ屋敷を指差した。「このお屋敷って……」

「私の家です」

カヤが間髪いれずに答えた。その瞬間、少年の表情がかわった…気がした。

「知人って……ウチですか？　やっぱり、昔、どこかでお会いしました？」

そのカヤの質問に、少年はまた頭をかいてあはは、とわらった。

「いやあ、どうでしょう。ちなみに、お名前は？」
「……神崎　カヤです」
「カンザキ　カヤ……」

鸚鵡返しのようにカヤの名前を唱えた少年。その表情からは笑顔が去り、真剣なまなざしでカヤを見つめていた。
やっぱり、このガキ、なんか変だ。

「お前は誰なんだ？」

俺は脅すように言った。しかし、少年はまったくひるむ様子もなく、けろっとしている。

「あ、すみません！　多分、住所間違ったみたいです。僕の知人はカンザキって名前じゃないですし」

「そうですか」

カヤは、特に気にしていないようだが…俺には、このガキ、なんかひっかかる。

「それじゃ、失礼しました」と少年はくるりと背を向けた。二、三歩進み、少年はこちらに振り返った。

「ちなみに……僕、リスト・ロウヴァーっていいます。また会ったときのために」

それだけ言うと、またにこっと無邪気に笑い、少年は去った。

リスト・ロウヴァー、か。なんか、気になるガキだ。

＊　＊　＊

「ケット」

リストがそう呼ぶと、光が集まり、ケットが現れた。

「リスト！　どうだった？」

ケットの問いに、リストはくすっと不敵な笑みをうかべた。

「見つけたよ。『災いの人形』を。やっぱり、エノクの教えてくれた住所は彼女の家だった」

リストは『占星術の館　ポリー・マッコーネル』と書かれたカードを裏返す。そこには住所と『Ｋａｙａ　Ｋａｎｚａｋｉ』と書かれている。

雨がやみ、道路には水溜りがのこっている。リストは、水溜りにうつる自分を見つめた。

「それに……多分、エノクのいっていた少年も」

「え？」

「俺と同じ……迷いながらも自分を認めようとしている少年」

リストは顔をあげると、後ろを振り返った。三ブロック先に、カヤの屋敷の屋根がみえる。

「たぶん、さっきのあいつ。一体……何者だ？」

天使のはしごが、もう消えかけていた。

カインの幸せ

「で？　で？　どうなったの？」

砺波は身を乗り出して和幸にせまった。『実家』…つまり、『カインノイエ』の隠れ家で、砺波の甲高い声が響き渡る。

「どうもなにも……一緒に帰っただけだよ」

「帰っただけって……誘われたんでしょ？　前進じゃない！　見直したわ、和幸」

和幸は砺波を呼んだわけじゃない。藤本に報告しようと『実家』にたちよったとき、偶然、砺波も遊びにきていただけだ。

「でも、まさか向こうから誘ってくるとはね…もしかして、一目ぼれされてたとかー！？」

砺波は一人できゃーきゃー盛り上がっている。こういう話を大好きなのは女子の特徴だ。

一方で、和幸はそんな砺波のテンションに付き合いきれず、呆れ顔。

「そんなんじゃねえよ。相談されただけだよ」

「相談？」それまで砺波の騒ぎっぷりに苦笑していた藤本が、やっと顔をあげた。

「ああ。なんでもストーカーに困ってるんだってさ」

「ストーカー？」

「ずいぶん前から被害にあってるんだって」

和幸は、藤本の前のソファに座りながら、真剣な表情で言った。
その隣で、相変わらず色恋話に華をさかせたい砺波はうずうずして和幸を見つめている。

「でもでも、そんな相談をされるなんて、やっぱり脈ありじゃない！？」

「うるせぇな、砺波！　話をそっちにもっていくなよ！
あいつは……ただ、俺が強いと知って相談してきただけだよ」

「強い？」と聞き返したのは藤本だ。ハイテンションの砺波と違い、ところどころ自分が気になるところだけ、落ち着いた様子で質問していた。

「ああ。カヤの狙いはこうだ。あいつに近づく男は決まって怪我をする。なら、彼女に近づく男を『仕込んで』おびきよせて捕まえればいい！」

「ふむ。なるほど。それには、ストーカーとやらを返り討ちにできるような『強い』男が必要……それでお前に話をもってきたのか」

「そういうこと」

そこまで聞いて、藤本は安心したかのように微笑んだ。

「つまり、彼女のボディーガードになった、てわけだな」

「え……」

和幸はぽかんとしてしまった。そういえば、確かにそうなるのか、と今気づいたのだ。

「そうよー！　これは超いい感じじゃないの」

「いい感じって……」

「彼女とべったり一緒にいても変に思われないんでしょ？

そ・れ・に……屋敷に入れるチャンスじゃないの」
「……」

砺波の言ってることはまったくだ。和幸もそれは分かっている。自分はきっと、今喜ぶべきなのだ。『おつかい』がうまくいきそうなのだから。だが、バス停で雨宿りしてから、和幸の頭にはカヤの笑顔が離れなかった。彼女と仲良くなればなるほど、つらくなる、と和幸には分かった。だってそれは全て、彼女の父親をはめるためなのだから。これから、和幸はカヤをだまし続けなければいけない。考えただけでも胸が苦しくなった。

「和幸？」砺波は和幸の顔をのぞきこんだ。
「……分かってるよ。俺は、神崎の屋敷の内部を探る。そのために…カヤと仲良くなるんだ」

なぜか、和幸は藤本の顔を見ることができなかった。
藤本はカインにとって絶対の存在。唯一、自分たちの存在を許してくれる人物。カインにとって、父であり、母であり、『神』だ。藤本に逆らうことは、自分の存在理由を失うことと同義。カインたちには、そういう意識が心の奥深くまで根付いている。
今、藤本からの『おつかい』に抵抗を感じている和幸には、どこかうしろめたくて藤本と目をあわせることもできなかったのだ。

「和幸、大丈夫か？」

藤本は、優しくそう声をかけた。自分にまったく目を向けようとしない和幸の異変に気づいたのだ。

「なに、和幸？　あんた、もしかして……神崎の娘に本気で……」
責めるようなトーンで砺波はそこまで言って、言葉をつまらせた。

藤本が、砺波を厳しい目で一瞥したからだ。しかられた犬のようにシュンとなった砺波は、藤本のソレが何を意味するのかを悟り、静かに部屋を出て行った。
砺波が出て行き、一気に静まりかえった部屋で、藤本はひとつため息をついた。

「やりたくないなら、いいんだよ。和幸」

優しい口調だった。和幸はハッとして顔をあげる。

「友人というものは、なかなかできないものだ。
特にお前たちのように特別な環境にあるものは……学校の友人と普通の関係を気づくことはなかなか難しいだろう」
「……」

藤本が一体どうしてこんな話を始めたのか分からず、和幸はただ呆然と藤本を見つめることしかできなかった。

「わたしはね、君たちに幸せになってほしいと思っている。
もともと、この組織をつくったのも君たちのような子供たちに救いの場をつくりたいと思ったからだ」

そこまで言うと、藤本は娘の写真を手に取った。

「それがいつからか……君たちを閉じ込める場所になってしまった気がするよ。
君たちが、わたしを慕ってくれているのは嬉しい。君たちのなかには、わたしをまるで神のようにあがめるものもいる。だが……たまに、不安になることがあるんだ」
「藤本さん……」

藤本は、和幸を真正面から見つめた。

「君たちは、ここでちゃんと幸せに暮らしているのだろうか、と」

「！」

「和幸。君も、いつも黙ってわたしの『おつかい』を引き受けてくれる。ありがたいと思っている。

だが……もし、本当はそれに抵抗があるのなら、断ってくれてもいいんだ」

思わぬ言葉だった。和幸は、自分の耳を疑った。断る？それは彼にとって新しい選択肢だった。

「特に、今回の『おつかい』は、せっかく仲良くなれた友人を裏切ることになる」

「！」

和幸の脳裏に、またカヤの笑顔がよぎる。

「まだ、友人というわけじゃ……」

正直、友達というものが何か彼にはまだ分からなかった。カインに仲間はいる。だが、それは友達よりも家族のほうが近い気がした。

藤本は、戸惑っている和幸を優しいまなざしで見つめた。

「さっき……彼女を、カヤと呼んでいたろ」

「え……」

「一歩一歩、彼女に近づきつつあるんだな、と感じたんだ。

なんだか、嬉しかったんだよ。お前の口から、わたしの知らない名前が出てくるのが。

カイン以外の友人の名前がな。
彼女に近づけ、と頼んだのはわたしなんだが……笑ってしまうな」
藤本は嬉しそうに微笑んだ。
「わたしも歳をとったのかもしれん」
「藤本さん……」
和幸はぐっと拳を握り締めた。
藤本の優しさが、余計に和幸の心を苦しめた。いつのまにか、頭の中のカヤの笑顔が消え、忘れかけていた大事なことを彼は思い出していた。
「俺は、幸せを望んでるわけじゃない。望める立場じゃないんだ」
それは、とても小さく、そして重い声だった。それを聞いて、藤本の表情は曇った。
「藤本さんは、俺たちに生きる理由をくれた。それが『カイン』だ。ホンモノの神サマは、きっと……俺たちの存在すら知らない。だから、やっぱり、藤本さんが俺たちの『神』なんです」
藤本は落胆のため息をついた。自分の優しい言葉が、逆に和幸を追い詰めたことを悟ったのだ。
藤本は本気だった。本当に、和幸が『カヤとの関係を友人として続けたい』『カヤをだましたくはない』と思っているなら、他の方法を考えようと思っていた。
藤本は気づいていた。カインの中で和幸だけが、自分のことを『父』と呼ばず、『藤本さん』と呼んでいること。そして、彼だけが『殺し屋』と呼ばれるカインの中で唯一、誰一人として殺したこと

がないこと。和幸こそ、カインの中で一番自分の存在に疑問をもっている子供だ。藤本はそれを見出していた。この機会に、彼に伝えたかったのだ。たとえ何者だとしても、何かを自由に望む権利はあるということを。

「今回の『おつかい』、ちゃんとやり遂げるよ」

和幸は立ち上がってそういった。藤本はなにも言わず、悲しい表情で和幸を見上げた。

「大事なこと忘れるとこだった。
カヤをだますのは確かに気が引けるよ。
でも……もし、あいつの親父が本当に人身売買を斡旋してるなら…俺は絶対に許せない。
カヤへの罪悪感なんて屁でもない。
俺たちカインだって、藤本さんがいなかったら…！」

そこまで言って、和幸は藤本を見つめた。

「藤本さんがいなかったら、今頃、生きてるかどうかも分からないんだ」

藤本に、返す言葉は見つからなかった。

＊　＊　＊

「お！　和幸くん」

藤本さんの部屋から出ると、目の前に三神さんがいた。相変わらずの軽い調子でにこっと微笑んで挨拶してきた。

「三神さん！　お……驚いたぁ～」
「藤本さんはいる？」
「ええ、いますよ。俺も今、丁度話し終わったとこです」

そう言って俺は扉に目をやった。
それにしても、まさかあんな話になるとは思わなかった。藤本さんがあんなこと言ってくるなんて……驚いた。でも、おかげで本来の目的を思い出せたな。俺は、カインなんだ。罪悪感にかまってる場合じゃない。

「何の話？」
「え？」

三神さんはにやりとしている。さてはこの人……俺の口をすべらせて、情報を得ようとしてるな。相変わらずだ。

「言うわけないでしょう」
「……ケチぃ」

この人と話してると調子を狂わされるな。俺は苦笑いを浮かべた。

「今から帰るの？　それとも、『おつかい』かな？」
「帰るんですよ」
「あらら。なんだか、最近『おつかい』してないんじゃない？」
「……」

そういえばそうかも。三神さんに言われて気づくなんて、自分でもどうかと思うが。確かに、最近『おつかい』は全然まわってこないな。カヤの件があるからか？　それとも…文化祭が近いからだろ

うか？
俺はまた藤本さんの部屋の扉を見つめた。この人は、亡くした娘さんのこともあるのか…俺たちカインに本当に優しい。甘い、と言ってもいいだろう。だからこそ、俺たちは必死にあの人のために働くんだけど……。あの人なら、文化祭という理由で俺に『おつかい』を休ませてる、というのも充分考えられる。

「おーい、和幸くん？」

三神さんは、半ば呆れた声で呼んできた。

「あ、すみません。藤本さんに用ですよね」

俺は、ぱっと三神さんに振り返り、道をゆずった。

「なんだか、ぼーっとしてるけど、大丈夫かい？」
「なんでもないですよ」

三神さんは「ふーん」といいながら、俺の横を通り過ぎた。
ふと、俺は、夕方のあの少年を思い出した。そうだ。三神さんは情報屋。聞けば、何か分かるかも。

「三神さん」
「ん？」
「リスト・ロウヴァー……て聞いたことあります？」

言われて、三神さんは首をかしげた。

「リスト……ロウヴァー？」

ふ〜む、としばらく考えて、三神さんは首を横にふった。

「いや……聞いたことないけど、どうかした？」

「いえ、ないならいいんです」

俺は軽くお辞儀をして、三神さんに背を向けた。おそらく、後ろでは、まだ三神さんが首をかしげているだろう。

三神さんが聞いたことないってことは……少なくとも、トーキョーの裏の人間ではない。まあ見た目はばりばりの外国人だったし。やっぱ、ただの旅行客なのか？

「考えすぎかな」

『実家』を出て、夜空を見上げた。もう十月。文化祭は来月に迫っていた。

＊　＊　＊

三神は『実家』をでていく和幸を見送った。和幸が外にでたのを確認すると、ふうっとため息をついた。

「やれやれ。中立って立場も……結構つらいもんだ。

ロウヴァーさんも困った人だなぁ。勝手に会うなんて」

三神は、またいつものへらっとした笑顔をうかべ、藤本の扉をノックした。

＊　＊　＊

「また？」

お母さんは驚いて目を丸くした。

「また、現れたっていうの？　あのストーカー……」

めまいでもおこしたかのようにお母さんはよろめいて、そばのイスに座り込んだ。

私も、ダイニングテーブルをはさんでお母さんの反対側のイスに座った。

「多分、そうだと思う。今日、ある男の子が怪我してて……私と二度とかかわらない、て言ってたから」

「……」

お母さんはダイニングテーブルにひじをつき、頭をかかえている。表情がみえない。悲しんでるのかな？　落ち込んでるのかな？　それとも……もう嫌になったのかな。

「お母さん？」

心配になって私は小さい声で呼んでみた。

「ごめんなさい」

お母さんは顔をあげ、無理した笑顔を浮かべた。

「あなたのことを考えたら、胸が苦しくなって……」

「ごめんね」

「あなたが謝ることはないのよ。気にしないで。アイスでも食べる？」

「あ、うん」

そう言って母は立ち上がり、冷蔵庫のほうへ向かった。よかった。いつものお母さんだ。

「でもね、今回は大丈夫」アイスを持ってきてくれた母に私はそういった。

「大丈夫って？」

「もうこの騒ぎはきっと終わり。犯人を捕まえるの」

私は、自信満々にそう言い放つ。なんだか嬉しかった。母を安心させられるかもしれない。いつも面倒ばかりみてもらっている自分が、この一連の事件を解決できるかもしれない。もちろん、私一人の力じゃない。和幸くんに手伝ってもらって…なんだけど。

「どういうこと？」

「え？」

思わぬ言葉だった。母の表情は曇っている。おびえている……ようにも見えた。

「どういう、て……」

「何をしようとしているの？」

今までみたことがない母の表情に、私はぞっとした。

「だから」私は自分の声が震えているのが分かった。「犯人を捕まえるの。友達がてつだってくれるって……」

母はアイスの箱をその場で落とし、私の元に駆け寄った。ガシっと私の両腕をつかむと、私を脅すような恐ろしい目つきで見つめてきた。

「余計なことをするんじゃない！」

今まで私を怒ったこともない母が……低い声でそう怒鳴った。私はなにも言葉がでなかった。おびえている私に気づいたのか、母はハッとして私の両腕から手を放した。

「ご、ごめんなさい、カヤ。つい、あなたが心配で」

私と目をあわせることなく母は立ち上がり、落としたアイスの箱に目をむけることなく、台所へいってしまった。

残された私は、ただ呆然とした。私が心配で？　本当なのかしら……。さっきの、お母さんじゃないみたい。今夜は勇気を出して、二ヶ月前の電話の話を聞こうと思ってた。思い切って、ストーカーの正体をお母さんは知ってるんじゃないのか、問い詰めるつもりだった。でも……

「できない」

消え入るような小さな声が出た。私の腕は、寒くもないのに震えている。もしかしたら、『できない』のではないのかもしれない。もう、する必要はないのかもしれない。だって、母のあの態度は、答えを言っているようなものだから。

私は、台所で洗い物をはじめた母の後姿を見つめた。母は、ストーカーのこと、何か知っている。そして、それは私が知ってはいけないことなんだ。……一体……何だっていうの？

『カヤ』との約束

「ニュースだ、ニュースだ！！」

相変わらず、いつも元気な平岡が俺に駆け寄ってきた。朝っぱらからよくあの声量がでるよ。俺は窓際の一番後ろ。なのに、廊下から走ってくるあいつの声はよく聞こえる。

数学の宿題を終わらそうと思って、朝早くから来たってのに。平岡の噂話で朝の時間はつぶれるな。机に開いていた数学の教科書をいさぎよく閉じると、はあっとため息をもらした。

平岡は到着するなり、俺の机に両手をおいた。

「転校生だ！」

またか？

「今度こそ、パンをくわえて走ってきたんだろうな」

「は？　お前、前もそんなこと言ってたな。まあいいや。今度はひとつ下で、神崎さんみたいにキレーな……」

「私がどうかした？」

いきなりの声で、俺と平岡は一瞬固まった。平岡と俺がゆっくりと横に顔を向けると、そこにはカヤが立っていた。

「か、神崎さん」

そういえば、平岡もカヤとはあまり話してないよな。いつも、カヤの噂話はしてるが…劇の練習中も遠めで見てるだけだし。いきなり話す機会がやってきて、平岡は緊張のあまり、カヤに敬礼してい

た。俺はその様子に、ぶっとふきだした。

「なにやってんだ、平岡」

一方、カヤはいきなり敬礼されてきょとんとしている。そりゃそうだよな。

「おはよう、カ……」

俺はそこまで言ってとまってしまった。思った以上にまわりに注目されている。ここで、カヤ、と呼びつけにするという行為がどういう騒動を巻き起こすか、容易に想像できる。

なんだろう、これは……すごく、照れくさい！

「おはよう、和幸くん」

「！！」

俺が躊躇しているというのに、カヤはあっさりそう呼んだ。あたりがざわついたのが分かる。

カヤは、今までいつも注目の的になっていたと言っていた。一方で、俺は逆だ。カインであることもあって、注目にならないよう、表の世界ではひっそりと生きてきたのだ。注目を集めてはいけない、という意識さえあった。その俺が、今、クラスの注目を一身にあびている。いけないことをしているような、落ち着かない気分だ。

「おはよう、神崎……」

ここで、カヤ、と呼ぶことはできなかった。目をそらし、小声でそうつぶやいた。長年、目立たないよう生きてきたんだ。癖というか習慣というか……つい、注目をさけてしまう。しかし、この様子

……砺波に、中学生か！　と笑われてしまいそうだ。

「……」

返事がなにもないので、カヤの顔を見上げると、悲しい表情を浮かべていた。

「え？」

なんで？

「それで……神崎さん、どうしたの？　アンリを探してんの？」

顔が赤らんだままの平岡が（勇気をだして）カヤにたずねた。カヤは、「あ」と思い出したようにほほえんだ。

「そ、そう。でも、きてないんだね。またあとにする」

アンリを探してた？　いや、違うだろ。あの様子……俺に用があったに違いない。

カヤは俺にはなにもいわず、スカートをなびかせ、背を向けた。周りの注目をあびながら、カヤは机の間をすりぬけていく。もしかして、と俺は思った。さっきの行動がカヤを悲しませたのだとしたら……考えられる理由はひとつだ。

「カヤ！」

俺は、教室中に響き渡る声で言って立ち上がった。カヤは驚いて振り返る。さらに驚いているのはまわりのクラスメートと……平岡だ。俺はかまわず、ずかずか歩いていき、カヤの腕をつかんだ。

「和幸くん！？」

戸惑うカヤになにも言わず、俺はそのままカヤを廊下に連れ出し、歩いていく。廊下ですれ違う奴らは、俺ら二人を見ると、目を丸くして何度も振り返った。

「和幸くん？　どこ行くの？」

「心配すんな」

「え？」

俺はとりあえず、屋上へ向かっていた。

「俺は大丈夫だ」

「……」

「急に態度かえて避けたりしない。何があっても……」

こういうセリフを言うようなタイプじゃないんだけどな、俺は。恥ずかしくて、カヤの顔を確認する気になれなかった。

ノート

屋上まで、和幸くんにひっぱられるままついてきてしまった。
嬉しかった。私の気持ちを汲み取ってくれたこともそうだけど、「大丈夫だ」と言ってくれたことが嬉しかった。てっきり、教室で冷たくされたときは、もう和幸くんは『ストーカー』に襲われたのかと思った。せっかくできた強い協力者だったのに……て絶望感に襲われた。
毎日のように、次々に人が私への態度を変えていった。そんな学校生活を送ってきたから……いつのまにか、人の態度に敏感になってたみたい。
屋上にでると、私の今の気持ちのように、晴れ晴れとした空が広がっている。ここまできて、和幸くんはやっと私の腕を離した。照れくさそうに離した手をぷらぷらと揺らしている。きっと、彼もこういうことをしたのは初めてなんだろうな、て気がした。

「悪かったな」

唐突に、和幸くんがそういった。

「なに？」
「さっき、カヤって呼べなくて…」
「ああ……私が変なとこ気にしすぎなだけ。こちらこそ、ごめんね」
「俺さ……」と、和幸くんはおもむろに語りだした。「なんつーか……日陰の人生なんだよ」
「え？」

何を言い出すのかと思った。前のときも…神さま、とか唐突に言い出したっけ。

「カヤと逆なんだ。誰の注目もあびずに生きてきた」
「……」
和幸くんは、私に背を向けたままフェンスのほうへ歩き出した。
「そうやって生きなきゃいけない運命っつーか……そうやってしか生きちゃいけないから」
彼自身も話したいことがまとまってないんだろう。しどろもどろに語る彼の話は理解が難しくて……何かを隠しながら話しているのは、なんとなくだけど伝わってきた。
「だから、抗体がなくてさ。さっきも、クラスの注目あびて、正直…びびってた。いや、落ち着かなかった。だから……」
彼は、なにやら口でごもごも言って、そっぽをむいている。最後のほうは聞き取れなかったけど、全然気にならなかった。
「そっか」私はそれだけ言った。
私の逆……か。彼の言う『日陰の人生』がどういう意味なのかは分からないけど、彼には彼で何かを抱えてるんだ。
「それで……と」急に声の調子がいつもの和幸くんに戻り、こちらに振り返った。「何の用だったの？」
「え？」
「俺のとこ来たんだろ。話があったんじゃないの？」
「あ……そうだった」

いけない、いけない。大事な用件を忘れるとこだった。

「昨日、言ってないことがあって。母のことなの」

「お母さん？」

「うん。多分、なんだけどね。『ストーカー』のこと、母が何か知ってるみたいなの」

私はそれから、二ヶ月前の電話の話。そして夕べのことを和幸くんに説明した。彼は、うんうん、と熱心に聞いてくれた。

「なるほどね。確かに、お母さん、怪しいな」

「……」

「直接そのこと、お母さんに聞いてみた？」

それを言われてハッとした。夕べの母の様子を思い出した。

私はうつむき、首を横にふる。

「聞けなかった。なんだか、こわくて」

「……こわい、ねえ」

彼はため息混じりにそういった。理解できない、といった様子だ。

「なあ……カヤのお父さんって何してる人なの？」

急に父の話？

「父は、貿易関係の仕事。私もくわしいことは知らないんだけど……どうして？」

聞かれて、和幸くんはなんだかあわてた様子で笑いだした。

「あ、いや……お前の家、すっげえでかかったからさ！　それで……気になってな」
「そう？」
「それより、電話だよな。そうだな……たとえば、なんだけど」
和幸くんはいいにくそうに切り出す。
「盗聴器、とかどう？」
「ええ？」
盗聴器？　何を言い出すの？
「もちろん、たとえばだよ！　お母さんに聞きづらいっていうからな。
電話の内容を盗聴すればいいじゃねぇかと思って」
「……」
それは……もしかしたら、また『ストーカー』から母に電話は来るかもしれないし。そのとき、電話の内容が聞けたら何か分かるかも。
でも、盗聴って…犯罪じゃない。
「和幸くんの案はありがたいんだけど……ごめんね。それは、母に悪いわ」
「そう、だよな」
なんだか、和幸くんはがっかりしているようだった。盗聴するって案は……渾身のアイディアだったのかな？

「あ……そろそろ、戻らないとな」

和幸くんは自分の腕時計をみて言った。確かに、そろそろチャイムがなりそうだ。

「ああ！」

屋上を去ろうとしたとき、和幸くんはそんな悲鳴をあげた。

「どうしたの？」

「宿題！」

「え？」

「数学の宿題、おわってねえ」

「百三十三ページの練習問題？」

和幸くんはきょとんとしている。私が言い当てたのに驚いている様子だ。

「クラスは違っても数学の先生は一緒だもの。もしかしたら、て思って。

私のクラス、そこ昨日終わったの。よかったらノート貸すよ」

「……そりゃ、助かる」

喜ぶかと思ったのに…相変わらず和幸くんはきょとんとしている。ノートの貸し借りってあまりしないタイプなのかな。

「じゃ、急いでとってくる。クラスにもってくね」

私はそう告げて、和幸くんより先に階段を駆け下りた。

そういえば私も……ノートを貸すのって久しぶりかも。なんだか、

嬉しくなった。

＊　＊　＊

カヤは、階段を駆け下りていった。残された俺は、ただ呆然と突っ立っていた。彼女は、なんだか嬉しそうだった。ノートを貸すことがそんなに喜ばしいこととは思えない。
きっと彼女は、そういうなんでもないことができるのが嬉しいんだ。周りの友達がしている当たり前のことをできることが嬉しいんだ。
俺は、彼女の『友達』に着実になっているんだな。

「……」

でも、その『友達』の正体は、ただの『嘘つき』なんだ。俺は、彼女の『友達』のフリして家に盗聴器をしかけようとした。彼女のためと偽って、彼女の父親をはめるために。さすがに、怪しまれて失敗したけど…。

「最悪な気分だ」

早く教室に戻って彼女からノートを受け取らなきゃいけない。でも、なぜだろう。足が重いな。俺はその場に座り込んだ。
そろそろチャイムがなるだろう。しばらく、なにも考えずにボーっとしていた。そのときだった。

「君も、創られた子なんだね」

いきなり、後ろからそんな子供の声がした。一瞬、背筋が凍った。俺はあわてて振り返る。すると、そこには、目がうばわれるような美しいブロンドの髪をもつ幼い子供が立っていた。

「な……」

言葉がでなかった。まるで腰がぬけたように立ち上がれない。なんだろう、この異様な存在感は？　ってか、いつのまに俺の後ろに？　屋上には俺とカヤしかいなかったんだ。俺はその屋上から3階へ降りる階段を見下ろして座っていた。つまり…俺の後ろには誰もいないはずだ。

「お前……誰だ？」

子供は優しく微笑んだ。時がとまったような気がした。少年の笑顔は全てをつつみこむような、おだやかで不思議なオーラをもっている。なぜか、カヤの笑顔がだぶった。

「和幸くん？」

カヤの声が聞こえ、ハッと我に返った。振り返ると、3階からカヤが俺を見上げていた。

「カヤ……」

「まだいたんだ。はやく、教室に戻らないと……」

「分かってる。後ですぐに……」

言って、俺はまた少年のほうに振り返る。

「あれ……」

だが、そこには、誰もいなかった。あわてて屋上に走っていく。

「なんで……」

屋上にも、誰もいない。念入りに周りを見渡すが、やはり少年らしき影はない。

「幻覚か？」

あたりにチャイムの音が響き渡った。俺は遅刻だ。

「創られた子供……」

あいつは確かにそういった。間違いなく、俺が何なのかを知っている。俺の秘密を……俺の正体を知っている。

俺はぐっと拳を握り締めた。ただの子供じゃないことは確かだ。

空を見上げると、さっきまで晴れ晴れとしていた青空に分厚い雲があつまってきていた。

俺は変な胸騒ぎを覚えた。

Nanshe 1:1

リスト・マルドゥク・ロウヴァーが、イギリスを旅立って二ヶ月ほど経ったある夜。リチャードの墓石の前で、リストとしばしの別れを告げたナンシェ・アブキールは、ロンドンからの電車に乗っていた。この日は友人のケリーと、ハロッズでちょっと買い物をして帰るつもりだったのが、つい夢中になって予定より遅い電車に乗ることになってしまったのだ。

「こんなに遅くなるなんて……」

自宅近くの駅について、ナンシェはため息混じりにそう言った。外はすでに暗く、腕時計は11時をさしている。

「タクシーで帰ろうかな」

お金は充分持っている。両親を心配させるより、お金の浪費で怒られたほうがましだ、とナンシェは思った。タクシーを捜そうと周りを見渡すと、それを待っていたかのように、一台の車がスイッと彼女の前に停車した。

タクシーじゃない。ナンシェにはすぐに分かった。その車の後部座席のドアに、見慣れた大きなへこみがあったからだ。自分がつけて母にこっぴどく叱られた傷。見間違うはずはない。母の車だ。ナンシェは確信した。あまりにも遅いから迎えに来たのかと思い、彼女が車にかけよると、窓が開いた。

「お母さ……」

とにかく、すぐにでも謝らなければ、と口を開いた彼女だったが、

その窓の向こうに母の姿はなかった。
「ナンシェ・アブキール様ですね」
「え……」
窓から顔を出したのは、知らない男だ。
「ナンシェ様ですよね」
男はもう一度、そう尋ねてきた。
「はい。あなたはどちら様ですか？」
戸惑いつつもそう聞くと、男はにこやかにほほえむ。
「マルドゥク家の使用人です」
マルドゥク家の？　とナンシェは首を傾げた。マルドゥク家というからには、つまりは本家の使用人ということだ。今まで、リスト以外に本家からわざわざ誰かがこの田舎町にくることなどなかった。なにか重大なことがおこったのか、とナンシェは少し不安になった。
だが、不思議なことがひとつある。なぜ、母の車に乗っているのか。ナンシェは、それが分からないうちは、念のため、車にそれ以上近づかないことにした。
「なぜ、本家の使用人がこんなところに？」
「実は、新しい頭首……リスト・マルドゥク・ロウヴァー様の件で早急にお話したいことがありまして……」
「え！？　リストちゃん！？」

リストの名前をだされ、彼女に不安感が波のようにおしよせた。
彼女にとってリストは特別な存在だった。頭首争いで足のひっぱりあいをする一族の中で、リストだけは彼女に優しく、そしていつも味方だった。半年だけ年下のリストは、なぜかナンシェよりもずっと大人っぽくて、何かにつけていつも助けてくれた。ナンシェにとってリストは、小さいときからずっと『白馬の王子』だったのだ。
リストの名前がでた時点で、彼女は冷静さを失っていた。使用人と名乗る男の暗い表情が、さらにナンシェの心配をつのらせる。

「もうお母様にはお話いたしました。お母様は、わたしからでなく、お母様の口からあなたにお伝えしたいとのこと。さ、車に乗ってください」
「……」

＊　＊　＊

心臓の鼓動が高鳴っている。リストちゃんは……大丈夫だ、て言ってた。
『王位継承は命と引き換え』。だから、リストちゃんは王位を継承しない限り、死ぬことはない、て…そう言ってた。きっと、大丈夫だよね。わたしは胸元に手をおいた。わたしはマルドゥクの女。こんなことで動揺しちゃいけない。冷静にならなきゃだめ。いつも毅然としていなくちゃ。
目をとじ、深呼吸する。

「わかりました」

わたしは目をひらき、運転席に座る男を見つめる。

「家までお願いします」

「お乗りください」

あれ。気のせいかな。なんだか、この男の人が笑った気がした。

後部座席に座り、シートベルトをしめる。

「では、出発しますよ」と男の人がいうと、車が動き出す。

そのときだった。

わたしの携帯がバッグの中で鳴っている。バイブの振動がひざをとおしてつたわってきた。

そういえば、家に無事ついたら電話をちょうだい、てケリーが言っていたから…心配してかけてきたのかも。わたしはそう思い、携帯を取り出した。

「あれ……」

画面に出ている名前に目を疑った。

違う。ケリーじゃない。ナオミ・チャンドラーとでている。でも……と、フロントミラーにうつっている運転席の男を見つめた。このナオミ・チャンドラーという女性はマルドゥク家の使用人だ。すでに、本家からの使用人がこうしてきているというのに、なぜ別の人物からも電話が来るのだろうか。

あ、そうか。わたしは、ふとひらめいた。この人が来るって、伝えるための電話かも。わたしはそう思い、電話にでた。

「ナオミさん？　おひさしぶりで……」

わたしが言い終わる前に、ナオミさんの悲鳴のような声がきこえてきた。

「ナオミさん！？　どうしたんですか？」

悲鳴じゃない。何かを必死に訴えている。何かをわたしに伝えようとしてる。でも、うまく聞き取れない。

「ナオミさん、落ち着いてください。どうしたんですか？」

「ニヌルタが……！！」

「え？　ニヌルタ？」

わたしがようやく聞き取れたその言葉を口にしたとたん、車が止まった。受話器のむこうで、ナオミさんがまだ何かを必死に叫んでいる。

「あの、どうしました？」

運転席の男に尋ねるが、男はなにも返事をしない。道にでも迷ったのかな。わたしはとりあえず、ナオミさんを落ち着かせることにした。

「ナオミさん、落ち着いて。わたしは大丈夫よ。もう本家の使用人がきて…」

「え……」

ナオミさんは急に静かになった。やっと、安心したのかな、と思ったのも束の間、ナオミさんは今度ははっきりとした口調で怒鳴った。

「逃げてください、ナンシェお嬢様！　あなたが、最後の一人なのです！！」

カチャッという音がした。前をみると、運転席の男が銃口をわたしに向けている。

「……」

言葉を失った。携帯電話からは、必死に訴えるナオミさんの声がもれている。

「あなた、は……」

「ゆっくり、電話をわたしてください。ナンシェ・アブキール」

わたしはいわれるままに電話をおそるおそる男にわたす。

「すこし、おそかったですね」

男はそう言って、電話をきった。

「この二ヶ月間……イギリス中をいそがしく飛び回りましたよ」

「え……」

「マルドゥク家とニヌルタ家は対立する一族。『災いの人形』をめぐり、邪魔をしあう宿命。

なんだか、まどろっこしくなりましてね」

ナオミさんは『ニヌルタが』と言った。そして、わたしに逃げろ、と告げた。まさか……と、わたしはもう一度、目の前の男をじっと見つめた。

「あなた……タール・ニヌルタ・チェイス？」

男は、不敵に微笑んだ。わたしはゾッとした。

リチャードおじいさまから聞いていた。ルルを嫌う神『エンリル』の僕である、ニヌルタ一族。わたしたち、マルドゥク一族の宿敵。その今度の頭首に選ばれた男は、とても残忍で凶暴だ、と。
アトラハシスの一族を皆殺しにまでした恐ろしい男……タール・ニヌルタ・チェイス。その彼が……目の前にいるなんて。わたしは恐ろしくて声もでなかった。
彼は、そんな様子のわたしをおもしろがっているかのように、口元をにやにやさせて話を続ける。

「考えたんです。もっとシンプルにできる方法はないか、と。
そこで、思いつきました。剣を継承し不死になったリスト・ロウヴァーはおいといて…
まずは、それ以外のマルドゥク一族を根絶やしにしよう、と」

思わず、はっと目を見開く。ナオミさんの、『最後の一人』という言葉が頭に響いた。

「まさか……」
「あなたで最後ですよ。ナンシェお嬢様」
「！」

タールは、引き金に指をおいた。
足が動かない。体が……動かせない。怖い。

「リストちゃん……」

いつもは神さまに助けを求めるのに……いざというときになって、わたしは『王子様』を求めていた。

もうひとりの転校生

放課後になってもまだ、平岡の尋問は続いた。

「だから、正直に言えって。なんで、神崎さんと急に仲良くなってんだよ？」

平岡は朝からこればっかりだ。

授業がおわって映画研究部の部室に来てからも、作業をしながらずっと聞いてくる。俺は適当にあしらい続けているのだが……こいつ、よく飽きないな。

「なんでもないことはないんだからな！　ノートだって借りてただろ。

それに、なんだよ！　あのくさいドラマのワンシーンみたいなあれはよ！？」

アレ……きっと、今朝、カヤを教室から連れ出したアレだろう。

それは言うなよな。俺もちょっと後悔してるんだ。かっこつけすぎた……と。

「うるさいな。さっさとその布ぬわねぇとアンリに怒られるぞ！」

そう、裏方の俺と平岡は、延々と布を縫っていた。一体、これが何用の布なのかも知らずに。

俺たちはただアンリの言いなりだ。

「あ！　そうやって、お前はずっと隠そうとしてるよな！　もう、ごまかしはきくか！」

言って、平岡は自分が縫っていた布を放り投げた。

「あああああああ！」

急にアンリの声が響いた。布を放り投げた瞬間に、部屋にはいってきたらしい。

平岡は冷や汗を流して固まっている。俺は知らんふりを決め込むことに決めた。

「平岡ぁあ！　なに、今のは！？」

やはりな。布を投げたことに怒ってるぞ、あれは。

平岡はあわてて布をひろいあげ、「手がすべった」と意味のない言い訳をわめいている。

周りの連中は、平岡のあまりに必死な様子に笑いたいのをこらえている。アンリの手前、笑うことはできないからな。まあ……どんな言い訳しても、アンリにぶったたかれるのは避けられないだろう。と、思ったのだが……

「まあ、いいわ」

意外にも、アンリの優しい言葉が聞こえた。俺はつい、「え？」といいそうになった。

「皆、皆、ちゅーもく！　劇の本番まであと一ヶ月ってとこなんだけど。

ご存知のとーり、残念ながら、主役が辞めちゃいました。てへ！

そこで、監督であるこの私が、新たな主役をスカウトしてまいりました！」

おお！　と、ざわめきがおきた。
そういえば……主役だった小倉が辞めたもんな。確かに一大事だよ。
アンリは扉の前でオホン、と咳払い。
「ご紹介しましょう！」と言うと、扉の向こうにいる誰かに手招きをした。俺のところからは死角でまだ見えないが、扉近くにいる女子は何やらキャーと騒いでいる。
まあ、アンリのことだ。またどっかのイケメンを見つけてきたんだろう。そんな風なことを考えながら、俺は頬杖ついてボーっと見ていた。誰が主役になろうが特に興味もなかったからな。
だが、入ってくる奴の顔を見て俺は目を疑った。
「今日、転校してきた、一年生の……」
アンリはそこまで言って、入ってきた少年に拍手した。
アンリに紹介されて入ってきたのは、なんと……
「リスト・ロウヴァー！？」
思わず、俺は立ち上がって叫んでいた。
そう、昨日、カヤの家の前で会ったあの少年だ。
「あら……和幸、友達なの？」
アンリはきょとんとしている。周りの皆も驚いた顔で俺を見ている。まあ、いきなり叫んだんだもんな。そりゃそうだろうが。
唯一、リスト・ロウヴァーだけはニコニコしている。あの様子……俺がいることを知ってたな。俺を見ても、眉ひとつ動かさなかっ

た。

「ちょっと、知り合いなだけだよ」

あいつが何者か分からない今は、とりあえず様子を伺ったほうがいい。俺はとりあえず、その場は適当にながすことにした。おとなしく座ると、隣の平岡が「大丈夫か、お前」といった表情で見てきた。

「和幸のせいで変な空気になっちゃったけど……仕切りなおしよ。今日、転校してきたばっかりのほっかほか。リスト・ロウヴァー君。

なんとイギリスから転校してきたのよ」

イギリス……か。

今のところ、ひとつだけ確かなことは、こいつは確かにアンリ好みのイケメンだということだ。部屋にいる女子も、小倉以上のイケメンの登場に、テンションがあがっている。

「リスト・ロウヴァーです。演劇とか、したことないんですけど……学校にも早く慣れたほうがいいかな、と思って参加することにしました。

よろしく」

キャーと、なんのへんてつもない自己紹介に女子は盛り上がっている。右目のかたすみで、平岡がつまらなそうにしているのが見えた。

「あ……」

ふと、今朝のことを思い出した。

「平岡、お前が今朝言ってた転校生って……」

「ああ。どうやら、あのパツキン野郎だな」

パツキン野郎ってな。新たなイケメンに嫉妬でもしてんのか？

「そこの藤本先輩とは……」

え？　いきなり名前を呼ばれて驚いた。パツキン野郎……あ、いや、ロウヴァーだ。

「藤本先輩とは特に仲良くなりたいな、て思ってます」

「は？」

教室がざわついた。お……おい、何言い出してんだ？　変な誤解を生むようなニュアンスだぞ。

それに……なんで、あいつ、俺の名前知ってるんだ？

ロウヴァーは、なおもけろっとした様子でさわやかに微笑んだ。

「似たもの同士みたいなんで」

似たもの……同士だ？　俺はぽかんとしてしまった。返す言葉が見つからない。

「なんだ、やっぱり友達なんじゃない」

アンリは首をかしげて言った。

「ま、細かいことはどうでもいいや。そういうことで。皆、いろい

ろ教えてあげてねー」
「細かいことといったらさー」
脇役Ａの小松が口をはさんだ。
「いいのか？　違う学年いれて」
そうか。全然気づかなかった。ひとつ下の学年なら、違う出し物があるだろ。小松、よく気づいた。
「そうだぜ、アンリ」俺も、小松に続いて口を挟んだ。
俺は、どうしても……あのロウヴァーって奴と距離をおきたかった。あいつには劇から降りてほしい。俺は切実にそう思った。あいつは……なんか、不気味だ。
リストは、きょとんとして俺を見ている。俺が小松に賛同したのが、あたかも不思議そうな表情だ。何考えてんだ、あいつ？　俺と仲良くしたいとか、似たもの同士だとか……意味がわからねえ。
「うるさいわねー。いいのよ、そんなことは」
アンリは、ズバッと言った。そんなこと、で済ます気かよ。
「先生には許可とったもの。学園祭とは生徒の手で作り上げるもの！　参加の枠に、厳しくする必要はない、てさ」
また、女子がキャーと騒いでいる。
「おしかったな、和幸」

平岡が隣からそう言ってきた。あいつと俺とでは、ロウヴァーを劇からおろしたかった理由は絶対に違うだろうな。俺は、はは、と笑って返した。

リスト・ロウヴァー

さて……うまく、はいりこめたな。自己紹介が終わって、オレは台本をもらった。

教室のはじでイスにすわりながら読み始める。横目で、藤本和幸の様子を伺う。

向こうもこっちをちらちら見ている。やっぱ、気になるか。

あの人の正体はすぐに分かった。

あのあと……このあたりで有名だっていう『三神』とかいう情報屋に依頼したら、あっという間に調べはついた。ちょっとばっかり、出費はかさんだけど…ま、おかげさまで必要な情報はそろったしね。

神崎カヤのことも大体状況は把握した。

エノクの言っていたことは本当だった。彼女は、普通の暮らしをしている。彼女の世話をしている夫婦がなにもので、どういう経緯で彼女を育てているのかは謎だが……

とにかく今は、神崎カヤに自然に近づくのが先決。フォックス・エン・アトラハシスは、『収穫の日』に、彼女の前に『箱』を持って現れる。このまま、彼女のそばにいれば、一網打尽にできるってこと。

それまでは、この劇の練習もまじめにしなきゃな。

オレは、ページをめくった。

「え……」

しばらく読んで、意外な単語に驚いた。

「カイン？」

つい、藤本和幸を見てしまった。

へえ。おもしろいな。カインの劇に、本物のカインが参加してる。
三神とかいう情報屋は、カイン（藤本和幸）がなぜ、神崎カヤを調査しているのかまでは、詳しく教えてくれなかった。カインは自分たちの仕事を『おつかい』と呼んでいるらしいが……神崎カヤにまとわりついているのも、その『おつかい』のためらしい。そこまでは教えてくれた。だが、一体、どういう『おつかい』なのか、その内容までは情報はくれなかった。
オレの心配はそこだった。カインノイエとかいう組織は、神崎カヤのことを…『災いの人形』と知ってマークしているのだろうか。それとも……ほかの理由で、偶然に彼女に白羽の矢が立ったのか。

「うーん。情報が足りないなぁ」

こうなったら……と、ある思い切った案が頭にちらついた。それは……藤本本人に直接聞く。

「しっかし、それはやりすぎかぁ？」

ま、成り行きにまかせて決めればいいか。時間はまだあるんだし。オレはあまりねちねち考えるのは苦手だ。頭を劇のほうへ切り替え、視線を台本に戻した。
そのときだった。

ガラッと扉が開く音がした。

ふりかえると、そこには神崎カヤがいた。
まるで、絵画からでてきたような美しさ。きりっとした眉。柔らかな輪郭。くっきりとした目。長く伸びたまつげ。一本一本が揺れる、さらさらとした黒髪。長い足。そして、包み込むようなオーラ。なるほど、これが神の『人形』か。彼女の姿は、誰がみても息をの

むだろう。これが『災いの人形』だとは……。オレはなんともいえないむなしさにおそわれた。

「あれ」

オレの姿に気づいたらしく、神崎カヤは目を丸くした。

「あなたは……」

「どうも。同じ学校だったみたいです」

オレは立ち上がって微笑んだ。

＊　＊　＊

劇の練習が始まってからも、俺はロウヴァーから目が離せなかった。

ロウヴァーの自己紹介がおわってしばらくしてから、カヤが来た。彼女は週番で遅くなったらしい。今は二人で台本の読みあわせをしている。

「なんだ、和幸。嫉妬か？」

「は！？」

振り返ると、平岡がニヤニヤしている。

「な、なんだよ？」

「いきなり、ライバル出現ってやつだな。それもあんな美形」

平岡は、わざとらしくため息をついて俺の肩に手をのせた。

「気持ちは分かるが、あきらめろ」
「だから……なんなんだよ、急に」
平岡の言ってる意味がさっぱり分からん。
「隠すなよ。俺はわかってるぜ。
さっきから、ずっと二人のほう見てるしよ。ばればれだよ」
「……え」
言われてみれば、確かに、見すぎかもな。
いかんいかん。ロウヴァーの奴は気になるが……ここは冷静に行動すべきだ。
「たまには、的を射たこというじゃねぇか、平岡」
「は？」
とりあえず、布を縫おう。俺は、ロウヴァーから目をはなし、布に集中した。

＊　＊　＊

練習が終わり、俺はひとり、教室をそうじしていた。
掃除当番は一人ずつ日替わり。そうじ、て言ってもほうきで掃くだけだけだから、なんてことはない。
にしても……こうしていると、俺も普通に高校生活を送っているんだな。ここ数週間、『おつかい』はまったく回ってきていない。
『おつかい』がなければ、俺はなんてことはないただの学生と同じ。なんだか、気がぬける。
結局、ロウヴァーとは一言も話さなかった。今、ぼろをだすのはまずいからな。向こうの出方を伺ってから俺も行動をとろう。俺は

そう決めたのだ。それに、あいつがただの変わったガキ、て可能性もあるしな。

「あれ」

そういえば……あいつ、俺のひとつ下なんだな。背も低いし、見た目も幼いから、てっきり中学生かと思ってた。

「まあ、いいや」

俺はほうきを片付け、かばんを手に取った。

「おわった？」

「え」

驚いた。それは、カヤの声だった。あわてて顔をあげると、廊下にカヤが立っていた。

「カヤ？」

「今日は、だいぶ遅くまで練習したね」

そう言って、カヤは廊下の窓を見つめた。もう外は暗い。

「俺のこと、待ってたのか？」

「……」

カヤはなにも言わずに、はにかんだ笑顔をみせた。

＊　＊　＊

「参ったなあ」

リストは、屋上で寝転がってそう言った。もう空には星がうかんでいる。

「ふられちゃったね」

ケットはからかうようにそう言うと、リストの隣にちょこんと座った。

「ねえ」

くくっとおもしろがってリストは笑う。

「人生ではじめて、『一緒に帰らない？』て言ったのになあ」

「見事に断られたね」

「仲良くならないとなにも始まらないのに。

あんまりしつこくすると、ナンパ野郎だと思われちゃうよ」

「……ねえ、リスト」

ケットは、おもむろに切り出した。ずっと疑問に思っていたことがあったのだ。

「なんで、わざわざ彼女の前に現れたの？

『収穫の日』まで、彼女をただ監視するって方法もあったでしょ」

ケットは、リストはそのつもりだとばかり思っていた。

彼女の学校に転校までして、劇にまで参加する……そこまでして、彼女に近づこうとしているリストの考えが理解不能だ。

「彼女と友達になろうとしてるみたいだけど……
そんなことして、事態を余計にややこしくするだけじゃない？
だって……何があろうと、リストと彼女は……」

リストは真剣な表情になった。いつものニコニコしているのが嘘のように、覚悟に満ちた表情だ。

「オレは『災いの人形』、神崎カヤを殺す存在。
いつか、オレはどんなかたちにしろ、彼女を殺さなくてはならない。
だからこそ……知っておきたかったんだ。
彼女がどういう人間で、何が好きで、どういう生き方をしてきたのか。
それがせめてもの、オレが背負える責任だと思うから」

それを聞いて、ケットは小柄なその体に似合わない、全てを悟った聖人のような表情を浮かべた。

「……」

しばらく黙ってから、ケットは優しく微笑んだ。それは、すべてを包み込むようなおおらかな笑顔だ。

「リスト……」いつものおどけた声とは違い、静かで落ち着いた声でケットは言う。「それは、ただの自己満足だよ」

リストは、フッと悲しく笑った。

「ああ。オレはとんでもない自己チュー。それでいいんだ」

それが、やけくそなのか、皮肉なのか、本心なのか……ケットには分からず、ただリストをじっと見つめることしかできなかった。

「それに……オレはさ、ケット」

リストは、夜空にひときわ輝く三日月を見つめた。

「ずるいかもしれないけど……全部、ナンシェのためだと思ってる」

「！」

月光に照らされたリストは、せつない表情をうかべていた。

「ナンシェのためだと思えば、全部背負える。どんなことでも出来る。

全て許される気がするんだ。

ナンシェはきっと、オレにとって唯一の光なんだ。

彼女という存在がいてはじめて、この世界にオレの影ができる」

リストは、月に手を伸ばした。月のやわらかい光がその左手を照らし、彼の顔にはうっすらと影ができた。

「自己チューでずるい人間だな、オレは。

でも、そういう生き方でしか……オレは自分の存在を肯定できないんだ」

ケットは、なにも言わなかった。

ケットは、エミサリエス。神の細胞でできたバイオロボット。『天使』とよばれるもの。神に近い存在だ。でも、神ではない。彼には、リストを救える力はない。

しばらく、沈黙が続いた。

「とにかくさ」と声のトーンを変え、リストは体をおこす。「収穫はあるわけだよ。今日一日だけでも、ひとつ重要なことがわかったし」

「え？」

ゆっくり立ち上がると、屋上のフェンスに歩み寄る。フェンスに手をかけ、校庭を見下ろした。

「『災いの人形』は恋をしている」

「へ？」

リストはクスっと笑った。

校庭には二つの影がある。和幸とカヤだ。

「それにしても、藤本和幸とは。

皮肉だね」

リストが『皮肉』といった意味は、ケットにも分かる。ケットは、またなにも言わなかった。

暗躍

「誰だ、あの男は……」

ある男が、手持ち鏡にむかってそう言った。鏡にはその男の顔は映っていない。その代わりに、和幸とカヤが二人で歩いている様子が映っている。それはまるでテレビを見ているかのような映像だ。

「あの子を……守らなくては」

男はイスから立ち上がった。ここはマンションの一室。だが異様なほど何もなく、生活観はまったくない。電気もつけずに、暗い部屋で男は鏡をじっと見つめていたのだ。

この日に限ったことではない。男はいつも鏡を見つめている。自分に見とれるナルシストというわけではない。そこに映るカヤの様子を伺っているのだ。

「アサルルヒのエミサリエス、バールよ」

男は玄関へ向かいながら、そう静かに唱えた。すると男の影から、麻でできたビキニのような衣装とマントを羽織った色黒の女性が現れる。

「はい」

バール、と呼ばれた女性は微笑を浮かべて男を見つめた。

浅黒い肌は月明かりに照らされて鈍い輝きを放っている。その瞳は血のような不吉な赤。それを隠すカーテンのように、黒く長い睫毛が覆っている。厚い唇は男をそそらせる薔薇の花びら。豊満な胸

に、ひきしまったくびれ。惜しみなくさらけ出された体は実に扇情的だ。一定の太さでいくつもの束にまとめられた髪は、まるでドレッドヘアのようだ。

「お願いします」と、男は彼女につぶやいた。

「また彼女におろかな人間が近づいたの？」

バールは黒い髪をはらい、鼻で笑った。男はなにも答えず、黙って玄関のノブに手をかける。

「もう……相変わらず、無口なお人ね。まあいいけど。ね、それより気づいていらっしゃる？」

男はやはり答える様子はなく、ただバールに振り返る。

「エンキ様の気配がするの。近くにいらっしゃるわ」

エンキ、と聞き、それまで無言だった男の口が開く。

「エンキ……ですか？」

「あら、もちろん、エンキ様ご本人ではないわよ。あのお方自らが、このエリドーにおりてこられるわけがないもの」

「つまり……エンキの細胞をもつエミサリエスがいる、といいたいわけですね」

「ま、そうなるわね」

男はしばらく何かを考え、ふっと微笑んだ。

「かまいませんよ。いつかは現れるだろう、とは思ってましたから」

バールは、不満げに口をとがらせる。
「あなた、本気でエンキ様に反旗を翻すおつもり？」
「……」
男はなにも言わずに扉を開け、出て行った。バールはふうっとため息をつき、自分の唇を人差し指で触れた。
「ほんとに人間って勝手な生き物ね。わが主、アサルルヒの立場も考えてほしいわ」

＊　＊　＊

「あのロウヴァーって奴……やっぱ、怪しいんだよな」
カヤの屋敷が目の前に迫っていた頃、俺はその話題を出した。
「リスト君？　そう？　話したけど、普通の子だったよ」
「……うーん」
そういえば、カヤはあいつと普通に話してたな。なんだかしらんが…おもしろくない。
「帰りがけも、『一緒に帰りません？』て言ってきてくれたし……フレンドリーな子だと思うけどな」
「え？　そんなこと言ってきたのかよ？」
一緒に帰ろう、だ？　いきなり？　確かに、キレイな顔してるし……実は、ナンパ野郎なんじゃねえだろうな。

「気をつけろよ、カヤ」
「気をつける？」
「あいつ、なぁんか気にくわねえんだよ。あんま、気を許すなよ。何たくらんでるかわかんねぇからよ。だから……」

夢中になって話していた。ふと、カヤにふりかえると、カヤはきょとんとしていた。
やべ。変な奴と思われたかな？

「いや……その、野生の勘っていうか……俺、そういうの働くからさ」

俺は自分でも良く分からなくなって、頭をかいてそっぽを向いた。
ふと、平岡の声が頭に響く。『嫉妬か？』と。
ちがう！　そういうんじゃない。俺は、そんな女々しい男じゃねえし。それに――カヤに、そんな感情は……ない、よな。

「フフッ」
「え？」

気づくと、カヤが笑っていた。

「なに？」
「和幸くんって、やっぱりおもしろい人だな、て思って」
「……おもしろい？」

うわ。やっぱ、変な奴だと思われたよ、絶対。まいったな。
でも……カヤが笑ってる。昨日見た、あの笑顔だ。やっぱり、この笑顔を見てると落ち着く。気が安らぐんだ。

「ん？」

じっと見つめすぎた。カヤは俺の視線に気づいて首をかしげた。

「え、なんでもないよ。あ！　家、ついたなあ」なんて、ごまかすが、わざとらしすぎて自分でも恥ずかしくなる。

「うん。送ってもらってありがとう。ごめんね、家、反対なんでしょ？」

「気にすんなよ」

カヤは申し訳なさそうに笑った。

それじゃ、と門を開けて家にはいっていくカヤを見送って、俺はくるっと踵をかえした。

赤い眼の女

和幸は、あるマンションに暮らしていた。月五万ほどの、比較的新しい普通のマンションだ。清潔感ただよう白い外観と、駅に近いのが特徴だが、オートロックがないので、女性入居者は少ない。

このマンションには、何人かのカインが暮らしている。誰がどこに、までは把握していないが、和幸はその事実だけ知っていた。

カインは、住む場所も生活費もすべて藤本に世話をしてもらっている。和幸も例外ではない。ここのマンションの部屋は、藤本に用意してもらった。

鍵を取り出し、3階の角部屋のドアを開ける。ここが、和幸の部屋だ。

「？」

ふと、和幸は変化に気づいた。なんだか、妙な気配がする。

「まさか……」

ハッと気づいた。そうっと靴箱に手をいれると、そこに隠しておいた銃に手をのばす。

カインは、その仕事ゆえ、命を狙われることもある。ほとんどが逆恨みといえるものなのだ。カインの『おつかい』は主に、盗まれた子供を奪い返す、というもの。恨みさえすれ、恨まれる覚えはない。

だが、子供を盗み売り飛ばす、という過程で様々な危ない連中が

絡んでいる。ほとんどの場合、それは組織ぐるみのビジネスだ。カインは、そんなビジネスの邪魔者、といったところ。
カインは顔を隠すこともせず、向かっていく。それは彼らのプライドでもあった。だが、それ故に、なんらかの証拠で顔がわれ、報復として命を奪われたカインもいる。だからこそ、カインは目撃者を排除する。それが、彼らの生き残る手段だからだ。これが、彼らが『無垢な殺し屋』と呼ばれるようになった所以でもある。

しかし、和幸は、三神が『天然記念物』と評する珍しいカイン。彼は、たとえ姿をみられようと、誰も殺したことはなかった。それは、彼の最後のこだわりでもあるのだが…。そのせいで、命を狙われることも多々あった。

和幸は、この部屋にすでに誰かが潜入している、と確信した。銃をかまえ、部屋にゆっくりと入っていく。
暗い部屋をそうっとのぞくと、和幸は息をのんだ。

いる。誰かいる。

だが、妙だった。その人影は部屋の真ん中で、どうどうと立っている。しかも……そのシルエットは明らかに女性だ。
変な威圧感がある。和幸はごくりとつばをのみこんだ。
しばらく、陰から観察していると、女の髪が、うにょうにょと動いていることに気がついた。まるで生きているかのように漂っている。

「なんだよ、あれは……」和幸は、女から聞こえないくらい小さな独り言をつぶやいた。

そのとき、雲におおわれていた三日月が、顔をだした。和幸の部屋にも月光がそそいだ。だんだんと、女の姿があきらかになっていく。和幸は息をのみながら、それを見つめた。

女は窓を背にしているせいで、逆光だ。はっきりと姿を確認はできない。

＊　＊　＊

くそ。よく顔が見えない。

俺は女から見えないように注意をはらいながら、部屋の中をのぞいていた。あの女、どっかの殺し屋か？　俺も『おつかい』のせいでこわーい連中に恨みを買ってるからな。命を狙われてもおかしくはない。

だが……それにしてもあの女、不気味だ。あの髪、普通じゃねえし。生きてるみたいに動いている。しかも、さっきからじっと立ってるだけだし。なんなんだ、こいつは？

それに、俺も変だ。足がすくんで動かねえ。

そういえば…今朝も、こういう感じを味わった。あのガキだ。俺を『創られた子』と呼んだあのブロンドのガキ。あのときも、俺は今と似たような恐怖を感じた。幽霊とかに対する恐怖とは違う。身の危険に対する恐怖とも違う。これは……畏怖？

「悪く思わないでね、ボク」

「え」

急に、女は口をひらいた。そして、女ははっきりと俺を見つめた。

俺は、女の眼だけはっきりとみることができた。なぜなら、女の眼は自ら赤い光を放ったからだ。ぼんやりと光るそれは、クリスマスの赤い豆電球のようだ。
俺のことに気づいていたことも驚きだが…この眼はなんなんだ？
思わず見とれてしまうような、怪しい魅力をもっている。何秒、俺は見つめていただろうが……急に心臓がどくん、と大きな鼓動をうち、激痛がはしった。

「う！？」

あまりの痛みに、胸元をおさえ、俺はその場に倒れた。

「なんだ、これは……」

倒れた拍子で、俺は部屋の中にはいっていた。
やばい。これじゃ、女にすぐやられちまう！
俺はあわてて体を起こし、女に銃をむけた。だが……

「いない？」

部屋には誰もいなかった。気づくと、心臓の痛みも消えている。たった一瞬の痛みだった。俺はたちあがると部屋のすみずみまで見て回った。といっても、一人暮らしのせまい部屋だ。ぱっと見でいないなら、どこにもいない。

「風呂場！」

俺はひらめいた。見ていないところは、風呂場だけだ。
あいかわらず銃をかまえたまま、風呂場にしのびこむ。にしても…自分の家の風呂場に　『忍び込む』ってのも変な話だよな。

慎重に、脱衣所をみまわし、風呂をのぞく。

「……」

一応、バスタブの隣のトイレのふたも開けてみる。

「いるわけねぇっつうの……」

俺は自分でつっこんだ。

「あの女、あとかたもなく消えてる……まさか、窓からとびおりたってことは…ないよな。

ここは3階だ。運が良くても大怪我。

俺になにもせず、そんな危ない逃げ方するのは変だ」

脱衣所にもどり、洗面台に銃を置いた。

「すでになにかしたとすれば……あの眼か。光る赤い眼なんて普通じゃねえ。

何かのトリックか……新手の武器か？」

俺はまた胸元に手をおく。

「確かに、胸にすんげえ痛みがあった。心臓を握られたみたいな、変な激痛」

ふと、顔をあげ、洗面台の上にある鏡を見た。

「え……

なんだ、これ！？」

鏡には、血で書いたような真っ赤な文字で『神崎カヤに近づくな』と書かれてある。
冗談じゃねえ。おかしい。さっき、ここにはいったときには、こんなのなかったはずなんだ。
俺は声を失い、後ずさった。

「！？」

一歩下がった足の下に、なにかの感触があった。あわてて下を見ると、それは石鹸だ。

「なんで、こんなとこに！？」

石鹸でつるっとすべり、俺の足は柔道ではらわれたかのように大きく弧をえがき、体のバランスがくずれた。
体が反射的に受け身をとったが……狭い脱衣所だ。俺は頭を壁にぶつけた。

「っつ……」

俺は頭をかかえて、寝転がりながらもがいた。

「痛ってえ……」

一通りもがいたあと、それまで痛みでつぶっていた目をふと開ける。
そして、最初に目に入ってきたものに、俺は息をのんだ。それは……銃口だ。

「！」

これは、ただの偶然なのか？

その銃は、さっきまで俺が持っていた銃だ。俺が倒れた拍子に落ちたのだろうが…俺の目の前に銃口を向ける形で落ちている。

もちろん、暴発したりすることはないだろうが……これがワザとだったとしたら、俺を脅すには充分な『いたずら』といえるだろう。

「……呪い、か」

そんな言葉が自然と口からもれていた。

そういえば、カヤは言ってた。自分が呪われている、という噂が流れたこともある、と。

俺はゆっくりと体を起こし、冷静に考えることにした。

「もし、これが何らかのトリックだったとしたら……」

タネは分からないが、犯人ははっきりと分かる。

「『神崎カヤに近づくな』か。確かに、こんなイタズラされちゃ、こわくなるわな。

ただのストーカーじゃねぇぞ、これは」

そう、カヤの『ストーカー』の仕業だ。

そうだ、とひらめいた。『ストーカー』の正体を暴く方法を思いついたのだ。血文字だ。俺にはわかる。あれは本当の血。犯人の血かは分からないが……藤本さんに頼めば、ＤＮＡから誰の血か調べだしてくれるはずだ。そこから、何か分かるかもしれない。

もう一度血文字を確認しよう、と鏡を見上げた。

「！」

だが、そこにはもう血文字はなかった。

「どういうことだよ……」

呆然とした。また消えてる。ここには誰も入ってきてないんだ。なんで消えるんだよ？

「まさか……相手は幽霊か？」

「おしい」

「え！？」

急に後ろから声がした。この声……聞き覚えがある。そして、この感じ。あの恐怖感。『畏怖』だ。

ばっと後ろを振り返ると、そこには、あの子供がいた。俺を『創られた子』と呼んだ、ブロンドの……不思議な子供だ。

「お前、あのときの……」
「やあ」と、子供は無邪気に微笑んだ。

呪い

「いつのまに、ここに！？」

俺は、突然後ろに現れた金髪の子供に叫んだ。

「ずっとさ」

ガキは、相変わらず無邪気な笑顔をうかべている

「……『ずっと』だ？」

「姿は消していたけどね」

「はあ？」

俺の頭は混乱していた。俺は、実は霊能力者なんじゃないのか、とさえ思い始めていた。

だめだ、冷静にならなくては。

「ひとつだけ……はっきりしときたい」

「なあに？」

「お前がやったのか？」

そう、これだけは明確にしとかなくては。ここにいるってことは、こいつが容疑者Aなんだ。見た目はガキでも……用心しなくては。もう、何があってもおかしくない状況なんだ。

だが、ガキはあわてた様子で首を横にふった。その仕草は子供そのもの。あやしいといったら、その変な服装くらいだ。

「まさか！　ケットじゃないよ」

「けっと？　お前の名前か？」

ケットと名乗るガキはにこりと嬉しそうに微笑んだ。なんか、調子狂うな。

「君に聞きたいことがあってあとをおってきたんだけど…思わぬ事態がおきてるね」

ケットは俺を見つめて、うーんと困った表情を浮かべた。

「なんだよ？」

「呪われちゃったね」

「……はああっ！？」

の、呪われただ？　急になにいいやがるんだ、このガキは！？

だめだ、だめだ。こんな子供とまともに相手にしちゃいかん。消えてた、とか言い出してんだぞ。変な子供だ。妄想癖かなんかだ。とりあえず、頭をひやそう。なんか、疲れてきた。

「あれ、どこいくの？」

「うるせえ。おうち帰れよ」

「あんまり、動いちゃいけないよ！　呪いがかかってるんだから。今、彼が来るから……」

俺は聞く耳をもたずに、脱衣所からでた。夜風にあたろう。そう思ったのだ。

もしかしたら、全部俺の妄想かもしれない。ありえないことがおきすぎだ。あのガキも俺の幻かもしれないし。麻薬に手はだしてないが……俺は『創られた子供』だ。欠陥があってもおかしくはない。異常がとうとうでてきたのかもしれない。

俺は窓をあけ、ベランダにでた。ここのベランダはとても小さいが、夜風にあたるくらいはできる。

「ふう……」

少し落ち着いてきた。とりあえず、整理して考えなければ。
まず、どこからどこまでが現実なのか。さっきのガキは結局、ここまでおいかけてこなかった。もう、どこにもいない。やっぱり、あれは俺のつくった幻と考えて良いだろう。じゃあ、目が光る女は？　あれも幻か？　それとも……幽霊？
背筋がぞっとした。夜風が冷たいせいだ。俺は自分に言い聞かせた。

「そういえば……」ふと、さっきのガキの顔が思い浮かんだ。「彼がくる、て……なんの話だ？」

まあ、いいか。あれは俺のつくった幻だ。気にすることじゃない。
そう思ったときだった。ミシっと鈍い音がした。

「……まさか」

嫌な予感がして足元を見る。その瞬間、足場にひびがいきなりはいり、底がぬけた。

「うそだろ！？」

コンクリートなんだぞ？　あんなひびの入り方あるわけがない！
だが、そんなこと考えてる場合じゃない。俺はそのまま、下の部屋のベランダに落ちた。うまく空中でバランスをとって、きれいに着地はできたものの……精神的には大ダメージだ。

「確かに……呪われてるかもな」

これを肯定することは、カヤを裏切る気がして嫌だった。だが、ここまでくると……

「きゃああ！」

悲鳴！？　いきなり悲鳴が聞こえた。これ以上、まだ何かあるのかよ？

「痴漢――！！」

痴漢？　ハッとした。ふと窓をみると、着替え中の大学生くらいの女性が部屋の中から俺をみていた。

そうか。俺は、下の階のベランダに着地したんだった。これは、確かに……不法侵入ってやつだ。ってか、このマンション、女はほとんどいないって聞いたのに……偶然、女の部屋のベランダに落ちるとは……ん？　いや、違う。これは、偶然ツイてないんじゃない。

「……やっぱ、呪われてるってわけか？」

とにかく、ここを切り抜けなくちゃな。俺はゆっくりと立ち上がり、窓の向こうの女子大生（多分）に両手をあげてみせる。

「誤解です！　ちゃんと説明するから……」

「きゃー、きゃー！！」

こりゃ、聞く耳もってねえな。ってか……窓閉まってるし。聞こえてないのか？

「！」

ふと、部屋の中にもう一つの人影があるのに気づいた。今までトイレにいたのか、急に現れた。

「友達……か？」

女子大生は、その現れた人物にかけよった。よくみると……がたいのいい『お兄さん』だ。

「友達以上……かな」

冷や汗がでた。その男の手にはバットがある。まさか、そっち系の彼氏か？　こっちに向かってきている。まあ……こちとら、カインだ。あの兄ちゃんにやられることはない。だが、『呪われている』今、なるべくいざこざは避けたい。

「しゃあない」

俺はぐっと足に力をいれた。

「覚悟しろよ、痴漢！」という怒号とともに男がベランダに来た。それをきっかけに、俺は大きくジャンプし、ベランダの手すりに乗った。

「な……」

「一応、言っとくけど……マネしないように。

どうも、お騒がせしました」

俺はそう言ってお辞儀をすると、後ろに飛んだ。男がぎょっとしている。この人たち、これがトラウマにならないといいんだが。

俺の体はそのまま地面へと落ちていく。普通ならどこかしら、骨折はするだろう。下手すりゃ、死ぬ。でも……カインの一部の人間には、ある特徴がある。その一部の人間とは…商業用に『創られた子供』。これに分類される奴には、常人離れした頑丈さとパワーがあるのだ。俺もその一人。

俺は、地面に着地した。ダン！　という大きな乾いた音が鳴り響いた。びりびり、と振動がつたわってくる。

「うぅ……気持ちわる」

上を見ると、さっきの男が青ざめた顔でこっちを見ていた。一応、俺は手をふってみた。

さて……ベランダが穴開いた。この事実を受け止めよう。まずは、藤本さんに報告するべきだよな。呪いとかはおいといて……。部屋に罠を仕掛けられたんだ。そう考えたら、俺は襲撃された、と言っていい。

俺の思考回路は支離滅裂だ。今、携帯で藤本さんに報告することもできるが、きっと理解不能なことを言い出してしまうだろう。直接、藤本さんと会って話し合うほうが、冷静さも取り戻せていいはずだ。

俺は、マンションに背を向け、歩き出した。マンションの敷地から出て、角を曲がった。そこで、俺は意外な奴とであった。

「お前……」

「こんばんは。藤本先輩」

リスト・ロウヴァーだ。なんで、ここにいるんだ？　近所なのか？

「落ちたんです」

「え？」

ロウヴァーは、突然そう言って、俺のマンションを指差した。急に、なんのはなしだ？

「二階から人が落ちたんです」

げ！　こいつ、見てたのか？

あんまり、こいつには俺のことをかぎまわってほしくはない。俺が二階から落ちてなんともない、なんてことこいつに知られるわけにはいかない。幸い、この様子だと、それが俺だと分かってない。偶然、見かけて気になってこっちに来た、てことか？

「見間違えじゃないか？」

俺は、はは、と笑ってロウヴァーの肩をたたき、横を通り過ぎた。

「見間違えじゃないですよ」

後ろでまだロウヴァーは言っている。しつこいな……。無視するか。ここは、聞こえないフリして……

「確かに、藤本先輩だったと思うんだけどなあ」

「！！」

俺は思わず振り返った。見えてたのか？

ロウヴァーも、こちらに振り返り、クスっと微笑んだ。

「本当に呪われてるんだ。
参った。いろいろ、計画狂っちゃうなあ」
「……な、んなんだ、お前」

呪われてる、て、今言ったか？　戸惑う俺を無視し、ロウヴァーは左手を夜空にかかげるように高くあげた。
次の瞬間、俺は目を疑った。ロウヴァーの左手に……なにもなかったはずなのに、大きな剣が現れたのだ。ロウヴァーは現れた剣をぎゅっとつかむと、それを俺にむかって構えた。

「！！」

銃をとりだそうと思ったが、そういえば脱衣所に置いてきたままだ。まさか……これも、呪いのせいか？

「ま、いいか。あとで修正しよう」

ロウヴァーは、その剣をなんの躊躇もなく、俺に突き刺した。

神の騎士

和幸は商業用に『創られた子供』。その体は頑丈だ。意識して一点に集中すれば、筋肉で銃弾さえも防ぐことができる。もちろん、銃弾がどこに当たるか正確にわかるわけがないので、その防御法を実際に試した者は誰もいないが。

だが、リストの剣は大きく、まっすぐに刺してきた。和幸には、どこが刺されるのか一瞬だったが、はっきりと分かった。そこにちゃんと意識を集中させたのだ。なのに、リストの剣は簡単に体を貫通していた。

「……なんで……」

和幸は、これが全て悪夢であってほしいと願った。

リストが剣をひきぬくと、和幸はあまりの激痛にその場に倒れた。分からないことだらけだ。このまま死んでも死にきれないだろう、と思った。ゆがむ視界でリストをとらえると、やっとのことで声をだす。

「リスト・ロウヴァー…お前は、なにものなんだ」

リストは、けろっとしている。まるで今、自分が何をしたか理解もしてないような表情だ。

「オレは、リスト・マルドゥク。ルルの世界『エリドー』を守る、神の騎士」

「……は？」

和幸は、死を前にして、耳がおかしくなったのかと思った。それ

か、リストは麻薬でもやって頭が狂ってるのか。まあ、どっちでもいいか、とどこか諦めの境地にきていた。
死を覚悟して目をつぶった。しかし、なかなか『死』というものは訪れない。結構、時間がかかるものなのか、と和幸はまぬけなことを思ったりもした。

「ところでさ……いつまで、やってるわけ？」

急に、リストはため息まじりに言った。その言葉に和幸は目を開き、あることに気づいた。リストの剣に血が一滴もついていないのだ。

「あれ……」

そういえば、痛みももうない。和幸の脳裏に、さっきの赤い眼の女がよぎった。あのときも、心臓の痛みは一瞬だった。そうっとされた腹を見る和幸。

「な、ない！？」

そこに、傷はなかった。

「どういうことだよ！？」
「言ったでしょう？　ルルの世界を守る、て。オレは、君たちの味方ってことだよ。
傷つけるわけないでしょ」

リストは、持っていた剣をぽいっと放り投げた。和幸は、反射的に受け取ろうと手をだしたが、その剣は和幸の手に達する前に煙のように消えた。

「！？」
「あなたにかけられた呪術を解いたんだ。だから、もう大丈夫。
ま、もちろん……救われるには、それなりの痛みを伴うものだから。
責任として、激痛は体験してもらったけどね」
ニコッと微笑むリスト。和幸は、ただぽかんとするしかなかった。
「さて、ここからどう計画を修正したものか」
リストはのんきにそうつぶやいた。

創られた子供

「さ、はいってはいって」

結局、ロウヴァーに言われるまま、ついてきてしまった。
ロウヴァーのマンションは俺のよりも格上だ。エントランスは豪華で、大理石までつかってあった。
部屋の間取りは俺の部屋と似たような感じだが…広さは段違いだ。
俺は、部屋にはいってぽかんとしていた。

「どうしたの？　座って」

突っ立っている俺に、ロウヴァーは後ろからそう促した。
しかし……この部屋、広いのになにもない。越してきたばかりなのだろう。備え付け（と思われる）家具だけで、あとはスーツケースくらいしかおいてない。生活感のない部屋だ。

「お茶でもいれるよ。くつろいでて」
「いや、そんなことはどうでも……」

俺の意見など聞いてない、といったところか。ロウヴァーは、部屋を俺にのこし、さっさと廊下の流しに向かった。にしても……さっき、あんなことがあったってのに、こいつの態度はなんだ？　急にタメ口になったのは大目に見るとして…もう少し、緊張感とかあってもいいんじゃないのか？　まるで当たり前かのようにすごしている。俺はまだ混乱してるっていうのに。

「ん？」

部屋を見回しているときだった。棚に一つだけ何かあるのが分かった。

「写真か？」

写真が部屋にかざってあることなんて普通なんだろうが……部屋に写真しか飾ってない、というのは違和感がある。俺は写真に近づき、手にとった。そこにうつっているのは、どこかロウヴァーに似た、かわいらしい少女だ。妹、とかか？

「ナンシェ、ていうんだ」

「え！？」

いつのまにか、紅茶をもってロウヴァーが部屋にはいってきていた。

あわてて俺は写真を戻す。

「悪い。勝手に……」

「なんで謝るの？　写真は見てもらうためにあるんだから」

「……」

ロウヴァーは、カップをテーブルに置いて、地べたに座った。

「これから、少し長い話をするから。ソファに座ってくださいよ、先輩」

「……」

いきなり、敬語にもどしやがって。まあ、確かに話はいろいろ聞きたい。俺はおとなしく、いわれるままソファに座る。

「ナンシェは……」
「え？」
間髪いれずにロウヴァーは話し始めた。しかも、ナンシェ？　さっきの写真の子か。
「ナンシェは、俺の生きる理由なんだ」
「……？」
「オレは彼女を守るために『創られた』んだ」
創られた…そういったのか？　俺はいきなりその単語がでて驚いた。
ロウヴァーは笑顔を浮かべた。だが、それはいままでのヘラヘラしたものではない。せつない笑顔だった。

＊　＊　＊

和幸には、とんでもない話が始まりそうなことだけは分かっていた。だが、その前に、彼には確認したいことがあった。それは彼にとって一生付きまとう大きなコンプレックスにかかわることだ。
和幸は、真剣にリストの目を見つめて口を開く。
「お前は『創られた』、と言った。それはつまり……」
「あなたと一緒です。
オレもクローンなんですよ」
「！」
まるで、和幸がこの質問をするのを知っていたかのように、平然とした様子でリストは答えた。和幸にはそれは衝撃的だった。彼にとって『クローン』という言葉を口にすることもはばかられていた。

それは、彼には恐ろしい単語でしかない。自分の存在を否定してしまう単語だ。『藤本和幸』であろう、といくらもがいても、『クローン』という単語を使われたらそこで自分は消えてしまう。そんな気がして仕方がなかった。

「……」

そんな恐ろしい言葉をはっきりと言われ、和幸は言葉を失っていた。

リストは、そんな彼をよそに、ニコッと微笑んだ。

「オレを創った男は、昔、クローン大国と言われたニホンに１６年前にきました。

何十年も前、この国は人口の減少が深刻化し、クローンという手段でそれを止めようとしたらしいですね。生まれないなら、創ればいい。

でもそれは、倫理と言う点でほかの国からは受け入れられなかった。

だから、国際的なバッシングを受け、止められた。

現に、今では、法律に厳しく『クローンを禁ず』て書いてある。

だが、皆が『甘い蜜』をすぐ忘れられるわけがない。

二十年前、どっかの学者が、地球はあと数年でパンクする、と世界に発表した。

少子化で悩んでいたこの国とは対照的に、他の……特に発展途上国では人口は増加し続けていたからね。

だが、この発表はまずかった。世界はとんでもない方法をとりはじめたんだからね」

和幸はそこまで聞いて、顔をあげた。

「強制的一人っ子政策だな」
「世界規模の、ね。
夫婦は子供を一人生んだら、両者とも避妊手術を受けなければならない。
バカげたはなしだが……まあ、世界が狂ってきている証拠だな」
「？」
「あ、なんでもない。あとで話しますよ。
とりあえず、大きな変化は新たな問題をおこすもの。
たとえば、そのたった一人の子供が死んでしまったらどうするのか……とかな。
もうその両親には子供を生むことはできない。だが……子供を失うつらさは計り知れない。
『甘い蜜』にひかれるものだ」
「……クローン」

それまでおとなしく話を聞いているだけだった和幸が口を開いた。
開き直ったかのようにリストの話の続きを語り始める。

「皆、クローンで創りなおせばいい、と考えるようになった。
そしてその考えは世界中に広まり、最もその技術が進んだニホンに、
欲深い金持ちからの注文が殺到した。
もちろん、法律で定められている以上、堂々とできるわけはない。
すべては裏のビジネスだ」
「その裏のビジネスに目をつけた、欲深い金持ちの一人が、オレを創った男、てわけ」
「……」

和幸には不思議だった。
自分が十七年もの間、克服できていない『自分がクローンである』

という事実を、リストは簡単に話している。

「なんで、平気なんだ？」

「なにがです？」

「なんで平気でそんな話ができる？」

「そんな話……自分が『創られた』経緯、ですか？」

やはり、リストは淡々と語っていた。だが、表情が急に険しくなったのに、和幸は気づいた。

「平気じゃない。自分が『クローン』だと思うと、嫌気が差す。でも、そのたびに……どうあがいても、その事実が変わることはない、て思い知らされるんです。

ただ、俺には『創られた』理由があるから……そのために生きることは許される気がして」

「理由。それが、さっき言ってた」

和幸は、後ろを振り返った。そこには、『裏の世界』や『クローン』なんてものにまったく無縁のような、ほがらかな笑顔を浮かべるナンシェの写真がある。

「はい。彼女……ナンシェです」

リストの声は、心なしか、低くなっていた。

「オレは、ナンシェを守るために『創られた』んです。罪を犯す運命から守るために……」

「罪を犯す運命？　なんだ、罪って」

和幸は振り返り、リストを見つめた。その表情には、へらへらと

した笑顔もみられない。真剣そのものだ。
リストはしばらく間をおき、ゆっくりと言い放った。
「神崎カヤを殺す罪です」

災いの人形

「なにいってんだ、お前？」

ここに来て、こいつにのこのこついてきたのは間違いだったのではないか、と思い始めた。

あの妙な剣のせいで、変な好奇心でここまで来てしまったが…あれがトリックで、こいつがただのキレた野郎だとしたら……

ふと、俺にはある考えがうかんだ。

「お前がカヤのストーカーか！」

俺は思わず立ち上がった。

「はあ？」

そうだ。あの騒ぎのあと現れたのはロウヴァーだった。あの大掛かりなイタズラがこいつがしかけたものだったとしたら、剣のトリックだって前から仕込めたはずだ。

「はじめてあったときから怪しいとはおもってたんだよ」

「ちょっと待って。ストーカー？　何の話？」

ロウヴァーは半笑いで言った。

「とぼけるな！　あの呪いまがいのイタズラも、全部お前がしかけたんだろ」

「オレじゃないよ。それは、エミサリエスの仕業」

「……エミサ？　なに？」

「ちなみに、イタズラじゃない。ほんとうの呪い、さ」
ロウヴァーは、得意げに言って、落ち着いた様子で紅茶を飲んだ。
「……本当に、お前はストーカーじゃないのか？」
「違うよ。オレはそんなに暇人じゃないし」
「……」
「それに……ただのストーカーが、自分の『生い立ち』をわざわざあなたに話すと思うの？」
そこをつかれると、弱いな。
実際、こいつが俺と同じ『創られた子』であるかどうかは定かじゃない。俺を味方にひきこむための作戦かもしれない。
だが……ロウヴァーの落ち着きようといったら、興奮して立ち上がった俺がアホみたいにうつるほどだ。これで嘘をついているのだとしたら、こいつは超一流の詐欺師だ。
確かに、殺気も感じられないし…もう少し、話を聞いてみるか。
俺はまたソファに座った。
「じゃあ、カヤを殺すって、なんなんだよ？」
「オレの運命さ。言ったでしょ。オレは『ルル』の味方だ、て」
「ルル、てなんだ？」
「君たち、人類のこと。神は、『ルル』と呼んでいる」
「……」
なんなんだ、こいつの話は？　やっぱり、まじめに相手にするのが間違いなのか？　神だなんだ、と……狂信者か？　それに、『君たち、人類』って…その言い方だと、まるで……

「まるで、自分は人間じゃない、て言っているようだな」
ロウヴァーは、クスっと笑った。
「オレは、神の血をひいている……といったら、笑う？」
「……は？」
かえす言葉が見つからない。こいつ、頭がくるってるとしか思えない。
「神の血だと？」
「そう。
ちょっと、昔話をさせてもらいますね。長くなりますけど、聞いてみてください」
「……わかった」
「遠い昔……
あなたたちが『神』と呼ぶものたちは、『ニビル』という名の宇宙船に乗ってこの地球に来た。
そのときは、地球には生物は存在してなかった。
『神』はこの星を気に入り、暮らし始めた。
彼らには『メ』と呼ばれる特別な力があった。『神』の力、てやつだね。
彼らはその偉大な力で、ここに世界を創り始めることにしたんだ。
そんなとき、エンキという『神』が、新しい種族を創った。
それが、君たち人間……『神』はこれに『ルル』と名づけた。
だが、『ルル』は繁殖を続けていくうちに、だんだんと神々の邪魔になっていった。
神々の中には、『ルル』を忌み嫌うものも現れ…
ついに、『エンリル』という神が『ルル』を滅ぼそうとし始めた。

飢餓や病気、そして最後には…『エンリル』は大洪水までおこした。
それは、地球全てをのみこむほどの大きなもので…
今度こそ、『ルル』は滅びたと思われた。
だが、『ルル』は絶滅しなかった」

俺は、いつのまにか聞き入っていた。馬鹿馬鹿しいと思いながらも、ロウヴァーの話しに引き込まれていた。
ロウヴァーの目は真剣そのもの。そして、目の奥に不思議な輝きがあった。
気のせいかもしれない。だが……俺の心の中に、こいつを信じなければいけない、という使命感がどこからか生まれていた。それは、不思議な感覚だった。
ロウヴァーは俺の様子を伺うことなく、続きを語り始める。

「なぜ『ルル』は生き延びたのか……
『ルル』を創った『エンキ』が、『エンリル』のたくらみを知り、お気に入りの人間に知恵を与えて助けていたからさ。つまりは、チクってた、てことだね。
その人間の名は『アトラハシス』。彼とその家族は、最後の洪水も生き残った。
『エンキ』のおかげでな。
だが……これに怒ったのが『エンリル』。
『エンキ』と『エンリル』は腹違いの兄弟だが…人間に関しての意見の相違で仲が悪かった。
『エンリル』は、『ルル』を滅ぼしたい。『エンキ』は、『ルル』を守りたい。
二人は平行線。

そこで、神々は、ある取り決めをした。

今後もし、『ルル』が救いようのないほどに落ちぶれた種族になったのなら…

『エンリル』は、好きにこれを滅ぼしてもよい、と。

ただし、それまでは、『エンリル』は手出しをすることはならない」

「……なんの神話だよ、それ」

俺はたまらなくなって、そう尋ねた。半笑いを浮かべて、バカにした素振りを見せたものの……内心では、この話が事実なのではないか、という気持ちが生まれていた。ロウヴァーの自信たっぷりの口調と、真剣な表情が俺にそう思わせていたのだ。

ロウヴァーは、俺の問いに答える様子もなく、続ける。

「神話じゃない。歴史だよ。この星……エリドーのね」

「エリドー？」

「そう。神々は、この星をエリドーと名づけ、『ルル』に与えたんだ。そして、宇宙船『ニビル』でまた旅立った。神々の王である、『エンキ』と『エンリル』の子孫を残してね」

「子孫だ？」

「ヒエロスガモスという儀式がある。女神と人間の男との聖なる結婚だよ。『エンキ』の娘、『エンリル』の娘、それぞれ人間の男と結婚し、子供を生んだ」

「神さまと人間のハーフってやつか」

「そうだね」と軽く答えて、ロウヴァーは頷く。「『エンキ』と『エンリル』は、その二人の子供を『ルル』の王に据えて、エリドーを去ったんだ。二人の王は、遠い宇宙を旅する『エンキ』と『エンリル』に、それぞれエリドーの様子を伝える連絡係になった。『エンキ』の血をひく一族の名は『マルドゥク』。『エンリル』の血を

ひく一族の名は『ニヌルタ』。ふたつの一族は永遠に対立する運命になった」
「まさか、お前もその一族っていうんじゃ……」
「正〜解。オレの本当の名は、リスト・『マルドゥク』・ロウヴァー。れっきとした、カミサマの子孫さ。……もちろん、オレのオリジナルが、だけど」

ロウヴァーは複雑な表情を浮かべた。確かに、変な話だ。こいつの話が本当だとして……ロウヴァーは神の一族がテクノロジーで『創った』子供。それは、許される行為なのか？　人間が人間を創る……それは、神の怒りをかう行いだ、と信じられている。そんな禁忌に神の一族が関わったっていうのか？

「とにかく、話をもどすね」

ロウヴァーは、へらへらとした笑顔にもどっていった。

「オレの一族『マルドゥク』と、『ニヌルタ』の一族は、神々がエリドーを去ってからずっと、こちらの様子を伝えてきたんだ」
「……チクり魔だな」
「うまい言い方だ。その通りさ。王の一族は代々、その役を受け継いでいった。神々は、宇宙のどこかで常にエリドーの様子を伺ってきたんだ。そうやって、判断してきた。『ルル』を滅ぼすべきか否か。そして……十六年と四ヶ月前、神々は決断した」
「？」

十六年と四ヶ月前……？
俺は、その細かい日数が気になった。ロウヴァーとは長い付き合いでもなんでもない。ついさっき会ったようなものだ。だが、分かる。こいつは細かい性格ではない。今までの話でも、ところどころ

アバウトだった。
　それなのに、約十六年前、といえばいいところで、四ヶ月前、と付け加えた。なにか、意味があるのか。
「『アトラハシス』が神々から預かったある箱に、『それ』は生まれた。『ルル』に滅びをもたらす『災いの人形』がね」
「災いの人形……？」
「そう、いうなれば……神様がエリドーに残した最終兵器。時限爆弾、といったところかな。『災いの人形』は、『ルル』を滅ぼすために、『パンドラの箱』から現れるのさ」
「パンドラの箱って……あの、神話にでてくる？」
　そうだ。聞いたことがある。パンドラの箱。確か、パンドラは女性の名前。神々に創られ、地上に送り込まれた人類の災い。美しい容姿と類まれなる才能、全てをかねそろえた完璧な女性。彼女に、神は『絶対に開けるな』と言い含めて、箱を与えた。だが、好奇心に負けたパンドラは開けてしまう。中には、飢餓や病気、あらゆる災厄がはいっていて、世界におそいかかったという。
「神話？　あぁ、確かに、似たような話はたくさんあるよね。実話を元にした小説が尾びれ背びれをつけてベストセラーになるみたいに」
「……その言い方……神話がただの小説だっていうのか？」
「さあね。オレに分かるのは、あなたの知ってる『パンドラの箱』と、オレが言ってる『パンドラの箱』は別物、てことだけ」
「はっきり言い切るな」
「ただ……『パンドラの箱』の中身が、世界にとって脅威だってところは一緒だね」
「……その人形、一体なんなんだ？」

ここまで聞いたら、止まれない。パンドラが好奇心に負けて箱を開けた気持ちがよく分かるな。

「『パンドラの箱』には、『アプスの粘土』という特別な粘土がはいっている。『災いの人形』はその粘土から創られるんだ。『生命の土』ともいわれる『アプスの粘土』から創られた人形だ。ただの土人形じゃない。姿も中身も『ルル』となんらかわりがない。意識もある。感情もある。本人も、自分が土人形だとは気づかない。『災いの人形』は、そうして十七年間、『ルル』として生活するんだ。普通の人間として。

そして……十七年経つと、『パンドラの箱』の中に、『テマエ』と呼ばれる林檎に似た実が現れる。この日を、『収穫の日』と呼ぶ。『災いの人形』は、この『テマエ』を口にすることで、自分の正体、そして使命を思い出すんだ。自分が、この世界を滅ぼすために、神に創られた人形であることをね。同時に……ある詩を思い出す」

「ウタ？」

「終焉の詩、と呼ばれるものさ。これは、『ルル』にとっては、死刑宣告、みたいなものかな。この詩は……大昔に『エンリル』がエリドーに仕掛けた大洪水を起こらせるスイッチなんだ。つまり、『災いの人形』が『終焉の詩』を唱えた瞬間、『エリドー』に大洪水が起こるってこと」

「……」

ロウヴァーの、こんなぶっとんだ話を信じようとしている自分に、俺は驚いていた。これが作り話なら、こいつは相当狂ってるか、才能ある詐欺師だ。

だが……今夜、俺の身に起きたことを考えれば、神だなんだという話を鼻から笑い飛ばすことはできなかった。

目の赤い女。急に崩れたベランダ。ロウヴァーのおかしな剣。俺が精神的に参ってしまったのかとも思った。それか、大掛かりな仕

掛けだったのか、と。しかし……誰が得をする？
なにより、信じなければならないような使命感がずっと増していた。不思議な力が働いている気がした。まるで、催眠術でもかけられているような気分だ。

「百歩ゆずって……」俺は声をしぼりだした。「全部、信じるとしよう。それで、その話とお前がカヤを殺すという話……どういう関係があるんだよ？」
「……鈍い人だな」

ロウヴァーは、くすっと笑って見せた。
バカにするな。もちろん、感づいているさ。信じたくないんだよ。はっきりと、それを聞くまで信じたくないんだ。
俺は、ぐっとこらえるようにロウヴァーの言葉をまった。

「神崎カヤこそ……神に創られた人形――『災いの人形』なんだよ」

ロウヴァーは、ためらいもせずにそういった。

困惑

「……ばかばかしい」

和幸は、やっとの思いでそう言った。わざとらしくため息をつき、立ち上がり、リストをにらむ。

「お前も『創られた子』だっつうからおとなしく聞いてたが……」

「同族愛？」

リストはちゃかすようにクスっと笑って言った。

こういう展開は予想していた。あんな話を聞いて、なるほど、と納得する人間がこの世にいるわけがない。

「お前が神の一族？　勝手に妄想ふくらますのはかまわないさ。それなりに楽しめたしな。

ただ……他人を巻き込むのはやめろよ。カヤが土人形だ？　ふざけんな」

強気でリストにそうは言ったものの……和幸は、困惑していた。

リストの話を聞いているときは、カヤがその『災いの人形』なのだろう、と予想していた。リストの口からそれが語られることも想像できた。だが、実際に言われると、素直に受け入れられなかった。素直に、そうか、といえるはずがなかった。

和幸の表情とセリフはしっかりとあっていなかった。強い口調と泳いでいる目では、なんの説得力もない。無理しているのは一目瞭然だ。

「本当にオレの妄想だと思ってます？」

リストは、落ち着いた様子でさらりと言った。

「……」

答えられないなら、『じゃあな』と言ってその場を去ればいい。それは分かってはいても、和幸は足を動かせなかった。何かがひっかかっている。リストの話を、くだらない、と捨て去ることができない。あの話が全部でたらめだと言い切る確信がなかった。

和幸は、ぐっと拳を握り締めた。

「妄想にきまってるだろ」

しぼりだすようにそういった。それが精一杯だった。

「不思議だな」

リストは、わざとらしくそうつぶやいた。

「？」

「さっきまではあんなに熱心に聞いてくれてたのに……いまさら、妄想だっていうの？

どういう心境の変化？」

「……それは」

「信じられないというなら、鼻で笑って出てってくれてかまわないのに」

「……」

和幸は、返す言葉がみつからなかった。いや、分からなかった。自分でも不思議だった。自分の行動が理解できない。なぜ、こん

な奇想天外な話をおとなしく聞く気になったのか。それも、カヤを殺すと宣言している人間の話だ。
自分のすべきことも分からない。和幸は、ただ呆然と突っ立っていた。激しく動いているのは、和幸の頭の中だけ。
その様子をしばらく観察し、リストはいたずらが見つかった子供のような表情をうかべた。

「なんて……無理でしょうけどね」
「え」
「これで確信が持てたでしょ？　オレが神の子孫であること」
「は？」
「こんなコピーでも、一応は神の血ってのは受け継いでるみたいだ」

得意げににこっと微笑むリストに、和幸は、写真の少女の面影をみた気がした。ナンシェ、という名前が和幸の頭にうかんだ。

「『ルル』……つまり人は、神を恐れてきた。誰から教えられたわけでもない。それは本能なんだ。創造主である彼らへの畏怖はＤＮＡにしっかりと刻まれ、子孫から子孫へと引き継がれていく。
あなたがオレの話をおとなしく聞いてしまったのも、そのせいだよ。オレの話を聞かなくてはいけない。オレの話を信じなくてはならない。そんなプレッシャーみたいなものが『ルル』であるあなたにはかかってしまったんだ」
「……」
「神様は絶対。それは、『ルル』である限り、誰にも敗れないルールなんだよ」

和幸はしばらく呆然として、力なくソファに腰を下ろした。妙な脱力感があった。

「そうか」という、なんとも気の抜けた言葉がでた。

和幸の中で、リストの話が真実であるという確信が生まれた。理解はできない。だが、感じ取った。リストが言った『プレッシャー』。それは、確かに和幸がリストから感じていたものをぴたりといいあらわしていた。リストを信じなければならない使命感。リストと会うたびに感じていた妙に落ち着かない雰囲気。その正体が分かった。

「神……か」

和幸は、皮肉が混じったトーンでそうはき捨てた。

＊　＊　＊

「で……なんで、俺にこんな話をした？」

「成り行きだよ。話すつもりはなかった。でも、君が呪われちゃったから。助けるついで、というか……」

「呪われる……そうだ。あれは一体なんだったんだ？」

あまりに多くを聞きすぎて、肝心なことを忘れていた。そうだ、俺はさっき襲われたんだった。目の前に神の子孫がいる以上……呪い、という言葉は不思議と現実味をおびている。

「なんで先輩が狙われたのか……については、オレも分からない。でも、誰の仕業か、と聞かれたら……心当たりはある、と答えるよ」

「……」

まだ俺を、先輩、と呼ぶのか。馬鹿にされている気さえした。

こいつの日本語は流暢だが……敬語とタメ口の使い分けは全然で

きていない。まだマスターしきれていないのか？　それとも、単に礼儀ってものに慣れていないだけか？
しばらくロウヴァーを見つめていると、ロウヴァーは首をかしげた。

「誰だ？　てきかないの？」

まるで、無邪気な子供だ。ロウヴァーは、時々そんな顔をする。俺はため息まじりに苦笑した。

「聞いたほうがいいのか？」

今までべらべらと、頼んでもいないのにしゃべり続けていたこいつだ。自分から言ってこない情報ってのは、言いたくないことにきまってる。
さっきの言い方は、もったいぶっているようで、それでいて『聞いてくるな』という無言の警鐘に聞こえた。
ロウヴァーは、俺の答えに満足したように微笑んでみせた。

「話がわかる人ですね。そう……聞く必要はないよ。今夜にでも対処するから。心配しないで」
「……」

しかし……俺はうつむいて、手を組んだ。まだ気持ちの整理がつかない。目の前にいるこのガキが、『神』の子孫？　そして、カヤが世界を滅ぼす土人形？
俺は、自分が『創られた』ことにだってまだ開き直れてないんだ。それで、こんな話をおしつけられても……どうしろっていうんだよ？
俺はもう一度、神の子孫だという少年の顔を見つめた。確かに、不思議な雰囲気のあるガキだ。南国の海のような碧眼には、吸い込

まれるような力がある。ずっと見つめていると、今まで俺が犯してきた罪を全部うちあけてしまいそうだ。
俺は目をそらした。ひとつ深呼吸をして、もう一度確認する。
「で、お前は本気でカヤを……」
「はい。殺します。使命だから」
ロウヴァーはすんなりと答えた。
「その使命ってのはなんなんだ？　神サマが人殺しをするのか？」
「人じゃない。彼女は、人形なんだよ。何度も言ってるけどな」
「……」
カヤが人形……カヤが？
ダメだ。頭が狂いそうだ。
カヤの笑顔が脳裏をよぎった。あれが、ただの粘土だっていうのかよ？　それも……この世界を滅ぼすために創られた人形。
「どうして……こんな話、俺にしたんだよ？　ついで、でこんなこと話すかよ」
俺は低い声でつぶやいた。
知らなければ……また明日も、カヤに会って普通に話せたんだ。
「ついで、て言ったのは半分うそなんだ」
ふいに、ロウヴァーがそう切り出した。
「藤本先輩が『カイン』とかいう殺し屋だってことも、『おつかい』で『人形』に近づいているのも知っている。

でも、どんな『おつかい』なのかは分からなかった。だから、確認したかったんだ。彼女が『災いの人形』だって知った上での『おつかい』なのかどうか……」
「カヤが土人形だなんて、誰がどうやったらわかるっていうんだよ！？」

思った以上に声がでた。ロウヴァーはなにも言わずに俺をじっと見ている。特に、驚いた様子もない。
俺が取り乱していることに驚いたのは、俺のほうだった。理解できない事実を急に押し付けられるってのは、結構イラつくもんだな。
俺は深呼吸した。いらついても意味はないんだ。俺は経験してしまったんだ。呪いや、傷も与えずに体を貫通した剣。そして、どこからかわいてくる妙な使命感。
とにかく、理解しなくてはならない。こうなっては受け入れるしかない。

「カインノイエは……人身売買にしか興味はない。それ以外のことで俺たちが動くことはない。誰も『人形』だなんだ、て話はしらない。だから……『おつかい』はまったく関係ないことだ」
「……そう。じゃあ、彼女は、人身売買になにか関係してるってこと？」
「『おつかい』の内容は誰にもいえない。どんな事情であれ、な」
「……だろうね」

ロウヴァーから、へらへらとした表情が消えていた。

「カヤは知らないんだよな。なにも」
「まだ、ね」
「カヤは言ってた。天気をあてることができるって」

雨宿りをした日、カヤは才能のようなものだ、と俺にはなしてくれた。雨がふる、雪がふる、ということを『分かる』ことができる、と。思えば……彼女は完璧だ。容姿も、才能も、全てもっている。何をやらせても人並み以上だった。

神様に創られた人形だというなら……納得できる。

「何度もいうけど、オレは彼女を殺す」

唐突に、ロウヴァーはそういった。今までみたことがないほど、真剣な表情だった。

「それが、『ルル』を生み出した、我らが主、『エンキ』の望み。『ルル』を救うことがオレの使命。そのためには、彼女を殺さなくてはならない。分かりますよね？　彼女が使命を思い出し、詩を唱えてしまえば……洪水で、『ルル』は今度こそ滅びてしまう」

俺に、なんでこんなことを言うんだ。俺には関係ない……はずなんだ。カヤに近づいているのは『おつかい』のためだ。あいつの父親が人身売買にかかわっているかどうか。俺にとって重要なのはそれだけなんだ。あいつが人形だったとしても、それが『おつかい』に支障をきたさないなら、俺にはどうでもいいことだ。

なのに、なんでだ？　どうして……

「先輩に、お願いがあります」

急に、ロウヴァーがまた敬語に戻ってそう切り出した。

「『災いの人形』は、あなたに恋をしています」

「！？」

頭が真っ白になった。一体、何を言い出すんだ？
ロウヴァーは、俺の返事を待つこともなく、真剣な表情のまま続ける。
「彼女は、『テマエの実』さえ食べなければ普通の人間として生きることができる」
「え？」

ちょっと待てよ。それ、すごい大事なことじゃないのか？
俺はロウヴァーの話をさえぎろうと口をあけたが、言葉をはさむ間もなくロウヴァーは話を続ける。
「オレの剣（つるぎ）……『聖域の剣（つるぎ）』は、『ルル』を傷つけることはできない。『テマエの実』を食べていない限り、彼女は『人形』ではなく『ルル』とされる。
つまり、彼女が『テマエの実』を食べない限り、危害を加えられません。だから、少なくとも『収穫の日』までは、オレは彼女を見守るつもりです」
「整理させれくれ！」

俺はロウヴァーに手のひらを出して制した。
「カヤは、『災いの人形』。神サマに創られた、世界を滅ぼす人形、なんだよな。だが、あいつはそれを知らない。で、今は一応……人間、てことになってる。でも……『収穫の日』に『テマエの実』ってのが現れて、もし、カヤがそれを食べるとあいつは使命を思い出し、世界を滅ぼす暗号を知る。そしたら、もうあいつは人間じゃなくて『人形』とされる」
「暗号じゃなく『終焉の詩』、だけど。大体、合ってるよ」
「ってことは……だ。もし、あいつがその実を食べなかったら……

使命もその詩も思い出すことはない。あいつは殺されずにすむ、てことか？」

手のひらが汗でじんわりとしめっているのがわかった。この感覚……難しい数学の問題がもう少しで解けそうな興奮に似ている。

ロウヴァーは、冷静にじっと俺を見つめていた。その視線は、どこか冷たい。なにを考えてるんだ？

しばらくして、「フッ」とロウヴァーが微笑した。

「そうなるね。『テマエの実』を食べなければ、彼女はただの女の子。何の脅威でもない。オレが殺すこともない」

「……」

やっぱり、そうか。じゃあ、あいつが『テマエの実』を食べるのを阻止さえすれば……あいつを助けられる。でも……なんで、俺がそんなこと考えてるんだ？

テマエの実

藤本和幸。おもしろい人だな。
目の前で混乱している人を観察して、興味深い、なんて思ってるオレは、冷たい人間なんだろうか。
でも、本当に興味深い人だ。

さっきオレは「少なくとも『収穫の日』までは、オレは彼女を見守るつもりです」と告げた。その上で、「せめて、『収穫の日』まで神崎カヤに幸せを味あわせてほしい」と続けるつもりだった。

『人形』がこの人に惚れてるのは一目瞭然だったからね。藤本和幸に、あわよくばあと4ヶ月間だけでも付き合ってくれないか、と頼むつもりだった。
オレなりの、罪滅ぼしなんだろうな。ほんの少しでも・・・『人形』に幸せでいてほしいんだ。裏工作をしてでも・・・
オレは、本当に自己中心的な人間だよ。そんなことしても結局は自己満足だろうにな。

だが・・・この男は、アレが生き残る方法を探ろうとしている。神に創られた人形だと知ってなお、救おうとしてる。オレの話を信じてないわけじゃないだろう。話を受け止めて、その上で、変えようとしている。使命・・・運命・・・理・・・そんな、決められたルールを変えようとしている。
神にあらがう本能・・・そんなものを生まれ持ってるんだろうか。それがもし、『創られた子』である性だとしたら・・・オレもそれがあるのか？　神の子孫であり、『ルル』に『創られた』オレにも？
「問題はね、『テマエの実』がどこにあるか分からないことなんだ」

気づくと、話すつもりもなかったことをオレは切り出していた。
見たくなったのかもしれない。『創られた子』が何をしでかしてくれるのか。

「『テマエの実』は『パンドラの箱』の中に現れる。
『収穫の日』・・・つまり、『災いの人形』が１７歳になる誕生日にね。
本来ならば、それまで『パンドラの箱』はある神殿で大切に保管されるものなんだ。
そして『収穫の日』、『マルドゥク』と『ニヌルタ』の王が決闘し、
『テマエの実』を奪い合う。それがしきたりだった。

オレもそのつもりで・・・『ニヌルタ』の王を討ち、『テマエの実』を得るために、
ずっと鍛えられてきた。

だが・・・ある人物が、それを破った。彼は『パンドラの箱』をどこかに持ち去ったんだ。
今も、どこにあるか分からない。
だから、こうしてオレは『災いの人形』を探し出した。
『パンドラの箱』がどこにあるか分からない今、
『災いの人形』を見守り、『テマエの実』を食べるのを防ぐほかないからね」

藤本和幸は、オレの話をじっと聞いていた。なにも言ってこない。
なんだ、もうあきらめたのか？

「『ニヌルタ』・・・てなんだ？」

「・・・・・・・え？」

仕方ない・・・かな。あれだけ、一気に話して全部覚えろなんて無理な話だ。

オレも、リチャードに小さい頃から、毎晩のように聞かされたんだ。そこらの童話よりもずっとよく聞いた。

「『ニヌルタ』は、『ルル』を嫌う神『エンリル』の子孫だよ。

オレの一族『マルドゥク』は『ルル』を守るためにエリドーに残った。

だが・・・『ニヌルタ』の一族は違う。『ルル』を滅ぼすことを使命としている。

『災いの人形』に『テマエの実』を与え、『終焉の詩』を唱えさせ、

『ルル』を滅ぼす。それが彼らの使命」

「じゃあ・・・『パンドラの箱』もそいつらが持ってるんじゃないのか？」

「いい考え方だね♪

でも、違う。彼らも必死に探しているはずだよ」

そう、オレは知ってる。誰がそれを持っているのか・・・

藤本和幸もそれに感づいたのだろう。疑うような視線でこちらを見ている。

「どうやら・・・そっから先は俺が首をつっこむべきじゃないみたいだな」

さすがは、裏世界で生きる『カイン』。引き際も良く分かってるな。

藤本和幸は肩をすくめてため息をついた。

「ロウヴァー」

しばらく間をおいて、藤本和幸は急に深刻な表情になって言った。

「俺には『おつかい』がある。

『カイン』である俺には、『おつかい』は何よりも優先される」

「かまわないよ。あなたが神崎カヤの傍にいてくれるのは、オレも助かるから」

本心だ。こうして全部話してしまったのだから、なおさらだ。

彼女の正体を知っている人間に彼女の傍にいてもらえれば、心強い。

「正直言って、あの呪いは厄介だ。そっちは、なんとかしてくれるんだよな」

「もちろん」

「わかった」

藤本和幸は、すっかり冷静になっていた。さっきまで取り乱したり、興奮したり・・・と不安定だったけど・・・生まれた瞬間から複雑な世界で生きてきた人だ。適応能力は人並み以上なのかな。

「正直、まだ混乱してる」藤本和幸はそう言って立ち上がった。「とりあえず、今日一日復習してみて・・・考えることは考えてみるよ」

考えることは考えてみる?

神の遺伝子をもつオレには、言語の壁はない。生まれつき、全ての言語をマスターしているといっていい。だが・・・『考えることは考えてみる』という言葉は理解できなかった。

「どういう意味？」と聞くと、藤本和幸はフッと笑った。
「今後の身の振り方を決める、てことかな。
今は、何を考えればいいのかさえ分からない。俺が考えるべきことなのかも分からない。
神サマは・・・こんなに身近じゃいけない存在だからな」
「？」

結局、返答も理解できなかった。

「あ、そうだ」

玄関に向かう背中をオレは呼び止めた。

「ロウヴァーって呼ばれるの慣れてないんだ。
リスト、て呼んでくださいよ。先輩」

先輩は、振り返りもせずに鼻で笑った。

「お前も、先輩、なんて使うなよ。寒気がする」

＊　＊　＊

和幸が去った部屋で、リストはナンシェの写真を手にしていた。

「ロウヴァー・・・。オレが『創られた』ことを隠すためにでっちあげた苗字。
マルドゥク家で呼ばれることなんてなかったからな・・・
こんなに呼ばれて嫌な気分になるとは知らなかった」

ナンシェの写真を見ていると、リストは鏡を見ている気分になることがあった。
見た目が似ているとはよく言われたが、そういうものとは違う。
ナンシェの人生は、リストがもし『創られた子』でなかったら歩むはずのもの。
そして、リストの人生は――――――――――。
ナンシェは、リストにとって、自分のもう一つの人生の可能性を映す鏡のようだった。
もちろん、ありえないことだとは分かっている。だが、ナンシェを見ていて、リストはそんな空想を描いていた。

「リスト」

ふと、キラキラと星のくずのような光とともに、ケットが後方に現れた。
リストは、ナンシェの写真を棚に戻し、ため息をついて振り返る。
「ケット。また勝手に現れて・・・
本来、オレが名前を呼んだときにしか現れちゃいけないんだよ」
リストは、わがままな弟をたしなめるように優しくしかると、ケットの頭をなでた。
「ごめん」
「勝手に藤本和幸のあとをつけたりして・・・
結果的に、いい展開になってるからいいけど。
なんのつもりだったの？」

リストは、そういいながら、テーブルのティーカップをかたづけ始める。
ふと、コップいっぱいに残った紅茶をリストはしばらく見つめた。和幸は一口も口をつけなかった。リストは、どこか寂しさを感じた。

「友達に、なりたくて！」

ケットが突然、ぎこちなくそういった。

「ええ！？」

リストは、なぜか動揺してケットに振り返った。

「ちょっと、話がしてみたかったんだ。かずゆきと・・・」

「・・・・・・あぁ・・・そう」

リストは変に自分が緊張しているのに気づいた。明らかに自分は動揺している。それが不思議だった。
その様子にケットも気づいていた。

「どうしたの？」

ケットは心配そうにリストの顔をのぞきこむ。

「なんでもないよ」と言うと、リストはティーカップを持って台所へと向かった。

その様子に、ケットは悲しく微笑んだ。

「やっぱり・・・友達になりたいのは、リストのほうなんだね」

ケットは知っていた。リストが『創られた子』であることは、最大の秘密。

神の一族が、クローンに関わるなど、絶対にあってはならない。だから、リストは自分の正体を誰にも言わずに生きてきた。ずっと、一人で背負ってきた。ナンシェにも言えずに、ずっと一人で。

しかし、今は・・・・・・

ケットは、さっきまで和幸が座っていたソファに手をかけた。

「やっと話せる相手を見つけたんだね」

台所から水が流れる音が聞こえてきた。

ケットの周りにまた光の粒があらわれ、ケットは姿を消した。

答え

「俺は『クローン』……それだけで十分、複雑じゃないか」

夜空を見上げてそうつぶやいた。天国ってのは、空にあると思ってた。神様もそこにいて、死んだら『創られた』自分もいけるんだろうか、と小さい頃からぼんやりと考えていた。そしたら、そこで神さまに聞くんだ、と決めていたんだ。

『僕のことを、知っていましたか？』

と。ガキのとき、寝る前にいつもそんなことを考えていた。

まさか……その神さまが、宇宙を旅していて、その子孫が学校の後輩だとは。

「笑えるな」

ロウヴァーの部屋を出て、家に向かうわけでもなく、ぶらぶらと歩いていた。

落胆していた。一番大切な夢を奪われた気分だった。

「いや……」俺はつぶやいた。いや、よく考えてみれば、宇宙船さえ手にはいれば神さまに会えることがわかったんだ。これは前進だよ。

「そしたら、生きてる間に聞けるな」

ははは、と声をあげて笑った。

「なにを聞けるの？」
「え？」

ふと、人気のない路地で、後ろから子供の声がした。そして、背筋にあの感覚が襲った。畏怖だ。
あわてて振り返ると、やはりそこにはあのガキがいた。ブロンドで、不思議な雰囲気のガキ。確か、名前は……

「けっと……」
「わー！　名前、覚えててくれたんだ。嬉しいなぁ」

きゃっきゃ、と飛び跳ねる姿は、ただの子供だ。

「お前……なんなんだ？　いつもどっから湧いてくるんだ！？」

すると、ケットはぴたっと止まり、にこっと微笑んだ。その笑顔は子供とは思えないほど、落ち着いていた。

「ケットは、『エンキ』のエミサリエス」
「エミ……なんだって？」

そういえば、リストもそんな言葉を言っていた。たしか、あれは……俺の呪いの話のとき。

「エミサリエスっていうのはね、神さまの細胞でつくったバイオロボットだよ」
「……え！？　ろぼっと？」
「そうだなぁ。神の遣い……天使、ていえば分かるのかな？」
「天使？」

天使って……翼がはえて頭にわっかがあって……
今夜はとことん、俺の固定観念が壊されるな。

「ケットは、『マルドゥク』家をサポートするために創られたんだ。『エンキ』様がエリドーを旅立つとき、『マルドゥク』家に聖域の剣とともにケットを授けていかれたの」
「『マルドゥク』家？　つまり……ロウヴァーの実家か？」
「そうそう。飲み込みがはやいね、かずゆき」

呼び捨て？！　ええい、もうなんでもこいだ。

「じゃ、お前はロウヴァーの……」
「しもべ……ていうのかなぁ。守護天使？」

ケットは、うーんうーん、と考え込んでしまった。自分でも自分の位置づけを把握していないのか。

「聖域のつるぎ、て……」
「かずゆきをさした、あの剣だよ。『ルル』を守るための剣。ちなみに……かずゆきにのろいをかけたのも、エミサリエスだよ」
「エミサリエス……お前だけじゃないのか？」
「いっぱいいるよ！　エリドーにも……少なくとも、あと二人はいるかな」
「……もう、頭が狂いそうだ」

俺は頭をかいてため息をついた。ケットも、どこか申し訳ないような表情で微笑んだ。

「で？　ロウヴァーの守護天使とやらが、何の用だよ？」
「……君に、聞きたいことがあるんだ」

「俺に？」

そういえば……俺の風呂場に現れたときも、そんなこと言ってたな。

だが、俺に聞くことなんてなにがある？

「ケットは……リストに何て声をかければいいのか分からないんだ」

「え？」

「君は、なんていわれたら救われるの？」

「ちょっと、まてよ。何の話だ？」

救われる？　急になにいいだすんだ？

ロウヴァーのこと聞かれても、俺にわかるわけがないだろ。

「君はリストと同じ。『創られた子』だから……」

「！」

ケットは、しょんぼりとうつむいていた。

「リストは、ずっと苦しんでる。神の騎士である自分が、『ルル』に『創られた』こと。

恐れているんだ。自分の存在に。でも、ケットはなにもしてあげられない。なんていえばいいのかもわからない。だから、君なら……君なら、なんていえばいいのか、分かるかな、て」

「……」

なるほど。

もしかしたら……と、俺にある考えがうかんだ。

「俺とは特別、仲良くなりたい……」

「え？」

そうだ。あいつ、言ってた。アンリに紹介されたとき、そんな変な誤解をよぶようなばかなことを。

てっきり、挑発でもしてるのかと思ったが……もし、本心だったとしたら――

「神の一族でありながら、人間に『創られた』子供……さぞかし、立場が悪かっただろうな」

「ううん。リストを創ったリチャード以外は、その事実を知らなかったから」

「え？」

「リチャードは秘密にしてたんだ。愛人のイリーナにお金を払って、リストの母親のふりまでしてもらって……。だから、皆は、リストはリチャードの隠し子だ、て思ってたんだ」

えらいことをするもんだな、神の一族のくせに。どっかの昼ドラでも見てる気分だ。

「じゃあ……ナンシェ、て子も？」

「！」

ナンシェ、という名前に、ケットは一瞬、顔をこわばらせた。

「ナンシェも……なにも知らない」

「なあ……」俺は、ずっともっていた疑問を持ち出そうとしていた。

「もしかして……ロウヴァーは、そのナンシェの……」

「違うよ！」

ナンシェのクローンか、と続けるつもりだったが……ケットにさ

えぎられた。

「そうか……」

どうも、ナンシェという存在、気になるな。ロウヴァーは、彼女を罪から守るために『創られた』と言っていた。ということは……少なくとも、一族の一人だ。てっきり、あいつは彼女のクローンだと思ったが……違うのなら、どういうことなんだ？　彼女を守るために『創られた』っていうのは……？

そんなことを考えていると、ゴトッと物音がして、電柱の陰から老人があらわれた。気配すら感じなかったが、どうやら、そこで寝ていたらしい。ケットの声で目を覚ましたんだろう。

誰からも気づかれない日陰の人生。その老人を見ていて、ふと頭に浮かんできた。

そういえば、俺はよくコフィンタワーに行って、自分という存在を考えていた。そこで、『死』を待つだけの人間に自分を重ねていた。

コフィンタワーは、このトーキョーで、一番、あの世に近い気がしていた。神サマに……ずっと会いたかったんだ。

「俺は、神サマってやつに答えを求めていた」

「え？」

「俺の存在が一体なんなのか……神サマに聞くつもりだった。天国で……神サマに会ったら、俺のことを知っていたか、聞くつもりだったんだ。子供だ、といわれるかもしれないけど……天国に行くために、人を殺さずに生きてきた。最後の意地だったんだ。人を殺さない、という行為は……俺の意地だった」

まわりの『カイン』は口をそろえて言っていた。

俺たちは人に『創られた』。神サマは俺たちの存在すら把握して

いない。だから、天国とか地獄とかは関係ないんだ、と。世の中の倫理とか、正義とか、そんなものは俺たちには当てはまらない。俺たちは、生まれたときからはみでた存在なのだから。
だけど、俺は……この世のルールの中にいたかった。俺が、ルールの外にいる人間だと認めたくなかった。人を殺せば、それを自分で証明することになる、と思っていた。だから……それだけは嫌だった。

「なにより……俺は、神サマに望みをかけてた。神サマさえいれば、俺はいつか答えを得られるんだ、と」
「かずゆき……神様はいるよ」

ケットは、情けに満ちた声で言った。

「そうだな。いるみたいだな。でも……」と、俺はケットを見つめた。

急に見つめられて、ケットは目を丸くした。この子供が、神の遣いってのは意外性があってパンチがきいてるよ。俺は、苦笑した。

「その神様の遣いとやらが、こうして俺に答えを求めてきたんだ」
「！」
「やっと、分かった。神様も答えを知らないんだ、てな。
俺は……俺たち、『創られた』人間は……答えも『創る』しかないんだ」

神サマは、答えを知らない。それが、答えだったんだ。

「そうだな。俺はなんていわれたら救われるかな……」

俺の中で、何かが消えた気がした。ずっと俺を縛り付けていた何かがほどけて、俺にのしかかっていた何かが離れた。そんな感覚だった。

初めて自転車の補助輪をはずして走ったときを思い出した。藤本さんの手助けもなしに、補助輪のない自転車のペダルを一回、一回、しっかりとこいだ。それは、不安と高揚が交じり合って・・・そして、自由を感じた。独り立ちしたような気分にさえなった。

あの自転車は、誰か年下の『カイン』に譲ったっけ。俺は、それが誰だかは忘れてしまったが、あの自転車がとても懐かしくなった。

なぜか、こんなときに、そんな思い出が頭にうかんだ。

「かずゆき?」

ケットが、はやく続きを聞きたい、というせがむような視線をむけてきた。

俺は、フッと微笑した。

「お前は予想外だった、と言われたいかな。神サマに」

「……へ?」

その答えこそ予想外だったのだろう。ケットは目を点にしていた。

「じゃあな、守護天使」

「そ、それだけ? どういうこと??」

俺はケットに背を向け、歩き出した。

なにが、神の子孫だ。ロウヴァーの奴。あいつも……結局、俺と同じじゃねぇか。救われることをずっと求めて、答えを探してるんだ。

神の子孫の前に……ただのクローン、か。

俺は月を見上げた。
しかし……ケットは言っていた。一族は誰も知らなかった、と。
「誰にも弱音さえはけなかったのか」
俺は、自然とつぶやいていた。
悩みを打ち明けることも許されなかった。それは、ひどい孤独だ。
それに比べて、俺は仲間がいた。同じ『創られた』人間が回りにいた。『カイン』という家族が。そして……藤本さんという理解者がいた。
ふと、俺の脳裏に、リストが自己紹介で言った言葉が浮かんだ。
『藤本先輩とは特に仲良くなりたいな、て思ってます。似たもの同士みたいなんで』
あれは、やっぱ本心だ。俺は確信した。
俺とちがって、嘘しか言えない環境にいたあいつは……ああやって、本音を皮肉や冗談で隠して表にだしてきたんだろう。
俺は頭をかいた。
「……リスト、て呼んでやるか」
クローンの前に、あいつは学校の後輩だ。
俺は、先輩と呼ぶな、といったのを後悔した。

変動

深夜に近づき、静まり返った神崎の屋敷。明かりが灯る部屋は数えるほどしかない。二階のカヤの部屋と浴室。そして、カヤの母親である神崎舞が夜のひと時を紅茶とともに過ごしているダイニングだ。

舞はダイニングテーブルに腰を下ろし、カタログを眺めていた。そこに並ぶのは、細部にまで趣向を凝らした指輪の数々。

「どの指輪もいまいちね」と、独り言をつぶやきながらページをめくる。特にどの指輪に興味を示すわけでもなく、ページをめくっては文句をつぶやく――それを繰り返していた。

「奥様」と、不意に、洗い物を終えたメイドが手をエプロンでふきながら、彼女に背後から歩み寄る。「終わりました」

すると、振り返るわけでもなく、舞は右手をはらってみせた。これはいつも通りの合図。『さがっていい』という意味だ。

メイドは頭を下げ、エプロンをはずしながら、部屋を出ていった。

彼女が今夜この屋敷に残っている使用人の最後の一人。これで屋敷には、家族三人と、数人のガードマンしかいないはず。

今日も変わらぬ一日が終わるのね、と舞はどこかつまらなそうにため息をつく。――と、そのときだった。気を抜いた舞を諌めるように、突然電話が鳴り響いた。

「なに！？」

もう時計は十一時を回っている。こんな時間に電話がくることはめったにない。舞は常識知らずの真夜中の電話に、驚きとともに苛

立ちさえ覚えつつ、乱暴に立ち上がった。

「なんなの、こんな夜中に……」

吐き捨てるようにそう言って、カタログをダイニングテーブルに叩きつけた。ナイトガウンをなびかせ、電話へと歩を進める。パタパタとあわただしく床とぶつかるスリッパの音は、舞の心中が穏やかではないことを象徴していた。

ダイニングルームの端で、目覚まし時計のように騒がしく音を鳴らす固定電話。その前に立つなり、舞はすぐさま受話器をとる。

「神崎ですが」と、怒りを抑え、出来る限り気高く努めた。が、その努力はすぐに無駄であったことを悟る。

「カヤをかえしてもらおう」

「！！」

唐突に鼓膜に飛んできたその聞き覚えのある声に、舞は目を見開いて息を呑んだ。

「な……あなた……」

朝の八時に毎日のように電話は来たが、こんな時間ははじめてだ。若くも、まるで機械の声のように、感情が感じられない冷たい声。聴覚を通して全身にプレッシャーを与える妙に落ち着き払った声。聞き間違うはずもない。舞は動揺と緊張で狂ったように騒ぎ出した心臓をなんとか落ち着かせようと深く息を吸い込んだ。頬に汗がにじみでて、身体に熱がこもっていくのを感じる。

舞はごくりと生唾を飲み込んで、慎重に電話の向こうの男に尋ねる。

「カヤをかえせ？　どういうこと……？」
「事情が変わった。カヤを迎えにいく。用意しておけ」
電話の男は、淡々と指示を伝えるだけだ。特に事情を説明する気配もない。舞は表情をがらりと変えて、受話器を持つ手に力を込める。
「なにいってるの！？　カヤを引き渡すのは、あの子の誕生日のはずだよ！？」
「事情が変わった」
また同じ言葉だ。この男はいつもこうだった。自分の用件を押し付けるだけ。こちらの話を聞こうともしない。
舞はかっと頭に血がのぼるのを抑え切れなかった。
「ちょっとまちなさいよ！　カヤを無事に誕生日に引き渡す。それが契約のはずだよ！？」
「もう家の近くに来ている」
「冗談じゃないわ！」
舞は恐怖と怒りで自分をコントロールできなくなっていた。こうなれば、今までのうっぷんもついでにはらしてやろうか――そうとさえ思い始めていたそのとき。
「どうした？」
そんな渋い声が舞の背中に投げかけられた。
舞がハッとして振り返ると、そこには湯気を立たせてバスローブに身を包む五十代半ばほどの男。カヤの父親である神崎昭三だ。
どれほど怒っていたのだろうか。舞は彼が部屋にはいってきたの

にも気づかなかった。どこか安堵したようにため息をつくと、「あいつが……かけてきた」と震える手で受話器を彼に差し出す。

「今すぐカヤを渡せ、て」

そう付け足すと、昭三も眉間に深い皺をよせた。奪うように舞から受話器をとると、「どういうことだ！？」と叫んだ。

「事情が変わった。今すぐあの子をかえしてほしい」

「金が先だ」

舞とは対照的に、父親はあくまで冷静かつ慎重に言った。その隣で、両手を胸の前で組み、舞は不安そうな表情で佇む。

「……」

電話の向こうで、男は言葉を失ったようだった。いや、何かを企んでいるのか。とりあえず、男は黙り込んでいる。昭三は、ここぞとばかりに言葉を続けた。

「金を払わなければ、カヤをつれていっても、警察に誘拐されたと通報するぞ」

「あなた！？」

驚いて声をあげたのは、受話器の向こうの男ではなく、舞だった。今にも金切り声で叫びだしそうな彼女を、昭三は受話器を持っていない手で制する。その鋭い眼差しはじっと真正面へと向けられている。たとえ姿は見えなくても、そこでは駆け引きが行われているのだ。舞はそれを悟って、唇をきゅっと結ぶ。

しばらく沈黙が続き、最初に口を開いたのは昭三だった。

「今じゃ警察も汚職の巣窟だ。役にたたないと思うか？」と切り出して、唇を妖しく笑ませる。「違うな。わたしのような人間にとっては、強力な味方なんだ」

もう一押し、と昭三は語調を強めて男に尋ねる。

「どうする？」

「明日、また連絡する」

有無をいわさずさらりと答え、男はぶちりと電話をきった。

通話の終了を知らせる音が虚しく昭三の鼓膜を震わせる。

昭三は、一仕事終えたかのようにため息をつき、受話器をゆっくりと戻した。それを見届けるなり、舞はいてもたってもいられずに昭三の腕にしがみついた。

「あいつ、なんだって？」

「明日……連絡がくる」

昭三の答えを聞いても舞の不安は晴れない。眉を曇らせ、声をひそめる。

「事情がかわったって……金はどうなるの？」

「大丈夫だ。金は必ず手に入れるさ」

昭三はくるりと身体を舞に向けると、その肩に手を乗せる。安心させるようにさするが、舞の表情は優れない。

「あいつは……」と舞は憎悪を吐き出すように顔をしかめてつぶやいた。「あいつは、何者なの？　気味が悪くてしかたがないわよ」

「安心しろ。それももう少しだ。カヤを渡せば、あいつともさよならだ。カヤさえ無事に渡せば……大金が手に入る」

＊　＊　＊

「どういうこと……」

カヤは、自分の心臓が破裂するのではないか、とさえ思った。今まで感じたことのない熱さを胸のあたりに感じていた。

震える手でラジオの電源を切る。ベッドにすわったまま、ラジオを呆然と持っている。なにも考えることができなかった。ランプだけしか明かりをつけていない部屋は真っ暗で、とても静かだ。

さっきまで、ラジオからは両親と妙な男との会話だけが響いていた。

「どうなってるの？」

カヤは、髪をくしゃっとつかんだ。

カヤは後悔していた。今朝もらった和幸のアドバイスを実行したことを。

和幸から『盗聴』という案を聞いたときは、そんなこととてもできない、と思った。だが・・・家に帰って電話を見たとき、はやる気持ちをおさえきれなくなったのだ。

まさか、こんな会話をきくことになるとは夢にもおもってなかったカヤは、コフィンタワーに向かった。表ではとても買えない非合法な商品はなんでもそこで買える、という噂を聞いたことがあったからだ。

噂は正しかった。盗聴器を手に入れるのに、十分もかからなかった。

しかし・・・まさか、こんな会話を聞くことになってしまうとは・

・・・・・・

「どうしよう」

これは、盗聴器なんて仕掛けた罰なんじゃないか、とカヤは思った。

「どうしよう……！」

カヤは、ラジオを抱いてうずくまった。

＊　＊　＊

リストはシャワーを浴びて、服を着替えた。まだほかほか暖かい体で服を着ると暑苦しい。

「これで外でたら、また汗かくよなぁ」と言ってうなだれながら、靴を履き始める。

「ケット」と、名前を呼ぶと、光の粒子がリストの後ろに集まり、ケットが現れた。

「はーい。彼を探しにいくの？」

「うん。呪いをかけるようなエミサリエスは一人しかいない。そうだろ？」

「『アサルルヒ』のエミサリエス、だね」

「そう。その『ドラ』は鏡。アサルルヒのエミサリエスが宿る鏡を授かったのはアトラハシスの一族だ」

ドラ、とは神から授かりし『贈り物』を意味する。ドラにはエミ

サリエスが宿っていて、それを授かったものは、そのエミサリエスの主となることができる。ケットの場合、ドラは『聖域の剣』である。

「アサルルヒはエンキ派の神のはずだ」

リストは深刻な表情を浮かべた。

「当然だよ。アトラハシス一族は、『エンキ』様に仕える『ルル』。本来なら、今、リストをサポートしているはずなんだ」

「それが……『パンドラの箱』を持ち出し、行方をくらましている。エノクの話じゃ、『人形』に『テマエの実』を食べさせようとしているというし。さらに……関係のない和幸さんに呪いをかけた」

そこまで言って、リストは腰に手をあてがう。

「やってること無茶区茶だよ。使命なんて知ったこっちゃない、て感じだな。

これをエンキが知ったら……アサルルヒはただじゃすまない」

「エミサリエスの責任は、それを創った神がとるものだからね」

二人は、暗い玄関で黙って考え込んだ。

「ま……とりあえずは、アトラハシスの王を探そう。話はそいつから全部聞く」

「うん、そうだね」

リストは、鍵を持っているのを確認し、ドアノブに手をかけた。

そのとき、ケットは嬉しそうにフフッと笑った。

「ん？　なに？」
「あ、ううん。そういえば、さっき……リスト、和幸さん、て呼んだな、と思って」
「え？」

言われて、リストは照れくさそうに顔をそむけた。

「本人が、嫌だっていうんだから……そりゃ、呼び方変えなきゃさ」
「……そうだね」

ケットは、満足そうに微笑んだ。

＊　＊　＊

気づいたら……俺は、カヤの家の前にいた。『災いの人形』のこととか……いろいろ考えてたら、足が勝手にこっちに進んでいた。

「俺は……何するつもりなんだ」

自分でも、よく分からなかった。カヤを助けたい。それだけははっきりしていた。カヤをだましておいて、こんなこと思うのは矛盾してるかもしれない。でも、放っとけない。なんか分からないけど・・・放っとけない。

「『災いの人形』はあなたに恋をしています」

リストの声が響いた。その瞬間、心臓が大きく鼓動をうった。

「はは……そんなわけ、ないだろ」

くそ、調子が狂う！　なんで、あいつはあんな変なことを言ってきたんだ？

ダメだ。とにかく、一回、部屋に戻って……頭を冷やそう。

俺が、そう思って、くるりと踵を返したときだった。

「和幸？」

「え！？」

目の前に、アンリがいた。

預言者の苦悩（前書き）

多少、残酷な表現があるやもしれません。
苦手な方はとばしてください。
この章をとばしても、内容がわからなくなることはないかと思いますので大丈夫です。

また、この話は完全なるフィクションです。
登場する事件、人物は、実際の場所とは一切関係ありません。

預言者の苦悩

イギリス。エディンバラ。
崖の上に築かれた歴史ある城、エディンバラ城。その門の前で、多くの観光客がわいわいと写真をとりながら見物している。その中で、一人の少女だけは落ち着いた様子で街を見下ろしていた。

「ポリーさま！　みつけた！」

ブロンドの髪を三つ編みに結った十三ほどの歳ごろの少女が、彼女に駆け寄ってきた。
『ポリー』と呼ばれた少女は、三つ編みの少女に振り返る様子すら見せずに、ただ口元に笑みをうかべる。

「何の用？　オリヴィア」
「何の用、じゃありませんよ。占星術の館をしめるってどういうことですかぁ？」

オリヴィアは泣きそうな顔で、その場にぴょんぴょんはねた。

「あなたには悪いことをしたわ。ずっと昔から決めていたんだけど……
あなたがあまりに楽しそうに働いていたから言いづらくて」

ポリーは、せつない表情をうかべてそうつぶやいた。
彼女の名前は、ポリー・エノク・マッコーネル。永遠の秩序を知る者である証、『エノク』の名をもつ少女だ。

一方、オリヴィアは近所の学校に通う高校生。ポリーの占星術の

館でバイトをしている。といっても……一度、ポリーの占いに世話になったことがきっかけで夢中になり、無理やり働いていたようなものだが。
本人は弟子入りしたいつもりなのだが……ポリーの占いにはタネがある。『エノク』、という誰にもマネできない大きな仕掛けだ。何度も、無理だ、と言ってはいるのだが、オリヴィアが聞く耳をもたないので、ポリーはそのまま放っといていた。
喜怒哀楽も激しく、ドジばかりするオリヴィアを見ているのが楽しかった、というのも理由の一つだったが。

自分の感情の起伏が激しすぎて他人のことまで気が回らないオリヴィアだったが……今日のポリーの様子がおかしいことにはさすがに気づいた。
オリヴィアはぽかんとして首をかしげた。
「ずっと昔って……どうかしたんですか？」

「ねえ、オリヴィア」

急に、その小さい体からは予想できないような、低く真剣な声でポリーは言った。

「この世界には、二つの運命がある。なんだか分かる？」
「え？　さあ……考えたこともないです」
「可変の運命と……不変の運命」
「はい？」

オリヴィアは、かしげていた首をさらにかしげた。
「可変の運命はね……そうね。簡単にいっちゃえば、人の力で変えることのできる世界のルール、かな。決して絶対ではない秩序」
「はあ」
「一方で、不変の運命は……どんなことがあろうとも、永遠に変わることのない世界のルール」
そこまで言って、ポリーは振り返った。
「わたしはね、その不変の運命を知っているだけなの」
「……え？」
もちろん、オリヴィアが話を少しも理解できていないことは、ポリーは分かっている。ポリーは、微笑しながら話を続けた。
「永遠に変わらない世界の決まりごとを、ただ知っているだけなの。でも、それだけで……わたしは全てを知ることができる。それが、エノクというものなの」
エディンバラ城に風が吹き付けてきた。ポリーは冷たい風を感じながら目をつぶった。
「わたしには、なんの力もない。知っているだけ。なにもできない。頭でっかちの赤ん坊。自分で立ち上がることさえできない」
「はい？」
「わたしは……運命を受け入れることしかできない」
「……はい？？」

オリヴィアがあまりにも首を傾げるので、このまま首をひねるのではないか、とポリーは心配になった。

「変な話をしたね。気にしないで」

「そういわれましても……」

「あなたは、幸せな一生をおくるわ」

ポリーは、とても穏やかな笑顔でそういった。言われたオリヴィアは、急に言われて目が点になった。しばらくして、やっと文章を理解したのか、目を輝かせた。

「そ、それって……それって、占いですか！？」

「ちがうわ。知っているだけ」

それはなぜか、落胆の声にもきこえた。

「……え？」

「それより！」ポリーは、急に声の調子を変えて手を組んだ。「あなた、今日、弟の誕生日じゃないの！？　いろいろ準備があるでしょ？」

「あ！」

さっきまでうきうきしていたのが嘘のように、オリヴィアは一気に青ざめた。

「そうだったー！」

どうしよう、どうしよう、とその場でじたばたしてから、オリヴィアは駆け出した。

「占いの弟子入りはまだあきらめてませんからー！」と、ポリーに叫び、観光客にぶつかりながらオリヴィアは去っていった。

「……」

その姿を、幼い少女は、まるで娘をみるかのようにいとおしそうに見つめていた。

「すみましたか？」

ふと、隣で街をみおろしていた男がポリーに話しかけた。

「ええ……またせたね」

男は、ポリーの言葉に肩をすくめた。

「な～に。こっちはあと三ヶ月も時間はありますから」

「余裕ね」

ポリーは男をにらみつけた。

「アトラハシス一族の件。神の一族といえど、許されるものじゃない。

タール・ニヌルタ・チェイス」

タールは、それがどうした、というような強気の表情で笑い出した。

「ははは！　それをあなたがいいますか。エノク。

あなたは、全てを知っていながら黙っていた。

アトラハシスを見殺しにしたのはあなたでしょう」
「……なにも言うまい。その通りだ」

エノクであるポリーには、もちろん、アトラハシス一族が皆殺しにされることは分かっていた。
だが、知っていても何ができるわけではない。エノクは、何かをするには知りすぎていた。まるで知識で雁字搦めにされているような気分だ。そうやって、ポリーは罪悪感をつのらせてきた。

「お前は、今から私も殺すのだろう」

言われて、タールは顔をこわばらせた。

「知っていて……現れたのか」

観光客が、二人の前で記念写真を撮り始めた。観光客が立ち去るまでの2分ほどの間、二人は黙っていた。

「それなら」と先に沈黙をやぶったのはタールだった。

「それなら、話は早い。
だが、お前を『裁く』前に答えてもらいたいことがある」
「……」
「『災いの人形』はどこだ?」

やはり、その言葉がくるのか……とポリーは、目をつぶった。落胆のため息がでた。

「お前が言わないとどうなるか……もちろん、知ってるんだろうな」

タールは、ゲームでもしてるかのように嬉しそうに笑った。

「……」

ポリーは、怒りを抑えるかのように深く息を吸ってから、目を開いた。軽蔑するかのような視線でタールをにらみつけて、ゆっくりと話し始める。

「アトラハシスの次はマルドゥクまで皆殺しにするとは……」

それを聞いて、タールは「おや」とわざとらしく声をあげた。

「皆殺しじゃありませんよ。まだ……ね」

試すようにポリーを見下ろして、タールは怪しく微笑んだ。

「わかってるだろうに。皆殺しになるかは……あなたの返答次第だって」

「ニヌルタの王……なぜ、こんな暴挙を！」

ポリーは我慢できずに、怒鳴っていた。

エノクは変わらない運命を知っている。だが、『知っている』ことと『理解』は別だ。全てを知っているといわれるエノクも、全てを理解しているわけではない。いや、だからこそ、全てを知っている彼女はつらかった。

なぜ？　どうして？　彼女がいくらそう叫んだとしても何も変わらない。ただ、ソレは起きてしまう。何が起きるかは知っていても、それを起こす人の感情までは彼女にも理解できないのだ。

「俺は優秀だよ」

苦しそうな表情のポリーとは対照的に、タールは爽やかにさえ見える涼しい表情でつぶやいた。

「優秀？」

「優秀だから、『災いの人形』を手にいれ、『テマエの実』を食わせるさ。

『終焉の詩』も詠わせる。絶対にな。

俺がニヌルタの王になったときに、世界の終焉は決まってたんだ」

「何がいいたい？」

「『ルル』は滅びる。俺のおかげでな。

だから……今、何人、俺が殺そうが結果は変わらない。

それが分かってしまったのさ」

「……」

ポリーの顔から、表情が消えた。

彼女には、見えた。タールの心の奥に潜む、長く複雑な葛藤で出来上がった黒いしこりが。

「そうか……」

「あ？」

「かわいそうに」

「！？」

かわいそう、という言葉をタールは初めてなげかけられた。なぜか、心が荒れた。

タールは、すばやく右手を天に挙げた。すると、なにもなかったはずの空中に、大きな剣があらわれる。タールはその柄をいきおいよく握ると、剣の刃をポリーに向けた。

「いいから、教えろ！　『災いの人形』はどこだ！？」
「……」

周りは、やっと二人のおかしな様子に気づき、ざわつき始めた。観光客の中では、なにかのパフォーマンスか、と写真を撮っているものまでいる。

「『ルル』の命を消し去る『冥府の剣』か……」

微動だにせず、あくまで冷静にポリーは言った。

「たとえ不老不死であろうが、エノクも所詮は『ルル』だ。この剣は効くはずだ」

彼女は、じっと剣を見つめている。もう覚悟は決めていたのだ。ずっとずっと大昔に。

「言え！　『災いの人形』の居場所を！
早く教えねえと……先に、あの小娘を」
「トーキョーだ」
「と……トーキョー？」
「ニホンのトーキョーだ」

ポリーは、タールに優しく微笑みかけた。

「お前は……そこで決着をつけるがいい。
答えを見つけなさい」
「！」

その笑顔は、剣を向けられている人間がする表情ではなかった。タールは、ひどい恐怖感にかられた。なぜかは、彼にも分からない。

だが、気づいたときには、彼女に剣を突き刺していた。

鼓動が早い。こんなことは彼にとって初めてだった。タールはうなだれているポリーを見つめた。感情的になって剣を振り下ろしたのは初めてだった。その瞬間は覚えていない。きっと、周りで悲鳴をあげた観光客のほうがしっかりと目にやきつけただろう。

観光客はしばらく静まり返り、それから誰からともなく、また悲鳴をあげはじめた。「子供が殺された！」「剣で刺した！」と、次々と走って逃げていく。中には、その場から動けないものもいる。

タールは、柄から手をゆっくりと離した。手がじんわりと湿っている。

手を離した瞬間、剣は跡形もなく消え、ポリーはその場に倒れた。

観光客は、剣が消えたことに、さっきと違ったざわめきを起こした。

「……答えだと？」

タールは眉間にしわをよせ、舌打ちをした。気を落ち着かせるために、タバコを出し、口にくわえる。ライターをとろうとポケットに手を入れたが、見つからない。

「くそ！」と怒鳴ると、タールは観光客のほうへ顔を向けた。観光客は、おびえた表情で後ずさった。

一瞬でも、ライターを誰かから借りようなんて思った自分をタールは恥じた。

＊　＊　＊

しばらくして、その場に警備員が駆けつけた。そのときには、タールはとっくに姿をけし、ポリーの周りを野次馬が囲んでいた。

「マジックだったのか？」などという不謹慎とも思える言葉が、野次馬から聞こえてきた。

「ちょっとどいて」と、警備員は野次馬をどけ、ポリーの遺体を見つける。すると、警備員は首をかしげた。「でまかせか？」と。

ポリーの遺体には傷一つなかった。血もでていない。そして剣で貫かれた腹部にも、変わった様子は見られない。ただ、ポリーが眠っているように横たわっているだけだった。

剣は目の前で消え、そして傷もない。

この奇妙な事件の噂は、一気に街中に広まることとなる。

疑心

タールは、近くの駐車場に止めていた車に乗り込んだ。車の後部座席の扉にはへこみがある。
運転席に座ると、アタッシュケースからライターを取り出した。ゆっくりとタバコをくわえ、火をつけ、一服する。

「お嬢様はおとなしかったか、レッキ？」

煙を出しながらそうたずねると、助手席に座っていたレッキは「うん」と後部座席を振り返った。
そこには、青ざめた顔で座っているナンシェがいた。髪は乱れ、顔や体にはあちこちあざがある。

「待たせて悪かったな。目的地が決まったよ」
「……エノク様は」

ナンシェは震えながら、消え入りそうな声でそういった。それが今、彼女がだせる精一杯の声量だった。

「あぁ、エノクね。かわいらしい人だったよ」
「……」
「冥府にお送りした」
「！！」

＊　＊　＊

なんてことを……
わたしは、頭が真っ白になった。これでも、神の一族だというの？

タール・ニヌルタ・チェイス。『ルル』を嫌う神、『エンリル』の子孫。わたしたち、マルドゥク家と対立する一族の王。
彼は、アトラハシス一族を皆殺しにして……そして、わたしの親戚も皆、殺した。
わたしも、殺されると思った。でも、命がおしければ黙って言うことを聞け、と脅されて……こんなところまでつれてこられた。
逃げなきゃいけない。それは分かってる。でも……怖い。ここに来るまでの間、さんざん恐怖をうえつけられた。今では、逃げようと思うだけで、足がすくんでしまう。

それに……。わたしは、助手席にすわっている少年を見つめた。姿はケット様によく似ている。違うのは髪と目の色だけ。あとは双子のようにそっくりだ。つい、見た目に惑わされて、助けを求めてしまいそうになる。でも……彼はわたしの味方じゃない。
彼こそ、『エンリル』のエミサリエス。名前は、レッキというらしい。

ニヌルタは、彼にいつもわたしの監視をさせてる。さっきだって、エノクと会いに行く、と言って、わたしをレッキに任せて車から降りていった。
何度か、逃げようかと思った。逃げなきゃいけない、て。でも、そのたびに
――やめて。
レッキはわたしに言った。その言葉は、脅すわけでもなく、無関心でもなく……寂しそうだった。
「ナンシェお嬢様よ」
「！」

タバコを一本すい終わったころに、タールは言った。皮肉まじりの言い方で。

「なんて顔してるんだ？」

「え……」

「顔色が悪い。どうかしたか？」

「……！」

分かってるに決まっている！　なのに、わざわざ聞いてくるというの？

わたしは、あざだらけの両手をぎゅっとあわせた。

わたしはマルドゥクの女。恐怖になど負けてはいけない。強くなくてはならない！　すうっと息を吸った。

「エノクは……偉大なる預言者。永遠の秩序を知るお方。そんなお方を、あなたはよく……！！」

「はははははは！！」

ニヌルタは、大声で笑って、ハンドルをたたいた。

「それを君が言うか」

「……」

「エノクの居場所を教えてくれたのは君だろ」

ぐっと喉がしまったように息がつまった。

どうして、この人は……

「君は、自分の命惜しさに、エノクの居所を話した。

なんて偽善者だ」

「……っ」

どうして、この人は……人の罪をほりだすの？

ずっとためていたかのように、涙が次々にこぼれだした。

つらいのは……それが、本当だからだ。

わたしは、エノク様の居場所を彼に話してしまった。小さい頃、リチャードおじいさまに、『困ったときはここをたずねなさい』と、エノク様の居場所を教えてもらっていた。でもまさか……こんなことになってしまうなんて。

エノク様を殺したのは……わたしだ。

「リチャード・マルドゥクがエノクを探し出した、という噂は聞いていたからな。マルドゥクを根絶やしにするついでに、聞き出そうと思ったんだ。一族の誰かは知ってるはずだと思ったからな」

ニヌルタは車の鍵をポケットから出し、エンジンをかけ始めた。

「そしたら、ある女が言ったんだよ」

なにを……話し出すつもりなの？

「ナンシェという娘が知ってるはずだ、と」

え……

心臓が、どくん、と鼓動をうった。それは、ありえない。リチャードおじいさまは、誰にも内緒だ、て言ってた。一族にも内緒だ、て。わたしがエノク様の居所を知っていることは……誰も知らないはず。

「その女はな、ナンシェが知ってるはずだ。リチャードの一番のお

気に入りはあの子だから、と。命乞い代わりに言ってきたよ」
「！」
「なんだ、その理由は？　と思ったが……本当だったなぁ！」
お気に入り……？　そんなこと、初めて聞いた。それは、とてもかわいがられたけど……。ほかの皆に、そんな風に思われてたなんて……
「お前、一族の中で、相当評判悪かったみたいだな」
「え……」
ニヌルタは、たたみかけるようにそう続けて、また大笑いをした。気分よさそうに鼻歌を歌いながら、アクセルを踏んだ。車が動き始める。
わたしは、呆然としてしまった。
一族の中で、争いごとが絶えなかったのは知ってる。でも、わたしは剣の継承者じゃなかったし……反感を買うようなことなんて、したことない。と、思ってた……
わたしはもしかして……一族のこと、なにも知らなかったんじゃないんだろうか。リチャードおじいさまのお気に入りだから、ちやほやされてただけ？
もう皆、いない。確かめることなんてできない。でも、もしそうだったとしたら……わたしは――――。
「……あ」
ふと、リストちゃんの顔が脳裏をよぎった。そうだ。リストちゃんは？
リストちゃんも、もしかして……わたしがリチャードおじいさま

のお気に入りだから、わたしに優しくしてくれてただけ？　それとも、リチャードおじいさまに言われたの？
嫌だ。考えたくもない。
わたしはぎゅっと体を丸めた。
怖い。リストちゃんと会うのも怖い。確かめる勇気も、わたしにはないよ。

「……」

涙が、頬の傷にしみた。

「泣くのは、まだ早いぜ」
「え」

ニヌルタは、軽い口調で言った。
今度は……何を言い出すつもり？

「お前は、俺の切り札だ」

ニヌルタの冷酷な表情が、バックミラーにうつっていた。
背中に寒気が走った。この人、まだ何かをしでかすつもりだ。

「まだ……まだ、わたしに何かさせるつもりですか！？」
「そのために生かしてるやってるんだろ。頭悪いの？」

ニヌルタは冷たく言った。

カヤの家出？

「家出！？」

俺は、思わず叫んだ。

「そう。さっき、電話かかってきてさ。
家出を手伝ってくれ、て言うの」

アンリは、腕を組みながら、難しい顔でうなずいた。
こんな話を、本人の自宅の前でするもんじゃないんだろうが……
と、俺はカヤの自宅を見上げた。

「家出って……」
「これからこっそり家を抜け出したいらしいの。で、わたしにも手伝ってほしい、て」

こっそり抜け出す……て、おい。
カインノイエでさえ、この屋敷に潜入することに慎重になっているんだ。だからこそ、オレがカヤをだますようなことまでして情報収集してる。それを……アンリが手伝ったところで、成功するのか？
俺はアンリに振り返った。じっくり見てみるが……やはり、こいつにどうにかできるとは思えない。こいつの元気だけは一目置いているが、ただのお調子者だ。
どうしたものか。

「ま、そういうことだからさ。じゃ！」と言って、アンリは俺の心配も知らずに、さっさと門へ歩いていく。

「え、おい！？」
あわててアンリの腕をつかんだ。
「そういうこと、じゃねえよ。どうするつもりだ？」
「どうするもこうするも……」
アンリは、これっぽっちも躊躇することなく、インターホンを押した。
「なっ！！」
分かってる。アンリはただの女子高生なんだ。『カイン』のものさしで図ってはいけない、と。
だが、それにしても……軽率すぎるだろ！！
「なにしてんだよ！？」
「あんたのほうこそ、なにパニくってるわけ？　いつの時代の頑固親父よ？　家出、ていっても、どうせ本気じゃないんだからさ」
「え」
「年頃の女の子なのよ？　親ともめるのも当たり前。とりあえず、話を聞いてあげるようと思って来ただけよ」
「……」
俺は、アンリの腕から手を離した。
あれ……こいつ、こんなに大人だったか？　ギャーギャー騒いでいるアンリの姿しか俺の頭にはなかった。アンリには、こんなところがあったのか……と妙な気持ちになった。
「なによ？　じろじろみて」

気がつくと、アンリは、気味悪そうに俺を見ていた。
「え？　いや……」
「どちら様です？」
インターホンから、女性の声が聞こえた。カヤではない。メイドか……母親か？
「あ、カヤちゃんの友達でーす！」
アンリは、元気よく答えた。こいつ……緊張感なさすぎだ。
いや、まてよ。
そっか。当たり前だよな。俺は、気づいた。
アンリにとっては、カヤはただの友達なんだ。ここは、友達の家でしかない。初めて友人の家に招かれた、程度のことなんだ。
アンリは、カヤの親が人身売買にかかわってるかもしれないことも……カヤが『災いの人形』であることも……なにも知らないんだよな。
なんだろう。うらやましく思えた。
俺は全部知ってしまった。もしかして、知らなくてよかったことも知ってしまったのかもしれない。
「あ、カヤっち！　出てきた」
「！」
アンリが、おーい、と手をふった。
なぜか、俺の心臓がいつも以上に騒ぎ出していた。
「和幸、なにうつむいてるの？　カヤっちだよ」

足音が聞こえてきた。サンダルだ。こっちに近づいてくる。
やべえ。顔、あげられねえ。なにしてんだ、俺？　これじゃ、変に思われる。
ダメだ。どんな顔でカヤに会えばいいのか……

「アンリちゃん、呼び出してごめんね」
「いいよ～ん」

カヤがすぐ目の前にいる。

「和幸くん？」
「……！」

カヤの、柔らかい声が聞こえた。

「よ、よお」

俺は、頭をかきながら、ゆっくりと顔をあげた。なにかいじってないと、落ち着かない。
カヤは、キャミソールにジャージの長ズボン姿。きょとんとして、俺を見つめている。これが……部屋着ってやつなのか？　なんだかよくわからないが、恥ずかしくなって、俺は結局、目をそらしてしまった。

「二人で……何かしてたの？」

カヤは、遠慮がちにそうたずねてきた。

「ごめん、アンリちゃん。もしかして、私、何か邪魔しちゃったん

じゃ……」
「ぜーんぜん！　そこで偶然、会っただけよ」
邪魔って……どういうことだ？
アンリは「どうぞ」と言われるのも待たずに、門を開けて入っていく。ずうずうしいというか、度胸あるというか……
「あ……そうだったんだ」
カヤは安堵したようにため息まじりにそういった。
一方の俺は……
「じゃ、じゃあ……俺、帰るから」
何か予定があるわけでもないのに、焦っていた。だしたこともないような声でそう言って、ぎこちなく後ろにさがった。
「また、明日な！」
おおげさなまでに高く挙げて手を振ると、俺は逃げ出すように背を向けた。
「待って！」
「……」
今にも、走り出そうか、と言うその瞬間、カヤの声が響いた。
あまりにも、せっぱつまった声だった。ゆっくりと振り返ると、カヤは今にも泣きそうな表情で立っている。
「和幸くんにも……いてほしい」

「……！」
「助けて、くれないかな？」
そのとき、はっきりと……これは年頃とは関係のないことだ、と確信した。

私、恋してる

「カヤ！？」

お母さんは手を腰に当てて怒鳴った。

「こんな時間になんなの？」

あやしまれるのは覚悟の上だった。

「劇の練習」

もう、うまい言い訳をする気すら起きない。それでも、今怪しまれたら……あの電話の男に連絡されてしまうかもしれない。

だから、演じなきゃ。そう、劇の練習。

私は、自分に言い聞かせた。我ながら、子供じみた発想だ。でもそうでもしなきゃ、私は今にも母に問い詰めてしまう。「契約ってなに？　お金って何？　電話の男は誰？」と。

「劇の練習って……こんな時間にしなきゃいけないことなの？」

「近江さんが急に思いついたことがあって、すぐにでも話し合いたい、て」

「男の子まで部屋にいれるなんて……」

「藤本くんは、主役なの」

本当は、小道具係。

「明日、学校でしょう？」

「……」

いつものお母さんだ。急に、苦しくなった。どういうことなの？
一体、何がどうなってるの？
ダメ。涙がでてきそう。

「大丈夫。ちょっと話すだけだから」
「え？　あ、カヤ！？」

たまらなくなって、私は逃げるようにリビングを去った。怪しまれたかもしれない。でも……大丈夫よね。まさか、私が電話に盗聴器しかけたなんて、夢にもおもわないはず。

それに、二階には、アンリちゃんと……和幸くんもいる。
そう。和幸くんもいる。
私は階段を上っていた足を止めた。いつのまにか、自分が微笑んでいることに気づいた。

「……」

こんなときに……なに、喜んでるんだろ。自分が情けなくなった。でも、嬉しい。和幸くんがいてくれるなら大丈夫、て不思議と安心するの。
アンリちゃんが和幸くんと現れたときは、なんだか悲しかったけど……偶然会った、て聞いて安心した。

「あはは……」

自然と妙な笑いがこみあげてきた。私は両手で顔をおおった。
こんなときに、思わぬことに気づいてしまった。

「私……恋してる」

相手は、劇の小道具係だ。

カヤの相談

カヤの部屋は二階にあった。
玄関にはいってすぐに、カヤの母親から質問攻めにあってしまった。こんな時間になんなんだ、と。カヤはそれを無視して、俺とアンリをさっさと部屋に案内し、また下へ降りていった。

「あんま、いい関係じゃないのかな」

アンリはそうつぶやいてベッドに寝転がった。
人のベッドによく勝手にのぼれるな。と思ったが、相手はアンリだ。そう考えれば、納得だ。

「関係？」
「お母さんと、よ。気づかなかったわけ？」

母親……？　気づくって……何の話だ？　さっきのやり取りか？
正直、俺にはわからない。父親代わりの藤本さんは居たが、母親代わりはいなかった。母親がどういうものかなんて、ドラマのイメージしかない。

「ほんっと、鈍感よね」

アンリは呆れたようにため息をついた。

「鈍感って……人の家庭に詮索する気はないしな」
「やーれやれ」
「？　なんだよ？」
「分かってないわね、あんたは」

「分かってないって……」
「なんでもない」
アンリは、そのまま黙ってしまった。その表情は、悪巧みをしているときの顔だ。
「……」
あやしい。何を隠してるんだ？
「ごめんね、待たせちゃって」
ガチャっと扉が開き、カヤが戻ってきた。
「ベッド、気持ちよすぎて寝そうだった」
アンリは、そういいながら、ベッドから降りた。
「それで？　何があったの？　親子喧嘩？」
俺は相変わらず、カヤと目を合わせずにいた。『災いの人形』の話が……カヤを見るたびに頭にめぐってくる。今は、そのときじゃない。俺だって、さっき聞いたばかりで、まだ整理がついていないんだ。こんな状態で、当の本人に会え、ていうほうが無理なはなしなんだよ。
ええい。とにかく、『災いの人形』どーたらこーたらは、リストの管轄。今は、カヤの悩みを聞いてやるのが先だ。
え？

悩みを聞く？　俺、何様なんだ？　だましてカヤに近づいてるんだよな。友達気取りか？

それに……よく考えたら、俺は今、カヤの屋敷にはいっている。これって、任務完了だよな。トイレを借りるふりして、屋敷内をさぐって……あわよくば、人身売買の証拠を見つけ出せば、『おつかい』完了だ。そうなったら、どうなる？　俺はカヤに近づく必要はなくなる。カヤとは無関係になるのか？　『災いの人形』のことも、他人事になるんだよな。俺は巻き込まれただけなんだから。それでいいんだよな。オレは、カヤを騙しているんだよな。

なんなんだ、このはっきりしない感じは？

「助けて」というカヤの声が頭に響いた。

カヤは、俺を頼ってる。藤本さん以外の誰かに頼りにされている。それは、初めての感覚で、とても嬉しい気分だった。

＊　＊　＊

カヤの部屋の真ん中には、小さな白いテーブルがあった。自然と、三人はそれを囲むように座っていた。

「私ね……」

カヤは、緊張していた。今から自分が話すことにおびえていた。今まで、人と深い関係を築いたことのないカヤにとって、相談をする機会もほとんどなかった。人を何かに巻き込むようなこともしたことがない。

それを、今、初めてしようとしていた。

ほとんど無理やり自分を皆の輪に引き込んだ、隣のクラスの生徒・近江アンリ。

そして、今まで会ったことのないタイプの男子生徒・藤本和幸に。

「私ね、売られそうなの」

「……」

突然の告白に、部屋は静まりかえった。

「え？」

アンリは間抜けな声をだした。

「売られるって……何の話だよ？」

和幸も続いた。何か大事な話をされることは予想できていたが、まさかそんな言葉がでるとは予想していなかった。

「母と父が……変な男と話しているの聞いちゃったの」

カヤは言いながら、勉強机の上のラジオを指差した。

「盗聴した電話で……」

「え！？」

和幸はまさか……と思った。そういえば、今朝、電話を盗聴したら、とアドバイスしたっけ、と思い出した。

「まさか、実行したのか？」

カヤは恥ずかしそうにうなずいた。

「それで？」とアンリは、盗聴というキーワードに興味すら見せずに話を促した。

「うん……男がね、あの子を渡せ、て。事情が変わったから今日迎えに行くって」

「迎えに？」

「そう。変な雰囲気だったの。引き渡す、とか……なんとか」

「ねぇ」

アンリは、手を挙げて和幸たちの注目をひいた。和幸は、つい「はい、近江さん」と指名しそうになった。

「カヤっちって養子なんだよね？　見るからに……」

「……うん」

「じゃあ……それ、普通じゃない？」

「は？」

どこが普通だ！？　と和幸は目を丸くした。いくら、アンリでも、そこまで非常識なのは問題だ、と怒鳴ろうかとさえ思った。

だが、アンリは、まじめな表情で続ける。

「本当の親がかえしてくれ、て言ってるんじゃないの？」

「あ……なるほど」と和幸もうなずいた。それは、一つの可能性だ。

だが……和幸は、ひとつ間をおいて、ハっとした。大きな疑問がうかんだのだ。

カヤに実の親は存在するのか？

リストの話だと『災いの人形』は『アプスの粘土』から創られる。つまり、カヤは人間ではなく、土人形なのだ。土人形に親などいるのだろうか？

和幸は一人で考え込み始めていた。
そんな彼をよそに、カヤとアンリは『実の親』説で話を進める。
「でも……両親は、必死にお金を要求してた」
「そうでしょうよ。だって、今までの養育費もあるじゃない。
それを無視して、すぐ返せ、なんてむしがよすぎるもの」
「……」

アンリのいうことは一理ある。だが、カヤは、どうも納得できずにいた。
電話での両親の態度があまりにも不自然だったからだ。母も父も、いつもの優しい両親ではなかった。それに……と、カヤはおそるおそる口を開く。

「『わたしのような人間』てどういうことなのかな」
「え？」

アンリと和幸は声をそろえていった。

「父が言ったの。
警察は汚職の巣窟だけど……『わたしのような人間』にとっては、強力な味方なんだ、て」
「！！」

その言葉に、一番、反応したのは和幸だ。
『わたしのような人間』。和幸には、それがどういう人間のことか、安易に予想がついた。それは、カインである和幸と最も関わりのある連中だ。
カインノイエの読みはあっていた。この瞬間、和幸は確信した。
やはり、神崎は人身売買にかかわっている。警察が味方だ、という

からには、それほどの力をもっている。神崎は、このあたりの人身売買を牛耳っている黒幕に違いない。和幸は、ぎゅっと拳をにぎりしめた。心の中で、興奮と憎悪がうずまいた。

しかし……と、和幸はカヤを見つめた。

彼女は、一体どういう星の下に生まれてきたのだろうか。和幸は、胸が苦しくなるほどせつなくなった。カヤは、人類を裁く『災いの人形』。そして、その育ての父は人身売買を斡旋している悪魔のような男。

だが、和幸は分かっていた。自分に、それを同情する権利はないことを。カヤを騙している『友人A』は、他でもない……自分なのだから。

「よく、わかんないけど……カヤっちのお父さん、お金持ちだからじゃない？」

もちろん、そんなことアンリが想像つくはずもない。アンリはカヤの広い部屋を見回して言った。

「そう、なのかな」

カヤはうつむいた。到底、納得できるはずはない。彼女は疑心暗鬼になっていた。全ては、二ヶ月前から始まっていたような気がした。『ストーカーということにしている』と電話で誰かに怒鳴っていた母の姿を見たあの朝から。あのとき、問い詰めるべきだったのかもしれない。もっと早く、あの電話の真相を直接聞き出すべきだったのかもしれない。いや……聞かなくて正解だったのかもしれない。聞いていたら、何をされていたか分からない。カヤには、もう何を信じればいいのか分からなくなっていた。

「とにかくさ……その電話って、今さっきの話でしょ。

今すぐ家出するのはどうなのかな」

アンリは、カヤの顔をのぞきこみながら優しく言った。

「今日は寝て、冷静になって、明日また学校で話し合おうさ」

そうだそうだ、それが一番だ、とアンリははしゃいでみせた。

「そうかもな」と、和幸も遠慮がちに続いた。「一度、冷静になったほうがいいかもしれない」

それは、カヤではなく、自分へ向けた言葉だった。もう、この家を探る必要もなくなっていた。さっきのカヤの証言で、神崎が人身売買を斡旋している、という確信はもてたからだ。あとはこれをカインノイエに行って藤本に報告すればいい。

しかし……和幸には気になることがあった。もし、神崎が人身売買にかかわっていて、カヤを誰かに金と引き換えに渡そうとしているなら……カヤの『売られる』という表現は適切だろう。問題は、誰に、そして、何のために、だ。

リストは、和幸の『おつかい』が『災いの人形』にかかわるものなのか気にしていた。ということは……神崎が、カヤを『災いの人形』と知って売ろうとしている可能性も考えたほうがいいのだろう。それに、『災いの人形』といえど、実の親、というものがいるのかもしれない。

とりあえず、明日、リストに聞いてからだ、と和幸は自分を落ち着かせた。

「うん、そうだね」

カヤはうつむいたまま言った。その表情は、まだ納得していなか

った。

もし

それは、帰り際だった。
カヤは俺たちを門まで見送りに来た。ここに来るまで、「来てくれてありがとう」と何度か笑顔で言っていたが……無理しているのは明らかだった。

「そうだ、そうだ」と、アンリは門の前で、急にカバンから台本を取り出した。

「これ。カヤっちのクラスの浜田に渡してくれない？」
「え？　浜田くん？」
「興味あるから、台本みせてくれ、て言ってきたからさ」
「まだ人員いるのか？　もう充分だろ」

俺は呆れて言った。そんなに大掛かりなものでもないだろうに。

「いいのよ。大規模であればあるほどいいの。
だって……目立つじゃない！」

冗談だろ。こちとら、目立たず、ひっそりと終わらしたいのに……

「浜田くんね。わかった」

カヤはまた無理した笑顔をみせて、台本を受け取った。

「……」

冷静になって明日考えよう、と俺たちはおさめた。だが……カヤ

は元気がないままだ。
まあ、そりゃそうだよな。両親が自分を売ろうとしているかもしれないなんて……たとえ、実の両親じゃなくてもずっと育ててくれたわけだし、ショックだよな。

「ねえ……アンリちゃん」

ふと、カヤは台本を見つめながら、か細い声で言った。

「なに？」と、アンリは軽いノリで返事をする。

なんだ、台本のダメだしか？　と、冗談でも言おうかと思ったが……どうも雰囲気が重過ぎて、そんな勇気はでなかった。
カヤは目を細めて、愛おしそうに台本を見つめていた。さっきの表情とは全然違う。

「もし」と、カヤは静かにつぶやいた。
「え？」
「もし、私が売られても……
カインが迎えに来てくれるんだよね？」
「！」

カヤは台本をぎゅっと抱きしめて、アンリを見つめていた。とても悲しそうな笑顔を浮かべて……。

アンリの告白

カヤの家を後にし、俺とアンリは一緒に歩いていた。アンリの家はカヤの家をはさんで、俺のマンションと反対側だ。だが、もう十二時も近い。アンリは、必要ない、と拒んだが、俺はアンリを送ることにした。

だが……アンリはずっと黙っていた。いつも、頼まずともべらべら話し、『沈黙という言葉は私の辞書にはない』なんて叫びそうなものなのだが……

「どうしたんだ？」

たまらず、俺は尋ねた。アンリと沈黙？　気持ち悪くて仕方がない。

「……」

アンリはなにも返事をしない。

実際、見当はついているんだ。さっきのカヤの言葉だろう。

「いやあ、にしても・・・」と、俺はぎこちなく言った。「まさか、カヤがあんなにお前の台本に影響されてるとはな！　いや、よかったじゃねぇか。俺も、一度、じっくり読み直そうかな」

「……」

返事がない。

まいったな。どうすりゃいいのか分からない。

「会いたくなったの」

「……え？」

それまで、黙って前を歩いていたアンリが振り返った。
そのアンリの表情は、今まで見せたことがないほど女らしくて俺は戸惑った。

「白馬の王子様」
「白馬の王子？　なんの話だよ？」

丁度、橋にさしかかったところだった。
アンリは、橋の手すりに歩み寄り、よりかかった。

「あの劇ね……実話なのよ」
「……」
「あれ？　驚かないの？　本当よ！？」
「あ」

いかん。うっかりしてた。
俺は思い出したかのように「ええ！？」と付け足した。
あの劇の台本を読んだとき、それは感づいていたんだ。高校に入ってから、こいつとかかわるようになって……アンリの『カイン』への興味は異常だったしな。
だが、そんなことアンリは知るはずがない。そもそも、俺がそのカインだと知ったら……発狂でもしかねない。

「もちろん、年齢は変えてるけどね。
本当は、あれはわたしが四歳のときだった」

アンリは俺に背をむけ、川を見つめながら話し始めた。

「三歳のときにさらわれて、売られたの。
子供を亡くしたという金持ちにね。
なにか……特殊な催眠術で記憶を変えられてたんだって。
だから、自分がさらわれたことさえ分かってなかった」

一般的なやり口だな。俺は心の中で相槌をうった。

「それから一年間、偽者の親に育てられてたの。
ひどい親だったよ。
助けられてから聞いたわ。その人たち、前の子供は自分たちが虐待で殺したんだって。
それでいて、また子供がほしいなんて……とんでもないことよね」

口調も雰囲気も、いつものアンリではなかった。十年以上も前でも、その怒りはおさまることはないんだろう。

「もしかしたら、私も死んでたかもしれない。
あのまま、あいつらに育てられていたら……きっと、いつか死んでた。
そこにね、カインが現れたの！」

アンリは振り返った。その表情は、晴れやかだ。

「『君を迎えに来た』って言って、私の催眠をといてくれたの。
こんなふうに……」

そう言って、俺に歩み寄り、俺の目の前で中指をパチン！と鳴らした。

「それから……カインのお兄ちゃんは私を本当の親の元へ返してく

れた。
あの人は、私の白馬の王子様なのよ」
冬が近づいている。俺とアンリに、冷たい風が吹き付けてきた。
アンリは、髪を手でおさえた。
「ずっと願ってるの。あのカインのお兄ちゃんに会えますように、て」
「……会って、どうするんだよ？」
俺の質問に、アンリは大きなため息をついた。
「本当に、鈍感な奴」
「え？」
「いいわよ。あんたにそういう繊細さは求めてないんだから」
「どういう意味だよ？」
「会えるだけでもいいの、ていう乙女な気持ちは分からないわけ？」
「……」
俺は、苦笑いをうかべた。よく、分からない。
「カヤっちに同情するわ」
「え、カヤ？」
「なんでもないわよ」
カヤがなんだって？　あまり聞こえなかった。
アンリは、気を取り直すように「とにかく！」と強い口調で切り出した。
「カヤっちにもこの話、したのよ」

「え？　なんで？」
「劇にどうしてもでてほしかったから、打ち明けたの。
この劇を大成功させたいんだって。
カインのお兄ちゃんが……どこかで噂を聞くくらいに」
アンリは顔を赤らめた。
「！」
俺は、ハッとした。これまでのアンリの不可解な行動の理由が分かった気がした。
そうか。いつもカインの劇や映画やらをつくっていたのは……どこかにいる、そのカインに気づいてもらうためだったのか。
「それで、お前……必死にこの劇を大規模に……」
「そうよ。カインを題材にした劇なんて、絶対に話題になる！
というより……問題になる。悪い意味で、ね。
でも……必ず、カインのお兄ちゃんの耳にも届くわ。
だから……」
「そうか」
「分かってるわ。そんなことしても、会えるわけない、て思ってるでしょ。
いいのよ。どうせ、気休めよ」
あいかわらず、顔をあからめてアンリは強がった。こういうかわいらしいとこもあるんじゃんか。もっと、学校でもそんな顔してれば、モテるだろうにな。
「気休めじゃないさ」
「え？」

「ちゃんとそのカインにも伝わるよ」
「……」
俺から、そんなことを言われるとは思ってなかったのだろう。アンリは目を丸くしてぽかんとしていた。
「で……」と、俺は声の調子を変えていった。「カヤが、あんなこと言ったもんだから……いろいろ思い出したわけか？」
「……そんなとこよ」
アンリは、口をとがらせてつぶやいた。単に強がりなのか、『鈍感、鈍感』とバカにしている俺に言い当てられて悔しいのか……アンリは、おもしろくなさそうな表情を浮かべた。
「もう……なんで、あんたにこんな話したんだろ」
そうはき捨てて、アンリはくるっと背を向け、また歩き出した。

＊　＊　＊

「なあ、アンリ……お前、幸せか？」
突然、和幸は、アンリの背中に問いかけた。
たった一言の質問なのに、和幸は妙に緊張していた。アンリにこんなこと聞くのが照れくさいのもあったのかもしれない。でも、それよりも……答えを聞くのがこわかった。
和幸は、ずっとこの質問をしたかった。特別アンリに、というわけではない。自分が助けた子供たち――カインに助けられた子供たちに聞きたかった。

知りたかったのだ。自分がしてきたことが、意味のあることなのか。
助けたとしても、子供たちにはつらい未来がまっているだろう。過去と向き合わなければならない。理不尽な社会で生きていかなければならない。
子供たちは、それでも、幸せでいてくれてるのだろうか。和幸には、それがずっと心配だった。

「……」

アンリは立ち止まり、すうっと息を吸った。

「もちろんよ！」と大きな声で答えると、和幸に振り返る。

「だって、私がちゃんと幸せにならなきゃ……
助けてくれたカインのお兄ちゃんにあわせる顔がないじゃない」
「！」

なぜか、和幸の胸がチクっと痛んだ。間違いを正されたような感じだった。
アンリは、優しい表情を浮かべて続ける。

「せっかく助けてもらった命だもの。
せいいっぱい幸せにならなきゃ恩返しにならないよ」
「……恩返し」
「あ、今のセリフよくない？　台本にいれようかな」

そんな冗談を言うと、アンリはまた背を向け、歩き出した。
和幸は、しばらく立ち尽くした。

「幸せが、恩返し……」

ふと、藤本の顔が脳裏によぎった。

それは、『君たちは、ここでちゃんと幸せに暮らしているのだろうか』と和幸に尋ねた、夕べの藤本の顔だった。

墓場の誓い

時計は十二時をまわっていた。和幸は、こんな時間にもっともそぐわない場所に来ていた。

そこは、トーキョーの都心のはずれ。時代においていかれた廃墟がたちならぶ一角。そこには、藤本が買った土地がある。若くして命をおとした彼の子供たちが眠る場所だ。

「広幸さん」

和幸は、ある墓の前でつぶやいた。

「こんな時間にきてすみません。命日でもないのに……」

不自然に微笑み、その場に座り込んだ。湿った土の冷たさが尻に伝わってくる。このトーキョーで土の上に座れるのは、墓地くらいだろう。和幸は思った。

「広幸さんに……話したいことがあって」

＊　＊　＊

いくつのころだったか。よく覚えてない。多分、五歳くらい。実際、本当の誕生日も分からない。

俺は、自分で誕生日を決めた。その日は、俺が……人間になった日。広幸さんに助けられた日だ。

物心ついたときから、周りには気味の悪い器具や医者がいた。俺は、カインの中でも特殊だった。商業用に『創られた』子供だ。つまり、売ることを最初から目的にされてた。

普通は違う。誰かが、誰かの代わりに『創る』んだ。たとえば、失った子供とか恋人とか……もう一度、愛するために『創る』んだ。もしくは、自分。かりそめの永遠の命を手に入れるために、自分を『創る』。

でも、俺は違う。実験台……奴隷……愛玩具。そんなものを必要とする連中に売るために『創られた』。こういうとき、クローンってのは便利だ。誰も探したりしないから。

俺たちは、生まれたときから独りだ。何をされても、たとえ死んでも、誰も気にしない。誰も困らない。法律だって、俺たちに適応されるか分かったもんじゃない。だって……法は、俺たちが生まれるのを禁止しているんだ。いないことになっているモノを、法律が守ってくれるとは思えない。

俺も『創られた』んだから、誰かしらのコピーなんだろう。オリジナルは、どこかにいる。死んでるかもしれないけど……。ただ、そいつが俺のことを知っているのかは分からない。商業用に『創られた』子供のDNAは、大体盗まれたものだと聞いた。どこかから入手したDNAで本人の了解も得ずに勝手に『創る』そうだ。

ただ、商業用に『創られる』と、一つだけ得をする。特殊能力だ。俺の場合、体が異常に丈夫に『創られた』。人間本来の能力を半分以下に抑える、脳の『リミッター』ってのも、はずれてるらしく……いつでも『火事場のバカ力』がつかえる。要は、怪力ってことだ。これも、一種の遺伝子操作の実験らしい。売る前に、あいつらは『創った』子供たちを改造する。失敗作は安く売り、成功した子供は高く売る。人体実験のリスクってのは、あいつらにとってはその程度の問題なんだ。

俺は、あの日……まさに売られるところだった。光栄なことに、成功作として高値で売られるはずだった。骨董品やアンティークが競られるオークションで、最後の目玉商品として出品された。

状況を把握してはいなかった。俺は外の世界を知らなかったから。知っているのは、『創られた』子供としての人生だけ。毎日、実験

を受け、訓練を受け、体を掃除される。それが普通だと思ってた。
でも、あの日、外の世界からある人が侵入してきたんだ。

『よお、坊主。外にでよう』

と、その人は言った。どこからか投げ込まれた煙幕であたりは白く、夢の世界のようだった。

『くそ！　カインか！』と、ディーラーがむせながら叫ぶのが聞こえた。

会場は、パニック状態だった。煙の中、ステージの上で、その人は俺の前で膝をついた。

『俺は広幸。君を迎えに来たんだ』

広幸さんはそう言って、俺に手を差し伸べた。
わざわざオークションの最中に俺をさらう必要もなかったはずだが……広幸さんは派手なことが好きな人だった。それを考えると、あの派手な救出劇もうなずける。

「広幸さん……俺は、迷ってる。どう生きればいいのか……分からなくなってきた」

俺は、土をにぎりしめた。ひんやりと冷たい。

「藤本さんが言ったんだ。俺は、『おつかい』を断っていいんだ、て。そんな選択肢、考えたことがなかった。俺にとって、藤本さんは指針だったんだ。藤本さんに従ってさえいればいいって思ってた」

俺は、広幸さんの墓を見つめた。

「それが……楽だったからだ」

なんのために生きればいいのか。

ずっと、考えてきた。――いや、それは嘘かな。

考えても分からなくて、いつのまにか考えるのをやめていた。そして……藤本さんに全て責任を押し付けていたんだ。藤本さんの『おつかい』さえこなしていれば、俺は存在を許される気がしていたから。

使命がない命は罪なのだ、と……思ってた。だから怖かった。

俺の命に意味がほしかった。

「カインとして生きること。『おつかい』を忠実にこなすこと。俺にできるのはそれだけだと思ってた。

でも……分からなくなってきた」

藤本さんは言った。幸せか？　と。

カヤは言った。助けて、と。俺にいてほしい、と。

そして……

「アンリが……カインに救われた友達が言ったんだ。助けてもらった命だから、幸せにならなきゃいけない、て」

あのとき、俺は思い出していた。

俺も……カインに助けられた子供の一人であること。いつのまにか、助ける側に徹していて、助けられたことを忘れていた。とんだ思い上がりだな。

俺は広幸さんの墓に手をふれた。

「……俺も……そんなことで、広幸さんに恩返しができるのか。俺の幸せに、そんな意味があるのかな」

考えたこともなかった。幸せなんて、俺に望む権利はない、て思ってた。

「広幸さん。俺、選んでいいのかな」

俺の幸せに価値があるなら……

「『おつかい』以外の自分の生き方を……自分で」

クローンである俺が――神の掟を破って『創られた』俺が、神の創った世界で幸せを望むのは、許されないことかもしれない。

でも、それなら……それでいい。そんな気持ちが生まれてきたんだ。

用意された幸せがないなら、自分で創ればいい。

俺には、自分で……自分の意思で守りたい、と思える奴がいる。カインとしてじゃない。俺自身、『和幸』として助けたい、と思う奴ができた。そういう奴に会ったんだ。

そして、そいつは今、助けを求めてる。

神を恐れる生き方は、もう終わらせよう。

俺の命は、神ではなく、藤本さんと広幸さんに助けられたものなんだから。

俺はカイン

「カヤ」

母親が部屋のドアをノックしたときには、カヤはベッドにはいっていた。不安と疑問……いろんなものがうずまいて、眠りたくても眠れずに、ただじっとベッドの中でうずくまっていた。

「カヤ、起きてる？」
「お母さん？」

ドアの向こうから、困惑気味の母の声が聞こえる。カヤはむくりと起き上がった。

しかし……うん、わかった、と出て行く気にはなれない。もしかしたら、自分を売るつもりかもしれない。その疑いは、カヤの中にまだしっかり残っている。

「なに？」

ぎゅっとシーツを握り締めて答える。

「さっきの友達が来てるのよ」
「……え？」
「もう遅いから帰って、て言ったんだけど……大事なものを忘れた、ていうから」
「忘れ物？」

カヤはベッドから降りてあたりを見回した。だが……二人は、特に手荷物もなかった。忘れ物とはなんだろうか？

「門の前に待たせてるんだけど……やっぱり、帰ってもらいましょうか」
「門の前……」
カヤは床を見回すのをやめ、窓から門を見下ろした。
「……和幸くん」
そこには、和幸がたっていた。
＊　＊　＊
玄関から誰かが出てきた。足音が聞こえ、和幸は石ころで遊んでいた足を止め、顔をあげた。
「和幸くん？」
カーディガンを羽織ったカヤが門に小走りでかけよってくる。暗くて表情はよく見えないが、髪がみだれているのは分かった。
「寝てたか？」
悪かったな、と和幸は微笑んだ。
「ううん……横になってただけだから」
カヤは、ハッとしてあわてて髪を整えた。
「えっと……それで、忘れ物？」

不自然な早口でそう尋ね、カヤは門を開けた。ギイっと耳に障る音が深夜の住宅街に響く。

「ああ」

和幸は、自分でも驚くほどに落ち着いていた。

これは、初めて自分で決めた行動だ。これが正しいことなのか、どういう結果を生むのか・・・見当もつかない。だが、赤子が立ち上がるようなものだ、と和幸は思った。誰しも、はじめの一歩をふむ。それが何を意味するか、その先に何があるのか、そんなことを理解する前に、赤子は立ち上がる。そして、人は歩み始めるのだ。

これもそんな一歩なんだ、と和幸は心の中で唱えた。

神サマから、藤本さんから、独立して歩む一歩。

自由とは、こんなに不安なものなのか、と和幸は思った。

和幸は、カヤに手を差し伸べる。

「え？」

急に差し出された手に、カヤは眉をひそめた。

「ごめん、忘れ物がなんなのか分からなくて……まだ見つけてないの」

「俺はカインだ」

「……え」

和幸は、はっきりといった。あまりにいきなりで、カヤは理解できなかった。

「なにいってるの？」

「……」
「なにかの、いたずら？」
「君を迎えに来た」
「え……？」

思わず、カヤは後ずさってしまった。
和幸は、じっとカヤの目を見つめている。こんなことは今までなかった。いつも、ちらちら見られることはあったが……一緒にいても、目があうとそらされていたのだ。
いつもと様子の違う和幸に、カヤは少しおびえていた。

「どうしたの？　和幸くん？」
「俺が連れ出してやる」
「え……」
「選ぶのは、カヤだ。
俺はただ……迎えに来ただけだ」
「……」

カヤの鼓動は早くなっていた。胸があつい。
和幸がカイン？　本当かどうかは、まだ判断することもできない。でも、目の前に、手が差し出されている。それは、事実だ。
不安だった。和幸とアンリが帰ってから、一人で部屋でおびえていた。何を信じればいいのか分からなくなっていた。アンリは実の親に返されるだけだ、と言ったが……それにしては、あまりに両親の口調や態度が不自然だった。それより、まるで別人だった。両親はカヤにいつも優しかった。そんな両親が大好きだった。でも、あの電話で話している両親は、まるで別人。カヤには、なによりそれが怖かった。
カヤはずっと孤独だった。どこに転校しようと、誰かの反感を買ってしまう。自分はなにもしていない。たが、いつも誰かに恨まれ

ていた。見た目、頭脳、才能……全てが妬みの対象だった。そして、ストーカー騒ぎが常につきまとった。よくしてくれていた男子も、急に態度を変えて、カヤを無視した。誰にも相談なんてできなかった。

そんなカヤにとって、唯一の味方が両親だ。その両親まで……自分を裏切るかもしれない。いや、裏切っていたのかもしれない。

そうだとしたら……誰に頼ればいいのか。誰を信じれば良いのか。カヤは、まるで暗い小さな箱の中に閉じ込められたような気分だった。

逃げようと思ってもどこに逃げればいいのかも分からない。このまま、じっと待つしかないのかと思っていた。

でも今、目の前に、手が差し出されている。自分を、連れ出してくれる、という救いの手。

カヤは、差し出された手をじっと見つめた。期待と不信感。自分の中でうずまく感情は複雑に混ざり合って、それが何なのか自分でも分からない。ただ、この手をとれば、全てが変わる。それだけは確信していた。そして、確実に何かを失うことを彼女は知っていた。

「お願い……」

カヤはうつむいてうめくように言った。

「連れて行って」

カヤはそっと和幸の手をとった。

フォックス・エン・アトラハシス

暗い夜道で、二つの人影が走り去っていく。
男は、その後姿をじっと見つめて立っていた。

「あらま。駆け落ちじゃない」

男のうしろで、露出度の高い衣装をまとった色黒の女がそうつぶやいた。

「……」

男はただ黙っている。女は腰に手をあてがい、男の後姿を見つめた。

「ね、どうなさるの？　おいかけましょうか？」
「結構です」
「あら、どういう風の吹きまわし？　あの子を受け取りに来たんじゃないの？」
「妙だと思いませんか、バール？」

急な問いかけにバールは小首をかしげる。いきなり「妙だ」といわれてもなんのことやら。

「はい？」
「あの少年には、もう呪いはかかっていない」

言われてバールはハッとした。確かに、たった今、夜の闇に消えて行った少年に見覚えがある。数時間前、自分が部屋に忍び込み、

そして呪いをかけた少年だ。だが、男の言う通り、かけたはずの呪いの気配がない。失敗したということはまずない。バールに失敗なんてあり得ない。理由は単純。そういう存在だからだ。

「……あら、そういえば……そうね。明日の十二時に解けるようにしたのに」と、バールは不思議そうにつぶやいた。

「誰かが解いたのでしょう」

静かに男はそう告げる。感情が推し量れない無機質な声色で。

バールは男の推理を聞いて、腕を組んだ。もう男の言いたいことは予想できていた。だがそれでも、わざとらしく「……つまり？」と答えを促す。まるで男を試すように。

それに気づいているのかいないのか、男は涼しげな表情で素直に答える。

「『ルル』を守る神の騎士、マルドゥクです」

やはりそうきたか。バールは唇の片端を上げた。

「マルドゥクがあの坊やを助けた、ていいたいわけ？」

「マルドゥクはもうすぐ近くにいますね」

「どうなさるの？」

「……」

しばらく考え、男はフッと微笑んだ。端正な顔立ちにさわやかな笑顔が浮かぶ。

「少し、様子をみましょう」

「ええ？」

男の提案に、バールは思わず動揺して声をあげた。様子をみる……それは、彼らしからぬ選択肢だ。てっきり、あの少年にもう一度強い呪いをかけろ、と命じられると思っていた。いや、そのつもりだった。

「とりあえず」と、男は穏やかな声でつぶやく。「彼はカヤを連れ出してくれました。こちらには都合がいい」

「……ま、そうだけど」

腰に手をあてがい、納得いかない表情でしぶしぶ同意するバール。それを尻目に、男は神崎の屋敷を見上げた。

「『ルル』は強欲な種だ」

感情が伺えない平坦なトーンでそう言って、男は一歩一歩確かめるように足を進めると、神崎の屋敷の門をくぐる。

「それが、自らの破滅を招くことすら知らない愚かな種」

淡々と独り言をつぶやきながら、男は玄関に手をかける。カヤが突然飛び出していったため、鍵はしまっていない。男を招き入れるかのように扉は開き、男は躊躇なく堂々とした様子で玄関にはいった。

「カヤ！？　長かったじゃない」

玄関が開いた音を聞いて慌しく駆けつけてきたのは、カヤの母親だ。シルクの寝巻きが動きに合わせて擦れて音を出す。乾ききっていない湿った髪を振り乱して玄関に姿を現し、そして困惑に顔色を雲らせた。

義娘(むすめ)の姿をとらえるはずの視界に入ってきたのは、青年だ。それも、全く見覚えの無い青年。

「あんた、誰！？」

母親は表情をこわばらせ、そう尋ねた。泥棒とは思えなかった。男は、あまりにも落ち着いた様子で立っている。

「お久しぶり、といったほうがいいですか？　神崎夫人」

「……久しぶり？」

男は、紳士のように優しく微笑んだ。

カヤにどこか似た顔つきをしている男。いや、人種としては同じかもしれない。浅黒い肌に、彫りの深い顔。端整な顔立ちで、まるで王族のような気品があふれている。鋼のような前髪は若干目にかかり、長く伸びた睫毛とぶつかっている。二十代前半と思われる若者は、実に紳士的な雰囲気だ。

だが、男は不気味だった。どう不気味だ、と言われれば説明はできない。ただ、見ているだけでゾッと背筋が凍る。母親は警備の人間を呼ぶことすらできずに、男のその妙なオーラに圧倒されていた。

「きれいなダイヤね」

「！？」

突如として誰かの細い指が耳元にふれ、甘い声が飛び込んできた。気づけば、見慣れぬ女がイヤリングをもてあそぶようになでている。後ろに人などいなかったのに。一体どこから沸いて出たのか。母親は驚愕し、飛び跳ねるように妖しげな女から離れた。

「いつのまに、そこに……！？」

「フフ」
妖艶な女は怪しく目を細めた。
母親はその炎のように煌く赤い目を見つめ、そしてハッとした。
「あら、あなた……どこかで」
すると、男が細い唇を横に伸ばして高いトーンでつぶやく。
「わたしより……彼女のほうが見覚えがおありですか？」
「……え」
男に言われ、母親はもう一度、じっくりと女を見つめた。
色黒の肌。黒く長い髪。ルビーのような目。麻でできた妖しげな衣装。
そして、心の奥で感じている不思議な感情。尊敬でもない。恐怖でもない。――畏怖。
「！！」
その瞬間、神崎夫人は驚愕して目を見開いた。思い出してしまったのだ。この二人と、いつ、どこで会ったのか。
「あなたたちは……っ！！」
母親はやっと状況を把握して、後ずさった。
「思い出してくれましたか？」男は嬉しそうに品のある笑みを浮かべる。「毎朝、電話をさしあげていたのに……声で気づきませんか？」

「……どうして、来たの？　明日、電話すると……」

母親は、恐怖で腰をぬかした。分かったのだ。この男こそ、毎朝、電話をよこしてきた男。ついさっき、カヤを渡せ、と電話してきた男。――そして……約十六年前、カヤという名の赤ん坊を渡してきた男。

「カヤはどこ！？」母親はハッとしてあたりを見回した。「カヤを……もう連れて行ったのね。話が違うわ！　金は……」

その言葉を聞いて、それまで微笑んでいた男の顔が急に冷たい表情に変わった。さっきまでの紳士的な青年とは別人のような、冷酷極まりない表情だ。まるで、感情のない精巧な蝋人形にさえ見える。

「金……金……」と、蝋人形は無機質に言葉を漏らす。

「え……」

「十六年もともに暮らした娘でも、愛情はわかないのか。ほんとうに、わたしは恥ずかしい。

こんな種の王になったことを、心から恥じます」

「……なにを？」

母親の体は小刻みに震え、声はかすれていた。ダイヤのイヤリングがカチャカチャと音を立て、よく手入れされた長い爪は床にリズムを刻んでいる。

恐怖に顔を青くする母親を見下すように男は見つめ、落胆のため息をついた。

「本当に、救いようのない種だ」

「……」

男が何を言っているのかはさっぱり分からない。だが、母親は悟った。もとから、この男は自分たちに金など払うつもりはなかったのだ、と。そして……この男が、どうしてここに現れたのかも。

「だ、誰か……！」

母親は助けを求めようと声をだし、体をひねらせ顔をあげた。そして、息を呑む。目に飛び込んできたのは、さっきまで隣に居たはずの妖艶な女。移動した気配は感じられなかった。なのに、振り返ったら目の前に佇んでいたのだ。

思わぬ出来事に硬直していると、女の紅い目が淡く光を放ち始めた。人の目が光るなんてあり得ない。さらに、こんな状況だ。悲鳴でもあげて逃げるのが妥当な反応なのだろうが、なぜか母親は見とれてしまった。どんな宝石よりも美しい輝きを放つ、その瞳に心まで奪われたようだった。

しかし、母親は分かっていなかった。その瞳に奪われるのは心だけではすまないことを。

それは突然やってきた。急に喉がしめつけられるような痛みにおそわれ、母親は崩れるようにその場に倒れこんだ。

「う……ぐ……！？」

首にはなにもない。だが、確かに感じていた。何かに絞められる感覚を。

「あ……」

ふと、紅い眼の女を見上げた。助けを求めようと。

だが、母親は思いもよらないものを目にした。化け物だ、と思った。

眼を紅く光らせるバールの髪は、まるで生きているようにうごめいている。よく目をこらせば――まとめられている髪の一束一束が蛇の頭をもっていた。バールと同じ紅い目をもつ蛇たちは、母親をあざ笑うかのように口をあけて蠕動(ぜんどう)している。

「『ルル』の王たる、わたし……フォックス・エン・アトラハシスは決めたのです」と、もがき苦しむ母親を見下ろしながら男は冷静に低い声で語りだす。「彼女のためにも、『ルル』は滅ぶべきだ、と。あなたも、例外ではない」

男――フォックスは優しく微笑みながら、神崎夫人が息絶えるのを見つめていた。無事に冥府へと旅立てるように、と祈るような穏やかな眼差しで。

謝罪

「きれいな部屋だね」

カヤは、俺の部屋を見回して、恥ずかしそうにそう言った。

「いや……まあ」

勢いにまかせて、カヤを『迎え』に行ってしまったものの……カヤの家から俺の部屋に来るまでの間、会話はなかった。

あのときは、なんの迷いもなかったんだ。でも、今、よくよく考えてみると・・・俺、とんでもないことやらかしたんじゃ……

「えっと……」と、口ごもり、カヤは首の裏をかいた。

すごく……気まずそうだ。

「寝るか！」

俺は、沈黙をやめるために、そんなまったく気の利かないことを堂々と言い放った。カヤは、きょとんとして俺を見つめていた。

＊　＊　＊

「寝るか！」と言って、和幸くんは、電気を消してさっさとソファに寝転がった。

よく月明かりがはいる部屋で、明かりもないのに、部屋はある程度明るい。

「あの……」
「ベッド、つかっていいから」
「え？」
「そこ……その細長いやつ」
「ベッドが何かはしってるよ」
「……そうだよな」

和幸くんは、はは、と苦笑いをしてそっぽを向いてしまった。
いろいろ聞きたいこともあるんだけどな。聞かないで、てことなのかな。
ベッド、使って良いって言われても……なんか、使いづらいし。
わたしは、青いシーツのベッドを見つめた。とりあえず、座ろう。
私は、和幸くんが寝転がっているソファの向かいにある、一人用のソファに座った。

「和幸くん」
「……」

返事がない。まさか、もう寝ちゃったわけじゃないよね。

「本当に、カインなの？」
「……」
「信じられなくて。だって、和幸くんは……友達だから」
「友達……
友達じゃない」
「え……」

予想もしてなかった反応だった。胸が、苦しくなった。なんだか、和幸くんがカインだって思うと……別人のような気がしてしまう。

「そ、そうだよね。昨日、今日、ちょっと仲良くなっただけだし。ごめん」
「違うんだ」
「え？」

和幸くんは、相変わらず、こちらを見ようとしない。

「俺は、カヤを騙してた」
「！」

騙す？　何の話？

「カインじゃない、てこと？」
「そこじゃない。友達、てこと」
「え？」

よく分からない。

「俺はカインとして、カヤに近づいたんだ」
「……カインとして？」
「カヤの親を……調べたかったんだ。
カヤの親には人身売買を斡旋してるんじゃないか、て疑いがあったから」
「！」

人身売買……？　なに、それ……あの、両親が？

「うそ……」
「お前の両親を調べるために、お前に近づいたんだ。
情報を得て、屋敷内を探るチャンスをつくるために」

「……」
「悪い」
なんて、言えばいいの？
両親が、人身売買を斡旋？　信じられない。いえ、信じたくない。
でも……それなら、納得できてしまう。あの電話。そして、そのときの両親の様子。
「それで、どうだったの？」
「……」
「ねえ、こうして私を連れてきたのは……その、確信ができたから、てこと？
父と母が、人を売り買いしているって確証を得たから？」
体が、震えてる。
分かってた。両親には何か秘密がある、て。心のどこかでは分かってたの。だって、あんなに警備が厳重な家なんておかしいもの。家のあちこちにはガードマンがいて……入っちゃいけない部屋もたくさんあった。
でも、考えないようにしてた。だって、両親は養女である私にすごくよくしてくれたから。それを裏切るようなことはしたくなかった。愛されてる、てだけで充分幸せだと思ったから……
けど、もし……愛されてなかったとしたら？　もし、私はずっと騙されていただけだったら？　私は……一度も、本当の愛を味わったことがない？
「……やっぱり、私も売られるところだったの？」
そうでないことを祈ってた。私の思い過ごしだと信じたかった。
でも、和幸くんが本当にカインで……私の話を聞いて、迎えに来

てくれたなら……そういうことなんだよね。私は、売られるはずだったんだ。

「……分からない。でも、俺は……そうだと思う」

和幸くんは、言いにくそうにそう答えた。

この人は……本当に、正直だな。私は、こんな状況で、クスっと笑ってしまった。

「なんだか……どう、反応したらいいか分からないな。

もう、何がなんだか分からない」

私はひざをかかえて、ソファの上で小さくなった。

「ごめん」

「え」

どうして『ごめん』？

そういえば、和幸くんの様子が変だ。本来は、私が『ありがとう』て言って、和幸くんが『どういたしまして』て言うはず。なのに、さっきから私のほう見ようともしないし。

部屋に二人きりで居るのが落ち着かないだけかと思ってたけど……なんだか、それだけでもないみたい。

「……騙してて悪かった」

「！」

和幸くんは、つぶやくように言った。

「和幸くん……」

もしかして……と、私は思った。『友達じゃない』とつぶやいた和幸くんの声が頭に響いた。

まったくこっちを見ようとしないのは……後ろめたいから？　ずっと……気にしてたのかな。両親を探るために、私に近づいたこと。本当は、私を騙すようなこと、したくなかった。でも、しなければいけなかった……そういうこと？　それでずっと、苦しんでいたの？

ほんの二、三日だけど、話してみて分かったもの。あまり、自分のことをべらべら話さない人だけど、和幸くんは優しくて他人を愛せる人。純粋なのよ。表にはみせないけど、なんとなく分かる。繊細で、優しい心の持ち主。

だからこそ、私は……和幸くんのこと――――。

私は、つい、微笑んでいた。

おあいこ

「ねえ、和幸くん」と、カヤの落ち着いた声が聞こえてきた。

緊張に体が強張る。罵られるのを覚悟した。当然だ。俺は、騙してたんだ。カヤの両親を調べるために、友達面してカヤに近づいた。最低……だよな。しかも、いい顔してカヤの相談に乗って……。

カヤが今ここで泣き出しても、俺には謝ることしかできない。泣かすようなことをした、と自覚している。

「謝るときは、人の目を見て謝るものよ」

「！」

ぎくりとした。

ソファに寝転がったまま、背もたれを睨みつけるようにじっと見つめ、深く息を吐く。

そうだな。カヤの言うとおりだ。

俺はむくりと起き上がり、カヤのほうを向いて座り直した。それでも……顔を上げるのは躊躇われた。

ごくりと生唾を飲みこんで、膝においた手に力をこめる。

情けねぇな。なに、びびってんだよ。何を……恐がってるんだ？

なんでこんなにカヤと目を合わせるのが恐いんだ？

「和幸……くん？」

心配そうなカヤの声に、俺ははっと我に返った。なにをぐだぐだ考えこんでんだ？

調子を取り戻すように咳払いをし、短く息を吸って顔を上げる。

そして目があったのは――微笑を浮かべる、天使のような少女。思

わず、息を呑んだ。何度でも、カヤを目にするたびに、時間が奪われる。彼女を見ると、時間が止まってしまう。見とれてしまうんだ。どんなに優れた彫刻でもここまで完璧な美を創りだすことはできないだろう、と漠然と思った。

たまらず、目をそらしそうになって――なんとか、堪えた。

照れてる場合じゃないだろ、と自分を叱咤する。

言わなきゃいけない。俺はもう嘘はつきたくない。嘘でしか創れない関係は、もうたくさんなんだ。

「悪かった」

カヤの目をじっと見つめて、そう言った。

カヤは、真顔で俺を見つめている。分からない。怒ってるのか？

それとも……

「うん」と、カヤは急に微笑んだ。何事もなかったかのような、満面の笑み。俺はあっけに取られた。「は」とすっとんきょうな声がこぼれる。

「こちらこそ、ごめんなさい！」

そう言って、カヤはぺこりと頭をさげた。

「え……」

ごめんって……謝られるとは思いもしなかった。

「なにが……だよ」

こっちは、深刻になって謝ったっていうのに……なんだよ、これ

は？　気がぬけた。
俺が戸惑っていると、カヤはくすくすと笑いながら顔をあげた。
「おあいこだもの」
「え？」
「私だって、和幸くんのこと利用したんだよ？　おとり捜査のために」
「あ……」
「ね。あおいこにしよ」
「……」
カヤは顔を赤らめて微笑んだ。
この笑顔だ。俺は、彼女の笑顔を見ると、救われる気がする。
「そっか」
俺も、つられたように笑ってしまった。
「それにね……」
カヤは、静かにそう切り出した。
「和幸くんが親切にしてくれたのは、カインのお仕事のためだったかもしれない。でも……嬉しかったから」
「へ」
俺、親切にしたか？　いつも、カヤの前に居るときは、何かとあわてて……親切するほどの余裕もあったとは思えなかったんだけど。
「それに、こうして助けに来てくれた。私が売られるかもしれない、

て思って……連れ出してくれたんでしょ？」
「ま……まあ、な」
「始まりなんてどうでもいいと思う。大事なのは、今の気持ち。私は今、嬉しい。両親のことはショックだけど……きっと、向き合えると思う。――和幸くんが、居てくれるから」
「え……」

俺が、居てくれるから……？　どういうことだ？
今度は、カヤが俺と目をあわそうとしない。なんだか……照れてる。

「あ……」

――『災いの人形』は、あなたに恋をしています。

リストの言葉が頭をよぎった。うそ、だろ。
俺はまたカヤを見つめた。相変わらずもじもじしている。
かわいい……って、いや、そんなこと考えてる場合じゃないんだよ！　カヤの両親は人身売買を斡旋してて……俺は、こうしてカヤをその家から連れ出した。
とりあえず、カヤは安全だ。これから、カヤの両親がカヤを誰に売ろうとしていたのか……なぜ、売ろうとしていたのか。いろいろ、調べなきゃいけない。明日、藤本さんに話しに行かないと。
それに……『災いの人形』だ。そう、彼女は『災いの人形』なんだよな。まだ、信じられないけど、俺はケットとかいう天使にも会っちまった。俺なりに、受け止めていかなきゃならない。

「和幸くん？」
「へ……」

カヤが、上目遣いで俺を見てきた。
ちょっと待て。よく考えてみろ……
なんだ……このおいしい状況は？　なんか、まずくないか？　俺の鼓動が、いきなり超特急だ。
「え……なに？」
俺は無理して笑顔をつくった。絶対に、違和感ある笑顔になってる。
「和幸くんって……」
ごくり、と喉を鳴らす。これは……砺波のもってた漫画でしかみたことのない……アノ状況か？
「和幸くんって、アンリちゃんから聞いたの？」
「……え」
アンリ？
「あの劇の秘密……知ってるんでしょ」
あ……そっか。アンリ、言ってたな。あいつ、カヤにあの劇が実話だってこと言ったって。
にしても、俺、アホみたいだな。なに、変な想像を……
砺波の『中学生か！』というツッコミが聞こえてくる。
「まあ……」気を取り直し、俺は質問に答える。「想像ついた、つうか……。分かったよ。アレが実話だ、て」
「やっぱり！　だから、同じこと言ったんだね」

「え？」

同じこと？　アンリが？　一体、何の話だ？

自分だけのもの

「雨宿りしたとき……和幸くん、私に言ったでしょ？
見た目も全部、神様の贈り物なんだから大事にしろ、て」
「あ……ああ」

和幸くんは、照れくさそうに頭をかいた。

「ずっと劇を断り続けてたある日ね、アンリちゃん、ウチまで来たんだ。どうやってウチを調べだしたのか分からないけど……」
「それは、ほら……アンリだからな」

和幸くんは呆れて笑った。
本当に、二人は仲がいいのね。なんだか、せつなくなる。

「カヤ？」
「え？　あ、そうそう。それでね……そのときに、アンリちゃん、同じこと言ったの。『どんなに嫌な目にあったとしても、与えられたものには感謝をしろ。せっかくの容姿なんだから有効活用しろ！』て」
「え……」
「それは、アンリちゃんがある人に言われたことらしいの。その人は……カイン。アンリちゃんを『迎え』に来てくれたカインなんだって」
「なるほどな」
「それで……この劇は自分の過去なんだ、て教えてくれたの。ずっと、そのカインを探してるんだって。この劇も、その人に気づいてもらうため。だから、どうしても注目度をあげたいんだ、て」
「……らしいな」

らしい、か。やっぱり、二人は何でも知ってるんだ。アンリちゃんは、これは秘密だ、て言ってたんだけどな。和幸くんには話してるのか。

あ。てことは……和幸くんもアンリちゃんには全部話してるのかな？

「ねえ、和幸くん」

「ん？」

「アンリちゃんも知ってるの？　和幸くんがカインだ、てこと」

それを聞いて、和幸くんは、「え」と目を丸くした。しばらくして、笑い出した。

「まさか！　そんなことしたら、あいつは発狂するよ」

「……それも、そうだよね」

なんだろ。ちょっとホッとしちゃった。

だめ、だよね。こんなこと考えるの。私、アンリちゃんと競おうとしてる。最低だ。

「信じてくれるんだな」

急に、和幸くんがまじめな表情でそう言った。

「信じる？」

「俺がカインだ、て……」

「あ……うん。まだ、現実味がないけど……」

だって、和幸くんがそういうなら……私は信じるしかないもの。

それに、アンリちゃんがカインから言われた言葉を、和幸くんも言った。和幸くんもカインだ、ていうなら納得できる。

あれ……？　ちょっとまって。ソレって……

「そういえば！　ってことは、和幸くんは、アンリちゃんを助けたカインを知ってるの？」

「ええ？」

「だって、同じセリフを言ったんだよ？　和幸くんも、その人から聞いたんじゃ……」

そうよ。私は、自分の推理に自信があった。

でも、和幸くんはせつない表情をうかべて首を横にふった。

「いや……そういうんじゃない。俺たちカインはな、皆、あこがれてるんだ」

「なにを？」

「全てさ。他の人は当たり前にもっているもの」

「……？」

「自分だけのもの、さ。見た目、性格、体、長所、短所……全て。だから、そのカインも俺も同じことを言った。

『どんなに嫌でも、自分しかもっていないものには価値がある。だから、大事にしろ』、てな」

和幸くんは笑顔をうかべていたけど……すごく、悲しそうだった。

「でも、それって変。自分だけのもの……そんなの誰でももってる。カインだろうがなんだろうが……皆、もってるでしょ。なのに、どうしてそれが羨ましいの？」

「……俺たちが、それをもってないからさ」

「どうして……？」

＊　＊　＊

カヤは理解ができないようだった。

それもそうだよな。自分だけのものを持ってない。そういわれて、そうか、クローンか！　なんて、分かるわけがない。

俺はぎゅっと拳を握り締めた。ここまで話したんだ。俺が『創られた』こと・・・隠す必要もないよな。

「俺はな……いや、俺たちは……」

「ん？」

「俺たちは『創られた』子供……」

「え？　なに？」

「カインは、皆……クローンなんだ」

はっきりと俺は言った。ここまで、きっぱり言ったのは初めてだった。カインの中でも『クローン』という言葉は避けられていた。特に、藤本さんは使うことはなかった。俺たちが傷つくことを知っていたからだ。

俺は……カヤの反応を聞くのがこわかった。

カヤはしばらくあっけにとられていた。そうだよな。それが普通の反応だよ。

「でも……」と、カヤは眉をひそめた。「クローンは……もう、禁止されているはずじゃ……」

「ああ。表向きにはな。でも……ほら、この通り、クローンは今でも創られているわけさ」

俺は鼻で笑って自分を指差した。

そう、教科書ではクローン研究はこの国の黒歴史とされている。そして、それは過去のものだ、としっかり書かれてある。

「……誰の？」と、カヤは遠慮がちに聞いた。俺は誰のクローンか、ということか。

「さあ。誰も知らない。多分、俺を『創った』奴も知らないだろ」

「そっか」

カヤはうつむいた。

やっぱ……気味悪い、かな。カヤみたいなお嬢様にとっては、クローンなんて……。

「だからな」と、俺はこの重い空気を取り払うように、明るい口調で言った。「俺たちカインには、自分だけのもの、てのがないんだ。全部、誰かのコピーだからさ」

これ以上、この話をしたくはなかった。だから、話を無理やりまとめようとしていた。カヤに……軽蔑されたくなかったんだ。

「そんなこと、ないよ」

「え？」

急に、カヤが切り出した。いつのまにか、カヤは顔を上げて俺を見ていた。

「和幸くんだけのもの、たくさんあるじゃない」

「？」

「生まれたときは、コピーだったかもしれない。でも……それからは？　それから起きたこと。それから会った人。それから感じたこと。全部、和幸くんだけのものだよ」

「……！」
「ね」と、慰めるようにカヤは微笑んだ。「言ったでしょ。始まりはどうでもいい。大事なのは、今の気持ちだ、て」
俺は、なにも答えられずに、カヤを見つめていた。
月明かりに照らされたカヤの顔は、いつも以上に魅力的だった。
「人は欲深いから。与えられたものだけじゃ満足できない。だから、生きるんだよ。自分だけの……大切なものを創るために。つらくても苦しくても、生きたい、て思うんだよ」
「カヤ……」
どこから、そんな考えが生まれてくるんだ？
俺は思った。カヤの魅力は、見た目だけじゃないんだ。もっと、奥深く……彼女の思い出や願い、苦しみ……それが心の中で混ざりあって、魅力となってあふれているんだ、と。神に与えられた魅力だけじゃない。彼女はそれ以上の美しさをもっている。
「それに……」と、カヤは声のトーンを高くして言った。
「今夜、私が和幸くんの部屋に泊まったことだって……和幸くんしか知らないんだから」
「へ？」
な……なんの話だ、急に？
カヤはいたずらっぽく微笑むと、人差し指を口の前でたてた。
「こんな美人を部屋に泊めたなんて……皆にバレたらねたまれるよ」
「あ……」
「なんちゃって」と、カヤは肩をすくめた。

俺は、つい、笑ってしまった。

「そうだな」

リストは言っていた。彼女は神に創られた、と。きっと、この地球(ドー)で一番美しい女性なんだろう。そんなカヤと一夜を過ごすとは……。全人類にブーイングをくらいそうだ。

思えば、これも……俺だけのものなんだな。俺のオリジナルは、カヤと知り合ってもいないんだ。カヤとの出会いも、俺だけのものだったんだ。

「カヤの言うとおりかもしれない」

俺は、カヤを見つめた。

それにしても、カヤがあんな冗談を言う奴だとは知らなかったな。それに、カヤにとっては、自分を美人だと表現するのはつらいはずなのに。

「ありがとな、カヤ」

自然と、そんな言葉が俺の口からこぼれていた。カヤは安心したように微笑んだ。

「ううん、ありがとう」

「え？」

「今ね、初めて自分の容姿に感謝したの。少しは……和幸くんの自慢になるかな、て思って」

「へ？」

カヤは、髪を耳にかけながらそう言って、真っ赤な顔を隠すよ

うにうつむいた。

「あ……うん」

それが、俺にできる精一杯の返事だった。

こんな状況……初めてなんだ。気の利いたことがいえるわけがない！

俺の頭の中では、『『災いの人形』はあなたに恋をしています』というリストの言葉が無限リピートしていた。

舞台設定（前書き）

『終焉の詩姫』は、シュメール神話をベースとしたオリジナルの神話をもとに、
架空の犯罪都市トーキョーで、運命に翻弄される少年少女の話になっています。

物語も第一章を終えたところで、ストーリーの軸となる舞台設定を簡単におさらいしたいと思います。なお、読み飛ばしていただいても全くかまいません。

舞台設定

【クローン】

ニホンという島国は、その昔、深刻な少子化問題に直面し、クローン研究に国力を注いだ。しかし、その研究は、他国からのバッシングにより中断され、憲法にも『クローン研究を禁ず』と加えられる。

だが、二十八年前に、ある研究者が『地球が近いうちにパンクする』と発表。世界はパニックに陥り、強制的一人っ子政策という馬鹿げた方針をうちだす。それは、子供を一人生んだ夫婦は、二人とも強制的に避妊手術を受ける、というものだった。

この突拍子もない政策により、クローンが再び脚光を浴びることになる。それも、裏の世界で。

たった一人の子供を失った悲しみに耐え切れず、多くの金持ちが、クローンという禁断の果実に手を出し始めたのだ。そして、かつてクローン大国と呼ばれたニホンに、その『発注』が殺到した。だが、法律には『クローン研究を禁ず』としっかりと書かれている。クローン製造・売買は、全て裏のビジネスとなった。

【人身売買と闇オークション】

強制的一人っ子政策により、子供の『需要』が高まっていたころ、世界には激しい貧富の差があった。そのために、貧しい家の子供はさらわれ、金持ちに売られる・・・という、人身売買が流行する。

また、商業用のクローンも同時にはやりだした。それは、誰かから『発注』を受けるのではなく、ＤＮＡを盗み出し、勝手にクローンを製造するというものだ。そうやって作られたクローンは、遺伝

子操作や人体実験などに使われた後、闇オークションに出品される。
＊もう一つの人身売買もあるのですが・・・それはまた本編で。

【カイン】
『カインノイエ』という組織に属する、『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たち。
平均年齢は１５歳。全員がクローンであり、幼い頃にカインノイエに助け出された、という過去をもつ。
そのため、カインノイエの創設者である藤本マサルを『父』と呼び、神のように慕う。
カインノイエの事務所を『実家』と呼び、藤本マサルからの指令を『おつかい』、そして子供たちを助け出すことを『迎え』と呼ぶ。
主な『おつかい』は、人身売買や闇オークションなどにより売られた子供たちを『迎え』に行き、救いだすことである。
ちなみに、カインは皆、『藤本』という姓を名乗っている。

舞台設定（後書き）

なにか分からない点がありましたら感想掲示板にてお伝えください。説明します。

アヌンナキ神話（前書き）

『終焉の詩姫』は、シュメール神話をベースとしたオリジナルの神話をもとに、
架空の犯罪都市トーキョーで、運命に翻弄される少年少女の話になっています。
物語も一章を迎えたところで、ストーリーの軸となるこの世界の神話を簡単におさらいしたいと思います。なお、読み飛ばしていただいて構いません。

アヌンナキ神話

【アヌンナキ神話】

遠い昔……

この地球(エリドー)に、『ニビル』という名の宇宙船に乗った生命体が降り立った。

彼らは、『メ』と呼ばれる偉大なる力で地球(エリドー)に世界を創り出し、やがて暮らし始めた。

あるとき、その生命体の一人、エンキが、新しい種族を創った。

彼らはこれに『ルル』と名づけ、『ルル』は彼らを『神』と呼び始める。

だが、『ルル』は繁殖を続けていくうちに、だんだんと神々の邪魔になっていった。

神々の中には、『ルル』を忌み嫌うものも現れ、

ついに、エンリルという神が『ルル』を滅ぼそうとし始めた。

飢餓や病気、そして最後には…エンリルは大洪水までおこした。

それは地球(エリドー)全てをのみこむほどの大きなもので、

今度こそ、『ルル』は滅びたと思われた。

だが、『ルル』は絶滅しなかった

『ルル』を創ったエンキが、エンリルのたくらみを知り、

お気に入りの『ルル』であった、アトラハシスという男に知恵を与えていたからだ。彼とその家族は、エンキのおかげで最後の洪水も生き残った。

エンリルはこれを知ると怒った。

エンキとエンリルは腹違いの兄弟だが、人間に関しての意見の相違

で仲が悪かった。
エンリルは、『ルル』を滅ぼしたい。エンキは、『ルル』を守りたい。

二人の神は平行線。

そこで、神々は、ある取り決めをした。

今後もし、『ルル』が救いようのないほどに落ちぶれた種族になったのなら、
エンリルは、好きにこれを滅ぼしてもよい、と。
ただし、それまでは、エンリルは手出しをすることはならない。

やがて、神々は地球（エリドー）を『ルル』に与え、また宇宙へと旅立った。
エンキとエンリルの子孫である二つの一族、『マルドゥク』と『ニヌルタ』を残して・・・。

マルドゥクはエンキの子孫、ニヌルタはエンリルの子孫だった。
二つの一族は地球（エリドー）の状況を、遥か彼方の宇宙にいる神々に伝える役目をになうことになる。

神々は、マルドゥクとニヌルタの報告をもとに、『ルル』を滅ぼすか否かを決断してきた。

そして、神々が『ルル』を滅ぼす、と決断すると、『災いの人形』が地球（エリドー）に現れる。
『災いの人形』は『パンドラの箱』から生まれ、１７歳まで普通の『ルル』として暮らす。
『災いの人形』の１７歳の誕生日に、『パンドラの箱』に『テマエの実』という林檎に似た果実が現れ、それを彼女が食べると『災い

の人形』としての使命、そして『終焉の詩』を思い出す。

『終焉の詩』とは、その昔、エンリルが地球（エリドー）に仕掛けた大洪水を引き起こす呪文であり、それを『災いの人形』が唱えたとき、その洪水によって世界は滅びるとされている。

アヌンナキ神話（後書き）

本編では『アヌンナキ神話』という表現はしませんでしたが・・・
特に名前は気になさらずに結構です。
内容が少しややこしいのですが・・・

エンキ＝マルドゥク＝人間の味方
エンリル＝ニヌルタ＝人間の敵

を理解していただければ言うことありません。

登場人物（前書き）

『終焉の詩姫』は、シュメール神話をベースとしたオリジナルの神話をもとに、
架空の犯罪都市トーキョーで、運命に翻弄される少年少女の話になっています。
物語も第一章を終えたところで、主なキャラクターを簡単に紹介したいと思います。なお、読み飛ばしていただいて構いません。

登場人物

藤本　和幸　フジモト　カズユキ（１７）
『カイン』の一人。自分がクローンであることにコンプレックスがあり、
その命の意味をずっと探し続けている。
同じ高校に転校してきた神崎カヤに近づけ、という『おつかい』を任せられる。

神崎　カヤ　カンザキ　カヤ（１６）
神崎家の養女。類まれなる美貌と頭脳、才能をもつ。
その正体は、世界を滅ぼすといわれる『災いの人形』なのだが、本人はそれをまだ知らない。
和幸に好意を持っている。

リスト・マルドゥク・ロウヴァー　Ｌｉｓｚｔ　Ｍａｒｄｕｋ　Ｒｏｖｅｒ　（１５）
神の一族、マルドゥク家の頭首。『ルル（人類）』の創造主であるエンキの子孫。
『災いの人形』であるカヤを殺す使命をもつ。
和幸と同じく、クローンである。

タール・ニヌルタ・チェイス　Ｔａｒ　Ｎｉｎｕｒｔａ　Ｃｈａｓｅ　（３６）
神の一族、ニヌルタ家の頭首。『ルル（人類）』を嫌うエンリルの子孫。
『災いの人形』であるカヤを使い、世界に終焉をもたらす使命をもつ。

ナンシェ・アブキール　Ｎａｎｓｈｅ　Ａｂｏｕｋｉｒ　（１５）
神の一族、マルドゥク家の娘。
リストを慕っている。
タールにさらわれ、現在、行方不明。

フォックス・エン・アトラハシス　Ｆｏｘ　Ｅｎ　Ａｔｒａｈａｓｉｓ　（２１）
『ルル（人類）』の王とされる、アトラハシス一族の生き残り。
他の一族は皆、タールに殺された。
『災いの人形』であるカヤが生まれた日、『パンドラの箱』とカヤを連れてどこかへ消えた。

ポリー・エノク・マッコーネル　Ｐｏｌｌｙ　Ｅｎｏｃｈ　ＭｃＣｏｎｎｅｌｌ（年齢不明）
不変の運命を知り、変わることのない世界の秩序を知るといわれる預言者。
だが、運命を知りながらそれを変えられない自分の非力さを嘆いていた。
エディンバラ城にて、タールに殺害される。

ケット・シー　Ｃａｉｔ　Ｓｉｔｈ　（年齢不明）
リストの持つ、『聖域の剣』に宿るエミサリエス。
エミサリエスとは、神の細胞で創られたバイオロボットであり、天使と呼ばれるもの。
ケット・シーは、エンキの細胞で創られた、エンキのエミサリエスである。
マルドゥクの者には、単に『ケット』と呼ばれている。

レッキ　Ｒｅｃｈ　（年齢不明）
タールの持つ、『冥府の剣』に宿るエミサリエス。

エンリルの細胞で創られた、エンリルのエミサリエスである。
姿かたちは、ケット・シーにそっくりであり、髪と目の色しか違いはない。

バール　Ｂａ'ａｌ　（年齢不明）
フォックスの持つ鏡に宿るエミサリエス。
アサルルヒの細胞で創られた、アサルルヒのエミサリエス。
赤い眼と蛇の頭をもつ髪が特徴。

藤本　マサル　フジモト　マサル　（６２）
カインノイエの創立者。カインを実の子供のように思っている。
昔、一人娘を失い、それが原因でカインノイエを創立した。

藤本　砺波　フジモト　トナミ　（１６）
カインの一人。テンションが高く、ノリがいい。
エンターテイメントを優先し、後先を考えない性格。

近江　杏里　オウミ　アンリ　（１６）
和幸のクラスメート。映画研究会の会長。和幸を様々な企画に引き込んでいる。
実は、幼い頃に売られ、カインに助けられたという過去をもつ。
カインをヒーロー視し、文化祭ではカインを題材にしたラブロマンスの劇を企画。
自分を助けてくれたカインに会うのが夢。

登場人物（後書き）

意外と登場人物少なかったです。
次の章からは、またストーリーの続きです。

おはよう

しつこく繰り返される耳障りな音――それが鳥のさえずりだと気付いて、俺は目を開いた。最初に入ってきたのは、まぶしい光。思わず、もう一度目を閉じて、瞼を押さえるように腕を置く。そうしてようやく暗闇を手に入れた。

なんでこんなにまぶしいんだ？　いくら朝でもここまで直接光に襲われることなんて今までなかったんだが。それに、気のせいか、腰も痛い。

とりあえず、瞼を開いて身体を起こす。が、やはり妙だ。休養を取ったはずの身体が、どうも重い。まだ疲れがとれていないみたいだ。

あくびをしながら頭をかき、不意に違和感に気付く。――風景が違っていた。いつも、朝一で見る景色じゃない。

ぐるりと辺りを見回して、ようやく自分がソファに乗っていることに気付いた。

「なんで、ソファに？」

しかも、しっかりと毛布まで持ってきている。俺は腰に巻きついている茶色い毛布をつかんで、小首をかしげた。これは真冬に使う供えの毛布。なんでこんなものを引っ張り出してまで、こんな寝心地悪いところで寝てたんだ？　仮眠でもとったんだっけ？

意味が分からねぇ。てか、思い出せない。

とりあえず、壁にかけてある時計を見ると、まだ七時。学校には八時にでれば間に合う。

しばらくぼうっとして、眠い目をこする。

もう少し寝よう。俺はのっそりとソファから立ち上がってベッドへと向かった。

＊　＊　＊

和幸は、見事に寝ぼけていた。

一夜であまりにいろいろありすぎて、頭がオーバーロードでもしてしまったかのようだ。元々、寝起きがいいほうではないこともあって、彼は夕べのできごとを丸々忘れていた。

ベッドで二度寝をしようと、まるまっている毛布をはがした。なぜ、毛布がふっくらともりあがっているのか。そんなこと、寝ぼけている和幸には気にもかからない。

眠る準備に入っている瞼は、すでに半分ほど閉じている。和幸はあくびをしながら毛布の中にはいり、ベッドに横になった。

妙に暖かいな、と思った。湯たんぽでも入れっぱなしにしていたような暖かさがこもっている。もしかして、明け方に寝ぼけてソファに移動でもしたのだろうか。そんなことを、ぼんやりと頭で考えていた。

「……おはよう」

聞き覚えのある声がした。それも、すぐ近く。

和幸はふと目を開けた。

目の前には、女性の顔があった。二、三度、目をぱちくりさせ、じっくりとその顔を見つめる。しばらくそうして、見覚えがある、と思った。

だが、なぜ自分のベッドに女がいるのだろうか。和幸は意味が分からず顔をしかめた。

それもただの女じゃない。浅黒い肌に、彫りの深い顔立ち。まるでこの世のものとは思えないほど、美しい――と、その瞬間だった。電流でも走ったかのように身体中がしびれたような感覚に襲われ、一気に目が覚めた。和幸はぎょっと目を見開いて、

「カヤ！？」

＊　＊　＊

俺はあわててベッドから飛び出した。

「カヤッ！！」

と、なぜか、名前しか口にでない。

か……かっこわるすぎだ。というか、最悪だ。

そうだ。夕べ、カヤは俺の部屋に泊まったんだ。それで……ベッドを貸した。――どうやったら、そんなこと忘れられるんだよ！？

「カヤッ……あ……の！」

悪い、寝ぼけてた。

そんなこと言って通用するのか？　いや、事実なんだけど……ありえないだろ！

カヤはそんな俺と対照的に、落ち着いた様子でむくりと起き上がると、顔を赤らめて微笑んだ。

「はい」

カヤは、まるで出席確認のようにはっきりと返事をした。

でも……なんで、この状況で、『はい』なんだよ？

＊　＊　＊

お、驚いた。何かいきなりまぶしくなったと思ったら……目の前

に、和幸くんが。
どうしようかと思った。まだ……ドキドキしてる。胸が熱い。頭がぼうっとするのは、単に寝起きだから、じゃないよね。
『気にしないで』とか言えばいいのかな？　『大丈夫だよ』？わ、分かんない。
和幸くん、パニクっちゃってるし。とにかく、私は冷静にしてなきゃ。なんでもないフリしないと……。
でも……『はい』は、流石に変だったかなぁ。

「和幸くん、あのね……」と、私は彼を落ち着かせようと声をかけた。でも、それが余計に和幸くんを焦らせてしまったみたいで……

「天気、いいなあ！」と、和幸くんは不自然に急に叫んだ。
「……そうだね」
私はとりあえず、相槌を打った。

『カインノイエ』へ

「この服、誰の？」

カヤは、和幸の部屋を出るなり、自分が着ているボーイッシュな洋服を見下ろした。少年のような服だが、細かいところにフリルやリボンなどの刺繍がはいっている。

寝巻きのまま、家をとびだしてきてしまったので、カヤには外出用の服がなかった。それを言うと、和幸は、たんすの奥からこの服を出してきたのだ。最初は、和幸の昔の服かと思ったが……着てみると、あきらかに女性物だった。

「それはな」と、和幸は、部屋の鍵を閉めながら言った。「砺波っていう奴のだ。たまに泊まりに来るから、何着か着替えが置いてあるんだ」

「え……」

カヤは、ズキっと胸が痛むのを感じた。この服は、女性用。背丈やデザインはカヤの年頃によくあっている。つまり、トナミは同じ年頃の女の子だろう。そんな子が、よく泊まりに来る？　カヤは、そういえば、和幸に付き合っている人がいるのか確認していないことに気づいた。

カヤがそんな心配を抱いているとは露とも知らず、和幸は鍵をかばんに入れ、エレベーターへ歩いていく。

「トナミ……」

カヤはため息をついた。

＊　＊　＊

「今日は、とりあえず藤本さんのとこに居ろよ」

和幸くんは、エレベーターを降りるのと同時にそういった。

藤本……さん？　あれ、藤本、て和幸くんの苗字なんじゃ？　親戚かな？

「藤本さん？」

「ああ、俺たちカインの……親父、かな」

「え？」

「育ての親であり、カインのリーダー」

「リーダー……」

カインのリーダー……そんな人がいるんだ。

そっか。やっぱり、和幸くんはカインなんだね。こういう話を聞くたびに、しみじみ実感する。

マンションのエントランスをでると、晴れ晴れとした天気が私たちを迎えた。本当だ。苦し紛れに言った言葉とはいえ、和幸くんの『いい天気だ』は真実だったのね。

それにしても……夕べのことが、夢みたい。バカみたいにすっきり寝てしまった。いっそのこと、全部夢で……今から家にこっそり帰って、お母さんに『朝帰りとはなんですか？』なんて叱られたい。

「もしかしたら、神崎がカヤのこと探してるかもしれないからな。しばらくは身を隠すんだ」

「……」

タイミングがいいな。一気に現実に引き戻された。

あれが全部夢だったら……なんて、無理な話よね。私は、急に気

持ちが沈んでしまった。
「俺も一緒にいてやれたらいいんだけど……」
「え……」
ドキッとした。私は和幸くんを見上げた。和幸くんは申し訳なさそうに私を見つめていた。
「ちょっと……学校で用があるんだ。悪いな」
「……ううん。ありがとう」
やっぱり……優しい。
私は本当にどうしようもないバカかもしれない。和幸くんのたった一言で、元気付けられてしまうんだから。
「藤本さんには、まず俺から事情を説明するから」
「事情……か。長くなっちゃいそうだね」
「まあ、とりあえず、俺が藤本さんの『おつかい』をさぼったことを伝えなきゃなあ」
おつかい？　私は、とても久々に聞いたその単語に気をとられた。
「おつかい……て、何を買う予定だったの？」
「え？」
私の質問に、和幸くんは一瞬、ぽかんとしてから笑い出した。
「違う違う。『おつかい』っていうのは、カインの中の暗号みたいなもので……藤本さんからの指令なんだ」
「指令？」

「そう。ミッション、てやつかな。ほら、カヤを騙して……両親のこと調べるはずだっただろ？　神崎が人身売買を斡旋してる証拠を手に入れるために。でも、それを破って、こうしてカヤを連れ出して全部話しちゃったから。それも、無断で」
「……あ」

和幸くんは苦笑いで頭をかいた。『まいった、まいった』なんて冗談まじりに言ってるけど……大丈夫なのかな。どうしよう。私、やっぱり和幸くんを巻き込んじゃったんじゃ……
藤本、という人には、私から謝ろう。私は、そう思っていた。

＊　＊　＊

カインは、カインノイエという組織に属しているそうだ。その本部は、教会だった。
驚いた。教会は、学校のすぐ近くにあって……私は何度もこの教会を見かけていたから。もう使われていない教会だ、と聞いて、特に気にしては居なかったけれど……まさか、カインの秘密基地だったなんて。
和幸くんは、ちょっと待ってて、と奥の部屋へと行ってしまった。
私は、前から三番目の列のチャーチチェアーに座った。目の前には、ステンドグラスと十字架がある。

「きれい……」

日がうまくステンドグラスにあたるように建築されたのだろう。朝日は、おしみなくその光をステンドグラスに注いでいる。
こんなに神秘的な場所だったら、神様にお祈りしたくなる気持ちは分かる。私は、他人事みたいにそう思った。
なぜなのかは分からない。でも……私は、神、というものに良い

イメージがなかった。

神……神……神……

その言葉を頭にうかべると、出てくるのはまったく違う言葉。

「『裏切り』」

私は、無意識に口に出していた。

「『神は裏切った』」

誰かがそう言うのが、私の頭にこだまする。一体、いつ、誰が、どうして、私に言ったのかは分からない。でも、その言葉は、私の記憶にしっかりと植え込まれている。

私の頭の奥に残ってる、誰かの声。懐かしくて、あたたかい声。

一体、誰……？

藤本という男

カヤはそのまま十分ほど待った。ステンドグラスをしばらく眺めてから、昔は教会として使われていた場所を見渡した。

教会に行くという習慣がこのトーキョーで一般的だとは到底いえない。無論、だからこそ、この教会はこうして売り払われてしまったのだろうが。

なぜ、藤本がここを事務所として選んだのか、カヤには興味があった。もしかしたら、この教会が、当時、安い良い物件だっただけかもしれない。だが、それにしてはこの場所は、教会としての姿を保ちすぎている。単に、安い物件だっただけなら、教会をそのままの形にして残しておくだろうか。全てをリフォームしてもっと事務所らしくしたほうが効率的だろう。

それに……と、カヤはチェアの背もたれを人差し指でこすった。やはり、予想したとおり、指にほこりはついてこなかった。そう、この教会はとてもよく管理されている。掃除もされているし、キャンドルも新しい。

藤本は、個人的にここを教会として使っているのだろうか。もしかしたら、藤本はクリスチャンなのかもしれない。それならすべてに納得がいく。

カヤがそんなことを考えていたときだった。ギイッと木製の古いドアが開く音がし、和幸と……そして、薄い白髪頭の高齢の男が現れた。

「お待たせしましたね、神崎カヤさん」

朝日が、男のくっきりとしたしわを強調させた。深くきざまれたしわに、濃い影がおちている。

カヤは、ゆっくりと立ち上がり、頭を下げた。考える時間は必要

なかった。この男こそ、藤本だ。和幸の親代わりであり、カインのリーダーだという男。カヤはすぐに判断した。

「あ、いやいや」と、藤本はカヤが頭を下げるのをみて、あわてて駆け寄ってきた。「そんなことはしなくていいのですよ」

カヤの肩に手をおき、藤本はにこりと微笑んだ。その笑顔は、とても裏世界で子供たちを束ねている男とは思えないほど優しさに満ちている。カヤは、ぽかんと、藤本を見つめていた。

「わたしは、藤本マサルといいます。マサルはね、カタカナで、マサルです」

「え……あ……私も、カタカナでカヤ、です」

「はいはい、存じ上げておりますとも」

「……」

カインのリーダーと聞いて、カヤはいろんな想像をめぐらしていた。カインは『殺し屋』だという噂も聞いていたから、そのリーダーなら強面の大男かもしれない、とも思っていた。それが、出てきたのは、しっかりはしているものの、物腰が柔らかく、おっとりとした優しい年配の男だ。

予想とちがう藤本に、カヤはどう接すればいいのか分からず、ただただぽかんとしていた。

「えっと……」という和幸の声が教会に響き、カヤはそういえば和幸が藤本の後ろにいるのを思い出した。

「じゃあ、俺は学校に行ってくるから」

「そうだな。遅刻はよくない」

藤本は、カヤの肩から手を離し、くるりと和幸に振り返った。
「カヤのこと、頼むな、藤本さん」
「ああ、分かっているよ」
和幸は、少し心配そうにカヤに目をやった。和幸自身、藤本のことは誰よりも信用しているが、カヤにとっては藤本は見知らぬ男。それを考えると、カヤをいきなり藤本と二人きりにするのは気がひけるのだった。
「一時間目だけ出て、帰ってくるから」と、和幸はカヤに言った。
「こら！　事情は分かるが、学校をさぼるのは……」
「じゃ、いってきます！」
「おい、和幸！？　神崎さんは大丈夫だから、ちゃんと学校は……」
『カインといえど、学業はおろそかにするな』というのが、藤本の教えだ。あんなことを言えば、小言が始まるのは安易に予想できた。和幸は、藤本の言葉に耳を傾ける様子もなく、逃げるように教会から飛び出していった。
残された藤本は、「やれやれ」とため息混じりに微笑んだ。
和幸が勢いよくあけた扉が閉まる音が教会に響くと、藤本はカヤに振り返って微笑んだ。
「では……神崎さん。少し、奥でお話をしましょうか」
「あ、はい」
「こちらへ」
藤本に促されるまま、カヤは、さっきまで和幸がいた奥の部屋へと向かった。

藤本の懺悔

「カインについてはご存知でしたか？」

藤本は部屋にはいるなり、そう切り出した。

「え」と、カヤは急な質問に戸惑いつつ、「噂は、少し」と、あいまいな返事をした。

「そうですか、そうですか。まま、さ、座ってください」

藤本はいつものように、黒い皮の上等なイスに腰をおろすと、カヤに微笑んだ。

部屋は、それほど大きくはない。藤本のデスクと、それに向かい合うようにおかれた大きめのソファ。そして本棚に観葉植物一つくらいしかない。いや、細かく言えば、もっとある。この狭い部屋で無数にあるもの――写真だ。壁にそこら中に飾ってある写真。そこにはカヤと同じ歳ほどの少年少女たちが写っている。藤本とのツーショットや、集団写真のようなものもある。

カヤは、座れ、と言われたものの、写真が気になって、立ち尽くしていた。

「皆、カインの子供たちです」

カヤが写真をきょろきょろ見回しているので、藤本がそう説明した。そして自分も写真を見回し、せつなく微笑んだ。どこか懐かしく、愛おしそうに。

「でも、和幸くんが見当たらない」

ぽろっとそんな言葉が口からもれた。カヤは自分ではっとして顔を赤らめる。
無意識に写真の中に和幸を探していたことに、このとき気づいた。カヤの思考回路はすっかり和幸が中心に変わっていた。
そんなカヤのほのかな恋心に気づくわけはない。藤本は、カヤの言葉をそのままに受け取り、胸を痛めた。和幸の写真がそこにないのは……と心の中で唱える。喪失感におそわれ、写真の子供たちを見ていられなくなった。そこに和幸の写真がないのは、当然だった。ここに飾ってある写真は遺影のかわりだからだ。

「それはそうですよ」と、藤本は沈んだ声で言った。「ここに飾ってある写真は……皆、先に逝ってしまった子供たちですから」
「え」
「皆、良い子達だった」

その声はとてもさびしそうで、藤本が泣き出すのではないか、とさえ思った。カヤは思わず、藤本に歩み寄った。だが、一歩足を踏み出したところで、かける言葉が自分にはないことに気づく。カヤには事情がまったく分からない。よく考えてみれば、カインが一体何者なのかもはっきりとは知らないのだ。せめてものヒントといったら、噂や、アンリの劇、そして和幸だった。だが、どれを信じればいいのかも良く分からない。特に、アンリの劇で語られるカインは、噂とはかけ離れている。アンリが実話だというのだから、劇のほうを信じるべきなのだろうが……火のないところに煙はたたない。カインに対する恐ろしい噂の原因もあるはずだ。
それに、とカヤは思った。写真をもう一度見回す。無邪気に微笑む少年少女。そんな写真に『死』という言葉はとてもかけ離れたものにみえる。

「なぜ・……」と、藤本に振り返り、そこで言葉をつぐんだ。

聞くべきじゃない。カヤは一歩足を退いた。聞いちゃいけない。弱弱しく背中を丸めている藤本を見ると、それ以上、質問することはとてもできなかった。

藤本から離れ、無言でソファに座る。藤本は悲しい表情で、じっと、デスクの上におかれた写真たてを見つめている。あれも、カインの写真だろうか、とカヤは思った。

「さきほど、言われましたね」と、しばらく間をあけてから藤本は口を開いた。

「はい？」

「噂で、カインのことを聞いた、と」

「はい」

「どんな噂ですか？」

写真たてからカヤへと向けた顔には、穏やかな表情が戻っている。

「殺し屋として裏の世界で育てられた少年少女がいて、カインと呼ばれている、と。初めて聞いたときは、漫画か映画の話をしているのかと思っていました。つい最近までも、ただの都市伝説かと……」

「そうですか」

カヤがそこまでカインを信じていなかったのも当然だった。トーキョーで、裕福な家庭に生まれた子供たちにとって、『裏世界』は『ＵＦＯ』と同じ類の言葉だ。

表で暮らす人間にとっては、トーキョーは明るい都市だ。なにも知らずに生きようと思えば、必要なものだけ見ていればいい。わざわざ裏路地に首をつっこんだり、夜道を出歩いたりする必要はない。『何も聞くな』。そうすれば、金のある人間は、トーキョーで幸せ

に暮らせる。コフィンタワーの廃れた姿に気づくこともないだろう。そこまで、気に留めることもないのだから。トーキョーでは、無関心が幸せの秘訣だ。

カヤには、トーキョーの裏路地はずいぶん治安が悪い、という知識はあった。だが、逆に言えば、その程度だった。カヤにとって、『裏世界』とはその程度のことで、まさかビジネスや社会が存在しているとは想像もしていなかった。まして、そこで生きる子供たちがいるなんて。だが、アンリと出会い、カインは実在する、と聞かされた。そして、実際に会ってしまった。カインだと名乗る少年に……

ふと、和幸の不器用な笑顔がカヤの頭をよぎった。

「あの……」

「はい？」

「一つだけ、確認したいことがあるんです」

カヤは不安そうに藤本を見つめた。聞いたら後悔するかもしれない。カヤの鼓動が一気に早くなった。でも、確認したい気持ちを止めることはできない。

「カインは……いえ、和幸くんは、殺し屋なのですか？」

藤本は目を丸くした。十六の少女は、救いをもとめるような目でこちらをじっと見ている。それはある意味脅しのようにも感じた。

「違う、と言え」というプレッシャーだ。

そんなことをしなくてもいいのだよ、と、藤本は自然と笑顔がこぼれた。

「いいや……和幸は、人を殺したことはありません」

「……」

カヤは、ホッと安堵し、肩の力を抜いた。よかった、と心の底から思った。やはり、自分の見る目は正しかった。和幸は人を殺せるような人間には見えない。思ったとおり、良い人なんだ、と喜んだ。

「じゃあ、噂はでたらめ、なんですね」

その質問に、藤本はまた「いや」と答えた。今度は、言いにくそうに。

「え？」

「カインは『無垢な殺し屋』と言われています。そして、それは事実です」

「でも、さっき、和幸くんは違う、ておっしゃいましたよね？」

「和幸は特別なんです。他のカインは、確かに、『殺し屋』と呼ばれても仕方のないことをしています」

「……あなたが、させているのですか？」

すんなりとそんな言葉が口からもれた。カヤは、自分でもそれを言ったことにしばらく気づかなかった。藤本が目を丸くして自分を見つめている。それに気づいてから、自分が言ったことを理解した。

「あ！」と、気まずそうに藤本から目をそむける。

しばらく重い沈黙が続いてから、「なるほど」とつぶやく藤本の声が、小さいながらもカヤの耳にはいってきた。

「わたしを、子供たちに人殺しをさせる悪人だ、と思っているのですね？」

「……」

藤本に怒っている様子はない。それどころか、とても穏やかな声だった。
カヤは、ただ黙った。実際、その通りだった。この人は、悪い人かもしれない、という気持ちが心の中に生まれている。写真に写る少年少女は自分と同じ年頃。壁に並ぶ笑顔は、『殺し屋』と呼ばれるような人間のものには見えない。ということは……そのリーダーだというこの男が、彼らをそそのかしているとしか思えないのだ。
「そうだとわたしも思います」
予想しなかった返答に、今度はカヤが目を丸くした。
ギイっという音をたてて、藤本はイスをまわす。カヤから、その表情を伺うことはできなくなった。カヤにイスの背を向け、窓を見ている。
「彼らの罪はわたしの責任です」
「どういうことですか？」
「わたしは、人を殺めてはだめだ、と彼らに教えられないのです。とても頼りない、非力な偽善者なんです」
「藤本さん？」
その声があまりにも寂しそうで、カヤは心配になった。この部屋を出た瞬間に、この人は自殺をしてしまうんじゃないか、とさえ思った。それほど、寂しい声だった。
「当たり前ではないからだめだ。法を犯しているからだめだ。この世のルールに反しているからだめだ。命をもてあそぶな。そんな言葉を、彼らに言えないんです」
「はい？」

「それを言ってしまえば、彼ら自身を否定してしまう気がしてならないのです。勝手に命を減らしてはいけないんだ、と、勝手に増やされた命である彼らには言えません」
「勝手に増やされた……？」
「わたしはね、彼らを救えるだけの言葉を持ち合わせていないのです。わたしにできるのは、彼らを許すことだけです。彼らがなにをしようと、わたしだけは認めてやる。わたしだけは守ってやる。それくらいしかできないんです」

カヤは藤本が何を言っているのか、さっぱり分からなかった。和幸のある言葉が脳裏をよぎるまでは……

「カインは、皆――クローン」

カヤは、そうつぶやいた。そして、そうか、と理解した。クローン。禁止されたはずの禁忌の行い。存在しないはずのもの。当たり前でなく、法を犯し、この世のルールに反し、命をもてあそんだ証。それは彼ら自身、クローンという存在だ。そんな彼らに、それがいけないことだ、と説明するのは確かに酷なのかもしれない。倫理が通じないんだ、とカヤは思った。

藤本がまたギイっとイスをまわし、カヤのほうに向きなおった。その表情に、声から感じ取られた寂しさは伺えない。

「変なことを話してしまいました」
「え、いえ」
「不思議ですね。なぜか、あなたといると、落ち着きますよ。話してしまいたくなるんです。心を許したくなる。いや……許される、救われるような気持ちになります」
「そう、ですか？」
「それは、とてもとても素敵な魅力だと思います。大切にしてくだ

さいね」
「……はい」
その『魅力』というものが、人を『裁く』ために創られた『災いの人形』の力だと分かるわけもない。藤本は、もしくは、と心の中でつぶやいた。自分が歳をとっておしゃべりになっただけかもしれない、と。
「ところで」と、藤本は高めの声で切り出す。「驚きました。クローンのことをご存知とは。和幸に聞いたんですか？」
「あ、はい。夕べ、教えてもらいました」
「そうですか」
藤本は顔をほころばせた。驚きと喜びが同時にこみあげてくる。カヤの口から『クローン』という言葉がでてきた時点で、和幸がそれをカヤに教えたことは予想がついた。だが、『和幸が』ということが、藤本には信じられないことだった。
クローンであることに一番コンプレックスを抱いていたのは和幸だと、藤本は知っていた。彼は、『クローン』という単語に一番敏感だった。和幸の口からその言葉を聞いたことは、藤本でさえ一度もない。その和幸が、カヤにそれを話したのだ。それが、藤本にはこの上なく嬉しかった。
間違いない。この女性は、和幸にとって今一番尊い存在になりつつあるのだ、と藤本は確信した。
「一つ、図々しいお願いを聞いてくれませんか？」
藤本は、落ち着いた調子でゆっくりとそう尋ねた。
「はい」

急に雰囲気のかわった藤本に戸惑いつつも、カヤは微笑してうなずいた。

「どうか、和幸を嫌わないでください」

「はい！？」

いきなり何を言い出すのだ、とカヤは目を丸くした。嫌うどころか……と、心の中でつぶやき、顔を赤くする。

「もしも、和幸があなたを騙していたことに怒りを感じているのなら、その矛先は、全てこの藤本マサルにお願いしたい」

藤本は、真剣な表情でカヤを見つめていた。その口調と態度は、十代の少女に対するものではない。カヤは、思わず背筋を伸ばした。

「さきほどお話した通り、すべて、わたしが命じたことですから」

「あの、お話が読めないのですが……」

「和幸が、『おつかい』をさぼった、とさっきわたしに言いました」

「！」

そういえば、と思った。カヤはそれを謝るつもりだったのだ。『おつかい』をさぼらせてしまったことを、藤本という人物に謝ろう、とここに来る前に思っていた。すっかり忘れていた。

だが、それが今の話にどう関係しているというのか。カヤは眉をひそめた。

「とても嬉しかった。わたしにとって、それはとても意味のあることなんです」

「……」

和幸が『おつかい』をさぼったことに責任を感じていた。謝らなければと思っていたのに、藤本は喜んでいる。カヤには、さっぱり意味が分からなかった。父親代わりでリーダーである藤本のいいつけを破ったことに、どんないい意味があるというのだろうか。

藤本は、一呼吸おいて、ゆっくりと口を開く。

「もう少し、老人の長話につきあってはもらえますか？」

リストの眠気

「リスト・ロウヴァーはいるか？」

俺は、一年のクラスをまわってはその質問を繰り返していた。こうして聞き込みのようなことをしていると、だんだんと隠れたあいつの本性が明らかになってくる。転校してたった一日なのに、各クラスで尋ねるごとに違う女子生徒の名前がでてくるのだ。「原さんのとこじゃないかな」と言われ、原さんのクラスにいけば、「中野さんと仲いいから」と言われる。それを続けて、九クラスある一年を全部回ってしまった。

ははは。なるほど。俺があいつに会うたびに感じていた落ち着かない雰囲気。リストは、それはあいつが神の子孫だからだ、と言っていたが……それだけじゃないんじゃないか。あいつはとんでもないナンパ野郎で、俺は無意識にそれを感じ取っていたんだ。だから、俺は不快感を抱いていたんだ。そうに違いない。

俺は、イライラしながらそんなことを頭の中で唱えていた。確かに、神の一族だけあって、リストは美形だ。きれいな顔の上に、猫っぽいかわいらしさまである。背が低いのも、そのかわいらしさのおかげで全く気にならない。逆に、かわいらしさ二割増し、といったとこだ。さらに、あの金髪と宝石みたいな碧眼。女にキャーキャー言われるのは、うなずける。

だが……だ。あいつは、カヤを殺すためにこの高校にはいったんだろ。それで、女遊び？　不真面目にもほどがある。なに考えてるんだ。

「リスト！」

俺は、屋上のドアを勢いよく開けた。最後にまわった六組で、や

っと信用できる情報を得たのだ。「さっき、屋上にあがっていったの見たよ」と吉野という女子生徒が教えてくれた。

「リスト？　いるんだろ？」と、俺は屋上を大またで歩きながら叫ぶ。すると、「かずゆき！」と、意外な声がした。そして、あの感覚。背筋がゾッとする落ち着かない恐怖感。――畏怖だ。ということは……。

俺は、声がしたほうを振り返る。

「ケット」

「おはよう、かずゆき」

無邪気に微笑む、金髪の子供。リストの守護天使とかいうケットだ。たしか、エミサリ……エミリエ……なんだっけ。まあ、いい。とにかく……こいつはこいつで、リストとは違うきれいな顔をしている。肌は、月の砂のように白く美しく、目は吸い込まれそうな深みをもっている。髪もリストと同じブロンドだが、リストよりも輝きに満ちている。ラメ入りのヘアスプレーでもかけているみたいだ。まあ、神が自分の細胞で創ったバイオロボットだというのだから、このガキが美しくて当然か。神さまってのはよっぽど、完璧なのが好きなんだな。それにしては、人間は欠点ばっかりだ。さぞかし、がっかりしただろうよ。

「よう、リストはどこだ？」と、俺はポケットに手をつっこみながら、尋ねる。

「それなんだけどね」と、ケットはとことこ俺のとこにかけてきて、人差し指をたてた。「シーッ」

「は？」

シーッ……て。静かに、てことだよな。神さまも人間も共通のジ

エスチャーか？
「なんだよ？」
「今、リストは休んでるの。ほら」
ケットはそう言って、俺が来たほうを指差した。そこには、この屋上と三階をつなぐ階段を囲った階段室がある。扉は俺が勢いよく開けたせいで、全開になって止まっている。
「え？　どこにもいないじゃないか」
そりゃそうだよ。俺は、今、その階段から来たんだ。
「どこ見てるの？　上だよ」
「上？」
言われて、屋上に突き出した階段室の上を見る。
「あ」と、俺は声をあげた。階段室の屋根から足が突き出ているのが見えたのだ。まだ新品同然のうわばき。間違いない。リストだな。本当に休んでるよ。
「休んでる、てなんだよ？」
「夕べ寝てないから」
ケットは心配そうに、放り投げられている足を見上げた。
「寝てない？　なんだ、徹夜したのか？　転校生が」
「見つからなかったんだよ」
「なにが？」

そう尋ねると、ケットは俺をじっと見つめた。
「かずゆきに呪いをかけた人」
「あ」
そうか、そういえば、そんなこと言ってたな。呪いのほうは任せろ、今夜にでもなんとかする……とかなんとか。なんだ、えらそうなこと言っといて、出来なかったんじゃないか。
俺は、無意識に、にやりと微笑んでいた。
「なに笑ってるの？　和幸？」
「いやぁ……神も完璧じゃねぇじゃねぇか、て思ってな」
「え？」

＊　＊　＊

「おい、リスト」
誰だ？　誰かの声がする。男？
「リスト、起きろ」
しかも、しつこいなぁ。せっかく眠りにつけた、ていうのに……なんだよぉ。
オレは、ゆっくりと目を開けた。最初にはいってきたのは、まぶしい太陽の光だ。オレは思わず、また目をつぶる。
「徹夜あけで悪いんだけどな」と、その声は続けた。「聞きたいことがあるんだよ」

こんなに眠そうにしてるってのに、優しさのかけらもないなぁ。
今度は手で太陽をかくし、目を開く。ここなら誰にも邪魔されずに寝られるかと思ったんだけど……この人には、そうはいかないか。

「やあ、和幸さん」

そこには、腰に手をあてがって仁王立ちで立っている和幸さんがいた。

「よく眠れたか、リスト」
「ついさっきまでは」と言って、オレは体をおこす。「何の用ですか？」
「だから、聞きたいことがあるんだ、て」

和幸さんは、やれやれ、といった感じでため息をついた。そういえば、さっきもそんなこと言ってたっけ。しかし……寝起きの人間に、あまり期待しないでほしいよな。それに、オレは夕べ寝ずに歩き回ってたんだ。体は疲れてるし、睡眠足りてないし。それを叩き起こして質問攻めする気か？

「聞きたいことって？」

それでも……和幸さんがオレのとこにわざわざ来たんだ。それは重要なことで、そして『災いの人形』に関係することのはず。あとにして、というわけにはいかない。

「カヤの両親のことだ」
「はい？」

和幸さんは、その場にあぐらをかいた。上半身だけ起こし、ほぼ寝ているような状態のオレとは違い、背筋はぴしっと伸びて姿勢がいい。この人……根っからの真面目くん、かな。

「カヤには生みの親はいるのか？」

生みの親？　そんな質問がくるとはおもいもよらなかった。オレは「へ」と、まぬけな声をだしてしまった。

「オレ、『災いの人形』の話……しませんでしたっけ？」

「ああ、覚えてるよ。

カヤは、パンドラの箱の……えっと、なんだっけ。なんとかの粘土……」

和幸さんは、記憶をなんとか思い出そうと、あぐらをかいているひざを手で何度かたたいた。夕べ、一気に事情を説明したんだ。そう簡単に全部覚えられるとは、オレも期待はしていない。

「アプスの……」と、オレはつぶやくようにヒントを与える。すると、和幸さんは「あ」と声をあげてオレを指差した。まあ、ヒントというより答えそのものだったけど。

「そうだ、それ。『アプスの粘土』、だよな」

「正解。『災いの人形』は、『パンドラの箱』の中にある『アプスの粘土』から生まれる土人形。つ・ま・り……？」

オレは、その続きを和幸さんに視線で促した。ここまでくれば、分かるよね。というか、これはただの夕べのおさらいだ。

和幸さんは、どうも気に食わないような表情で、ぼやくように続きを言う。

「つまり、生みの親はいない……か」
「正〜解」
「だよな。てことは、やっぱり……アンリの予想ははずれ。カヤは単に売られるところだったわけだ」
売られるところだった？　なんだ、その話は？　オレは上半身をさらに起こし、和幸さんを見つめる。
「何の話ですか？」
「それも聞こうと思ってたんだ」
「なんだか……」オレは、ため息混じりに微笑した。「夕べのうちにいろいろあったみたいですね」
「まあな」
和幸さんは肩をすくめてそう言って、呆れたような笑顔をみせた。
あれ、なんだか……話しているせいか、眠気がひいてきていた。

『ストーカー』の正体

屋上の階段室の屋根の上で、和幸とリストは長話をしていた。ほとんど和幸が一方的に話し、リストはたまにうなずいていた。それは夕べ、リストの部屋で話したときと、逆のシチュエーションだ。

話の内容は、リストの部屋を出たあとに起きた出来事だった。カヤが家出をしようとしたこと。その原因である、カヤが盗聴した親と男の会話。そして、和幸がカヤに自分の正体を明かし、『おつかい』をさぼってカヤを連れ出したこと。

時間軸にそって、それを一通り説明すると、和幸は一仕事おえたかのようにため息をついた。

「と、いうわけなんだが……どう思う？」

リストは、しばらくじっと和幸を見つめて固まった。そして、やっと口を開いたかと思うと、「わお」とだけ言ってまた黙った。

そんな返答に和幸は満足するわけはない。不機嫌そうに眉をひそめる。

「おい？」

「いや、正直な感想ですよ。思わぬ急展開です」

「分かってる」

和幸は、頭をかいた。

「で、『災いの人形』は和幸さんの家に泊まったんですか？」

「は？」

頭をかいた手がぴたりと止まる。急な質問だった。しかも、予想

外の質問だ。

「な、何の話だよ？」

和幸は、あえてそこは話さなかった。話す必要もないと思ったし、話したくはなかった。カヤと一夜をともにした。その事実は、自分でも思い出すだけで緊張してしまうからだ。和幸は、鼓動が早くなっていることに気づく。

一方のリストは、楽しそうにニコニコして、さらに問い詰める。

「彼女を家から連れ出しましたとさ、おしまい。とはいかないでしょう？

そのあとはどうしたんですか？」

「どうでもいいだろ」

「いやぁ、そうはいかないなぁ」

「いいから！」と、和幸は顔を赤くしたまま、怒鳴った。「神の一族として、意見をくれ」

それは、いらだったような早口だった。リストは、怒鳴られてもびくともせず、逆におもしろがってクスっと笑った。だが、流石にこれ以上は和幸を本気で怒らせてしまう。リストは、そこはわきまえて、神の一族として話し始めた。

「そうだなぁ。その話だけじゃ、なんともいえない、かな。はっきりいって、よく分からない」

「……そうか」

「あ」と、リストは思い出して「ケット」と、自分の守護天使の名を呼ぶ。すると、リストの横に光の粒子が集まり、それはやがて少年の形へとかわっていった。はっきりと具現化すると、ケットはにこりと微笑む。

「はーい」
「話、聞いてたよね。どう思う？」
「うーん」と、神の遣いは首をかしげた。

和幸は、ぽかんとケットを見つめていた。ケットがいきなり現れるのは何度か経験してきたが、こうして目の前でマジックのような登場を見るのは初めてだ。そうか、天使というのは本当なんだな、とぼんやりと心の中で唱えた。

「ケットにもよく分からないや。でも……彼女が売られそうだった、ていうなら、人身売買、てやつでしょ。かずゆきの専門なんじゃないの？」
「あ、まあ……」

ケットは首をかしげて和幸を見つめた。光の中から現れた少年に話しかけられ、今更ながらに和幸は戸惑っていた。どうも、現実味がわかない。この神出鬼没の少年は、自分の幻覚か何かのような気がしてならない。

「そうなんだが……」と、和幸は目をそらして頭をかいた。「俺が気になっているのは、カヤが『災いの人形』として売られそうだったのかどうか、なんだ」
「え？」と、リストとケットは同時につぶやく。
「もし、あいつがただ、『美少女』として売られそうだったのなら、俺はそれで納得できる。そういうマーケットも確かにあるからな」
「マーケット？」と、ケットが首をかしげた。
「つまり……十代の少女だけを売り買いする市場もある、てこと」

天使といえど、見た目は幼い子供だ。つい、和幸は言葉を易しく

して説明していた。

「ただ……」と、和幸はリストへと視線を移して続ける。「俺はあいつが世界を滅ぼす力を持っていると知っている。すると……どうも、カヤを『災いの人形』として欲しがる奴に売ろうとしたんじゃないのか、と思えてならない」

「なるほどね」

リストはしばらく、ふーむ、と考えた。和幸の推理を聞いて、リストはある可能性を自分が見落としていることに気づき始めていた。もっと早くに思いつくべきだったのだろうが……眠気のせいだろう、とリストは思った。

「『災いの人形』を知っているのは、本当にごくわずかです」

「え？」

「神の一族や、それに関わる人間しか知らない。普通の人が知り得ることはまずありません」

「でも」と、和幸は顔をしかめた。「お前、俺に聞かなかったか？　カインノイエが『災いの人形』を知っているかどうか、て」

「念のため、ですよ」

「はあ？」

「神崎カヤを調べてる組織がある……そう聞いたら、『災いの人形』がらみじゃないか、て不安になるのは当たり前でしょう？　だから、念のため、確認したかったんですよ」

リストはなぜか自慢げにそう言った。確かに、的を射ている。和幸は、悔しそうに「それもそうだな」とつぶやいた。

「じゃあ、夕べの騒動は『災いの人形』がらみではない、とお前は

思うわけだな？」

やっと、結論に近づける、と和幸はややリラックスしてそう尋ねた。だが、リストの表情は逆に曇った。

「いいえ。『災いの人形』がらみだと思います」

「え？」

「どういうこと、リスト？」

驚いたのは和幸だけではなかった。ケットも思わぬリストの発言に目を丸くして、主人の顔をのぞきこむ。

「和幸さんの推理は正解だと思います」

「でも、お前、さっき言っただろ。神の一族とか、そういう奴じゃなきゃ、『災いの人形』のことを知りえない。だから、カヤがそれが原因で売られるはずはない。そうだろ？」

リストはじっと和幸を見つめた。いつものヘラヘラした顔はなく、真剣だ。

「その電話の男が、もし『そういう奴』だったら？」

「え？」

言われたことの意味が、和幸には理解できなかった。電話の男……つまり、カヤを渡せ、と言ってきた奴のことだろう。だが、それが『そういう奴』だったら、とはどういうことか？

「『災いの人形』には、親代わりがいます」

「え？」

「生みの親が存在しない『災いの人形』には、育てる親代わりが必

要です。その役目は、ある一族がエンキから託されていました」
　和幸は、『エンキ』という言葉を、夕べの記憶からほりだそうと努力した。まるで、テストのときのように。だが、いろんな違う語句が混じってうまく思い出せない。
「エンキって何だ？」と、早々と降参することにした。リストは、嫌な顔をすることなく、すぐに質問に答える。
「エンキは、君たち人間を創り出した神。つまり、君たちの味方。オレたちマルドゥク家の主さ」
「ちなみに、ケットはエンキ様の細胞で創られたんだよ」と、ケットは元気よく付け加えた。
「そうだった。悪い。で……そのある一族、てのは？」
「それは、アトラハシス」
「アトラハシス……」
「あ！」と、それまで大人しく黙っていたケットが声をあげた。ケットもここにきて、はっきりと分かった。リストが何を言おうとしているのか。
　一方で、和幸は、ゆっくりと『アトラハシス』という単語を頭の中で繰り返していた。何かは分からないが、どこかで聞いたことがある。きっとこれも夕べの話にでてきた名前だろう。だが、やはりそれがなんだかは思い出せない。
　和幸の難しい表情に、リストはすぐにそれを悟った。幼いときにリチャードから毎晩聞かされていた自分とは違い、和幸は夕べの一度だけしか聞いていない。全部覚えられずに当然だった。それでも、必死に記憶を呼び起こそうとしている和幸に、どこか申し訳なさそうにリストは微笑んだ。
「アトラハシスは、エンキのお気に入りの人間。大昔、人間を嫌う

神・エンリルが起こした大洪水のときも、エンキのおかげで彼の一族だけ生き残ったんだ」
「ああ、そういえばそんな話も……」

とはいったものの、あまりはっきりと思い出せなかった。記憶力には自信があるほうだったのに、と和幸は少々落ち込んだ。

「とにかく、アトラハシスは『災いの人形』を育てる親代わりの役目をエンキからさずかったんだ。特に、アトラハシス一族の王となる人間は、『災いの人形』を命をかけて見守る使命を与えられた」
「へえ……」と、和幸は力なく返事をした。不真面目な返事だったが、別に話を聞いていないわけではなかった。何かがひっかかっていたのだ。『災いの人形』、つまりカヤを守る使命をもつ人間がいる。それは、とても違和感のある話だった。なぜなら……

「なんで、そいつはここにいないんだ？」

ぽつりと和幸は疑問を口にした。リストは、真剣な眼差しで和幸を試すように見つめると、ゆっくりと結論を言う。

「……だから、戻ってくるんですよ」
「え」

リストは思い出していた。エノクの預言を。フォックス・エン・アトラハシスは、『収穫の日』、『災いの人形』を迎えに、『箱』とともに現れる。彼女はそう言った。エノクの預言は絶対だ。どういう形であれ、彼女が預言したことは必ず起こる。もちろん、『収穫の日』まではまだ二ヵ月もある。実際に現れるのは今ではないだろうが……

「彼は、彼女を迎えに来る」

リストは考え込むように、左手を口に当てた。

その横で、しばらくぽかんとしてから和幸はハッとした。

「つまり……電話の男が、そのアトラハシスだ、ていうのか？」

「じゃないかな、とオレは思いますけど」

リストはまるで、ごまかすようにおどけて言った。

「でも」と、和幸は思わず立ち上がる。「なんでだ？　カヤを守る使命があるのに、なんで今更カヤのとこに現れるんだ？　今まで何してたんだよ？　それに……そもそも…」

和幸の興奮が、急にさめた。ある、大きな疑問にたどり着いたからだ。

「そもそも、なんでカヤは神崎家の養女になった？」

まるで独り言のように言った和幸に、ケットは何度も頷いて賛同した。そしてリストも、「そうなんだよね」と低い声でつぶやく。これぱかりは、リストも全く分からなかった。エノクに教えてもらった住所にきてみれば、見知らぬ夫婦のもとで『災いの人形』は普通に暮らしていた。フォックス・エン・アトラハシスが、『パンドラの箱』ごと『災いの人形』をどこかに連れ去った後、一体何が起きたのか。それは誰にも分からない謎だ。本人に聞く以外、それを知る方法はないだろう。

＊　＊　＊

カヤを守る使命をもつ人間がいる。それは、なぜか衝撃的だった。なぜ、それがこんなに俺を動揺させているのか、自分でも分からない。うまくいえないが……カヤが急に遠い存在になった気がした。なんだろう、この感じ。そうだ、あれに似ている。あると思っていたテストが、急に延期になったときのような、肩透かした気分。なんなんだ？

俺がそんなことを考えていると、珍しく真面目な表情で考え込んでいたリストが、人差し指を高々に挙げた。

「ちなみに」と、高いトーンで切り出すと、俺を見つめる。どうやら、この人差し指は、俺の注意をひくためのものみたいだ。

「和幸さんに呪いをかけたのも、アトラハシスです」

「は？」

「細かい説明はめんどうなんで、とりあえず、それだけ飲み込んでください」

確かに、これ以上、新しい単語をだらだら並べられても余計混乱するだけだが……急に、そんなことを言われても、「はい、そうですか」とはいかない。

「言う必要はないと思って、夕べは言いませんでした。でも、ここまで話が進んじゃうと、言わざるをえない、というか……」

「ちょっと待ってくれ。なんで、アトラハシスが俺に呪いなんか？」

混乱している俺に構う気はないのか、リストは俺を無視して淡々と話を続ける。

「オレが寝ずに探していたのも彼です。つまり、彼はこのあたりにいる」

「おい、だから、なんで俺に呪いを？」

「どこからか『災いの人形』を見守っているのかもね」
「……見守る……？」

あれ。なんだ？
一瞬、時が止まったような気分になった。俺、大事なことを見落としていないか？

「どこの学校にいっても、必ずけが人がでたの。
それも、決まって私に近づいた男の子だった」

カヤの声が、俺の頭の中に響いた。心臓が強く波打つのを感じた。

「そうだ」

俺は放心状態でつぶやいた。

「『神崎カヤに近づくな』」
「え？」と、リストとケットがまた声をハモらせた。

そう、俺は思いだしていた。夕べの呪い騒ぎで見たあの鏡に書かれた血文字を。一夜で多くのことが起こりすぎて、思わぬ大事なことを忘れていた。リストに聞かずとも俺は知っていたんだ。あの呪いが誰の仕業か。カヤに近づく男がケガをするという呪い。カヤを何度も転校においやった呪い。それは、カヤの『ストーカー』の仕業。

いや、違う。

「『ストーカー』じゃなかったんだ」
「は？」

「ずっと守ってたんだ、カヤを」

意外なかたちで、俺とカヤの『ストーカー』捜査は終わりをつげたようだった。

カインノイエ誕生

「さ、どうぞ、神崎さん」と、藤本さんは紅茶がはいったマグカップを渡してくれた。ふんわりとりんごの香りがする。藤本さんは、ジンジャーアップルという紅茶だ、と教えてくれた。しかし、私はそれ以上にマグカップが気になった。渡されたマグカップはいびつな形をしていて、取っ手は今にもとれてしまいそうだ。といっても、決して古いわけではない。作りが甘いのだ。私は一目で分かった。これは、藤本さんの『子供』が作ったマグカップだ、と。

藤本さんも、同じようないびつな形のマグカップを持って、イスに腰をおろした。嬉しそうに頬をゆるませて私に言う。

「小学校の工作で作るらしいんですよ。これだけ子供が多いと、もう買う必要もなくなってしまってね。お客様にだすときには、さすがに心苦しいんですが」

そういいつつも、表情は自慢げだ。私もつられて笑みがもれる。

「皆、同じ小学校に通うんですか？」

私は、写真を見回してからそう尋ねた。

「ええ。古い友人が校長をしている小学校が近くにありましてね。カインの子供達は、皆、そこに通わせています」

「そうですか」

その友人は、全部知っているのだろうな、と私は思った。いくら子沢山と嘘をついたとしても、こんなにいては誰でも疑問をもつ。

「持つべきものは友、とはよくいったものです」
冗談なのか、皮肉なのか……藤本さんは、明るい調子でそういった。
「さて」と、藤本さんが話を戻したのは、私が二口ほど紅茶を味わったあとだった。
「もったいぶるほどの話でもないですから、さっさと始めましょうかね」
なんだろう。緊張してきちゃった。一体、何の話をされるのか見当もつかない。さっきまでの話の流れだと……きっと、和幸くんの話なんだと思うんだけど。
藤本さんはふうっと一呼吸いれてから、写真をながめて話し始める。
「あなたは知らないでしょうが、ずいぶん前から、ここトーキョーでは、クローンは裏世界で商品として取引されていました」
あれ、急にクローンの話？　私は、なんだか拍子抜けした。クローンのことは確かに気になるけど……この話がどうさっきの話につながるのというのだろう。
「何十年も？」と、私は戸惑いつつも相槌をいれる。
「具体的には、三十年ほど前でしょうかね。トーキョーの裏社会で、ビジネスとして、クローンが注目され始めたのは。そのときは、駆け出しのビジネスで、まだ小さなものでしたが」
「……」
「神崎さん？　どうしました？」

私がぽかんとしているので、藤本さんは心配そうに見つめてきた。
「あ、いえ……ちょっと、驚いただけです」と、私は無理して微笑んだ。

本当は、『ちょっと』どころじゃなかった。信じがたい事実に、私は呆然とした。知らなかった。和幸くんがクローンだ、て聞いて、初めて未だにクローンが造られているってわかったというのに。それが、まさかビジネスになっているなんて……しかも、さっき、藤本さんは『商品』と表現した。クローンが秘密に造られ、裏で売り買いされているってことだよね。それも三十年もの間？

てことは、もしかして、和幸くんもそうやって売られたり、買われたりしてきたのかな？　まさか……藤本さんが、和幸くんを買ったの？

「わたしは」と、藤本さんが、机の上の写真たてを手にとって言った。「ある事件がきっかけで、『創られた』子供……つまり、『クローン』に興味をもちました。今思えば、それは最大の過ちであり、大きな転機でした」

私は、その『ある事件』をたずねるべきか、一瞬迷った。でも……ここまでいろいろと教えてくれている藤本さんのこと。あえて言わないのは、言いたくないからじゃないか、と思った。さっきの写真を見つめる藤本さんの顔が思い浮かぶ。救いをずっと待っている罪人のような、せつない表情だった。もう、あんな表情はさせたくない。私は、一度開きかけた口をぐっと閉じる。

「あるとき、彼らの置かれている境遇を知り、彼らを救わねばならない、と思い立ちました。そして、友人達とある組織をつくったの

です」

ある組織。私は、あ、と声を出した。

「つまり、カインノイエですか？」

藤本さんは、満足げにうなずく。

「そうなりますね。今のカインノイエの基となった団体です。でも、その頃は、『クローンを救う会』と名乗っていました」

クローンを救う会？　あれ、なんだか……想像と違う、かな。ううん。とても分かりやすい名前でいいよね。でも、分かりやすすぎはしないかな。

そんな私の小さな戸惑いに気づくわけもなく、藤本さんはまるで商品を説明するかのように流暢に話を続ける。

「もちろん、秘密裏です。クローン自体が秘められた存在ですからね、それは当然ですが。やっていたことは過激でした。クローン工場を爆破したこともあります」

ぼくは……。目の前の、もうおじいさんとも呼べるこの人が昔はそんなことをしてたなんて、想像もつかない。

「でも……」と、それまでスラスラ話していた藤本さんのペースが急に落ちた。渋い表情で机の上で手を組む。「それだけでは足りなかった」

「足りない？」

爆破で足りないなんて……それ以上の過激なことがあるのだろう

か。私には想像つかない。

「破壊行為をつづけているうちに、わたしは気づきました。本当にしなければならないことは……救う、ということは、ただ乱暴に破壊し、製造を止めればいいわけではないのだ、と」

「え」と、無意識に声を出していた。私はどうやら、藤本さんの『足りない』といった意味を吐き違えていたようだ。

「破壊だけでは誰も救えない。それはただ、正義を乱暴にふりかざしているにすぎない」

藤本さんは、白い眉の下でギラギラと光る瞳で私を見た。この人の目だけは、老いを感じさせない。野心を抱く若者のような目をしている。

「救うというのはそう簡単ではないのです。『結果』にも責任をもたなければならない」

「結果、ですか？」

「連れ出した子供たちの、その後です」

私は、ハッとした。そういえば……と、私の頭に、ある文章が浮かんだ。『クローン製造は禁止された』という、教科書にあった言葉だ。

この国は、以前はクローンを研究として堂々と製造していた。もちろん、すぐに他の国から批判があって禁止されてしまったけど。『クローン製造は禁止された』。教科書は、クローンについて、そんな言葉で締めくくっていた。私は、それになんの疑問をもったことはなかった。でも、そういえば……と、私は考える。そのとき生まれたクローンたちはどうなったんだろう？　その続きは？　製造

が禁止された……て、それで全部終わり？　それは、誰の視点での『終わり』なの？　藤本さんの言葉に、一気にそんな疑問があふれ出した。でも……私は偉そうなことといえない。そんなこと、今まで考えたことなかったもの。

藤本さんが言っているのは、きっとそういうことなんだ、と私は思った。

「我々が本当にしなければならなかったことは、『創られた』子供たちを助け出し、そして居場所を与えることではないのか、と思うようになったのです」

「・・・・・・居場所・・・」

「それからというもの、わたしは『創られた』子供を見つけ、あるときは盗み、助け出し、自分の子供として育てるようになりました」

和幸くんの、「藤本さんは俺たちカインの……親父、かな」という言葉が頭に浮かぶ。

「しかし、『救う会』の他の人間はそんなわたしのやり方が気に食わなかったようで、一人一人と去っていきました。そしてわたしは、あるときから、全て一人でやらざるをえなくなりました」

「たった一人で、ですか？」

私はぎょっとした。リーダーは藤本さん、とは聞いていたけど……副リーダーとか、秘書とか……こういう世界でどういう役職があるのかよく分からないけど、そんな人たちがサポートしているのだと思っていた。まさか、全部一人で仕切っているなんて。

よく考えれば、まわりの写真にはカインの少年少女たちと藤本さんしか写っていない。本当に、一人で皆を育ててきたんだ。これだけの子供たちの世話を、藤本さん一人で。信じられない。それは、どれだけの労力と苦労が伴うものだろうか。

全て、クローンの子供達の境遇を不憫に思っての行動だ、という話だけど……それだけでここまでするのかな。私は、変な違和感を覚えていた。藤本さんは良い人だと思う。話していてそれは分かった。でも、ここまでのカインの子供達への愛は『良い人』で済ませられるものではない。何か、もっと深いところに、根底に、藤本さんのクローンの子供たちへの愛の原因があるのではないか、と私は思い始めていた。

「そんなころ」と、藤本さんは声のトーンを少し高くして切り出す。どうやら、話が変わるようだ。「わたしは、ある男の家に『創られた』子供がいる、という情報を得ました」

さっきもでてきたけど……つくられた子供って、クローンのことかな。

「幸か不幸か……そこは一度、わたしが潜入し、達也という少年を助け出した家でした」

さらっと藤本さんは言ったけど、実際言っていることはすごいことだよね。こんな物腰の柔らかいおじいさんが、昔は、人の家に侵入して子供を助け出していたなんて……想像つかない。

「達也はそれを知ると、手伝いたい、と言い出しました。この家の勝手は自分には分かる。自分がいく、と。わたしは断固として拒否しました。しかし……達也はわたしに隠れて単独で行動し、そして子供を助け出してしまった」

「え！」と私は思わず声をあげた。子供が……そんなこと簡単にやってのけてしまうものだろうか。

私が驚いているのを見て、「ああ」と思い出したかのように言っ

て藤本さんは苦笑いをした。
「『創られた』子供たちの中には、特殊な子供たちがいます」
「特殊……？」
クローンである、と言う時点で充分、『個性的』なのに？
「体に……いえ、遺伝子に細工をされた子供たちです。そういう子供たちは、異常に体が丈夫だったり、身体能力や五感が並外れていたり、ごくまれに超能力のようなものをもっている場合もあります」
「ちょうのうりょく」
私は、まるでその単語を初めて聞いたかのような反応をしてしまった。超能力って……急に、話がどこか遠いところにとんでしまったような気分だ。
「ごく稀に、ですよ。わたしでさえ、今まで二、三人くらいにしか会っていません」
藤本さんは、まるで昨日の野球の試合を語るような、軽い調子でそういった。
「そう、ですか」と、私は笑顔で答えた。その笑顔はきっとひきつっていたに違いない。
「とにかく、それが始まりでした。
達也の活躍を聞き、助け出した子供たちが手伝いたいと主張しだしたんです。
そして、彼らはわたしの言うことも聞かず、自分たちで組織を作り出し、

訓練や役割、暗号までつくりだしたんです」
「すごい……行動力ですね」
「はい」と、藤本さんはため息混じりに答えた。

でも、その子供たちの気持ち、なんとなく分かるかもしれない。私も、小さいころは、お母さんのお手伝いがしたくて仕方なかった。おつかいに行きたかったし、料理を手伝いたかったし、洗濯も自分でしてみたかった。何か頼まれると、大人になった気分がして、すごく嬉しかった。内容は全然違うけど……その子供たちも、そういう気持ちだったんじゃないのかな。

そんなことを考えていたとき、ギイっときしむ音が聞こえた。藤本さんがイスの背もたれに背中を押し付けたのだ。窓の外に向けている視線は、きっと景色を見ているわけではないのだろう、と思った。藤本さんは、遠い昔を見つめている。

「それをみていて分かりました。まだ足りないのかもしれない、と」
「足りない、ですか？　一体、何が？」
「使命です」

藤本さんは、私に視線を戻すと、はっきりとした口調で言った。

「わたしは、どんなかたちであれ、彼らに『使命』を与えなければならないのだ、と気づきました」
「使命……ですか？」

使命……あまり使わない単語だから、いまいちイメージがわかない。それが分かったのか、藤本さんは優しく微笑み、注釈をいれるように付け加える。

「命の理由、ですよ。生きる意味です。

彼らは、それがほしくてほしくてたまらなかったのだと思います。
自らに使命を課すことで、『創られた』命に意味を与えようとしていたんでしょう」
「……」
なんだか、寂しいな。私は言葉がでてこなくて、ただ黙った。
「だから、わたしの言うこともきかずに、カインを名乗り始めた」
「え！　カインって、子供たちがつけた名だったんですか？」
本当に、全部子供たちが自分たちで創りだしたんだ。私は、驚きとともに感心してしまった。
藤本さんは、まるで自分の子供が褒められたかのように、目を細めてうなずく。
「はい。ここは教会ですからね。聖書も残っている。
どうやら、彼らはそれを読んでそこからもってきたらしい。
自分たちにあっている名前を」
「カイン……」
まさか、聖書にでてくる名前だったなんて。でも、私もそこまで聖書に詳しいわけじゃないけど……カイン、なんて全然聞いたことがない。
私が眉をひそめて考えていると、藤本さんが囁くように教えてくれた。
「初めて殺人を犯した人間の名ですよ」
「！」
「カインとは、最初の人類、アダムとイブの息子です。
彼には、アベルという弟がいました。

ある日、兄弟はヤハウェという神に捧げ物をしたのですが、神は弟のアベルの捧げ物を気に入り、カインの捧げ物は無視した。
それに嫉妬したカインは、弟のアベルを殺し、最終的にはヤハウェにより、『ノド』と呼ばれる場所に追放されました。
カインは人々に殺されるのを恐れた。そこで神は、彼が殺されないように……と、カインを殺せば七倍の復讐がある、と刻印を押したといいます。
これが、大まかなカインのお話です」

きっと、藤本さんもよく聖書を読んだりするのだろう。音読をするかのように藤本さんはすらすらとそう言った。

「本当のところ、なぜあの子たちがその名を選んだのか、よく分かりません。
なぜ、自分たちにそれがあっていると思ったのか……」

カインが誕生するときの話だ。まだ、『無垢な殺し屋』と呼ばれる前のはず。まさか、そのときから自分たちが人を殺すと思っていたんだろうか。私はそう思うと、なんだか悲しくなってしまった。
藤本さんも、同じ気持ちなんだろう。悲しい表情をうかべていた。

「とにかく……それならば、とわたしは組織に名をつけました。
彼らの居場所。彼らが帰るところ。
家……です」

――あ。
私は、ハッとした。

＊　＊　＊

「カインの家（カインノイエ）……？」

カヤは、まるで何かに乗り移られたかのように、ぽつりとそうつぶやいた。それに、満足そうに藤本はうなずく。

藤本は、ぼんやりと当時のことを頭にうかべた。キラキラした表情で、この部屋に来て、子供たちは命名披露した。カインという新しい名前を。そのときの彼らの顔は一生忘れられないだろう。それは、輝かしい未来を確信した表情だった。

子供たちは、組織名を『ノド』にしようとしていた。エデンの東にある、カインが追放された先の名だ。子供たちの意見を尊重しようと心に決めた藤本でも、その名前には賛成するわけにはいかなかった。藤本は、子供たちに、ここを『追いやられた場所』だとは思って欲しくなかったのだ。ここは、彼らを『迎え入れる場所』。藤本は、子供たちにそう思って欲しかった。

「彼らが望むなら、わたしはそれを守ろうと思いました。
たとえ人殺しになろうが、わたしは彼らを守り続けよう、と。
それが、彼らの幸せなら、と」

そこまで言って、藤本は一つ間をおいた。

「しかし」と、藤本は暗い表情をうかべる。「だんだん……わたしが与えた『使命』が彼らを縛り付けるようになっていった。『使命』を果たせばいいのだ。『使命』以外に生きる道はない。そんな風に考えるようになっていったのです。

そしていつからか……子供たちは、私を神のようにあがめるようになってしまいました。

わたしが全てだ、わたしが善なのだ、と。自分達で善と悪を区別することをやめてしまった。

自分たちの幸せまで考えなくなってしまったのです」

カヤは、同情するような視線で藤本を見つめた。

「わたしが良かれと思って与えた、かりそめの『使命』が、彼らを目隠ししてしまった。そんな気がしてならないのです。

本当はね、わたしは思うのです。『使命』は与えられることに意味があるのではない、と。

『使命』に疑問を持ち、考えること。そうしてやっと、自分の道を見つけられるのだ、と」

「自分の道、ですか？」

カヤのその質問に、藤本は「はい」と丁寧に返事をする。

「和幸が、あなたを助けるために、初めて『おつかい』をさぼったように」

「！」

カヤは息をのんだ。まさか、ここにきて自分の話がでてくるとは思いもしてなかった。

「え」と鼻から息がもれたような情けない声がでた。

「つい一昨日までは、何があっても『おつかい』は果たす、なんて言っていたんですよ」

藤本は、『おつかい』をやらなくてもいいのだ、と言った日のことを思い出した。今ここに和幸がいたら、顔を赤くして機嫌を悪くすることだろう。

「そう、だったんですか？」

「ええ。まったく……一体、何があの子を変えたのか……」

藤本はわざとらしくそう言った。藤本には分かっている。和幸を変えたものが何か。そしてそれは、今、目の前に座っている。

「考え、選ぶ、ということは、幸せなことです」と、話のまとめにはいるかのように、声の調子を変えて言う。「わたしはずっと、彼らにその幸せを知ってほしかった。でも……今まで、一度もそれに気づいた子はいなかった。気づく前に、皆……」そこまで言って、藤本はカヤを見つめた。心配そうな表情をしている。「皆、死んでしまうのです」なんて言ってわざわざ無用な同情をかう必要はないだろう。

それに、「なぜ？」と聞かれたら困る。流石に、その理由を彼女に話す気にはなれなかった。藤本は、その言葉を喉の奥に飲み込んだ。

「長くなってしまいました」と微笑むと、「とにかく、そういうわけで、わたしはあなたに感謝しています。あなたは、和幸の目を覚ましてくれた。彼に自分の生き方を選択するきっかけを与えてくれました。わたしに従うだけじゃない生き方。わたしに歯向かい、自分で決断する、という選択を」

「え……そんな……私が何かしたわけでは……」

カヤは、ここにきてやっとなぜ藤本がこんな話をしたのかは分かった。だが、それでも感謝されるのは落ち着かない。カヤには自分が何かをしたという意識は一つもないからだ。

「いやいや」藤本は接待をしているかのように言う。「ありがとう、と言わせてください」

藤本には分かっていた。ありがとう、と言っても、どういたしま

して、と返ってくるわけではないことを。藤本も、カヤが何かしたと思っているわけではなかった。和幸を変えたのは、人を変える奇跡の力。藤本自身も経験した、人生をも変えてしまう大きな力だ。

藤本は、三十年前に亡くした最愛の娘の写真を見つめた。そうだよなな、フィリオ。藤本は心の中でそうたずねた。

エミサリエス

雲ひとつない空の下、朝のひと時を屋上でリストと過ごしている。よく考えれば、ちょっと気持ち悪いぞ。なんで男二人で――ケットもいるが――真剣な顔して語り合わなきゃならないんだ。ま、事情が事情なだけにな……。

俺は、リストにカヤの『ストーカー』の話をしていた。最初に「実は、カヤには『ストーカー』がいるんだ」と言うと、リストは「なんで、早く言わないの？」と驚いたように文句を言った。とはいっても、まさか、『ストーカー』が神さまのごたごたに関係しているとは思わなかったからな。カヤは誰もが認めるほどの美人だ。『ストーカー』が一人しかいないことに驚くくらいだよ。

「なるほどね。そんなストーカー騒ぎが……」

一通り聞いて、リストはそうつぶやいた。声にどこか疲れが伺える。神の一族も疲労はあるのか。俺はのんきにそんなことを考えた。

「どう思う？　全部アトラハシスって奴の仕業だろ？」

「おそらく」

リストは短く返事をした。もっと大きなリアクションを期待していたんだが……。

「でも、なんで夕べの時点で言ってくれなかったんですか？」

「本当にただのストーカーだと思ってたんだよ。それに、お前の話を把握するので精一杯だったし。てか、お前だって俺の呪いがアトラハシスの仕業だ、ていわなかっただろ」

「まあ……そういわれたら、そうか」

リストは、確かに、とひきつった笑顔をみせた。
そもそも、ストーカー騒動と『災いの人形』がつながるとは、夢にもおもってなかった。まさか、ストーカーが、カヤの隠れたボディガードだと誰が思うかよ。今だって、正直、飲み込めていない。だが、カヤのストーカーを捕まえようと始めた『おとり捜査』でひっかかったのは、アトラハシスだったんだ。ストーカー＝アトラハシスは明らかだよな。

「ところで」と、リストは軽い調子で切り出す。「今、『災いの人形』はどこに？」
「『実家』、あ、いや、カインの事務所にいる」
「安全なんですか？」
「ああ。藤本さんがついてるから、何かあったら連絡来ると思うし」
ポケットから携帯を出して、ちらりと見た。メールも着信もない。
「それに」と、携帯を戻しながらリストに目をやる。「すぐにでも戻るつもりだから」
一時間目はでるつもりだったが、どうせカヤのことが気になって集中はできないだろう、と思うと出る意味がないように思えた。リストに聞きたいことも全部聞いたし、学校にはもう用はない。
「これからどうするつもりですか？」
急に、リストは真剣な表情でそう聞いてきた。どう、て……
「さあな。とりあえず、しばらくはカインノイエでカヤをかくまうよ。

神崎が探してるだろうからな。学校も当分は休ませる」

ふと、アンリの顔が浮かんだ。真っ赤な顔でかんかんに怒っている。そうだよなぁ。カヤが学校に来なくなって一番困るのは、アンリだよな。

それに……と、今度はカヤが頭の中に浮かんできた。放課後、劇の練習をしているカヤだ。夕焼け時に台本を眺めるカヤの横顔は絵画のようで、俺はいつも見つめていた。無駄に長いセリフもすぐに覚え、リアルな演技でアンリを喜ばせ、相手役だった小倉はいつも居心地が悪そうだった。そういえば、劇の練習中、カヤは輝いていた気がする。もしかして……と、俺は思った。あいつ、あの馬鹿げた劇を、楽しんでたんじゃないだろうか。

「それがいいだろうね」というリストの言葉に、俺は現実に引き戻された。

「こっちはひき続けてアトラハシスを探す。その間、彼女をお願い」

「あ、ああ」

リストは、勢いをつけて立ち上がると、うーん、と伸びをした。

だが、探すって……この広いトーキョーでどうやって探すつもりなんだ？　現に、夕べ徹夜して見つからなかったんだろう。そもそも、このあたりにいる確証はあるのか？　俺は確かに呪いをかけられたが、そのときにアトラハシスに会ったわけでは……

あ！　と俺は、あることを思い出す。そういえば、と俺は思わず立ち上がった。

「俺、アトラハシスに会ってる」

「え？」

リストとケットがきょとんとして俺を見てきた。
そうだ。夕べ、俺は会ってる。変な人物に。
「赤い眼の女だ。あいつの眼を見てから、変なことが起きた。
あいつがアトラハシスなんじゃないか？」
そう。俺を待ち構えていた変な女。顔はよく見えなかったが、スタイルのいいシルエットをしていた。外国のモデルみたいなスタイルだった。そして、あの眼。赤くぼんやりと光って、俺の思考は一瞬止まった。そして、心臓がつかまれるような痛みを感じてその場に倒れてしまった。俺の幻覚かと思っていたが……ケットが現実だと分かった今、あの女も現実なんだ。ということは、あいつが俺に呪いをかけたアトラハシスだ。
あれ、でも……リストはいつも『彼』と言っていた。まさか、あれは男だったのか？
そんな疑問をうかべていると、リストの笑い声が耳にはいってきた。
「え？」と、とぼけた声をだすと、リストは笑いながら左手の平をだしてきた。笑いがおさまるまでちょっと待ってて、ということか？
「違う違う」
そこまで爆笑することなのか？　リストは、笑いで途切れた息を整えながら言った。
「それはアトラハシスのエミサリエスさ」
「え？」
「エミサリエスは、神の遣い。神の細胞でできたバイオロボットだよ」と、ケットが嬉しそうに飛び跳ねて言った。

ああ、それは覚えてるさ。このケットも、エンキとかいう神が創ったバイオロボットなんだよな。で、あの女もそうだ、ていうのか？　それにしては見た目が違いすぎる。あれは、妖艶な女だった。いろんなタイプがあるんだろうか。

「どういうことだ？」

自分で考えていてもどうにもならない。俺はリストにたずねる。また膨大な意味不明の単語がでてくるんじゃないか、という嫌な予感を抱きながら。

「エミサリエスはね、ドラと呼ばれる神さまからの贈り物に宿る神の遣いだ」
「どら？」

ほら、みろ。さっそくだ。ドラ……俺の頭に浮かんだのは、麻雀だ。一度、広幸さんに誘われて麻雀をしたときに、そんな単語がでてきたのを覚えている。もちろん、今、リストが言っているドラとは全く別物だろう。

「ドラっていうのは」といいながら、リストは左手を空高く挙げた。この行動、見覚えがある。リストの左手に、光の粒子があつまり、急に大きな剣が現れた。リストはその柄をぐっとつかむと、俺に向かって剣をかかげた。
この剣、そうだ、夕べ俺をさした剣。気のせいだと思うが、俺の腹がちくっと痛んだ。

「ケットの場合、ドラはこの剣。『聖域の剣』っていうんだけど。オレの一族、マルドゥク家の王は、代々この剣を引き継ぐんだ。つ

まり、これは王の証ってわけ」
「それで」と、ケットは話したそうに早口でリストに続く。「その剣を引き継いだ人が、ケットの主人になるんだよ」

ふーむ。よく分からないな。

「つまり」と、俺は頭をかいた。「この剣に、お前が宿ってるのか」

ケットを見下ろしてそういうと、ケットは元気よくうなずく。
『宿る』、か。そんな言葉もスピリチュアリティで、今までろくに使ったことがない。そういえば、アニミズムとかいう思想があったな。万物に神が宿る、とかなんとか。今は関係ないけど。

「それで、この剣を持ったものが」そこまで言って、ケットに指をさす。「こいつの主人になる」
「そう」

リストは満足そうに微笑んだ。
ドラの説明はもういいと思ったのか、夕べのときのように、リストは剣をぽいっと放り投げる。つい、それを受け取りそうになるが、このあとどうなるか、俺はもう知っている。予想通り、煙のように剣は消えた。

「エンキがマルドゥク家に、ケットが宿る『聖域の剣』を遺したように……
神々は、エリドーを去るとき、様々なドラを遺していった。
オレたちにも、一体いくつのドラがこのエリドーにあるのか、把握しきれていない。
中には、多分、遺物として博物館に保存されちゃってるのもあるかもね」

そう言っていたずらっぽくリストは笑った。だが、笑い事か、それ？

「ドラには、それぞれエミサリエスが宿ってるんだよ」

間髪いれずにケットがそういう。

「神々がそれぞれ違う力をもっているように、エミサリエスもそれぞれ違う能力を持っている。基本的に、創った神の力を受け継ぐんだんだけどね」

「そういうこと」と、リストはケットの頭をなでた。「姿かたちもそれぞれ。和幸さんが見た赤い眼の女って、髪がうにょうにょして、浅黒い肌で色っぽいお姉さんじゃなかった？」

え……と、俺は戸惑う。肌の色は確認できなかったけど……あのシルエットは間違いなく、『色っぽいお姉さん』といえるだろう。そして、『髪がうにょうにょ』。なんて適当な表現なんだ、と呆れてしまうが、確かに、それは俺が夕べ見た女の髪を言い表している。

「何で分かるんだ？　お前も会ったのか？」

「いや、オレは会ったことないけど、リチャードが……オレの前の王が会ったことがあって、そいつから聞いたんだ」

「ケットは会ったことあるよ」と、ケットは嬉しそうに手をあげた。

「しかし、これではっきりしたよ。間違いない。アサルルヒのエミサリエスだ」

リストは腕を組んで、満足そうに言う。

「これで、確証を得たね、リスト」と、ケットはわざわざ難しい言

葉を使って言う。

おいおい、俺、置いていかれてるよ。

「アサル……なんだって？」

「アトラハシスの一族も、ある神からドラを授かったんだ。彼らも、一族の王がそれを代々引き継いでいる。そして、その神はアサルルヒ。エンキの……部下、みたいなものかな」

「部下、ねえ」

分かりやすく説明するために、そんなたとえをしたんだろうが……なんだか一気に気がぬけた。

「アサルルヒ様は呪術を得意とされてね、だから、そのエミサリエスも呪術を操るんだ」

ケットはいつも楽しそうだな。キラキラした瞳で俺を見上げながらそう言った。

なるほど。段々、分かってきた。天使（エミサリエス）は、創った神によって能力が違う。そして、天使（エミサリエス）が宿った贈り物（ドラ）を手にしたものは、その能力を使うことができる。もしくは、天使（エミサリエス）を操ることができる。そんなところか。

そうか、だからリスト達には分かったんだ。呪術を操る天使（エミサリエス）を使役しているのはアトラハシスだから。俺が呪いにかかったという時点で、アトラハシスが犯人だといっているようなものなんだ。

だが、それが分かったといって、俺の本来の疑問は解決されていない。

「俺が会ったのがエミサリエスだ、ということは納得した」

「そりゃよかった」

「だが、違う疑問がある」と、俺は頭をかく。「アトラハシスは、本当にこのあたりにいるのか？」

それを聞いたリストは、しばらくきょとんとして、それからケットを見下ろした。ケットはその視線に気づくと、自分の仕事を思い出したかのように、「ああ」と声をあげる。

「いるよ」

「……はっきりいうな」

「エミサリエス同士は、存在を感じることが出来るんだ」

また、スピリチュアリティな……。

「この辺に居るのは感じ取れるんだ」

そう言って、ケットは周りを見渡した。この辺……といっても、見える範囲でも気が遠くなる広さだ。

「はっきりと居場所が分かるわけじゃないらしいんだけど、少なくとも、距離はなんとなく分かるらしいんだ」

リストは真面目な表情でそういった。

なるほど。通りで徹夜になったわけだ。『気配』なんていう抽象的なもので探そうとしたら、そりゃ疲れ果てる結果になるだろうよ。

「ご苦労なこった」

大変だな、手伝おうか？　なんてうわべでもいえるわけはない。俺にいえるのは、そんな冗談交じりの言葉だけだ。

＊　＊　＊

「にしても」と、リストはにやにやとして言った。「不思議ですね」
「なにがだ？」

とっくに一時間目が始まっていることに気づき、階段室から屋上へと降りたときだった。ケットはすでに姿を消し、屋上には和幸とリストだけになっていた。
リストは、和幸が降りてくるのを見ながら怪しげな笑みをうかべている。

「夕べまでは、『おつかい』最優先、なんて言ってたのに……
今日になったら、『カヤを連れ出した』だなんて。
いろいろ気が変わりすぎじゃないですか？」

和幸は、リストの怪しげな笑みに、めんどくさいことになりそうだ、とため息をつく。

「俺もわからねぇよ。気づいたら、こういうことになってて……」
「へえ」

わざとらしい声でそういうと、リストはゆっくりと和幸に歩み寄り、まじまじと見つめた。不気味な笑顔に、和幸は後ずさる。

「なんだよ？」
「あるよねぇ。そういうの」と言って、リストは和幸に背を向ける。
「理屈じゃ考えられない心境の変化」
「は？」
「なんだっけな～、それ」と、腕を組んで首をかしげる。あまりのわざとらしさに、和幸は苛立ちさえ覚えた。まるで、幼稚園のお遊

戯会の演技のようだ。
「何が言いたいんだよ？」
和幸のそんな苛立った声に満足したのか、急に「あ！」と手をたたき、リストは振り返る。
「恋、だ！」
「はあ！？」
和幸は思わず叫んだ。リストは構わず、軽い調子で続ける。
「理屈じゃ考えられない心境の変化。人に不思議な力を与える魔法。世界に奇跡をもたらす力。それは、恋」と、まるでシェイクスピアの演劇をしているかのように、大げさに両手を広げながら言い放つ。
和幸は、今まで経験したことのない絡みに、言葉をなくし、口をぱくぱくさせた。何か言いたいのだが、言葉がでてこない。それをいいことに、リストはさらにまくしたてる。
「誰かに恋したんでしょ？」
「なっ」
「誰かなぁ？」
くすっと微笑むリストは、無邪気な少女のような可愛らしさがある。和幸は、殴りたい衝動にかられたが、そのせいで手がだせなかった。
「馬鹿げたことを！」と、顔を赤くして、和幸はやっとのことで言葉をしぼりだした。
その言葉に、リストは目を丸くする。自信たっぷりに「本気だよ」

と言うと、和幸をのぞきこむように見つめる。
「人間(ルル)なのに、愛を信じてないの？」
「は？」

今まで全力で和幸をからかっていたリストが、急に真面目な表情になった。その急激な変化に、和幸は戸惑い眉をひそめた。

「人が」と、リストは低い声でつぶやく。「人が最後に神に対抗できるとしたら……それは、愛の力だと思うんだけどな」
「愛は世界を救う、てのか。バカらしい」

和幸は、そうはき捨て、足早に歩き出す。リストはあわてる様子もなく、そのあとをのんびり歩いてきた。

「そうかなぁ。オレは至って真剣だけどな」
「そもそも、俺が誰に、愛を抱いてる、ていうんだよ」

その言葉を最後に、和幸は屋上を去った。あまりに動揺していたのだろう。リストがまだ残っているというのに、ばたん、と勢いよく扉を閉めてしまった。
残されたリストは、ただぽかんとした。置いていかれたことが寂しかったわけではない。和幸の言葉が信じられなかったのだ。

「うっそー……耳を疑ったよ、今」
「ね」と、消えたはずのケットがリストの横で立っていた。
本来は、エミサリエスは、主人が名前を呼んだときしか現れてはいけない。だが、前の主人であるリチャードがルールに甘い人物だったため、ケットはそういう意識に乏しくなっていた。リストも、もうすっかり慣れて気にしていない。

「なあ、ケット。あれは、和幸さんなりののろけだと思う？」
ケットを見ることなく、和幸が閉めた扉を見つめてつぶやく。
「さあ」と、ケットは微笑んだ。「本当は分かってると思うよ、リスト」
「え？」
「照れ隠しだよ」
「照れ隠し、ねぇ」
リストは、ふうん、と首をかしげた。
「本当に、興味深い人だ」

愛という名の神

朝日がステンドグラスを照らし、様々な色の光が教会にあふれている。藤本とカヤは、最前列のチャーチチェアーに並んで座ってそれを見つめていた。

二人は、ある人物を待っていた。話がおわってから、藤本は一本の電話を誰かにやった。ここに来るように、という内容の電話だった。カヤは誰が来るのかは知らない。和幸以外のカインの誰かだ、ということだけ藤本は教えてくれた。

待っている間、藤本はたわいもない話をカヤにしていた。ほとんどが和幸の小さい頃の話で、教会にはずっと笑い声が響いていた。

一通り、和幸の恥ずかしい幼少時代の話をすると、藤本は黙った。あれ、とカヤが藤本に振り返ると、藤本はステンドグラスを見上げていた。その視線をたどるようにカヤもステンドグラスに目をやる。

ステンドグラスには聖母マリアと幼子キリストが描かれている。青い衣をまとって赤子を抱く聖母マリアの頭上には、輝く白い鳩が羽ばたいている。

「そういえば」と、カヤはずっと疑問だったことを口にする。「どうして、ここを選んだんですか？　ここって、カインノイエの事務所、なんですよね」

すぐに返答はなかった。藤本は、カヤを見ることもなく、しばらくステンドグラスを見つめていた。何かを懐かしく思い出すような表情だ。

「ここがまだ教会だったころ、ここの神父がわたしに言いました」

「え？」

やっと藤本が口を開いたかと思えば、質問とは程遠い答えが返ってきた。いきなり、何の話かとカヤは目をぱちくりさせた。

「神は『愛』なのだ、と」

「愛？」

カヤは、そんな風に考えたことはなかった。斬新だな、と思いつつも、どういう意味なのだろう、と首をかしげる。

藤本は、ただステンドグラスを見つめて、言葉を続けた。

「この世に愛がある限り、人は救われるのだ、と教えてくれました」

「素敵な言葉ですね」

カヤは、優しく微笑んだ。この二人の様子を今誰かが見れば、二人を仲のよい祖父と孫だと思うだろう。

「わたしも、そう信じたいと思っています。

だから、ここを買い取ったのです」

「！」

「神父はアメリカの方でした。どうしても帰国しなければいけない事情があり、ここを手放された。だから、わたしはここを買い取りました」

やっと現実に戻ってきたかのように、藤本はにこりとほほえみ、カヤに振り返った。その表情は、穏やかなカインの『父親』に戻っている。

「深い事情はないのです。ただ、神父の言葉が好きだったからです。

それに、これは後付かもしれませんが……

誰にでも扉を開く教会。それは、カインたちにはぴったりな家だ

と思うのです」
「……そうですね」

カヤは、複雑な事情があったわけではないことに、内心ホッとしていた。藤本の話にはいつも寂しい物語が隠れている。なにも知らない自分が、軽い気持ちで質問していいのか、不安だった。質問しようとすると、常に、カインの写真をながめる藤本の表情がうかぶのだ。

だが、今回は違った。暖かい話だった。カヤは、安心したように微笑んでから、目をつぶった。

「愛がある限り、人は救われる……」

カヤの透き通るように澄んだ声が教会に響き渡る。カヤは宗教にかかわったことは今までなかった。教会に入ったのも、これが初めてだ。これからはいろうという気もない。だが、その言葉は、素直に信じてみたいと思った。

そのとき、ばたん、と扉が開く音が教会の後ろから響いた。驚いてカヤと藤本は振り返る。

「お待たせ～、ぱぱ！」

今にも下着が見えそうなスカートをひらひらとなびかせながら、セーラー服を着た少女はモデルのように中央の通路を堂々と歩いてくる。胸まであるウェーブのかかった黒髪が、ふわふわと歩くたびにゆれた。清楚で幼げな顔に、その大人びたウェーブはミスマッチしている。

「急に呼び出してすまないね」と、藤本は立ち上がり、カヤもあわ

てて立ち上がった。
その頃には、少女は二人のすぐ近くまで来ていた。にこっと微笑む唇のグロスが、朝日できらりと輝く。
「ユーアーウェルカム」と、ランダムな英語を言いながら、少女は藤本の前で立ち止まった。カヤはその間も、彼女のミニスカートの動きが気になった。下着が見えはしないか、と心配で仕方がない。
「その子？　電話で言ってた、紹介したい子って？」
少女は、藤本の隣にいるカヤを見やる。カヤは、「初めまして」と言おうと口をあけたのだが、それを少女の甲高い声が邪魔をした。
「その服！？」
いきなりそう叫ばれ、カヤはびくっと体をこわばらせる。
少女は、カヤに近づくと、服をまじまじと見つめた。
「あの？」
「どこで買ったの？　私も同じの持ってるんだけど」
「え？」
カヤはその言葉にハッとした。もしや……と思った。この服は、自分のではない。この服は……
「もしかして、トナミ、さん？」
おそるおそるカヤはたずねた。そう、これは和幸から借りた服だ。和幸は言っていた。よく泊まりに来るトナミという人物の服だ、と。
少女は、その言葉に、服をチェックするのをやめて、カヤを真正

面から見つめる。
「そうだけど？　あなた誰よ？」
「彼女は神崎カヤさんだ」
相変わらずの勢いの砺波に苦笑しつつも、藤本は横からそう言った。その名前に、砺波は「は！？」と声をあげ、藤本に振り返る。
「なんで？　神崎カヤって、確か……」
そこまで言って砺波は、あわてて口を閉じた。「確か、和幸が騙して近づいてる女でしょ？」そのセリフは、事情が分からない今は、リスクが高い。もしかしたら、今も騙している最中かもしれない。
和幸に、カヤに近づけ、という『おつかい』を伝えたのは砺波だった。恋愛とは無縁の和幸がこの『おつかい』をどうこなすのか、砺波は気になって仕方がなかった。それからというもの、自分の『おつかい』でもないのに、しつこく和幸に進展を聞いていたものだ。そのせいで、神崎カヤはまるでドラマの登場人物のような感覚で、まさか、自分が本人に会うとは思ってもみなかった。
砺波は落ち着かない表情で、じーっとカヤを見つめる。その様子に、藤本は、ははは、と笑い声をあげた。
「大丈夫だよ、砺波。彼女は全部知ってる」
「知ってる？」
それはそれで、おかしなことだ、と砺波は思った。騙しているのを知っていたら、騙せないじゃないか、と。
「どうなってんの？」
「事情がかわったんだよ」

「……ふーん」

砺波は、カインの中でも、特に藤本への『信仰心』が強い。藤本が言うならば、それでいい。疑問などいらない。そういう考えの持ち主だ。今回も例外ではない。藤本が、事情が変わった、というなら、それでいい。彼女にとって、問題なのは……

「で、私に何して欲しいの？」

それだけだった。

ガールズトーク　―上―

「これ、かわいくない？」

砺波ちゃんはそう言って、黄色いビスチェドレスを体にあてて私に見せた。ふわふわな胸元に、スカートはドレープチュール。かわいいお姫様みたいなドレスだ。あどけなさが残る可憐な顔の砺波ちゃんには、よく似合いそう。私は、力強くうなずいた。

「よく似合うと思う」

「そう？　ありがと」

実際は、私の意見は求めていないのかもしれない。砺波ちゃんは、軽い調子でそう答えると、ドレスを元の場所に戻し、違うドレスを観察し始めた。

私は、砺波ちゃんと買い物に来ている。電車に乗って、都心の大型ショッピングモールにやってきた。ついて早々、このモールの名前を確認する暇もなく、砺波ちゃんは私を中へと連れ込んだので、私は今、自分がどこにいるのか正直把握していない。たまに、フロアの地図がおいてあるけど、砺波ちゃんはそれを見る時間すら許してくれない。立ち止まろうとすると、「なにしてんの？」と腕をひっぱられる。女子高生のショッピングはこういうものなのかな。すごく……情熱的。

寂しい話だが、女の子とこうしてショッピングに来るなんて、小学校ぶりかもしれない。私は、中学校にはいってから、段々と同性に嫌われるようになった。理由は分からない。何かしたつもりは全くなかった。急に、「ちょっとかわいいからって」という言葉をよく耳にするようになり、冷たい目で見られるようになった。こう言うと自意識過剰にきこえるかもしれないけど、私は何をやってもう

まくできた。自分でも不思議なくらいに、なんでもできてしまう。だから余計に、反感を買うことが多かったのだ。

「カヤ？　なに、つったってんの？　やる気あるわけ？」

「え？」

気づくと、砺波ちゃんが腰に手を当てて私をにらんでいた。

「ごめん」

私……いつのまにか、感傷にひたってたみたい。

「ここのドレス、いいのないわ。次、いくわよ」

そういうと、砺波ちゃんはまた私の腕をつかみ、ずかずかと店を出て行った。

私はひっぱられながら、私の腕をつかんでいる砺波ちゃんの手を見つめる。こうして腕をひっぱられてお店をまわるのは、私にとって新鮮で、すごく楽しいことだった。自然と笑みがこぼれていた。私は、ずっとこういうのに憧れていたんだ。

「あ、あれ、かわいくない？」と、突然、砺波ちゃんは立ち止まる。「シャトー」という名前のドレス専門のお店だ。店の奥に展示されているミントグリーンのドレスを砺波ちゃんは指差した。

＊　＊　＊

砺波は、展示されているミントグリーンのカクテルドレスをまじまじと見つめていた。オーガンジー生地のふんわりとしたスカートには紫の花びらの刺繍がちりばめられている。砺波は一目ぼれした。

その隣で、カヤはただ突っ立っていた。こんなドレスばかりの店に入るのは初めてで、落ち着かない。

「ねえ、砺波ちゃん」と、カヤは、このモールに来てからずっと疑問だったことを聞こうと決心した。

「なに？」

「なんで、ドレスなの？」

その言葉に、「は？」と砺波はきょとんとしてカヤに振り返る。

二人がこうしてモールに来たのは、カヤの私服を買うためだった。あわてて家を出ることになったカヤを察した藤本は、砺波に一緒に服を買いに行くように頼んだのだ。

だが、来てからというものカジュアルな服を見ることは一度もない。別にそれが不満なわけでもなかったが、あまりにもドレスを真剣に探す砺波に、カヤは単純に聞きたかった。

「パーティがある、て言ったでしょ」

さも、当たり前かのように自信満々に砺波はいいきる。だが、実際はそんなこと一言もカヤに告げてはいない。ここに来る電車の中でも、砺波はずっとクラスの男子の悪口を言っていたし、モールに来てからは目に入る店を次から次へと厳しく評価していた。だが、そう言っても、砺波は気にも留めないだろう。カヤはそう悟ると、ただ苦笑いをうかべる。

「パーティって？」

遠慮がちにカヤがそう聞くと、砺波は目を輝かせた。よくぞ聞いてくれました、といった表情だ。

「うちの高校のクリスマスパーティよ」
「クリスマスパーティ？」
でも、あと二ヶ月も先じゃない、とカヤは思った。
「そう。うちの高校は、学園祭とかはへぼいんだけどさ、その代わり、クリスマスパーティはすんごいのよ！」
「そうなの？」
ずっときついことばかり言っていた砺波が、ここまで賞賛するのだ。カヤはそのクリスマスパーティがどんなにすごいのか気になった。
カヤが興味を示しているのを察した砺波は、オホン、とわざとらしく咳払いをし、まるで演説のように語り始める。
「うちの校長が高校時代、アメリカにいたらしいのよ。で、向こうってプロムとかあるじゃない？　高校卒業のときに、皆でドレスアップしてダンスするやつね。こっちではそういうのないから、それを売りにすれば入学者数あがるんじゃないか、なんていう悪知恵を働かせたわけ。で、はじめたのが、プロムに似せたクリスマスパーティよ。といっても全然違うんだけどね。全学年はもちろん、他校の人も出席していいし、ダンスも皆おそまつだし。
あ、でも、効果はあったのよ。はじめてから数年で入学者数アップ。ただ、女子生徒が男子生徒の二倍になっちゃったんだけど」
「……」
砺波はハイテンションで一気に話し終えた。カヤは、すぐには反応できずにぼうっとしていた。入学者数アップのためのパーティ？
まさか、こんな現実的な話をされるとは思ってもみなかった。も

う少し、ロマンティックな話を期待していたのだが。

「毎年、実行委員がテーマを決めるんだけど……」といいながら、砺波は安売りドレスのコーナーに歩み寄る。

「今年は、シンデレラにしたの」

「シンデレラ？」

「そう。子供っぽいけど……」

砺波は、適当に白いドレスを引っ張り出した。確かに、安売りなだけあって、粗末なドレスだ。生地もさわり心地は悪い。砺波は嫌な顔をして放り投げるように元に戻す。

「それしか思いつかなかったし」

「素敵じゃない」

それは、社交辞令でもなんでもなかった。シンデレラがテーマのクリスマスパーティ。カヤは見てみたくなった。

「ありがと」

砺波はかわいらしく微笑み、丁寧にそう言った。

「実はさ」と、声のトーンを変え、砺波はきりだす。「私、実行委員なんだよね」

「そうなの？」

「そうなの」

砺波は、自慢げに微笑むと、カートに寄りかかった。

「毎年、テーマにあわせてイベントやるんだけど、今年はとびっきりロマンティックなの考えてるのよ」

化粧品を売りつけるセールスマンのような、もったいぶった怪しい笑みをうかべる砺波。カヤは、自分の胸がときめいているのに気づいた。まんまとのせられているとしても、悪い気はしないだろうと思った。

「女の子は、前もって招待する男の子に、右足の靴を渡しておくの。ちなみに、この靴はわたしたち実行委員会が指定します。うちの高校のサイトでネット販売する予定。女の子はサイズだけ選ぶことになるわ」

「……」

パーティに行く用意だけでも大変そうだな、とカヤは思って苦笑した。女子生徒の多い高校だというから、女の子の憧れがたっぷりつまったパーティになるのも当然か、とカヤは納得する。

「で、当日は、女の子は仮面をかぶって登場する。仮面舞踏会みたいにね」

シンデレラに仮面舞踏会はないのでは、という疑問はカヤはあえて口にしなかった。

「男の子は、仮面をつけた女の子達の中から自分のパートナーを探さなきゃいけないの。こいつだ、と思ったら、持っている靴を履かせる。ぴったりあったら仮面をはずして、そのあとは二人であんなことやこんなこと〜」

きゃーっと砺波は、安売りドレスをひっぱりだし、ぎゅっと抱き

しめた。周りでドレスをみていたほかの客が、何事か、と砺波を白い目でみる。その視線に気づいていないわけではないだろうが、砺波は全く気にする気配さえ見せなかった。

「素敵……」

カヤも、パーティの様子を想像するのに忙しく、他の客の視線など気にならなかった。ため息混じりにそうつぶやくと、実行委員が目をぎらぎらとさせてカヤの腕をつかんできた。

「カヤも参加しなよ」

砺波は力強くそういった。

「え！？」

「他校の生徒も参加オッケーのオープンなパーティなの。ね、クリスマス。二十五日。おいでよ」

それを聞いて、カヤはハッとする。

「二十五日なの？」

「なに？　予定あんの？」

「私……」と、カヤはいたずらっぽく微笑む。「その日、誕生日なの」

「え？」

「十七歳の誕生日」

「……だから？」

誕生日、ときいて、だからなに、という人も珍しいだろうが、砺波はそういう子だった。

だが、今回ばかりは、的を射ている。カヤはしばらく考え、そう思った。誕生日は、本当なら両親と過ごす。毎年、何かと盛大に祝ってくれた。今年も何か、企画していただろうが……今となっては、どうなんだろうか。カヤの気持ちは沈んだ。今更、両親と誕生日にわきあいあいと過ごすのは想像もできない。今年ばかりは、誕生日だから何かある、というわけではない。

「ちょっと、考える必要ある？」という、呆れた砺波の声が店に響いた。静かなクラシックのＢＧＭを消し去る甲高い声だ。

「え……」

カヤは、我に返った。

「いいじゃない。誕生日を、パーっとウチの高校で楽しんだってさ」

「……」

砺波はもっていた白いドレスを宙に放り投げた。なんてマナーの悪い客だ。きっと、周りはそう思っているだろう。でも、この無茶苦茶な明るさが、今のカヤにはありがたい気がした。

カヤはしばらく間をおくと、にこりと微笑む。

「そうだね。いこうかな」

「そうこなきゃ！」

砺波は、イエーイ、と声をあげ、カヤの腕をつかんだ。

「さ、そうと決まったら、カヤもドレス買うよ」

「え？」

いきなり、ドレスを買うことになるとは思ってもいなかった。カヤは、お金はどうしよう、と不安になりながらも、砺波にひっぱられるまま、「シャトー」の奥へと進んでいった。

今年の誕生日は、今までとは違うものになりそうだ。カヤに分かるのはそれくらいだった。カヤの十七の誕生日。今年のクリスマス。まさかそれが、『収穫の日』を意味することなど、知る由もない。

ガールズトーク　―下―

「これ、いいじゃない」

そう言って砺波ちゃんが渡してきたのは、真っ赤なマーメイドドレス。胸元は大胆に開いていて、体にぴったりとはりつくようなラインはスタイルを強調しそうだ。シンプルで好きなデザインだけど……私には、ちょっと色っぽすぎるんじゃ。私は、あわてて近くにあった適当なドレスに手をかけた。

「こっちのほうがいいかな」

砺波ちゃんは私がひっぱりだしたドレスを見て、あからさまに嫌な顔をした。

「冗談でしょ」

確かに、引っ張り出してから気づいたけど……テカテカした緑色に、フリルばかりついたセンスのないドレスだ。

砺波ちゃんは奪うように、私の持っていたドレスを取り上げ、赤いマーメイドドレスを私につきつけた。

「しちゃく」

「え？」

私は、砺波ちゃんの言葉の意味が分からなかった。まるで、初めて聞く単語のような気がした。でも、どこか聞き覚えのある……しちゃく……？

「試着！」

砺波ちゃんは、店の奥にあるフィッティングルームを指差す。そこで、やっと分かった。

「試着？」

まさか、こんなセクシーなドレスを着ることになるとは思っていなかった私は、固まった。は、恥ずかしい……。でも、砺波ちゃんを言いくるめられるほどの話術は私にはない。

それに、砺波ちゃんはさっさと店員さんのところへ行って、試着させてくれ、と騒いでいる。もう後戻りはできなさそうだなぁ。

＊　＊　＊

砺波が、鼻歌まじりに携帯をいじっていると、扉の開く音が背後からした。試着室のドアだ。砺波は、わくわくしながら振り返り……そこにいたカヤに、思わず息を飲んだ。携帯を落としそうにさえなった。他のドレスを見ていた客も、思わず手をとめ、カヤに見とれた。

赤いマーメイドドレスは、カヤの体に魔法のようにぴたりとフィットしていた。はっきりとした赤い色は、カヤの麻黒い肌で際立ち、ショートヘアが、露出している首元と胸元をすっきりとみせて色気をだしている。胸元が大きくあき、鎖骨のラインが強調され、谷間も目立たない程度にのぞいている。ボーイッシュな服を着ていたさっきまでのカヤとは一味違った。

「どう？　ちょっと、露出しすぎじゃ……」

恥ずかしそうに、カヤは胸元をおさえた。砺波は、ぶんぶんと顔

を横にふり、カヤに歩み寄る。
「そんなことない！　丁度いい。これにしなよ」
「でも……」
いまいち、踏ん切りがつかない、といったカヤの様子に、砺波は腰に手をあてがう。まったく、とため息をつき、カヤを軽くにらんだ。
「せっかく色っぽい体してるんだから、もっとつかったほうがいいよ」
「え？」
「男をたぶらかすにはもってこいの素材なんだからさ」
「は……」
言って、砺波はカヤの谷間に人差し指をつっこみ、ドレスをひっぱった。ひょいっと胸元をのぞくと、「へえ」と怪しく微笑む。カヤは、いきなり胸をのぞかれ、何もできずにただ固まった。
「やっぱり、いいものもってるじゃない。Cカップ？」
「砺波ちゃん！」
カヤはやっと我に返り、胸元を必死に押さえた。砺波の行動はもとより、カップ数まで言い当てられたのですっかり取り乱していた。異性はもとより、同性とも深い仲を築いたことのないカヤにとって、こういうノリへの抗体は全くない。対照的に、そういうノリしか知らないような砺波は、相変わらずの調子で続ける。
「いいじゃない、良い形してるんだし、ケチケチしないの」
「い、いいかたち？」

バストの形に良いも悪いもあるのか。カヤはそんなことを考えたことも無い。褒められているのか、冗談なのかさえ、よく分からなかった。

「彼氏に言われたりしないの？」

「……え」

何も言っていないのに、砺波はカヤに彼氏がいると決め付けているようだ。カヤは思わずぽかんとしてしまった。その反応で悟ったのか、砺波はぎょっとした。彼女は、気持ちを隠そうという気はさらさら無いのか、あからさまに感情を顔にだす。

「もしかして……いないの！？　うっそ。じゃ、探さなきゃだめじゃん」

「わ、わざわざ探すこともないよ」

「クリスマスパーティはどうするの！　パートナー探さなきゃだめでしょ」

言われて初めて、そうか、とカヤは思った。靴を頼りに愛しき姫を探す、というシンデレラにならって企画されたイベント。自分を探す王子がいないのでは、始まらないのだ。前もって誰かに自分の靴を渡さねばならない。つまり、誰かを招待しなければならない、ということだ。

しかし、それがわかっても探す気は起こらない。なぜなら、カヤがパーティの様子を思い浮かべたとき、カヤの仮面をはずしてくれた相手の顔ははっきりと浮かんでいたからだ。

和幸くんと一緒に……。

そう考えただけで、カヤは顔が熱くなるのを感じた。

「誰か、よさそうな人はいる！？」

砺波が、キラキラとした瞳で見つめてきた。カヤは、「実は……」と言いそうになったが、あることを思い出して思いとどまった。そういえば……と、砺波を見つめ返す。トナミ、という名前を聞いて嫌な予感がしたのだ。今朝、和幸はよく泊まりに来る女性がいることをほのめかした。自分は、和幸からその女性の服まで借りた。その女性の名がトナミだ。珍しい名前だし、カイン。偶然、同じ名前ということはないはずだ。つまり、この目の前にいる子が、和幸の彼女ということもある。

カヤは、砺波から目をそらした。

「それは、いない……かな」

気づくと、そんな嘘をついていた。面と向かって聞く勇気がでなかった。少なくとも、泊まりに来るほどの親密な関係だ。具体的にどれほど親密か、なんて話されたら……とても、耐えられそうにない。

そんなこととはつゆ知らず、それを聞いた砺波は、ぱん、と自分の胸に手をあてた。

「大丈夫よ！」

「え？」

「私が紹介してあげる」

「……」

目が点になった。カヤのそのときの表情は、まさにそれだろう。思わぬ展開になってしまうのではないか、という不安が電撃のように体を走った。今からでも心当たりはある、というべきだろうか。でも、誰だ？　て聞かれたら？　和幸くん、と答えて、私の彼氏だ

から無理よ、なんて言われたら？　そんな自問自答のような葛藤が頭の中をかけめぐった。結局、砺波が次の言葉を言う前に、対策を練ることはできなかった。

「今夜、あいてる？」

「！」

砺波は、カヤの両肩をつかみ、迫るように質問した。ノーとは言わせない、そんな圧力を感じて、カヤは思わずうなずいてしまった。

「よかった。いい奴がいるのよ。丁度、彼女ほし～って騒いでたから、今夜にでもデートしな」

「あの、砺波ちゃん……」

このままじゃ、本当に後戻りできないことになる。カヤはあわてて砺波を止めようと口をひらいた。　だが、砺波が人に気配りするような人間ではないことを、カヤはまだ理解していなかった。砺波は、聞く耳ももたず、新たな恋愛に首をつっこめることに意気揚々としていた。カヤの意見は、元から聞く気はないのだ。

「大丈夫、大丈夫。イケメンだし、紳士だし。背も高いの。カヤにはぴったりだと思うのよ」

「砺波ちゃん、待って。私ね……」

「とりあえず、会ってみなって。ね、お願い！」

「え」

砺波は、ぱちんと両手をあわせ、カヤを上目遣いで見つめてきた。

「お願い、お願い、お願い」

「……」

こんなに必死に、お願い、と言われては……カヤに断ることはできなかった。一方的ではあったが、砺波とのショッピングは楽しかった。こういう関係を、できるのなら続けたい。そんな感情がうまれているのにカヤは気づいていた。ここで断って、砺波が気を悪くしたらどうしよう。そんな不安が心の端っこにひそんでいる。友情、というものにあこがれている自分がいた。

カヤは、苦笑いで、ただうなずいた。

「きゃ〜〜〜、ありがとう！　これで、あいつに借りが返せるわ」

「……え？」

そんなことは聞いてないぞ？　とカヤは思って、目をぱちくりさせた。借り？　それは、一体何の話なんだ？

そんなカヤの視線に気づき、砺波は、あはは、と照れた笑いを見せる。

「実は、この前の『おつかい』のとき、間違ってそいつを撃っちゃったのね」

「は？」

「暗くて、見えなかったのよね」

ちょっと待って、とカヤは思った。『おつかい』のとき？

「その人も、まさかカインなの？」

砺波はけろっとした様子でにこりと微笑んだ。

「そうよ、嫌？」

「え？」

聞かれて頭に浮かんだのは、やはり和幸だった。

「嫌なわけない」

気がつくと、はっきりとした口調でそう言っていた。それは、和幸へ向けた言葉だったが、それを砺波が知るわけもない。カヤがこの話に前向きなのだ、と勘違いし、さらに調子に乗り始めた。

「じゃ、ばっちりね。曽良（そら）には予定あけさせるから、心配しないでね」

「そら？」

「そいつの名前。松尾芭蕉の弟子の名前からとったんだってさ」

松尾芭蕉の弟子？　すごいセンスの持ち主だな、とカヤは思った。そういえば……疑問がうかんだ。カインの名前は誰がつけているのだろうか。彼らはクローンだという。両親といえる人はいるのだろうか。でも、こうして藤本を父と慕っている以上、そういう存在は感じられない。そもそも、家族といえる人はいるのか。和幸は、藤本という姓を名乗っているし、藤本は子供達を一人で育ててきた、と言っていた。名前も藤本さんがつけているのだろうか。それとも、『創られた』ときに、誰かに名前を与えられるのか。カヤはそんな疑問を抱いていた。本当は、そんなことを考えている場合ではないのだろうが。

「これから、楽しくなりそうねぇ」

恋のキューピッド気分にすっかり浸っている砺波は、背伸びをしてそう言った。

ユリィ・チェイス

アメリカ。テキサス北部。トーキョーのぎゅうぎゅうとした印象とは正反対の、のんびりとして広々とした田舎。たとえ近所でもとても『近く』はなく、一軒一軒が離れて建っている。それぞれが広大な庭をもち、そこには馬や鶏が家族同然に暮らしている。月も高くなり、あたりは静まり返っていた。耳をすませば、遠くのバーの騒音が聞こえてきそうだ。そんな夜に、馬の背に乗る少年の姿があった。ある一軒屋の裏、まるで牧場のような広大な庭で、彼は愛馬の背にまたがっていた。

月の光で、少年の高い鼻が濃い影を唇におとしている。ほっそりとしたりんかく。優しげなたれ目。透明感のある白い肌。栗色の髪は、馬のたてがみとは対照的に、短くゆるいパーマがかっている。彼は、愛くるしさと色っぽさをどっちももっている。よく年上の女性に好かれるのはそのせいだ。

「ビッグボーイ」と、愛馬の名をよび、少年は馬の首をなでた。ビッグボーイは、首を小刻みに上下に揺らしてそれに答える。

ビッグボーイは、その名の通り、他の馬よりもずいぶん大きな体をしている。がっしりとした足の筋肉。黒い毛並み。幼い子供はビッグボーイを見ると、怯えてしまう。確かに、映画に出てくれば、間違いなく、悪役の馬になってしまうだろう。だからこそ、オレはビッグボーイが好きなのかもしれない。彼は、そう思った。

「ユリィ！」

静かだった庭に、そんな声が響いた。がさ、がさ、と誰かが近づいてくる足音が聞こえる。ユリィは、声の聞こえたほうにビッグボーイの体を向けさせた。

「こんな時間に乗馬する奴があるか」

家のほうから歩いてきたのは、ピンクのメッシュのはいった茶髪の少女。年頃は十三。そのショートヘアは、見るからに痛んでいる。ブリーチのしすぎだ。キャミソールからは、ピアスのついたへそがのぞいている。こちらの少女も、鼻が高い。つり目なのを除けば、どこか雰囲気は少年に似ている。

「アイリス、何の用？」

ユリィは、ゆっくりとビッグボーイから降りると、ぽつりとそう言った。ぼけーっと眠そうなのは、彼の特徴だ。せっかくの愛らしい目も、いつも半開き状態。睡眠は充分とっているはずなのだが、いつも寝不足のようにふるまっている。

それを長年見てきたアイリスは、もう飽き飽きしている。いつもイライラさせられる。今回も例外ではない。アイリスは、呆れたようにため息をついた。

「海外ニュース、始まるから。みたいんじゃねぇかと思ってよ」

まるでどっかの不良のようにそう言って、アイリスは家のほうをあごで指した。ユリィは、馬の綱を手にもったまま、相変わらず、ボーっとしている。

「ちょっと？　なんとかいえよ」

「あのニュース、やるかな」

『あのニュース』が何をさすのか、アイリスにははっきりと分かっている。難しい表情で、そっぽを向いた。

「やるに決まってる。だから、わざわざ呼びにきたんじゃねぇか」
「……そう」

『あのニュース』とは、イギリスの『死神』のことだった。ここ数週間、アメリカのメディアでも騒がれている。海外ニュースのトップは、大体その事件だ。それは、エディンバラで起きた幼女殺害事件。テレビに映った愛くるしい被害者の写真を、ユリィは忘れることはない。少女の名は、ポリー・マッコーネル。彼女は、観光客の目の前で、ある男に大きな剣でさされたという。しかし、不思議なことに、彼女の遺体にそのような傷はなく、眠ったように倒れていただけだった。

この事件は、エディンバラで大きな話題を呼び、イギリス中に怪奇事件としてとりあげられることになる。多くの観光客が、現場を目撃していて証言は一致している。だが、それとマッチする痕跡はない。剣はなんだ？　その男は何者だ？　様々な憶測が飛び交い、ついには死神などという推理まで飛び出したのだ。今ではすっかり『エディンバラの死神』というキャッチフレーズでおなじみだ。

ユリィとアイリスは、ろくにニュースなど見ない。その事件の詳しい話を知ったのも、アメリカで取りざたされてから随分たったときのこと。アイリスの友人から聞いたのだった。

『死神、あんたの兄貴じゃん』

友人は、そう言った。

「あの、ポリーって子、何者なんだよ？」
「さあ」

ユリィからまともな返事を期待していたわけではない。アイリス

はうつむいた。
友人に言われ、アイリスはあわててニュースをチェックした。すると、観光客が撮ったという事件直前の写真が公表されていた。男が剣を幼い少女にかかげている写真だった。ニュースによると、観光客はショーかなにかだと思ったらしい。なんともお気楽な話だ。
アイリスは、その写真を見て、コップを落とした。ユリィは……ただ、呆然とした。写真の男に、見覚えがあったのだ。数ヶ月前、使命のために家を出て旅にでた、兄だった。

「意味わかんねぇよ。なんで兄貴は、イギリスで子供殺してんだよ？
確かに、ウチらは人間（ルル）の敵だけど……子供を殺すのは、いけすかねぇよ」
「タール兄さんは……変わったんだ」

ユリィは、無表情のままそう言った。

「変わった……ってなんだよ？　お前、何を知ってんだよ？」
「オレは知らない。生まれる前の話だから。全部、父さんに聞いた」
「パパに？　なんで、お前だけ聞いてるんだよ？　あたしは何も聞いてない」
「アイリスは、オレより年下だ」
「だからなんだよ？　三つしかちがわねぇだろ」

アイリスは、反抗期真っ只中だ。歳が近く、いつもボーっとしているユリィは八つ当たりの格好の餌食だった。

「オレは、トーキョーに行く」

ユリィは突然そう打ち明けた。まるで、脈絡がない。アイリスは、なんと言われたのか、しばらく理解できなかった。やや間をあけ、

目を限界まで開くと「は？」と声をあげる。
「なに？　トーキョー？　ニホンの？」
「うん」
「うん、じゃねぇよ。なんでだよ！？」
「カード、調べた」
「は？」
「タール兄さんのクレジットカード。航空券を買ってた。トーキョー行きだった」
「お前、まさか……」
アイリスは、言葉を失った。ユリィの信じられない考えが分かったのだ。
「兄さんを止める」
ビッグボーイがユリィの顔をつっついた。もう乗らないのか、と言いたげだ。
しばらく固まってから、アイリスは短く息を吸ってまくしたてるようにユリィにつめよる。
「止める、て……バカじゃねぇの？　あたしらニヌルタ一族だ。兄さんの使命はウチらの使命！　応援するのが筋だろうがよ」
「使命……世界を終焉に導くこと」
ユリィが、珍しく目をはっきりと開けて言った。眠そうじゃないユリィの様子に、アイリスは一瞬たじろいだ。いつもなめきってバカにしているが、兄なのには代わりは無い。
「そうだよ。ウチらは、エンリルの子孫。人間を滅ぼすのが使命」

「『災いの人形』が『終焉の詩』を唱え、世界は大洪水にのみこまれる」
「そうさ。そうやって、害虫である人間（ルル）を排除するんだよ」
「オレたちもな」

その言葉に、アイリスは眉をひそめた。やはり、真ん中の兄貴はアホだ、と確信して笑った。

「ちげぇよ。あたしらは、エンリルの子孫なんだから。兄貴がマルドゥクに勝利し、『災いの人形』に『終焉の詩』を詠わせたら、ウチらだけは助かる。そう教えられてきただろ。たとえ地球（エリドー）が洪水に見舞われても、ニヌルタ一族だけは、エンリルの恩恵で助けてもらえるのさ」
「恩恵とは何だ？」
「は？」

恩恵、と言う言葉も知らないのか、とアイリスはため息をついた。だが、ユリィの論点はそこではなかった。

「助ける、というが、どうやってオレたち一族だけを助けようというんだ？」
「……それは…」
「エンリルは、宇宙の果てにいる。それで、どうやってオレたち一族全員を助けるっていうんだ？」
「エンリルは神だ！　偉大な力、『メ』がある」
「その力を、オレたちのために使うとなぜいいきれる？」
「それは、だから、ウチらの神だからだよ」
「そうだ、エンリルは、神だ。オレたち人間を嫌う神」
「バッカじゃねぇの？　あたしらは人間（ルル）じゃない！　神の一族だ」
「違う。オレたちは、神の血がはいっただの『人間』だ」

「！」

ここまで、たくさんしゃべるユリィをアイリスは今まで見たことが無かった。いつもボーっとして口数も少ない。のんびりと暮らすだけの牛に見えたものだ。だが、今のユリィは違う。まるで、今までためてきたうっぷんを全て吐き出すかのように、力強い口調で次から次へと言葉を並べている。アイリスは、一歩後ずさった。気迫負けだ。

「エンリルは、世界の終焉にオレたち一族を救う。それはただの言い伝えにすぎない。

誰がそれを保証できる？　神はオレたちを救うというが、誰がそんなことをいった？

オレは神に会ったことが無い。会ったことのないものを、どうして信じられる？」

「……いかれてるよ、お前」

アイリスは、一風変わったユリィがあまり好きではなかった。キレイなお兄さんだね、と友人に言われるときだけ、ユリィの存在に感謝した。だが、それ以外では、いつもうざったかった。何を考えているか分からないただの奇妙な奴。いつからか、アイリスは、ユリィを兄と呼ばなくなっていた。

「何かがおかしい。何かが、オレたちの目をくらませている。そんな気がしてならない」

「お前がおかしいんだよ、ばぁか」

「……」

ユリィは、黙って月を見上げた。もとのおとなしいユリィに戻ったようだ。アイリスは、つきあってらんねぇよ、と唾をはいて、家

へと去っていった。
ずっと動かないユリィの肩を、ビッグボーイは甘噛みしてきた。
ユリィは、それまでまるで居眠りしていたかのように、ハッとした。
「ビッグボーイ」
無表情のまま、ビッグボーイの頭をなでる。
「しばらく、出かける。アイリス、よろしく」
気のせいかもしれないが、ビッグボーイが嫌そうな顔をしたように見えた。ユリィ・チェイスは、クスッと微笑んだ。

ラピスラズリの指輪

ただただまっすぐに続く道路を、ユリィはバイクにまたがり走っていた。あたりには何もない。ただ一本の道路が、永遠にも感じられるほどずっと続いているだけだ。この田舎では、夜中に車が走ることはない。見かけるのは、大型トラックくらいだ。そんな夜道をユリィは赤いバイクに乗って走っていた。小さなリュックを背負い、頭は赤いヘルメット、両膝両足にはプロテクター。十八歳の少年にしては、それは優等生すぎる格好だ。まるで初めて自転車に乗っている子供のようにみえる。だが、ユリィはそんなこと構いはしない。必要なのだから、するだけだ。

遠くに、ぽつりぽつりと光が見え始める。街だ。やっと目的地か。ユリィはヘルメットの中で、ふうっとため息をついた。夜中にバイクを走らせるのは好きではない。

トーキョーに向かった兄を探すのは容易ではない。ニホンはこの国に比べれば小さいが、それでもその首都で一人の男を捜すのは至難の業だ。ユリィはそんなこと重々承知だった。それでも、止めなくてはならない。その気持ちを抑えることはできなかった。数日前、酔った勢いで父が告白した『ある過去』を知ってからは。

とにかく、彼に今必要なのは、神の助けだった。

＊　＊　＊

それは、三階建ての古びた博物館だ。この街の資料館、ともいうべきその建物には、あらゆる古い貴重品がおいてある。そこにいけば、この街の歴史を知ることができる。建物自体、とても古く歴史あるこの博物館は、よく課外学習でミドルスクールの学生がやってくる。ユリィも、そうしてここにきた。五年前だっただろうか。歴史の授業でここに来て、課題のレポートのために写真をたくさん撮

っていた。そこで、彼の本能がそれを見つけた。思いがけない、ある『贈り物』を。
ユリィは、その博物館の入り口の前で、バイクにまたがったまま止まっていた。バイクの前輪を、ガラス張りの入り口のほうへ真正面に向けている。こんな時間だ。当たり前だろうが、誰もいない。博物館は真っ暗で、非常口を示すランプだけがほんのりと緑色に光っているのが窓から見える。周りを四角く囲うように通っている道路にも誰もいない。近くには、二、三軒、コーヒーショップが並んでいるが、そこももう閉じている。博物館は、昔は郵便局だったらしく、住宅地の真ん中にぽつんと立っていて、少し遠くに目をやれば、民家の明かりがちらほらみえた。
ユリィは、ぐいっとハンドルをつかむ右手をまわした。エンジンをふかす音があたりにひびく。

「ごめん、トム」

そう小さくいって、ユリィは、勢いよく博物館の入り口へとバイクを走らせた。なんの躊躇もないかのように、ガラスの扉につっこんでいく。あと少しで、ガラスにぶつかる、というところでユリィはバイクから飛び降りた。キレイに着地できるかとも思ったが、バランスを崩し、そのまま地面をくるくると転がることになった。主人をなくしたバイクは、まるでそれに気づいていないかのように速度をおとすことなく、まっすぐに入り口に突進する。
ガシャン、というガラスが割れる音と、バイクが倒れて床にこすれる音が辺りに響いた。ユリィは、二、三度くるくる地面を回ってから仰向けになって止まった。仰向けになったユリィの目にはいってきたのは、さっきと変わらぬ月だ。

「バイク、嫌な音がしたな」

ユリィはぽつりとつぶやいた。覚悟はしていたが……。バイクはもう諦めたほうがよさそうだ。十八の誕生日にもらったバイクなのに、と思いながら立ち上がる。

入り口は、すっかり風通しがよくなっている。ユリィは歩きながら、プロテクターとヘルメットをはずし、その場に放り投げた。家をでたときから、こうするつもりだった。そのための、プロテクターだ。バイクに乗ったまま突っ込んでもよかったのだが、ガラスをなめると痛い目にあう。

ユリィは、ちらばっているガラスのかけらを拾い上げる。月の光を反射し、きらりと光った。こうしてみれば、宝石のようなのに……そんなことを考えていたときだった。

ビー、という何とも耳障りで大きな音があたりに響き始めた。ここは古い建物だといっても、貴重な品が保管されている博物館だ。外観や内装を崩さない程度に、最低限できるセキュリティシステムはほどこされている。無論、正面玄関がぶち破られたら、アラームは鳴るし、近くの警察に連絡ははいる。

ユリィは、音に驚いて、ガラスをもつ指に力をいれてしまった。

「あ」

指から、血がぷくりと出てきていた。ほらね、危ないんだよ。ユリィは、心の中でつぶやいた。

トムというのはこの博物館を管理している人物だ。八十近いおじいさんだが、とてもしっかりしている。特に、この街の歴史は知り尽くしている。一つの質問をすれば、それから十分はトムの話を聞き続けなければならなくなる。いつも服からはみでているぽっこりとした腹がサンタクロースを連想させる、ふくよかなおじいさんだ。

ユリィは、特別彼と仲が良かった。他の友人たちは、彼の話を聞くのをめんどうくさがったが、ユリィは違った。彼がこの街の歴史

を話すのを見るのが好きだった。八十年間、この街に住むトムは、この街を誇りに思っている。この街の始まりから今まで、全ての歴史に誇りをもっている。ユリィは課外学習でトムと出会ってから、バスでよくここに来てはトムの話を聞いていた。話好きのトムと、口数の少ないユリィは相性があった。

そんなある日。ここに通うようになってから、一年ほどたったときだろうか。クリスマスの近い冬だった。トムはユリィに、何か欲しいものはあるか、とたずねた。トムの息子夫婦は、孫をつれて街を出てしまった。トムにとって、ユリィは孫のようなものになっていたのだ。

聞かれたユリィは、こう言った。

『あの指輪がほしい』

＊　＊　＊

約四年前。博物館が閉館時間を過ぎ、トムは残っている客がいないか各階を確認してまわっていた。隣には、一年前にこの博物館に訪れてから、すっかり入り浸るようになった十四歳の少年がいる。ユリィだ。

トムは目を丸くして、彼を見下ろした。

「指輪？」

少年はうなずき、展示品のひとつを指差した。それは、ラピスラズリの指輪だ。とても古い指輪で、これに関しては詳しいことはほとんど分かってはいなかった。分かっていることといえば……昔、この街にいた宝石商がどこかで見つけ、これだけは一生誰にも譲らなかった、ということ。トムが前の館長から聞いたのは、そのくらいだ。だが、それでも、この博物館の貴重な品には変わりは無い。

「あの指輪は……」と、トムは口ごもった。クリスマスに何がほしいか、と聞いた手前、リクエストにけちをつけるのは気がひける。だが、これは別問題だ。

「いいかい、ユリィ。分かってるだろうが、ここにある物は全て貴重なんだ。

一つ一つが、この街の歴史を物語っている。あの指輪もそうだ。この街の誰かが持っていた指輪で、歴史の一部なんだ。悪いが、それをあげることはできない」

「……」

ユリィは、指輪を見つめて、ただ黙った。

「どうしても、だめ？」

「ああ、悪いな。ほかのなら、なんでもいいよ」

「なにがあってもだめ？」

「ああ。館長として、どうしてもできない」

「……」

結局、ユリィは他の候補をあげることはなかった。

＊　＊　＊

一階の奥の小さな部屋。そこでユリィは、ラピスラズリの指輪をじっと見つめていた。アラームが博物館に鳴り響き続けているが、ユリィの耳はもう慣れて気にならなくなっている。ただ、警察が来るのは時間の問題。急がなくてはならないことは分かっていた。

ユリィはショーケースを、グローブをはめた右の拳で乱暴に割った。指輪や近くにある装飾品にもガラスがふりかかった。

「ごめん、トム」

ユリィはまたそう言った。

ゆっくりとラピスラズリの指輪を手にとる。リングの部分をじっと見つめると、それが黄金であることが分かった。古さの中に高貴な雰囲気が漂っている。ユリィは、ふうっとため息をつき、そうっと指輪を左手の中指にはめた。リングの大きさに合わせて指を選んだのではない。とりあえず、中指からはめてみただけだったのだが、リングは不思議なほどぴったりと合った。というより、『合わされた』ようだった。自然と指輪が自分の指の大きさにリングのサイズを合わせた。そんな感覚だ。ユリィは、やはり……と心でつぶやく。

そして、誰もいないはずの博物館で、女の声がした。

「名を……」

それは、耳から聞こえているのではない。頭の中に直接はいってくる感覚だった。かすかに聞こえるその声は、母親のような優しくつつみこむような声だ。なぜか、初めて聞く声だというのに、その声を聞いただけで、安心した。

「名を……」

その声は、相変わらずそう語りかけてくる。

ユリィは、じっと指輪を見つめた。ラピスラズリが輝いている。

「ラピスラズリ」

つぶやくようにユリィはそう言った。いや、正しくは、そう『名づけた』。

彼は、しゃれたことができるほど器用ではない。目の前にラピスラズリがあったから、それでいいか、と軽い気持ちでそう名づけただけだ。だが、『声』は不満一つもらすことはなかった。

「その名、ありがたく頂戴します」

声は、ユリィの頭の中でそう響いた。とてもはっきりと、敬うように。

「手をあげろ！」

いきなり、そんな叫び声が小さい部屋に響いた。ハッとしてユリィが振り返ると、まぶしい光がいきなり目に入ってきた。ライトだ。まぶしそうに目をひそめる。はっきりとは見えないが、自分の状況は分かる。警察が来たのだ。ライトは三つ。三人いる。

ユリィは、トラブルは好きではない。たまに、今夜のような大胆な行動を取ることもあるが、大抵はおとなしくしている。必要だと思ったときだけ、尋常でないほどの行動力をはっきりする少年だった。できれば、今回も平和的に解決したい。だが、今の状況では、それは望めそうに無い。何かしでかす必要がある。ユリィはそう判断した。警察に捕まるのだけは避けなくてはならない理由があるからだ。

人間の敵であるニヌルタ一族は、警察とかかわるのをひどく嫌う。この世界で人間を取り締まる役目をもつ警察には、ニヌルタといえども従わざるを得ない。人間として地球で生活をするためには、このルールを守らなければならないからだ。それが神の一族、そして人間を『裁く』使命をもつ一族にとっては耐えられない屈辱だった。ユリィがここで警察ともめ、逮捕でもされようなら、ニヌルタの恥だと罵られよう。一族の老人たちから非難を受け、トーキョーなんて行くことは叶わなくなる。ここをなんとか乗り切らなければ

ならない。ユリィは、手を挙げながらそんなことを考えていた。

「手を後ろに組め」

警察の一人が銃をかまえながら、ユリィにゆっくりと近づいてくる。ユリィはいわれるままに、両手を頭の後ろに組んだ。機をうかがって逃げる。それしかなかった。

警官は、ユリィの顔を確認すると、意外に若い犯人に驚いて目を丸くした。子供のいたずらだったのか？　警官はそう思いつつも、足を引きずるようにして、ユリィの後ろに回った。他の二人は入り口で、同じように銃を構えている。

「ゆっくりその場でひざまずけ」

「……」

ユリィはいわれるままにおとなしく従った。ふと、警官の目に何か光るものが映った。それは、少年の左の中指。他の警察官二人が照らしているライトを反射して輝いている。よく目をこらしてみると、それは美しい指輪だった。シンプルな金のリングに、青い惑星のような淡い光を放つ石がついている。

子供のくせに、高価なものを、と警官は鼻で笑った。

「生意気だな。何の石だ、それは」

「ラピスラズリ」

ユリィはただ質問に答えた。……つもりだった。警官の叫び声を聞くまでは。

「なんで、こんなとこに！？」

叫んだのは、ユリィにライトをあてている二人のうちの一人だ。ユリィの背後にある大きな影がいきなり現れたのだ。もう一人もそれに気づき、息をのんだ。その影には見覚えがある。大きく太い二つの角。巨大な体。ロデオでみた雄牛だ。いきなり現れた牛は、フウッと鼻から気合をいれるような息をもらしている。

ユリィはその息を背で感じた。だが恐怖は感じない。殺気もなにもない。それよりも、暖かい優しさに守られているような気さえした。一方で、ユリィに銃をつきつけている警官は、同僚の二人の様子に怯えながら、ゆっくりと振り返る。

その瞬間、牛は勢いよく近距離でその警官に頭からつっこんだ。幸い、角がささることはなかったが、警官はトランポリンで跳んだかのように宙に浮いて地面にたたきつけられる。それを見ていた警官二人は、言葉を失って牛を見つめた。牛は、まだやる気だぞ、といわんばかりに、前足で何度か地面をたたく。

二人の警官のうちの一人、太った警官は、牛に銃を向け、発砲した。暴れ牛が同僚を吹っ飛ばしたのだ。当然ともいえる行動だ。だが、その銃弾は牛の体に当たることなく、『通りぬけた』。あまりの出来事に、もう一人の警官も何発か牛に発砲したが、弾の無駄遣いにしかならなかった。

牛は、ふうっと鼻から息をだすと、二人に向かって走り出す。

「うわあ」と叫んで、二人は出口にむかって逃げ出したが、牛はその片方の尻に角を突き刺し、もう片方の尻を後ろ足で蹴り飛ばした。

ユリィは、一部始終、両手を頭の後ろに組み、ひざまずいた状態で見ていた。三人の警官はすっかりのびて、部屋は何も無かったかのような静けさになっていた。侵入者を知らせるブザーをのぞけば……だが。

牛は、ひづめを鳴らしながら、ユリィへと近づいてくる。ユリィは、この暴れ牛から逃げる気は毛頭なかった。なぜなら、彼がこの暴れ牛を呼び出したのだから。

「そうか」と、ユリィはぼんやり牛に言った。「名前を呼ぶと、現れるんだね」

牛は、ユリィの目の前で立ち止まると、「はい」とその姿からは想像できない優しい女性の声を発した。しかし、牛の口は動いていない。ユリィの頭の中に、その声が入ってくるだけだ。だが、ユリィには分かった。この声は、この牛が発しているのだ、と。

「ご無事ですか」と、牛はたずねる。

「うん」

ここにきてやっとユリィは両手をはずし、ゆっくりと立ち上がる。

「ありがとう、ラピスラズリ」

そういえば、石の名前をそのまま彼女に与えたんだった、とユリィは思い出した。

「お言葉には及びません」

「エミサリエス、なんだよね」

今更かもしれないが、と思いながら尋ねる。

「はい。動物の神、シャカンのエミサリエスです」

「動物の神……」

あの指輪を初めて見たとき、ユリィははっきりと感じた。彼の本能が告げた。というより、本能が騒いだ。彼の中にある神のＤＮＡが激しく反応するのを感じたのだ。その瞬間、理解した。これは贈

り物だ、と。天使(エミサリエス)が宿るとされる贈(ドラ)り物。今まで、兄のタールがもつ『冥府の剣』しか見たことはなかった。どういうもので、どういう決まりがあるのかは、『冥府の剣』に宿るレッキという天使(エミサリエス)に聞いたことがあった。贈(ドラ)り物を手にし、そこに宿る天使(エミサリエス)に名を与えたら、その天使(エミサリエス)の主人になれる、と。どんな力なのかは、天使(エミサリエス)に聞いてみないと分からない。宝くじみたいなもんだよね、とレッキが無邪気に笑って言っていたのをユリィは覚えている。

「どんな力なの？　牛の力？」

「この牛の姿は、力の一つにすぎません。わたくしの力は、動物の力です。この地球(エリドー)のあらゆる動物に姿を変え、その力を使うことができます」

「……」

ユリィは、ボーっと目の前の牛を見つめた。声が、クスっと笑うのが聞こえた。

「申し訳ありません。あまり、便利な力でなくて……」

「じゃ、馬にもなれる？」

ラピスラズリに返事することもなく、ユリィは唐突にそう聞く。

「はい、もちろんです」

こんな無茶振りにも不満はもらさず、牛は、両足を高々とあげ、力強く地面をたたいた。その瞬間、牛は馬へと姿を変える。その変化を目で追うことはできなかった。気づいたら、馬になっていた。そう言うのが正しい表現だろう。

馬は、真っ白い雪のような美しさ。毛並みもさらりと流れるようだ。『白馬の王子』は、こういう馬に乗って現れるのだろう。ユリ

ィはそう思った。だが……と、更なるリクエストを口にする。

「黒い馬にはなれる？」

「黒、ですか。もちろんです」

あまり、黒い馬をわざわざリクエストされたことはない。ラピスラズリは戸惑いつつも、新しい主人の要望に応える。馬は、ぶるぶると頭を揺らした。すると、一瞬にして、白馬は黒く塗りつぶされた。それでも、気高い美しさはかわりはしない。

「うん」と、ユリィは満足そうにいう。

同じ黒い馬でも、ビッグボーイのような、がっしりとした印象はない。きっと、雌馬なのだろう。優しげな目。柔らかい線。とても優雅だ。ユリィは、ラピスラズリの鼻筋をなでる。

「君の力を借りたい」

ユリィは、ぽつりとそうつぶやく。ラピスラズリは、目を細めた。

「もちろんです。そのために、わたくしはここにおります」

その言葉に、ユリィはかすかに微笑した。

「さっきバイクを壊した。空港まで乗せてくれる？」

ユリィの頭の中で、ラピスラズリがフフッと笑うのが聞こえた。

「喜んで」

「少し遠い。どこまでいける？」

ラピスラズリは、ご冗談を、と誇り高くつぶやいた。

「大地が続く限り、どこまでも」

すれちがい

もうすっかり空は夕焼けだ。私は、大量の紙バッグを両手に提げて、教会に戻ってきた。紙バッグにはいっているのは、全て洋服。それも、私が買ったことがないような派手なお店の。全部、砺波ちゃんに半ば押し付けられて買ったものだった。彼女は、私に同意すら求めず、自分の趣味で全て選んでしまった。果たして、これらを着ることがこれからあるのかどうか。

砺波ちゃんは、同じように大量の紙バッグを提げ、鼻歌まじりに前を歩いている。教会の扉に手をかけ、私に振り返った。

「本当によかったの？　あのドレス、買わなくて」

「え……うん。私には高すぎるから」

あのドレス、とは、私が「シャトー」で試着した赤いマーメイドドレスのことだ。お店の人にも、「お似合いです」と何度も褒められ買うようすすめられたのだが……

「値段は気にすること無かったのに。どうせ、パパのカードで買うんだから」

砺波ちゃんは、それがなんでもないかのように軽く言って教会の扉を開けた。私は、苦笑いをうかべる。

「だから、だよ」

そう。現金もろくに持たずに家をでた私。そもそも、お財布自体持っていない。真夜中に和幸くんに連れ出されたのだから、当然だ。それを知った藤本さんは、砺波ちゃんにカインのカードを使って私

の服を買うように、と頼んだ。カインのカードとは何か、と思ったが、ふたを開ければただのクレジットカード。藤本さんはどうやら、カインの皆にクレジットカードを渡しているようだ。カインを一人で世話している、と言っていたが、お金まで一人で面倒をみているとなると……相当、大変なはずだ。一体、あの藤本さんのどこにそこまでの力があるというのだろうか。

そんなことを考えながら、私も砺波ちゃんのあとについて教会に入る。ぱたんと扉を閉じ、くるりと教会の祭壇のほうに体を向けた。そのときだった。

「砺波！」

いきなり、そんな怒鳴り声が響いた。私の体がびくっと反応した。声の主が誰か、すぐに分かった。

和幸くんだ。

和幸くんは、上は半そでの白いTシャツ、下は黒のジャージ姿で、片手に雑巾を持って中央の通路の奥で立っている。顔には疲労がうかがえた。もしかして……掃除でもしてたのかな。

「あははは」と、砺波ちゃんの笑い声が教会に響き渡る。

「掃除させられてやんの。何しでかしたわけ？」

やっぱり、掃除なんだ。

私は、半日ぶりに会う和幸くんにドキドキしていた。いつも、ブレザーの制服姿しか見たことなかったから……こういうジャージ姿を見れただけで、なんだか胸がときめく。半袖からのぞく二の腕の筋肉がたくましい。男の子なんだな、て改めて思った。

「何もしてねぇよ。他にやることなかっただけだ。
そっちだろ、問題は」

でも、何か和幸くん、様子がおかしい？
雑巾を床にたたきつけると、こちらのほう、つまり入り口に向かって、ずかずか向かってくる。

「こっちは、朝からずっと待ってたんだ。どういうつもりなんだ？
居場所の一つも連絡してこないってのは？」
「は？　なんで、そんなことしなきゃなんないのよ」

やっぱり、和幸くん、怒ってる。砺波ちゃんは、そんな和幸くんにひるむ気配すらみせず、胸をはってはっきりとした口調で言い放つ。

「何度も電話したんだ」
「あら、ごめんね。気づかなかった」
「せめて、藤本さんには、どこにいる、とかメールでもしないか？」
「なんでそんなことといちいちしなきゃなんないのよ？　買い物行ってただけなのよ？」

和幸くんは、砺波ちゃんの目の前で立ち止まって、砺波ちゃんを睨むように見下ろした。
二人の会話は、すでに口論になっていた。私は、砺波ちゃんの斜め後ろで、止めるべきかどうか迷っていた。
でも、それはおせっかいだよね。二人は付き合ってるのかもしれないんだし……和幸くんは、朝からずっと連絡のない彼女を心配してたのかも。だから、こんなに怒ってる、とか。この怒りは、優しさの裏返し？
やだな。二人の口論も、見てるのがつらい。

実際、ずっと和幸くんは私に話しかけてくれない。私に見向きもせずに、砺波ちゃんにばかり……。
ああ、最低だ。嫉妬してるのかな。私はただ、和幸くんに助け出してもらっただけなのに。その上、和幸くんに何を求めてるんだろ？　ずっと一緒にいてほしいの？　そもそも、和幸くんが私に近づいたのは、『おつかい』のためだった。本当は、和幸くんは私と仲良くなりたいわけじゃないのかもしれないのに。

「カヤ」
「！」

急に呼ばれてドキッとした。優しくて、愛おしい声。
ハッと顔をあげると、和幸くんがこちらを見ていた。やっと、私を見てくれた。

「疲れただろ。朝から、こいつの買い物につきあわされて」
「失礼ね。カヤの服を買ってあげたのよ」
「はいはい」

砺波ちゃんはムッとして、和幸くんの腕をはたいた。

「いってぇな」と、和幸くんは砺波ちゃんをにらむ。

「……」

そんな、二人のやりとりに、また胸がいたんでしまった。うらやましい、と思ってしまった。嫉妬なんて、よくない。私の心が醜くなってる、そんな気がした。こんなの嫌なのに……アンリちゃんに嫉妬して、今度は砺波ちゃんに嫉妬してる。そんなこと知られたら、和幸くんに嫌われる。

「私……」と、勇気を出して声を出した。二人は、ぴたりと止まってこちらを見ている。
「私、藤本さんに話しに行くね。いろいろ、買っていただいたから」
そう言って、私は両手に提げている紙袋を、和幸くんに見せるように高々と挙げた。

＊　＊　＊

カヤは、まるで逃げるように足早に俺の隣を通り過ぎ、藤本さんの部屋へと向かっていった。なんだか、様子が変だったな。
……。
いや、変なのは俺のほうかもしれない。
『誰かに恋したんでしょ？』

ええい、まただ。リストの楽しげな声が頭に響いた。掃除してる間も、ずっとこの声が俺の手を止めた。そして、その声を思い出すたびに、カヤの顔が思い浮かぶ。今朝、ベッドの中で「おはよう」と俺に言ったカヤの顔が。
そのたびに、俺の頭はパニックになる。正直、俺の中で起きている『変化』に俺は戸惑っていた。いまいち、その『変化』の正体もよく分からないし、どう対処すればいいのかもよくわからない。
そして……カヤとどう接すればいいのか急に分からなくなった。『おつかい』として接していたときのほうが、ある意味楽だったかもしれない。良心は、そりゃ痛んだけど……『おつかい』なんだ、と割り切ることで自然と接することができたんだ。何も深いことを考えることなく。
でも、今はどうすりゃいいのか分からない。俺は、カヤの何なん

だ？

「で？」

砺波の苛立った声が、俺を現実に連れ戻した。俺は思わず、「は？」というアホな声をだしていた。

「なんで、ムキになって怒ってるわけ？」

「あ？」

「居場所のことよ。何事なわけ？」

ああ、それか、と俺はため息をついた。

「いいか」と、子供に叱るような態度で俺は砺波にいう。

「学校から早々と戻ってきてみれば、カヤはいない。

藤本さんいわく、砺波と買い物だ、という。

どこに買い物だ、と聞くと、分からない、ときた。

つまり、実質的にカヤは、今朝から行方不明だったわけだ。

どんだけ……」

そこまで言ったときだった。砺波は、俺の言葉を奪うように口をはさむ。

「心配してたわけだ」

「え」

砺波は、目をまん丸にして俺を見つめていた。なんだ、この反応は？　俺は、気味が悪くて、後ずさった。

「なんだよ？」
「カヤが心配だったんだ」
「……だったら、どうしたんだよ」

そうだ、思い出したぞ。砺波のこの雰囲気、俺には心当たりがある。恋愛話をするときのこいつだ。どんな話も恋愛にもっていくこいつのことだ。今回もそういうつもりに違いない。

「好きなの？　カヤのこと」

ほらな、こうきた。だが、不思議なことに、ハイテンションではない。いつもなら、キャーキャー言って、頼んでも無いのに一人で大盛り上がりするのに。目をぱちくりさせて、不思議そうに俺を見つめていた。

「そ……そういうんじゃない」

俺は、目をそらしてそんな言葉を搾り出した。
カヤのことを、『好き』？　そんなことどうやって分かるんだよ？
リストといい、こいつといい、何なんだ？
俺はずっと『おつかい』だけしてきた。付き合ってほしい、といわれたことは何度かあったが、興味はなかった。本当の俺を知らないくせに、俺に何を求めているんだ、と理解できなかった。正直、好きだなんだという気持ちは俺にはよく分からない。
俺は『創られた』人間。神も俺の存在を知らない。そんな俺に、運命の相手など用意されてるとは思えなかった。誰かと付き合えば、その人の運命を狂わせるんじゃないだろうか、とさえ考えたこともある。そんな意識があったせいもあるだろう。恋愛というものに、これといって興味はなかったのだ。砺波とは正反対だな。

「カヤは……」と、俺は続ける。「カヤは、俺が連れ出した。だから、責任もってカヤのことを守らないといけないから」
「ふーん」
砺波は、疑うような視線で俺をみながら、しばらく黙った。なんなんだよ？　何かたくらんでんのか？
「そう」と、砺波は高い声で言った。そして、にこりと屈託の無い笑みをみせる。「じゃ、よかった」
それは、予想外の反応だった。いつもなら、恋愛話じゃない、と分かるとがっかりするものなのに……変だな、喜んでるようにもみえる。よかった？
「もう、心配したじゃない。あんたがカヤのこと好きだったらどうしようかと思ったぁ」
「は？」
なんだ？　砺波にどんな影響があるっていうんだよ？
「そうよね、そうよね。和幸は『おつかい』のために、あの子に近づいたんだもんね。
個人的な感情はないわよねぇ」
「……」
その言葉に、俺は何も言い返せない。
「よかった、よかった。じゃ、つまり、あんたは今、カヤのボディガードなわけね」
「……ま、そうなるな」

間違いじゃない。確かに、俺はあいつのボディガードだ。特に、神崎がカヤを探している今は、俺が守ってやらないと。
だが……と、今朝、リストから聞いた話を思い出す。アトラハシスは、カヤを守る使命をもつ人間のこと。リストは言っていた。アトラハシスという人間のこと。なぜ、姿を現さないのかは分からない。どういう経緯で、そいつがカヤを神崎に渡したのかもさっぱりだ。だが……もし、カヤを渡せ、と神崎に言ってきた電話の男が、本当にアトラハシスなら……俺は、カヤを連れ出すべきじゃなかったんじゃないだろうか。リストにアトラハシスのことを聞いてから、そんな考えが芽生えていた。カヤを守る使命をもつ奴がいるなら、そいつに任せるべきだ。俺には……そんな使命なんてない。俺がでしゃばるようなことじゃない。

「そんならさ」と、砺波はまるでおばさんのような声をだした。「今夜、待ち合わせ場所まではあんたが送ってあげてね」
「え？」

待ち合わせ場所？　いきなり、何の話だ？

「あ、そうそう。好きな子ができたら、すぐわたしに伝えるのよ。和幸の恋愛にはものすごーく首をつっこみたいから」
「は？」

なんだよ、それは？
しかし、そんなことを聞く暇も与えないかのように、砺波は紙袋を手に、ひらりと俺に背を向ける。

「じゃあ、そういうことで」
「は？」

「帰る～」

砺波は背を向けたまま、俺に手をふり、教会の扉を開けた。西日が教会にはいってきて、俺は顔をしかめる。

「おい？」

ばたん、と扉がしまった教会で、俺はただ佇んだ。

相変わらず……嵐のような女だな。

はじめての『おつかい』

「侵入する？」

和幸が藤本の部屋にはいったとき、丁度、カヤが驚いてソファから腰をあげるところだった。和幸が入ってきたことすら気づかず、カヤは夢中で藤本に迫る。

「どうして？　もう必要ないんじゃないんですか？」

「落ち着いてください」

藤本は、右手でカヤを制し、和幸にアイコンタクトを送った。助けてくれ、といった表情だ。和幸は、すぐに何のことか悟り、ゆっくりとカヤに近づく。

「カヤ」

優しく声をかけたつもりだったが、カヤは驚いて飛び跳ね、和幸に振り返った。

「和幸くん！？」

いつのまにそこに？　と続きそうな表情だ。和幸は、言いにくそうに事情を説明しだす。

「カヤの両親のことで……」

「！」

一瞬、カヤの表情が強張ったのを和幸は見逃さなかった。今はあ

まり聞きたい話でもないだろうが……と思いつつ、話を続ける。

「俺の早とちりだったかもしれない」

カヤを眉をひそめる。思わぬ和幸の告白に、カヤはどう反応して良いか分からない様子だ。

「『わたしのような人間』。電話で、お父様はそうおっしゃったんですよね？」と、今度は藤本が黒い皮のイスに座ったまま、訊ねる。

カヤは藤本に目をやると、何も言わずにうなずいた。そう、夕べ盗聴した電話で、父はこう言った。警察は汚職の巣窟だけど『わたしのような人間』にとっては、強力な味方なんだ、と。

「和幸はそれを根拠に、あなたのお父様を人身売買の親玉だ、と判断したそうです」

カヤは、目を丸くして和幸を見た。そうだったんだ、とこのとき知ったのだ。まさか、自分のセリフが根拠になっていたとは夢にも思っていなかったのだろう。

「しかし……」と、藤本がいうと、和幸はばつが悪そうにそっぽを向く。

「それだけでは、なんの根拠にもならない」

「え……」

藤本は、やれやれ、とため息をついた。

「カインには、悪党のすること＝人身売買（イコール）、という変な固定観念があるみたいで、和幸もそのせいで早とちりをしたようです。他にも、

麻薬や強盗……悪党のすることはたくさんあるのですがね」

つまり……と、カヤは思った。『わたしのような人間』というセリフで、和幸はカヤの父を悪党だと判断し、悪党ならば人身売買にかかわっているはずだ、と決め付けた。そういうことだろうか。

「まったく、いつもはそんな性急なことはしないんですよ？　なにがあったのか……」

藤本は、ジト目で和幸を睨んだ。和幸は、目をそらしたままだ。

「ちょっとまってください。それじゃ、両親は人身売買にかかわってないんですか？」

カヤに、喜びと不安が混ざりあった気持ちの悪い感情が襲ってきた。夕べから、両親が人身売買にかかわっていた、という事実を受け止めようと必死だった。それを、今更、間違いだったといわれては……嬉しいことに違いはないが、両親を疑っていた自分が許せなくなる。両親にどう謝ればいいのか分からないし、また気持ちの整理をつけなければならない。

「いやいや」と藤本はあわてて言う。「それはまだ分かりません。もともと、ご両親には、そういう疑いがありました。それを確認するために、和幸に『おつかい』を頼んだのです。ただ……神崎さんが聞かれたという電話の内容は、その疑いを濃くしただけにすぎない、ということなのです」

「つまり……？」

カヤはまだ混乱していた。藤本の言っていることがよく分からない。

「つまり」と続いたのは、カヤの隣にいる和幸だ。「藤本さんは、しっかりとした証拠がほしい、てこと。藤本さんが納得できるような証拠をね」

カヤは忙しく、藤本と和幸を交互に見やった。

「それと……家(うち)に侵入すること、どんな関係があるんですか？」

「和幸に『おつかい』を頼んだときと、今では状況が大きく違います」

藤本は、優しく微笑んでそういった。それは、まるで質問の答えになっていない。

「はい？」

「あの家を良く知るあなたがいる」

「……」

やはり、カヤには、藤本が何をいわんとしているのか、理解できなかった。

「カヤは嫌かもしれないけど……あの家の防犯システムや間取りを全部教えて欲しい。知ってる範囲でいいんだ。そしたら、あとは俺が……」

和幸が、どこか申し訳なさそうにそう言った。藤本と和幸の二人からの情報の応酬に、カヤは目が回りそうだ。

「え？」

「カヤの家に侵入して、人身売買の証拠を探す」

「！」
「資料とか何か、そんなものが必ずあるはずなんだ。だから……」
「……」

カヤは、呆然として力なくソファに座った。やっと二人の考えていることがはっきりと分かった。ここにきて、自分に両親の悪事をあばく手伝いをしろ、というのか。証拠がでようがでまいが……この行動は、今度こそ、本当に両親を裏切ることになる。カヤは、ぎゅっと自分の右腕を左手でつかんだ。

「カヤ？」

和幸は、心配そうにしゃがむと、カヤを覗き込んだ。

「嫌なら……いいんだ」
「！」

ずるいな。カヤは思った。和幸の優しい言葉は、カヤにとって何よりも強力な武器だ。和幸にそんな風に言われて、カヤに断れるはずもない。

カヤは、顔をあげると、和幸を見つめた。その瞳には、覚悟があらわれている。

「私が行く」
「え？」

和幸と藤本は、全く同時に驚きの声をあげた。

＊　＊　＊

「あの家の防犯システムは、私でも全部知っているわけではありません。引っ越して間もないですし。でも、とても厳重だということは父から聞いています。それに……銃をもったガードマンもたくさんいます」

カヤは、はきはきとした口調で藤本さんにむかって話し始めた。

「軽はずみに知ったかぶりなんかして……和幸くんを危険な目にあわせたくないんです」

え……。

俺は、どくん、と心臓が大きく鼓動をうつのを感じた。カヤは、俺たちが理不尽な頼みをしているときにも、俺のことを心配していた。俺は、自分が情けなくなった。

藤本さんが言っていることは最もだ。俺は夕べ、性急だった。確かに、証拠が足りないというのに行動を早まった。リストの言うとおりだ。理屈じゃない心境の変化が……確かにあった。いてもたってもいられなくなったんだ。

『誰かに恋してたんでしょ？』

うるさい。

「いや、しかしですね」と、藤本さんはあわてている。「こちらも、あなたを危険な目にあわせるわけには……」

「私の家です。何も危険はありません」

カヤに、まるで迷いはなかった。

俺は、少し驚いていた。カヤは、なんていうか……『癒し系』というイメージだった。おっとりとして、包容力があって、一緒にい

ると安心する。だから、こんな凛々しいカヤを見るのは、新鮮だった。こんな一面もあるんだな。と、のんきに思った。

その間にも、カヤはまくしたてるように藤本さんに訴えている。

「第一、両親はまだ私が電話を盗聴したことを知らないはずです。今もきっと、ただの家出だと思ってる。私が家に行っても、ただの『帰宅』です。怒られはしても、危険なことはなにもありません」

藤本さんは、確かに、と唸るようにつぶやいた。だが、相変わらず、難しい表情だ。どうしても、カヤを巻き込みたくない、とみえる。

無論、俺も同感だ。

「だが、カヤ。目的は、人身売買の証拠集めなんだ。お前にそんなことさせるのは……」

カヤは、真剣な表情で俺を見つめた。覚悟を決めた女の顔だ。

「十七年ちかく、両親は私を育ててくれた。たとえ、どんな秘密をもっていようと、どんなひどい人たちだとしても……私は、あの人たちを愛してる。だから、せめて……」

そこまで言うと、カヤはうつむいた。ぎゅっと拳を握り締めるのが見えた。やはり、つらいんだ。思わず、その手を握り締めたくなった。カヤを、守ってやりたい。そんな気持ちがあふれでた。

「せめて」ともう一度言って、カヤは顔をあげた。今度はまっすぐに藤本さんを見つめている。「自分でけりをつけたいんです。自分で確かめたいんです。行かせてください」

藤本さんは、カヤをじっと見つめた。カヤも負けじと見つめ返している。
しばらく藤本さんは、腕を組み、考えていた。そして、部屋中に飾ってある写真を見渡す。
「たとえ、止めても……結局、勝手に実行してしまうのでしょうね」
それは、諦めのような言葉だった。カヤは、「はい？」とぽかんとしている。
「達也もそうでしたから」
藤本さんは、微笑みながらため息をついた。
達也。その名前は、聞き覚えがある。確か、カインノイエが創られるきっかけになった少年だ。藤本さんの制止を無視して、独断で子供を『迎え』に行った少年。藤本さんは、この状況に、彼を思い出していたんだ。
「和幸」
藤本さんが、低い声で俺の名前を呼んだ。俺は立ち上がってうなずく。
「何かあったときのために、お前も行きなさい」
「分かってる」
もちろん、そのつもりだ。
「藤本さん……」

カヤは、安心したように微笑んでいた。

「詳しいことは、和幸に聞いてください。どんなものが証拠になるのか、知っておいてもらわなければ意味がないですからね」

「……はい」

真面目になった藤本さんに影響され、緊張した面持ちでカヤはうなずく。

にしても……まさか、カヤが行くことになるとは夢にも思ってもいなかった。心配だが、カヤの言うことも一理ある。神崎にとっては、カヤは娘だ。一番、家に侵入しやすいのはカヤだろう。それに、両親もカヤには油断するはず。俺がこそこそ家を探るより効率がいい。ガードマンだってそうだ。カヤが家を出歩いてて、誰も不審に思うことは無い。

ただ一つ、気になるのは……アトラハシスか。カヤをとり返そうとしているアトラハシスだ。カヤが神崎に戻ってくれれば、やはり現れるだろうか。もうすでに、神崎の家で待ち構えているかもしれない。

だが、アトラハシスなら問題ないんだよな。カヤを守る使命の人間なんだから。逆に、カヤを渡すべきかもしれない。アトラハシスが現れて、カヤを渡せ、と言ってきたら……俺は従うしかないんだよな。リストが人間を守る役目をもつように、そいつはカヤを守る役目なんだから。そのほうが、カヤのため……。

分かってる。『災いの人形』だなんだという話は、俺の管轄じゃない。いつか、俺じゃ何の力にもなれないときがくる。だから、カヤを守る『使命』をもつ奴に任せるべきなんだ。俺には、そんな『使命』はないんだし……。

でも、なんだ？　なんでこんなに気に食わないんだ？　なんでこんなに……落ち着かない？

俺の拳に、自然と力が入っていた。

はせがわまさよし

それは、六時を回ったころだった。和幸とカヤが去り、藤本は、どのカインにどの『おつかい』を頼むかを考えていた。そんなとき、コンコン、というノックの音がした。

カインたちは、遠慮なく藤本の部屋に入ってくる。どんなに礼儀正しいカインでも、わざわざノックするような子供はいない。つまり……と、藤本は顔を上げ、ドアを見た。

「はいりなさい、三神くん」

言われて、三神はドアを開け、部屋に入ってくる。不敵な笑みを浮かべて。

「なんで分かったんです？　僕だ、て」

「ノックして入ってくるのは君くらいだからね」

へぇ、と鼻で笑い、三神はソファに座った。

「今日は、どんな情報を売りに来た？」

藤本は腕を組み、イスに深く座りなおす。この若い青年はどこか気に食わない。だが、彼の情報屋としての腕は誰よりも認めているつもりだ。さて、今夜は何を言い出すのか、と藤本は構えた。

だが、三神は「いえいえ」と肩をすくめて言う。

「今日は情報屋として来たんじゃありません」

「なに？」

藤本は、意外な言葉に眉をあげた。
「あなたの友人として、忠告しに来ました」
友人？　一体、いつから自分がこの情報屋の友人になったというのだろうか。図々しいというか、無礼というか。藤本は、やはりこの若者は気に入らない、と再確認した。しかし、忠告、というのが気になる。
「何の話だ？」
「あなたの息子さんのことです」
藤本は、ハッとした。藤本には実の子供がいたが、それは娘だった。つまり、三神の言う息子というのは、カインの少年たちのことだ。だが、彼らがどうしたというのだろう。いや、そもそも誰のことをいっているんだ？　藤本は、興味を示すように、身を乗り出した。
「一体、なんの話だ？」
「あるカインを調べている同業者がいるんですよ」
「なに？」
同業者、とは、情報屋のことだ。情報屋が、カインを調べている。それは、不気味な話だった。それも、『あるカイン』と三神は表現した。誰か一人のことを指している。こういうときは、大体、そのカインの命を狙う奴がいて、居場所を探っている可能性が高い。『おつかい』の報復だ。
「くわしく聞こう」

藤本は真剣な表情で、三神を見つめた。

「その情報屋とは、『深い』仲でしてね、調査が行き詰って僕のところに相談しに来たわけです」

「どうやって知ったかを聞きたいんじゃない。わたしの『子供』に危険が迫っているのかどうか、を聞きたいんだ」

まるで脅すように低い声で藤本は言った。三神は、両手を挙げて、鼻で笑う。バカにするような態度だ。

「いや、心配しないでください。多分、ですが、命が狙われているわけではないと思います」

「どういうことだ？」

それでは、ますます分からない。命を狙っていないのに、なぜカインを調べる必要がある？　藤本は、顔をしかめた。

「命よりも……僕が心配しているのは、彼のメンタル面で」

「三神くん！」

藤本は急に怒鳴った。まるでからかうように、話を遠まわしに語り続ける三神に堪忍袋の緒が切れたのだ。

「『彼』とは誰のことを言っている？　一体、誰が誰を探しているというんだ？」

怒鳴られても驚いた様子もなく、三神は相変わらずの不敵な笑みを浮かべている。

「依頼人の名は、長谷川正義（はせがわまさよし）……だそうです」

今まで散々もったいぶっていたのが嘘のように、三神はすんなりとその名を言った。藤本は、ぴたりと固まった。はせがわまさよし。その名前に覚えがないか、頭の中を必死に探す。

「はせがわまさよし……」

口に出してみるが、覚えはない。

三神は、命を狙われているわけではない、と言った。それなら、思い当たるのは……『迎え』に行った子供だ。今まで多くの子供達にカインを『迎え』にやった。一人一人、資料として名前は残ってはいるが、全員の名前を頭に記憶しているわけではない。その中の一人が、カインにお礼をしたくて探している可能性もあるだろう。

藤本はそう思うと、デスクの一番下の引き出しを開き、資料をひっぱりだした。そこに名前があれば、過去にカインが『迎え』に行った子供、ということになる。

だが……すばやく資料を調べだした藤本に、三神は笑い声をあげた。

「そこに、彼の名前はないですよ」

三神は、はっきりとそういった。資料をめくる手をとめ、藤本は三神を見る。

「なんだと?」

「申し訳ないんですが、言えるのはここまでですね」

藤本は、頭に血がのぼるのを感じた。思わず、立ち上がり、デスクに両手をたたきつける。

「いい加減にしろ！　知ってることを全部言え！」
「すみません。これ以上は、さすがに、彼女の営業妨害になりますから」
彼女、とは、三神と『深い』仲だという情報屋のことだろう。
「ここまで話して、今更、そんな心配か？」
「ええ。ここまで話して差し上げたんだから、感謝してほしいですね」
藤本は、ぐっとデスクに置いた手を握り締める。この男は……やはり、信用ならない。感謝、といっているが、ただ藤本が取り乱すのを観察したかっただけに違いなかった。
「僕はただ、藤本さんに準備をしていて頂きたくて……」
「準備？」
「ええ。とりあえず、驚くことが起きる。それだけは、頭においといてください。
心臓発作なんて、起こさないように」
三神は気が済んだかのように、ソファから立ち上がる。
「それじゃ……僕のお節介はこのへんで」
「待て」
「はい？」
藤本は、真剣な眼差しで三神を見つめる。
「長谷川正義は、一体どのカインを調べてる？」
「それは……」と、三神は怪しげな笑みを浮かべた。「長谷川正義

に会えば分かります」
「！」
会えば分かる……どういう意味だ？　藤本は、三神が去った部屋で一人で考えていた。やはり、知り合い、ということなのだろうか。だが、聞き覚えのない名だ。歳を取って忘れているだけなのか。藤本は、ふうっとため息をつき、頭をかかえた。
「はせがわ……まさよし」

秘めた幸せ

もう六時か。すっかりあたりは暗くなっている。

俺は、上下黒の、ファッションセンスまるでゼロの服に着替えてカインノイエを出た。上はただの黒無地ロングTシャツだし、下も黒のジーパン。靴は、右足にナイフを隠したブーツ。これが、カインが『おつかい』をするときの服だった。そこらのバイトのほうが、もっとセンスのいい服を着ているだろう。いつだったか、砺波が藤本さんに「私に選ばせてよ」と怒鳴り込んだっけ。結局、まあいいじゃないか、と藤本さんに言われて、砺波の改革は失敗に終わった。藤本さんには、服を気にする俺たちの気持ちが分からないようだ。そもそも、見られてはいけないのだから、気にする必要はないだろう。そう言っていた。確かに……それも一理あるが……。

こうして、カヤの隣をこんなださい格好で歩くのは、情けない。まあ、カヤは俺のこの格好を見ても顔色一つ変えてなかったから、気にしてないんだろうけど。

ええい。そんなことはいいんだ。それよりも心配することがほかにあるんだし。

「本当に大丈夫か？」

俺は、カヤに確認する。これで、何度目だろうか。ここに来るまでの道のり、何をすべきかを説明した。その間、まるで接続詞かのように「大丈夫か」を連発していた気がする。その度に、カヤは優しく微笑んだ。

角を曲がれば、カヤの実家、というところで、俺は立ち止まった。カヤも、同じように立ち止まる。

「今夜じゃなくてもいいんだぞ」

俺はカヤに振り返って、しつこいようだが、また確認した。

「今夜がいいの」

「急すぎないか？」

カヤは顔を横に振る。

「早く、はっきりさせたいの。両親が人身売買に関わっていて、本当に私を誰かに売ろうとしたのかどうか……」

そう言われては、なんとも言えない。そこまで気持ちが固まっているなら、俺にできることは……

「何かあったら、すぐ『迎え』に行く」

俺は力強くそう言った。すると、カヤはきょとんとし……しばらくしてから、「あ」とつぶやき、顔をそむけた。

なんだ、その反応？　俺、気色悪かったか？

「……」

俺は、カヤを安心させるつもりで言ったのだが……なんだ、この沈黙は？　そんなに変なことを言ったのか？　よく分からんが、とにかく、俺の発言のせいで、妙な雰囲気になったのは確かだ。何がいけなかった？

＊　＊　＊

和幸くんは、隣で気まずそうな表情で頭をかいた。

あぁ、もう、私は何してるんだろう。「ありがとう」とか、「よろしくね」とか、いろいろ言葉があるのに。胸が苦しいほど嬉しいのに、なんで何も言えないの？　私は、赤らんだ顔を見られるのがはずかしくて……それを隠すので精一杯だった。でも、すぐ顔をそらすなんて失礼だったよね。なんて思われてるか……

そんな自己嫌悪と後悔の言葉を頭の中で並べていると、

「そうだ、これ」

思い出したように和幸くんが言った。まともな返事ができてないのに、話がかわっちゃう。私は、自分で台無しにしたというのに、無性に悔しくなった。でも、もう遅いよね。とにかく、今はやるべきことに集中しなきゃ。私は、よし、と心の中で気合をいれて、顔をあげた。すると、目の前に指輪があった。

「へ」

思わず、そんな声をあげていた。和幸くんが、どこから出したのか、シルバーの指輪を手にしていた。指輪には、黒い石がついている。なんだか、シンプルな指輪。

「それなに？」

「カメラ」

「え？」

カメラ？　私は驚いて指輪をじっくり見つめた。もしかして、この黒い石が？

戸惑っている私をよそに、和幸くんは私の左手を取った。ドキっと心臓が大きく鳴った。触れられるの……これで二度目だ。夕べ、私を『迎え』に来てくれたときと、これで二度目。でも、夕べとは

違うドキドキがある。夕べは、不安と恐怖、そして家を飛び出すことへの緊張で、それどころじゃなかった。でも、今は違う。しっかり感じる。和幸くんの手の温もり。やっぱり、男の子の手は全然違う。大きくて、頼もしい。

「さっき、カインノイエを出るときに藤本さんから渡されたんだ」

言いながら、和幸くんはリングにあう指がどれか、探っている。そういえば、確かに、カインノイエを出るとき、藤本さんが何かを渡していた。黒い長方形の箱だった。もらってすぐに和幸くんはそれをポケットにつっこんでいたな。指輪だけにしては、大きすぎた気もするけど……。他にも何か入ってたのかな。

「その映像は専用の眼鏡で見ることが出来る。家の外からそれで俺が監視するから」と、和幸くんは視線で脇にはさんでいる黒い箱を指した。

そうそう、この箱だ。そっか。指輪と眼鏡がはいってたのか。なるほど、と私は頷く。にしても、おもしろいもの持ってるんだな。

なんて、のんきに感心していたが、あることに気づいて私はハッとした。

「あ……」という、かすれた小さな声がでた。

リングのサイズにあう指をみつけ、和幸くんが指輪をはめようとしている。でも、その指は……指輪をするには、すごくすごく重要で……。こんなときに、こんなシチュエーションで、そこに指輪をはめられるのは……！

「……」

ごくっと私は唾を飲み込んだ。和幸くん……気づいてないのかな。それとも、分かってるけど気にしてないだけ？　私が意識しすぎてるだけ？　どうしよう、言ったほうがいいの？　でも、それも変だよね。けど、砺波ちゃんが彼女だったら……こんなの嫌がるはず。このまま黙ってたら……ずるいのかな。

そんなことを迷っているうちに、和幸くんは、するっとカメラつきの指輪を私の薬指にはめた。左手の薬指に――。

「！」

胸が、ドキドキしてる。分かってるの。そういうつもりじゃない、ってことは。でも、なんだか嬉しい。だって、こういうときくらいじゃなきゃ、こんなこと実現しないかもしれないもの。ほんの少しの間くらい、こんなことで浮かれても罰（ばち）は当たらないよね。

「よし」と和幸くんは、はめた指輪の黒い石を時計まわりに少し回し始める。まるで時を刻むように、カチッカチッと音を出しながら、黒い石はぎこちなく回った。

「これで、起動したはずだ」

和幸くんは、満足そうにいって、私の左手から手を離した。左手から、急に心地のよい温もりが去ってしまった。私はつい……名残惜しくて、和幸くんの手を目で追っていた。

「それ、安物だから衝撃には弱いんだ。なるべく、物にあてたりしないように」

「うん」

私は微笑んで頷くと、左手の薬指を見つめた。そこには、見かけ

だけの指輪が光っている。

帰宅

和幸は、藤本から受け取った黒い箱を開けた。そこには、センスのない黒縁眼鏡とイヤホンがはいっている。いつの時代のがり勉眼鏡だよ、と和幸は嫌になった。もう少し、おしゃれなデザインの種類もあるのだが、その分値段が高くなる。藤本は、そもそも見られてはいけないのだから、と同じ機能で安いものがあればどんなデザインでもそちらを選んでいた。別にけちなわけではない。カインの生活費に上限なしのクレジットカードを渡してしまう藤本だ。金を惜しむことは無い。だが、無駄に高い機材を買うならば、その分『子供たち』の養育費にあてたい。そういう考えの持ち主だった。

さて、と和幸はその眼鏡をかける。よくできた小型のディスプレイだ。解像度はそこまでよくないが、どういう状況かは理解できる。その代わり、自分の視界はふさがれることになる。和幸は、塀に背中を押し付けて、眼鏡にうつる指輪の映像に集中した。

「よし」

和幸は満足そうに言った。カヤは言われたとおり、指輪を進行方向に向けて歩いてくれている。揺れはするが、しっかり、カヤの進行方向の映像が見える。

和幸は、今度は黒い箱からイヤホンを出し、右の耳にはめた。指輪は音もひろってくれる。少し雑音ははいっているが、カヤが門を開ける音が聞こえてきた。安物ながら、必要なものはしっかりそろった商品だ。

しかし……と和幸は思う。昔は、テクノロジーで名をはせたこの国も、今ではこんな雑な造りの中途半端な商品が出回っている。原因は分からない。だが、ある時期から世界のテクノロジーは止まってしまった。止まった、というのは誇張表現かもしれない。停滞し

た、といったほうが適切か。まるで、世界が成長を止めてしまったかのように。とにかく、質は悪くなる一方だ。その代わりにこの国で進み始めたのがクローン研究だった。まるでそれに勢いを吸い取られるようにその他のテクノロジーは伸び悩んだ。不可思議で気味の悪い風潮だった。

和幸は、そんなことを考えながら、カヤの指輪から送られてくる映像を観察していた。

＊　＊　＊

和幸くんに言われたとおり、私は手を前で組み、指輪を進行方向にむけて歩いていた。ふと、家の前に一台のセダンが止まっているのが目に入る。両親の車じゃない。メイドさんやガードマンは車で来ない。誰かお客さんでも来てるのだろうか。

私は疑問に思いながら、門を開き、敷地内にはいった。

「あれ」

そして私はすぐに異変に気づく。人の気配がしない。家の明かりはついている。でも……いるはずのガードマンが庭にいない。私は広い庭を見回した。いつもなら、何人かのガードマンが銃をたずさえ、そのへんに立っている。なのに、誰もいない。それに……門が開けば、自動的に呼び鈴が中でなるはずだ。「おかえりなさい」とメイドさんが出迎えに来てくれるものなのに。

もしかして、私を心配して皆で探しに行ってる？　でも、ガードマンもいないのは変だ。空き巣でも入られたら大変なのに。

戸惑いつつも、なんだか嫌な予感がして、私は足早に玄関へと向かった。ドアノブに手をかけ、「あ」と気づく。そういえば、鍵を持ってない。参ったな、と思いつつ、だめもとでドアノブをひねった。すると……ガチャっといとも簡単に開いてしまう。

やっぱり妙だ。明かりはついてるから誰かいるんだろうけど……呼び鈴が鳴ったのに誰も出迎えに来ないし、鍵が開いてる。こんな無用心な状況はおかしい。

私は胸騒ぎがして、ドアを勢いよく開けると、駆け込んだ。

「お母さん、お父さん！？」と叫び、靴をぬいで家にあがる。そのとき、私はハッと息をのんだ。

「なに、これ……」

玄関にあがったその床に……白い線が引かれている。それは、いたずらにしては気味の悪い形。まるで誰か倒れた人のような……。そして、私はあることに気づく。台所のほうから、ピピーピピーというビープ音のようなものが聞こえてくるのだ。この音、何か私は知っている。住人に、あることを警告する音。

「防犯システムが……切れてる」

そのときだった。わはははは、という笑い声が二階からした。やっぱり誰かいるんだ。それも、複数の男の人の笑い声。ガードマンだろうか。二階で休憩でもしてるのかな。防犯システムが切れていれば、私が入ってきた呼び鈴もならなかったに違いない。それで、誰もでてこなかったのだろうか。

私は、ごくりと唾を飲み、二階への階段を上り始めた。

＊　＊　＊

カヤは、左手を胸の前において、階段を上っていた。男たちの話し声が近づいてくる。それは、二階の奥からだ。だが、それはおかしい。二階の奥は、父の書斎。そこは普通なら入るのに暗証番号が

必要な部屋だ。防犯システムが切れている今なら、容易に入れるだろうが、なぜガードマンがそこでたむろしているのだろうか。
カヤに、不安と恐怖が襲ってきた。明らかに嫌な予感がしていた。だが……

「何かあったら、すぐ『迎え』に行く」

立ち止まって目をつぶり、その言葉を思い出した。この指輪を通じて、和幸が様子を見てくれている。何かあれば助けに来てくれる。そう思うと、勇気がわいてきた。
そうっと二階の廊下を歩く。なぜか、左右に六つある部屋の扉は全て開けられていた。その中には、防犯システムが働いているときは暗号が必要な部屋も混じっている。そして、自分の部屋も開けられている。心臓があつい。カヤは、胸においている手をぎゅっと握り締めた。そうっと自分の部屋をのぞく。すると……

「！」

カヤは、思わずのけぞった。部屋が、荒らされている。ありとあらゆる引き出しは開けられ、中のものは全部外にひっぱりだされている。下着まで、あちらこちらにちらばっていた。

「どうなってるの」

消え入りそうな震える声でカヤはつぶやいた。もしや……空き巣？　カヤはおびえながら、男たちの声がする部屋を見つめる。一番奥の部屋。ガラガラ、と物音がする。それはとても乱暴で、何かを探している音でもない。そして、彼らはガードマンじゃない。カヤは確信した。彼らこそ、空き巣かもしれない。
物音がする部屋のドアは少し開いていて、そこから中がのぞけた。

カヤは、じっと指輪を見つめる。ここまできたんだ。犯人の顔、見ておかないと。そんな使命感がわいてきた。何かあれば、和幸が来てくれる。それが、後押ししていた。

部屋に物音を立てずに近づく。そうっとドアの隙間から中をのぞいた。すると、やはり男たちが引き出しや、金庫までこじあけ、中のものを乱暴にバッグに入れていた。

「見ろよ、この時計。ダイヤだらけだ」

三十代くらいの小太りの男が、カヤの父が大事にしていた時計を自分の腕にはめている。

「おーい、ずるいぞ」

猫背の年配の男が、うらやましそうにそんな声をあげた。その後ろから、背の高い青年が、カヤの父の高級なスーツを着て現れる。

「どうですか」と、にやついて、二人に見せびらかした。それを見て、他の二人は「似合わない」と馬鹿にして大笑い。

どうなってるの？　カヤは、目の前のことが信じられない。自分の息があがっていることに気づいた。体も震えている。両親はどこだ？　他の皆は何してるの？　分からないことばかりで、不安と恐怖、そして何か『理解できない感情』が渦巻いて、カヤを混乱させていた。そのときだった。

「なにしてるんですか」

「！」

後ろから、そんな声が聞こえて、誰かがカヤの肩をたたいた。カ

ヤは心臓が止まるかと思った。いつの間にか、後ろから誰かが近づいていたとは、全く気づかなかった。
和幸くん、助けて。そう祈るように心の中で唱え、ゆっくりと振り返る。するとそこには、ひげ面の三十代くらいの凛々しい顔の男がいた。カヤは言葉がでず、じっと男を見つめる。しばらく男は、カヤの顔をまじまじと見、それから微笑んだ。

「神崎のお嬢様ですね」
「え」

＊　＊　＊

いい体格のひげのおじさんは、この季節には少し厚着のジャンパーの中に手をつっこむと、内ポケットからメモ帳のようなものを出して、私に見せた。

「警察……」

私は、放心状態でそうつぶやく。体から一気に力がぬけた。そう、おじさんが見せてきたのは警察手帳だった。

「いや、無事でよかった。ケガはありませんか？」と、おじさんは優しく微笑む。
「はい。特に何も……」言いかけて、私はハッとする。そうだ、空き巣！

「あの、助けてください。この部屋に空き巣……」

また部屋に振り返ると、丁度そのとき、小太りの男がドアを大きく開けた。

「！」

気づかれた！　どうしよう、相手は三人。警察の人も危ないんじゃ。私の心臓はまた早くなった。

だが、その小太りの男は、私の予想を裏切り、愛想よく微笑んだ。

「神崎カヤさん？」

「……え」

どういうこと？　部屋の中のほかの二人も、にこやかに微笑んで「よかった、よかった」と口々に言っている。

「彼らは空き巣じゃありませんよ」と、警官のおじさんが笑っていった。「彼らも私の同僚、警官です」

警官？　この人たちも？

「あの……？」と困惑気味に言うと、うしろから警官のおじさんが、私の肩に手をのせた。振り返ると、今度は、悲しい表情を浮かべている。

「てっきり、あなたも殺されてしまったかと……」

「はい？」

殺された？　何の話？

「ご両親のこと、お聞きになりましたか？」

両親のこと？　何？　どうしたっていうの？　まさか、人身売買

のこと？
私は、とりあえず、首を横に振った。すると、ひげの警官が、わざとらしいほどにつらい表情をうかべる。
「ご両親、今朝、遺体で見つかりまして……」
「！」
私は……頭が真っ白になった。今、聞いた言葉の意味が、分からない。
「どういうこと、ですか」
かろうじて、私は言葉を出した。
「お母様の舞さんは、玄関で。お父様の昭三（しょうぞう）さんは、そこのベッドルームでお亡くなりになっていました」
頭の中で、さっき玄関でみた白い線が思い浮かぶ。まさか、あれが……お母さん？
「いや……」
私は頭をおさえた。もう、聞きたくない。
「今朝、それを発見したメイドの山田さんから連絡を受けまして……ずっと調査していました。あなたも夕べから行方不明だということでしたので、わたしたちはてっきり……」
殺されたって……誰に？　なぜ？　でも、今はそんなことより……ただ、悲しい。

両親は悪い人だったのかもしれない。たとえそうだとしても、私は愛していた。私を育ててくれたんだもの。こんな別れ方……いやだよ。

目から涙があふれでた。

「犯人の手がかりを捜すために、他の皆さんには出払っていただきました」

そう言って、ひげの警官は「さ」と私の肩を引き寄せた。

「下で、落ち着いて話しましょう」

言われるまま、私は呆然として足を動かした。ひどい疲労感がする。めまいがする。私……何しに帰ってきたんだっけ。何で、家を出たんだっけ。頭が混乱してる。どうして、両親を信じなかったんだろう。ちゃんと、話すべきだった。

いつもより何十倍も遅い足取りで、二歩、三歩と廊下を歩いたときだった。

「ははは」と、この状況に似つかわしくない笑い声がした。それは、さっきの部屋から。私は立ち止まった。そう、何か引っかかっていた。

「犯人の手がかり……」

ひげの警官は、犯人の手がかりを捜している、といった。でも……私は、後ろの部屋を振り返る。

「どうされました?」と、ひげの警官が問う。

あれが、捜査なの？　宝石のどこに、金庫のどこに、手がかりがあるっていうの？

私は思わず、走り出した。

「神崎さん！」

そんなひげの警官の声も無視し、部屋に入ると、小太りの警官のバッグに向かって走った。そこにいる三人は驚いて目を丸くしている。

「捜査の邪魔ですよ！」と、父のスーツを着たまま若い警官が言う。何が、捜査なの？

私ははっきり見た。彼らがバッグに、お父さんの宝石をつめこんでいるところを。楽しそうに、父のものを物色していたのを。笑いながら……当たり前のように。

私は、小太りの警官が抱えているバッグにしがみついた。

「おいおい、ちょっとお嬢さん？」

「これは父の物です！」

泣きながら、私は小太りの警官を見つめる。

「かえしてください」

彼らが、一体何をしようとしているのかは分からない。宝石をどうするつもりなのか、全然分からない。でも、とにかく……守りたかった。私は、両親を信じなかった。あの電話一つで、十七年培った信頼関係を疑ってしまった。育ててもらった恩を仇で返すようなマネをした。だから、せめて……守らなきゃ。父の大切なものくら

い、私が守らなきゃ。
まるでバスケットのボールの取り合いのように、私と小太りの警官はバッグをつかみあっていた。
「証拠品の押収なんですよ」
「なんの証拠なんですか」
証拠品の押収？　彼らの様子はそんな風には見えなかった。
「あなたがたは、本当に警官……」
そこまで言ったときだった。ぐっと頭に激痛がはしった。思いっきり髪をひっぱられ、私は悲鳴をあげた。バッグから手が離れる。小太りの男の呆れた顔が見えた。
「全く……」というひげの警官の声が後ろからする。どうやら、私の髪をつかんでいるのは彼のようだ。
「せっかく、丸くおさめようと思ったのに、残念です」
何？　やっぱり、警官じゃないの？　でも、あの手帳は本物にみえた。
「行儀の悪いお嬢様だ」
「！」
機嫌悪くそういった小太りの男は、私にずかずかと近づくと、右の拳を勢いよく私のほうに撃ってきた。すごい衝撃がはしり、そして……目の前が真っ暗になった。

＊　＊　＊

屋敷の外で、俺はひどくイラついていた。

くそ。なんだよ、このポンコツは？　俺は黒眼鏡をたたいたり振ったりしていた。カヤが変な男たちの部屋に入ってから、映像が来なくなっていた。もしかしたら、どこかに指輪をあててしまったのかもしれない。

「……」

俺は、神崎の屋敷の二階を見上げた。あの男達は……危険だ。だが、中の状況が分からないんじゃ、無闇に駆け込んでも……って、もうそんなこと考えてる場合でもないか。入って連れ出す。それだけだ。

俺はぽんこつ眼鏡を放り投げ、走り出した。

帰宅（後書き）

警官に対する描写がひどい件は、申し訳ありません。
１００％フィクションです。
そのうち、カバーできる話を書きますので、今のところご容赦を。

布石（前書き）

少しグロテスクな表現があります。
苦手な方はとばして頂いたほうがよいかもしれません。

布石

和幸は、部屋のあまりの惨状に言葉をなくした。ただ、立ち尽くした。部屋は、血だらけで、あたりに肉片や体の部位がちらばっている。めまいを起こして、ふらつく。こんなものは、見たことがない。

心臓の鼓動が急速に上がっていく。

「カヤ……？」

和幸は部屋にはいり、あたりを見回した。不安でふらついた足取りだ。こんな部屋にいたなら、カヤも無事だとは思えない。

「カヤ！？」

やめてくれよ、と祈って、よく部屋を見回す。そして、細くてか弱い手が、厚いジャンパーを羽織った『胴体』の下からでているのを見つけた。

「カヤ！」

カヤだと和幸はすぐに確信した。あわてて近寄り、『胴体』をよける。するとそこには、カヤがうつぶせで倒れていた。同じように血だらけだが、カヤの血ではない。ここに何人いたかは、定かではない。もう、一人、二人、と簡単に体を数えられる状態ではないからだ。和幸は、カヤを仰向けにし、体を抱き起こす。左頬にはあざがあるが、それ以外には特にケガもない。

「カヤ、しっかりしろ」

和幸は、カヤの前髪にそっとふれた。じっとカヤの顔を見つめる。今まで感じたことのない気持ちが心の中にあふれた。和幸は理解した。ただ、心配なんじゃない。俺は今、怯えている。

「カヤ……何があったんだよ」

そう苦しそうに言うと、和幸はカヤを抱きしめた。ぐっと強く、愛おしく……。そうすると、今まで落ち着かなかった気持ちがおさまった。満たされた気がした。これを、ずっと自分は求めていたんだ。和幸は思った。

和幸は、やっとこのとき、自分の『変化』の正体が分かった。自分が今まで分からなかった感情。『好き』だなんだというのは、やはりまだ分からないが、これだけは分かる。もう、はっきりと言える。あぁ、そうか、と和幸は微笑する。

「俺は……ただ、君を守りたいんだ」

＊　＊　＊

フォックスは、鏡を見つめて、ふうっとため息をついた。くっきりとした顔立ち。二重のはっきりとした目。浅黒い肌。黒く、目にかかりそうなやや長めの髪。紳士のような雰囲気のただよう彼は、いつも、一人、暗い部屋で鏡だけを見つめている。自分に見とれているわけではない。そこの鏡に映っているのは、彼ではない。彼の何よりも大事なものだ。

「フォックス」

妖艶、と言う言葉がよくあう女が、フォックスの座るイスに横か

ら寄りかかる。彼女は、色っぽいスタイルを惜しみなく、ビキニのような服でみせびらかしている。その眼は燃えるような赤だ。彼女は、他でもない天使(エミサリエス)の一人。アサルルヒの天使(エミサリエス)、バールだ。

「なぜ、何もしなかったのです？　いつもだったら、彼女があの部屋に入った瞬間にでも、奴らに呪いをかけますのに」

バールは、退屈そうに尋ねた。

「そもそも！」と、バールは腰に手をあてがう。「いつ、彼女を奪いに行くのです？　いつだって彼女を取り返せますのに。何を、もたもたと……」

「何度も話したはずです、バール。策を変える、と。しばらくは、わたしは彼に任せます」

フォックスは、バールに振り返りもせずに答える。バールは、気に食わないように「彼、ね」と小声で言った。

「でも」と、バールは諦めずに反論を続ける。「そのせいで、あなたの大事なお人形は傷をおいましたわ」

「……」

「ま、『ムシュフシュ』が目覚めたお陰で……なんとかなりましたけど」

バールは、ちらりとフォックスの顔色を伺う。依然、涼しい顔をして鏡を見つめている。

「ねぇ。あの人間(ルル)の坊やに何を期待していますの？　あなたは、あの坊やを重要視しているけど……わたくしには分かりませんわ」

すると、やっとフォックスは表情を変える。爽やかに微笑み、バールを見つめた。

「彼は、布石です」

「え？」

フォックスは視線を前に戻すと、膝を組む。

「彼は、わたしの味方です」

「は？」

バールには、主人の言っている意味が理解できない。会ったこともないというのに、どうしてそんなことが言えるというのか。

「あの二人は、間違いなく、惹かれあっています」

「お人形とあの坊や？」

バールは眉をひそめる。そんなことに興味は無い。そんなことを考えてみたこともなかった。

「それがどうしたの？」

「あの少年、カヤを見殺しにするでしょうか」

「え？」と顔をしかめ、バールはしばらく考える。「さあ……状況によるんじゃない？　世界の終焉がかかれば、見殺しにも……」

「彼は必ず、カヤを死なせはしません」

フォックスは、はっきりと言い切った。バールは、「へえ」と興味津々にフォックスを見つめる。

「何をたくらんでらっしゃるの？」

「……全ては、『収穫の日』です」

全てを語らないフォックスに、バールは呆れてため息をつく。だが、主人のこういうところも、なんだかセクシーで好きだった。バールは、フォックスの頬にチュッとキスをする。

「楽しみにしてますわ」

フォックスは、特に反応することなく、鏡を見始めた。

ただ、抱きしめて

カヤは、ゆっくりと目を覚ました。目に入ってきたのは、暗い天井。明かりはついていない。光は窓からはいる月明かりだけだ。ここはどこだろう。

「うっ」

カヤは、自分の左頬が痛むのを感じた。そっと手を触れるとずきっと激痛がはしる。頭がぼうっとしていた。自分に何が起きたのだろう。体を起こすと、自分がベッドに横になっていたことに気づく。といっても、毛布の中ではなく、その上だ。ふと、変な匂いがすることに気づく。一体どこから……そう思い、自分の手に視線を落とす。そして……

「！」

カヤは声を失った。手には赤い何かがついている。これは……血？　そして、よくみれば、自分は体中、それがついている。
手が震えだす。何があったか、段々と記憶が戻ってくる。

「いや……」

カヤは頭を抱えた。自分はそうだ。殴られたんだ。妙な男たちに囲まれて……そのあと、何があったんだろう。何が起きたの？　そして、自分は今、どこにいる？　カヤは混乱し、両手で頭を抱え、ベッドの上でひどく震えた。もしかして、自分は連れ去られたのではないか。そんな考えが浮かび、カヤはハッとした。何かされるかもしれない。

「和幸くん……」

カヤは、あわてて左手を見た。カメラ、カメラ、と指輪を見る。だが……薬指には指輪はない。和幸と唯一、つながっていた指輪が。カヤは、「いや」と声をだし、左手を右手で握り締めた。

「いや！　和幸くん！！」

その叫び声は、悲鳴にちかかった。

＊　＊　＊

「カヤ！」

急に、その声がした。私は、ハッとする。震えが急に止まった。

「カヤ、大丈夫か」と、和幸くんが、部屋に入ってきた。私は、その姿を見て、思わず涙がでた。

「おと、おとこたちが……」

一生懸命、事情を説明しようとしても、言葉にならない。涙が次から次へと出てきてしまう。和幸くんは、私の横に座り、私の両肩をがっしりとつかんだ。

「大丈夫だ。いいから、落ち着いて」

「お父さんのたいせつなもの……どうしても、がまんできなくて……」

いいから、と言われてもあふれてくる言葉を止められなかった。怖かった、すごく。何があったか話さないと気がすまないような気持ちがして、しゃべらずにはいられなかった。

和幸くんは、そんな私に優しく微笑んで、私の髪をなでた。

「落ち着いて。もう大丈夫だ」

「……どう、なったの？　あれから……なにがあったの？　この血は？」

私は、嗚咽をあげながら、途切れ途切れにたずねる。和幸くんは、一瞬難しい顔をした。でも、それは本当に一瞬で、すぐにまた笑みを浮かべる。

「いいから……」

それだけ言って、和幸くんは私を抱きしめた。

「！」

私は、何も言えなくなった。

＊　＊　＊

俺は、しばらく、カヤを抱きしめていた。胸の中で、段々と落ち着いていく彼女の呼吸を感じる。パニックはおさまってきたみたいだ。

俺はあのあと、適当にタクシーを拾って戻ってきた。幸い、暗くて運転手は俺たちが血だらけなのに気づかなかったようだ。彼女が酔っ払っちゃって、なんてありきたりの嘘を言ったら「お若いのに」と皮肉じみたことを言われた。

とにかく、カヤの精神面が心配だった。ぽんこつカメラが途中できれてしまって、何があったのか俺はよく分かっていない。カヤの頬のあざも、どうして出来たのか。

とりあえず……さっきカヤは「この血は？」と聞いてきた。つまり、気絶したのは、あの血の海が出来る前、てことだ。カヤが気絶したのは、あの惨劇が原因ではない。不幸中の幸いだな。あれを見るのは、流石にショックが強すぎる。だが……気絶するような何かがあったことには変わりは無い。一体、何が？　それに……

「両親が……殺された、て」

「！」

カヤのか細い声がした。首元にその息を感じる。さっきと違って、落ち着いた声だ。

「ああ、聞いてた」

そう、そこまではカメラも作動していた。

「大丈夫か？」

「……」

カヤは、何も答えない。大丈夫なわけ、ないよな。俺は馬鹿だ。しばらく、カヤは黙ってしまった。数分の沈黙が……重い空気で何時間にも思えた。俺には、どんな言葉をかければいいのか分からない。

「そうだ……」

俺は、思い出したように切り出す。カヤを引き離し、カヤの顔を

伺った。左頬のあざが痛々しい。ずきっと胸が痛むのを感じた。
「風呂、お湯ためといたから。まず、血をおとそう。な」
「……」
ほんのちょっとでも、気分転換になれば。そう思ったのだが……なるわけないだろうな。まぁ、どちらにしろ、早く血は落とさないといけない。気持ち悪いだろうし。
カヤは、唇をかみ、ゆっくりとうなずいた。
「タオルと……服は、俺のでいいか？」
そう言って俺は立ち上がった。だが、何かがひっかかって、俺は中腰で止まった。
「え？」
振り返ると、カヤが俺の服をつかんでた。
「砺波の服のがいい……か？　一応、何枚かあるけど」
俺が戸惑ってそう言うと、カヤは首を横に振る。なんだろうか、とまたベッドに腰を下ろした。
カヤは、迷子の子犬のような、寂しい目で俺を見つめて言う。
「もう少しだけ……」
「え？」
もう少し？　なんだ？
俺が困惑していると、カヤは俺に寄りかかるように体を預けてき

た。

「カヤ？」

「ただ、抱きしめて……」

それはかろうじて聞こえるほどの、小さな声だった。

俺は、カヤの背中に手を回すと、何度か優しくさすった。

＊　＊　＊

とりあえず、風呂にはいって血をおとそう。和幸くんはそう言って、私をお風呂場に案内してくれた。部屋と玄関をつなぐ廊下の真ん中。ドアを開けると、そこは脱衣所になっていた。和幸くんのTシャツとハーフパンツを渡され、私はそこに入る。

「バスタオル、あとで持ってくるな」と和幸くんは言って、脱衣所のドアを閉めた。

血まみれの服を脱ぎ、下着をはずす。一体、何があったんだろう。ブラにまで、血がしみこんでいる。これだけの血……誰の？　まさか、あの男達？　あの後、一体何があったんだろう。和幸くんが……何かしたのかな。でも、一体何をしたの？

私は、お風呂場のすりガラスのドアを開く。浴槽にはお湯がたまっていた。わざわざ、和幸くんがためてくれたんだ。そう思うと、自然と笑みがもれた。優しさが身にしみる。

キュッとシャワーを開け、全身であびる。気持ち良い。体の緊張がほぐれていくのを感じた。両手に視線をおろす。両手にこびりついていた血がお湯に溶けていく。指先から赤い液体がするすると落ちていった。排水溝まで赤い筋となってそれは流れていく。

「……」

しばらくぼうっとそれを見つめていると……何かがぐっとこみ上げてきた。ずっと、こらえてきたもの。

「お母さん、お父さん……」

涙がシャワーと混じって、頬を、体を、足をつたって排水溝へと流れていく。私は、シャワーを全開にする。勢いのよいシャワーの音がお風呂場に響き渡る。

＊　＊　＊

俺は、トントン、と脱衣所のドアをノックする。やっと見つけたおろしたてのバスタオルを手に持って。

「カヤ、入るぞ」

風呂場のほうからシャワーの音が聞こえる。カヤはもうシャワーを浴びているんだ。特に答えを待つことも無く、俺は脱衣所を開けた。

すりガラスを通して、シャワーを浴びているカヤの姿がぼんやりと見える。なめらかな体のラインに、つい、目を奪われた。バスタオルを置いてさっさと出るつもりが、俺は数秒ほど、そこで見とれていた。

「って、何してんだ」

ハッと我に返ると、俺はあわてて棚に歩み寄り、そこにバスタオルを置く。ふと、足元に血だらけの服を見つけた。そして、カヤの

下着。……下着！？

「悪い！」

カヤに聞こえるはずもないのに、そう言って不自然に顔をあげた。そのときだった。

「ごめんなさい」

「いや、俺が悪い……え？」

俺は風呂場に振り返る。シャワーの音に隠され、かすかだが、カヤの声が聞こえた。反射的に返事してしまったが、明らかに俺に対してじゃないだろう。俺は、風呂場のドアに歩み寄った。シャワーを全開にしてるのか、シャワーの音がやたらと大きい。耳をとぎすますと、やはり聞こえてきた。

「ごめんなさい」という、カヤの声。そして、それは……嗚咽する声に変わっていった。すりガラスを通して、カヤがしゃがみこむのが見えた。

「お父さん、お母さん……」

俺は一瞬、風呂場をノックしよう、と手をだし……そして、やめた。このシャワーは、ちょっと開けるだけで充分な勢いがある。全開にする必要はないはずなんだ。

つまり……と、俺は足音をたてないよう、静かに脱衣所を出る。パタン、とドアを閉め、そのままもたれかかった。シャワーにまじって、カヤの泣き声がかすかに聞こえる。

「俺に、聞かれたくないんだな」

なぜだかは分からない。だが、カヤがそれを望む以上……知らないふりをするのが、今、俺が唯一カヤのためにできることだ。

「……無力だ」

俺はその場でしゃがみこんだ。

願い

風呂場の扉を開閉する音が聞こえた。カヤが風呂をあがったんだ。
俺はベッドを背もたれ代わりにして床に座り、ボーっと窓から月を見上げていた。しばらくして、ガチャっと脱衣所のドアが開く音がする。ひたひた、と裸足で歩く音。キイッと部屋の扉が開く音。俺はその音全てに耳をすましながらも、視線は月から反らさなかった。

「お風呂、ありがとう」

そんな、カヤの遠慮がちな声が聞こえた。

「おお」

俺は、それでもカヤに振り向かなかった。というより……振り向けない。心臓の鼓動が早くなっている。俺は、最低だ。今夜、ひどいことがカヤに起こった。俺は、カヤを慰めなきゃいけない。それなのに、俺は今、全然別のことを考えている。

「隣、いい？」

すぐ横に、カヤの気配がする。

「あ、ああ」

『あ、ああ』？　なんだよ、その返事は。かっこわるすぎだ……。
よいしょ、とカヤは隣に腰を下ろした。風呂上りのぽかぽかした暖かさが、左肩に伝わってくる。俺は、ちらりとカヤに目をやった。

「！」

だめだ。俺はすぐに目をそらす。思ったとおり。風呂上りのカヤは、色っぽすぎて……見てたら理性がどうにかなりそうだ。ぬれた髪。ほてった顔。ぶかぶかのTシャツ。

ああ、くそ。なに考えてんだ？　おかしいだろ。無神経にもほどがある。ああ……カヤが一人で風呂場で泣いた理由が分かるな。こんな俺が、相談相手になるわけがないんだ。

俺は、何を言えばいいか分からず、ただ黙っていた。時計の音が、いつにも増して耳障りに聞こえる。なにか話さなきゃ……だが、何を？

「ごめんね」

突然、カヤが言った。

「ごめん？　なにがだよ？」

俺は、え、と思って、カヤに振り返る。暗くてよかった。俺が変な顔しててもわからないだろう。

「資料、見つけられなかった」

「え」

資料？　カヤは、無理した笑顔を浮かべている。何の話だ？

「うっかり、忘れちゃったの。『おつかい』のこと」

俺は、ハッとした。そうだ。すっかり基本的なことを忘れていた。

カヤは、俺たちに協力するために、家に戻った。そして……

「……」

俺は、言葉を失った。一気に、目が覚めたな。煩悩がどっかに吹っ飛んだ。俺は本当に最低だ。それを実感する。そうだよ。カヤがこんな目にあったのは、俺のせいじゃないか。そんなことも、分かってなかったのかよ、俺は。

「和幸くん？」

「俺のせいだ」

つぶやくように言った。カヤは、目を丸くした。その目は、泣いたせいで赤くなっている。

「俺たちの『おつかい』に、巻き込むべきじゃなかった」

「え？」

俺が家に侵入すべきだったんだ。カヤを行かせるべきじゃなかった。そしたら、カヤはケガなんてしなくてすんだ。怖い思いをすることはなかった。血を浴びることなんてなかった。俺はぎゅっと拳を握り締める。何が、守りたい、だ。カヤを危ない目にあわせたのは、俺じゃないか。

「俺は……」

分かってしまった。血の海で、カヤを見つけたとき。俺の心の『変化』を。カヤと話すようになったのは、ほんの数日だというのに……こんな気持ちが、今、俺の心の中にうずまいているなんて信じられない。だが、はっきり認識した。俺の中にある今まで味わった

ことの無い『恐怖心』。恐ろしくなってしまったんだ。彼女を失うのが、とてつもなく怖くなった。こんな気持ちは、今まで感じたことはなかった。『おつかい』をするだけだった今までは、俺には『気持ち』なんてものもなかったのかもしれない。カヤは、それを俺にくれた。カヤは俺を必要としてくれた。俺に、助けて欲しい、と言った。カインとしての俺じゃなく、和幸としての俺を頼ってくれた。俺はあのとき、この地上で『存在』を許された気がしたんだ。

俺の脳裏に、まぶしいくらい愛らしいカヤの笑顔がうかぶ。カヤは、俺にとって……

「和幸くん？」

カヤが、顔を覗き込むように俺を見てきた。

「大丈夫？」

俺に、優しく、そう微笑みかける。だが、その笑みはとても不自然で……明らかに無理していることが分かった。たった一夜で、心に深い傷をおったはずだ。今もつらいんだ。なのに、俺の心配かよ。『大丈夫？』って、それは俺のセリフだよ。何で俺は、こんなときにカヤに心配させてるんだ。何で俺は、カヤにこんな無理した笑顔をつくらせてる？　俺は、なんてふがいないんだ。

俺は、カヤの目をじっと見つめる。カヤは戸惑いつつも、微笑して俺の言葉を待っていた。

これが正しいことかは分からない。でも、伝えたくてしかたがなくなった。今さら、こんなことを言っても説得力はないかもしれない。俺のせいでこうなったのに、守りたい、なんて身の程知らずかもしれない。自分勝手かもしれない。でも、カヤに誓いたくなった。もう二度と、こんなことはおこさせない。例え何があろうと、君を守ってみせる。だから……また、あの笑顔をみせてほしい。

「カヤ、俺は……」

そのときだった。ピーンポーン、という呼び鈴がなった。

＊　＊　＊

和幸くんが、次の言葉を言う前に、部屋の呼び鈴がなった。誰か、来た？

和幸くんはハッとして、私を通り越して、玄関のほうに目をやる。部屋のドアは開いたままだ。まっすぐに玄関のドアが見える。

「かずゆき〜〜〜」

そんな、砺波ちゃんの声が聞こえてきた。

「砺波？」

和幸くんは不思議そうにそう言って、私に視線を戻す。その表情には、困惑が見受けられた。

「ちょっと、一人にしても大丈夫か？」

「うん、平気。だいぶ、落ち着いたから」

申し訳なさそうに、和幸くんは微笑んだ。本当に、優しいな。私は、心があたたかくなるのを感じた。

和幸くんは、腰を上げ、部屋を出て行った。ぱたん、とドアが閉められ、私は一人、部屋に残される。一気に、緊張がとけた。ふうっと深いため息がでる。和幸くんの、あんな真剣な表情、みたことがない。なぜか、今更、急に心臓がドキドキし始める。

「『カヤ、俺は』……なんだろう？」

私は、言われた言葉を自分で言ってみた。何を、言おうとしたんだろう？　もしかして……なんて、空想を抱いて顔があつくなる。そんなわけないよね。砺波ちゃんが彼女かもしれないんだし。

でも、いいの。和幸くんがこうして傍に居てくれるだけで、私には充分だよ。私は心からそう思った。じゃなきゃ、今頃私は心身ともにボロボロだ。隣にいてくれるだけで、安心できる。心があたたかくなる。

ふと、目の前のテーブルに目をやった。

「あ」

暗くてよく見えなかったが、そこには、あの指輪があった。黒い石のついたシルバーのリング。

「こんなとこに……」

失くしたんじゃないか、なんて心配してたから、すごくホッとした。私は腰を上げ、その指輪を手にとった。

「よかったぁ」

ぎゅっと指輪を抱きしめるように胸にあてた。私と和幸くんをつなげていた指輪。大切な指輪。愛おしい指輪。

私は、左手の薬指を見つめた。ここに、和幸くんはこの指輪をはめてくれた。私は、そのときのことを思い出す。思い出すだけで、また胸がドキドキする。夢のような瞬間だった。

私はずっと忘れない。あのときのこと。絶対、忘れない。何があ

っても……

私は指輪を握り締め、目をつぶった。そして心の中でつぶやく。でもね、欲を言えば……もう一度、いつか……

「神さま……」

そんな言葉が口からもれた。私は目を開け、月を見上げた。

私はどの宗教にはいっているわけでもない。これから入るつもりもない。でも、祈りたくなった。願いたくなった。だって、そうでもしなきゃ、叶いそうにない願いに思えたから。

「もしよかったら、あと一度だけでもいい。この薬指に、指輪をください。

和幸くんと私の……二人の指輪を」

なぜ、月に願ったのか。自分でも分からない。私はクスっと笑ってしまった。

「能天気ね、私は」

今夜あったことを考えれば、他にもたくさん祈ることがあるはずだ。でも、こういうときだからこそ、私は明るい未来を願いたかった。

もういいんだ

「何の用だよ、砺波？」

俺は、ガチャっと扉を開け、いきなりそういった。砺波は、相変わらず丈の短いワンピースを着てそこに立っている。長袖だからましなほうだが、夏になるとランジェリーみたいな服を着だす。どういう神経してるんだか。

砺波は、不機嫌そうな顔で俺をにらんでくる。

「何時間待たせてんのよ？」

「は？」

待たせる？　今夜、約束してたか？　俺は眉をひそめると、砺波は両手を腰にあてがった。

「言ったでしょ？　待ち合わせ場所にカヤをつれてきて、て」

「え？」

そんなこと言われたか？　ええと、と思い出す。

「『実家』で会ったときにはなしたじゃない」

ああ……そういえば、別れ際にそんなことを言ってたな。なんとなく思い出した。だが、あんな乱暴に言われただけじゃ、それは約束といえないだろ。

「簡単にいうけどな。別に、待ち合わせの場所も時間も知らされてないんだぞ。

どうやって……」

反論すると、砺波はえらそうに、ストラップがうじゃうじゃついた携帯電話を見せ付ける。

「これ、何か分かる？」

「……ケータイ」

おい、馬鹿にしてんのか？　すると、砺波はすうっと息をすい、一気に俺に怒鳴りつける。

「そう、携帯電話。け・い・た・い！　分かる？　常に持ち歩くものよ。なんで、あんたはいつもチェックしないのよ？　何時間も前に、場所も時間もメールしといたんだから」

「こっちは『おつかい』してたんだ。それどころじゃなかったんだよ」

そもそも、メールの返信が無い時点で、俺が気づいてないことを察しろよ。本当に自分勝手だ。……まぁ、こいつもカインだし仕方が無いか。カインは基本、皆、自分勝手だ。俺もきっとそうなんだろう。俺たちは、自分で自分を守るしかない。親代わりの藤本さんもいるが、大勢の『子供』たちを抱えている。一人一人、細かく面倒みれるわけではない。自分を面倒みれるのは自分だけ。自分を一番に考えなきゃ、到底生きていけない。そうしてるうちに、段々自分勝手になってしまうんだ。

「『おつかい』……それを言われると……」

砺波は、むむっとたじろいだ。とことん、こいつは藤本さんを特別慕っているからな。何が『おつかい』よ、とは冗談でもいえない

だろう。『おつかい』だった、という言い訳はこいつには効果てきめんだ。

「とりあえず」と、砺波は落ち着いた様子で俺を見上げた。「今からでもいいから、カヤを連れてくわ」

「え？」

「カヤ、居るんでしょ？　あんたの部屋に泊まってる、て聞いたんだけど」

いや、居るけどな……今から？　そりゃ、無理だろ。どんだけ、遊びたいんだよ、こいつは。

「今夜はキャンセルできないか？」

「ええ？」

砺波は、信じられない、と目を丸くした。

「なんで？」

「……いろいろ、あったんだよ。大事な用事じゃないんだろ？」

事情はとても全部話す気にはなれない。俺は目をそらして、どうせ、と呆れたように言った。

「それはあんたが決めることじゃないでしょ？」

さすがにむかついたのか、砺波は俺をにらみつける。

「とりあえず、カヤに聞いてよ」

「聞いても同じだよ。今夜は無理だ、て」

というか、今の状態のカヤを、このハイテンション自己チュー女と会わせたくはない。カヤはきっと、嫌だ、とは言わないだろう。そういう性格だ。それをいいことに、砺波は、カヤを無理やり引きずり出す。そんな映像が容易に想像できる。俺がここでこいつを引き止めなくては。

砺波は、え～っとつまらなそうに声をあげた。まるで、だだをこねる子供みたいだ。童顔だから、それがさまになっている。

「もう……曽良(そら)になんて言えばいいのよ」

「え？」

ほら、帰った帰った、と追っ払うつもりだったのだが……砺波のつぶやいた言葉を、聞き逃すことはできなかった。曽良だって？なんであいつの名前がでてくるんだ？

「曽良(そら)？　あの、曽良か？」

俺が戸惑いつつたずねると、砺波は肩をすくめて、おなじみのフレーズを返す。

「松尾芭蕉の弟子のね」

それは、曽良のキャッチフレーズのようなものだった。自己紹介では、いつも言っていた。掴みにはばっちりだ、と本人は気に入っていた。確かに、インパクトがあって覚えやすい。だが、『松尾芭蕉の弟子』がそこまで有名かは俺にはわからない。実際に、一部のカインには、芭蕉、と呼ばれている。本末転倒だよ。そんな曽良もカインの一人。俺や砺波と同い年だ。小学校では三人で同じクラスにもなったことがある。中学にあがってからは、めったにつるむことはなくなったが……。

「曽良がなんなんだ？」

久々に聞いたその名前に驚いていた。砺波はまだあいつと遊んでいるのは知っていたが……まさか、カヤと三人で遊ぼうとしたのか？　すると、砺波は意外な言葉を口にした。

「デートよ」

「は？」

デートだ？　待て。余計に混乱してきた。

「誰と、誰がデートするんだよ？」

「カヤと曽良よ！」

それがまるで当然のように、砺波は俺を責める口調でそういった。

「え？　どういうことだよ？」

意味が分からない。なんで、カヤと曽良がデートするんだよ？　どういう経緯でそうなるんだ？　なんかよく分からないが、いい気分じゃない。

聞かれて、砺波は急に嬉しそうな表情を見せた。この顔……見覚えあるな。色恋話をするときの砺波だ。目がきらきら輝いている。だが、なんで今、その顔をするんだ？

「実は……」と、砺波はもったいぶったように言い、「カヤに男を紹介することになってさ」と自慢げに言い放った。

「……」

俺はなぜか、頭が真っ白になった。

「男？　なんで？」

俺は、ひきつった笑顔をうかべて砺波に聞き返す。

「なんで、て……彼氏もいないし、好きな人もいないっていうから。じゃあ、私が探すの手伝うよ、てことになったのよ」

「……」

「って、なんで、あんたに話さなきゃいけないわけ？」

「あ……そうだな」

視線をどこにやればいいのか分からない。目が勝手に泳ぐ。間違いない。俺は動揺してる。いきなり、とんかちで頭を殴られたような気分だった。急に、むなしくなった。なぜだか分からない。だが……ショックだった。砺波は、俺が急におとなしくなったので、気味悪そうに顔をしかめる。

「大丈夫？　顔色わるいわよ」

「なんでもない」

低い声でそういうと、じゃあな、も無しに玄関のドアを閉める。俺は、これ以上……話す気になれなかった。というより、聞きたくなかった。

「ちょっと！？」という砺波の声がかすかに玄関に残った。俺は、ドアを背にし、後ろ手に鍵をしめる。ふうっとため息をついた。

「デート……か」

俺は半笑いで、はき捨てるように言う。

＊　＊　＊

「砺波ちゃん、なんだって？」

和幸くんが部屋にはいってきて、私は開口一番、そう尋ねた。和幸くんは、扉の前で立ち止まると、頭をかいた。

「デート……」

「え？」

「デート、だったんだな」

え？　何の話だろ？　それに、なんだか和幸くんの様子も変。さっきとどこか違う。

「デートって？」

「曽良（そら）とデートだったんだろ、今夜」

そら……？　どこか聞き覚えのある……あ！　私は、ハッとした。『松尾芭蕉の弟子』というフレーズが頭に浮かぶ。カインの曽良さんだ。そうだった……砺波ちゃんに、今夜、曽良さんを紹介するって言われてた。すっかり忘れちゃってた。怒ってるかな。あとで謝らなきゃ。

それより、今は……と、私は和幸くんを見つめる。デートっていうわけじゃない、て伝えなきゃ。話の流れでそうなっただけ。和幸くんに、デートだなんて思われるの、すごく嫌。

「和幸くん、それね……」

「悪い。勝手に断った」

「え……」
「デートだとは知らなかったから」
和幸くんは、まるでわざと私の言葉をさえぎるように口を挟んだ。こんなこと、今までなかったのに。どうしたんだろ……。心臓がどんどんはやくなっていく。喉が渇いていく。嫌な予感がする。
「曽良には、俺から事情説明しとくから。安心しろよ」
「そんなこと、しなくても……」
「曽良は、良い奴だから。うまくいくといいな」
「！」
胸が、えぐられるような気分。和幸くんは、優しく微笑んでいた。まるで……全然気にしていないみたいだ。
「俺、風呂はいるな。今日はもう休めよ」
「あ……」
ちょっとまって。これ、なに？　何か、間違ってる。何かが変な方向へ転がってる。そんな気がした。
「和幸くん」
私は思わず、呼び止めた。
「ん？」と、和幸くんは振り返る。その表情は、いつも通り。でも、どこかそっけない。
「さっき……」と、私は勇気を出して言う。「さっき、何を言おうとしてたの？」

「え？」

私は、手の中にある指輪をぎゅっと握りしめた。

「『カヤ、俺は』……て、何か言いかけたでしょ」

和幸くんは、すぐには答えなかった。しばらく、顔をそむけ……そして、申し訳なさそうに微笑んだ。

「もういいんだ」

「……！」

和幸くんは、私の反応を待つことなく、すぐに部屋を出て行った。廊下を歩く足音と脱衣所のドアの音が聞こえる。もういいんだ……その言葉は、とても冷たくて、遠ざけるような言い方で……私は、ただその場に立ち尽くした。

軽蔑……されたのかな。こんなときにデートなんてするお気楽な女だ、て呆れられた？　男遊びする軽い女だ、て思われた？

どうしよう。嫌われたかもしれない。

「……嫌だよ」

和幸くんが抱きしめてくれた体が、もうすっかり冷えてしまった。すぐそこに居てくれたのに。優しく抱きしめてくれたのに。

――もういいんだ。

その、冷たい言葉が頭に響くと、さっきとは違う涙がでてきた。

小さな願望

――彼氏もいないし、好きな人もいないっていうから――

砺波の声が頭に響く。

「……かっこわり」

浴槽につかり、俺はそうつぶやく。体を沈め、あごまで湯につかると、さっきカヤに言おうとしたことを、自分で思い出す。もう少しで、カヤを困らせるとこだった。今から他の男とデートするってのに……迷惑だよな。俺の脳裏に、さっきカヤが見せた無理した笑顔がうかぶ。俺は、カヤのあんな笑顔は見たくない。優しくてほがらかで、暖かい……そんな、いつも見せてくれるカヤの笑顔が……

「――俺は、好きなんだ」

俺は、そうつぶやいていた。ピチャッと蛇口から水がおちる音がする。それ以外、静かなもんだ。カヤは眠っただろうか。男のくせに、長風呂だ、と思われていそうだな。

俺は目をつぶって、カヤの笑顔を思い浮かべる。初めて一緒に帰ったときに、見せてくれた笑顔。夕べ、「おあいこにしよ」と言った笑顔。たまにみせるはにかんだ笑顔。いつもそんな笑顔を見るたびに、心が安らいだ。カヤの笑顔を見れれば、俺はそれでいい。カヤを困らせるようなことは、したくない。

だが、正直言って、俺はがっかりしていた。カヤに好きな人はいない、と砺波にはっきり言われて落胆したんだ。つまり、だ。俺はどうやら、心のどこかで、カヤが俺に惚れてると思っていたようだ。今思えば、とんでもなく恥ずかしいことだが……。

――『災いの人形』はあなたに恋をしています。

そう、その原因は、リストのあの言葉。なんで、あいつがそんなデタラメを俺にふきこんできたのかは謎だが……おかげで、馬鹿みたいに思い上がっていた。まあでも、そうじゃないか、と自分でも思うことは何かとあったことはあったんだ。

俺は左手を湯から出し、その薬指を見つめる。その『事実』に気づいたときには、カヤの指にあの指輪をはめていた。うっかりしていた。左手の薬指がどんな意味をもつのか、全く考えていなかった。「あ」と思ったときには、もう指輪はカヤの薬指にあった。カヤは何も言わないし、戸惑ってもいなかったから……俺も知らんふりをしたが……。

「やっぱ……気づいてなかっただけか」

ふ～っと、体を沈めた。そんなに大きな浴槽ではない。一人暮らしのマンションにしては大きめだが、膝を若干まげなければ体がおさまらない。上半身を沈めれば、それだけ足をださなければならない。俺はかまわず、鼻をつまむとそのまま頭を湯の中に沈めた。行儀が悪いぞ、という広幸さんの声が聞こえてきそうだ。今は大目に見てください。

にしても、カヤにとって俺はなんなんだ？　こうして平気で俺の家に泊まってるし、抱きしめても嫌がらない。いいお友達、てやつなのか？　男にすらみられてないのかもしれない。

って、なにぐちゃぐちゃ考えてるんだよ、俺は？　もうどうでもいいだろ。カヤは、新しい関係を他の誰かと求めてるんだ。曽良はいい奴だし……きっと、カヤを支えてくれる。それにカインだ。カヤを守ってくれるだろう。カヤが無事で、いつも笑顔でいてくれるなら……それで充分だ。

俺は、それでいいんだ。

もし、ずっと息がもつなら、このまま湯船に沈んだまま眠ってしまいたい。そんな気分だった。

＊　＊　＊

「お風呂、長かったね」

私はベッドに腰をおろして、お風呂から戻ってきた和幸くんにそう言った。和幸くんは目を丸くして私を見る。

「起きてたのか？」

「うん」

部屋の扉を後ろ手に閉め、和幸くんは明かりをつけた。いきなり明るくなって、目がちかちかする。

「寝ててよかったんだ」

「まだ九時だもん。眠れないよ」

「……それもそうか」

和幸くんは、ははっと笑ってタオルで髪をふいた。お風呂上りの和幸くんは、下はスウェット、上は……裸。男の人の裸なんて見たことない。私は視線に困っていた。でも、つい……気になって見てしまう。鍛えてるんだろうな。ムキムキってわけじゃないけど、筋肉がしっかりついてる。セクシーって……こういう体をいうのかなぁ？

「カヤ……？」
「え？」

いけない。つい、ぼうっと見とれてた。和幸くんは、眉をひそめて私を見ている。変に思われたかな。

「大丈夫か？」
「え……」

和幸くんは心配そうに私に歩み寄る。だめ。今、近づかれたら……心臓がおかしくなりそう。

「熱でもある？」と、和幸くんは私の顔をのぞきこむ。
「ないよ、大丈夫。ちょっと、暑くて」

なんてごまかして、手でぱたぱたあおいだ。和幸くんは、そうか、と背を伸ばし、窓に向かった。

「窓、開けようか」
「ありがとう」

和幸くんは、窓を半分だけ開けてくれた。
ごめんね、和幸くん。違うの。顔が赤いのは……熱とか、暑いからじゃないんだよ。そんなことを心の中で訴える。とても、口には出せないけど……。
今にも、「和幸くんのことが好き」と伝えてしまいたい。もう一度、抱きしめて欲しい。でも、私にはそんな勇気はない。私は両親を失った。家にももう帰れない。今、こうして自分を保てていられるのは、和幸くんが傍にいてくれるから。好きな人の傍にいられるから。もし今、和幸くんを失ったら、もう私に頼れる人はいない。

好きだ、て伝えて拒絶でもされたら、きっと今のこの関係も壊れてしまう。気まずくなって、離れなきゃいけなくなる。そんなことになったら、今度こそ私はおかしくなる。それなら、このままでいい。

――もういいんだ。

和幸くんの冷たい言葉が頭に響いた。もしかして、嫌われたのかもしれない。でも……と、私は窓際にたたずむ和幸くんを見る。こうして和幸くんはいつも通りにふるまってくれている。いつもの優しい和幸くんだ。演技かもしれない。『おつかい』のために、仕方なく私に親切にしてくれているのかもしれない。そう考えたら悲しいけど……それでもいいよ。和幸くんが傍にいてくれるなら、どんな形だっていい。ただ、傍にいたい。傍にいてほしい。

私は、ずるいな。

「そうだ」

和幸くんが思い出したようにつぶやいた。

「飯。夕飯、食べてないな」

「え……あ、そうだった」

うっかりしてた。そういえば、お腹が空いている気がする。和幸くんは、タオルを首にかけ、腰に手をあてがった。

「よし、何か作るか」

「料理、できるの？」

男の子が料理。私の父は亭主関白そのものだったから、そんなこ

と想像できない。私は首を傾げて和幸くんを見つめた。和幸くんは私に顔を向け、自信満々に微笑む。

「四年間一人暮らしだ。どう思う？」

「……料理できなきゃ、今頃ガリガリだね」

和幸くんは私の答えに満足したようにうなずくと、ベッドの隣の収納ケースに歩み寄り、Tシャツを取り出した。

「もしくは、ファストフードの食べすぎで肥満だ」と付け加えて、Tシャツをかぶる。

「和幸くんはどっちでもないもんね」

「そういうこと」と和幸くんは答え、私の前を通り過ぎ、廊下にある小さなキッチンへと向かった。

「何か手伝おうか？」

私は和幸くんの後を追った。

＊　＊　＊

和幸は、冷蔵庫を開け、少ない食材に顔を引きつらせる。

「あー……きゃべつ半分、たまねぎ四分の一」

たいしたものを作る気はもとから無かったが、ここまで材料がないのは予想外だった。とりあえず、あるだけ冷蔵庫から出すことにし、キャベツとたまねぎをカヤに手渡す。肉は冷凍庫にあったはず、と冷凍庫の扉を開けると、思ったとおり、そこには豚肉が二パック

冷凍してあった。和幸は、よかった、と微笑み、カヤに振り返る。

「なんとか、肉はあったから……て、どうした？」

和幸の期待を裏切り、カヤは表情を曇らせていた。和幸は豚肉を取り出すと冷凍庫の扉を閉め、カヤを見つめた。

「気分、悪いか？」

数時間前に、ひどい目にあったのだ。こうして、普通にふるまっているほうがおかしいというもの。急に泣き出されたとしても、文句は言えない状況だ。和幸は、カヤが無理をしている気がしてならなかった。

「ううん。ただ、あのね……」

確かに、顔色が悪いわけではない。カヤは、いいにくそうにもじもじしている。

「どうした？」

「お肉、食べれないの」

「え」

予想だにしない返答に、和幸はぽかんとする。カヤは、上目遣いで申し訳なさそうに和幸を見つめた。

「ベジタリアン？」

それがまるでどこかの種族かのように、和幸は尋ねる。

そんな和幸の問いに、カヤはこくりとうなずいた。どうやら、キ

ャベツとたまねぎで何とかしなくてはならないようだ。和幸は、なにも言わずに、肉を冷凍庫に戻した。

命の引き算

「誰に、料理習ったの？」

私は、キャベツを洗いながら、隣でたまねぎをきっている和幸くんに尋ねる。

「広幸さんっていう……俺の兄貴みたいな人」

和幸くんはなれた手つきで、たまねぎを頭の方から根元の方に、スライスしていく。

「あにき？」

「ああ。俺を『迎え』に来てくれたカインだ」

「！」

私はハッとした。そうだ。カインノイエは、クローンの子供たちを救い出し、育てる場所。カインノイエに救い出された子供たちはカインになって、他のクローンを救い出す。ということは、和幸くんを救い出したカインがいる、ていうことなんだ。

「四年前まで一緒に暮らしてた」

「そうだったんだ」

意外。藤本さんが皆を面倒みてるとばっかり思ってたから……でも、そうだよね。藤本さん一人で、そんなに大勢の子供の面倒をみれるわけがない。大人のカインが、他の幼いカインを育てるシステムになっているのかな。

「カインは、救い出した子供の面倒を見るの？」

私は和幸くんの横顔を見つめて尋ねた。いつの間にか、キャベツを洗う手が止まっていた。

「人による。でも、大体はそうなってるよ」

「そっか。和幸くんにはお兄ちゃんがいるんだね」

なんだか、嬉しくなった。クローンの子供たちはずっと孤独と戦っているんじゃないか、なんて思っていたから。藤本さんが親代わりといっても、とんでもない大家族だもん。パパやママを独り占めしたい年頃の子供にとっては寂しいはず。でも、お兄ちゃんやお姉ちゃんがいるなら、話は別。

「広幸さんか……」

キャベツを洗う手を動かしながらつぶやいて、私はふと気がつく。広幸……和幸……

「名前、似てるね」

洗い終わったキャベツの皮を一枚和幸くんに手渡した。和幸くんは受け取りながら、懐かしむような笑みを浮かべる。

「ああ。広幸さんがつけてくれたんだ」

「そうなんだ。通りで」

「俺たちカインは、『創られた』子供。両親なんていないから、最初、名前はないんだ。たとえあっても……オリジナルと同じ名前とか、ろくなもんじゃない」

オリジナル、ていうのは、自分のＤＮＡの元になった人のことだよね。というより、同じＤＮＡを持っている人、だ。
ろくなもんじゃない……か。カインの皆は、自分のオリジナルのことをよく思ってないのかな。和幸くんは前、自分のオリジナルが誰か分からない、て言っていた。知りたいと思うことはあるんだろうか？　探そうと思ったことはあるのかな？　オリジナルの両親は？　ＤＮＡ的には実の両親になるんだもの。会いたいと思ってもおかしくはないはず。私だって……本当の両親に会いたい、て思ったことは何度もある。お母さんとお父さんが亡くなった今、こんなこと言うのは不謹慎かもしれないけど。

「だから、『迎え』に行ったカインがその子供の名前をつけるのが、今じゃ伝統になってる」

和幸くんが、キャベツに包丁をいれながら、そう付け加えた。

「伝統、か」
「ああ。だから、カインの中には、変な名前がごろごろ居るわけだ。俺は、ラッキーだよ。
『砺波』なんて、あいつを『迎え』にいったカインが、適当に地名から選んだらしいしな」

砺波、という名前に、胸がズキっと痛む。ごめんね、砺波ちゃん。砺波ちゃんは何も悪くないのに……砺波ちゃんが和幸くんと付き合ってるかも、と思うと名前を聞いただけでも悲しくなる。私は何様なんだろう。

「砺波って、地名だったんだね。珍しいと思った」と、私はなんとか返事をした。絶対、顔、ひきつってるよ。私は、和幸くんから顔をそらすように、キャベツに目をむける。私、さっきからキャベツ

全然洗えてないな。

「他にも」と、和幸くんは包丁を止め、何かを考えるように視線を上に向けた。「そうだな。明後日（あさって）、とか」

「え？」

私は思わず、笑ってしまった。

「あさって？　それ、名前？」

「だろ？　笑えるよな」

和幸くんも笑いながら、私に振り返った。

「あと……皇帝、とかな」

「皇帝くん？　からかわれたりしないの？」

「するよ。でも……『迎え』に来てくれた人にもらった名前だからな。文句はいえない」

「そっか」

「でも、さすがにひどいものは、藤本さんが止めるけどな。アスファルト、とか」

「アスファルト！？」

「ああ。どうかしてるだろ」

「うん、可笑しい」

私と和幸くんは見つめあい、二人で笑いあった。

幸せ、てこういう時間のことをいうんだろうな。私は笑いながら、そう思った。今夜起きた悪夢のようなことを、ほんの少しだけ忘れられる。こうして、台所で二人でたって笑いながら料理をする。夢みたいだ。

「それで……」と、私が切り出したのは、和幸くんが野菜をいためはじめたときだった。

「広幸さん、今はどこに？」

私は、何も考えずにその質問をしていた。和幸くんの顔が一瞬ひきつった。炒める手がおそくなる。明らかに、雰囲気が変わってしまった。

「死んだ。四年前に」

「……」

廊下に、炒め物の音がうるさく響く。私は、言葉を失う。軽はずみに……なんてことを聞いてしまったんだろう。

「ごめん」

それしか、言えなかった。

「気にすんな」

和幸くんはそう言って私に微笑みかけた。その笑顔に、無理している様子はない。

「本当に、気にしなくていいんだ。寿命だった。仕方ない。俺たちは覚悟してる」

寿命？　そんなに広幸さんは高齢だったんだろうか。でも、高齢のカインなんて想像できない。それに、俺たち？　どうしても、その言葉を聞き逃すことはできなかった。

「覚悟って、どういうこと？」
「俺たち『創られた』子供は……」と言って、和幸くんは火を消した。いい匂いがただよっている。ふうっと一つため息をつき、和幸くんは私を見つめた。

「寿命が普通より短い」
「え？」
「それは、もとになったＤＮＡを採取した年齢による」
「どういうこと？」
「ＤＮＡを採取した時点でオリジナルがもつ残りの寿命。それが、俺たちの寿命なんだ」

それってつまり……と、私は頭の中で整理する。オリジナルの寿命から、ＤＮＡを採取した年齢を引いた年数がクローンの寿命？

「たとえば、広幸さんは二十六で亡くなった。つまり、オリジナルの寿命がつきる二十六年前に採取したＤＮＡで『創られた』んだ」

和幸くんは、さもそれがなんでもないかのように軽く言って、たまねぎとキャベツの炒め物を皿によそい始めた。

「そんな……」
「問題なのは、この事実があまり知られてないことでさ。ってか、クローンを売り込む奴がそれを隠している。あいつらにとっては良くない事実だからな。
とにかく……そういうわけで、結構いるんだ。高齢になってから自分を創ろうとする金持ちの馬鹿がさ。それじゃ、ちょっとしか自分の分身は生きられない、てのにな。俺たちにとっては迷惑な話だよ」

返す言葉が見つからない。和幸くんは平気そうに話してるけど……私には、すごく怖いことに聞こえる。『俺たちにとっては迷惑な話』。全く、その通りだ。だって、もし……もし、和幸くんのDNAが『そういう人たち』から採取されたものだったら？　もし、百歳のおじいさんのものだったら？　和幸くん……あとどれくらい……？

「ちょっと焦げたな」

和幸くんは、苦笑してそういった。確かに、たまねぎが少しこげている。でも、そんなことより……

「和幸くん」

私は、じっと和幸くんを見つめた。自分で、何を言いたいかも考えていないのに。

「カヤ、悪かったな。変な話して」

和幸くんは、私の言葉を待つことなく、そう微笑んでくれた。謝ることないのに。私が、こんな話をさせてしまった。

「でも、俺は気にしてない。俺は自分のオリジナルのこと知らないからな。そいつの寿命なんて分からない。つまり、俺の寿命も不明だ。なら、一緒だろ」

「一緒？」

「ああ。皆、寿命はある。でも、具体的な数なんて分からない。『創られた』人間であろうが、授かった人間であろうが、皆、一緒だ」

それも、そうかもしれない。私はうつむく。和幸くんたちは、それを調べようと思えば調べられるだけであって、それを知らないうちは私たちと何も変わらないんだ。でも、そんな引き算で決められた寿命って……。

「ってわけで、俺たちは気にしてない。だから……」

和幸くんの手が私の髪に触れた。私は、ハッとして顔をあげる。そこには、穏やかで優しい和幸くんの笑顔があった。

「カヤも、気にしないでくれ」

「……」

気にしないなんて出来ない。でも、そんな顔されたら、うなずくことしかできなかった。

「さて。食べるか」

和幸くんはそう言って、お皿を二つ、部屋へと運んでいく。私はその背中を、複雑な気持ちで見つめていた。

命の引き算（後書き）

クローンについて完璧に調べたわけではありません。このような説もある、という情報を元にしました。また、完全なクローンが造れるようになったときには、この寿命の問題はなくなる、という説もあります。

ですので、クローンの寿命に関しては、この物語の中だけの設定であり、フィクションです。

勉強不足で申し訳ありませんが、ご了承ください。

「和幸くん、起きてる？」

カヤのそんな声が聞こえてきた。夕飯も終え、皿を片付けたあと、俺たちはまっすぐ寝ることにした。カヤはまだ眠くない、と言っていたが、今夜あった出来事を考えれば、精神的に参っているはずだ。俺はとにかく、カヤを休ませたかった。

だが、どうやら、本当に眠くないようだ。俺は、ソファに寝転がったまま、カヤの寝ているベッドのほうに顔だけ向けた。

「ああ。どうした？」

「嫌なら、答えなくていいからね」

カヤは、ベッドに横になり、顔だけ毛布から出してこっちを見ている。

「なんだ？」

「オリジナル……」と、カヤはいいにくそうに切り出す。初めて口にする外国語のように、ぎこちない発音だった。「オリジナルの人に会いたいと思う？」

何を聞くんだよ？　俺は思わず、体を起こしていた。

「は？」

「ごめんね。失礼だよね」

カヤもあわてて体を起こした。今にも泣きそうなほど、申し訳なさそうな表情だ。そんな顔されると……

「いや、驚いただけだから」

俺が寝転がらない限り、カヤもこのまま体を起こしたままにするだろうと容易に想像がつく。俺はゆっくりと体を横にした。予想通り、カヤもそれにあわせるようにベッドにまた寝転がる。

「オリジナル……」

俺は考える。オリジナルと会いたいか？　そんなこと考えたこともない。確かに、俺のＤＮＡがどこから来たのか。それが気にならないといったら嘘になる。だが……

「会いたくないな」

カヤの返事はない。会いたい、というのを期待していたんだろうか。まあ、いい。俺の正直な答えを言おう。それが、カヤが本当に求める答えのはずだから。

「ってか、そいつがもうこの世にいないことを願うよ」

「え」

俺はまた顔を横に向け、カヤを見つめる。悲しそうな表情をしている。

「俺がもう一人いるなんて、気持ち悪くて仕方ない。それに……オリジナルと会えば、ますます自分が『創られた』人間なんだ、て思い知らされる。コピーなんだ、てな」

「そんな……」

カヤが慰めようとしている。俺にはそれがわかった。カヤの言葉をさえぎるように、俺はすばやく言葉を返す。

「なんで、急に？」

「え……」

俺にそんなこと聞かれると思っていなかったのだろうか、カヤは口ごもってしまった。さては……さっきの寿命の話か？　やはり話すべきじゃなかったかな。カヤにはもう嘘はつきたくなかった。嘘で固められた関係はやめたかった。カインだ、と明かしたあの夜から……。だが、余計なことまで打ち明けてしまったのだろうか？　寿命のことは、俺たちカインにとっては当たり前のことで、俺は本当に気にしていない。カヤもそんな風に考えてくれると思っていた。でも、カヤは純粋で優しい女だ。それを考えれば、あんなこと話してカヤが気に病むことは当然か。

「カヤ、さっきのことなら」と、口にしたときだった。

「お父さんとお母さんは？」

「え？」

カヤは、真剣な顔でこちらを見ている。何かを懇願するような視線で。だが、何を求められているのか分からない。

「お父さんとお母さん？」

とりあえず、寿命のことじゃないことは分かったな。

「オリジナルの、ご両親とは会いたいと思わないの？」

「……」

どうして、そんな質問を思いつくんだ。俺は言葉を失った。カヤの質問の意図がつかめないし、真意もわからない。なんだって、そんな質問を？　どんな答えが望みなんだ？

「さあ、それこそ考えたこと無い」

俺はカヤから目をそらし、顔を天井に向けた。そして、カヤの質問を考える。オリジナルの両親。本当に考えたこと無かった。それは、俺の両親、てことにもなるんだよな。実の両親。俺にはそんなものいないと思っていた。だが、確かに、ＤＮＡ的には俺の実の両親は存在している。

「……」

分からない。想像すらできない。そもそも、彼らは俺のことを知らないはず。俺は商業用に『創られた』。俺のＤＮＡは盗まれたもの。存在すら知らない息子のクローンが突然現れたら……ショック死でもしないだろうか。まあ、もしオリジナルが死んでいればその両親もこの世にいないだろうが。

そんなことを、頭の中で考えていると、カヤの小さな声が聞こえた。

「私はね、会いたいって思ってた」

「え？」

俺はカヤに視線を戻す。カヤは、枕をぎゅっとつかみ、その手を見つめていた。

「両親には内緒にしてたけど……自分の実の両親のこと、知りたいってずっと思ってたの」

「あ……」

そうか。カヤは自分をただの養女だと思っている。なぜ、カヤが神崎家の養女になったかは謎だが、少なくともカヤは自分に実の両親がいると信じているんだ。俺は知っている。『災いの人形』である彼女に、実の両親はいない。そんなこと、言えるはずもないが。

「私ね、ぼんやり覚えていることがあるの」

「え？」

ドキッとした。待てよ。なにかとんでもない事実でもとびだすんじゃないだろうな。明日、またリストと朝のひと時を二人で過ごさなきゃいけなくなるのか？

「両親と関係あるかは分からない。でも……懐かしい声がするの」

「懐かしい声？」

カヤは、首を伸ばし、窓から月を見上げた。

「小さい頃、夜になると、誰かがそばにいた気がするの。ベッドの横に、誰かがいて……私にいつも語りかけてきた」

「何を？」

すると、カヤは今まで見せたことのないような、真剣な表情をみせた。俺は、その表情にぞくっとした。彫刻の女神のように、美しい。

そしてカヤは、ゆっくりと口を動かす。なまめかしい唇を。

「しゅうえんのうたひめ」

きっと、俺はいやらしい目でカヤを見ていた。少なくとも、その言葉を聞くまでは。俺は、え、と体を起こした。

「しゅうえんのうたひめ？」

しゅうえん……それは、『終焉』か？　嫌な予感がする。そのフレーズは、『災いの人形』を思い起こさせるからだ。

「なんだ、それ？」

「どこかの、御伽噺（おとぎばなし）みたいなお話なの」

カヤはそう言って、横に向けていた体を仰向けにした。そして、何かに乗り移られたかのように、カヤは真顔で語りだす。

「あるところに、土からできたお姫さまがいました。
お姫さまは神さまに愛されていました。神さまのかわいいお人形です。
しかしかわいそうなことに、お姫さまが生まれた世界はとても邪悪で、神さまは悲しみました。
そこで神さまは、お姫さまにある詩（うた）を教えました。
その詩は、世界に終焉をもたらすものです。
神さまはお姫さまに言いました。
『つらくなったらいつでもこの詩を詠（うた）いなさい。
汝を苦しめる世界は破壊され、汝は楽園へと導かれるだろう』
お姫さまは十七歳になるまで、世界に耐えました。
しかし、とうとう、お姫さまは憎しみに病みました。そして……」

俺は、カヤの御伽噺に聞き入っていた。その話には聞き覚えがあった。一緒ではない。だが、リストが話してくれた『災いの人形』によく似ている。お姫様は『災いの人形』、つまりカヤのことだ。

俺の心臓が、ドクンドクン、と段々早くなっている。リストは言っていた。『テマエの実』を食べない限り、カヤは自分の使命を思い出さない。カヤは本当にこれをただの御伽噺だと思っているんだ。だが、誰がこんな話をカヤにしたんだ？

「！」

俺はハッとする。考えることもない。一人いる。考えられる奴が。カヤを見守り、過激な『ストーカー』並みのことをしてきた人間。アトラハシスだ。まさか、カヤにこの物語を語ったのはそいつか？

「でもね」というカヤの声が、俺の考察をさえぎった。いつの間にか、カヤがこちらを見ている。その表情は、いつもの愛らしいものに戻っていた。

「最後が思い出せないんだ。そこまでは覚えているの。はっきりとじゃないけど、話し出すと、するする出てくるの。きっと、小さい頃何度も何度も聞かされたんだと思う。誰かに……」

その誰かは、アトラハシス。カヤが小さい頃は、カヤの前に現れていたのか。寝る前に、そんな御伽噺をするために……。アトラハシスはカヤの親代わりだという。まさか、寝かしつけていたんだろうか。

「ねえ、和幸くん」と、カヤはいたずらっぽく微笑んで、俺を見た。

「え？」

「和幸くんはどう思う？　おはなしの続き。

その子は、世界を滅ぼしてしまったのかな」

「！」

ドクン。俺の心臓が大きく揺れた。

「どうしても、思い出せないんだ」

カヤ……！　どうしようもなく、せつなくなった。そばにかけより、抱きしめたくなった。カヤは何も知らないんだ。それをただの御伽噺だと思っている。

俺は、つくり笑顔を浮かべることしかできなかった。俺には分かる。カヤは、続きを思い出せないんじゃない。続きがないんだ。『まだ』、ないんだ。

そのエンディングは、これから、カヤが決めるものだから。

スラムの聖女

朝の七時半。藤本は教会の鍵を開け、扉を全開にした。鳥のさえずりが教会に響き、朝日が光線となってふりそそぐ。藤本は、朝日を全身であび、ゆっくりと深呼吸をする。カインノイエをはじめてから、藤本は朝型の生活をするようになった。『子供』たちが学校前にいつ訪れてもいいように、朝早く教会を開けなくてはならないからだ。藤本の自宅はここから徒歩十分ほどのマンション。何かあれば、『子供』たちは藤本の家にかけこめるのだが、この教会を『カインノイエ（カインノイエ）の家』と名づけた以上、『子供』たちが好きなときに出入りできる場所にしたかった。だから、夜遅く閉め、朝早く開ける。藤本は、風呂と寝るためだけに自宅に帰っているようなものだ。もはや、『カインノイエ（カインノイエ）の家』ではなく、『藤本の家』にちかい。

藤本は、日課である朝の掃き掃除を始めた。昨日、和幸が丁寧に拭き掃除までしてくれたので、ほこりがほんの少しある程度だ。五分もせずにきりやめた。できのいい息子をもつと、つまらないものだ、と藤本は微笑む。

「藤本さん」

ほうきを片付けようとしたときだった。落ち着いた女性の声が教会に響く。誰かはすぐ分かった。藤本は、ほうきをその場に置き、女性に目をやる。開け放たれた扉の前にたつ女性を、朝日が逆光となり照らしている。女性は一歩、二歩、教会にはいってくる。修道服を纏った三十代半ばほどの女性。やせて骨ばった顔。とんがった顎。薄い眉。目は少したれている。決して美人とはいえないが、全身から母性が滲み出ている。保育士にでもなれば、園児にモテモテになるだろう。彼女は右にえくぼをつくって微笑んだ。

「おはようございます」

その佇まいは凛として、貴婦人を思い起こさせる。藤本は、頬をゆるめ、足早に女性に歩み寄る。

「これはこれは。シスター・マリア。おはようございます」

藤本はシスターに頭を下げる。それを見て、シスターは満足そうに微笑んだ。

「朝早くに申し訳ありません」

「いえいえ。さ、どうぞ、中へ」

そう言って、藤本はシスターを中へと促す。シスターはぺこりと一礼し、藤本の部屋へと向かった。

＊　＊　＊

私は、昨日と同じ道を和幸くんと歩いていた。和幸くんのマンションから、カインノイエまでの道のりだ。住宅街をくねくねと進むだけで平坦な道。昨日よりも三十分ほど早く家をでたから、少し肌寒く、人の気配も少ない。部活の朝練があるのか、たまに野球部のユニフォームを来た中学生くらいの子が走っていくくらい。それと、眠そうなサラリーマンがちらほら通り過ぎる。ただ……皆、私とすれ違うと、私を二度見し、必ずなめるように見つめていく。理由は分かってる。このフリフリの超ミニスカートだ。

「カヤ、大丈夫か？」

また一人、サラリーマンが私の足をじっくりと見ながら通り過ぎ

たとき、和幸くんは遠慮がちにそう尋ねた。

「だ、大丈夫」

ほんとうは恥ずかしくてたまらない。今にも下着が見えそうなミニスカート。それもふわふわしてて、危なっかしい。私は極端に小またで歩いていた。砺波ちゃんはよくこんな服を着れるなぁ。

「悪いな、て俺が謝るのも変なんだけど……」

和幸くんはそう言って頭をかく。確かに。和幸くんが謝ることじゃない。

「私がいけないの。せっかく、昨日洋服買ったのに、カインノイエに置いてきちゃったから」

そう。昨日、両手に抱えていた買い物バッグを、ごっそり藤本さんの部屋に置いてきてしまったのだ。初めての『おつかい』で頭がいっぱいで、すっかり忘れていた。忘れたことに気づいたのは今朝。着替えようと思って、着替えがないことに気づき……結局、また和幸くんに砺波ちゃんの服を出してもらったのだ。

「あの角曲がれば、カインノイエだから。ついたら着替えられるよ」

「う、うん」

「ところで」と、和幸くんは不思議そうに私を見つめる。「なんで、ずっと腕組んでるんだ？」

「え！？」

ぎくっとした。そう。私は和幸くんの部屋をでたときからずっと腕を組んでいる。体のラインがはっきりと分かるびったりとした赤

いロングTシャツ。それは今の私にとっては、『不適切』な服で……私は腕を組んでいなければならなかったのだ。胸を隠すために……

「あ……」

私は恥ずかしくて言葉がでない。でも、和幸くんは首をかしげて私の答えを待っている。

「つけてないの」

私は観念してそう白状する。遠まわしに……。

「は？」

和幸くんにはそれが理解できなかったようで、顔をしかめた。男の子には、直接的に言わなきゃわかんないかな。

「下着も、置いてきちゃったから」

もごもごとそういうと、和幸くんはしばらくぽかんとした。そして、やっと意味が分かったかのようにハッとして立ち止まった。

「……え！？　ノーブ……」

ノーブラ。そういいたかったんだろう。和幸くんは、ぎりぎりで言葉を止め、顔を赤くして明後日のほうを見た。

夕べの事件で、私の（というか、砺波ちゃんの）服は血だらけになり、ブラにまでしみがついてしまった。換えのブラも、昨日の紙袋の中。そこで私は仕方なく、ノーブラで外出という人生初の試みをすることにしたのだ。

それにしても……と、私は歩きながら考える。夕べ、一体何があったんだろう？　あの血は一体なに？　私が覚えているのは、空き巣に殴られるまで。そこからの記憶はない。気づいたら、和幸くんの部屋で寝ていた。体中、血だらけで。夕べはあえて、和幸くんに聞かなかった。聞く気にもなれなかったし、とにかく夕べは正気を保つのに必死だった。普通にふるまって、考えないようにしていた。和幸くんも、それが分かっていたのかもしれない。夕べの出来事について、一切口にしないでくれた。

でも、いつまでもそうやって避けてはいられない。いつか聞かなきゃ。いや、聞きたい。今は、少し落ち着いている。何があったか聞く覚悟はできていると思う。両親の死のことも、いつか聞かなきゃいけないし。つらいけど、逃げてるだけじゃなにも解決しないもの。

そのときだった。ふわっと何かが肩に乗っかるのを感じた。

「え？」

振り返ると、和幸くんが緑のスクールブレザーを私にかけてくれていた。和幸くんはシャツにネクタイ姿になっている。

「和幸くん？」

「それ着てろよ。隠せるだろ」

相変わらず、視線は明後日のほうだ。よほどノーブラが衝撃的だったんだろうか。そんなに必死に目をそらさなくてもいいのに。

和幸くんのかわいらしさと優しさに、笑みがこぼれた。

「うん」と、私は和幸くんのブレザーに腕を通し、前をボタンでしめた。やっぱり男の子って体が大きい。ゆったりと着れるから、ちゃんと胸が隠れる。

「ありがとう」
「お、おう」
和幸くんの頬が赤らんでいる。やっぱり、かわいいな。なんだか……ノーブラもたまにはいいかも。私はそんなことを考えて、クスッと微笑した。

＊　＊　＊

藤本とシスター・マリアが本題を終え、談笑していたときだった。
「藤本さん」とノックをすることなく、和幸がはいってきた。
「カヤの服を……」
そういいながら紙袋を探して部屋を見回し、和幸は思わぬ人物を見つける。修道服に身をつつんだつつましい女性。
「シスター・マリア！」
嬉しそうに微笑んで、藤本に挨拶することなく、和幸はシスターにかけよった。シスターもそれに応えるように、ソファから立ち上がると、えくぼをつくって微笑む。
「お久しぶりですね、和幸」
「お元気そうで」
和幸は安心したように目をほそめてそうつぶやいた。
そんな様子にきょとんと扉の前で突っ立っているのは、カヤだ。

藤本の部屋にはいると、ソファには修道女（シスター）がいて、和幸は嬉しそうに彼女にかけよった。確かにここは教会だが、形だけの教会のはず。その正体は『無垢な殺し屋』の隠れ家だ。そんなところに修道女がいるのが不思議でならない。修道女がこれだけミスマッチする教会もここくらいだろう。

「あら」と、シスターは、扉の前で佇む美女に気づく。中東系の見慣れない顔立ち。きりっとした眉に、くっきりと大きな目。すらっとのびる長い足。ミニスカートがそれをより強調させている。残念なのは、ぶかぶかの緑のブレザーだろう。全くサイズがあっていない。それに、左頬のあざ。

「あのお嬢さんは？」

藪から棒に、そのケガはなんだ、と聞くようなデリカシーのない人間ではない。シスターは、あざに気を病みつつそれを顔にだすことなく、和幸に柔らかい口調で問いかけた。

「ああ」と、和幸はカヤに振り返った。「彼女はカヤ。俺が今、護衛してる」

カヤは、『護衛』という言葉にドキッとした。そういえばそうなるのか、と今更ながら気づく。

「初めまして。シスター・マリアです」

シスターは丁寧にお辞儀をした。まるでマナー講習のビデオのようにキレイなお辞儀だ。ゆったりとした動き。それでいて、まるで分度器で計ったかのようにきっちりとした角度。カヤは、初めて人のお辞儀に見とれた。

シスターは体を起こすと、カヤに微笑む。

「お美しいお嬢様だこと」

「え、あ……初めまして。神崎カヤです」

いまさらになって、カヤはあわててお辞儀をした。つい、シスターの上品な立ち振る舞いに気を取られていた。

「シスターはな」と、カヤが顔をあげるのをまたずに和幸は話し出す。「お台場の教会で貧しい人たちを助けてるんだ」

「お台場？」

カヤは体を起こすと眉をひそめて和幸を見つめる。

「お台場って、港区のスラム街じゃ……」

カヤが驚いたのも無理はなかった。お台場は、トーキョーで有名なスラム街。職も金もなく、家もない人々が集まり、集落をつくっている場所だ。開発が滞り、国から見離されたお台場は、廃墟が立ち並び、家のない彼らにはまたとないたまり場になった。そこにいっても金が手に入るわけでもないのだが、トーキョーの貧民は最後にはお台場に行く、といわれている。理由は分からないが、まるでそこが聖地かのように、困り果てた貧困層の住民はぞろぞろと救いを求めてお台場に向かうらしい。

カヤはもちろん、行ったことなどない。近づこうとすら思ったことはない。そこは死臭がただよう巨大な墓場だ、とも言われている。まさかそんなところに教会があるとは……カヤには驚きだった。さらに、こんな素朴で気品ただよう女性がそこで暮らしているなんて、信じられない。

「スラム街……というより、わたしはあそこを大きな教会だと思っています」

柔らかくすらすらとシスターはカヤに言った。

「……教会、ですか？」

今まで耳にしたお台場のイメージと教会では、全くそぐわない。カヤは首をかしげる。

「皆、救いを求めてやってきます。わたしたちは、お台場で、彼らとともに、何ができるか考えているのです」

わたしたち……つまり、他にもシスターがお台場にいる、ということか。カヤに理解できたのはそれくらいだった。

カヤがぽかんとしているのを見かね、藤本が口をはさむ。

「わたしたちカインノイエとシスターのヴィーナス教会は、姉妹のようなものでしてね。協力しあっているんですよ」

「協力、ですか？」

カヤには、『無垢な殺し屋』と貧困街の教会がどう協力できるのか想像もできない。

「シスターのもとには、様々な人々が救いを求めて現れます。その中には、子供を盗まれた人々も多くいる。つまり……」

藤本がそこまで言うと、和幸があとをひきつぐ。

「人身売買の被害者さ」

カヤはそこでハッとした。人身売買……これまでそんな商売が行われていたことも知らなかった。だが、今のカヤにとっては他人事ではない。両親がそれを斡旋していた可能性もあるのだから。

「人身売買には大きくわけて二つのタイプがあってさ。一つは、俺たちみたいな『創られた』子供が売られる場合。もう一つは、貧しい子供が誘拐され、売られるケース」

「つまり……」と、カヤはぎゅっと胸元をおさえる。アンリの顔が思い浮かんだ。「アンリちゃん？」

和幸は、何も言わずにうなずく。そう。アンリもその一人。三歳のときに誘拐され、売られ、そして一年後にカインが『迎え』にきて、今の実の両親のもとに帰されたのだ。文化祭の劇で、その一連の出来事を語るのは、他でもない、ヒロインであるカヤ自身。やっぱり、実話なんだな……と、カヤは深刻な顔で思った。

「わたしは、教会にそのような相談がきたとき、彼らにこのカインノイエを紹介しているのです」

シスター・マリアは相変わらず、えくぼをつくり微笑んでいる。

「そして、シスター・マリアからの依頼をうけて、わたしは盗まれた子供の居場所を探し出し、カインを『迎え』に送る。そういう流れになっています」

そう付け加えたのは藤本だ。

カヤは、ぽかんと聞いていた。本当に、ビジネスみたいだ、とシンプルな感想を抱く。

「藤本さんは、その『紹介料』として、食料をこちらの教会に寄付してくださっているんですよ」
「え！？」

シスター・マリアの発言に、カヤは思わず声をあげた。シスターの依頼でカインノイエが子供を救い、その『紹介料』で食料を寄付？　それはとても『協力』とはいえないんじゃないだろうか。その『依頼料』として、シスターがカインノイエにお金を払うほうが自然だ。カインノイエにばかり負担がある気がしてならない。
もちろん、シスター・マリアも、それを重々承知だ。カヤに言われずとも分かっている。

「藤本さんには助けてもらってばかりで……」と、シスター・マリアは藤本に見やった。「なんとお礼をしたらよいか」

藤本は、何も言わずに微笑むと、首を横に振る。

「藤本さんは、シスターがこうして来てくれるだけで嬉しいんですから。それで充分ですよ」

和幸は、からかうようにそう口をはさんだ。すると、藤本は「こら」と冗談交じりにしかる。

「まあ、和幸は大人になりましたね」

シスターの上品な笑い声が部屋に響いた。
カヤは、黙ってその様子を見ていた。このカインノイエとお台場の教会との関係はよくわかった。だが、カヤには不思議でならないことが一つ残っている。藤本になぜ、そこまでの財力があるのか。カインノイエの一連の『おつかい』は、貧しい人を相手にビジネス

しているようなものだ。もしくは、身寄りのないクローン。一体、誰が藤本に金を払うというのだろうか。それなのに、お台場の教会に食料を寄付までしている。さらにいえば、カイン一人一人にクレジットカードまで与えている。そこまでの金がどこから来ているのだろうか。

カヤは首をかしげ、この謎の多い老人を見つめた。

責任

着替えたいというカヤを藤本の部屋に残し、藤本と和幸は、シスター・マリアの背中を教会の前で見送っていた。シスターは何度も和幸たちに振り返り、手を振っている。

「依頼？」

和幸は、シスターに手をふりながら、藤本に尋ねた。藤本も、シスターに微笑んだまま応える。

「ああ。五歳の娘さんが盗まれたそうだ」

「俺、いこうか？」

シスターが角を曲がった。藤本は満足すると、くるりと踵を返し、教会の中へはいる。和幸も藤本の後をおうように教会に入り、扉に手をかけた。木がきしむ音とともに、ばたん、と扉が閉まる。

「お前には、まだ神崎さんの護衛があるだろう」

「そのことなんだけど……」

和幸が言いにくそうにつぶやく。藤本は手を後ろに組み、和幸に振り返った。その表情は険しい。さっき、シスターと話していたときとは大違いだ。

「あの頬のあざは？」

「！」

藤本の問いに、和幸はハッとする。そう。今、カヤの顔を見て気

づくことは、その美しい顔立ちではない。左頬のあざだ。当然、藤本も気づいていた。シスターも気づいていた。二人とも、カヤに尋ねなかっただけだ。

「わたしは昨日、はっきりと明確に示したはずだ。何かあったときのために、お前についていけ、と」

藤本は、にらむように和幸を見た。

藤本は、カインに実の子のように接している。いや、実の子以上に優しく甘いかもしれない。だが、『おつかい』に関してはきびしかった。『おつかい』での失敗は命をおとすことにもつながる。現に、何人ものカインが寿命ではなく、『おつかい』の最中に命をおとしている。それをずっと見てきた藤本は、自然と失敗に対する目がきびしくなっていた。先月、砺波(となみ)が曾良(そら)を間違って撃ったときは、特にひどいものだった。和幸は、そのときのことを思い出す。藤本にこっぴどくしかられた砺波が泣きながら和幸の部屋に来て、一晩中泣き言に付き合わされた。だが、和幸は慰めはしなかった。『おつかい』のミスは厳しく追及される。それは分かりきったことだ。皆、分かって『おつかい』に臨んでいる。その上でミスをしたなら、言い訳はきかない。全部自分の責任だ。

そして、今回は和幸のミスだ。和幸も分かっている。藤本にカヤを任されていたのに、カヤにケガをさせた。

「すみません」

和幸ははっきりとそういい、藤本を見つめる。

「何があった？」

藤本は、するどい目で和幸を見つめたまま、低い声でそう尋ねた。

＊　＊　＊

俺と藤本さんは、最前列のチャーチチェアーに並んで座っていた。俺の話を一部始終聞くと、藤本さんは深いため息をつく。

「なるほど。神崎は殺されたか」

「すでに警察がいた。屋敷には、しばらく近づけないと思う」

カヤの指輪から送られてきた映像で、俺はしっかりと警察手帳を確認した。そして、あいつらは屋敷内をあさっていた。あれのどこまでが捜査かは分からないが……一応、捜査、という体（てい）でやっている以上、俺たちカインは近づけない。裏で『殺し屋』と呼ばれる俺たちが、表の『番人』である警察と関わるわけにはいかないからだ。

「資料も、押収されているかもな」

藤本さんは背を曲げ、頭をかかえた。藤本さんの、こんな落胆する姿を見たくはなかった。俺は目をそらした。ぎゅっと手を握り締める。

「ごめん、藤本さん」と、しぼりだすように言う。「神崎が黒幕だったかもしれないのに。それでなくても、重要な手がかりだったのは分かってる。トーキョーの黒幕にたどりつく貴重な手がかりだった。それを、こんな形で失って……俺の責任だ」

誰が神崎を殺害したのかは分からない。正直、それは警察の仕事だ。だが、死人に口なし。これでは、神崎が黒幕だったのかも分からない。それに『殺人事件』になった以上、俺たちには手がだせない。神崎のもつ人身売買に関する資料も手に入ることはないだろう。

今は、警察は汚職の巣窟。中には、人身売買に関わり私腹を肥やしている警官もいる、て話だ。人身売買が明るみに出るのを恐れ、もう資料を処分されている可能性もある。

「俺は……」と、俺はつぶやく。「俺は『おつかい』をさぼるべきじゃなかったのかもしれない」

藤本さんが顔を上げたのが、横目で見えた。

「俺はカヤを連れ出すべきじゃなかったんじゃないか……て思えて仕方が無い。『おつかい』をちゃんとこなしていれば、もしかしたら……」

俺は独断でカヤを連れ出してしまった。はっきりとした根拠もなしに、その場の感情で行動した。その結果がこれだ。あのまま、カヤを騙して情報をつかめば……神崎が黒幕でなかったとしても、黒幕の正体を暴けたかもしれない。それに、カヤを連れ出したせいで、彼女を『おつかい』に巻き込み、危ない目にあわせた。俺がカヤをケガさせ、血の海に放り込んだんだ。第一、俺が、カヤを連れ出さなかったら、カヤの両親が殺されることもなかったのかもしれない。そんなことを考えていたら、俺は迷宮に迷いこんだみたいな絶望感に襲われた。

「和幸！」

急に、藤本さんの怒号が教会に響き、俺はハッとする。

「いいか、和幸」と、藤本さんは立ち上がり、俺の目の前でしゃがんだ。その目はとても真剣で、そして優しさに満ちていた。「二度と、そんなことは言うな」

それは、あまりに予想外の言葉だった。

「お前は自分の意志で選んだ。わたしは『おつかい』のミスは許さない。だが、『おつかい』をやめることは構わない。それは、君たちの選択だからだ。ただ……選択には『責任』がついてまわる」

「責任……」

藤本さんは、力強くうなずいた。

「結果に対する『責任』だ。たが『責任（それ）』はな、後悔とは違うんだ」

藤本さんは、俺の両肩をがっしりとつかんだ。そして、一つ一つの言葉を丁寧にしっかりと口にする。

「お前の今の『責任』は、もし、もし、もし、と考えることではないんだ。お前の選択が生んだ結果と向き合い、今、出来ることをする。それが、『責任』だ」

「……出来ることって？」

俺は、藤本さんの目をじっと見つめる。藤本さんは、悲しく微笑んだ。

「それが何かは、わたしは教えられない。それを見つけ、何をするか選択すること。それもまたお前の『責任』だ。生きることは、選択と責任の繰り返しなんだ」

『おつかい』をしているだけのときがずいぶん楽に思えた。言われたことをすればいいだけで、あとは藤本さんに任せていた。だが、

今、俺が直面しているのは俺が選んだ行動の結果。カヤを連れ出す、という選択肢を選んだ未来。藤本さんは正しい。これは俺が選んだことだ。俺に、嘆く権利はないよな。

「選択と責任か。なんだか、面倒くさいな」

俺は、鼻で笑った。もちろん、冗談だ。藤本さんは、はは、と笑うと俺の頭を子供のときのようになでる。

「わたしはそうやって、お前たちを得た。人生には面倒くさいだけの価値はある」

俺たちカインは藤本さんにおんぶにだっこだ。たまに、不安になることがある。俺たちは藤本さんの重荷なのではないか、と。俺たち『創られた』子供のことなんか無視して生きていれば、ずっと楽な人生を送れていたはずなんだ。だが、藤本さんは、カインノイエのリーダーとしての道を選んだ。そして俺たちを実の子のように大切に育ててくれている。感謝してもしきれない。その上、俺たちを『価値』と呼んでくれた。藤本さんの人生の価値が俺たちだというなら、これ以上うれしいことはない。

俺は微笑し、藤本さんが、よいしょ、と立ち上がるのを見つめた。尊敬のまなざしで。

「参ったな。こっぴどく叱るつもりが……」

やれやれ、と藤本さんは腰を何度か叩いて笑った。この人も、ずいぶん歳をとったな。俺はなんだか急に寂しい気分になった。

「あのぅ」と、遠慮がちにカヤが現れたのはそのときだった。

空き巣の真相

私はおそるおそる二人が座るチャーチチェアーに歩み寄る。

「着替え、終わりました。すみません、部屋をお借りしてしまって」

そう言うと、藤本さんは頬を緩めてうなずいた。

「神崎さんが着ると制服も一段とかわいらしく見えますね」

「そんな……」

藤本さんの言葉にいやらしさは微塵も感じられない。純粋な褒め言葉に私は照れてうつむいた。

私は一日ぶりに、制服を身にまとった。緑のブレザー、緑のリボン、緑のチェック柄のスカート。ブレザーやスカートのデザインは凝っているのだが、配色に工夫はみられない。全身緑の地味な制服だ。緑じゃないのは、下に来ているシャツくらい。ただ……不思議なことに、男子のネクタイだけエンジ色。変なところに統一感がない。女子のリボンもエンジ色にすればよかったのに。

「そうか、昨日、制服も買ってたんだな」

和幸くんがそう言って、チャーチチェアーから立ち上がった。

「う、うん。念のため、と思って……。あ、ブレザー！」

私は思い出したように、和幸くんに駆け寄って、手に持っていたブレザーを手渡す。

「ありがとう」
「おう」
軽く返事し、和幸くんはブレザーに腕を通した。いつもと変わらない和幸くんだ。私は無意識に和幸くんを凝視していた。
――俺はカヤを連れ出すべきじゃなかったんじゃないか……て思えて仕方が無い。
和幸くんのその言葉が頭に響く。私は、二人の会話を聞いてしまった。着替えが終わり、藤本さんの部屋を出ると、和幸くんのそんな言葉が聞こえ、私は立ち止まってしまった。藤本さんの部屋から教会へ続く短い廊下で、じっと息をひそめていたのだ。盗み聞きするつもりではなかった。ただ、姿を現すタイミングを逃してしまった。あんな深刻な会話をしているときに、ひょっこり顔を出すなんてできないよ。
「カヤ、どうした？」
「え！？」
気がつくと、和幸くんが目の前で手を左右にふっていた。いけない。ボーっとしていた。
「なんでもない」
会話を盗み聞きしてたんだ、なんていえるわけがない。私はつくり笑顔をはりつけた。
「学校、行かれるんですね」

藤本さんが横から心配そうに尋ねてきた。私は藤本さんに体を向けて、今度は本物の笑顔を浮かべる。

「はい。じっとしていても、考え込んじゃうでしょうし。学校に行ったほうが少しは気が晴れるんじゃないか、と思って」

それに、私は劇のヒロイン。文化祭までもう間もないし、アンリちゃんを心配させるわけにはいかない。実のところ、私は張り切っていた。今まで友達もいなかった私は、学校のイベントなんて他人事で興味はなかった。楽しそうにしている周りを見て、私は余計に孤独感を味わっていた。イベントのたびに、自分が独りだってことを思い知らされる。でも、今回は違う。私は『参加』している。アンリちゃんは今まで会った女の子と違った。二ヶ月たった今でも、嫉妬や妬み、そんなものを一切感じさせない。きっと彼女は、単純に劇の成功が第一で他は気にしてないんだ。これで練習を休み続けたら、それこそ反感を買うのだろう。もちろん、だから練習にいきたいわけじゃない。劇の稽古は、私にとって大切な場所になっていた。クラスでは、いつも通り、私は浮いている。でも、劇のときは違う。私には役割があって、必要とされている。皆のために私ができることがある。私はチームの一員。それが、何より嬉しかった。

「それもそうですね」と藤本さんは微笑んだ。だが、心配しているのは隠せていない。ちらりと和幸くんに目をやると、「念のため、注意するように」と低い声で唱えるように言った。

和幸くんは真面目な表情でうなずく。

「あ、そうだ」

私は、とても大事なことをわすれていたことに気づく。藤本さんに会ったら最初に言わなくてはならなかったこと。それは……夕べ

の失敗。あれ、そういえば……さっき、藤本さんは『おつかい』のミスは許さない、て言ってなかったっけ。なんか、こわいな。

「はい？」と、藤本さんの柔らかな声が聞こえた。

「あの……」

私はおそるおそる藤本さんを見つめる。

「夕べ、資料を手に入れられなくて……すみません」

シスター・マリアほどとはいかないが、私は出来る限り丁寧に頭を下げた。偉そうに自分が行く、と言っておいて、何も手に入れられなかった。和幸くんに任せておけばこんなことにはならなかったかもしれない。藤本さんに、和幸くんに、申し訳なかった。

「神崎さん！」

いきなり、藤本さんの声が響いた。やっぱり、怒られる？　そう思ったのもつかの間、藤本さんのしわだらけの手が私の肩をつかんだ。

「やめてください」

「え……」

私が顔をあげると、藤本さんが苦渋に満ちた表情で私を見つめていた。

「そんなこと、なさらないでください」

「でも……」

藤本さんは、首を横に振る。何も言わないでくれ。そういう意味だろうか。

「和幸から、夕べのこと、全部聞きました」

藤本さんは私の肩から手をはなすと、姿勢を正した。私も体を起こし、隣にいる和幸くんを見つめる。和幸くんは申し訳なさそうに微笑んだ。

「ご両親のこと、残念でした」

「！」

このときばかりは、その言葉を素直に受け取ることはできなかった。藤本さんの言う『残念』が皮肉のように思えて仕方が無い。惜しい人を亡くしましたね。そんな意味で言ったのではないだろう。藤本さんや和幸くんは、両親が人身売買を斡旋していたのではないか、と疑っていたのだ。もしそうなら、両親はカインノイエにとって許せない相手。真相が分からなくなって『残念』だった。そういわれているような気がしてならない。

「……いえ」

私は藤本さんの目を見ることはできなかった。

「頬のあざも、カインノイエの責任です。まことに、申し訳ない」

私はハッとして頬のあざを隠すように触れた。隣の和幸くんがどういう顔をしているのか、怖くて見ることはできない。このあざを一番気にしているのは、和幸くんのような気がしてならない。和幸くんは優しい人だから、全部背負い込んでしまいそうで心配だった。

このあざも、私が勝手な行動を取ってつくってしまっただけなのに。
「このあざは……」と、私はあざから手を離してはきはきと言う。
「このあざは、空き巣に殴られたのであって、カインノイエのせいじゃありません」
我ながら、正論だと思う。和幸くんに殴られたわけじゃないもの。誰かが悪いというなら、空き巣だ。両親の死をいいことに、人の家に入り込み、物をあさり、見つかると暴力で解決しようとした。護衛を頼まれた和幸くんが責任を感じるのも分かるけど……私には、だからといって和幸くんが悪い、というのは見当違いに思える。
自信満々に藤本さんを見つめていたのだが、藤本さんはあっけにとられていた。私の言葉があまりに意外だったのだろうか。すると、藤本さんは眉をひそめ、和幸くんに目をやった。
「空き巣？」
藤本さんがそう和幸くんに尋ねる。
え？　そこなの？　私のほうも、きょとんとしてしまった。
「和幸くん、空き巣のことは話してないの？」
夕べのことは聞いた、と言うから、てっきり空き巣のことも話しているのかとばかり。いいえ、話しているはずだよね。空き巣の話がなかったら、夕べの出来事の何を話すというの？
私と藤本さんに見つめられ、和幸くんは居心地悪そうに顔をしかめていた。
「わたしは空き巣の話は聞いていないぞ」

藤本さんは腕を組んだ。カインのリーダーらしい、厳しい顔つきになっている。やっぱり、ただのおじいちゃんではないんだ。私は横目で藤本さんの表情を見てそんなことを心の中でつぶやいた。

「話してないからな」

和幸くんが軽い調子でそう返す。

「どういうことだ？」

「空き巣なんていなかったからだ」

「え！？」

二人のやりとりを見守っていた私だったが、思わずそんな声をあげてしまった。空き巣がいなかった？　あれ？　和幸くん、あの指輪で見てたはずなのに。まさか、気づいていなかったの？　私は眉をひそめて和幸くんに迫る。

「いたの、空き巣が。それも四人も！　家（うち）をあさってたの。宝石とかいろいろバッグにつめてた」

そのうちの一人が、私の頬を殴ったんだよ。そういいかけて、私はやめた。和幸くんに面と向かってそんなことはいえない。和幸くんは、きっと自分のせいだとおもっているに違いなかったから。

「ああ、なるほど」という藤本さんのため息交じりの声が聞こえた。

なるほど？　何が？

「神崎さん」と、私に真相を打ち明けたのは和幸くんではなく、藤本さんだった。「彼らは空き巣ではなく、警官です」

「え……？」

自分の耳を疑った。警官？　あの人たちが？　そんなわけあるはずがない。

「そういうことだな、和幸」

藤本さんは、腕を組んだまま和幸くんに目をやる。

「ああ」と短く返事をしてから、和幸くんは心配そうな表情で私に諭すように言う。「カヤも見ただろ、警察手帳」

ハッとする。そういえば、ひげの男が提示してきた。でも……

「偽物じゃないの？」

私はおそるおそる和幸くんに尋ねる。偽物だと信じたかった。

「本物だ」

俺にはわかる、と言いたげな自信に満ちた表情だ。

「でも、あの人たち、家をあさってたよ。父の宝石まで持ち出そうとしてた。あれは、捜査だったっていうの？」

夕べの男たちの様子が頭に思い浮かぶ。まるで録画した映像のように、はっきりと鮮明に思い出せる。笑いながら、父の私物を欲望のままにあさる男たち。誰もいないのをいいことに、スーツをその場で試着している男もいた。そして終いには、私を殴った。ずきっと頬が痛んだ気がした。傷がうずく、てこういうことをいうのかな。

とにかく、彼らが警官のはずがない。
和幸くんは、私の肩に手をおいた。
「あれがあいつらの捜査なんだ」
「……」
返す言葉が見つからない。頭が混乱して目が泳ぐ。
「事件の現場で捜査とかこつけ、物を盗む。よくあることなんですよ、神崎さん」
藤本さんが遠慮がちに切り出した。でも、そんなこと信じられない。へえ、そうなんですか。なんていえる話じゃない。
「警察は、もう機能していません。腐敗しているんです」
「！」
藤本さんは恐ろしい言葉をさらりと言ってのけた。私は、思わず藤本さんに振り返った。藤本さんは難しい表情を浮かべている。
「もちろん、模範的な警官も中にはいます。しかし、組織、というものは、一人、二人がどうにかできるものではありません」
「そんなことって……」
私は気が遠くなった。警察も信用できない、てことなの？　思わず、チャーチチェアーに腰を下ろす。和幸くんはあわててしゃがみ、私の顔をのぞきこんできた。
「大丈夫か？」

和幸くんは、いつもそう尋ねてくるな。私はいつも心配させてばかり、てことかな。

「警察が腐敗しているというなら……」

私はぎゅっとスカートを握り締めた。

「両親を殺した犯人は……誰が見つけてくれるの？」

何かあれば警察に電話すればいい。それが常識だった。困ったときは警察が助けてくれる。そう信じていた。でも、もしそれがもう成り立たないとしたら……一体、誰が助けてくれるの？　誰に助けを求めればいいの？

「カヤ……」

和幸くんは、スカートを握り締める私の手をつつむように左手を置いた。

「腐敗しているといっても、警察は警察だ。仕事はする。きっと、犯人を捕まえてくれる」

私は、何も答えられなかった。和幸くんの優しさは有難かった。でも、その言葉を信用していいのか分からなかった。犯人はきっと捕まらない。そんな気がしてならない。

「カインノイエが出来ることは、全てしてみましょう」

まるで慰めのような、そんな藤本さんの言葉が聞こえた。

空き巣の真相（後書き）

たびたび、警察に関するイメージを悪くするようなことを書き、申し訳ありません。繰り返しますが、フィクションです。
あくまで、設定上のことですので、ご了承ください。

疑惑

藤本は、和幸とカヤを見送ると、自分の部屋に戻った。学校に行くのに邪魔になるから、とカヤが置いていった紙袋が部屋の隅に固めておいてある。藤本にはなじみの無い響きのブランド名が紙袋に連なっている。あの聡明そうな顔立ちの美女も、まだ少女に違いないのだ。それを思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。いきなり、厳しい現実をつきつけてしまった気がしてならない。まして、両親を失った直後なのだ。

「強い子だ」

藤本は、寂しくつぶやくと、黒い皮のイスに座る。

よく考えてみれば、両親が殺されたというのに、彼女は毅然とふるまっている。本当なら、どこかに閉じこもり泣き崩れていてもおかしくないというのに。今までよほどのことに立ち向かってきたのだろうか。それとも……まだ、実感がわいていないだけか。和幸の話だと、遺体はすでに搬送されたあとだった。カヤは両親の遺体と向き合ったわけではない。不幸中の幸いかもしれない。遺体がどんな状態だったかは知りようもないが、さすがに両親の遺体と対面するのはこの上ない苦痛だろう。藤本は、そんなことを考えながら、デスクの上の電話を手に取る。カヤに、協力する、と言ってしまった以上、藤本に出来ることはしなくてはならない。神崎殺しの犯人が誰なのか……。

藤本はスピードダイアルである男に電話をかけた。呼び出し音が四、五回。そして、あの青年の、人を小馬鹿にしたような話し方が聞こえてくる。

「おはようございます、藤本さん」

「おはよう、三神くん」

情報屋の三神だ。思えば、神崎がトーキョーの人身売買を仕切っている黒幕ではないか、という情報を売ってきたのも彼だった。それなら、やはり彼に依頼するのが筋だろう。藤本は皮肉そうに笑みをうかべる。

「情報を売ってほしい」

コンコン。扉をノックする音が聞こえた。藤本は、眉をあげる。妙だった。カインの子供たちはノックはしない。ノックしてここに訪れるのは、シスター・マリアか……そして、受話器の向こうにいる男、三神だ。

「三神くん、今、どこにいる?」

まさか、タイミングよくここに来た……そんなことがあるだろうか。三神が朝型の人間ではないことは藤本はよく知っていた。いつもここにくるのは、夕方か夜。電話でさえ、朝かかってきたことはない。事実、受話器の向こうの声は寝起きのようにかすれている。

「嫌ですね。そんな情報がほしいんですか?」

やはり、ふざけたことをぬかす。馬鹿なことを聞いた。藤本は、面倒くさそうにため息をつく。

「またあとで電話する」

返事も待たずに受話器を置き、扉を見つめる。

「はいりなさい」

扉がゆっくりと開き、そこに居た人物が姿を現す。藤本はぎょっとした。

「神崎さん？」

現れたのは、さっき和幸と学校に向かったはずのカヤだった。

「あの……」と、少女は焦った様子で扉を閉めると、藤本のデスクに駆け寄ってきた。

「どうしました？」

藤本が戸惑いつつもそう尋ねると、カヤは切羽詰った表情で小声で答える。

「お尋ねしたいことがあって」

「はい。わたしでよければ、なんでも」

まあまあ、座ったら、と藤本はソファを薦めたが、カヤは首を横に振った。

「和幸は？」

「教会の前で待っててもらってます。忘れ物をしたって言って……」

「忘れ物……」

そんな小さな嘘をついたことに罪悪感でもあるのだろうか。藤本がカヤの顔色を伺うように見つめると、カヤは目をそらした。

カヤとは昨日、少し話しただけだが、落ち着いて聡明な印象を受

けた。そんな藤本には、こんなに落ち着かないカヤを見るのは、不気味にも感じた。

「聞きたいこととは？」

「夕べのことです」

カヤは浮き足立っている。和幸に嘘をついて待たせている、ということは、和幸に内緒で何か聞きたいのだ。そして、忘れ物を取りに行く、と言った以上、早くすまさなければならない。カヤが焦っているのも当然だ。

「夕べ？」と、藤本は首をかしげた。「それは、あなたのほうがよくご存知では？」

すると、カヤは首を勢いよく横に振った。

「私は、気を失ってしまって……。警官に殴られたあとのこと、何も知らないんです。目が覚めたら」

カヤは目を見開いていた。その視線は藤本に向けられていない。自分の両手を、張り詰めた表情で凝視している。恐ろしいことを思い出している。藤本には分かった。和幸から、何があったか聞いていたからだ。

「血、ですか」

「！」

カヤはハッとして藤本を見つめた。その通りだ。

「体中、血だらけだったんです」

「聞きました」と藤本はうなずく。
「和幸くんは……なんて？」

カヤの声は震えていた。藤本には分からなかった。なぜ、彼女が自分にこれを尋ねるのか。和幸に聞けば一番早いはずだ。これから一緒に学校に行くのだし。とりあえず、自分が話せることは話してあげよう。藤本はそう思うと、ゆっくりと聞いた話を告げる。

「あなたがしていた指輪から信号がこなくなり、和幸は屋敷に向かったそうです。そして、あなたをある部屋で見つけた。二階の奥の部屋」

カヤは聞きながら、小刻みにうなずいていた。そう、二階の奥の部屋。そこで、警官に殴られ、気絶した。重要なのは、そこから……

「和幸が部屋に入ると、そこには四人の警官の死体と、彼らの大量の血がとびちっていたそうです」
「え？」

カヤは思わず声をあげていた。それは、カヤの知りたかった内容を大きく省いていたからだ。

「そこにあなたが一人横たわっていた。和幸は、とりあえずあなたを抱きかかえ……」
「あの！」と、カヤは藤本の話をさえぎる。そこからの話は、正直どうでもよかったのだ。

「それだけですか？」
「はい？」
「和幸くんから聞いた話は、それだけですか？」

『それだけ』。その意味が、藤本にはよく分からなかった。

「神崎さん」と、藤本は呆れたような声をだす。「一体、何を聞きたいのですか？」

「……」

カヤは黙ってうつむいた。不安が心の中で渦巻いている。

「神崎さん。もし、何か知りたいのでしたら、和幸に直接聞いたほうがいいのでは……」

カヤはぶんぶんと顔を横に振った。

「和幸くんは優しいから。きっと、私には隠す気がするんです」

藤本は顔をしかめた。隠す？　一体、彼女は何の話をしているのだろうか。カヤはまた両手をひらき、視線をおとす。夕べ、そこにはべっとりと血がついていた。

「あの血は、あの男たちのもの。そして、彼らは死んでしまった」

そこまで言うと、カヤは真剣な表情を浮かべる。どこか、恐怖におびえているような緊迫した顔だ。

「いえ、彼らは殺された」

「神崎さん、大丈夫ですか？」

流石に藤本は不安になり、立ち上がった。カヤを落ち着かせようと肩に手をおく。

「落ち着いてください。どうしました？」
「誰に？」
カヤのつぶやくような声が部屋に響いた。
「はい？」
やっと我に返ったかのように、カヤはバッと藤本の顔を見上げる。今にも泣きそうな、不安な表情で。
「和幸くんですか？」
「！」
藤本はハッとした。カヤが何を心配しているのか、やっと分かってきた気がした。
「気を失って、目が覚めたら血だらけで、和幸くんの部屋にいたんです。あの屋敷には、あの男たちと私と、和幸くんしかいなかった……彼らが誰かに殺されたとしたら、それは……」
カヤはそこまで言うと、頭をかかえた。続きは言いたくないのだろう。藤本は、難しい表情でため息をつくと、カヤの肩から手を離す。自分の部屋の壁を見回すと、そこには歴代のカインたちが微笑んでいる。写真だけみれば、無垢な子供たち。だが、彼らは『殺し屋』と呼ばれていた。自分にはそれを止める力はなかった。いや、止める『言葉』がなかった。だから、彼らの行為を許すことにした。自分だけはそれを認めて、天というものがあるなら、共にそこで裁かれよう。そう誓ったのだ。
だが……藤本はうつむいた。カインの中で、たった一人、その行

為を拒絶し続けた子供がいた。それが、和幸だ。三神が、天然記念物、と揶揄するほどの珍しいカイン。和幸だけは、『無垢な殺し屋』と呼ばれるカインの中で、『殺し屋』ではなかった。
自分は、昨日、この少女に告げた。和幸は人を殺したことはない、と。彼女はそれを聞いてホッと安堵したようだった。

「藤本さん」と、カヤは、昨日と同じように救いを求めるような視線で見上げてきた。

「藤本さんは、どう思いますか？　和幸くんは……」

藤本は答えにつまった。藤本には自信がなくなっていた。昨日と同じことを言う自信が。和幸は人を殺したことがない。それは今となっては分からないことだった。カヤの言っていることは的を射ている。カヤが男たちに捕まり、和幸が部屋に駆けつけ、男たちの死体とカヤを見つけた。そんな和幸の話は、何かが大きくはしょられているように感じてならない。和幸がカヤのいる部屋に駆けつけるまでに、誰かが来て男たちを殺し……そして、和幸が現れる前に逃げた。そんなことが起こり得るのだろうか。万が一、起こり得たとしても、狙いはなんだ？　なぜ、男たちを殺し、煙のように消え去った？　それよりも……和幸がカヤを助けるために部屋にかけつけ、男たちを殺し、カヤを連れ出した。そのほうが自然に聞こえる。神崎が殺された、と言う事実に気を取られ、そんな些細な違和感に気がつかなかった。
だが、もし和幸が男たちを殺したなら、なぜ言わない？　藤本にはそれが不可解だった。藤本に嘘までついて隠すことではないことなど、和幸は知っているはずだ。

「藤本さん？」

頼りなく、震える声がして、藤本はハッと我に返った。藤本は、にこりと笑みをつくり、カヤを見つめる。

「和幸は、『男たちを殺した』とはわたしには言いませんでした」

「……」

カヤの表情は曇ったままだ。もちろん、これがカヤの求める答えではないことは重々承知だ。だが……と、藤本は首を横にふる。

「わたしにいえるのは、それだけです」

カヤは、ふうっと大きなため息をついて肩を落とした。

ムシュフシュ

俺はある人物に会うために、学校の三階、一年のクラスの廊下を歩いている。

俺は学校に着くと、カヤを教室まで送った。

「また、放課後にね」

そう言ってカヤは教室に入っていったのだが……やはり、様子が変だった。確かに、両親が昨日殺されたというのだ。当たり前のように普通にしているほうが変だというものだが……今朝まではカヤはなんら変わりはなかった。それこそ、俺が不安になるほど、『普通』だった。もう少し、泣いたり暴れたり……なんてしてくれたほうが安心かもしれない。そのほうが、話も聞いてやれる。だが、まるで隠しているかのように、俺にそんな様子は見せない。やはり、頼りにされてないんだろうか。

とにかく……その『普通』がぎこちなくなったのは、カヤが忘れ物を取りに藤本さんの部屋に戻ってからだ。何を忘れたのかは分からないが……取ってくるのに時間がかかっていた。見つかりにくい、小さいものだったのだろうか。そして、藤本さんの部屋から戻ってきたカヤは、顔色がすぐれなかった。理由を聞いても、笑ってごまかされるし、その笑顔もぎこちないし。何かを隠しているのは明らかだ。藤本さんが何か変なことを言ったのだろうか。それとも……警察が腐敗してる、なんて話をしたからか？　あれはさすがにショックを受けてたみたいだしな。

「きゃー！」

こっちは、真剣な考え事をしているってのに……まるで、アイド

ルのライブのような黄色い声援が聞こえてきた。顔をあげると、一年九組の前で女子が四、五人たむろっている。教室の中へむかって手を振っては、キャーキャー騒いでいる。
　ははは。おモテのようですね、神の子よ。

「ちょっと、ごめん」と俺は言って、あのバカのファンの間をぬって一年九組の教室に入る。

「なによぉ」「誰ぇ？」「やな感じ」なんていう不満の声が聞こえた。なんとでもいえ。

　俺は入るなり、腕を組み、九組の教室を見渡す。一時間目まで大分時間がある。がやがやと教室はにぎわい、生徒はあちらこちらにちらばっていた。だが、一箇所だけ、やたらと女子が多く集まっている場所がある。窓際、後方。教室のはじっこ。そこには、女子に囲まれた金髪の美少年の姿がある。その転校生は、俺の姿を見つけると、にこりと微笑んだ。

「あれえ？　和幸さん」という、なんとも能天気な声が響く。
「よう、リスト」

　俺は呆れて半笑いで手をあげた。なんでこいつは俺よりも高校生活エンジョイしてんだよ。

＊　＊　＊

「楽しそうでなによりだな」

　和幸さんは苦笑して言った。明らかに、皮肉だ。
　オレと和幸さんは、クラスの目の前にある非常階段に場所を移動

した。和幸さんがまさかオレと遊びにクラスにくるわけがないからね。すぐに『災いの人形』のことだ、と分かった。クラスでそんな話もできるわけがなく、不満そうなクラスメートを置いて非常階段に来たわけだ。非常階段からは、サッカー部の朝練がよくみえる。

「まだまだ。あと部活にはいらなきゃ」

オレはクスッと笑ってそう応えた。皮肉にはウィットのきいた冗談で対抗しなきゃね。

「勝手にしろ」

和幸さんはサッカー部の朝練に一瞥してから、ため息をついた。さて。スモールトークはこのへんでいいかな。オレは、サッカー部から目を離し、和幸さんに目をやる。

「なんの御用でしょう？」

「またアトラハシスが現れた」

「！」

アトラハシス？　まさか、その名前がでてくるとは思ってもいなかった。真剣に話を聞かなきゃなだめみたいだ。オレは腕を組み、首を傾けた。

「続けてください」

「夕べのことだ」

＊　＊　＊

それから、俺は夕べの出来事をリストに告げた。細かい事情は告

げなかった。それは『おつかい』に関わることで、『災いの人形』には関係ないことだと思ったからだ。とりあえず、カヤが家に帰り、そこで男に殴られたこと。俺が駆けつけたら、男たちは『バラバラ』で血の海だったこと。信号がきれてから俺が駆けつけるまで、三分ほどだったと思う。てことは、ほんの少しの間でそんなことが行われたのだ。常軌を逸している。とても人間業じゃない。つまり……天使（エミサリエス）の仕業としか考えれない。

「そんでもって、カヤを守るために、そんなことをするような奴がいるとしたら、アトラハシス。そうだろ？」

俺は自信満々にリストに尋ねる。カヤに近づいただけで、男をケガさせるような奴だ。カヤが気絶するほど殴られれば、あんなおそろしいことをしてもおかしくはないだろう。

だが、リストはなぜか即答しない。こいつには珍しく、言葉を失ったようだった。

「なんだ？　どうしたんだよ？」

リストは、サラサラのブロンドの前髪を左手で掻きあげると、ため息をついた。まるで、一仕事終えたかのようなため息だ。何もしてねぇだろうに。

「ケット」と、リストはつぶやくと、リストの後方に光の粒子が集まり、ケットが現れた。ケットの表情も深刻だ。一体なんだってんだ？

「おい？」

俺がせかすと、リストは真面目な顔で俺を見上げた。

「ムシュフシュです」
「は！？」

おい、まさか……また、新しい単語かよ。エミサリエスで終わりだと思ったのに。俺は疲労感を覚えた。

「ムシュフシュ？」

こうやって鸚鵡返しするのも飽きたっての。だが、リストやケットの深刻な表情をみると……これは、真面目に聞いたほうがよさそうだな。ただ事じゃなさそうだ。

「間違いないね」と、ケットは偉そうに腕を組んでうなずいた。「バラバラにちぎられた体。ムシュフシュの仕業としか考えられない」
「おいおい。アトラハシスじゃないのか？」
「アトラハシスの天使（エミサリエス）に、人をバラバラ死体にするような力はないんですよ、和幸さん」

ないんですよ、といわれてもな……そんなこと知るかよ。

「とにかく、ムシュフシュが何か教えてくれ」
「ムシュフシュは……」と、リストは視線をおとす。「化け物です」
「は！？」

もったいぶっといて、それかよ。化け物？　抽象的すぎないか？
化け物にもいろいろあるし……

「ムシュフシュはね」と、ケットがとことこ俺に歩み寄って切り出す。「『災いの人形』の身に危険が及ぶと現れる怪物なんだ」

今度は怪物？　統一してくれよ。化け物なのか、怪物なのか。それとも、化け物で怪物？　とにかく、まだよく想像がつかない。

「それは、一体どういうことだよ？　もっと分かりやすく言ってくれ」

すると今度は、ケットの主人が口をだす。

「『災いの人形』は、『テマエの実』を口にするまではただの人間（ルル）。それまでは俺の『聖域の剣（つるぎ）』では殺せません。でも、逆に普通の方法では簡単に死んでしまいます」

俺はハッとした。そういえば……リストは言っていた。こいつの持っている剣……『聖域の剣』は、カヤが人間である限り、危害は加えられない。つまり、『テマエの実』を食べてからしか、リストはカヤを殺せない。だが……

「そうか。確かに……ただの人間ってことは、普通に死ぬ、てことなんだな」

心臓を刺せば死ぬし、首を絞めれば死ぬ。普通の人間なんだ。

「そう」と、リストは相変わらず真剣な顔で続ける。「だから、人間（ル）であるときに彼女を守る『何か』が必要だったんです」

あれ？　カヤを守る使命をもつ奴がいただろ。俺は顔をしかめた。

「アトラハシスがいるじゃないか」

「アトラハシスはエンキ様の味方だから信用できないってエンリル

様が訴えたんだ」

ケットが俺の横からそう言った。えっと……エンキが人間の味方で、エンリルが人間の敵。そうだったよな。で、アトラハシスは、エンキのお気に入りの人間。俺は一生懸命、頭で整理する。確かに、俺もエンリルの立場だったら不安だな。敵の部下が自分の武器を守る、なんて信用できないのは最もだ。

「そこで、怪物に『災いの人形』を守らせることにしたってわけ。どっちの味方でもない怪物にね」

リストは肩をすくめて簡単にまとめた。

「ムシュフシュは知能が低い。複雑なことは考えられないし、言葉もしゃべれない。だから単純な使命しか守れない」

「単純な使命？」

なんだ、それは？　使命に単純も複雑もあるのか？　つまり、分かりやすい使命、てことか？

「『災いの人形』に危険が及んだとき、姿を現し、その場にいる危険を全て排除しろ」

リストは、棒読みでそう言った。

「それが、使命か？」

「そう。『災いの人形』が人間である限りは、ムシュフシュはそれしかしない。つまり、『災いの人形』がケガをしたら、だれかれかまわず周りにいる人間を殺すんです」

ぞくっとした。夕べみた、血の海を思い出す。おいおい、神さまはとんでもないものを地上に送ったんじゃないのか。

「ちょっとまてよ。ケガをしたら……て、擦(す)り傷やかすり傷もか？そんなんでいちいち周りの人間を殺されたら、誰もいなくなるぞ」

「それは大丈夫」と、かばうように言ったのはケットだ。「『災いの人形』は『収穫の日』まで、自分が何者かは知ってはいけない。だから、ムシュフシュも彼女に姿を見せてはいけないんだ」

そりゃそうだろうな。俺は小さな神の使者を見つめて思う。どんな化け物かは分からないが、人をばらばらに食いちぎるような化け物だ。そんなのが目の前に現れたら、それこそショック死する。

「てわけで」

リストは人差し指を立てた。

「ムシュフシュが目覚めるのは、『災いの人形』が気を失うほどのケガをしたとき」

なんだそりゃ。どこが、単純な使命だ。俺は呆れた。

「充分、複雑な使命に聞こえるぞ」

「そうですか？」

リストは、肩をすくめた。

「とりあえず、ムシュフシュは何も考えません。『災いの人形』が気を失えば、姿を現し、周りにいる人間を殺す。言い訳はききません。無関係でも、見える範囲にいれば、食いちぎる」

なるほど。頭の悪い権力者ほど質が悪いようなものか。凶暴なのに知恵がない。それはまるで暴走列車だ。
だが、疑問が残る。俺がカヤのもとに駆けつけたとき、何もいなかった。あったのは、あの地獄絵図だ。
「でも、俺は無事だぞ？　カヤが気を失っていたときに近づいたのに……」
「『災いの人形』が気を失ったとき……つまり、危害を加えられた、そのときにその場にいましたか？」
つまり、殴られたとき……だよな。そりゃ、もちろんいなかった。いたら、そもそも殴らせていない。
「いや」と、俺は短く否定する。
「だからです。ムシュフシュは、目覚めたときに見える範囲にいた人間を全て殺し……そして、すぐに消えます。危険は排除された、と判断するからです。つまり、気絶したときに立ち会わなければムシュフシュに殺されることはありません」
まあ、そんな化け物、すぐに消えてもらわなければ確かに困る。なるほど。リストが言った、『単純な使命』って意味が分かった気がした。目を覚ます。目にした人間を殺す。消える。その化け物がやるのはその三つだけなんだ。
にしても、俺がもう少し早くカヤのもとにかけつけていたら、もしかしたら殺されていたかもしれないんだな。俺も、あのバラバラ死体の一人になっていたわけだ。
「ちなみに」と俺は尋ねる。「お前も、ムシュフシュってのに会えば危ないわけか？」

すると、リストは首を横に振る。

「ムシュフシュは、エンキとエンリルには服従します。だから、エンキの子孫であるオレや、エンキの細胞をもつケットには手を出しません」

知能が低いわりに、そういう身の振る舞いは分かってるわけか。せこいガキみたいだ。

「で、そのムシュフシュってのも天使（エミサリエス）なのか？」

すると、ケットが「違うよ！」と必死になって否定した。心外だ、といった表情だ。「ムシュフシュは怪物。天使（エミサリエス）じゃないよ」

俺には、怪物も天使（エミサリエス）も違いはないんだが。俺は苦笑いして「悪い」と謝った。

「ムシュフシュは神の細胞から創られたわけじゃないってことです」

リストは、ケットの頭をぽん、とたたくと俺にそう言う。

「じゃあ、ムシュフシュの気配は感じ取れないわけか」

俺は腕を組み、リストに言った。昨日、ケットは天使（エミサリエス）同士は気配を感じ取れる、て言ってたからな。ムシュフシュが天使（エミサリエス）じゃないとしたら、それはできないんだろう。

「その通りです。覚えが早いですね」

リストのそんな感心した声が聞こえた。
失礼な奴め。「どうも」と、俺は肩をすくめる。
「それで……どこから現れるんだ？　そのムシュフシュってのは」
俺は、当然のように尋ねたのだが……リストとケットは目を点にして黙ってしまった。
さっきから、こいつらは当たり前のように、『現れる』と繰り返していたが、俺にはイメージがつかない。現れる、といってもどこから現れるんだよ？
「なんだよ？」
「いえ……てっきり、見当はついてるかと思ってたから」
リストはひきつった顔でそう言った。なんだか、いいにくそうだな。
「あ」と俺は思いつく。「そういえば……」
昨日聞いた天使（エミサリエス）の話を思い出す。たしか、麻雀にある言葉でなにか言ってたな。たしか……ツモ、じゃなくて……
「ドラ、だ！」
天使（エミサリエス）は、ドラとかいう物に宿っている、ていってたな。それに天使（エミサリエス）が宿っていて、その持ち主はその天使（エミサリエス）を使役することができる。ケットの場合は、リストの持っている『聖域の剣』がドラ。
そうだ、そうだ。まるで連想ゲームのようだが、効果はある。こうやって覚えていけばいいかもしれない。俺は、段々『災いの人形』絡みの話についていけるようになっているのが嬉しかった。何も知

らなかったら、カヤのことを助けることはできないからな。俺は、どうだ、と自慢げにリストを見た。

「カヤも、お前が持ってる剣みたいなのを持ってるのか？」

具体的に、カヤがいつも持ち歩いている物は思い当たらないが……リストは、剣を自由自在に出したり消したりできている。なぜかはわからない。どうせスピリチュアリティな話で、原理なんてないんだろう。とにかく、目に見えなくても、カヤが『何か』を持っていてもおかしくないはずだ。その『何か』にムシュフシュが宿っていれば、カヤの危険にすぐ姿を現せる。

だが、リストとケットの表情は曇っていた。はずれ……か？

「半分あたりで、半分はずれ、です」とリストは低い声で言った。

「どういう意味だ？」

「あのね」

ケットが俺のブレザーをひっぱった。俺はしゃがんで、ケットの顔を真正面から見つめる。だめだ。どうも、こいつはただの子供にしか思えない。

「ムシュフシュはね、『災いの人形』に宿っているんだ」

「え？」

『災いの人形』ってカヤだよな。カヤに宿ってる？　どういう意味だ、それは？

「ムシュフシュが宿る贈り物（ドラ）は、『災いの人形』自体なの」

俺は、ケットの言っている意味を理解し、ハッとした。そして、

背筋が凍った。

「つまり……」

俺はうつむく。汚い俺の上履きが目に入った。その染みが、夕べみた血にだぶる。

「つまり、カヤの体に……」

ちぎられた男たちの体が頭に浮かんだ。吐き気がした、あのおぞましい光景。ひどい血の匂い。バラバラの体の部位。

あれをつくりだした怪物が……カヤの体にいるってのか？

＊　＊　＊

和幸は、しゃがんだまま地面を見つめていた。カヤの体には、人をバラバラに食いちぎる化け物が宿っている。それを知って、やっと思い知らされたような気がしていた。カヤが、普通の人間ではないことを。

「すみません、言わなくて……」

リストは申し訳なさそうにつぶやいた。

「和幸さんがついていれば、『災いの人形』も危ない目にあうことはない。だから、ムシュフシュも目覚めることはないだろう。そうふんで、話しませんでした」

和幸は、ふうっとため息をつく。リストにそんな意図はなかったのだろうが、カヤを危険な目にあわせた負い目を感じている和幸に

は、その言葉が追い討ちのように心に突き刺さった。

「いや……実際、俺がしっかりしてれば、その化け物も目覚めなかったわけだし」

和幸は立ち上がると、リストに微笑んだ。その笑顔には皮肉が混じっている。つまり……と、考える。間接的に、俺があの男たちを殺してしまったようなものだな。

「とりあえず、これだけは理解しておいてください。彼女の安全は、周りの人間の生死にかかわります。だから、これからも『災いの人形』をしっかり見張ってください」

チャイムが鳴り始めていた。いつのまにか、サッカー部もグラウンドから消えている。だが、リストは気にする様子もなく、真剣な顔で和幸にそう釘をさした。

「言われなくても、そうする」

和幸は遠くを見つめてそう答えた。

和幸の解法

俺は、ぼうっと窓の外を眺めていた。窓際の一番後ろ。俺はこの席を気に入っている。丁度グラウンドがよく見えるからな。二年二組がわらわらと体操着で出てきた。カヤの姿もみえる。この高校のジャージは、全身緑でださいことこの上ない。カヤが着ていると合成みたいに不自然だ。カヤには、もっとシックなドレスとか、そんなのが似合いそうだ。

「練習問題やってきてるかー？」

そんなだみ声が聞こえてきた。俺は窓からちらりと声の主へ目を向ける。蛙のような顔で、黒ぶちめがねをかけた中年男が教科書を手に黒板の前に立っている。数学担当の石黒だ。俺はとりあえず、教科書を開いて練習問題に目をおとす。もちろん、やってきていない。まあ、石黒はいつも出席簿順で人をあてるから……俺は大丈夫だろう。

ピーッという笛の音が聞こえて、俺はまたグラウンドに目を向けた。カヤは、他の女子とまだ馴染めていないようだ。一人で行動している。彼女の圧倒的な美しさは、女子には受け入れにくいのだろう。特に、二組の女子は高飛車なのが多い。カヤにはあっていない気がしてならない。ウチのクラスだったら、アンリもいるし、少しはマシだったろうな。

にしても……と、俺はさっきリストに聞いた話を思い出す。

「ムシュフシュ」

隣の奴にも聞こえないくらい小さい声でそうつぶやいた。

カヤの中に化け物がいる……信じられない話だ。正直、びびって

いる。夕べのあの惨劇。思い出しただけでも吐き気がする。人を食いちぎった化け物が、カヤの中に巣食っているとは。そう考えたら、カヤが少し恐ろしく見えてしまう。『災いの人形』……今さらながら、カヤの正体を思い知らされた気分だ。

「藤本」

急に前の席の中村が、石黒の目をぬってＳＤメモリカードを渡してきた。

「なんだ、これ」と、受け取りながら尋ねる。石黒は、こちらに背を向けて練習問題の番号と割り振りを黒板に書いている。

「いつもみたいに見てから回せ。男にな」

それだけ言って中村は前を向いた。またかよ。俺は机の横にひっかけてあるカバンから携帯を取り出し、机の下でＳＤカードを挿した。石黒の動きに注意しながら、ＳＤカードの中身を確認する。そして……

「は！？」

思わず、大声をあげていた。石黒はもちろん、クラスの全員が俺に振り返っている。

「なんだ、藤本？」

石黒は、黒ぶちめがねをくいっとあげて俺を睨んできた。俺は、あわてて教科書を指差す。

「いや、見直したら答えが全然違ってて……」

何人かがクスっと笑うのが聞こえた。ああ、分かってるさ。嘘はばればれだろう。

石黒は、ふん、と鼻で笑うと「そうか」と偉そうにだみ声で言う。

「藤本はちゃんとやってきたみたいだから……最後の問題を解いてもらおう」

最後の問題ね。一番難しいやつだろ。即興でできるか、ての。

だが、このSDカードを取り上げられるよりマシだ。俺は、「もちろん」と苦笑して言った。石黒は気に入らない表情を浮かべたが、また黒板に向き直り、問題を書き始める。

俺は、また携帯を見下ろす。SDカードにはいっていた画像は……

「カヤ」と、俺はため息混じりにつぶやいた。

そう、全部カヤの写真だった。それも、着替えている最中の。下着がしっかり映っている。そして左頬にはあざ。さては、今朝撮ったばかりのできたてか。更衣室でどう盗み撮りしたのか分からないが……女子に協力者がいるのは確かだ。まさか、男が更衣室で隠れて撮ったわけではあるまい。

にしても……と、俺は削除を試みる。やはり、ロックされていて、暗証番号が必要だ。携帯に保存するのも、同じ。やっぱ、あとでこれを売ろうって寸法だな。というのも、こういうことは、よくあることなのだ。カヤは初めてだが……三年のマドンナや音楽教師などなど。何かと人気のある女子は標的になる。

あー、くそ。誰だよ……と、俺は教室を見渡す。

「よし、名前が書かれてる奴は前にでて問題解け」

石黒の声が響いた。黒板には、それぞれの問題の番号の横に名前があった。もちろん、最後の問題には、俺の名前が。
まいったなぁ。ＳＤカードのせいで、問題考えられなかったし。俺は問題を見つめる。あー、考える気もしない。

「藤本！」

いつまでたっても黒板にでてこない俺に、石黒が苛立った声で呼んだ。
俺は、この教師があまり好きではない。教科書に頼りすぎてオリジナリティに欠けているし、煙草くさいし。そういえば、カヤも数学はこいつだ、て言っていたな。カヤはどう思ってるんだろうか。あいつのことだから、真面目な人だよね、とかなんとか言いそうだな。
そんなことを考えながら、立ち上がったときだった。

「あ」と、俺は大事なことを思い出した。「ノート」

ハッとしてイスに座りなおすと、机の中をあさった。何人かは、もう黒板に答えを書き終わっている。前の中村が心配そうに俺のほうに振り返ってきた。

「降参しちまえよ」なんて言っている。
「その必要はなさそうだ」と、俺はあるノートを見つけて自慢げに言う。

それは、カヤから借りた数学のノートだった。うっかり、返すのを忘れていれっぱなしにしていたのだ。ノートをひらくと、びっしりパソコンで書かれたようなきれいな字がみやすくならんでいる。

俺は、黒板に向かって歩きながら、ノートをぺらぺらめくった。

「あった」と、俺は微笑む。

さすがはカヤ。しっかり予習がされていた。この練習問題も解いてある。

「藤本、早くしろ」と石黒が急かす。どうせ、俺には解けないとふんでいるんだろう。残念だったな。

俺は、黒板の右端にいき、チョークをとった。カヤのノートを片手に。

――じゃ、急いでとってくる。クラスにもってくね。

カツッと、黒板にチョークをつきたてたときだった。カヤの嬉しそうな声が頭の中に響いた。そして……俺の頭に、一昨日のことがフラッシュバックのように蘇る。カヤがこの教室に来て、皆が驚いて俺を見て……俺はカヤを教室から連れ出して屋上に行った。

「……あ」

そうだ、俺はあの日、カヤと約束したんだった。

「おい、藤本？」

チョークを黒板にあてたまま動かない俺に、石黒は顔をしかめて近づいてきた。

「どうした？　分からないなら……」

「いえ、思い出しました」

俺ははっきりとそう言って、黒板にある文字を書きなぐった。もう、カヤのノートは必要ない。乱暴に文字を連ねると、チョークが割れるような勢いでバシッと置いた。自信満々に教室を見渡し、俺は不敵に微笑む。

「そういうことだ」

それだけ言って、俺は黒板を去り、席に戻った。クラスはシーンと静まっていた。石黒も目を点にしている。

「藤本？」と、中村が困惑した表情で俺に振り返る。「どういうつもりだよ、お前」

俺は肩をすくめて、また窓の外を見つめた。カヤは相変わらず一人で行動している。それを見ながら思い出す。俺があいつにした約束。

――急に態度かえて避けたりしない。何があっても。

俺は……俺だけは、最後までカヤの味方でいてやらなきゃいけないんだ。たとえ……化け物が体に宿っていようとも。

数字だらけの黒板で、俺が書きなぐった文字が、異彩を放っている。

『ＳＤカード→屋上』。これが俺の解法だ。

「藤本、なんだこれは！」という、石黒の怒号が聞こえた。やっと我に返ったか。

カインと不良　―１―

和幸は、一時間目が終わるチャイムとともに教室をでた。右のポケットには、クラスの誰かから回ってきたＳＤカードがはいっている。誰のものかは、すぐに分かるはずだ。

「おい、藤本！」という平岡の声が後ろから聞こえたが、和幸は振り返りもせず、階段へと向かった。二年三組、二年二組、二年一組、と通り過ぎると目の前に階段があらわれる。この校舎は、三階が一年、そして下にいくごとに学年が上がって、一階が三年だ。校舎はコの字になっており、校舎の東は一組から三組。南は、四組から六組。西は、七組から九組。きちんとフェンスがついた屋上は校舎の東のみ。南と西は平坦な屋根で、そこに出るための階段もない。つまり、『屋上』といえば意味する場所はひとつしかないのだ。

和幸は階段を一気に駆け上ると、勢いよく屋上への扉を開けた。教室を出たのは和幸が最初だ。誰も来ているはずはない。和幸は扉を全開にしたまま、屋上に足を踏み入れ、太陽にむかって気持ちよさそうに伸びをする。

「さて、と。誰が来るかな」

二、三歩、扉から離れると、階段に振り返りそうつぶやいた。

若干、あのメッセージがしっかり伝わっているかの心配はある。『ＳＤカード→屋上』。和幸としては、『ＳＤカードを返して欲しければ、屋上へ来い』という意味だったのだが……果たして、意図を汲んでくれているかどうか。とりあえず、ＳＤカードの持ち主が、屋上に来てくれればいいのだ。

和幸は腰に手をあてがい、しばらく待った。そして……誰かが階段をあがってくる足音が聞こえてきた。どんどん、近づいてくる。

カヤの着替え写真を売ろうとしていた犯人が。
和幸がじっと、階段を睨むように見つめていると、あるクラスメートが姿を現した。とても馴染みのある顔。和幸は、目が悪いわけでもないのに、目を細めてその人物を凝視する。
そして、「うそだろ！？」と、呆れたように怒鳴った。

＊　＊　＊

「なにがだよ？」

現れた人物は、まるで野球部みたいな頭をして、くっきり一重のがたいのいい男。一見、野球部の主将のようにも見えるのだが……俺は知っている。こんなたくましい体して、スポーツ少年みたいな頭して……こいつは、運動おんちのインドア派だってことを。そう、屋上に現れたのは、まさかの平岡だった。

「平岡？　お前かよ！？」

まさか、平岡が現れるとはこれっぽっちも考えていなかった。俺は、頭をかかえて大きくため息をつく。なにやってんだよ、こいつは。確かに、こいつはカヤによく見とれていたが……まさか、隠し撮りまでするような変態だとは思っていなかった。心から残念だ。

「お前ってなんだよ？」と、平岡は屋上にきといて、まだとぼけている。
「なんだよ、て……あのメッセージ見て来たんだろ？」

すると、平岡はりりしい眉毛を器用に動かし、眉間にしわをつくった。笑えるほど真剣な顔だ。

「ああ。お前を注意しにきたんだ」
「は！？」
注意？　平岡が俺を？　なんのことだよ？　すると、平岡は偉そうに腕を組んで俺をにらみつけた。
「いいか。神崎さんは女神だ」
「……」
は！？　おい、何を話しだすんだ？
「俺はてっきり、お前は神崎さんに純粋な気持ちで惚れているんだと思っていた」
「おい、平岡。何の話を……」
惚れてる？　ああ、そういえばこいつ、リストが劇に入ってきたときに、嫉妬だなんだと俺をからかってきたな。そうか、俺がカヤに惚れてる、と思っていたのか。
だが……今は、そんな話はどうでもいいだろ。ＳＤカードの話はどこだよ？
「お前と神崎さんじゃ、百パーセント無理だと思ってる。だが……もしかしたら、お前は、革命を起こすかもしれない、とちょっとは期待していたんだ」
「か、革命？」
ってか、それなら百パーセントじゃないだろ。矛盾してるぞ。平岡は、気のいい馬鹿だとは前々から思っていたが……ここまで馬鹿だとは思っていなかった。なに言ってるのか、全然意味分からん。

「俺たち三流グループから、あんな美女にお近づきになれる奴がでるかもしれない……お前は俺たちにとって戦士だったんだ！」
「……」

三流グループ？　つまり、学校でイケてない男子ってことか？
そうか、俺はそんなグループに属していたのか。目立たないように暮らしているうちに、どうやらそんなグループに入っていたようだ。知らなかった。それも、『俺たち』？　他にもメンバーがいるのかよ。一体、誰だ？
だが、そんな質問をする間もなく、平岡の熱弁は続く。

「なのに、あんな美しい人を欲望で汚すなんて！　それも、金のために！　純粋な気持ちはどこにいった！？」

平岡は、目頭に手をあて、そう叫んだ。俺はただ、固まった。意味が分からない。

「俺は、お前を見損なった！」
「お、おい、待てよ。何の話をしてるんだよ？」
「だから、あのＳＤカードだよ！　まさか、お前が神崎さんを盗撮までするとは……」

このとき、やっと状況が理解できた。俺は、はあっと肩を落とす。
どうやら、この馬鹿は俺があのＳＤカードの持ち主だと思ったようだ。つまり、カヤを盗撮した犯人は俺だ、と。なんでそういう思考回路になる？　こそこそＳＤカード回すような犯人が、堂々と黒板にあんなこと書くかよ。

「俺じゃねぇよ、平岡」と、俺は力なく言った。
「え？」

平岡は、うっとうしい泣きまねをやめると、俺をじっと見つめる。
「違うのか？」
「ちげぇよ。なんでそう思ったんだよ？」
「だって、黒板に書いてただろ。ＳＤカード欲しい奴は屋上へ……そういう意味じゃなかったのかよ？」
ははは。そういう風にとられたわけか。俺は呆れて笑うしかなかった。
「なんだ、お前は……俺が屋上でデータを売りさばくかと思ったのか」
「だから、止めにきたんだろう」
やはり、気のいい馬鹿だな、こいつは。
「俺も同じことしようとしたんだよ」
俺が肩をすくめてそういうと、平岡はくりっとした目を大きく開いた。
「は？」
「俺も」と、ポケットからＳＤカードを取り出す。「こいつに説教しようと思ってな」
平岡が、目をぱちくりとさせた。そのときだった。
「藤本、いるかぁ！」

そんな低い声がして、平岡よりも背の高い男の影が、ずいっとのびてくる。俺が平岡の後ろに目をやると、長髪、長身の男がポケットに手をつっこんで、偉そうに立っていた。すっと伸びた鼻筋。きれ長の目。長さが半分しかない眉。細長い輪郭。ウチのクラスでイケメンともてはやされる熊谷(くまがや)だ。だが、ひどい問題児で……いわゆる、ワル。二組のギャルに確か人気があったな。つまり……

「真打ちは後から登場だな、平岡」と、俺は平岡に小声で言う。いや、この場合は真打ちじゃなくて『真犯人』か。

熊谷の後ろから、ガラの悪い痩せたスキンヘッドと、柔道部並みのがたいのいいスポーツ刈りが現れる。スキンヘッドの鼻は若干左に曲がっている。ボクサーにしては痩せすぎだ。生まれつきか、ケンカか。まあ、どうでもいい。スポーツ刈りのほうは見たことあるな。一組の……林(はやし)、だったか。うろ覚えだ。

「俺のSDカードがなくなったんだけどさぁ。お前、知ってる?」

熊谷は半笑いで俺にそう言った。後ろの二人は、くつくつと含み笑い。わざとらしいったらない。分かってて俺を馬鹿にしているのは明白だ。

ふと横に目をやると……平岡は、まるで迷子の子犬のようにおどおどしている。平岡を巻き込みたくないんだが。こうなったらもう仕方ないな。

俺は、手に持っているSDカードを熊谷に見せる。

「こんなの拾ったけど、これ? 名前書いてないんだけどさ」

熊谷の笑いが消えた。もちろん、俺が持っていることに驚いたわけではないだろう。あのメッセージを読み取ってここに来たはずだ

からな。こいつの笑顔を消したのは……おそらく、俺の態度のせいだ。平岡によれば、俺は三流グループらしい。そんな奴に、こんなナメられた態度とられたら、プライド傷つくよな。

「てめぇと楽しくおしゃべりしに来たんじゃねぇんだよ。黒板にふざけたこと書きやがって。いいからそれ、渡せ。お前が持っててもお前が仕方ねぇだろ」

熊谷がじりじりと俺に近づいてくる。それに比例して、平岡が俺の後方へあとずさっていった。スキンヘッドとスポーツ刈りは後ろで、にやにやしている。

「それとも」と、熊谷が俺の目の前で立ち止まると、唇の端をあげた。「買い取りたいのか？」

やっぱ、売るつもりだったんだなぁ。ま、それ以外考えられないけど。

俺は、「そうだなぁ」とSDカードをまじまじと見つめる。

「いくら？」

その言葉に、スキンヘッドとスポーツ刈りが大爆笑。

「SDカードごと欲しいのかよ？　どんだけ！？」

「ほら、言っただろ、熊谷！　神崎の写真なら、こういう馬鹿がでてくるって」

熊谷は、二人に一瞬振り返ると、ハハッと笑って見せた。

「一枚ずつ売るつもりだったからなぁ、カード丸々の値段は考えて

なかったぜ」
「そうか。じゃあいいわ」
「あ？」
さて……うまくいくかは、神のみぞ知る、てな。

カインと不良　―２―

和幸は、ＳＤカードを持つ指に力を入れた。パキっという高い音が鳴ってＳＤカードは見るも無残にきれいに折れる。屋上が一気に静まった。

「ほら、返す」と、和幸は微笑して折れたＳＤカードを熊谷に差し出す。これに、熊谷は額に血管を浮き出して怒りをあらわにした。イケメンとうたわれる顔が一気に鬼の形相へと変わる。

「てめぇ、ふざけやがって！」

熊谷はそう叫ぶやいなや、右の拳を和幸のみぞおちに思いっきり入れた。和幸の体はくの字に曲がり、スローモーションのようにゆっくりとその場に崩れる。がくっと膝をつくと、和幸は腹をかかえてうずくまった。

「なめたマネしてんじゃねぇよ。お前、何様のつもりだ」

熊谷は唾を吐くとそう怒鳴った。学校一のワルだと自負していた熊谷にとって、大してクラスでも目立たない和幸にこんな態度を取られたのが腹ただしくて仕方がなかった。それも、高値で売るはずだったカヤの着替え写真を台無しにされたのだ。盗撮を頼んだ二組の女子にも、金は払っている。これでは、大損だ。

「適当に痛めつけて戻ろうぜ」

つまらなそうにそう熊谷に促したのはスキンヘッドの男だ。

「ふ、藤本、大丈夫かよ」と、消え入りそうな声で平岡が後ろから声をかけた。心配だが、熊谷に目をつけられたくはない。おどおどして和幸に駆け寄ることもできなかった。
その様子に、「お前は、なんだ？」と、いらついた声で熊谷は平岡に怒鳴る。平岡はびくっと肩をふるわせ、後ずさる。

「いや、あのさ……こいつ、神崎さんのこと惚れてて……だから、こんなことを。だから、これくらいで許してくれよ」

それが、平岡にできる精一杯だった。少なくとも学年で一、二を争う不良に、まさか立ち向かうことはできない。せめて、和幸のために弁解してここは退いてもらおう。そう思ったのだが……熊谷と他の二人はそれを聞き、顔を見合わせ、笑い出した。

「惚れてるってよ！」
「笑えるぜ」
「こんなことしたって、神崎がこいつを相手にするかよ」

口々に馬鹿にする三人に、平岡は言葉が出せない。

「平岡、さがってろ」

和幸は顔をあげると、平岡を一瞥し、押し殺すような声でそう言った。それにピクリと反応したのは熊谷だ。笑うのを止め、和幸を見下ろす。

「お～、まだ余裕あるんじゃねぇか」

涼しい表情は浮かべているものの……熊谷は、腑に落ちなかった。キレると自分をコントロールできない性格は自覚している。さっき

も、みぞおちに本気で拳をいれた。手加減は一切なかったはずだ。失神でもするかもしれない。そうまで思ったのだが……和幸は、声もださずにうずくまっただけだった。さらに、怯える様子もなく、他人の心配をしている。何か妙だ。それに……気に入らない。

熊谷は、和幸の髪を左手でぐいっとつかんだ。

「立てよ」

和幸を睨みつけ、低い声でそうつぶやく。後ろの二人は、顔を見合わせた。

「おい、熊谷。なにマジになってんだよ、そんな奴に」

「軽く一発殴って終わりにしろよ」

和幸は、髪をひっぱられるまま、素直に立ち上がる。まっすぐに熊谷の目を見つめた。その顔には苦痛の色は一切ない。おかしい。熊谷は顔をしかめた。ついさっきみぞおちに重いパンチをいれたのに、もうけろっとしている。まるで何事もなかったかのように……

「どうしたんだよ？」

和幸が半笑いでそうつぶやいたのが聞こえた。周りの人間には聞こえないくらいの小さな声だ。明らかに、挑発している。熊谷は、何かがキレる音が頭の中でした気がした。

「そんなに神崎に惚れてるなら、おそろいのあざでもつけてやるよ」

熊谷は頬をぴくぴくひきつらせてそう言い、和幸の髪をつかんだまま、右の拳をふりかぶった。

「わあ、藤本！」

平岡の悲鳴のような声が響く。そのときだった。

「そこまでぇ！」

それは、その場にいる全員の鼓膜をやぶるかというくらいの、怒鳴り声だった。

＊　＊　＊

やっぱりな。ここにいるんじゃないか、と思ってたんだよ。困ったときの神頼みだ。にしても……止めるの遅すぎだ。

熊谷は、突然の大声にビビって、拳を止めた。顔をしかめて声のしたほうに振り返る。後ろのスキンヘッドとスポーツ刈りも同じように後ろを振り返っていた。

「なにしてるんですかぁ？」

そんなわざとらしいとぼけた声をあげて、金髪碧眼の美少年は、階段室の屋上からひょいっと飛び降りた。

「なんだ、こいつ」と、スキンヘッドがいぶかしげな表情でスポーツ刈りに尋ねる。

「例のイギリス人だろ。転校してきた」

イギリス人の転校生は、ぐちゃぐちゃ話している二人は完全無視で、こちらに歩み寄る。

「これ以上は、茶番劇でも見てられませんよ」

リストは熊谷を見つめながら、能天気な声でそう言った。茶番劇、ね。俺は鼻で笑う。視線は熊谷だが、俺に言っているんだろう。

「なんだよ、てめぇは」

「リスト・ロウヴァー。一昨日、転校してきたんですよ」

いたずらっぽく微笑むと、リストは熊谷に手を差し出した。こんなときに、握手かよ。案の定、熊谷はカッとして、俺の髪から手をはなすと、リストの胸倉につかみかかった。

「お前か、調子にのってる一年の金髪は」

「これ、生まれつきなんですけど」

おいおい。リスト……そんなに挑発するような態度で、どうなってもしらないぞ。って、俺がいえる立場じゃないが。

「ロウヴァー、謝っとけ！」と、平岡が後ろから必死に叫んだ。本当に気のいい奴だ。巻き込んで心底申し訳ない。

「先輩なめるとどういう目にあうか教えてやる」

熊谷は、俺に振り下ろすはずだった拳をリストに向かってかかげた。

「はは、いいぞ、熊谷」と、後ろの二人はあおっている。こいつら、タダの暇人じゃないか。

そしてリストは……何かする気配もない。俺は正直、焦っていた。神の子孫なら、何か奇跡みたいなものを起こせるもんだとばかり……。俺は不安になり、熊谷の手を止めようと足を一歩出した。その

ときだった。

「オレを殴る気？」

リストの真剣な声が聞こえた。熊谷の振り上げている拳が、びくっと揺れる。なんだ？

＊　＊　＊

リストは、熊谷の目をじっと見つめた。

「オレを殴る気？」

もう一度、ゆっくりとつぶやく。熊谷は、目を泳がせる。自分の中で何が起きているのか分からない。ただなぜか、拳を振り下ろせない。味わったことのない、恐怖感に似た妙なものを感じていた。

「暴力は好きじゃない。教室に戻るんだ」

リストが命令するように語調を強めてそう言うと、熊谷は小刻みに震えた。熊谷は、自分の中の何かと格闘していた。なぜか、言われたとおりにしなくてはならない気がして仕方が無い。なんで、こんな一年坊主の言うことをきかなきゃならないんだ。一発殴ればいいだけだ。そう自分に言い聞かせても、なぜか手が出ない。額にじんわりと汗がうかぶ。ダメだ。逆らえない。熊谷は、観念したように唇をかみ締め、ゆっくりと拳を下ろしていく。表情には、屈辱と困惑がにじみでている。

熊谷が感じている妙なもの。それは他でもない、『使命感』だった。リストの神の遺伝子が熊谷に働いているのだ。

「おい、熊谷？」という、スポーツ刈りの男の戸惑う声がする。

熊谷は、乱暴にリストの胸倉から手を離すと、チッと舌打ちをして、二人の友人のほうへ歩いていく。明らかに落ち着きを失っていた。

「熊谷？　なんだよ、急に？」

「なんもしねぇのかよ？」

二人が引き止めるように熊谷を囲むと、熊谷は「うるせえ！」と二人をおしのけ、階段室へと歩いていった。熊谷の表情は異常だった。まるで幽霊でもみたかのような怯える表情だ。額には、運動をしたかのような大量の汗。二人は戸惑いつつも熊谷を追いかけるようにあとについていった。

「なんだよ、一体？」

不良三人組が消えた屋上で、平岡が泣きそうな声でそうつぶやいた。

カインと不良　―３―

「大丈夫か、藤本？」

平岡が心配そうに俺に駆け寄ってきた。

「え？」と、俺はとぼけた声をだす。

「みぞおち、殴られたじゃないですか」

すかさず、リストがいやみっぽい口調で言った。俺はハッと思い出す。そうだ。殴られたんだった。

「あ、いててて……」

いまさらながら、俺はみぞおちを押さえ体を丸めた。横目に、リストが呆れた顔をしているのが見える。

「大丈夫かよ？　思いっきりはいってたぜ」

平岡の悲痛な表情に、俺の良心が痛んだ。みぞおちよりも、そっちのがずっと痛いわ。

「オレが保健室につれていきますよ、藤本先輩」

リストが天使のような笑顔でそう言った。わざとらしい……。だが、にくめないかわいい笑顔だ。女だったらアイドル間違いなしだな。ナンシェとかいう子は、さぞやかわいいんだろう。俺は、ぼんやりとリストの部屋でみた写真を思い出す。リストによく似た女の子だった。リストが髪をのばして、頬をふっくらさせて、まつ毛を

増やせば、あの子になりそうなくらい。
そんなのんきなことを想像していると、「俺もついていくよ」という平岡の声が聞こえてきた。
「いや、いいですよ、平岡先輩」
リストが間髪いれずに即答する。
「平岡先輩は、藤本先輩が次の授業に遅れること、先生に伝えておいてください」

こいつは、よく次から次へとアドリブで言い訳がおもいつくな。俺は苦笑した。俺は、みぞおちを押さえたまま、平岡を見上げる。リストの天使の笑顔に、顔を赤らめている。おいおい、こう見えてもれっきとした男だぞ。目を覚ませ！　と、俺は平岡の頭をゆさぶりくなった。

「そうしてくれよ」と、俺は苦しそうな声で言う。自分でも分かる。大根役者とは俺のことだな。リストは心の中で爆笑していることだろう。
だが、みぞおちにパンチがはいったのを目の当たりにしている平岡は、疑う様子もなく、申し訳なさそうにうなずいた。
「わ、わかった。頼むな、ロウヴァー」
「任せてください」
また、天使の笑顔が炸裂か。どれだけ美しい顔してても……まさか平岡は、この後輩一年坊主が、神の子孫だとは思うまい。

＊　＊　＊

平岡は、名残惜しそうに何度も振り返りながら、屋上を出て行った。平岡の姿が見えなくなるやいなや、じっと笑顔をキープしていたリストは呆れ顔になって和幸を睨む。

「和幸さんがなんで裏方なのか、よく分かった気がしますよ」

「うるせえ」と、和幸はみぞおちを押さえていた手を離し、背をしゃんと伸ばした。

リストにはもちろん、分かっていた。先刻、屋上で繰り広げられた出来事は全て『茶番』であること。まさか、裏世界の殺し屋が、不良のパンチを大人しくくらって倒れこむわけがない。

「殴られたときに、もう少し声とかだしたらどうです？　少しはマシになると思うな」

「うるせえ。あいつのパンチが弱すぎるんだよ」

リストの嫌味まじりのアドバイスに、和幸ははずかしそうに反論する。なんとも無茶な言い訳だが、和幸の素直な感想だった。

「もう少し衝撃が来るかと思ったのに、全然だ！　神さまが創る人間ってのは、こんなにひ弱なのかよ？」

はあっと大きなため息をついて、そんな悪態をつく。すると、リストは、おほんとわざとらしく咳払いをした。

「神への冒涜を、神の子孫の前でよくできますね」

その言葉に、和幸は不敵な笑みでリストを睨んだ。

「お前の存在自体、神への冒涜だろうが」
「あ……それ言います？　ひどいなぁ」

これぱかりは、リストに反論のしようがない。神の子孫であり、『創られた』人間。神の遺伝子をもったクローン。リストこそ、神への冒涜……いや、神への裏切りそのものだ。

「まあ、それはおいといて」と、特に気にする様子もなく、リストは和幸にさわやかに微笑む。「なんだったんです、さっきのは？　おとなしく殴られちゃって。避けたり、受け止めたり、カインなら簡単でしょ」
「お前がいると思ってな。止めに入ってくれるとふんでたんだよ」

リストは顔をしかめた。

「失礼な。いつも休み時間はここにいるわけじゃないですよ」
「賭けただけだよ」

和幸にとって、リストが屋上にいるかどうかはどちらでもよかった。いなければいないで、不良のひ弱なパンチを受け続けて、適当なところでのびたフリをすればよかった。ただ、リストがいれば、神さまの『奇跡』で何とかしてくれる。無駄にケガをしなくてすむだろう、と期待しただけだ。
リストは、やれやれ、と呆れた顔で腕を組む。

「腑に落ちません。暴力は嫌いですけど……オレだって、正当防衛は認めますよ」

遠まわしに、やり返せばよかったじゃないか、と言っている。和

幸にはそれが分かった。堂々と神さまが暴力を認めるわけにはいかないんだろう。リストも一応、神の子孫としての自覚はあるようだ。和幸は、神の子孫も難儀だな、と思いつつ苦笑した。

「暴力沙汰で事を荒立てたくなかったんだ」

「は？」

屋上に呼び出した時点で、ことを荒立てているような気もしたが……和幸には、あのままＳＤカードを放っとくわけにはいかなかった。最低限できる限りのことをしよう、と思いついた策がこれだったのだ。あのままこっそり隠したり捨てたりすることも可能だったが、それだと、犯人が『誰が隠した』と騒ぎ始めるおそれがあった。屋上に犯人を呼び出し、目の前でＳＤカードを破壊する。怒りの矛先は自分に向けられるし、こちらが黙っていれば向こうも表立って騒ぎ立てないはず。和幸には、これがベストの策だと思えたのだ。ただし、暴力沙汰にはしないことが絶対条件で……。

「俺は」と、和幸は自分の両手を見つめた。「いまいち、力の加減ができない。クラスメートなんて殴ったことないし。多分、大怪我させる。そうなったら……騒ぎになる」

自分が殴られることは問題ないように思えた。商業用に『創られた』和幸は、体が人並み以上に丈夫だ。そこらの不良に殴られても、少し痛む程度だろう。あざはもしかしたらできるかもしれない。だが、転んだ、とでも嘘をついて自分が黙っている限り、教師にも何があったかはバレないし、周りの注意を引くこともならない。だが、自分が向こうに手をだせば……大怪我はまぬがれない。そうなれば、教師の目もごまかせない。生徒たちの好奇心もあおる。何があったんだ、どうしたんだ、と関係者は問い詰められるだろう。そうなれば……

「ＳＤカードのことが話題になる。そういうわけにはいかなかったんだ」

着替え中に写真を撮られて、隣のクラスに回されていた。和幸は、そんなことを、カヤに知られたくなかった。カヤは純粋だ。深く傷つくだろう。それに、夕べおそろしい目にあったというのに、次の日に辱めを受けることはない。たとえ、自分がどれほど殴られようと、和幸はカヤをこの一件から守りたかった。

和幸は、ぎゅっと拳を握り締める。正直にいえば、今にでもあいつらを殴りたい。だが、それはカヤのためにはならない。それが分かっているからこそ、和幸は自分を制止できていた。

「ＳＤカード？」

リストが、きょとんとしてそう尋ねた。和幸は、ハッとしてリストに振り返る。そういえば、リストは何も事情は知らない。階段室の上から、盗み聞きはしていただろうが……ＳＤカードの中身を見ていなければ、事情を全部把握することはできないだろう。

「いや、なんでもない。とりあえず、助かったよ」

そして、リストがそれを知る必要はない。出来る限り、あのＳＤカードの中身を知る人間は少ないほうがいい。たとえ、リストでも……和幸に、それをバラす気はかけらもなかった。

＊　＊　＊

体育が終わり、更衣室で着替えを済ませた二組の女子がわらわらと教室に戻ってくる。熊谷はポケットに手をつっこみ、それを廊下

で待ち構えていた。二組の女子は、次から次へと、熊谷をちらちら見ながら、頬を赤らめて教室に入っていく。熊谷は、彼女たちに一瞥もくれない。ただ、ある女を待っていた。

「麻子(あさこ)！」

熊谷は、目的の女を見つけて、そう怒鳴った。麻子、と呼ばれた女子は、え、と顔をあげて熊谷を見た。茶髪のロングヘアーに、高校生らしからぬ厚化粧。つり目をなんとかたれ目にみせようと、アイシャドウとアイライン、付けまつ毛を総動員している。痩せた骨ばった体と逆三角形の輪郭が特徴的だ。麻子は、熊谷を見ると、嬉しそうにとびはねる。

「いっちー！」

周りの友人をおしのけるように麻子は走り出し、熊谷にとびついた。熊谷は、下の名前を一久(いちひさ)という。いっちーとは、そこからついた熊谷のニックネームだ。麻子がつけて、麻子だけ使っている。

「うぜえな」と、熊谷はとびついてきた麻子を突き放す。

「なによぉ」

友人の前で、こんなことをされてはプライドに障る。麻子は、一気に不機嫌な顔になった。二人はつきあっているわけではなかった。熊谷にとって、麻子はただの都合のいい女だ。特別な感情はかけらもない。利用できるからそばにおいているだけだった。一方、麻子は、熊谷が学年の女子の中で人気が高いから近づいただけだ。どんな男の傍にいるか。それが麻子にとって、女のステータスだった。つまり、麻子にとっては熊谷は洋服や宝石と同じだ。

「写真のことなんだけどよ」と、熊谷は麻子の腕を引き、廊下のはじへつれていく。
「SDカード今朝渡したでしょ」
「壊されたんだよ」
「はあ！？」

麻子のかすれた甲高い声が廊下に響いた。熊谷は麻子の肩に手をまわし、乱暴に近づける。

「壊されたってなんなのよ？　誰に？」
「いいから！　データのこってねぇのかよ」

その言葉に、麻子は、ふ～ん、と目を細める。グロスの塗られた赤い唇をぺろりとなめ、熊谷の顔にじっとちかよった。

「あたしの携帯の本体に残ってるけど……」
「金は払うよ」

麻子は、満足そうにあやしく笑んだ。

「それ、今夜のホテル代ね」

熊谷の耳に、麻子がそうささやくのが聞こえた。

接近

「裏の世界では、人身売買が当たり前のように行われているんだ」

リストは難しい表情で、つぶやく。カヤは、「そんな……」と顔をそむけた。リストは、カヤに歩み寄ると、その肩に優しくふれる。

「君も、その被害者だ」

カヤは、手で顔を覆う。

「じゃあ、私の本当の父と母は？」

「君の帰りを待っている。だから、俺が迎えに来たんだ」

カヤは顔をあげ、リストの顔を見つめる。二人は見つめあい、そしてあつい抱擁を……

「この劇、大丈夫なのか？」

俺は気づいたらそうつぶやいていた。

「こら、和幸。通し稽古中なんだから、黙っててよ」

あ。しまった。つい。

アンリは、教室のはじから、丸めた台本を俺にむかって指した。静まっていた教室がいきなりざわめきだす。カヤとリストは、何やら談笑を始めた。演技の相談にはみえないな。

映画研究部の部室は、校舎三階の西のはじにある。アンリが無理やりつくった部だから、部室というか……あまった教室を貸して貰

っている、という状態だ。机を全部、教室の後方に固め、空いているスペースで劇を練習しているのだ。俺は、机の足を背もたれにして、床にあぐらをかいていて見ていた。他の裏方の連中も、床に座るか、机に腰をおろしてその練習を見ている。

もう文化祭まで三週間をきっている。そりゃ、通し稽古にも気合がはいるわけで。驚くべきは、リストだな。さすがは神の子孫。カヤに匹敵する演技力に暗記力。なにより、このふざけた劇を真剣にやれるってのがすごいわ。俺だったら、途中で笑ってしまうだろう。

それにしても、参加者が増えているな。二十人はいるだろうか。一昨日より、十人ほど女子が増えている。俺は、見ない顔の女子生徒に目をやった。上履きの色はエンジ色。一年か。彼女たちは、熱心にその視線を一人の男子生徒に向けている。

あ、そうか、と俺は理解する。

「リストく〜ん」

そのうちの一人が、台本をもってリストにかけよった。カヤをおしのけ、リストにすりよるかのように近づく。ほらな、やっぱり。リストのファンがごっそり入ってきたんだ。俺は半笑いでその様子を見つめた。

「！」

ふと、カヤと目があった。カヤはにこりと微笑んで、俺のほうへ向かって歩いてくる。俺は若干、緊張していた。カヤが風の噂で、あのＳＤカードのことを聞いてはいないかと不安だった。だが、練習風景を見ている限り、そんな様子は見られない。実際、ＳＤカードで女子の写真が回っているのは、男子の間だけの秘密。まあもちろん、盗撮に協力している女は別だが。カヤの交友関係は狭いし……俺や平岡が直接言わない限り、耳に入ることはないはずなんだ。

心配しすぎ、だよな。

「どうだった？」

恥ずかしそうにカヤは俺を見下ろしてそう尋ねた。

「カインがイギリス人ってのがおかしい」

俺が肩をすくめて言うと、カヤはくすっと笑って、俺の隣にぺたんと腰を下ろした。スカートの中が見えないように、器用に足を折って座る様は、なんか……色っぽい。ふと、今朝見たカヤの着替え写真が思い浮かぶ。一瞬、下着を思い出そうとして、俺は我に返った。何してたんだ、俺は？

「それをいったら、少女Aがイラン人ってのもおかしいんじゃない？」

カヤは冗談のつもりで言ったのだろう。いたずらっぽく笑ってそう言ったのだが……その言葉は、俺を一気に冷静にさせた。

「……いや」と、俺はため息をつく。「外国の子供も売られてくることがあるから」

それを聞いて、カヤは一瞬、顔をひきつらせた。

「そうなんだ」

「それ以外は……」と、俺は声のトーンを変えて言う。「リストが鼻の下のばすのをやめれば完璧だ」

「え？」

カヤは目を丸くして俺を見つめた。俺は、ふっと鼻で笑う。

「冗談だよ」

フフッとカヤが笑った。よかった。もとのカヤに戻ったな。

だが……と、カヤの稽古中の演技を思い出す。カヤは何をやっても完璧だ。演技もリアルで、目を見張るばかり。つまり……普段もそういうことができる、てことだよな。今も、普通のふりをしているだけかもしれない。

そうだ。SDカードのことで頭がいっぱいで忘れていたが……今朝、カヤは様子がおかしかった。動揺を隠しきれない……そんな感じだった。あれは、絶対になにかある。きっと、何かを隠しているはずだ。でも、何だ？　SDカードはあの後に起きたこと。カヤがそれを知るはずはない。しかも、藤本さんの部屋から戻ってから様子がおかしくなったんだ。学校とは関係ない……ことだよな。

「どうしたの、和幸くん？」

俺は、いつのまにか、カヤを見つめていたようだ。俺はハッとして頭をかく。

「いや……」と言って、ファンに囲まれるリストに目を向けた。

とりあえず、今は、聞くべきときじゃない。それに、カヤが俺に言いたくなったら、言ってくるはずだ。無理やり言わせるのもおかしい。

「リストくん、大人気だね」

カヤが、クスッと笑ってそう言うのが聞こえた。確かに、大人気だ。五、六人に囲まれてへらへらしてる。

「そうだな」と、俺は呆れた声で返事をした。リストの奴、いい気なもんだよ。あれがカヤを殺す使命をもった神の騎士だとは。緊張感なさすぎだ。

にしても……と、俺はちらりとカヤに目をやった。隣で、目を細めてリストのハーレム状態を見つめている。こうしてカヤと肩を並べて床で座っているこの状況……ほんの数日前まで考えられなかったよな。初めて、カヤに近づけ、て『おつかい』を受けたときはどうなるかと思ったけど……なるようになるもんだ。さらに考えれば、そんな『おつかい』を受けなければ、こんな美少女と話すこともなかっただろう。俺は、日陰の人生。目立たないように生きてきたからな。わざわざ避けていたかもしれない。本当に、何が起きるか分からないもんだ。

――人生には面倒くさいだけの価値はある。

藤本さんの声が頭に響く。そうかもしれない。俺は、無意識に微笑していた。

「お！」と、俺が声をあげたのは、しばらくリストのハーレムを観察してからだった。ある悲しくも興味深い事実に気づいたのだ。

「ん？　なに？」

カヤが、首をかしげて俺を見つめるのが横目で見えた。俺は、リストの左後ろをあごで指す。

「あそこ、平岡みてみろよ」

「平岡くん？」

カヤは戸惑いながらも、言われたほうに目をやった。教室の隅、

アンリの隣で平岡がつまらなそうな顔してリストを睨みつけている。俺はククッと含み笑いをしてカヤの耳に顔をよせた。

「憎たらしそうな顔して、リストを睨んでるだろ」

「あ……」と、カヤは申し訳なさそうに微笑む。「本当だ」

「リストに話しかけてるポニーテールの子、いるだろ。平岡、あの子がお気に入りなんだ」

もちろん、自分を三流グループだと思っている平岡が、あんなかわいい子にアタックするわけはない。かげながら恋焦がれているだけだ。なのに、一丁前に嫉妬してるみたいだな。だめもとでも告ればいいのに。

「そうなんだ」

カヤは手を口にあてて驚き、「でも……」と、あわてた様子で俺に振り返る。

そのとき……

俺の鼓動が大きく波打った。

「あ」と、つぶやくカヤの顔がすぐ目の前にあった。こんなに間近でカヤの顔を見るのは初めてだ。『おはよう』とカヤがベッドで言ったときよりも、ずっと近い。少しでも顎をだせば、唇があたりそうだ。

やべ……。動けねぇ。

「和幸……くん」

俺の唇のすぐ前で、カヤが消え入りそうな声でそうつぶやいた。

「神崎さん、いる！？」

そんな町田の声が聞こえたのはそのときだった。

「はい！？」と、カヤが弾かれたように町田のほうに振り返る。俺もやっと金縛りが解けたように、顔を逆方向にそむけた。ふうっと大きなため息がもれる。心臓がここにきて、すごい勢いで早くなった。今のは……近かった。

「あ、いたいた」

町田はカヤを見つけると、教室に入り、こちらに近づいてきた。俺の顔は今、どんなことになっているだろうか。カヤは？　いや、顔を確認することなんて出来ない。

心臓が落ち着くのを待っていると、俺の目の前に町田のスカートがなびいた。見上げると、相変わらずのロングヘアが目に入ってくる。町田はアンリの親友みたいだが、アンリと違って文学少女を思わせる落ち着いた雰囲気の子だ。一切いじっていないナチュラルな眉に、ぱっちりとした一重の目。素朴、て言葉がよく似合う。その証拠に、スカートの丈もやや長めだ。膝下……三センチ？

「藤本くんのえっち」

「え！？」

町田の声に、ぎょっとして俺は顔をあげた。町田がジト目で俺を見下ろしている。えっち？　なんのことだよ？

「足、じろじろ見ないでよ。顔、真っ赤だし！」

「は？」

顔が赤いのは、足を見てたからじゃ……て、言えるか。

「！」

何か、視線を感じる。俺はちらりと横をみた。すると、カヤがムッとした表情で俺を見ている。おい、ちょっとまて。スカートの丈を見ていただけだ。いや……説得力なさすぎだろ。

「きゃ～、藤本くん、えっちぃ」

教室の向こうからの声。気持ちの悪い、上擦った高い声。このお調子者は、平岡だ。アンリの隣で嬉しそうに騒いでいる。

それにつられて、「やだぁ」という誰かの声が聞こえてきた。

「うるせぇぞ、平岡！」と俺は怒鳴った。濡れ衣もいいとこだ。

「神崎さん、先生が呼んでるから、職員室行って」

町田が何も無かったかのように、カヤに告げる。おいおい、フォローしてくれよ。

「うん、わかった」と、カヤもまるで無視。さっさと腰を上げた。いや、まさか、カヤも俺が町田の足をじろじろ見てたなんて思ってないよな？

「おい、カヤ」

何を言おうとしたのか自分でも分からないが、俺はカヤを引き止めていた。するとカヤはくるりと振り返り、いたずらっぽい笑顔を見せた。

「和幸くんのえっち」

「え」

カヤはそれだけ言って、教室を出て行った。俺はぽかんと教室に取り残される。なんだよ、今のは？　カヤも俺が変態だと思ってるのか？　よく分からないが……すごい、ショックだ。

だが……と、俺はさっきのカヤを思い出す。頭のなかでリプレイするだけで、心臓が高鳴った。

「かわいい……」

後方から、照明係のそんなつぶやく声が聞こえてきた。ああ、同感だ。

訪問者　―上―

「失礼します」

カヤが職員室の扉を開けると、担任の野村が一番奥の席であわてて腰をあげた。野村は、ブルドッグと陰で呼ばれている社会科教師だ。三十代後半で、既婚。ゴルフ焼けの顔に、おたふくのようにふくらんだ頬。髪は真ん中わけでサラサラとしている。将来はげることはなさそうだ。目はつぶらでかわいいのだが、全体的に顔のバランスが悪い。

「神崎、神崎」

野村ははねるように、カヤのもとへはしってきた。

「野村先生、あぶないですよ」と、年配の化学教師が小言のようにつぶやくのが聞こえる。

「どうしたんですか、野村先生？」

カヤは、若干身を引きながらそう尋ねた。野村は、いやいやいや、と興奮している様子でカヤの腕をひく。向かっている先は、どうやら校長室のほうだ。

カヤの頭に、過去の出来事がフラッシュバックする。職員室に呼ばれ、校長室に連れて行かれる。カヤにとってはお決まりのコースだ。まさか……と、嫌な予感がした。また、学校を追い出されるのでは？

「野村先生、待ってください！」

カヤは、急に足をとめ、野村の腕をはらった。周りの教員が、取り乱した少女の声に驚いて振り返る。

「今回は嫌です。無理です！」

「え？　なんのことだ、神崎？」

野村は驚いて顔をしかめた。カヤは優等生で、野村も気に入っていた。声をはりあげるような生徒ではない。一体、何事だ。

「小倉くんの件ですよね？　ご迷惑をおかけして、ごめんなさい。でも、私は、本当に何も知らないんです！」

「小倉？」

＊　＊　＊

そうだ。そういえば、小倉くんが大怪我をしたんだった。私の頭に、足を包帯でぐるぐるに巻いて劇の練習に現れた小倉くんの姿が浮かんだ。

――お前には、二度とかかわらねえ！

小倉くんの憎しみに満ちた声が蘇る。あのあと、先生に何か言われることもなかったから、あれで終わったのだと思っていた。いつも、こういう羽目になる。私に近づいた誰かがケガして、私は校長先生に呼ばれ、こういわれるのだ。

「他にいい学校がありますよ」

遠まわしに、転校してくれ、ということだった。

でも、まさかこんなにいきなり呼び出されるなんて……いつもだったら、もっと学校中に噂され、学校がごまかせなくなってから、『交渉』される。今回の場合、小倉くんの件は噂になっていない。小倉くんと私はそこまで仲良くなかったし、小倉くんのケガと私を関連付ける人もいなかったんだろう。てことは、別の人？　私が知らないだけで、誰かがケガをした？　私の『ストーカー』によって。

あれ？　ちょっとまって。そういえば……和幸くんはどうして何ともないの？　和幸くんは私といつも一緒にいる。私は和幸くんの部屋に泊まってまでいる。なのに、和幸くんは一度も、『ストーカー』のことを口にしたことはない。小倉くんの次に襲われるなら、和幸くんのはずなのに。そもそも、私と和幸くんが仲良くなったきっかけは、『ストーカー』を捕まえるためのおとり捜査。なのに、『ストーカー』が現れない……。どうなってるの？　もしかして、もう『ストーカー』はいなくなったんじゃ？

「そうだ！」

私は胸が高鳴り、思わずそう叫んでいた。野村先生はぎょっとしている。構わない。だって……

「もう、ストーカーはいませんから、大丈夫です」

「……は？」

そうよ。『ストーカー』はもう諦めたんだ。それが一番しっくりくる理由だもの。校長先生には、事情をちゃんと説明して……和幸くんにも証言してもらって、それを訴えよう。今後はこういうことは二度と起こらないから、て説得するんだ。そしたら、この学校を追い出されることはなくなるはず。

だって……絶対、嫌だもん。私は、この学校にいたい。和幸くんのそばにいたい。

「だから、転校だけは許してください」

＊　＊　＊

うるんだ瞳でカヤにじっと見つめられ、野村は自分の胸がときめているのに気づいた。だが、自分は既婚で教師だ。相手は二十も下の女子高生。何を考えている、と野村は咳払いをする。何より、他の教師に誤解を生むようなことがあってはいけない。

「何言ってるんだ、神崎。転校するのか、お前は？」

「はい？」

カヤはきょとんとした。転校以外に何の話だ。そして、重大なことに気がつく。そうだ。『ストーカー』以上の問題を自分は今抱えているんだ。カヤは視線を落とした。

「両親のこと、ですか……」

今度は急に落ち込んだカヤに、野村は困惑した。さっきはいきなり目を輝かせて懇願するように見つめてくるし、今度は泣きそうな表情でうつむいている。優等生に限って問題があるものだし……と、野村は不安になった。

「ご両親に何かあったのか、神崎？」と、野村は気をつかって小声で尋ねた。他の教師は興味なさそうにテストの採点やらプリント作成やらをしているが……聞き耳をたてているのは明らかだ。

「え？　両親のことでも、ないんですか？」

『ストーカー』でも、両親のことでもない。カヤにはさっぱり分からない。それなら、なぜ呼び出されたのだ？

「お前にお客さんが来てるんだよ」

野村はちらりと校長室に目をやって、早口でそう告げた。お客さん？　カヤは顔をしかめた。自分に誰が学校にまで尋ねてくると言うのだ？　それに、野村の様子が尋常ではない。浮き足立っているような……

「とにかく、早く校長室へ」

＊　＊　＊

校長室に入ると、校長先生が私に微笑みかけた。五十代くらいのきっちりとした女性の校長だ。ぴったりとしたシックなスーツが、スタイルの良さを強調している。ヨガでもやっているのかな？　シルエットだったら二十代に間違えられそう。ショートヘアに薄い化粧でクールな印象。顔立ちも上品だし、きっとお嬢様育ちなんだろうな。

「神崎です」と、私は会釈する。

「知っていますよ。さて、私は席をはずしますね」

校長先生はゆっくりとイスから腰をあげる。

校長先生が席をはずす？　わざわざ、どうして？　私が不思議に思っていると、「すみませんね」という聞き覚えのある声がした。

「え！？」

私はハッとして横を見た。そこには、ひょっこりと薄い黒髪の頭がソファの背もたれからはみでている。まさか……お客さんって……

「失礼しますね」と、校長先生がその頭に向かってお辞儀をした。すると、ソファに座っていた男性がおもむろに立ち上がり、校長先生にピシッとお辞儀を返す。

私はその後姿に、ハッとした。やっぱり、そうだ。あの人は……

「それでは」

校長先生が私の横を通り過ぎ、扉をパタン、と閉めた。すると、『お客さん』はくるりとこちらに振り返る。

「やあ、カヤちゃん」

「本間(ほんま)のおじさま！」

＊　＊　＊

カヤは、本間に嬉しそうに駆け寄った。

男の名前は、本間秀実(ほんまひでみ)。薄い黒髪に、ふちなしの眼鏡。黒いスーツに、紫のネクタイ。四角い輪郭。芋虫のような濃い眉毛と小さな目。六十半ばのこの男は、どこか厳しさのある顔に、笑みを浮かべてカヤを見つめた。

「久しぶりだね」

「お元気そうで」

「ま、座りなさい」と、本間は腰をおろしながら、目の前のソファにカヤを促した。

カヤは久々の再会に心をおどらせながら、ソファに座る。本間は

カヤの父の古い友人で、カヤが幼いときから家によく遊びに来ていた。父親と本間との詳しい関係は知らないが、博識で礼儀正しいこの男をカヤは尊敬していた。親戚付き合いのなかった神崎家に育ったカヤにとって、本間は叔父のような存在だ。

「どうされたんですか？　おじさまが私を学校に訪ねてこられるなんて。驚きました」

「心配していたんだよ」と、本間は眉間にしわをよせて低い声で言う。

「はい？」

「わたしも時間がないから……さっそく、本題に入らせてもらう」

カヤは本間の真剣なまなざしに、緊張して背筋を伸ばした。

「昭三（しょうぞう）と舞さんのこと……聞いたよ」

カヤの心臓がどくん、と鳴った。昭三と舞。それは、カヤの両親だ。本間は苦渋の表情を浮かべてため息をついた。

カヤはごくりと唾をのむ。遺体を見ていないことが大きかったのだろう、カヤには信じられないでいたのだ。両親が殺されたなど……何かの間違いだ。そう思えて仕方が無かった。だが、こうして本間の口から聞くことで、とうとう両親の死が現実味をおびてしまった。

カヤはうつむいた。言葉がでない。

そんなカヤをよそに、「どうして、自殺なんて……」と、本間はつぶやいた。

「え？」

カヤはその言葉に、目を見開く。

「自殺？」

訪問者　―下―

自殺？　本間のおじさまはそう言っただろうか。

「自殺って……」

「おや、知らないのか？」

本間のおじさまは顔をしかめた。私は、力なく首を横に振る。

「私は、殺された、と聞きました」

そう。夕べ、警官は「殺された」と私にはっきり言った。聞き間違うはずがない。それに、自殺なんて……両親がするはずがない。

「殺された？　誰に聞いたんだね？」と、本間のおじさまが、するどい目つきで身を乗り出す。すごい真剣だ。そりゃ、そうだよね。本間のおじさまにとって、父は親友だった。殺された、となるとまた別問題だもの。私はぎゅっとスカートを握り締め、本間のおじさまを見つめ返す。

「警察の人です」

「警察？　いつだね？」

「夕べです」

「家に帰ったのかね、夕べ？」

本間のおじさまが目を見開いた。なんだか、尋問みたいだ。私は居心地が悪かった。

「……はい」

「そして、警官に会った？」
「捜査中、だったみたいです」
捜査、か。自分で言ってて嫌になる。あんなの、捜査じゃないのに。
「それで……どうしたんだね？」
「それから……」と、そこまで言ってハッとした。
だめ。言っちゃダメだよ。
私の頭に、和幸くんの笑顔が浮かぶ。そして……私の手にこびりついていた血。
――和幸は、『男たちを殺した』とはわたしには言いませんでした。わたしにいえるのは、それだけです。
藤本さんの声が頭に響く。あのあと……警官は殺されたんだ。調べようと思えば、すぐに分かること。父の書斎に警官の遺体が四つあるはずだもの。失敗した。おじさまに、家で警官に会った、なんて言うんじゃなかった。万が一……万が一、和幸くんが調べられることになってしまったら……。ごまかさなきゃ。私は、あの警官の死と無関係。彼らが殺されたことも知らない。そういうことにしなきゃ。
「それから」と私はごくりと唾をのんだ。おじさまを騙すなんて……気がひけるけど……「それから、すぐ帰りました」
本間のおじさまが、眉をひそめた。
「帰った？」

「はい。ショックだったので、すぐ友人の家に……」

しばらく、本間のおじさまが私を睨むように見つめた。まるで、嘘を見極めるかのように……。

「おじさま？」と、私は微笑する。おじさまは頭のいい人。ちょっとでも不審だと思えば、あの手この手で夕べの真相を調べ上げてしまうだろう。そんなこと、させるわけにはいかない。和幸くんは私を守ってくれた。今度は、私の番だ。

「そうか」

本間のおじさまは、ふうっとため息をついて、ソファに深く座りなおした。よかった。張り詰めた空気が消えた。信じてくれたみたいだ。

「とにかく、カヤちゃんが無事でよかったよ」と、おじさまは微笑む。「いや、昭三と舞さんの悲報を聞いたとき、娘さんは行方不明だ、と言うじゃないか」

私はハッとした。そうか……一昨日の夜、私は家を飛び出してしまったから、私は消息不明になっていたんだ。

「遺体は見つからない、というから……すがる思いで高校に電話をいれたんだよ。そしたら、学校に来ているというから、飛んできたんだ」

私は苦笑いを浮かべた。すごい違和感ある状況よね。両親が死んで行方不明の娘が、元気に学校には来ているなんて。何か筋の通る言い訳を考えなきゃ。

「一体、どうなっているんだね？」

また、おじさまがするどい視線を向けてきた。

おじさまがどんな仕事をされているのか、私は実は知らない。父から聞いたことはなかったし、私と話していると仕事が忘れられる、とおじさまが嬉しそうに言っていたからだ。聞かないほうがいいんだろうな、と幼心に思ったのを覚えている。それに、聞く必要もないと思っていた。でも、今は……興味がある。このおじさまの貫禄……少なくとも、ただの会社員ではない。

「実は……」と、私はとっさに言い訳を考える。「両親とケンカしたんです」

「ケンカ？」

私はうなずく。

「一昨日の夜、ケンカして……それで、家を飛び出したんです」

「カヤちゃんが家出か」

それは、嘘ではない。私は口元だけ微笑をうかべた。

「それから、一体どこにいたんだね？　ホテルかい？」

「いえ、友人の家に泊まっていました」

「友人の家」と、おじさまは腕を組んだ。

「それで、夕べ、仲直りしようと思って家に帰ったんです。そしたら、警察の方がいて……両親が殺された、と。驚いてすぐに家をまた飛び出して、友人の家に帰ったんです」

「そうか……」

おじさまは、固い表情を浮かべて視線をおとした。納得……してくれたかな。私はじっとおじさまの様子を伺う。
しばらくして、おじさまは何度かうなずいた。
「大変だっただろう」
その言葉に、一気に緊張がほぐれた。よかった。納得してくれた。
「どうだね」と、おじさまはまた身を乗り出した。「今後のお葬式やその他の整理、一切をおじさんに任せてくれないか？」
いきなりの申し出に私はぎょっとした。全然考えてなかった。お葬式とか、お墓のこととか……いろいろ考えなきゃいけないんだ。急に、寂しくなってうつむいた。
「それはさすがに申し訳ないです」
「いやいや、カヤちゃん。ぜひ、やらせてほしい。急に両親を亡くしたんだ。君にそんなことをさせたくはない」
でも、それこそ、今までの恩を両親に仇で返すようなものだ。お葬式も全て、他人に任せるなんて……
「実はね」と、おじさまが声を低くして切り出す。「昭三に言われていたんだよ。自分にもしものことがあったときは、本間さんに全て頼みたい、と」
父が、そんなことを？　私は聞いたこと無い……
「今思えば……あのときから、自殺を覚悟していたのかな」

遠い目でおじさまはそう小さく言った。
自殺……私はやはり腑に落ちなかった。夕べまで、殺されたと思っていた。警官もそう言った。なのに、急に自殺？　両親が？　そんなわけない。悩んでるように見えなかったし……それに、変な男に私を売ろうとしていたんだ（理由はまだ分からないけど）。そんな大事なときに自殺なんてするだろうか。でも、おじさまはこう言っているし……どれが本当なの？

「どうだい、カヤちゃん。おじさんの頼みを聞いてくれるか？　友人との約束を守りたいんだ」
「……」

そういわれてしまうと……私は、小さくうなずいた。

「お願いします」

父がそれを望んでいたのなら、そうするべきだろう。でも、なんだろう、この違和感。何かがおかしい気がしてならない。

＊　＊　＊

「それと、もう一つ……」と、本間が真面目な表情で切り出したのは、帰りがけだった。

本間と並んで校長室の扉の前に立ち、カヤは首をかしげる。丁度、本間のためにドアを開けようと手をのばしたところだった。

「本間に来ないかね？」

カヤには一瞬、意味が分からなかった。ドアノブに伸ばした手を

戻し、困惑した表情で本間を見上げる。

「はい？」

「うちに養女にこないか、と言っているんだ」

「……！」

カヤは目を泳がせた。本間の家に養女に入る？　あまりに突然の申し出だ。まさか、本間がそんなことを言い出すとは思ってもいなかった。返す言葉が見つからない。

だが、すぐに断る気も起きない。確かに、現実的な話だからだ。両親が亡くなった今、カヤに身よりはない。今は和幸の部屋に泊めてもらっているが、ずっと、というのはさすがに悪い。藤本にお金を借りることになるだろうし。そう考えれば、幼いころから知っている本間の家に養女に入るほうが気が楽だ。だが……やはり、突然すぎる。自分はまだ両親の死も受け入れきれていないというのに。

「あの、おじさま……」と、カヤはうつむいた。

「いや、今すぐに返事が欲しいわけではないよ」と、本間はすぐに微笑んで付け加えた。「ただ、考えておいてほしいんだ」

そう言って、本間はカヤの肩に手をおく。カヤは、そう言ってもらえてホッと安堵した。そう、断りたいわけではない。ただ、今はまだ早すぎるだけだ。

「ありがとうございます、おじさま」

「あ、そうだ。おじさんと一つ約束してほしいんだ」

本間は、急にそう言ってカヤの前に人差し指を立てた。

「はい？」

「いいかい。何かあったら、一番におじさんに教えて欲しい。困ったことや気になること……それから、昭三や舞さんの死に思い当たること。なんでもいい。何かあったら、おじさんに電話するんだよ」

本間の顔は真剣だった。自分を気遣っての言葉なのだろうだが……カヤは素直に「ありがとう」と言えなかった。あまりに鋭いまなざし。低い声。なぜか、脅されているような気がして仕方がない。

「分かりました、おじさま」と、カヤは無理して微笑んだ。

「そうだ、おじさんの名刺をやろう。電話番号もメールもかいてあるからね」

本間は思い出したように胸ポケットをさぐりだす。

「どこにやったかな」と探しながら、本間はカヤにこう尋ねた。「文化祭がちかいんだって？」

カヤはその言葉に、自慢げに微笑む。

「あと三週間くらいです」

「校長先生から聞いたが、劇にでるんだって？」

今日の様子は少し変だったが、本間はカヤにとって叔父のような存在。いわば、たった一人の身寄りだ。カヤは目を輝かせて、本間の腕をつかんだ。

「そうだ、おじさま。ぜひ、観に来てください」

「劇をか？　カヤちゃん、主役なんだろうね」

「ヒロインです」と、カヤは恥ずかしそうに笑った。

「あ、あった、あった」と、本間は名刺をとりだす。「それで、何の劇の誰役だね？　ジュリエットか？」

カヤは、すうっと息を吸うと、小声で答える。

「『無垢な殺し屋』、カインの劇」

「――カイン？」

「私は、悪い人に売られた女の子の役で、カインに助けてもらうんです」

「！」

その瞬間、本間の表情が凍った。名刺を渡す手も中途半端な位置で止まっている。カヤは、本間の異様な変化に恐怖さえ覚えて、心配そうに顔を覗き込んだ。

「おじさま？」と、恐る恐る呼びかける。

「いや、すまない」

本間は我に返ったようにまた動き出した。だが、名刺を渡す手だけは止まったままだ。カヤはそれに自分から手をのばしたほうがいいのか、判断しかねていた。

「カイン、とは……意外というか」

本間は不自然に笑った。あら、とカヤは目を丸くする。

「おじさま、カインをご存知なのですか？」

「え？」

「おじさまって真面目な印象があったので……そういう都市伝説みたいな話は聞いたことないだろうな、と思っていました」

カヤも、カインが実在する、とアンリから聞かされるまではカインの存在を信じてはいなかった。カインの噂は何度も聞いたことはあったが、誰かが面白半分ででっちあげた作り話だ、と思っていたのだ。そんな噂を、大人が相手にしているとは思えなかった。まして、本間のような真面目な人間はそんなものを聞く機会すらないだろう。だが、本間の様子からして、どうやらカインが何かを知っている。意外というか不思議だった。

「ここまで歳をとると、たくさんの人からいろいろな話を聞くものだよ」

本間は、カヤの疑問をふきとばすかのように、屈託のない笑顔を浮かべた。

「とても興味深い。是非、劇には伺わせてもらうよ」
「お待ちしてますね、おじさま」
「未来の娘の晴れ舞台かもしれないからね」

その言葉に、カヤはどう答えればいいのか分からなかった。未来の娘……そうなるかもしれない。だが、今は想像もつかない。カヤは笑顔を消し、うつむいた。一体、自分はこれからどうなるのだろうか。急にそんな漠然とした不安が襲ってきたのだ。

「どれ、わたしはもういかないと」

そんな声がして、カヤはハッとする。顔をあげると、本間が名刺を胸ポケットにもどすところだった。カヤは首をかしげる。自分に渡すために取り出したはずだ。

「おじさま、その名刺……」
「あ、そうだったね。うっかりしていた」
本間は苦笑いをうかべて、名刺をカヤに渡した。「ありがとうございます」とカヤは言って名刺を受け取る。いつもしっかりしている本間が、こんなおっちょこちょいなミスをするなんて……。本間も、物忘れする歳になったということか？　カヤは首をかしげながら、本間を見上げた。
「それじゃ、また。多分……劇のときに」
ドアノブに手をかけた本間は、何事もなかったかのように落ち着いていた。
「はい。お気をつけて」
カヤは気になりつつもそう言って、校長室から出て行く本間を見送った。パタン、と扉が閉められカヤが一人残される。
「今日のおじさま、何か変だったな」
ぽつりとそうつぶやき、カヤはおもむろに名刺に視線を落とした。そして……
「え！？」
カヤは校長室に響き渡る大声を出した。そこには、信じられない肩書きがのっていた。カヤは思わず口に手を当て、何度も見直す。
「うそ……おじさまが？」

ここにきてやっと、なぜ野村があんなに浮き足立っていたのかが分かった。そして、校長のあの丁寧な態度も今なら納得できる。だが、納得できないのは……どうして今まで自分はこれを知らずにいられたのか。

カヤは呆然として、未来の養父になるかもしれない男を思い浮かべた。

トーキョーの黒幕（前書き）

具体的な役職名がでてきますが、実際の人物、団体、出来事とは一切関係ありません。

トーキョーの黒幕

夕方になって、カインノイエの教会に一人の青年が駆け込んできた。静かな教会にドタバタという足音が鳴り響き、青年の一つに結んだ髪が馬の尻尾のようになびく。

「藤本さん！」

青年は勢いよく、藤本の部屋の扉を開けた。藤本は、入ってきた人物に目を見開いて驚く。

「三神くん？」

それは、常にノックをしてから入る情報屋の三神だ。いつも飄々（ひょうひょう）としている彼にしては珍しく、興奮している。

「どうしたんだね？」と、藤本は戸惑って尋ねると、三神は力強い足取りで藤本のデスクまで向かってきた。いつもならば、我が物顔で早々とソファに座るのに。

「尻尾をだしましたよ！」

三神は、藤本のデスクに両手をばん、と置くとギラギラと目を輝かせてそう言った。藤本は一瞬、あっけにとられた。尻尾？

「何の話だね？」

「あなたがずっと探していた……黒幕です」

藤本は、ハッとした。黒幕。それは、カインノイエが目指す最終

目標。トーキョーの人身売買を牛耳っているといわれる人物。藤本は思わず立ちあがった。この歳でここまで興奮しては、心臓発作になりかねない。それくらい、心臓が高鳴っていた。

「誰だ、誰なんだね！？」

「落ち着いてください。といっても、僕も興奮していますが」

三神は右手を藤本に掲げて、不敵に笑った。藤本は、ごくりと唾をのみ、深呼吸をしてイスにまた腰をおろした。

「話してくれ」

「少し、長くなりますけど、いきますよ」

三神は、ひとつ深呼吸をすると、デスクの前を短く右往左往しながら語りだした。

「藤本さんからの依頼をうけて、僕は神崎の事件を調べたんです。神崎昭三、舞夫婦の殺害事件ですね」

藤本は、デスクの上で手を組みながらうなずく。相変わらず、心臓の鼓動が早い。黒幕さえ分かれば、人身売買を止める方法が分かるかもしれない。これは希望だ。どこのどいつかは分からないが、三神に頼めばその居場所もすぐあばける。それが効果的ならば、藤本は自らの手をその人物の血で染めても構わない。そう覚悟していた。それで人身売買の終焉が目に見えるものになるなら。

「そしたら、奇妙なことが分かったんです」

「奇妙？」

「ええ。心中自殺、になっているんですよ」

藤本は顔をしかめた。どういうことだ？　自殺？　和幸は殺された、と言っていたはずだ。

「すまない。わたしは和幸の報告だけで、しっかり調べたわけではなかった」

間違った情報で三神に仕事を依頼したのなら、こちらのミスだ。藤本は、和幸が間違えるとは思えないが、と思いながらもとりあえず謝罪した。すると、三神はあわてた様子で右往左往していた足を止め、藤本に両手を出した。

「いえいえ。藤本さんは間違っていません。昨日まで、殺害事件だったんですから」

「なに？」

「だから、奇妙だ、と言ったんです。情報源（ソース）によると、今朝になって、急に心中自殺に変えられたようなんです」

情報源（ソース）とは、三神がもつ巨大な人間のネットワークだ。三神にとって、インターネットよりも正確で信頼できる情報のネットワーク。三神は、各方面に多くの情報源をもっている。いわば、スパイ、といえる彼の仲間だ。彼らとはどういう経緯で、どういう関係で知り合い、それが誰だかは三神は死んでも誰にも話さないだろう。

「変えられた？　自殺の証拠がでてきた、ということではないのか？」

「そういうことにはなってます。書類上ではね。遺書が見つかった、と」

「それでは、何も問題ないだろう。神崎は自殺した。遺書があるなら、それでいいんじゃないのか？」

果たして、この話が黒幕と一体どういう関係があるのか。藤本には皆目見当がつかない。もしや、神崎こそ黒幕で、人身売買の黒幕だった、なんて遺書に書かれていたというのか。

しかし、三神は顔を横にふる。

「その遺書ですが……確かに、紙の上では存在しています」と、三神は人差し指を立てた。「しかし……実際には存在していない」

「！」

つまり、でっちあげだというのか。藤本の頭は混乱した。一体、誰が何のためにそんなことをする？　そして……どうやって、そんなことが出来たというのか。

「妙だったそうですよ。夕べまで殺人事件として捜査が進んでいたのに、今朝、急に自殺に変わり捜査が打ち切りになったそうです。ただ、興味深いのは……肝心のその遺書は誰も見ていない、ということ。まるで……」

三神は、真剣な顔で藤本を睨むように見つめる。

「まるで、事件を誰かにもみ消されたようだ。そう僕の情報源（ソース）が言っていました。さらに、神崎夫婦の遺体の第一発見者の田中という女性も行方不明。夕べ、神崎の自宅を捜査していた警官四人は銃の暴発で死亡したそうです」

藤本はハッとする。自宅を捜査していた四人の警官。それは確か、和幸が殺したのでは、とカヤが心配していた件ではないだろうか。そうか、銃の暴発だったのか。藤本はそう納得しようと思ったが……その一方で、どこか無理があるように思えて仕方がなかった。銃の暴発で四人もどうやって死ぬというのか。さらに、銃の暴発で死

亡したなら、遺体の状況を見て和幸は分かるはずだ。なのに、和幸はそのことは何も言わなかった。何かがおかしい。

「もみ消された……か」と、藤本は難しい顔でつぶやく。

「『なぜ？』なんていわないでくださいよ」

早い三神の返しに、藤本は面食らった。

「藤本さんは、僕の情報を信用してくれていますよね」

いつものへらへらとした口元はどこかへいっている。三神は真剣そのものの表情でそう尋ねた。藤本は戸惑いつつもうなずく。

「もちろんだ」

君のことは気に入らないが、君の情報は頼りにしている。そう、藤本は心の中で付け加える。

「それなら分かるはずです。神崎昭三は、トーキョーの黒幕に近い存在だった。僕は、黒幕ではないか、とさえ思っていました。そんな彼が死に、誰かが、その捜査の邪魔をした。誰かが、神崎昭三を警察が調べるのを嫌ったんです。

それも、雑な方法です。遺書を偽造することもせず、ないものをさも存在するかのように捏造し、無理やり殺人事件を葬った。よほど焦っていたんでしょう。それほど、神崎昭三を調べられるのは、その人物にとっては危ないことだった。なぜ？」

藤本は黙りこくった。三神の言いたいことが分かっていくうちに、緊張と興奮、そして憎悪が入り混じった複雑な感情が心の中を渦巻いていく。

「神崎昭三は人身売買に関わっていました。殺人事件となれば、彼自身のことも調べられてしまう。犯人を見つけるためにね。彼が調べられれば、何かしらの人身売買の証拠もでるでしょう。人身売買は、あくまで裏のビジネス。表の番人である警察に正式に　それが見つかっては、大打撃だ。警察も全員が腐っているわけではないですからね。人身売買が裏で行われている、と知って正義感をふるいたたせ、捜査を始める者もでてくるでしょう。誰かには、それは許せないことだった」

藤本はここにきて、やっと口を開く。それまで貝のようにぐっと閉じていた、かわいた唇が動く。

「それに……神崎昭三をたどって、その誰かの名前が浮上する可能性もある。神崎昭三が調べられれば、自分まで巻き添えをくう。そういうことだな」

三神は、満足そうにうなずいた。

藤本は理解した。それなら、四人の警官の件も納得できる。おそらく、銃の暴発もでたらめだろう。屋敷内で起きた事件である以上、殺された、となると屋敷に捜査がはいる。暴発なら事故。神崎の死との関連を疑われることもないし、神崎や屋敷が詳しく調べられることはないはずだ。そう考えたのだろう。もちろん、藤本には、実際に四人の身に何が起こったか知る由もない。和幸が『殺されていた』と言う以上、藤本はそれを信じるだけだ。四人の警官は何者かに殺された。そして、その事件も銃の暴発として処理された。今は、それだけ分かれば充分だ。

藤本は、大きく息を吸う。核心は目の前だ。

「つまり……」と、藤本は爆発しそうな心臓を落ち着かせながら、

かみしめるように言う。「その人物こそ、トーキョーの黒幕」

すると、三神は、まあ待って、と咳払いをした。

「それだけでは、まだ可能性の域をでません」

「なに？」

あんなに熱っぽく語っていたと言うのに、ここに来てなぜ弱気になるのだ、と藤本は呆れた。だが、三神は情報屋だ。こんな推理に近い憶測を情報として渡すわけにはいかない。ちゃんとした証拠がないものは情報とはいえない。それは、トーキョーに三神あり、といわれるほどの情報屋であるプライドだ。

「僕は、その人物を割り出しました」

いきなり言われて藤本は目を見開いた。いつももったいぶってなかなか核心をつかない三神には珍しく、潔い発言だ。だが、あまりに急だ。藤本は顔をしかめた。

「割り出した？　どうやって？」

「それは後で話します。その前に、僕は断言します」

「断言？」

「彼こそ、黒幕です」

「さっきと言っていることが違うだろう」

興奮する藤本に、三神はまた右手を出して制す。

「その男の隠し口座を見つけたんです」

「隠し口座？」

「ええ。不思議なことに、大金がその口座に流れています。それも、

どうもよからぬ人たちから……」

よからぬ人たち……それは、つまり裏で活動する人間たちのことだろう。藤本は、この青年を少しおそろしく感じた。この短時間で、隠し口座を調べ上げ、さらに金の流れまで暴き出したのだ。一体、彼の情報網はどれほど巨大なのだろうか。

「なるほど。そのよからぬ人たちだが……具体的に誰だか、調べはつくか？」

言われて情報屋は、にやりと笑む。やっといつもの三神らしい表情が戻った。藤本は、不覚にもホッとしてしまった。いつもは、あの不敵な笑みが気に食わないというのに。

「依頼していただければ、いくらでも」

つまり、金を払えば、ということだった。藤本は、鼻で笑ってうなずいた。三神も慈善事業で藤本に情報を渡しているわけではないのだ。人身売買についてはよく思っていないようだが、情報を売るのが彼の生業。生きるための情報提供だ。

「それで」と、藤本ははやる気持ちをおさえつつ尋ねる。「黒幕は誰だね？」

三神は、また真剣な表情に戻った。

「一晩で、殺人事件を自殺に変える。一般人ができるわけはありません」

それはそうだ、と藤本は眉をひそめる。

「一警察官にできることでもない。つまり、もっと上からの圧力がかっている」
「上だと？」
藤本は驚愕した。思わず、イスから立ち上がって叫んでいた。
「それじゃ、君は……黒幕が警察の中にいる、というのか？　それも、上層部に？」
三神は、申し訳なさそうな表情で力なく首を横に振る。
「もっと、上です」
「なに？」
「ある人物が、夕べからせわしなく警察の上層部に連絡をとっていたという話を聞きました。どういう会話がなされたのかは、僕でも調べられなかった。それほどの、危険な会話がなされた、と理解してください」
藤本の喉がからからに渇いている。それは単に身体的な渇きではない。真実への渇きだ。何十年も、人身売買と戦ってきた。その黒幕がやっと明らかになる。藤本の手に自然と力がはいる。
「それで、僕はその人物が怪しい、と調べ上げたんです」
「それで、誰なんだ？」
三神は一度目をつぶり、ゆっくりと目を開く。そして、低い声でその名を言った。
「国家公安委員会委員長、本間秀実（ほんまひでみ）です」

「なんだと！？」

藤本は目を見開いた。

国家公安委員会。それは、内閣府におかれる外局で、警察庁を管理する機関だ。六人で構成される委員会の中で、唯一、委員長は国務大臣。

「そんな馬鹿な……」と、胸をおさえ、藤本は倒れるようにイスに座った。「そんなわけがない」

思ってもいないことだった。藤本は、絶望感におそわれる。

「何かの間違いだ」

藤本は首を横に振り、震える声でつぶやいた。三神は、それを冷たい視線で見つめている。

「僕もそう願いたいですが……彼を調べれば調べるほど、彼が黒幕だと思えて仕方ないんです。神崎との関係もはっきり分かりました。大学の先輩後輩です」

「だめだ」

藤本の心臓が、異常なリズムをうちはじめている。藤本の額には、汗がふつふつと湧き上がる。

「だめってなんですか？」

「もう手遅れだ」

手遅れ？　三神は、眉をひそめた。せっかく、黒幕の正体が分かったというのに、なぜ手遅れなのだろうか？

「三神くん」と、藤本が喉に何かがつまったような声をだす。「この件からは手をひけ。公安委員長をこれ以上調べる必要はない」
「え？」

ついさっき、金の流れを調べろ、と依頼したはずではないか。三神は身を乗り出し、デスクに手を置いた。

「どういうことです？」
「分からないのか！？」

藤本は、息をあらくし、苦しそうな表情で三神を睨んだ。

「わたしにはもうできることはない！」
「ここまで来て何を言っているんです？　これから、でしょう」
「今までとはもう違う。相手は国の大臣だ！　国民に選ばれた人間だ」
「だからなんですか？」
「人身売買はもう国の行いだ。わたしには止められない」
「はい？」

ううっとうめき、藤本は胸をぐっとつかんだ。三神には、藤本の言っていることはさっぱり分からない。だが、それよりも藤本の異常な様子が気になった。

「大丈夫ですか、藤本さん？　水、飲みます？」
「もう何もできない」
「藤本さん？」

藤本はイスの上で体をかがめながら、搾り出すように言葉をだす。

「子供たちには言わないでくれ」
「はい？」
「子供たちには……黒幕のことは、言わないでくれ」
三神には到底理解できない。せっかく、黒幕がわかったというのに、自分に口止めをしている。大臣だから一体なんなのだ？　何が変わるというのだ？　人身売買を牛耳っているのに変わりはない。
「あの子たちが知れば、大臣を殺すだろう」
藤本は、今まで経験したことのない心臓の痛みに耐えながら、最後の力をふりしぼるように三神に伝える。
「それだけは、だめだ。そんなことをしても、もう何も変わらないのだから。
腐敗しているのは警察だと思っていた……」
「藤本さん！？」
三神は、声が小さくなっていく藤本にかけよる。額の汗がひどい。目も焦点があっていない。
「もっと上……国全てが……狂っていた……」
その言葉をのこし、藤本は意識を失い、三神に倒れこむようにイスからおちた。三神は、血相を変えて藤本を揺り動かす。
「藤本さん！？　藤本さん！？」
それから二十分後、救急車が到着し、藤本は病院へ搬送された。

トーキョーの黒幕（後書き）

＊外局とは、特殊な任務を担い、ある程度独立した機関。

実際の国家公安委員会に、事件をもみけしたり、といった力はありません（と思います）。委員会は、国の安全を守るために何がベストかを一生懸命に考えてくださっている方々です！　フィクションとはいえ、申し訳ないですが、ご了承ください。

粛清の足音

本間が校舎からでると、校門の前で黒いセダンの高級車が待ち構えていた。車の前には、二十代後半のきりっとした青年が立っている。黒いスーツに青いネクタイ。背は百八十ほど。髪は必要以上にワックスでかためられ、顔は緊張をはりつけたような表情だ。

「前田くん」と、本間は右手をあげた。前田は頭をさげ、すぐに車の後部座席のドアを開ける。礼も言わず、本間は当たり前のように開けられたドアに誘われ、後部座席に腰を下ろした。

「前田くん、隣に座りなさい」

ドアをしめようとした前田に、左側の席を指差して本間はそう言った。

「はい」と短く返事をし、前田はまた礼をしてからドアを閉じる。

「一度、自宅へ帰ってくれ」

本間にそう告げられ、運転手は「はい」と短く返事をした。ガチャっと扉が開く音がし、前田が「失礼します」とはきはきとした口調でことわり、本間の隣に腰を下ろす。

「出しなさい」

前田がシートベルトをするのを確認してから、本間は運転手にそっけなく命じた。車は、ゆっくりと動き出す。

「前田くん」と、本間は窓の外を見ながら呼んだ。
「はい」
前田は滑舌よく返事をする。
「あの高校の学園祭で、ある劇をするらしい」
「劇ですか？」
窓に本間のうすら笑いがうつっている。
「その台本をどうにか手に入れて欲しい」
「はい？」
前田は三年ほど本間の秘書をやっている。様々な無茶な要求を受けてきたが、今回は異色だ。学園祭の劇の台本？　公安委員長である本間にとって、それがどんな意味をなすというのか。
「カインの劇らしいんだよ」
その言葉に、前田の表情がかわる。太い眉をぐっとあげ、目を見開いた。
「カイン、ですか？」
「それも」と本間は前田に振り返る。「劇のカインは、悪い人に売られた女の子を助けるそうだ」
「！」
前田は息をのんだ。そんな馬鹿な、と声をあげそうになる。表で語られるカインは、裏世界で殺し屋として育てられた少年少女。そ

れだけのはずだ。今まで、カインをヒーローとして語るような声は聞いたことがない。いや、そうならないようにしてきたのは自分たちだ。カインの真実を知る者は表から排除してきた。一言でもそんな声を聞いたならば、即座に手を打ってきたのだ。そして、代わりにカインはただの悪者だ、という噂を流してきた。

それをぶち壊すような劇をするとは、怖いもの知らず以外の何者でもない。いや、それより……そういう劇をしようとする意志が問題だ。

「よくない。非常によくない」

本間は、あやしげな笑みをうかべて顔を左右にふった。

「どうなさるおつもりですか？」

「内容によっては……粛清（しゅくせい）も、あるいは必要かもしれないね。いい見せしめにもなるだろう」

前田はハッとした。粛清……それは大げさにも聞こえるが、この人物ならそれだけのことをやりかねない。三年傍にいた前田には分かる。

「しかし、高校の学園祭です。そこまでなさらなくても。まだ子供ですよ」

そう言ったときだった。本間は恐ろしい剣幕で前田を睨みつける。

「子供　だからだ！　その理由はわかっているだろう」

前田は慌てて頭を下げる。

「し、失礼しました」

だが、その声は本間の耳にははいっていない。本間の心に憎悪がみなぎっていた。

「どれだけ、カインにわたしのビジネスを邪魔されたと思っている？　あのガキども……いつか必ず、お仕置きをしなくてはならない」

「お仕置き、ですか」

前田の声は震えていた。自分も下手したら、この男に消される可能性もある。この男の恐ろしさは、誰よりも自分が知っている自信があった。

「カインは根絶やしにする。必ず、だ」

本間は決意に満ちた瞳でそうつぶやく。前田は何も言わずに、上目遣いで本間を見つめていた。今何か言っても怒りを買うだけだ。ここは黙っておくに限る。

「問題はね、前田くん」

「はい」

「なぜ、カインが売られた子供を助けていることを知っているのか……だ。

そもそも、なぜ子供が売られていることを知っている？

それは誰も知らないはずだ。そうだろう？」

前田は「はい」とうなずく。

「いや、わたしの考えすぎか。ただの高校生の劇だ。だが、偶然とはいえ、すばらしい一致だよ」と、本間はわざとらしく言う。「誰

がそんな話を考えたのか、興味があるね。才能があるよ」
「まさか、とは思いますが……」と前田は怯えながら怪しく笑む。
「カインに関わった人物、では？」

その言葉に、本間は満足げに微笑んで前田に振り返る。

「わたしもそう思っている。過去に助けられた子供か、もしくは……」と、本間はさっき会った娘を思い出す。このあたりの人身売買の管理を任せた男の養女だ。類まれなる美しさと正直で純粋な心をもっている。そして……莫大な金をもたらす娘。

「不思議だねぇ」と本間は高い声で言った。

急に声の調子が変わった本間に戸惑いつつ、前田は「は？」と相槌をうつ。

「神崎の娘がぴんぴんして学校に行っているんだよ」
「両親が殺されたのに、強い子ですね」

前田の見当違いな返答に、本間は眉をぴくりと動かした。だが、説明する気も起きず、言葉を続ける。

「夕べ、自宅に帰って警官にも会っているそうだ」

夕べ……神崎の自宅……警官。自分が銃の暴発事故にするために奔走した事件を思い浮かばせるキーワードだ。本間の言わんとしていること悟り、前田は眉間にしわを寄せた。

「言ったかな？　昭三は彼女をある男に売ろうとしていたこと」
「はい」

そういえば、そんな話を聞いたことがあった。確か、本間はその取引には全く関わっていないはずだ。神崎夫婦が勝手にどこかで見知らぬ男と妙な契約をしたとか。だが、その莫大な金に本間は興味を示していた。いつか、神崎夫婦を裏切り、あの娘を奪うのではないか、と前田は心配していたものだ。

「カインがもしそれを知れば、やはり彼女を助け出すんだろうかね」

本間は唇の端を上げて、怪しく言った。前田はしばらく考え、ひきつった笑顔を浮かべる。この男とカインについて話すときは、いろいろ気を遣う。変なことを言えば、自分が怒鳴られるのだ。

「ま、まあ、そうだと思います」

この若い秘書は、自分の意図していることが理解できていない。若造が、と本間は鼻で笑う。まあ、いい。それよりも……と、未来の娘の言葉を思い出す。

――いえ、友人の家に泊まっていました。

「友人とは……誰のことかな」

本間は、鋭い目つきで窓の外を眺めた。学校をさぼっている女子高生の姿がちらほら見える。あれがカインかもしれない。そう思うと、自然と拳に力がはいる。

「前田くん、私は神崎カヤに会って確信したよ」

「はい？」

「昭三や舞さんを殺したのは……間違いなく、カインだ」

前田はごくりと唾を飲んだ。神崎殺しの犯人はカインではないか、と本間が疑っていたのは知っていた。だが、ついさっきまでは半信半疑だったはず。それが、どうやら神崎の娘との再会で何やら確証を得たようだ。

本間は、冷静な顔を保ちつつ、その心の中に憎しみの炎をもやしていた。

「悪い友達とは付き合うな、と娘には身をもって教えなきゃいけないなぁ」

粛清。また自分は恐ろしいことにかかわるのか、と前田はごくりと唾をのんだ。それも、高校の学園祭で……

恥ずかしい過去

「傑作だよ、これ」

カヤが映画研究部の部室に戻ると、平岡のそんな嬉しそうな声と劇の練習らしからぬ笑い声が聞こえてきた。確かに、ヒロインの自分がいなきゃ通し稽古はできないだろうが、この騒ぎはなんだろうか。何やら、盛り上がっている。首をかしげながら、カヤは扉を開けた。

「うるせえ、平岡！」

はいるなり、和幸のそんな怒号が聞こえ、カヤはびくっと肩を震わせた。

「消せよ、アンリ！　今すぐ、消せ」

二十人近い参加者が、教室の端っこに集まって、何かを囲むように小さな円になっている。その円から離れたところで、和幸が一人、機嫌悪く腕を組んでいた。

「和幸くん、どうしたの？」と、カヤは歩み寄る。カヤが入ってきたことにも気づいていなかった和幸は、その声に飛び跳ねるように驚いた。

「げ！　カヤ！？」と、和幸はあからさまに嫌な顔で叫んだ。

「『げ』？」

そんな悪い反応をされるとは夢にも思っていなかった。カヤは悲

しそうに立ち止まる。自分はほんの少しの間でも和幸と離れているとつらいというのに。本間と話しているときも、和幸が恋しくて仕方がなかった。授業中もずっと和幸と会うのを楽しみにしている。なのに、それは自分だけなんだ、とがっくり肩をおとした。

すると、そんな悩みを吹き飛ばすかのような甲高い声が耳に入ってくる。

「カヤっち！　待ってたのよ」

「え？」

それはアンリだ。

「アンリ、やめろよ！」

アンリが急に人だかりの円の中から飛び出してきて、カヤに向かってきた。なにやらノート型パソコンを持っている。和幸があわてアンリを止めに入ったが、アンリはひらりとそれをかわしてカヤの横にすべるように駆け寄った。

「これ、見てみて」

「やめろ、カヤ！」

和幸もあわてて駆け寄ってくる。どうやら、あの嫌な反応はこれが原因のようだ。カヤは興味津々にパソコンをのぞく。すると、そこには何かの動画が途中で止められていた。

「……動画？」

「わあ！　カヤ、見るなって」

和幸がノート型パソコンを奪いとろうと手を伸ばす。が、時すで

に遅し。パソコンのある動画はすでに再生が始まっていた。
『何だ、お前は？』という平岡の声がして、動画には頬をはらしている平岡が映った。そして……
「和幸くん！」
次に映ったのは和幸だ。カヤは、目を輝かせて画面に見入る。常に裏方だったんじゃなかったんだ、とカヤは内心驚いていた。
「アンリ、止めろ！」と和幸は言うが、アンリは右手を突き出し、怪しく笑んだ。
「もう遅いわよ」
動画の和幸は平岡の胸倉をつかみ、ひどい棒読みでこう叫ぶ。
『俺の女に手だすんじゃねぇ！』
その瞬間、部室中の生徒が大笑い。アンリは腹をかかえて苦しそうに笑い出す。
「下手すぎだろ！」と、平岡が笑いながら叫ぶ。
「才能ないない。一気にコメディ」と、呆れた口調で言ったのはコトミだ。
和幸は、いらついた表情でため息をつく。顔は真っ赤だ。自分でもわかっている。それはみっともないほどの異常な棒読みだった。自分に演技の才能がこれっぽっちもないことは、アンリにかかわったお陰ではっきりと分かった。
ただ、カヤだけはぼうっと画面を見つめている。爆笑の渦で、一

人だけ無反応だ。音声は聞こえないから、もうアンリは停止ボタンを押したはず。動画に夢中なわけではないだろう。和幸は、苦笑いでカヤの様子を伺う。

「カヤ……別に、笑っていいんだぞ」

カヤは優しい女だ。こんな状況で、俺に気を遣ってどう反応したらいいのか混乱しているのかもしれない。和幸は、せめて笑い飛ばしてくれたほうがマシだ、と心のそこから思った。

「そうよぉ」とアンリは、カヤをひじでつっつく。「何か言ってやんなよ。この大根役者に」

「お前な、アンリ！　お前がどうしてもっていうから、参加してやったショートフィルムだろ！？」

「あんたのこの演技のせいで、真剣ラブロマンスがラブコメになっちゃったのよ？　偉そうにいえる立場？」

それを言われると何も言い返せない。確かに、自分がぶち壊しにしている。和幸は、「あ～」とイラついて頭をかいた。

「私……」と、カヤがふと口を開いた。

アンリは、「なに！？」と目を輝かせてカヤに振り返る。アンリにとって、このショートフィルムはネタだった。カヤがこれにどんな反応を示すか、一番期待していた。一方の和幸は、カヤがどんなことを言うか見当もつかず……内容によっては、一生治らない心の傷をおいそうだ、と誰よりも緊張していた。

そんな様々な期待と不安の中、カヤは相変わらずぼうっとしてつぶやく。

「私、こんなこと言われてみたい」

それは、誰も予想しなかったコメントだった。

「え」と和幸はあっけにとられ、「は」とアンリは気の抜けた声をだした。

＊　＊　＊

「なんだったの、あの動画？」

昇降口で、カヤは俺にそう聞いてきた。

練習が終わって、俺はカヤと教室を出たのだが……妙に視線を感じた。今も、誰かが後ろで見ている気がして仕方がない。さぞや、不思議なんだろう。俺とカヤが仲がいいことが。つりあわないのは俺がよくわかってるよ。放っとけ。

「あの動画はな」と、俺は下穿きをほうりなげるようにして、地面におとす。「入学したてのころに撮ったショートフィルムなんだ」

カヤも上履きを脱ぎ、下穿きに履き替えている。

「それを……なぜか平岡の奴が、一ヶ月前くらいからインターネットにのせてたんだよ」

「え！？」

カヤは驚いて目を丸くした。ああ、そうだよな。おかしいよな。人権侵害だよ。俺は何も聞いていなかった。

「あいつ、この劇を宣伝するホームページをつくってるんだけどさ、そこに『今までの作品』とかいってあの動画を置いてたんだよ」
「そうだったんだ」
実際、参加者は皆、そのホームページをチェックしていない。平岡には申し訳ないが。だから、誰もあの動画が置いてあることは気づいていなかった。今日……急に、平岡が皆にお披露目するまでは。
「平岡の奴がさ」と俺はカヤが靴をはくのを待ちながら言う。「アクセス数がすごいんだよ、なんて言ってノートパソコン開きだして」
「へぇ、すごいね、平岡くん」
カヤは純粋に嬉しそうに微笑んだ。ローファーのつま先をとんとん、と地面にたたいてから、俺の横に歩み寄る。
「じゃ、帰ろっか」と、カヤは俺を上目遣いで見て微笑んだ。その瞬間、俺の心臓が大きく揺れた。
「あ、ああ」なんていって、俺はすぐ目をそらす。
やっぱ、かわいいんだよな。平岡のホームページのアクセス数がすごいのも納得だよ。カヤは恥ずかしがるだろうけど……平岡の作ったホームページには、あらゆるところにカヤの写真がある。もちろん、隠し撮りではない。記録のために練習風景を撮った写真だ。だが、やはりカヤは目立つ。俺はネットのことはよく分からないが……おそらく、口コミだか書き込みだかで伝わっていったのだろう。美少女が載っているホームページがある、とかなんとか。それか、平岡自身がそうやってネットで宣伝した可能性もあるな。あいつはネットに詳しい。高校生なのに、プロ並みのホームページをつくってしまうくらだ。

「ねえ、和幸くん」というカヤの声がした。俺はハッと我に返る。いかん。ぼうっとしてた。
「ん？　なんだ？」
カヤはどこか恥ずかしそうにしている。どうしたんだ？
「また、和幸くんの部屋、泊まってもいい？」
え。俺は、ごくりと唾をのんだ。
「あ、ああ。そうだよな。もちろん、いいよ」
平静を装ってそういった。……つもりだ。だが、俺の演技がひどいのは自覚している。動揺しているのはバレバレだろうな。ああ、情けない。俺の部屋に泊まるのは当然だろう。カヤに今、帰る家はないし、事情を知っているのは俺だけだ。カヤは……仕方なく、うちに泊まるんだ。なに変に反応してるんだ、俺は……。
――私、こんなこと言われてみたい。
ふと、さっきの言葉が頭に響いた。一気に顔が赤らむのを感じる。このタイミングで、なに思い出してんだよ。余計、動揺するだろ。あのときは、その言葉が意外すぎて呆然としてしまったが、よくよく思い出せば……すごい可愛いんじゃないか、あれ。分かってるさ。女の子ってのは、ああいう言葉に弱いんだろ。俺に言われたい……とかじゃない。単純に、セリフがいい、て言っただけなんだよな。つまり、俺の演技は眼中にないというか。
ちらりと横に目をやる。カヤはちょうど、髪を耳にかけているところだった。そのしぐさがまた色っぽくて、俺は見とれてしまった。

「ん？　どうしたの、和幸くん？」と、俺の視線に気づいたカヤが聞いてきた。
「え？　いや、その……髪のびたな、と思って」
なんだ、その返しは……。自己嫌悪に襲われる。どんだけ、アドリブに弱いんだよ、俺は。カヤはきょとんとしてしまった。
「そう、かな」
そりゃそうだ。髪は伸びる。カヤは髪をつまんで眉をひそめた。きったほうがいいかな、とでも考えているのだろうか。悪い、カヤ……深い意味は何もなかったんだ。
それにしても……と、俺は真面目に考える。カヤに、今朝のような不自然な様子は見られない。今朝、何があったか知らないが……とりあえず、落ち着いたみたいでよかった。まあ、無理しているだけなのかもしれないけど。でも、こうしてカヤが自然体で隣にいてくれると、俺も安心する。俺は、自然と頬が緩んでいた。
そのときだった。思いもよらない奴の声が突如、俺の耳を貫いたのは。
「かっちゃーん！」
聞き覚えのある、そのよく通る高い声。俺は、声のしたほうに目をやる。
「かっちゃん？」と、カヤは首をかしげた。
校門のほうで、ギターケースを担いだ、短髪の他校の学生が手を振っている。ほりの深い顔に、高い鼻、透明感のある白い肌。学ランの似合わない、ニホン人離れした顔の少年だ。全体的に愛嬌のあ

る顔で、大きなアヒル口が特徴的だ。
相変わらず、テンション高そうだ。俺は急に疲労感がした。
「誰だろうね？」
カヤは、不思議そうに辺りを見回した。どうやら、『かっちゃん』を探しているようだ。俺はため息混じりに、カヤの肩に手を置く。
「俺が『かっちゃん』」
そういうと、カヤは目をぱちくりさせた。
「え？」
「それで」と、俺は学ランの男をあごで指す。「あれが、藤本曽良（ふじもとそら）」
「……そら？」
しばらくカヤはぽかんとして、思い出したかのようにハッとした。
「松尾芭蕉の弟子！」
どうやら、曽良のキャッチフレーズはカヤには効果的のようだ。
さて……曽良が来た。カイン一のイケメン、カイン一のいい奴、そして……カイン一、アホな奴が。

俳句と花束

この人が……曽良(そら)、くん。ハーフみたいな顔だ。俳優さんみたいにかっこいい。あひる口もすごくかわいいし。確か、この人もカインなんだよね。まるで『殺し屋』には見えない。

私と和幸くんが正門まで来ると、曽良くんはいきなり和幸くんに抱きついた。

「かっちゃーん！　久しぶり、久しぶり！」

「お前はやっぱりこうなのか！　離れろ、馬鹿！」

わあ。男同士で抱き合っているの、初めて見た。和幸くんはすごい嫌がっているけど。それもそうだよね。部活帰りのほかの学生が、すれ違いさまに好奇の目で見てるもん。曽良くんって人懐っこいのかな。それとも『かっちゃん』が大好きなだけ？

「かっちゃん、冷たくなった？」

気が済んだのか、あっさり和幸くんから離れ、曽良くんは悲しそうな声でそういった。

「お前が暑苦しいんだ。分かるか？　温度差があるんだ、ここに。温度差」

そういって、和幸くんは自分と曽良くんを交互に指した。

「温度差？」と、曽良くんは首をかしげ、「あ！」とハッとする。あわてて和幸くんのおでこに手をあてた。

「かっちゃん、熱があるの！？」
「そういう意味じゃない！」

和幸くんは声を荒げて、曽良くんの手をはたいた。なんか……すごい、個性的な人だな。和幸くんが一気に疲れてる。ふと、曽良くんは思い出したかのように、和幸くんの横にいる私に顔を向けてきた。

「神崎カヤちゃん？」と、曽良くんのアヒル口がにぱっとひろがる。
「あ、はい。初めまして。曽良……くん？」
「松尾芭蕉の弟子っす！」

皆、これを言うんだなぁ。これで何度目だろう。私は、つい苦笑してしまった。

「どうしたの、そのあざ？」

曽良くんは唐突に尋ねてくる。え、と私は左頬をおさえた。

「これは……」
「普通、藪から棒にそんなこと聞くか？」

呆れた声でそういったのは和幸くんだ。けど、曽良くんは大して気にする風もなく、「そうだなぁ」と、急に腕を組んで悩みだす。なんだろう？　今の会話で悩むことって何かあるかな？　すると、曽良くんは、ぽんと手をたたいた。

「カーヤは？」

へ？　いきなり……何の話？　頬のあざはもういいの？　かーや

ってなに？　曽良くんは茶色の目をきらきらさせて私を見ている。
えっと……どう反応すればいいんだろう？
私がきょとんとしていると、和幸くんが大きなため息をついた。
「たった二文字の名前になんでニックネームが必要なんだよ」
「え？　ニックネーム？」

かーや？　私のニックネーム？　そういえば……私、ニックネームなんて今までなかったな。

「ニックネームのほうが長くなってんじゃんかよ」と、和幸くんは曽良くんの頭を軽くはたいた。なんかこの二人、いいコンビ。

「そもそも、俺の『かっちゃん』もおかしいんだよ。名前が一文字しかはいってないだろ」

確かに。かっちゃん、て聞いて、それが和幸くんだとは思わなかったもの。

「じゃあ、ズユッキーにする？　それとも、ズッキーニがいい？
なんか似てていいよね」
「なんでお前は、素直に名前を呼べないんだ」

和幸くんはがっくりと頭を垂れた。
どうやら、この曽良くんはニックネームをつけるのが大好きみたいだ。それも……失礼だけど、センスはない、かな。
曽良くんは和幸くんに返事をする様子もなく、背負っていたギターケースを下ろした。え？　もしかして、ここでギターだすつもり？
「なにしてんだ、お前は？」と和幸くんはいぶかしげな表情で尋ね

た。
「いや、カーヤにプレゼントがあるんだ」
えっと、カーヤは私なんだよね。さっそく使われてる。このまま定着するんだろうか。でも、プレゼントってなんだろう？　ギターケースを開けてるから……もしかして、歌、とか？　私に何か演奏してくれるのかな？　でも、ここで？　気持ちは嬉しいけど、ちょっと恥ずかしいかも。
そんなことを考えていると……曽良くんは、ギターケースからあるものを取り出した。
「はい！」と言って、私にそれを渡してくる。
「え……」
思いもよらないものに私はぽかんとしてしまった。
「なんで、お前は……」と和幸くんがあきれ果てた声で言う。「ギターケースの中に、花束いれてんだよ！？」
そう、それはとてもかわいらしい、小さなブーケのような白いバラとすみれの花束だった。ギターケースには、なぜかその花束だけ入っていたようだ。え？　ギターはどこ……？
「受け取ってください」
曽良くんはそう微笑んで、私の前で片ひざをついた。そして、その花束を私に差し出す。
「……え！？」

思わず、ドキっとしてしまった。なに、このシチュエーション？
曽良くん、まるで王子様みたい。かっこいいし、すてきなんだけど……と、私はちらりと隣を見る。和幸くんも曽良くんの行動に目を丸くして口をぽかんとあけている。和幸くんの前でこんなことされても……。

「山路（やまじ）きて　何やらゆかし　すみれ草」

急に、曽良くんがそんな俳句を詠んだ。私はハッとして曽良くんに視線を戻す。

「芭蕉の俳句。ふと足を止め、道端に咲く小さなすみれの奥ゆかしさに心がひかれる。そんな句だよ」

「……え」

すてきな俳句。私はじっと花束に見とれた。そっか、その俳句からこの花を選んでくれたんだ。しっかり、名前にならって松尾芭蕉を勉強しているんだ。おもしろい人だな。私はくすっと微笑んでいた。

「そろそろ受け取ってくれないと、腕がしびれるんだけど」

曽良くんのそんな苦しそうな声が聞こえて、私はあわてて花束を受け取った。

「あ、ごめんなさい！」

って……受け取っちゃった！　心臓がドキドキしている。和幸くんの顔、見れないよ。これ、受け取ってよかったのかな。
曽良くんは満足そうに立ち上がって、私を見つめた。背、高いな。

「じゃ、行こうか」
「え？」
行くって、どこに？　すると、やっと和幸くんが反応した。
「どこに行くつもりだよ？」
気のせいかもしれないけど、なんだかイラついてるような……。
「デートだよ」と、曽良くんはけろっとして言う。
「デート！？」
私と和幸くんの声がハモった。あ……そっか。そういえば、夕べ、私は曽良くんと出かける予定だったんだ。ドタキャンしちゃったんだっけ。
「三時間、ここで待ってたんだからぁ」と、自慢げに曽良くんは高々といった。
「三時間！？」
私と和幸くんの声がまたハモった。まさか、私がでてくるのをここでずっと待ち続けていたの？　待ち合わせする、という考えはなかったんだろうか。それとも、サプライズが好きなのかな。
「なんで、そんなこと……」と、和幸くんは困惑ぎみに尋ねる。
「なんで……て、夕べ、メールくれたのはかっちゃんだろ。カーヤとのデートはまた今度にしてくれ、て」

私はドキッとした。そんなメール送ってたんだ。ああ……やっぱり、デートって思ってたんだなぁ。砺波ちゃんからそう聞いたんだもんね。当たり前かぁ。ちらりと和幸くんを見ると、不機嫌そうな表情で腰に手をあてがっていた。

「また今度、てメールしたんだ」

「次の日でもいい、てことでしょう？」

その言葉に、和幸くんはあっけにとられた。確かに、曽良くんの言うことは間違っていない。無理やりな気もするけど……。って、私は何のんびり考えてるんだ。どうしよう。デート？　今から？　断らなきゃ。でも、花束受け取っちゃったし、いまさら断るのってどうなんだろう。そもそも、砺波ちゃんは私によかれと思って曽良くんを紹介してくれたんだ。曽良くんもそのつもりでこうして来てくれた。それを今更、断るのって失礼すぎないだろうか。

「カーヤ、ほら行こうよ」

曽良くんの手が目の前に出されている。私はごくりと唾を飲む。どうしよう……。ごめんなさい、私、和幸くんが好きだから。そんなこと言える？　今更そんなことといったら、曽良くんにも砺波ちゃんにも申し訳ないよ。それに、和幸くんが隣にいるのにそんなこと言えない。

ごめんなさい、今日は気分が悪くて。ううん、それもだめ。夕べ、ドタキャンしてるのに、そんなこと言えない。どうしよう。なんて言おう？　そもそも、嘘をつくのも気がひけるし。何かいい方法はない？　何か……何か……

「三時間も待ってたんだから」

悲しそうな曽良くんの声が聞こえた。私はハッとして曽良くんを見る。

「夕べから楽しみにしてたんだよ」

「あ……」

すごく切ない表情。だめだ。断れない。

「和幸くん……」と、私は隣に振り返る。でも、とても顔は見れない。エンジ色のネクタイを見つめて、つぶやくように私は言った。

「先、帰ってて」

「……分かった」

その声は、そっくりだった。

――もういいんだ。

そう言ったあのときの声に。

俳句と花束（後書き）

芭蕉の句ですが、意味がちょっと違うかもしれません。すみません。
曽良の解釈、ということにしておいてください。

欲深い望み

曽良がカヤと去り、和幸は正門の前にたたずんでいた。カヤが選んだんだから、これでいいんだ。そう分かってはいても、何かが気に入らない。何か、落ち着かない。いらいらして仕方がない。カヤにさえイラついている自分もいる。

「くそ！」と頭をかいた。

「俺の女に手だすんじゃねぇ！」

急に、後ろからそんな棒読みのキザなセリフが聞こえてきた。

「え？」

聞き覚えのあるセリフだ。言った覚えもある。ついさっき、皆に馬鹿にされた自分のきめ台詞だ。

振り返ると、そこには金髪碧眼の美少年がいた。世間一般でイケメンといわれる曽良とはまた違う美しさをもっている。西洋の絵画にでてくる天使のようだ。だが、そのにやにやとした笑顔がその神秘さを台無しにしている。

「今こそ、それを言うときじゃないですかぁ」とリストはため息混じりに言った。

「……ずっと見てたのか？」

和幸は、歩み寄ってくるリストを睨む。

「いえいえ。『かっちゃーん、久しぶり』のとこからですよ」

「最初からじゃねぇか」
リストはくすっと微笑んだ。
「なにやってんですかぁ？」
「お前に関係ねぇだろ」
「関係大有りですけど」
リストは、和幸の隣にくると、偉そうに胸をはってみせた。
「は？」
関係大有り？　なんでだ、と和幸は眉をひそめる。
「言ったじゃないですかぁ。しっかり見張ってください、て」
リストは頭の後ろで手を組んで、不満そうにそういった。和幸はハッとする。そういえば、確かに今朝そういわれた気がする。あれは、ムシュフシュの話を聞いたときだった。カヤの安全は周りの生死にもかかわるから、これからもしっかり見張れ、とリストに言われた。だが……と、和幸は首を横にふる。
「デートについていけるわけねぇだろ」
他人のデートをつける。そんなこと、和幸の男としてのプライドが許さない。だが、リストは不敵に笑ってささやく。
「あのソラって人、死んじゃうかも」
「！」

リストは急に真剣な表情になると、小声で告げる。
「ムシュフシュは一度目を覚ました。前より現れやすくなっている。彼女の身に何かあれば……本当に、危険なんです」
和幸の脳裏に、夕べの血の海がよみがえった。曽良はカイン。曽良がついていれば、カヤは大丈夫だ。そう思っていた。だが、まさかカヤといるせいで曽良が危険だとは。
「全部知っている和幸さんに、『人形』のそばにいてほしいんだ」
「……」
リストは、懇願するような表情で和幸を見上げていた。確かに、そう言われると、説得力がある。和幸はしばらく黙って考えると、あきらめたようにため息をつく。
「分かったよ。デートを見張ればいいんだろ？」
「そうこなきゃ」
さきほどの張り詰めた表情はどこへやら。リストは、急に元気になってとびきりの笑顔を浮かべた。
「それじゃ、ケットをお貸ししますね」
「え？」
ケット。それはリストの天使（エミサリエス）だ。それを貸す？　そんなことができるのか、と和幸は首を傾げる。
「ケット、和幸さんの言うことを聞くんだよ」

リストは自分の守護天使にそう命じた。だがその姿は見当たらない。どこにもいないじゃないか、と和幸はあたりを見回す。すると……

――よろしくね、かずゆき。

そんな声が頭の中で響く。

「え！？」

和幸は頭を両手でおさえた。なんだ、これは。まるでイヤホンで高音質の音楽を聴いているような感覚だ。その様子に、リストは苦笑した。

「そのうち、慣れます。心の中でケットに話しかければ、ケットは答えます。名前を呼べば、ケットは姿を現します。難しいことは何もありません」

そういえば、ケットはリストが名前を呼ぶたびに現れていたな。和幸は呆然としながら、その様子を思い浮かべた。どうやら、本当に自分は天使を借りたようだ。

「ムシュフシュは、エンキとエンリルの使者には手を出さない。万が一、ムシュフシュが現れたときは、ケットが何とかするから安心してください」

なるほど。ムシュフシュ対策か、と和幸は納得する。

「だが……」と、和幸は頭から手を離して尋ねる。「アトラハシス探しは？　ケットが必要なんじゃないのか？」

天使同士（エミサリエス）はお互いの存在を感じることができるという。リストは、その気配を頼りにアトラハシスを探していた。自分にケットを貸してしまえば、手がかりがなくなるじゃないか、と和幸は疑問に思った。

だが、リストは首を横に振る。

「こっちが向こうの気配を感じ取れるってことは、向こうもこっちの気配を感じている、てこと。どうやら、アトラハシスはオレたちを避けてる。向こうのエミサリエスがケットの気配を察して、逃げてるんだ。見つからない原因はそれですね。

だから、ケットがいないほうが見つけられる可能性が高い。といっても、手がかりなしで歩き回るだけだから。望みはないけど」

「……なるほど」

アトラハシスが、なぜリストから逃げているのか。それは和幸には分からない。見当もつかない。そもそも……と、ずっと疑問に思っていたことを考える。アトラハシスはカヤを守る使命を持っている。なのに、『ストーカー』まがいのことをして遠くから見守っているだけ。姿も見せずに過激な方法でカヤを守っている。一体、なぜか。

「なあ、アトラハシスは何してるんだ？」

和幸は、唐突にそうつぶやいた。リストはその言葉に、いつも和幸がやるように頭をかいた。

「オレにも、実際よく分からないんです」

「カヤを守る使命、なんだろ？　本当なら、俺がやってることは……そいつがやるべきこと、なんだよな」

和幸は自分で言っていて、胸が痛んだ。誰かの代わり……それはひどく嫌なものだ。特に、クローンである彼にとっては。

「使命は、そうです」と、リストは冷静に言う。「でも……どうやら、彼は神への信仰を失った」

え、と和幸は眉をあげる。アトラハシスは、神に気に入られた人間だったはず。人に『創られた』人間である自分にはうらやましくさえ思える。そんな彼が、神を捨てた、というのか。

「だから、もう彼が何をしようとしているのか、オレには分からないんです」

「……」

リストのその表情は、せつなくて寂しそうで、それでいて憐れみに満ちている。和幸は、初めてリストのそんな顔を見た。年下とは思えない、僧侶のようなオーラがある。確かにこいつは、神の子孫なのかもしれない。和幸は、今更ながらにそう思うと、ごくりと唾を飲んだ。

「とにかく」と、リストは高い声で調子を戻す。「ケット、何かあったら伝えてね」

――うん。

和幸の頭にそんな声が響く。やはり、気味が悪い。和幸は顔をしかめた。

「伝えてって……どうやって？」

頭をおさえながら、和幸はリストに尋ねる。天使（エミサリエス）が携帯電話でももっているというのか。それより、リストが携帯電話をもっているかもあやしい。

「天使（エミサリエス）と、その主人は契りという絆で結ばれてる。だから、話さなくても会話ができます。遠くにいてもね」

「テレパシーかよ」と、和幸は半笑いで言う。もうついていけない、と呆れている。

「そんなとこ」

リストは、軽い調子でそう返事をした。

＊　＊　＊

それは、曽良とカヤをおいかけよう、と正門から走り出そうとしたときだった。

「和幸さん」というリストの声が聞こえて、俺は振り返る。

なんだ、まだ注意事項でもあるのか？　全部、話した気がするが。

「神の一族としてじゃなく、個人的に聞きたいんですが」

なんだ、真面目な顔で？　俺は黙ってリストの言葉を待つ。すると、リストはゆっくり唇を動かした。

「どうして、彼女を引き止めなかったんですか？」

「え」

まさかそんな言葉がこいつの口から出てくるとは。それも、真面目な表情で……。俺は、その質問に答える必要があるのかさえ、分からない。

「なんだよ、急に？」

「待ってたと思いますよ。『人形』は」

待ってた？　俺が引き止めるのを？　カヤが？　そんなわけあるか。だって……

「カヤが行くって言ったんだぞ」

そうだ。カヤが曽良を選んだんだ。俺にそれを引き止める権利があるかよ。……って、おい。俺、引き止めたかったのか？　夕べの覚悟はどこいったんだ？　俺は、カヤの笑顔を見れればそれでいい。そう決めたはずだろう。なのに、不満なのかよ……カヤが曽良とデートするのが。女々しい奴だな、俺は。

そんな自己嫌悪におちいっていると、リストが相変わらず真面目な表情でつぶやくように言う。

「ノーとは言えないからですよ、彼女は」

「え？」

何の話だよ？　ノーとは言えないニホン人か？　いや、カヤはニホン人じゃないしな。リストは、遠くを見つめて続ける。

「彼女に人は傷つけられない。彼女は憎しみを知らない。人を嫌えない。

自分を犠牲にしてでも他人を優先する」

リストには珍しく、すごい真面目だな。そりゃ、確かに……カヤはそういう女だよな。憎しみを知らない、ていうのは言い過ぎだと思うけど。

「とんでもないお人よし、てことか？」と、俺はかみくだいて表現してみる。

いや、待て。だから、曽良の誘いにのった、とか言うんじゃないだろうな。だから、なんだよ。なんでもかんでも『災いの人形』を理由にすればいいってもんじゃないだろ。

「そう」と、リストはせつなく微笑んだ。アトラハシスの話をしたときみたいな、大人びた表情だ。「そういう風に『創られた』んです」

『創られた』……俺はハッとした。そうか、そういえば……カヤも、『創られた』んだよな。俺みたいに。いや、俺と逆だ。俺は人に『創られた』。そして、カヤは……神に『創られた』。俺たちは、正反対だったんだ。

俺は拳を握り締めていた。

結局、神も人間も同じじゃないか。好き勝手に命を『創って』もてあそんでやがる。

「神さまも馬鹿だな」と、俺は鼻で笑った。「そんなお人好しじゃ、この世の中で生きていけない」

それは、冗談交じりの皮肉だった。いや、そのつもりだったんだ。

リストは俺をじっと見つめた。その瞬間、ドクン、と俺の心臓が大きくなった。背筋がゾッとする。絶対的な恐怖感。リストからそんなものを感じた。これは、畏怖だ。

「そんな世界だから、神の『裁き』が始まったんだ」
「……！」
リストの表情はひどく冷たく、感情のないような声だ。落胆……なぜか、俺の頭にその文字が浮かんだ。怒りでもなく、憎しみでもなく……リストは、落胆している。
「彼女は神にとって『あるべき人間』のモデルなんです」
そういったときには、リストはいつもの穏やかな表情に戻っていた。
「つまり、神さま基準の『正しい人間』？」と、戸惑いつつも、俺は相槌をうつ。
「そう。そんな彼女が生きられない世界……それは、神にとって『救う価値のない世界』」
なんだ、それは……勝手すぎないか。俺には言葉にできない憤りを感じた。根本的に何かが気に入らない。
「だから」と、リストは悲しく微笑んだ。「彼女は世界を滅ぼす権利を持っているんだ」
世界を滅ぼす権利？　権利、だと？
「……ふざけるな」
俺は、かろうじてその一言を引きだした。

「結局、神の一族としての言葉じゃねぇか」
「ほんとだ」
リストは、鼻で笑った。自分で気づいてなかったのか。どうやら、成り行きでこんな話になったみたいだな。
「冗談じゃねぇ。まだ、カヤが世界を滅ぼすとは決まってない。そうだろ」
リストはハッとした。俺は、リストを睨むように見つめる。カヤを……殺す使命をもつ少年を。
「俺はしっかり覚えてる。『テマエの実』。それさえ、カヤが食べなければ、カヤは『終焉の詩』を思い出さない。そしたら……カヤは人間のままで、お前もカヤを殺さない。そうだろ！？」
俺は一息で言い切った。リストは、冷静に俺を見つめている。
「その通りです」
リストは、視線をひとつも動かさずそう冷たく言った。
「それだけ分かれば十分だ」
俺は、拳を握り締め、踵を返す。そのまま、リストに何も言わず、俺は曽良たちのあとを追った。
そう……『テマエの実』さえ、カヤが食べなければいいんだ。簡単だ。
カヤが曽良と付き合おうがかまわない。別に、『俺の女』じゃなくても構わない。この世界に、あいつの笑顔があればいい。同じ世

界であいつが微笑んでいればいい。

なあ、神サマ。世界とカヤを守りたい。そう思うのは、欲深いことなんだろうか。それを、あんたは罪だというのか。それなら、それでいい。俺は……生まれたときから、あんたのルールから外れているんだから。

＊　＊　＊

和幸の背を見送り、リストは目をつぶった。今にも泣きそうに顔をゆがめ、唇をかむ。

「すみません、和幸さん」

震える声でそういい、ゆっくりと目を開ける。その目には、決して曲がることのない覚悟が宿っている。

「オレにも……守らなきゃいけないものがあるんだ」

それは、たとえ嘘をついてでも守らなきゃいけない。リストは、心の中でそう付け加えた。

欲深い望み（後書き）

本当は曾良なのですが、変換できないときがあるので、念のため、曽良に変えます。芭蕉の弟子は曾良です。

曽良スペシャル

「とりあえず、ドリンクバー二つね」

曽良くんは、短いスカートのウェイトレスさんにそう微笑んだ。オレンジ色のメイド服みたいなかわいい制服。でも、派手なメイクと茶髪が浮いている。ギャル……ていうんだっけ、こういうスタイル？

「コップ、あそこに置いてありますから」

そう小声で言うと、彼女はやる気がないのか、むすっとした表情で頷いて去っていった。あそこって……どこなんだろ？

私は、窓際の席で曽良くんと向かい合って座っている。周りには家族ずれのお客さんがあふれている。

「にしても驚いたなぁ。これがファミレス初体験だなんてさ」

曽良くんは、あひる口を大きく開けてそういってきた。私は、苦笑いで応じる。

そう、私たちはファミレスに来ていた。行ったことがない、と言う私に、じゃあ行こう、と曽良くんが言い出して……今に至る。店内はすごいガヤガヤとしている。子供の泣き声やお母さんのいらだった声、笑い声、皿の重なる音、ナイフがこすれる音……いろんな音があふれている。私は、こういう環境で食事をしたことはない。両親との外食だって、いつも高級フランス料理とか三ツ星ホテルのレストランとかだった。こうして見知らぬ人たちが、家族で楽しそうに食べているのをみると……ウチは、やっぱり普通とは違っていたんだな、て思い知る。

「カーヤ？」
「え」
「どうしたの？」

気づくと、曽良くんが首をかしげて私を見ていた。いけない、いけない。つい、両親のことを考えたら暗い気持ちになってしまった。曽良くんに悪い。気持ちを切り替えなきゃ。

「なんでもない。ごめんね」と、私が微笑んで謝ると、曽良くんはそれに返事をすることなく、メニューを開いた。
「パフェとか好き？　甘いもの。ケーキとかアイスもあるし」
「え……うん。アイスが、いいかな」
「おっけーおっけー」

ぱーっと目を輝かせて、曽良くんはメニューに見入る。
曽良くんって……細かいことを気にしないタイプなのかな。まったく、詮索してこない。私はなんだか調子が狂った。和幸くんだったら、「なんでもない」なんて言っても「本当か？」なんて言ってきそうなんだけど……って、私なに考えてるんだ。曽良くんに失礼だ。比べるなんて。

「あ！　ジュース、何がいい？」
「え？」
「とってくるよ」

とってくる？　頼むんじゃないの？　自分で持ってくるの？　でも、どこから？　私はきょとんとしてしまった。

「何がいい？　あ、曽良スペシャルにする？」

「そらスペシャル？」

なんだろう、それは？　ジュースの名前？

「そうしよう！」

「え、え？」

曽良くんは私の返事をまつことなく、テーブルにメニューを開いたまま、立ち上がってどこかへ行ってしまった。私はぽかんとして残される。ジュース……どこに取りにいくんだろ？　それにそらスペシャル？　そんなのがお店においてあるの？　なんだか、カクテルみたい。それとも、曽良くんがジュースに勝手につけたニックネーム？

＊　＊　＊

ドン、と置かれたジュースに、カヤは目を点にした。それは、こけのような緑色。それによく見れば、黒い液体が沈殿している。

「なに、これ？」

おそるおそる聞くカヤに、曽良は腰を下ろしながら自信満々に微笑んだ。

「曽良スペシャル」

「……飲めるの？」

曽良スペシャルが何かはもうどうでもよくなっていた。この様子だと、質問してもまともな返事が返ってきそうにないからだ。カヤはとりあえず、このあやしげなジュースが体に毒じゃないかだけで

も確認したかった。

「飲めるでしょぉ。飲めるものを混ぜたんだから」

「……そう」

混ぜた……カヤはなんとか分かった気がした。曽良スペシャル。それは、曽良が好き勝手に様々なジュースを混ぜた飲み物なのだ。

カヤには、ドリンクバーの仕組みもよく分からない。曽良が一体どうやってジュースを混ぜてきたのか不思議だった。よく店の人に怒られなかったな、と曽良をどこか尊敬の目で見つめる。そのときだった。

「かっちゃんいつ来るのかなぁ？」

曽良は、まるで恋する乙女のようなウキウキした瞳でそう、いきなり《・・・・》つぶやいた。カヤは思わずジュースをひっくり返しそうになって、あわてて両手でコップをおさえた。

「ええ！？」

かっちゃんとは、和幸のニックネームのはず。いつ来る？　来るとはどういうことだ？

すると、曽良はくすっと微笑んだ。

「さっきメール来たんだ。今、どこにいるんだ？　て」

「……え」

曽良はポケットから携帯電話を出して、ゆらゆらと左右に揺らす。なんで、そんなメールをしたんだろうか、とカヤは疑問を抱く。一応、和幸は今、自分のボディガードだ。無事を確認するのも『おつ

かい』の内なんだろうか。

「多分だけどね」と、曽良は身を乗り出し、周りに知り合いもいないのに小声で言う。「カーヤを取り返しに来ると思うんだぁ」

「！」

カヤの心臓がどくん、となった。取り返す？　どういうことだ？

それより、曽良はなぜこんなことを言うんだろうか。一応、自分をデートに誘ったはずなのに。まるで、和幸が邪魔しに来てもかまわない、といった様子だ。いや、それより……もう分かっていた。予想通りだ、という余裕さえ伺える。

「かっちゃん、怒ると恐いんだよなぁ。やだなぁ、やだなぁ。殴られたらどうしよう」

「へ？」

曽良は、大きくため息をつき、携帯をポケットにしまった。カヤはまったく理解ができない。怒る？　和幸がなぜ怒るんだろうか。

「あのぉ、曽良くん？　何の話？」

カヤが苦笑しながら尋ねると、曽良は頬杖をつき、けろっとした様子で答える。

「かっちゃん、カーヤのこと好きだよ」

「……」

うるさいはずのファミレスが一気に静まった気がした。カヤは顔色を失う。

「……え！？」

三秒ほどたっただろうか。カヤは、周りの雑音を消し去るくらいの大声を出した。

「あはは、やっぱり気づいてな～い」と、曽良は愉快に笑う。「あの顔見て、なんでわかんないかなぁ」

「か、顔？」

どの顔だ？　とカヤは顔をしかめる。すると、曽良は、おおげさなほど険しい表情をし「……分かった」と低い声で言った。それは、どことなく和幸の声に似ていなくもない。どうやら、カヤが「先、帰ってて」と言い、正門で別れたときの和幸のマネのようだ。

「え……え……」カヤは目を泳がせ、曽良の言う『顔』を思い出そうとする。顔がどんどん熱くなる。だが、思い出せない。ええと、ええと、と目をつぶり、記憶を引き出そうとするが、頭に浮かぶのはエンジ色のネクタイ。

それは当然だった。カヤは、あのとき和幸の顔から目をそらしていたのだから。

「でも！」と、カヤは混乱しながらずっと気になっていたことを口にする。「砺波ちゃんは！？」

和幸の部屋によく泊まりにくるという女性。元気で可愛らしい、同じカイン。カヤはずっと砺波が和幸の彼女なのでは、と疑っていたものだ。

「砺波……あぁ、トミーのことか」曽良は目をぱちくりさせる。「トミーとかっちゃんはただの幼馴染みたいなもんだよ。俺もだけど」

「へ」
「恋愛感情はないと思うよ」
「……」
カヤは呆然とした。本来なら、ホッとすることなのかもしれないが……今までの自分の心配は一体、何だったんだ、と思うとがっくりくる。ずっとそれで悩んでいたというのに。だが、恋愛とはそういうものか、とカヤはため息をついた。
「ねえねえ」と、曽良が屈託のない笑顔を浮かべる。「カーヤはかっちゃんのこと好きなの？」
それは、曽良の唐突な質問だった。カヤは、え、と目を丸くする。
「わ……私は……」
赤面しながら、カヤは口を動かした。砺波と和幸の間に特別な関係はない。もう言えるはずだ。いや、言わなくては。こうして曽良とデートすることになったのも、自分が本音を隠したせいだ。ここで言わなくては、曽良にも悪い。そう思い、「本当は」といいかけたときだった。
「好きじゃないなら……俺が、かっちゃんにがつん、と言ってあげるよ」
軽い調子で曽良はそう言った。
「え？」と、カヤは眉をひそめる。がつん、と何をいうというのだろうか。
「俺と『おつかい』を代われ、て」

急に、無邪気な顔が真面目な『男』の顔に変わっていた。カヤの頬から、一気に赤みがひいた。心臓のドキドキが緊張の鼓動に変わっている。カヤは、曽良の意図していることをすぐに悟った。『おつかい』……それは、自分の護衛。和幸と『おつかい』を代わる……それは、曽良がカヤのボディガードになる、ということだ。

「あのぉ、ご注文決まりましたぁ？」

相変わらずやる気のない、たらこ唇の女子高生がやってきてそう尋ねる。カヤは、そのウェイトレスに反応することもせず、ただじっと曽良を見つめていた。とても深刻な表情で。

一方の曽良は、はいはぁい、と元気良く返事をし、メニューを指差した。先ほどの真剣な顔は消え去っている。

「このパフェと……あ、カーヤはどのアイスがいいの？」

「……」

カヤは、ぎゅっと拳を握り締め、ごくりと唾をのんだ。

「できるの？」というカヤの震える声が曽良の耳にはいる。ウェイトレスは、「は？」とあからさまに不機嫌そうな顔をした。なんだよ、まだ決まっていないのかよ。言葉がなくてもそれが伝わってきそうだ。

曽良はメニューからゆっくりと顔をあげ、カヤを見つめる。

「え？」と、微笑する。聞き取れなかったのではなかった。カヤの言葉の意味はもう理解している。だが、確認が必要だ。

「『おつかい』……」

そこまで言って、唇をなめる。カヤの喉は緊張でかわききっていた。だが、曽良スペシャルをここで飲む気にはなれない。かすれた声でカヤは続ける。

「『おつかい』、和幸くんと代わってくれないかな」

ばかやろう

「なんで、ファミレスなんだよ？」

曽良からのメールに書かれてあったファミレスの前で、俺は立ちすくんだ。初デートにファミレス。それもカヤとのデートで、だ。カヤは一応、人身売買にかかわっていた男の娘。あんなでかい屋敷にも住んでいたし、根っからのお嬢様のはず。そんな彼女をファミレスに連れて行くなんて。それも、このあたりは若者のデートスポットで、周りを見渡すと、映画館やカフェ、大型ゲームセンター。そして道路をはさんだ反対側には、噴水のある広い公園まである。ファミレス以外にも、いろいろあるだろう。行くところが。

やはり、曽良はどこかおかしいな。あいつの頭のねじは二、三本、まちがったところにはめられているに違いない。それも人に『創られた』からか？　欠陥？　いや、そんなことを言ったら俺もそうなってしまうか。

「お、いたいた」

俺は、窓際の席に座っている二人の姿を見つけた。厚化粧でたらこ唇のウェイトレスと話している。注文してるのか？　ま、なにはともあれ……

「窓際とは、助かった」

外からで十分、様子が伺えるからな。

にしても、デートを監視とは。気が進まない。だが、リストの言うことはもっともだ。カヤの秘密を知る俺が、傍にいてやったほう

がいい。何かあったときに、助けてやれる。特に、ムシュフシュとかいう化け物。万が一、カヤがファミレスで転んで失神でもしてみろ。あそこにいる全員が、夕べの警官みたいになるんだ。食いちぎられ、体はもはや一つでなくなる。そう考えると、背筋がゾッとした。まあ、いざムシュフシュが現れても、俺には何もできないが。リストに借りた天使さまに何とかしてもらうしかない。俺にできるのは……ムシュフシュが現れないように注意することだけ。

はあ。そうはいうものの……こうして窓から二人を見張るってのは……ストーカーみたいだよなぁ。俺はガードレールによりかかり、離れたところでファミレスにいる二人の様子を伺う。そんな俺の視界を、べたべたとひっつきながら、何組ものカップルがさえぎって行く。もう十一月だもんな。世間は恋の季節か？

――かずゆき。

頭の中で、声がした。俺はハッとして頭に手をおく。ケットだ。えっと、どうするんだっけ？　心の中で会話ができるんだったな。頭で言葉を思い浮かべればいいのか？

なんだよ、ケット？

――中にはいらないの？

おお、答えた。便利だが気持ち悪い。悪霊にとりつかれてる気分だ。

――失礼だよ、かずゆき。

ムッとしたケットの声が聞こえた。ふくれっつらをする天使の顔が思い浮かぶ。あ、そうか。こういうのも聞かれるんだな。

悪い、悪い。ええと……質問、なんだっけ？

――レストランの中、はいらないの？

はは。馬鹿か。趣味悪すぎだろ。入るかよ。ここから見てるだけでも、罪悪感で吐きそうだよ。

――ふうん。

それだけ言って、ケットは何も言わなくなった。やれやれ、リストはいつもこんな感じなのか？　心の中で別人が話しかけてくるなんて。まるで、自分が二重人格にでもなった気分だ。不気味で仕方がない。天使に護られるってのも大変なんだな。

「あ」

ふと、二人の様子に目を戻したときだった。俺は、ある事実に気づき、ハッとした。カヤの様子が……

「カヤ？」

よく目をこらす。やはり、間違いない。カヤが、泣いている。俺は、ガードレールから体を離し、ふらりとファミレスに歩み寄っていた。二組のカップルにぶつかり、舌打ちをされたが、どうでもよかった。何かあったのなら、たとえ最低だ、と罵られようと、デートに乱入して事情を聞かないと。そんな気持ちが押し寄せていた。

曽良が泣かした？　いや、あいつは馬鹿だが悪い奴じゃない。カヤを泣かせるようなことは絶対にしないはずだ。ってことは……ふと、夕べのカヤの泣き声が頭に蘇った。シャワーの音で隠しながら、「お父さん、お母さん」と泣いていた彼女の声。そう。カヤは夕べも泣いていた。それも……俺に隠れて。

「！」

俺のファミレスに近づく足が止まる。

「……そうだ」

カヤは俺の前では普通に振舞う。今朝だって、様子は明らかに変だった。なのに、俺には何も言わない。放課後になると、すっかり普通に戻っていた。彼女は間違いなく、何か悩みを抱えている。……いや、何言ってんだよ、俺は。あいつが悩みを抱えていて当然だろ。急に両親を亡くしたんだ。普通にしてるほうがおかしいんだよ。

なのに……と、俺はカヤに目をやる。窓の向こうにいる彼女は、泣きながら曽良に何かを話している。なぜだろう、あいつがこんなにも遠く感じるのは？　窓一枚隔てているだけなのに。まるで赤の他人に見える。距離を感じる。それは、メジャーで測れるようなものじゃない。もっと……深いところにある、距離。気持ち……信頼……心？

なんだ、この気に食わない気持ちは？　ぐっと拳を握り締める。爪が手のひらに食い込んだ。

窓の向こうで、曽良が立ち上がり……カヤの隣に座った。泣いている彼女の肩に手を回し、何かを語りかけている。カヤは、それに何度も頷き……曽良は彼女を抱きしめた。

気づくと、俺の息は荒くなっていた。この気持ちはなんだ？　憎しみじゃない。怒りじゃない。悲しみじゃない。俺は……

「は……」と、俺は鼻で笑っていた。

俺は、悔しいんだ。

カヤは俺に何も打ち明けてくれない。俺はてっきり、あいつはそ

ういう性格なんだ、と思っていた。もともと、誰かに悩みを打ち明けるタイプでもなかったようだし。自分のことは抱え込んで、人のことばっかり気にして……そういう奴だから、俺は待つことしかできない。そう思っていた。なのに、なんだよ、あれは？　カヤは、曽良にはちゃんと涙をみせて話してる。曽良には、打ち明けてるんだ。

は。馬鹿だよ、俺は。今さら、なに驚いてるんだよ？　カヤが曽良の誘いにのった時点でわかってただろ。カヤは曽良を選んだ。それは、こういうことなんだよ。

――かずゆき！？

俺が踵を返し、ファミレスに背を向けたときだった。ケットの驚く声が頭に響く。

――どこにいくの？

帰るよ、と俺は短く心の中で答える。

――ええ！？　『災いの人形』を見張ってくれるんじゃなかったの？

「俺は降りる。こんなのばかげてる！」

つい、口に出していた。周りのカップルが不審そうに俺を見てきた。もう、どうでもいいさ。

――おりる、てどういうこと？　ムシュフシュはどうするの？

もしケットが姿を現していたら、あわてふためいて俺の服をひっぱっていることだろう。

「あそこの曽良に頼めよ。俺があいつに全部説明してやってもいいしな」

全部……それは、『災いの人形』のことだ。やけくそのように乱暴に歩きながら、大きな独り言を口にしていた。

――困るよぉ。本当なら、普通の人は知ってはいけないことなんだからぁ。

その言葉に、「じゃあ……」と、俺はいらだった声をだす。「じゃあ、そもそも俺を巻き込むなよ！」

周りのカップルが自然と俺との距離をあけている。おかげで人ごみの中、スムーズに前に進めるよ。

俺は最低だ。子供みたいだな。でも、そうだろ。俺の言い分は間違ってないはずだ。俺は、神の一族じゃない。そもそも、人に『創られた』人間。神さまのごたごたに、一番関係ない存在だろ。『使命』だってないんだぞ。それなのに、なんで俺はこんなことに巻き込まれてるんだよ？　なんで、言われるまま、あいつのデートのぞかなきゃいけないんだよ。なんでこんな惨めな目にあわなきゃならない？　カヤの正体を知っているのは俺だけだから、と言われて納得していた。でも、それ自体、おかしかったんだ。世界の終焉？『災いの人形』？　なんで俺なんだよ？　なんで俺が知らなきゃいけなかったんだよ？　俺の人生は十分ややこしいのに……なんで、俺は……

「あぁ、くそ！」

俺は舌打ちして頭をかく。もう自分でも自分がなに考えてるのか

全然分からなくなってきた。頭がぐちゃぐちゃだ。

「！」

そのとき、ふと、ポケットの中から振動が伝わってきた。バイブだ。俺はおもむろに立ち止まり、携帯電話を取り出した。

「……曽良」

それは曽良からの電話だ。なんだよ？　タイミング悪すぎだろ。何の用だ？　カヤを迎えに来い？　それとも……遅くなる、ていう連絡か？　頭の中に、カヤの肩に手を置いて電話している曽良の様子が思い浮かんだ。ああ、くそ！　気づくと、俺の携帯電話は「ただいま、電話にでることができません」なんていう嘘を言い始めていた。はは。気が利いてるよ。俺は携帯電話をポケットにしまう。

――かずゆき？　電話、でないの？　ねえ、大丈夫？

ケットがおびえたような声をだしている。いや、心配しているんだろう。

「ああ、大丈夫だよ」

俺は鼻で笑った。俺は呆れていた。自分に。

ばかやろう、と俺は自分に怒鳴った。ただの嫉妬じゃねぇか。

「どうかしてるよ、俺は」と、俺は夜空を見上げて呆れて笑った。

俺の人生は十分ややこしいのに……なんで、俺は……世界を滅ぼすような女に惚れたんだ。

カヤの真意

「『おつかい』、和幸くんと代わって」

言った自分が一番ドキドキしていると思う。喉がからから。唇はかさかさ。私、今どんな顔しているんだろう。きっと、試験前の切羽詰った受験生のような顔だろう。しばらくの沈黙のあと、曽良くんは、クスッと微笑んだ。

「そうこなきゃ。かっちゃんには悪いけど……俺からうまく言うから」

曽良くんの嬉しそうな顔に、私は焦った。いけない。早く理由を話さないと。私、また誤解を生んでしまう。

「あのね、曽良くん」と身を乗り出す。「私、和幸くんのこと好きなの！」

「……へ」

い、言った。私、とうとう言った。運動もしていないのに、息があがっている。本人に言ったわけでもないのに、心臓がすごいスピードで動いている。やっと……言えた。でも……曽良くんはきょとんとして固まっちゃってる。

「あのぉ……」

隣から、機嫌の悪そうな声が聞こえてきた。

「え」

そういえば、ウェイトレスさんがずっとここにいたんだった。私は、まったくその存在を忘れていた。そして、おそらく曽良くんも……

「またあとで注文とりにきますからぁ」

敬語はつかってはいるが、その声から彼女のイライラがいたいほど伝わってきた。むすっとしたまま、背を向け、レジのほうへ向かっていく。

「ごめんなさい」と、私は小声で言った。きっと聞こえてないだろうが、とりあえず私は謝っておきたかった。きっとレジで、窓際に座る迷惑な二人の客の話をすることだろう。

「カーヤ、どういうことなの？」

曽良くんの困惑した声が聞こえてきた。私は我に返ったようにハッとして、曽良くんを見つめる。

「俺にかっちゃんと『おつかい』を代わってほしい。それってつまり、俺と一緒にいたい、てことなんじゃないの？」

違う……とは言いづらい。それは、曽良くんは楽しいしかわいいし。友達っていう意味では一緒にいたい。ただ……曽良くんに私のボディガードになってほしいのは、まったく別問題。

「てっきり、かっちゃんより俺を選んでくれたかと思ったのに」

そういって、曽良くんは私の横においてある花束に目をやった。

そうだよね、私、思わせぶりなことをしてしまったよね。曽良くんは砺波ちゃんの紹介で私と会った。花束も持ってきてくれたし……私とは付き合う前提で会っていたに違いない。なのに、いきなり『和幸くんが好き』だなんて。やっぱり、自分の気持ちは隠すものじゃない。こうして、誰かを傷つけてしまう。世の中は複雑……。

「ごめんなさい」と、私はうつむく。「私、臆病でずるくて弱くて……砺波ちゃんにちゃんと言えなかったの。好きな人がいる、て」

そもそもの始まりはそこだったんだ。砺波ちゃんに「誰か、よさそうな人はいる!?」と聞かれたときに、勇気をだして打ち明けるべきだった。そしたら、曽良くんに期待させることもなかったんだ。

そう思って自己嫌悪におちいる私に、思わぬ言葉がとびこんできた。

「いやいや」と、曽良くんは真顔で手を横に振る。「それは正解だったと思うよ」

「へ?」

思わずきょとんとしてしまった。どういうこと?

「トミーにそんなこと言ったら、必要以上にひっかきまわされて、まとまるものもまとまらなくなるからさ」

「……」

そう……なの? 私はぽかんとしてしまった。ふわふわと能天気のようにみえる曽良くんが、こんな深刻な顔で言うなんて……砺波ちゃん、よっぽどすごいんだな。彼にはトラウマでもありそうだ。

「そっか、そっか。俺もトミーから紹介された時点で、本気にする

べきじゃなかったなぁ。どうせ、無理やり押し付けられたんでしょ」

曽良くんは、ため息交じりで微笑んだ。

「押し付けられた……わけじゃ」

なくもない、かも。私は苦笑する。

――お願い、お願い、お願い。

砺波ちゃんの懇願する声が頭に蘇った。

「ま、でもさ」と、曽良くんが気分を変えるかのように明るく切り出した。「こうしてせっかく知り合えたんだしさ。どう？　ファミレス友達、てのは」

「……」

私はぼうっと曽良くんを見つめてしまった。曽良くんはにぱっとアヒル口を大きくあけて微笑んでいる。私も、つられるように頬をゆるめた。

「うん」

ファミレス友達。そんなものが巷で存在しているのかは分からないけど……その響き、私はなんとなく好き。曽良くんって……ただ無邪気なんじゃない。心も子供のように純粋なんだ。本当に、こんな彼が『殺し屋』だとは到底思えない。

「よし。じゃ、ここからは……カインとして話を聞いてもいい？」

「！」

曽良くんは身を乗り出し、テーブルに両腕を置いた。

「俺にかっちゃんの『おつかい』を代わってほしい。それは、本気なの？」

私は、ゆっくりと頷く。それは本気だ。

「それはつまり、俺がカーヤの護衛をする、てことだよ？　かっちゃんが好きなら、今の状況はすごくおいしいんじゃないの？」

おいしい……そういう言い方が適切かは分からないけど、確かに今の状況は私にとってありがたい。付き合ってもいないのに、和幸くんと一緒にいられるんだもん。でも……そういう問題じゃないんだ。私はぎゅっとテーブルの下でスカートを握り締めた。曽良くんにどう説明しようか、頭の中で整理する。まずは、何かあったか話さなきゃ。夕べの出来事。四人の警官の謎の死。そして、私の懸念。和幸くんが……彼らを殺したのではないか、という不安。

そんなことを考えているうちに、何かがじわじわとこみあげてきた。今朝からずっと我慢していた気持ちがあふれてくる。ずっと、ずっと堪えていたものが波のように襲ってくる。どうしよう。こんな公共の場で、私……

「カ、カーヤ！？」

曽良くんが驚いて足をテーブルにぶつけた。

「どうしたの？　え？　泣いてるの！？」

だめだった。抑えられなかった。どんどん、どんどん、涙がこぼ

れてくる。

「私……」と、嗚咽しながら声をしぼりだす。「私、和幸くんに……殺させてしまった」

「え！？」

＊　＊　＊

曽良は、いぶかしげに、急に泣き出したカヤを見つめる。彼女はなんと言った？　和幸に殺させた？　それはないだろ、と曽良は苦笑する。

「何の話をしてるの？　かっちゃんは人を殺さないよ」

それは、カインでは有名な話だった。危険を承知で、あえて人を殺さないカイン。その信念は見上げたものだが、他のカインにとっては理解しがたい。一体、彼の目的はなんだ？　彼は何を恐れているのだろうか。本人に聞くと、それは自分の意地だ、という。そういわれても、カインの誰も理解することはできなかった。

「私のせいなの」と、カヤは頭をかかえる。「和幸くんは私を守るために……」

死んだ四人の警官。カヤが気を失ってから和幸がそこに現れるまでに殺されたという男たち。今朝、カヤは藤本に尋ねた。和幸が殺したのか、と。藤本ははっきりと否定しなかった。和幸が殺した、とも、和幸は無実だ、とも言わなかった。ただ、和幸は何も言わなかった、とだけカヤに告げた。カヤには分からなかった。状況から考えれば、和幸しか考えられない。だが、なぜ和幸はそれを言わない？　殺し屋、と呼ばれるカインに属していて隠す必要があるのだ

ろうか。特に、藤本に言わないのはおかしい。考えられることといえば……

「和幸くんは、きっと苦しんでる」

あふれる涙を止める努力すら忘れて、カヤは震える声で強く言った。

「自分でも受け入れられてないんだと思うの。人を殺したことにすごく戸惑って、一人でそれと戦ってる」

曽良は、まだ状況を理解できずにいた。ただ、カヤの尋常ではない様子に、和幸が人を殺した可能性を真面目に考えるべきだろう、と冷静に判断していた。

「このまま、『おつかい』を続けていたら……私に関わり続けたら、また和幸くんは誰かを殺してしまう。そう思えてならない。それが……こわいの」

カヤは鬼気迫る勢いでそこまで言い切ると、顔を手で覆った。

「いつか、和幸くんが……別人になっちゃうんじゃないか、て不安なの。

それなら、そうなるくらいなら……もう、私を守らないでほしい」

周りの客も、カヤの様子に気づいてじろじろ見ていた。たらこ唇のウェイトレスも、興味深くこちらに視線を送っている。曽良は、大丈夫ですよ、とにこやかに微笑みまわりに手をふってみせた。

「ねえ、カーヤ」と、曽良は腰をあげ、カヤの隣に席をうつす。

「落ち着いて。深呼吸して」

カヤの肩に手をまわすと、顔をのぞきこむ。「ね」とアヒル口に微笑を浮かべ、深呼吸してみせた。カヤは何度か頷き、曽良と同じように深呼吸する。確かに、呼吸を整えただけで、ずいぶん楽になった気がした。

「ファミレス友達、呼ぶ？」

曽良は優しくカヤに微笑みかける。カヤは、涙を目にためたまま、クスッと笑った。

「よしよし」曽良はカヤをぎゅっと抱きしめると、「ファミレス友達にギアチェンジだ」なんておどけて言った。そして、カヤの頭を優しくぽんぽんとたたく。

「大丈夫、話はちゃんと聞いてあげるから。あせらないでいいんだ」

カヤは曽良の胸の中で、また静かに涙を流す。打ち明けた相手が曽良でよかった、とカヤは心の底から思った。和幸が、曽良はいい奴だ、と言った意味がよく分かった気がした。

迎えに来た少年

曽良くんは、真剣に私の話を最後まで聞いてくれた。私が男に殴られ気絶し……和幸くんが助け出してくれたこと。その短い間に四人もの男たちが何者かに殺されたこと。そして、和幸くん以外に、その犯人が考えられないこと。

「なるほどねぇ」と隣で曽良くんは頬杖をついた。「確かに、かっちゃんが殺したとしか考えられないね」

私は、ふうっとため息をつき、うつむいた。やっぱり、そうだよね。

「だって、そうじゃなかったら、かっちゃんがそれを調べてるはずだ。カーヤの周りにいた男たちが殺されたんだもん。カーヤのボディガードとしては、何があったのか気になるはずだ」

曽良くんは私に振り返り、真剣な表情でそう推理する。

「なのに、それをしていない。気にしている素振りすらないんだろ？　普通、カーヤに聞くはずだよ。何があったか、誰がやったか心当たりはないか、て。それをしないのは知っているからだ。誰が何をしたのか。つまり、その本人ってこと」

ぎゅっと私はまたスカートを握り締める。夕べのことを思い出した。私が和幸くんの部屋で目を覚まし、パニックになったとき。あれから、何があったの？　私がそう尋ねると、和幸くんは……

――いいから……。

まるでごまかすようにそう言って私を抱きしめた。あのときは、私を落ち着かせるために話すのを避けたのかと思った。でも、違うのかもしれない。和幸くんは全部知っていて……でも、それを私に隠したかったから……

やっぱり、和幸くんなんだ。そうなんだ。私は、和幸くんを本物の『殺し屋(カイン)』にしてしまったんだ。

「というのは」という、明るい曽良くんの声が耳に入ってきたのは、私が絶望に襲われたときだった。「カインとしての意見ね」

え？　私が曽良くんの顔を見上げると、曽良くんは明るい笑顔で私を見ていた。

「ファミレス友達としての意見は……」といって、携帯を取り出し私に差し出す。

「ケータイ？」

「本人に聞きなよ」

「！」

本人に聞く？　確かに……今まで、直接和幸くんに聞いたことはない。でも、和幸くんは藤本さんにさえ何も言っていない。たとえ聞いても何も変わらないんじゃ。はぐらかされて終わるに決まっている。そんなことを考えながらいぶかしげに曽良くんの携帯を見ていると、おもむろに曽良くんが話し出した。

「残念なことに、俺たちに超能力はないから」

「え」

超能力？　急に何の話だろう？　でも、曽良くんがあまりに真剣な表情だから、私は口をはさめなかった。

「相手が嘘をついているかどうか、一発で分かったら便利なんだろうけど……それは出来ない。だから、俺たちは信じるしかないと思うんだ。言葉、てやつを」

信じる……その言葉を頭で繰り返し、私は曽良くんを見つめる。

「かっちゃんがもし、殺してないって言ったら……カーヤはそれを信じて、もう悩むのはやめなよ」

「え」

「かっちゃんのこと好きなら……それくらい、やってのけなきゃ」

「！」

曽良くんの曇りのない瞳が私を見据えていた。真剣そのものだ。まるで、証明しろ、と挑発されているようにも感じた。

「かっちゃんのことは、俺が代わりに疑ってあげるから」

「私の……代わり？」

「だから安心して、カーヤは思う存分かっちゃんを信じなよ」

曽良くんは、ね、と歯をみせて微笑んだ。曽良くん……。私は、胸が苦しくなった。また、違う涙がでてきそうだ。

私は、ごくりと唾をのみ、曽良くんの携帯電話を見つめる。曽良くんの提案は、厳しくて……それでいて、きっと正しい。私にできることは、和幸くんの言葉を信じることだけなんだ。それができないなら、好きだなんて言っちゃだめなんだ。他の誰が疑っても、私だけは和幸くんを信じる。それくらいの覚悟がなきゃ、恋しちゃだめだ。

私は目をつぶった。深呼吸する。
覚悟……私に欠けていたことかもしれない。和幸くんに、好きだ、と言えなかったのも、拒絶されるのが恐かったから。逃げていたんだ。和幸くんとちゃんと向き合えてなかったのは私のほうだ。嘘ついていたのは私のほうだ。隠し事をしていたのは私のほうだ。だめなんだ。それじゃ、だめなんだ。言わなきゃだめだ。伝えなきゃだめだ。気持ちを秘めてばかりの私に、和幸くんが本音を話せるわけがなかったんだ。

「ありがとう、曽良くん」

私は、目をゆっくりと開き、曽良くんの携帯電話に手をのばした。
女は度胸。あたってくだけろ。私は、強くならなきゃだめだ。

＊　＊　＊

これから電話をする、というカヤのため、曽良は席をたち、トイレへ向かった。こういうところは、誰よりも気が利く人だ、とカヤは曽良の背中を見送る。
曽良の携帯電話に視線をおとし、ボタンを押す。電話帳で、は行をさがすと、そこにはたくさんの「藤本」がいた。皆、カインなのだろう。カヤはその多さに驚きつつも、和幸の名前を探す。

「あ……」

これだけ「藤本」がいたら、同姓同名もいるだろう、と思ったのだが、幸運なことに藤本和幸は一人だけだ。
カヤはもう一度、深呼吸をする。そういえば、和幸に電話をするのは初めてだ。中学生のときの初恋を思い出した。電話の発信ボタン一つ押すのに何時間もかけていたな。カヤはクスッと微笑む。で

も、もうそんな時間はいらない。カヤは迷わず、発信ボタンを押す。携帯を耳にあて、和幸の声を待つ。

コール音が一つ、二つ、三つ、四つ……それとともに、カヤの心臓の鼓動も早くなる。だが、でたのは和幸ではなかった。知らない女。いや、よく聞く声の女だ。

「ただいま、電話にでることができません」

女は無愛想にそう言ってきた。カヤは、ふうっと大きなため息をつく。女は、メッセージがあるなら残せ、と言う。では、お言葉に甘えて、とカヤは録音開始の発信音をまった。

ピー。女の予告どおり、耳に刺さるような音が鳴る。

「和幸くん」

その名前を口にして、急に緊張しだす。

「あのね……夕べのこと……」

そこまで言って、カヤは唐突に言葉をとめた。これは違う、と気づく。そっちじゃない。まず、自分が言わなきゃいけないことは、それじゃない。殺したのは和幸くん？　お願い、教えて。それを問い詰める権利は今の自分にはない。隠し事をしている自分に……自分の気持ちに正直でない人間に、誰が心のうちを打ち明ける？　まずは自分が素直にならなきゃ。自分の気持ちを、伝えるんだ。カヤはぎゅっと拳を握りしめる。

「私」と、カヤは強い口調で切り出す。「和幸くんのことが……」

そのときだった。

「カヤ」

その声に、カヤは目を見開く。

「え……」

電話をそのままにし、カヤは振り返った。やはり、空耳ではない。彼はそこに立っていた。カヤは飛び出しそうな心臓をおさえるように胸に手をあて、裏返った声で叫ぶ。

「和幸くん！？」

＊　＊　＊

どうして？　どうして、和幸くんがここにいるの？

私は、携帯電話を耳に当てたまま、和幸くんを凝視していた。帽子を深くかぶっていて、顔は見にくいけど……それでもはっきり分かる。和幸くんだ。でも、なんでここにいるの？　私服になってるから……家に一度帰ったんだろう。わざわざ、迎えに来てくれたんだろうか。私は携帯電話を耳から離す。

「今、ちょうど電話してたの」

すると、和幸くんは肩をすくめた。

「みたいだな」

「……どうして、ここにいるの？」

心臓が早い。胸が熱い。驚いたのと、緊張と……あと、嬉しい気

持ちが混ざり合っている。

「一緒に来てほしいんだ」と、和幸くんは私に手を差し出した。

ドキ、と心臓がとびはねた。あ……と、曽良くんの言葉を思い出す。

――カーヤを取り返しに来ると思うんだぁ。

そうだった。曽良くん、言ってた。和幸くんに私たちの居場所を教えた、て。ここに来るよ、て言われたじゃない。でも……本当に来てくれるなんて。

私の頬は一気に紅潮する。和幸くんの手だ。私に差し出されている。思わず泣きそうになった。嬉しい。

私は和幸くんの手をとる。

「連れて行って」あのときのようにそう言って。

どこに連れて行ってくれるのか分からないけど……そこで、言うんだ。好きだ、て伝えるんだ。電話よりずっといい。留守電なんかよりずっといい。

私は携帯電話を切った。

＊　＊　＊

和幸はマンションのエレベーターをおり、自分の部屋へと向かっていた。三階の角部屋だ。廊下のずっと奥。ポケットから鍵をだそうとひっぱりだそうとして、和幸は携帯を落としてしまった。

「げ」

渇いた音が廊下に響く。和幸はあわてて携帯を拾った。一度もおとしたことがなかったのに、とため息をつく。

「壊れてないよな」と、携帯電話を食い入るように見つめた。ふと……ディスプレイに、留守電のマークがあることに気づく。そういえば……さっき、曽良からの電話を無視したんだった。

「はあ。ガキっぽかったよな」

和幸は頭をかき、苦笑した。そして、ケット、と心の中で呼ぶ。

――なに？

高く透き通る声が頭に響く。和幸は留守電を再生し、携帯電話を耳にあてた。

「さっきは、あたって悪かったよ」

誰もいない廊下で、そんな独り言が響く。

――だいぶ、落ち着いたみたいだね。

ケットが嬉しそうにそう答えた。和幸は「メッセージは一件です」という女の声に耳を傾けながら「ああ」と頷き、部屋へと歩をすすめる。

――気にしないで。神は八つ当たりされるためにいるからね。

その言葉に、もっともだ、と和幸は苦笑する。

あそこまで頭に一気に血が上ったのは初めてだ。和幸はケットに怒鳴りつけたときの自分を思い出す。今思い返すと、あれはまるで他人のようだ。どうやら、知らないうちにプレッシャーやストレス、迷い、混乱……様々なものをためこんでいたようだ。

――世界の終焉なんて、普通の人が聞いたらショック受けるのは当然なんだ。

ふと、話しかけてもいないのに、ケットがそう言い出す。

――かずゆきが今まで、ケットたちに素直に協力してくれたことが本当はすごいことなんだよ。だから、大丈夫だよ。

声は子供そのものなのに、その言葉には重みがあった。和幸は、参ったな、と鼻で笑う。子供に諭されているようで落ち着かない。

部屋の前まで来たときになって、女の声がメッセージの日付、時間、そして相手の電話番号を伝え、やっとメッセージを再生しだした。再生まで時間がかかりすぎだ、と和幸はあきれる。あとで設定を変えようか、と思ったときだった。

「和幸くん」

おもいもよらない声が聞こえた。え、と和幸は足を止めた。それは、カヤだ。曽良のお気楽な声を待っていたのに、カヤの重苦しい言葉が飛び込んできた。和幸は面食らった。

「あのね……夕べのこと……」と、カヤは口ごもる。和幸は眉をひそめた。夕べのこと？　なんだろう、と聞き入るが、その内容が語られることはなく、「私……」と急にカヤは強い口調で切り出す。

「和幸くんのことが……」

和幸は、ごくりと唾をのんだ。俺のことが……？　まさか、と期待を高める。なんでカヤが留守電にメッセージをいれてきたのかはよく分からない。それも、曽良の携帯電話から。カヤは携帯電話を自宅に置いたままでてきてしまった。確かに、彼女は今、自分の携帯電話を持っていない。曽良の電話を借りるのは当然だ。だが、問題はそこじゃない。てっきり、二人は付き合うことになると思っていた。カヤを抱きしめる曽良を和幸はその目で見たのだ。なのに、カヤはその曽良の電話で自分にかけてきて、意味深なことを言い始めている。曽良は平気なんだろうか？　花束まで持ってきて、相当本気のはずだ。なのに、目の前で他の男に電話させている。一体、どうなってる？　と和幸は戸惑っていた。

とりあえず、続きを聞こう。ここまで耳に集中したことは、これが初めてだろう。それくらい、和幸は真剣にメッセージに耳をかたむけていた。

だが、カヤの言葉は思わぬ人物の声にさえぎられる。

「カヤ」という声が、電話の向こうでかすかに聞こえた。和幸は眉をひそめる。なんだ、この声は？　聞き覚えがある。でも、誰だ？　明らかに、曽良ではない。だが、この声を自分は知っている気がする。

そして……和幸は、想像すらしなかった名前を耳にすることになる。

「和幸くん！？」とカヤは『誰か』を呼んだ。

救世主の条件　―１―

「え……」

俺は唖然とした。和幸くん……て俺だよな。カヤは確かにそう呼んだよな。言い間違いか？　人間違いか？　そうに決まってる。何らかの間違いだ。だって、俺はここにいるんだ。

困惑する俺を無視して、メッセージは無情にもたんたんと続く。

「今、ちょうど電話してたの」

「みたいだな」

「……どうして、ここにいるの？」

待て、待て。どういうことだ？　おかしい。カヤは普通に会話を続けている。それも、相手を完全に俺だと思っている。それに……相手の声だ。どこかで聞いたことがあると思ったら、俺にそっくりじゃないか。まったく一緒ではない。俺が思っている自分の声とは少し違う。だが……自分の声ってのは、本人には違って聞こえるという。カヤにとっては同じなのかもしれない。

不気味な会話はまだ続いていた。

「一緒に来てほしいんだ」と『俺』が言った。なんだって！？

「カヤ、行くな！」

俺は思わず携帯に叫んでいた。留守電だというのに、滑稽な様子だろう。だが……嫌な予感がして仕方がない。当然だ。俺の偽者がカヤを連れ去ろうとしているんだから。

だが、これは過去に起きたこと。俺が今、何かできるわけはない。

そして、メッセージは最後の一言を再生する。それはカヤの声だった。

「連れて行って」という、俺が『迎え』に行った夜と同じセリフ。

「カヤ！」

カヤに聞こえるわけはない。でも、叫ばずにはいられなかった。そいつは、俺じゃない！

「メッセージは以上です」と、無機質な女の声がした。俺は放心状態で携帯をおろす。

「どうなってんだ、これは……」

俺はまるで貧血を起こしたかのように、めまいを起こしてふらついた。なんとか壁に手をおき体を支えると、頭を左右にふる。しっかりしろ。考えろ、考えろ。冷静になれ。考えろ、考えろ。落ち着け。考えろ、考えろ。

「考えろよっ！」

俺は気づけば、壁に拳をたたきつけていた。コンクリートの壁に俺の拳のあとがくっきり残っている。

「くそ」と、俺は頭をかかえた。

どうなってんだよ？　誰なんだ？　俺のふりしてカヤをどこかへ連れ去るなんて……何のために？　どうするつもりなんだ？　考えろ。誰がそんなことをする？　誰が得をする？

「！」

いや……と、俺はハッとして顔をあげる。そもそも、誰がそんなことをできる？

そうだ。考えるまでもない。可能性は一つしかないだろ！

「ケット！」と俺は廊下に響き渡る大声で叫んだ。

俺の隣に、光の粒子が現れ、それは少年の形へと収束していく。まばゆい光とともに、美しく輝くブロンドの髪と透き通る白い肌をもった少年があらわれた。

「かずゆき」と、少年は心配そうに俺を見てきた。俺はケットの言葉を待つことなく、声を荒げて怒鳴る。

「アトラハシスだ！」

ケットは、俺の怒号にびくっと体を揺らした。

「俺に化けて、アトラハシスの奴がカヤを連れ去った！」

そうだ。それしかない。カヤは、これっぽっちも俺の偽者に疑問をもっていなかった。それほど、俺によく似ているんだ。ただの変装とはいかない。誰かが、俺になったんだ。そして……そんなことができて、カヤを連れ去ろうとする人物。心当たりは一人だ。カヤを守る使命をもつ、アトラハシス。

「ケット！　リストに連絡しろ。アトラハシスがカヤを……」

興奮している俺とは対照的に、ケットはぽかんとしている。こい

つにとっても『災いの人形』であるカヤは最重要人物なんじゃないのかよ？　なんで、こんなにのんびりしている？

「おい！？　ケット、なにをぼうっとしてるんだよ？」

俺はしゃがみ、ケットの両肩をつかんだ。すると、ケットは首を横に振る。その表情には困惑の色がみえる。

「ぼうっとしてるんじゃないよ。不思議なんだ」

「不思議？　なにを悠長なことを！？　カヤがアトラハシスにさらわれたんだぞ！？」

「アトラハシスじゃないよ！」

え……？　なにいってんだ、こいつは？

「かずゆき！　アトラハシスのエミサリエスに、姿を変えるような力はないんだ」

ケットは、まるで俺を説得するかのようにはきはきとそう言った。だが、俺には理解できない。

「なに言ってんだよ？」

「アトラハシスは、かずゆきに変身なんてできないんだよ！」

俺は、言葉を失った。アトラハシスじゃない？　そんな馬鹿な。じゃあ……と、俺は息を荒くしながらケットを見つめる。

「他の、天使（エミサリエス）の仕業か？」

確か、天使（エミサリエス）は他にもいて、それぞれ違う力をもっている、と言っ

ていた。それなら、変化（へんげ）する（もしくは、させる）力をもつ天使（エミサリエス）もいるんじゃないだろうか。その持ち主が誰か、なんて俺には皆目見当はつかないが……そいつが現れて、俺に変身してカヤをさらったのかもしれない。姿を変えるなんて、人間業じゃないんだ。天使（エミサリエス）が絡んでいるとしか思えないだろう。まさか、俺に全身整形したわけでもあるまいし。

「確かに、姿を変える力をもつエミサリエスはいる」

ケットの冷静な声が耳にはいる。やっぱり！　と俺は目を見開いた。

「でも……」と、ケットは続ける。「その気配はしない」

「……は？」

気配……たしか、天使（エミサリエス）同士は、お互いの気配を感じ取れるとかなんとか言っていたな。それで、大体の位置は分かる、て。つまり、気配がないってことは、このあたりにその天使（エミサリエス）はいない、てことなのか？

「エミサリエスの仕業じゃないよ、かずゆき」

ケットは、申し訳なさそうにそう結論付けた。

「そんな、馬鹿な……」

俺は立ち上がり、頭をかかえる。天使（エミサリエス）が関係ないだと？　そんなわけあるかよ。じゃあ、どうやって、俺のふりをしたっていうんだ？　カヤをすんなり騙したんだぞ。ただ似ている、なんてもんじゃないはずだ。一体、天使（エミサリエス）の力なしでどうやるんだよ？

くそ。カヤがさらわれたんだ。なのに、何も分からないなんて！
意味わかんねぇよ。どうなってんだよ？　まさか、俺がもう一人現れたとでも……

「！！」

俺は、ハッとした。金縛りにあったかのように、体が硬直した。俺は……なんて勘違いをしていたんだ。

「かずゆき？　どうしたの？」

ケットの心配そうな声が聞こえてきた。俺の手が、痙攣するように震え始めた。心臓が、狂ったようにスピードをあげていく。

「俺の偽者じゃない」

俺はかろうじて声をだした。

「え？」

ケットが首をかしげている。だが、詳しく説明する気になんてなれない。俺は壁にもたれ、放心状態でつぶやく。

「俺が偽者だったんだ」

こんな大事なことを忘れていたなんて。俺はどうかしていた。

「かずゆき？　何の話をしているの？」

「俺は……」と頭をかかえる。「俺は、もう一人いる」

＊　＊　＊

「和幸くん……どこ行くの？」

私は、隣に座っている和幸くんに尋ねる。私たちは、レストランをでてすぐにタクシーに飛び乗った。というより……和幸くんに押し込まれるようにタクシーにいれられた。なんだか、少し乱暴だった。まるであせっているみたい。なにかあったのかな。しかも、曽良くんには何も言わなくていい、ていうし。和幸くん、連絡してくれてるよね。黙ってレストラン飛び出しちゃったもん。曽良くん、心配してないといいけど。

「行けば分かるから」

しばらくしてからそう短く答えて、和幸くんは窓の外を眺めはじめた。道路は渋滞だ。さっきからタクシーは動いていない。それでいらいらしているんだろうか。

「お楽しみ、てこと？」

私は遠慮がちにそう尋ねた。でも、返事はない。

なんだろう。和幸くん、雰囲気が違う。それに……と、和幸くんの手を見つめる。ひざの上においている左手が、ずっと落ち着きなく動いている。

「和幸くん、大丈夫？」

体調でも悪いんじゃないか。そう思って私は和幸くんの肩に手をのばした。すると、和幸くんはばっとこちらに振り返った。その表情はひどくこわばっていて、顔色も悪い。

「気分悪いの？　大丈夫なの？」
「分かってほしい」
「え？」

急に、和幸くんはせっぱつまった表情で言ってきた。分かってほしい？　なにを？

「いつだって、犠牲はつきものなんだ」
「ぎせい？」

やっぱり、和幸くん、変だよ。私は急に恐くなった。何か、おかしい。

「君は……『殺し屋』の女なんだろ？」
「え？」

『殺し屋』の女？　何言ってるの？　『殺し屋』ってカインのこと、だよね。まるでその言い方は、他人事みたい。自分がカインなのに？

私が戸惑っていると、和幸くんは、いきなり私の右手首をつかんできた。ひどく強く……

「痛っ！」と、私はおもわず叫んでいた。

「君にも罪がある。これは、君の贖罪（しょくざい）だと思って……」
「何の話をしているの！？」

私は、勢いよく右腕を振り、和幸くんの手をはらった。まだ、痛い。私は、左手で右手首をさすり、和幸くんを見つめる。私は、自

分が震えていることに気づいた。嫌な予感が波のようにおしよせてくる。恐い。おかしい。和幸くんは、こんな乱暴なことしない。それに、隣にいるのに落ち着かない。いつもなら、和幸くんのそばにいるとすごく安心するのに。

まさか……と、私は眉をひそめる。この人は……和幸くんじゃない？　信じられないけど、それしか考えれないもの！

「あなた、誰？」

私は、かすれた声で尋ねる。すると、「もういいか」と男はおもむろに帽子をとった。茶色く染めた短髪が現れる。私は息をのむ。やっぱり、違う。和幸くんじゃない。

男は、ふうっとため息をつき、私を見つめた。

「分かってください。できれば、こんなことしたくない」

「こんなことって……なに？」

「でも、仕方がない。正義（せいぎ）のためだ」

答えになってない。この人、何なの？　何の話をしているの？

それに、どうして、和幸くんと同じ顔……

「！」

私は言葉をなくした。まさか……と、目の前の、和幸くんと同じ姿をした男を見つめる。よく見れば、和幸くんほどがっしりとした体つきではない。痩せているし、筋肉もそれほどついてなさそうだ。でも……それでも、やっぱり和幸くんに見えてしまう。

「あなたは……」

私は確信した。この人が何者か、理解してしまった。
そして、私が言い終わる前に男は頷いた。顔に皮肉交じりの笑顔をうかべて。

「俺のクローンが、世話になってるみたいですね」
「！」

思わず、力がぬけた。背もたれに力なくよりかかる。やっぱり、この人が……和幸くんのオリジナル……。でも、なんで？　なんで私の前に現れたの？　どうして和幸くんのふりして私を連れ出したの？　それに、和幸くんは言っていた。オリジナルは和幸くんの存在も知らないはずだ、て。なのに、どうして……

「長谷川正義（はせがわ まさよし）といいます」

オリジナルは低い声でそう言い、「初めまして」と、ぎこちなく付け加えた。
私は何も反応できなかった。ただただ、和幸くんのオリジナルを見つめていた。長谷川正義、と言う名の、不気味な男を。

救世主の条件　―２―

「つまり、かずゆきのもとになった人が、『災いの人形』を連れ去ったってこと？」

ケットはきょとんとしてそう尋ねる。

「ああ。それしか考えられない」

和幸は、部屋の前で深刻な表情でうつむいていた。

自分にそっくりの人間がカヤの前に現れた。天使（エミサリエス）の仕業でないとすれば、考えれるのは、もう一人の自分……つまり、十七年前に和幸を『創る』ために盗まれたＤＮＡの持ち主。和幸のオリジナル。

「でも、なぜ？」とケットは顔をしかめた。「なんのために『災いの人形』を？」

その言葉に、和幸はいらついて壁をける。

「わかんねぇよ！」

それが分かれば、こんなところでぐだぐだ話してなどいない。和幸は心の中で悪態をついた。そもそも、カヤが騙されたというのだから、オリジナルと自分の見た目の歳は変わらないことになる。てっきり、ずっと年上だと思っていた。死んでいるだろう、とさえ思っていた。そんなことでさえ驚きなのに、なぜそいつがカヤの前に現れ、そしてカヤを連れ去った理由なんて分かるわけがない。

「とにかく、曽良に電話して……」と、和幸が携帯電話を取り出す。

そのときだった。

「あ、いた！」

そんな声が、廊下の反対側、エレベーターのほうから聞こえた。和幸が振り返ると、そこには二十代前半の青年がいた。肩までの茶髪は、無造作ヘアのつもりなのだろうか、ぼさぼさとまとまっていない。眉はきれいに整えられ、きっちりとした服装が育ちのよさを感じさせる。それぞれの形はいいものの、目は小さく、鼻は大きく、口は小さい。顔のパーツは全体的にバランスが悪い。

「藤本和幸？」

青年は、和幸に駆け寄りながらそう叫んだ。

「あんた、誰だよ？」

このタイミングでなんなんだ？　変な勧誘だったら承知しないぞ。和幸は、青年を睨みつける。

「いや、ただの通りすがりなんだけどさ」と、青年は和幸の前に立ち止まり、息を切らせてそう言った。一瞬、隣にたたずむブロンドの美少年に目を丸くする。

「通りすがり？」

和幸は、あからさまに嫌な顔をうかべる。そんなのにかまってる暇はない。ぶん殴ってでも追い返してやる。そう殺気立つ和幸に、男はとんでもないことを言い出した。

「変な男に伝言頼まれたんだよ」
「は？」
「女を預かった。返してほしかったら、第三区立小学校の体育館に来い、て」
「……んだと！！」

女。聞かなくても分かる。カヤのことだ。
気づけば、和幸は男の胸倉をつかみ、壁に勢いよく押し付けていた。青年は、ひいっと叫び、両手をあげた。
「待てよ、待てよ。俺は伝言を……」
「その男、どんな奴だ！？」

怒りで胸倉をつかむ手の力加減ができない。男の首はみるみるうちに圧迫され、男は苦しい声をもらしていた。
「かずゆき！　暴力は認めない」

たまりかねて、ケットが和幸の服をひっぱった。天使（エミサリエス）といえど、ケットは小型だ。そこまで力があるわけではない。和幸はかまわず、男の胸倉の手に力をいれる。
「言え！　その男、誰だ！？」
「大野、て言ってた」

大野？　和幸は、眉をひそめる。
「そいつの顔は？　俺と同じか！？」

すると、男は鼻で笑う。

「なんだ、それ？　どういう意味だよ？　全然ちげぇよ」

和幸は、しばらく憎悪にもえる目で男を睨みつける。男は、相手は年下だというのに、自分がひどくおびえていることに気づいた。このままだと、殺される。そんな気がした。

「本当に俺は、何も知らないよ。ただ、通りがかりに頼まれただけだ！」

「……」

どうも気に食わない男だ。だが……と、和幸は男の胸倉から手を離す。男は、大きくむせて、喉を押さえた。

この男にかまっている時間もない。とりあえず、やるべきことがわかったんだ。

「第三区立小学校……あそこは、廃校になったんじゃないのか」

和幸は、低い声で男に尋ねる。すると、男は「ああ」と苦しそうに答える。高校生とは思えないような力で圧迫されていた喉は、未だに締め付けられて声がだしづらい。

「だから、今は……変な連中のたまり場になってるって」

「変な連中？」

「ああ。麻薬さばいたり、売春婦呼んだり……無法地帯だ。事情はわかんないけど、知り合いがそこにいるなら……早く助けにいったほうがいいぜ」

和幸の心拍数があがっていく。そんな場所に、カヤが連れて行かれたというのか。おそろしくて、考えたくもない。一体、大野とい

う人間は誰だ？　てっきりそれが自分のオリジナルの名前かと思った。だが、それは違うらしい。じゃあなぜ、その大野がこの男を使って自分を呼び出す？　それも、カヤの居場所を伝えてきた。自分をおびき出しているのは明らかだ。まさか……『おつかい』がらみの復讐なのだろうか。

とにかく、ただ一つ、分かったことは……と、和幸は手を握り締める。どうやら、今回の事件は、『災いの人形』がらみではない、ということ。ただの、人間のごたごただ。それも、おそらく、自分自身にかかわること。

「リスト、呼ぶ？」と、ケットが心配そうに尋ねてきた。和幸は、首を横に振る。

「いや……どうやら、今回は俺の責任みたいだ。俺が片付けるよ」

「え？」

「大野って奴は俺に会いたいらしい」

そのために、カヤは連れ去られた。和幸は唇をかんだ。伝言のお陰で、相手の狙いは分かった。カヤは、自分をおびきだすための餌。大野という人間がなぜ自分を呼び出したいのかは分からない。それに、自分のオリジナルがなぜそいつとかかわっているのか。分からないことだらけだ。だが……と、和幸は踵を返した。とりあえず、行く場所はもう分かった。

「あ、もう一つあった」と、男が高い声で言う。和幸は足を止め、首だけで振り返った。

「銃をもってこい、て」

「は？」

銃？　男は、肩をすくめてとぼけた顔をしてみせる。

「持ってんだろ」

和幸は、それには答えなかった。やはりそうか、と何も言わずに男のもとへ歩み寄る。男は楽しんでいる。その表情を見て、ある確信を得た。この男は、ただの通りすがりじゃない。大野の手下だ。

「なんだよ？」と、男はうすら笑みを浮かべる。

和幸は、右の拳をぐっと握り締める。ケットはその動きに過敏に反応し、あわてて口を開いた。

「かずゆき！　暴力は……」

だが、その幼い声は、今度ばかりは何の効果もない。和幸の右拳は、男の左頬に勢いよくぶち当てられていた。男は、壁に頭をうちつけ、そのまま床に倒れた。ケットはあわてて男にかけよる。

「かずゆき！　なんてことを……」

どうやら、それでも手加減はしていたようだ。男は、うう、とうめいて頬を押さえている。ケットは無事を確認し、ホッと安堵した。

「カインにケンカ売るとどうなるか、分からせてやる」

和幸は、冷たい目で男を見下ろしていた。

＊　＊　＊

青年は、ペッと唾をはくように血を吐き出した。それと一緒に、奥歯が二本落ちてきた。

「くそぉ……」と、小さく悪態づいて、男は体を起こした。もう、藤本和幸もブロンドの美少年もいなくなっている。

「まぁ、これくらいあぶない奴じゃなきゃ、意味ないからな」

緊張が一気に解け、青年は大きくため息をつく。

「ああ、そうだ」と、思い出して青年はポケットから携帯電話を取りだす。黒のスライド式の携帯電話だ。すばやく暗証番号をいれ、ある人物に電話をいれる。痛む左頬をかばうように、右側の耳に電話をあてた。

「よう、俺だ」と、受話器の向こうの人物に言う。「分かってるよ。遅れて悪かった。マンションに来る途中で迷ったんだ」

男は、ジャケットのポケットから煙草の箱を取り出した。器用に口と左手だけで煙草を一本くわえる。

「ああ、計画通りだ。俺の言葉、ちゃんと信じたよ。大野が犯人だと思いこんでる」

はは、と馬鹿にしたような笑い声が廊下に響いた。

「今、そっちに向かってるよ、お前のクローン」

救世主の条件　―２―（後書き）

第三区立小学校なんてものは存在しません。フィクションです。

救世主の条件　―３―

「そうか」と、正義は真面目な表情で電話に応える。「銃は？」

隣に座るカヤは、その単語にハッとした。銃？　何の話だ。そもそも、誰と話している？　じっと正義の横顔を見つめると、自分の不注意さに気づいた。よく見れば、和幸よりも大人びた顔だちをしている。おそらく、二つか三つほど年上なのだろう。帽子をかぶっていたせいもあるが……微塵も疑わなかった。せめて、曽良をまつべきだったのだ、とカヤは後悔していた。

「安心しろ、幸太郎。うまくいく。俺のクローンだ。どうしようと俺の勝手だろう」

俺のクローン。和幸のことを話している。カヤは、ごくりと唾をのんだ。よく分からない感情が心にうずまいていた。どうしようと俺の勝手……その言葉を聴いた瞬間、感じたことのない気持ちがこみあげてきた。ぎゅっと唇をかみしめる。

「クローンのほうもすぐに来る」と、正義は携帯電話を閉じながら、カヤに告げた。

タクシーは渋滞をぬけ、住宅街を進んでいた。

「どういうこと！？」

「君を助けに来るんだ」

カヤに振り返った正義の顔は、覚悟に満ちていた。

助けに来る……カヤには、その意味が分からなかった。和幸のオリジナルと一緒にタクシーに乗っているだけで、危ない目にあって

いるわけではない。和幸が『迎え』に来るのは分かるが、『助け』に来るのはなぜか。まさか、これから……助けが必要な状況に陥るのだろうか。カヤはゾッとした。

「あなた、何をしようとしているの？」

「大野（おおの）という男がいる」と、正義はおもむろに切り出す。「悪の根源だ」

「え」

「帝国大学の医学部なんだが……」

帝国大学。カヤは、ぎょっとした。それは、今のニホンで最も優秀な大学だ。いや、とびぬけている、といったほうが適切だろう。そこの医学部となれば、世界でもトップクラスの頭脳の持ち主、となる。それが、なぜ悪の根源というのだろうか。

「そいつは、大学内で大麻を売りさばき、学生から金をまきあげている。遊びでね」

「！」

大麻？　カヤはその馴染みのない名前にぎょっとした。今まで、周りでその名前がでたことはただの一度もない。自分には一生無関係のものだろう、と思っていた。

「それが段々エスカレートして、今じゃ大学周辺の住宅街でも大麻が充満するようになった。この辺もそうだ」

カヤはじっと正義を見つめていた。その表情は真剣だ。でたらめを話しているわけではないだろう。本当に……帝国大学の人間が大麻を売っているのか。そして、それを買っている学生がいる。カヤは、ショックを受けて言葉を失った。

――警察は、もう機能していません。腐敗しているんです。

今朝の藤本の言葉がカヤの頭に蘇る。警察も崩れ……そして、国のトップの教育機関まで、汚染されているなんて。一体いつから狂いだしていたのだろう、とカヤは胸を痛める。

だが、今はそんな心配をしているときではない。その話と今のこの状況が一体、どんな関係があるのか。それこそ、今、自分が考えるべきことだ。

「おまけに、そいつは……」と正義は続ける。「今まで大麻を買った人間の名前を全部データに残している。証拠の写真とともに」

正義の顔がこわばるのにカヤは気づいた。カヤは、眉をひそめ、正義の顔色をうかがう。やはり、急に汗がふきだし、目が泳いでいる。

「あなたも……買ったのね」

カヤは気づくとそういっていた。正義は、ハッとしてカヤに振り返る。しばらくカヤを睨みつけ、正義はまた顔を前に向けた。

「俺じゃない」

押し殺したような声だった。え、とカヤは眉をあげた。

「とにかく……あいつは、それで客をゆするんだ。無理難題をつきつけてくることもある」

正義は、くやしそうな表情をうかべている。無理難題。それが一

体何を意味するのか、カヤにはよく分からなかった。このときまでは……

「今回は」と正義はカヤに視線をやる。無理難題の、最も分かりやすい例を正義は知っていた。「素人の若い女を用意しろ。そう言ってきた」

「え」

正義は、じっとカヤを見つめている。どこか、同情するような目で。

それは、ちょうどタクシーが止まったときだった。カヤは、ハッとする。自分の息があがっているのに気づいた。正義の言っている意味が、じわじわと分かっていく。正義が用意した女は……自分だ。あわててタクシーから飛び降りようと、シートベルトをはずす。だが、ドアの取っ手に手を伸ばしたところで、正義の手がカヤの腕をつかんだ。

「大丈夫だ！」

正義の声がタクシーの中で響いた。

タクシーの運転手は、これだけ騒いでいても、特に気にする様子もない。トーキョーでタクシー運転手をしていれば、こんなことは日常茶飯事だ。無関心がここで生き残る方法。運転手はたばこをすいながら、正義が金を払うのをただ待っていた。

「『大丈夫』？　麻薬を売るような男に私を渡すんでしょう？　どうして大丈夫なの？　なにされるか、想像つくでしょう！？」

カヤは、おびえた表情で正義に振り返った。

いつも、和幸が自分に投げかけてくれる「大丈夫」という言葉。

同じ声なのに、こんなにも違って聞こえるのか。カヤは、自分が正義の見かけで騙されたことに強く嫌悪した。まるで、別人じゃないか。なぜ、こんな人を和幸と勘違いしてしまったのだろう、と。

「言っただろう。俺のクローンが助けに来ると」

カヤは眉をひそめる。正義本人がカヤを陥れておいて、和幸が助けに来るから大丈夫だ、とはどういうことなのか。正義の狙いがさっぱり分からない。

「殺し屋、なんだろ。俺のクローンは」

唐突に、正義はそうつぶやいた。カヤは、答える気配さえ見せず、ただ正義を凝視していた。そういえば、さっきもこんなことを言っていたな、と思い出す。『殺し屋』の女だろ、と聞いてきた。どうやって、和幸の正体を調べ上げたのかは分からないが……どうも、『殺し屋』という事実に固執しているように感じる。

「それを知ったとき、愕然としたよ」と、カヤの腕をつかんだまま、正義は言う。「俺のクローンは犯罪者なのか、と」

犯罪者……カヤは、その言葉を聞き流すわけにはいかなかった。

「違うわ。和幸くんは、そんなんじゃない」

だが、その言葉に正義は耳を貸すこともなく、言葉をきり返す。

「それならば、と思った。俺が……責任をもって、そのクローンを正しく使ってやらなきゃいけない、と」

「え」

使う？　この男は、今、そう表現しただろうか。
カヤは、目の前の男はとんでもなく危険な人物なのではないか、と思い始めていた。正しく使う……人に対して、そんな言葉が出てくること自体、異常だ。
「正義（せいぎ）の『殺し屋』なら……俺は許してもいい、と思ったんだ」
「正義の、『殺し屋』？　許す？」
あまりにも言っている意味が理解できず、カヤには鸚鵡返しすることしかできない。
「正義をなすためには、犠牲も必要だ。悪を消し去るために、ときに『手段』に目をつぶる必要もあるだろう」
「何言っているの？」
「俺はこの国を変える男だ」
「！？」
正義は唐突にはっきりと言った。迷いも疑いも感じられない。それは、将来の夢、などという美しいものではない。この男からは、野心と絶対なる自信が感じられる。それは、高慢としか思えないものだった。カヤは息をのむ。やはり、普通ではない。
「だからこそ」と、正義は言葉を続ける。「神は俺に『殺し屋』のクローンを授けた。そう思えて仕方がない。これは、サインなんだ。俺は……自分の分身をうまく使って、世の中を浄化させなくてはならない」
正義は、どうやらカヤが聞いていようがいまいがどうでもいいようだった。自分の言葉に陶酔している。愛しい人と同じ顔をした男

の、恐ろしく異常な言葉。カヤは、自分の精神がおかしくなりそうだ、と不安になった。
震えているカヤを気にする様子もなく、正義はじっとカヤを見つめた。緊張と覚悟。それが表情に見え隠れしている。

「まずは、大野からだ」正義は低い声で言った。

「！」

それは、独裁者の横暴な宣戦布告のようだった。
カヤの目から、涙がぽろりとこぼれた。無表情で、正義をじっと見つめる。ああ、そうか。カヤは、むなしい絶望感に襲われた。

「和幸くんにその人を殺させる気なのね」

まるでささやきのような、か細く弱弱しい声だった。

「……」

正義は何も言わない。そして、動揺もしていなかった。彼は、自分の行いを完全に正当化していた。これから起こることは、正義のためには仕方のないことなのだ。いつだって、犠牲は必要だ。これは第一歩にすぎない。正義は自分にまるで暗示のようにそう言い聞かせ、未来の自分の栄光に思いをはせていた。
カヤは、自分の勘があたってしまったことを確信し、そして落胆した。涙が次から次へとこぼれてくる。

「そのために、私を……その人に渡す」

『殺し屋』の女なんだろ、という言葉が、カヤの頭に響いた。カヤはぐっと悔しそうに唇をかむ。

「あなた……和幸くんのオリジナルなんかじゃない。まったくの……別人よ」

正義は、ぴくりとも表情を変えなかった。

救世主の条件　―３―（後書き）

作中で語られる帝国大学は、実際にあった帝国大学とは一切関係ありません。旧帝国大学ともまったくの無関係です。
ご了承ください。

救世主の条件　―４―

私を使って和幸くんに人を殺させようとしている。それは、私にとって最も許せないこと。

いや。絶対にいや。そんなのいや。

タクシーから降りると、長谷川という男は私の腕を掴み、無理やりひっぱった。向かっているほうには、古い小学校のような建物がみえる。ここに……麻薬の売人がいるのだろうか。この人が私を渡そうとしている相手。その男が何をするために、女を要求したのか、私にだって分かる。なんとかしなきゃ。

「離して、長谷川さん！」

長谷川さんの手から逃れようと必死に抵抗するが、いくら細身でも男にかわりはない。その力に勝てるわけがなかった。

「大丈夫だ、て言っているだろ」

迷惑そうにそう怒鳴り、私の腕をひっぱる。脱臼するかと思った。なんて乱暴なの？

「和幸くん……」と私はひきづられるように連れて行かれながら、涙声でつぶやく。そのとき、長谷川さんが思いもよらないセリフを口にした。

「俺の女に手だすんじゃねぇ」

私は、ハッとして、彼を見つめる。なに、急に？　いえ、それより……その棒読み、そのセリフ……聞き覚えがある。

「そう言って現れるのかな」長谷川は鼻で笑ってそう付け加える。
「にしてもあれはひどい演技だね。俺はもっとうまくできる」
やはり、と思った。この人、あのショートフィルムを見たんだ。
「どうして……」とつぶやくと、長谷川さんは呆れたような笑顔で振り返る。
「どうして知っているのか？　俺に似た男が変な動画にでている、て友人に言われたんだよ。それで見てみたら……そっくりなんてもんじゃない」

今日の放課後、劇の皆で見ていた動画。和幸くんが唯一出演したショートフィルム。平岡くんが、承諾なしで勝手にインターネットにアップした映画。この人は、それを見たんだ。まさか、それが原因？　それでこの人は和幸くんの存在を知ってしまったの？　でも、似た人を見つけただけで、クローンだと思うだろうか？　私だったら……他人の空似、で終わらせてしまう。
すると、長谷川正義は自慢げに言う。
「あまりにも似てるから、気になって大金はたいて調べ上げたんだ。最終的に、三神とかいう奴にたどりついて……」
「みかみ？」
「凄腕の情報屋らしい。最初に依頼した女探偵が紹介してくれた」
じょ、情報屋？　そんなものがいるの？　どうなってるの、トーキョーは？　もう私にはついていけない。カインが存在すると知ったあの日から、トーキョーはまるで異世界のような姿を私に見せるようになった。
とりあえず……これだけは分かった。この人はお金をつかって和

幸くんを調べ上げたんだ。きっと、私のこともそうやって知ったのね。どうやら、私を和幸くんの女だと思い込んでいるようだけど……それもそうか。ここ二日間、私は和幸くんの部屋に泊まっていたんだもの。その事実だけ考えれば、付き合ってると思われても当然だ。それにしても、なんでもお金でできてしまうのね、この世界は。

「まぁ、そんな話はいいか」と言って、長谷川さんは私の腕を無理やりひっぱる。気づけば、私たちは廃校の敷地にはいっていた。体育館のほうから、誰かが騒いでいる声が聞こえて来る。

「さて……クローンはうまくやってくれるかな」

彼は体育館を見つめ、そうつぶやいた。

クローン、クローン、クローンと……和幸くんには名前があるのに。なんだか、すごい悔しい。たとえオリジナルでも、和幸くんのこと何も知らないじゃない。私は、彼をにらみつけてはっきりと言う。

「和幸くんは誰も殺したりしない！」

その言葉に、長谷川正義は顔をしかめた。

「殺し屋なのに？」

私は言葉につまる。確かに。人を殺さない殺し屋なんておかしいだろう。でも、それが和幸くんなの。そんな和幸くんを私は好きなの。だから……

「あなたの思い通りにはならない」

私は、強くはっきりとそう言った。長谷川さんの私の腕をつかむ手に、ぐっと力がはいるのを感じる。彼はきっとプライドの高い人間。私のような小娘にこんなことを言われるのは屈辱なんだろう。でも、私は恐くない。強くなるんだ。守られているだけじゃだめなんだ。

「私が、彼を守る」

「は？」

長谷川さんが、ぎょっとした。何を言っているんだ、と馬鹿にするような表情だ。かまわない。いくらでも馬鹿にすればいい。でも……

「誰も殺させたりしない」

長谷川さんは足を止め、ぽかんとして私を見つめてきた。不思議そうに私を見ている。しばらくしてから、「なんだ」と残念そうにつぶやいた。

「え？」

「君も、協力してくれるかと思ったのに」

「！？」

な……なに、それ？　私は愕然とした。協力？　何を言っているの、この人は。私が賛同するとでも思っていたの？

「分かってもらえずに残念だ」

憐れむような目でそう冷たく言って、長谷川さんはまた足を動かす。私は連行されるように、体育館へとつれていかれた。

＊　＊　＊

体育館に足を踏み入れ、カヤはその光景に言葉を失った。
いくつかのキャンプ用のライトで照らされた体育館で、二十人ほどの若者たちがあちらこちらにちらばり、好き勝手なことをしている。まるで秩序がない。酒の空き瓶やライターが足元にちらばり、煙草の灰で床は黒ずんでいる。ある青年は下着姿の女を抱えて酒をのみ、またある青年は一人でぼうっと煙草をすっている。いや……カヤは、その青年をよく観察してハッとする。煙草ではない。紙をタバコ状に巻いているだけだ。青年はそれをタバコのように吸ってぼうっとしている。それはジョイントと呼ばれるものだった。タバコ状に巻かれた紙には大麻がはいっている。
周りを見渡せば、何人もの青年が同じようなことをしていた。中には、露出の高い服を着た顔色の悪い女も四、五人見受けられる。カヤはその中の一人の行動を目でおった。赤く染めたロングヘアで、ランジェリーのようなワンピースを着た二十代後半の女だ。煙草を片手に男に何かを話しかけ、金をもらうとおもむろに服を脱ぎだした。すると、彼女の周りに男が集まり始め、「いいぞ」と騒ぎ始める。きっと、そういう仕事をしている女性なんだ。カヤは彼女の裸を見ないように目をそらした。
それにしても……不幸中の幸いか。皆、自分たちのことに夢中で、正義とカヤが入ってきたことにも気づいていないようだ。こんな人たちに囲まれたら、私にはどうもできない。カヤはごくりと唾を飲んだ。逃げようにも、正義がこうしてしっかりと腕をつかんでいては……と掴まれている右腕を見つめる。

「なあ」と、正義は、入り口近くで寝転がっている人相の悪い青年に話しかけた。
「大野はどこだ？」

ドクン、とカヤの心臓が鳴った。大野。これから自分が引き渡される相手だ。

「あぁ？」

話しかけられた男は、不機嫌そうに正義を睨みつける。焦点があっていない。男の周りには、注射器が三本ちらばっている。それを何につかったのか、カヤは想像する気にもなれなかった。

「はせがわぁ」と、いやそうに男は起き上がる。「目障りなんだよ、お前は」

「大野はどこだ？」

正義は、挑発にものらず、ただ質問を繰り返した。

「ああ？　大野に何の用だよ？」

よだれをふきながら、男は正義に振り返る。

「女を届けに来たんだよ」

おんなぁ？　と男は正義の隣にいるカヤに視線をむけてきた。カヤは、思わず顔をそむける。目を合わせたら、何をされるか分からない。そんな危機感を覚えたのだ。だが、男はカヤに一つも興味をしめさない。というより、カヤがよく見えなかった。

「ああ？」といらだった声をだし、男は目をこする。「コンタクトがねぇ！　誰だ、盗んだのは！？」

男は、かれた声でそう怒鳴る。だが、相変わらず、他の連中は自分のしていることで頭が一杯で、男の声は耳に届いていない。

「おい、大野はどこだ！？」

あせったように、正義が叫ぶ。すると、やっと男は「ええ？」と上を向き、答えをさがし始めた。

「ああ……」と思い出し、へらへらと笑い出す。「外の体育倉庫だよ」

「体育倉庫？」

「女連れてったから、お楽しみ中だなぁ」

カヤはその言葉にハッとする。お楽しみ中……それって、そういうことだよね。そう考えただけで、呼吸が乱れ、心臓があつくなる。カヤは掴まれていないほうの手で胸元をおさえた。

「体育倉庫……いい趣味してる」

正義はため息をついて、そうはきすてるように言った。

救世主の条件　―５―

「フォックス！　なにしてるのです？」

いらだった声をだしたのはバールだ。相変わらず暗い部屋で、ソファにすわって鏡を見つめる主人に叱り付けている。鏡には、正義に腕をひっぱられて歩くカヤが映し出されている。

「声がないから状況はよく分からないけど……」

この鏡は、アトラハシスの一族に伝わる贈り物（ドラ）だ。どこにいようと、フォックスが願えば『災いの人形』の姿を映し出してくれる。さらに、この鏡に宿る天使（エミサリエス）であるバールは、この鏡に映る場所に瞬時に移動することもできる。『災いの人形』を守る使命をもつアトラハシスにとって、この上なく便利な道具だ。ただ一つ問題があるとすれば、会話までは聞くことはできない、ということだろう。

「明らかに様子がおかしいでしょう？　ほら」

バールは、フォックスの持っている鏡を指差す。鏡の中で、何度もカヤは腕をふりはらおうとしている。だが、そのたびに正義に何か言われ、ひきずられるように歩いている。

「何かしなくていいのですか？」

妖艶な天使は腰に手をあてがい、大きくため息をついた。まるで宿題をしない息子に呆れる母のような態度だ。

彼女の主人は、藤本和幸という少年が『災いの人形』を連れ出してから不可解な行動をとるようになった。いや、正しくは……何も

行動をとらなくなってしまった。以前なら、『災いの人形』に少しでも近づこう輩がいるものなら、すぐにでも呪いをかけて脅していた。それが、最近はただ見ているだけ。昨日なんて、そのせいで『災いの人形』は男に殴られてしまったのだ。今までなら、考えられないこと。策を変えたのだ、と何度も言われるが、バールには納得がいかなかった。

「まさか、これを痴話げんかだとでも思っています？」

バールはふっくらとした唇をとがらせてそう言う。

フォックスもバールも、鏡の少年を和幸だと勘違いしていた。会話が聞こえない状態では、和幸とカヤが二人ででかけたようにしか見えなかったのだ。フォックスが何も行動にでないのも、それが大きな原因だった。

「この会話を何度繰り返すつもりですか？」

フォックスの落ち着いた声が静かな部屋に響く。バールは、はいはい、と不満そうに返事をした。

「彼がカヤを愛すること。それが、カヤが生き残る鍵です」

「もぉ、さっぱり意味がわかりませんわ」

「ルルである彼がいれば、マルドゥクも恐れるに足りません。ルルには、彼らは手を出せませんから」

バールはその言葉に、ぴくりと眉を動かした。人間（ルル）を守る神の一族・マルドゥク。それは、本来ならフォックスが仕えるべき一族。だが、彼はそのマルドゥクを見限った。十七年前の、あの事件から……。

「だから」と、フォックスは整った顔に、微笑を浮かべる。「困難は二人で乗り越えてもらいます」

その言葉に、バールは肩をすくめる。

「障害こそ、愛を深める。そういうことかしら」

返事をすることなく、フォックスは黙って鏡を見つめていた。バールは、やれやれ、と背すじをのばす。またしばらく、暇な日が続きそうね、と落胆しながら。

＊　＊　＊

「大野！」

体育倉庫は、正門のすぐ近くにあった。白いコンクリートで囲まれた長方形の小さな倉庫だ。

長谷川正義は体育倉庫のドアを何度もたたいた。

「長谷川さん」と私は震える声で問いかける。「お願い。考え直して」

こんな説得も無意味なんだろう。私にはそれは分かっていた。彼の目は、ずっとずっと遠くを見据えている。目の前の小さな犠牲なんていとわないんだ。いや、見えていないのかもしれない。そんな覚悟が言葉がなくても伝わってくる。

でも……どうしようもなく、怖い。なんとか、気が変わってくれないだろうか。私は藁にもすがる思いで長谷川さんに懇願する。

「長谷川さん、お願い！」

「大丈夫だよ」

長谷川さんは、私に微笑みかけた。とても、冷たい笑顔。和幸くんはこんな笑顔、私に見せたことなんてない。

「すぐに助けがくるから」

「！」

「こいつがいなくなれば、大勢の人が助かるんだ」

長谷川さんがささやくように私の耳元でそう言った。エゴの塊だ、この人。説得なんて、到底無理な話だったんだ。私は愕然とした。このまま、大野という人に渡されたら……どうなるんだろう。

そのときだった。ガガッと耳障りな重い音が響き、倉庫の青い扉がゆっくりと開きはじめた。

「なんだ、正義」

扉の隙間から、だるそうな声が聞こえてきた。扉が開くにつれて、男の顔が段々と見えてくる。

和幸くん……ごめんね。私は目をつぶって、そう心の中でつぶやいた。自分でも、一体何に謝っているのか分からない。

……。

いえ、何で謝ったの？　私はハッとして目を開ける。これじゃ、だめよ。諦めてどうするんだ。私は強くなるんだ、て決めたのに。このままじゃ、長谷川さんの思い通りになってしまう。なにが、「私が守る」だ。結局、和幸くんの助けを待つだけじゃない。なんとかしなきゃ。

顔をあげると、体育倉庫の扉の間から、上半身裸の男が姿を現していた。パーマがかった肩までの長髪。ほっそりとした顎にはそり残したひげ。女性のように細い眉。細い目。すっきりとした鼻筋。

薄い唇。ワイルドな色気のある男の人だ。この人が、大野。
私は、ごくりと唾をのんだ。

＊　＊　＊

低所得者層があつまる住宅街にそれはあった。五年前までは子供の声が響き渡っていたはずの建物は、今やまるで心霊スポットのように暗く重い雰囲気がただよっている。唯一、体育館からは夜な夜な人の声が聞こえてくる。それは幽霊ではない。いや、幽霊よりも恐ろしいだろう。狂った男たちの馬鹿騒ぎだ。
そんな体育館から、一人の男がでてきた。目をこすりながら「あー、見えない」とつぶやいて千鳥足で校庭を歩いている。彼は、いつのまにかコンタクトを失くしていた。気分も盛り上がらないし、ハッパでも吸わなきゃやってられない。だが、面倒なことに、その持ち主は今、体育倉庫で『お楽しみ中』だ。いちいち、外にでて取りに行かなくてはならない。

「よくみえねぇ」と言いながら、男は体育倉庫へと歩を進めた。目をこすりつつ、倉庫の扉をたたく。

「お～い、大野！」

そう大声で怒鳴ったときだった。カチャッとつめたい音が聞こえ、後頭部に何かがあたるのを感じる。

「え？」と、男はぼうっとしながら振り返った。

「大野は、ここか」

それは、ずいぶん若い声だ。それも、どこか聞き覚えがある。つ

い最近聞いた気がする。だが、頭がぼうっとして思い出せない。暗くて相手の顔はよく見えないが、どうやら自分は銃をつきつけられているのは分かった。男は、はは、と笑う。

「はあ？　お前、誰？　なに、これ？　偽物だろ？　あぁ、コンタクトおちて、よくわかんねぇ」

「……」

シカトかぁ、と言おうとしたとき、銃がぐっと頭に押し付けられる。

「大野はここか」

「！」

それは……恐ろしく、冷静な声だった。男は、恐怖で身震いをする。初めて、殺気というものを知った気がした。

「この、中だよ」

男は、半笑いでそう答えていた。

＊　＊　＊

「あ……」

いろっぽい女の声が、暗い体育倉庫に響く。大野は彼女に馬乗りになり、スカートの中に手をすべらせていた。

「すっげぇいい女だよ、お前は」

そう耳元でささやき、大野は首筋にキスをする。女の呼吸が乱れ始め、大野はにやりと微笑んだ。

そのときだった。ガガン、と耳をつらぬく大きな破壊音がして、何かがふっとんできた。暗かった体育倉庫に、月明かりが入ってきた。あたりにはほこりがまいあがり、思わず大野は咳き込んだ。「なんだ？」と困惑し、体を起こすとその『何か』に目をやる。それは地面に横たわっていた。大きなへこみを中心に、ぐにゃりと変形している。大野は状況がつかめなかった。一体、なぜ……頑丈な体育倉庫の扉がふっとんできたのだろうか。

ふと、何者かの影が体育倉庫に入ってくる。大野は顔をあげ、扉がなくなった入り口に目をやった。そこには、月明かりを背にして少年がたたずんでいる。

「迎えに来たぞ、カヤ」

少年は、そう言った。どこか、聞き覚えのある声で。

救世主の条件　―６―

やっぱ、天使がついているからだろうか。こんなに早く大野を見つけられるとは。ありがたいことこの上ない。
俺は銃を腰にさし、体育倉庫に足を踏み入れた。俺が蹴り飛ばした扉が転がっている。

「おいおい、どうなってんだ？」

跳び箱の陰から、男が姿を現した。暗くてはっきりと顔は見えないが……上半身が裸。ズボンもひざまで下がっている。あわてて、そのズボンをあげ、チャックをしめ始めた。なにやってたんだ、こいつは？

「大野だな！」

俺は大声で怒鳴った。パーマがかった長髪の男は、両手を挙げる。

「なんだよ、一体？　どうしたんだよ？」

カヤはどこだ……と言おうとして、足を一歩踏み出し、俺はあることに気づく。大野の足元だ。よく目をこらすと、誰かの足がある。裸足だ。跳び箱の陰に誰かいる。その足首には、下着……

「！」

悪寒がはしった。大野は……上半身裸。ズボンもひざまで下げていた。何をしていた？　その足は、誰のだ？　カヤは……どこだ！？　俺は馬鹿か！　なんですぐに感づかない？

俺は、恐ろしい予想が浮かび、震えた。まさか……遅かったのか！？

「大野ぉ……！」

俺は大野に駆け寄り、勢いよく顔を殴りつけた。大野は、声を出す暇もなくそのまま壁にふっとんだ。

――かずゆき！

ケットの叱責が聞こえる。どうでもいい。

俺は大野がどうなったか見届けることなく、跳び箱の陰に顔をのぞかせる。

「カヤ！」

「なによぉ」

「え」

そこには、確かに女がいた。それは、俺の予想通りだ。だが……

「誰？」

俺はとぼけた声で聞いていた。

女はだるそうに体を起こし、ホックのはずれたブラをつけなおしている。俺はそこで、女が下着姿だということに気づき、ハッとした。いかん。つい夢中で、直視していた。俺は慌てて目をそらす。

「あんたこそ、誰なのよぉ」

女は、頭をかかえた。暗くて顔はよくみえないが、これだけは分

かる。カヤじゃない。

「うえ、げほ！」

苦しく咳き込む声が聞こえた。俺は、ハッとして倒れている男を見やる。意外だな。鍛えてるのか？　気を失っていない。

「大野！」

俺は気をとりなおし、立ち上がって大野に歩み寄る。

「カヤはどこだ！？」

大野の髪をつかみ、ひきあげた。大野は、口から血を流して俺を睨んでくる。

「どういうつもりだ、正義ぃ」

まさよし……俺は眉をひそめた。俺を何の疑いもなく、正義、と呼んでいる。つまり……それが、俺のオリジナルの名前か。大野の髪をつかむ手に自然と力がはいった。

「俺は、藤本和幸のほうだ」

お前のご所望のな、と心の中で付け加えた。すると大野は、一瞬黙り、は、と鼻で笑う。

「何言ってんだよ、正義ぃ。お前もハッパやってんじゃねぇのかぁ」

「え？」

「てか、なんだよ、その格好。高校にもどったのかぁ？」

くつくつと大野は含み笑いをした。なんだ、こいつ？

「お前が俺を呼び出したんだろ！？」

俺のマンションにこいつの手下がわざわざ出向いてきたんだ。俺が来るのを、待ち望んでいたはずだろ。なのに、なんだ？　話がかみあわない。

すると、大野は急に、恐ろしい形相で俺を睨みつけてきた。

「ああ。女を連れて来い、てな！　で、その女はどこだ！？」

「は？」

意味が分からない。女……それは、カヤのことだろうが……俺を呼び出すために、カヤをつれてきたんじゃないのか？　なぜ、俺が名乗ってもとぼけるんだ？　それに……『女はどこだ』？

「とんでもない女、つれてきやがって」

大野は舌打ちしながら、左腕を見つめた。そこには、かすかだが血がついている。その傷は……歯型のように見えなくもない。

「早く探し出せよ！　あの女、承知しねぇ。本気で噛み付きやがって」

「……」

間違いない。こいつ、まだ俺をオリジナルと勘違いして話している。ちゃんと名乗ったよな？　はっきり言ったよな？

いや、それより……噛み付いた？　まさか、その傷……カヤが？

「いつまで、俺の髪つかんでんだ、てめぇ」

俺は、ハッとして大野の髪を離す。どうなってんだ？　俺は混乱していた。大野は血を吐き出すと、頭をかかえる。

「お前も、あとでただじゃおかねぇからな。あぁ……頭がフラつく」

「ちょっとぉ、どうなってんのよぉ？」

後ろから、下着姿の女が不満をたらす。大野は、うるせえ、と怒鳴りつけた。

「正義ぃ、いいから、女探し出せよ！」

変だ。何か、おかしいぞ。とりあえず、正義になりきるか。とにかく、今はカヤを探さなくては。

「どこに行ったんだ？」とぎこちなく尋ねる。すると、大野はあからさまに怒りをあらわにした。

「いかれてんのかよ！？　校舎に逃げただろ！
お前、探してたんじゃねぇのかよ！？」

俺はその言葉にハッとする。つまり……オリジナルは今、カヤを校舎で探してる……そういうことだな。

俺は大野に背を向け、体育倉庫から飛び出した。ぼうっと突っ立っている男をつきとばし、校舎へと走る。ふと、せまりくる建物を見て、俺は眉をひそめた。どっしりとたたずむその校舎は、どこか……俺たちの高校につくりが似ていた。

救世主の条件　―７―

「はあ……はあ……」という荒い息が暗い教室に響く。

怖い。

あの人、すごい怒っていた。「そいつ、捕まえろ」という彼の怒鳴り声が頭に響く。私は口をおさえる。気分が悪い。血の味がする。ごめんなさい。痛かったよね。人に噛み付くなんて……最低。

でも、仕方がなかった。そうやって隙をつくるしか、逃げ出す方法はなかった。私は、長谷川さんが手を離し、大野という男が私の腕をつかんだその瞬間、思いっきり噛み付いた。というより……気づいたら、噛み付いていた。必死だった。何かしなくちゃ。その思いでいっぱいだった。そして……無我夢中で走り出したのだ。

「う……」

嗚咽がもれた。涙がでてきた。

「和幸くん……和幸くん……」

教卓の中に、私の涙声が反響する。長谷川さんは、後ろから追ってきていた。きっと、この校舎を隅から隅まで探していることだろう。ここにも……いつか来る。あまりにもパニックになって、軽率な判断をしてしまった。校舎に逃げ込んだら、とじこめられたも同然なのに。でも、正門のほうには長谷川さんがいたし。

あぁ、後悔してももう遅い。どうしよう。ここにずっと隠れていたら見つかるのをまっているようなものだよね。思い切って校舎から抜け出そうか。

どくん、どくん、と心臓がはやくなる。

だめだ。怖い。足がすくむ。私はぎゅっとひざを抱える。

教室からでて、長谷川さんに見つからないように昇降口まで戻る。できないことはないだろう。でも……単純に、怖い。勇気がでない。次に見つかって、大野という人のもとに連れて行かれたら、今度こそ何をされるか分からない。ひどく怒っていたもの。そして、もし私がまた暴力をふるわれるようなことになったら……和幸くんは……

だめだ。私は首を横に振る。考えただけでもつらい。和幸くんが私のせいで、誰かを殺すなんて……。和幸くんがあの警官四人を殺したのかどうかは、まだ分からない。結局、聞けていないもの。でも、変わらない気がした。もし、殺していなかったとしても……ここで私に何かあれば、和幸くんは過ちをおかしてしまう。そういう気がしてならない。和幸くんは優しくて、いつも私のことを心配してくれる。その優しさが……引き金をひかせてしまう気がする。私が止めなきゃ。

でもどうやって……？　教卓の中に隠れている私に、これ以上何ができる？

「！！」

びくっと体が震えた。扉の開く音。キュッキュッという足音。誰かが入ってきた。すぐそこにいる。私はぐっと体を教卓の奥に押し込める。音をたてないように……。

荒い息が聞こえる。誰かは姿を見なくても分かる。この校舎にいるのは、私と……長谷川さんだけだ。少なくとも、生きている人間は。

長谷川さんは、教室の後ろへと向かっていった。足音でしか判断がつかないけど……。ガシャッという音。何か鉄の扉を開く音だ。きっと……掃除用具入れだ。私を探している。

お願い。どっかへ行って。体が震え、意思に反して涙があふれてくる。今、泣いている場合じゃないのに。嗚咽がもれないように、私は口を押さえた。

和幸くん。会いたい。恋しい。好きだ、て伝えたい。抱きしめてほしい。そう思うと、余計に涙があふれ、息が苦しくなってくる。

「うっ……」

しまった。声が……もれた。私、なんてばかなの。

ガタッと教室の後ろから机がゆれる音がした。胸がやけるように熱くなる。もう……だめだ。私は覚悟した。

足音が近づいてくる。体が震える。だめだ。腰が抜けたように、体が動かない。

バン、と教卓に手をおく音が響いた。私は、祈るように目をつぶる。

――ごめんね、和幸くん。

「カヤ！」

すぐ目の前から聞こえた。びくっと私の体が反応する。声……やっぱり同じだ。和幸くんそっくりだ。でも、もう騙されない。私はぐっとひざを抱く手に力をいれる。そうやって、和幸くんの声で私を呼んでも……

ぐっと唇をかみ、私は目を開く。

「あなたは和幸くんじゃない！」

「ひどいな」

え……。

私は、目の前でしゃがんでいる人物をじっと見つめた。涙が、ぽろりと落ちる。

「迎えに来た」

そういって、彼は私に手を差し伸べた。

「遅くなって悪かったな、カヤ」

「……」

「もう、大丈夫だ」

肩が震える。熱い何かがみぞおちからこみあげる。

もう、間違ったりしない。この優しい笑顔。包み込むようなあたたかいオーラ。居心地のいい安心感。傍にいるだけで感じる安らぎ。

「和幸くん」

私は、彼の手をとることなく、彼に飛びついた。

一番大切な……愛する人の胸に。

救世主の条件　―８―

カヤが、腕の中にいる。抱きしめることができる。それが……こんなにも嬉しいことだとは分かっていなかった。心が温まる。生きている心地がする。これが愛おしいってことなんだろうか。

「和幸くん」

俺の耳元で、カヤの声がした。やっと聞けた……そんな風にさえ感じた。ファミレスの前で傍観していたときとは違うんだ。カヤの声が聞こえる。俺に話しかけている。カヤはここにいる。あのとき感じた距離が、ここにはもうない気がした。

俺は、彼女をさらに強く抱きしめた。どこまで強く抱きしめていいんだろう。これ以上はだめなのか？　か細い彼女の体は、もろくてすぐにでも崩れそうで、俺は力の加減に悩む。それでも……できる限り、ギリギリまで強く抱きしめたかった。

「和幸くん」と、カヤはもう一度、俺の名前を呼ぶ。かみしめるように……。「私、本当に……呆れるくらい、単純な女なんだ」

いきなりそう切り出すと、カヤは腕を俺の首にまわし、俺の肩に顔をうずめる。

「さっきまで、怖くて怖くて……涙が止まらなかったの」

そうだろうな。俺は、胸が痛くなった。こんなところで一人で隠れていたんだ。俺が名前を呼んでも、目をつぶってじっとしていた。よほど、怖かったに違いない。それを思うと……俺は自分が許せない。また、俺のせいでカヤを危ない目にあわせたんだ。カヤに、た

とえ恨まれても当然なのに……。

「でもね」とカヤは顔を動かして言う。その吐息が、俺の首筋にかかった。「こうして、和幸くんがそばにいてくれるだけで……それだけでね、世界が変わるの。恐怖でいっぱいだった世界が……和幸くんが現れただけで、喜びに満ち溢れて……胸が高鳴って……心が息を吹き返したようだった」

「カヤ……」

こんなこと、言われたことなどない。俺は頬があつくなるのを感じた。

カヤは顔をあげて、ほんの少し身をひいた。首にからむ腕がゆるむ。ゆっくりと視線をあげ、俺を見つめる。数センチ先にカヤの顔がある。俺の心臓がざわめきだしていた。カヤを探していたときの鼓動とは違う。悪い気分じゃない。それとはまったく別。正反対のもの。それでいて、狂いそうなほど激しいもの。自分が恐ろしくさえ感じる。どう抑えたらいいのか分からない。俺の中で、『何か』が爆発しそうだ。俺のオリジナルはきっと、今もカヤを探しているに違いない。今すぐにでもカヤを安全なところへ連れ出さなきゃいけない。だが、それを俺の『何か』が止めていた。このままでいたい。あと数分、数秒でもいい。そして……と考えている自分がいる。

だめだ。カヤと離れたほうがいいような気がしてならない。こんな状況なのに……このままだと、俺は彼女に何かをしてしまいそうで……。

「もう」と、カヤは俺の心配をよそに、唇を動かした。「もう、怖くないの。それよりも……」

そしてカヤは、俺の頬に手をそえる。涙が一粒、頬をつたうのが見えた。その表情は、少しも悲しそうではない。カヤは……微笑ん

でいた。

「それよりも、嬉しいの」

それは、今まで見た彼女の笑顔の中で、最も美しく、そしてはかないものだった。

カヤは視線をおとし、恐怖と緊張で乾いた唇をなめる。細い喉元が、ぴくりと動くのが見えた。一つ一つの彼女の動きに、目が離せない。不安にも似た、焦燥感にも似た、この高揚はなんだろう。奪われたくない。失いたくない。カヤをずっと……こうして抱きしめていたい。

カヤは震えながら息を吸い、俺を潤んだ瞳で見つめた。

「私、和幸くんのことが……」

「カヤ、悪い」

「え」

気づくと俺は……彼女の唇をうばっていた。

＊　＊　＊

ガタン、と教卓がゆれた。和幸に押され、カヤの背中があたったからだ。

和幸は、衝動的にカヤと唇を重ねていた。一体、何が引き金だったのか分からない。ただ……自分を止められなかった。カヤは驚いて体をびくん、と動かしたが……抵抗することもなく、力をぬいた。

和幸はカヤの体を支えるように、彼女の背中をしっかりと抱きとめる。カヤの唇は柔らかくて繊細で、激しく動かすこともはばかられた。ほんの少しだけ彼女の唇をあじわって、和幸はゆっくりと離れる。

カヤは目をつぶったまま、浅くため息をついた。

それは、短くてはかない初めてのキスだった。

＊　＊　＊

どうしよう。言葉がでてこない。目が開けられない。胸が苦しい。体があつい。

「カヤ」

和幸くんの声が聞こえる。その言葉は、あの唇からでているんだ。私の口をふさいだ、その唇。困るよ。キスまで、優しいなんて。

頬に和幸くんの手がふれた。

「大丈夫か？」という、いつもの心配そうな声が聞こえてきた。そう、この声。この言葉。やっぱり、あの人とは全然違う。和幸くん、あなたはクローンなんかじゃない。

「いきなり……よくないよな」

申し訳なさそうな声。今にも、悪かった、と言い出しそうだ。私は、首を横にふり、ゆっくりと目を開く。

「ううん」と、頬に触れている彼の手に、自分の手を上から重ねる。

「ただ、名残惜しかっただけ」

「……」

和幸くんが頬を赤らめて、きょとんとした。

和幸くんが、目の前にいる。すぐそばにいる。これが、今の私の

幸せなんだ。

「そっか」と、和幸くんは目を細めた。照れくさそうで、それでいて優しい笑顔。和幸くん、私……今なら、運命を信じられる気がするよ。きっとね、私はあなたに恋する運命だったんだ。

私は目をつぶり……もう一度、和幸くんの唇の感触を思い出す。また、できるかな。何度でも……何度でも繰り返したいよ。ねえ、せめてもう一度……今度は、優しくしなくていいから。もう一度……

「ドッペルゲンガー」

突然聞こえたその言葉に、私はハッとして目を開いた。和幸くんの声……でも、それは目の前から発せられたんじゃない。ドクン、と大きく鼓動が一つなった。和幸くんの表情が、急にこわばる。私は、和幸くんの手をぎゅっと強く握り締めた。

ゆっくりと、和幸くんは顔を横に向ける。教室の入り口へ。その表情は、今まで見せたことないほど、緊張している。私の胸に一気に不安がおしよせてきた。

――俺がもう一人いるなんて、気持ち悪くて仕方ない。それに……オリジナルと会えば、ますます自分が『創られた』人間なんだ、て思い知らされる。コピーなんだ、てな。

夕べの、和幸くんの声が蘇る。和幸くんは、大丈夫なんだろうか。オリジナルと会って……正気を保てるだろうか。『自分』を保てるだろうか。気づいてもいなかった、その懸念。それが私の胸を圧迫するようにこみあげてきた。

和幸くん。お願い、信じて。『自分』を。私は、祈るようにそう心の中で訴えた。

「ドッペルゲンガー発見」

冷たい長谷川さんの声が、教室に響く。

救世主の条件　―９―

和幸は立ち上がった。目の前のその人物をじっと見据えながら。ドッペルゲンガー。その青年はそう表現した。自分のことを。

「まさよし……だな」

和幸は、落ち着いた声でそう尋ねる。体育倉庫で、大野という男が自分を呼んだ名前。

「初めまして。長谷川正義だ」

男は静かにそう答え、教室に入ってきた。

似ている、なんてものではない。和幸はぐっと拳を握り締める。自分がいる。目の前に、もう一人の自分がいる。呼吸がはやくなっている。息をすっても胸にはいってこない。動揺している。これまで経験したことないくらい、ひどく動揺している。

「和幸くん」

カヤは、和幸の拳が震えていることにきづいた。その手を、握り締めてあげなくては。そう思い、とっさに立ち上がると、和幸の拳に手をそえる。汗でしめっている。カヤは、心配そうに和幸を見つめた。やっぱり……無理だったんだ。オリジナルと会うなんて……と、カヤは唇をかみ締める。

「大丈夫だ」と、額に汗をうかべながら、和幸はカヤに微笑んだ。

「……」

その笑顔はひきつり、頬の筋肉が正しく動かされていない。大丈夫ではない。カヤは、そう確信した。それはそうだ。和幸にとって、自分がクローンだということは一生消えないコンプレックス。それを受け入れることは自分を否定するようなもの。だからこそ、『クローン』という言葉を避けてきたのだ。『創られた』、と言葉遊びのようにごまかして。

それが、『本物』の自分が目の前に現れてしまった。もう、ごまかしはきかない。自分はクローンなのだ。その事実が、ナイフのように胸に突きつけられる。

「いろいろ話したいこともあるが」と、正義は和幸とカヤに歩み寄りながら、つぶやく。「とりあえず、大野という男を殺してきてほしい」

和幸は、目を見開いた。ドクン、ドクン、と心臓があつくなっていく。

「なんだと？」

急に、何を言い出した？　和幸は、自分の耳を疑った。殺してきてほしい？　なぜ、そんなことを頼む？

「まだ、そんなことを言っているの！？」

一歩前に出て、そう怒鳴ったのはカヤだ。和幸は、彼女の取り乱す様子に目を丸くした。彼女がこんなに声を荒げるのを、今まで聞いたことなどない。

「もう諦めて！　和幸くんは誰も殺さない！」

そもそも、自分はこうして大野の手から離れたのだ。和幸があの男を殺す恐れは、何一つない。それでも、この男はなぜまだ諦めないのだ。やはり狂っている、とカヤは恐ろしくなった。

「銃、持ってきてくれたんだろ？」

長谷川はカヤに目をくれることなく、和幸に指を差した。

和幸はハッとして腰に手をあてる。そこには、確かに銃がある。マンションで会った男に、もってこい、と言われた銃だ。だが……と、和幸は、眉をひそめ、正義を睨みつける。それは、大野という男の伝言だったはず。それなのに……なぜ、この男は、『持ってきてくれた』と表現したんだ？　まるで、それは自分のためのような言い方ではないか。

「一体、どうなってる？」

和幸は、荒い息をこぼしながらそう尋ねる。その言葉に、正義は首を傾げた。

「和幸くん、相手にしちゃだめ」と、カヤが和幸に振り返り、懇願するように叫んだ。だが、その言葉は、和幸の耳には届かない。ふつふつと沸くある感情が、和幸の心を支配しはじめていた。

「俺はその大野という男に呼び出された。いや、そう思っていた。なのに……なぜ、大野は俺を知らない？」

カヤの心に、ある嫌な予感がおしよせる。和幸の表情が……長谷川のそれに似ている。冷たく、残酷な表情。

「和幸くん……もう、行こう」

カヤは、おびえながら、和幸に歩み寄る。とにかく、この場から去らなくては。とにかく、和幸をこの男から遠ざけなくては。それしか考えられなかった。このままでは……和幸が、別人になってしまうような気がしてならない。せっかく、気持ちが通じ合えたのに。これ以上、この男と一緒にいてはだめだ。カヤは、必死に声を張り上げる。

「もう、いいよ。もう……」
「その大野を殺せ、となんでお前が言う!?」
「和幸くん! お願い、もう帰ろう!」
「まさか、お前が全部……」
「帰ろうよ!!」

カヤは和幸の腕をつかんで、高い声で叫んだ。長谷川は、やれやれ、とため息をつき、冷たく言い放つ。

「お前、俺のクローンだろ」
「!」

和幸は、動きを止めた。それは、たった一言で、彼の存在を消し去る呪文だ。カヤはそれを知っている。なぜ、それを言ってしまったの。カヤは愕然とした。和幸の今の気持ちを思うと、涙がこみあげてきた。

「和幸くん?」と、震える声でよびかけ、和幸の顔色を伺う。目には狂気が宿り、そして視線は長谷川に固定されている。カヤを見ようともしていない。まるで、カヤの存在に気づいていないかのようだ。そして、察した。きっと、もう自分の声は届かない、と。彼の

中で、何かが狂い始めている。よくないことがおきる……カヤは悟った。

「大野はとんでもない悪人だ。大麻をばらまき、遊びのために金を稼いでいる。

その上、大麻を買った相手を脅し、奴隷のように扱う」

「もうやめて、長谷川さん！」

「世の中のために……殺したほうがいいと思うだろう？　そこで、君の出番だ。これからは、世の中のために、手を汚したらいい」

「和幸くん、耳をかさないで！」

カヤは和幸に必死に訴える。だが、和幸の耳にははいらない。彼にもう冷静な心は残っていなかった。心の中で……何かが切れた。何かがはずれた。そんな感覚を覚えていた。

――かずゆき？　大丈夫なの？

天使の声が頭に響くが、それも幻聴にしか思えない。和幸の心は、ある一つの感情に侵食されていた。憎悪という大きな、人を狂わせる感情。

「な。あの男は、死ぬべきだと思うだろ？　よりよい世の中のためなんだ。

お前は……俺のクローンなんだから」

再度、耳にしたその言葉に、和幸は、肩を震わせた。長谷川は当たり前のように言い放つ。

「俺のために、できるよな？」

和幸の手がぴくりと動く。和幸に表情はなかった。それを見て、カヤは身が凍るように、ゾッとした。人は、ここまで表情を消せるのだろうか。

「和幸……くん？」と、カヤはおそるおそる和幸の頬にふれる。だが、和幸はピクリとも反応しない。何か……よくないことがおこる。そしてそれを……きっと、自分は止められない。カヤにそんな不安がおしよせた。

「そのために、お前は生まれたんだ。そう考えたら……少しは、楽になるんじゃないか？　俺のクローンでよかった、と思えるような未来を……」

そこまで言ったときだった。和幸はカヤをおしのけ、正義に向かって四、五歩すばやく歩み寄る。そして……腰から銃を抜いた。

＊　＊　＊

「和幸くん！！」

私はかすれるほどの叫び声をあげていた。和幸くんが、長谷川さんに銃を向けている。こんなの、だめ。嫌だよ。

私はあわてて和幸くんに駆け寄る。

「お願い、銃をおろして！」

和幸くんは、私に見向きもしない。銃口を長谷川さんの頭に向けている。銃口と長谷川さんの間は一メートルほど。きっと、和幸くんははずさない。その目は真剣だ。こんな和幸くんは、見たことない。

「和幸くん！　やめて」

長谷川さんは、こんなこと想像もしていなかったのだろう。ごくりと唾をのみ、硬直している。やっぱり、何も分かってなかったんだ、この人。あんなこと言えば、こうなるに決まっているのに。クローンだなんて……どうして、本人にそんな言葉を投げかけられるの？　自分のことしか考えていないんだ。そんな人が、正義を語るなんて！

「和幸くん、お願い。やめて」

声が震える。涙がこぼれてくる。

「おい、本気かよ？」

だめ。あなたは何も言っちゃいけない。私は長谷川さんに振り返る。

「黙って！」

「お前は、俺のクローンだろ！　俺を殺せるわけが……」

カチャッという音が聞こえた。私が和幸君に振り返ると、親指で撃鉄を起こしていた。私は銃とかには詳しくない。ドラマとかでしか見たことがない。でも、分かる。あれを起こせば……あとは、引き金をひくだけなんだ。

「お前は俺のふりして、カヤを騙した」

和幸くんは低い声でそう言った。

「お前の言葉を聞いてて分かった。お前は、また……やる」
「和幸くん？」
「俺は、それを許すわけにはいかない」

私の呼吸が乱れる。もしかして……あの人がひどいことを言ったからじゃないの？　私のため？
いやだ。私のためだ。和幸くん……私を守るために、彼を殺そうとしている。

「和幸くん。私は大丈夫だから！」
「やっぱり……殺し屋には正義なんて分からないんだな」

長谷川さんが吐き捨てるように言った。
和幸くんの引き金におく人差し指に力がはいるのが分かった。どうしよう。何かしなきゃ。でも、何をすればいいの？　和幸くんは、私の言葉に耳を貸してくれない。説得は無理。じゃあ、ほかに何ができるの？

「ドッペルゲンガーは……」

和幸くんは震える声で言った。緊張している。怖がっている。私はそのとき、悟った。和幸くんは、警官を殺していない。和幸くんは、まだ誰も殺していない。私は目の前の拳銃を見つめる。これを防がなきゃ。防いだら、和幸くんは、まだ私の好きな彼のままでいられる。防がなきゃ。

「ドッペルゲンガーは会うと死ぬらしい」

防がなきゃ。

「だめ！！」

気づいたとき、私は和幸くんの銃に手をのばしていた。冷たい鉄の感触がして、私はそれを自分のほうにひっぱる。

「カヤ！？」

和幸くんが驚いて私の名前を叫んだ。そのときだった。何か、胸のあたりに……妙な熱を感じた。

＊　＊　＊

バン、という耳をつらぬく破裂音が校舎に響く。

すべては一瞬だった。覚悟を決めて、引き金に指をおき、力をいれた。人は殺したことはないが、銃は何度も撃ったことはある。どれくらいの力で引き金が引かれるのかなんて分かっていたつもりだった。

初めて人を殺す。それも、自分のオリジナルを殺す。大罪だと思った。何よりも許されないことだと思った。それでも、俺はやらなきゃいけないと思った。俺がクローンだどうだ、というのはもうどうでもよくなっていた。俺にはカヤがいる。俺だけの……大切なものをやっと見つけたんだ。俺は彼女を守る。それが俺の使命だ。そう決めたんだ。彼女を守るために、俺は生きていく。だからこそ……俺はやらなきゃいけないと思った。この男は危険だ。殺さなきゃ、カヤがまた危険な目に会うと思った。

だが、引き金に力を入れようという瞬間、何かが銃口の向きを変えてしまった。一瞬だった。それがカヤの手だと気づく前に、俺は引き金をひいていた。勢いだった。まさか、カヤが銃を動かすとは思ってもいなかった。急に動かされ、俺の指は引き金をひいたんだ。

暴発だった。だが、そういったところでどうなる？
俺はカヤを撃った。

救世主の条件　―１０―

「カヤ！！」

和幸の叫び声が教室に響いた。

カヤは朦朧としながら、左胸の上のあたりをおさえる。手になにか、べっとりしたものがまとわりつく。緑色のブレザーがみるみるうちに赤く染まる。

「あ……」

カヤは、急に寒気を感じた。意識が遠くなっていく。足に力がはいらない。

一体、何があったんだろうか、とぼんやり考える。和幸が目の前で、真っ青の顔で立っている。なにを、そんなおびえた表情で自分を見つめているんだろう。あぁ、とカヤはぼんやり思い出す。そうだ。撃たれたんだ。いや、撃たせてしまったんだ。なんてドジなんだろう。撃鉄のあがった銃を自分に向ける馬鹿がどこにいるの。こうなるに決まってるのに。慣れてないことは、するもんじゃないなぁ。カヤは、呆れ笑いを浮かべ、崩れるようにその場に倒れた。

「カヤ！！」

和幸は銃を放り投げ、倒れこむカヤを抱きとめる。

「カヤ、カヤ！　しっかりしろ！」

涙声でそう叫び、カヤを床に横にさせる。

正義はあぜんとしてそれを見つめていた。目の前で、少女が撃た

れた。自分が連れてきた女だ。自分が、己の正義のために犠牲にしようとした女。そんな彼女は、自分を守ろうとした。足が震えだす。至近距離で胸を撃たれた。これで、助かるはずはない。犠牲にしようとは思ったが、殺すつもりはなかった。少し、大野に体を触られる程度ですむ。そう思っていた。正義は、震える手で頭を抱える。彼女は殺し屋ではない。彼女に死ぬほどの罪はない。そんな彼女が死に直面している。撃ったのはクローンだが……このすべてを引き起こしたのは、自分に他ならない。自分の正義は、これを許さない。

「こんなはずでは」と正義は震える声をだした。

和幸は、カヤのブレザーを脱がし、シャツの胸元を破った。下着の右側は、もう元の色が確認できないほど暗い紅色にそまっている。傷口からは血があふれるように流れ出ている。和幸はカヤのシャツの一部を破ると、傷口におさえつけた。

正義はそれをみているだけで、大量の血にめまいを起こした。吐き気がする。

「カヤ！　目をつぶるなよ。いいな、しっかりしろ！」

――かずゆき！

ケットの声が頭に響く。だが、かまっている場合じゃない。和幸は答えることすらせずに、カヤに必死に呼びかける。カヤの目は焦点があっていない。

「なんで……なんで、手を出したんだ！」

和幸は涙をぬぐいながら、力強く傷口をおさえつける。白いシャツがみるみる赤くなる。出血がひどい。

「お前！　なにしてんだよ！？」

和幸は、呆然としている正義に怒鳴りつける。

「救急車、呼べ！」

正義は、顔を横に振る。

「もたもたすんな！」

「呼んだら、なんて事情を説明するつもりだよ。全部、話す気か？」

正義は、震える声でそう言ってきた。その言葉に、和幸はハッとする。怒りと憎悪がこみあげる。

「ここまできて、自分の心配しかできないのかよ！？」

くそ！　と叫び、和幸は片手を離し、携帯電話を取り出す。

――かずゆき！　だめだよ！

天使の声が頭に響いた。こいつもかよ、と和幸は腹を立てる。

「なにがだめなんだ！？」

急に大声で独り言を叫んだ和幸に、正義は眉をひそめる。気でもふれたんだろうか、と憐れむように見つめた。

――かずゆき、誰も呼んじゃだめだ！　皆、ムシュフシュに殺される！

和幸はハッとした。ムシュフシュ……カヤが気を失うと現れるという化け物。ゆっくりとカヤに目をやる。カヤはなんとか目を開けているが、かろうじて、といった状態だ。これだけ血が流れれば、意識を失うのは時間の問題だろう。

そして、カヤが気を失えば……その瞬間、その場にいた者はムシュフシュに殺される。

「ちょっとまて……じゃあ……」

――病院で気を失うことになったら、大勢の人が殺されてしまう。彼女を連れて行かないで。

和幸の血の気がひいた。冗談じゃない。そんなもたもたしていたら、本当に間に合わなくなる。こうしている間も、カヤの血は体外に流れ続けている。病院は、すぐ近くにある。今すぐ呼べば、きっと助かる。

「ムシュフシュは……お前が、どうにかできるんじゃなかったのか！？　そのために、こうして俺に憑いているんだろ！？」

――リストが、ケットをかずゆきに貸したのは、かずゆきを守るため。ケットがかずゆきに宿っていれば、ムシュフシュはかずゆきには手をださないから。

こんなせっぱつまった状況で、そんなややこしい説明をされても理解できない。和幸は顔をしかめる。

「どういうことだよ、それは」

――ケットに、ムシュフシュを止める力はないんだ。ただ、ムシュ

フシュはケットに手を出さない。だから、ケットが宿っている限り、かずゆきはムシュフシュには襲われない。それだけなんだ。

てことは……と、和幸は苦渋の表情を浮かべ、携帯を放り投げた。

「なんだよ、それは！？　意味ないじゃないか！」

そもそも……と、和幸はいらだった声で叫ぶ。

「ムシュフシュはカヤを守る化け物なんだろ！？　なんで、俺はこうして簡単にカヤを撃てた！？　なんで、そいつはこうなる前に止めなかったんだよ！？」

分かっている。こんなの、責任転嫁だ、と。撃ったのは自分だ。だが、それでも……ほんの少しでも、これを回避できる方法はなかったのか、と和幸は探りたくて仕方がなかった。今となっては、すべて無意味だというのに。

――違う。彼女を守る使命は、アトラハシスのもの。ムシュフシュじゃない。

その言葉に、和幸は鼻で笑う。

「言ってることが、今朝と違うだろ！　ムシュフシュはカヤを守る化け物だ、て言ってただろ！？」

――ムシュフシュは、万が一のときの備えなんだ。アトラハシスが彼女を守っている前提で宿された怪物。アトラハシスが、きちんと自分の使命をこなしていれば……本来、彼女にこんな危機は訪れないはずなんだよ！

アトラハシスがいれば……と、和幸は心の中でつぶやく。なんて、情けない。何が、『無垢な殺し屋』だ。俺は、とんでもない役立たずじゃないか。和幸は、カヤの顔を見つめ、悔しさに奥歯を噛み締めた。そこに横たわる少女は、ついさっき唇を交わした彼女と、まるで別人のようだ。血に染まり、顔は青ざめ、目はうつろ。唇はかたかたと震えている。

「病院につれていけないって……どうすればいいんだよ！？
くそ！　ムシュフシュなんて役立たずのお荷物じゃねぇか！」

余計なものを宿しやがって、と和幸は悪態づいた。

――連れて行けない、とは言っていないよ。

え、と和幸は顔を上げる。

――ムシュフシュは、周りに危険がないと察知するとすぐに消える。ほら、かずゆきもそうだったでしょ？

そういえば……と、和幸は思い出す。夕べ、自分がカヤを助けに向かったとき、すでにそこは血の海だった。ムシュフシュが男たちを殺したあとだったのだ。だが、そこにはもう怪物の姿はなかった。和幸はそのまま、気を失っているカヤを連れ出し、家まで無事に運ぶことができた。

――ムシュフシュが消えてからなら、意識がない彼女を病院に連れて行っても大丈夫だよ。

ケットは、安心させるようにそう告げた。良い報告をしたつもり

だった。だが、和幸は皮肉そうに笑う。

「ふざけるなよ！」

――え？

和幸は、カヤの傷口を押さえる手に力をこめる。当たり所が悪かったのだろう。血がどんどんあふれてくる。

「カヤがこのまま気を失うまで待てっていうのかよ！？　そんなことしてたら……」

手遅れになる、という言葉を喉の奥におしこんだ。カヤはまだかろうじて、意識がある。そんなときに、いえるわけがない。

「このまま……見ていろ、ていうのか」

涙でゆがむ視界の中、ふと、カヤの口が動くのが分かった。和幸は、ハッとして、つくり笑顔をうかべる。

「カヤ、大丈夫だ。すぐに病院に連れて行く。だから……」

「ごめんね」

それは、もう声とはいえないほど、かすれていた。

救世主の条件　―１１―

「ごめんね」？　それは、俺のセリフだ。俺が……カヤを撃った。涙が、あふれてくる。なにしてんだ。カヤが不安になる。俺は笑っていなくちゃいけないんだ。

「何言ってんだ。とにかく、何も喋るな」

「ごめ……んね」

相変わらず、力ない声でそうつぶやいている。

「誰も……殺させたくなかったのに」

俺はハッとした。殺させたくなかった？　何の話だ？　俺はカイン。殺し屋。それは、カヤも知っているはずだろ。

「和幸くんのままで……いてほしかったから」

「カヤ、しゃべらなくていい」

「殺し屋（カイン）に……なってほしくなかった」

俺は、傷を抑える手の力をゆるめてしまった。カインになってほしくなかった……それは、まるで……知っていたようだ。カインの中で唯一、俺が人を殺したことがないことを。

「誰も……殺さないで、ほしかった」

「カヤ……」と俺は震える声で尋ねる。「それが理由なのか？　俺に人を殺させないために……それで……」

俺は言葉を失う。それで、あんな無茶したのかよ。ぐっと唇をか

む。そんなことまで、考えていたなんて。

「これじゃ……本末転倒、だよね」カヤは、微笑を浮かべた。「私……死んじゃったら、ごめんね」

カヤの目から涙がこぼれた。死んだら……て、やめろよ。俺はもう、つくり笑顔をたもてなくなっていた。

「忘れてね」と、カヤはかすれた声で言う。「今夜のこと、忘れて……ね」

なんでそんなこと言うんだ。俺はまたぐっと傷口をおさえ、首を横に振る。

「頼むから」喉が絞まる。声がでない。「……れ、に」声になってない。これじゃ、カヤが不安になる。

「俺に」と、声をしぼりだす。「俺に……お前を殺させないでくれ……」

くそ。なんで、こうなるんだよ？　おい、神さま。助けてくれよ。カヤは、お前が創ったんだろ！？　俺がかわりになるから、カヤは……助けてくれ！

――かずゆき！

急に、天使の声が響く。なんだよ！？　何もできないくせに、うるさい！

――あの人を追い出して。

あの人？　俺は顔をあげる。すると、そこには正義がたちすくんでいた。震えながら、ひどい顔色でカヤを見下ろしている。こいつ、まだいたのか。何もしないで突っ立って。

――ケットが助けられるのは、かずゆきだけだ。すぐにも『災いの人形』は意識を失う。だから……

そうか。このまま、あいつがここにいると……ムシュフシュに殺される。

――かずゆき！　早くして！

ケットは必死で急かしてくる。

でも……と俺は躊躇した。助ける価値があるのか、あいつに？

このまま、ムシュフシュに食い殺されても文句はいえないだろう。あいつが、全部引き起こしたんだ。俺はもとから、あいつを殺すつもりだった。あいつさえ、カヤを連れ出さなければこんなことには……

「……き、くん」

そのときだった。ふと、俺の頬に冷たい何かがふれた。ハッとして俺は視線をおとす。冷たい何か……それは、カヤの手だった。ついさっきまでは、あんなに温かかったのに。カヤは、もう危ないのかもしれない。俺の心にそんな不安がよぎる。

俺は傷口から左手だけ離し、カヤの手をとった。

「カヤ……」

「……和幸くん、許して」

「！」

それは、とても小さくてか弱くて、今にも消え入りそうな声だった。

「……許して」

許してって……こんなときまで、何でお前はそうなんだよ？　なんで撃ったんだ、とか、よくもこんなことを、とか……いくらでも罵ってくれ。そのほうが、ずっと楽なんだ。

でも、お前はそれをしないんだ。そういう奴なんだ。カヤは、いつも他人を思う。この傷も……正義と、そして俺を守るために体を張ってくれたんだよな。俺はその気持ちを裏切っちゃだめだ。

俺は、ごくりと唾をのみ、正義を見上げる。

「正義」

正義は、びくっとして俺を見た。急に名前を呼ばれて驚いたようだ。

「出ていけ」

「え」

こいつを、カヤはここまでして守ったんだ。俺が、誰も殺さないように。こんな男を……カヤは守ったんだ。だから、俺はこいつを死なせちゃいけない。

「早く、出て行け！」

「……」

「行け！！」

正義は俺に怒鳴られ、びくっと体を震わせた。こんな状況で、あいつも参っているみたいだな。さっきの減らず口はどこかへいっている。正義は戸惑いつつも、じりじりと後ろへひいて行った。でも、と何度か言いかけたが、俺に睨まれ、口をつぐんだ。最後にじっとカヤへ視線を送ると、くるりと踵を返して去っていく。最終的には、逃げるように走っていった。結局、あいつは自分が巻き込まれなければそれでいいんだろう。内心、ほっとしているんだろうな。

俺は、ふうっとため息をつく。これで、とりあえず、ムシュフシュが現れても大丈夫だ。ケットがついている俺にはムシュフシュは手をださないらしいし。でも……カヤはもつのか？　こんなに血を出して、目もうつろだ。これで意識を失うまで待てってのかよ。いや……それより、気を失わずに、そのまま死んだらどうなるんだ？

リストは言っていた。カヤも『テマエの実』を食べなければ人間。普通に死ぬ、と。このまま、ムシュフシュが現れて、そして消えるまで放って置いたら……

「死にますわよ、これじゃ」

「！」

急に、女の声がした。どこかで聞いたことのある、色っぽい声だ。

＊　＊　＊

和幸がハッとして顔をあげると、目の前に、ビキニのような麻布を着込んだ妖艶な美女が立っていた。世の男すべてを惑わせるだろう、完璧なプロポーション。その浅黒い肌は、どこかカヤを思わせる。ぷるんとした唇。赤い瞳。そしてなにより、うねうねとしたドレッドヘアー。和幸には、そのシルエットに見覚えがあった。

「お前は……」と、女に向かって言う。
「アトラハシスに仕えるエミサリエス、バールと申します。また会えたわね、ルルの坊や」
やはり、と和幸は目を丸くする。この女こそ、和幸の部屋に忍び込み、呪いをかけた張本人だ。そして……アトラハシスの守護天使。
「なんで今頃現れたんだよ！？」
アトラハシスは、カヤを守る使命をもつ人間。それがなぜか、ストーカーまがいのことをしてカヤを遠くから見守っているだけだった。今更、なにをしにきたんだ、と和幸はいらだった。それに彼女は、カヤはもう死ぬ、と発言した。カヤは、なんとか意識はたもっているようだが、朦朧としている。もう話の内容を理解できてはいないかもしれないが、だが、それでも彼女の前でそんなことを言ってほしくはない。
「あなたのせいで我が主（あるじ）が取り乱して……て、細かい話をしている暇はありませんわ。こちらも、彼女に死なれては困ります」
バールは、腕を組んで和幸を見下ろす。
「ケット・シー。姿をあらわしなさいな。いるのは分かりましてよ」
和幸は、眉をひそめる。ケット・シーとは、ケットのことだろうか。だが、リストがそんな風に呼んでいるのを聞いたことがない。
「バール、久しぶりだね」
和幸の隣に、光の粒子が集まり、ケットが輝きの中から現れる。

その表情は真剣だ。そしてどこか、緊張している。

「挨拶している場合じゃありませんわ。彼女が死ねばすべては終わり。

あなたの主人……マルドゥクはどこ？」

和幸は、え、と眉をあげる。マルドゥク。それはリストのことだ。

「なぜ……」と和幸がつぶやくと、バールは腕を組み、豊満な胸を余計に強調する。

「なぜ、マルドゥクを探すか？　それは……ケット・シーにお聞きなさいな」

バールは、冷たい視線でケットを見下ろしている。責めるような視線だ。ケットは何か隠しているのか？　言われて和幸は、ケットに振り返る。

「ケット？」

ケットは、難しい表情でバールをじっと見つめていた。

「リストは……」

そのときだった。

「ここにいますよ」

場の雰囲気にあわない明るい声が響いて、リストが教室に入ってきた。

「リスト！？」

和幸は彼の姿を見てぎょっとする。いつのまに、そしてなぜ、彼がここにいるのだろうか。ケットには、リストに知らせなくていい、と言ったはずだが。

「やぁ、和幸さん。えらいことになってますね」

リストは血だらけのカヤを見て、苦笑いを浮かべる。まるで状況の深刻さが分かっていないかのような、のんきな表情だ。

「リスト、不謹慎だよ」とケットが遠慮がちにいさめる。

「バール、か。初めまして」

リストはケットの言葉を気にする様子もなく、バールに微笑んだ。彼女こそ、アトラハシスに仕える、アサルルヒのエミサリエス。聞いていた通りの、妖艶な姿だ。

まじまじと見てくるリストに、バールは厳しい視線で睨みつける。この少年を、彼女は見覚えがあった。鏡で『災いの人形』を監視しているとき、何度かこの金髪碧眼の少年を見たことがあったのだ。確か、『災いの人形』と一緒に劇に参加していた。まさか、高校に入り込んで、彼女に接触していたとは。バールは、半ば、呆れた。

「あなたが、マルドゥクの王」

「アトラハシスは？」

間髪いれずに、リストはそう尋ねる。

「……見ているわ」

「ここには来ないか……」

リストは、ちっと舌打ちをした。アトラハシスのもつ鏡。それは、離れたところからでも、『災いの人形』を観察することができる便利な道具だ。さらに、エミサリエスであるバールを、鏡が映し出す場所に出現させることもできる。彼自身がここに来る理由もないか、とリストはため息をついた。

「リスト！」という和幸の叫び声がリストの耳にはいってくる。「どうにかならないのか！？」

どうしてリストがここにいるのかは分からないが、どうでもよかった。リストは神の子孫。もしかしたら、奇跡を起こせるかもしれない。和幸は、意識を失いかけているカヤを見つめる。もう少し、がんばってくれ、と心の中で叫ぶ。

「……さすが『災いの人形』。よく、ここまでもっていますね」

リストはカヤのもとに歩み寄り、そんな言葉をもらす。

「こんなときまで、人形扱いかよ！？」

「こんなときだからこそ、ですよ」

「！」

リストの視線は冷たい。いつものようにからかっているわけじゃない。和幸は、それに気づき、ゾッとした。リストの表情からは、焦りも不安も感じられない。こんなカヤの姿を見ても、顔色一つ変えていない。それは、冷静だから、の一言で片付けられるものではない。冷酷すぎる。和幸は、はっきりと確信した。リストは、この状況に何も感じていない、と。

「リスト……助けに来てくれたんじゃないのか？」

和幸の、絶望に満ちた声が、暗く静かな教室に響いた。ケットはその言葉にうつむく。ケットは分かっていた。リストがここにいる理由。それは、『災いの人形』を助けるためではない、ということを。

リストにこの場所を伝えたのはケットだった。和幸には、リストに知らせるな、と言われたものの、ケットの主人はあくまでリストだ。マンションで呼び出されたときから、ずっとリストに伝えていたのだ。和幸がこの校舎にはいったときには、すでにリストもここに来ていた。カヤが撃たれて苦しんでいるときも、実はすぐそこにいた。だが、何もしなかった。リストはケットに口止めをし、様子を伺っていたのだ。アトラハシスに会うために。

『災いの人形』を守る使命をもつアトラハシス。彼は、神への信仰を捨て、好き勝手をしている。だが、和幸からストーカーの話を聞き、確信した。信仰は捨てたが、まだ使命は捨てていないのかもしれない、と。何らかの理由で未だに『災いの人形』を守っている。それなら……彼女のピンチに姿を現すはずだ。和幸がカヤを撃ったとき、そう思いついた。だからリストはずっと待っていた。アトラハシスが現れるのを。結局、現れたのはバールのみだったが。

とにかく……と、リストは和幸を見下ろす。こうして姿を現した以上、もう知らんふりはできない。

「なぜ、助けると思うんですか？」

リストは、和幸の目の前にしゃがみ、微笑を浮かべてそう言った。

「なぜって……カヤは、このままじゃ……！」

リストがそんなことを尋ねる理由さえ、和幸には分からない。早

くしなくては間に合わなくなる。こんな話をしている場合ではないのに。そういらだちながら、和幸は怒鳴った。だが、リストは相変わらず平然とした顔で和幸に告げる。

「彼女が死ねば、和幸さんはこの世界の救世主です」

「……え？」

救世主の条件　―１２―

救世主？　一体、何の話をしだすんだ？　お前の冗談につきあってる暇はないんだ。どうでもいいから、カヤを助けてくれ！

「マルドゥク。おしゃべりしている時間はないのよ！」

バールが腰に手をあてがい、怒鳴った。やはりそうか、と俺の心に希望の光がともる。あいつは今の状況では味方だ。カヤを生かそうとしている。それもそうか。アトラハシスの天使（エミサリエス）なんだから。だが、なぜ、バールはリストにせがむ？　リストはやはり、何かできるのか？　カヤを助けられる力を持っている？

リストは、バールに一瞥し、すぐに俺に向き直った。

「彼女がこのまま死ねば、世界は滅びない」

「……え」

「つらいとは思いますが……彼女をここで死なせてあげるべきです」

俺は言葉を失った。なんてことを、こいつは平気で言うんだ。死なせろ、て……

「なに、言ってんだよ……」

「分からないんですか？」と、リストは低い声で言った。「彼女は『災いの人形』。人間じゃありません。ただ、世界を滅ぼすために創られた土人形。今は……人間のふりをしてこの世界を観察しているだけなんです」

「やめてくれ」

それ以上、そんなことを言うな。聞きたくない。

「彼女が今死ねば、世界に終焉はおとずれない。神の『裁き』をここで終わりにすることができる。世界は滅びることはない」
「マルドゥク、あんたね」

バールが呆れた声で怒鳴ったが、リストはそれを左手で制した。じっと俺を見つめている。真剣な眼差しだ。

「和幸さんは、世界を救えるんですよ」
「！」
「彼女を殺したあなたは、世界の救世主になれる」
「……」
「だから」と、リストは真面目な表情で俺を見つめる。「このまま……」

俺はぐっと唇をかんだ。血の味がする。怒りで俺の手が震えていた。もう、たくさんだ。カヤは『災いの人形』。世界を滅ぼす力をもつ女。だから……ここで死ぬべきだ、ていうのか？
カヤが何をした？　そんな使命を勝手に与えて……人間ではないから、と簡単に死なせるのか？　俺が彼女を殺しても、それを罪といわず、救世主とほめたたえるのか。カヤが死んだほうが世界のためだから？　そんな理由で、なんでもかんでも正当化するのかよ！

「冗談じゃない！　世界？　救世主？　どうでもいい！」

カヤを殺せば、俺は世界の救世主。世界の敵を殺した英雄か。なんだよ、それ？　一体、それになんの価値がある？
俺はリストをにらみつけた。

「世界のために、カヤを殺さなきゃいけないのか！？　だったら、

俺はそんな世界はいらない」
「かずゆき！」
ケットの戸惑う声が横から聞こえてきた。俺の言葉は、神への冒涜だったのだろうか。天使の叱責か？　でも……どうでもいいんだよ。
「そんな世界、滅んでいい」
「……」
リストは何も言わず、じっと俺を凝視している。
俺は本気だ。決めたんだ。俺の生き方を。初めて、自分で守りたいと思える奴に会ったんだ。初めて、自分で選択したんだ。俺は、カヤを守る。そのために、生きるんだ。分かってる。カヤを殺しかけてるのは俺自身。こんなこと言って、ばかげているのかもしれない。でも……それでも、諦めたくないんだ。俺にとってなにより大事なもの……それは、カヤのいる世界なんだ。
「いい男じゃない」
バールが長い足をくねくねとさせて歩み寄ってきた。
「マルドゥク。ズルはいけなくてよ」
リストがちらりと横目でバールを見る。
「ズル？」
「この一連の『裁き』において……『テマエの実』を食べるまでは、『災いの人形』は人間（ルル）として扱うこと。そう決められているでしょう。つまり、人間（ルル）を守る使命をもつあなたは、彼女を救わなくては

ならない」
「……」
「ルルである我が主（あるじ）とは立場が違いますもの。神の子孫であるあなたは、神のルールを破ることはできないはず。そうでしょう？」
リストは何も答えない。俺は眉をひそめてじっと見つめる。神のルールやらなんやらはさっぱり分からない。だが、それより……バールのこの言い方だ。やっぱり、リストはカヤを助けられるんだ。望みはある。カヤは助かる。
「うっ……」というカヤのうめき声が聞こえた。俺はあわてて彼女を見下ろす。呼吸がおかしくなっている。もう……きっと、限界だ。やはり、気を失う前に……。
「リスト！」
助けられるなら、早くしてくれ。
だが、俺が怒鳴っても、リストはぴくりともしない。冷静に、俺の隣のケットにちらりと目をやった。
「どうなの、ケット？」
「バールの言うことは正しいよ。マルドゥクの王は、『災いの人形』が人間（ルル）である以上、彼女を救わなくてはならない。それもまた使命。リストは助けるべきだ」
それを聞き、やれやれ、とリストはため息をついた。すっくと立ち上がると、左手を天井にかかげる。
「矛盾している気がしてならないけどね」

リストの左手にキラキラと光の粒子が集まり、細長くひろがった。そして、それは剣の形をおびていく。リストは、現れた大振りの剣をぐっとつかんだ。あれは……たしか、『聖域の剣』、だったよな。

「彼女を救えば、ルル(エリドー)の世界が滅ぶかもしれない。なのに……」

悔しそうな表情でそういってから、リストはなぜか俺にその剣を差し出してきた。

「リスト!?」というケットの声と、「あら」というバールの声が聞こえた。

なんで、俺に？　これ……贈(ドラ)り物とかいう神聖な武器じゃないのか？　特に、この剣は……リストの一族が代々継いでいる家宝みたいなものなんじゃ……。

「彼女を助けたかったら、この剣で彼女の体を貫けばいい」

「！」

貫く……？　おい、待てよ。確か、この剣はカヤを殺す剣だったんじゃ。まさか、俺を騙してカヤに止めを……？

「お前、結局、俺にカヤを殺させる気か！？」

「違う！」とリストは声を荒立てた。「これは人間(ルル)を救うための剣。これでさせば、どんな傷も治るんです。彼女も、今はまだ人間(ルル)。救うことができる」

え……と、目の前に差し出されている剣を見つめる。傷が治る？　これでさせば……？　そんな馬鹿な。

「和幸さんの呪いもそうやって解いてあげたでしょう」

言われて、ハッとする。そうだ。そういえば、俺もこの剣で貫かれた。バールに呪いをかけられた夜だ。ひどい痛みがしたのに、傷口もなくて……そして、呪いがきえた。

「ねえ、とにかく、急がないと。『災いの人形』は、一応、しぶとく創られているけど……さすがに、もう危ないと思いますわ」

バールがいらだったようにそういってきた。もう危ない……俺はカヤを見下ろす。まぶたは今にも閉じそうだ。苦しそうな呼吸が、段々とゆっくりになっている。ムシュフシュは現れていないから……意識はまだあるんだろうが……。

とにかく、今、俺にできることは……リストを信じることだけか。

「リスト」というケットの声が聞こえた。「かずゆきに剣を貸すの？　本気？」

「うん。オレは気が進まないから。『災いの人形』を助けるなんて……」

リストは、悔しそうな表情を浮かべていた。カヤを殺す。それがこいつの使命だったな。それを考えれば……リストが嫌がるのも分かる気がする。だが、カヤが『テマエの実』を食べなければ、カヤは『終焉の詩』を思い出さない。そうすれば、こいつはカヤを殺さずにすむはずだ。俺とリストで協力して、『テマエの実』をカヤが食べないようにする。そうすれば、誰も死なないし、世界も滅びない。俺は、その選択肢がある以上、諦めない。

「和幸さんが本当に……彼女を助けたいというなら、あなたが自分でするべきだ」

リストは剣を俺に突き出してきた。

「俺にも、使えるのか？」

「オレの権限で、貸すことができる。ケットを貸したように。ただし、オレに手渡されてから、和幸さんが剣から手を離すまで、ね」

ごくり、と唾を飲む。俺が、神の剣でカヤを貫く……想像しただけでも、恐ろしい。俺だって、そんなの気が進まない。だが、それでカヤが助かるなら……。

「これで貫けば……」

「世界への『裁き』が再開される。あなたは、世界に『終焉』という脅威を再びもちこむことになる」

「……」

「それでもいいの？　よく、考えてください」

カヤが今死ねば、確実に世界は救われる。世界は滅びない。確かに……このままカヤを殺せば、俺は救世主なのかもしれない。だが……

「世界の救世主……」と俺は鼻で笑う。「俺は、『創られた』人間。その資格はそもそも、ないだろ」

リストが眉をピクリと動かすのが分かった。そう、お前も『創られた』人間だもんな。とんだ皮肉だったかもしれない。

俺は、カヤの傷口から手を離し……リストの持つ剣へ手をのばす。ぐっと柄をもつと、リストがゆっくりと手放した。その途端、一気に重さが俺の腕にかかる。

「うわ……！？」

思わず、床に剣をぶつけてしまった。俺は怪力だ。そういうふうに『創られた』。なのに、とても重くて持ち上がらない。こんな重い剣だったのかよ！？　リストはいつも軽々とこれを持ってただろ。あの細い腕に、なんでそんな力がある？

すると、リストは涼しい顔でそれを見つめて微笑した。

「それが……使命の重さです」

「！」

使命の重さ。なるほど、さすが神の剣だ。剣の重さは、物質の質量じゃないわけか。精神的な『重さ』。人が抱えるもの。背負うもの。プレッシャー。そんな重さ。これが……こいつが背負っている使命、か。人類を守る重み。そのために、カヤを殺す罪。リストは、これを背負っているんだな。俺はぐっと剣の柄を握り締める。俺が今からすることと、正反対じゃないか。

だからこそ、こいつは……自分ではやりたくないんだ。

「覚悟のない人間には、その剣は持ち上がらない」

「覚悟……ね」

俺は、鼻で笑う。そういわれて、ひきさがれるか。

ぐっと剣を持ち上げる。重い！　だが……俺は決めたんだ。俺はカヤを守る。

「これでもう……」

つぶやいて、俺は剣を持ち上げた。剣の重さに耐える俺の腕が震えている。

「神のごたごたに関係ないなんて……」たちひざをし、カヤの体へ剣の切っ先を向けた。「言えなくなるな」

俺は、勢いよく、剣をカヤの腹部に突き刺した。

救済の代償

「あああぁっ！！」

おそろしい女の叫び声があたりにこだました。正義は、校舎の外にでたところでそれを聞き、びくっと体を震わせる。尋常ではない悲鳴だ。正義はおそるおそる校舎にふりかえった。あの声は……神崎カヤだろうか。あまりにひどい叫び声だった。彼女の声から、こんな悲鳴は想像できない。断末魔の叫び……か。

「あぁ……」と、正義はまた頭を抱えた。こんなはずではなかった、こんなはずではなかった、と何度も繰り返す。自分は正しいはずだ。大野を殺せば、すべて解決すると思った。この辺りを平和にすることができる。そして……彼女を自由にすることできる、と信じていた。なのに……何が起きた？　神崎カヤが自分をかばって銃弾をあびた。血だらけの少女を見ることになった。なぜ、こんなことに？

頭を抱え、正義はグラウンドに出たところで崩れるように座り込んだ。

「こんなはずでは……」

顔を手で多い、そのまま背中を丸めた。そのときだった。

「はせがわぁ」という、気の抜けた声が聞こえ、誰かの足が見えた。正義は、ハッとして顔をあげる。すると、目の前には、人相の悪い男が立っている。確か、こいつは……と正義は思い出す。コンタクトがない、と騒いでいた男だ。

「大野が探してるぜ」と、男は嬉しそうに言ってきた。

「そうか」

神崎カヤが噛み付いたせいで、大野はひどく怒っていた。声を荒げて、女を捕まえて来い、とわめいていた。つれて帰らなければ、その怒りの矛先は自分に向けられるだろう。

正義は、震える足をおさえながら、立ち上がる。

「女、見つかったのかぁ？」

「……いや」

もしかしたら、自分は間違っていたのかもしれない。正義は、初めて、そんな気持ちを抱いていた。自分をかばった少女。自分を恨んで当然なのに、彼女は自分をかばった。そして、もしかしたら命を落とすかもしれない。あの出血で助かれば、奇跡だ。自分の行いが、彼女を死においやるのか。正義は、初めて、自分の正義（せいぎ）を疑い始めていた。

「ははは」という男の笑い声が響く。正義は、ハッと我に返り、男を見やった。「まずい、まずいよぉ、はせがわぁ」

「なにがだ？」

「大野に殺されるよぉ」

殺される、か。大方、誇張表現でもないだろう。大野はキレると何をするか分からない男。その上、父親が警察に強いコネをもっているという噂だ。あの男に恐い物はない。だからこそ、殺すしかない、と思ったのだ。

「大野を殴るなんて、命知らずだねぇ」

男は、ヒヒッと笑って正義の背中をたたいた。正義は、その言葉

に眉をひそめる。

「殴った……？」

「とぼけてもだめだぜぇ。大野、きれまくりぃ」

「……」

もちろん、自分は殴っていない。となると……正義は、ふっと鼻で笑う。どうやら、クローンはしっかりと復讐を用意してくれたようだな。大野を殴ったか。殺してくれればよかったのに。なんて、厄介なことをしてくれたんだ。正義は頭をかかえ、はは、と奇妙な笑い声をあげた。自分は、本当に殺されるかもしれない。だが……

「それが、罰なら……」

甘んじてうけよう、と心の中でつぶやく。正義は、体育倉庫へと重い足で歩いていった。

＊　＊　＊

「ああっ！！　あうう……ぐっ！　あぁっ」

カヤは剣で貫かれた瞬間、体を大きくのけぞらし、ひどい叫び声をあげた。俺は、思わず剣から手を離しそうになった。

「手を離さないで！　剣が消える！」

リストのその叫び声で、なんとかそのまま剣を持ち続けたが……カヤのこの苦しみようはなんだ？　腹を貫く剣をぬこうともがいている。

「あああああっ！！」

表情は苦痛でゆがみ、カヤの声とは思えない、恐ろしい悲鳴をだしている。

「どうなってるんだよ！？」

俺は、リストを睨みつける。話が違う。傷が治る、て言っただろ。だが、バールもケットも冷静な表情でカヤを見下ろしている。おい、少なくともバールは焦っていいんじゃないのか？　カヤを守ろうとしていただろう！？

「これでいいんです」とリストは俺に冷静に言う。

「いいって……苦しんでるだろ！？」

カヤは痛みで我を忘れている。苦しみながら暴れて……俺はそれを剣でおさえつけている状態だ。

「覚えてないんですか？　救われるには、それなりの痛みを伴うものなんです」

俺は言われてハッとする。聞き覚えがあるセリフだ。リストに刺された夜を思い出す。確かにあのとき、俺も激痛を味わった。それで、リストに言われた。

――もちろん……救われるには、それなりの痛みを伴うものだから。責任として、激痛は体験してもらったけどね。

つまり、カヤが今体験しているのは、救われるための代償？　俺はカヤを見下ろす。そして、ハッとした。右胸の傷が……みるみる

うちに、消えていっている。

「癒す傷の七倍の痛みを体感することになる。そういう風に聞いています」

リストが、段々落ち着いてきたカヤを見つめて、冷静にそう言った。七倍……俺は、ゾッとした。その痛みでショック死したらどうなるんだよ。

「あぁ、あ……はっ……」

カヤの、強い呼吸が聞こえる。痛みはおさまったんだろうか。ぴたりともがくのが止んだ。体や顔が汗でぐっしょりぬれている。まだ意識は朦朧としているのだろう。目はとろんとしている。だが、さっきと違って顔色はいい。震えもない。そして……

「傷がない」

血は肌にこびりついているものの、銃痕はすっかり消え去っていた。どんな原理なのかは分からないが……どうでもいい。これが奇跡ってやつなら、俺は大歓迎だ。

俺は、ホッと安堵し、その場に崩れるように腰をおろす。

「もう、放しても大丈夫です」

リストに言われ、剣から手を放した。すると、剣は煙のように跡形もなく、すうっと消える。やっぱ、何度見ても奇妙だな。そして、カヤの腹には貫かれた跡は何一つ残っていない。一緒だ。俺が刺された、あのときと。

「あれ？」ケットが、かわいらしい声をだした。「バールは！？」
俺もリストもハッとし、辺りを見回す。いない。どこにも、あの妖艶な天使の姿はない。いつのまに？
「やれやれ……いい女ってのは去り際も見事だねぇ」
リストは呆れながらも、クスッと微笑んでそう言った。こいつは、やっぱり緊張感がないよな。
「さて……あとは、お二人でごゆっくり」
「え？」
リストに、いつものおどけた笑顔が戻っていた。シーッと人差し指を口にあて、忍び足で教室から出て行く。
「お、おい！？」
「ケットは置いていきます」それだけ言って、リストはさっさといなくなった。おい、緊張感ないにもほどがあるだろ。
「ケットも、姿を消すね」
「え？」
俺はケットに振り返る。おいおい、皆、あっさりすぎないか？
さっきまでの緊迫感はどこだよ？　どっと疲れてるのは俺だけか？
「『災いの人形』は、『収穫の日』まで自分の正体を知ってはいけない。それを破った者には、罰が下る、て言われてる。つまり、何があっても秘密にしろ、てこと」

俺はハッとした。そうか……だから、バールもリストも、さっさと姿を消したわけか。カヤに見られたら、なんて説明したら分からないもんな。特にリストなんて……なんでここにいるの？　て質問攻めにあいかねない。

「どんな罰かは分からないけど。そういうわけだから。あとは、かずゆきに任せるね」

「お、おう」

任せるって言われても……。まぁ、俺も得体の知れない罰にあいたくはないしな。なんとか、ごまかそう。って、おい。どうやってごまかすんだ？　俺は、そういうの大の苦手だろう。それに、カヤはずっと意識を保っていた。ムシュフシュが現れなかったのがその証拠。ということは……一連の出来事、全部見聞きしていた可能性もあるんじゃないのか？　やばい。俺たち、散々、『災いの人形』の話してたじゃないか。俺なんて、姿のないケットに大声で話しかけていた。これ……罰、くだらないよな。どうなるんだ？　カヤに直接言わなければ、セーフ？　そうじゃないと、俺たち全員アウトだろ。

そんなことを俺が悩んでいる横で、ケットは、じゃあね、と微笑んで光となって消えた。おい、と引きとめようとしたが……リストは、ケットを置いていく、て言っていた。つまり、消えてもどうせ俺の中にいるんだ。引き止めることもない。

――そうだよ。安心して。

「……」

ほら、みろ。あぁ、でも……なんか、やりずれぇ……。

まあ、いい。それよりも、と俺はカヤを見つめる。カヤが無事だ

ったんだから……て、あれ？

「カヤ？」

カヤのまぶたが閉じている。

「え！？」

まさか、今、失神！？　俺は辺りを見回した。ムシュフシュって化け物が、現れるんじゃ……と、警戒したのだ。すると、くすくす、とどこからともなく笑い声が聞こえてきた。それは、俺の内側から聞こえる。ケットだ。

――眠ってるだけだと思うよ。

「眠ってる？」

言われて、カヤをもう一度見つめる。確かに、すう、すう、という寝息をたてている。表情もおだやかだ。確かに、寝てる。体力を消耗したんだな。そりゃそうだ。撃たれて血を流して、それからその七倍の痛みを体験してもがき苦しんだんだ。眠りに落ちるのも分かる。

俺は、ふうっとため息をついた。

「驚かすなよ」

そういって俺もカヤの隣にごろんと横になった。俺も……体力、精神力、全部使い果たしたよ。

ふと、床に転がる携帯電話が見えた。そういえば、さっき放り投げたな。今日だけで、二回も落としたことになる。俺は手をのばし、

携帯電話をとった。そういえば、今、何時だろう。安心したら、そんなどうでもいいことが気になった。
携帯電話を開くと、時間よりも気になるものを見つけた。八件もの不在着信。それは全部、曽良からだ。

「……」

曽良のばかやろう。そういえば、なんでお前がついていながら、カヤが連れさらわれてるんだよ。必死すぎて、気づいていなかったな。ええい、せいぜい心配しろ。それが、お前の罰だ。俺は携帯電話をとじ、ポケットにつっこんだ。性格悪いな、俺。……やっぱ、無事は知らせよう。俺はまた携帯電話を取りだし、メールを打った。
「カヤ、無事」とだけ打って送信すると、満足して床に置く。
横に顔を向けると、そこにはカヤの寝顔があった。俺は手をのばし、頬をなでた。温かい。自然と頬がゆるんだ。隣で、カヤが穏やかに眠っている。それだけで、こんなに嬉しいなんて……。
つい、抱きしめたい衝動にかられる。でも、そんなことをして起こしたくはない。今は休ませてやりたい。なら、せめて……ほんの少しでいい。カヤに触れて、生きている心地を味わいたい。俺は頬に触れていた手を、そうっと首元へとつたわせた。つやのある肌。なめらかできめ細かい感触。俺の鼓動が、段々と早くなっている。無意識に、その手はさらに下へと向かう。赤く血で染まった胸元を撫で……

「え！」

俺はハッと我にかえる。目に飛び込んできたのは、カヤの赤く染まった下着。傷ばかり気にして、とんでもないことをほうったらかしにしていた。そうだ。傷をみるために、シャツを破ったんだった！　カヤの胸元はあられもない姿になっている。俺はあわてて体を起

こし、ブレザーを脱ぐ。下着を隠すように、それをカヤにかけ、ふうっとため息をもらす。心臓が、騒いでいる。さっき……俺、何してたんだ。俺は自分の手を見つめる。悪いことをしたような、変な緊張感で胸がやけるようにあつい。カヤが寝てるすきに、体を触るなんて……変態だろ。自己嫌悪に陥りながらも、胸は高鳴っている。どうやら俺は、後悔はしていないようだ。俺も男だってことか。カヤにかけてやったブレザーに目をやる。どちらかというと、あのまま続ければよかった、という後悔のほうが……。

――聞かなかったことにするよ。

「あ……」

しまった。ケットがいるんだった。俺の顔は一気に赤くなる。最悪だ。恥ずかしすぎるだろ、今のは。ったく、もう。本当に、やりずらい。

それにしても……と、俺は気を取り直すように、咳払いをした。またカヤの隣に横になる。目を覚ましたカヤは、どこまで覚えているんだろうか。あれだけの出血だ。撃たれてからのことは、朦朧としていてはっきりは覚えていないだろう。いや、そう願う。だが、撃たれたことは覚えているよな。怪我が治っていることを、どう説明しようか。

「う～ん」

俺はそううなりながら、目をつぶった。

――かずゆき？

ケットの声が聞こえる。俺は、ふっと微笑した。悪い、俺もちょ

っと寝る。

――ええ！？　ここで？

ちょっとだけだよ。すげぇ、疲れた。自然と、ため息がもれる。本当に……疲れた。

すると、しばらくしてから、やれやれ、というケットの声が聞こえる。

――仕方ないなぁ。ケットが見張ってるから。何かあったら起こすね。

ケットのその言い方……ままごとで母親を演じていた砺波を思い出した。俺は、目をつぶりながら、ふっと笑う。

「頼りになるなぁ」

えへへ、という嬉しそうなケットの笑い声がする。

俺は目をつぶり、カヤの笑顔を思い浮かべる。目を覚ましたら、まずなんて言おうか。いろいろ話さなきゃいけない。伝えなきゃいけないことがたくさんある。でも、とりあえずは……君を抱きしめたい。

新しい朝

ここ……どこ？　目を開くと、ぼんやり光がはいってくる。まぶしい。

私、どうなったんだっけ？　確か、和幸くんが長谷川さんに銃を向けて……それから、それを止めようとして、銃をつかんで……あ！　そうだ、撃たれたんだ。確か、このへん……と、私は右胸の上に手をあてる。このへんに、弾があたって……あれ？　傷がない。あれ？　おかしいな。どうして？

「あ……」

私は、ハッとした。もしかして、ここ……天国なんじゃ？　私、死んじゃったの？　そうだ。だって、光に満ち溢れているし、傷はなくなっているし。

「うっ……」

やだよ。私、死んじゃったの？　涙がこみあげてくる。もう、和幸くんに会えないんだ。そう思うと、胸が締め付けられる。

「うぅ……和幸くん」

嗚咽しながら、そうもらした。そのときだった。

「カヤ」

「！」

横から、その声はした。すぐ隣から。私はゆっくりと顔を横にむ

ける。

「和幸くん？」

光を背にして、和幸くんがそこにいた。横になった状態で、上半身だけ起こして私をじっと見つめている。穏やかな表情だ。私は、頬を緩めた。和幸くんの右手が私に伸びて、そっと私の頬をなでる。

「大丈夫か？」

いつもの、そのセリフだ。涙が勝手にあふれてくる。頬に感じる。和幸くんのぬくもり。幻じゃない。夢じゃない。

「私、生きてるの？」

震える声でそう尋ねた。すると、和幸くんは「ああ」と優しく微笑んで頷いた。

「……生きてる」

私は目をつぶり、和幸くんの手にふれた。生きてる。こんなに、嬉しいことはない。私はまだ、和幸くんと一緒にいられるんだ。

「おはよう」

和幸くんがそういったのが聞こえてきた。優しい声。愛に満ちた声。

「おはよう」と私は返事をする。でもそれは、ひどい涙声でとても聞き取れるものではなかったと思う。

＊　＊　＊

カヤが目を覚ました。俺は、夕べ、ほんの少しだけ眠り、そして朝までずっと彼女の寝顔を見ていた。時間は気にならなかった。ただ、見つめていたかった。ここから離れるべきだ、と思いつつも……カヤを起こしたくはなかった。隣でカヤが穏やかに眠っている。それがたまらなく嬉しくて、幸せだったんだ。

「おはよう」

カヤは涙を浮かべ、笑顔でそう返事をした。震えた涙声まで愛おしく思えてしまう。重症だな。

俺はその唇を見つめ、夕べのことを思い出す。拳銃で彼女を殺しかける前のこと。教卓の前での出来事。つい、もう一度……彼女の唇を確かめたくなった。俺はゆっくりと、顔を近づけようと体を倒し……

「なにが、あったの？」

「あ……え？」という、間の抜けた声がでた。あわてて体をひく。

なにやってんだ。俺……つっぱしりすぎだよ。いきなり、キスって……カヤは、病み上がりというか、死に掛けたんだから。もっと、ほかにしなきゃいけないことがあるだろ。

「私……撃たれた、よね？　なのにね、傷が……ないの」

ぎくっと、心臓がとびはねた。いきなり、きた。この質問。

「あぁ……」

「どうして？」

やべ。一晩考える時間があったのに、何も思いついてない。ずっと、全然違うこと考えていた。起きてからの、カヤとの新しい生活を……。時間の使い方、間違ったよなぁ。そもそも、カヤを撃ったのは俺なのに。もっと罪の意識にさいなまれるべきだ。カヤが助かったことに興奮しすぎて、感覚が麻痺している。それにしても、夕べはとんでもない夜だった……。って、だから、言い訳を考えろって。

「和幸くん？」

寝転がったまま、カヤは首をかしげた。そろそろ答えなきゃ、あやしまれる。ってか、もうあやしまれてるかもな。なんていえばいい？　『神さまの剣を借りて、傷を治したんだ』。言えるわけがない。それに、『災いの人形』のことをカヤにバラすと、なにやら罰が下るって話だしな。慎重に、うまい言い訳を考えなくては。

「麻酔銃……だったんだ」

「へ？」

気づけば、そんなみっともない言い訳が口から出ていた。麻酔銃？　おいおい。俺は曽良より馬鹿なんじゃないか。

「ま、麻酔銃？」

カヤが、明らかに困惑している。どちらかというと……なんで、そんな嘘を？　という表情だ。

「あぁ、えっと……」と、俺は目をそらし、口ごもる。下手に嘘を

ついても、カヤを心配させるだけかもしれない。俺はアドリブに弱い。俺の様子が変だ、とカヤは不安になるだろう。うまく、この状況を切り抜ける自信は……ない。といって、本当のことを言えば、神さまのお怒りがくだる。となると……

「カヤ」

俺は真剣な表情でカヤを見つめた。カヤは、いきなり俺が真面目になって驚いたようだ。びくっと体を震わせ、目を丸くしている。

「……カヤ。お前の誕生日まで、待ってくれないか？」

「え？」

嘘はもうつきたくない。俺たちの関係に、もう嘘はいらない。だから、俺は……約束をする。嘘をつくかわりに、誓いをたてる。

カヤの誕生日。それは『収穫の日』。世界とカヤの運命が決まる日。

「その日が過ぎたら、全部話すから」と、俺は力強く言う。『収穫の日』に、『テマエの実』を食べなければ、カヤは人間でいられる。そしたら、もう神さまがどうとか、世界がどうとか……そんなことを気にすることなく、俺たちは二人の人生を送れる。それまで、なんだ。それまで……

「それまで、何も聞かないで……俺を信じてくれ」

無理がある頼みだよな。銃で撃たれて、目を覚ませば傷は消えている。それで、何も聞くな、て。でも、それ以外に俺には何も言えない。俺は、カヤから目をそらしていた。答えを聞くのが……正直、こわかった。

しばらくしてから、「……麻酔銃」というカヤの小さな声が聞こえ、俺はハッとする。カヤにまた視線を戻すと、カヤは天井を見つめていた。疲れが残る顔に、微笑がうかぶ。

「麻酔銃、てことにするね」

「……！」

カヤ……俺は胸が苦しくなった。俺を、信じてくれるんだな。

「ありがとう」

気づくと、そうつぶやいていた。カヤは俺を見つめ、小さく頷いた。

夕べの出来事

「なぁ」と、俺はやや間をあけてから、気になっていたことを尋ねる。「ところで、どこまで、覚えてるんだ？」

この様子だと、俺が『聖域の剣』で貫いたことは覚えていないだろう。あの剣はなに？　とか聞いてこないし。

カヤは俺に聞かれ、しばらく考えてから、ゆっくりと唇を動かす。

「撃たれて……胸の辺りが熱くなって……あとは、ぼんやりとしか覚えてない。とにかく、負けちゃだめだって思って、意識を保とうって……そればかり考えていた気がする。覚えているのは……それだけ」

そうか……と、俺はほっと安堵した。やはり、薄れる意識で戦っていたんだな。おかげで、細かいことは覚えていない、か。

「でも」と、カヤは不思議そうに声を出した。「変な夢をみたの」

「夢？」

カヤが俺をじっと見つめてくる。

「和幸くんに、刺される夢」

「！」

あ……俺は言葉を失った。覚えてるんじゃないか！

「刺される？　俺に？」

あぁ、声が裏返ってるよ。しっかりしろ。

「うん」とカヤは恥ずかしそうに笑った。「大きな剣だったの。まるで、勇者の剣みたいな」

「ああ……そうかぁ。おもしろい夢だなぁ」

俺は、はは、と変な笑い声をあげる。

「すごいリアルだったんだよ？　痛みもあったの」

カヤは眉をひそめ、つぶやくように話す。そりゃあ、あれだけ苦しんだんだ。覚えてるよなぁ。

「変だよね。和幸くんにさされる夢なんて」

俺は何も答えられない。刺したのは、本当だから。助けるためだとはいえ、嫌な気分だった。もう二度と、あんなことはしたくない。もう二度と……

＊　＊　＊

和幸くんにさされる夢。すごく恐かった。もしかしたら、和幸くんに撃たれたせいなのかな。だから、あんな夢を……。でも、撃たれたのは、私がドジだったからだ。あれは事故だった。私が悪い。だけど……あの剣。あれは、嫌。よく分からないけど、すごく嫌な感じがした。そして、和幸くんは、迷わずそれを私に突き刺した。すごく、苦しかった。悲しかった。とても、不吉な夢。

「なぁ、カヤ」

和幸くんに急に名前を呼ばれ、私は顔を向けた。和幸くんは相変わらず、上半身だけ起こして私を見ている。

「悪かった」

「！」

え……いきなり、なに？　それも、そんな深刻な顔で。

「もう少しで、俺は……」

あ。私は、和幸くんが何を言おうとしているのか分かった。私の馬鹿。あんな夢の話をするからだ。

「俺は、お前を殺……」と和幸くんが言いかけたところで、私は口をはさむ。

「ねぇ、和幸くん。夕べのこと、なかったことにしよう」

「！」

和幸くんはぎょっとしている。こんなこと、言われると思ってなかったよね。でも、私は……あんな銃弾一つで、私たちの関係を――せっかく始まった新しい関係を台無しにしたくないの。

「私たちは……ここには来なかった」

「カヤ……？」

「私は、曽良くんと遊んで、それから和幸くんの部屋に戻った。そうしない？」

「……」

「和幸くん？」

そうだな、て言ってもらえると思ったのに……和幸くんは、どこ

か寂しそうな表情で黙ってしまった。あれ？　いい提案だと思ったんだけど。なにか、悪いこと言ったのかな、私。
和幸くんは私から目をそらし、何か考え込んでいた。しばらくして、やっとその黒い瞳が私のほうへ戻ってくる。見つめられ、ドキッとした。今更だけど……和幸くんって、色っぽい。
和幸くんは、どこか言いにくそうに口を小さく動かして、私に尋ねる。

「キスも……なかったことにするのか？」

＊　＊　＊

夕べのことはなかったことにしよう。カヤはそう提案してきた。カヤは俺を気遣ってそう言ってくれたんだろう。それは分かる。でも……夕べは、俺にとって、最悪で、そして最高の夜だったんだ。オリジナルと遭遇して、カヤを撃って殺しかけたんだ。確かに、人生最悪の夜だよ。けど、忘れたくない、大事なこともあったんだ。それは……初めて、カヤと――。

「キス？」

カヤが眉をひそめている。まるで身に覚えがないがないかのような表情だ。なんだ、この反応？　俺の脳裏に、嫌な予感がはしる。いや、まさか。そんなわけない。俺は、苦笑しながら確認する。

「夕べ、しただろ。そこで」
「……そこで？」

おい、悪い冗談だよな。

「覚えてない、のか？」

カヤは、じっと黙ってしまった。まさか、記憶が混乱している？　確かに、事故で記憶が一部なくなったりする、てドラマとかでよく見るし。って、その一部の記憶が……俺とのキスかよ！？　なんでよりによって、そこなんだよ。俺はがっくりと頭を垂らす。こういう場合、どうなるんだ？　全部、ナシか？　夕べ、一晩中、頭の中で思い描いていたことは全部起こらない？

――いろいろ、楽しみにしてたのにね。

いきなり、ケットの声が頭に響いた。うるさい！　ああ、もうこの天使をどこかにやってくれ。

「キス、したの？」

「……」

カヤはもう一度聞いてきた。これは……完全に覚えてない。俺は、苦笑いでカヤを見下ろす。

「覚えてないなら……いいんだ」と、俺はため息まじりにつぶやく。いや、よくないけどな。もう一度、やり直しか？　いや、どういうタイミングでどうやり直せばいいんだよ？

俺ががっくりと肩をおとしていると、カヤの手が俺の首筋に伸びてきた。

「もう一回」と、カヤは顔を赤らめてつぶやく。「もう一回、してくれたら……思い出すかも」

俺は、きょとんとして彼女を見つめた。いたずらっぽい笑顔で俺

を見上げている。

「あ……」

つい、笑みがこぼれた。俺は、参ったな、と頭をかく。

「覚えてんだろ」

「覚えてないよ」カヤは、色っぽく囁くようにそう告げる。「だから……思い出させて」

カヤは俺の首をひっぱり、自分のほうによせた。横になっている彼女に覆いかぶさるようにして、俺はカヤの唇にキスをする。

朝の廃校の教室で、俺はもう一度、彼女の唇の感触を確かめた。やわらかい感触。高鳴る鼓動。焦燥感。そしてじわじわとやってくる恍惚感。もっと、俺はカヤを知りたい。ずっと、傍にいたい。いつから、こんなにカヤに惚れていたんだろうな。

君は、俺に本当の人生をくれた。幸せを教えてくれた。生きる意味をくれた。そして……この、心地よい感情をくれた。誰かを、心のそこから想う気持ち。何よりも、誰かを守りたいという気持ち。

大げさじゃない。俺は……世界が滅んでも、君を守りたいと思った。きっと、これが……愛なんだと思うんだ。

カヤ、俺は君が好きだ。

＊　＊　＊

「どうだ？」

唇をゆっくりと離し、和幸くんはそう尋ねた。私は余韻にひたりながら、目を開き、私に覆いかぶさる和幸くんの顔を見つめる。不

思議。夕べと違う。胸が苦しくない。ほんわか温かい。心がすごく落ち着く。居心地がいい。

私は、遠慮がちに微笑む。

「まだ……思い出せない」

和幸くんは、フッと呆れたような笑みをみせる。子供のわがままを優しく許す……そんな表情だ。ごめんね、嘘ついて。少しね、いじわるしたくなったの。だって、キスも……なかったことにするのか？　なんて、変なこと言うから。なかったことにすると思う？

いたずらっぽく笑ってから、私はまた目をつぶった。和幸くんの手が私の髪にふれ、私の唇にまた優しく彼の唇がふれる。今度は……さっきよりも長いキス。じっくり味わうような、ほんのちょっと激しいキス。

たとえ何があっても、あなたとのキスを忘れたりしない。ずっと、覚えてるから。もし、私が記憶を全部失ったとしても……こうしてキスをして。そしたらきっと、思い出すから。

それくらい、あなたを好きな自信があるの。

ペンギン

和幸は、床に落ちている銃をひろいあげる。いつも『おつかい』のときに使っている、古い回転式拳銃（リボルバー）だ。これを、十三のときから使ってきた。なのになぜか、初めて持ったときのように手が震える。持つだけで、あのとき引き金を引いた感触が戻ってくる。カヤを撃ったときの感触。そして、青ざめたカヤの表情。和幸は、震えながらため息をつき、目をつぶった。もう、きっと無理だ。和幸は、そう確信した。そして、ある決意を心に誓う。夕べから覚悟は決めていたのだ。ただ、本当に自分がそれを実行できるか自信がなかった。それは、和幸の人生でとても大きな選択になる。自分の人生が、大きく変わるだろう。だが……もう決めた。和幸は目を開き、拳銃を見つめる。

「今まで、ありがとな」

小声でそうつぶやいて、腰にそれを差した。ちょうど、そのときだ。

「もうこっち向いていいよ」

カヤの声がして、和幸はハッとし、振り返った。

カヤは、ぶかぶかのワイシャツを着て、その上からブレザーを羽織っている。

「やっぱり、大きいね」

恥ずかしそうに微笑むカヤ。妙に、色っぽい。和幸は顔を赤らめた。

破れたカヤのワイシャツの代わりに、和幸が自分のを貸したのだ。おかげで和幸は、Tシャツの上にブレザーというおかしな格好になっている。

「ごめんね、借りちゃって」

カヤは申し訳なさそうに言う。和幸は、首を横にふり、カヤに歩み寄った。

「似合ってるよ」

その言葉に、カヤは腕を組み、ムッとした表情を浮かべる。

「それは……絶対、嘘」

これのどこが、とあまった裾をひらひら和幸の前にゆらした。和幸は、はは、と笑う。

「ペンギンみたいでかわいいじゃんか」

「ペンギン……」

カヤは、え、と目を丸くし、たらんと垂れているシャツの袖を見つめる。これが、ペンギン？　まぁ、和幸くんがかそれでかわいいと思うなら……。カヤは頬を紅潮させ、はにかんだ笑顔をうかべた。

「買って来た服、藤本さんのとこだよな」

「え？」

突然、和幸が尋ねてきた。砺波と一緒に買いに行った洋服のことだろうか。カヤは、ええと、と思い出す。

「そう……かも。藤本さんの部屋だ」
「じゃ、一回、カインノイエに戻らないとな」
確かに、このまま和幸の部屋に戻っても、服がない。
「ごめんね」と謝ると、和幸は「いや」と首を横に振る。
「どっちにしろ、藤本さんに会うつもりだったから」
「……そう」
そのときの和幸は、どこか大人びた表情をしていた。その目は真剣で、何かを吹っ切ったようなすっきりとした表情。なんだろうか、とカヤは首を傾げた。

＊　＊　＊

「朝だぁ」
カヤが、グラウンドに出たところで、ううん、と背伸びをした。俺はその背中を見て、目を細めた。カヤはすっかり元気になっている。少し疲れてはいるようだが、無事ならなんでもいい。神の剣か……と、俺は『聖域の剣』を思い出した。俺たち人間を救うための剣。俺は、目の前でカヤの傷が消えていくのを見てしまった。本当に……俺は、神のごたごたに巻き込まれたんだな。今更ながら、そう実感する。そして、俺はカヤの命を助けた。世界の終焉の鍵をにぎる女を。もう『巻き込まれた』じゃすまない。俺は足を踏み入れたんだ。後戻りはできない。
「どうしたの？」
「え」

カヤが、ぼうっと突っ立っている俺に振り返った。

「帰ろう」

そう言って、カヤは俺に手を伸ばす。その手を見つめ、俺は心の中でつぶやいた。こんなに幸せでいいんだろうか、と。不安さえ、感じる。昨日まで、俺は諦めていたのに。カヤが曽良を選んでも、彼女の笑顔さえ見られればいい、と強がっていたのに。しまいには、なげやりになって全部放り投げようとした。今考えると、本当にかっこ悪いな。

俺は、カヤの手をとった。嬉しそうに微笑む彼女は、やはり美しい。この笑顔を独り占めにして、罰でもあたらないだろうか。

そんな俺の心配をよそに……彼女はぎゅっと俺の手を握り締め、俺の腕に体をよせてきた。こんなに密着されると、さすがに緊張する。

「和幸くんの手、好き」

カヤはつぶやくようにそう言った。

「つらいとき、私を連れ出してくれるから」

カヤはそういって、上目遣いで俺を見つめてくる。

あぁ、もう……罰でもなんでもあたればいい。とりあえず、俺は今、幸せだ。

＊　＊　＊

二人で手をつなぎながら校庭を歩いていると、カヤが「そういえ

ば」と思い出したように声をだした。

「そういえば、なんで分かったの？」

「なにを？」

「あの教室。なんで、私があそこに隠れてるって分かったの？」

あとから来たはずの和幸が、正義よりも先に自分を見つけたのが、不思議で仕方なかった。和幸がここに向かっているのは、正義の話で分かっていたが、あんなに早く自分を見つけてくれるとは思ってもいなかったのだ。完全に、あのとき教室に入ってきたのは正義だと信じきっていた。

すると、和幸は、ちらりと校舎に振り返った。

「校舎、うちの高校と似てるだろ」

「え」

カヤも校舎に振り返り、その形を確認する。本当だ。カヤは、言われて初めて気づいた。確かに、似ている。

「だから、カヤが向かうとしたら、あそこなんじゃないか、て思って」

「どういうこと？」

説明になっていない。カヤは首をかしげた。似ているからって、なんであの教室なのだろうか。

「ほら、あの教室さ、部室と同じ場所だろ」

「部室……」

それは、劇の稽古をしている教室のことだ。和幸はそれだけ言っ

て、また前を向いた。カヤは、驚いてきょとんとする。なるほど、だから自分はあの教室に一目散でかけていったんだ。校舎三階の西のはじ。そこは、放課後、いつも劇の練習をしているあの部室と同じ場所だ。まったく、意識していなかった。

「そっか」と微笑んで、和幸を見つめる。私が、あの劇を――あの空間が好きなこと、気づいていたんだね。カヤは心の中でそうつぶやいた。ほんのささいなことも、そうやって見ていてくれる。そういう優しさが、カヤはたまらなく好きだった。

真紀

タクシーをつかまえなきゃな、と和幸くんが隣でつぶやいて、それからぶつぶつ何かを言っている。耳をすませば、この辺はタクシー少ないんだよな、とかなんとか言うのが聞こえた。それに、早朝だしね。私は心の中で相槌をうつ。

「あ」

ふと、私の目に、白いコンクリートの小さな建物が飛び込んできた。正門のすぐ近くにある体育倉庫。つい、ぎゅっと和幸くんの手を強く握り締める。

「どうした？」

それに気づいたのか、和幸くんが優しく声をかけてきた。

「あ、なんでもない」

わざわざ、話すほどのことでもない。ちょっと、大野って人のこと……思い出してしまっただけ。和幸くんに変な心配かけたくないし。

「曽良でも呼び出して、タクシー捕まえさせるかぁ」

和幸くんは相変わらず、帰る方法を探していた。私は通り過ぎざま、横目で体育倉庫を見つめる。私はもう少しで、ここで……そう思うとゾッとする。考える必要はないのにね。もう、大丈夫なんだから。ただ、気になるのは……なぜか、扉がなくなっていること。

夕べまではあったのにな。どうしたんだろう。よく目をこらせば、倉庫の中でひしゃげて転がっている。まるで、外からふっとばされたみたい。まさか……和幸くん、かな。私は、苦笑してしまった。

そのときだった。私は……体育倉庫の中に、ある影を見つけた。ここからじゃ、はっきりとは分からないけど……誰かが倒れている。

「あれは……」

嫌な予感がする。私は和幸くんの手を離し、体育倉庫に走り出した。

「あ、おい！？　カヤ！？」

後ろから、和幸くんの戸惑う声が聞こえる。私は、走りながら振り返る。

「長谷川さん、倒れてるの！」

「え！？」

そう。あの茶色い髪。あの服装。私には見覚えがあった。倒れているのは、和幸くんのオリジナル……長谷川さんだ。

＊　＊　＊

「長谷川さん！」

カヤは、体育倉庫に駆け込んで、倒れている青年に呼びかけた。青年は、うつぶせに倒れている。床には、血のあと。カヤはぞっとした。

「長谷川さん！？」

あわててしゃがみこみ、青年を仰向けに動かした。カヤはその顔を見て、言葉を失う。もう、この青年が正義かどうか、分からなくなっていた。頬や目ははれ、歯もかけている。頭からは血がながれ、額が赤くそまっている。

「正義……？」

遅れて入ってきた和幸も、正義のその状態に呆然とした。

「長谷川さん、しっかりして」

カヤは、正義の頬に手をおき、優しくなでる。和幸はその様子をみて、改めて彼女の心の深さを実感した。騙されてさらわれて、ひどい目にあわされたというのに……よくそこまで本気で心配できるな。自分は、そこまで器は大きくない。正義を逃がしたのは、カヤのため。俺は許したわけじゃない。和幸は、冷たい視線で正義を見つめながら、そんなことを頭の中で考えていた。

「和幸くん、救急車！」とカヤは切羽詰った表情で振り返る。

「呼ばなくていい」

かすれた低い声が聞こえた。カヤはハッとして、正義に目を戻す。腫れた目を、できる限り開けようとしているのが分かる。

「長谷川さん！」

カヤはほっと安堵し、微笑んだ。そうっと正義の頭を抱えあげ、ひざにのせる。

和幸はそれを見てぎょっとした。いくらけが人とはいえ、膝枕はやりすぎではないか。それに、相手は一応自分のオリジナルだ。いい気分ではない。気に入らない表情を浮かべて、二人のほうへ歩み寄る。

「なにがあった、正義？」

心配する様子もなく、和幸は腕を組んでそう尋ねる。だが、正義はぴくりとも反応しない。じっとカヤを見上げている。

「病院は、だめだ……俺は大丈夫だから」

俺は無視かよ、とますます和幸は気分を害す。

「でも、ひどい怪我だし」

「真紀……」

「え？」

いきなり、正義は体育倉庫の天井を見上げ、朦朧としながらその名前をつぶやく。

「真紀……真紀……」

壊れたプレイヤーのように、その名前を繰り返し続ける。さすがにその様子に、和幸も眉をひそめた。

「真紀？」カヤはアドバイスを求めるように、和幸を見上げる。「誰？」

クローンだといっても、分かるわけがない。和幸は力なく首を横

にふった。

「とりあえず……タクシー拾ってくる。病院に連れて行こう」

「でも、病院は」とカヤは慌てて引き止める。本人が嫌だ、というのだ。何かしら事情があるだろう。

和幸にも、それは分かる。だが……このまま、放っておくわけにもいかない。というより、カヤがそれを許さないだろう。まさか、正義も治療してほしくないわけではないはずだ。きっと、警察沙汰を避けているだけだ。

「カインノイエが世話になってる医者がいる。その人なら、事情も分かってくれる」

カヤの返事を待つことなく、和幸は体育倉庫から出ていった。タクシーを拾いにいったのだ。だが、この辺はタクシーが拾いにくい、とさっき文句を言っていたはず。カヤは、ふうっとため息をつく。しばらくかかりそうだ。カヤは正義へと視線を戻した。相変わらず、ひざの上で朦朧としながら「真紀」とつぶやいている。

「真紀って誰なの？」

あざに触れないように気をつけながら、カヤは正義の顔をなでた。

「真紀、すまない……すまない」

気づくと、カヤの手には正義の涙がつたっている。カヤはハッとし、静かに涙を流す正義の瞳をじっと見つめた。もしかしたら、彼のあの異常な行動には、何かわけがあったのかもしれない。カヤは、そう思い始めていた。

＊　＊　＊

すぴー、すぴー、という気持ちよさそうな寝息が、待合室に響いていた。ソファに腹をだして寝ている少年が一人。

ここは自宅を改装した小さなクリニックだ。白を基調とした壁。待合室には水槽と大型テレビ。そして、寝心地のいいソファがある。

「曽良くん、起きなさい」

三十代後半。縁無しめがねをかけた男性が、ぱたぱたとスリッパをならして待合室にはいってきた。四角い顔に、くっきりとした二重。目じりには、同世代よりもずっとはっきりとしたシワがきざまれ、さらさらとした黒髪は、七三にわけられている。

「ほら、曽良くん！　診療時間がくるよ」と、ソファにだらしなく寝ている少年の尻をはたく。

「筒井さぁん……俺、頭が悪いんだぁ。診察してくださぁい」

ソファに寝ている少年、曽良は、えへへ、となぜか嬉しそうにそう言った。筒井は、大きくため息をつく。

「それは、自分で治せるでしょう」

「生まれつきでしたぁ！」

曽良は、ムンクの叫びのように、手を両頬におしつけた。

「いいから、さっさと起きなさい！　やることがあるんでしょう？」

呆れて筒井は、曽良の尻を今度は思いっきりたたいた。痛い！と叫んで、曽良はソファをごろごろしている。

「まったくもう……これが、未来のカインのリーダーですか」

やれやれ、と筒井は頭を横に振った。そのときだった。

ドンドン、と誰かが入り口のドアをたたくのが聞こえてきた。これには、曽良も驚いて飛び起きる。

「さて、一人目が来ましたよ」と筒井は白衣をなびかせ、入り口へと向かった。

曽良の土下座

「どうしました？」という声が聞こえて、扉が開かれた。現れたのは、思ったより若いお医者さんだ。三十代……だろうか。四角い輪郭にぱっちりとした目。表情からは優しさがあふれている。

「和幸くんじゃないか」と、白衣を着た男性は目を丸くした。「やっと来たんだね」

え？　やっと来た？　どういうことだろう？　和幸くんは来る前に電話でもしたんだろうか。隣に立っている和幸くんを私は見上げた。すると、和幸くんもいぶかしげな表情を浮かべている。

「やっと来た？」という呟きがかすかに聞こえた。どうやら、和幸くんも身に覚えがないようだ。なんだろう？　でも、それを聞く暇もなく、おや、と先生が声をあげた。

「どうしました？」

先生は、和幸くんが抱えている長谷川さんをまじまじと見つめている。和幸くんは思い出したようにハッとした。

「筒井さん。何も聞かないで、とりあえず、こいつを……」

和幸くんは申し訳なさそうにそう頼んだ。お医者さん――筒井先生、というらしい――は、最後まで聞くことなく、「わかっていますよ」と扉を支え、私たちを中へと促す。

私、挨拶しなくて大丈夫、かな。こんな状況だし、仕方ないよね。筒井先生の前を通り過ぎるとき、とりあえず私は会釈だけした。

中へ入ると、私と和幸くんは意外な人物に目を見開く。

「かっちゃん、カーヤ！」

なんと、中にいたのは曽良くんだった。わーい、と両手をあげてとびはねている。なんで、病院に曽良くんがいるの？

あ……そういえば、夕べ、私を連れ出したのは、長谷川さんだったわけだから。曽良くんに連絡いれてくれてるわけないよね。あれ！？　じゃあ、曽良くん、どう思ってたんだろう？　私がいきなり消えたってことになるんだよね？　心配させたんじゃ……いえ、目の前にいる曽良くんは心配していたようには見えない。アヒル口をにぱっと開けて、また和幸くんにかけよってきた。

「どうだったの？　熱い夜をすごしたわけ？」と、ニヤニヤして和幸くんに迫る。どうやら、和幸くんがかかえている長谷川さんには気づいていないみたい。……うーん、そんなわけはないよね。幽霊じゃないんだし。気づいているけど、興味がない……のかな。曽良くんは、やっぱりどこかつかめない。それに、熱い夜って、どういうこと？

「曽良……」和幸くんの、低い声が聞こえた。「お前とは、あとでゆっくり話す」

和幸くんは、厳しい目つきで曽良くんを睨みつける。曽良くんは、え？　と動きを止めた。さすがに、和幸くんが怒っているのはわかったのかな。

「こっちに運んでください」と、筒井先生は和幸くんを急かした。筒井先生を追うように、和幸くんは長谷川さんを抱えて奥の部屋へと連れて行く。

私はその背中を見つめて、とりあえず、ほっと肩をなでおろした。とりあえず、お医者さんがついていれば大丈夫だ。

「カーヤ」ぽつんと残された曽良くんが眉をひそめて私に声をかけてきた。「かっちゃん、怒ってたように感じたんだけど……」

「うん」

私は、申し訳なく微笑む。きっと和幸くんは、私がさらわれたことで曽良くんを怒ってるんだ。曽良くんと出かけている間に、長谷川さんに連れ去られたわけだから。でも……あれは私があっさり騙されたから悪いのに。そうだ、それをちゃんと伝えよう。曽良くんが私のせいで怒られるのを見たくはない。

「あとで、私から言っておくから、大丈夫だよ」

「言う？　何を？」

私は言葉に詰まる。さすがに、「なんでもない」じゃごまかせないよね。いつかは和幸くんから聞くだろうし。でも、一体どこから話せばいいんだろう。

「あのね……」

＊　＊　＊

ある程度、事情を説明したあとだった。外に出ていなさい。筒井さんにそう言われ、俺は診察室からでた。怪我のこと以外は、筒井さんは本当に何も聞かないでくれた。あんな腫れあがった顔でも、俺に似ていることはさすがに気づくだろう。なのに、顔色一つ変えずに、治療を始めた。さすが、カインノイエのお抱え医師。理解があって助かる。

それにしても……最後に言われた言葉が気になるな。

――藤本さんの部屋は、曽良くんに聞きなさい。

どういうことだ？　藤本さんの部屋？　藤本さん、ここに来てるのか？　人間ドッグ？　まさか……藤本さんの身に何かあったわけじゃないよな。まあ、曽良に聞けば分かるか。そう思い、待合室へと体を向けた。

曽良の悲鳴にも似た叫び声が聞こえたのはそのときだった。

「ごめぇえん！！」

なんだぁ？　こじんまりしてるけど、ここも病院だ。なんて声をだしてんだよ？

俺はあわてて待合室へとかけこんだ。そして、その光景に呆然とする。

「曽良くん、大丈夫だから」

「ごめんよお！！」

曽良が、カヤに土下座をして必死に謝っていた。俺は、言葉をなくす。なんだ、これは？

「和幸くん！」と、カヤが俺に気づいてヘルプを求めてきた。あ、いかん。傍観者に徹しようとしていた。俺は曽良に駆け寄ると、その腕をつかみ、無理やり立たせる。

「なにしてんだよ？」

すると曽良は、今度は俺に泣き崩れるように抱きついてくる。

「ごめんよぉ、かっちゃぁん」

ええい、なんなんだよ？　相変わらず、うっとうしい！

「どうなってんだよ、カヤ？」

曽良との会話はもう無理だ。俺はカヤに尋ねることにした。

「夕べのこと、簡単に話したの。そしたら……」

申し訳なさそうな表情だ。あ、なるほど。俺の代わりに、何があったか話してくれたんだな。それで、こうなってるわけか。一応、責任は感じてるんだな。それなら、遠慮することはない。

俺は、俺に泣きついている曽良の肩をおさえ、体から離す。

「曽良、お前な……」

「かっちゃんだと思ったんだよぉ」

「いや、聞けって」

「トイレにいったふりして、様子みてたんだ。そしたら、かっちゃんが来て、カヤも喜んでついていったから。あぁ、よかったなぁ、て」

「だからってな、確認くらいしろよ」

「ごめぇんよぉ」

あぁ、もう無理だ。曽良はまた俺に抱きついてきた。やれやれ、と俺はため息をついた。

「カヤ」と、俺はカヤに視線をやる。「どうする？」

一番、ひどい目にあったのはカヤなんだ。これの対処もカヤが決めるべきだろう。正直、カヤの答えは大体予想がつくけどな。
カヤは、恥ずかしそうに微笑んだ。やっぱりな。答えは決まってるか。

「私も、確認しなかったから。曽良くんは悪くないよ」
「……」

やれやれ。優しいにもほどがある。普通の友人なら分かるが、曽良はカインなんだ。裏の世界で生きる子供。警戒心とか慎重さがもっとあっていいはずだ。みすみす、目の前で俺のオリジナルにカヤを連れて行かれるなんて……藤本さんが聞いたら本気で怒るぞ。まぁ、それもカヤは嫌がるだろうな。言わないで、て涙目で頼まれそうだ。
にしても……銃で撃ったことも気にしていないみたいだし、正義のこともう怒ってないみたいだし。ほんと、呆れるくらい心が広いよな。ま、そこがまたカヤの魅力なんだけど。

「だってよ、曽良」

よかったな、と俺にしがみついている曽良の背中をたたく。

「カーヤ」

曽良は生き返ったように明るい表情に変わり、俺から離れた。そして、今度はカヤに抱きつく。……え！？　おい、なんで抱きつく必要がある！？

「無事でよかったよぉ～」
「あ、ありがとう、曽良くん」

カヤは戸惑いつつも、そういって微笑んだ。
なに抱きついてんだよ！？　と曽良を引き離したくなったが……そんなことしても、かっこ悪いだけだよな。俺は、もう余裕をもっていいはずだ。そうだ、余裕をみせるんだ。あぁ、でもなんか落ち着かない。

「そっか、だからだったんだね」と、気が済んだようにカヤから離れ、曽良は俺に振り返った。なんだ、急に？

「夕べ、何度も電話したのに、出なかったから」

あ、そういえば……こいつから、不在着信いっぱいあったな。

「でも、メールしただろ？」

カヤ、無事。そうテキストしたはずだが。すると、曽良は呆れたような顔をして顔を横にふった。

「あのメール、意味わかんなかったよ」
「簡潔で分かりやすかっただろ」
「あまりにも変なメールだったから……てっきり、カーヤとラブラブしすぎて、頭がのぼせ上がっちゃったのかと思った」
「は！？」

何言い出すんだよ、こいつは？　ラブラブって……つい、カヤと目が合って、顔があつくなった。カヤも頬を赤らめている。確かに……思い当たることはあることはある。ぼんやりと、カヤとのキスを思い出し……って、そんなことを考えてる場合じゃないだろ。
頭を切り替え、俺は冷静になって考える。そうか。曽良は正義を

俺だと思っていたんだ。俺とカヤが出かけたと思っていたなら、こいつが心配して電話かけてくるわけがない。じゃあ、なんだったんだ？

「何の用だったんだよ？」

そう尋ねると、曽良は急に深刻な表情になった。こいつには珍しい顔で、俺はなんだか不安になる。

「実は、父さんが……」

父さん……？　それは、藤本さんのことだ。俺以外のカインは、藤本さんのことを『パパ』とか『親父』、『父さん』などと呼んでいる。あ……そういえば、筒井さんもさっき藤本さんの名前を出していた。藤本さんの部屋は曽良に聞け、て。

俺は、ざわっと胸騒ぎを感じた。一体、何があったんだ？

「藤本さんが……どうしたんだよ！？」

別れの決意

「藤本さん！」

和幸は、ある病室のドアを勢いよく開けて、中に飛び込んだ。そこは、清潔感のある小さな個室。花柄のカーテン。小型の液晶テレビ。木製のタンス。そして、部屋の端にはベッドが一台。そこに上半身を起こして座っているのは、六十になる男。手には、リンゴとナイフがある。入ってきた少年に、目を見開き、そして優しく微笑んだ。

「和幸」

和幸は、今にも泣きそうな表情でベッドへと駆け寄る。

「大丈夫かよ？　心臓発作って……」

「曽良から連絡がいったんだね。すまないね、心配させて」

藤本は、ベッドの上に置かれた小さなテーブルにりんごとナイフをひとまず置いた。

「体調は？」

「いいよ。なに、心配することはない。歳なだけだよ」

そういって、藤本は慰めるように和幸の腕をさする。だが、それで不安がぬぐえるわけがない。和幸は、疑うような表情で藤本を見つめた。

「ちゃんとした病院にいったほうがいいんじゃないのか？　筒井さ

んには悪いけど……ここじゃ、設備が……」
「失礼だよ、和幸」
声を落とし、藤本はそういさめる。和幸は、口をつぐんだ。
「救急車で運ばれるとき、ここがいい、とわたしが頼んだんだ。一番、落ち着くからね」
「……」
「それに、もうなんともない。心臓発作といっても軽いものだよ」
軽いものといっても心臓発作だ。和幸は心の中でそう反論する。
「でも、和幸の顔がみれてほっとした。来てくれて嬉しいよ。ありがとう」
和幸は何も言わずに、微笑んだ。ベッドのそばにある小さな机の上には、大量のフルーツやお菓子、花束が置いてある。きっと、藤本は同じセリフを、見舞いに来たカインの子供たちに言い続けているに違いない。
「それ、むくよ」と和幸は、ベッドの上のテーブルにおかれたリンゴとナイフを手に取った。藤本は、ああ、と嬉しそうに頬をゆるめる。
＊　＊　＊
リンゴをむく俺を見つめながら、藤本さんはおもむろに口を開いた。どこか、申し訳なさそうに。
「入院している間は、『おつかい』は中断しなくてはならないな」

俺は思わず、ナイフを持つ手を止めた。いきなり、『おつかい』の話か……心臓がまた段々と早くなる。藤本さんが心臓発作を起こしたって聞いたときとは違う緊張だ。俺は、すごく大事な話を藤本さんにしなくちゃいけない。でも、こんな状態の藤本さんに言っていいんだろうか。また体調を悪くしたら……と不安になる。

「そうだ」と、俺の心配をよそに、藤本さんは明るくきりだす。「わたしが入院中の間だけだが、曽良にわたしの代理を頼んだ」

「え！？」

俺は思わず、ナイフを落としそうになった。曽良に！？　と驚愕する。

「藤本さん！？　曽良って……本気かよ？」

「あの子は、カインの中で一番顔が広い。まあ、若いが……年上のカインたちからも信頼が厚いしな」

俺は、あからさまに不安を顔にだしていたと思う。確かに、曽良は人望がある。それも、年齢関係なく、だ。だが……あの曽良に代理を頼むのか？　性格もいい。信用もできる。ただ問題は……。藤本さんは俺の顔をじっと見つめてから、はは、と笑った。どうやら、俺の考えていることを読み取ったようだ。

「あの子は、頭のいい子だよ」

「ええ！？」

藤本さんはどこを見ているんだ、と失礼ながら呆れてしまった。曽良が頭がいい？　変なニックネームばかりつけるあいつが？　ギターケースに花束いれてた奴だぞ？　だが、藤本さんの目は真剣。

自信に満ち溢れている。藤本さんには……俺の知らない曽良が見えているのかもしれない。

「能ある鷹は爪を隠す。あの子にぴったりの言葉だよ」

「……」

鷹というより馬鹿な気がするけど。でも……藤本さんは俺たちの父親代わり。ずっと育ててきてくれた。藤本さんがそう言うなら、きっと曽良は鷹なんだろう。俺は、ただ微笑んだ。

「まあ、わたしが入院している間だけ、だ。連絡係をしてもらうくらいだろう。夕べのようにな」

そうか。連絡係……それで、あいつから不在着信が来てたのか。ここに居たのも、見舞いにくるカインを取りまとめるためだろう。一度に、カインが皆来たら、大混乱になるもんな。藤本さんも休めやしないだろう。

「それで、だ。和幸」と、藤本さんは頬を緩めて言った。

「はい？」

「お前に、曽良をサポートしてほしい」

俺は思わず、言葉を失った。

「カインの中で一番、しっかりしているのはお前だ。曽良もお前が大好きだし……」

「……」

藤本さんは、俺がすんなり頷くと思ったのだろう。黙り込んだ俺をみて、首をかしげている。

「どうした？」

ナイフをもつ手が震えだした。言うときがきたんだ。でも、大丈夫だろうか。藤本さんは昨日、心臓発作を起こしたばかりだ。違う日にしたほうがいいかもしれない。でも……だからといって、ここでいい顔して曽良のサポートを引き受けるわけにもいかない。嘘もつきたくない。

「和幸？」

藤本さんが心配そうに俺の顔を覗き込んできた。決断しなきゃ。今、言うか、言わないか。

「藤本さん……俺……」

言って、藤本さんを見つめた。

「なんだ？」

優しくそう尋ねてくる藤本さんに、俺は言葉を詰まらせる。だめだ。言えない。藤本さんは……ここまで俺を育ててくれた。自転車の乗り方を教えてくれたのもこの人だ。分数の割り算に、日が暮れるまでつきあってくれたのもこの人だ。広幸さんに叱られた俺を慰めてくれたのもこの人だ。同級生とのケンカに、耐えろと諭してくれたのもこの人だ。

俺はこみあげてくるものをこらえるように、うつむいた。

「和幸」藤本さんの手が、ナイフを握る俺の手に伸びてきた。「わたしには何を言ってもいいんだ。分かってるだろう？」

分かってる。藤本さんには何でも言えた。藤本さんが居てくれたから、俺はここまで生きてこれた。だからこそ……言うのがつらい。でも……俺は、決めたんだ。

――たまに、不安になることがあるんだ。君たちは、ここでちゃんと幸せに暮らしているのだろうか、と。

いつかの藤本さんの言葉が蘇る。俺はぐっと目を瞑り、覚悟を決める。もう後戻りはできないんだ。

「俺は……」と口にし、目を開く。「幸せだった」

「え？」

顔を上げ、藤本さんを見つめた。何を言い出すんだ、と不思議そうな顔をしている。俺は、安心させるように微笑んだ。

「カインノイエで……カインとして生きて、幸せだった」

「和幸？」

「でも……やらなきゃいけないことができたんだ」

俺の深刻な表情に、藤本さんは眉をひそめている。

俺は、手に持っていたナイフとリンゴをテーブルに戻し、腰から銃を出した。

「和幸！？」

いきなり銃を出したんだ。それはびっくりするよな。

「引き金が……」とつぶやき、俺はその銃を見つめる。やはり、俺

の手は震えていた。「引き金が、あんなに軽いとは知らなかった」

引き金の重さ。どれほど力をいれれば、引けるのか。分かっていたつもりだった。だから、俺は銃を扱える、と思っていた。これは身を守る武器だ、と信じていた。それは、買いかぶりだったんだ。引き金は、ずっと軽かった。俺が思っていたより、ずっと軽かったんだ。俺は、あんなにも簡単にカヤを殺しそうになった。

思い出しただけで、ゾッとする。俺は銃を、リンゴの隣に置いた。

「武器を手にしたら……そんなつもりじゃなかった、なんて通用しないんだ」

人を殺さなきゃいいんだ、と勝手に決めていた。銃を持っていても、それで人を殺さなきゃいい、と思ってた。でも、違うんだ。銃を持った時点で、俺は人殺しだ。俺が誰も殺さない、と誰がわかる？　俺にだって、そんなことわからないんだ。たとえ、俺がそのつもりでも……引き金は、あんなに簡単に引ける。銃に心はない。信用しちゃいけなかったんだ。

「和幸、なにがあったんだ？」

戸惑う藤本さんを、俺はじっと見つめた。

「本当に、誰かを守りたいと思うなら……きっと、武器を捨てなきゃいけないんだ」

「え？」

俺が誰かを殺して、それで喜ぶような奴は、最初から守る価値はない。カヤは……身を挺して、俺を守ってくれた。世界のルールの中に残れるように。

「理想論かもしれない。でも……違う方法を探してみたいんだ。誰も殺さずに、大切な人を守れる方法を……」

どうやら藤本さんは、もう俺の言いたいことを悟ったようだ。寂しそうな目で俺を見つめていた。でも、何も言うことなく、黙って俺の言葉を待っていてくれている。俺を信頼してくれてるんだ。

俺が、自分がクローンだという事実に耐えてこれたのも、この人の理解があったからだ。十二年もの間、俺を心から愛して育ててくれたから。だから……だからこそ、俺は信じてる。たとえ会えなくなっても、絆は消えない、と。

「俺……カインノイエを抜けます」

親父

カインノイエを抜ける。息子の一人がそう言った。今までこんなこと、ただの一度もなかった。怪我や病気で抜ける者はいたが、自分の意志で、目的をもってやめたいと申し出る子供は彼が初めてだ。藤本は、自分の顎が震えていることに気づいた。あふれてくるものがあった。目頭をおさえ、「そうか」と搾り出すように言う。やっと……この日が来たのか。藤本は、肩の荷がおりたような気さえした。自分は、ずっとこのときを待っていたんだ。藤本はそう思うと、あふれでる涙を止められなくなった。

子供たちのために創ったカインノイエという組織。やがてそれは、子供たちの生きる道を狭めることになってしまった。――少なくとも、藤本はそう感じていた。自分を神のようにあがめ、言われたことに何の疑問も持たずに実行する。彼らに、そんな偽りの『使命』を与えてしまったのは他ならぬ自分だ。ずっと罪悪感があった。彼らを『無垢な殺し屋』にしてしまったこと。彼らからカイン以外の選択肢を取り上げてしまったこと。それがやっと……やっと一人、自分で生きる道を見出した子供が現れた。

「藤本さん……すみません。恩を仇で返すような……」

独り立ちしようとしている息子は、申し訳なくそう言い出した。いや、違うんだ、と藤本は言おうとするが、喉がつまって声が出てこない。彼はどうやら、自分が泣いている理由を勘違いしている。誤解を解かなければ、と藤本はなんとか自分を落ち着かせた。

「ありがとう」

最初に出てきたのは、その言葉だった。少年は、え、と眉をひそ

める。藤本の表情に、怒りや悲しみはない。息子を誇りに思う父親の顔だ。

「信じる道をいきなさい。お前の人生なんだから」

やはり、藤本は自分の一番の理解者だ。和幸は、それをかみ締めるように何度も頷いた。

「これから、どうするつもりなんだ？」

落ち着いた声で、藤本はそう尋ねる。和幸は、しばらく間をおいてから、照れ笑いのようなものを浮かべた。

「学校辞めて……バイトして金貯める」

その言葉に、藤本は顔をしかめた。

「学校を辞める？　何言ってるんだ？」

「カインノイエを抜けるんだ。『おつかい』をしないのに、藤本さんにもう甘えるわけにはいかない。マンションも、もっと安いところに引っ越すよ」

学校にマンション。藤本は、これがどういうことなのか理解した。カインを辞める今、藤本から金銭面の支援ももう受ける気はないということか。カインの中でも一際真面目な性格の彼なら、そう考えても不思議ではない。だが、と藤本は悲しく微笑んだ。

「お金の面倒くらいみさせてくれ」

無力の自分には、それくらいしか手伝ってあげられないのだから、

と心の中でつけくわえる。

「でも、それじゃ、けじめがつかない」としぶる和幸に、藤本は首を横に振った。

「せめて、高校を卒業するまでは、父親面をさせてくれ。これは、わたしのけじめだ」

そう言われ、和幸は言葉に詰まった。

「高校は卒業してくれ。頼む」

懇願するように、藤本は和幸を見つめる。ここまでされては、和幸も断ることはできない。それに、実際問題、いくらけじめだといっても、藤本からの仕送りがなくなれば、自分は道端でのたれ死ぬことになるだろう。今からバイトで金をためるといっても、たかがしれている。カヤを守る前に、自分が餓死しかねない。藤本もそれは十分分かっていて、こんな言い方をしているのだろう。情けないが……ここは、甘えるしかない。和幸は、遠慮がちに頷いた。それを見て、藤本は安堵したように微笑む。

ちょうどそのとき、誰かが扉をノックした。

「和幸くん?」という遠慮がちな声が聞こえる。カヤだ。

和幸は、振り返ると「どうした?」と答える。

「ごめんね。ちょっと、話があって……」

扉の向こうから、そう返事が来る。話……おそらく、正義のことだろう。和幸は、藤本に振り返ると、名残惜しそうに苦笑した。

「行かなきゃ」

藤本は、深く頷く。あの声は、神崎カヤだ。そうか、連れてきていたのか、とほほえましくなった。やはり彼女だったか、と納得する。

和幸に変化をもたらしたのは神崎カヤという存在だ。『おつかい』をさぼり、そしてとうとうカインを辞めた。ベッドサイドテーブルに目をやると、そこには銃が横たわっている。和幸が十三のときに自分が渡した古い拳銃だ。武器を捨てて守りたい大切な誰か……それは、彼女なんだな。藤本は、目を細めた。

「また、見舞いに来るから」と去り際に和幸は微笑んだ。「親父」とぎこちなく付け加えて。

＊　＊　＊

「親父、か」

和幸が出て行った部屋で、藤本は感慨深げにそうつぶやく。

「そう呼ばれるのに、十二年かかったなあ」

真面目な性格だからこそ、和幸は誰よりも自分が『創られた』ことに戸惑っていた。カインの中で、一番それにコンプレックスを抱えていたのは彼だろう。カインの中で唯一、人を殺さなかったのも……そして、自分を十二年間、父と呼ばなかったのもその現われに違いなかった。それが、彼は今、自分を父と呼んだ。何があったかは分からないが、どうやら自分の存在とやっと向き合えたようだ。それもきっと、彼女のお陰なんだろう、と藤本は苦笑する。

「やはり」と藤本は朝日が差し込む窓を見つめた。「人を救うのは愛なんですね」

それは、実家――つまり、カインノイエの隠れ家である、あの教会に居た神父の言葉だ。

――この世に愛がある限り、人は救われます。

藤本は、満足げにため息をもらし、体を倒した。

本当の両親

「どうした、カヤ？」

和幸くんは、藤本さんの病室から出てきて、開口一番そう尋ねてきた。表情は普通だけど……その目は、充血している。かすかに、涙のようなものが見えて、私は不安になった。

「なにかあったの？」

もしかして……藤本さん、危険な状態なんだろうか。

「え？　なんで？」

「目、赤いから」

「あ……」

遠慮がちに指摘すると、和幸くんは恥ずかしそうに目をこすって微笑む。

「なんでもない」

「なんでもない？」

なんでもないわけがない。もう、何も隠してほしくないのに。私は、眉をひそめて和幸くんをじっと見つめる。すると和幸くんは、ちょっとたじろいで、それから諦めたように微笑んだ。

「後で話そうと思っただけだよ」

あとで……か。今朝も聞いたなぁ。私は、ついはあっとため息を

ついていた。

「また？」

「いや、これは……本当に、すぐ後で話すから。信じて、待ってくれ」

信じてって言われたら、何も言い返せない。

「分かった」と私は呆れたように微笑んだ。

「それで、話ってなんだったんだ？」

和幸くんは歩き出しながら、私にそう尋ねる。

「長谷川さん、重傷じゃないみたい。心配しなくていいって」

「へえ」

「……」

特に興味がなさそうだ。私の笑顔はひきつった。やっぱり、和幸くんは長谷川さんが嫌いなのかな。夕べ、自分に人を殺させようとしたんだもんね。それは、そうか。でも……もし、夕べの事件がなかったらどうだったんだろう？　仲良くなれたのかな。それとも、やっぱり……。そういえば、言ってたもんね。オリジナルは死んでるほうがいい、て。会いたくなんかないって。どういう気持ちなんだろう。自分のオリジナルと会うって……。

「それだけか？」と和幸くんは腑に落ちない表情で振り返る。

「あ、ううん。それでね、筒井先生が誰か迎えを呼んでほしいって。ご両親とか……」

私は和幸くんの顔色を伺いながら、おそるおそるそう言った。長

谷川さんの両親……それは、ＤＮＡ的には和幸くんの両親でもある。長谷川さんを嫌うのは分かるけど、ご両親はどうなんだろう？　一昨日も聞いたけど、そのときははっきりとした返事はもらえなかったし。

「あいつの携帯……」和幸くんは特に表情を変えることなくつぶやいた。私はハッとして、さっき筒井先生から預かった長谷川さんの携帯電話をポケットから取り出す。

「ここにあるよ」

和幸くんはそれに目を丸くした。

「用意がいいな」

「筒井先生が渡してくれたの。事情もあるだろうから、私たちに任せる、て」

「そうか」

あれ……やっぱり、特に変わった様子はないな。オリジナルの両親のこと、どうとも思ってないのかな。私は長谷川さんの携帯電話をあごにあてて、和幸くんをじっと見つめる。

「俺の親じゃないからな」

「え！？」

いきなり、こちらを見ることもなく、和幸くんはそう言い放った。私は驚いて携帯電話を落としそうになる。

「なに？　急に？」

ごまかすように笑顔を浮かべると、和幸くんのジト目がこちらに

向けられた。
「分かってるよ、お前の考えてること」
「え……」
やれやれ、と和幸くんはため息混じりに微笑んだ。
「俺が本当の両親に会えるチャンスだ、なんて思ってるんだろ」
「あ……」
図星。私は言葉をなくす。
「ＤＮＡ的にはそうなのかもしれないけど……」言って、和幸くんは後ろを振り返った。その先には……藤本さんの病室がある。「俺の親父は一人だけだから」
「……和幸くん」
そのときの和幸くんの表情は、すごく大人っぽくて……魅力的だった。
「でも、ありがとな」
私に顔を向け、そういって私の肩に手をおく。私の大好きな爽やかな笑顔。私もつられて微笑む。
そうだよね。和幸くんのお父さんは、藤本さん。ＤＮＡなんて、関係ないんだよね。私、まだまだ何も分かってないな。
「外で電話しよう」
「うん」

それにしても……と、歩きながら私は和幸くんの横顔を見つめる。和幸くん、変わった？　何かを吹っ切れたような、すっきりとした表情をしている。前まで感じていた、影のようなものがない。やっぱり、さっき藤本さんと何か大事なことを話したのかな。私は、横目で和幸くんを見ながら首をかしげた。

フォルダわけ

「はい。筒井クリニックという病院です。住所は……」

隣でカヤが、正義の父親にここの住所を電話で伝え始める。

俺たちは筒井クリニックの玄関前で、段差に腰をおろしていた。目の前の小さな駐車場には、筒井さんとその奥さんで看護師の真帆さんの車が停まっている。白いセダンと緑の軽自動車が仲良く並んでいるのを見ると、車まで仲がいいのか、なんて馬鹿なことを頭の中で考えてしまう。筒井クリニックは、どちらかというと高齢の患者が多い……らしい。といっても、近所のおじいちゃんおばあちゃんが定期診察で来るくらいの、静かな病院だ。その証拠に、診察時間が始まっているのに、まだ誰も来てないしな。のんびりしていいわ。俺は、ひざにひじをついた。

「すぐ来るって」

カヤが携帯電話を耳から離し、俺にそう言ってきた。

「そっか」にしても、と俺は正義の携帯電話を覗く。「この……フォルダ分けって便利だな」

携帯電話の電話帳を細かくフォルダ分けしていてくれたおかげで、父親の番号もすぐに分かった。『ファミリー』フォルダの『父』で一発だ。こんな機能があるとは。へえ、と俺が感心していると、カヤが急に噴出す。

「え？　なんだよ？」

何か、おかしいこと言ったか？

「和幸くん、電話帳どうしてるの？」

「え？」

どうしてるって……俺はおもむろに自分の携帯電話を取り出した。電話帳の画面を開き、カヤに見せる。すると、カヤはぎょっとして俺に振り返った。

「一つもフォルダ分けしてない！　分かりづらくない？」

まるでそれが異常かのような言い方だ。俺は眉をひそめる。

「別に……あんまり使わないから」

「そういえば、いじってるの見たことない」

「俺、携帯、あんま好きじゃないんだよ」

「そうなんだ」

カヤはからかうように笑った。俺はなんだか恥ずかしくなって携帯電話をまたポケットに戻す。するとカヤがあわてて飛びつくように俺の携帯をつかんだ。

「だめだめ。私が整理してあげるから」

「いいって。別にそんな必要じゃないし」

カヤは何か気に食わないようで、ムッとした表情をうかべている。その顔がまた……いじけているみたいで、かわいい。

「これからいっぱい使うでしょ」

とりあえず俺の携帯から手を離し、座ったまま腰に手を当てる。どうやら、怒っている……設定らしい。どんな顔しても、俺にはかわいく映るようだ。全然恐くない。

「なんで？」と、俺は肩をすくめた。これから『おつかい』もなくなるし、俺の携帯のメモリにはいっているのは大体カインだ。使うことはぐっと減るだろう。まあ……カヤはまだ、俺がカインを辞めたことを知らないから、分からないんだろうけど。

「なんでって……毎日電話したいもん」

「へ」

思いもよらない意外な返しに、俺はぽかんとしてカヤを見つめる。カヤは頬を赤らめて微笑んでいた。

これから使うって……あ、そうか。カヤと……か。なんだ、その不意打ちでかわいい発言は。顔が一気に熱くなった。

「だから」とカヤは俺に手を出してきた。「私専用のフォルダつくるの」

「……」

正直……心底、かわいいと思っている。思わず、渡したくなる。けど……俺は知ってる。その必要はないんだ。

＊　＊　＊

和幸くんは、一向に携帯を渡してくる様子はない。あれ？　そんなに携帯嫌いなのかな。私との電話でも……嫌？

「どうしたの？」と、私は戸惑いつつ、尋ねる。それに和幸くんは、

「二つ」と答えた。

「二つ？」

何が？　フォルダが二つほしいの？

和幸くんは、勝ち誇ったかのような表情を浮かべて、話し出す。

「一つ。お前、携帯持ってないだろ」

「え」

あ……！　そうだ。私、携帯電話、家に置きっぱなしなんだ。いけない。すっかり忘れていた。あそこであったことを考えると……取りに行くのも、なんか嫌だし。新しく買わなきゃいけないんだ。そうか……今、フォルダつくったって登録する番号がないよ。

なるほど。二つっていうのは……フォルダを作らなくていい理由なんだ。でも、二つ？　他になにがあるんだろ？　私ががっくりと肩を落としていると、「二つ」という和幸くんの声が聞こえてきた。

「一緒に暮らそう」

「！」

え……。

一瞬、何を言われたか分からなかった。目をぱちくりとさせ、和幸くんを見つめる。和幸くんは、微笑を浮かべ、私の言葉を待っていた。

「え……え？」

やっと出たのはそんな声。もう、なにその反応は？　気が利かないな、私は。でも、頭も心臓もパニックだよ。急に……一緒に暮ら

そう？　そう言ったよね？　確かに、ここ二、三日は泊まらせてもらってたけど……でも、一緒に暮らす、てそれは……。

混乱している私とは違い、和幸くんは落ち着いていた。

「そしたら、毎日電話しなくてもいいだろ」

「……あ」

それはそうだけど。でも……急に、同棲？　どうしよう。

「カヤ？　嫌だったら、別に……」戸惑っている私に、和幸くんは心配そうにそう声をかけてきた。

「嫌じゃないよ」

慌てて私は答える。そう、嫌じゃない。

「けど？」と和幸くんが促す。

「けど……」

分からない。なんていえばいいんだろう。私はうつむいた。

そのときだった。

ブー、ブーと、私のひざに振動がつたわってきた。長谷川さんの携帯電話だ。和幸くんとの話を遮るのは気がひけるけど……電話を無視するわけにもいかない。私は携帯電話を手に取った。ウィンドウには、父、と出ている。

「もしもし？」と電話に出ると、さっき耳にした低く渋い声が聞こえてくる。『あと十分で着く』とその声は告げて、挨拶もなしに切れた。無機質なプープーという音が聞こえてくる。

「あと十分で着くって」と私は携帯電話をおろして和幸くんに伝えた。和幸くんは、そうか、とまるで興味がないようにそっけなく答える。いや……きっと、本当に興味がないんだ。私はそんな気がした。

「わざわざ、こんな電話するなんて……律儀というか」

すごく真面目な人なんだろうな。確かに、長谷川さんも恐ろしいくらい真っ直ぐな人みたいだし。猪突猛進っていうのかな？　目標のためには手段を選ばず、暴走してしまう。そんな人なんだと思った。もちろん、夕べは本当に怖かった。長谷川さんが本当に恐ろしく思えた。でも……「真紀、すまない」というあの言葉がどうもひっかかる。何か理由があるに違いない。きっと、悪い人じゃない。そんな気がして仕方がなかった。

そんなことを頭の中でぐるぐると考えていると、和幸くんの視線を感じた。

卒業パーティー

「それで」と、俺が切り出したのは、しばらく沈黙してからだった。
「さっきの話なんだけど」

カヤが、ハッとしてこちらに振り返る。その表情には、戸惑いが見受けられた。やっぱ、いきなり一緒に住むのは無理があったのか？　でも、カヤには俺の部屋しか帰るところはないはず。喜んでくれると思ったんだけどな。

「とりあえず、頭に置いといてくれればいいから」

俺はそう言ってカヤの手を取った。指をからめるようにしてぎゅっと握る。本当は、すぐにも答えがほしかったんだけどな。

「ありがとう」カヤは俺の手を握り返して、目を細めた。どこか、安心したような笑み。俺も、ホッとした。別に、困らせたかったわけじゃないんだ。この顔を見たかったんだ。カヤには、安心していてほしい。俺の傍で……。

「そういえば、さっき、何を言おうとしてたの？」
「え？」

さっき？　なんだっけ？

「あとで何かを話すって……言ってなかったっけ・」
「あ」

そうだ。カインを辞めたこと、まだ言ってないんだ。もう、『無

垢な殺し屋』じゃないんだ、てカヤに伝えてやらなきゃ。俺は姿勢を正し、真剣なまなざしでカヤを見つめる。

「俺……」

「かっちゃーん！！」

あぁ、ったく！　曽良がいきなり、クリニックから飛び出してきた。

「カインを辞めるの！？」

「……」

玄関前に座る俺たちを見下ろし、曽良は目を見開いてそう叫んだ。

おい……。

「え？」

カヤの戸惑う声が聞こえる。俺は、大きくため息をついた。

「今、父さんから聞いたんだ」曽良は興奮した様子で、病院を指差す。「本気なの？」

カヤには俺の口から告げたかったのに。俺は曽良ではなく、カヤを見つめて答える。

「本気だ」

「……和幸くん」

カヤはどう反応すればいいのか分からないようだった。複雑な表情を浮かべている。

「トミーに殺されるよ」

曽良の冗談まじりの声が上から降ってくる。俺はその言葉に、鼻で笑った。確かに、砺波は許さないだろうな。あいつは、藤本さん――親父を誰よりも慕っている。

「そんときは」と俺は曽良を見上げる。「助けてくれよ」

「やってみる」

曽良は微笑してそう答えた。どうやら……こいつは、反対しているわけじゃなさそうだな。

「和幸くん」カヤがおずおずと声をかけてきた。俺はカヤへと視線を戻す。「もしかして、私のためなの？」

申し訳ない表情だ。本当に、こいつは……と、俺は半ば呆れてしまう。全部、背負い込もうとするんだな。私のため……というより、私のせい、と思っているんだろう。俺は微笑みながら首を横にふった。

「いや……俺自身の、幸せのためだ」

その言葉に、カヤは目を丸くする。こんな答えが返ってくるとは思っていなかったのだろう。驚いている。ぱちくりと瞬きをして、それから、頬を緩めた。

「そっか」

それならよかった、と小声で言って、カヤはうつむいた。

カヤのために嘘をついたわけではない。本当に、カインを辞めるのは、カヤのためじゃない。これは、俺のわがままなんだ。俺がそうしたいから、そうするだけ。これがカヤのためだというのは、押し付けで……自己満足だ。カインとしてじゃなく、俺の意志でカヤを守りたい。そう思ったのは俺の勝手。それは俺の選択で、カヤには関係ない。だから、心配しないでくれ。俺はそう心の中でカヤに告げた。

ふと、視線を感じて、俺は思い出したように背後を見上げる。やはり、曽良がにやにやしてこちらを見ていた。

「な……なんだよ？」

「見せ付けてくれちゃって。すっかり、仲良しだねぇ」

曽良はいたずらっぽい笑顔で、俺の右手を指差す。そこには、カヤの左手が乗っている。あ……と、俺はあわてて手を離し、立ち上がった。カヤはいきなり手をはずされて、驚いたように俺を見上げる。

「照れなくていいのにぃ」

「邪魔だから、中、入れよ！」

照れるに決まってるだろ。俺は曽良を睨み、クリニックを指差した。曽良は俺の反応に、嬉しそうにヘラヘラしている。この野郎、茶化しやがって。

「今度、パーティしようよ、パーティ」と曽良は脈絡もなく急に言い出す。

「パーティ？」

一体、なんのだよ。すると、曽良はアヒル口をにぱっと開けて、

微笑んだ。

「かっちゃんの卒業パーティーだよ」

「！」

卒業……カインからの、てことか？　俺は、予想だにしなかった言葉に、ぽかんとしてしまった。曽良はそんな俺をからかうことなく、大人びた微笑を浮かべている。――いや、浮かべていた、だ。一瞬でその微笑は、いつもの子供じみた満面の笑みへと変わった。

「それと、二人の新しい門出に」

結局、そこをいじるのかよ。

「いいから、お前は中もどれよ！」

こういうことをいじられるのは、俺はまったく慣れていない。俺はクリニックを指差し、怒鳴った。

「でも」と意外なほうから声が聞こえる。それはカヤだった。カヤは立ち上がると、こちらに振り返り、曽良に微笑む。「パーティーしてほしい」

カヤ？　パーティー好きなのか？　そういうのは好きじゃないのかと勝手に思っていたが……。

俺が眉をひそめて見つめる先で、カヤと曽良はなにやら視線で会話をしていた。何をカヤの瞳から読み取ったのか、やや間をあけて、曽良は目を細める。

「もちろん」

俺だけ、置いていかれているような気分だ。
まぁ……曽良が誰を呼ぶつもりかは分からないが、確かにそういう場をつくってもらえるとありがたいかもな。カインを抜ければ、他のカイン達と会う機会も減るだろうし……というより、もう会ってはいけないのかもしれないし。会えるだけ、皆と会っておきたい。そして、謝らなきゃいけない。カインノイエという家族から抜けることを……。

一般人たる者

パーティ。すごくいい案だと思った。カインを辞めるという和幸くんには、そういう区切りが必要だと思うんだ。今までずっと、裏の世界で『無垢な殺し屋』として生きてきた彼だから……カインを辞める、といってもそうすぐには切り替えられないはず。何かを始めるとき、終えるとき、大体、儀式があるものだ。入学式に卒業式、成人式に結婚式（離婚式はないけれど）、そしてお葬式。それは、けじめ。何かに別れを告げて、新しい何かと出会うための。曽良くんの言う卒業パーティが、和幸くんのそんな儀式になればいい。私はそう思った。

「さ、何してるの？」

突然曽良くんは、急に声のトーンを変えてそう言ってきた。

「え？」と、私と和幸くんは声をハモらせる。すると曽良くんは、あきれたような表情で腰に手をあてがった。

「学校、遅刻だよぉ。早く行かなきゃ」

学校？　確かに……とっくに遅刻だ。でも、もともと行く気はなかった。というか、学校のこと何も考えていなかった。和幸くんもそうだったのだろう。その言葉に、首をかしげている。

「なんでいきなり学校なんだよ？　今から行く気にならねぇよ」

確かに……長谷川さんのことも気になるし。お父さんも今から来るんだし。私はぎゅっと携帯電話を胸の前で握り締める。

「私も……ここでお父さんをお待ちしなきゃ」
「だめだめ！　かっちゃんもカーヤも、抜け切れてないよぉ」
「へ？」と、また私と和幸くんは同時に声をだす。

ぬけきる？　何の話だろう。
曽良くんは、チッチッ、と舌打ちし、わざとらしく人差し指を左右に振る。絵に描いたような典型的な――そして、あまり誰もやらない――動作だが、曽良くんがやると可愛らしい。

「一般人になるんでしょう？」

はっきりと曽良くんはそう言い放った。一般人？　その言葉自体の意味は分かるけど、曽良くんの意図することは分からない。

「何が言いたいんだよ？」と和幸くんは苛立った声を出す。
「ここから先は、俺たちの管轄。かっちゃんにはもう関係ないでしょお」

俺たち……私はハッとする。それはきっと、カインのことだ。私は和幸くんをちらりと見やる。彼もそれがわかったのだろう。真面目な表情で曽良くんを見つめている。
曽良くんは、そんな和幸くんにどこか寂しそうな笑顔をなげかける。

「一般人は、これ以上首をつっこむべきじゃない」
「曽良……」
「これから、新しい人生を歩むんでしょう。だったら、こんなところで突っ立ってちゃだめだよ」

私は、何も口をはさめなかった。ただ黙って、曽良くんの言う一般人という言葉の意味を考える。――ううん、考える必要はない。明らかだ。一般人、それはきっと、表の世界に生きる人間のこと。わざわざ危険に身をおく必要のない、嘘で自分を偽る必要のない、生き方を選べる人たち。カインとは違う世界に生きる人たち。

「守らなきゃいけない人もできたんだろ」と、曽良くんは真剣な表情で言う。「一般人らしく生きなきゃ、結局危ない目にあう。中途半端が、一番よくないんだ」

曽良くんは徐々に声のトーンを落としてそう言った。彼には珍しい、男らしく凛々しい表情。その表情で放たれた、暗号のように真意をちりばめた言葉。私には、まるで脅しのようにとても重い言葉に聞こえた。

和幸くんはしばらくじっと曽良くんを見つめ、「そうだな」とつぶやいた。悔しそうで、それでいて嬉しそうな、複雑な表情で。

「俺は、普通であろうとしなきゃ……もう普通にはなれないよな」

そうかもしれない、と私は心の中で相づちを打つ。体にしみ付いた癖のように、和幸くんは裏世界の匂いをかぎ付けては、首をつっこんでしまいそうだ。そして危険な場所で、持ってもいない銃を探してしまうんじゃないか。カインを辞めるとなると……それはそれで、違う心配事も出てきちゃうな。そもそも、カインじゃない生活を、彼は想像がついているのだろうか。それすら、私には不安だった。

「ま」と、それまでの雰囲気を壊すように、曽良くんが軽い調子で言う。「とりあえず、面倒ごとを避けてればなんとかなると思うよ」

曽良くん……結局、そんな簡単な結論でまとめちゃうんだ。私は苦笑した。

「ほら、分かったなら、学校行った行った。一般の高校生は学業優先でしょお。こっからのいざこざはプロフェッショナルに任せなさい」

どん、と曽良くんは自分の胸をたたく。それに和幸くんは鼻で笑う。

「なんだ、俺はもうアマチュアか」

「元プロ、だよ」

曽良くんは楽しげにそう言い放った。

日向の世界へ

曽良のいうことは当たっていた。俺は一体、ここで正義の父親を待ってどうするつもりだったんだろう。カヤの手前、仕方なかったとはいえ……こうしてあいつを病院につれてきてやったことさえ、やりすぎとも思える。なのに、その父親を呼び出し、それを待ってやるなんて。夕べあいつがカヤにしたことを考えたら……ただの馬鹿としか思えない。そこまでやってやる義理はない。それに、やっぱりオリジナルと関わるのはよくないんだ。ドッペルゲンガーと会えば死ぬ。それはただの都市伝説だろうが……そう言われる理由は分かる気がする。同じ人間が出会えば災いが起こるんだ。妬みや憎しみ、同族嫌悪。同じだからこそ、起こる争いもある。オリジナルとクローンは、きっと相容れない存在なんだ。関わってはいけなかったんだ。

曽良もきっとそれを分かっていて、こうして俺を追い出そうとしているんだろう。なるほど。藤本さんが曽良を「能ある鷹」と称したのも、今なら納得できる。こいつは表には見せないけど、奥深くまで物事を考えているんだな。確かに、曽良はカインのリーダーにふさわしい。そう思うと、なぜかホッと安堵した。カインは大丈夫だ。そんな漠然とした気持ちが心にしみわたる。

「それじゃ……あとのこと、全部頼んでいいのか」

俺は玄関前の段差をおりながら、曽良に尋ねる。曽良はアヒル口を横に伸ばし、力強く頷いた。

「もっちろん。後処理はこちらにお任せください。事情はカーヤから聞いたからね。いろいろと、うまくやるよ」

「悪い」

厄介ごとを丸投げして帰るみたいで気が引ける。でも、曽良の表情は明るくてすがすがしい。本当に気にしていないんだ。本当に、こいつはいい奴だよな。変なニックネームをつける癖さえなければ……完璧だと思うんだが。

「あ、そうだ。カーヤ、携帯電話」と曽良はカヤを見下ろす。俺の隣にいたカヤは弾かれたように曽良に振り返った。

「え」

「オリジナルの携帯電話。返しとくから」

「あ……」

あまりにも手になじんで忘れていたのか、カヤはそれが正義の携帯電話だと忘れていたようだ。言われてハッとし、胸元で握り締めていた携帯電話を曽良に差し出す。

「長谷川さんに……」とカヤは遠慮勝ちに言う。「よろしく伝えてね」

曽良は携帯電話を受け取りながら、にぱっと微笑んだ。

「うん。よろしく、て言っとく」

その返しに、カヤは心配そうに苦笑する。曽良の場合、こういうところは冗談かどうか分かりかねるよな。本当に、よろしく、と言って終わりそうだ。

「曽良くん、いろいろありがとう」

カヤは、やや間をあけて、おもむろにそう切り出した。曽良は、え、と目を丸くする。

「昨日のファミレスも……すごく楽しかった」言って、カヤはまぶしい笑顔をうかべる。

「俺も。またファミレス会議しようねぇ」

曽良は急にハイテンションになり、わー、とはしゃぐと、カヤに抱きついた。おい！？　これで二回目だぞ！？　抱きつく必要がどこにあるんだよ？　俺は思わず怒鳴りそうになったが……余裕、余裕、と自分に言い聞かせて思いとどまる。

＊　＊　＊

「まだ、手、振ってるよ」と、私はクリニックに振り返りながら和幸くんに言った。駐車場の出口に差し掛かったところだった。曽良くんは玄関前で楽しそうに手を振っている。体ごと動かして、元気そのもの。

「朝からテンション高いよな」

和幸くんも振り返り、呆れてそう言う。私は、ほんとに、と微笑する。

駐車場から出て、しばらく歩くと……もうクリニックは見えなくなった。建物の陰に隠れていくその建物を、私は歩きながらじっと見つめていた。正直、心残りがある。長谷川さんのこと。体は大丈夫かな、というのもあるし、それに……夕べの事件の真相も気になる。きっと、何か深い事情があるはずなんだ。「真紀、すまない」あの言葉がどうしてもひっかかる。

「カヤ？」という声が聞こえて、私はハッとする。

「え？」

私はあわてて前に顔を戻し、和幸くんを見上げた。和幸くんはいぶかしげな表情を浮かべている。

「もしかして……病院に残りたかったか？」

「！」

私は言葉を失った。図星だからだ。和幸くんは私の表情からそれを悟ったのだろう。立ち止まって、申し訳なさそうに微笑む。

「戻ってもいいぞ」

「え……」

それは思わぬ申し出だった。戻る？　今から……病院に？

「お前のことだから、このまま帰るなんて気が引けるだろうな、とは思ってたんだ。あいつのこと、心配なんだろ」

「……」

その笑顔は、これっぽっちも陰を感じさせなかった。晴れ晴れとして、さわやかな笑顔。これが……『一般人』の笑顔なんだろうか。

ふと、曽良くんの声が頭に蘇る。

――かっちゃんを……俺たちの大事な兄弟を、よろしくね。

それは、さっき私に抱きついてきたとき、そっと耳元でささやかれた言葉だった。そうだ。私には、長谷川さんよりも心配しなくち

ゃいけない人がいる。私が守らなきゃいけない人は、今、病院にいる彼ではない。この、目の前で私に微笑みかけている人。私はこの人を、新しい世界で守ってあげなきゃいけない。日陰で暮らしてきた彼には、きっとまぶしいくらいの世界だから。――ううん、それくらい輝く世界に私がしてあげなきゃいけない。

私は、そっと和幸くんの手を握った。いきなりで、和幸くんは驚いて目を丸くする。

「カヤ？」という戸惑う彼に、私は明るく微笑む。

「行こう」

一言そう言って、私は和幸くんの手をひっぱる。今度は、私が彼を連れ出してあげなきゃいけないんだよね。日向の世界へ……。

「ああ」という嬉しそうな声が、背後から聞こえた。

エンリルの僕たち

わたし……これから、どうなるのかな。揺れる船床に横たわり、わたしは呆然としていた。周りには、大きな木箱がたくさん積まれている。あの中に何が入っているのか、考えたくもない。わたしは古い小さな船に乗っている。エンジンは一体、いつ造られたものなのか……スピードもろくにでないし、その上、すぐに故障する。海の真ん中で急に止まっては船員があわてて修理し……ここにくるまでそれを何度も繰り返した。男だけの――それも海賊のような粗暴な男たちの――船だ。当然だろうが、トイレはとても使えたものではなかった。異臭とあちこちにこびりついた汚れ。彼らは、掃除、という言葉を知らないのではないか。そんな風にさえ思えた。それでも、二ヶ月という長い船旅。わたしは『慣れ』という生き残る力で、耐え抜いてきた。

ふと、ギイっという耳障りな音が聞こえ、そして光が小さな船倉に入り込んできた。床に、男の影がのびてくる。

「よう、ナンシェお嬢様」

目の前に、黒い革のブーツがきゅっと音を鳴らして現れた。わたしは力なく、その男を見上げる。三十代半ばの男……のはずなのに、見た目は二十代のように若々しい。エネルギッシュ、といえばいいのだろうか。こんな長旅でも、疲れを一切感じさせない。ギラギラと野心を感じさせる力強いまなざし。あごひげに、長いぼさぼさの髪。ワイルドなアメリカ人。この男が……わたしの一族を皆殺しにし、わたしをこんなひどいクルーズへ誘ったのだ。

「ニヌルタ……」

水もろくにあたえられず、乾いた唇をわたしはなんとか動かす。

「まだまだ、そういう目つきができる元気があるじゃないか」

タール・ニヌルタ・チェイス。アトラハシス一族を惨殺し、神の子孫であるマルドゥク一族をも手にかけた。リストちゃんの『聖域の剣』と対をなす、もう一つの神の剣『冥府の剣』をもつニヌルタの王。人間（ルル）の世界『エリドー』を滅ぼす使命をもつ男。

「もうすぐでインドにつく」人間（ルル）を滅ぼすために生まれた男は、そうつぶやく。

「インド……」

一体、どういう経路でどうしてインドに着いたのか。そんなこと、わたしに分かるはずもない。今までも、途中途中で様々な国に立ち寄っては、積荷を入れ替えていた。これが何カ国目だか、今となっては分からない。途中でわたしは数えるのをやめてしまったからだ。

「まったくよ」とニヌルタはわたしの頭上に置かれている積荷に腰をおろす。「お前のパスポートのせいで、とんだタイムロスだよ」

わたしを置いていけばよかったじゃない、という言葉をわたしは喉の奥に飲み込む。そんなこと言えば……また何をされるか分からない。彼はなぜか、わたしを恨んでいるようだった。会ってから何かしたわけではない。だって会ったそのときから、わたしは彼の人質になっていたのだから。会う前から、彼はわたしを憎んでいたんだ。理由は……分かるはずもない。

「せっかく航空券も買ったっていうのに……」

ご丁寧に、彼はわたしの母を殺し、わたしのパスポートを持ち出して迎えに来た。どこへでもわたしを連れていけるように……。でも、わたしのパスポートはとっくに期限がきれていた。どうやら、そこまでは彼も確認しなかったようだ。彼はそこで、パスポートをつくる手間を嫌った。どうやら、待つのが性に合わないようだ。そして、この長旅を選んだ。密輸船でニホンへ行くという、無茶な船旅を。わたしたちの遺伝子に眠る神の力。人を従わせるプレッシャー。彼はその神聖な力を使って、乗組員にわたしたちの乗船を認めさせた。そして、今に至る。

「ま……あと少しでニホンにつくわけだし。許してやるよ、お嬢様」

わたしはただ、彼を見上げていた。何を言っても、彼はそれを嫌う。わたしの発言はすべて彼の感情を逆なでしてしまうのだ。

「そうそう、インドで船を乗り換えるからな」

「え」

筋肉質の腕を組ませ、ニヌルタは微笑する。

「この船はインドまでだ。そこからは、あいつらの取引相手の船に乗ってニホンに向かう」

あいつら、と言ったニヌルタの目が船倉の扉へ向けられた。この船の乗組員……密輸業者を指したのだろう。彼らの取引相手の船に乗り換え……そこまで、話をつけていたなんて。

「とりあえず、『収穫の日』に間に合えばいいんだ。ゆっくり楽しく行こうや」

そう言って、ニヌルタは不気味な笑い声をあげた。
わたしはぐっと目をつぶり、祈り始める。わたしには、それしかできない。ずっとこの船で、わたしは祈り続けていた。いまや、たった一人の肉親。幼いときからの、わたしの王子様。――リストちゃん、助けて、と。

『収穫の日』まで、あと二ヶ月をきっていた。

＊　＊　＊

「お金のこと何も考えてなかったよね」

のんきな声でそう言って、青年は電光掲示板を見上げていた。

「成田新東京国際空港いきのお客様……」

そんなアナウンスが響き、青年は「あ」と声をあげる。あまりにもぼうっと立っているせいで、旅行客のスーツケースやバッグにやたらとぶつかっていた。それでも彼は微動だにしない。高い鼻にほっそりとした輪郭。そして短いカールがかった栗色の髪。ユリィ・チェイスは、空港で航空券を握り締めて突っ立っていた。

――お金がない、と分かって、いきなり農場に住み込みで働き始めるなんて……ユリィには驚かされます。

ユリィの頭の中に、そんな母性にあふれた優しい声が響く。

「うん。ニヌルタのお金に手を出すのもまずいから」

本来、一族の王に選ばれたものは、『裁き』をめぐる旅にでると、

一族との連絡を一切絶たなくてはならない。それはエンリルだろうとマルドゥクだろうと同じだ。王に選ばれれば、孤独に戦わなくてはならない。唯一、一族とコミュニケーションができるのは、家に帰ったときのみ。それ以外では、連絡手段を持たずに旅をする。それゆえに、ユリィがタールに会いに行こうとしていると一族にばれれば、止められるのは必至。それも、タールを止めに行くのだ、と知られれば、一族の老人たちは怒り狂うことだろう。だからこそ、ユリィは自分でお金を稼ぐ必要があった。一族のお金を使えば、何に使ったのだ、と調べられかねない。邪魔されるわけにはいかない。単なる家出にしておきたかった。アイリスには目的も行き先も話してしまったが、彼女は自分には関心はない。わざわざそれを一族の老人たちに言いに行くようなことはしないだろう。ユリィはそう高を括っていた。

「でも、思ったより時間がかかった」

――『収穫の日』まであと二ヶ月もありませんよ。

「うん」とユリィはうなるように言う。「でも、焦っても飛行機は早くならないから」

ぼうっとした表情でそうつぶやいた。ラピスラズリの笑い声が頭にひびく。

――相変わらずね、ユリィ。

でも、搭乗手続きは焦ったほうがいいかもしれない、とユリィは電光掲示板を見上げて思った。

新しい生活

「おい！　なんこつまだか！？」

食欲を誘う香りと熱気がただよう、とある焼き鳥屋。四人連れの団体が二つも来れば、もう満杯の座敷。そして、調理場を囲むように配置されたカウンター。閑静な住宅街に似合わない、にぎやかな小さな焼き鳥屋だ。そこの店長である真田進（さなだすすむ）は、三十代後半の強面（こわもて）の男。目は細く鋭く、口はへの字にまがっている。とがった逆三角形の輪郭、その額の右側には、古い傷跡。いつも眉間にしわをよせ、しゃがれた声で怒鳴っていた。特に最近は、新しく入ったバイトに、殺すんじゃないか、というくらいの迫力で怒鳴り散らしている。

「組長〜、ビールもう一杯」

カウンターに座る、五十代半ばのスーツ姿の男が、酔って顔を赤くしながら、進に声をかけた。組長とは、強面の進についたあだ名だ。ほとんどが常連客のため、そのあだ名はすっかり定着している。

「へい」と、低い声で進は答え、背後に振り返る。「おい、ビール！」

せまい調理場には、進のほかに二人の若い男女が背を向けて立っていた。そのうち、少女のほうが振り返る。十六の少女は、猫顔という言葉が当てはまる顔つきをしている。くりっとしたややつり目の瞳。ゆるいウェーブのかかった短い茶髪。鼻や口はそれぞれ小さく、愛らしい。こんな熱気のすごい調理場で、よく長時間働けるな、と驚かれるほどのきゃしゃな体つき。

「どっちにいってるんですかぁ？　組長」

少女は、みずみずしい唇に笑みを浮かべて進に尋ねる。ここのバイトも、進を組長と呼んでいる。いつから始まったのか、それはこの伝統になっていた。半年前から働いている彼女も例外ではない。

「新人のほうだ！」

睨みだけで人を殺せそうな、するどい視線を少年の後頭部にあびせ、進はすぐに自分の作業に戻る。慣れた手つきで、次から次へと鶏肉を扱う進の背中を、少女はじっと見つめた。広くたくましい背中だ。二の腕の筋肉もしっかりとついている。実は、組長は本当にヤクザだった。そんな噂は当たり前のように流れている。見るからに、そんな感じだから仕方がない。

「ビールだってよ、新人くん」と、いたずらっぽく笑んで、少女は隣でネギを切っている少年に告げる。

「ビールとなんこつね」

少年は額の汗をふき、こちらに目を向けた。短くさっぱりとした髪に似合う、さわやかな笑顔を浮かべて。少女は、胸がちくりと刺されたような痛みを感じた。四日前からここで働き始めた同い年の少年。一見、特徴的でない顔なのだが、よくよく見れば、きれいな顔立ちをしている。それに、ここ数日一緒に働いて、少女はあることに気づいていた。彼の、ふとみせる笑顔がたまらなく魅力的だということ。

「なんこつのほう、あたしやっとくけん」

気づくと、そんなことを言っていた。トーキョーに引っ越してから封印していた、地元福岡の方言までひっぱりだして。

少年は、あ、と目を丸くし、申し訳なさそうに微笑んだ。

「助かるよ、紺野(こんの)」

言われて少女は、熱気のせいでもとから赤らんでいた頬をより紅潮させる。

「葵(あおい)でいいよぉ」

思い切ってそう言うと、少年は戸惑いつつも、分かった、と頷いた。これが好機といわんばかりに、葵はぐっと身を寄せ、大きな黒い瞳で彼を見つめる。

「あたしも、名前で呼んでいい？」

すると少年は、ためらいつつも、身をひきながら頷く。ちらりと進のほうへ視線が泳いだ。確かにそろそろ、なんこつとビール！という進の怒号が響き渡りそうだ。葵は、せかすように少年に尋ねる。

「で、ごめん。下の名前なんだっけ？」

すると、新人バイトの少年は、どこか照れくさそうに苦笑した。

「和幸。藤本和幸だ」

本間カヤの午後

「これは？」

胸まであるウェーブがかった黒髪をはらい、幼い顔立ちの少女はハンガーラックからミニスカートのワンピースを取り出した。それを押し付けるように、一緒に買い物に来ている友人の体にあてる。友人は、あてられたワンピースとは正反対ともいえる、ひかえめな服を着ている。キャミソールにカーディガン。そしてロングスカート。露出をできるだけ控えた服装だ。それでも、その際立った神秘的な美しさは、あたりの買い物客の目をひく。ガールフレンドをつれた男でも、彼女にふりかえるほどだ。

「ちょっと……これは、派手じゃないかな、砺波ちゃん」

彼女はそう言って、ワンピースを押し返す。童顔の少女――砺波は、ムッと唇をつきだす。

「そんなんじゃだめよ、カヤ！　今夜が初デートなんでしょう？」

乱暴に、ワンピースをハンガーラックに戻し、今度はもっと丈の短い花柄のワンピースを取り出す。それに、カヤは苦笑する。

「だからって……そんな短いスカート着て行ったら、彼もひくんじゃないかな」

「ええ？」と、砺波は自分がもっているワンピースを見つめる。それは、今、彼女が着ているタイトスカートにくらべれば、まだ丈は長いほうだ。「これ、そんなに短い？」

その瞬間、カヤはこれ以上彼女と言い争っても無駄だ、と悟る。結局、今夜はミニスカートでデートに向かうことになりそうだ。そう考えただけで、カヤの頬は紅潮した。

＊　＊　＊

は、恥ずかしい。やっぱり砺波ちゃんが選ぶ服って、短すぎる。私は違和感のある極端な小股で、ショッピングモールを歩いていた。白い生地に花柄の清楚なデザインのワンピース。ただ、丈がありえないほど短い。

「と、砺波ちゃん」と私は、これよりも短いタイトスカートをはいた砺波ちゃんの背中に呼びかける。「今から、着ることないんじゃあ……」

試着室でトライするだけだ。そう言われて着たのに……試着室から出ると、もう砺波ちゃんが支払いをすませていて、「私からのプレゼント」と微笑みかけてきたのだ。おかげで、こんな短いスカートで、素足丸出しで、人ごみの中を歩かなくてはならなくなってしまった。周りの視線が痛い。絶対、彼に嫌がられる。そんな気がして仕方がない。

「どんな歩き方してるのよ！？」

急に砺波ちゃんは振り返り、腰にあてがってそう声をあらげる。

「だって、恥ずかしい」

そう反論すると、砺波ちゃんはあきれたようにため息をつく。

「そんなことだろうと思ったのよ。だから……今から着とくの」
「ええ？」
砺波ちゃんは自信に満ちた笑顔を浮かべ、堂々と言い放つ。
「慣れなさい！」
「……」
そんなぁ……。私は肩を落とす。
「堂々と歩けば、しっくりくるものよ」なんて、よく分からない理屈を言って、砺波ちゃんは私の腕をひっぱる。やっぱり砺波ちゃんには何を言っても無駄なようだ。
相変わらずの勢いで、砺波ちゃんは私をひっぱり、ショッピングモールを闊歩する。皆が私の足を見つめていると感じるのは……自意識過剰なだけだろうか。堂々と歩く、か。ちょっと試してみようかな、と胸をはって思い切って大またで歩いてみるが……すぐに歩幅は小さくなっていった。だめ……恥ずかしい。
そんなとき、ふと砺波ちゃんは私に体を寄せてきた。砺波ちゃんのふわふわとした髪からリンゴの香りがする。シャンプーの香りだろうか。
「つけられてる」
いきなり、砺波ちゃんは低い声でそうつぶやいた。
「え！？」と驚く私に、「シッ」と砺波ちゃんは真剣な表情で注意する。
「ずっと気になってたのよ。カヤとの待ち合わせ場所から、ずっと。

あいつ……絶対、つけてる」

まるでカップルのように砺波ちゃんは私にくっつき、小声でそう告げてきた。ある嫌な予感がよぎる。まさか、あいつって……

「ねぇ、砺波ちゃん」と私はおそるおそる尋ねる。「その人って、長身で……」

「ちょっとロン毛の、イケメンお兄さん！　カヤも気づいてた？」

砺波ちゃんはくりっとした目をめいっぱい開き、私に迫る。やっぱり、そうか。私は申し訳なく苦笑した。でも、砺波ちゃんはそんな私の表情の変化に気づく様子もなく、真剣な顔でなにやら考えている。さっきまでのかわいらしい顔はどこへやら。まるで別人のような、冷酷にも思えるするどい目つきだ。

「なんだろう、あいつ。裏路地に誘い込んでひねりあげて……」

「ああ、それはだめ！」

私は慌ててそう声をあげた。ついつい、忘れてしまいがちだけど……こんな彼女もカインなんだ。放っといたら、本当にひねりあげてしまうだろう。

カイン――『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たち。裏世界で殺し屋として育てられた少年少女。表の世界では、そんな風に語られている。でも、本当は違う。私はある事情で、彼らと関わることになった。特に、その中の一人と……。ここトーキョーの裏社会では、人身売買が横行している。貧しい子供や、テクノロジーで創られた子供――クローンが、商品として売買されているのだ。クローンについては、私も詳しいことは知らない。つい一週間ほど前まではクローンの存在も知らなかったくらいだ。でも、ある人物に教えてもらった。裏社会では当たり前のようにクローンが製造され、売られ

ていると。カインの正体は、そんな売られたクローンの子供たち。彼らは、同じように人身売買によって売られた子供たちを『迎え』に行っているのだ。そのために、人を殺すこともある。それが、彼らが『無垢な殺し屋』と呼ばれる所以(ゆえん)。

「どうして？」と、不満そうにカインの少女は私に尋ねる。私は、ふうっとため息をつき、苦笑して答えた。

「あの人、私のボディガードなの」

「ボディガード！？」

私と砺波ちゃんはほぼ同時に後ろに振り返る。視線の先には、スーツ生地のテーラードベストに、タイトなジーパンを着た二十代半ばの男性が人ごみに紛れて立っている。肩に触れるかどうかのやや長めの黒髪。しっかりとした眉。切れ長の目。すっきりとした鼻筋。薄い唇。肩幅がやや広めで、少し筋肉質な体つき。雑誌にでてくるモデルさんみたいな、清潔感漂う男性だ。

「ボディガード……にしては、イケメンすぎじゃないの？」

半ば、呆れたように砺波ちゃんがつぶやいた。もう笑うしかない。私もそう思うんだから。

「椎名望(しいなのぞむ)さんっていうの」

望さんは、私と砺波ちゃんの視線に気づき、右手をあげて微笑んだ。きれいに並ぶ歯が照明を浴びてキラリと光る。それに応えるように小さく手を挙げてから、私は砺波ちゃんと一緒に前に向き直る。

「アレ、大丈夫なの？」と、歩き始めながら砺波ちゃんはいぶかし

げな表情でつぶやく。「軟派野郎にしか見えないんだけど……」

砺波ちゃん、相変わらずはっきり言うな。でも確かに、私も望さんが強いとは思えないんだよね。話していても、失礼だけど……軽い感じ、というか。

「てかさ」と砺波ちゃんは腕を組んで、私をジト目で見てくる。「あいつと付き合ってるんだから、ボディガードなんていらないじゃん」

顔が熱くなるのを感じる。付き合ってる、てそうはっきり言われると……やっぱり、照れる。私はごまかすように、砺波ちゃんから目をそらした。

「それは、そうなんだけど……」

「元・裏世界の殺し屋を彼氏に持って、なにが恐いんだか」

おっしゃる通り。私は、何も言えずに苦笑する。

そう。私の彼は……ほんの数日前まで、裏社会の殺し屋だった。人を殺せない、心優しい殺し屋。彼は、砺波ちゃんと同じく、カインと呼ばれていた。

「おじさまが、どうしても……て聞かなくて。まさか、彼が元カインだから大丈夫、なんて言えないでしょう？」

「それもそうねぇ」

どんな事情であれ、カインが殺し屋だということに変わりはない。そして彼らが生きる場所は、あくまで裏の世界。表の世界ではその正体を隠し、嘘をついて生きている。カインだ、なんて知れたら、もう日の光を浴びて生きることはできなくなってしまうだろう。元

カインである彼も例外ではない。彼も、日向で生きるためには、その過去を隠さなくてはならない。だから私も、彼のその秘密を守っている。

「そういえば」と、砺波ちゃんが切り出したのは、エスカレーターへ足を一歩踏み出したときだった。「あいつ、ちょっと落ち込んでたよ」

「落ち込んでた？　どうして？」

私もエスカレーターに乗り、砺波ちゃんの横に立つ。上りのエスカレーターの人が、すれ違い様にこちらを見てくる。私は、おもむろにハンドバッグで太ももを隠した。

「同棲、断ったんでしょう？」と、砺波ちゃんはニヤニヤしながら聞いてくる。

「う……うん」

「その代わりに、どこぞのおっさんの家に養女にはいるなんて……あいつにしては、寝耳に水というか」

「……そう、だよね」

私はうつむいた。

六日前……だっただろうか。一緒に住もう。彼はそう言った。そのとき、両親を失った私には家と呼べるものもなく、彼の申し出は嬉しかった。でも……迷った挙句、私は断ったのだ。そして……私は、本間家に養女にはいった。本間秀実（ほんまひでみ）という父の古い友人が、両親の自殺を知って、本間に来ないか、と持ちかけてくれたのだ。最初は戸惑ったが、今や私もすっかり本間カヤだ。

確かに、養女の話はいきなりだったとは思う。でも、まさか……それで、彼が落ち込んでいたなんて。そんな風には全然見えなかった。私に気を遣って隠していたんだろうか。彼は、演技は下手なの

だが……そういうことになると、なぜか器用に本心を隠せるのだ。おそらく、意識すると演技が下手になるのだろう。

「寂しそうだったよぉ」

エスカレーターから降り、砺波ちゃんはからかうように私にそう言った。

「あいつが私に電話してくるなんて珍しいんだから」

「そうなの？」

私たちは、自然とコーヒーショップを目指して歩き始めていた。

「そうなの。いきなり同棲申し込んで、ひかれたんじゃないか……て心配してた」

「！」

初耳。そんな心配していたなんて……私は思わず立ち止まった。

「どうしたの？」と砺波ちゃんは目を丸くして私に振り返る。

「そんな風に思ってたなんて……知らなかったから」

ふうむ、と砺波ちゃんは顎に手をおく。

「ま、付き合いたてだから仕方ないけど……あんたたちは、もう少しいろいろ話したほうがいいんじゃない？」

顔を上げると、砺波ちゃんの真面目な表情があった。私をじっと見据えている。

「仲良くなったきっかけも特殊だし、付き合うまでの過程も異常だし……あんたたちは、大事な要素をぼとぼと落っことしてきていると思うのよね」

砺波ちゃんの言っている意味がよく分からず、私は首を傾げる。私たちの馴れ初めが、普通ではないのは分かっている。でも、大事な要素？　ぼとぼと？　なんのことだろうか。

「なんていうか……普通なら通るべき道を、飛び越えてきちゃった、ていうかさ」

「はあ」と、とぼけた返事をしてしまう。どうやら、砺波ちゃんもうまく言葉にできないようだ。う～ん、と唸って終いには「とにかく！」と切り捨てるように言った。

「今夜がオフィシャルな初デートなわけだし。これから、お互いのことじっくり知っていけばいいのよ」

「……うん」

その意見には、大賛成。私もそう思ってた。私たちは……これから、なんだ。今夜が初デートっていうのは、我ながら驚く。付き合う前から彼の部屋に泊まったりしていたし、学校では毎日会っているし。でも、『彼女』として彼と一緒に出かけるのは……今夜が初めて。変に緊張してしまう。

「ようし。待ち合わせまで、プランを立てるわよ！」

急に砺波ちゃんは張り切ってそう言い出し、コーヒーショップを指差した。

「プラン？」

どこに行くとかは……全部、彼が決めることになっているんだけど。すると砺波ちゃんはぐいっと私に顔を近づけ、にやりと微笑む。

「あいつは奥手だから。カヤが誘惑しなきゃいけないの」

「ゆ……！？」

ちょっとまって。そのプラン！？　私はまだそこまでは……そう言おうと口を開くが、言葉を発する前に砺波ちゃんに腕をひっぱられ、コーヒーショップへと連行される。

砺波ちゃん、まだ初デートなんだってばぁ。私は心の中で、そう叫んだ。

初デートの諸注意

やべぇ。遅刻だ。俺は落ち着かない様子で、信号が青になるのを待っていた。この横断歩道渡れば、すぐそこなのに。周りには、すでにデートを始めているカップルがわんさかいる。いやぁ、でも……嫌な気がしない。なぜかってそりゃ……はは。俺も単純だな。

信号が青になり、俺は人ごみの間をぬって、目の前の公園へと走る。都会のど真ん中にある、噴水つきの公園。公園、といってもかなり広く、中には博物館や動物園もある。春には桜が咲き乱れ、有名な花見スポットだ。

俺は公園に足を踏み入れると、全力疾走で噴水へと急ぐ。

もう七時を過ぎて、あたりは暗く、点在するぼんやりとした街灯の光が頼りだ。この暗がりを利用して、公共の場だというのにベンチでいちゃつくカップルも目にはいる。

噴水のある広場について、俺は足を止め辺りを見回す。何人か、時計を気にして立っている。彼らも待ち合わせだろう。それで……あいつはどこだ？　暗くてよく顔が見えない。とりあえず、噴水の周りで立っている女の顔を一人一人確認していく。さすがに、何人かに「なに？」とキレられそうになったが、一応無事全員の顔を確認した。……で、どこだよ？　結局、知っている顔はなかった。あいつも遅刻……てことだろうか。俺はそう思って、噴水を眺める。

すると……

「誰かお探しですか？」

ふと、背後からそう声をかけられた。明らかに無理して変えている声色。俺は鼻で笑い、ゆっくりと振り返る。そこには、浅黒い肌をした少女が、両手を後ろに回して立っていた。

「ああ。彼女、探してるんだ」

目を細め、そう言うと、花柄のワンピースを着た少女はクスッと微笑する。

「一緒に探してあげましょうか」

「いや」と俺は呆れたように言う。「もう見つけた」

すると彼女は、ふーん、と試すような視線で見てくる。俺は、やれやれ、と腰に手をあてがう。

「遅れて悪かったよ、カヤ」

言うと、カヤは満足そうに微笑んだ。その笑顔は、やはり美しい。絵画の女神がとびだしてきたような神々しさがある。俺はこれほどまで、目を奪われる女に会ったことがなかった。約三ヶ月前、夕日が照らす廊下で、神崎カヤと初めて出会ったときまで。一瞬で思考を止められ、全神経が視覚に集中された。初めて、『見とれる』という感覚を体験した。だが……それは単なる見た目の問題ではないと思う。不思議な魅力があふれているんだ。まるで妖しい魔術のような、人を惹きつける力。って、自分の彼女をこんなにベタ褒めするのもどうなんだろうな。

「水と紅茶」と、カヤは急に切り出し、後ろに回していた両手を前に出す。そこには、ペットボトルに入った水と紅茶が。「どっちがいい？」

「あ……」

もしかして、噴水の前に居なかったのは……これを買ってきてくれてたのか？

「きっと走ってくるかと思ったから」

俺が唖然としていたからか、カヤは説明するようにそう言った。俺はため息まじりに苦笑する。相変わらず……果てしない心の広さだよな。遅刻してもあんな悪戯だけで、ドリンク用意してくれてるんだから。

「水」と言って、俺はカヤから水を受け取った。

ここが公園じゃなかったら、俺は迷わず彼女を抱きしめていただろう。むなしいことに、付き合いだしてからのほうが、彼女と接触する機会が減った。俺のオリジナル――長谷川正義の事件から、カヤと二人きりでゆっくり過ごす時間はほぼ皆無だったのだ。皮肉にも、あいつのお陰で俺たちの間は縮まったわけだが……俺とカヤのお互いの状況がガラリと変わることになり、学校以外で会うのは難しかった。俺はカインを辞めて焼き鳥屋でバイトを始め、カヤは……本間カヤになった。大部分は、それのせいだった。本間家に養女に入り、手続きやら引越しやらでカヤはてんてこまい。とても、俺との時間をとれる状況じゃなかった。まあ、そのお陰で、俺の携帯メールテクニックは向上したけど。

「どうかした？」

水を受け取ったまま、どうやら俺は彼女に見とれていたようだ。カヤは心配そうに見つめてきた。俺はハッと我に返り、ペットボトルのキャップをはずす。

「いや……ありがとな」と早口で言って、水を口にふくんだ。確かに、走ってきたせいで喉が渇いていたようだ。焦っていて自覚して

いなかった。喉がじわじわと潤っていくのを感じる。

「よっぽど、喉がかわいていたんだね」

急に、背後――噴水のほうからそんなのんきな声がして、俺は水を変なところにひっかけてむせた。多分、気管にはいったんだ。

「え？」と俺が振り返ると、そこには……あまり会いたくなかった人物が居た。相変わらずの、オシャレなファッション。これは、アメカジとかいうやつか？　長い髪。すました顔。いわゆるイケメン。俺のテンションは一気に下がった。

「どうも、椎名さん」

諦めのような声がでた。

「どっから湧いて出たんです？」と体をくるりと椎名に向けて尋ねる。すると、椎名は、嫌だなぁ、と相変わらず軽い調子で頭をかく。

「ずっとここにいたよ。藤本くんは女の子ばっかり見てたから、気づかなかったのかな」

「……」

なぁんか、この人はいつもチクチク気に入らない言い方をするんだよな。女を見てたのは、カヤを探してたんだよ。わかってるくせに、誤解を生むような言い方を……。俺は頬をひきつらせて椎名を見つめる。

「これ買って来る間、代わりに待っててもらってたの」と、カヤがかばうように言うのが聞こえてきた。これ、とは飲み物のことだろ

う。

「へえ、代わりにここで待っていたんですか」俺は眉をあげて言う。「ボディガードなら、対象にべったりついておかなきゃいけないんじゃないですか？」

さらに言えば……なんで、俺に声をかけなかったんだよ。カヤの代わりに俺を待っていたんだろうが。黙って俺がカヤを探すのを見ていたってどういうことだ。悪意を感じる……。

すると椎名は、いやいや、と余裕な顔で言う。

「自販機はほら、すぐそこだから。何かあればすぐ駆けつけられるでしょ」

やっぱ、この人……信用できない。俺は、そうですか、と気のない返事をした。だが、内心、全く納得していない。そんなゆるい考えのボディガードがどこにいるんだよ。

カヤのボディガード。椎名望。俺からすれば、スキばかりの頼りない護衛人だ。なんでこんな奴が、カヤのボディガードなのかさっぱり分からない。正直言って、やろうと思えば、今この人をその噴水にぶちこめる自信がある。確かに、鍛えていそうだけど……特別、強そうでもない。それでも、カヤの新しい養父（ちち）がたっての希望でつけた護衛なんだ。一体、この男の何に惚れて？　俺に頼んでくれればいいのに。ま、もちろんそんなことカヤの養父（ちち）にいえるわけはないが。俺は一般の高校生。ボディガードがつとまってはいけないはずだ。

「それじゃ」と、このいけ好かないカヤのボディガードに切りだす。「今からデートなんで。ご苦労様でした、椎名さん」

俺は椎名に背を向け、カヤの手を取った。すると、「目立たないようにしているからね」という間延びした声が背後から聞こえてくる。俺は、は？　と振り返った。

「帰っていいですよ」というか、帰れ。「カヤはちゃんと俺が家まで送りますから」

椎名は、にたりと得意げに笑み、こちらに歩み寄る。

「僕は、カヤちゃんのボディガードですから」と、なぜか語尾をあげて言う。まるでオカマ口調だ。

「ボディガードなのは知ってる。でも……デートなんですけど」

下校のときにカヤと帰ろうとすると、やはりこいつはいた。いつも、少し離れた後方から俺たちをつけて来るんだ。おかげで、全然二人きりな気がしなかった。全くリラックスできない。自然な会話なんて一つもできない。どうも、誰かがつけていると落ち着かない。カインであったときの職業病なのだろうか……特に、後ろに誰かがいると気になって仕方がない。常に気を張ってしまって、カヤと――というか、椎名と別れたあとは、どっと疲れていた。だが、今夜はデートだ。デートなんだ。いいか、男女が二人きりで甘い時間をすごす、アレだよ。まさか、こんなときもボディガードが後ろからついてくるってのかよ。冗談じゃないぞ。

ふと、目の端で、カヤがおどおどしているのが見える。養父の仕込んだ護衛人と彼氏じゃ……どっちの味方につけばいいのか、悩むんだろうな。

「デートだろうとなんだろうと、関係ないんでね」と椎名はさらりと言う。「君に関しても、注意事項がお父様からきているし」

「は？」
「おじさまから？」

これには、さすがにカヤも口をはさんできた。注意事項ってなんだよ？　俺はカヤから手を離し、体ごと椎名に向きなおる。
椎名は、俺とカヤが見守る中、ポケットから紙切れを取り出した。そして、おほん、とわざとらしく咳払い。

「ひとぉつ」とふざけたイントネーションで読み上げる。「高校生らしいお付き合いであること。身体的接触は手を繋ぐところまで。つまり……キスから先は禁止ってことだねぇ」
「……は！？」

なんだ、それ？　どこの高校生が、そんな純情なお付き合いするんだよ？　いつの時代のはなしだ？　ってか、もうキスはしてるんだけど……。

「ふたぁつ」と相変わらず気に障る読み方で続ける。「デートは九時まで。ちなみに、彼氏くんはカヤを送る必要はない。つまり、デート後に自宅に来るな、てことだねぇ」
「なに、それ？」

俺の代わりに、カヤが、憤慨したように声を上げた。内容も気になるが……それよりもさっきからひっかかっているのは……つまり、のあとだ。なんでいちいち、椎名のコメントがはいってくるんだよ。

「みぃっつ。カヤは、彼氏くんの家に上がらないように。以上！」

満足げに言い切って、椎名は紙をポケットにつっこんだ。
俺は、言葉を失くしていた。なんだよ、これ。やっぱ、付き合っ

てからのほうがいろいろ難しくなってんじゃんか。

「それ、本当におじさまから？」

カヤは困惑した声で椎名に尋ねる。カヤも初耳なんだな。

「そうですよ。今朝、家を出るときにこの紙を頂きまして」

「こんなの……」と何かをいいかけ、カヤは口をつむぐ。自分を養女に迎え入れてくれた人だ。あまり悪くは言えないのだろうな。

「それで……あんたは俺がその注意事項を守るように見張るわけだ」

「そうなるねぇ」

椎名は、とぼけたような顔を浮かべている。こいつ、楽しんでるな。やっぱり、噴水につっこもうか。

「とりあえず、さっさとデート始めたほうがよろしいんじゃないか、と」

「あんたに言われなくても……」

声を荒げる俺を椎名は右手で制し、左手首の時計を見た。なんだ？　すると、椎名はわざとらしく顔をしかめる。

「あと一時間四十五分ですよ」

この野郎……完全に、おもしろがってる。思わず、俺はペットボトルを握る左手に力をこめていた。ペキッというはじけるような音があたりに木霊する。

「そうですよね」

急に柔らかい声がして、俺は我に返る。カヤは俺の肩に手を置き、にこりと微笑んできた。

「せっかくのデートだもん。時間、大事にしよ。ね」

まるで説得するかのような言い方だ。俺が頭にきているのが分かったのだろうか。笑顔の中に、抑えて、と言わんばかりの切羽詰った表情が隠れている。俺はなくなく頷き、ちらりと椎名をにらみつけた。

「じゃ……見張り、お願いしますね、椎名さん」

「護衛、なんだけどなぁ」

俺は答える素振りもせず、くるりと踵を返す。カヤを誘導するように、その背に手をまわし、足早に噴水から離れていった。

誘拐予告

「本当は、映画でも見に行こうかと思ったんだけど」

和幸くんは、公園の中心にある池を見つめながらそうぼやいた。

残り一時間四十五分……そんな予期しなかったタイムリミットが発覚し、私たちはその池のまわりをとりあえず散歩することにした。確かに、想像していたデートとは違ってしまったけど……私はとにかく和幸くんと話がしたかったから、これはこれでいいのかもしれない。

「ごめんね、和幸くん」と私は改まって言った。そう……私は、和幸くんとちゃんと話がしたかった。あのことについて。

「え？　なにが？」

いきなり謝られ、和幸くんは驚いた顔で私に振り返る。

「本間に養女にはいったこと……」

謝るときは目をみるものだ。そう彼に言ったのはほかでもない私。でも、彼の目を見ることができず、私はうつむいていた。

「養女のこと？　なんで、謝るんだよ？」

「それは……望さんのこともそうだし」と、私はちらりと後ろを見る。ある程度距離をとって、望さんがついてきている。

「あぁ」呆れたような声をだし、和幸くんも望さんをちら見する。

「アレは確かに迷惑だけど」

「それに……」私は前に向き直り、またうつむいた。「せっかく、

一緒に暮らそう、て言ってくれたのに……」
「え」
なんで今更その話をだすんだろう、て思ってるんだろうな。それを断ったのは、もう六日も前だもん。和幸くんが頭をかいているのが、目の端で見えた。
「まぁ、それは……残念だな、とは思ったけど。それより、初っ端からそんなことで悩ませて悪かったな、ていうほうが大きいし。いきなり同棲とか、ひくよな」
「違うの！」
思わず私は顔をあげ、和幸くんに振り返る。和幸くんのきょとんとした顔がこちらに向けられていた。気づけば……私たちはいつのまにか、足を止めていた。
「あのね……」と、本来なら、六日前に言うべきことだったことを頭の中で整理する。「同棲を断ったのはね」
和幸くんがごくりと唾をのんだのが、喉の動きで分かった。私は上目遣いで和幸くんを見つめる。
「焦りたくなかったからなの」
「え？」
こんな言葉がくるとは思っていなかったのだろうか、和幸くんはとぼけた声を出した。
「和幸くんとの関係は……じっくり、大切に育みたかったの。だってね、ほら……」

つい、私は言葉に詰まる。あれ以来、あの人の名前をだすのは、はばかられた。私たちは自然とその話題を避けていた気がする。でも……今は、言うときだよね。

「長谷川さん」と、その名をだすと、やはり和幸くんの眉がぴくりと動いた。ごめんね、和幸くん。私は心の中で謝る。そして、罪悪感を押し殺して続けた。「長谷川さん、若かったじゃない」

「は？」

「長谷川さん、すごく若かった！　だから……だからね」そこまで言って、私は和幸くんの右手に自分の左手を伸ばす。ぎゅっとその手をつかみ、私は説得するかのような熱い視線を和幸くんに向ける。

「だから、私たち、これからいっぱい時間があると思うんだ」

「……カヤ」

＊　＊　＊

最初、カヤの言っていることが意味不明だった。なんで急に正義の名前がでてくるのか。それに、あいつが若いからなんなんだ、と。だが、俺は唐突に理解する。カヤの言いたいこと。それは、俺の寿命のことなんだ。一週間ほど前だろうか。カヤに話したことがあった。クローンの寿命。それはオリジナルの寿命からＤＮＡが採取された年齢を引いた数だ、と。そうか。カヤの言うとおりだ。正義は若かった。俺よりいくつか上くらい。てことは――病気とか怪我は別として――俺の寿命は……。

「二人の時間、これからたくさんあるから」

俺は、カヤをじっと見つめた。まさか、あんな事件があったとき

に、そんなことを考えていたなんて。当の俺さえ、気にかけてもいなかったのに。

「だから、一つ一つ、大切に進めていきたいと思ったの」

目を細め、頬を緩める彼女。俺は何も言葉が出せなかった。街灯のぼんやりとした光を浴びて、まるで月夜の女神のような彼女を、ただただ見つめていた。

「焦って、たった一瞬でも幸せを見逃すようなことがあったら、嫌だから」

俺の手を握る彼女の手がぎゅっと強くなる。

「ゆっくり……じっくり……一緒に生きていきたいの」

「……！」

もう、我慢できなかった。俺は、思わず彼女を抱きしめていた。驚いたのか、足元にカヤのハンドバッグが落ちてきた。

「和幸、くん」

カヤの苦しそうな声が耳元でした。俺は、強く抱きしめすぎているようだ。だが……離したくない。少しでも緩めるのが、恐かった。本来なら、カヤの言葉に、感動する場面なんだろう。なのに……俺はおびえていた。こんな恐怖は初めてだ。漠然とした、絶望感。そして、罪悪感。

俺たちは、本当に一緒に生きていけるんだろうか。本当に、俺たちに時間はあるのか。カヤと一緒にいたいと思えば思うほど、未来が恐くなる。プレッシャーが増す。失敗はできない。カヤとの未来

……それは、俺にかかっているんだ。あぁ、だからなのかもしれない。俺が自分の寿命をかけらも考えていなかったのは……それよりも重要なタイムリミットが迫っているからなんだ。終焉、という世界の寿命。それは、こんな華奢な体に容赦なく課せられた残酷な使命。彼女はまだそれを知らない。何も知らない。

それを思えば思うほど、俺の胸は押しつぶされる。もしも彼女が、全てを知ったらどうなってしまうのか。無論、神の罰があるから、誰も彼女には告げない。だからそんなことは起こりえない。あくまで仮定の話だ。でも、俺は自信を持っていえる。彼女は自分の死を選ぶだろう、と。それほど、彼女にはつらい事実だと思うんだ。自分が、世界を滅ぼす終焉の詩姫だなんて。

＊　＊　＊

「カット、カット！」

抱き合う二人に、椎名は映画監督のような偉そうな態度で近寄る。カヤは、あ、と声をあげて椎名に振り返ったが、和幸はぴくりともせずに抱きしめていた。

「こぉら、藤本くん。注意事項忘れたのかな？」

椎名は和幸の肩をつかんで、乱暴にカヤから引き離す。和幸は、椎名の手を乱暴に振り払うと、敵意のある目つきで睨み付けた。

「分かってますよ」

吐き捨てるようにそう言って、カヤの腕をつかんで椎名に背を向け歩き出す。

「おおい」というつまらなそうな声が後ろからしたが、和幸は気にする素振りもせず、カヤをひっぱって歩いていく。その様子に、カヤはどこか不安そうな表情を浮かべていた。

「どうかした？」

しばらく早歩きをし、椎名とだいぶ距離が開いたときだった。沈黙に耐えかねて、カヤがとうとうそんなおびえたような声をだす。和幸はぴたりと立ち止まると、後ろの椎名を確認する。厄介なボディガードは、だいぶ遠いところでのらりくらりと歩いている。

「和幸くん？」

「十二時だ」

唐突に和幸は早口でそうつぶやいた。カヤは、え、と首を傾げる。すると、深みのある黒い瞳が、ばちっと自分に向けられた。いきなり真剣な目で見つめられ、カヤはびくっと体をこわばらせる。そして和幸は、はっきりとした口調でこう言う。

「十二時に、迎えに行くから」

「え？」

迎え――カヤは、久々に聞くその単語に目をぱちくりとさせる。それは、元カインである和幸に、よく馴染みのある言葉。でも、今、それが何を意味しているのか、カヤには分からなかった。

和幸はやんわりと頬をゆるめ、優しい口調で続ける。

「靴も全部、部屋に持って行っとけよ」

「靴？」

「ああ。部屋に迎えに行くから」

「部屋に……？」

やはり、何の話か分からない。眉をひそめ、カヤはしばらく考え……そしてハッとした。やっと、和幸がしようとしていることが分かったのだ。

「って……ええ！？」

その反応に、和幸は得意げに微笑む。

「そ。カインの専売特許。誘拐しに行くな」

「和幸くん！？」

声だけ聞けば、今にも「そんなのだめよ」と言い出しそうなものだが……困惑が伺えるのはその口調だけだった。カヤのその表情は嬉しさを隠せていない。笑顔がこぼれてしまう。カヤの様子は、まるでそんな風だった。

「この手は……」和幸はそう言い、右手をカヤに差し出す。「お前を連れ出すためにあるんだろ。カインだろうとなかろうと……それは変わらない」

「……あ」

カヤは目を丸くし、頬を赤く染めた。その手を見つめ、そうだ、と思い出す。つらいとき、逃げたいとき、自分を救いだしてくれたのは、この手だった。カヤはうっとりと見とれるように目を細め、その手を取る。そして「うん」とはにかんだ笑顔で頷いた。

しっかりとカヤの手を握りしめ、和幸は近づく椎名を横目に、また歩を進める。

「そんじゃ……部屋の場所と監視カメラの位置、全部教えてもらおうか」

その言葉に、カヤは思わずクスッと笑った。

インターミッション：情報屋の休日

「ちょっとぉ……ここまで来て仕事してるわけぇ？」

バスタオルを巻いた、スレンダーな女性がバスルームから姿を現す。濡れた髪は人工的な白に近いブロンドで、腰までである。様々な色を経験した髪は、痛んで一本一本が細い。だが、彼女はそれはそれで気に入っていた。細い眉はゆるやかな弧を描き、奥二重の目はぱっちりとして、中の黒目はやや大きい。こぢんまりとした鼻に、厚い唇。歳は二十代後半の、妖艶な魅力漂う女性だ。

彼女は、ダブルベッドに横になってパソコンをいじっている青年を睨みつけた。青年の長髪は一本にまとめられ、馬の尻尾のようになって彼の背中に乗っかっている。その顔は、依然としてこちらに向けられる様子はない。夢中でパソコンの画面を見つめている。

女性は、やれやれ、とため息をつき、バスタオルだけの格好でベッドに腰をおろした。あたりにはポルトガル調の家具が並び、ソファ、液晶テレビ、ドレッサーが備え付けられている。女性は、それを見回し、頬を緩める。

「こんな素敵なホテルに泊まれるなんて。最高のヴァケーションじゃない」

しかし、後ろから返事はない。女性は苛立ったため息をつき、体を放り投げるようにして青年の隣に寝転がった。

「聞いてるわけ？　三神」

すると、青年――三神は、口元だけ笑みを浮かべる。相変わらず、視線はパソコンの画面に釘付けのまま。

「聞いているよ、ユラ」
「嘘よ。聞いていないでしょ」
あぁ、もう、とユラは諦めたように、ごろんと仰向けになった。
「せっかく、マカオに来てるってのにぃ。海外よ、海外！　分かってるの？　いっつも、デートもろくにしてくれないんだから。この旅行中くらいは仕事はなし、て約束したでしょー。一週間、情報屋は休業！　ユラのことだけ、考える。そう言ったのは誰よぉ？」
不平不満の応酬に「だから」と、三神はベッドに頬杖をつき、ユラに視線を向ける。「ちゃんとユラがシャワーのときだけにしてるだろ」
ユラは仰向けのまま、ジト目で三神をにらむ。三神は観念したようにため息をつき、画面を見ることなく、パソコンをぱたんと閉めた。
「これでいいのかな」
すると、さっきまで不機嫌だったはずのユラはころりと表情を変える。くるりと転がって、三神に寄り添う。
「満足」と、ユラはにやりとする。寝転がったまま、ぎゅっと三神の胸に顔をすりよせた。
「それで……なんの情報調べてたわけ？」
その言葉に、三神はげんなりとした表情を浮かべる。

「情報屋はお休み、て言ったのは君でしょ。何、さっそく僕から盗もうとしてるの」
「いいじゃない。教えてよ」

結婚も考えている相手ながら、彼女も情報屋であることに変わりはない。油断もへったくりもありはしない。だからこそ、おもしろいのだが……と、三神は、くくっと笑った。

「本間秀実だよ」と、三神はすんなりその名を口にする。すると、ユラはハッとして顔を上げた。

「国家公安委員長の？　ずっと、調べているけど、なんなの？」
「ただ……気になってね」

彼を調べるきっかけになったのは、カインノイエのリーダーである藤本マサルの依頼だった。藤本マサルは、『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たち――カインを束ねる、六十をすぎた男。彼は、人身売買を牛耳るトーキョーの黒幕を長年追っていた。そして、とうとう、その尻尾をつかんだのだ。もちろん、トーキョーに三神あり、と謳われる凄腕の情報屋である彼の手柄だった。三神は、警察内部の情報筋から有力な情報を得、そして隠し口座を見つけ出し、国家公安委員会委員長、本間秀実を黒幕だ、と断定した。だが、その正体を伝えた途端、藤本は態度を一変し、もう情報は要らない、と言ってきた。もっと調べろ、と依頼されると思っていた彼は、拍子抜けだった。さらに、藤本マサルは心臓発作を起こし、入院までしてしまったのだ。

いつもなら、依頼以外のことは一切調べない三神だったが、どうしても本間秀実は気になって仕方がなかった。情報屋は中立、私情は挟まない。それがモットーの三神でも、人身売買には心を痛めて

いた。正直、カインノイエをえこひいきしてきたのは否定できない。だからこそ、せっかく暴いたトーキョーの黒幕を放っておくのは気が引けた。

「それで、何か見つけたわけ？」

これに関しては、正式な依頼があるわけでもない。いわば、自分の趣味のようなもの。ユラも質問してはいるが、明らかに興味がなさそうだ。隠す必要はないだろう、と三神は話し出す。

「本間秀実は、国家公安委員長になる前……議員として、ある法案に関わっていたみたいなんだ」

「ある法案？」

ますます、ユラの興味はそがれている。三神には、彼女の声だけでそれが分かった。だが、自分としても言葉にだして情報を整理してみたかった。構わず、話を続ける。

「二年前に可決された妙な法律があっただろう。まあ、最近のメディアは報道規制がいろいろかかっているから……そのときも、あまり流されていなかったけどね。内容が内容なだけに、国はこっそり可決したんだ」

それを聞いて、あ、とユラは声をあげる。

「新治安維持法ね」

それに、三神は真剣な表情で頷く。こういうときの彼の目つきはするどく、二十代という若さを感じさせない。

「簡単に言えば、反政府運動を行う秘密結社を罰する法律。過激な社会運動を防ぐためのものなんだけど……」

その言葉に、ユラは半笑いを浮かべる。

「社会運動？」

「そうなんだよ。そんなことしてる奴を、少なくとも、トーキョーでは見たことがない」

それは別に、平和だから、うまくいっているから、というわけではなかった。ただ単に、社会運動をするほど人々は国に関心を持っていないのだ。

「そんな法律を、本間秀実は必死になってサポートしたようなんだ」

「サポート？」ユラは、鼻で笑う。「つまり、賄賂でしょ」

「その通りだね」

だが、不可解なのは……と、三神は考える。その後、可決されてからその法律が効力を発揮した様子はない。本間秀実が何か得をした様子も見られない。あるとすれば……と、三神は眉間にしわをよせ、低い声でつぶやく。

「治安警察……か」

「治安警察？　なに、それ？」

情報屋にとって、「知らない」と言うことは何よりプライドが傷つくもの。ユラはムッとして、三神に顔を近づける。

「一応、その法律が通ったから、警察の中に治安警察が置かれているはずなんだ。治安維持法を遂行するための部隊、て言えばいいの

かな」
「へえ……聞いたことないけど」
僕もそうだ、と三神は心の中でつぶやく。治安警察が実際おかれているのかもあやしいところ。それだけ、新治安維持法自体、知名度が低いのだ。だが、それも『誰か』の思惑によるものだろう。三神は、ユラの濡れた髪に触れながら、心の中でそう唱える。
新治安維持法は人々の言論や表現を制限する力まで持っている。だからこそ、反対を恐れて国はメディアに規制をかけた。国民の注目をその法律に向けないように。まあ、大々的に流したところで、誰も気にかけなかったかもしれないが……と、三神は皮肉そうに笑った。

「それで、その治安警察と本間秀実がどう関係するわけ？」
「法案が可決されてすぐ、内閣は変わり……本間は国家公安委員長に任命された。きっと、前々からそういう取引もあったんだろう」
三神はユラの髪から手をはなし、むくっと起き上がる。
「つまり……本間は、法案の可決で、二つのものを手に入れた。新治安維持法はもちろんだが、それと……治安警察」
ユラも起き上がり、はずれかけたバスタオルをぎゅっとつかむ。目を細め、得意げに微笑んで三神の言葉を補足する。
「国家公安委員長は警察のトップもトップ。治安警察も操れる、てわけね」
「それ以上かもしれない」と間髪いれずに三神は言う。「彼は、治安警察を組織するところから好きにできたはずだから」

ベッドから立ち上がり、三神は上着を脱ぎだす。ユラはそれを見つめ、首をかしげた。

「でも、だからなに？　今まで、特になにかしたわけじゃないんでしょ？　その法律も治安警察も使われた様子はない。違う？」

上着を放り投げ、三神はユラに振り返る。彼には珍しく真剣な表情で、ユラは一瞬たじろいだ。

「だからこそ、不気味なんだ」三神は低い声でそう指摘した。「それに……秘密裏に使われている可能性も否定できない。僕の調べがまだ足りないのかも……」

服を脱ぐと、三神が実は筋肉質であることが分かる。割れた腹筋。太い二の腕。三神はわざといつもゆるい服を着て、それを隠していた。情報屋といっても、裏の世界で生きる以上、命を狙われないとは限らない。相手を油断させておけば、スキもできる。そのために、あえて柔なフリをしているのだ。

ユラは唯一、彼が裸のときだけ、そのひきしまったボディを楽しむことができる。三神の話はそっちのけで、ここぞとばかりに、彼女はなめるように見つめていた。そのうち、体が熱くなってくるのを感じ、いてもたってもいられなくなる。

「ねぇ」とユラは甘い声をだし、ベッドから腰をあげる。三神に近づくと、その胸元を人差し指でひっかいた。「とりあえず、この一週間は仕事の話はなし」

三神は腑に落ちない表情でユラをにらむ。

「情報を聞き出してきたのはそっちじゃないか」

「細かいことは気にしない」

言って、ユラは三神の首元に厚い唇を押し付ける。一、二回、繰り返し、ハッとする。

「そういえば……あの子の父親も政治家じゃなかったっけ」

「ん？」

ユラは、ほら、と顔をあげ、三神の目を見つめる。

「三神にも手伝ってもらったでしょ」

「あぁ」と三神は、思い出すように右上を見上げた。「長谷川正義くんか」

そういえば、困り果てた彼女を見かね、ほんの少し手助けしたことがあった。彼女が探していたのは、藤本和幸という少年。依頼人である長谷川正義のクローンだった。カインノイエと長い付き合いである三神は、大体のカインとは会っている。無論、藤本和幸にも何度も会っていた。

三神は、『カインに関する情報は漏らさないこと』という契約を、高い口止め料と引き換えに藤本と結んでいる。とりあえず、藤本和幸の住所と『殺し屋』であることだけをユラに教えたのだ。『カイン』とは一言も言わなかったから、契約違反ではないだろう。三神はそう正当化させていた。だがきっと、それが藤本マサルに知れれば、契約違反だ、と怒鳴りつけられることだろう。三神はその様子が容易に想像できた。

「そうそう」とユラは人差し指で空を切る。「あの子も、確か……参議院議員の息子じゃなかったかなぁ。いや、衆議院議員？　どっちだっけ……」

「……」

そしてしばらく、部屋が静まった。二人は各々、何かを考えている。

「結局」と先に声を出したのは三神だった。「仕事の話しかしてないねぇ、僕たち」

ユラは、ただ苦笑した。

インターミッション：情報屋の休日（後書き）

既存の治安維持法を基にしていますが、無関係です。治安警察も存在しません。ご了承ください。

次話から、本題に戻ります。インターミッションでした。

偶像崇拝

トーキョーのトシンから離れたところに、高級住宅がならぶ一角がある。和幸は、そのうちの一軒、特に豪勢な邸宅を見上げて立っていた。ほかの住宅よりもずっと高いブロック塀。三メートルはあるかもしれない、と和幸は苦笑する。

「金持ちは大変だな」なんてのんきにつぶやいて、和幸は軽くストレッチを始める。屈伸しながら、ふとカインであった過去を思い出す。毎晩のように、こうして泥棒まがいのことをしていたものだ。それも、いつも侵入するのは豪邸だった。それだけ、このトーキョーの金持ちが腐っている、ということだ。金持ちは金と引き換えに子供を買い、あるものは実の子として育て、またあるものは玩具としてあつかっていた。虐待目当てに買われ、自分が来たときには手遅れだった子供もいる。

和幸は、その光景を思い出し、ぴたりと動きをとめる。封じようとしていた、ある気持ちが襲ってきた。カインをやめたことに対する、罪悪感だ。自分がこうしている間にも、誰かは攫われ売られている。それを思うと、自分がとてつもない身勝手な人間に思えてくる。自分の生き方を優先し、助けを求める子供たちに背を向けた。自分勝手以外の何者でもない。

だが、それでも……と、和幸は体を動かし始める。足首をまわし、腕を伸ばす。たとえ裏切り者とののしられようと、罪悪感におしつぶされようと……カヤへの想いを断ち切ることはできない。

ただ、カヤと一緒にいたいんだ。今、自分にできる弁解はそれだけだ。彼は心の中で強くそう唱え、目の前にそびえる塀を見上げた。短い間隔で監視カメラが設置されているのが分かる。今まで『おつかい』で侵入した豪邸と比べても、かなり守りは堅そうだ。何より面倒なのは、ガードマンを攻撃できないことだろう。『おつかい』

と違って、相手は敵ではない。今から連れ出すのは、売られた子供ではない。今から侵入する家は、あくまで……

「彼女の実家なんだよなぁ」

和幸は、改めてそれを確認すると、がっくりと肩を落とす。

「玄関から入りたいよ」

そんな愚痴をこぼしながらも、なんて気が楽だろう、と笑みをこぼす。たとえ、見つかって捕まっても、怒られるだけ。『おつかい』と違って殺されるようなことはない。――本当に、自分は命の綱渡りを引退したんだな。そんな実感が唐突にやってくる。といっても、見つかればカヤとの付き合いは、より難しくなるだろう。不法侵入なんかする男を、どこの親が気に入るだろうか。下手すれば、別れろ、といわれるかもしれない。気は楽だが、プレッシャーは、もしかしたら『おつかい』よりもあるかもしれない。和幸はそんなことを考えていた。

そのときだった。

「お」

ブー、と何かがポケットの中で暴れ始めた。和幸は、その何かをポケットから抜きだす。それは、最近よく使うようになった携帯電話だ。セットしていた十二時のアラーム。時間だ。和幸は、それをすぐにしまうと「よし」とため息混じりにいって、かぶっている帽子を深くかぶる。そして、胸ポケットにしまっていた黒縁眼鏡をとると、なれない手つきでそれをかけた。

『おつかい』と違って、今回は顔を隠す必要がある。顔を隠さず向かっていくのはカインの意地であり誇りだったが……今回の場合、

見つかっても殺されはしないにしろ、カヤとの今後がかかっている。ちょっとでも監視カメラに顔が映れば、アウトだ。顔を隠していれば――自分だとバレさえしなければ――どっかのこそ泥ということにもできるだろう。

「そんじゃ」と和幸は塀から距離をとる。「誘拐しに行くか」

塀に向かって勢いよく助走をつけ、思いっきり足に力をいれた。筋肉の収縮が全身を駆け巡り、生々しい感覚として伝わってくる。それに妙な興奮を覚えつつ、和幸は地面を蹴った。限界まで圧縮されたバネが解放される。その瞬間、まるで地面が爆発したかのように、体が宙へと弾かれる。解き放たれた筋肉が喜びの声をあげている。和幸はそんな懐かしい感覚に、心を躍らせた。全てはたった一瞬の出来事なのに、スローモーションのように一つ一つの体の変化をとらえることができる。走り高跳びの要領で、宙でくるりと体をひねらせ、塀を背中に感じる。すべるように塀を越え、真っさかさまに地面へと落ちると、それまでコマ送りだった世界が一気に早まわしになる。

あっという間に地面が目の前に迫り、和幸は両手を地面に突き出し、バク転するように体を回す。ザッという音を鳴らし、足が地面に埋まるように着地した。気づけば、まるでクラウチングスタートのような姿勢をとっている。ふと顔をあげると、かぶっていたはずの帽子が目の前に落ちている。和幸はしばらくそれを見つめ、ふうっとため息を一つこぼす。

両手を地面からはなし、パンパンと土をおとすと、それをひろって頭にのせた。

「陸上部、はいろうかな」なんてぼやいて立ち上がり、屋敷のほうへ体を向ける。あたりはよく手入れされた松の木や、たくましい桜の木が何本も並んでいる。和幸はその中の一本の木に身を隠すよう

にして、庭の様子を伺った。見える範囲には、二、三人ほどのガードマンがうろついている。ちらりと視線を屋敷の二階へとうつす。一番はじの角部屋。そこがカヤの部屋だ。

ふと、和幸はあることに気づき、不敵に微笑む。

「いい木があるじゃないか」

それは、カヤのベランダまで到達するほどの、背の高い立派な桜の木だ。あれをうまく利用すれば……和幸は、監視カメラの死角をぬって桜の木へと向かった。

＊　＊　＊

「おやすみなさい」

カヤはそう言ってソファから立ち上がる。

「おや、もう寝るのか？」

眉をあげ、焼酎を片手にそう言ったのは彼女の養父、本間秀実だ。ソファにふんぞり返るようにして座っている。その隣には、彼の秘書である前田が背筋をぴんと伸ばして浅く座っていた。

「明日は日曜日なんだし、もう少し晩酌につきあってはくれないかね」

言って、本間は焼酎をカヤに掲げるようにしてみせる。カヤは、申し訳なさそうに微笑んだ。

「ごめんなさい。もう眠いので」

「そうか……それなら、仕方ないね」
残念そうにそう言って、本間は焼酎のビンをガラスのテーブルに置く。
「おやすみ、カヤ」
カヤはぺこりとお辞儀をすると、テーブルにおいてある紅茶のカップを取ろうと手をのばした。すると、前田がハッとし身を乗り出す。
「僕が、片付けておきますから」
「え、でも……」
「おやすみなさい、カヤさん」
カヤの言葉を遮るように前田はそう言うと、いそいそと腰をあげてカヤのティーカップを手に取る。ここまでされては、断れない。カヤは、じゃあ、と戸惑いつつ言うと、前田にもお辞儀をしてリビングから出ていった。
ティーカップ片手に、カヤの背中をじっと見つめる前田。その頬はほんのりと紅潮していた。パタンと扉が閉められ、カヤの姿は見えなくなった。閉ざされた扉。それは、自分の彼女への想いをよくあらわしている。前田のティーカップを持つ手が震えた。
「流しにおいてきます」と本間に言うと、リビングの奥にあるキッチンへと向かう。
もう十二時近い。メイドはすでにさがっている。暗いキッチンで、前田はティーカップをじっと見つめた。これを流しに置いて去ればいいだけなのに、彼にはそれができなかった。せいぜい自分が彼女に触れられるとすれば、こうした物を媒介とした間接接触くらいだ。

五日前に出会った少女。それは、自分の上司である本間秀実の養女。彼女と会った瞬間、そのあまりの美しさに、彼は身ぶるいした。まるで、時が止まったようだった。いや、時を止めたかった。本間が自分を彼女に紹介すると、彼女は丁寧にお辞儀をし屈託のない笑顔を浮かべた。魂が吸い取られたようだった。それからというもの、昼夜彼女を考えている自分がいる。秘書である自分は、本間につきっきりだ。こうして家に招かれることも毎日のよう。彼女とも同じ空間にいる機会は多い。だが、そこには徹底的な距離があった。絶対に踏み込めない線。それが、彼女と自分の間に引かれている。どんなに近くに座ろうと、彼女に触れることは赦されない。彼女に熱のこもった視線を送ることも赦されない。自分にできるのは、陰から彼女を慕うことだけ。

前田は、ティーカップの口を震える指で、撫でるようになぞった。ふと、ある箇所に、乾いた紅茶が弧を描いているのを見つける。ここは……と、前田はごくりとつばを飲む。間違いない。彼女はここに口をあてて、紅茶を飲んでいたんだ。薄暗いキッチンで、前田はそっとその部分に自分の唇をあてる。もうすぐで十七を迎えるというあどけない少女。それなのに、他のどの女からも感じたことのない、魅惑的な色気がある。前田は彼女を思い浮かべて、乾いた紅茶を舐めた。それだけで、彼女を自分のものにしたような満足感を覚え、前田はうっすらと笑みを浮かべた。

侵入者

もうすぐで十二時。何も用意してないよ。私はリビングから出ると、弾かれたように玄関へと足を運ぶ。靴を部屋に持っていかなきゃ。階段の横を通り、吹き抜けのある玄関ホールへとたどり着く。

靴、靴、としゃがんだときだった。

「カヤちゃん」

靴を取ろうと伸ばした手をひっこめ、振り返る。

「望さん」

「何してるんですか？」

そうだった。望さんは、外では私のボディガードだけど……私が家にいるときは、屋内のガードマンなんだ。でもまさか、こんなときに見つかるなんて。

「あ……靴を、揃えていたんです」と私はすっくと立ち上がる。靴を部屋に持っていったらさすがにあやしまれる。

「こんな夜中まで起きてたら、お肌あれちゃいますよ」

「そうですよね。早く寝ます」

私は肩をすくめ、にこりと微笑む。望さんもそれに応えるように微笑んだ。怪しまれてはいない……よね。こんな時間に靴を揃えるなんて明らかにおかしいけど。念のため、明日のこの時間に同じことをしようか。そしたら、私の癖だと思うはず。うん、そうしよう。私はそんなことを考えながら、望さんの横を通り過ぎる。

「おやすみなさい」と早口で言い、階段に足をかけた。
「いい夢を」
そんな望さんの声が後ろから聞こえたが、私は振り返りもせず階段を上る。もう十二時は過ぎてる。もしかしたら、和幸くんはもう来ているかもしれない。
真夜中のデートか。なんだか、ドキドキするな。靴がないけど……いざとなったら、裸足でも私は構わない。ああ、でも服は着替えなきゃ。私はキャミソールにタオル生地の長ズボン。こんな格好じゃ外には出れない。というか、こんな格好で和幸くんに会いたくないよ。って……もし、もう来てたらどうしよう。
焦って早まる足で、一気に二階まで駆けあがった。二階に上がると、まずは広いスペースがある。そこには、おじさまの趣味のビリヤード台がおいてある。そこを囲むようにドアが並んで、一番端に私の部屋がある。私は足早にそのドアに向かう。
それにしても……もう十二時も過ぎてるし、お店も開いてないよね。靴をもってこい、てことは外に出るってこと。和幸くんはどこにつれて行ってくれるんだろう？
ガチャっとドアを開ける。真っ暗な部屋に、窓から真夜中の月の光が差し込んでいる。辺りを見回す。まだ引っ越してきたばかりで、物も少ない。あるのはベッドと机、姿鏡くらい。おじさまがタンスを買ってくれるというので、新しく買った服や下着はまだダンボールに入ったままだ。とりあえず、変わった様子はない。誰もいない。よかった、まだ来てないんだ……と私は安堵する。急いで着替えよう、と私は部屋に足を踏み入れ、ダンボールへ駆け寄る。背後でパタン、と扉が閉まる音がして、部屋が一段と暗くなった。
「ええっと……」と、ダンボールを見下ろす。ちゃんと、どれにどの服をいれたか細かく書くべきだった。着たい服がどの箱にあるの

か分からない。腕を組み、首を傾げる。
そのときだった。急に後ろから口をふさがれ、腰に『何か』が絡み付いてきた。
「ん！？」
身動きできないくらい、ぎゅっと『何か』は私の腰を締め付ける。
「驚いた？」
どこか、いたずらっぽい声が背後からした。耳元に息遣いを感じる。背中にぬくもりを感じる。やっと、私は状況を把握して、ホッと肩の力を抜いた。
それがわかったのか、口をふさぐ手がゆっくりと離れる。
「心臓止まるかと思った」
腰に絡みつく『何か』――彼のたくましい腕に、私はそっと触れる。
「どこに隠れてたの？」
「ドアの陰、かな」
あ、そうか。ドアを開けたまま、部屋を見回したのが敗因か。でも……背後に人の気配も全然しなかった。足音も息遣いも聞こえなかった。さすがは、カイン、なのかな。
ううん、そんなのどうでもいい。とにかく……私はクスッと微笑み、くるりと体をねじる。
「どこに連れて行ってくれるの、誘拐犯さん？」

帽子と眼鏡で変装した『誘拐犯』は、フッと微笑んだ。
私のウエストを抱いていた手が、肩へと伸びる。ぐいっと体が反転させられ、私は彼と向かい合った。

「え」という言葉が自然と漏れ、胸が熱くなる。
目の前に、彼の顔があった。じっと私を見据える瞳。こんなに近くで見るの、久々だ。思えば……私が彼の『彼女』になってから、私たちの距離はひらいてしまった。気持ちが離れたわけじゃない。環境が、私たちを引き離しているだけ。こうなるとは思っていなかったから……最後に彼の部屋に泊まった夜――彼がカインを辞めた夜、私たちは照れくさくて、当たり障りのない話ばかりしてごまかした。一緒にベッドに横になっても、彼は私の体に指一つ触れることはなく……ただぎこちなく、脈絡のない話をしていた。こんなに、触れ合うことが難しくなるとは思ってもいなかったから。もったいなかったな、なんて思ってしまうんだ。
ねぇ、もしかして……誘拐なんて言い出したのは、同じ気持ちだからかな。

「カヤ」と、彼の唇が動いた。ドキッとして、体がこわばる。
「はい！」変なところから声がでた。ような気がした。

「目……」
「え？」

目？　目が何？　私がきょとんとしていると、言いにくそうに彼は苦笑する。

「目、瞑ってくれないと……なんつーか、やりづらいんだけど」
「……あ！」

一気に顔が熱くなる。こんな雰囲気で、こんなシチュエーションで、彼が何しようとしているか……当然、分かってたのに。何してるんだ、もう。子供じゃないんだから。

「ごめん」と、慌てて謝って私は目を瞑る。ドクン、ドクン、と一つずつ重低音のような鼓動がなる。初めてじゃないのにね。まだ、こんなに緊張するよ。

私の肩にのせた彼の手に力がはいる。そして……唇に、懐かしい感触がした。やわらかくて優しいキス。一週間ぶりの彼とのキス。みぞおちがきゅうっと苦しくなる。私は彼の首に腕を回した。もっと、していたい。すごく居心地がいいんだ。胸が高鳴って、悩みも不安も忘れられるの。でも……わがままをいえば、もっと触れてみたい。手だけじゃなくて、唇だけじゃなくて、もっと……彼に触れたい。彼を知りたい。そんな気持ちが、胸の奥からこみ上げてきていた。

密室の葛藤

俺が唇を離そうとした瞬間、カヤは俺の首に手をまわし、激しく唇を重ねてきた。

いつから、こんなに積極的になったんだ？　と内心驚いていた。いや、もともと積極的だったのかもしれない。よく考えれば……付き合いだしてまだ一週間。カヤのこういう面は、俺も全然知らないんだよな。

そんなことを考えながらも、俺はカヤに応えるように唇を動かす。

「ん」と漏れた彼女の声が、俺の脳天をつらぬく。一気に、心臓が全力疾走を始めた。

よく考えれば……カヤはキャミソール一枚。肩も胸元も、素肌がさらけだされている。彼女の肩にのせた手を少し動かすと、そのキャミソールの紐が指にひっかかった。その瞬間、ざわっと腹の奥で何かがうごめいた。これは……まずい。そう直感した。

そもそも、暗い部屋。真夜中。二人きり。これだけそろって、何もするな、てほうが無理があるんだ。

俺は唐突に唇を離し、カヤを引き離す。

「……」

じっと彼女を見つめる。いきなりの俺の行動に、カヤは驚いているようだ。きょとんとして、まん丸の目を俺に向けていた。何か気のきくセリフはないか、と俺は必死に探す。だが、俺の頭の中には、こんな状況に必要な言葉のストックはない。こういうときは、単刀直入に言うしかない。

「これ以上は……やめたほうがいい、と思う」

「どうして？」

俺を真っ直ぐに見つめて、カヤは小首を傾げた。その仕草がまた可愛くて、せっかくかけた理性のブレーキがはずれそうだ。

「多分」と本能を抑えて、言葉を絞りだす。「我慢できなくなる」

「え」

そんな純粋な瞳で見つめないでくれ。俺は彼女の肩から手を離し、とりあえず身をひいた。目をそらし、帽子の上から頭をかく。

「その、俺も一応……男、というかなんというか」

いや、普通に男だろ。俺は何が言いたいんだよ。

「我慢……」ぼそりとカヤがそうつぶやいた。聞き漏らしそうなほど、小さい声だった。

「え、なんだ？」と俺は振り返って尋ねる。するとカヤは視線を落とし、相変わらずの小さい声で言う。

「我慢、しなくていいと思う」

「は……」

なん、だって？　俺がぽかんとしていると、カヤは上目遣いで俺を見てきた。

「我慢しないで、いいよ」

真剣な目。頬を赤らめ、どこか懇願するような表情。いや……待て。我慢しないで、て……まさか、そういう意味で言ってるのか？

話の流れと状況からして、そういうことだよな。俺の解釈があっているとしたら……いやいや、そんなわけない。焦りたくない、て言ったのはカヤだ。それに、まだ付き合って一週間。早すぎる、よな。俺は別にいいんだけど……カヤはそういうの気にしそうだ。そのカヤから、誘ってくるわけはないよな。

「何の話だ？」と、とりあえず聞くことにする。先走って答えて、変なことばっか考えてる男だと思われるのも嫌だし……

「……」

カヤは困ったような表情を浮かべ、それからうつむいた。「なんでもない」と小さくつぶやいて。

＊　＊　＊

「着替えるね」と私は言って、和幸くんに背を向ける。

「あ、ああ」少し困惑気味の和幸くんの声。「向こう、見てるから」

私はため息まじりに苦笑する。本当に……優しすぎるんだから。というか、まじめなのかな。

それにしても……砺波ちゃんのアドバイスはもっともだった。

――あいつは奥手だから。カヤが誘惑しなきゃいけないの。

ダンボールを開き、洋服をあさる。その間も、さっきのことを考えていた。私は……きっと、和幸くんを求めていた。心だけじゃなくて、体も。自分でもあんな言葉が飛び出すなんて思ってもいなかった。でも、あのまま……全てを奪ってほしかった。そんな気持ち

にかられた。焦らないでゆっくり進めよう、て言い出したのは私なのに。笑ってしまうよね。

私、どうしちゃったんだろう。もしかして、自分で思っている以上に……自由に会えないこの状況に参っているのかな。普段触れられない反動？　それとも、不安？

付き合う前の数日。私は和幸くんといつも一緒だった。だから安心できた。たとえガールフレンドじゃなくても、和幸くんを独り占めできていたから。でも今は……和幸くんと一緒にいない時間のほうが多い。その間のことが気になる。一緒にいない間に、和幸くんの気持ちが離れていきそうでこわい。その間に、もし和幸くんが、誰か他の、もっと素敵な人に出会ったら……そう考えるだけで、居てもたってもいられなくなる。

こわいんだ。だから……体で、その不安をごまかそうとしたのかな。会えない時間を、そうやって補いたかったのかもしれない。――和幸くんがそれを知ったら、呆れるかな。

私は目当ての服を見つけ、さっさとキャミソールを脱いだ。ふと、目の前の姿鏡に目をやる。そこに映っているのは、幸せなはずなのに不安そうな少女。なぜか、寂しそう。

下着姿の『彼女』は、ずいぶん華奢に見えた。ぼうっと『彼女』を見つめると、段々と漠然とした恐怖感におそわれる。なぜか最近、こうして鏡に映る自分を見るのが恐い。理由は分からない。ただ、鏡の向こうの『彼女』は、とても冷たくて恐ろしい女に見えて仕方が無い。自分じゃない気がする。……恐い。私はたまらなくなって目をそらした。

とにかく、着替えなきゃ。私は、ズボンもすばやくぬいだ。そのときだった。

「靴、ちゃんと持ってきたか？」

後ろから、彼のそんな声が聞こえてきた。

＊　＊　＊

「あ、それなんだけどね……」

背後から、申し訳なさそうな声がする。

「望さんに見つかっちゃって、持って来れなかったの」

「え」

思わず、振り返ってしまった。靴がどうの、というわけではない……望、という名前に反応したんだ。そして、目に飛び込んできた光景に、「あ」と俺は声を漏らす。それは、スカートのファスナーを閉める彼女の後姿。上半身は下着だけ。傷一つない滑らかな背中があらわになっている。覗き見なんて最低だ、と思いつつ……目が釘付けになる。触れたい、という気持ちが胸を押し上げてくる。きっと柔らかくて、すべるような手触りなんだろう。想像するだけで、胸が高鳴った。俺はごくりと唾を飲む。

そのときだった。鏡越しに彼女と目があった。

「！」

カヤは俺が見ていることに気づき、ハッと目を丸くした。俺も我に返り、やっと顔をそむける。

「悪い！」と慌てて謝った。

カヤからの返事はない。俺はじっとしていられず、部屋の中を歩き始めた。もちろん、カヤに背を向けて。

みっともない。こっそり見てるなんて……ありえないよなぁ。付

き合ってるんだし、堂々と見るほうがマシ、か？　いや、でも……相手がカヤだと、どうも軽はずみにそんなこともできない。純粋無垢。そんな言葉が彼女に合っている。穢(けが)れを知らない……いや、穢しちゃいけない。そんな気がする。

そりゃ、俺も男だし、興味はある。てか、こんなシチュエーションで何もしないほうがおかしいだろ。砺波に知れたら、大爆笑を招くな。でも……踏み出せない。つい、慎重になりすぎる。きっとそれほど……俺はカヤのことが、好きなんだ。

部屋の中をフラフラ歩いていると……ガタッと足元に何かが当たった。

「え？」と下を見ると、それは白い長方形の箱。荷物は端にまとめられていたはず。なんでこれだけ、こんなとこにあるんだ？　箱は開けられていて、中に入っている何かが月の光を反射してキラリと光る。よく目をこらしてみれば、なんてことはない。ただのヒールの靴だ。なんていうんだっけ。こういうの……砺波がよく履いているんだよな。パン……なんとか。パンパースみたいな名前の……まあいいや。

「カヤ、靴あるじゃんか」と俺はしゃがみ、箱の蓋をつまむ。

「え？　靴？」

どうやら、さっき覗いてたこと怒ってはいないようだ。声がいつもと変わらない。

「あぁ。ほら……」ここで振り返ったらさっきの二の舞。俺は靴を片方だけ箱から出し、カヤに見えるように掲げる。横目で、俺もじっくりとその靴を見つめた。なんだ、新品か？　やたらときれいだ。

するとやや間をあけて、「あ！」という驚愕した声が背後から聞こえた。あわてて近づいてくる足音がして、俺の手から靴が奪われ

る。は？　としゃがんだまま背後に振り返ると、カヤがその靴を胸に抱きしめ、せっぱつまった顔をしている。どうしたんだ？　と言おうと口をあけて……俺はそのままぽかんとした。
　着替えたカヤは……すごく、可愛くなっていた。思わず、見とれた。白いシャツに黒いカーディガン。そして、ふんわりとしたカラシ色のスカート。見るからに、清楚なお嬢様。正直、すごいツボだ。そりゃ、今日のデートで着てきた超ミニワンピースも、有難かったんだけど……どうも、どっかの自己チュー女を思い出してイマイチ好きになれなかった。もちろん、そんなことカヤには言えなかったけど。だから、こういう服のほうがカヤらしくて俺は好きだ。

「これは、ダメなの」

　そんな、どこか恥ずかしそうなカヤの声で俺は我にかえる。あ、そうだそうだ。靴の話だった。

「なんで？」

　もしかして、服と合わない、とかそういうことか？　ファッションのことは良くわからない。履ければどうでもいいと思うんだが。充分可愛いし、これでビーチサンダル履かれても俺は気にならない。

「これは……」とカヤは靴をぎゅっと抱きしめ、口ごもった。

　靴に関することで、そんなに真剣になる問題はあるだろうか？　外反母趾？　サイズがあわない？　いや、それにしては乙女な表情をしているし。俺は眉をひそめてカヤの言葉を待つ。
　カヤはしばらく視線を落とし……そして、深呼吸をした。で、急に目を見開いて俺を見つめてくる。頬は赤らんだまま、真剣な表情だ。

「ねぇ、和幸くん！」
「は、はい！？」
思わず、そんな返事をしていた。いきなり、なんだよ？
「ダンスとか……興味ある？」
「は？　ダンス？」
靴の話はどこいった？

密室の葛藤（後書き）

恋愛小説はまだまだ続きます。かなり続きます。

跳躍

和幸くんが見つけた靴……それは、お昼に砺波ちゃんから受け取った靴。砺波ちゃんの高校が指定した銀色のパンプス。クリスマスパーティの、シンデレラの靴だ。それを片方、前もってパートナーに渡して、パーティの夜にその靴を履かせてもらう。それが、ルール。私は、できるなら和幸くんと行きたいと思っていた。ううん、絶対一緒に行きたい。だから、この靴もいつか彼に渡そうと思っていたんだ。でも……気になることが一つ。それは、靴と一緒に砺波ちゃんがくれた衝撃の言葉。

――和幸って、ダンスパーティとか嫌いじゃなかった？

そう。話を聞けば……和幸くんは、そういうイベントごとは好きじゃないらしい。思わぬ、事実だった。もう付き合ってるし、あとはタイミングを見計らって……ロマンティックに誘うんだ、なんて張り切っていたのに。思わぬ障害があった。そうだよね、和幸くんが乗り気じゃない可能性もあるんだ。

でも、でも……もしかしたら、砺波ちゃんの勘違い、てことも。私はすがるように和幸くんを見つめていた。

「ダンス……」と和幸くんは眉をひそめる。そして、首を横に振った。「あんま、好きじゃないけど。なんで？」

「……」

あ……うそ。やっぱり、幼馴染の砺波ちゃんの言葉を信じるべきだったぁ。私はがっくりと肩を落とす。あんま、好きじゃない。そう口では言ったけど、顔にははっきり書いてある。嫌いだ、て。

「カヤ？　ダンスがどうしたんだ？」
「な……なんでもない」
私は力なく靴をその場に下ろし、自分で足を入れる。うーん、味気ない。
「それ、ダメなんじゃなかったのか？」
和幸くんはいぶかしげな表情でそう言って立ち上がった。うん、ダメだったんだよ。ついさっきまでは。パーティの日まで履かないつもりだったんだ。でも、和幸くんと行けないなら行く意味もないし。本当はすごく精神的に大ダメージ。でも、私が勝手に盛り上がっちゃってただけだ。クリスマスは、何か二人で楽しめることをしよう。私の誕生日でもあるし。そうだよね、二人きりで何かしたほうがいいよ。うん。私は顔を上げ、にこりと微笑む。
「もう、いいの」
そういえば……同じ言葉を和幸くんに言われたことがあったな。私はそのときのことを思い出し、苦笑した。
「あ、これ……もう片方の」と和幸くんは、思い出したようにもう一方の靴を箱から取り出し、私に渡してきた。
「ありがと」
それを受け取って、同じように自分で履く。今更だけど、自分で靴履いちゃったら、もうシンデレラ失格だよね。とほほ、て言葉……初めて言いそうになった。
トントン、とつま先をたたくと、視線を感じて私は和幸くんに振り返る。彼は腰をあてがい、不敵な笑みを浮かべていた。何か、企

んでるような、そんな顔だ。
「じゃ、覚悟はいいか？」
ん？　覚悟？　唐突に、何を言い出すんだろう？
きょとんとしていると、和幸くんが歩み寄ってきて、いきなり私を抱き上げた。いわゆる、お姫様抱っこ……ドキッと心臓が大きく揺れた。
「な、何？」
それは、こんなことされてすごくときめくんだけど。でも、狙いが分からない。覚悟って何の？
「そうだなぁ」と和幸くんはもったいぶったようにつぶやく。「すんごい体験させてやるよ」
「へ？」
どういう、体験？　私は目をぱちくりさせて、自慢げに微笑む彼を見つめた。

＊　＊　＊

「本気、なの？」
「怖いか？」
「それは……こんなこと、したことないし」
「大丈夫。カヤは何もしなくていいから。っつーか、あんま動くなよ」
「う、うん」
「ま、とりあえず……声、ださないようにな」

「……そんなの、絶対無理！」
「家の人に声聞かれたら、アウトだぞ」
「……わ、かった。がんばる」

カヤはぐっとこらえるように唇をかみ締め、うなずいた。まさか、こんなことになるなんて……想像もしていなかった。自分を抱きかかえる彼の腕――背中を支える腕、膝を抱える腕に、ぐっと力がはいるのを感じる。彼は本当に実行するつもりなんだ。カヤは、ごくりとつばを飲む。

「覚悟はいいか？」

そうたずねてくる彼の顔に緊張感はなく、眼鏡のレンズの奥で目が輝いている。おびえるカヤとは対照的だ。

「本当に」とカヤはおそるおそる口を開く。「本当に、塀の向こうまで跳ぶの？　ここから？」
「ああ」

和幸は涼しげに短く答える。
二人は、屋根の上にいた。四角いキューブが重なるようなデザインの屋敷は、屋根が平坦になっている。しかも、がっしりとしたコンクリート造りで、さらに広い。和幸にとって、充分な助走スペースだ。一つ、不安要素があるとすれば、カヤを抱えて飛ぶことくらい。多少負担はあるだろうが、それでも軽く道路まで飛び降りられるだろう。パッと見ただけだが、高さも塀までの距離も、大した事はない。高さはせいぜい、ビル三階程度。縁から塀までの距離は、五メートルほどだろう。今まで、これ以上の高さから飛び降りたこともあるし、これ以上の距離を飛び越えたこともある。和幸は、一切心配などしていなかった。

「本当の本当に、飛び降りるの？」

カヤは、和幸に抱きかかえられたまま、しつこく確認する。和幸は、はは、と苦笑し、一歩ずつ後ずさっていく。真剣なまなざしで、屋根の縁を見つめながら。――助走の距離をとるために。

「それ以外に、お前を連れ出す方法ある？」

言われて、カヤは、ええと、と考える。

「あるんじゃない、かな」

その嘘は彼女の最後のあがきだった。

「ないよ」と和幸は一蹴し、勢いよく始めの一歩を踏み出す。カヤははっとして、和幸の首にしがみつくように腕を回した。一体、彼が何歩進んだのか、数えることもままならないスピード。これが、高校生の脚力だろうか。カヤは改めて、『創られた』子供が特異な存在であることを思い知った。

充分取った距離を、和幸は一瞬のうちに走り抜け……そして、屋根の縁を思いっきり蹴ると、勢いよく宙に飛び出す。ふわっと体が浮く感覚がして、カヤは和幸の首に絡める腕に力を入れる。そしてぐっと目をつぶった。風の吹き付ける音が耳をつらぬく。重力が臓器を押し上げる。遊園地……そんな言葉が頭に浮かぶ。幼いころに乗ったアトラクションを思い出した。ただ高い位置から下降するだけの単調な乗り物だった。それを、とても気に入っていた気がする。怖いけど、空を飛んでいるみたいで気持ちよかった。そのときの感情が蘇る。カヤはいつの間にか、目をつぶったまま、微笑んでいた。

ダン、という乾いた音がして、地響きにも似た振動が全身に伝わ

ってきた。

「うぅ……気持ちわる」

そんな声が耳元でして、カヤはあわてて目を開き和幸を見つめる。

「大丈夫！？」

「いや」と、和幸はひきつった笑顔を浮かべる。「いつものことなんだけど……着地すると変な痺れがあってさ」

そりゃ、あんな高いところから飛び降りたら……と、カヤは心の中でつぶやく。顔を上げると、ついさっきまで居たはずの屋根が、塀の向こう、さらに高いところにある。あんなとこから……ここまで飛んできたんだ。カヤはあたりを見回した。確かに、ここは塀の外。暗い路上。信じられない、とカヤは目を丸くする。

「本当に丈夫なんだね、体」出てきたのは、そんな言葉だった。半ば、呆れたような声だ。

「もう、丈夫、の一言じゃ片付けられない気もするけど」なんて和幸も呆れたように言う。我ながら、冗談みたいな体だよ、と和幸は苦笑した。

跳躍（後書き）

ラブコメすぎますね。

＊くれぐれも屋上から決して飛び降りないように。大怪我します。当たり前ですが、念のために。

存在の証明

和幸が中腰になると、カヤは和幸の肩に手を置き、地面に足を下ろした。それを確認して、和幸はカヤの膝下から手を抜く。

「遺伝子操作やらナノマシンやらなんやらで、体は改造されまくり。まるでサイボーグでさ」

「え？」

自分の足で地面に立ち、背筋をのばしたときだった。遺伝子操作？　ナノマシン？　急に何の話を始めたんだろう、とカヤはきょとんとする。それがわかったのか、和幸は「あぁ」と照れたように苦笑する。

「体が丈夫な理由だよ」

「あ！」

軽くストレッチを始める和幸を見つめながら、カヤは「そうなんだ」と小声で答えた。その表情は、一気に曇った。また自分は、余計なことを聞いてしまったんじゃないか。そんな気がしていた。

当の和幸は、屈伸しつつ、けろっとした様子で話を続ける。

「ま、それが唯一……商業用のクローンでよかった、と思えるところだけど」

「商業用……？」

カヤはぎこちなく鸚鵡返しする。「ああ」と和幸は、足首をまわしながら頷く。

「なんていうかな……売るためだけに創られたクローン」

そう言われてもぱっとこない。カヤは首をかしげた。それに、和幸は申し訳なさそうに微笑む。

「普通は違うんだ。たとえば……砺波」

「砺波ちゃん？」

「あいつのオリジナルは交通事故で死んだらしい。で、その親が、子供の代わりに、と『発注』してクローンを創った。それが砺波なんだ」

発注、という言葉に違和感を覚えながらも、そうだったんだ、とカヤは複雑な気持ちになる。砺波がカインだというのは知っていたが……ということは、砺波も誰かのクローンだということなんだ。今更ながら、それに気づかされた。

「一方、俺や曽良は違う。誰かが『発注』したわけじゃない。誰かがＤＮＡをどっかから盗んできて勝手に創ったクローンなんだ。オークションで売るためにね」

「オークション？」

骨董品とかアンティークを売るアレ？　とカヤは眉をひそめる。そんなところで、クローンが――命が売り買いされているというのか。カヤはゾッとした。

「いわゆる、闇オークションってやつだな。その客は最悪だ。オークションで売られたクローンはロクな目にあわない。奴隷のようなもんだ」

遠くを見つめる和幸の目が、カインのときのそれに戻っていた。

カヤはそれを感じ、一歩後ずさる。彼を恐い、と思っている自分がいる。カヤはごくりと唾をのみ、胸元に手を置いた。

「性欲処理だとか……虐待用だとか……存在の証明のない俺たちは、いい様に使われるんだ。そういう需要もあって体が丈夫に創られるんだけどな。乱暴に扱っても壊れないようにって。

あとは研究のため、かな。要は、人間モルモットなんだよ」

吐き捨てるようにそう言って、和幸はうつむいた。その表情は、『一般人』ではなくなっている。今、自分の前にいるのはカインだ。カヤはそう思った。

存在の証明……か、とカヤも視線を落とす。『発注』されたわけではないクローンは、誰もその存在を知らない。勝手に創られたクローンを知るものなどいない。せいぜい、創った人間だけ。そんな彼らがどんな目に遭おうと、誰も気にかけない。というより、誰も気づかないんだ。カヤの胸がぐっと締め付けられる。どんなにつらくても、救いの手を期待することもできない。なんて果てしない絶望だろうか。

でも……と、顔を上げる。そこには、そんな絶望から抜け出し、立派に立っている少年がいる。カヤの頭に、六十を過ぎたある男の顔が思い浮かんだ。誰も知らないはずの彼らに手を差し伸べた男がいたんだ。そして彼は、子供たちに『家』を与えた。――藤本マサル。カインが父と呼び、慕う男。なぜ、カインが彼を神のようにあがめるのか、今さらながら分かった気がした。カヤは、フッと頬を緩める。いつか、藤本を悪い人じゃないか、と疑った自分が恥ずかしくなった。

カヤは和幸に歩み寄り、唐突にぎゅっと抱きしめる。

「え？」

彼は、そんな藤本の元から去った。与えられた居場所から旅立った。そして、ここに居る。自分の胸の中にいる。これからは、自分が藤本の代わりに彼を支えるんだ。カヤはそう心の中で強く誓った。

＊　＊　＊

「カヤ？」

なんで急に抱きしめてきたんだろう。俺には、その行動の意味が分からなかった。今の会話の中に、それを誘発する要素などなかったはずだ。ただ、事実を話しただけなのに。

「和幸くんの、存在の証明……」と、カヤは俺の胸に顔をうずめてつぶやく。「私じゃだめかな」

「え」

思わぬ言葉だった。俺は返す言葉が思いつかず、口をぽかんと開けたまま硬直する。ただ、俺の心臓は必死に何かを訴えようと強く鼓動を打っている。

「前、言っていたよね。自分だけのものがない、て。自分はクローンだから、て」

「あ、ああ」

一週間以上も前の話だ。よく覚えているな、と半ば感心する。と、同時に、そういえばそんな話もしたな、と若干恥ずかしくなった。

「私……」俺の背中を抱くカヤの手に、ぎゅっと力がこもる。「和幸くんだけのものになりたい」

「！」

その瞬間、耳まで熱くなったのを感じた。ど真ん中だ……。部屋じゃなくてよかった、なんてのんきなことを考える。多分……理性なんてふっとんでいた気がする。

「私じゃ……だめかな」

もう一度、カヤはそう尋ねる。俺は、言葉が全くでてこなかった。答えは一つなのに、いろんな気持ちがこみ上げてきてどうすればいいのか分からない。とにかく……と、フラフラしていた腕をカヤの背中に回し、ぎゅっと思い切り抱きしめる。

「か、和幸くん？」

目を瞑り、その感触で彼女の存在を確かめる。溢れる感情は、一つの言葉にすることはできない。どの言葉も、今の自分の気持ちを完璧に表すことはできないだろう。ただ……これだけは、言わなきゃいけない。俺は浅く息を吸い、カヤの耳元でささやく。

「カヤのこと……たまらなく、好きだ」

「……え」

それは、初めて好きだ、と言った夜。ぼんやりと夜道を照らす電灯の下、俺たちは強く抱き合っていた。先の見えない暗い路地は、まるでこれからの俺たちの未来を暗示しているようで、初めて暗闇におびえたんだ。でも、唯一確かなことがある。君を想うこの気持ち。それは、何があってもずっと変わらない。

たとえ君が……世界を滅ぼしても。

スクーターに乗ろう

「かわいい」

私は思わず、そんな声をあげていた。家から少し離れたところに、和幸くんはソレを停めていた。赤いスクーターだ。

「曽良から借りてきたんだ」と言いながら、和幸くんはスクーターの鍵をはずす。まさか、こんなの用意してくれてたなんて。飛び跳ねたくなった。

「んで、これも借りてきた」と和幸くんはシートの部分をぱかっと開けた。へえ、こんなところが収納スペースになってるんだ。私は興味津々で中をのぞいた。そこには、二つヘルメットが入っている。和幸くんは帽子をぬいでそこにいれ、代わりにヘルメットを取り出した。

「これ被って」と渡されたのは、フルフェイスタイプのヘルメット。顔が全部すっぽりはいって、目の部分にはシールドがある。スクーターにしては大げさにも感じる。でも、こういうものなのかな。私はそれを、まじまじと見つめた。これ被ったら、強盗みたいになりそう。

「どっか、行きたいところある？」

いいながら、和幸くんもヘルメットを被る。私に渡したものと違って、頭だけ隠れるタイプのものだ。運転する人が、こっちのヘルメットのほうがいいんじゃないのかな。そんなことを考えてぼうっとしていると、和幸くんは「あ」と目を丸くして私を見てきた。

「こんなの被るのださい、とか思ってるんだろ」
「え？　違うよ。そうじゃなくて……」
和幸くんは私の手からヘルメットを奪うように取り上げて、それを私に無理やり被せた。ちょっときつかったけど、スポッと顔がヘルメットにおさまる。すると、ほんの少しだけど視界が悪くなった。顔を覆うシールドのせいだ。でも、和幸くんの呆れた笑顔ははっきり確認できる。
「お前に何かあったら、一番困るのは俺なんだから」
え……。きゅん、と胸が締め付けられた。すんなりと言ってのけたけど、それ、すごく甘い言葉じゃない？
「せっかく」と、眼鏡を外し胸ポケットにいれる和幸くん。「砺波にそのヘルメット借りてきたんだからな」
「砺波ちゃん？」
このヘルメット、砺波ちゃんのなの！？　私はぎょっとした。
「あいつは、あれでバイク乗りだよ」
ええ！？　バイク……砺波ちゃんが？　あれ……曽良くんがスクーターで、砺波ちゃんはバイク？　逆な気がするのは、偏見だろうか。
「で？　どこに行きたい？」
ヘルメットについているゴーグルをはめ、和幸くんはこちらに向

かって微笑んだ。私は無駄に慌ててしまう。行きたいところ……急に言われても思いつかない。本音を言えば……和幸くんと一緒なら、どこでもいいんだ。

「えっと……」

でも、そんなことを言っても困らせてしまうだけだし。私は一生懸命、行きたいところを考える。しばらく、ううん、と唸って……私は降参するように笑顔を浮かべる。

「どこでも」

結局、でたのはそんな言葉。せっかく、どこか連れて行ってくれる、て言ってるのに。

「じゃあ」と、和幸はとくに嫌な様子もみせずに微笑んだ。「虹の橋にでも行くか」

「へ？」

虹の橋？　なんだろう、それ？　私はぱちくりと目を瞬かせる。和幸くんは説明する気はさらさらないようだ。さっさとスクーターにまたがって、エンジンをかけた。赤いスクーターが嬉しそうに、声をあげる。

「後ろ、乗って」

「え」

和幸くんが上半身をねじってこちらを見てきた。

いけない。ぼうっとしてた。そうだよね。私も乗るんだよね。

「うん」と、あわてて言って、私は和幸くんの後ろに……て、どうしよう。私は急に動きを止める。じっとシートを見つめ、スカートを握り締める。足をあげて……ここに、またぐんだよね。スカートでそんなこと……したことない。こんなことなら、スパッツでもなんでもはいてくるんだった。恥ずかしい。

「どうした？」

和幸くんの声がして、私はハッと顔をあげる。

「……」

「大丈夫か？」

あ、また……その言葉だ。胸がずきっとした。こんなときまで、何、心配させているんだ。スカートをつかむ手に力をいれる。和幸くんは今にもエンジンをきって、スクーターを降りてしまいそうだ。

「大丈夫！」と、私は声を張り上げる。

「え？」

いきなり大きな声をだした私に、和幸くんは驚いたようだった。

和幸くんは、殺し屋（カイン）を辞めた。裏の世界を捨て、日向（こっち）に来た。新しい世界で、新しい人生を始めた。変わろうとしているんだ。私も……変わらなきゃだめだよね。今まで、いつも和幸くんが迎えに来てくれた。連れ出してくれた。守ってくれた。でも、これからは違う。私が、和幸くんを支えるんだ。強くなりたい。

「行こ」

言って、私はスカートをひざ上までたくしあげる。なぜか、和幸

くんはあわてて前方に顔を向けた。でも、これで……と、堂々と足をあげ、シートをまたいで腰を下ろす。スカートがめくれあがって……やっぱり、ちょっと恥ずかしい。けど……

「落ちるなよ」という冗談交じりの声が聞こえ、私は腕を彼の腰にまわした。

「うん、大丈夫」

動き出すスクーターの上で、私は必要以上に強く彼にしがみついていた。彼の背中に体をよせる。ヘルメットさえなければ、この背中に顔をよせられるのに。それでも、安心する。こうして、抱きついているだけで……彼に触れていると実感できるだけで、幸せなんだ。

虹の橋　―約束―

「ここって……」

カヤは、スクーターから降りるとさっさとヘルメットをとった。フラフラとした足取りで、歩きだす。自分が連れてこられた場所におどろいているんだろう。

俺もスクーターのエンジンを切り、ヘルメットとゴーグルをはずす。スクーターから降りると、俺の足取りもおぼつかなかった。いや、これは……カヤとは違う。まったくの別の理由だ。簡単にいえば、精神的疲労だ。とんでもない拷問だった、と俺はため息をつく。よく事故らずにここまでこれたもんだ、と俺は自分を褒めたい。三十分ほどだっただろうか。その間、ずっと俺の全神経は背中に集中していた。あまりにカヤがくっついてくるもんだから、こっちはもう……

「和幸くん！」

「え！？」

カヤのはじけるような明るい声に、俺はハッと我に返る。いかん、いかん。とりあえず、背中のあの感触は忘れよう。

「きれいだよ」とはしゃいで彼女が指差したのは、トーキョーの街だった。光が満ち溢れるその都市は、こうして外からみれば、なんてことはない、ただの都会の街なんだ。その陰で、人が売られていようとは誰も思わないだろう。

手すりによりかかり、カヤは夜景に見とれていた。俺はその隣に歩み寄り、手すりにひじをつく。

俺たちは、虹の橋のちょうど真ん中に立っていた。それは、トー

キョーの副都心とお台場をつなぐ橋だ。つまり……スラムへの橋。すべてを失った者が最後にわたる橋。希望を求めてたどり着く橋。

「これが、虹の橋なんだね」

カヤは夜景をじっと見つめながら、そうつぶやいた。そうだよな。普通に暮らしていたら、この橋の名前を聞くこともないだろう。虹の橋……それは、スラムの連中が勝手に呼んでいる名前だ。どうやら、この橋の昔の名称が基になっているらしい。

「昔は……」と俺は腰をかがめ、手すりに置く腕に顎をのせる。「ここも有名な観光スポットだったらしい。派手にライトアップもがんがんしてたんだって」

「ここが？」

カヤがこちらに顔を向けたのが、横目で見えた。ここが……カヤがそう言った理由は容易にわかる。俺たち以外、ここには誰もいない。いや、いることはいるんだが……と、俺はちらりと橋の反対側に目をやる。そこには、生きているのか死んでいるのかも分からない老婆の姿。少し離れたところにも、似たような人の影がちらほら見受けられる。そりゃそうだ。ここは、トーキョー中の貧しい人間が、逃げ延びてくる場所――スラムへ続く一本道。

「あれが……スラム、なんだね」

いつのまにか、カヤはさっきとは反対側を眺めていた。俺も、カヤの視線の先を見つめる。光り輝く向かいの街とは対照的に、そこには暗闇しかない。なんとか、建物の陰がうっすらと見えるくらいだ。まるで不気味な島。

「ああ。あれが、お台場スラムだ」と俺は低い声で答える。
「向かい合っているのに……全然違うんだね」
彼女がどんな表情をしているのか、向こうをむいているせいで確認できない。でも、声は悲しそうだ。
「……」
こんなとこ、連れてくるんじゃなかったかな、と今更だが、反省する。ここから見るトーキョーの夜景は格別で、それも誰に邪魔されることもない。普通の人は近づかないからな。最高の夜景を貸しきり状態だ。だから、真夜中のデートにいいんじゃないか、なんて思ったんだけど……間違ったかなぁ。
「あそこも……昔は、にぎやかだったのかな」
カヤがぽつりとそうつぶやいた。俺は、ああ、と苦笑する。
「お台場スラムも、昔は観光スポットだったみたいだ。今じゃ、そのかけらもないけど」
「世界は、そんなにも変わるものなんだね」
「……そうだな」
確かに、その通りだ。昔のデートスポットが、今じゃ貧困層の隠れ家。世の中ってのは、容赦なく変わっていくんだな。俺もしんみりと、お台場の闇を見つめる。
そのときだった。カヤがくるりとこちらに顔を向けた。晴れやかな表情で。
「だから、これから、また変わるかもしれないんだよね」

「へ？」

そんなとぼけた声を出した俺に、カヤは目を輝かせてぐいっと迫ってくる。

「世界は変われるんだよ、和幸くん」

「……あ、ああ」

なんで、そんなに希望に満ちた顔なんだよ？　俺は唖然としていた。そんな俺に気づいていないようで、カヤは嬉しそうに微笑んで、主塔と主塔をつなぐケーブルを見上げる。

「ここも、またいつか、ライトアップされるかもしれない」

「……」

「そしたら、一緒に見に来ようね」

見に来ようって……俺は、何も答えられない。　カヤの言っていることが、あまりにも理解不能だからだ。急にどうしたんだ？　何が言いたいんだ？

俺が戸惑っていると、カヤはこちらに振り返り、微笑した。

「カインの皆が……日向で暮らせる世界も、きっと来るんだよ」

「！」

＊　＊　＊

変なことを言う女だな、なんて思われてるかもな。でも、希望が湧いてきたの。こんなところに来て、未来の希望を見つけるなんて……私は変なのかもしれない。でも……信じたいんだ。悪くなるだけが変化じゃないから。これだけ、変わってしまう世界――ううん。

これだけ、変わることができる世界なら、これから良くなる可能性だって十分あると思うんだ。だから……

私は和幸くんに振り返り、微笑んだ。

「カインの皆が……日向で暮らせる世界も、きっと来るんだよ」

「！」

和幸くんはぎょっとしていた。目を見開いて、呆然としている。あ、やっぱり……おかしな奴だ、て思われちゃったかな。というか……失礼だったかな。私はカインでもなんでもない。カインに助けてもらった人間。そんな私がこんなこと言うなんて、おこがましいよね。それも、カインを辞めた彼に。

私は和幸くんに体を向け、ごまかすように両手の平を見せる。

「な、なんて……軽はずみだったかなぁ」

「カヤ」

和幸くんは、今にも泣きそうな、つらい表情を浮かべていた。どうしたんだろ。やっぱり、私まずいこと言ってしまったのかな。何も知らない人間が、いけしゃあしゃあと偉そうに言うもんじゃないよね。

「ご、ごめんね。気にしな……」

気にしないで。そう言いかけたときだった。和幸くんの手がのびてきて、私の左手をつかんだ。

「！」

「そんな世界が来ても」と和幸くんは低い声で言う。「お前がいなきゃ、意味がないんだ」

「え」
「俺は……未来をお前と一緒に見たい」
私だってそうだよ。和幸くんとずっと一緒にいたい。ううん、ずっとあなたの傍にいる。なのに……なんで、わざわざそんなこと言うの？　急にどうしたの？　なぜか、胸が痛い。苦しい。どうして、そんな悲しい顔をしているの？
私が絶句していると、和幸くんはおもむろにポケットに手をつっこんだ。私の左手をつかんだままで……。
「お前の誕生日……」
そうつぶやいて、和幸くんはポケットから出した『何か』を、すばやく私の左手……左手の、薬指にはめた。ドクン、と心臓が飛び跳ねる。
「あ……」
これは……この指輪は……胸が熱くなる。シルバーリングに黒い石。見覚えがある、なんてものじゃない。これは……思い出の指輪。私は顔をあげ、和幸くんを見つめた。
「お前の誕生日に、結婚しよう」
「――え」
いきなりの……プロポーズだった。

虹の橋　―悪魔―

なに言い出してるんだ、俺は。いきなり、結婚って……馬鹿じゃないのか。焦りたくない、て言われたばっかだろ。でも……居てもたってもいられなくなったんだ。カヤの左手をつかむ俺の手が震える。無理だ。嫌だ。カヤのいない世界なんて、絶対に嫌だ。想像もしたくない。俺は自分勝手な人間だ。カヤと引き換えに、どんなにいい世界を与えられても、俺はきっとそれを拒絶する。カヤを犠牲にした世界なんて……俺はいらない。だから、絶対、カヤと二人で……

「そんで、ここをライトアップしよう」

まるで小学生みたいな発想だな。でも、それでもいいんだ。お前がそれを見たいというなら、俺が実現してやる。いや、一緒に創ろう。お前の望む世界を、一緒に創ろう。

「豆電球でもなんでも使って、俺たちでライトアップするんだ。……二人で」

カヤはぽかんとしている。俺がいきなり、熱弁をはじめたんだ。そりゃそうだよな。

ごめんな。今はまだ何もいえないんだ。でも、必ず、お前を守るから。お前の誕生日――『収穫の日』、俺がお前を守る。『テマエの実』なんて食べさせない。君を……人である君を守るんだ。そしたら、二人で新しい世界を……未来を見ていける。一緒に生きていける。

「結婚……」とカヤはうつむいた。指輪をじっと見ている。

正直、断られてもかまわない。付き合って一週間で何言っているんだ、と笑われたってかまわない。俺はただ、誓いたかっただけなんだ。結婚、なんて言葉をつかって……子供みたいだけど、それしか思いつかなかった。俺はそれだけ、カヤを失いたくないんだ。誓いなんだ。『収穫の日』、君を守る……神だとか使命だとか運命だとか、どうでもいい。俺に分かるのは、君を守りたい、という気持ちだけだから。俺は、一人の女に惚れた……ただの弱い人間なんだ。

「結婚」とカヤはもう一度つぶやいて、俺を見上げた。頬を赤らめ、目に涙を浮かべ、そして微笑んだ。「結婚、したい」

「へ……」

あれ……と、俺は思考がとまり、体が固まった。すんなりオーケー？　理由も聞かずに、そんな簡単に……？　ぽかんとしていると、カヤはハッとしてうつむいた。

「あ、やだ。もしかして、冗談だった？」

「え？」

「ご、ごめん！　本気にして……あ、気にしないでね。本当に、真に受けた私が頭悪いだけだから」

カヤは、耳まで真っ赤にして、俺の手から左手をはなす。パニクって、あたふたしている。俺はつい、その様子に噴出していた。我慢できずに声をだして笑うと、カヤはしょんぼりとうつむく。

「カヤ」と、俺は彼女の両肩をそっとつかむ。笑顔を消し、真剣な顔で。「俺は、本気だ」

はじかれたようにカヤは顔を上げた。涙の残る瞳を、大きく開けて俺を見つめている。

「本当に？」

「ああ」

「本気の、本気？」

「ああ」

カヤの頬がゆるんだ。いつもの彼女と違って、子供みたいな笑顔だ。

「楽しみ……楽しみだな、誕生日」

カヤは小声でそういって、頬を手で覆った。か、かわいい。俺はついにやけそうになった。

「そういえば」と、ずっと疑問に思っていたことを口にする。「誕生日、いつなんだ？」

というより、『収穫の日』はいつなんだ？　というのが本音だ。それがカヤにバレるわけもないのに、なぜか俺は緊張していた。

カヤはまだ頬を赤らめたまま、はにかんだ笑顔をみせる。

「クリスマス」

「え」

＊　＊　＊

和幸くんは、唖然としてしまった。顔が青ざめている。私は眉をひそめた。これが……彼女の誕生日を聞いた彼氏の表情だろうか。

私の誕生日は十二月二十五日。聖なる日、クリスマス。確かに、そんな特別な日に生まれたのは、珍しいのかもしれない。でも、それにしても、この驚きようは異常だ。

「どうしたの？　クリスマス、何かあるの？」

もしかして、クリスマスが大嫌い、とか？　イベントが嫌いな和幸くんだもん。それも考えられるよね。一年で一番嫌いなのは、クリスマスなんだ！　とか叫ばれたらどうしよう。って、和幸くんはそんなことしないよね。

「あと……二ヶ月もない」と、和幸くんは力なくつぶやく。

「う、うん。あと一ヶ月と二週間……くらいかな」

私は努めて明るく言った。でも……和幸くんは愕然とした表情でうつむいてしまった。やっぱり、変だ。なんなんだろう？　一体、どうしちゃったの？　クリスマス、そんなに嫌いなの？　それなら、私……誕生日、変えてもいい。日にちなんて、どうでもいいもの。

「和幸くん」と、私は和幸くんの頬に触れる。薬指に光る黒い石――小型カメラがキラリと鈍い光を発する。「どうしたの？」

彼の額には、汗がにじんでいた。張り詰めた表情で、じっと私を凝視する。何かを言いたそう。でも、口が開きそうで開かない。実は、体調でも悪いんじゃないか。私はそんな心配までし始めていた。

そのときだった。

「不吉な！」

どこからともなく、そんな怒鳴り声が聞こえた。私も和幸くんも

驚いて、びくっと肩を震わせる。声は背後から聞こえた。かすれて震えた声だ。一体、誰？　私はおそるおそる振り返る。すると、そこには……さっきまで、橋の反対側で横になっていたおばあさんが立っていた。白髪は鳥の巣のように頭の上でからまっている。その体は、まるで骨と皮。洋服も汚れて、元がどんな色だったか分からない。おばあさんは、ゆらゆらと揺れるように私たちに歩み寄ってくる。

なんだろう……私たち、何か悪いことしたのかな。おばあさんの顔……まるで鬼のような剣幕だ。こんなことを言ったら失礼かもしれないけど……今にも噛み付かれそう。私は不気味な恐怖にガタッと肩をふるわせる。

すると、その肩をぐいっと引っ張る手が。

「スクーターに」

和幸くんの冷静な声がした。私はハッとして和幸くんに振り返る。

「帰るぞ」

「う、うん」

その間も、おばあさんはじりじりと近づいてきていた。

私はすぐ横に停めてあるスクーターに駆け寄り、ヘルメットを取って頭をおしこむ。

「不吉な！」

「ばあさん、悪かったよ。邪魔した」

そんな和幸くんの声が背後でした。やっぱり、私たち……気づかぬうちに、おばあさんの気に障ることしていたのかな。にしても……不吉ってなんなんだろう？

「お前は……」というかすれた金切り声がする。「お前は悪魔だ！」
「え！？」

あ、悪魔！？　急におばあさんはあたりに響き渡る大声で叫んだ。一体、誰のことを……まさか、和幸くん？　怒っているとしても、言っていいことと悪いことがあるよ。私はムッとして振り返る。

「悪魔だ！」
「え……」

おばあさんの指は……私に向けられていた。何？　悪魔って……私のこと？

「いい加減にしろよ！」と和幸くんがおばあさんに駆け寄り、私を指差す腕を払いのけた。「カヤ、行くぞ」

和幸くんはまるで焦っているかのような表情。いきり立っている。そんな彼の腕を、おばあさんはすがるようにつかんだ。和幸くんは後ろに重心をもっていかれ、一瞬よろける。

「アレは不吉だ」とおばあさんは相変わらずの調子で続ける。そして、和幸くんに問いかけた。「なぜ、アレを殺さない！？」
「……！」

時が、止まったかと思った。どす黒い何かが、心にうずまいた。恐怖と不安が、私の胸に襲いかかった。なんて残酷な質問……私の体は一気に震えだす。もちろん、私は悪魔じゃない。そもそも、悪魔なんて信じてない。ただ……おばあさんのその言葉は、あの夢を私に思い出させた。

私は腹部に痛みを覚え、そこに手をおく。長谷川さんに連れ去られた夜、夢の中で……和幸くんに刺されたところだ。恐ろしく不気味な剣で。

あの夢の中で、和幸くんは私を殺そうとしたんだろうか。ただの夢なのに……どうしても、それが気になるの。それを考えると、恐いの。

ねえ、和幸くん。――私は顔を上げ、おばあさんと対峙する和幸くんを見つめる。

「どうして……」という弱弱しい声が、ヘルメットの中で響いた。

どうして……何も言わないの？

虹の橋　―魂の寄り道―

なんなんだよ、このばあさんは？　こんな今にも死にそうな体だっていうのに……俺の腕をつかむ握力は、弱さを感じさせない。しっかりとつかんでいる。それに……この目つき。なぜか、その瞳は生気に満ち溢れている。瞳だけ、若さを保って生きてきたようにさえ思える。

「なぜ、殺さない！？」

ばあさんは、またそんな馬鹿げた質問を投げかけてきた。このばあさん、頭イカれてんのか！？　カヤが悪魔？　殺せ？　一体、どんな妄想を……

――彼女は『災いの人形』。人間じゃありません。ただ、世界を滅ぼすために創られた土人形。

「！」

リストの声が頭に響いた。

「アレは悪魔だ！」

また、ばあさんが叫んだ。俺はぐっと拳を握り締め、唇をかむ。さっきまでの怒りがひいて、不安と疑問が心を支配する。なんで……と、俺はばあさんをじっと見つめた。カヤは……カヤは世界を滅ぼす存在。世界にとって不吉な存在。世界の脅威。世界に終焉をもたらす……悪魔。ただのばばあの妄想じゃない。カヤが不吉。認めたくは無いが、きっとその通りなんだ。このばあさんは、それが分

かったっていうのか？　いや、ただの偶然……か？　俺が深く考えすぎなのか？

「アレを殺してくれ」

まるで、すがるような顔でばあさんは俺を見上げてきた。

「頼むぅ」

ばあさんは俺の腕に顔を擦り付けてくる。まるで、救いを求めるように。救い……その瞬間、ゾッと悪寒が走った。

――彼女を殺したあなたは、世界の救世主になれる　。

また、リストの言葉が脳裏をよぎった。

「やめろよ」

「アレを殺すだけで、世界は……」

そんな目で、見ないでくれ。

――和幸さんは、世界を救えるんですよ。

「うるさい！」

俺は、ばあさんを突き飛ばすように腕をはらった。なんだ？　なんで……こんなに、心が乱れてるんだ？　俺は肩で息をしていた。おかしい。なんで、こんなばあさんの言葉に惑わされてる？　もう決めただろ。俺はカヤを守るんだ。救世主よりも世界の敵になることを選んだ。世界とカヤを天秤にかけて、俺はカヤを選んだ。たっ

た一つの可能性に賭けて……世界を危険にさらすことを承知で、カヤの命を救った。それでいいんだよ。それが、俺の選んだ生き方だ。

「裏切り者」

「！」

心臓が、鷲づかみにされたようだった。俺はごくりとつばをのみ、声のしたほうに振り返る。ばあさんがしりもちをついたまま、俺を指差していた。その顔には、怒りと絶望が浮かんでいる。ばあさんは必死になって俺に向かって叫ぶ。

「裏切り者！」

「……」

俺は……何も言い返せなかった。とにかく、もうこのばあさんと関わりたくない。いや、正確には……ここから逃げたい。逃げなきゃいけない。これ以上、何も聞いちゃいけない。俺はぐっと唇をかみ締め、ばあさんに背を向けた。

「！」

スクーターへと顔を向けた俺の目に飛び込んできたのは、一人たたずむカヤだった。こちらを向いて、ただじっと立っている。暗闇とヘルメットのせいで、その表情を伺うことはできない。なぜか……彼女が恐ろしく見えた。

俺は彼女にゆっくりと歩み寄る。

「帰る前に、俺の部屋、寄っていいか」

手が震えていた。俺はカヤに知られないように、それをポケット

の中に隠す。
カヤは何も言わずにうなずいた。

＊　＊　＊

老婆は、去っていくスクーターをじっと見つめて立っていた。表情は穏やかで、目には同情の色が表れている。

「あなたの答えを信じて、迷える子」と老婆は静かにつぶやく。「たくさん、悩んで。たくさん、苦しんで。揺らがぬ覚悟を決めなさい。あなたの答えは、きっとそれに値するのだから」

ふと、老婆の隣に光の粒子が現れた。それは段々と人の形を形成し、そして少年へと姿を変えた。輝くような長いブロンド。神秘的なオーラ。すべてを見透かすような、汚れのない金色の目。少年は、老婆を見つめ、大人びた笑顔を浮かべる。

「それは預言なの？　エノク」

その言葉に、エノクと呼ばれた老婆は頬をゆるめる。だが、その視線は決して少年に向けられることはない。ただただ、スクーターが消えた暗闇を見つめている。

「彼は、知らないようですね。あなたが彼に宿っていること」
「うん。かずゆきは嫌がるからね。だから、リストがこっそり」

それよりも、と幼い少年――エンキのエミサリエス、ケットは腰に手をあてがった。

「一体、どうなってるの？　まさか、こんなとこで君に会うとは思

ってなかったよ。しかも、そんな躯(からだ)で」

すると老婆は、悲しげに微笑した。

「前の躯……ポリー・マッコーネルから、魂を引き剥がされたのです。ニヌルタの王によって」

その言葉に、ケットは仰天して目をまん丸にする。エノク独特の言い方で分かりづらいが、それはつまり『殺された』ということだ。

「ニヌルタに!?」

「彼はどうやら、エノクというものを理解していなかったようです。ただのルルだと高を括り、私に『冥府の剣』を突き刺しました」そこまで言って、エノクは不敵な笑みを浮かべる。「彼もまた迷える子」

「エノク……君は……」

憐れむような視線を彼女にあびせるケット。だが、その言葉は「ですから」という彼女の明るい声によってさえぎられた。

「今は次の躯を探しているのです。この永遠なる魂の器(うつわ)となる、魂無き新鮮な躯を」言って、エノクは胸に手を当てた。

「まさか」と、ケットはジト目で彼女を見つめる。「本気でその躯を器にしようとしたわけではないよね?」

するとエノクは、クスッと微笑む。

「この躯は、ただの寄り道です。あの少年の背中を押しに来ただけ」

「背中を押す? あれが?」とケットは眉間にしわをよせる。「にしては、ずいぶん陰険なことしてたじゃないか。あんなこと、かず

ゆきに言うなんて。ひどく心がかき乱されていたよ」

天使は不機嫌そうな顔を浮かべた。それに気づいてもいないのか、エノクは穏やかな笑顔を浮かべる。それは、せつなくもみえる複雑な笑顔だった。

「少し、関わってみたかったのです。運命、というものに」

「……」

傍観者であるはずの預言者らしからぬ発言だ。ケットは眉をひそめる。永遠の秩序を知るもの――エノクが自ら他人の人生に関わることなど珍しい。たとえ、こちらから訪れたとしても、必ずしも答えをくれるわけではないというのに。

ふと、エノクの視線がケットへと向けられる。ケットはハッと目を丸くする。やっと、ケットはエノクと視線を交わした。

「エンキのエミサリエス」とエノクは、人差し指を口にあてる。その指もまた、骨と皮。今にも折れそうだ。「マルドゥクの子には、くれぐれも言わないでくださいね。私と会ったこと。私と話したこと。すべて」

その言葉に、やれやれ、とケットはため息をついた。幼い顔立ちには似合わない、あきれ果てた表情だ。

「うん、わかった。それを君が望むなら」

「ありがとう」

エノクは満足げに微笑み、目をつぶった。その瞬間、老婆の体はその場に崩れ落ちる。そして、ケットの足元で、その顔から色みが消えていく。さっきまで確かに感じられた彼女の生気は、あっとい

う間に消え去った。エノクが去り、老婆は死体に戻ったのだ。……

ケットは難しい表情を浮かべて、星空を見上げる。

「君もまた……迷える魂なんだね、エノク」

その言葉を残し、少年は光となって消えていった。

悪魔の望み

「ちょっと、ここで待っててくれ」

部屋の玄関に入るなり、俺はカヤに振り返ってそう言った。カヤは相変わらず、沈んだ表情でうなずくだけ。俺の笑顔は自然とひきつる。スクーターに乗っているときは仕方ないとして……マンションについてから、エレベーターの中でも、部屋までの通路でも……俺たちに会話はなかった。カヤの様子が明らかにおかしい。俺と目をあわせようともしない。こんなカヤを、今まで見たことがない。

だが……「大丈夫か」とか、「どうしたんだ」とか、聞く気になれなかった。それは……俺も同じだからだ。様子がおかしいのは、俺も同じだった。自覚してるくらいだ。カヤも、それを感じ取っているだろう。

とりあえず、俺はカヤを玄関において部屋にあがった。カヤが初めて泊まりに来た日――俺が彼女を初めて『迎え』に行った夜、彼女が着てきた服……というか、寝巻き。それを返そうと思ったのだ。

部屋に入り、カヤの寝巻きをしまった衣装ケースに歩み寄る。

「どこだっけ」と、無駄に独り言を言い、三段あるケースを上から順に見ていく。

その間も、俺の頭の中に浮かぶのは、あのばあさんの顔……憎しみに満ちた表情。まるで、親の仇をみるような目。初めて、俺の罪を知る人間に会ったのかもしれない。そんな気がして仕方が無かった。親父も、カヤさえも知らない俺の罪。――世界の災いを庇う罪。あのばあさんは、きっとそれを見抜いていたんだ。

カヤの服を探す俺の手が止まる。

世界を滅ぼす……俺は、分かってなかったのかもしれない。あの

ばあさんの反応は、当たり前だったんだ。この世界に生きる人間なら、俺を恨んで当然だ。カヤを守る俺は、憎まれるべき存在なんだ。ただ、それを皆知らないだけなんだ。世界の終焉――それは、親父や、砺波、曽良、アンリ、平岡……皆を殺すこと。リストも、ナンシェという写真の少女も。皆、死ぬんだ。

俺は、分かってなかった。かっこつけていただけなんだ。カヤを守りたい。だからいいんだ、と自分に言い聞かせていた。それを盾にすべてを正当化しようとしていた。駄々をこねる子供となんら変わらない。

でも、仕方ないだろ！　世界を滅ぼす。そんなの、分かるわけがないんだ。俺は、ただの人間なんだ。ただ、カヤを好きなだけなんだ。

やっと見つけた彼女のキャミソール。きづけば、俺はそれをぐっと握り締めていた。

――裏切り者！

どこからともなく、そんなかすれた声が俺を襲う。俺にまとわり付いて離れない、まるで悪霊のような声。じゃあ、どうすればいいんだよ、と俺はそれに問いかける。カヤを……殺せっていうのか？

あのとき、リストの言うとおり、カヤを死なせるべきだったっていうのか？　俺が間違ってるっていうのか？　だめなのかよ？　カヤも世界も救う。それを夢みちゃいけないのか？

カヤを殺せば、世界は確実に救われる。だから……　カヤを殺せばいい。あいつが脅威になる前に……人間であるうちに。そう言いたかったのか？　それが正しいことなのか？　それが、一番、確実な方法だから？　カヤが死ねば、皆救われるから？

でも、方法があるんだ。『テマエの実』を食べさせなければ……そしたら、カヤは人間のまま。世界も滅びない。それに賭けちゃいけないのか？　危険なのは分かってるよ。世界を賭けた大博打だ。

「世界……」

カヤのキャミソールを握り締める手がゆるむ。

世界……その単語をつぶやくと、今、頭に浮かぶのは人間だった。親父と、そして俺の大事な家族――カイン。あのばあさんのせいで、気づいてしまった。俺が、カヤのために危険にさらそうとしているもの……それは、世界、なんて単語ひとつで表せるものじゃない。それは……別の、多くの命。

世界を賭ける？　俺は何様だったんだ。俺に……そんなことをする資格なんてないじゃないか。

俺は、がくりと肩を落とした。

「どうすればいい」

今更、不安になった。本当に、俺はカヤも世界も守れるのか。もし……万が一、あいつが『テマエの実』を食べてしまったら……俺はどうするつもりなんだ？

俺は震える手を見つめる。

カヤがたとえ『災いの人形』になってしまったとしても……俺はあいつを愛し続ける。カヤが何者だろうと、俺の気持ちは変わらない。……じゃあ、カヤを守るのか？　世界を滅ぼそうとする女を守るのか？　世界の終焉を、ただ見守るのか？　――何のために？　誰のために？

「……」

俺は力なく腰をおろす。

そうだ。俺は、一体誰のために……カヤを守ろうとしてるんだ？

カヤのため？

「違う」と俺は鼻で笑う。

自然と力がぬけた。急に無力感に襲われる。俺は知らない。カヤの気持ちを。カヤの望みを知らない。だってカヤは何も知らないんだ。自分の正体を知らないんだ。彼女が何を望んでいるかなんて分かるわけがない。

……いや、それも違う。

――カインの皆が……日向で暮らせる世界も、きっと来るんだよ。

そうだ。あいつははっきり言ってたじゃないか。彼女の望み……世界の未来だ。

「……！」

急に息苦しくなった。自分の心が黒くにごっていく。そんな気がした。そのまま体中、闇に飲み込まれていくような、そんな嫌な気分。

世界が滅んでもいいと思ってた。それでも、カヤを守りたいと……そう思ってた。それがカヤのためだ、と勝手に思い込んでいたんだ。でも……俺はぐっとカーペットをむしるように握り締める。考えたくも無いことを考えている自分がいる。それを自覚したくもないのに……勝手に言葉が頭の中で並んでいく。俺は目をつぶり、歯を食いしばった。こんなこと、気づきたくなかったのに。でも、分かってしまった。もう認めるしかない。

もし、あいつが本当に『終焉の詩姫』になってしまったら……

本当にカヤを想うなら……

俺は……きっと、あいつを――

「殺してね」

「！」

そんな無機質な声がしたのは、そのときだった。

＊　＊　＊

唐突に聞こえたその声に、和幸はハッとして振り返る。暗い部屋にたたずむ彼女は、恐ろしいほど無表情で、和幸はゾッとした。

「カヤ……？」と和幸はやっとのことで声をだす。

カヤは部屋の入り口で佇み、隣にある姿鏡に目をやった。そこに映る自分を冷たい視線で見つめ、腹に手をおく。腹痛でもするかのように、一瞬、顔をゆがめて。

「和幸くんに刺される夢……あれは、予知夢なのかもしれない」

「え？」

不気味なほど、彼女の様子がおかしい。和幸は、ゆっくりと立ち上がった。

「和幸くんは、きっと私を殺すんだよ」

「！」

和幸は、えぐられたような痛みを感じた。胸に穴があいたんじゃないか、とさえ思った。カヤは鏡から目を離し、じっと和幸を見つめてくる。

「なんでだと思う？　私が、悪魔だからかな」
「なに、言ってんだよ」

かろうじて出たのは、そんなうすっぺらい言葉だった。ごまかすこともままならない。和幸の心は、不安と迷いで動揺していた。足が床に縫い付けられたかのように、動けない。

「考えたら……私の周りは、事故や怪我ばかり。幼い頃からそうだった。呪われてる、とずっと言われてきた」

やっと彼女の顔に表情が戻ったかと思えば、それは悲しみに満ちたもの。蓋をしたはずの過去が、どんどんと彼女の中にあふれでてくる。

「もし……私自身が、災いの元凶だったとしたら……全部、私が引き起こしていたことだとしたら……筋が通っちゃうんだ」
「！」
「だから、あのおばあさんの言ったこと……きっと、本当なんだよ」

和幸は、何もかける言葉が見つからなかった。彼女は、助けを求めるような視線で自分を見つめている。そんなことはない、という言葉を待っているんだ。それは分かる。だが……いえなかった。今、そんなことを言っても、余計に彼女を不安にさせてしまう。今の和幸にとって、そんなことはない、という言葉は嘘でしかないからだ。きっと、演技だと簡単にばれてしまうだろう。

もちろん、その呪いはすべてアトラハシスの仕業で彼女のせいではない。だが、彼女が災いの元凶であることは、否定できない。的を射ていた。

何も言わない和幸に、カヤは悲しく微笑む。

「結局、私が和幸くんを人殺しにしてしまうのかな」
「！」
まるで、あきらめのような言葉だった。
「ごめんね」と、彼女は続け、はかない笑顔を浮かべる。「でも、和幸くんに殺されるなら……て思うの」
和幸は、その言葉に目を見開く。言葉が出てこない。何を言えばいいのか分からない。どう受け取ったらいいのか分からない。手が震え、呼吸が乱れる。
カヤはそんな和幸から目をそらし、遠くを見つめてつぶやく。その表情は、言葉に似合わず、落ち着いたものだ。
「悪魔が存在するとして……私がその一人だとしたら……和幸くんに殺してほしい」
カヤは無意識のうちに、左手の薬指にはめられた指輪に触れていた。
「だから……」
そこまで来て、カヤは言葉を詰まらせた。それまで微笑んでいた表情が険しくなる。急に震えだし、うつむいた。だから……と、小さくか細い声で言うのが聞こえてくる。和幸は眉をひそめ、重い足を一歩動かす。
「カヤ」と、やっと声がでた。
「……たくない」

カヤは顔を覆い、くぐもった声をだす。それは、かろうじて音になっている程度。何を言っているのか、まったく分からない。和幸はさらに一歩近づき、耳をすませた。

「カヤ、大丈夫か？」

「いやだ……」と、カヤは今度はちゃんと言葉にして、顔をあげる。

「殺さないで」

「！」

それまでのはっきりとした口調が嘘のような、弱弱しい震えた声。涙でぬれた顔は、ひどくはりつめている。それは、今まで彼女がみせたことのない表情だった。

「殺さないで……」

みっともないほど涙で顔をぬらし、カヤはまたつぶやいた。

身を切り裂かれるような痛みが、和幸の全身をはしった。頭が真っ白になり、何も考えられなくなった。自分はもう意識がないんじゃないか、とさえ思った。ただ体だけが意志をもち、勝手に動き出している。さっきまで田んぼを歩くように重かった足取りが嘘のようだ。一切の迷いの無い確かな足取りで、彼女に歩み寄る。

「……」

涙でぬれた瞳で、カヤは和幸を見上げた。おびえた表情で。

和幸の表情は険しく、口は貝のように固く閉じられている。その張り詰めた雰囲気に、カヤは、今にも殺されるんじゃないか、とさえ思った。ガタッと全身が震え、カヤは一歩後ずさる。

その瞬間、和幸は乱暴に彼女を抱きしめた。

二人だけの時間

「和幸……くん？」

まるで子供のように私を抱きしめる彼に、私は呼びかける。背中をあまりに強く締め付けられ、苦しかった。やっとのことで言葉が出る、といった感じだ。

「苦しいよ……」と、震える声で訴える。すると、私を縛り付けていた腕がゆるみ、和幸くんは体を離した。目の前に、真剣な彼の顔がある。さっきとはまったく違う表情。――長谷川さんを思い出した。強い信念。恐ろしいほどの覚悟。そんなものを和幸くんから感じる。

「悪魔でもいい」と、和幸くんははっきりとした口調で言う。私はハッと目を見開いた。

「もう……そんなこと、どうでもいい」

「……」

急に、泣き出すかと思った。和幸くんは、そんな表情を浮かべた。自分が悪魔かもしれない……そんな不安を訴える私に、悪魔でもいい、と彼は言った。まるで答えになっていない。何も解決になっていないよ。それじゃ、余計に不安になる。どうして、言ってくれないの？　私が一番ほしい言葉……大丈夫だ、て。気にするな、て。全部でたらめだ、て。なんで否定してくれないの？　私は本気なのに。ほんとに不安なのに！

「どうでもよくない」と、私は涙を流して叫び、和幸くんを突き放

そうと腕を動かした。そのとき、逆に彼に腕を捕られ、私は抵抗できないかたちで後ろの壁に押し付けられた。

「あっ」

ドン、と鈍い衝撃が背中を伝う。雑で乱暴で……彼らしくない。なんで、こんなこと？　そう言おうと開けた口は、言葉を発することはなかった。私の腕を捕まえたまま、彼は唐突にキスをしてきた。目をつぶる暇もなく……見開いた私の目から、残っていた涙がぽろりと落ちる。

唇を単に押し付けるようなキス。ロマンティックとは程遠い、大雑把なキス。でも――体の力がぬけていく。こんなことで、何かが変わるわけじゃないのに……不安が消えるわけはないのに……でも、なぜだろう。ピリピリしていた空気が和らいでいく。緊張が解けていく。心が安らぐ。

私は目をつぶり、彼に身をゆだねた。手首を押さえつけていた彼の手が離れ、腰へと移動した。その手は、躊躇することなくカーディガンの中へ……シャツの中へと侵入してくる。そして、わき腹に、そのぬくもりを感じた。いつもは手の平でしか味わったことのない、その感触。暖かくて頼もしくて、骨ばった手。撫でるように、わき腹から背中へと肌の上を滑っていく。

少しくすぐったくて体をよじると、彼は唇を離した。何か言葉を交わすのかと思ったら……私の顔を見ることも無く、首筋にその場所をうつす。彼の唇が触れた瞬間、ビクッと体が反応した。徐々に耳のほうへと位置を変えていきながら、彼はキスを繰り返す。そのたびに、背筋がむずがゆくなる。一つ一つのキスに、体がいちいち反応してしまう。

どうしよう、と私は目をつぶった。心臓が……おかしなリズムで騒ぎ出している。頭まで茹で上がったようにぼうっと熱い。体が硬直して……身動きもとれない。

でも……不思議。こんなこと、初めてなはずなのに……懐かしい気がするの。

＊　＊　＊

オレは、止めるべきなんだろうか。ソファに寝転がり、暗い天井を見上げて考える。

――ねえ、どうすればいいの？

あせるケットの声が頭の中でした。もう天使はいらない、と言う和幸さんに、こっそり秘密で貸しておいた天使（エミサリエス）の声だ。……秘密で貸す、てのも変な言い方だが。

――リスト！　ケットはどうすればいい？

そうだな。どうしようか。確かにオレは一度、和幸さんに『災いの人形』と恋仲になってほしい、と思ったことがあった。そしたら、『人形』は少なくとも人間（ルル）としての残りの時間を幸せに暮らせる。そう思ったからだ。でも……和幸さんは？

まさか、ここまであの人が本気に『人形』にのめりこむとは思っていなかったから……想定外だ。オレはとんでもなく、軽はずみなことをしたのかもしれない。これ以上、『人形』と深い仲になっても、待っているのは別れだけ。つらいだけだ。なにより……和幸さんは、それをまだ知らない。オレを信じてるからな。

にしても、神の子が人間（ルル）を騙すか。やっぱ、オレは『創られた』子。はみだし者なのかな。

――そろそろ、決めてくれないと……止めづらくなるよぉ。

ケットのパニくった声が聞こえてくる。オレは、ぷっとふきだした。天使（エミサリエス）といえど、子供だなぁ。

――そんなこといいからぁ！　どうするの？　どうするの？

帰っておいで、ケット。オレはそう命じる。

「え！？」という声が、すぐ横でした。さっきまで頭に響いていた声だ。「なんで！？」

結局、パニクってるな。オレはのっそりと体を起こし、戻ってきた自分の天使に微笑みかける。

「せめてもの罪滅ぼし……かな」

「へ？」

どうせこれも……オレの自己満足なんだろうけど。でも、オレにはこれくらいしかできないから。

「残された時間……二人には、幸せでいてほしいんだ」

「幸せ……でも、『災いの人形』は、神の聖なる創造物なんだよ！？」

戸惑うケットの声は、子供そのものだ。オレは、まあまあ、とあしらい、ケットの頭をなでる。

「といっても、『災いの人形』は処女じゃなきゃいけない、なんて……オレは聞いたこと無いけど？」

「それは……」とケットは口ごもる。「過去にも、人間（ルル）と契りを結

んだ『人形』はいたけど」
「ほらな」
じゃ、いいだろ、とオレはまたソファに横になった。にしても、契りを結ぶって……古風な言い方をするよな。見た目とのギャップに、オレは鼻で笑った。
「問題は……」と、頭の後ろで手を組みながら言う。「アトラハシスだけどな」
「あ！　そっか。アトラハシスも鏡でのぞいてるよね」
「不憫だよねぇ」
ため息交じりでそうつぶやいた。いや、本気でそう思う。いきなり、公開プレイって……
「レベル高いわ、和幸先輩」
「一体、何の話さ、リスト」
冗談はさておき。
「これ以上、和幸さんに嫌われたくもないし。邪魔しないであげよう」
鼻歌まじりにそういうと、隣でケットのため息が聞こえた。確認しなくても分かる。きっとケットは今、大人びた表情を浮かべている。オレを諭すときの、天使らしい顔だ。
「嫌われるのは、これからでしょう。リスト」
ほらな。天使さまのありがたいお言葉だ。オレは何も言わず、目

をつぶった。

＊　＊　＊

「バール」

暗い部屋で、黒髪の男は手鏡をテーブルの上にふせた。

「なぁに、フォックス？」

男――フォックスの背後で、露出度の高い衣装を纏った女が陰から姿を現す。ふっくらとした唇を笑ませ、彼女は彼の座るソファの背もたれに腰をかけた。

「少し、外の空気を吸ってきます」

その言葉に、バールは目を丸くする。

「あら、珍しい」

「わたしが帰ってくるまで、決して鏡をのぞかないように」

「変なことをおっしゃるわね」とバールは小首をかしげる。「一緒に行きますわ」

フォックスはおもむろに腰を上げると、バールに振り返った。

「たまには、独りで歩くのもいいでしょう」

バールはクスッと微笑んだ。

「そんなに嫌なら、邪魔をすればよろしいのに。命じてくだされば、

簡単にやってのけてみせますわ。たとえば……」

目を輝かせ、様々な方法を思い浮かべるバール。おもしろがっているとしか思えない。フォックスは呆れたようにため息をつき、首を横にふった。

「必要ありません」

それだけ言って、フォックスは歩き出す。バールはその後ろで、つまらなそうに唇をとがらせた。

「知りませんわよぉ？」

「一時間……それくらいで帰ってきます」

振り返ることも無く、フォックスはバールに告げる。その言葉に、バールはにやりと笑んだ。

「もっとかかるんじゃないかしら？　初めてみたいですし」

「……冗談に品がありませんよ、バール」

冷たくそう言い、フォックスは部屋を去った。

「もお……つまらないお人ねぇ」

やれやれ、と、バールは腕を組み、玄関のドアが閉まる音に耳を傾けた。

誰もいなくなった暗い部屋で、バールはまじめな表情を浮かべる。先刻までのおちゃらけた雰囲気は、嘘のように消え去っている。そして、ひとつため息をつき、ぽつんとテーブルの上に残された鏡を、せつなく見つめた。

「人間（ルル）の男と結ばれたパンドラを待つのは、悲劇だけ。
それでもいいのよね……カヤ・パンドラ」
鏡が返事をするわけもなく、バールの声はさびしく響いて消えた。

愛してる

あのおばあさんの言葉が、あの夢を記憶の奥からひきずりだした。思い出さないようにしていた悪夢。和幸くんに刺される夢。とてもリアルな恐ろしい夢。それに……和幸くんの、おばあさんへの態度が不安を上乗せした。なぜ私(アレ)を殺さないのか、とたずねるおばあさんに、和幸くんは何も答えなかった。しばらく絶句しておばあさんを見つめていた。

怖くなった。私が悪魔だ、なんておかしなことを、どうして和幸くんは一蹴してくれないのだろうか、て。まして、私を殺せ、だなんて……。すぐにでも、呆れた顔であしらってくれると思った。なのに……和幸くんは、おばあさんの言葉を黙って聞いていた。

ううん、ただ、黙って……なんてものじゃなかった。様子が、明らかにおかしかった。結局、「うるさい！」とおばあさんを引き離したけど……不思議だった。なんであんなにムキになるのか。

だから、ハッと気づいたんだ。和幸くんは、おばあさんの言うことに、何か心当たりがあるんじゃないか、て。そしたら……いろんなことを思い出してしまった。呪いのことや、両親のこと、神崎の家で死んだ警官、血だらけだった私。そして……目を覚ましたら、跡形もなくなっていた銃痕。そう、和幸くんに撃たれた、胸の傷。いつのまにか消えていた。和幸くんは、いつか理由を話してくれる、と約束してくれたから、気にしないでいたけど……でも、やっぱりおかしいよね。傷がなくなるなんて。

そんなことを考えていたら……自分は本当に悪魔じゃないか、て思えてしまったんだ。そして、和幸くんもそれを知っているんじゃないか、て。変だよね。馬鹿みたいだよね。でも、恐くなったの。すごく、とてつもなく、恐ろしくなったの。

でも、結局……うやむやにされてしまった。その不安ごと、強引にねじ伏せられた。そんな気がする。ずるいよ。反則だよ。けど、嫌な気分はしないんだ。逆に、嬉しい。私、変かな。胸いっぱい、幸せを感じている自分がいる。

確かに、あまりに唐突で、思わぬ展開だけど……私は、受け入れるよ。いつかは、こうなりたいって思っていたし。成り行きは、想像とは違ったけど……いいよね、そんなの。

私は彼のベッドの上で、カーディガンの裾に手をかけた。

＊　＊　＊

ベッドの上で、カヤは何も言わずカーディガンを脱いだ。一枚脱ぎすて、そしてシャツのボタンに手をかける。上から一つずつはずしていくと、黒いレースの下着があらわになった。最後のボタンをはずし、カヤは躊躇無くそれを脱ぐ。はらり、と白いシャツが床に落ちた。

浅黒い彼女の肌にはひとつの穢れもなく、体の滑らかなラインが月明かりに照らされている。その表情は落ち着いていて、ぱっちりとした大きな目はまっすぐに前に向けられている。

その視線の先で、和幸も同じように上着を脱いだ。それを無造作に放り投げると、前かがみになり、カヤを押し倒す。

そして――ベッドに横たわる彼女の唇を奪った。ほんの少し触れる程度の軽いキス。

和幸の神経は、唇よりも彼女の体に触れる手先に集中していた。やわらかく滑らかな体を味わうように手を滑らせる。それが彼女の背中の下に潜りこむと、カヤは少し体を反らせて背中を浮かせた。和幸の右手が何かを探すように、背中とベッドの間を探っている。

目的のものを見つけたのか、急に動きが止まったかと思うと、ぐ

っと一瞬下着が後ろに引っ張られ、そしてすぐにゆるくなった。胸元が、急に開放的になる。圧迫感がなくなった。――上は、これが最後の一枚。さすがに恥ずかしくなり、カヤは顔を横にそむける。

その動きに気づき、彼女に覆いかぶさっていた和幸は体を起こした。

暗がりで、目を凝らして彼女の表情を伺う。ほんのりと頬を紅潮させた彼女は、ぐっと目をつぶっている。

「嫌か？」

馬乗りになったまま、和幸はぽつりとそう尋ねた。カヤはハッと目を開く。

「え？」

そういえば、久しぶりの会話だ、とカヤは思った。いきなりキスされ、それから会話は一切なかった。ただ流れに身を任せるように、体を動かしていただけだった。

「悪い。俺……なんか、急に……」

月明かりが逆光になって、彼の表情が分からない。それでも、声の感じから容易に想像できる。申し訳なさそうに眉をひそめる彼の顔が、カヤの頭に浮かんだ。カヤはあわてて顔を横に振った。

「嫌じゃないよ」

嫌なわけない……と、心の中でも、つぶやく。

左手を持ち上げ、和幸の頬に触れる。その薬指には、指輪が光っている。おもちゃのような指輪。それでいて、どんな高価な指輪よ

りも自分には価値のある指輪。

「私……」

胸の奥から、こみあげてくるものがあった。それは言葉だ。ある言葉が湧き上がってくる。それは、今まで口にしたことのない言葉。ぐっと横隔膜が持ち上げられるような感覚がする。肺が押し上げられ、息がつまるよう。

その言葉は、カヤにとって重要な言葉だった。軽はずみに使ってはいけない。そんな意識が物心ついたときからあった。それが一般常識なのか――他の皆も同じように思っているのか。それとも、自分だけのこだわりなのか、願掛けのようなものなのか。自分でも分からなかった。ただ、ここぞというときにしか、その言葉を口にしてはいけない。そんな意識だけは、はっきりしていた。

そして、今がそのときだ、とカヤは確信していた。

「私、和幸くんのこと……」

そこまで言って、唇を舐める。たった一言だというのに、緊張が高まる。ごくりとつばを飲み、カヤはとうとう生まれて初めてその言葉を発する。

「愛してる」

カヤは頬を赤らめ、はっきりとした口調でそう言い放った。俺もだ、そんな言葉を期待しながら。

だが……予想に反し、和幸は何も答えない。それどころか、まるでマネキンが倒れるように無防備に、自分に倒れ掛かってきたのだ。

「え！？」

力が一切はいっていないのだろう。自分に覆いかぶさってきた和幸は、さっきと違い、苦しいほど重い。全体重がカヤにかかっていた。胸や腹部が圧迫され、痛みと息苦しさに襲われる。

「和幸、くん！？」と息苦しい声で叫ぶが、和幸はぴくりとも体を動かさない。

とりあえず……と、カヤは力をふりしぼって、和幸の体を横にのけた。下着をおさえながら、カヤは上体を起こす。

「和幸くん、どうしたの？」

一体、どうなってるのか、さっぱり分からない。カヤは和幸を揺り動かす。が、やはり反応はない。いきなり、どういうことなのか。まったく前兆などなかったのに。急に意識を失ったようだ。

救急車でも呼んだほうがいいのだろうか。そんなことを考え始めていたときだった。かすかだが、息遣いが聞こえてきた。それは、間違いなく和幸から。カヤは顔を和幸に近づけ、よく耳をすます。すると、スースー、という穏やかな寝息が聞こえてきた。

「へ……」

まさか、寝ているだけ？　カヤはぽかんとした。あのタイミングで眠りに落ちたというのだろうか。そんなことあるはずはない。貧血でも起こしたのか？　でも……と、和幸の顔を見つめる。暗くて分かりにくいが、顔色が悪いようではない。健やかに寝ているだけ。何の変哲もないただの寝顔だ。

カヤはぽつんとベッドの上で座り、首をかしげる。そういえば、学校とバイトと忙しそうだったし……その上、自分を『誘拐』して

スクーターで走り回った。疲労かな？　でも……と考えながら、カヤは仕方なしに下着のホックを付け直す。

「こんなタイミングで寝れるかな？」

悲しげな彼女の声が部屋に響く。

たとえどんなに眠かろうと、これから彼女と……というときに眠りに落ちる男がいるだろうか。うーん、と唸りながら、カヤは、何らかの病気の可能性を考え始めていた。

＊　＊　＊

あれ？　俺、こんなとこで、何してんだ？　ここは……と、俺は辺りを見回す。よくなじみのある景色。――学校だ。目の前には、夕焼けが差し込む二年二組の教室。誰もいない、放課後の教室だ。俺のクラスは隣の三組。なんで、二組の教室の前で突っ立っている？　誰かを……探してたんだっけ？

廊下で突っ立ち、うーん、と首をかしげる。思い出せない。何してたんだっけ？　なんか、大事なことをしようとしていたような……でも、なんだっけ？　思い出せない。何しようとしてたんだ？

何しに、ここに来たんだ？

そのときだった。

「週番？」

急に、後ろからそんな声が聞こえてきた。

愛の詩

「週番？」

急に、後ろからそんな声が聞こえてきた。

「え？」

振り返ると、そこには……彼女が、いたずらっぽい笑顔を浮かべて立っている。

西日が差し込む、学校の廊下。彼女の浅黒い肌は、夕焼けのせいで少し赤みをおびえている。やっぱり、きれいだ。俺は一体、彼女に何度見とれたらいいんだろう。

「なんちゃって」と、彼女は手を後ろにくんで、俺を上目遣いで見つめてくる。

「……」

「覚えてない？　初めて会ったとき、こんな感じだったよね」

「……」

俺はぽかんとしていた。何かが、しっくりこない。どうなってんだ？　なんだ、この違和感は？

「どうしたの？　何か、変だよ」

「え……あ、ああ」

なんだろう。頭がぼうっとしている。記憶が、もやがかかったようにはっきりしない。俺は頭を抱えた。

「どうなってる？」

正直、なんで今、俺がここにいるのかも分からない。いや、学校なんだから……授業が終わって帰ろうとしてたんだよな。でも、授業のことさえ、思い出せない。今日は何日だ？　何曜日だ？　何時だ？　どこかで頭を打ったんだろうか。

「ね、和幸くん」と、彼女は明るい声で言う。「宿題、手伝ってくれる約束だよね？」

「……宿題？」

そんな約束したか？　俺はぽかんと彼女を見つめた。すると、むっとした表情で彼女は俺を見上げてくる。

「もしかして、覚えてないの？」

「え、いや……」

「ほら、手伝って」

彼女は俺の腕をとり、教室へと俺を連れ込んだ。

二組に足を踏み込んで、一番最初に目に飛び込んできたのは、学級旗だ。教室の後ろに掲げられている。体育会系が多い二組らしく、気合のはいった旗だ。旗いっぱいに男とも女ともつかない、どでかい顔が書かれてある。そして、勝利、という大きな文字。ぼうっとそれを見ていると、背中をつっつかれた。

「はい、書いて書いて」

「……え？」

振り返ると、彼女の手には白いチョークがあった。書いてって……なにを？　俺が眉をひそめると、彼女は優しい眼差しで頬をゆる

めた。
「詩（うた）」
「……ウタ？」
意味が分からず、俺はとりあえず鸚鵡返しをした。彼女はゆっくりとうなずいて、チョークを俺の右手に握らせる。
「書いてほしいの、愛の詩を」
「は？」
「ラブポエムだよ」
頭を傾け、彼女は無邪気に微笑んだ。
はあ？　おい、それ何の宿題だよ？　国語か？　それとも、音楽？　なんにしても……と、俺は困った表情を浮かべて頭をかく。
「ちょっと、待てよ。俺、そういうの全然センスないから」
「センスなんてどうでもいいんだよ」
彼女は冷静に、すんなりとそう言ってくる。迷いはない。そんな感じだ。これは……断れそうに無いな。
「私も、一緒に考えるから」と、最後の一押し。
「ってか……」と、俺はチョークをくるりと宙で回転させる。「お前の、宿題なんだろ」
チョークをキャッチし、ジト目で彼女を見つめた。すると、一瞬きょとんとして、彼女は照れたような笑みを浮かべる。
「そうだったね」

おいおい……俺は苦笑する。

「それで……愛の詩、といわれても……俺にはさっぱり思い浮かばないんだけど」

とりあえず、チョークを黒板にたて、俺はそう弱音を吐いた。

「私への気持ちを、詠えばいいと思うよ」

「！」

思わず、顔があつくなる。いや、待て。それ、アドバイスのつもりか？　逆効果だぞ。本人目の前に、そんなことできるか。いたいキザ野郎のすることだろ。恥ずかしくて、余計に書けない。チョークが心なしか震えている。

「いや、無理だって！」結局チョークをはなし、俺は振り返った。

「詩なら、曽良に頼んだほうが」

「あなたじゃなきゃ、だめなの」

「！」

ビシッと間髪いれずに言われ、俺はあっけにとられる。なんだ？　ただの宿題なんだろ？　なんでそんなにムキになるんだよ。

「お願い」と、彼女は泣きそうな顔で訴えてきた。「書いて」

「……」

よっぽど……成績を気にしているんだろうか。まあ、そこまで必死に頼むなら、俺も知恵をふりしぼってなんとかするしかないか。

「うぅん」

でも、まったく思いつかないぞ。俺は、黒板としばらくにらめっこを続けていた。

「なんでもいいんだよ」と、後ろから助言がまいこむ。「愛さえこもっていれば」

「……」

だから……そういわれると、余計に書けないんだっての。

彼女への想い、か。それをいきなり、詩にしろって言われても。そうだなぁ。俺は、あきらめたようにため息をつき、黒板に文字を書いていく。カツカツカツ、と軽快な音が教室に響き渡る。文字が連なるごとに、俺の頬はどんどんと熱くなっていく。絶対、これ……自分で読み直さないからな。てか、宿題ってことは提出されるんだよな？　まさか、匿名にしてくれるよな。いやいや、その前に……全部、俺が書くのかよ？　彼女の宿題だろ？　なんで俺が全部書いてるんだ？　ええい、もういい。ここまでもう書いちゃったし。

俺はすでに、残りあと一行にきていた。と、そんなとき、後ろからまたアドバイスがとびこんでくる。

「俺、より……僕、のほうがいいんじゃないかな」

「……」

なんで、彼女はそんなに余裕なんだ？　知ってるんだよな？　この詩、自分にあてたものだ、て。そしたら、普通……照れるよな。特に、彼女は顔を赤くしてうつむきそうなものだが。ちなみに、書いているこっちは、もう顔がゆでだこ状態だよ。

とりあえず、依頼人である彼女の意見を尊重し……俺は、『俺』に×をつけ、その下に『僕』と書き足した。

よ、よし。とりあえず、こんなもんか。俺にしては、即興でよくやったよ。恥ずかしさで、心臓のテンションが高い。投げ捨てるようにチョークを置き、くるりと身を翻して俺は黒板に背を向けた。すると、目の前で、彼女が微笑しながらつぶやき始める。

「君の……」

俺はハッとし、あわてて彼女の口をふさいだ。

「声にださなくていい！」

彼女は楽しそうに肩を震わせ、うんうん、と頷く。

「つーか」と、彼女の口から手を離し、今更ながらたずねる。「なんで、黒板に書かせたんだ？」

すると、彼女はけろっとした様子で答える。

「彼女に見せるの」

「……彼女？」

誰のことだ？　先生か？　いや、教師を、彼女、とはいわんだろ。不思議がってる俺の横を通り過ぎ、彼女は黒板に歩み寄った。じっと詩を見つめている。は、恥ずかしい。俺はそういうガラじゃないんだ、て。

「これで、十三人目」

「！」

急に、彼女の声が低くなった。どこか、大人びた話し方だ。彼女

らしくないトーン。なんだ？　十三人目？

「他に、十二人も……こんな詩、書かせたってことか？」

「いや」と彼女は短く言ってから、すんなりと答える。「この詩を書かせたのは、これが初めてだ」

「！」

やっぱり、変だ。彼女らしくない話し方。それに……なんだ、この異様な雰囲気は？　俺はぞっと背筋に寒気を感じ、あとずさった。この感覚、覚えがある。そうだ……リストやケットから感じるアレだ。――畏怖。でも、ちょっと違う。なんていうんだろう……もっと、強烈なんだ。気を抜くと、腰がぬけそうなほど圧倒的な威圧感。それでいて、懐かしささえ感じる、親近感。

「他の十二人のパンドラ達は……皆、憎しみに蝕まれたまま、土へと還った」

「は？」

パ、パンドラ？　何の話なんだよ？

「もう、見飽きたのだ」と、彼女はこちらに振り返った。「だから、お前をここに呼び出した」

「え……」

「偉大なる力、『メ』を使い、パンドラのある言葉に仕掛けをしておいた。その言葉を聞いた者が、わたしの元へ訪れるように」

待て待て待て。なんだよ？　どういうことなんだよ？　話がまったく読めない。

パニックになる俺を尻目に、彼女は怪しげな笑みを浮かべる。

「お前は、その言葉を聞いた者……パンドラが心から愛するルル」
「！」
いきなり彼女の威圧感が増し、全身に鳥肌が立った。そしてその瞬間、頭の中に、ある言葉がよみがえる。
――私、和幸くんのこと……愛してる。
それを皮切りに、一気に記憶が頭の中に叩き込まれた。霞がかっていた頭の中が一気に晴れ渡る。その瞬間、俺は目を見開いた。周りを見渡し、後ずさる。ガタン、と机が腰に当たって俺はそこで立ち止まった。やっと、この奇妙な状況に気づく。どうなってんだ！？　ありえないだろ。俺は、さっきまで彼女と部屋にいたはずだ。なんで、急に学校にいるんだよ？

女神の神託

「なんだ、ここ！？」

俺はパニクって声を張り上げた。彼女は、そんな俺とは対照的に、あくまで冷静に答える。

「パンドラの記憶を元に、構築した世界。夢に近い、まがい物」

「は？」

「お前と会うために創ったまやかしの世界。気に入ったか？」

「はあ！？」

彼女はうすら笑みをうかべ、俺をじっと見つめている。意味がさっぱり分からない。状況が把握できない。分かることといえば……目の前の女は、彼女ではない、ということ。見た目は彼女そのものだが……別人だ。理解はできないが、もう受け入れるしかない。

「お前は、何だ！？」

なぜか、誰だ、という言葉はでてこなかった。自然と……何だ、と尋ねていた。

彼女の姿をした女は、相変わらず微笑を浮かべたまま、くるりとこちらに体を向ける。

「名は、ティアマト」と、女は静かに言う。

「ティア、マト……」

「聖域（ニビル）に住まう神々の母にして、地球（エリドー）に残りし唯一の女神」

「……」

は！？

「わたしは、地球（エリドー）の天であり、地である」

いや、待て。俺はまだ、頭の整理がついてない。

「か、神？」

頭が混乱する。待ってくれよ。どうなってるんだ？　目の前に……神がいる？　どんな状況だよ、それは。まあ、リストやケットと毎日顔をあわせてる俺だ。いまさら神が現れても、気が狂ったりはしない。だが……と、ティアマトと名乗る女を見つめる。

「なんで、その姿……あいつにそっくりだ」

「これは、本来の姿ではない。パンドラの姿を借りたまで。お前にこれを書いてもらうためにな。うまくいっただろう？」

ティアマトは、ちらりと背後に目をやった。そこには、さっき俺が書いたこっぱずかしい詩がある。

あ……ちょっとまてよ。今、「パンドラの姿」って……。おい、てことは、パンドラってあいつのことか？　いやでも、さっき、十二人のパンドラたち、て言ってたし。

「パンドラって、なんだよ？」

他にも分からないことはたくさんあるが……とりあえず、思いついたものから聞いていこう。もう、俺の情報処理能力はとっくに限界だ。

「パンドラは、世界に終焉をもたらす女。『災いの人形』と呼ばれ

る、魂をもった土人形」
「『災いの人形』！」

それが何かは、もう知ってる。そうか、やっぱりあいつのことだったんだ。十二人のパンドラ……つまり、これまで十二回の『裁き』があった、てことか？　驚いたな。あいつのほかにも『災いの人形』がいたなんて。だが、それなら……と、俺はぐっと拳を握り締める。

「なぁ」と、俺はティアマトを真剣な目で見つめた。「その中で――これまでの『災いの人形』で、人間として生き残った奴はいるのか？」

すると、ティアマトは俺に冷たい視線を返してきた。どこか悲しげな、憂いを含んだ表情だ。

「いない」
「！」

ティアマトの一言が、俺の胸に突き刺さる。過去十二回の『裁き』……『災いの人形』は、皆それぞれ殺された？　やっぱ……難しいのか。俺はうつむく。はは、聞くんじゃなかったな。

「だから、お前を呼んだんだ」
「え」

どういうことだ？　俺はばっと顔を上げる。

「アトラハシスは使命を見失い、ニヌルタの王は殺戮に走り、マルドゥクの王は禁忌を犯した」

禁忌を犯した……ギクッとした。マルドゥクの王はリストだ。つまり、禁忌とはクローンのことを言っているんだろう。やっぱ、まずいよな。神の一族がクローンを創っちゃ……俺にだって、そんなこと分かるぞ。リストを創った奴は何考えてたんだよ？

「『裁き』さえ、崩れかけている。このエリドーで神にもっとも近い者たちが、この有様。

エリドーの長い歴史の中、今までこんなことはなかった。アトラハシス、ニヌルタ、マルドゥク……彼らが、神の意志に逆らうことなど、なかったのだ」

正直、ティアマトが何の話をしているのか、よく分からない。ってか、神と話している状況事態、理解不能だ。いや、こいつ、本当に神なのか？　神ってこんなに簡単に会えるものなのかよ。なんだか、肩透かしだ。ああ！　ったくもう、こうなったら開き直りしかない。とりあえず、黙って話を聞くしかない。

「わたしは思った。もう……このエリドーが、神の手から完全に離れるときがきたのだ、と」

「！」

神の手から完全に離れる？　それは、どういう意味だ？

ティアマトはじっと俺を見つめてきた。

「わたしは……これを、最後の『裁き』にしたいと思っている」

「最後？」

「この『裁き』が、ニビルに住まう神々の、最後の干渉となるだろう」

つまり、あいつが最後のパンドラになるってことか？　もう二度

と、『災いの人形』は生まれない？　もちろん、もし……この『裁き』で世界が滅びなければ、だろうけど。世界が滅びたら、『裁き』も何もありゃしない。

「お前の書いたこの詩は、そのためのものだ」

「！」

唐突に、ティアマトはそんなことを言ってきた。な……んだって？　衝撃的な発言に、俺は息をのむ。意味がさっぱり分からない。理解できない。なんで、俺の詩が？　ってか、なんで俺！？

「もっとも」と、ティアマトは目をつぶり、笑みを浮かべる。「それを決めるのは、彼女だが」

「彼女？」

俺が眉をひそめてそうつぶやくと、ティアマトはゆっくりと目を開け、俺を見据える。

「お前の愛するパンドラだ」

俺の愛する『災いの人形（パンドラ）』って……

「な……なんで、あいつなんだよ？」

「彼女には、その資格があるからだ。世界を裁くために、生まれてきた存在なのだから」

「わけわかんねぇよ！　そもそも、あんたが本当に神なら……この『裁き』自体、止められないのか？　中止にしてくれよ」

そしたら、全部丸くおさまる。あいつが世界を滅ぼすことも、死ぬこともない。なんの心配もいらないんだ。

「それはできない」

俺の期待をよそに、ティアマトはきっぱりと否定した。

「わたしは、神の世界（ニビル）から追放された身だ」

「……は？」

「ここに、たった一人残ったのもそのため。いや、残された……といったほうが正確か。体を引き裂かれ、天と地に封じられた。

だから、わたしに『裁き』を止める権利も力もない。できることといえば……このような小細工くらい」

「なんだよ、それ……」

神も追放とかされるのかよ？　俺たちと、かわんねぇじゃねぇか。

「『裁き』そのものに干渉することはできない。

わたしがパンドラにしてやれるのは……これくらいしかない」

言ってティアマトは、また俺の書いた詩を見つめた。

俺も、つられるように黒板に目をやる。そこにあるのは雑な字で書かれた短い詩。この詩はどうやら……あいつ次第で、神からこの世界を切り離す鍵になるらしい。……って、そんなわけあるかよ。書いたのは俺なんだ。特別な詩でもなんでもない。ただ……あいつを想って書いた詩。それも、センスのかけらもありゃしない。てか、詩として成り立っているのかも俺には疑問だ。

もう、これ……全部、単なる夢おちなんじゃないのか。そんな気がしてきた。ハッと目を覚まして、「夢だったのか」で終わるんだ、きっと。そもそも、いくら俺がカヤと特別な関係にあるからといって、普通、俺の前に神が現れるか？　いや、まあ……世界を滅ぼす女と付き合ってる時点で、普通じゃないんだけど。

「この詩は……」と、ティアマトはおもむろに切り出す。
「え？」
「この詩は、お前の……いや、お前たちの望みを叶える希望の詩となるだろう」
「！」

俺たちの望み？
ハッとする俺に、ティアマトは振り返る。無表情に近い、冷静な顔だ。

「その希望は……お前たちにとって、完璧ではないかもしれない。パンドラにとって、呪いにも似た希望になるだろう。
それでも……もし、パンドラがそれを望んだなら……」
「どういうことだ？　希望って？」

心臓の鼓動が、どんどんとテンポを上げていく。この、はぐれた女神は……俺に……俺たちに希望を与えてくれるってのか？　でも、あいつにとって呪いにも似た希望？　それはなんだ？　俺たちの望みって、なんだ？

「いいか、パンドラの愛する人よ」

ティアマトは、一歩一歩と俺に近づいてくる。どうやら、俺の質問は無視のようだ。

「お前は、絶対に死んではならない。世界（エリドー）のためにも、パンドラのためにも、生きなければならない。お前がいなければ、全て終わりだ」

あいつとまったく同じ顔なのに、俺は彼女に見つめられ、たじろいだ。すごい眼力だ。

「お前たちが神を信じずとも……わたしは、お前たちの愛を信じています」

「！」

ティアマトの右手が、俺の胸元におかれた。なんだ？　何かされる……そう直感が告げる。

「手伝ってくれて、ありがとう」

急に、見た目につりあった口調でそう言って来た。にこりと微笑む顔も、彼女そのものだ。

「ティアマト？」

「パンドラが……カヤがお前を待っている。帰りなさい、ルルの子」

「！」

ドン、とティアマトが俺の胸を力強く押した。俺はぐらりとバランスを崩し、後ろに倒れていく。なぜか、抵抗する気も起きずに、俺は重力に身を任せた。徐々に……頭がぼうっとしていく。また、記憶にもやがかかっていく。

ちょっと、待てよ、ティアマト。まだ……聞きたいことが。

ティアマト……ティアマト……あれ？　ティアマトって……なんだっけ？

眠りに落ちるような感覚がして、気が遠くなった。

ナルコレプシー？

「そしたら……急に、眠っちゃって……」

カヤは暗い部屋で、携帯電話を耳にあててていた。隣には、仰向けでベッドに倒れている和幸がいる。心配そうに彼を見つめながら、カヤは電話の向こうにいる人物に話しかける。

「そういうことって、あるんですか？」

電話の相手は、しばらく黙った。カヤは、緊張の面持ちで返事を待つ。

「つまり」と、呆れたような声が聞こえてくる。「俺に、そういう経験があるのか、知りたいわけだ？」

カヤは、苦笑いを浮かべた。まさに、それを聞きたかったのだ。

「俺はないな。やってる最中に、急に眠るなんて」

「や、やってる最中じゃないです！」

相手は電話の向こうだというのに、カヤはあわてて手を横に振った。顔が一気に赤くなる。

「でも……ブラをはずされた後、て言わなかったか？　やろうとしてたんじゃないの？」

「あ……それは、その……そうなんですけど……」

カヤは無意識に正座になって、うつむいていた。やる、という

表現にどうも抵抗があった。――だからといって、他にどんな言い方があるかも分からないのだが。

「もしかしたら、興奮しすぎて気を失ったのかもね」

「え？」と、カヤは顔を上げる。「そういう経験、あるんですか」

「……ないよ」

ため息交じりの声が聞こえた。どうやら冗談だったようだ。カヤは、あちゃ、とひきつり笑顔を浮かべる。

「まさかとは思うけど……ナルコレプシーかもしれないな」

カヤは、は、ととぼけた声をだしていた。

「ナルコ……え？」

「ナルコレプシー。居眠り病、ともいわれる、睡眠障害だ。睡眠発作といって、急に眠ってしまう症状もあって……」

カヤは話についていけず、ぽかんとする。それを悟ったのか、電話の相手は「とにかく」と話をきった。

「どうやっても起きないようなら、病院に連れて行ったほうがいいかもしれない」

「そう、ですよね」

今度はカヤがため息をつき、和幸を心配そうに見下ろした。

「それで、月曜日なんだけど」と、電話の向こうの声はトーンを変えて言う。「この前話した通りで大丈夫？」

「あ、はい」

カヤはハッとし、微笑んだ。
「会えるの、楽しみにしてます」
「……」
かすかだが、鼻で笑ったような音が聞こえ、カヤは首をかしげる。
「どうかしました？」
「いや……あんなことがあったってのに……電話はしてくるし、会いたがるし。君は変わっているよ」
その言葉に、カヤは微笑を浮かべる。
「話さなきゃ、分からないこともあると思って」
「え？」
そのときだった。和幸の手がぴくりと動くのが、目に飛び込んできた。カヤは、あ、と声をあげる。
「あの……起きるかも！」
「そうか、よかったな」
「夜更けに、すみませんでした」
慌てて早口でそう言い、「ああ」という声を聞き届けてから電話をきった。両手をベッドについて、和幸の顔をのぞきこむ。
「和幸、くん？」と、カヤはおそるおそる声をかける。すると……
「ティアマト」

彼は、目をつぶったまま、そうつぶやいた。

＊　＊　＊

「ティ、ティアマト？」

なんだろう、それ？　聞き違いだろうか。首をかしげていると、和幸くんの目がゆっくりと開いていく。私は、思わず前のめりになった。

「和幸くん！」

眠たそうな目で、和幸くんは私を見つめてきた。何度か瞬きをして、不思議そうな表情を浮かべる。

「……カヤ」

名前を呼ばれただけで、こんなに胸がきゅんとするなんて。私は頬を緩め、愛おしく彼を見つめる。

「大丈夫？」

「あれ……俺……」

まだまだ眠そうな顔。やっぱり、単に眠気が急にきただけなんだろうか。和幸くんはゆっくりと体をおこす。その動作も、だるそうだ。

「寝てたのか？」

前髪をかきあげながら、和幸くんは聞いてきた。

「うん」と、私は苦笑して答える。
「……いつのまに……あ？」
和幸くんは、いぶかしげな表情で自分の上半身を見下ろした。
「なんで、裸……」
「へ」
そう、和幸くんは上半身裸。それはそうだ。だって……これからだったんだから。それにしても、この様子……寝ぼけて、何があったのか覚えてないのだろうか。
ふと、和幸くんはぼうっと私を見つめてきた。その視線は、ゆっくりと顔から体へ向けられる。ボタンをしめず、羽織っているだけのシャツ。私は下着も素肌もさらけだしていた。あ……と、私はそれを思い出し、慌てて下着を隠すようにシャツをひっぱる。今さら、だけど……改めてまじまじと見られると恥ずかしい。
「……あ……」
聞いたことも無いような情けない声をだし、和幸くんは表情を変えた。
「俺……ええ！？」
急に目が覚めたかのようにハッとして、和幸くんは頭をかかえる。
「やってる最中に寝たのか！？」
「……」

また、やってる、か。その表現、なんとかならないのかな。私は何も答えずに苦笑した。

＊　＊　＊

「ど、どこまで……その、どこまで……？」

ありえない。大失態もいいとこだ。あんなに強引に抱こうとしといて……寝たのか、俺は！？　最悪だろ。

「覚えてないの？」

カヤは遠慮がちにそうたずねてきた。覚えて……は、いる。でも……

「外したとこ、までは……覚えてるんだけど」

具体的に、何を、とはいいづらい。だが、カヤには伝わったようで、胸元をぎゅっとおさえた。

「それなら」とカヤは顔を赤らめて苦笑する。「和幸くんは、全部覚えてるよ」

「……」

嘘だろ。一体、どう間違えば……そんな大事なとこで眠りにつくんだ！？　せっかく、うまく外せた……あ、いや……とにかく、男として失格だ。俺はカヤと目もあわせられず、がっくりと肩をおとした。

「気にしないで」と、カヤの明るい声が聞こえてくる。はは。余計

に、へこむ。「よくあることだよ」

いや、絶対ないだろ。今の俺には、カヤの気遣いがつらい。

にしても……なんでいきなり？　眠気なんてなかった。そもそも、あんな状況で眠くなるわけが無いんだ。それに……と、俺は頭をかかえる。

なにか……大事なことを忘れている気がする。とてつもなく、重要なこと。寝ている間に……何かあった気がする。いや、でも……寝てる間に何が起きるっていうんだ？　夢？　夢を見ていた？　なんの？　思い出せない。記憶にもやがかかっているみたいだ。なんなんだ、一体？

「ねぇ、和幸くん」と、カヤはさっきとは違い、真剣な声で呼ぶ。なんだ？　って振り向くのが恐ろしい。これ以上、フォローされたら俺は立ち直れなくなりそうだ。といって、最低！　と言われても、それはそれで……

「ティアマトってなに？」

「！」

ティアマト？　俺は眉をひそめ、カヤに振り返る。

「寝言、なのかな。起きる前、そうつぶやいてたから」

「俺が？」

カヤは戸惑いつつ、うなずいた。ティアマト……ティアマト……聞いたことあるような気もするけど。

「聞き間違い、とかじゃないのか？」

俺は眉をひそめてそう尋ねる。聞き覚えがある気がしなくもないのだが、はっきりと、これだ、というものはない。何か似たような言葉かもしれない。カヤは、うーん、と考えてから、肩をすくめた。

「かもしれない」

「ま、なんにしても……ただの寝言だ。深い意味はないよ」

と、言いつつ……なんだか気になる。ティアマト。その単語を頭の中で繰り返す。なんか、ひっかかる。落ち着かない。思い出しそうなのに……出てこない。何なんだろう？

まあでも、思い出せないってことは、結局大事なことでもないんだよな。

それよりも、だ。俺は、ティアマトという言葉をとりあえず頭の片隅に置き、気持ちを切り替える。そう、俺が気にしなきゃいけないことは別にあるんだ。

「カヤ！」

気合をいれて、俺は姿勢をただし、カヤの両肩をつかんだ。カヤは驚いて目を丸くしている。

「どしたの？」

「今度は、寝ないから」

「へ」

馬鹿の一つ覚えみたいだが……他に汚名を晴らす方法も見つからない。よくよく考えたら、さっきは無理やり迫ってしまった。いくら気持ちが高ぶって我を忘れたからって……アレはアレで最低だったな。今度は、あんな乱暴なやり方じゃなくて、カヤが安心できるような……って、俺の場合、その前に、寝ないこと。これが第一目

標だよな。はは。自分で言ってて……なっさけねぇ。普通、寝るか？

「仕切りなおそう」

言って、俺はゆっくりと彼女の唇にキスをしようと顔を近づける。あと少し……俺の心臓は高鳴っていく。目をつぶり、唇にあたる感触を味わう……と、想像とはまったく違う感触がして、俺は目を開いた。

「え？」

彼女と俺の唇の間に割って入ってきたのは、彼女の人差し指だった。唐突に、カヤは指を俺の口にあててきたようだ。

俺も馬鹿じゃない。この行動の意味は分かる。拒否だ。

ぽかんとする俺に、カヤはクスッといたずらっぽい笑顔を浮かべる。

「しばらく、後悔しててもらおっかな」

「は」

「寝た罰」

それ以上何もいうことなく、カヤはさっさとベッドから降りていく。あっけにとられた俺は、引き止めることもできず、彼女の肩から力なく手を離した。

つまり……おあずけってことか。俺は、がっくりと頭を垂らした。そりゃ、怒って当然だよな。どこの世界に……初めてやろうってときに、寝る馬鹿がいるんだ。それも……

「！」

俺はハッとし、顔をあげる。そうだ。大事なこと、忘れてた。俺は、カーディガンを拾い上げる彼女の背中を見つめる。

――私、和幸くんのこと……愛してる。

俺、まじで最悪だ。

「カヤ！」と、思わず立ち上がり、俺もベッドから飛び降りる。カーディガンをちょうど着ようとしていた彼女は、胸のとこでそれを握り締めて目を丸くしている。

「もう一箇所……連れて行きたいところがあるんだ」

「……今から？」

「ああ」

そういえば、今、何時だろう？　もういい時間だよな。でも、居てもたってもいられない。どうしても、今しなきゃいけないことがある。やるとかやらないとか……そんなことより大事なことがあったんだ。

俺は、問答無用で彼女の腕をつかみ、玄関へと向かった。

「ちょっと、和幸くん！」

「大丈夫だ、日が昇る前には家に帰すから」

「服、着ないの！？」

え……俺ははたりと立ち止まり、自分の体を見下ろす。

「風邪、ひくよ？」

あまりに夢中で、上半身裸なのを忘れていた。彼女の優しい言葉

が追い討ちをかけて、俺の顔は一気に赤くなった。

コフィンタワー　―笑顔―

「ついたぞ」

そんな声がして、和幸くんはそうっと私を背中からおろした。私が着地すると、カツン、というヒールの音があたりに響く。それ以外、静かなものだ。誰もいない？　それに、なんだか肌寒い。一体、ここはどこなんだろう？

彼がスクーターを停めたところは、何の変哲もない坂道だった。スクーターの鍵を厳重にかけると、彼は私に言った。目をつぶってろ。なぜかは分からなかったけど、言われるまま目をつぶり、彼に手をひかれて歩いていた。すると今度は急に、おぶる、と言われ……目をつぶったまま、彼におぶられてここまで来た。

体の動きで、彼が階段を登っているらしいことは分かったけど……それにしては、かなりの時間登っていた。たぶん、十分くらいだろうか。そんなに長い階段ってあるかな？　もしかして、どこかの神社？

「もう、目開けていい？」

遠慮がちにたずねると、「ああ」という和幸くんの自慢げな声が聞こえる。

何をたくらんでるのかな？　そうっと私は目を開き、そして、目に飛び込んできた光景に息を呑んだ。

「……キレイ」

眼下にひろがるのは、光り輝く夜のトーキョーの街。星がそこら中にひろがってるみたい。もう夜明けも近いというのに、ビルの明

かりやネオンは煌々と輝いている。それが、足元に広がっているのだ。
私はどうやら、高い場所にいるようだ。高い……建物。それも、三六十度見渡せるような窓――といっても、窓枠だけだが――に囲まれている。
「ここは……」と、私は和幸くんに振り返る。
「コフィンタワー……聞いたことある？」
その名前に、ハッとした。コフィンタワー……飛び降り自殺の名所。治安の悪さで有名な一画に、のっそりと聳え立つ塔。私は、一度近くを訪れたことがあった。盗聴器を買うために……。そう、全ての始まり。両親のあの電話を盗み聞きした、あの盗聴器。
「カヤ、どうした？」
隣から、心配そうな声が聞こえてきた。
「あ、ううん。なんでもない」
つい、感傷にひたってしまった。あれ以来、このあたりに来ることもなかったから。
私はもう一度、景色に目をやる。トーキョーで『死』の象徴ともされるタワーから見える、格別の夜景を。
「まさか、自分があのコフィンタワーの中にいるなんて」
もちろん、治安が悪いことも一要因だけど……それ以上に、このタワーが放つ負のオーラが恐ろしかった。入ったら最後。もう出れない呪いの塔。そんな気がして仕方なかった。

でも、この目の前にひろがる景色はどうだろう。なんてキレイなんだ。キラキラ光る夜の街。それが、一面に広がっている。全部を視界におさめられない。街中が一足早いクリスマスみたい。トーキョーが、宝石の変わりに光で着飾っている。そこに、『死』の陰さえも感じられない。

「ここにお前を連れてくる気はなかったんだけど、他にいい場所も知らなくて。それに、金も無いし」

すぐ隣で、和幸くんが手すりによりかかって、微笑んでいる。なぜか、彼はリラックスしているようだった。まるで、ここが自宅かのように落ち着いている。ここに来るのは、どうやら初めてではないようだ。

「どうして、連れてきたくなかったの？　すごくキレイだよ」

私はうっとりとして、夜景を眺める。どれほどここにいても、見飽きることはないだろう。

「まあ、外を見る分には、な」

「え？」

和幸くんは、くいっと背後にあごをやる。それに促され、私は背後に目をやった。そして、思わず「きゃ」と小さく悲鳴をあげる。

「な、分かったろ？」

窓とは反対側。つまり、塔の中心部分には、半分白骨化した遺体や、今にも死にそうなおばあさん、目がうつろで痙攣している青年。そんな人たち――そして、人だったものが壁を背に座りこんでいる。

ゾッと背筋が凍った。そうなんだ。これが、コフィンタワーたる所以なんだ。私はそれを実感した。

「一応、区がたまに死体の回収に来てるみたいだな。前より、減ってる」

どこか感心したように、和幸くんはそうつぶやいた。

「前って……やっぱり、ここに来たことあるの？」

まだ、心臓がドキドキしてる。まるで、お化け屋敷に来てるみたい。私の笑顔は自然とひきつっていた。

そんな私とは対照的に、和幸くんは冷静な表情を浮かべ、おもむろに語りだす。

「俺、カインだったころさ……しょっちゅうここに来てたんだ」

「え！？」

しょっちゅうって……

「それって……」

ここは、コフィンタワー。『死』を望むものが登る不吉な塔。私は胸元をぎゅっと握り締める。

「和幸くんも、まさか……」

震える声でそこまで言うと、和幸くんはハッとしてこちらに顔をむけ、笑い出した。

「違う、違う。別に、死にに来たわけじゃないよ」

ホッと自然とため息がでる。よかった。

「でも、それじゃ、なんで？」

「なんでだろうな」と言って、和幸くんはうつむいた。悲しそうでもなく、その表情は、懐かしむようだった。「たぶん……この世界で居場所も見出せず、ここで『死』を待つだけのあの人たちに、自分を見てたんだと思う」

「！」

あの人たち……私はもう一度、彼らに目をやった。大都会が放つ光も、彼らには届いていない。暗闇で、じっと何かを待っている。死を待っている。迎えを待っている。居場所……それを、彼らはあの世に求めてるんだろうか。なんて、悲しい希望なんだろう。

「ここに自分は存在していていいのか……ずっと分からなかった」

和幸くんがまた話し出し、私は視線を戻す。月光の照らす彼の横顔は、いつになく色っぽかった。

「かといって、クローンである自分が、あの世にいけるとも思えなかった。神サマってのに、受け入れてもらえるとも思えなかったしな。俺はきっと、人を殺さないことで、神サマに媚を売っていたんだ」

ここで、そんなことないよ、と口をはさむのは軽はずみに思えた。私は何も言わず、彼の話を聞いていた。

「俺は、ただ生きているしかなかったんだ。いつか来る『死』を信

じて。今にも脆く崩れ去りそうな、『自分』と共に……」
「和幸くん」

せめて元気付けよう、と思い、彼の肩に手を伸ばしたときだった。トーキョーの光を反射し輝く瞳が、私へと向けられた。ぱちっと目があい、私は手を止める。その表情には、マイナスの感情は見受けられなかった。

「で、お前に会った」
「！」
「お前が、俺に……いてほしい、と言った。助けてくれないか、て……そう言ってくれた。
俺を、必要としてくれた」
「あ……」

言われて、私は思い出す。まるで遠い昔のような、あの夜。両親の妙な電話を盗聴し、家出しようかと迷ってアンリちゃんを呼び出した。するとなぜか、彼女は和幸くんと一緒に現れた。そして、遠慮して帰ろうとした彼を私は呼び止めたんだ。

――和幸くんにも……いてほしい。助けて、くれないかな？

あんな、たった一言を、まだ覚えててくれたんだ。

「あのとき、この世界で存在を許されたような気がしたんだ」

和幸くんは大人っぽい笑顔でそういった。
ドクン、と心臓が大きく揺れる。そう……だったんだ。あの一言が、彼にとってそんな意味をもっていたなんて。驚いた。――そして、嬉しい。そっか。じゃあ、あのときからすでに、私はあなたの

『存在の証明』になれていたんだね。つい、頬がゆるむ。
「カヤ」
和幸くんは改まって名前を呼び、私の左手をとった。
「！」
その真剣な表情に、私はたじろいだ。私だって、いろんなことを彼に伝えたいのに……そんな瞳で見つめられたら言葉がでないよ。
「俺も……」と彼は言い、急に頬を赤らませた。
「ん？」
なぜか、途中で口ごもった彼に私は微笑して首をかしげる。
「俺もな……」
「うん」
「……」
なかなか、次の言葉がでない。私はただじっと待つ。なんとなくだけど、彼が何を言おうとしているのか分かってきた。
「俺も……」
和幸くんは、まるで何かが喉につまっているかのような、苦しい声でもう一度言った。
そんなに焦らされたら……こっちまで心臓がドキドキしてきちゃう。手が震える。私は、期待の目で彼を見つめていた。

「俺も、その……」

うん。それで？　と、私は急かすような視線で続きを促す。でも、彼は耳まで真っ赤にして、口ごもっている。言ってくれるんだよね？　また、もういいんだ、なんて言わないよね？　もうそんなのナシだよ。お願い……聞きたい。ソレを言うために、ここまで連れてきてくれたんでしょ？　だから……言って。和幸くんも……

「俺も――」

「『愛してる』！？」

「へ」

あ……ばか。

＊　＊　＊

「俺も……」

言え。言うんだ。そのために、わざわざここに来たんだろ。俺が考えられる、最もロマンティックな場所。ここで、愛してる、て伝えるんだ。カヤがせっかくそう言ってくれたのに、俺は何も答えずに眠ってしまった。本来、男から言うべきセリフだってのに。やってる最中に寝たことより、そっちのほうが問題だったんだ。

だから、ここで……この完璧なシチュエーションで、ちゃんと言うんだ。なのに……言葉がでてこない。愛してるって……こんなに恥ずかしいもんなんだな。照れくさすぎて、言えない。プロポーズは、あんなにあっさりいけたってのに。どうも、俺には勢いってのが必要なようだ。ここまで改まってしまうと、難しい。

「俺も、その……」

言えって。あぁ！　て、照れくさすぎる。だめだ、だめだ。次こそ言うぞ、絶対。
俺は息を吸い、覚悟を決める。

「俺も――」
「『愛してる』！？」
「へ」

な、何が起きた？

「あ……」と、カヤが顔を赤らめ、うつむいた。俺はぽかんとして彼女を見つめる。

「……ごめん」

上目遣いで、カヤは苦笑する。言葉とは裏腹に、反省の色は見えない。いたずらが見つかった子供みたいな顔だ。
俺はしばらくぽかんとしてから、噴出した。それにつられるようにして、カヤも笑い出す。コフィンタワーの展望室で、場違いな笑い声が響き渡った。
参ったな。ここまでして、結局言えなかったじゃないか。でも、いいか。俺はちらりと横目で、笑っているカヤを見つめる。楽しそうな笑顔だ。これが見れただけでも、来た価値はある。夜景よりも何よりも、俺がずっと見ていたいのは彼女の笑顔だから。

コフィンタワー　―贈り物―

比較的キレイな一画を見つけ、二人は肩を並べて座っていた。二人の背を支えているのは、もう二度と開くことのないエレベーターのドアだ。目を凝らせば、ねずみや虫、血や汚物など、長居したくなくなるものが山ほど見えるのだろうが、あえて見る必要もない。カヤは、ただまっすぐ前――夜景を見つめていた。最初は感じていた妙な臭いも、鼻が順応したのか、気にならなくなっていた。

「バイト代貯まったら、ちゃんとした指輪、買うから」

おもむろに、和幸はちらりとカヤのしている指輪を見つめ、恥ずかしそうにつぶやいた。

「どうして？」

夜景から和幸に顔を向け、カヤは首をかしげる。我慢も何も、カヤにとってはこれ以上ない完璧な指輪だ。和幸との思い出の指輪。初めて神に祈ったものだ。もう一度、この指輪を薬指にはめたい、と。

「どうしてって……それ、ただの小型カメラなんだぞ。金なかったから、それ渡しただけで……」

「あ、そうか。じゃあ、これつけたまま着替えないようにしなきゃ」

見た目は指輪でも、中にはカメラとマイクが仕込まれている。和幸があの眼鏡をつけてわざわざ覗くようなことはしないと思うが……念のため、気をつけなければ、とカヤはうなずいた。

だが、和幸にとって問題なのはそんなことではない。結婚しよう、

とその指輪を渡したのだから、結婚指輪だ。それがそんな、おもちゃのようなスパイグッズでいいはずはない。せっかくの気品あふれる彼女の雰囲気が、台無しだ。彼は苦笑を浮かべる。

「いや、その前に……それ、まだ壊れてるから」

「え、そうなの？」

「ああ」

カインを続けていたら、藤本に渡して修理してもらっているはずだろうが、カインを辞めた今、その必要もない。卒業記念にもらっても怒られないはずだ。――思い入れのある指輪だし。和幸はそう考えて、壊れたまま持っていたのだ。

「だから……本物の指輪を買えるまでは、それで……」

「私はこれがいいの」

カヤは左手をぎゅっと胸の前で握り締め、弾けるように微笑んだ。

「和幸くんとの、思い出の指輪だもの。最高の贈り物だよ」

満面の笑みでそこまで言われては、和幸も返す言葉はない。

「そっか」と照れながらそっぽを向いた。

「うん」

あのときのことが、嘘みたいだ。カヤはそう思いながら、和幸の肩に頭をのせた。

神崎の屋敷に潜入しようというとき、和幸はカヤの左手薬指にこの指輪をはめた。カヤは思った。こんな状況でもない限り、こんなことはもう二度と起きないだろう、と。なのに、こうして指輪をは

めて彼の肩によりかかっている自分がいる。カヤは幸せをかみ締めるように目をつぶった。
ふと彼の肩がゆれ、自分の肩にその腕が回ってきた。

「！」

キスももうしたというのに、まだこんなことで胸をときめかす自分がいる。カヤは呆れたように微笑した。
彼の腕に包まれて、まるで揺りかごに眠る赤ん坊のように安心しきっていた。

＊　＊　＊

穏やかな表情だ。俺の胸で今にも眠りにおちそうな彼女が、たまらなく愛おしい。ふと、あの大失態は正解だったんじゃないか、と思った。こんな風に俺たちの間にまったりとした時間が流れているのは、あれのお陰だ。
イカれたばあさんのせいで、一時、俺たちの雰囲気は最悪だったからな。居眠り事件が起きて……緊張が解けたんだ。それでも、男として大失態をおかしたのは変わらないが。

――殺さないで。

脳裏に、見たことも無いほど泣きじゃくった彼女の顔がよぎる。
ただ事じゃなかった。おびえていた。俺に殺されるのをすごく恐れていた。最初は、殺してくれ、と言っておいて……急に、殺さないで、と訴えた。無理していたんだろうな。いつもの強がりだったんだ。でも、最後にはちゃんと本音をぶつけてくれた。正直な気持ちを打ち明けてくれた。そう考えると、嬉しいんだ。
いつかの、ファミレスの外から覗いたカヤと曽良のデートを思い

出す。曽良の胸でなきじゃくっていた彼女を見て、子供みたいに逆上したものだ。なんで俺には何も打ち明けてくれないのか、と。まるで、アレが遠い昔みたいだ。俺は懐かしむように鼻で笑った。

それにしても、悪いことをしたな。カヤは、俺が『聖域の剣』で刺したことを夢だと思っている。予知夢じゃないか、と心配していた。そう思うのも無理は無い。あれは実際に起きたこと。異常にリアルな夢だと感じているはずだ。不気味に感じているはずだ。だから、あんなにおびえさせてしまったんだ。

彼女の肩を抱く俺の手に力がはいった。

「カヤ」

そう呼んでみるが、カヤはピクリとも反応しない。もしかしたら寝てしまったのかもしれない。でも、それでもかまわなかった。俺は独り言のようにつづける　。

「俺は、絶対お前を殺したりしない。この指輪に誓う」

まあ、一回殺しそうになったが……それは、おいといて。

「お前が悪魔だろうがなんだろうが……俺だけは、お前の味方でいるから」

カヤは世界を滅ぼす女。それでもかまわない。そんなの、どうでもいいんだ。それよりも大事なことは……

「俺は」と低い声で言う。さっき、言いそびれた大事な言葉。どうやら、雰囲気をつくりすぎたようだ。今なら、すんなりいえる。

「俺はお前を愛してる。お前がたとえ何者だろうと、それは変わら

ない」

返事は無い。やっぱ、寝てるのか。俺はため息混じりに微笑んで、夜景に目をやる。

やれやれ……俺は、情けないな。部屋でぐちゃぐちゃ頭を悩ませていた自分を思い出す。なに、弱気になってたんだ。あんなばあさんに、気持ちを揺らがされるなんて。

「俺は諦めない」と、姿は見えないあのばあさんに向かってつぶやく。

カヤと二人、この世界で生きるんだ。もう不安に惑わされたりしない。必ず、守ってみせる。世界も、カヤも……。

万が一、なんて今はどうでもいいんだ。やるべきことは分かってる。『テマエの実』をカヤに食べさせない。それだけだ。俺は賭けを始めた。もう、降りれない。だから、勝つしかない。世界とカヤを守って勝てばいい。

それにしても……不思議だな。なぜか、眠りに落ちてから、気が楽になったような感じがする。自然と前向きになれる。

俺は、希望を知っている気がする。

「……あ」

ある可能性に気づき、俺はまぬけな声を出した。――もしかして、単なる寝不足だったのか？

「確かに、最近忙しかったしなぁ」

自然と、あくびがもれた。そういえば、今何時だろう。

隣から気持ちのよさそうな寝息が聞こえ、俺もそれに誘われるよ

うにして目をつぶった。

＊　＊　＊

「ん……」

なんだろう。まぶしい。私は、重いまぶたを開いた。肌寒いな、と体を震わせる。

「あ……」

目を開いて、一番最初にはいってきたもの。それは、トーキョーに光をそそぐ朝日。起きる時間だ、と皆に伝えている。偉大なる母……そんな言葉が思い浮かんだ。

「きれい」

朝日そのものも、それによって創られる影も、全部が神秘的に見えた。夕べとまったく違う姿を見せるトーキョー。それが私を囲むように広がっている。私は目をつぶり、トーキョーの声に耳を傾ける。こんな高いところにいるのだから、聞こえるはずは無いのだが……車のクラクションや人の話し声、目覚まし時計の音。そんなものが聞こえてくるような気がした。

「トーキョーの朝、か」

そんなことをつぶやいて……そして、私はハッとした。

「あ、朝！？」

朝一の私の大声が、コフィンタワーの展望室に木霊した。

＊　＊　＊

「か、和幸くん！」

なんだ？　誰かが俺を揺り動かしている。

「和幸くん、起きて！」

「あ？」

ねっむい……なんだよ？　俺は、ゆっくりと目を開く。

「！」

いきなり入ってきた光に、思わず目を細めた。まぶしい。

「和幸くん、どうしよう！？　朝だよ！」

誰だ？　ってか、ここどこだっけ？

俺を必死に揺らす誰かは、まばゆい光を背にしている。まるで後光みたいだ。逆光で顔が見えない。俺はぼうっとして、ぼやけた輪郭の誰かを見つめる。

「……天使？」

「えっ」

気づけば、そんなことをつぶやいていた。

「ね……寝ぼけてる場合じゃないよ！　帰らないと！　おじさまに

バレちゃう！」

なにをそんなにあせってるんだ？　帰る？　バレる？　おじさま……

「！！」

俺は一気に血の気がひいた。一瞬で目が覚めた。目を見開き、バッと体を壁から起こす。

「やっべえ……」

トーキョーが……明るい。嫌味なほど、いい朝だ。

まずい。夜明け前に、カヤを帰すはずが……さすがに、こんなに光が燦燦と照らす中、カヤをこっそり部屋に戻すなんてできるわけがない。でも、なんとかしないと……カヤの養父（おやじ）さんにバレたら、印象最悪だ。家に忍び込んで娘を連れ出し、朝まで引っ張りまわしたわけだから……大問題だよな。地震、雷、火事、親父。昔から、怖いものは決まってるんだ。世界がどうのと考える前に、俺が向き合わなきゃいけないものがあったんだ。カヤの養父（おやじ）さんに気に入られとかなきゃ、世界とカヤを守れても……結婚なんてできないじゃないか。カヤと一緒にいられない！

寝起きでぼけている頭をフル回転させて、俺は必死に方法を探す。そのときだった。

「藤本くん、現行犯逮捕だ」

「へ」

聞き覚えのある、気に食わない声がした。

嫌な男

なんでこんな汚い場所に……椎名は、あたりを見回しながら呆れていた。死体なのか生きているのかもよく分からない肉体が、あちらこちらに転がっている。ねずみが足元を走り回り、壁には芸術作品のような血のシミがついている。嫌な臭いもして、思わず顔をしかめた。

総評として……十代のカップルがデートで来るにはあまりに不適切な場所だ。でも、彼らはここにいた。エレベーターと思われる扉の前で座り込んでいる二人。こちらをきょとんとした様子で見つめている。椎名は、やれやれ、と腰に手をあてがいながら、歩き出した。

「部屋に起こしに行ったら、もぬけの空なんですから。お父さんを心配させちゃだめですよ、カヤちゃん」

カヤはその言葉に、申し訳なさそうな表情で立ち上がる。

「ごめんなさい」と謝る彼女の横で、おそらく彼女を連れ出したと思われる少年は、むっとした表情でこちらをにらみつけている。見つかったというのに慌てる様子も無く、あくまで反抗的な態度だ。椎名は、おもしろがってクスッと笑った。彼が自分を良く思っていないことは明らかだった。

「なんでここが分かったんデスカ？」

わざとらしい敬語で、和幸は尋ねる。子供だな、と思いつつ、椎名は彼の目の前で立ち止まって肩をすくめた。

「携帯電話にはＧＰＳっていう、便利な機能があるんだよ」
その言葉にハッとしたカヤのほうだった。
「あ」と、携帯電話をポケットから取り出した。「これで、私を見つけたんですか」
ＧＰＳの存在は知っていたが、道に迷ったときに使うものだとばかり思っていた。まさか、それをたどってこの携帯自体の場所を探ることができるとは……カヤはのんきに感心した。
「そういうことです。さ、帰りますよ」
そう言うと、椎名はカヤにじりじりと歩み寄る。
「の、望さん？」
椎名の妙な雰囲気に気圧され、カヤは後ずさった。ボディガードが、まさか自分を殴るようなことはないだろうが……椎名の雰囲気はその気配すら感じさせる。
おびえるカヤに、椎名は、いやぁ、と困ったような笑顔を浮かべて立ち止まった。
「ひきずってでも連れ戻せ。そういわれてまして」
「ひきずる！？」
「はい。でもそれはさすがに嫌なので……」
椎名はすばやく屈み、彼女の腰に手を回すと、軽々と肩に担いだ。
「え……あ！」

ぐる、と体が回る。鉄棒で前周りをしたような感覚。椎名の背中がいきなり視界に飛び込み、それも上半身は逆さづり状態。カヤは、何が起きたのか一瞬分からなかった。

「や、望さん！？」

自分が米俵のようにかつがれている。それが分かって、カヤは顔を赤くした。

「こっちも首がかかってますから。強引にでも連れ帰りますよ」

軽い調子でそう言う椎名。ばたつくカヤの足をおさえるように、スカートの裾まわりをしっかりと腕でおさえる。

「きゃっ。やだ、望さん、おろしてください」

「おい、椎名！」

カヤの養父（ちち）が雇ったボディガードだし……と堪えていた和幸だったが、嫌がるカヤの声をこれ以上聞くのはさすがに我慢できない。立ち上がって、椎名の腕をつかもうとした。

だが、その動きはぴたりと止まる。唐突に椎名が取り出したある物に反応して。

「藤本くん。君も、一緒に来てもらうよ」

「……！」

カヤは急におとなしくなった和幸を疑問に思い、なんとか顔をあげ、様子を伺う。そして、ハッと目を見開いた。椎名が和幸に突きつけているもの。見覚えがある。嫌な思い出が体に染み付いている。

左胸がちくりと痛む。――拳銃だ。

「望さん！？」

悲鳴にも似たカヤの声があたりに響く。

「仮にも、大臣の娘さんを無断で連れ出したんだ。ただの夜遊び、じゃ済まされないよ」

久々に、拳銃を見た。和幸は、ごくりとつばを飲む。そういえば、こうして自分が銃口を向けられる側になるのは初めてかもしれない。自分はいつも、あちら側だった。――凶器を見せびらかし、人を恐怖で押さえつける側。

和幸は、ゆっくりと銃口から椎名へと視線を向ける。

「世の中にはね、責任ってものがあるんだ」

君は知らないだろうけど――そんな言葉が続きそうな言い方だ。明らかに、侮辱されている。和幸はぐっと拳を握り締めた。ガキが。そう言われている気がしてならない。

椎名は、自分をにらみつける少年の目つきに満足したようにほくそ笑み、ガンマンのように銃をくるりと回してジャケットの下にしまう。

そのかっこつけた行動も気に食わない。和幸は、あからさまに顔をしかめた。

「それなりの『お仕置き』は覚悟したほうがいいよ」

「お仕置き……」

それは、十七の少年に使う言葉だろうか。巧妙に言葉を選んで、

椎名は自分を貶している。ちまちまと蓄積する、椎名への苛立ち。思いのままに、このすました顔面に拳をいれられたら、どんなにすっきりすることだろう。だが……と、和幸はキレそうな自分をおさえるように、作り笑顔を浮かべる。

「話せば、きっと分かってもらえます」

「そ。ま、がんばって」

無理だろうけどね。椎名の表情ははっきりとそう言っていた。

一方カヤは、まるで木から落ちそうな猫のように、椎名の背中に腕をつっぱっていた。

「望さん、おろしてください」と必死に言うが、椎名は気にする風もなく、カヤを抱えたままくるりと踵を返す。

「タワーから降りたら、おろしてあげます」

「ええ!?　頭に血がのぼります」

「そうなる前に、降りますから」

和幸を残し、階段のほうへ二、三歩進んだところで、ふと、椎名は立ちどまった。

「それと」と、くるりと後ろを振り返る。そこには、鋭い視線を自分に向けている少年が立っている。相当嫌われたようだ。椎名は満足げに微笑み、間延びした声で続ける。

「年上にはさん付け……最低限の社会のルールだよ、藤本くん」

少年の頬がぴくりと動くのが、はっきりと分かった。それでも、なんとか堪えているのだろう。偉い偉い、と、椎名は心の中でつぶ

やく。

「スミマセン、椎名サン」

まるでロボットのような抑揚のない声で、反抗的な少年は言い返した。

＊　＊　＊

ダイニングの時計が、八時を刻む。本間秀実はゴルフウェアに身をつつみ、ダイニングテーブルに座ってじっとしていた。四角い顔にはふちなしの眼鏡がかけられ、スカスカの黒髪が頭を覆っている。眼鏡の奥には、鷹の目のような鋭い瞳。その視線は、テーブルに置かれた固定電話に注がれている。

普段は部屋の隅にひっそりと置かれている固定電話だが、朝の八時が近くなるとダイニングテーブルへと運ばれる。本来ならあわただしく掃除をしているはずのメイドも、この時間にはダイニングから追い出される。毎朝八時、ダイニングに在るのは電話とにらみ合う本間の姿だけだ。それは、五日前――カヤを養女としてひきとった日――からの日課だ。

そして、いつものように電話が鳴り出す。カヤを引き取った、あの夜のように。

本間はハッとし、すばやく受話器をとった。

「もしもし」と、押し殺した声で言う。すぐに返事はない。いたずら電話とも思える沈黙が続く。それでも、本間は受話器を置こうとはしない。相手が誰かは分かっているからだ。ごくりとつばをのみ、緊張の面持ちで報告を始める。

「カヤは元気だ。まだ眠っているが、今夜は友人と……」

「嘘をつくな」
「！」
冷静な低い声が、本間の鼓膜をふるわせた。まるで感情がないかのような、無機質な声。本間はごくりと唾を飲み込んだ。
「嘘では……」
「彼女が夜遊びしようが、それは問題ではない」
「なぜ、それを！？」
仰天し、本間は目を見開く。背筋に悪寒がはしった。本間はバッと窓に振り返る。――どこからか、見ているのか。あるいは……と、近くのコンセントに目をやる。盗聴か。そう思うと、変な汗が背中をつたった。まさか電話の男はこの五日間の間に屋敷に忍び込み、監視のための仕掛けをしていったというのか。いや、そんなことができるはずはない。本間は顔色をなくす。――できたとすれば、恐ろしい男だ。
不気味な電話の相手は、返事をまつことなくある台詞を唱える。それは、毎朝繰り返される台詞だ。
「約束の日、無傷で健康なカヤを渡すこと。条件はそれだけだ」
またそれか、と思いつつ「そうすれば」と本間はぎらりと野心を瞳に宿らせ、つぶやく。「金はわたしのもの。そうだな？」
「そうしなければ、お前は死ぬ」
間髪いれずに男はそう答えた。予言のような言葉。迷いのない、確信に満ちた声。本間は、受話器を握る手に力をいれる。
声は、ずいぶん若い。分かることといえば、それくらいだが……

そんな若造に脅されている事実が気に食わない。だが、何ができる。自分が興味があるのは、金だ。神崎夫妻がイランで妙な男と交わした契約。赤ん坊を十七歳になるまで育てあげること。その報酬は莫大な金。一体いくらかはまだ知らないが、神崎昭三を乗り気にさせるほどの金額、と考えれば、十分魅力的だ。その金さえ手に入ればいい。そのためには……と、本間はぐっと奥歯をかみ締める。――これくらいの屈辱、甘んじて受けよう。

「また明日、電話する」

男はそう言って、電話をきった。

嫌な男（後書き）

長すぎたので、中途半端なところできってしまいました。次話と一つです。

クローンの父

本間は気に食わない表情を浮かべ、受話器を元に戻す。いつもどおりの会話だった。一方的に電話をしてきて、一方的にきる。質問をしても、答えが返ってくるわけでもない。いつだって、男のペースだ。国務大臣ともあろう自分が、こんな仕打ちを受けるなんて……本間は乱暴にイスから立ち上がり、いらだった声で秘書を呼ぶ。

「前田くん！」

「は、はい」と、待っていたかのように秘書は部屋に入ってくる。日曜日だというのにスーツを着込み、髪はばっちりとワックスでかためられている。電話中は、ダイニングの扉の前で待機。それが彼の日課だ。

「盗聴器を探せ。屋敷全て、徹底的にだ」

「え……盗聴器、ですか」

いきなり何の話だ、と前田はぽかんとする。苛立っている本間には、のろまな秘書が余計に腹立たしく思える。

「いいから、手配しなさい」

「あ、はい」

すみません、と口癖のように言いながら、前田は電子手帳を取り出した。

本間は、やれやれ、とため息をつきながら、隣のリビングへと歩き出す。

「カヤは？」

「あ、もうすぐで着くそうです」

金魚の糞のように本間のあとにつきながら、電子手帳片手に前田はあわてて答える。ちょっとでも返事が遅れれば、「まったく、君は」と決まり文句のように言われてしまう。それを聞くたびに、髪の毛が抜けていく気がした。本間の機嫌は損ねたくない。できることなら、当たり障りの無いことだけ報告していたい。だが……と、前田はおそるおそる本間の背中に語りかける。

「彼も一緒だそうです」

その瞬間、ぴくりと本間の肩がゆれるのが分かった。前田の動悸が激しくなる。下手なことを言えば、怒鳴られるだろう。それでも、確認しておかなければならないことがある。前田は怒鳴られることを覚悟で、すうっと息を吸いたずねる。

「本当に、お会いするつもりですか？」

すると本間はしばらく黙り、前田の心配をよそに微笑を浮かべて振り返った。

「心配かね、前田くん」

さきほどとは打って変わって、穏やかな声だ。思ってもいない返しに前田は戸惑いつつ、それはそうですよ、と説得するかのように一歩踏み出す。

「まだ確証はないといっても、椎名くんの推測だと、彼が……」

「分かっている。だから、会うんだ」

前田は、眉をひそめる。保身を第一に考える本間らしからぬ行動に思えた。

「なあに」と前田の心配をよそに、本間は落ち着いた表情で言う。

「虎穴に入らずんば、虎児を得ず。危険を冒す価値はある。父親として、彼が何のためにカヤをたぶらかしているのか、知る必要があるしなぁ」

「しかし、ですね……」

勇気を振り絞って食い下がろうとした前田を、本間の右手が制した。前田はピタリと動きを止める。

「それに……もしものときは、望(アレ)がなんとかするだろう。そのために拾ってやったんだ」

アレ、とは、あのホストのような男だろうか。前田は一瞬顔をしかめた。カヤにべったりとくっつく護衛人、椎名望。本間が彼を頼りにしている理由は知っている。それを考えれば、カヤのボディガードに彼をつけたのも頷ける。だが、それでも前田にはおもしろくなかった。へらへらとカヤについて回る椎名という男が気に食わないのだ。優等生として生きてきた前田にとって、元々ああいう軽い男は気に障る存在。それに妬みが混じって、今では椎名の顔を見るのも不快だった。

「にしても」と、本間はソファに腰をおろしながらつぶやく。「藤本和幸……藤本、か。ある男を思い出す苗字だな」

一瞬で前田の頭から、憎たらしい椎名の笑顔が消え去った。

「はい？　藤本、ですか」

ぼうっと違うことを考えていたことなど、本間に知られるわけにはいかない。なんとか相槌をうてたことに、とりあえず前田は安堵した。

ソファに深々と座って、本間は瞑想するかのように目をつぶる。

「藤本……マサルだったかな」

「藤本マサル？」

その名前に聞き覚えはない。ぱちくりと前田は目を瞬いた。

彼は自分を生粋のエリートだと自負していた。ぬきんでた知識を持っている自信がある。この若さで、本間の秘書を務めているのがなによりの証拠だ。だが、藤本マサル、という名前に全く心当たりが無い。まだまだ勉強不足なのか。それとも……と、前田はハッとする。今まで学ぶ必要のなかった人物――つまり、裏の世界の住人かもしれない。嫌だな、と前田は泣きそうに顔をゆがめる。どんどん世界の暗闇にのみこまれていく自分がいる。こんなつもりで政界にはいったわけではないのに。そう思うと、自然と頭が垂れる。

そんな前田の苦悩を知る由も無く、本間は語りだす。

「『クローンの父』、藤本マサル。

画期的な人工子宮を創りだし、裏のクローン製造を一気に飛躍させた男だ」

「人工子宮……」

前田はぽかんとしてしまった。人工子宮……自分が学んできた範囲では、それはまだ成功していないはず。どうやら、表より裏の世界のほうが、今や進歩しているようだ。前田は、やるせない思いに襲われた。

「かつて天才と謳われた研究者なんだが……なぜか表舞台から急に姿を消し、裏社会の闇医者になりさがった」
「はあ」
「わたしたちの間では有名だよ。といっても、名前まで知っている人間はごくわずか、か。
噂によれば、工場の爆発に巻き込まれてもう死んだとか」

まるで独り言のようにそうつぶやいてから、本間は目を開く。
「皮肉な苗字だな。もし……和幸くんが本当にカインなら」
「は……はい」

前田は心臓が掴まれたような痛みを覚えた。本間が、カイン、と口にする度に、寿命が縮まる思いだ。正体不明の幻のような殺し屋たちへの怒りは、全て自分にぶつけられる。今、カインを恨んでいるのは、本間よりも自分のような気がした。
ちょうどそのとき、あわただしい騒ぎ声が玄関から聞こえてきた。

平和な朝食　―１―

どうなってんだよ、これ？

俺は、目の前に並ぶ色とりどりの果物を呆然と見つめていた。葡萄に、ブルーベリー、苺、グレープフルーツ、メロン。皿にごっそり積まれている。フルーツって……朝食べるものなのか？　しかも、こんなにいろんな種類が並んでいいのかよ？　メロンが気の毒でならない。一人で主役張れるのに。

その横の皿には、一口サイズのクロワッサンが几帳面に並べられている。駐車場に並ぶ車みたいだ。さらにその隣には、ベーコンにウィンナー、スクランブルエッグ。

こんな豪華な朝食は、今まで見たことが無い。広幸さんと暮らしていたころでさえ、せいぜい卵かけご飯。一人暮らしになってからは、トースト一枚。低血圧なのか、俺は寝起きが悪い。朝食をつくる時間があれば、睡眠をとりたい。

「和幸さま」

いきなり隣から声がした。おっとりとした落ち着いた声。あわてて振り返ると、エプロンをつけた五十代くらいのおばさんが、オレンジジュースのはいった瓶を携えて微笑みかけていた。その瓶もまた、高そうな水差しで、ガラス細工みたいに模様がほどこされている。――無駄にしか思えない。なんで金持ちは、細部にまで金の匂いをただよわせるんだ。こんな水差し、模様なんていらないだろ。俺は座ったまま、じっとその瓶を見つめていた。

「オレンジジュースでよろしいですか？」

このおばさん、メイドってやつか？　黒く長い髪をうしろできっ

ちりとまとめ、服装も質素、メイクも必要最低限、といったところだ。だが、立ち振る舞いには気品が漂う。ベテラン？

「あの、和幸さま？」

気づけば、そんな上品なおばさんが顔をしかめていた。アホみたいにぼうっとしている俺を不審に思ったのだろう。俺はハッと我に返り、「すみません！」とあわててコップを手渡した。

おばさんは満足げに微笑みながら、コップを受け取ってジュースを注ぎだす。

それを眺めながら、俺は居心地の悪さを体の芯から感じていた。和幸さまって……何かのプレイかよ。それだけじゃない。この豪勢な朝食も、ジュースをわざわざ注いでもらうのも……落ち着かない。さらに俺の後ろには、椎名が仁王立ちして控えている。背中にその視線を痛いほど感じて、気持ちが悪い。カヤのボディガードなら、カヤのそばにいろよ。なんで俺にくっついてるんだ。

せめてもの救いは……と、目の前に座るカヤを見つめる。カヤは俺の視線に気づき、にこりと微笑んだ。慣れているんだろう。これが当たり前のような顔をして、座っている。カヤがいなかったら、俺はこうして大人しく座ってはいられないだろう。

「何かありましたら、お声をおかけください」

メイドのおばさんはコップを俺の前におきながら、そう言って下がった。おいおい、ホテルか、ここは。

そもそも、このシチュエーションは絶対におかしい。なんでいきなり平和な朝食になってるんだ？　俺はちらりと、斜め横――いわゆる『お誕生日席』に座るおっさんを見つめる。四角い輪郭にするどい目つき。親父よりは髪が残っている頭。深く刻まれた皺（ちち）。愛嬌があるのは、麻呂っぽい眉毛くらい。威厳漂う、カヤの養父だ。

「さて、食べようか」と、カヤの親父さんは俺に微笑んだ。だが、その目は笑っていない。ように見える。

「は……はい」

とりあえず、苦笑して返事をする。おかしすぎる。今朝のことはお咎めなしで一緒に朝食って……。

俺は、目の前に置かれた空の取り皿を見つめる。食事に手が出せない。不気味すぎる。お説教前の腹ごしらえじゃないだろうな。

家についたら、すぐさま怒鳴られると思ってた。殴られてもおかしくはない。それほど怒っているはずだ、と覚悟していた。初デートに妙なルールまでつけてきた親父さんなんだ。カヤを勝手に連れ出して朝帰りなんて、論外だろう。なのに……玄関で会うなり「初めまして」と握手を求められ、「朝食を食べていきなさい」と誘われた。あまりのことに唖然とした俺は、断る理由も見つからず……こうして上流階級の朝食に迷い込んだわけだ。

てか、よくよく考えれば……この人、国の大臣なんだよな。今更だけど、カヤはすごい人の養女になったものだ。俺は視線をあげ、カヤを見つめた。ちょうど葡萄を口に運んでいるときだった。俺と視線があうと、彼女は不思議そうに目をぱちくりさせた。食べないの？　と言っているようだった。

いや、確かに腹は減ってるけど……だめだ。このままじゃ、気持ち悪くてやってられない。

俺は、ガタッと音を立てて立ち上がる。

「あの！」と姿勢を正して、親父さんに体を向けた。「夕べ……ってか、今朝のことですけど」

そこまで言ったときだった。頭を下げる準備をしていた俺を、親

父さんの冷静な声が止める。
「食事中に席をたつものじゃないよ、和幸くん」
「……へ」
思わず、猫背になった。そ、そこかよ？　もっと重要な問題があるだろ。
「いや、でも……」
「君もベジタリアンかね？」
「は？」やべ。大臣に、は？　って……俺は慌てて手を横に振った。
「い、いえ」
親父さんは眼鏡の奥の目を細め、俺にベーコンとウィンナーの乗った皿を差し出してきた。
「カヤは食べられないからね。いつも一人なんだよ。付き合ってくれると嬉しいんだが」
「……」
俺はしばらく反応できなかった。肩透かし、てやつだったのかな。もっと恐い人を想像していたんだ。国の大臣ともなると、さぞや堅苦しい人なんだろう、て思っていた。偏見、だったかな。目の前のおっさんは、気取った様子もない、気さくそうな人だ。確かに、厳しそうな顔をしているけど……よく考えてみれば、両親を亡くしたカヤをすぐに養女に迎えるような人だ。いくら旧友の娘だといっても、なかなかできることじゃない。カヤも、この人のことを尊敬しているって言っていたし。だからこそ、本間に養女にはいった。
俺、気にしすぎだったかな。器のでかい人のようだし。今朝のこと、本当に怒っていないのかもしれない。若気の至り、とでも思っ

て大目に見てくれてるのか？　そうだよな。お仕置きだなんだとほざいていたのは、椎名だ。あいつの言うことなんて、相手にするべきじゃない。

「それじゃ……頂きます」

俺は遠慮がちにつぶやいてイスに腰をおろす。フォークを手にし、親父さんが差し出してきた皿からベーコンを一切れ、取り皿に運んだ。それを見届け、親父さんは頬を緩めて皿を元の場所に戻す。

こんがりと焼けたベーコンの香ばしい匂いが、俺の食欲を刺激する。もういいや。とりあえず、食べよう。まさか、毒が盛られてるわけでもないし。せっかく朝食に招いてくれたんだから、遠慮して食べないほうが失礼だよな。

そうと決まれば……と、ベーコンにフォークを突き刺そうとしたときだった。親父さんの第一問が出題される。

「ところで、和幸くんは一人暮らしなんだって？」

「え！？」と、フォークを止める。「あ、はい」

いきなり、そんな話？　カヤが話したのだろうか。

「ご両親は？」

げ。その質問に、思わずフォークを落としそうになった。心臓が一気に熱くなる。

やべ……久々だ。そうだよな。こういう話が来るよな、普通。抜き打ちテストがあると知った瞬間と同じ感覚だ。俺は必死に、自分のプロフィールを思い出す。

「両親は、いないんです」

とりあえずフォークを横に置き、俺は余裕の微笑を浮かべる。小さいころに必死に覚えた設定なんだ。そう簡単には忘れない。てか、忘れるわけにはいかない。

親父さんは、俺の言葉に大きなリアクションもなく、顔を上げただけだった。

「いない？」

「はい。孤児院出身なんで」

目の端っこで、カヤがじっとこちらを見つめているのが見えた。カヤも気づいたんだな。日向に出てきても、結局俺は嘘をつかなきゃやっていけないことを。

「ご両親はお亡くなりに？」

「いえ、俺……あ、僕は弟だっただけです」

俺の答えに、親父さんは、ああ、と落胆にも似た相槌を打つ。

弟……それは、今の世の中ではありえない存在だ。もちろん、カヤみたいに養子縁組の場合は違うが。一人っ子政策のせいで、子供を一人産んだ夫婦には避妊手術が義務付けられている。といっても無料（ただ）じゃない。金は自分たちで負担。だから、こっそり手術をしない夫婦もいる。国も暇じゃないからな。一人一人調べるわけにはいかない。だから、結構な数の夫婦がサボっているようだ。そのせいで誤って二人目を授かる夫婦が後を絶たない。二番目の子供を孕んだことがバレれば、重い罰金もしは禁固刑もありうる。それは御免だ、というわけで……彼らはこっそりと自宅出産し、子供を孤児院や近くの教会に置いていくようになった。そのお陰で、全国的に孤児院の数は増加。というより、ほぼ全ての教会が孤児院に変わってしまった。

そこに目をつけた親父――藤本マサルは、トーキョー各地の孤児院に、俺たちカインの記録を残してもらうことを思いついた。元キリスト教会の孤児院は、シスター・マリアの知り合いが多かったからな。協力を得るのは簡単だったらしい。

カインに連れ出された子供たちは、まず孤児院に偽の記録をつくってもらい、それに合わせて戸籍やらなんやらを捏造する。俺たちのプロフィールはそうやってできあがる。

「だから」と、俺は話により現実味をもたせるために補足する。「生活費は、孤児院に面倒を見てもらっているんです。最近では、僕たちのような孤児のための基金もありますし」

「なるほどね」

唸るような声で親父さんはつぶやいた。そして……

「どこの孤児院だね？」

「え」

乗り切った……と思ったのに、まさかまた質問がくるとは。普通、ここまで突っ込むか？　俺が本当に孤児だったら気を害してるぞ。

「世田谷のバプテスト教会です」

かといって、シカトするわけにもいかないからな。俺は言いづらそうにそう答えた。だが、若干不安だ。世田谷……でいいんだよな。こうして人の親に会う機会なんて小学校以来。学校でもここまでの話をすることもないし。自己紹介は本当に久しぶりなんだ。これ以上、細かい質問されたらボロがでるぞ。

「孤児院の院長の名前は覚えてるかね？」

「……」

言ってるそばから！　俺は言葉を失った。なんで……なんで、そこまで聞いてくるんだよ？　院長の名前？　そこまでは……覚えてない。なんだろう。変に緊張してきた。彼女の父親と会っているから？　それだけじゃない。まるで、尋問されてるみたいで……冷や汗がでる。

「院長は……」と、とりあえず間をもたせようと俺がつぶやいた。そのときだった。

「おじさま！」

それまで黙っていたカヤが口をはさんできた。俺も親父さんも、え、とカヤに振り返る。

「もう少し、楽しいお話をしませんか？」

カヤの明るい声が、ダイニングに響いた。

「堅苦しいお話ばかりだと、和幸くんも緊張して話しづらいでしょうし」

カヤの穏やかな笑顔で、それまでよどんでいた空気が一気に晴れる。少なくとも、俺はそう感じた。

「せっかくなんですから」と、　カヤの最後の一押し。俺はただ、ひきつった笑顔を浮かべてじっとしていることしかできなかった。しばらくしてから、「そうだな」と親父さんがため息まじりにつぶやく。その瞬間、一気に肩の力がぬけた。

質問攻めは終わりか？　よかった。カヤに助けられた。俺は心の

底からホッとした。これで、安心してベーコンを……と、フォークを手に取る。
すると、また親父さんの低い声が俺に襲い掛かってきた。
「和幸くん、趣味はなんだね？」
「はい！？」
しゅ、趣味？　俺はまた親父さんに振り返った。趣味って……趣味！？　俺の趣味？
「休日は何をしているんだ？」
「休日は……」
もっぱら下見だ。侵入する屋敷とか、オークション会場とか……それか、銃の手入れ。もちろん、それはカインだったときの話で、カインを辞めてからは……って、まだ一週間も経ってないんだ。一般人としての休日はこれが最初。
仕方なしに、俺はひきつり笑顔でしょうもないことを口走る。
「寝てますね」
だめ男じゃないか。
「じゃあ、特技は？」
「特技……は」
ピッキング。不法侵入。射撃。――どれも言えたもんじゃない。
「特に、ないです」

親父さんの眉がぴくりと動いた。さすがのカヤも、これはフォローできないよな。

「それじゃあ、将来の夢は？」
「……夢も、特にないです」
「進路はどうするんだ？」
「進路……」
「大学は、もう決めたかね？」
「え？」

よくそんなに質問が次から次へと出てくるな。それも、俺が困るような質問ばかり。

「さあ……進学はしないと思います」

金が無いっての。それに、そこまでして勉強する理由もないし……夢なんて、考えたことない。つい先週までは、考えなくてよかったんだ。殺し屋（カイン）という定職があったから。それに俺は、親父の指示に従っていればよかったから。

そんなことを知っているわけもなく、親父さんはぎょっとして俺を見つめてきた。

「もったいないなぁ。せっかく、頭がいいのに」
「まさか。頭は悪いほうですよ」

俺が頭いい？　一体どこからそんな考えを？　カヤが言ったんだろうか。それとも、社交辞令ってやつか？

「謙虚だね」と、親父さんは目を細めた。「このあたりで一番優秀な進学校に通っているんだ。もっと威張っていいんだよ」

「へ」

一番優秀な進学校？　俺はぽかんと口を開けていた。そしてハッとしてカヤに目をやる。

そういえば……俺、カヤと同じ高校、なんだよな。天才的な頭脳をもつ――それも『災いの人形』だからなんだろうが――カヤが転校してきたんだ。その時点で、あの学校が馬鹿なはずがない。

知らなかった。てか、考えたことがなかった。高校のレベルなんて、どうでもよかったから。藤本さん――親父が、ここに行け、て言ったから受験しただけだ。そうか。たまに授業についていけないのは、俺が頭が悪いからだと思ってた。でも、違ったんだ。授業のレベルが高かっただけ。

俺は思わず、視線を落とした。

趣味も特技も進路も夢も、そして自分の高校のことさえ分かっていない。俺……カイン以外の自分のこと、何も知らない……。

平和な朝食　―1―（後書き）

＊実在する孤児院、また世田谷のどのバプテスト教会とも全く関係ありません。念のため……

平和な朝食　―２―

和幸くん、大丈夫かな。なんだか、いつもと雰囲気が違う。

私はブルーベリーを口に運びながら、じっと和幸くんを見つめていた。彼はうつむいて何かを考えている。落ち込んでるようにも見える。でも……まさか、ね。孤児院の話は、きっと嘘だもの。本当だったら、おじさまの非常識とも思える追求で気を害しているはずだけど……彼は、いうなれば、オークション出身。人身売買が行われるという闇オークションで、異常な需要を満たすために競売にかけられた商業用のクローン。もしそこに、広幸というカインが現れなければ、彼は今、奴隷のような生活をしていたはずだ。

ブルーベリーが口の中ではじけ、甘酸っぱい味が香りとともにひろがる。

孤児院の話以外で、気に障るような話題があったんだろうか。私が口をはさんでからは、趣味とか特技とか、当たり前の話しかしていなかったけど。確かに、全ての返答はあやふやだった。理由は分かる。話せる内容が、まだないんだ。彼は、学校や映画、音楽のことよりも、人身売買の事情に通じている。だって、それが彼がこれまでの人生、命をかけて従事していたことだから。いきなり、趣味や特技なんて話されても、困るよね。まして、進路なんて……

ふと、私は心配になった。彼が本当に落ち込んでいるとしたら、原因はその質問じゃないか。彼には早すぎる。カインとしての生き方しか知らないはずだもの。将来のことを考えるのは、まだ早い。大学だって考えたこともなかっただろうし、将来の夢がないのも当然。表の世界でいきなり役割を見つけろ、て言われても……右も左も分からない異国に降り立って、すぐに就職先を探すようなもの。楽しいものじゃない。そこにあるのは、ほんのちょっとの希望と胸いっぱいの不安だ。

――かっちゃんを……俺たちの大事な兄弟を、よろしくね。

曽良くんの言葉が頭をよぎった。うん、分かってる。私が、導いてあげなきゃ。

「和幸くん」と、またおじさまが口を開いた。今度はどんな質問だろうか。私まで、変に緊張してしまう。

和幸くんは、名前を呼ばれて我に返ったようで、弾かれたようにおじさまに振り返った。おじさまは、穏やかな笑みを浮かべて尋ねる。

「絵画は好きかね？」

その瞬間、和幸くんの表情がこわばった。私は思わずため息をつきそうになって、なんとかこらえる。絵画……和幸くんが興味があるとは思えない。でも、おじさまは……

「わたしはね、カラヴァッジオが好きなんだよ」

言いながら、ウインナーにナイフをいれる。楽しそうな表情だ。おじさまは絵画の話をするとき、いつもこういう顔になる。まるで子供の話をしているような、自慢げな表情。

「カルパッチョ？」と、和幸くんは困惑気味につぶやいた。和幸くん、それ料理。彼の後ろで、思わず望さんがふきだす。もう……こらえてくれてもいいのに。私が望さんに一瞥をくれると、彼はハッとして口を押さえた。でも、その目は依然として笑っている。

「カラヴァッジオはね」と気持ちを切り替え、私は和幸くんに話し

かける。「イタリアの画家。おじさまは、大ファンで……」
「わたしが一番好きなのは、『洗礼者の首を持つサロメ』だね。盆の上に乗せられたヨハネの首には、衝撃を受けた」

私の話を遮ったおじさまの言葉に、和幸くんは忙しく振り返る。
おじさまったら……と、私は苦笑する。和幸くんは、カラヴァッジオの名前も聞いたことが無いみたいだし、絵の話をされても退屈にきまっている。といって、話を変えたらおじさまは嫌がるだろうし。どうしよう。
とりあえず、私が通訳になって……と、絵の説明をしようとしたときだった。

「盆……ヨハネ……」と、彼がつぶやくのが聞こえてきた。「サロメって……ヘロディアの娘ですか」
「え」

和幸くんが、落ち着いた声でそう言った。私は思わず、驚いて声をあげていた。さっきまで今にも笑い出しそうだった望さんも、きょとんとしている。

「おお、サロメは知っているのかね」

感心したようにおじさまはそう言った。和幸くんは遠慮がちに微笑んでから、しっかりとした口調で答える。

「養父であるヘロデ王に踊りをみせ、その褒美に洗礼者ヨハネの首を欲したという古代パレスチナの女……ですよね」
「その通りだ。よく知っているじゃないか」

私も、正直驚いていた。まさか、サロメの話を知っていたなんて。

すると、和幸くんは照れ笑いを浮かべて言った。

「教会で育ったこともあって、聖書はよく読んでいましたから」

「ああ、なるほどね」

あ……そっか。孤児院育ちは嘘でも、教会で育ったことは本当なんだ。いつかの、藤本さんの言葉が頭によみがえる。あれは、カインという名前の由来を話していたときだ。

――ここは教会ですからね。聖書も残っている。どうやら、彼らはそれを読んでそこからもってきたらしい。

カインだった和幸くんも例外じゃない。教会を改装したカインノイエで、聖書を読んで育ったんだ。

「じゃあ、宗教画は興味あるのかな」

おじさまは唐突にそんなことを言い出した。うーん、どうしても……和幸くんを絵画の世界に引き込みたいようだ。せっかく、生き生きしてきた和幸くんの顔がまた強張ってしまった。

「あ……そう、ですね」

興味ない、て顔に書いてある。

「それなら」とおじさまは、得意げに微笑んで言う。「金曜日の夜、一緒にオークションに行かないか」

「！」

お……オークション！？　その単語に、和幸くんの表情がさらに

強張る。私もきっと、同じような顔をしているだろう。
オークションに和幸くんを連れて行く？　だめ……そんなの絶対、だめ！

「あの、おじさま。突然すぎますよ。土曜日は文化祭もありますし」
「ああ、そうだったね」

だが、とおじさまは迫力のある目力で和幸くんを見つめる。

「ぜひ、未来の息子をはやくお披露目したくてね」

未来の息子……？　いきなり、そんな言葉がでてくるなんて。私も和幸くんも絶句した。
確かにプロポーズは受けたけど、おじさまにはまだ言っていない。そもそも、夕べのデートに妙なルールをつきつけてきたのはおじさまだ。厳しい門限とか、家にあがるな、とか。てっきり、彼との交際をよく思っていないのかと思っていた。なのに、急に『未来の息子』？
もしかして、今日会ってみて、和幸くんのこと気に入ってくれたのだろうか。あ……さっきのサロメの話かな。あれで一気に気に入った？

「わたしはオークションで絵画を発掘するのが趣味でね。よく行くんだよ。だから、知り合いも多くてね」

おじさまがオークション好きなのは昔から知っている。掘り出し物を見つけるときの興奮がたまらない。そう話してくれたこともあった。
トーキョーのオークションは、今や上流階級の社交場。オークションというより、パーティに近い。おじさまのようなお金持ちとな

ると、人脈を広げるためにオークションに顔を出すこともある。私も、神崎の両親に連れられて一度だけ行ったことがある。いろんな人に挨拶させられ、すごく疲れた記憶がある。だから、おじさまが和幸くんを連れて行きたいと思うのも自然な流れ。もし、本当に彼を未来の息子だと思っているなら、だけど。

でも……と、私は和幸くんの顔色を伺う。彼にとってのオークションは全くの別物のはず。もちろん、おじさまが連れて行こうとしているオークションは、全うなオークション。和幸くんが関わってきたオークションとは――闇オークションとは違う。だけど、嫌だよね。いくら違う、と言っても……オークションはオークション。嫌な記憶、たくさんあるだろうし。そもそも、彼はオークションで競売にかけられた過去がある。大嫌いな場所なはずだ。行きたくなくて当然。ううん……行かせたくない。

「いつかは」と、おじさまはこちらを見つめてきた。「カヤを紹介しなくては、と思っていたんだ。だから、ついで、と言うと失礼かもしれないが……君も一緒に来てくれれば、カヤも心強い。なにより、ああいう場に年頃の女性が一人で行くのはさびしいものだ。デートがいたほうが格好もつくだろう」

私の反応を確認することもなく、おじさまはすぐに和幸くんに視線を戻してそう言った。

どうして……こんなにしつこく彼を誘おうとしているんだろうか。それも、今度の金曜日だなんて。オークションは毎週のように行われている。別にいますぐ行かなくても……。いつか行こう、でいいはず。初めて会ってここまで説得する理由はなんだろう？　よほど気に入ったのだろうか。

「あの」と、やっと和幸くんが口を動かす。「やっぱり、文化祭の前日なんで……遠慮しておきます」

その言葉を聞いて、私はほっと肩をなでおろす。よかった。断ってくれて。気を遣って承諾してしまうんじゃないか、なんて思ったけど、ひとまず安心。

この話はここで終わり。私はそう信じていた。おじさまが険しい表情で口を開くまでは。

「なんだ。やはり、遊びで付き合っているだけかね」

「は……？」

「お、おじさま！？」

いきなり、不機嫌そうにフォークを置くと、おじさまは腕を組んで顎をひいた。和幸くんはもちろん、私も理解できない。どうして、唐突にそんな話になるの？　まさか、オークションを断ったから？

なんか変。おじさまらしくない、横暴な振る舞いだ。

「カヤを夜通し連れまわしたのも、それだけカヤを好きなのか、と信じていた。若さゆえの、情熱的な愛。いいじゃないか。いや、それなら許そうと思っていた。だが……それが単なる遊びで、カヤと真剣に付き合っているわけではないのなら……今すぐ別れなさい」

理不尽すぎて、言葉が出てこない。なにか言わなきゃ。でも……反論しようにも、おじさまの主張に筋が通っていないから、どう言ったらいいのか。

「行きますよ」

私が焦っていると、和幸くんが低い声でそう言い出した。投げやりにも思える、乱暴な口調　だ。絶対、怒ってる。

「オークションに行けば……僕が真剣だって、分かってくれるんですよね」
「和幸くん……」
嫌な予感がする。話がおかしな方向に進んでいる。コロコロと何かに誘われるように、坂道を転がっていく。なんだろう、この違和感。
ふと、和幸くんの後ろにいる望さんを見やった。彼は――笑っていた。それも、人を見下すような笑み。
「無理はしなくていい。公式の場で、カヤの恋人だ、と紹介されるのが嫌なら……」
「嫌です」
それまで決して和幸くんと目をあわせようとしなかったおじさまが、ハッとして顔を上げた。私も、思わぬ言葉に顔をしかめる。嫌って……どういうこと？
「カヤさんの婚約者として、紹介してください。それなら、行きます」
え……一気に、顔が熱くなる。たぶん、目の前のウィンナーより真っ赤な自信がある。そんな私とは対照的に、和幸くんは落ち着いて堂々たる風貌だ。もう、恥ずかしいとか照れるとか……彼にとってはそんなレベルじゃなくなっているんだ。本気なんだ。グッと胸が押し上げられる。――純粋に、嬉しい。
「婚約者？」と、あっけにとられたようにおじさまがつぶやいた。どこか、呆れたような表情だ。
「できれば、カヤさんの誕生日に結婚させてほしいんです」

カヤさん……なんだかくすぐったい。和幸くんもそうなんだろう。さっきもだったけど、そう呼ぶときだけ発音が可笑しい。

「はあ……結婚」

おじさまは、参ったな、という表情で頭を抱えた。

「おじさま。私からも、お願いします」

姿勢をただし、遠慮がちに私も口をはさむ。話がまた違う方向に進んでいるけど、どうでもよかった。婚約者、てことになれば、今後、和幸くんと会いやすくなるだろうし。この家に自由に出入りすることもできるようになるだろう。二人きりの時間が、もっとほしい。

「だがね……」と、おじさまはため息混じりにつぶやく。「和幸くんは十七だ。まだ結婚は無理だろう」

「あ」

時が、止まった気がした。私と和幸くんは顔を見合わせる。そういえば、そうだ。私が誕生日を迎えても、お互い十七。婚姻は、男性十八、女性十六以上。私は大丈夫だけど、彼は法的に結婚できない。二人とも……気づいていなかったなんて。

呆然としていると、おじさまが声をあげて笑い出した。

「若さゆえの無知な情熱。わたしは好きだよ」

私は恥ずかしくてうつむいた。望さんの笑い声も聞こえてくる。

でも……と、上目遣いでおじさまの笑顔を見つめる。さっきまで

の重い空気は消え去っている。いつものおじさまだ。つい、頬がゆるんだ。

「結婚の話はまだ先だとして」とおじさまは、一通り笑ってから切り出す。「そこまで真剣だというなら、次からは玄関から入りなさい」

おじさまの右腕が和幸くんの肩にのび、ぽん、と優しく叩いた。

「泥棒じゃないんだから。ちゃんと呼び鈴を鳴らして、挨拶してから家にあがりなさい。いいね？」

「は……はい。ありがとうございます」

和幸くんも、いつもの表情に戻っている。さっきのことで、耳は赤いままだけど……嬉しそうな表情だ。おじさまは満足げに頷いて、朝食に戻った。

私はその様子を見届けて、こっそりと安堵のため息をつく。終わりよければ全てよし、かな。とりあえず、おじさまと和幸くんの初対面はうまくいった……と信じたい。

でもオークションは、結局行くことになっちゃったんだよね。和幸くんはまじめだから、一度了解したらキャンセルはしないだろう。すごく心配だけど……私がしっかりしていれば、大丈夫だよね。私が、彼を守ればいい。そうだよね。

――かっちゃんを……俺たちの大事な兄弟を、よろしくね。

分かってるよ、曽良くん。

残念だ

「どう思った？」

本間は自分の書斎に入るなり、後ろからついてきた一見ホストのような若者に尋ねる。

「全部箇条書きにして文書で提出しましょうか？」

身近に仕える人間で、こんななめた口の利き方を自分にできるのはこの男くらいだろう。本間は鼻で笑って振り返る。掘り出し物は、曲（くせ）があるものだ。

「口頭にしなさい、望（のぞむ）」

「了解」

最後にはいってきた本間の秘書が、椎名の後ろで静かに扉を閉めた。本間は書斎のソファに腰を下ろしながら、いまいち垢抜けない若手秘書に問いかける。

「カヤは？」

「和幸くんが帰ってすぐに、シャワーを浴びると言って浴室に……」

三年も秘書を務めていながら、まだおどおどとした態度を見せる。質問をしただけで体をびくっと震わせるし、いつも怯えた表情を浮かべている。本間は、やれやれ、とため息をつく。自分がそれほど威厳があるのか、それともこの秘書が臆病者なだけなのか。とりあえず、今は秘書に構っている場合ではない。

本間はちらりと時計に目をやってから、それで、と椎名に促した。

「和幸くんはどうだね？」
「まっすぐでいい子じゃないですか。今時珍しく、真面目そうですし」
今時珍しく、か。この男が言うと説得力があるな。本間はため息をつくと、厳しい視線で椎名をにらむ。
「時間がないんだ。本題にはいりなさい」
脅しのような低い声に顔色を悪くしたのは、椎名ではなくその後ろに控える秘書、前田だった。言われた本人は、つまらなそうな顔を浮かべただけで気にする様子はひとつもない。
「そうですね。とりあえず、彼が言っていた生い立ちは全部資料通りでした。世田谷のバプテスト教会に記録も残っていますし、孤児のための基金。これも存在しています」
そこまで言って、ただ、と椎名は声を低くする。
「それにしては、暮らしが贅沢すぎます。マンションも高校生が一人で暮らすには豪華なところですし……それに中学は私立に通っています。私立に通えるほどのお金を持っているとは思えないんですよね」
「同感だな」
でも、とそこで声をあげたのは意外にも前田秘書だった。
本間と椎名が同時に振り返ると、前田は顔を強張らせる。その表情には見覚えがあるが、わざわざ口をはさむような行動は珍しい。本間は興味深げに、前田を見つめた。

「あの……それだけで、あの子がカインだ、て言えますか？」

なんだ、そんなことで話を止めたのか。本間は呆れて首を横に振った。斬新な意見でも飛び出すか、と少し期待してしまった自分が情けない。

「嫌だな、前田さん」椎名は上半身をねじり、前田に振り返る。「今はただ、順を追って話しているだけですよ。確証となるものは、他にあります」

「確証？」

「いいですか」と、まるで子供を相手にしているような態度で椎名は切り出す。「カヤちゃんがヒロインをつとめる文化祭の劇。前田さんも台本、読みましたよね」

たずねられ、前田は戸惑いつつも頷く。本間に命じられ、その台本をこっそりと学校から入手したのは、他でもない自分だ。カインを正義のヒーローに見立てた、奇抜で危険な劇。そして、フィクションというにはあまりにも現実的なストーリー。読んだ本間が顔を赤くし、それを床に叩きつけた事件は記憶に新しい。

「あれは間違いなく、なんらかのかたちでカインを知る人間が書いている。もしくは、書かせている。それは容易に想像つくでしょう」

いくら、あなたでも――そんな言葉が続きそうだ。その見下した言い方に、前田は奥歯をかみ締めた。もし自分に力があったなら……と、どうしようもない空想を描いて拳を握り締める。蔑まれることには慣れてもいいころなのに、いつまでたっても自尊心がしつこく根深く残っていた。

「問題は、誰が……なんですけどね」と、椎名は偉そうに腰をあてがった。「脚本を書いたのは誰だ、とカヤちゃんに尋ねても、どうもごまかされる。学生の台本だからフォーマットも適当で、脚本家も日付も何も記されていない。ま、わざとなのかもしれませんが……」

そこまでは自分も知っている。前田は表情を曇らせた。必要以上に丁寧な説明は、逆に苛立たせる。わざとなのかもしれない。その言葉は、まさに今自分が椎名に向けて言いたい台詞だ。

「そこで、とりあえず劇に参加しているメンバー全員を調べたわけです。すると面白いことに、あやしいのは一人だけ」

椎名が天井を指す人差し指を、前田は眉をひそめて凝視する。

「和幸くん、ですか」まるで何かに乗り移られたのように、若い秘書はそうつぶやいた。

「そう。彼のプロフィールだけ、どうもうさんくさい。理由はさっき言ったとおりです」

「でも、実際、孤児院出身の子供はたくさんいます。教会にちゃんと記録もあったんでしょう？　お金の件も、いろんな可能性があるはずです。やはり、それだけでは……」

前田が勇気をだして食い下がると、椎名の大きな右の手のひらがそれを制した。

「僕も半信半疑でしたよ。今朝まではね」

「は」

ここにきて、やっとか、と本間は椎名を見上げる。半人前の秘書

のせいで、無駄に時間をくってしまった。さっさと本題にはいりたいというのに。どうも、秘書はあの少年をかばっているように見えて仕方がない。同情でもしているのだろうか。――全く、余計なことを。

本間は腕を組み、椎名の名を呼ぶ代わりにわざとらしく咳払いをした。

「確証を得たんだな」

「そりゃ、そうでしょう」恐いもの知らずなのか、上下関係に疎いのか、椎名は嘲笑にも似た笑みを浮かべて本間に振り返る。「この家の警備に携わってはいませんが……それでも、これだけは分かります。夕べ、屋敷のガードに不手際はなかった」

その言葉に、本間は眉間にシワを寄せ、うむ、と答える。

椎名は、ふと窓に目をやり、今度は明らかな嘲笑を浮かべて鼻で笑う。

「そんな中、カヤちゃんを連れ去っちゃダメでしょう」

だから、子供なんだよ。そう心の中で付け加えた。

「それで……彼はどうやって忍び込んだと思う？」

すると椎名は、ふうむ、と腰に手をあてがい、おもむろに窓に歩み寄った。じっと外を眺めてから、小首をかしげる。

「塀を飛び越えただけでしょう。彼は手ぶらでしたし。シンプル・イズ・ザ・ベスト、ですよ」

「飛び越えた！？」それまで押し黙っていた前田は思わず声をあげていた。「あんな高い塀を！？　そんな、無茶な」

おもしろいほどいいリアクションをする。椎名は、あはは、と笑って前田に振り返る。本間の秘書を三年もしていて、カインの知識も豊富なはずだが、まだまだ素人だ。椎名がちらりと本間に目をやると、予想通り落胆のため息をついていた。出来の悪い秘書ですね、と思わず言いたくなった。

「無茶かどうか……」椎名は気を取り直し、微笑を浮かべて前田に持ちかける。「お見せしましょうか？」

「！」

前田はハッと息を呑む。そうだった、と忘れかけていた事実を思い出した。本間がこの気に食わない男を頼りにしている理由。それは、太古の法律を思い起こさせる。――目には目を、歯には歯を。

前田はごくりと生唾を飲み込み、小さく首を横に振った。

「結構です」

その声は、自分でも驚くほどか弱かった。

「それにですね」と、前田を気にかける様子はさらさらなく、椎名は本間に話しかける。「普通の高校生は、銃を向けられてあんなリアクションはしませんよ」

のんきに笑うと、人差し指を立てて銃の形にした右手を前田に向けた。小学生みたいなイタズラに、前田はぎょっと目を丸くする。

「あれは、映画で見慣れてる……そんなもんじゃない。道端でいきなり顔見知りと会った。そんな反応です」

前田が居心地悪そうにしている。椎名は笑いを必死にこらえ、手を元に戻した。真面目でお堅い青年は、実にからかいがいがある。

「とにかく」という本間の低い声が、椎名を真面目な会話に引き戻す。「確信した、ということだね、君は」

「ま、そうなりますね」

「彼の狙いはなんだと思う？　なぜ、カヤと付き合っている？」

ここにきて、椎名は急に真顔になった。あぁ、と言いづらそうに顔をゆがめると、鼻をかく。

「残念ながら……普通に恋愛してるんだと思います。

神崎夫婦殺害に関しては分かりませんが……今回は、単純にカヤちゃんにゾッコンなんでしょう」

「なぜ、そう思う？」

「箇条書きにしましょうか」

「箇条書きは忘れなさい」

それじゃ、と椎名は息を大きく吸い込んだ。

「まず第一に、本間先生の命は狙っていません。夕べ悠々と屋敷に忍び込んでおいて、本間先生には見向きもしていないですからね。何をしたかといえば、カヤちゃんとコフィンタワーで居眠りだ。

さらに、朝食のときも始終緊張しているだけ。目の前にフォークやらナイフもあったのに、ベーコンひとつまともに突き刺せなかった。

カインは後先考えて行動するほど大人じゃない。目の前にチャンスがあったら、自分の命は顧みずに行動にうつすはずです」

そういえば、結局彼は何も食べなかったな。本間は、今更それに

気がついた。

「第二に、本間先生のスパイをしているわけでもありません。本間先生の裏の顔を知って、カヤちゃんを利用しているのだとしたら、目的は情報収集でしょう。特に、オークションの話題には目がないはず。

なのに、オークションに誘われて実に嫌そうに断りました。早速舞い込んできたチャンスを棒に振るのはおかしい。

慎重に機を選んでいる、という可能性は、彼に関してはないでしょうしね。そんなタイプには見えませんから。

そして、最後に……」

椎名は急に気が抜けた表情を浮かべ、肩をすくめる。

「年齢も考えずにプロポーズ。狙ってそんな馬鹿ができるわけがない。以上です」

余計なことを付け加える男だ。本間は、呆れた表情で頭をかかえる。だが……と、朝食の席で十七の少年が見せた真剣な顔を思い出す。カヤと結婚させてほしい。そう言い出したときだ。確かに、演技でできるような表情ではなかった。本気なんだ、とまっすぐな瞳が必死に訴えていた。

今時珍しく、という椎名の言葉が脳裏をよぎる。本間は、やれやれ、とソファにのけぞり天井を見上げた。

「謹厳実直……惜しい少年だな。――残念だ」

独り言のようにそういって、本間はソファから重い腰を上げる。

「あとは、証拠がほしい」

前田はぎょっとした。まだ、足りないというのか。やはり、自分大事の男は嫌になるほど慎重だ。

「証拠……ですか」と、椎名が首をかしげる。「どんなものをご所望で？」

「そうだな。名乗り出てもらうのが理想だ」

「……は？」

本間は腰をぐっと伸ばし、ほくそ笑んだ。三年傍にいる前田は、その顔をよく知っている。頭の中でシミュレートした自分のプランがうまくいったときの笑みだ。

「証拠があがったら……自首してもらう」

珍しく、椎名は理解に苦しみ眉をひそめた。自首？　そんなことをカインがするとは思えない。自首するくらいなら、命を捨てるようなガキ共だ。いきなりぼけだしたのかとさえ思った。ちらりと前田を見ると、前田もぽかんとしている。どうやら、本間が一人暴走しているようだ。

「望。君の義妹（いもうと）は、使えそうかね？」

「は」

いきなり義妹の話？　ますます分からない。椎名はのどもとを掻きながら、「まあ」と返事をする。

「彼女にも手伝ってもらうよ」

「……じゃ、連絡しときます」

けど、何をするつもりです？　椎名はその言葉を飲み込んだ。本間は腹黒いおっさんだが、能無しではない。考えがあるのなら、自分は――そして義妹は付き合うまでだ。

「さて。ゴルフに遅れてしまう」

のんきに本間はつぶやいて、歩き出した。

パンピーのくせに

「オ……オークションに行く！？」
「はあ！？　何考えてんの？」

ま、それはそうだよな。好きなだけ、ののしってくれればいい。
俺は本間の家を後にし、まっすぐ『実家』に来ていた。つまり、カインノイエの本部だ。親父はまだ入院中。その留守を務めるのは、曽良。だからここに来たのだが……思わぬ人物がいた。――砺波だ。資料の整理をしている曽良を手伝っているわけでもなく、ソファで足のマニキュアを乾かしている。何しにきてんだ、こいつは。

「とにかく、これスクーターの鍵。ありがとな」と俺は、親父のデスクに座る曽良に鍵を渡す。にしても、意外と、社長イスが曽良に似合っている。立派な青年実業家にすら見える。馬子にも衣装？
いや、ちょっと違うか。
「それはいいんだけど」

戸惑いつつ曽良は受け取り、心配そうな表情で俺を見てきた。

「本気で行くつもりなの？　オークション」
「ああ。行く、て宣言しちゃったからな」

すると、後ろから相変わらずの金切り声が。

「今からでも断りなさいよ！　オークションなんて行くもんじゃない」
「無理だ」と俺は振り返る。

マニキュアのせいで砺波は動けないようだ。足をソファの肘掛に乗せたまま、無理な姿勢で上体を起こしている。

「試されてると思うんだ。あの親父さんにさ」

「はあ？」

「よく考えたら……俺とカヤは身分が違いすぎる」

「何を今更。見た目の時点でつりあってないのよ、あんたたちは」

相変わらずだな、砺波。当たり前のようにひどいことを言ってのける。だが、いつだって間違ったことは言っていないんだ。今回もしかり。確かに、付き合ってること自体奇跡というか……。

「身分が違うから、なに？　かっちゃん」

曽良の言葉で俺は現実に引き戻される。ああ、と曽良に振り返る。

「だから、カヤの世界……つまり、上流階級でちゃんとやっていけるか。それをみられてる気がするんだ」

「それで、オークションに行く？　意味わかんないわよ」

後ろから、砺波のイラついたような声が聞こえてきた。

俺も最初は理解できなかった。なんでいきなりオークションに誘われたのか……しかも、断ろうとしたら、別れろ、とまで言われた。なんなんだ、このおっさんは？　と頭に来たが、落ち着いてみると、その考えが分かった気がした。

俺は……というより、俺たちカインは、オークションに悪い印象しかない。俺だって、一度はそこで出品された人間だ。何も分からずステージに出され、競りが始まった。いきなり眩しい舞台にあげられ、目の前には見たことのない服――今考えれば、単なる正装だ――を身にまとった大人たち。叫ばれる数字が、自分の値段である

ことも知らなかった。曽良だってそうだ。しかも、カインになってからも、オークションに忍び込んでは子供たちを救い出してきた。そのたびに、目の前で繰り広げられる儀式に、思い出したくもない記憶が無理やり引っ張り出された。売られようとしている子供が、自分と重なって見えた。毎回、吐き気がした。きっと、トラウマというやつだったんだろう。

だから俺たちには、オークションに対して嫌な記憶しかない。人に値段をつけ、物のように売り買いする場所。自由も意志も、存在さえも否定する場所。俺たちにとってのオークションは、そういう存在だ。

だが、逆に言えば、俺たちはその一面しか見ていない。裏で行われるオークション、いわゆる闇オークションは確かにおぞましいものだ。けど、カヤの親父さんが俺を誘ってくれたオークションは違う。全くの別物。意味合いが全然違う。

「金持ちはオークションに行く」と、おもむろに曽良が切り出す。

「それはトーキョーの流行であり、彼らにとってステータスみたいなものだ」

そこまで言って、曽良は親父みたいにくるりと皮のイスを回し、窓を見つめる。

「オークションで挨拶まわりをするのは、一種の社交界デビュー。確かに、カーヤのパパはかっちゃんにその機会を与えているのかもしれないね」

「ああ」

もともと、トーキョーのオークションは人身売買とは関係なかった。二十年ほど前、アンティークブームがあって、そのときに一気に流行りだしたのだ。当時は、純粋なオークションだったという。

だが、ある時期から、それを隠れ蓑に闇オークションが始まった。通常のオークションが行われている地下で、人身売買が行われるようになったのだ。オークションに来る客の中には、その存在を知らない者もいるし、闇オークションを目当てで来る奴もいる。カヤの親父さんは前者だろう。国の大臣が、闇オークションを知っているはずは無い。知っていたら……俺たちがこそこそオークションに忍び込む必要はないはずなんだ。――少なくとも、俺はそう信じている。

そういえば、カヤの親父さんは、しょっちゅうオークションに行くといっていた。おそらく、その中のいくつか――いや、もしくは全部かもしれない――親父さんの知らぬところで、闇オークションが地下で行われていたものもあっただろう。あの人、オークション、すごく好きそうだったし、それを知ったらショックだろうな。

「でも……」と、曽良は真剣な視線をこちらに投げかけてきた。俺はハッと我に返る。「かっちゃんは大丈夫なの？」

「！」

まっすぐに、その台詞は俺の胸につきささる。

「そうよ」

砺波の甲高い声が聞こえ、そして柔らかい何かが腕におしつけられた。ハッとしてみると、砺波が俺の腕に絡みつくように腕をまわし、胸をおしつけていた。もうマニキュアは乾いたのか……って、おい！　この感触、それかよ！？

「もしそこで闇オークションもあったらどうするわけ？」

言われてハッとした。何に驚いたかって、砺波がその問題に気づ

いていたことだ。
そう……闇オークションは、通常のオークションの地下で、同時、もしくは時間をズラして行われる。親父さんが俺を連れて行こうとしているオークションが、闇オークションつきである可能性もある。
それもあって、俺はここに来たんだ。俺は砺波の腕をはらい、まじめな表情で曽良を見つめる。
「今週の金曜の夜。会場は『フィレンツェ』。誰かカインを『迎え』にやる予定はあるのか？」
すると曽良は、珍しく真剣な表情で黙った。俺をじっと見据え、そして不敵に笑う。
「やっぱり、大丈夫じゃないじゃん」
俺は、へ、と目を丸くした。大丈夫じゃない？　何の話だ？
「なんで、かっちゃんにそれを教えなきゃいけないのさ」
「え！？」
お、おい……こんな真剣な話で、こいつはふざける気か？
「なんでって……カインが来るなら、俺だってその準備をしとかないと」
俺は思わず、デスクにたたきつけるように両手を置いて迫っていた。だが、曽良は顔色ひとつ変える様子もなく、涼しげな表情で足を組んだ。
「準備ってなぁに？　余計なことしないでくれるかなぁ、パンピー

のくせにぃ」
「ぱ……ぱんぴー？」
なんだ、その言葉は？　俺の新しいあだ名だろうか。
「一般人、て意味よ。すんごい大昔の流行語らしいわ」
横から砺波がそう説明した。さすが、小学校から仲がいいだけあるな。にしても、なんで言語が同じ人間と話すのに通訳がいるんだよ。
「カインじゃない人間に、ほいほい情報を渡すと思ったぁ？」
「……いや、でもな……事情が――」
「事情も何も無いよ。かっちゃんはカインじゃない。だから、俺はなにも言えない。それだけ」
「そんな問題かよ？」
「銃もなくて人も殺せない。そんな奴が、コッチで何の役に立つのさ？」
「！」
曽良の目は真剣だ。いつも陽気なアヒル口も、大人しく閉じている。こいつと、こんな緊張感ある時間を過ごすことになるとは……思いもしなかったな。
厳しい言葉。他の奴に言われていたら腹を立てていたかもしれない。だが……
――一般人らしく生きなきゃ、結局危ない目にあう。中途半端が、一番よくないんだ　。
カインを辞めた日に、こいつに言われた言葉。それが頭の中に響

いた。

「そう、だよな」

こいつはこいつなりに、俺のことを気遣ってくれている。そんな気がした。俺はうつむき、曽良に見えないように微笑んだ。

実験的な馬鹿なことばかりして、人に変なあだ名を押し付け、呆れるくらい人懐っこい。そんな奴に心配されていると思うと、気に食わないが……有難い。そういえば、中学までは親友のように仲が良かった。なんで、つるまなくなったんだろう。――今思うと、もったいなかったな。

「ところでさぁ」

急にいつものお気楽な曽良のトーンに戻った。俺は、え、と顔をあげる。すると、見覚えのある形にあひる口が広がっていた。

「かっちゃん、アッチのほうは卒業したの？」

「……は？」

あ……アッチ？

「そうそう。それを私たちは聞きたかったのよね」

隣から、また砺波が俺の腕にしがみついてきた。その目は光り輝き、肌はいつも以上に艶々している。頬はほんのりと紅潮していて……って、こいつのこの顔も見覚えがあるぞ。色恋話を期待しているときの砺波だ。

い、嫌な予感がする。

「カヤ、どうだったの？」
「……は！？」
「夕べ、したんでしょ？」
「な、なにをだよ！？」

すると、砺波はげんなりとした表情を浮かべた。あからさまに人を蔑んだ目で見つめてくる。

「信じられない。それでも男なわけ？　分かるでしょ！？　何の話だか！」

ああ、もう分かってるさ。だからこそ、とぼけたいんだよ。てか、こっちの台詞だ。お前、それでも女かよ？　はじらいをどこに落としてきたんだ？

「卒業したの、卒業したの？」

親父のイスのほうから、そんなしつこく迫る声が聞こえてくる。まるで悪霊のようだ。

そしてこのとき、走馬灯のように小学校の思い出がよみがえってきた。――ああ、そうだ。俺が曽良や砺波と距離をおいた理由……これだ。こいつらのしつこいちょっかい。俺の初恋を台無しにし、その後の恋愛にも多大な悪影響を及ぼした。

だめだ。さっさとここから出よう。

「話は終わりだ！」と、乱暴に砺波を突き放す。こいつもカインのはしくれ。このくらいされても平気だろう。

「なによ。人が心配してやってんのに」

ほらな。ひるむ様子もなく、噛み付いてくる。砺波に心配されてろくな目にあったことがないぞ。

「大きなお世話だ」

「白状するまで、逃がさないから」

言って、砺波は大またを開き、俺の前に立ちはだかる。いつもどおりのミニスカートから、ほっそりとした太ももがのぞいている。やっぱ、スタイルはいいんだよな。顔も可愛いし、この横暴な性格さえ直ればもてるだろう。

「それで……かっちゃん、卒業したの！？」

横からもしつこい追求が。カヤの親父さんといい、こいつらといい……なんで今日はこんなに質問攻めされるんだ。

しかも、卒業、卒業って……中学生か！　他に言い方、いくらでもあるだろう。デリカシーってものをそろそろ覚えろよ。せっかく、見直したっつーのに。やっぱ、曽良はただの馬鹿だ。

「バイトあるから帰るぞ」

相手にしてらんねぇよ。てか、相手にするべきじゃない。俺は砺波を押しのけ、足早に出口へと進む。

「えー？　逃げるの！？」

砺波の不満いっぱいの声が背中に突き刺さる。だが、全く気にならない。俺はずかずか扉へと歩いていく。

「そうだ」と、忘れかけていた重大事実を、振り返りざま曽良に告

げる。「お前のスクーター、コフィンタワーに停めてあるから」
「はっ！？」

さっきまでのにやついた顔はどこへやら。曽良の顔は一気に凍りついた。
俺はその顔を見て、くすんでいた心が晴れ渡るのを感じた。すっきりした。
コフィンタワーで椎名に見つかり、カヤと共に連行されるように本間家に車で連れて行かれた俺は、曽良のスクーターを置いてきてしまっていた。バイトの時間も迫っていて、結局取りに行く暇がなかった。借りといて、鍵だけ帰してさようなら。あまりにも礼儀知らずだ。どう謝ろうかと思っていたが、こうなったらもうどうでもいい。いい仕返しだ。――まあ、少しおつりがきそうな復讐ではあるけど。

「そんじゃ」
「かっちゃん、ひどい！」

曽良の悲鳴にも似た声を残し、俺は親父の――いや、曽良のオフィスを後にした。

砺波のプライド

それは、教会の扉を開けたときだった。ギイッと重い音が教会に鳴り響き、光が差し込んでくる。いきなり飛び込んできた光に和幸が目を細めると、後ろから慌(あわただ)しいハイヒールの音と甲高い声が聞こえてきた。

「ちょっと、和幸！」

ハッとして振り返ると、砺波がウェーブのかかった黒髪を揺らして駆けてくる所だった。さっきまで自分をおちょくっていた少女と同一人物とは思えない、真剣な表情だ。

「どうした、砺波？」と、和幸は振り返る。

「金曜のオークションのこと」

砺波は、和幸の前で立ち止まると、姿勢を正す。

「曽良は言わないだろうから、私から言っとこうと思って」

「何を？」

「今ね、『おつかい』は全部休止中なの。ほら、パパが入院中だからさ」

和幸は、ハッと目を丸くした。そういえば……と、藤本の言葉を思い出す。

――入院している間は、『おつかい』は中断しなくてはならないな。

確かに、そう言っていた。うっかりしていたな、と頭をかく。
砺波はそれを気にする様子もなく、腰に手をあてがい困ったような表情を浮かべて話し出す。

「だから、ここ最近は誰も『迎え』には行ってないのよ。三神さんも今バケーション中で、情報も全くはいってこない状況だし。実質、カインノイエはなーんにもしてないわ」

三神がバケーション中。それは初耳だ。和幸は、顔をしかめた。
三神さんといえば……と、密かに尊敬していた裏の『青年実業家』を思い浮かべる。まだ二十代とは思えないほどの世渡り上手。依頼をそつなくこなす敏腕情報屋。いつも平然とした表情で忙しさを微塵も感じさせない。そんな彼が休暇をとるとは意外だった。何かあったのだろうか、と心配にさえなる。

「そう、だったのか」と、和幸ははっきりしない口調でつぶやいた。そういえば、カインを辞めた今、彼と会うこともう無いのかも知れない。そう思うと、感慨深くなる。

「あんたとは、長い付き合いだし、分かるのよ」
「ん？」
「あいつは徹底して、あんたをコッチから引き離すつもりみたいだけど……そんなの、どうせ逆効果でしょ」

砺波は顔をそむけると自分の髪をいじりだした。口をとがらせ、いじけているようにすら見える表情だ。いつもと少し雰囲気の違う砺波に、和幸は目をぱちくりさせる。なぜかむっとしている表情も、いきなり小さくなった声も、かわいらしくさえ感じる。これが初対面だったら、素直に可愛いと思えたのかもしれないが、砺波の素を知っている和幸には、不気味なだけだ。

「砺波？」と機嫌をうかがうかのように、恐る恐る声をかける。「何の話だ？」

「何も言わなかったら」唐突にいつもの砺波に戻り、和幸に怒鳴るように言い放った。「あんた余計に気にするでしょ！　危なっかしいのよ、脳みそのない猪みたいで」

「！」

なんで、今度は怒り出したんだ。和幸は思わず後ずさり、顔を引きつらせる。砺波の激しい感情の起伏はいつものことだが……いつまでたっても慣れない。

「だから、勘違いしないでよ」と砺波は、頬を赤らめて言いづらそうにつぶやく。「私だって、気持ちは曽良と同じ。あんたは今、部外者なんだから。余計なことはしないで。迷惑だからさ」

「……砺波」

あぁ、そういうことか。和幸はやっと安心して、肩の力を抜いた。実に、砺波らしい言い方だ。和幸は、懐かしむような表情で目を細めた。どうやら自分は、自己チュー女にまで心配をかけているようだ。

曽良は情報を隠し、砺波は事情を伝えた上で釘を刺しにきた。二人とも各々のやり方で自分を気遣ってくれている。はっきりとした言葉がなくとも、彼らの曲（くせ）のある優しさは十分伝わってくる。

「……分かってるよ」

和幸は微笑して、そうつぶやいた。

カインを辞めたことに対して、罪悪感があった。どうやら彼らは、それにしっかり気づいていたようだ。だからこそ、わざときつい言

い方をしているんだろう。役立たずだ、とか、迷惑だ、とか――気にするな、と言われるよりずっといい。優しい言葉は、今の自分には余計につらい。そんな幼稚な心情を分かってくれているんだ。和幸は、改めて自分は恵まれていた、と実感する。

「……」

そんな感傷にひたっている和幸の前で、砺波は何かを言いたそうに口をもごもごとさせていた。

ずっと言いたかったことがあった。でも、どうも自分の性格がそれを許さない。それを自覚するのも負けるような気分で、気に食わない。だから、ずっと気づかないフリをしてきた。いや、本当に気づいていなかった。――ある女の子が、自分の服を着て『実家』に現れるまでは。

商業用のクローンではない砺波は、普通の少女だ。身体能力もそこらの女子高生と変わりはしない。そんな彼女は、和幸や曽良たちと違って、下手をすれば足手まといになりかねない。だから、どうしても強くならなきゃいけなかった。フリでもいい。自分を強く見せなきゃいけないと思っていた。何より、そうやって自分を騙したかった。自分は強いから大丈夫だ、と言い聞かせて乗り切ってきた。だから、必死に弱みを隠してきた。――この幼馴染以外には。

気づくと、何かある度に彼の部屋に泊まりに行っていた。気軽に駆け込める避難所だった。砺波は、最も記憶に新しい事件を思い浮かべる。『おつかい』の最中、曽良を誤って撃ってしまったときのこと。藤本にこっぴどく叱られ、夜通し和幸の部屋で泣きじゃくったものだ。

自分が涙を見せるのは、後にも先にも、こいつだけだ。砺波は、いつの間にか自分の背を追い越していた幼馴染を見上げる。

「私を……」と、砺波はやっとのことでつぶやく。自分でも嫌になるほどか細い声だ。すると和幸は、やはり聞きにくかったのだろう、耳の遠い老人のようなとぼけた顔で、「え、なに？」と言ってきた。

まったくこいつは。砺波は出鼻を挫かれ、苛立ったため息をついた。――やっぱ、私には向いてない。心の中でそうつぶやくと、気を取り直し、いつもの調子で言い放つ。

「私ら家族を捨てるんだから……ちゃんと、幸せになってよね」

「え」

出てきたのは、砺波自身も驚くほど、素直な言葉だった。和幸は唖然として、まるで体調でも心配しているかのような目で見てくる。砺波は居心地が悪くなり、目をそらすと「カヤ、いい子だしさ」と、ごまかすようにつぶやいた。

すると和幸は、照れくさそうに微笑んでうなずく。

「それも、分かってる」

「……」

自分が褒められたかのような自慢げな顔だ。砺波はその鼻をへし折りたくなった。それを防ぐように腕を組むと、それで？　と平然を装い、和幸をにらむ。

「その自慢の彼女から、靴は受け取ったわけ？」

「は？　靴？」

「とぼけないでよ。めんどうくさいわね。

クリスマスパーティの靴よ。夕べ、渡されたでしょ？」

それはつい昨日のこと。砺波は、初デート前のカヤに靴を手渡し

ていた。実行委員会が指定した、シンデレラの靴だ。もちろん、ガラスの靴とはいかなくて、シンプルな銀色のパンプスに落ち着いたのだが。

だが、和幸は全くピンと来ていないようで、眉をひそめて首をかしげた。

「……いや。何の話だ？」

＊　＊　＊

成田空港の到着ロビーに、バックパックを背負う一人の少年が呆然と突っ立っていた。窓ガラスに囲まれた長い廊下に、ガラガラとスーツケースのタイヤの音が鳴り響き、荷物の到着を知らせるアナウンスが何度も何度も繰り返される。新天地に胸を躍らせる人々、終わりを告げた休暇を悲しむ人々、久方ぶりの再会に声をあげる人々。そんな中で、彼はたった一人、途方にくれていた。

「トーキョー……どこだろう」

そうつぶやいて、カールがかった栗色の髪をくしゃくしゃとかく。

――下調べはしなかったの？　ユリィ。

どこか、呆れたような声がユリィの頭に響く。それは紛れもなく、彼の守護天使の声だ。

「うん。忘れてた」

うっかり、と言う言葉ではすまされないだろう。天使（エミサリエス）――ラピスラズリは、ため息をついた。

――エミサリエス同士は、気配で互いの存在を確認できます。ただ、ある程度、近い距離でないと。

それは知っている。ユリィは心の中でそう答えた。エミサリエスがお互いの気配を感知できることは、話に聞いていた。だからこそ、彼はわざわざ博物館に侵入して指輪を盗み出したのだ。タールを見つけるには、天使の助けが必要だ、と確信したから。

「まあ、『収穫の日』まで時間はあるし」

――ありませんよ。のんきなことを言っている場合では……

「でも、お金がなければ、生きていけないもの」

その言葉に、ラピスラズリは絶句した。まさか……とは思うが、詳細を聞くのが恐ろしい。永遠とも思える長い経験の中で、こんなに自分を心配させる主人は初めてだ。

――あの、ユリィ。お金、もう残っていないのですか。

すると、ユリィは顔色一つ変えずにうなずく。

「飛行機代で全部なくなったから。まずは、どこかでバイトを探そう」

――計画性がなさすぎますよ、ユリィ！

当然、ニホンについてからの滞在費もろもろを計算にいれて、金を稼いでいたのかと思っていた。それくらいの常識的な考えはでき

るだろう、と高を括っていた。どうやら、買いかぶりすぎていたようだ。ラピスラズリは、嗚呼、と嘆いた。

――そう簡単に、また仕事が見つかるとは思えませんよ。それも異国の地で。

「大丈夫。なぜかオレの言うことは皆、聞いてくれるから」

それは……と、ラピスラズリは言葉をつまらせる。もちろん、ユリィもそのトリックは知っているのだろう。彼に眠る神の遺伝子が持つ、偉大なる力。人間（ルル）の本能――創造主への忠誠心に訴えかける力。神の一族はそれを使って人間（ルル）の意志に干渉することができる。あまりに強い意志は変えることはできない、といわれているが、ささいなことならその力で人間（ルル）の心を操ることができる。バイトで雇ってくれ……そんな命令なら、いとも簡単にできてしまうだろう。とはいえ、そんな尊い力を小遣い稼ぎに平気で使ってしまうのだから……

――なんて、恐れ多い……もう好きになさい、ユリィ。

「うん、好きにする」

言って、ユリィはのろのろと歩き出した。

異端児……ラピスラズリは、ふとそんな言葉を思い浮かべていた。新たな主にふさわしい言葉に思える。地球（エリドー）に存在する二つの神の一族。ユリィ・チェイスは、その一つ、ニヌルタ一族の子。――それなのに、どこか……人間じみている。ラピスラズリはそんな印象を受けていた。呆れることも多いが、興味深い子。これも神の遺伝子のせいかもしれないが、理屈では説明できないカリスマ性を彼から確かに感じていた。今から何かをしでかそうという革命家の、静か

なる炎。ユリィのぼうっとした性格は、それを隠すためのオブラートにすぎないのかもしれない。

いえ、とラピスラズリは呆れた。さすがにそれは、天使の贔屓(ひいき)目か。

「早く、サムライに会いたいなぁ」

ぼそりとユリィは冗談とも本心ともつかぬ言葉をつぶやいた。

バナナ

俺は意外な人物に出くわし、ぎょっとした。思わず、部屋の鍵を床に落とす。一瞬、自分がどこに居るのか分からなくなった。俺は、マンションに帰ってきて、ドアの鍵を開けて……自分の部屋にはいってきた――はずなんだ。

とりあえず、あたりを見回す。間違ってない。俺の部屋だ。

てことは、つまり目の前に居るこいつは、空き巣だ。勝手に人の部屋に入り込んで、俺を出迎えたんだから。

「お帰りなさい、和幸さん」

空き巣は、天使のような笑顔で俺に手を挙げた。ソファに寝転がって、信じられないほどくつろいでいる。

「……なんでここにいるんだよ？」

あまりのことに気の利いた台詞もでてこない。硬直したまま、ひきつり笑顔で俺はそう尋ねた。

「いやぁ、外で待ってるのも何だったから」と、空き巣は落ち着いた様子で体を起こす。「勝手に入っちゃった」

「何が……入っちゃった、だ！」

俺はやっといつもの調子を取り戻し、空き巣に怒鳴りつけた。ズカズカ部屋の中にはいると、ソファの前に立ちはだかる。

「人間の世界にはな、不法侵入っていう犯罪があるんだよ、リスト」

もちろん、皮肉だ。いくら神の子といえど、人間世界に暮らしているんだ。知らないわけがない。
リストはゆっくりとソファに座りなおし、余裕の表情。
「知ってる、知ってる。夕べ、和幸さんが『災いの人形』の部屋に入り込んだ、アレでしょ」
「ああ、それ……」
ん？　思わず言葉をきった。そうだ、確かに俺が夕べしたことこそ、不法侵入のいい例だ。だが……
「なんで知ってるんだよ！？」
俺は、さっきよりも取り乱して叫んでいた。カヤの部屋に忍び込んだことは、誰にも話していない。カヤがこいつに話すわけはないし。
ってことは……と、嫌な予感がおしよせる。顔を赤くしたらいいのか、青くしたらいいのか、もはや分からない。こいつが、夕べの出来事を知っている理由。考えられることといえば……
「お前、まさか……」
酸欠したかのように、頭がふらついた。そんな俺をまるで楽しんでいるかのように、リストはさわやかな笑みを浮かべ、「そんなことはおいといて」と一蹴した。
「壁に押し付けるなんて、意外と強引なんですね」
「ケット！」
決定打の一言を聞くなり、俺はその名を叫んだ。

冗談じゃない。プライバシーの侵害もいいとこだ。何考えてるんだよ？

「ケット、でてこい！」

確か、名前を呼べば出てくるはずなんだ。俺に宿っているなら……

だが、聞こえてきたのはケットのあどけない声ではなく、リストの笑い声。

「嫌だなぁ。和幸さんが呼んだところで出てきませんよ。ケットはオレのエミサリエスなんですから」

いや、それは知っている。ケットはリストの天使だ。だからこそ、こいつは自由にケットを他人に貸すことができる。てっきり、俺にこっそりケットを宿していたのかと思った。じゃないと、夕べのことをこいつが知り得るはずはない。だが、リストのこの言い方……違うのか？

俺は動きを止め、ぽかんとした。

「俺に……ケットを宿していたんじゃないのか」

「オレ、信用ないですねぇ」と、リストはため息混じりに言う。

悲しそうな表情だ。思わず、謝りそうになった。だが、ケットなしで一体どうやって夕べのことを知ったんだ？

困惑する俺をよそに、リストはまるで被害者のような口ぶりで続ける。

「首にキスを始めた段階で、ケットはちゃんと返してもらいましたよ」

「……」

一瞬、外国語を聞いているような気分に襲われた。全く、意味が分からない。明らかにおかしいことを言っている。俺は眉をひそめ、リストをじっとにらみつける。

「イエスかノーで答えろ。俺に勝手に天使を……」

「お貸ししてましたよ。五日前から」

「は……」

＊　＊　＊

和幸さんは口をあんぐりと開け、呆然と突っ立っている。相変わらず、面白い人だな。

「それで」とオレはニコリと微笑み、話を元に戻す。「初体験、緊張しました？」

「ふざけるな！」

一気に顔を赤くし、すごい剣幕で怒鳴ってきた。どうやら、やっと事情を受け止められたようだ。今にも殴りかかってきそうな迫力だ。

「さっきの話だがな。ああ、俺はお前を信用してない。今後一切、信用しない」

「分かりました。それで、夕べは……」

「ったく、なんなんだよ、今朝は！　もう質問はたくさんだ！　放っといてくれ」

和幸さんは両手で頭を抱えて、ヒステリックな女みたいな声をあげている。かわいそうに、きっとうまくいかなかったんだろう。つ

い、同情　の眼差しで見つめてしまった。

「初めてなら、仕方ないですよ」と慰めると、和幸さんは今にもキレそうな表情で俺をにらみつける。

「そういう話をしてるんじゃないんだよ」

こんな低い声も出せるのか、と感心した。

和幸さんは、くそ、と悪態づいて、頭をかく。それから深いため息をつくと、今度は落ち着いた様子で俺に問いかける。

「てか、どうやって中にはいったんだ！？」

あ、話題を変えた。よっぽどうまくいかなったんだな。初めて、を否定する様子もないし。カマかけてるの、分かってないのか。ま、これ以上傷口に塩を塗るのも悪い。そろそろ、からかうのはやめるか。怒らせるために来たんじゃないんだ。

「それはほら、天使がついてますから」オレは肩をすくめてそういって、「ね、ケット」と天使の名を呼んだ。

すると、オレの隣に光の粒子がどこからともなく現れる。それは蛍のように飛び交って、やがて人の形へと収束していく。光り輝くブロンドの長髪、宝石のような瞳。ふっくらとした頬に、小さな鼻。古代ギリシャを思わせる、純白の変わった服装。まるで人形のような、完璧な愛らしさ。しょんべん小僧みたいにかわいらしい、と表現したら、ナンシェは顔をしかめたっけ。

「ごめんね、かずゆき！」と、姿を現したとたん、ケットはそう叫んだ。とことこ、と和幸さんのほうへ駆け寄ると、今にも泣きそうな表情で彼を見上げる。

見た目は、本当にただの子供なんだ。――服装は別として。そのせいだろう、和幸さんはどうもケットには強く言えない節がある。その証拠に、今も対応に困って顔をひきつらせている。

「ケットたち、エミサリエスには空間的隔たりはないんだ。リスト次第で、どこにでも姿を現せる。だから、ドアも壁も関係なくて……それで、勝手に部屋に入り込んで、ケットが中から鍵を開けて……」

ん？　オレも和幸さんも顔をしかめた。おそらく、オレたちは同じことを考えているだろう。ケットは姿を消していても、周りで起きている状況は把握できる。つまり、これまでのオレと和幸さんの会話もオレを通して聞いていたはずなんだ。だから当然、あっちの件で謝ったのかと思った。

「ケット」オレは苦笑して問いかける。「謝るの、そっち？」

「え？　あ、そっか！」

オレに言われてケットはハッとし、和幸さんをその透き通った穢れのない瞳で見上げる。

「いろんなこと覗いてごめんね」

「……」

和幸さんは絶句した。耳まで赤くして、呆れたような表情をうかべている。しばらくケットを見つめてから、もういい、と言って肩を落とした。

やっぱ、可愛らしさは得だよな。オレは、このときつくづくそれを痛感した。

＊　＊　＊

「で？　何の用なんだ、リスト？」

いちいち、リストにまともにかまっていたら身がもたない。俺は話を先に進めることにした。

そりゃ、頭にきた。リストにははっきり言っといたんだからな。俺は二度とケットを借りたくない、と。いつも心を第三者に読まれているのは落ち着かないし気味が悪い。それも、ケットはリストの僕。つまり、ケットを通して全てがリストに筒抜けになるわけだ。なにより、それが一番気に食わない。だから……ケットを俺に宿らせるな。そう強く言ったはずなんだ。なのに、俺の行動も心の声も全部知られていた。それも、五日間。いや、正直、期間はどうでもいい。なにより、夕べだ。夕べの一連の出来事を観察されていた、というのがものすごく気に食わない。カヤとやっと二人きりになれた、と思っていたのに……どうやら、違ったようだな。

ま、もういい。嘆いても仕方がない。とりあえず、バイトに遅刻したらまずい。着替えないと。

俺はリストに背を向け、収納ケースの引き出しを開けた。リストの答えが背後から聞こえてきたのは、ちょうどそのときだった。

「トーキョーに有名なバナナがあるって聞いたんですけど、どこに行けば手に入ります？」

「は？」

思わず、Tシャツを手に振り返った。バナナ？

リストはふざけている様子はなく、真剣な表情だ。

「お土産で買おうかと思ってるんですけど、どのバナナのことなのか……エクアドル産はよく見かけるんですけど」

「……」

まさか、そんな話をするためにわざわざ部屋に忍び込んだのか？

俺は呆れて首をふり、またリストに背を向け、上着を脱いだ。

「一生探してろ」

そう冷たく言って、半そでのTシャツに、右腕、左腕の順で袖を通す。最後に頭を通すと、「お土産って……」と鼻で笑ってつぶやいた。もっと深刻な話だと思っていたのに。

「のんきだな、お前は」

俺はリストに振り返るなり、責めるような口調でそう言った。

「あと一ヶ月と二週間で、世界とカヤの運命が決まる。そんなときに、よく土産なんて……」

大体、こいつはカヤを殺す使命を持っている。そんな奴が、なんでこんなにのんびりしてられるんだよ。前は違ったかもしれないが、今は劇を一緒にやってる友達だろ。仲良く話しているところも、何度も見ている。人間同士として、もう関係を築いているんだろ。よくそれで……平気な顔をしてられるよな。彼女を殺すかもしれない。不安になったりしないのか。罪悪感はないのか。

俺がじっと見つめる先で、リストは大人びた表情を浮かべていた。

「そんなときだから、ですよ」

さびしくも聞こえる声でそういって、リストはうつむいた。

「『裁き』を止めて家に帰って……ナンシェにトーキョー土産を渡す。それを思い浮かべるだけで、オレは耐えられるから。そのためなら、罪を背負える」

そして、リストは黙り込んだ。ケットが心配そうにリストに駆け寄り、顔を覗き込んでいる。

ナンシェ――写真の少女が頭に浮かんだ。リストの部屋に一枚だけ飾ってあった写真だ。ブロンドのセミロングの髪。リストと同じサファイアのような碧眼。写真だというのに、見ているだけで癒される眩しい笑顔。カヤとはまた違った魅力があった。カヤが魅惑的な月だとすれば、彼女は無邪気な太陽だ。どんな声をしているだろうか、とか……つい考えてしまう。リストとよく似てはいるが、声は全く違うはずだ。性別が違うんだから。正直、会ってみたい、と思ってる自分がいる。あきれるが、俺も男だな。

そういえば……リストは、彼女こそ、自分が『創られた』理由だ、と言っていた。珍しく曇った表情を浮かべているリストを見ながら、俺は眉をひそめる。彼女との再会を夢見て、支えにしている。そういう意味だよな、さっきの。転校して間もなく、あいつの周りにはいろんな女子生徒の名前が飛び交っていた。一人の女を一途に想うような奴だとは思えないが。まあ、見た目からして、恋人、てわけではないだろう。一体、どういう関係なのかは分からないが、それでも、リストにとって特別な子だってことは確かだ。

それにしても……耐えられるって、使命に、てことだろうか？

それに、罪――以前、聞いたことがあったな。リストが背負う罪。それは、カヤを殺す罪だ。

もしかして、と、俺はふと思った。こいつは表に出さないだけで、本当は使命を嫌がっているんじゃないだろうか。そういえば、こいつは自分のこと、あまり話さないよな。いつも人のことからかうばかりで、本音なのか冗談なのか分からないことばかり口にする。

――藤本先輩とは特に仲良くなりたいな、て思ってます。似たもの同士みたいなんで　。

いつかの、リストの言葉が頭に蘇った。

ケットの話によれば、こいつの正体を知っていたのは、こいつを創った男と母親を演じていた女だけだという。肝心のナンシェという少女も、知らなかったらしいし。リストは、一族の中でクローンであることを隠して生きなきゃいけなかった。――俺が、カインであることを隠して表の世界で暮らしていたように。神の一族がクローンを創る。とんだスキャンダルだ。そりゃ、隠すはずだよ。

俺と同じ、『創られた』存在だとしても……事情が全然違う。俺はきっと、こいつほどつらくなかったと思うんだ。そりゃ、比べるようなことじゃないだろうけど。リストは、俺以上に、自分という存在に苦しんできたはずだ。神に一番近い存在でありながら、その命は禁忌を犯して『創られた』。神への冒涜、裏切り、そのものだ。それでも、その苦しみを誰にも打ち明けられなかった。打ち明けてはいけなかった。――それが、俺との大きな違いなんだ。俺は、カインだった。表では嘘だらけの俺にも、ちゃんと『家』があった。『家』に帰れば、嘘をつかなくてよかった。『カインの家』には理解者がいて、何でも話せる場所があったからだ。

ぽつりと疑問が浮かんだ。リストは今まで、天使以外に心の内を明かしたことがあるんだろうか。

「バナナの話は、冗談です」リストはやっと口を開いたと思ったら、真面目な表情のまま、俺に顔を向けてそう切り出した。「本当は……」

冗談、か。それも、本当なのか怪しいな。

「和幸さん、聞いてます！？」

「え？」

つい、考えるのに夢中でぼうっとしてた。俺は、悪い、と反射的に謝っていた。

リストは、仕方がないな、と言いたげな苦笑を浮かべて、肩をすくめた。

「今からする話……聞きたくなかったら、そう言ってくださいね」

珍しいな。いつも、否応なく話を押し付けてくるのに。そもそも、俺がこの神のゴタゴタに巻き込まれたのも、こいつが「ついでに」と……まあ、いいんだけどな。巻き込まれたこと、後悔はしていない。

「どんな話なんだ？」と、リストの真似して肩をすくめる。ケットが心配そうに俺を見つめているのが、視界の端っこで分かった。きっと……『災いの人形』の話なんだろう。

「彼女さんの、元彼の話です」

「へ」

間抜けな声がでた。彼女さんって、カヤ？　こいつが、カヤのことを『人形』以外の呼び方で呼ぶなんて珍しいな。しかも……元彼？

「カヤの、元彼？」

声が不自然に裏返っている。いつかは聞くことになるかも、とは思ってはいたが、リストの口から聞くとは微塵も思っていなかった。

「お前……知ってるのか？」

すると、意外なところから返事が返ってくる。

「リストは知らない。でも、ケットは会ったことがあるよ」

「は！？　何言ってんだよ？」

俺は、鼻で笑ってケットに振り返る。ケットがなんで、カヤの元彼に会えるんだよ？　俺だって、名前すら聞いたことがないってのに。

だが、幼い少年の表情はとても深刻で、冗談を言っているとは思えなかった。そもそも、ケットが冗談を言えるほどのユーモアを持ち合わせているとは思えない。

「おい……何の話なんだよ、一体？」

異様な空気に、俺の声は自然と震えた。緊張している。これが、彼女の元彼の話を聞く雰囲気か？

すると、リストがゆっくりと口を開き、落ち着いた声でつぶやいた。

「彼の名は、シュ・シン。何千年も昔の、彼女の元彼です」

「……？」

元カレの名を聞いても、嫉妬すらわかなかった。ただ、意味が分からず、俺は硬直した。

最初のパンドラ（前書き）

実在した国名、儀式、人名などがでてきますが、実際のものとは一切何ら関係ありません。
それぞれモデルにしていますが、史実とは大きく異なっております。
ご了承ください。

最初のパンドラ

「それは……やっと、人間(ルル)が『文明』を築き始めたころ。地球(エリドー)に、ウルという国がありました。当時、数少ない文明国家の中で、二つの大河にはさまれたその国は、栄華を極めていた」

リストはカーペットを見つめ、そう語りだした。

いきなり数千年前の話を始められ、和幸は戸惑っていた。それも、カヤの昔の恋人にまつわる話だという。だが、なぜ大昔にカヤの元彼がいるというのだ。

すっかり、バイトに遅刻する時間になっていたが、和幸はそれすら気づけずにいた。

「シュ・シンはその国の若き王だった」

「！」

シュ・シン。その妙な名前こそ、カヤの元彼の名だ。それが太古の王？　意識が遠のくような気がした。相槌すらいれることができず、和幸はただリストを見つめていた。いぶかしげな表情で。

「ウルにはある伝統がありました。ヒエロス・ガモスと呼ばれる聖なる結婚です」

「ヒエロス・ガモス」

和幸は、ぴくりと眉を動かした。その単語には聞き覚えがあった。確か……と、おぼろげな記憶をたぐりよせる。頭に浮かんだのは、リストの部屋。そうだ、とハッとする。カヤが『災いの人形』だ、と聞かされた夜だ。そのときにも、ヒエロス・ガモスという聞き慣れない響きの単語を聞いた気がする。

「人間の男と女神との結婚です。前も、ちらっと話しましたよね」
「ああ……なんとなく、覚えてるよ」
「オレの祖先……あ、いや、オレのオリジナルの祖先か。ややこしいな」リストは、苦笑してため息をつく。「とにかく、マルドゥク一族の祖も、ヒエロス・ガモスによって生まれた、人間と神のハーフです」

そういわれても、なんと答えればいいのか。和幸は、「で？」と不機嫌そうにつぶやいた。

「ただ、ウルで行われていた聖婚（ヒエロス・ガモス）はちょっと違う。もっとこう……儀式的なものでした。神々への信仰心を失わないための、象徴にすぎなかったんです」
「どういうことだ、それ？」

すると、それまで黙っていたケットが遠慮がちに口を開く。

「ウルが栄えていた時代には、すでに神々は地球（エリドー）から去っていたんだ。だから、女神は地球（エリドー）にはいなかった」

そこまで言って、ケットは眉をひそめた。

「いや、いるにはいるんだけど……あの御方は……」

和幸にかすかに聞こえるかどうか、の声でケットはもごもごとぼやきだす。リストはわざとらしく咳払いをすると、涼しげな微笑を浮かべてさりげなくケットの言葉を訂正する。

「地球（エリドー）には聖婚（ヒエロス・ガモス）にふさわしい女神は、一人も残っていなかったんで

す」

それじゃ、女神と結婚なんてできないじゃないか。そう和幸が尋ねるより先に、リストがつけたす。

「そこで、女神の代理を立てることを考え付いたんです。女神の化身たる巫女。彼女たちが、女神の代わりに王と結婚した」

「無理やりだな」

「人と神との絆なんて、そんなものでしょう。それで人が満足するなら、でたらめでも子供だましでも、なんでもいいんですよ」

あきれたようにつぶやいた和幸に、リストは肩をすくめてそう返した。

聖婚（ヒエロス・ガモス）について、長々と話す気はさらさら無いようだ。和幸に基礎知識を与えて、リストはさっさと本題にうつる。

「ウルの王は、聖婚（ヒエロス・ガモス）で、女神の巫女を妃に迎える。それがしきたり。シュ・シンもそうやって妻を娶（めと）った」

「妻……」

さすがにそれを聞き逃すことはできない。和幸は居心地悪そうに顔をしかめた。シュ・シンが、カヤの元彼――数千年前の男に使うには不適切な気もするが――だというなら、シュ・シンの妻というのは……

「カヤか？」と和幸は力なく尋ねた。疑問はたくさんあるが、とりあえず、話の流れからしてそれくらいは予想がつく。リストは真剣な表情で和幸を見つめ、小さくうなずいた。

「そのときの彼女の名は、クバティム」

「くばてぃむ？」

耳になじまない名前だ。まるで他人の名前。数千年前、異なる名前。まさか……と、和幸は視線を落とす。生まれ変わり、とかいう話じゃないだろうな。カヤの前世か？　だが、『災いの人形』は人ではない、という。なら、転生なんて可能なのか。もしくは、前世は人間だったとかいうオチか？　なんにしても、と和幸の気持ちは沈んだ。また、カヤは人ではない、と思い知らされることになりそうだ。

ひそかにため息をつく和幸の耳に、「クバティムは」というリストの声がはいってきた。

「彼女は、最初のパンドラです」

「！」

パンドラ――和幸の脳裏に、何かがちらついた。ピリッと電流が走ったような感覚がして、そしてすぐにそれは消えた。聞き覚えがある気がする。残ったのは、そんなぼんやりとした感覚だけだった。さっき――『ヒエロス・ガモス』のときと違って、どこで、なぜ、その単語を聞いたのか、少しも思い出せない。気のせいかもしれない、そんな気さえした。

とりあえず、和幸は話をすすめることにし、「パンドラ？」とリストに尋ねた。すると、待ってました、といわんばかりにリストはすばやく答えを返す。

「『災いの人形』の、本来の名前です」

「本来の名前？」

「ええ。神が彼女たちに与えた名前ですよ。オレたちは、あまりそっちの名では呼ばないけど」

彼女たち。和幸は違和感を覚えた。カヤが『災いの人形』。自分が把握していたのはそれだけだ。なのに、リストの話だと、まるで他にもいるかのようだ。

疑問が積もり積もって、爆発しそうだ。もう我慢できない。和幸は、眉間にしわをよせ、リストにまくしたてるように質問を投げかける。

「なあ、さっきからしっくりこない。最初のパンドラ、とか、彼女たち、とか……一体、どういうことだ？　カヤが『災いの人形』なんだろ」

「そうだよ」リストではなくケットが、珍しく低い声で答える。「彼女は、十三番目のパンドラだ」

「！」

十三番目？　和幸は言葉を失った。つまり、どういうことだ？

「カヤの他に、十二人も……」

そのときだった。全身に鳥肌がたつのを感じて、和幸は言葉をきった。――既視感（デジャヴ）。それも、気味の悪いほどの強いもの。和幸はごくりと生唾を飲み込んだ。ただのデジャヴじゃない。そうはっきりと確信する。自分はどこかで同じ台詞を言ったことがある。それも、つい最近。すると、混乱する和幸の頭に、どこからともなく女の声がした。

――これで、十三人目。

ハッとして目を見開く。その声は、紛れも無くカヤのもの。だが……辺りを見回しても、カヤの姿はない。リストとケットも、いきなり挙動不審になった自分を変な目でみているだけ。つまり、さっ

きの声は自分にしか聞こえていない。幻聴ではない。それだけは、なぜかはっきり分かった。記憶、か？　でも、いつの？　和幸は、頭の中にぽっかり穴があいているような気がした。大事なことを忘れている。その感覚は夕べからあったが、これほど強く感じたのは初めてだ。

「かずゆき、大丈夫？　気分悪い？」

心配そうな幼い声がして、和幸は反射的にハッと顔をあげた。自分がうつむいていたことさえ、自覚していなかった。

「やっぱり、この話はやめときましょうか」

そう言って、今にも立ち上がろうとするリストに、和幸は「いや」と声をあげた。

「続けてくれ。知りたいんだ。パンドラのこと」

急に、はっきりとした口調でそう言った和幸に、リストも天使も目を丸くしてきょとんとしてしまった。さっきまでさえない表情で話を聞いていた彼とは別人のようだ。

和幸の頭からはバイトのことはすっかり消え去り、その代わり、カヤの声で囁かれる意味深な言葉が浮かんできていた。

――他の十二人のパンドラ達は……皆、憎しみに蝕まれたまま、土へと還った　。

なんなんだ？　何の話をしてるんだ、カヤ？　和幸は妙な胸騒ぎを覚え、焦りを感じた。明らかに、自分は何かを忘れている。

和幸はソファに座るリストと向かい合うかたちで、床に乱暴に腰

を下ろした。

「クバティムのこと、話してくれ」

最初のパンドラ（後書き）

これから、退屈な話が続くかもしれません。
苦情、ご指摘など、ありましたら、もう遠慮なくどうぞ。

太古の元彼

驚いた。いきなり、和幸さんは乗り気になったんだから。腰をすえて聞こう、てか？　話しやすくて助かるけど、不気味だ。なんで急に？

「クバティムは、物静かで優しくて温和で……凛々しくも美しい人だった」

隣で、ケットが懐かしむようにそうつぶやいた。和幸さんは、え、と目を丸くしてケットを見つめる。

「会ったこと……あるのか？　何千年も前なんだろ？」

「そりゃそうですよ」と、オレはケットの代わりに答える。「ケットは『聖域の剣』に宿る天使（エミサリエス）。神々が地球（エリドー）を去ってからずっと、マルドゥクの王から王へと引き継がれてきたんです」

褒めているわけではないのだが、ケットは嬉しそうに、えへへ、と頭をかいた。

「そうか……本当に天使なんだな」

ぽつりと和幸さんはそうつぶやいた。ケットが天使だということを信じてなかったわけではないだろう。改めてそう実感したんだな。

「クバティムとシュ・シンは、とても仲が良かったんだよ。シュ・シンは無愛想でこわい人だったけど、クバティムにだけは笑顔を見せていた」

おいおい、ケット。元彼の話をするときは注意しないと。といっても……と、オレはちらりと和幸さんに目をやる。予想通り、嫌な顔はしていない。和幸さんは、クバティムと神崎先輩（今は本間先輩か）が同一人物だ、といまいち理解できていないんだろう。まだ、説明してないしな。

とりあえず、これ以上ケットに自由に話させるのはよくないな。きゃっきゃ、きゃっきゃ、と思い出話を始めそうだ。どうせ行き着く先は、悲しい結末なのに。だったらせめて、さっさとその結末を話してしまおう。

「ただ」と、オレは和幸さんを真っ向から見つめて切り出す。「シュ・シンは、知ってしまいました。自分の妃が、国を……世界を滅ぼす人形だ、ということを。ある日、突然ね」

「ケットもその場にいたの。シュ・シンはひどくうろたえて、見ているこっちがつらかったよ」

ケットは悲しそうにうつむいてしまった。全てを覚えている、というのも考えものだな。忘却も、神が人に与えた尊い贈り物なのかもしれない。記憶が脆く儚く、そして曖昧だからこそ、人は生きていける。それも人間（ルル）の強さ。そんな気がした。

「その気持ち、たぶんよく分かるな」

和幸さんが、鼻で笑ってそうつぶやいた。オレはハッとして、目の前の人間（ルル）を見つめる。何かを思い出しているのだろう、視線を落としてじっと黙っている。

ああ、そうか、とその様子を見て気づいた。この人もまた、パンドラを愛する人間（ルル）。同じ経験をしたんだよな。というか、オレがさせてしまった。まあ、神崎カヤの正体を明かしたとき、この人が彼女をどう思っていたのかは分からないけど。特別な感情を抱いてい

たかは定かではない。それでも、今となっては……シュ・シンと同じ。世界を滅ぼす女を愛してしまったんだ。

嫉妬云々（うんぬん）という問題じゃないのかもしれない。彼女の抱える問題を元彼がどう対処したのか……和幸さんにとって気になるのは、そっちかもな。残念ながら、参考にはならない話なんだけど。

「その事実を知ってまもなく」とオレは、更なる昔話の口火を切る。「『収穫の日』が来て……マルドゥクとニヌルタは『テマエの実』をめぐって決闘をしたんです。それが、しきたりですから」

そう、本来の『収穫』はそうやって行われるべきものなんだ。『災いの人形』の十七の誕生日、『パンドラの箱』を前に、マルドゥクの王とニヌルタの王が決闘し、勝者が『テマエの実』を手に入れる。シンプルなルールだったのに……アトラハシスのせいで、今回はそうはいかなくなってしまった。

「それで、どっちが勝ったんだ？」

緊張の面持ちで、和幸さんは聞いてきた。前まで、マルドゥクって？　ニヌルタって？　といちいち尋ねてきたのが嘘のようだ。すっかり巻き込んでしまったんだな。しみじみ思った。

「勝ったのは」と気を取り直し、オレはつぶやく。「ニヌルタでした」

「！」

思ったとおりの表情だ。期待が裏切られたかのような顔で、和幸さんは黙り込んだ。クバティムと神崎先輩の関連性を完璧には理解してないまでも、二人が同じ『災いの人形』であることは分かっている。それだけで、太古の昔に生きた女でも、感情移入してしまう

んだろう。この人は本当に……まっすぐな人だ。

「ち、違うんだよ！」

「え」

唐突に声を高らかにあげたのは、他でもないオレの守護天使だった。慌てた様子で、和幸さんに向かって首を横にぶんぶん振っている。

「ティティは、戦いとか……向いてない女の子で、無理して剣（つるぎ）を持っていたんだ。だから、ニヌルタに力負けしちゃって、でも、がんばったんだよ」

「ティティ？　誰？」と和幸さんは苦笑する。

やれやれ。もう少し、空気を読めるようになってくれなきゃな。見た目だけじゃなくて、中身も子供なんだから。オレはケットの頭に手をのせると、ため息混じりに和幸さんに答える。

「当時の、マルドゥクの王です。つまり、昔のケットの主（あるじ）。オレのオリジナルの先祖。ティティ・マルドゥク」

「ああ……そういうことか」

そういうことです。まったくもう、大昔に死んだ奴をこんなとこでかばっても仕方が無いだろうに。オレはため息混じりに苦笑した。

「ケットは一回休み」

そう言って、ぽんぽんとケットの頭を叩く。「ええ！？」という声だけ残して、ケットは光の粒子に分散して消え去った。

「それで」と、ケットの姿が消えるや否や、すぐさま和幸さんが話を促してきた。「ニヌルタが勝ったってことは、『テマエの実』は」
「はい。クバティムは、『テマエの実』を食べました」

オレの言葉を聞き、和幸さんは腹でも痛いかのような、苦い表情を浮かべた。参考にならない話で申し訳ない。オレは心の中でそうつぶやく。オレはこの人がすがっている希望を知っている。『テマエの実』を食べなければ、パンドラは人間（ルル）として生きられる。それだけを信じて和幸さんは『収穫の日』に備えている。なんて虚しい望みだ。同情してしまうよ。でも……それは他でもない、オレがこの人に与えた最悪な贈り物。――我ながら、オレは神の一族失格だと思う。

和幸さんは数学の難問でも解いているかのような怪訝な表情で口を開く。

「クバティムは『テマエの実』を食べた。でも、世界はこうして滅んでいない。ってことは、ティティって女――マルドゥクの先祖が、ちゃんと殺したんだな。あの剣で」

ちゃんと、ね。考えすぎかもしれないが、精一杯の嫌味に聞こえた。

でも、違うんですよ、和幸さん。もしそうだったら、オレはわざわざ話しに来ていない。クバティムが迎えた最期。それこそ、オレが彼に伝えたかったことだ。クバティムは、他のパンドラとは違う稀有な運命をたどった。だからこそ、オレたちの間ではよく知られているパンドラなんだ。彼女こそ、パンドラが『災いの人形』と呼ばれるようになった所以。パンドラの逃れられない哀しき終焉を象徴する人形。

オレは声を落としてある質問をする。

「ケットから聞いたんですが……夕べ、『人形』はひどく取り乱したそうですね」

いきなりなんだ、と和幸さんは目を丸くした。

「殺さないで。そう泣きながら訴えた、て」

すると、和幸さんは顔を曇らせた。頼むから、ここにきて「放っといてくれ」とか怒り出すのはやめてくれよ。その件(くだり)はもう終わらせたんだ。今はもうからかう気分じゃない。

そんなオレの心配を見事に裏切り、和幸さんは「ああ」と答えてくれた。部屋の入り口のほうを見つめ、夕べのことを思い出すかのように目を細めた。

「最初は、正反対のことを言ってた。自分が悪魔だったなら、俺に殺してほしい。そう言ってきたんだ。でも、急に泣き出して……」

そこで言葉を切ると、こちらに視線を戻す。

「何か、関係あるのか？」

「大有りです」

ケットからその話を聞かなければ、オレは和幸さんにクバティムの話をしようとは思わなかった。

心の古傷

夕べのことと、最初のパンドラの話と、何の関係があるんだ？　正直、カヤとクバティムとの関係性もいまいちよく分かっていない。リストは、まるでカヤがクバティムかのような言い方をしている。カヤが、違う名前で別の時代に存在していたかのような口ぶりだ。クバティムの夫をカヤの元彼だ、と言うし。全く意味が分からない。考え付くのは、生まれ変わり、という可能性だ。だが……『災いの人形』は人ではない、とこいつに散々言われてきた。人でないなら、生まれ変わるとは思えない。それに、カヤは十三番目の『災いの人形』なんだろ。クバティムもあわせて、過去に十二人のパンドラがいたということだ。まさか、それも全員カヤなのか？　十三回生まれ変わった、とでもいうのか？

分からないが、とりあえず今はおいておこう。こいつと会ってから、俺はそういう面でメリハリをつけられるようになった。開き直り、ともいうかな。

「一週間前になりますかね」とリストが切り出す。「『聖域の剣』をオレが貸したこと、覚えてますか？」

忘れるわけ無いだろ。正義のときの事件だ。俺は自分の右手を見つめた。この手で銃の引き金をひいて、カヤを撃った。思い出すだけで胸が苦しくなる。手が震える。俺はその震えをごまかすようにブラブラと右手をすばやく振ると、リストを見上げる。

「覚えてる。お前には本当に感謝してる」

あのとき、こいつから神の剣を借りていなければ……カヤは死んでいた。人間を救う、『聖域の剣』。信じがたいことだが、それで

体を貫くとどんな傷でも治るという。事実、あの剣はちゃんとカヤの傷を癒してくれた。ただ……助けるためとはいえ、カヤの体を剣で貫くというのは、いい気分じゃない。未だに、その感触は忘れられない。二度と、ごめんだ。

「感謝しないほうがいいです」リストはしばらく間をあけてから、ため息混じりにそう答えた。「夕べ、『人形』が取り乱した原因は、それなんですから」

「え？」

「たぶん、ですけど」

なんだって？　俺は思わず身を乗り出した。

「どういうことだ？」

「これもケットから聞いたんですが……『人形』は和幸さんに刺されたこと、覚えてるそうですね」

「ああ。でも、あいつはそれを夢だと思ってる」

「ただの夢――頭ではそう思えても、体や魂はそうはいかない。痛みを、しっかり覚えていたんでしょう」

「痛みって、あのときの？」

『聖域の剣』は、傷を癒すかわりに、その傷の七倍の痛みを代償として与える。俺も呪いを解いてもらったときに味わったが……あれは、ひどい。指先、つま先、全身に、一つ一つの神経に伝播する、身を引き裂かれるような痛み。呪い一つでアレなら、カヤが味わった痛みは……想像すらできない。

だが、リストは顔を曇らせて首を横に振った。

「何千年もの昔の、痛みです」

「……え？」

「クバティムを殺したのは、マルドゥクではなく、シュ・シン。彼女の愛した人間（ルル）です」
「！」
シュ・シン？　俺は息をのんだ。なんで？
「でも、『テマエの実』を食べた『災いの人形』を殺せるのは『聖域の剣』だけ。一体、どうやってシュ・シンが……」
いや、聞くまでも無い。ハッとして口ごもった。俺は答えを知っている。そして俺は……それを試している。
「剣を、マルドゥクから借りたのか」
「その通りです」
そうだ。マルドゥクが許可すれば、あの剣を他人が借りることができる。俺がリストから借りたように。シュ・シンも同じ事をしたのか。俺とは全く正反対の理由――恋人を殺すために。
「でも、なんでだ？　クバティムが『災いの人形』なら、それを殺すのはマルドゥクの使命。そうだろ？　なんで、シュ・シンが殺す必要が……」
「それが、クバティムの望みだったからです」
「！」
望み？　一体、どんな望みだよ、それ？
「『テマエの実』を食べる前……まだ人間だったころ、クバティムはシュ・シンに告げたそうです。国のために自分の命が邪魔になることがあれば、あなたの手で殺してほしい、と」

大きく、心臓が揺れた。聞き覚えがある、望みだ。そして……カヤらしい、と思ってしまった。

「だから、シュ・シンは実行したんです。『テマエの実』を食べ、国の脅威となった彼女を……自ら『聖域の剣』で貫いた。彼女の、最期の望みを叶えるために」

それを聞いたとき、俺の頭に浮かんだのはあの夜のこと。胸に風穴をあけたカヤの腹を、重く冷たい剣（つるぎ）でまっすぐに貫いたあのときの光景。

――殺さないで……　。

彼女の、夕べの苦しい声が頭に蘇る。すがるような、張り詰めたか弱い声。カヤのあんな顔は初めて見た。涙さえろくに見せない彼女が、号泣したんだ。ただごとじゃない、と思った。何事か、と思った。わけも分からず、夢中で俺は彼女を抱きしめていた。震える肩を放っとけなかった。今思えば、ちゃんと話を聞いてやればよかった。――いや、聞いても結局分からなかったのかもしれない。きっと、彼女も知らないはずだ。それは、太古の昔に受けた心の古傷。あの夜、俺が蘇らせてしまったトラウマ。

俺は、不思議にも素直に認めようとしていた。もう、認めるしかないところに来ていた。

「クバティムは……カヤなんだな」

リストが驚いて目を丸くした。てっきり、だから何度もそういってるじゃないですか、なんて文句を言われると思ったが……返ってきた反応は、遠慮がちにうなずくだけだった。

「生まれ変わり、て考えたらいいのか？」

殺さないで、と訴えてきた彼女の様子は尋常ではなかった。よく考えれば、ただの夢――カヤはそう思っている――であそこまで取り乱すはずは無い。他にも理由があってしかるべきだったんだ。恋人に剣で腹を貫かれる――その体験が、カヤの遠い昔の感情を掘り起こしてしまったというなら……あの一件で、愛する男に殺された前世の哀しみを思い出させてしまったというなら、現実離れした推測だけど、納得できる。そりゃ、不安になるはずだ。

夫に殺されたクバティム……一体、どんな気持ちで死んでいったんだ？　カヤはその気持ちまで思い出しているのだろうか。だとしたら、それはひどい恐怖だ。――夕べ、乱暴に抱こうとしてしまったことが、悔やまれる。さらに悔やまれるのは、その後のことだが……。

「生まれ変わり、というより同一人物です」

けろっとした様子で、リストはそう答えた。

同一人物？　いくらなんでも、それは無理があるだろう。クバティムは殺されたんだ。それに、時間差が激しすぎる。

「タイムスリップでもしたのかよ」

「いえ」リストは、俺の皮肉交じりの冗談に苦笑する。「パンドラは死ぬと、土に還ります」

「つ、土？」

いきなり、何を言い出すんだ？　答えになってないだろ。

「もともと、『アプスの粘土』から創られた体。パンドラにとって

の死は、人の形を失い、土へ戻ることを意味する」
「！」
想像も、したくない。俺は口を開けたまま、言葉を失った。カヤが神に創られた土人形。それすら、考えたくもない事実なのに。死んだら、カヤは土に戻る？　彼女の姿自体、なくなってしまうのか？　人でない、て……そういうことなんだな。――残酷すぎるだろ。
俺に返事を期待していないのだろう。リストは、一人で話を続ける。
「体だった土は、『パンドラの箱』へと戻り、次の『裁き』のときまで眠る。魂も同じです。体を失った魂は、ティアマトによって記憶を消され、『パンドラの箱』に『アプスの粘土』とともに封じられる」
「ティアマト？」
その名前に、俺の体がびくっと震えた。なぜかは自分でも分からなかったが、気づいたときには鸚鵡返しでその名をつぶやいていた。口に出してみると、不思議なことに懐かしい感じがした。――馴染みがある名前だ。
「ティアマトは、地球（エリドー）に眠る唯一の女神です。彼女は……大昔、まだ地球（エリドー）が神の世界であったときに神々と対立し、聖域（ニビル）から追放され、地球（エリドー）に封印された。
一応、神々を生み出した偉大なる母……なんですけどね。今では、その権威も力もない。『裁き』に関していっても、パンドラの魂を管理しているだけですし」
「……」
ティアマト……なんだっけ。リストの話はそっちのけで、俺はこ

れでもかというほど眉間に力をいれて、考え込んでいた。

「和幸さん？　聞いてますか？」

ちょっと待ってくれ、リスト。もう少しで思い出せそうなんだ。ティアマト、ティアマト……

「あ！」そうだ、思い出した。俺は、真剣な顔でリストを見上げる。

「俺の寝言だ」

「は？」

確か、カヤが言っていた。夕べ、あの大失態のあと、俺は寝言で「ティアマト」と言っていたって。

だが……俺は自分で言っといて、居心地が悪くなった。真面目な話の最中に、寝言のことを言う必要はあっただろうか。聞いたこともない女神の名前を、寝言で言うとは思えない。きっとカヤの聞き違いか、ただの偶然か何かだ。リストの話を遮ってまで言う話じゃなかったな。

「悪い。なんでもない」と、俺は口ごもりながらつぶやいた。頬があつい。「それで？」

リストは苦い表情を浮かべていた。こいつにしては珍しく真面目な会話を続けていたのに、その腰を折ったんだ。機嫌を悪くしても仕方が無い。今回ばかりは一方的に俺が悪かった。

「とにかく」と、リストはため息混じりに言う。「次の『裁き』が来ると、『パンドラの箱』の『アプスの粘土』から再びパンドラが創られ、封じられていた魂が宿る。

つまり、同じ体、同じ魂。それで何度も何度も、パンドラが創ら

れるんです」

よく分からない。俺はその心情を表情であからさまに出していたんだろう。リストは、いいですか、と人差し指を立てた。

「クバティムが死んだとき、その体は土に還り、『パンドラの箱』に戻りました。魂は記憶を消されて浄化され、同じく『パンドラの箱』に封じられた。そして、次の『裁き』が来たとき……クバティムだった土は再び人の形を取り戻し、同じくクバティムだった魂を与えられた。これが、二番目のパンドラです」

とんだ、リサイクルだな。そんな感想しか浮かばなかった。

まさに、粘土だ。嫌気が差す。一つの粘土を何度も何度もこねては同じ人形を創るわけか。魂もまた、使ってはデータを消して再利用。それの繰り返し。まるで、重ね撮りだ。

「つまり」と俺は声を落とす。「カヤにとって、これは十三回目の人生、なんだな」

「本人は知りませんがね」

十二回も殺されてきたのか、あいつは。そのうち、一度は……愛する男に。俺は首を絞められたかのように、息苦しくなった。――無性に、カヤに会いたくなった。

心の古傷（後書き）

シュ・シンとクバティムの物語『災いの王妃』を下記ＵＲＬにて載せております。
リストの語る、ウルの王シュ・シンの短編小説です。（さらっと語ってます）

『災いの王妃』→ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２２７８ｍ／

＊お手数ですが、ＵＲＬのコピー＆ａｍｐ；ペーストでお願いいたします。

今彼の役目

「なんで、俺にこんな話をした？」

しばらく黙り込んでから、和幸はそう尋ねた。リストはそれまで強張らせていた表情をやわらげ、へらっと笑ってみせる。

「それはほら、元彼のトラウマを消してやるのが、今彼の役目というか」

「だから、俺にわざわざ話したってのか？」和幸は唇の片端をあげ、リストを睨む。「冗談はいい」

真面目なんだから、とリストは肩をすくめてため息をついた。適当にごまかせそうにはないな。リストは、口元から笑みを消す。

「まさか、封じられた記憶が蘇るとは思えません。追放されたといっても、女神ティアマトの力はそこまで甘くはない。なんせ、神々を生み出した母ですからね。本来、最も偉大な神なんですよ」

声のトーンを高くしてそう言うと、リストは腰を上げた。よいしょ、とわざとらしくつぶやいて、腰を叩く。

「だけど、夕べの『人形』の言動からして……はっきりとではないにしても、無意識下で彼女は過去を思い出してしまった。そうとしか考えれない」

まるで、カヤの言葉をその場で聞いたような口ぶりだな。和幸は苦笑した。こっそり人に天使をとり憑かせて盗み聞きしたというのに。

嫌味の一つでも言ってやろうか、と和幸が口を開けたときだった。ふと、リストは独り言のようにつぶやいた。

「愛する人に殺された記憶……それは、神の力をもっても消せない傷なのかもしれない」

いつもふざけているだけのように見えるリスト。だが、たまに的を射たことを言う。和幸は視線を落とすと、そうだな、とつぶやいた。

部屋に重い空気がたちこめ、時計の針が時を刻む音だけが響いた。その音に耳を傾け、和幸は自分が何か大事なことを忘れているような感覚に陥った。自分は急いでいたのではなかっただろか。

「和幸さんにクバティムの話をしたのは、その傷を癒してほしいからです」

突然、そんな重い言葉が頭上から降ってきた。は、というすっとんきょうな声が口から漏れる。振り仰ぐと、リストが真剣な顔でこちらを見下ろしていた。

なんでお前がそれを頼む？　和幸には、リストの考えていることが全く理解できなかった。カヤは人ではない、カヤは死ぬべきだ、などと冷酷なことを散々言っておきながら、彼女を気遣っているようなことを口にする。一体、何を考えているんだ。

リストは窓の外に目をやり、前髪を左手でかきあげた。南中に近づきつつある太陽の光が、あたりのマンションを照らしている。

「彼女には、せめて人間である間だけでも、幸せでいてほしい。普通に暮らせる貴重な時間を、余計な不安で無駄にしてほしくないんです」

確実に、カヤを殺す前提で話している。ろうそくの火ほどの希望も無いかのようだ。和幸はその言い方が癇(かん)に障ったが、文句が口から出てこなかった。――あまりにも、リストの表情が苦しそうで。

「リスト、お前本当は……」と、和幸が言いかけると、リストはすばやく視線を戻して微笑んだ。

「ってわけで！　また、夕べみたいなことがおきたら、そのときはお願いしますね。

キスなり押し倒すなり、今彼の権力を行使して、忘れさせてあげてください。和幸さんのテクに期待してますから」

気づけば、いつものリストのへらへら顔だ。和幸は調子を狂わされ、顔をしかめた。真面目になったかと思えば、いきなり冗談を言い出す。いつまでたってもつかめない性格だ。

「お前な……」呆れてため息混じりにそうつぶやく。その続きは自分でも分からなかったが、考える必要もなかった。リストは無邪気な笑顔を浮かべると、すぐさま穏やかな声で諭すように和幸に告げた。

「彼女の過去の傷を消せるのは、神じゃない。やっぱ、今彼(あなた)の役目なんですよ」

＊　＊　＊

「遅いなあ」

私はつぶやいてあたりを見回す。さすが若者の街。交差点まで、びっしり人だかりだ。日曜日だしな。中学生くらいの子もミニスカートであたりを闊歩している。つい、その足を目で追いかけてしま

う。砺波ちゃんに負けないくらいの丈の短さ。見ているこっちが顔を赤くしてしまいそうだ。やっぱり、男の人はああいう服装が好きなのかな？　――和幸くんも？

ううん、と私は自分が着ている服を見下ろす。一応今夜のことを考えて、一番気に入っているワンピースを着てきたんだけど……丈は膝下まであるし、胸元も特に開いているわけでもない。これじゃ、だめなのかな。女らしくない？　そういえば、和幸くんの好きなタイプってどんな女性だろう？　やっぱり、色気のある子がいいのかな？　それとも、かわいらしい子？

首を傾げて考えている私を、通り過ぎる人たちがちらちら変な目で見てくる。ショッピングモールの入り口で突っ立っている私は、それでなくても目立っている。私は恥ずかしくなってうつむいた。

それにしても……お昼が近づいてきたからだろうか。カップルの姿がよく目に付く。今から、ランチなのかな。いいなぁ。こんなこと、和幸くんには言えないけど、私も本当はもっとデートしたい。待ち合わせして、買い物して、ご飯を食べて、映画を見て……そういう普通のデートがしたい。でも、平日は学校だし、休日は和幸くんはバイトだし。のんきに昼間から私と遊んでいる時間はないよね。

それに……と、少しはなれたところで壁にもたれかかって立っている男性を見つめた。タイトなジーンズのせいか、いつも以上に足が長くみえる。スタイルもいいし、顔もかっこいい。服装と髪型のせいでちょっと遊び人にも見えるけど、目鼻立ちの整った正統派の美形だ。肩まである髪をばっさり切ったら、爽やかな好青年に生まれ変わることは間違いない。ホストにも見える彼は、何を隠そう私のボディガードだ。こうやって、いつも遠くから私を見守っていてくれる。――和幸くんとのデートのときも。

私は、はあ、と一つため息をついた。どうして、付き合ってからのほうがややこしくなっているんだろう。私はただ、和幸くんと一緒にいたいだけなのに。

「！」

そのときだった。ハンドバッグから振動が伝わってきた。携帯電話だ。私は慌てて取り出し、ディスプレイを見て目を丸くする。

「和幸くん！？」

噂をすれば、というやつだろうか。でも、この時間帯は……不思議に思いながらも、携帯を耳に当てた。

「もしもし？」

「……よう」

『よう』？　なんだか、不自然な返しだ。私は戸惑いつつも「よう」と真似をした。

「どうかした、和幸くん？」

「あ、いや……」

「？」

電話くれて嬉しいけど、様子が変だ。そもそも、今電話があるのはおかしい。

「何かあった？」

おそるおそる尋ねると、和幸くんは恥ずかしそうに答えた。

「声が、聞きたくなって」

「！」

ドクン。心臓が飛び跳ねた。古典的だけど、効果抜群だ。一気に体が熱くなった。

「わ、私も」と、慌てて返事をする。「会えなくて、さびしい……」

周りに聞こえないように小声で言ってうつむいた。暇をしている左手に目をやると、薬指に輝く何の変哲も無い黒い石が視界に入った。私の、大切な『婚約指輪』。これに小型カメラが隠されているとは、誰も思わないよね。

「そっか」

上擦ってる。私はつい噴出してしまった。照れてるの、声だけでも分かるよ。

それにしても……電話くれたのは嬉しいけど、気になることが一つ。私は遠慮がちに尋ねる。

「バイト中に電話して、怒られないの？」

「へ？」

へ？　その間の抜けた反応はなんだろう？

「今、バイト中でしょ？」

「……」

するとやや間をあけて、和幸くんの悲鳴にも似た声が聞こえてきた。

「やっべぇ！」と言う声と、ガタガタと何かにあわただしくぶつかる音がした。「悪い、また電話する」

「あ、じゃ、バイト終わったら……」
「ああ、じゃあな」

ぶちっと容赦なく電話は切れた。なんだったんだろう？　私はぽかんとして、携帯を下ろした。分かることと言えば、どうやら彼はバイトのことを忘れていたということ。でも、普通忘れるかな？　バイトがある、と言ってあわただしく帰って行ったのに。それに……急に、声が聞きたい、だなんて。もちろん嬉しいけど、今朝会ったばかり。何かあったのかな？

「カーヤ！」

タイミングよく、聞き覚えのある明るい声がした。私はハッとして、声のしたほうに振り返る。
交差点からこちらへ走ってくる二人がいた。高い鼻に、色白の肌。そして、愛嬌のあるアヒル口。ニホン人離れした顔立ちの少年だ。そして、もう一人。ゆるいウェーブのかかった髪に、あどけなさの残る愛らしい顔の少女。――曽良くんと砺波ちゃんだ。

「ごめんね、カヤ」

私のもとに来るなり、砺波ちゃんは息をきらせてそう言った。その隣で、汗ひとつかいていない曽良くんは不機嫌な表情を浮かべている。

「恩を仇で返しマンが現れたんだよ」
「え？」

恩を仇で……なに？　会って早々、曽良くん節が炸裂みたいだ。

「わたしまで巻き込まれたんだから！　なんで朝っぱらからコフィンタワーに行かなきゃなんないのよ。辛気臭っ！」

そして、砺波ちゃんもいつもの彼女にはや戻り。さっき浮かべていた申し訳ない表情はすっかり消え去っている。おそらく、砺波ちゃんの中では一度謝ればチャラなんだろう。

にしても、何に怒ってるんだろう？　コフィンタワーにかかわること？

「あんた一人でとりに行けばよかったのよ」と、砺波ちゃんは曽良くんのふくらはぎに勢いよく蹴りをいれた。ローキック？

曽良くんは顔色一つ変えずに、ええ、と悲しそうに声をあげる。相当強く蹴られたようにも見えたけど……全然痛くなさそう。見ているこっちのほうが悲鳴をあげそうになった。

「電車よりトミーのバイクのほうが早いじゃんか」

殺し屋とは思えない弱弱しい声で、曽良くんは嘆くように砺波ちゃんに反論した。まるで、尻にしかれている夫みたいだ。私はただ唖然として、二人の口論を見つめていた。

砺波ちゃんは曽良くんに体を向け、腰に手をあてがう。

「カヤを待たせた罰として、今日一日、荷物もちね」

「ええ！？　トミーだって遅れたんじゃないか」

「あんたのせいで遅れたんでしょ」

これ以上の抵抗は無駄だ、と思ったのか、曽良くんはがっくりと肩を落とした。「恩を仇で返しマン」と、消え入るような小さな声が聞こえてきた。なんだか、小学生みたいなやりとりだ。懐かしく

さえ感じる。
私が苦笑していると、曽良くんが悔しそうな表情で私を見つめてきた。
「カーヤ、どういうしつけしてるのさぁ」
「し、しつけ？」
何の話？　私も、何か関係しているの？　左手で髪を耳にかけながら、私は眉をひそめた。すると、「あれ！？」という甲高い声が左耳を貫いた。それが砺波ちゃんだと私が判断するより先に、彼女は私の左手首をつかんで自分のほうにひっぱる。
「この指輪！」と砺波ちゃんは、目を丸くして叫んだ。その視線は、薬指の指輪に釘付けだ。
あ、そうか、と私は照れ笑いを浮かべる。まだ、砺波ちゃんに言ってなかった。実は、誰かに言いたくて仕方なかったんだ。のろけ話だ、と呆れられるかもしれないけど……構わない。話したい！
私はきっと満面の笑みを浮かべていたと思う。
「これね、和幸くんに……」そこまで言ったときだった。
「ダサくない！？」
砺波ちゃんが、あからさまに不快な表情を浮かべてきっぱりと私にそう言った。

笑えない冗談

デパートの地下にある食料品売り場――いわゆるデパ地下。食料品の買出しにしては必要以上に着飾った女性客が、そこかしこにあふれている。ロールケーキやプリンなど、洋菓子の並ぶ一角には行列までできている。その向かい、色とりどりのフルーツが並ぶ棚の前で、高校生くらいの三人組がわいわい騒いでいた。周りで真剣に品定めをしている主婦にとっては、鬱陶しくてならない。だが、そんな厳しい視線も、話に夢中になっている彼らにとってはなんてことは無い。――いや。唯一、ショートヘアで中東系の顔立ちをした少女だけは、周りを気にしていた。

「皆、見てる気がするんだけど」と彼女は後ろを振り返ってつぶやく。

「そんなこと言ってぇ。カーヤ、ごまかそうとしてるでしょ」

しっかり荷物もちにされている曽良は、買い物カゴを片手ににやりと笑んだ。

「ごまかすって……別に、何も」と、カヤは目の前にあったリンゴを手に取る。

「またまたぁ。顔、赤いよ。夕べ、何があったか教えてよ」

「夕べ……」

ライトに照らされ輝くリンゴをじっと見つめ、カヤは夕べのことを思い出した。初デートに、誘拐、真夜中のスクーター、虹の橋……そして、悪魔。リンゴをつかむ手に自然と力がこもる。妙な老婆の叫んだ言葉。自分を悪魔と呼び、和幸に「殺せ」と訴えた。一体、あれはなんだったんだろう。なにより、自分はどうしてあんなにも

不安になったんだろう。ただの老婆の戯言(たわごと)じゃないか。
和幸に剣で刺される夢をみてから何か変だ。鏡に写る自分が恐くなったり、あの夢が正夢になるんじゃないかと怯えたり、老婆の言葉を本気にしたり……。夕べなんて、和幸に殺されると本気で思っていた自分がいた。一度、撃たれたからだろうか。でも、あれは事故だ。ちゃんと分かっているのに。和幸に怯えるなんてどうかしている。カヤは浮かない表情でため息をついた。

「ため息!?」
「え?」

いきなり叫んだ曽良の声に、ハッと我に返ってカヤは振り返る。曽良は気の毒そうにこちらを見つめていた。そして、ぽつりと言う。

「……かっちゃん、下手だったんだ」
「は? え? なに?」

なかなか慣れないが、かっちゃん、というのは和幸のあだ名だ。といっても、名付け親である曽良しか使っていないのだが。
曽良は、そっかぁ、と悲しそうに顔をゆがめ、カヤに抱きついた。

「かわいそうな、カーヤ! 痛かった!?」
「ええ? なにが? 何の話?」

友達同士とはいっても、公共の場で男女で抱き合うのはカヤの中のマナーに反する。カヤは持っているリンゴのように顔を赤くして、曽良から離れようとじたばたした。
そんな二人をよそに、砺波は冷静に果物を眺めていた。そしてある物を見つけ、キラリと目を輝かせる。いいこと思いついた。砺波はニヤリと怪しげに微笑んで、それを手に取る。

「曽良、曽良！　これ、和幸にいっぱい買って行こうよ」

抱き合っている二人に振り返り、砺波はパック詰めになっている
ある果物を差し出す。カヤはそれを見つめてきょとんとした。

「さくらんぼ？」

すると曽良は弾かれたようにカヤから離れ、腹を抱えて笑いだした。カヤは理解に苦しみ、隣で首をかしげる。さくらんぼの何がおもしろいのか、さっぱり分からない。

「あからさますぎ。かっちゃんに殺されるよ」と、曽良は笑いながら砺波に警告する。

「あいつが人を殺せたことあった？」

余裕の表情でさらりと言ってのけると、砺波は曽良の持っているカゴにさくらんぼのパックを三つ入れた。言われて曽良は、アヒル口に微笑を浮かべる。

「それもそうだ」

「それに、今夜はあいつの卒業パーティでしょ。アッチの卒業も、祝ってあげなきゃ」

怪しげに言って、砺波はカヤをちらりと見つめる。

「ねえ、カヤ？」

逃がさないわよ、という獣のような目つきで見つめられ、カヤはたじろいだ。砺波だけでなく、曽良も不敵な笑みを浮かべている。

二人が一体、何をたくらんでいるのか、見当もつかない。ただ、分かるのは……よからぬことを考えている、ということだ。

「あ……アッチって？」

「もお、あんたたちは二人して！　ごまかさないで白状しなさいよ」

「白状？　何を？」

「夕べよ！　ヤったんでしょ！？」

「！」

高級デパ地下での会話とは到底思えない台詞が、堂々と放たれた。カヤはあまりに率直に聞かれて、言葉を失い硬直する。

「夜中に連れ出してすることといったら、それしかないんだから」

ヤった……どうして皆、そういう表現をするんだろう。もう少しまともな言い方はないのだろうか。カヤは何よりそこが気になってがっくりと肩をおとした。

「ね、どうだったの？」と、砺波は瞳を輝かせてカヤに近づく。「あいつ、ベッドの上では……」

「砺波ちゃん！」

それ以上、質問を聞くのも恥ずかしい。カヤは顔を真っ赤にして、砺波の両肩をつかんだ。

「夕べは、何も無かったの」

嘘ではない。少なくとも、砺波や曽良が期待してるような話は何も無い。――悲しいことに。

だが、二人は疑わしげな表情を浮かべている。これでこの二人が

納得するわけが無かった。

「もう、そういうのはいいからさぁ」砺波は呆れたようにそう言って、両肩をおさえているカヤの腕を軽くふりはらう。「ダサい指輪でプロポーズして、何もしないわけないじゃない」

「そうそう。いくら、かっちゃんでもここまできて……」

カヤは、ぐるぐると頭が回るような気分になった。段々と耳が遠くなる。まるで水の中にいるかのように、音がぼやけていく。次から次へと、二人の追及の言葉が襲い掛かってくる。――だから、何も無かったんだって。

「……ヤってないの！」

気づけば、カヤはそう叫んでいた。

＊　＊　＊

「ね……寝た！？」

砺波ちゃんは、コーヒーショップに響き渡る声でそう言った。私は返事をすることなく、カプチーノをすする。

結局、果物は買えなかった。今思い出すだけでも恥ずかしくて顔があつくなる。あんなに人の多いところで、はしたないことを口走ってしまった。それも、大声で。穴があったら入りたい。まさにその気持ちで、私はとっさに二人を置いて逃げ出していた。気づくと一階にいて、追いかけてきた二人とともにこのコーヒーショップにやってきた。

一番奥、窓際の席に落ち着くと、事のあらましを話した。私自身考えないようにしていた、夕べの出来事。和幸くんには悪いけど…

…やっぱり、ひっかかるんだ。心の片隅に置いといて放っとけるほど、私は大人じゃないみたい。

「嘘でしょ？　これから女を抱こうって男が、普通寝る！？」

持っているカフェモカのカップを、そのまま握りつぶすんじゃないだろうか。そう心配になるような剣幕だ。

私はカプチーノをテーブルにおくと、砺波ちゃんの隣に座っている曽良くんに目をやる。男の子の気持ちは、男の子にしか分からない。

「どうなの、曽良くん？」

「さすが、恩を仇で返しマン」

曽良くんらしからぬ、渋い表情を浮かべてそうつぶやいた。私は「へ？」と目をぱちくりさせる。恩を仇で返しマン。たしか、会ったときも言っていたよね。もしかして、和幸くんのことだろうか。

「いくら、あいつでも……それは、おかしいでしょう」

曽良くんの珍回答にぴくりともせず、砺波ちゃんは眉をひそめてじっと見つめてくる。珍しいものでも見るかのような表情だ。よく平気ね、と言われている気がした。

「やっぱり、変だよね。よほど疲れてたのかな」

「いや」曽良くんは、呆れたような表情でテーブルにひじをつく。

「疲れてても、そのタイミングで寝ないでしょ」

「じゃあ、病気とか……」

確か、電話であの人が言っていたな。突然眠ってしまう病気があ

るって。ナルコ……なんだっけ。
そのときだった。砺波ちゃんが、何食わぬ顔でぽつりとつぶやいた。
「他に女でもいるんじゃないの」
「え！？」
思わず、ガタッとイスごと後ずさっていた。曽良くんも目をまん丸にして、砺波ちゃんを見つめている。
「な、なに言ってるの、砺波ちゃん！？」
「だぁってぇ、せっかくヤれるチャンスに寝るなんて、あやしいでしょう。他の女でもう済ましてて、やる気がでない……」
「トミー！」
身を乗り出して砺波ちゃんを止めてくれたのは、曽良くんだった。
「なによ」と困惑気味に砺波ちゃんは曽良くんを睨む。
茫然自失。そのときの私は、まさにそれだ。和幸くんが、浮気？考えたこともない。ううん、考える必要なんてないもの。そんなこと、あるわけがない。あるわけ……ないよね？
「やだ、ごめん。ただの冗談だから」
「え」
気づくと、私はうつむいていた。砺波ちゃんの申し訳なさそうな声に、ハッとして顔をあげる。
「ちょっと、からかいたくなっただけよ。何、凹んでんの」
小首をかしげて苦笑する砺波ちゃんは、いたずらをした子供みた

いだ。冗談……か。嘘でも、笑顔を浮かべることはできなかった。
嫌だな。私、どうしてこんなに余裕がないんだろう。こんな冗談、笑い飛ばさなきゃ。和幸くんは浮気をするような人じゃない。それを一番分かってるのは、私じゃないか。なのに、なんで……
ちらりと、左手の薬指を見つめる。

――お前の誕生日に、結婚しよう。

プロポーズまでされて、何が不安なんだろう？　自分でも分からない。一体私は……何を恐れているんだろう。なぜ、焦っているんだろう。和幸くんとは、じっくり一緒に歩んでいきたい。そう望んでいる私と、幸せで円満なはずなのに、怯えている自分がいる。鏡に映る自分を見るたびに、得体の知れない絶望感が襲ってくる。
最近、私はおかしい。

悪女の噂

「ところでさ、カーヤ」場の雰囲気を変えるように明るい調子で、曽良が口火をきった。「かっちゃん、何時にバイト終わるんだっけ？」

聞かれてカヤは、えっと、とつぶやき、「たしか、三時」と答える。その表情には、さっきまでの沈んだ様子はない。砺波はそれを見て、内心ほっと安堵していた。ほんのちょっと、いじわるをしてやろう。そういう気持ちがあったことは否定できない。なんちゃって、と笑って終わらせるつもりだった。和幸がカヤに惚れ込んでいることは誰が見ても明らか。浮気なんて、まずありえない。無論、カヤも分かりきっているだろう。だから、まさかあんな冗談を本気にするとは思ってもいなかったのだ。――それだけ、カヤも和幸に夢中だということか。今時、こんな純粋な子がいるなんて、と砺波は半ば呆れた。

曽良に止められていなければ、『ただの冗談』で泣かせていたかもしれない。砺波はゾッとした。カヤを泣かせたとあれば、和幸もかんかんに怒るだろう。砺波にとって、それは気に食わない展開だ。

「じゃあ、三時までに全部準備しなくちゃねぇ」

曽良のウキウキした声が砺波の耳に入ってきた。

いつの間にか、話の内容は今夜計画しているサプライズパーティになっている。和幸のカイン卒業を祝うパーティだ。

「バイト終わったら電話くれるって言ってたから」

「お、ナイス。確実にいつ帰ってくるか分かるね」

頬杖をつきながら、砺波は幼馴染の彼女を見つめる。さっきまで落ち込んでいたのが嘘のように、明るい笑顔を浮かべている。すっかり気にしていないようだ。いや……そう見せているだけかもしれない。何度か買い物に出かけただけだが、彼女が自分の大嫌いなタイプの女――猫かぶって男に媚びるだけの女――ではないことは、はっきりと分かった。素直で純粋で、他人を気遣える優しい子だ。和幸が惚れたのも頷ける。もっと嫌な女だったら、よかったのに。砺波は、二人にバレないようにひっそりとため息をついた。

「でも、どうやって和幸くんの部屋に忍び込むの？」

騒がしいコーヒーショップに居て、誰かに盗み聞きされるわけもないのだが、カヤは自然とひそひそ声で尋ねていた。

「それは……」ムフフ、ともったいぶった笑みをうかべると、曽良はポケットから銀色の鍵を取り出す。「カインノイエ、リーダー代理の特権っす」

「え？」

「父さんは、子供たち皆の部屋の合鍵を持ってるんだ。だから、オフィスからかっちゃんのをこっそりくすねてきたってわけ」

信じられない、と不機嫌そうな声をもらしたのは、それまで大人しかった砺波だった。

「パパのものを盗むなんて！」

「借りた、の。それに、オフィスのものは好きに使っていい。父さんからはそう言われているから」

「……」

珍しく、二人の間に異様な空気が漂った。特に砺波は、いつもの

さばさばとした雰囲気はなく、深刻な表情で曽良を睨みつけている。どうも曽良のしたことが気に入らなかったようだ。
カヤは居心地の悪さを感じながらも、とりあえず話を変えなきゃ、と笑顔を浮かべて口をひらく。

「それで……今夜、他に誰が来てくれるの？　他の人も、呼んでくれたんだよね？」
「ああ」曽良は一瞬で表情を変えると、アヒル口を横に開いて、砺波からカヤへと視線をうつす。「誰も来ないよ」
「へ？」

今日のパーティは、和幸のカイン卒業パーティだ。できるだけたくさんのカインの兄弟たちに、和幸を送り出してほしい。カヤはそう思っていた。バイトを終え部屋に帰ると、そこにはカインの皆がいて……というサプライズを期待していたのに。

「どうして、誰も？　誘ってないの？」

このパーティの企画を電話でしたとき、曽良は確かに言っていた。カインたちは自分が招待しておくから、と。
聞かれた曽良は一瞬顔を強張らせてから、「ごめんね」と苦笑する。特に、言い訳もするつもりはないようだ。

「そっか」正直残念だが、リーダー代理をこなす曽良はきっと忙しいのだろう。カヤは晴れやかな笑顔を浮かべる。「でも、二人がいるし。それだけで、和幸くんは喜ぶよ」

曽良は、ありがと、と微笑して答えた。そんな曽良を横目で見て、砺波は呆れて首を横に振った。こいつも気がいいんだから。

「皆、カヤに会いたくないのよ」

砺波は、きっぱりと事実を述べた。なんの躊躇もなしに。

カヤは、え、と顔をしかめる。

「トミー！？」

また叱責にも似た曽良の声が飛んできたが、今度は引き下がるつもりは毛頭ない。砺波はカヤを真面目な表情で見つめ、特に感情をこめずに淡々と語りだした。

「曽良はちゃんと誘ったの。和幸を知っている皆には片っ端から。でも、全員に断られたのよ」

断られた？　カヤは眉をよせる。なぜ、と問いかけて口をつぐむ。

――皆、カヤに会いたくないのよ。

そんな砺波の言葉が浮かんだからだ。自分はもう理由を聞いているではないか。

「私……」と、カヤはつぶやくような声をだす。「カインの皆に嫌われてるの？」

「『神崎カヤ』は、カインノイエでは有名なの。ほら……あんたの父親を、人身売買の黒幕だ、とウチらは睨んでいたわけでしょう」

カヤはハッとして肩をふるわせた。思い出したくもない悲しい過去が、記憶の奥深くから湧き出てくる。優しかった両親と、闇の人身売買。思い返せば、和幸はもともと、『おつかい』で自分に近づいてきたのだった。神崎の両親をスパイするために、娘の自分を利

用しようとした。まるで遠い昔のようだ。そんな彼が今では、れっきとした自分の恋人。不思議なものだ。
そういえば……と、カヤは眉をひそめる。両親と人身売買との関係はあやふやなまま闇に葬られてしまった。今となっては、カインノイエの読みが正しかったのかどうか、知る由も無い。

「その噂だけが一人歩きしてさ、あんたまで悪者扱いされてたの。黒幕の娘、とかいって」
「トミー、そんな話……」

真剣な表情で止めようとする曽良を、砺波は一瞥する。その瞳を見つめ、曽良はこらえるように黙った。砺波が恐いから、ではない。ちゃんとした理由があるように思えたからだ。

「で……和幸まで、あんたに奪われた。皆、そう思ってる。あんたが和幸を惑わして、カインを辞めさせたってね」

カヤは何も言わずに押し黙った。間違ってはいないだろう、と悲しく微笑する。自分と会わなければ、和幸はカインを辞めていなかったのだから。

「わたしもさ」と、砺波は背もたれにもたれかかった。「カヤのこと、嫌ってたと思う」
「！」

思いっきり、ナイフで心臓を貫かれたような気分だった。目を見開いて砺波を見つめる。今にも涙がでそうだった。嫌い――同性からは狂うほど言われてきたというのに、いつまでたっても慣れない。耳にした瞬間に身が凍る。それほど、聞きたくない言葉。
だが、砺波の表情はいたって穏やかだった。

「もし、あんたに会ってなかったら、ね」

整った歯並びが微笑んだ口からのぞいた。カヤは、きょとんとして目をぱちくりさせる。

「あんたと和幸のこと、カインの中でちゃんと分かってるのはわたしと曽良よ。他のカインには、言わせておけばいい」

「……」

「悪者の娘かもしれないけど、和幸をたぶらかした悪女じゃない。和幸がカインを辞めるほどのいい女だっただけ」

いたずらっぽく笑って砺波はそうしめくくった。

駄目だ、とカヤは思った。今度こそ、涙がでる。感極まって、ありがとう、ともいえずにカヤは目を細めた。果たして、同性の友達から暖かい言葉をもらったのはいつぶりだろうか。

「ただ……」と砺波は耳に髪をかけながら、視線を落とす。「分かっておいてほしいの」

「？」

「あんたは神崎の娘で、和幸にカインを辞めさせた。カインの皆が知ってるのはそれだけで……わたしだって、こうして実際に会ってなければ恨んでた。結果だけみれば、カヤはそれだけのことをしたの。

だから……あんたを嫌う皆のこと、責めないで」

こんなに真剣な砺波を、初めて見た。カヤはそう思った。いつもテンションが高く、話すことといえば文句か恋愛話だけ。そんな彼女が見せた、意外な一面。自分を気遣ってくれていると思ったのは、間違いだったかもしれない、とカヤは思った。本当は、カインを…

…彼女の家族をかばっているんだ。確かな絆を感じて、カヤは頬を緩めた。同時に、申し訳ない、という罪悪感がこみあげてくる。和幸がカインノイエを抜けたのは、彼自身のため。彼はそう言っていた。だが、少なくともそのきっかけをつくったのは、自分だ。大切な兄弟を家族から奪い取った女……嫌われて当然だ。

「隠そうとしてごめんね」

「え」

砺波の話がひと段落ついたのを見計らって、曽良が口をはさんできた。

「普通、こういう裏話は避けるものだと思ったから」

曽良はジト目で、隣に座るバカ正直な少女を見つめた。曽良の言葉が嫌味だとちゃんと分かっているのだろう、ツーンと白を切っている。

彼女はカヤと違い、守られる立場になったことはない。平等もレディファーストもない裏世界で、たくましく生き抜いてきた。そんな彼女にしてみれば、嘘までついてカヤの気持ちを守ろうとする姿勢が気に入らなかったのかもしれない。曽良はそう思って、苦笑する。

彼女のいいところは、妬みや嫉妬、不満を心の中でくすぶらせないところだ。気に入らなければ行動にでて、心のモヤモヤは自分できっちり処理する。そのせいで、いらぬトラブルを招くことも多々あるのだが……曽良は、彼女のそういうところは好きだった。――ある程度、だが。

「でも……」と、カヤは言いにくそうに上目遣いで二人を見やる。

「二人の気遣いは嬉しいんだけど、やっぱり和幸くんにはカインの

人たちと会ってほしいの」
「は？」
せっかく丁寧に事情を話してやったのに、何を言っているんだ。カヤがいるところに、カインは来ない。磁石の同じ極が反発しあうのと同じだ。それを分かってそんなことを言うのは箱入り娘のわがままにしか聞こえない。砺波は、あからさまに顔をしかめた。それを見て、カヤは慌てて弁解するように言葉を続ける。
「私は、行かないから！　そしたら、皆、来てくれるよね」
「行かない？　何言ってんのよ？」
「私と会うのが嫌で、カインの皆が来ないなら……私は行かなくても……」
自分は和幸とはいつだって会える。だったら、わざわざパーティで会わなくてもいい。それよりも、これから会いづらくなるカインの皆と会ってほしい。カヤにとっては、当然の結論だった。卑屈になっているわけでもない。カインが自分を嫌っていることは納得できた。それを変えたいとも思ってはいない。嫌われて当然――その感情はカヤにとって初めてのものだった。
だが、逆に今度は砺波が納得できなくなった。はあ？　と苛立った声をもらす。
「ちょっと、カヤ！？　わたしの話、聞いてた？」
「え！？」
ああ、もう……と、砺波は大きくため息をついた。その隣で、曽良は孫を愛でる老爺（ろうや）のような笑顔を浮かべて、黙っている。そういえば、この二人の性格は正反対だな、とのんきに考えていた。

「和幸は、カインを辞めてあんたを選んだの。その時点ではっきりしてるでしょう」
「な、なにが？」
なんでわたしがここまで言ってやらなきゃいけないのよ。砺波はムッとした表情を浮かべ、腕を組む。
「カヤとカインなら、和幸はあんたを選ぶ。
あんたがいないんじゃ、誰が来たってあいつは喜ばないっての」
「……」
カヤは、ぽかんとしてしまった。砺波の言いたいことを理解するのに、ほんの少し時間がかかった。そして、ハッとして顔を赤くする。
「あ、ありがとう」と、恥ずかしそうにうつむく。
「まったく……世話が焼けるんだから」
そっぽを向いて、砺波は呆れた笑みを浮かべた。

曽良の苦言

「マジでごめんな」

バイトを終え、俺は焼き鳥屋をでるとすぐに頭をさげた。相手は、俺が遅刻したせいで二人分の仕事をしなくてはならなくなったバイト仲間だ。彼女はつり目をさらに細くして、俺をにらむように見つめている。ただ、全く怖くはない。もともと愛嬌のある猫顔だからか、それとも……もっと恐ろしい顔でいつも睨んでくる女を俺は知っているからか。そういえば、彼女の服装は、あいつを思い出させる。黒いタイツにホットパンツ。高いヒール。上はロングTシャツにジャケットで、そこだけはあいつとは違うが。まるで露出狂のように、季節構わず肌を露出するあいつ――砺波だったら、寒空でもチューブトップにコートで出歩くだろう。

「ほんっとに、大変やったんやから」と、同僚は桜色の唇をとがらせる。「お昼時は忙しいって、前も言ったやん」

「……悪い」

とはいうものの、方言で怒られるとなぜか嫌な気分がしない。いや、反省しなきゃいけないんだが、聞きなれない言葉遣いについ気をとられる。彼女……紺野葵(こんのあおい)は、中学のときに福岡から引っ越してきたらしい。まだ福岡弁（というのだろうか）は抜けきっていないようだ。

「ちゃんとした言い訳、用意してきてるん？」

「え……」

葵は腰に手をあてがい、ヒールの音を響かせて大またを開いた。

そんな威張ったポーズも、小柄なせいで特に迫力はない。
言い訳……か。一応、ちゃんとした理由はあるんだ。神の子孫がいきなりウチに来て、彼女が昔どう死んだのか長々と話していった。それを聞いているうちに、バイトのことはすっかり忘れて気づいたときには大遅刻。だが、こんな話、いえるわけがない。

「彼女の元彼のことで、ちょっとな」と、俺は言葉を濁した。嘘と本当の真ん中くらいだろう。

すると、葵は目を丸くして俺を見てきた。こうして目をぱっちりさせると、本当に猫みたいだ。猫じゃらしでも持ってくれたら様になりそうだな。

「彼女おるんや」ぽつりと彼女はそう漏らした。なんだ、意外だったのか？　「どれくらい、付き合っとうと？」
「え？」

こういうこと、聞かれるもんなのか？　俺は今まで誰かと付き合ったことはないし、そもそも表の世界では薄っぺらい人間関係しか築いてこなかった。こういう会話になったことがない。どこまで話したらいいのかもよく分からない。
まあ、質問に答えていればいいか。

「一週間……くらいかな」
「なんや、バリ短いやん」

なぜか彼女は、あはは、と笑い出した。とがった八重歯がちらりと見えた。
バリ――葵はよく使うのだが、どうやら、すごい、という意味らしい。

「悪かったな、短くて」
「あ、そういうことやないよ。ごめん、ごめん」と、葵は俺の腕をつかむ。「ね、今からどっか行かん？」
「は？」

どっかって？　いきなり、なんだ。彼女の話をすると、誘われるのか？

「なに、その顔。遅刻して人に迷惑かけた奴のする態度？」
「……悪い」

それを出されたら弱い。何も言い返せない。俺ががっくりと頭を垂らしてそういうと、葵は弾けたような笑顔を浮かべた。どうやら、完全にからかわれている。

「あ、そうや。夕飯、おごってよ。そしたら、許してあげる」

パン、と両手をあわせて、葵は頭を傾けた。ウェーブがかった短い茶髪が、ふわりと揺れる。
俺はそんな彼女をじっと見つめ、違和感を覚えた。一瞬、自分がどこにいるのか分からなくなった。彼女は、あまりにも『普通』だ。しばらく迷子のような気分を味わってから、ふっと思い出す。――そうだ、ここは日向の世界。俺はこっちに引っ越してきたんだった。人身売買も、カインも、全てが幻の世界。俺はもう、ここでこっちに住む人間と、『普通』の関係を築いていいんだ。ただの高校生のフリをする必要はない。今の俺は、ただの高校生なんだから。

「ちょっと？」気づくと、葵はいぶかしげな表情で俺の顔を覗き込んでいた。「おごるのそんなに嫌なん？」

「え、あ……いや」

いきなり、黙り込んだらそう思われても仕方ないか。これじゃ、ドけちの器の小さい男に思われるな。確かに、お金はないけど……嫌ではない。なにより、『普通』のことをずっとしてみたかった。

「そうだな。夕飯、おごるよ」

「お。やった！」

葵は両手でガッツポーズ。まるで子供みたいな仕草に、つい笑ってしまった。一挙一動、全てが……違う。なぜか、新鮮な気分になる。彼女は何も知らない。俺を、ただのバイト仲間だと思ってる。カインだった俺のことも、カインだということを隠して『普通』のフリをしていた俺のことも知らない。彼女は、カインを辞めてからの俺――ただの『藤本和幸』しか知らない。

不思議な感じだ。そして、決して嫌な気分じゃない。世界は何も変わってないのに、まるで平和だ。自分がクローンだということも、全て妄想のように思える。本当に、人身売買なんて起こっているんだろうか。そんな気すらした。

世界は、人の目を通して無限に姿を変える。だから俺が変われば、世界も変わる。でもそれはただの幻覚にすぎない。俺の心境の変化が生み出した錯覚だ。人身売買は起こっている。俺はクローンだ。世界は……終焉の危機にある。

でも、せめて……ほんの少しでいい。一瞬だけでも、それから目をそらしてもいいよな。そんな気持ちが生まれていた。ちょっとでいい。錯覚に溺れて、全てを忘れる時間がほしい。そう望むのは、いけないことだろうか。

「といっても、まだ三時やんなぁ」

赤い皮のベルトの腕時計を見て、葵は首をかしげた。身に着けているものも本当に今時の女の子だ。って、俺、おっさんみたいだな。

「買い物、行く？　それとも、映画観る？」

「そう、だなぁ」

買い物に、映画……か。俺は顔がほころんだ。いたって、『普通』だ。

「なんなら映画観て、買い物つきあうよ」

「お、いいやん！　そうこなくっちゃ。あたし、観たい映画あったっちゃんね」

言って、葵は歩き出した。その後姿を見つめ、俺は目を細める。

彼女は銃を持ったことがない。まして、人を殺したこともない。

『創られた』存在でもない。裏社会の存在すら知らない。なにより、彼女は世界を滅ぼさない。――『普通』の女の子だ。それが、新鮮だった。

＊　＊　＊

玄関と部屋をつなぐ廊下。そこには浴室、トイレへの扉と、そしてキッチンがある。小さなキッチンだけど、砺波ちゃんと二人で使うには十分だった。廊下中にカレーの香りと、焼きたての紅茶クッキーの芳香がただよっている。二つが混ざって妙な匂いになってしまっているけど……あとで換気すればいいよね。

「ところで」私は冷蔵庫を開けると、二パックぎっしりつまったさくらんぼを見つめた。「こんなにさくらんぼ買ってどうするの？」

「だ・か・ら、和幸をおちょくるのよ」

隣から、ソーダの缶を片手に砺波ちゃんがそう答える。実に得意げだ。それにしても、こうして腰をかがめて砺波ちゃんを見上げると……目がいくのは、その太もも。ふわふわとしたミニスカートは、もう少しで下着が見えそうだ。こっちが恥ずかしくなって、私はあわてて視線をそらす。

「おちょくるって、さくらんぼで？」

冷蔵庫を閉じると、背筋を伸ばして砺波ちゃんに首を傾げた。そういえば、デパ地下でもさくらんぼのことで曽良くんと盛り上がっていたな。一体、さくらんぼがどうしたというのだろうか。

「だって、夕べ、和幸とヤってないんでしょう？　なら、まさにチェリーじゃない」

「チェリー？」

「『さよならチェリー』改め、『がんばれチェリー』よ」

ケタケタ笑って砺波ちゃんは私の横を通り過ぎ、部屋の中へと向かっていった。結局、さっぱり分からなかった。

「カーヤ、カーヤ！」

「！」

ベッドで昼寝していたはずの曽良くんの声がして、私は振り返る。曽良くんは砺波ちゃんと入れ違いに部屋からでてきて、私の元へかけよってきた。その手には……

「かっちゃんから、電話」

目を輝かせて曽良くんは私に携帯電話を差し出す。確かに、携帯は小刻みに震え、サブディスプレイには和幸くんの名前が表示されている。私は慌てて曽良くんの手から携帯を取ると電話に出た。

「バイト終わったの！？」

思わず、いきなりそんな質問を口にしていた。

「あ……ああ、そうだけど」

いけない。明らかに和幸くんは不審がっている。人数は少ないとしても、サプライズパーティなんだから。ばれないようにしなきゃ。

「今から、帰るの？」と、なんでもないかのように平静をよそおう。

「え？　あ……いや、ちょっと寄り道してからな」

寄り道？　今から？　私は顔をしかめて、曽良くんにアイコンタクト。曽良くんは、どうしたの、と口パクで言ってきた。

「寄り道って、どこに……」

「悪い、電車来たから切るな」

「え！？」

電車？　確かに、言われてみれば駅のアナウンスのようなものが聞こえる。それに、騒がしい。

「あの、和幸くん、どこに行く……」

「とりあえず、バイトはクビになってないから。それを知らせようと思って」

「え、あ、うん」

段々と雑音がひどくなる。耳に刺さるような、鉄と鉄がこすれる音が聞こえてきた。電車が到着したのだろう。

「じゃあな」

「え！」

そして容赦なく、電話は切られた。私はあっけにとられて硬直する。お昼の電話のときと同じだ。なんだか……一方的すぎない？

「かっちゃん、どうしたの？」

曽良くんが小首をかしげて聞いてきた。私はゆっくりと携帯をおろしながら、首を横に振る。

「今から寄り道するって」

「寄り道？　どこに？」

「聞けなかった」

詳しく聞いても怪しがられちゃうし。勘付かれたらサプライズじゃなくなっちゃう。でも、帰ってきてくれなきゃ始まらないし。難かしいなぁ。

「まあ、そのうち帰って来るんだし。のんびり待とうよ」

曽良くんはアヒル口をにぱっと開き、私の肩をぽんぽんと叩いた。曽良くんの笑顔を見ると気が和む。私は微笑して頷いた。

「ねえ、カヤ！」

今度は砺波ちゃんの声が部屋のほうからした。キッチンの用事はもう済んだし、私はコンロの火が止まっているかちらりと確認してから曽良くんと一緒に部屋に向かった。

和幸くんの部屋……男の子だというのにきちんと片付けられている。曽良くんが寝転がっていたせいでベッドはぐちゃぐちゃだけど。それ以外はきっちりしている。ベッドと向かい合うようにおかれた二人掛けソファも真っ白で汚れもないし。その間にある白い小さなテーブルも、新品みたいに光沢がある。A型……なのかな？

「なに、砺波ちゃん？」

「あんたのイケメンボディガードだけどさ」

砺波ちゃんは窓をほんの少し開けて、外を眺めていた。確か、あそこからは駐車場が覗けるはずだ。私は「望さん？」と答えを返しつつ、砺波ちゃんに歩み寄る。

「本当に、ずっとあそこで待ってるわけ？」

「うん」

私もちらりと駐車場を見下ろした。ベランダにでればもっとよく見えるのだが……何分、ベランダには得体の知れない大きな穴が開いていて、危なくて足を踏み出せない。ちょっと穴を覗けば階下のベランダがしっかり見える。一体、このベランダに何があったんだろうか。和幸くんに聞いても「老朽化だ」なんて説得力のない言い訳をされるし。

とにかく……今は、駐車場だ。砺波ちゃんと私の視線は、白い軽自動車と青いクーペに挟まれた黒の高級車に注がれていた。マンションの駐車場で浮いた存在のその車には見覚えがある。おじさまの自家用車であり、今は望さんが私の送り迎えのために使っている車だ。昼間、砺波ちゃんたちとの待ち合わせ場所にもあの車に乗って

きた。そして今は、望さんが一人であそこに乗っている。じっと停車したままで。

「九時まで、ずぅっと？」

砺波ちゃんは、呆れたような、不審そうな、どちらともつかない表情を浮かべて私に言った。九時はおじさまから提示された私の門限だ。

「うん」それしか言えない。私だって居心地が悪い。ずっと望さんを一人で外に、それも車内に放っておくなんて。でも、これでも譲歩したほうなのだ。最初は、部屋の扉の前でずっと立っている、とまで言ってきた。それをなんとか、二階、一階、エントランス、そして駐車場……と交渉したのだ。

「ふうん。暇なイケメンね」

一体、興味があるのかないのか。結局、砺波ちゃんはそんな気がない返事をしてその場を去っていった。残された私は、再び視線を駐車場に停まる高級車へ向ける。

「椎名望（のぞむ）、だよね」

「え！？」

背後からの声に私は驚いて振り返った。いつのまにいたのだろうか。気配を全く感じなかった。そこに立っていたのは、真剣な表情の曽良くん。その視線は私を超えて、駐車場へ向けられている。

二歩、三歩、と足を進め、彼は私の隣に立った。真面目な曽良くんの横顔は、かっこいいというより美しい。横を向いていると、高い鼻が特に目立つ。シルエットにしたら、間違いなく外国人に見え

るだろう。まつ毛も長いし、肌は透き通るようにキレイだし……と、じっと見つめていると、茶色い瞳がいきなり私のほうへ向けられた。

「かっちゃんの言うとおり、嫌な感じだった」

「え……望さん？」

嫌な感じ？　私はつい渋い表情を浮かべていた。和幸くんが望さんのことを嫌っているのは知っている。曽良くんまで嫌いになっちゃったのかな。でも、二人は直接話したりはしていない。一応、遠目で望さんを紹介したけど、それだけだ。なのに、嫌な感じを受けたんだろうか。見た目かな？　髪型といい服装といい、遊び人のような様相なのは否定できないし。私だって、最初に望さんと会ったときは正直戸惑った。ボディガードにはとても見えなかったから。

すると、まるで私の心を読み取ったかのような曽良くんの質問が飛び出した。

「本当に、カーヤの護衛なの？」

「え！」と私は目をむく。後ろめたいことはないのになぜか慌てて言葉を続けた。「もちろん！　護衛だよ」

何を言い出すんだろう、いきなり。よっぽど曽良くんも望さんを嫌いになってしまったのだろうか。望さんも同性からは嫌われるタイプなのかな。

曽良くんは窓のふちに体をあずけ、睨むような視線を望さんの乗っている車に向けた。

「にしては……まるで守ろうとしているようには見えなかった。あれは、監視だ」

「どういうこと？」

独り言のような曽良くんの言葉を私は聞き逃さなかった。一歩足を踏み出し、曽良くんの顔を覗き込む。

「ねえ、カーヤ」彼の唇がゆっくりと動いた。そして、あの深みのある茶色い目が戻ってくる。

自分から覗き込んでおいて、いざ視線があったら萎縮してしまった。それほど、曽良くんの雰囲気はいつもと違った。この感じ……そう、なんとなくおじさまに似ている気がする。獲物を逃がさない――そんな肉食動物の気迫。

「もう少し、人を疑わなきゃだめだ」

「！」

思いもよらない言葉が曽良くんのアヒル口から飛び出していた。返す言葉が見つからない。なんでそんなことを言うの？　曽良くんからそんな言葉、聞きたくはなかった。

私たちはただ見つめあった。曽良くんの瞳は、私に的を絞って動かない。もちろん、相手は曽良くん。怖くはなかった。ただ、気圧されていた。蛇に睨まれた蛙。私はまさにそれだと思う。つい忘れてしまいがちだけど、彼もカイン――裏世界の『無垢な殺し屋』なんだ。

そんな張り詰めた雰囲気が私と曽良くんの間に漂う中、突如として甲高い声が響いた。

「やったー！　エロ本みっつけたぁ。カヤ、こっち来て一緒に読もうよ」

な……なにやってるの、砺波ちゃん？　一瞬で緊張の糸がきれた。ぎょっとして砺波ちゃんに振り返る。彼女の手には、古ぼけた妖し

げな本が。表紙には、扇情的なポーズをとる裸の女性。それが分かった途端、顔から火がでそうになって、慌てて私はまた窓のほうに顔をやる。――今度はさっきとは全く別の理由で。

もう、なんてものを見つけちゃうの、砺波ちゃんは。読みたくないよ。

「ほらね」

眉を曇らせる私に、穏やかで柔らかい声が投げかけられた。いつもの曽良くんの声色だ。振り返ると、曽良くんがフッと微笑んでいた。

「人は信用できないでしょ」

「……」

冗談めいた一言。それが、破廉恥な本を持っていた和幸くんに対するものか、それを掘り出した砺波ちゃんに対するものか、私は分からず苦笑した。

頭の中

「信じられん！　ねえ、分かった？　京子が太一を殺すなんて！」

映画館を出て興奮した様子でそう語る葵に、俺は失笑する。同じような会話があちらこちらから聞こえてくる。それほど、衝撃的なラストだった。個人的には……二時間も二人の恋愛について語っといて、ラスト五分で嫉妬で頭が狂ったヒロインが主人公を殺す。こんな映画、金を返してほしいと思う。

パンフレットが並ぶ売店に見向きもせず、葵はさっさとエスカレーターへと向かった。この六階建ての建物は、最上階が映画館でその下は全てショッピングモールになっている。下りのエスカレーターに迷わず足を進めるということは……宣言どおり、これから買い物をする気満々なんだろう。

「えらく期待を裏切る映画だったな。いろんな意味で」と俺は半笑いでつぶやく。

「なあ、純愛ものを期待しとったよね？　だって、トゥルーラブとよ、題名。殺人事件とは思わんやんなぁ」

葵は興奮冷めやらず、エスカレーターに後ろ向きで乗りながら俺に同意を求めてきた。そんな姿勢で乗るものだから、葵は一瞬体のバランスを崩してよたついた。俺は手を貸そうと慌ててエスカレーターに乗って彼女の傍によった。が、そのときにはすでに葵は手すりをつかんで体制を持ち直していた。とりあえず、ホッと安堵したが……どうも、葵は危なっかしい。ちゃんと前向いて乗れよ。そう注意したくなった。

「まぁた、題名に騙されたわあ」

難しい表情を浮かべて葵は腕を組んだ。俺の心の声が聞こえたのか、前に体を向け大人しくエスカレーターに乗っている。

「予告とか観てから選ばないのか？」

後ろからそう声をかけると、葵は顔だけ振り返り八重歯を見せた。

「どんな話か分かったら、おもしろくないやん」

「そう……か？　少なくとも、俺は……」

ハッピーエンドかどうかくらい、知っておきたい。俺はその言葉を喉の奥に押し込んだ。それは、映画に対する感想じゃない。そう分かったからだ。

俺はちらりと横を見た。長いエスカレーターに面して、一点の曇りもない透き通った大きな窓が張り巡らされている。もう外は暗くなっている。室内のほうが明るいせいで、窓はトーキョーの景色よりも俺自身をはっきりと映し出している。

せめて……結末を知っていれば、こんな不安と戦わなくていいのに。窓に映った俺は、そんな疲れた顔をしていた。

「あ、あれ、可愛い！」

「え？」

いきなり葵がまた騒ぎ出し、俺の腕をひっぱった。って、おい、エスカレーターでひっぱるか？　残り六段を葵に引きづられるようにして駆け下り、そのままの勢いで俺は「紫苑」という名の、黒い壁に囲まれたアパレルショップに連行された。

ぼんやりとした間接光でライトアップされる店内は、まるでカフェみたいな雰囲気だ。黒い木材の棚が並び、そこにふんわりとした

雰囲気の服が並んでいる。足元を見れば、パステルカラーのヒールの靴が一定の間隔を置いて連なっている。葵は目を輝かせて棚から棚へとぴょんぴょん飛び跳ねるように物色をはじめた。実に楽しそうだ。俺はこのままぼうっと突っ立ていればいいのかな。砺波によく買い物はつき合わされたから、待たされるのは慣れている。

にしても……と、俺は改めて店内を見回す。確かにお洒落だとは思うが、こんなに薄暗い照明でちゃんと服の色が分かるのか？　光によって見える色が変わってくるんだぞ。

「何かお探しですか？」

「え！？」

いきなり後ろから声をかけられ、俺は弾かれたように振り返った。店内に並ぶ商品とよく似たスタイルの、ふわふわとした白い服を着込んだ若い店員だ。取ってつけたような笑顔をはりつけている。

いや、お探しって……どう見ても、この店に男用の服はないだろ。俺が女に見えるのか？

「お構いなく」と適当なことを言って、その場をやりすごそうと足を踏み出す。すると店員は、まるでバスケのディフェンスのような軽やかな動きで俺にはりつき、不自然な高い声で尋ねてくる。

「彼女さんにプレゼントですか？」

「！」

葵のほうへ向かおうとした足が止まった。それをチャンスと思ったのか、店員は一段とわざとらしい笑顔を浮かべる。

「クリスマスも近いですしね。サイズはおいくつですか？」

「サイズ……」

「S、M、Lとありますが」

馬鹿にしてるのか。それくらい知ってる。俺は苦笑した。

「あ、もしお分かりでなかったら、フリーサイズもありますので。彼女さん、どういう感じがお好みですかね？」

マシンガントークとはこういうことか。俺に返事をする隙すら与えず、店員はてきぱきとした動きで傍の服を二、三着取り出して俺に見せてきた。

「こういうフェミニン系ですかね？　それとも、ちょっとセクシーな感じですか？」

俺はとりあえず、差し出された服を一瞥し――だが、ろくに見ず――首を横に振った。

「サイズも好みも知らないんで」

「はい？」

そんな返事が来るとは思っていなかったのだろう。まるで銃がジャムったように店員は言葉を詰まらせた。

彼女の服のサイズ？　好み？　『普通』の彼氏なら、知ってるんだろうか。

「和幸ー！」

こちらも、たんぽぽの綿毛のような白い服を手に携えて俺に駆け寄ってきた。だが、今度は店員じゃない。客だ。というか、葵だ。

「どう？　これ、似合う？」

モデルのように腰をくねらせ、葵は持ってきた服を自分の体に当ててみせた。シンプルな白を基調としただぼっとした上着。四角く開いた襟元に、橙や赤などのカラフルな糸で刺繍がほどこされている。

「ああ、彼女さんいらしてたんですね」と隣に居た店員が砺波以上に高い声で言った。

「いや、彼女じゃ……」

言おうとして途中でやめた。別に店員にそれを説明する必要はない。

「なにかありましたら、お声をおかけになってくださいね」

そういい残し、店員は違う獲物へと向かっていった。「何かお探しですか」という上擦った声が離れたところから聞こえてくる。

「彼女やって」と、葵ははにかんだ笑顔を浮かべた。俺は肩をすくめる。そう思われても仕方ないよな。こういうことは……彼女とするもんだ。

「で、どう？　似合う？」

葵は今にも飛び跳ねそうな勢いではしゃいでいる。女ってのは、本当に服選びが好きだよな。ファッションてのは、それほど重要なんだろうか。ステータス？　個性？　プライド？　見栄？　自己表現？　砺波もちょっとでも服に文句つけようものなら、みぞおちに思いっきり拳をいれてくるもんな。

カヤは……どうなんだろう。女だもんな。ファッションには興味あるよな。どういう服が好きなんだろう。そういえば、あまりあいつの私服を見たことがない。会うときは大体学校で、いつも制服だし。それか……俺が貸した砺波の服。ようやっと、昨日のデートで私服が見れたくらいだよな。それも、一気に二着。最初のミニスカートのワンピースもよかったけど、俺は『誘拐』したときの清楚な格好のほうが……

「おーい、こら。なに、黙っとうとよ？　変なら正直に言ってくれていいんよ？」

ハッと気づくと、葵が上目遣いで見つめていた。俺は苦笑して「悪い」と謝る。つい、ボーっと違うことを考えてしまう。失礼、だよな。

「そうだなぁ」と、まるでファッション評論家のように偉そうに腕を組む。実際にはファッションなんてさっぱり分からないが。とりあえず、似合うかどうか主観で言えばいいんだよな。

だが……服を当てている葵をじっと見つめ、しばらくすると俺はまた別のことを考えていた。葵を見ているようで、実はそうじゃない。気づけばいつだって、俺は違うことを考えている。

それが葵にバレる前に、とぽつりと俺はつぶやいた。

「似合うよ」

「ほんと！？」

「……ああ」

カヤによく似合うと思った。

＊　＊　＊

「和幸、趣味とかあると？」

葵は「紫苑」と書かれた紙バッグを手に、くりっとした瞳をらんらんとさせて和幸に尋ねた。後ろから「ありがとうございました」という元気のある声が聞こえる。二人は振り返りもせずに、ショーウィンドウに挟まれた通路を歩いていく。あたりはカップルや若い女性客がわいわい話しながら歩いている。たまに向かってくるほかの客とぶつかりそうになりながらも、二人は並んで足を進める。

「趣味……」

和幸は、聞き覚えのあるその単語に苦笑を浮かべる。今朝も同じような質問をされたな、と肩の凝った朝食を思い出す。

「特にない」と、結局同じ答えを返す。

「ええ！？　そんなわけないやん！　なんかあるやろ、普通」

その言葉に、和幸は鼻で笑う。

「普通、はな」

「興味あることとか、ないと？」

「興味……ねえ」

どうしてこっちの世界の人間はそういうことばかり聞くんだろうか。和幸は疲労感を覚え、肩をまわした。

そのときだった。突如ある物が目に入って足を止める。

「ん、どしたん？」葵も遅れて足を止めた。和幸がじっと見つめている物を見上げると、顔をしかめる。

「なん、それ？　展覧会？」

店と店を区切る壁に貼られているのはポスターだった。どうやら、ヨーロッパの美術館が保有している絵画がいくつか出張してくるようだ。その美術館の名前もしっかり書いてあるのだが、和幸にはぴんと来ない。だが、巨大なフォントと派手な色からして、おそらくは有名な美術館なんだろう。そもそも、海外からわざわざ呼び寄せるのだ。有名でないわけはない。

「会場は……上野の美術館やな」

感心がなさそうな間延びした声で葵はつぶやく。こんなのどうでもいいから、早く次の店に行きたい。それが正直なところだが、一体何を探しているのか、和幸はポスターを注意深く凝視している。

「行きたいと？」とりあえずそう尋ねると、和幸はたった今意識が戻ったかのようにハッとしてこちらに振り返った。

「え？　なに？」

こんな近くで聞こえてないわけはないだろう。ぼうっと別のことを考えていたに違いない。葵はムッとした表情で、語調を強めてもう一度質問を繰り返す。

「この展示会、行きたいん！？」

「いや……」言って、和幸は頭をかく。「カラヴァッジオの絵はないかな、て思って」

探してたんだ、とつぶやいて和幸はポスターに再び目を戻した。聞きなれない単語に、葵は眉をひそめる。

「カルパッチョ？」

その返しに、和幸は思わず噴出した。それも聞き覚えのある言葉だ。何を隠そう、同じ言葉を今朝言ったのは自分だ。

「カラヴァッジオ。イタリアの画家だよ」

受け売りの言葉で訂正すると、和幸は歩き出す。葵は、へえ、と感心して目を丸くした。

「なんや、和幸って絵画に興味あるんや」

葵はとことこと和幸の後をおいかけ、尊敬の眼差しで和幸を見上げる。すると和幸は、え、と顔をゆがめる。

「興味……？　俺が、絵画に？」

まさか、と言い掛ける和幸に、すかさず葵が言葉をはさむ。

「だって気になるっちゃろ、カルパッチョ」

「……カラヴァッジオだって」

「どっちでもいいやん。興味あるなら、一緒に行かん？　展示会」

「え……」

突然の葵の誘いに、和幸は一瞬きょとんとした。展示会がある、じゃあ一緒に行こう。葵としては自然な流れのつもりだったが、彼にとっては意外だったようだ。彼は一つ間をおいて「いや、いいよ」と微笑した。

「そ。行きたくなったら、連絡してね」

とりあえず、次につながる一言を葵は残す。和幸は、ああ、と穏やかに答えた。

その横顔を、心持身(こころもち)をかがめながら葵は見つめる。目立ってかっこいいわけではない。今時のイケメンにはあてはまらない。はっきりいって特徴もない。ただ、よく見れば整った顔立ちで、女だったら「美人」にあてはまっていただろう。そしてなにより、笑顔が清清しくて魅力的。それを見ただけで、彼の内面の優しさが伝わってくるようだ。若干女顔のさわやか君――それが葵が友人に彼を説明するときの表現だった。バイト中はろくにしゃべったことはない。ただ、細かいところまで気が回り、覚えも早い。自分のほうが先輩なのに、彼に助けられていることもしょっちゅうだ。その上、肝が据わっているのか、危ない客が暴れだしても冷静に対処できる。頼もしい、の一言だ。

そして……と、葵はちらりと彼の二の腕を見つめた。今は服で隠れているが、バイト中に半そでをまくるとたくましい二の腕が顔を出す。それを見るのが、今の葵の何よりの楽しみだった。いわゆる、二の腕フェチ。葵は十分自覚している。そして彼の二の腕は、ばっちり彼女のタイプだった。

「で、和幸は何か買いたいもんないと？」

実際のところ、葵は絵画に興味はない。さっさと次の話題……というより、次の店に行きたかった。

「買いたいもの……かあ」と、和幸は明後日の方向を見つめ、しばらく黙った。そしてなにやらしばらく考えてから、「マカロンってブランド分かるか？」と尋ねる。

「マカロン？」

葵は目をぱちくりとさせた。そして聞く必要もないだろう、と苦笑する。マカロンといえば、今若者に大人気の靴専門のブランドだ。上品さの中にも可愛さのあるデザイン。シックな色からパステルカラーまでそろっている。特にトーキョーの女子高生の間では大ブームだ。

「もちろん！　バリ人気やん」と元気よく葵は答える。すると和幸は間髪居れずに次の質問をなげかける。

「どこに行ったら買える？」

聞かれて、葵はきょとんとする。

「なんで？　マカロンって女の子の靴しか置いてないよ？」

「ああ。シンデレラには靴が必要らしくてな」

何を言ってるんだろう。葵は怪訝な顔で首をかしげた。だが、和幸は気にする様子もなく、微笑を浮かべて歩いている。

もしかして……と、葵は冷笑する。

「彼女に買うん？」

刺すような視線を向けると、和幸は「いや、まあ」と照れながらそっぽをむいた。まさか、シンデレラとは彼女のことか。葵はつまらなそうに目を細めた。彼女にとって、おもしろい話ではない。二の腕はもちろんだが、顔も雰囲気も葵の好きなタイプだ。彼女がいる、と聞いてがっかりしたが、一週間と聞いて希望がわいた。一週間くらいの薄い付き合いなら、まだ自分がつけいる隙はあるだろう。そう思ったからだ。だが……もし、彼が彼女にぞっこんだった場合は別。今まで彼女の存在をほのめかすようなことは一切なかったか

ら、てっきりそこまで浮かれていないのだろう、と踏んでいた。
並んで歩く二人の間にしばらく沈黙が続き、葵はある策を思いつき、口を開いた。

「じゃ、マカロンのお店行って……和幸の部屋で夕飯食べん？」
「は？　俺の部屋？」ぎょっとして和幸は立ち止まる。すると葵は猫なで声で袖にすがるように懇願する。
「いいやん！　和幸、一人暮らしなんやろ？」

客が少ない時間帯は、唯一二人がバイト中に世間話をできる。和幸が一人暮らしで、焼き鳥屋の近くに住んでいることはそのときの会話でリサーチ済みだった。

「いや、さすがに部屋は……」としぶる和幸に、葵は腕をつかんでもう一押し。
「マカロンの店、焼き鳥屋の近くにあるんよ。やけん、いっぺん戻らないかんと。やったらさ、そのまま和幸の部屋で夕飯食べたほうが効率的やんか」

まくしたてられ、和幸はあっけに取られた。果たして葵の主張は的を射ているのか。あまりにも勢いよく熱弁されたので、判断しかねていた。
一方の葵は、爛々とした瞳で迷っている和幸を見つめる。マカロンの店なんて本当はどこにでもある。このショッピングモールにも入っているのは知っている。
でも、葵には嘘をつく必要があった。一発逆転するにはどうしても部屋に上がりこむ必要がある。彼女がいようがいまいが、男なのには代わりはない。それこそ、自分がつけいる弱点だ。そして、もう一つ。自分は彼の弱みを握っている。

「遅刻して迷惑かけたのは、誰やったっけー？」

クスッといたずらっぽく笑って、葵は止めを刺した。

頭の中（後書き）

しばらく、一話ずつの長さは長めになるかと。長すぎでしたら、ぜひ一言頂ければ修正いたしますので。

エレベーターと嘘

「電話もつながらないし……どこに居るんだろう」

電源がはいっていないか、電波の届かないところにあるため……無機質な女性の声は、そんな決まり文句を読み上げる。今日一日で、耳にたこができるほど聞いた。カヤは携帯を力なく耳から離すとがっくりと肩をおとす。もう八時を回っていた。門限は九時。あと一時間で帰らなくてはならない。その焦りで、カヤは始終部屋の中を歩き回っていた。

一方砺波は、あまりにも遅い帰りに飽き飽きしてベッドに転がっている。はだけたスカートをなおす気力すらないようだ。下着が見えるスレスレのところまでスカートがあがっている。

「もう、帰んない？」やっと砺波が発したのは、ため息交じりのそんな言葉だった。

「そろそろ、トミーがそう言うと思ったよ」

ソファであぐらをかいていた曽良が、呆れた笑顔を浮かべてそうつぶやく。待つことは苦にならない性（さが）の彼とは違い、砺波は動いていないと落ちつかない性格だ。ここまでじっと待つというのは、もしかしたら彼女は初めてかもしれない。いや、よくここまでもったものだ、と曽良は感心すらしていた。

「あとちょっとだけ」カヤはピタリと足をとめると、携帯を抱きしめながら砺波に訴える。が、砺波の気持ちはもう決まっていた。

「帰る！」

はっきりとそういうと、砺波は勢いよくベッドから飛び降りる。これ以上待つ気はさらさらない。苛立った表情と乱暴な動作から、それがはっきりと伝わってくる。

「待って、砺波ちゃん」

ベッドの横に置いておいた赤いバッグを取り、帰る支度を始めている砺波の腕をカヤはすがるようにつかんだ。

「ね、あと三十分？」とカヤは小首をかしげて不器用に笑った。男だったらこの可愛らしい仕草に再考したかもしれないが、砺波に効くはずはない。鼻で笑って顔を横に振る。どこか勝ち誇ったようにも見えるその笑顔に、これっぽっちも心が動かされていないことをカヤは悟る。それどころか、床においてあったカヤのハンドバッグまで手に取ると、逆にカヤの腕をつかんだ。

「あんたもいい加減、諦めなさい！」

「ええ！？　待って、あと三十分だけ！」

必死にねばろうとするカヤの言葉に、砺波は青筋を立てる。

「三十分待ったところで、八時半！　なにができんのよ、箱入り娘！」

「！！」

ぴしゃりと言われ、カヤは言葉を失くした。あっけにとられてぽかんとするカヤの顔を見つめ、砺波は満足げに微笑む。

「分かればいいのよ」さらりとそう言うと、今度はソファでくつろぐカインのリーダー代理に振り返る。「片付け、よろしく。パパ」

「そう言うと思ったよ」

パパ……砺波が嫌味っぽく放ったその言葉に、カヤはハッとする。そうだ、曽良なら。カヤはすがるような目で曽良を見つめる。

「曽良くん、砺波ちゃんを止めて！」

今のカインのリーダーは曽良だと和幸から聞いた。それなら、砺波は曽良の部下のようなもの。曽良の言うことなら聞くのではないか。そう期待したカヤだったが……彼女は分かっていなかった。カインノイエのルールとは別に、砺波と曽良の間には揺るぐことのない力関係が存在していることを。

曽良は努力する気すらないような諦めきった表情をうかべる。

「それ、無茶ぶりっす。おやすみ、カーヤ」

「ええ！？　リーダーなんじゃ……」

「ウチの家訓は弱肉強食、実力主義。さ、帰ろ、帰ろ」

わめくカヤに聞く耳もたず、砺波はずんずんとカヤをひっぱりドアへと歩を進める。実に乱暴だ。よくもここまで待たせてくれたわね、といわんばかりの怒りよう。砺波にはもう説得のしようがない、とカヤは諦め抵抗をやめた。足をもたつかせながら、砺波に引っ張られて部屋をあとにする。

「今日はありがと、曽良くん」

そんなしょんぼりとしたカヤの声だけが部屋に残り、そしてドアが勢いよく閉められた。残された曽良はひらひらと手を振りながらため息をつく。

「俺なら……」とつぶやき、そして口をつぐんだ。誰もいない部屋で言ったところでどうなる、と苦笑する。

＊　＊　＊

「へえ、結構いいとこ住んどうっちゃんね」

葵はエントラスにはいったところであたりを見回した。俺は、そうかぁ、と苦笑する。エントラスはいたって普通だ。橙色の壁に囲まれた小さなスペース。そこにそれぞれの部屋の郵便受けがあって、奥にエレベーターがある。

俺はとりあえず自分の郵便受けに何もないことを確認すると、葵の荷物――紙袋二つ――を左手にエレベーターへと向かった。

「ごめんね。荷物持たせて」

葵は俺のあとについてきながら、そうつぶやいた。

「一つは俺のだよ」エレベーターのボタンを押し、俺は右手に持っている紙袋の一つを掲げる。その隅には小さく、「ｍａｃａｒｏｎ」と書かれている。まさか俺がこんなブランドものを買うとは……我ながら気持ちが悪い。

「彼女の、やろ」

葵はにやりといたずらっぽく笑んでそう訂正してきた。だから……茶化されるのは慣れてないんだよ。うまい返し方も思いつかずに、エレベーターの扉をじっと見つめる。すると特に待つこともなく、あっさりと扉が開いた。どうやら、ここで停止していたようだ。

「何階なん？」と葵は軽やかにエレベーターに乗り込むと、階数ボ

タンの前で身をかがめた。
「三階」遅れて乗り込んで、俺はそう答える。一体何が楽しいのか、葵は嬉しそうにボタンを押した。小柄で猫顔。おまけに一挙一動が幼い。子猫だな。

エレベーターの扉が閉まり、重低音と共に上へと動き出す。若干だが重力を内臓で感じた。
奥に備え付けられている鏡にもたれかかると、階数表示板を見上げる。確かに、このマンションは高校生一人が住むには良すぎるほどの物件だ。だが……どうも、エレベーターの動きが遅いんだよな。
ぼんやりそんなことを考えているときだった。

「いった……！」

急に葵が刺すような鋭い声をだし、左目を抑えた。

「どうした？」
「コンタクト……変なとこいって」

コンタクトだったのか、葵？　思わず、そんなことを口にしそうだった。俺は荷物をその場に一旦置いて、痛そうに目を押さえる彼女に近づく。

「大丈夫か？」
「ダメ」

即答だった。よっぽど痛いのか？　俺は裸眼だからよく分からないが……そもそも、コンタクトを入れる時点で痛まないのか不思議だ。

「手、どけて」
「うん」苦しそうな声で葵はそう答え、ゆっくりと抑えていた手をはずした。
俺は若干膝を折り、顔をのぞきこむようにして葵の目を見つめる。
「なんか、痛いんよ。どこにあるか見つけてくれたら……」
「どの辺か、分かるか？」俺は葵の目元に親指をおき、じっくりと左目を見つめた。
「分からん」
泣きそうな葵の声がエレベーターに響いた。痛そうだけど……それらしいものは見当たらない。俺はさらに顔を近づけ、食い入るように白目の部分を見つめる。すると、ふと、猫目石（ねこめいし）のような深みのある瞳が俺をじっと見てきた。
「おい、葵。違うほう見ててくれないと探せない……」
「探さんでいいと。嘘やから」
「は？」
嘘？　なにがだ？　俺が眉をよせると、いきなり葵の手が伸びてきて俺の首に回ってきた。そして、やっと自覚する。コンタクト探しに夢中で気づいてなかった。葵の顔がありえないほど近くにある。
「え、おい……」戸惑う俺に、葵は顔をさらに近づけてくる。
ちょっと待て。これって……そういう流れか？
「待てって！」と、とっさに葵の両肩をつかむ。
そのときだった。

エレベーターが微弱に揺れ、扉が開きだすのが目の端で見えた。機械的な低い音がして、葵は「続きは部屋やね」といたずらっぽく囁いた。

「！？」

一体、何を勘違いさせてしまったのか。俺は愕然として葵を見つめる。葵はグロスで輝く唇を笑みで緩め、目を爛々と輝かせて俺を見つめていた。――期待の眼差しだ。それに気づいて一気に頭が冷えた。同時に罪悪感を覚えて顔をしかめる。いくら俺でも、何を期待しているかくらい分かる。身に覚えはないが、気があると思わせるような態度があったのかもしれない。彼女はいる、てはっきり言ったはずなんだが……いや、関係ないか。

「葵……」と俺は真剣に彼女を見つめて、そういうつもりはない、と言いかけた。

だが、思いもしなかった甲高い声がそれを邪魔した。

「なにしてんの！？」

それは、聞き覚えのある声だった。

俺と葵は、ほぼ同時に振り返る。そこには――開いた扉の前には、見慣れた人物が立っていた。

「砺波……！？」

そして、その隣には呆然と突っ立っているカヤがいた。

お帰り

これ、どういうこと？　私は、未だに目の前の光景が信じられずにいた。

エレベーターの中で何してるの？　女の子の肩をつかんで、顔を近づけて……『続きは部屋』！？　その子、誰？　偶然エレベーターで乗り合わせた子？　ううん、違うよね。知らない子と、エレベーターでキスしようとしないもの。

和幸くんは私の姿を認めると、慌てて女の子から離れてエレベーターから出てきた。私は思わず後ずさった。自然と視線が地面に落ちる。

「なんで、ここに……？」

それが、彼の最初の言葉だった。私は返す言葉が見つからなかった。今、質問に答えなきゃいけないのは私じゃない気がした。

＊　＊　＊

うつむき黙りこくるカヤをかばうように、ずいっと砺波がカヤと和幸の間に割って入った。キッと鋭い目つきで和幸をにらみつけると、オペラでも歌うかのように大きく口を開けて怒鳴りつける。

「なんでここに？　こっちのセリフよ！　なんでエレベーターの中でちちくりあってんのよ！？　発情期の猿か、あんたは！」

「ちちくり……そんなんじゃねぇよ。お前はどいてろ」

「はっ！　どかなきゃいけないのは、そこの泥棒猫でしょう！？」

両手を腰にあてがい啖呵を切ると、砺波はエレベーターから丁度

出てきた葵を指差した。
カヤは砺波の後ろで、おそるおそる葵を見つめる。さっきはあまりのことで顔もよく確認できていなかった。エレベーターが開いたら、二人組が顔を近づけて見詰め合っていた。男のほうが和幸だと分かった瞬間、カヤの頭は真っ白になった。

――他に女でもいるんじゃないの　。

タイミングよく砺波の声が蘇り、呆然とした。嘘からでた真。そんな諺が思い浮かんだ。
エレベーターで和幸と見詰め合っていた少女は、小柄で華奢で愛らしい。大きな瞳のつり目。ほんのりと赤い頬。ふわふわとしたウェーブがかった茶髪。ショートパンツからのぞく足は今にも折れそうなほど細い。きっと、こういう子を見ると男の人は守りたくなるんだろう。そう思わせるような少女だ。
葵をとらえる視界がだんだんとゆがんでいき、たまらなくなってカヤは目をそらした。ここで泣きたくない。それだけは意地でも守りたいプライドのように思えた。

「一体誰よ、あんたは！？」

砺波の怒号が通路に響き渡る。葵は砺波の迫力に気圧され、ビクッと体を震わせた。両手に携える三つの紙袋が、ガサッと音を立てる。
和幸は、おい、と声をあげて葵をかばうように砺波の前に立ちはだかる。

「葵に噛み付くなよ、砺波」
「はあ！？　あおい？」
「バイト先の友達だよ」と和幸はちらりと葵に目をやる。すると砺

波は、「あっそう」と演技じみた口調でつぶやく。その声色はいたって落ち着いている。表情もまるで菩薩のように穏やかで、さっきまでの勢いが嘘のようだ。

和幸は、嵐の前の静けさだ、と確信した。砺波とは長い付き合いだ。どういう怒り方をするのかも大体分かっている。本気でキレるときの砺波は、こうして一度不気味な落ち着きを見せる。そして、嵐は唐突にやってくるのだ。激しい雷と豪雨とともに。

砺波が微笑を浮かべてすうっと息を吸い込んだ。和幸は、来る、と直感して後ずさった。

「こっの……」と、丁度砺波が怒鳴りかけたとき。葵が明るく可愛らしい声を出した。

「あ！　もしかして、和幸の彼女さん？」

「！」

出鼻をくじかれ、砺波は大きく口を開けたままぽかんと静止した。しかも、葵の人差し指はどう見てもカヤではなく自分に向けられている。どうやら、カヤではなく自分を和幸の彼女だと思っているようだ。それもそうか、と砺波は冷静に思った。ぎゃあぎゃあ騒いでいるのは自分で、カヤではない。この状況を見たら、間違いなく自分が嫉妬に狂うガールフレンドに見えるだろう。苛立ちに恥ずかしさも加わって、顔が熱くなるのを感じた。人の気も知らないで……と、その人差し指をへし折りたくなった。

だが、問題はそこではない。砺波は、ふつふつとこれまでにない怒りがこみ上げてくるのを感じた。爆発寸前の苛立ちが蓄積していく。そしてダムは決壊する。一気に――

「あんた、どういう神経してるわけ！？　彼女いるの知ってて手だしてきたわけ！？　てか、よく平気そうな顔でつったってるわね！　少しくらい、動揺したらどうなの！？　その鼻へし折って、分か

らせてや――」
「砺波、いい加減にしろよ！　誤解だ！」
とうとう暴れだした砺波の肩を必死に押さえながら、和幸は声を荒らげた。葵はまるでいきなり猛獣に出くわしたかのように、顔を真っ青にして後ずさる。
「いい加減にするのは、あんたでしょ！」砺波の勢いは衰えず、その矛先は和幸に向けられる。「五時間も待たせて、土産に女連れ帰ってきて！　何様のつもり！？　いつから、そんなご身分になったわけ！？　しかも、エレベーターの中でフライングスタート！？」
「五時間？　何言ってんだ？」
「ああ、もう信じらんない！　わたしはあんなもの見るために、五時間も待ったわけ！？」
砺波はそう吐き捨てると、和幸を殴るような勢いで突き飛ばし、「カヤ！」と振り返った。じっと黙ってうつむいていたカヤは、ビクリとして顔を上げる。
「和幸の彼女はあんたでしょう！　なに黙ってんのよ。さぼってないで、口動かしなさいよ！　楽してんじゃないわよ！」
「……あ」
砺波の血走った目が睨むようにカヤを見つめている。さわがしい言葉の応酬が急におさまり、月夜に静けさが戻った。集まる視線を感じ、カヤはたまらくなってうつむいた。きっと、和幸も自分を見ている。目を合わせるのが嫌だった。
「カヤ、どうした？」と優しい和幸の声がカヤの耳に入ってきた。いつもと変わらない声。それが余計につらい。どうしたもこうした

もない。なぜ、まるで心配しているような声色で尋ねてくるのか。優しい言葉が腹立たしく思えたのは初めてだ。せめて、必死になって言い訳を始めてくれたらマシだったかもしれないとカヤは思った。キスしようという現場を見られたのに、自分にフォローもないし、さっきから葵をかばってばかりだ。どうなっているのかさっぱり分からない。何を言えばいいのかも分からない。

「へえ。和幸の彼女、外人なん！」

「え」

唐突に、通路によく通る声が響き渡った。カヤはハッとして顔を上げる。砺波の背中を超えた向こうに、葵が興味深そうに自分を見つめていた。

「ニホン語分かると？　ないすとぅみーちゅー？」

「！」

限界だ。カヤはこみ上げてくるものを抑えるのに精一杯だった。今、一言でも口にしたら泣き出してしまう。そう確信すると唇を噛んで葵から目をそらす。

そんなカヤの様子を横目で見つめ、砺波ははらわたが煮えくり返るのを感じた。こちらはとうに限界は過ぎていた。なんで、わたしが……と思いつつ、カヤの代わりに怒りを全部ぶちまけることを決意する。バッと葵に顔を向きなおすと、まくしたてるように怒鳴り散らす。

「言葉わかんないのは、そっちのほうでしょ！　なんなのよ、その似非（えせ）方言は！？　どうせ、男の前でだけ方言だしてんでしょ。性根腐ってんのよ、泥棒猫は！」

葵は怒りに震えた。子供みたいな可愛い顔して、この女はどういう性格をしているんだ。さすがにここまで言われては黙ってはいられない。葵は顔を真っ赤にして、肺に一気に酸素を吸い込むと「似非やないんですけど！？」と、かすれるほどの高い声で言い返した。

「あたしは福岡出身ばい！」

「どうでもいいわよ、そんなこと！　一生いらない情報だっつーの。興味ないわよ！」

「はっ！？」

ケンカをふっかけておいて、興味がない？　言っていることが無茶苦茶だ。葵は憤怒にわなないた。

「さっきから、あんたなんなん！？　そもそも人のこと、泥棒猫って失礼やん！」

「本当のことじゃない。文句あるなら、聞くわよ。どうぞ？」

砺波は得意げに微笑むと、腕を組んで胸を張る。葵が逆上してくれたおかげで、こっちのペースだ。その時点で勝利を確信していた。

「どうぞって……だ、大体、あんた彼女じゃないんでしょ！？　黙っててよ！」

すると砺波はクスッとあからさまに嘲笑する。

「ほぉら」と腰に両手をあてがうと、憐れむような目で葵を見つめる。「本性でたら、しっかり共通語じゃない。設定忘れちゃった？　方言はもういいの？　ぶりっこまで中途半端でどうすんのよ」

自分が猫だったら背中の毛は総立ちだっただろう。葵は苛立ちで

頭から湯気がのぼる思いだった。

「むっかつく！」

なんとか搾り出せたのは、そんな薄っぺらい言葉だけだった。

「砺波も葵も、いい加減にしろよ。いろいろ誤解が……」

一部始終疲れた表情で見守っていた和幸は、二人の口論が落ち着いたのを見計らってそう切り出した。

「誤解？」

砺波はさらっと髪を後ろにはらって、へえ、と不敵に微笑んだ。突き刺すような視線で和幸を睨みつけると、口頭試問のように質問を繰り出す。

「じゃ、エレベーターの中で何してたの？　顔を近づけて見詰め合って？　キス以外にいい言い訳はある？」

その質問に誰よりも反応したのは、砺波の後ろでじっと黙っていたカヤだった。心臓が大きく飛び跳ね、体がびくんと震える。カヤの頭の中で、さっきの光景が思い浮かんだ。和幸の首に手をまわす葵。葵の肩をつかみ、真剣な顔で葵を見つめる和幸。その先――キスなんて、想像もしたくない。

「コンタクトだよ」と、カヤの苦悶をよそに和幸はさらりと答えた。

それを耳にして、カヤはハッとする。疲れと呆れははっきりと声色から伺えるが、嘘は感じられない。こういう状況で、巧みなアド

リブが彼にできるとは思えない。きっと、本当だ。

「コンタクト？」砺波は眉をひそめて馬鹿にするような口調で尋ねる。

「ああ。葵がコンタクトがずれたっていうから、様子見てただけだよ」

「コンタクトがずれた？　へえ」

砺波は鼻で笑うと、葵を睨みつける。葵はすました顔でそっぽを向いていた。その様子に、砺波は確信する。――やっぱり、泥棒猫じゃないの。そして、相変わらずの幼馴染にあきれ返った。恋愛となると、てんで勘がはたらかない。嘘と騙しあいの世界で生きてきといて、今更こんな手にひっかかるなよ、と砺波はため息をつく。

「にしても、古典的ねぇ」とつぶやくと砺波は葵の腕をつかみ、エレベーターのほうへひっぱった。

「なに！？」と葵は耳を貫くような声で叫ぶ。砺波は振り返る素振りすらみせず、エレベーターのボタンを押す。どうやらエレベーターは他の階へ移動していなかったらしく、すぐに扉は開いた。

「砺波、何する気だ！？」

怒り狂う砺波は何をしでかすか分かったもんじゃない。和幸はあわててエレベーターの前にたちふさがって、砺波の行く手を阻んだ。

「この女を追い出す……送っていくのよ」と砺波は何食わぬ顔で答え、葵をあごで指す。

「和幸、なんなん、この子！？」

葵は必死に砺波の手をふりほどこうと四苦八苦しているが、砺波の手はピクリともせずつかんでいる。葵の華奢な腕が折れるんじゃないか、と不安にさえなる。和幸は苦渋の色を浮かべて、諭すように砺波に言う。

「俺が送っていくから、お前は……」

その瞬間、砺波の中でかろうじて繋がっていた最後のか細い糸が切れた。

「あんたね！！」

今までで一番大きな甲高い声が響き渡る。砺波は勢いのままに和幸の胸倉をつかんで、睨みつけた。

「わたしに恥かかせないでよ！」

「は？　何の話……」

「ぐだぐだ言ってないで、さっさとカヤに弁解しなさいよ！　何、考えてんの！？」

声が裏返っていた。砺波は一気に言い切ると、和幸の胸倉から乱暴に手を離した。迫力に気圧され、和幸は力なくよたついて後ずさる。

そして――カヤに目をやった。ずっと大人しかった自分の彼女。じゃじゃ馬を抑えるので手一杯で、放っといていた。それでも、大丈夫だと思っていた。カヤは砺波とは違う。こんなことで変な誤解を起こすような短絡的な女ではない。そう信じていたからだ。うつむいて黙っているのも、てっきり癇癪を起こした砺波に怯えているだけだと思っていた。

だが……目があった途端、カヤはとっさに目をそらした。その表

情には、はっきりと拒絶の色が現れている。その瞬間、和幸はやっと気づいた。本当に心配すべきことは、ずっと幼馴染の怒りで隠されていただけだ、と。

「ほら、来なさい！　泥棒猫。ちゃんとしつけてやるから」

「痛っ！　離してよ！」

じっとカヤを見つめる和幸の後ろで、葵は砺波にエレベーターへひきづられるように連れ込まれる。騒がしい二人の声は、扉が閉まるその時まであたりに響き渡り、そして嘘のように消え去った。エレベーターが掃除機のように舌戦（ぜっせん）ごと二人を飲み込んだのだ。

そして、重苦しい沈黙だけが残される。ゾッとするほど冷たい空気。不気味なほどの静けさ。どこかの部屋から、テレビの笑い声がかすかに聞こえてくるほどだ。

うつむいたままピクリともしないカヤに、和幸はそっと話しかける。

「カヤ……何か言ってくれ」

我ながら、気が利かないセリフしかでてこない。和幸は嫌気がさした。でも、黙って待つよりはずっといいだろう。

和幸のその読みはあっていた。カヤは下を向いたまま、ぽつりとつぶやいた。

「……お帰り」

二人の言い分

お帰りって……俺は眉根を寄せた。カヤはずっと下を向いている。まったく俺を見ようとしていない。エレベーターから降りてからも、目が合ったのはたった一瞬。

「カヤ、どうした？」と俺が一歩近づき肩に触れようとすると、カヤは身をよじって後ずさった。行く当てのなくなった右手が宙をさまよっている。俺はその手をとりあえずポケットにつっこんだ。

「怒ってんのか？」

カヤは何も答えない。動きもない。

砺波は弁解しろ、と言っていた。でも……何をどう弁解すればいいんだ？　おそらく、さっきのコンタクト騒動なんだろうが……俺は全くの無実だ。確かに、あと少しで有罪だったかもしれないが。ギリギリ止めたんだ。俺は本当にコンタクトを探していただけだし、やましいことなんて微塵もない。

まあ砺波は荒れ狂うほど完璧に勘違いしていたし、同じものを見たカヤも誤解していて当然か。でも、ちゃんと事情はさっき話したんだけどな……聞こえてなかったのか？

「さっきの……キスっぽく見えたらしいアレなんだけど」って、どういう説明だよ。だが、他にうまい言い方も思いつかない。「あれは、葵のコンタクトを探してたんだ。ずれて目が痛かったらしくて」

「……」

静まり返る通路。カヤは反応する気配すらない。

「葵は、バイト仲間でさ」とりあえず今日のあらましを話す。「今日、遅刻しただろ。で、迷惑かけたから出かけることになって……」

「……」

ダメだ。うんともすんとも言わない。せめて、うん、くらいは言ってくれれば救われるんだけど。

「とにかく……だから、映画観て買い物しよう、て話になってな。それで……なりゆきでウチで夕飯食べることになって一緒に帰ってきたんだ」

「……」

息苦しい。なんだ、この空気は。思わず俺はため息をついた。なんなんだよ。口もききたくないってことか？　誤解だって言ってんのに。なんだか、砺波のほうがマシだったな。あれくらい怒鳴り散らしてくれたら、少なくとも何考えているのか分かる。

「なぁ、カヤ。せめて、こっち見てくれ」

顔も見れないんじゃ、怒ってるのか泣いてるのかも分からない。顔を覗き込もうと近寄るが……俺が一歩近づけばカヤは後ずさる。十七になってまで、はないちもんめをやる気はない。多少乱暴になっても……と、カヤが後ずさるより先にすばやく近づくと、腕をつかむ。

「嫌……！」と小さい悲鳴が聞こえたが、このままじゃ埒があかないんだ。俺は無理やりひきよせると、顎に手をかけ顔をあげさせた。抵抗する暇も与えなかった。ハッと目を見開いて俺を見つめる瞳。じんわりと涙が浮かんでいた。堪えるような、悔しそうな、そんな表情で俺を見上げている。

「どうしたんだよ？」

とりあえず出てきたのは、そんな言葉だった。するとカヤは涙を一粒こぼし、俺を突き放して後ずさった。カヤの力は決して強いわけではない。こらえようと思えば、そのままカヤを拘束できた。でも、流石にできなかった。そんなことしても、余計に泣かせるだけだとそれくらい俺にも分かる。

カヤはまたうつむいて、頭をおさえた。まるで体調が悪いかのように、荒い息遣いをしている。

「カヤ、大丈夫か？」

まさか、実は調子が悪いんじゃないか。そんな予感がして、俺は努めて優しく声をかけた。すると、やっとカヤが自ら顔をあげた。夜の海のような潤んだ瞳がまっすぐに俺に向けられる。少なくとも目を合わせる気になったようだ。前進か。とも思ったのだが、それで安心するのは早計だった。

「大丈夫じゃない。全然、大丈夫じゃない」

興奮した様子で、カヤはそうつぶやいた。唇が震えている。

「なにが、大丈夫じゃないんだ？」

一定の距離を保って――約三歩ほど――俺は怪訝な表情でそう尋ねる。あくまで、落ち着いて。

「エレベーターのことなら、お前が思っているようなことは何も……」

「キスだったかどうかは問題じゃないの！」
「は？」
勢いよく飛んできたカヤの言葉に、俺は顔をしかめる。他に弁解しなきゃいけないことは思いつかないんだが。それが分かったのか、カヤは必死に訴えるようにたたみかけてくる。
「ああいう状況になることそのものが、おかしいんだよ。なんでエレベーターに二人きりで乗ってるの？　こんな時間になんで部屋に呼ぶの？」
「だから、言っただろ。遅刻した侘びもかねて……」と俺が言いかけると、カヤは興奮した様子で続きを奪い取る。
「映画、買い物、夕飯？　どうして、あの子と！？」
どうしてって……おい、何回言えばいいんだよ。
「だから！」少し苛立って声がうわずった。「あいつは俺のフォローをしてくれて……」
「でも、和幸くんと付き合ってるのは私だよ！？」
「……は！？」
初めて、カヤの言い分が全く理解できなかった。会話のキャッチボールって、こんなんだったか？　球を投げたらグローブが返ってきたみたいだ。顔をしかめてぽかんとしていると、「私だって」とカヤは視線をそらす。「そういうことしたいのに」
「……」
まるで子供みたいな言葉だった。俺は肩透かしを食らって絶句した。カヤの言葉だとは思えない。なんだよ、つまり葵と出かけたこと自体に頭にきてるってことか？　自分がしたいことを葵がしたか

ら？　まさか、そんな理由でずっと黙り込んでたんじゃないよな？
そんなことで泣いてたんじゃないよな？

「じゃ、そう言えばいいだろ」

若干、呆れた。心配して損した。だが、カヤは「言えないよ！」と食い下がる。

「だって、いっつも忙しそうだし、疲れてるし」
「忙しくないし、疲れてない」

そりゃ、バイトと学校があるし、暇な時間が有り余ってるってわけにはいかないけど……言ってくれれば、カヤのために時間を割くことはいくらだってできるんだ。
てっきり俺は、本間に養女にはいったことでカヤは忙しい日々を送っているんだとばかり思ってた。だから、誘うこともしなかったんだ。

「不満があるなら、言ってくれなきゃわかんねぇよ」と、俺は落ち着いた調子で諭す。するとカヤは眉を曇らせた。まるで俺がひどいことを言ったような、ショックを受けた表情を浮かべる。

「不満なんてないよ」

おい……わがままにしか聞こえないぞ。流石に、じわじわと頭に血がのぼってくる。

「明らかにあるだろ。じゃなきゃ、なんであんな態度とってたんだよ？　ずっと黙りこくってうつむいて」
「それはだって、和幸くんが他の女の子と……」

「葵はバイト仲間だって言ってんだろ。何回言わせるんだよ！？ちょっと遊びに行っただけだろ。ものの数時間。それがなんなんだよ！？」

「その……ちょっとの間で、私がしたいことしなくてもいいじゃない！　私だって、和幸くんと映画観て買い物行ってご飯食べたい。我慢してたのに。なのに……なんで他の女の子と、そんな簡単に……！」

珍しく怒鳴ったカヤの声が通路に響いた。俺は面食らった。いつもの穏やかで包み込むような雰囲気はどこにいってしまったのか。目の前でわめいているのはカヤの姿をしたわがままな子供（がき）じゃないか、とさえ思った。言い分がめちゃくちゃだ。幼稚すぎる。カヤが何をしたいかなんて、言ってくれなきゃ分かるわけがないだろ。そこまで気にかけて生活しなきゃいけないのかよ？

「いいか！」と気づけば俺も負けじと怒鳴っていた。「カヤのことばかり考えてられないんだよ」

その言葉を放った瞬間、何かを封じていた蓋が外れた――気がした。意思とは別に、溜め込んでいた不満があふれ出てきた。止められなかった。

「俺だって、なんでもかんでも受け入れられるわけじゃない！　頭がパンクしそうなんだ。次から次へと……ちょっとぐらい、気晴らしでもしなきゃおかしくなる！」

言った。俺は自分で言ってハッとした。頭に血がのぼって出てきた言葉は……自覚していなかった本音だった。――それも、決してカヤに直接言ってはいけない本音だった。

「気晴らし？」と、カヤは顔をゆがめた。「なに、それ？　私と一緒にいると、気晴らしが必要になるの？」
「……違う。そういう意味じゃない」

さっと血の気がひいて一気に冷静になった。とんでもないことを口走ってしまった。取り返せるなら、そうしたい。でも……手遅れだ。カヤは、はっきりと聞いてしまった。俺の、『災いの人形（パンドラ）』への不満を。

「そういう意味じゃないなら、何？」
「……」

言えるわけがない。一緒に居るとつらいんだ、なんて。失いたくないって……そればかり考えてしまう。迫り来る『収穫の日』を思うと不安がおしよせる。絶対にお前を守る、といくら誓っても、俺は人間だから……弱い自分はいつまでたっても消えてくれない。
だから、それを考えなくていい時間がほしかった。カヤから……いや、カヤを失う恐怖から少しでも離れる時間がほしかった。そうでもしないと……身がもたないと思った。いざというとき、戦えないと思った。そのための、気晴らしがほしかったんだ。

「次から次ってなに？」
「それは……」

答えられずに俺は目をそらした。
それは、『災いの人形（パンドラ）』であるカヤの秘密だ。神の子孫が何かというと俺に放り投げてくる現実離れした事実。押し売りの定期購読みたいだ。ついで、で教えられたお前の正体に始まって、今度はお前の死に方だ。今朝、突然聞かされたんだ。お前はこれで十三回目の人生なんだろ？　過去十二回も、お前は殺されてきたんだ。しか

も、リストははっきりと言った。お前は……死んだら粘土に還るって。俺が抱きしめたその体も、何度も見とれたその笑顔も、全部跡形もなく消えて粘土に戻る。粘土だ。粘土になるんだ。小学校の図工でいじっていた、あんなものに、だ。そんな事実をどう受け止めればいい？　はいはい、と平気な顔して気にしないふりにも限界がある。お前が世界を滅ぼすかもしれない……それだけでもいっぱいいっぱいなのに。

なんて……カヤに言えるわけはない。『収穫の日』が訪れる前に『災いの人形』に正体をバラすと罰が下るという。どんな罰が下るかは分からないが、そんなリスクを負うことはできない。それに、言ってもカヤを苦しめるだけだ。知らないほうがいいこともある。カヤは知らなくていい。今は俺だけでいい。

俺はぐっと拳を握り締めた。

そんな俺を冷ややかな目で見つめ、カヤは悔しそうな表情で口を開いた。

「やっぱり本間に養女にはいったこと怒ってるんでしょ。本間のこと、気に入らない？」

「！」

そうじゃない！　と声を大にして言いたかった。

俺とカヤの間には、とてつもなく大きなピースが欠けていた。本音で言い合えば、話がかみ合うはずはなかった。『災いの人形』を会話に迷い込ませた俺のミスだ。

＊　＊　＊

「それとこれとは、話が違うだろ」と、和幸くんは落ち着いた様子で言葉を返してきた。でも、なんの説得力もない。もう、抑えきれないほど血がたぎっていた。気晴らしがほしいだなんて……あんま

りだ。

「違う？　問題はそれじゃない！」と私はみっともないほど声を荒らげた。「望さんのこと気に入らないんでしょう？　絵画の話なんて、本当はしたくないんでしょう？　オークションも行きたくないんでしょう！？」

次から次……思いつくことは山ほどある。私は和幸くんの生活に変化ばかりをもたらした。たくさん迷惑をかけてきた。カインだったときもそうだし、カインを辞めてからもそうだ。なにより、私は彼にカインを辞めさせた。彼の人生を大きく変えたんだ。そして、慣れない生活に彼を引き込んだ。極めつけは本間家。朝食のときの彼の落ち着かない表情ははっきりと覚えている。おじさまと話すときの彼は、始終居心地が悪そうだった。でも、それでも……まさか、『気晴らし』が必要なほどストレスを感じているとは思わなかった。緊張してるだけかと思ってた。言ってくれればいいのに。そしたら私だって、何かしてあげられた。わざわざ他の女の子に、救いを求めなくてもいいじゃない。

「椎名のことは否定しないけど……他は違う！」和幸くんは苛立った声をあげる。頭をかかえると、ため息混じりにつぶやく。「ちゃんと合わせようとしてる」

「合わせる？」

話せば話すほど、心の中に何か妙なものが渦巻く。息苦しい。気持ち悪い。喉の奥に毛玉がつまったようだ。吐き出したいのに、その方法が分からない。代わりに出てくるのは、怒鳴り声。

「合わせなくていいよ！　合わせる必要なんてない。望さんが嫌いならそれでいい。絵画の話も無視していい。オークションもドタキ

ャンしていい。おじさまに会わなくったっていい」
「だから、そういう問題じゃ……！」
「ねえ、和幸くん、無理してるの？」
「……」

和幸くんは何も答えず、疲れ果てた表情で私を見つめていた。答える気すら起きない……そんな感情が見て取れた。

「私のこと、本当は恨んでる？」気づけば、そうたずねていた。
「は！？」
「私と出会わなければ……カインを辞めなかった。慣れない生活に無理して合わせることなかった。窮屈なことしなくてよかった。気晴らしも……必要なかった」

途中から、声が震えていた。自分で言っててつらくなった。瞳の奥に溜め込んでいた涙があふれてくる。
会ったこともない私を恨むほど、カインの皆は和幸くんを大切に思っている。殺し屋だったことはいいとは思わないけど、少なくともカインだったころの和幸くんには素敵な家族がいた。血縁以上に強い絆で結ばれたお父さんと兄弟姉妹がいた。それを私は引き裂いたんだ。それで私が彼に与えたのは何？　カインの家族以上のものを与えられた？　ううん……居心地の悪い場所とストレスだけだ。無理ばかりさせてたんだ。

「……」

嫌な沈黙だ。和幸くんはしばらく何も答えなかった。苛立ったため息をつくと、「最悪だ」とつぶやいた。

「……もういい。冗談じゃない」

冷たく低い声ではっきりとそう言うと、私に背を向けエレベーターのボタンを押した。もう帰れ……そういうジェスチャーだろう。
でも、このままじゃ帰れない。だって――

「答えになってないよ！」
「……ああ、答えられないんだよ。それが、問題なんだよ！」

体を突きぬけ骨まで振動するかのような怒鳴り声。体に震えが走った。和幸くんを、初めて本気で怖いと思った。
呆然とその背中を見つめていると、彼は鼻で笑って振り返った。

「なんなんだよ、これ？　なんで言い合いになってんだよ？　少しでいい、普通のことをしたくなったんだ。それだけだろ」
「普通？」どうしても、聞き逃せない一言。私は震える唇を精一杯動かす。「普通ってどういうこと？　あの子とでかけるのが普通のこと？　じゃあ私はどうなるの？　私と出かけるのは普通じゃないの？」
「なんで、そうなるんだよ！？」
「私が普通じゃないから！？」

いい加減にしてくれ、と頭痛でもするかのように彼は頭をかかえた。でも、引き下がれない。だってそれは私にとってとてつもなく大きな意味を持っているから。

「私はなに？　普通じゃないならなに？　呪われた女？　悪女？　黒幕の娘？　それとも、大臣の娘？」

段々と、自分の感情が分からなくなってきた。体が得体の知れない何かに勝手に動かされているみたい。次に何を言い出すのか、自

分でさえも予想がつかない。それでも何の迷いもなく口が言葉を発する。

「結局、和幸くんも他の皆と同じじゃない！」

和幸くんの表情が一変した。エレベーターに向けていた体をこちらに向けると、迷子の子供でも見つけたかのような困惑した顔で見つめてきた。

「カヤ、なにいってんだ？」

「和幸くんは言ってくれたじゃない！　何があっても急に態度変えたり避けたりしないって」

それは……廊下で初めて言葉を交わしてから二ヶ月が経ったときのこと。ストーカーの相談をした翌朝、教室に会いに行った私の腕をつかんで彼は私を屋上に連れ出した。そのとき、初めて言ってくれたんだ。心配するな、大丈夫だ、て。

――急に態度かえて避けたりしない。何があっても……

今でも昨日のことのように思い出せる。その声ははっきりと頭の中に残ってる。

私はその言葉が嬉しくてたまらなかった。初めて、両親以外の人からそんな心のこもった言葉を言われた。

呪いのことや、嫉妬や妬み……それがどこに行っても私を孤独にした。周りの視線はいつもよそよそしかった。どこに行っても見世物だった。ちやほやされるのは最初だけ。時間がたてば、異質な存在として遠ざけられる。ひそひそと囁かれる言葉に心は蝕まれ、容赦なく浴びせられる好奇な視線に身体が切り刻まれた。

決して、普通に扱われることはなかった。いつまでたっても、ど

こに逃げても、私は外人――よそ者だった。まして、普通に私を好きになってくれる人なんか居なかった。
だから、すごく意味があったんだよ。あの言葉に救われたんだ。
じっと彼を見上げる。和幸くんの表情からはさっきまでの剣幕は消え去っていた。代わりに、心配そうに私を見つめている。いつもの彼だった。

「いつから私……普通じゃないって思われてたの？」

私は涙を堪えてそう尋ねた。
丁度そのとき、空っぽのエレベーターが到着し何事もなかったかのように扉が開いた。

不正解

「カヤ……」

和幸くんはエレベーターに見向きもせずに、ゆっくりと歩み寄ってきた。後ずさりそうになった足をなんとかその場に食いとどめる。絶対に、答えを聞くんだ。

彼は私の目の前に佇んで、憂いに満ちた表情を浮かべた。そして……

「！」

気づけば私は彼の胸の中にいた。有無を言わさず、抱きしめられた。突然、容赦なく、力強く。さっきまであれほど怒っていたのに。この豹変はなんだろう？　私はどう反応したらいいか分からず、呆然としていた。彼は何も言わず、私の背中に回した腕に力をこめる。身体が一段と密着する。

「和幸くん？」

ケンカしてたんじゃなかったの？　なんで、こんなことになってるの？　私はまだ納得してないんだよ。話はついてない。何も解決してない。

なのになんで……気が安らいでしまうんだろう。心が落ち着いていく。胸が温かくなる。心臓が優しく鼓動を打つ。苛立ちが溶けていく。眠りに落ちるように意識がとろけそうになる。

身体の力が抜けていく。抗えずに私は目をつぶった。

だめだ。また、ごまかされちゃう。

「！」

私はハッと目を見開いた。――『また』？

心臓が収縮したように痛んだ。

そうだ。そういえば……夕べもそうだった。夕べも、こうしていきなり抱きしめられてキスされて、ごまかされた。悪魔なんじゃないか、と怯える私をねじふせるように抱きしめてきたんだ。それで、どうなったっけ？　どうもなってない。彼は、どうでもいい、と言っただけだ。何も解決していない。何も答えは出ていない。

それだけじゃない。

「あのときもそうだった」とぽつりとつぶやく。

カインノイエの『おつかい』のため、神崎の屋敷に帰ったとき。私は怪しげな警官に遭遇し、そして殴られた。気を失って目を覚ましたら、私は和幸くんの部屋でベッドに横たわっていた。――血だらけで。

何があったのか、と問い詰める私を、彼はやっぱりこうして抱きしめて……

「……ごまかした」

そうだ。全く同じだ。あのときも、夕べも、そして今も。いつも、答えは出ていない。こうして抱きしめられてうやむやにされてきた。

心臓が火がついたように熱くなっていく。血が全身を異常な速さでかけめぐる。

あの傷のことはどうだろう？　長谷川さんの一件で、誤って撃たれた胸の銃痕。大量に血が流れ、意識が遠のき、正直もうだめだと思った。目を覚まして飛び込んできた日の光を天国の入り口だと思ったくらいだ。なのに、傷は跡形もなく消えていた。なぜか、と問

い詰めると彼は言った。私の誕生日に全部話すって。でも……

「どうして、誕生日なの？」

「さっきから何言ってるんだ、カヤ？」

さすがに不審に思ったようで、和幸くんはひとまず私から身体を離すとじっと見つめてきた。

私は肩を上下に揺らして荒く呼吸し、彼をまっすぐに見つめ返す。

「いつも、答えてない」

「は？」

「和幸くんはいつも答えてない」

和幸くんはまるで耳が遠いかのように顔をしかめた。私は思いっきり和幸くんを突き飛ばした。精一杯の力をふりしぼって。

「カヤ！？」と和幸くんは後ろによたつきながら、驚いた声をあげる。その表情にはさっきのような怒りの色は見えない。あるのは、戸惑いだけ。

「ちゃんと答えて！　もう、ごまかされるのは嫌！」

砺波ちゃんよりもずっと高い声が出たんじゃないか、と思った。ここまで大きな声は出したこなかったから。音痴の子供みたいな、ひどく裏返った声がでてしまった。

「何を、答えてほしいんだ？」和幸くんは真剣な表情で、そう尋ねてきた。

何をって……思い返せば、たくさんある。何から、というほうが正しいだろう。私は緊張をおさえるように深呼吸して、ゆっくりと

口を開いた。
「どうして、私は血だらけだったの？」
「！」
和幸くんが目を丸くした。「あ」と弱弱しい声がその唇から漏れる。
何の話だ、とは言わせない。もうちゃんと分かってるのは、その様子からも明らかだ。
「あの夜、何があったの？」
「……」
四人もの警官の突然の死。私の体中にこびりついていた彼らの血。私はてっきり、全て和幸くんが引き起こしたことだと思っていた。私を守るために彼が四人全員を殺したのだ、と。彼を人殺しにしてしまったんだ、と罪悪感に押しつぶされそうにすらなった。でも違う。長谷川さんの一件で――怯えた表情で長谷川さんに銃を突きつける彼を見て、確信したの。彼はまだ誰も殺していない、て。だからこそ私は身体を張ってそれを止めたんだ。
けど、それなら誰？　誰が彼らを殺したの？　何があったの？
和幸くんは藤本さんにこう告げた。自分が駆けつけたときには、四人は死んでいた、と。でも、そんなことありえない。だって、私が気を失ってから和幸くんが駆けつけるまでの数分。その間に第三者が現れ四人もの男を殺して姿を消したというの？　それも私が全身に血を浴びるほどのことを。――不可能だ。不可解だ。
それに、和幸くんはあの事件を全く気にしていなかった。何があったのか、調べようともしていなかった。曽良くんだって言っていたじゃないか。それはおかしい、て。誰がやったか調べようともしないのは、犯人を知っているからだ、て。

だから、答えは一つ。きっと和幸くんは見ていたんだ。彼らを殺したのが和幸くんではないとしても……少なくとも、彼はその場に居合わせた。何が起きたのか、見ていたんだ。全部知ってるんだ。知ってて隠してるんだ。

「俺は……」と、やっと彼の口が動いた。私はじっと彼を食い入るように見つめる。お願い、答えて。そう心の中で祈りながら。

彼は苦悶の表情を浮かべてうつむいて、そして低い声でつぶやいた。

「俺はなにも知らない」

「え」

和幸くんは顔を上げ、真顔で私を見てきた。

「俺がかけつけたときには、警官は死んでてお前が倒れてた」

台本を読み上げるかのようにすらすらとそう言って、口を閉じた。きっと、藤本さんに報告したときと全く同じセリフなんだろう。なんとなく、そんな気がした。嘘のようには聞こえないが……説得力はなかった。じっと私を見据える真剣な眼差し。これ以上は聞くな。そんな無言のプレッシャーを感じた。

「それじゃあ……」と、彼の視線にたまらなくなって目を背ける。

「胸の傷は？」

「え」

私はぎゅっと左胸を押さえる。あの話題をもちかけることさえ、良心が痛む。彼は表にはださなくても、気にしているはずだから。傷をえぐるようでつらい。そもそも、なかったことにしようと持ち

かけたのは私なのに……調子のいい女だ。でも、聞かずにはいられない。気になって仕方がないの。不安でたまらないの。

過去が――和幸くんと歩んできた道が――濃い霧に覆われていることに、今頃気づいたんだ。このまま進んでいったら、得体の知れない場所に迷い込む。急にそんな恐怖に襲われた。

「どうして、傷が消えていたの？」改めて私は問うた。

「……」

返事がすぐ返ってくるわけはなかった。

「それは……」と彼は口ごもり、ため息をもらす。「言えないんだ」

怒鳴りあっていたときよりも重い空気だ。あたりの静けさがよけいに緊張を高める。

「言えないなら」私は覚悟を決めて彼を見上げた。「その理由を教えて」

「！」

「どうして、私の誕生日なの？」

「……」

一生言えない。そう言われたら、まだ納得できたのかもしれない。カインの秘密道具かな、とか子供じみた空想でこじつけられた。でも彼は言った。誕生日が過ぎたら全部話す、て。

「傷が消えたことと誕生日……何か関係があるの？」

その瞬間、和幸くんはつらそうに顔をゆがめた。今にも涙を流すんじゃないかとさえ思うほど、苦しそうな表情。今まで、こんな彼

を見たことはない。

「何を隠してるの？」

思わず、私はつぶやくようにそう尋ねていた。

「……」

彼は何かを言おうとして口を開き、そしてまるで声を失ったかのように戸惑った表情を浮かべた。結局、言葉がでてくる気配はなかった。

「そう」

それが答えなんだと思った。

私は浅いため息をもらし、棒のように立っているだけだった足を動かして彼の横を通り過ぎた。

そのときだった。すれ違いざま、彼は私の腕をつかんだ。いきなり重心を後ろにとられ、私はその場で足踏みをした。

「信じてくれ」

「え」

振り返れば、目を血走らせた彼が切羽詰った表情を浮かべている。

「頼む。信じてくれ」

「……」

「今はそれしか言えないんだ」

信じる。その言葉を聞いたとき、頭に浮かんだのは曽良くんの言

葉。

――もう少し、人を疑わなきゃだめだ　。

催眠術にかかったようだった。私は、その言葉に誘われるように首を横に振っていた。

「もう、分からない」

何もかも、分からない。心がぐちゃぐちゃだ。ここまで何も答えてくれない彼を、どう信じればいいのか分からない。まるで、ふられたような気分だ。もう、葵という少女がどうのという問題ではなくなっていた。

秘密が多すぎる。分からないことが多すぎる。唯一分かるのは、彼が何かを隠しているということだけ。

息苦しい沈黙の中、私はただ彼を見上げていた。まっすぐに、じっと……。その視線から、私がそれ以上何も話す気がないことを悟ったのだろう。彼は「そうか」と低い声でつぶやいて、ゆっくりと私の腕から手を離した。

「望さん、待ってるから」と視線を落として言うと、私はエレベーターへと歩を進める。いつのまにやら扉は閉じていた。ボタンを押すと、すぐさま扉は開く。狭い箱の奥でこちらを見つめているのは私だった。――鏡に映る自分。憐れむような目で私を見ている。

やめて。そんな目で見ないで。私はあなたじゃない。

なぜか、鏡の中の自分に向かってそんなことを考えていた。自分でも何のことだか分からない。やっぱり、私おかしい。

「カヤ」

エレベーターに乗り込み、ボタンを押そうとしたときだった。黙り込んでいた彼が駆け寄ってきて、閉じかけた扉を手で押さえた。
最後のチャンス。そう思った。私はじっと彼を見つめる。真実を教えてくれる気になったんだ、と信じて。

「カヤ、俺は……」

扉を押さえつつ、彼はかみしめるように言葉を放つ。

「お前を愛してる」

「！」

息を呑んだ。夕べ、コフィンタワーであれほど言えずにいた言葉を、彼はすんなり言い放った。やっと彼の口からそれを聞けた。嬉しいはずなのに。あんなに待ち望んだ言葉だったはずなのに。それは、今ほしい言葉ではなかった。

「答えになってないよ」

まるで条件反射のように、そんな言葉が涙と一緒にこぼれていた。
すると、彼は諦めたように鼻で笑って扉から手を離した。一歩後ずさり、疲れ果てた笑顔を浮かべてつぶやいた。

「悪い。俺の答えは、もうそれしか残ってないんだ」

どういう意味か分からなかった。私は何も答えず、エレベーターのボタンを押した。
今はただ、一人になりたかった。

カーヤは世界を滅ぼさない

エレベーターが下へ下へと進んでいく。それとともに自分の気持ちも沈んで、暗い闇のそこへとひきずりこまれていく。そんな気がしてカヤはその場にうずくまった。

今日は、曽良と砺波を呼んで、和幸の卒業パーティをする。バイトから帰って来た彼を驚かせて、疲れもふっとぶくらい喜ばせるんだ。そんなことくらいしか、自分にはできないから。

ドアを開けてあっと驚く彼の顔を楽しみにしていた。それだけだったのに。

「なんで、こんなことに……」

カヤの鼻をすする音が響いた。エレベーターの隅で体育ずわりをして膝に顔をうずめる。

途中から、会話は二人の手から離れていた。言葉が暴走して勝手に傷つけあっていた。

「こんなはずじゃなかったのに」

もはや、自分が彼になんと言ったかも思い出せない。一体どこから、話はずれていったのだろう。嫉妬に狂った自分は、余計なことを口走ってしまった。気にしなければよかったのかもしれない。答えなんて求めなければよかったのかもしれない。知らんふりをしていればよかった。気づかないふりでもすればよかった。和幸をただ信じていればよかったのに。

どうして、答えを求めてしまったんだろう。

和幸が何かを隠している。それも一つじゃない。きっと、些細なことじゃない。一体なに？　一体なぜ？　そう思ったら、カヤは沸

き起こる不安をごまかせなくなった。止まらなかった。
たとえ会えない時間がどれだけ増えたとしても、二人は強く繋がっていると思っていた。カインを辞めた彼との間に、もう隠し事はない。嘘はない関係にやっとなれたと信じていた。――それが裏切られた気がした。
葵とエレベーターの中で顔を近づけあっていた和幸を見た瞬間、彼への不信感が芽を出した。口論と疑問がその根をカヤの心にはりめぐらせ、そして曽良の言葉――人を疑えという助言が強力な肥料となり大樹へと成長させた。
カヤはぐっと腕をつかんだ。涙がとめどなく流れ始める。

「和幸くんも信じられなくなったら……私は……」

私は、独りだ。その言葉を、カヤは喉の奥に押し込んだ。このつらいとき、誰に相談すればいいのか分からない。誰の胸で泣いたらいいのか分からない。
ふと、コフィンタワーで見かけた、生と死の狭間に身を置く住人たちの姿が思い浮かんだ。この世界に居場所を見出せず、ただ『死』を待つことしかできない人々。
丁度、エレベーターが一階について扉が開いた。カヤはハッとして顔を上げる。ぽろりと涙が静かに落ちた。

「私だ」

放心状態でそうつぶやく。どこにいっても浮いてしまう自分。どの場にもピタリとはまらない自分。疎外感しか感じない世界。この世界に居場所がないのは自分だ、と気づいた瞬間だった。

＊　＊　＊

なんで、こうなる？　なんで、うまくいかない？
俺はカヤを追いかける気にすらなれなかった。壁にもたれかかってその場に座り込んでいた。もし、三〇一号室――エレベーターに一番近い部屋――のドアが開いて中の住人がでてきたら、俺を不審者だと思うだろう。住人が女じゃないことを祈るのみだ。ストーカーだと思われたらたまったもんじゃない。
押し黙るエレベーターの扉をじっと見つめる。カヤが戻ってきてくれるんじゃないか、なんて情けない希望を抱いて。

「かっちゃん」

死角から、空気をよまない明るい声が聞こえてきた。穏やかで滑らかな声色。――曽良だ。俺は顔を向けることもなく、「何してんだ？」とつぶやいた。

「こっちのセリフだよ」

曽良はそう答えると、俺の隣に同じように座り込む。
遠くから誰かが近づいてくる気配は感じていたから、特に驚かなかった。カヤと砺波が居た時点で、きっとこいつもいるだろうとは思っていたしな。

「どうしたの？」
「……」

話を聞くよ、と促すような優しい口調だった。さては、ある程度聞こえていたんだろう。あれだけ怒鳴りあっていたんだし、ここのマンションの防音はあまりよくない。もしかしたら、この階の住人全てに聞き耳を立てられていたかもしれない。
曽良に詮索するような気配はない。ただ、俺の言葉を待っていた。

俺は鼻で笑ってため息をつく。頭をこつんと壁にあてると天井を仰ぎ見た。

「何してんだろうな」と独り言のようにつぶやいた。

ただカヤを守りたいだけなのに。そのためについた嘘が彼女を傷つける。そのために抱えた秘密が彼女を引き離す。

答えてやれない。それが、こんなにつらいとは思わなかった。

「恋してるんだよ」

「！」

いきなり、けろっと曽良がそう言い放った。俺はあっけに取られて曽良に振り返る。曽良は相変わらずのアヒル口を広げて微笑んでいた。

「は？」

「やっと、彼氏彼女らしくなってきたじゃない」

「……いや、ケンカしたんだよ」

「うん、聞こえてた。特にトミーの声が」

「だろうな」

調子が狂うな。俺は顔をしかめて小首を傾げる。ケンカしたっていうのに、こいつの明るさはなんだ？　心配してるのか、面白がってるのか分からない。

まあいいか。曽良が何考えてるのか分からないのはいつものことだ。こいつらしい。

「で？」と、俺は声の調子を高くして切り出す。「なんでここにいるんだよ？　カヤや砺波まで」

曽良が通路の奥から姿を現したということは、つまり俺の部屋にいたってことになる。おそらくは、カヤも砺波もそうだろう。本来なら、なんで勝手に入ってんだ？　とか、どうやって入った？　とか怒鳴り散らすところだが……そういう気分でもない。

それにしても、今朝はリストが勝手にあがりこんでいたし、夜はこいつらか。いつから鍵というものは役立たずになったんだ。

「卒業ぱーちぃ」

唐突に、曽良の跳ねるような声が聞こえてきた。俺は、え、と目を丸くする。卒業ぱーちぃ……いや、パーティ？　それって前、筒井クリニックでこいつが思いつきで言い出したアレか？　確か、カヤも乗り気で……

「え」と俺は戸惑った声を漏らす。「今夜？　いや、でも俺、聞いてない」

「そりゃそうでしょ。サプライズなんだから」

曽良は呆れたように笑んだ。

「ずぅっと皆でかっちゃんが帰ってくるの待ってたんだよ。カーヤとトミーは一生懸命料理つくってさ。カレーとケーキ、クッキーとか。さくらんぼだって大量に買ってきたのに」

俺はただ唖然とした。意識が飛んだようだった。頭が真っ白だ。そして、おそらく顔面は真っ青。砺波が言っていたことがやっと理解できた。

「五時間も……待たせたのか」

「そろそろ六時間だけどね」

どっと疲れを感じた。罪悪感に胸が押し上げられる。曽良から目を離し、俺は正面を見つめた。今更、自分がやってしまったことの重大さがわかった。

――五時間も待たせて、土産に女連れ帰ってきて！

相変わらず、さりげなく的を射たことを言うよな、砺波は。俺は頭をかかえて、大きくため息をついた。

「最低だ、俺は」

曽良は何も言わなかった。否定してほしかったわけじゃないが、こういうときこそこいつのトンチンカンな返事がほしくなる。でも、そういうときに限ってこいつのアヒル口は大人しい。沈黙は肯定の表れか、興味がないから黙ってるだけか。曽良の場合、可能性は五分五分で分からない。

「それで？」と、やや間をあけてから曽良が落ち着いた様子で尋ねてきた。「泥棒猫さんは、大人しく帰ったの？」

俺は苦笑した。泥棒猫さん、ね。そこまでしっかり聞こえてたのか。さすが、砺波。よく通る声だ。

「ああ。砺波が送って行ったよ」

「トミーが！？　それ、大丈夫なの？」

「大丈夫だろ。『おつかい』でなければ人を傷つけたりはしないはずだ」

いくら、あいつでも。口には出さずに、そうつけくわえる。

「どうかなぁ」

心配そうに曽良がため息混じりにつぶやいた。砺波と俺以上に付き合いのあるこいつに、そんな不安そうな顔をされると……俺まで心配になってくる。そういえば、しつけてやるとかなんとか捨て台詞を吐いていたような……まさか、な。大丈夫だよな？

一応、無事に家に着いたか葵に連絡しようか。さっきのことも謝らなきゃいけないしな。特に、砺波の暴言を。電話……せめてメールで。いやでも、そんなことしたらまたカヤが……

「はあ」と、大きなため息がでた。

「どうしたの、かっちゃん？」

いや、と言って頭をかいた。なんて面倒なんだ。

「正直さ」と、俺は座りなおして姿勢を正す。「カヤがまさか、嫉妬するとは思わなかったんだ」

あいつは待たされたことについては、一言も言わなかった。きっと、帰りが遅かったことは怒ってないんだろう。頭に来たのは単に葵と出かけたから。心底、驚いた。落胆に近いショックがあった。カヤはそんなことで怒るような女だとは思わなかったから。しかも、あんなにひどく取り乱して……。

思えば、あの嫉妬さえなければ、こうしてケンカすることもなかった。どうして、カヤはあんなにムキになったんだ。

「バイト仲間とちょっと出かけただけだったんだ」と、なぜか俺は曽良に弁解を始めていた。まるで癖になったみたいだ。「なにもや

ましいことはしてない。なのに……」
「そりゃ、嫉妬するでしょぉ」
「え！？」

思わず、とぼけた声を出していた。驚いて俺は曽良に振り返る。こいつも男だ。分かってくれると思ったんだが……曽良基準（スタンダード）は予想不可能だ。

「俺の味方はいないのか？」冗談交じりに苦笑する。すると、曽良ははじけたように声をあげて笑った。
「嫉妬なんて可愛らしいじゃない」
「可愛いですむような嫉妬じゃなかったんだよ」
「幸せものぉ」

曽良はひじで俺をついてきた。ったく、こいつは……。俺は、あのな！　と声をあげる気にもならず、首を横に振ってため息をつく。

「俺は……カヤは、あれくらいで嫉妬するような奴じゃないって思ってたんだ」

まるで言い訳してるみたいだな。みっともない。それも、曽良に。恥ずかしくなって俺はそっぽをむいた。
すると、おもしろがるような軽い調子で曽良は言った。

「仕方ないよ。カーヤだって、普通の女の子だ」
「！」

その言葉に、思い切り心臓をつかまれたようだった。ハッと目を見開き、とっさに曽良に振り返る。

「普通？」と聞き返す俺の声は上擦った。曽良はそんな俺の様子に呆れた笑みを浮かべる。あぐらをかくと、何かを思い出すかのように明後日の方向を見上げた。

「デパ地下で大声で叫ぶし、くだらない嫉妬もする。カーヤは普通の女の子だよ」

「……」

普通……曽良があっさりといいのけた言葉に俺は動揺を隠せなかった。

――いつから私……普通じゃないって思われてたの？

カヤの責めるような問いかけが蘇る。

俺は曽良とは違う。曽良みたいに、あいつのことを普通と簡単には呼べない。あいつが世界を滅ぼす女だと知ったときから、もう普通とは思えなくなった。だって、普通じゃないだろ。神の子孫とか、世界の終焉とか、天使とか、使命とか、運命とか、『収穫の日』とか。巻き込まれた俺だって、もう普通じゃないだろう。

曽良がうらやましくさえ感じる。あいつのことを、心のそこから「普通の女の子」といえることがうらやましい。俺には、もうできない。これはこれで、もしかしたら嫉妬なのかもしれない。いや……悔しい。

「……カヤは世界を滅ぼすかもしれないんだぞ」

「は？」

「それでも、普通っていえるのかよ」

「……」

言わなくていいことをつぶやいていた。曽良に言う必要なんて微

塵もないのに。いや、きっと言ってはいけないことだ。なんで言ったのか、言ってどうするのか。自分でも分からない。八つ当たり、負け惜しみ、そんなものだったんだと思う。カヤを普通だとさらりと言った曽良に対抗したかったんだ。

俺は曽良の顔を見ることができなかった。すでに後悔していたし、自分自身に呆れていた。どうすりゃいいのかも分からなかった。どういうこと？　と聞かれたら自分はどうするつもりなのか。全部話すつもりなのか。一から説明する気があるのか。それすら決めていない。くだらないエゴで軽はずみに口にしていいことなんかじゃなかったのに。俺はどうするつもりなんだ。曽良を巻き込むつもりなのか。

しばらく、沈黙が続いた。通路を照らす蛍光灯の超音波のような音まで聞こえてきた。かすかに曽良の息を吸う音が聞こえて……

「カーヤは世界を滅ぼさないよ」

「！」

返ってきた言葉は、予想を大きく裏切るものだった。耳のすぐそばでドラを叩かれたかのような衝撃だった。いや、きっとそれ以上だ。その言葉は鼓膜から脳まで一気に突き抜けた。

俺は驚愕して曽良を見つめた。曽良は涼しげな表情を浮かべている。これっぽっちも言った言葉に疑いはない。そんな顔だ。まるで全てを見抜いているかのような瞳。

まさか……いや、そんなわけはない。でも……動揺する様子もなくこいつはあんなにはっきり言った。何の話だ？　と聞くこともしなかった。俺は眉根を寄せて、緊張する心を抑えて曽良に問う。

「曽良、お前……」

「うん、分かってる」と曽良は憂いに満ちた表情で俺の肩に手を乗せた。

分かってるって……俺は言葉も出なかった。そんな馬鹿な！　曽良もカヤの正体を知ってるっていうのか！？　なぜ？

「だから」と、曽良は言葉を続ける。「病院にいこう、かっちゃん」

「は！？」

病院？　俺はあっけに取られてぽかんとする。すると曽良は身を乗り出して、必死に騒ぎ出した。

「明らかに、心の病（やまい）でしょう！？　妄想癖、虚言癖！？」

「なっ……！」

「筒井先生にみてもらおう！　馬鹿以外なら治せるって言ってたから」

「……」

俺は口をあんぐり開けて動けなくなった。分かってるって……全然分かってねぇじゃねぇか！　どんな勘違いだよ、それは！？　一気に血がのぼった。さっきまでの緊張をどうしたらいいんだ！

「ふざけんなよ、お前！」と、俺は思わず叫んだ。

「はっ！　急に怒り出す……精神不安定！？」

「うっとうしい！」

苛立ちに任せるように俺は勢いよく立ち上がる。

「ただの冗談だ！」と吐き捨てるように言い放った。

「冗談？」

曽良はぽかんとして目をぱちくりとさせている。このテンション

をどうしたらいいの？　と戸惑っているみたいだ。俺はそれを見下ろして苦笑した。
妄想、虚言、か。そう思われても仕方がない。それが正しい反応だよ。普通は信じないよな。カヤが世界を滅ぼす人形だなんて。
「ああ、冗談だ」とおだやかに言う。「悪かった」
それと、ありがとな。心の中でそう付け加える。
――カーヤは世界を滅ぼさないよ。
真意は別として、その言葉……すげぇ勇気付けられた。急に気が楽になった。呪いのように肩にのしかかっていた重しが少し軽くなった気がした。きっと、大丈夫だ。そう思えた。根拠なんて何もない、いつもの曽良の戯言（たわごと）なのにな。
「カレー、食うか」と気を取り直して俺は曽良に投げかける。「つくってくれたんだろ？」
「俺は寝てただけだけどね。食べよう！」
こいつは、関心がないことにはつくづく捉われない。どうでもいいと思うことに対しては考えることもしない。そういうメリハリが（極端に）はっきりしているんだ。俺の『冗談』も、興味がない部類にふりわけられたようだ。すっかりさっきの会話全てを忘れたかのように目を輝かせて立ち上がった。頭はカレー一直線か。
「そうだ！」とアヒル口を目いっぱいあけて曽良は叫んだ。「チェリーカレー！」
「へ？」

いきなりなんだ？　チェリーカレー？　そんなものがあるのか？

「さくらんぼいっぱい買ったんだよ！」

曽良は期待に胸をときめかせる少年のような顔で、そう言ってきた。たしかに、そんなことをさっきも言っていたな。だが……

「だから、なんだ？」

「だから……チェリーカレー」

なんだろう、嫌な予感がする。そういえば、こいつのこういう顔も見覚えがあるな。確か、あれは小学校の理科の実験のとき。こいつは大量の薬品を混ぜて、毒ガス並みの危険な気体を発生させた。同じ班だった俺まで担任に叱られ、こいつはその間も楽しげに笑っていた。ああ、あのときの顔にそっくりだ。

つまり、そうか。そういうことか。

「混ぜるなよ」と、脅すような低い声でつぶやく。「さくらんぼをカレーに混ぜるなよ」

曽良はにんまりと気持ちの悪い大人びた笑顔を浮かべた。

「おいしいものを混ぜるんだから、大丈夫だよぉ」

「足し算じゃないんだよ、料理は」

「大丈夫だって！　かっちゃんは昔から心配性なんだから」

言って曽良はスキップするような軽い足取りで歩き出した。俺はその背中を見つめて、言われた言葉を反芻する。

「心配性……俺が？」

そんな自覚はない。でも、そうなんだろうか。曽良が能天気すぎるからそう感じるだけじゃないのか？　俺は心配しすぎ？　『災いの人形』のことも……思いつめすぎなのか？　――分からない。そもそも、明日どんな顔でカヤに会えばいいのかさえ、分からないってのに。

そうだよ。カヤと俺……大丈夫なのか？　あんなにひどい言い合いをしたのに。いや、それよりも問題なのは……俺が何も言えなかったこと、か。まさか、別れたりなんてことはないよな。まさか……な。

「……」

気づくと俺は考え込んでうつむいていた。心配性――馬鹿にしたような曽良のお気楽な声が頭に響く。

ダメだ。今、考えたって仕方ない。寝る前にでも電話してみようか。そのころには、お互い落ち着いているだろうし。きっとカヤも興奮しすぎただけだ。俺のことが信じられないなんて……ないよな。売り言葉に買い言葉、だよな。頭が冷えれば、分かってくれる。ちゃんと分かり合える。

今はそれよりも、俺はカレーを守らなくては。さっさと歩く曽良を追いかけるように足を踏み出す。

そのときだった。エレベーターの扉が開く音が後ろからした。

二度目の失踪

エレベーターの扉が開く音。和幸はハッとして振り返った。カヤが戻ってきた、とそう期待に胸を膨らませて。

だが、目に飛び込んできた人物にぎょっとする。というより、げんなりとした。

お決まりの細身のジーンズ。一本一本が鋼のような煌く黒い長髪。きりっと端正な顔立ち。和幸にとっては、男のくせに、と腹が立つほどよく手入れがされた眉。そして、和幸を苛立たせる余裕の微笑。

「椎名……」顔をしかめて和幸はつぶやいた。「サン」とぶっきらぼうに付け加えて。

「やあ、藤本くん。こんばんは」

言って椎名はひらひら手をふり、エレベーターから降りてきた。そして浮かない顔で首をかしげる。

「カヤちゃんはどこかな？」

「は？」

どこ？　突然の、そしておかしな問いに和幸は眉を集めた。カヤは、椎名が待っている、と言ってエレベーターに乗った。ということは、椎名のところに向かったはずなのだ。それなのに、その椎名がカヤの居場所を尋ねてきた。これはどういうことだ？　と慌てて口を開く。

「なんで――」

「あなたのところに戻ったんじゃないんですか！？」

後ろから唐突に飛んできた言葉に、和幸の言葉は遮られた。え、と振り返ると、曽良が緊迫した表情でいつのまにか和幸の傍に立っていた。

「は？」と椎名は彼らしからぬ戸惑った声をもらす。「何言ってるの？　僕はカヤちゃんを迎えに来たんだ。もうすぐ九時だし……変なメールが来たから」

忙しく今度は椎名に振り返ると、和幸は眉根を寄せる。

「変なメール？」

椎名は、そうそう、とおもむろに黒い携帯電話を取り出した。それを掲げると左右に小さく揺らして二人にみせる。

「『望さん、ごめんなさい。先に帰ってください』って。さては楽しすぎて帰りたくなくなったのかと思って連行しに来たんだけど」

「え！？」和幸と曽良の声が重なった。確かに椎名の言うとおり、それは変なメールだ。カヤはもうすでに帰ったはずなのに、先に帰って、とはどういうことか。和幸は気が焦って早口で告げる。

「カヤはもう帰ったぞ。あんたが待ってるからって言って」

「帰った？」

はあ？　と椎名は声をあげて頭をかかえる。「参ったなぁ」

「参った――」

「参ったじゃないでしょ！？　それじゃ、カーヤはどこ？」

またも和幸は曽良にセリフを奪われ、顔をしかめた。だが、それを気にしている場合でもない。とにかく、カヤが心配だ。

「落ち着いて、友人A君」

取り乱す和幸と曽良とは対照的に、椎名は余裕の表情で間延びした声を出す。和幸には逆に落ち着き払った椎名が不思議で仕方ない。カヤがいなくなったのに、ボディガードである男がなぜ余裕の顔をしていられるのか。それを見ていると、和幸の焦る気持ちが余計に苛立った。

「カヤちゃんも子供じゃないんだから」言って、椎名は携帯のボタンを押し始める。「とりあえず、電話電話」

＊　＊　＊

電話の着信音が暗い路地に響いた。肩に触れるか触れないかのショートヘアが揺れ、少女は立ち止まる。皮のハンドバッグから折りたたみ式の携帯電話を取り出すと、サブディスプレイの光が少女の顔を照らした。すっきりとした鼻筋、ふっくらとした唇が浮き上がる。

「望さん」と、少女はサブディスプレイに表示された名前にため息を付いた。「ごめんなさい」

携帯に出る素振りすら見せず、そのまま腕を下ろす。

「何してるんだろう、私」ため息混じりにつぶやくと、うつむいた。街灯が薄い彼女の影を地面に落としている。じっとそれを見つめていると、気のせいか、影がぐんぐんと成長していった。濃さを増し、前へ前へと伸びていく。

え、と眉をひそめて、そして気が付く。別の光が近づいてきてい

るんだ、と。
ハッと我にかえると、後ろから獣の唸り声のようなものが聞こえてきた。振り返れば、ギラリと光る二つの目。白い光線はまっすぐに彼女に向けられている。徐々に大きくなる光はやがて彼女を包み込む。
眩しさに目が痛んで、思わず顔を背けた。
鉄の獣は彼女にのっそりと近づいて立ち止まった。そして人の言葉を発して彼女に声をかける。

「久しぶりだね、神崎さん」
「今は、本間です」言って、獣――シルバーのセダンに視線を戻す。先刻浴びた光のせいでチカチカとする視界の中、窓を開けてこちらを見つめている青年を捉える。「お久しぶりです、長谷川さん」

ついさっきまで一緒に居た少年と同じ容姿をした青年が目の前に居た。肉付きや頬のこけ方、眉の形は若干異なるが、それでもそっくりだ。大きく異なるのは、その髪型。彼とは色も長さも違う髪――茶色の短髪。そして、顔中に残るアザ。右眉の上や右頬、そして鼻にはガーゼが貼り付けられている。それらを除けば、同一人物にしか見えない。
自分の恋人と同じＤＮＡを持つ男。オリジナル、と呼ばれる存在。長谷川正義という名の青年だ。彼女はそんな彼をやはり不思議そうに見つめる。分かってはいても、奇妙だ。同じ顔、同じ声。さっき口喧嘩をして別れた相手が、目の前で涼しげな表情で車の中からこちらを見ている。双子だ、とでも思い込めば、違和感は減るだろうか。
そんなことを考えてぼうっと見つめていると、正義は居心地悪そうに顔をしかめた。
「とりあえず、乗ったら？　ここにずっと停車しているわけにもい

かないから」

言われて、カヤは弾かれたように「ごめんなさい」と言って、車の前を通り反対側――助手席へと向かった。

まだ携帯電話はうるさく軽快な音楽をならしている。カヤは助手席のドアの前で立ち止まると、それを見つめた。唇をかみしめ、ぐっと握り締める。そして慣れた手つきでそれを開き、迷わずあるボタンを長押しする。数秒の後、意気揚々としていた音楽は沈黙し、明るかった画面は息を引き取ったかのように光を失った。

電話の電源をきっただけなのに、悪いことをしているかのような罪悪感がこみ上げてきた。カヤは自分を落ち着かせるように深呼吸して助手席のドアを勢いよく開ける。

＊　＊　＊

「あら、切られた」

椎名は目をぱちくりとさせて携帯電話をおろした。

「切られた！？　もう一回かけ……」

興奮して声をあげる俺を椎名は右手で制し、「分かってるから」と携帯をいじる。

「どこ行っちゃったんだろうね」心配そうな声が横からした。振り返ると、曽良が難しい表情で視線を落としている。これが砺波だったら第一声で、あんたのせいでしょう！　と怒鳴って俺を殴っていただろうな。

「そんなにひどいケンカだったの？」曽良は表情を曇らせて小声で

聞いてきた。
ひどい……か。どうだったんだろう。初めてのケンカだ。度合いなんて分からない。ただ、カヤが一人でどっかに行ってしまったんだ。この事実を考えれば、ひどいケンカだったんだろう。
俺は曽良の問いには何も答えず、椎名へと視線をうつす。丁度、「だめだ」とつぶやいて携帯を耳から離したときだった。
「電源きっちゃったみたい。これじゃＧＰＳもつかえないなあ」
椎名は、やれやれ、とため息をついて携帯をポケットにしまった。電源まで切ったのか？　俺は愕然とした。行方をくらます気満々じゃないか。そんなに、あのケンカで傷ついたのか？　罪悪感が高波となって襲ってきた。どうせなら、砺波に殴られたいと思った。
「こういうことには絶対ならない、て約束したから僕は車で待機したのに。参ったね」
呆れたような笑みを浮かべ、椎名は俺と曽良を交互に見つめてきた。
「何があったか教えてもらえるかな？　こそこそ、二人で何か話してたでしょ」
こいつに俺とカヤとのことを話すのは気がひけるが……こんな状況だ。そうも言ってられない。腐ってもこいつはカヤのボディガードだ。協力してやる義務がある。俺は嫌々ながら口をひらく。
「ケンカしたんです」
「ケンカ」

椎名は、へえ、と目を丸くした。近所の噂話に耳を貸すおばさんみたいなリアクションだ。このボディガードは事の重大さを分かってるのか？　護る対象が消えたんだぞ？　もうこれでクビなんじゃないのか？

「で、それで一人でたそがれに行っちゃったのかな」

なるほど、なるほど、と軽い調子で椎名はつぶやく。ここにきてよくそんな態度がとれるな。もっと焦れよ。心配しろよ。

「カーヤが行きそうなとこ、心当たりある？　かっちゃん」と曽良が口を挟んできた。俺は弾かれたように曽良に顔を向ける。

「行きそうなとこ……？」

「よく行く場所とか……誰か、友達の家とか？　カーヤの学校の友達、誰か知ってるでしょ？」

「！」

友達……カヤの友達？　俺は眉間にしわを寄せ、うつむいた。

アンリとは仲がいいといえばいいのだろうが、家に押しかけられるほどの仲ではないだろう。いつか、アンリをカヤが家に呼び出したこともあったが、あれは自分が売られると思ったから。知り合いでそんなことを話せるのは、幼い頃売られた経験のあるアンリくらい。だから頼ったに過ぎないはず。証拠に、劇の練習以外で二人がつるんでいるのを見かけたことはない。となると、二組の連中だが……いや、やっぱりカヤが誰かと一緒に居るのを目にしたことはない。体育の時間のグラウンドでも、一人だったし。

つまり――誰も、思い浮かばない。俺は胸がしめつけられた。

「分からない」

顔を上げてそう小さくつぶやくと、曽良はいぶかしげな表情を浮かべた。

「分からない……て」

「とにかく、探しに行こう。歩きならまだ近くにいるだろ」

「そうだね」

珍しく真剣な表情で曽良はうなずいた。今にも駆け出そうという勢いの俺たちだったが、間延びした椎名の声がそれに水を差す。

「いやぁ、その必要はないよ」

「え？」と俺と曽良はほぼ同時に椎名に振り返る。

「落ち込んでたんでしょう？　なら、行く場所は一つだ」

それだけ言って、それじゃ、と椎名は踵を返す。俺はとっさに「待て」と声をあげていた。

「一つって、どこだよ！？」椎名を追いかけるように足を踏み出す。

「俺も……」

俺も連れて行ってくれ。そういいかけ、口をつぐんだ。こんなときとはいえ、こいつに頼みごとをするのは……癪(しゃく)だ。

躊躇している間に、椎名はさっさとエレベーターに乗り、こちらに手を振っていた。

「尻拭いは大人の仕事。気にしないでいいよ。おやすみ」

「は！？」

尻拭いだと！？

「あんたな……！」

悪態の一つでもついてやろうかと口を開けたが、そのときにはエレベーターの扉はあっけなく閉まっていた。最後に見えたのは、椎名の勝ち誇ったかのような嘲笑。

行き場のなくなった苛立ちをどこにやったらいいのか分からず、俺は堪えるように拳を握り締めた。

「好きになれないな、あの人。嫌な感じがする」

ぼそりと曽良が横でつぶやく。俺はエレベーターを睨みつけたまま「ああ」と答えた。

「とにかく」曽良は俺の怒った肩を落ち着かせるように、軽く手をのせてきた。「俺たちも探してみよう。トミーにも連絡するよ」

「そうだな」

「携帯取ってくるから。ちょっと待ってて」

そう言って部屋に向かう曽良を横目に、俺は不安に痛む胸をおさえた。

カヤはどこに行ったんだ？　こんな夜遅くに。一人で。椎名はカヤの行く場所はひとつだ、と言っていたが……行くあてなんてあるのか？　俺のとこ以外に？

「くそ」と小さく悪態づいた。頭を抱えて唇を噛み締める。

こんなときに、もしアトラハシスが現れてあいつを連れ去ったりしたら……いや、それならまだマシなのかもしれない。それよりも、もし、変な男に襲われでもしたら……。考えただけでも胸が引き裂かれる。

絶望に打ちひしがれ、マンションの廊下で立ち尽くしていると…

…ふと、あの事件を思い出した。突如行方が分からなくなったカヤに動揺し、今と同じようにここで狂うほど心を乱した。気づけば、あのときと同じ状況だ。

嫌な一致だな。俺は苦笑する。思い出したくもない、あの夜。長谷川正義にカヤを連れ去られた、悪夢のような一週間前の夜だ。

二度目の失踪（後書き）

＊『さっき口喧嘩をして別れた相手』とありますが、『別れ』は『バイバイ』のほうで二人はまだ付き合っています。分かりづらいかな、と思ったので念のため。

迎えに来た青年

「突然、すみません。呼び出して……」

車から降りて開口一番、私はそう言った。遅れて降りてきた長谷川さんは「いや」と短く返事をする。

着いた場所はどこかの駐車場だ。周りは高層マンションに囲まれている。どれも立派で高そうなマンションだ。ぐるりとあたりを見回すと、広い駐車場にびっしりと車が停めてあることに気づく。私は車には詳しくない。セダンかクーペ、軽自動車。そんな分類くらいしか分からない。でも、キレイかどうかの区別はつく。停めてあるどの車も、新品同然だ。いや、もしかしたら全て新車なのかもしれない。

「どちらにしろ、明日会う予定だったんだ。変わらないよ」

長谷川さんが鍵についたボタンを押すと、シルバーのセダンが子犬のような声で鳴いた。

「まあ、驚かなかったというと嘘になるけども」苦笑してそう言って、長谷川さんは歩き出した。私も置いていかれないように、と後をおう。

やっぱり、会ってみると話しづらい。私は彼の後ろについて歩きながら、落ち着かなくてうつむいた。電話だと結構話せたのにな。車の中では沈黙するだけだった。

私はあの事件のあと、彼と連絡を取っていた。長谷川さんのお父さんを呼び出すために携帯を借りたとき、こっそり彼の番号を調べて暗記していたのだ。筒井クリニックの玄関前、和幸くんと曽良く

んが後ろで言い合いをしている隙に。
和幸くんは嫌がるだろうし、危ないといって止めると思ったから言わなかった。でも、どうしても彼とちゃんと話がしたかったんだ。そりゃ最初に電話したときは怖かった。何があったかを考えれば当然だと思う。彼に誘拐され、恐ろしい目にあわされたんだから。けど、どうしても気になったの。

――真紀、すまない。

私はじっと、前を歩く彼の背中を見つめる。
朦朧とする意識の中、傷だらけの彼がつぶやいた言葉だった。事情があるんだ、と確信した。悪い人ではないんだろう。そう思った。よくよく考えてみれば、あの夜、彼は怯える私に「大丈夫だ」と言い続けていた。口調は乱暴だったけど、もしかしたら本心から言っていたのかもしれない。
そして、四日前の夜、私は思い切って彼に電話したんだ。

――生きていてくれてよかった。

電話の相手が私だと分かると、彼は最初に震える声でそう言った。それから、すまかった、と何度も何度も繰り返した。後悔している、と。

――許してほしいとは言わない。恨んでくれていい。それだけのことはした。

許したいと思っている。そう告げると、ありがとう、と苦しそうに答えた。それから、お互いのことを話した。あえて、あの事件の話題は避けて。不思議な気分だった。声だけ聞けば、和幸くんだから。和幸くんと電話をしているようだった。そう思うことに罪悪感

もあったけど、仕方がなかった。口調は違うけど、声はそのものだから。

そして、私は彼を誘った。会って話がしたい、て。彼は快諾してくれた。直接謝りたいから、と。

問題は望さんだった。長谷川さんと会おうとしても、ボディガードである彼はついてくる。もし望さんが長谷川さんに会えば、絶対に不審に思う。だって、見た目は和幸くんだから。

そこで思いついたのが、学校を抜け出すこと。学校に行っている間だけは、望さんは私の傍にいない。唯一の望さんの休憩時間ともいえる。私が学校をさぼるはずはない、というおじさまの信用があればこその方針だった。だから、それを裏切るのは気が引けたけど……他に選択肢はない。月曜日――つまり明日、私は授業をこっそり抜け出し、長谷川さんが学校に迎えに来る。そういう計画を立てていた。

でも……計画は変更だ。私の勝手な事情で。

嫌な気分だ。長谷川さんを利用している気がして仕方がない。

「そういえば」と、丁度駐車場からでたとき、長谷川さんは私に振り返った。「ちゃんと彼に怒ったの？」

「え！？」

ドキリとした。彼……きっと、和幸くんのことだ。でも、怒ったって……まさか、さっきのケンカを知ってる？　そんなわけない。私は言っていないし……

戸惑っていると、長谷川さんはため息混じりに苦笑した。

「これから女性を抱こうというときに眠るなんて、男として最低だよ。居眠り病（ナルコプレシー）じゃないなら、ちゃんと怒るべきだ」

「！」

あ……ハッと目を丸くする。怒るって、そっちの話か。私は、ごまかすように作り笑顔を浮かべる。

「あれは、もういいんです。あのときは、夜中に電話しちゃってすみませんでした」

「いや。君には大きな借りがあるから。何されても文句は言えないよ」

静かにそう言って、長谷川さんはまた歩き出す。私は返す言葉が見つからなかった。

＊　＊　＊

「ここが俺の部屋だ」

駐車場の隣に佇む、とある高層マンション。正義が指差すドアは、その十三階の角部屋だった。

カヤはただただ唖然としていた。エントラスに足を踏み入れてから十三階までのエレベーターの中でも、緊張して肩に力がはいりっぱなしだった。豪華すぎる。その一言につきる。エントランスには小さな噴水があったし、いくつか並ぶ太い柱は大理石で造られていた。エレベーターも、小さなシャンデリアのようなものがぶらさがり、手すりは黄金に輝いていた。もちろん本物の金ではないだろうが、見紛うほどの輝きを放っていた。よく磨かれていることは一目瞭然だった。

そしてエレベーターが開き、目に入ってきたのは長い通路。通路自体は何の変哲もない普通のマンションで、これにはカヤもホッとしてしまった。いくつものドアを通り過ぎ、とうとう正義の部屋にたどり着いたのだ。

正義は鍵を取り出し、それを鍵穴に差し入れる。それを見つめな

がら、カヤは段々と自分が不安になっているのに気づいた。よく考えれば、正義は一人の男だ。それも、年上の。見た目とＤＮＡは和幸だといっても、別人に変わりはない。ついさっき、部屋に葵を連れ込もうとした和幸に怒ったというのに……自分は他の男の部屋に入ろうとしている。まさか正義と二人きりになっても、間違いが起こることはないはずだが……それでも、これを知ったら和幸は嫌な気分になるはずだ。そもそも、正義と会ってること自体、和幸にとってはいい話ではない。

カヤは急に自分がしていることが恐ろしくなり、後ずさった。その間にも、正義は二つの鍵を順調に開けている。

「あの……」

ここまで来て、今更違う場所がいいなんて言っていいんだろうか。でも、言わなきゃこのまま部屋で二人きり。カヤは困惑していた。もし、万が一、取り返しのつかないことになったら……。ドアが徐々に開いていく。それに伴って、カヤの心拍数も増していく。

「あ、あの……」ダメだ。入っちゃだめだ。カヤはそう決意すると、思い切って声を出す。「やっぱり、ごめんなさい！」

そのときだった。「え」という正義の戸惑う声に重なるように、明るくあどけない声があたりに響いた。

「おかえりなさい、まさよし！」

「へ」

カヤはハッとして声のしたほうを見つめた。開かれたドアの向こうには、くりっとした大きな目でこちらを見つめる幼い少女が立っていた。熊のぬいぐるみを抱き、ピンクのパジャマを着ている。地

毛なのだろうが、やや茶色に近い黒髪は三つ編みでまとめられている。ほどけば肩よりやや下くらいの長さになるだろう。ふっくらとした頬に、小さな鼻の下には桜の花びらのようなかわいらしい唇。睫毛は放射線状に広がり、大きな目をさらに強調している。まるで人形のような可愛らしさに、カヤは息を呑んだ。

正義は少女に向かってため息をつくと、「寝る前に髪を結ぶなって何度も言っただろ」と諌める。

「だってぇ」と少女はいたずらっぽく笑む。「こうするとね、明日の朝には、髪の毛ウネウネしてるの」

「ウネウネしなくていいんだよ」

ウネウネ……きっと、ウェーブの真似ごとをしたいんだろう。カヤは幼い少女の思い付きが微笑ましくて、ついクスッと噴出した。その笑い声に、思い出したかのように少女は小首をかしげてカヤを見上げる。

「その人、だあれ？」

「ああ、そうだった」と苦笑しながら正義は中に入ると、少女を軽々と抱き上げた。「カヤお姉ちゃんだ」

正義の腕に座るように乗っかった小さな少女は、不思議そうにカヤを見つめる。

「カヤおねえちゃん？」

「はじめまして」と、カヤは満面の笑みで答えた。

しばらくじっと見つめて少女はきょとんとする。そしてほんのりと頬を赤らめると、いそいそと正義に耳打ちした。

「きれいなひとだねえ」

その声は内緒話には大きすぎて、カヤにまではっきりと聞こえた。カヤは目をぱちくりと瞬かせ、照れ笑いを浮かべる。

心がほんのりと温まっている。愛らしい少女のおかげで、さっきまでの緊張が嘘のようにすっかりほぐれていた。

「そうだな」目を細めてそう答え、正義は少女を床に下ろす。「さ、歯を磨いてもう寝なさい」

「もう磨いたよ」

自慢げにそう言って、少女はにかっと笑って歯を見せた。正義は満足そうに微笑むと、少女の頭をなでる。

「偉いな。じゃあ、あとは寝るだけだ」

「おはなしは？」

ぎゅっと熊のぬいぐるみを強く抱きしめると、懇願するように少女は正義を見上げる。正義は、あ、と顔をしかめて、ちらりと後ろで立っているカヤを一瞥した。

「今夜は、ごめんな。お客さんが来てるから」

「……はあい」

少女は悲しそうに返事をすると、くるりと踵を返して廊下を走っていった。

それを見届ける正義の背中をじっと見つめ、カヤは頬をゆるめて尋ねる。

「名前、なんていうんですか？」

すると、正義は振り返りもせずに「さくらっていうんだ」と答える。

「さくらちゃん……可愛い名前ですね。ぴったりだと思います」

正義の返事はなかった。カヤは、それで……と遠慮がちに尋ねる。

「妹さん、ですか？」

もしそうなら、養女か親の再婚相手の連れ子か、はたまた……。いずれにしろ、血は繋がっていないはずだ。いや、もし繋がっているならこの兄妹は複雑な状況下に置かれていることになる。聞くかどうか最後まで迷っていたのだが、うやむやにしていても今後やりづらくなるだけ。それにこうして自分に堂々と紹介してきたのだ。正義は気にしていないはずだ。カヤはそう思った。

正義はしばらく間をおいて、ゆっくりと振り返った。その表情はとても穏やかで、カヤの見てきた正義とは違っていた。――どちらかというと、和幸のそれに似ていた。

「娘だ」

正義はさらりとそう答えた。

迎えに来た青年（後書き）

しばらく、カヤと正義の話になります。

ハッピーエンドへの鍵

三つの扉を通り過ぎ、廊下の突き当たりのドアを開く。そして、私は目を丸くして息を呑んだ。

まるでホテルの一室のような、広々としたカウンターキッチンつきリビング。全面窓に囲まれ、マンション街の夜景が一望できる。角部屋だからこそ、の贅沢だろう。テレビは薄型五十インチ。フローリングの上に白い絨毯が敷かれ、L字型の純白のソファが白いテーブルを囲うように置かれている。

私が呆然と立ち尽くしていると、「何か飲む？」と後ろから長谷川さんの声がした。

弾かれたように降り返ると、彼はキッチンでコップに水を汲んでいた。それを見つめて、ふと料理しているところを想像する。きっと彼はそこに立って料理をしながら、リビングにいるさくらちゃんの様子を伺っているのだろう。愛おしそうに目を細めて。

それにしても、娘さんがいたなんて。本当に驚いた。だって、長谷川さんの子供ってことは……つまり、遺伝子的には和幸くんの子供？　ううん、そうはならないか。母親のＤＮＡだって混じってるわけだから。でも、少なくとも、さくらちゃんのＤＮＡの半分は和幸くんだよね。って、遺伝子ってそんな単純な足し算引き算なんだろうか。もう、よく分からない。考えても混乱するだけだ。余計なことはこの際無視。とりあえずは、正義さんに娘がいた。その事実だけを受け止めよう。

けど、そうなると今度は別の点が気になりだす。さくらちゃんはいくつなのか。長谷川さんはどう見ても二十代前半……もしくは半ば。三十を越していることはまずない。ということは、十代のときの子供なんてことも有り得る。失礼かもしれないけど、意外だ。

「オレンジジュースか、リンゴジュース」長谷川さんはコップいっ

ぱいの水を飲み干すとそう言って、くるりと背を向け冷蔵庫を開けた。「それくらいかな。炭酸は買わないんだ。身体によくないから」

身体によくない……か。私はつい頬をゆるめた。さくらちゃんへの愛が言葉の端々から伝わってくるな。

「気にしないでください」と私が微笑んで答えると、長谷川さんは冷蔵庫を閉めてこちらに振り返る。

「本当に？　遠慮しなくても……」

「大丈夫ですから」

そうか、とつぶやいて長谷川さんはパッとしない表情を浮かべた。私が遠慮していると思い込んでいるようだ。

「とにかく、座って」言いながらキッチンから出てきた長谷川さんの手には、大きなゴミ袋がぶらさがっている。「悪いんだけど、ゴミ出しを忘れていた。ちょっと待っててくれないか」

「あ、はい」

「すまない」

申し訳なさそうに苦笑して、長谷川さんは鍵とゴミ袋を手にリビングから足早に出て行った。

私はぽつんとリビングに一人佇む。ガチャンと玄関のドアが閉じる音が廊下に響いてリビングまで届いてくる。

「ゴミ出し、か」

思わず、笑ってしまった。一週間前、和幸くんを利用して人を殺そうとした男は、まるで普通の人だ。――いや、普通の父親、だ。なんだか気が抜ける。あのときは、彼のことが怖くてたまらなかっ

たのに。まさか彼の部屋にこうして来る日が訪れるなんて思いもしなかった。

私はしばらくじっと部屋を眺めていた。白いテーブルに白いソファ。きちんと整理整頓された部屋。

「似てる」

部屋の大きさはまるきり違う。テーブルやソファの形も違う。でも、全体的に似た雰囲気を感じた。和幸くんの部屋にそっくりだ。すうっと鼻で空気を味わうように吸う。香りまで似ている。――引いては返す波のように、急に寂しさが戻ってきた。それも、どっと押し寄せてくる。

思わず、その場に座りこみそうになった。そのときだった。

「まさよしは？」

「！」

怯えたような小さな声が後ろからして、私はビクッとして振り返る。

「さくらちゃん！？」

いつのまにリビングに来ていたのか、言われたとおり髪をほどいたさくらちゃんがそこに立っていた。相変わらず、熊のお友達を連れて。

「どうかした？」と私は彼女に近づいて、しゃがみこんだ。近くで見ると、一段と可愛らしい。澄んだ瞳はキラキラと輝いている。頬はふっくらしていてつい触りたくなるほどだ。

「おはなし……」

さくらちゃんは、ぽつりとつぶやいた。恥ずかしそうに私から目をそらして。

「おはなし？」

「寝る前のおはなし。すこしだけでもしてほしくて」

あ。そういえば、さっきも二人でそんな話をしてたな。おはなしは？　と問いかけるさくらちゃんに、長谷川さんは……

—今夜は、ごめんな。お客さんが来てるから。

ついさっき耳にしたその声が脳裏によぎる。あのときは、おはなしって何のことか分からなかったけど……そうか、そうだったんだ。

「いつも、寝る前にお話してもらうんだ？」と優しく尋ねる。すると、さくらちゃんは熊のぬいぐるみを強く抱きしめて頷いた。

「そう」

私は懐かしさがこみ上げて、目を細めた。

「私も、よくしてもらったんだ」

「え？」

目をぱちくりとさせるさくらちゃんに、私は微笑みかける。

寝る前のお話……かすかに頭に残る思い出。あの、優しく愛のこもった声。包まれるような暖かいオーラ。護られているという絶対的な安心感。きっと、母親の胎内に眠る胎児のような気分だ。暗闇で顔も分からなかったけど、確かに誰かが傍にいてくれた。幼い頃、枕元で毎晩のようにおはなしを語って聞かせてくれたんだ。一体、

誰なのかは分からない。実の私の両親か、忘れてしまったベビーシッターか。はたまた……私の守護霊なのか。
何者でもいい。とにかく、あの声が恋しい。特に、今はすごく……。
いつから、姿を現さなくなってしまったんだろう。それも思い出せない。はっきりと覚えているのは、そのおはなし。不思議な御伽噺（おとぎばなし）――『終焉の詩姫』。

＊　＊　＊

あるところに、土からできたお姫さまがいました。
お姫さまは神さまに愛されていました。神さまのかわいいお人形です。
しかしかわいそうなことに、お姫さまが生まれた世界はとても邪悪で、神さまは悲しみました。
そこで神さまは、お姫さまにある詩（うた）を教えました。
その詩は、世界に終焉をもたらすものです。
神さまはお姫さまに言いました。
『つらくなったらいつでもこの詩を詠（うた）いなさい。
汝を苦しめる世界は破壊され、汝は楽園へと導かれるだろう』
お姫さまは十七歳になるまで、世界に耐えました。
しかし、とうとう、お姫さまは憎しみに病みました。そして……

＊　＊　＊

「そして？」

カヤの『おはなし』を聞くなり、さくらはベッドに横になったまま首を傾げる。
月明かりだけが照らす薄暗い部屋で、カヤはベッドに腰を下ろし

て彼女を見つめていた。引っ越してきたばかりなのか、子供部屋にしては味気ない。彼女が抱いている熊のぬいぐるみ以外、おもちゃや人形は見当たらない。といより、物がない。必要最低限の家具くらいしか置いていなかった。ただのゲストルーム。カヤはそんな印象を受けた。

「そして、どうなるの？」と、さくらはもう一度尋ねる。

「そして……」と、カヤは言葉を詰まらせた。

言葉を切ったのは、もったいぶるためではなかった。カヤにも、続きは分からないのだ。いや、覚えてないだけなのかもしれない。記憶の海に漂う懐かしい御伽噺。今となってはそれを聞かせてくれたのが誰だかもカヤには知る由もない。ただ覚えているのは、その声が暖かく愛にあふれていたことくらい。

正義がさくらに毎晩『おはなし』を聞かせている。そう聞いて、ついカヤは懐かしくなってこんな話を記憶の奥から引っ張り出してしまった。それが単なる自己満足に過ぎないことに気づきもせず。エンディングの分からない話を幼い子供にしてどうするんだ。違う童話にすべきだった、とカヤは心底後悔していた。

だが、すでにここまで話してしまったことを考えると、「分からないの」で締めくくるわけにもいかない。カヤは苦し紛れに好ましいエンディングを口にした。

「そして……幸せに暮らしました」

取ってつけたようなハッピーエンド。カヤは苦笑するしかなかった。

さくらは目をぱちくりとさせて困惑の表情を浮かべている。こんなあどけない少女を困らせてどうするんだ、とカヤは罪悪感にかられた。それも単なる御伽噺で。

「ごめんね」とカヤはたまらず謝罪する。「つまらなかったよね」

そもそも、話がはちゃめちゃだ。カヤががっくりと反省して頭を垂れると、さくらは遠慮がちに尋ねてきた。

「王子さまは？」

「え」

カヤは顔を上げて振り返る。月明かりに照らされて煌くさくらの瞳が、じっと彼女を見据えていた。純粋な眼差し、そのものだ。

「王子さまは出てこないの？」さくらは消え入りそうなほど小さな声でそう問いかける。その質問に、今度はカヤが目をぱちくりとさせた。

「王子様？」

「だって」とさくらは鼻までふとんに顔をうずめて、はずかしそうにカヤに伝える。御伽噺のなんたるかを。「お姫さまがしあわせにくらすには、王子さまが迎えにこなきゃいけないんだよ」

「……」

「いつも、そうだもん」

少女の純粋な願いにも似た指摘に、カヤはぽかんとして言葉が出なかった。

なんてかわいらしいんだろう。そう思いつつも、いつのまにか忘れていた幼い夢を思い出した気がした。そういえば、自分も小さいときはお姫さまに憧れていた。一体誰に刷り込まれたのか、女の子は皆、一度は夢見るものだ。白馬に乗った王子、という存在を。

「そうだね」とカヤはため息混じりにつぶやいて、天井を仰いだ。この御伽噺を思い出すたびに感じていた物足りなさ。それは確かに、お姫さまを救い出す存在だったのかもしれない。――欠けていたハッピーエンドへの鍵だ。

「じゃあ、こうしよう」

カヤは明るく微笑んで、口を開いた。

そして語りだす。新しい『終焉の詩姫』。王子さまが現れる、幸せな終焉を付け加えて。

「あるところに、土からできたお姫さまがいました……」

正義の告白　―１―

「だめだ。トミー全然電話にでないや」

閑静な住宅街の暗い路地を歩きながら、曽良は落胆した様子で携帯をおろした。俺は「そうか」と条件反射で答える。正直、砺波が来ようが来まいがどうでもよかった。一人増えただけでどうなる。携帯も切ってこの広い街を彷徨うカヤを、どうやって探せばいいんだ。

くそ。せめて、あいつが行きそうな場所さえ俺が知っていれば……。

『災いの人形』だ、終焉の詩だ、『収穫』の日だ、とそんなことは知っているのに、カヤの服のサイズも趣味も、こんなときにあいつがどこに行くかも分からない。何が彼氏だ。余計な知識ばかり増やして、肝心なことは何一つ分かってないじゃないか。あまりに情けなくて、そして腹立たしい。しかも、人を見下して楽しんでいるようなあのふざけたボディガードが、心当たりがあるようなことをほざいていたんだ。こんなに悔しいことはない。

俺は隣に曽良がいることも忘れて、ずんずん足を進める。

「ちょっとかっちゃん、待ってよ」

バタバタと地面に足を叩きつけて、後ろから曽良が追いかけてきた。

「待てねぇよ」

「そりゃそうだ。じゃなくてさ！」曽良は呆れたような声をだし、俺の腕を掴んで引き止める。「いくらなんでも、二人じゃ無理があるでしょ。手がかりがゼロなんだから」

そんなの分かってる。俺は曽良の手を振り払うと「だから！」と怒鳴る。

「とにかく歩き回るしかないだろ！　手分けして。立ち止まってる暇なんか……」

「そうだけどさ。そんなにカリカリしてても仕方ないでしょ」

いい？　と曽良は自慢げに微笑むと人差し指を突き出した。

「成功の秘訣は深呼吸から」

「は！？」

どこのじじいの名言だ？　聞いたことないぞ。

「いいから、いいから。深呼吸して」言って曽良は、大げさに深呼吸してみせる。「ね、ほら。かっちゃんも」

「やってられるか」

曽良のアドバイスを一蹴して俺はまた足を動かす。確かに、イラついてもカヤが見つかるわけじゃない。曽良の言うとおり、落ち着くべきかもしれない。でも……そうは頭で分かっても、うまく感情をコントロールできるほど大人じゃない。カヤがいなくなって冷静でいられるほど、俺は強くないんだ。焦りと不安、恐怖。心の中でごった返して、どう収拾つければいいのか分からない。心が荒れてる。自分の感情がよく分からない。

とにかく、カヤを見つけなきゃ。見つけて……それからどうすればいいのかも分からないけど……とりあえず、カヤが無事ならそれでいい。仲直りでも第二ラウンドでもなんでもしてやる。

「かっちゃん！」と、曽良の呆れたような声が聞こえてきた。「他の兄弟たちに手伝ってもらおうよ」

後ろから飛んできた言葉は、見事に俺の心臓を貫いた。何を言われようと無視しようと決めていたのに、その決意は一瞬でぐらついた。俺はハッとして振り返る。

「できるのか？」

曽良は肩をすくめ、「やってみる、としか言えないけど」と携帯をちらつかせた。

兄弟たち――それは、カインの皆のことだ。その手があったか、と思うと急に肩の力が抜けた。「頼む」と俺は呆然としてつぶやく。

今のカインのリーダーは曽良だ。代理だが。一応はカインの皆に命令できる立場にいる。『おつかい』と銘打ってカヤの捜索を頼むことも可能だろう。公私混同、とあとで親父に叱られても文句は言えないが。でも、曽良も言ったように、今は手がかりがゼロ。残されている策といえば人海戦術くらい。人手があれば、カヤをどこかで見つけられるかもしれない。――作戦というには、お粗末すぎるけどな。

「『迎え』に行くのは俺たちの十八番（おはこ）だしね」

そうつぶやきながら、曽良は携帯をいじり始めた。口ではそんな冗談を漏らしているが、顔は真剣だ。

冷静になってみると……俺たち二人のケンカに巻き込んでしまって、申し訳ないやら恥ずかしいやら。よく考えれば、ここまで曽良が付き合う必要はないよな。しかも、リーダー代理の権力を濫用してまで。

「悪いな、曽良」

ぽつりと謝って、電話をかけ始めた曽良をじっと見つめる。すると、そのアヒル口の片端が上がり、

「かっちゃんのためじゃないよ」

「は……」

なんて言った、今？　よく聞き取れなかったが……聞き返そうにも、曽良は「もしもし」と通話を始めてしまって口を出せない。俺は気持ち悪さを残したまま、とりあえず電話が終わるのを待った。

＊　＊　＊

「ありがとう、さくらに『おはなし』してくれて」

言って長谷川さんは、ソファに座る私に暖かい紅茶を手渡してきた。飲み物はいい、て言ったのに。結局、気を遣わせてしまったみたい。さくらちゃんの部屋をあとにしてリビングに戻ると、いつのまにか戻っていた長谷川さんが紅茶をいれていたのだ。

ふんわりと香るシナモンにつつまれて、私はホッと息をつく。喉は乾いてはいないけど、リラックスのための紅茶は今の私には必要かもしれない。

「どの『おはなし』をしてくれたんだ？」と長谷川さんは私の斜め横に座った。

「大した話じゃないんです。私が小さいころに聞かされていた御伽噺で」

「へえ」

といっても、さくらちゃんが気に入ってくれたのは別バージョン。私がエンディングを即興で付け加えた、王子さまが登場する『終焉の詩姫』。彼女は満足してくれたようで、何度も何度も同じ話をさせられた。彼女はよっぽど『おはなし』を聞くのが好きみたいだ。熱心に目を輝かせて耳を傾けてくれたのだから。

「よかったら」と長谷川さんは身を乗り出して、じっと私を見てきた。――和幸くんと全く同じ熱い眼差しで。「その『おはなし』、あとで教えてくれないか？　メールででもいいから文字にしてくれるとありがたい」

「え！？」

「俺はあまり童話を知らないんだ。ありきたりなものばかり聞かせるから、さくらは飽きているようで困っていたんだ」

私は困って眉をひそめた。もちろん、『終焉の詩姫』を教えるのは一向に構わない。ただ、さくらちゃんに聞かせたのは、半分は私が考えた別バージョン。それを長谷川さんに教えるのはちょっと恥ずかしい。

「頼む」

長谷川さんは相変わらず、彼によく似た視線で見つめてくる。もし、これが今日でなかったら――彼とケンカした日でなかったなら、顔を赤くして照れていたかもしれない。でも、今の私にはつらいものでしかなかった。ただ胸が痛んで目をそらす。「分かりました」と逃げるように承諾して。

「ありがとう」

嬉しそうな彼の一言が、私の心をひっかいて爪あとを残した。

居心地悪く俯いていると、長谷川さんのため息が聞こえてきた。そして「さて」と息の詰まったような声がして――

「さくらの母親は、真紀という女性でね」

「え」

唐突に切り出され、私は一度逸らした視線を彼に戻す。

真紀……その名前は、私がずっと気になっていた名前だ。長谷川さんが遠のく意識の中で呼び続けた名前。それが、さくらちゃんのお母さん？　ということは、長谷川さんの奥さん――いや、結婚しているとは限らないか。指輪はしてないみたいだし。でも、こうしてさくらちゃんと一緒に暮らしているってことは、真紀さんもここに住んでいるんだよね？　姿は見かけないけど。でかけているのかな。

「彼女は身体を売る仕事をしていた。いわゆる、娼婦、てやつだ」

「！」

娼婦？　私は言葉を失った。い、いきなり、とんでもない話が始まった。まだ、心の準備が……。

「娼婦なんて、神崎さんには分からないかな」

私が呆然としている理由をはきちがえているようだ。私は「知ってます」と咄嗟に答えた。そもそも、長谷川さんに連れて行かれた体育館で実際に見ているじゃないか。忘れているのだろうか。煙たい体育館で、男に裸体をさらしていた女性たち――娼婦。

そういう職業の女性がトーキョーに溢れていることは、さすがの私も耳にしていた。もちろん、違法だ。表向きにはいないことになっている。でも実際には――あまりにも需要があって止められない

のか――その数は増える一方だという。ただの高校生だった私の耳にまでその噂が入るほどだ。裏世界の華は、表も裏も関係なくあらゆる男性を虜にして止まないのだろう。

「出会ったときは……恋に落ちたときは、娼婦とは知らなかった。陰のある女性だ、とは思ったけどまさか身体を売っているとは思ってもいなかったんだ」

まるで言い訳をするような話し方だった。きっと長谷川さんは娼婦という仕事をよくは思っていないんだろう。それが伝わってきた。

「さくらはね」と急に長谷川さんは声を落とす。「彼女の客との子供なんだ」

「え！？」

こんな反応は失礼だっただろう。でも、あまりの事実に冷静な判断はできなかった。私は思わずぎょっとして大声をあげていた。

そんな私に、長谷川さんはまるで子供を見つめるような優しい視線を向ける。

「だから、あの子に俺の遺伝子は入ってないよ」

「……！」

「気になっているかと思ったから」

遺伝子……そう言葉を濁してはくれたけど、長谷川さんの言いたいことははっきり分かる。そしてそれは、確かに私が気にしていたことだ。心が読まれたようで恥ずかしい。

「どの客なのかは、真紀にも分からないそうだ」

何事もなかったかのように、長谷川さんは話を続ける。

「分からない？」と、私は気を取り直してなんとか相づちをうつ。

「男と寝るのは彼女の仕事だ。一週間にいろんな男と行為をする。『どの男が失敗したのか、なんていちいち覚えていられない』。真紀の言葉を借りれば、そういうことだ」

なんて言葉を返せばいいのか、分からなかった。とりあえず、浮かんだのはさくらちゃんの顔だ。彼女は知っているんだろうか。実の父親が分からない、という事実。いや、たとえそう言ったところで幼い彼女には理解できないだろう。

そういえば、長谷川さんのことを「まさよし」と呼んでいた。「パパ」や「お父さん」ではなく。その時点で気づいても良かったのかもしれない。長谷川さんが実の父親ではないことを。

「真紀は、いきなり子持ちの娼婦になった。もともと孤児院出身の彼女には家族はいない。助けてくれる人もいないし、仕事も続けなくてはお金もない。そうやって精神的に追い込まれていった彼女は……ある男につけこまれることになった」

「ある男？」

遠慮がちにそう尋ねると、長谷川さんはじっと私を見つめて厳しい表情でつぶやく。

「大野だ」

「！」

大野……忘れるはずもないその名前。思わず震えそうになった身体を私は必死に抑えた。たくましい上半身をあらわにして体育倉庫から現れたあの男。口の中に、嫌な鉄の味が蘇る。私は彼の手から

逃げようと咄嗟に彼の腕に噛み付いた。それも、血が皮膚からにじみ出てくるほど強く。あの女を捕まえろ、と叫ぶ憎しみに満ちた彼の声は未だに頭に残っている。今度もし、会うことがあれば……そのときは、私は文字通り、痛い目にあうことだろう。

「そう」と、長谷川さんは低い声で言葉をつなげる。「俺がクローンに殺させようとした男だ」

「覚えてます」

それだけしか言えなかった。

「最初は真紀も、娼婦として大野と会っていたらしい。要は、大野に身体を売っていた。

だが、そのうち……大野に薦められ、大麻に手を出すようになった。それが始まりだったんだ。彼女の悪夢の」

「……！」

大野さんから大麻を買った？　真紀さんが？　ってことは……と、私の中でからまっていた糸がするするとほどけていく。

そうだ……そういえば、あの夜、タクシーの中で長谷川さんは言っていた。大麻を大野さんから買った客は、それをネタに強請られる。無理難題をつきつけられるんだ、て。だから、あのとき私はてっきり長谷川さんが大麻を買ったんだと思った。それで大野さんに強請られて、彼を殺そうと考えたのかと。でも、彼は確かにこう答えた。

――俺じゃない。

「もしかして……だからだったんですか？」言葉が勝手に口からこぼれていた。「真紀さんのため？」

長谷川さんはしばらく何も答えなかった。
でも、私は自分の憶測になんの疑いもなかった。だって、そうとしか考えれない。大切な人を庇うために、大野さんを殺そうとしたんだ。それなら、納得できてしまう。彼の行動も――そして、彼が和幸くんのオリジナルだということも。

「真紀さん、強請られていたんですね」優しく尋ねると、長谷川さんはつらそうに頷いた。

その表情には、見覚えがあった。

―俺は……未来をお前と一緒に見たい。

虹の橋でそう言った和幸くんとそっくりだった。プロポーズの直前に彼がみせた切ない表情。言葉にそぐわない哀しい顔。なぜ、彼はあんなにも苦しそうだったんだろう。今、考えるべきことではないんだろうけど……つい、頭に浮かんでしまった。

「俺が真紀と出会ったのは、病院だった」と、長谷川さんは遠い目をして語りだす。「二年前だったかな。病院で迷っていたさくらを見つけて、彼女の病室に連れて行ってあげたのがきっかけでね」
「病室？」
「神経衰弱、過労、栄養失調……そんなものだったんじゃないか、と思う。真紀は二、三日、入院していたんだ。とにかく……」そこで言葉を切ると、長谷川さんは懐かしむように優しい笑顔を浮かべた。「俺は彼女を一目見たときに、何かを感じた」

何かって……それって、もしかして？　私はきょとんとしたまま「一目ぼれ？」とつぶやいていた。長谷川さんは恥ずかしそうに苦

笑する。

「薄っぺらく聞こえるだろうけど……そうなるんだと思う。この人を守らなきゃいけない、という強い使命感を覚えたんだ。不思議な感覚だった」

ロマンチックじゃないか、と私はほほえましくなった。薄っぺらくなんてない。

「彼女も、俺に興味を持ってくれたようで……というか、さくらが俺によく懐いてしまって。お互い退院してからも、会うようになったんだ」

「お互い？」

長谷川さんも入院していたんだ。てっきり、誰かのお見舞いか何かだと思ったけど……。

「ただ、そのころは俺は何も知らなかった。彼女が娼婦だということも、大野に脅されていることも」

「いつ、知ったんですか？」

「つい一ヶ月くらい前、かな」

「！」

そんな最近？　私はぎょっと目を丸くする。すると、それに気づいたのか、長谷川さんは慌てて訂正した。

「いや、娼婦だということは、もっと前に知っていた。ただ……大野とのことはずっと気づいてやれなかったんだ。付き合いだしてからもずっと……真紀は、何も相談してくれなかったから。一人で抱え込んでいたんだ。自分のまいた種だから、と。俺に迷惑をかけた

くなかったのかもしれない」

二年もの間、真紀さんは大野さんのことだけは隠し続けたんだ。私は唖然としてしまった。だって、二年……長すぎる。そんなこと、できるの？　ずっと、好きな人に隠し事をするなんて。よほどの覚悟がないとできない。それに……きっと、すごくつらい。傍によりかかれる肩があるのに、無理して背筋を伸ばして……。

でも、気持ちは分かる気がする。だって、恐ろしいほど正義にこだわる長谷川さんだ。あの事件で、私はそれを体感している。大麻に手を出したなんて、彼に言えるわけない。もし私が真紀さんでも、やっぱり打ち明けられなかったと思う。嫌われるかも、許してくれないかも……そんな不安が邪魔して。

「だが、一ヶ月前、真紀はとうとうどうすることもできなくなった」と、長谷川さんは眉根を寄せてうつむいた。そして、体のどこかが痛むかのような苦しい表情を浮かべて、恐ろしい事実を口にする。

「大野が、娘を連れて来い、と言ってきたんだ」

正義の告白　―２―

一ヶ月前。雨が激しく降る夜だった。正義はそのときのことを思い浮かべる。

予告もなしに部屋に尋ねてきた真紀は、服がすけて下着が見えるほどびしょぬれだった。おかっぱのようなショートヘアはぴたりとやせこけた頬にへばりつき、ややつり目のまぶたに引かれたアイラインは黒い涙となって流れていた。すっきりとした鼻筋に雨が伝って、雫を落とす。今にも折れるんじゃないか、と心配になるほど細い足はカタカタと震え、官能的なふっくらとした唇からは「助けて」という言葉が漏れていた。

風邪をひく、と、バスタオルで包んで抱きしめると、雪崩のように突然泣き崩れた。そして、彼女は全てを語りだしたのだ。正義に隠していた、大きな秘密。一人で抱え込んで、やがて破裂しそうなほど膨れ上がってしまった罪。娼婦でシングルマザーとなった不安、頼れる人がいない孤独、育児と身体を売る生活による疲労から精神的に追い込まれ、つい大野の口車に乗ってしまったこと。――つまり、大麻に手を出したこと。

正義は彼女が娼婦だった事実にも、最初は動揺を隠せなかった。それでも、真紀への気持ちは変わらない、となんとか気持ちの整理をつけた。だが、ここにきて、今度は麻薬だ。どう受け止めればいいのか分からず、正義は困惑した。麻薬で現実の苦悩から逃れようなど、正義が嫌う愚か者のすること。はっきり言って自分が軽蔑している部類の人間の行動だ。だが、バスタオルにくるまってひどく取り乱す真紀は、明らかに助けを必要としている。こういうときのために自分はいるんじゃないか。正義はそう腹をくくって、どうしたんだ、と尋ねた。

「私は、大野の奴隷なの」

真紀は正義にしがみつきながら、そう叫ぶように訴えた。

「奴隷って、どういう意味だ？」

「あいつに逆らえば、警察に突き出される。あいつは……私が大麻を買った証拠を持っているの。だから、あいつに言われたことは何でもしなきゃいけない」

真紀の震える肩を抱きつつ、正義は顔をしかめた。

「ブラフに決まっている。そんなことをしたら、大野って奴も危ないだろう。なぜそんな証拠を持っているんだ、と怪しまれるに決まっている」

「関係ないの！　大野の父親は警察に顔がきくから、あいつは何があっても捕まらない。私が警察に捕まって、全部話しても同じ。大野は何をしても罪には問われないの！　あいつはそうやって楽しんできたのよ」

そんな馬鹿な、と正義は愕然とした。世の中が腐っていることはもちろん知っていた。だが、正義（せいぎ）を市民に提供するはずの警察まで権力に惑わされ、己の使命をねじまげているとは……正義（まさよし）にとって、信じたくない事実だ。

「私は……捕まるわけにはいかなかった」と真紀は正義の胸に顔をうずめる。「さくらがいるもの。あの子には私しかいないから……私が刑務所にはいることになれば、あの子は一人きり。お金だってないのに。生きてなんていけない。だから……言うことを聞くしかなかった！」

必死に正義に弁解しているようだった。か弱い肩がいつも以上に

脆く見える。正義は「分かってる」と慰めるようにつぶやいた。法を破っておいてその罪から逃れてきた彼女を許すこと――それは自分自身の正義を裏切るようなものだ。それでも、彼女を突き放すことなどできなかった。正義は初めて、悪を庇おうとしていた。

「私、いろんなことをしてきたよ」真紀は力なく、そうつぶやいた。

「大麻を運んだこともあった。何も知らない女の子を騙して、大野のところに連れて行ったこともあった。罪に罪を重ねても、罪は消えることはないのに」

「真紀」

正直、なんと声をかければいいのか分からなかった。自分の知らないところで、恋人は罪の底なし沼に足を踏み入れていたのだ。だが、どう引き上げたらいい？　一歩踏み出せば、自分も沼に足を取られ、二人で沈んでいくだけではないだろうか。

「ねぇ、これは罰なのかなぁ」

ふと、真紀は疲れ果てた声でそう言った。

「大野に……さくらを連れて来いって言われたの」

「！」

さくら――なぜ、あの子の名前が出てくるんだ。正義はいきなり心臓をつかまれたような気になった。

「どうしよう」と、真紀は嗚咽をもらしながら震える声で言う。「さくらまで、目をつけられるなんて。まだ五歳よ。何する気なの？」

正義は自分が震えていることに気づいた。悪寒ではない。恐怖で

はない。こみ上げて来る強い怒り。

「もう自首しようかな、て。そしたら、あいつの言いなりにならないですむもの」真紀は正義の背中に手を回す。まるでこれで最後かのように、きつくかみ締めるように抱きしめた。「私が刑務所に居る間、まさくん、あの子の面倒見てくれるよね？」

その瞬間、何の躊躇もなく罪の泥沼に飛び込んでいく自分がいた。正義は大きく息を吸うと、玄関に響き渡る声で叫ぶ。

「自首なんてしなくていい！」

「え」

正義は真紀の両肩をつかむと自分から引き離し、真紀を真剣な眼差しで見つめる。

「悪の根源は大野だ。なんであいつが捕まらずに、真紀が捕まらなきゃならない！？　まずはあいつが罪を償うべきだ！　真紀じゃない」

「でも……私が自首するか、さくらをあいつに渡すか。二つに一つしか……」

それを聞き、正義はグッと唇をかみ締めた。確かに、真紀の言うとおりだ。だが……どちらも、正義の選択肢にはない。

「とにかく、まず俺がそいつに会いに行く」

「だめよ！　そんなこと……」

「会って君の代わりに交渉する。まずはそれしかないだろ。さくらを渡すわけにはいかないし、君が警察に捕まればさくらは母親を失う。父親もいないのに……あんまりじゃないか」

真紀は返す言葉もなく、静かに涙を流してうつむいた。

「俺に任せてくれ。なんとかしてみせる」真紀の肩をつかむ正義の手に力が入る。「どんな手をつかってでも、大野は俺がなんとかする。罪は必ず、償わせるから」

＊　＊　＊

「どんな手をつかっても……」カヤは顔を曇らせた。「それが、和幸くんだったんですか」

責めるような口調ではなかった。同情に近い、哀しい声だった。正義は、「いや」と言って背中を丸める。

「最初は違ったんだ。最初は……金で解決しようとした。大野も乗り気だった。週に十万ずつを一ヶ月間。それで手を打つ。さくらには手を出さない。そう言ってきたんだ」

「週に十万！？」それを一ヶ月間続けるとなれば、単純計算で四十万。カヤは目を丸くした。「そんなお金……」

すると、正義は皮肉そうに鼻で笑う。

「金のことは問題なかった。見ての通り……」と、正義は部屋を見回した。「父親のおかげで、俺は金には余裕がある。四十万でさくらが助かる。安いもんだった」

言われてみれば、確かにそうだ。こんな豪華なマンションに住んでいて、金に困っているわけはない。父親のおかげ、と言うのだから自分で稼いでいるわけではないのだろうが、少なくとも裕福な家

の出ということになる。マンションに一歩足を踏み入れた時点で、正義が所謂(いわゆる)お坊ちゃまであることに気づくべきだった。――だが、問題はそこではない。カヤはまるで眩暈(めまい)がしたかのように首をふると、気を取り直して問いかけを続けた。

「それじゃあ、どうして和幸くんを巻き込んだんですか？」

そこまで言うなら、金で解決すればよかっただろう。なぜクローンを使って大野を殺そう、という考えにいたったのか。カヤには理解できなかった。正義の父親は、こんなマンションを息子に与えるほどの財力を持っている。金が急に払えなくなった、というわけではないはずだ。

「大野の……」と、正義は苦しそうに声を出した。「大野の気が変わったんだ」

「気が変わった？」

「あの事件の一週間前だった。急に、金はいらないとあいつが言い出したんだ。さくらのほうが、使い道があると……」

「！」

使い道――その言葉に、カヤは顔色を失くした。なんて言葉を、幼い少女に使うんだ。大野という男は、人と金の区別がつかないのだろうか。正義が彼を「悪の根源」とまで罵倒していた理由がカヤは分かった気がした。そして……そんな男のことだ。なんとなくだが、大野がさくらを使って何をしようとしていたのか、想像がつく。

「ひどい」と、か細い声でカヤはつぶやく。

ぐっと膝を握り締める正義の手が震えていた。思わずその手を掴みたくなって、だが、カヤはその衝動を押さえた。正義が和幸のオ

リジナルだからこそ、越えてはいけない一線をわきまえておかなくてはならない。見知らぬ男以上に、気を使わなくてはならない。手に触れる。それだけでも、思わぬ結果を導きかねないのだから。

「そのときだった。殺すしかない、と思ったんだ」

正義は搾り出すように、そう言った。

＊　＊　＊

「神崎カヤなんだけど」

そう言ってしばらくすると、曽良は表情を曇らせた。

「いや……分かってるっす。でも、緊急事態というか」

またなのか。俺は、二十二回目の電話をしている曽良の横で大きくため息をついた。

なぜか、カインの兄弟姉妹たちからことごとく断られ続けていた。『おつかい』は今、休止中。だから、こんな時間に忙しいということはないはずなんだ。カインのリーダー（代理）の頼みを断るほどの理由はなんだ？　しかも、どうもカヤの名前を出すと向こうの反応が芳しくなくなるようだ。一体なんなんだよ？

ああ、くそ。こんなんだったら、歩き回って探したほうがマシだった。曽良が「そう言わずにぃ」と引きつった笑顔で言うたびに、俺の苛立ちはつのっていく。相手が嫌がっている証拠だからだ。

「ああ……だから、そう言わずに」

そうそう、これだ。二十二回も聞けば、耳のたこも破裂する。

俺は勢い任せに曽良の手から携帯を奪い取ると、誰だかも確認せずに怒鳴りつけた。

「頼むから、手伝ってくれ！　なにが気に入らないんだ！？」

いきなり手から携帯が消え、曽良はきょとんとして俺を見ていた。そして、「かっちゃん」と哀れみに満ちた表情を浮かべ……合掌？

「てめぇの女が気にいらねぇんだよ、和幸！」

「！！」

いきなり、鼓膜が破れるほどの怒鳴り声が携帯から飛び出してきた。電波を経由してここまで恐ろしい声が忠実に再現されるものだろうか。曽良の合掌の意味が分かって、俺は背筋がゾッとした。聞き間違うはずはない。この声は……

「静流（しずる）姉さん……」

「久しぶりねぇ。もう二度と、あんたの声を聞くこともないかと思ってたんだけど。よくも怒鳴りつけてくれたね。いい度胸じゃないか」

相変わらずの、低いハスキーボイス。そしてこの高圧的な口調。何も変わってない。昔のままだ。

女番長とも呼ばれている、二つ年上のカイン――シズル。小学（ガキ）生の頃、俺や曽良、砺波の姉代わりだった人だ。中学に入ってすぐ、広幸さんが死んで……それから立ち直るまで、俺の面倒を（きびしく）見てくれたのもこの人だった。仁侠映画好きで、言葉に難があるが……頼れる皆の姉貴分ってとこだ。そういえば、砺波のあの口の悪さはこの人の影響だろう。

「元気そうでなによりだよ」言って、とりあえず機嫌をとる。怒らせると砺波よりも厄介だからな。悪いけど、今、シズル姉さんのことで頭を悩ませている場合じゃないんだ。

「なんで、お前に心配されなきゃなんねぇんだよ？」

「……」

たった一言でも、素直に言葉を返せないんだろうか。シズル姉さんらしいといえばらしいけど……久々の会話だというのに、淡白というか冷たいというか。まあ、予想はついてたけど。

「曽良から聞いただろうけど」と、俺はため息混じりに本題に戻す。

「姉さんが気に入らないと言った、『俺の女』がいなくなったんだ。探すの手伝ってくれると助かる」

「嫌だって言ってんだろ」

「なんで？　面倒くさいからか？」

そもそも……なんで、『俺の女』が気に入らないんだ？

すると、電話の向こうで「は」と呆れた笑いが聞こえた。

「分かんねぇのかよ？　神崎カヤがいなくなったなら、こっちは万々歳なんだよ」

「なんでだよ！？」と俺は腰に手をあてがった。話が読めない。まるで……カヤを嫌ってるみたいな口ぶりじゃないか。なんで？　会ったこともないだろ。

頭を悩ます俺に、酒やけの男のような声でシズル姉さんは一気に畳み掛けてくる。

「お嬢さまがクルーザーでどぶ川に迷い込んできて、偶然釣り上げた珍しい魚を水槽にぶちこんで熱帯魚代わりに眺めて楽しんでやが

る。どぶ川の仲間にとっては、いけすかねぇ話じゃねぇか」
「……は？」
何の話だ？　どぶ川？　魚？　俺は意味が分からず、ぽかんと口を開けた。
「和幸。女に騙されるほど、お前も馬鹿じゃねぇだろ。戻っておいで」
「！」
騙される？　俺がカヤに？　何を言ってるんだ、姉さんは？
「まだ間に合う。曽良に言って、『勘当』は延期してもらいな」
「勘当？　なんだ、それ？」
「それから、悪いけど、他のカインに頼んでも無駄だよ。その前に、あたしが根回しするからね。
それじゃ、せいぜい飽きるまで女のケツ追い回してな」
「は！？　なんだよ、それ！」
引き止める俺の声は聞こえたのか聞こえなかったのか。シズル姉さんは有無を言わさず電話を切った。言いたいことだけ言いやがって。久々の弟の頼みも断固拒否か。仁侠映画好きなら、人情ってもんにもう少し興味を示してもいいんじゃないのか。
「どうなってんだよ？」と俺は苛立ちながら、曽良に携帯を返す。
「シズル姉さんはカヤが嫌いなのか？　会ってもいないのに、なんでだ？」
「……さあ、なんでだろうねぇ」
この話には関心がないのだろうか。曽良は適当な返事をした。

まあ、いい。シズル姉さんは独特の世界を持つ、滅茶苦茶な人だ。カヤの噂でも聞いて、何かとんでもない勘違いを起こしたんだろう。それよりも……

「勘当ってなんだ？」

尋ねた瞬間、曽良がハッと目を見開いた。「あ」と言ってアヒル口をゆがめる。

当然のようにシズル姉さんはその単語を口にしたが、俺は聞いたことがなかった。勘当って言葉自体はもちろん知っている。でも、勘当を延期？　そんな使い方は聞いたことがない。無論、カインの間でも。

「今夜の卒業パーティで言おうと思ってたんだけど」

曽良は言いにくそうにそう切り出した。俺が眉をひそめると、曽良は真剣な表情で俺を見てきた。

「今夜が、かっちゃんとの最後の夜なんだ」

「！」

最後の夜？　どういうことだ、それ？

正義の告白　―３―

「殺してやろう……て、じゃあ、そのときに和幸くんを利用しようと考えたんですか？」

カヤは喉に何かがつまったような息苦しさを感じた。正義のそのときの苦しみを思うと、胸が締め付けられる。

さくらか。真紀か。過酷な選択を迫られ、正義が選んだのはどちらでもなかった。選んだのは……大野を殺すこと。その選択肢を肯定する気はないが、それほどまでに追い詰められた彼の気持ちは分からないでもない。もう逃げ場がなかったんだ。カヤはそう思うと、いつかの正義に捕まれた腕の痛みを思い出す。アザができそうなほどの強い力で掴まれ、脱臼するかと思うほどの勢いで引っ張られた。あのときは、なんて乱暴な人だ、と怯えたが……今となってみれば、あれは彼自身の恐怖と焦りのあらわれだったのでは、という気がしてくる。心の奥底で自分よりも怯えていたのは、もしかしたら彼のほうだったのかもしれない。

「ああ」としばらくしてから正義は低い声で答える。「俺のクローンがいる。しかも、殺し屋の。その事実はすでに知っていたからね」

それを聞いて、カヤは一週間も前の会話を思い出す。和幸を初めて目にしたのは、平岡がつくったホームページの動画。確か、正義はそう言っていたはずだ。

カヤが気になっていたのは、そこからの彼の行動だ。自分の生き写しのような少年を見つけ、探偵を雇ってまで調べ上げた。カヤにはその行動が理解できない。自分だったら、他人の空似ですましていたはずだ。わざわざ調べようとまでは思わない。つまり……と、カヤは眉根を寄せる。冷静になって考えてみれば、明らかだ。正義

はそれ以前から、クローンの存在を知っていたのだ。居場所や名前までは知らないまでも、どこかで自分のクローンが生きている、その事実を把握していたに違いない。

「いつから、知ってたんですか？」カヤが慎重にそう尋ねると、正義は小首を傾げた。

「クローンのことか？」

カヤは口元だけ笑って答える。はい、と言うのもはばかられた。事実だから仕方がないといっても、和幸をクローンだと表現することに嫌悪感があった。裏切っているような罪悪感まで感じる。

もちろん、正義は和幸を自分のクローンとしか思っていない。カヤがそんなことを気にしているとは思いもしていなかった。

「二十年前……俺が四歳だったときのことだ」

正義はそう言って口火をきると、淡々と話し出す。

「幼稚園に入ってから高熱や咳に悩まされる日々が続いていて、ある日病院で診察を受けた。両親は肺炎かと思っていたが、違った」そこで区切ると正義は胸に手を当てた。「原因はここにあった」

「ここって……」

「心臓だ。移植が必要だと診断されて、すぐに移植手術を受けた」

さらりと言ってのけた正義。カヤは何も言葉がでなかった。つい、まじまじと正義を見つめてしまう。移植手術を受けたってことは……と、彼が押さえている胸元に視線を集中させた。あそこで動いている身体のモーターは、正義のものではなく別の人間のもの。それが不思議で、首を傾げた。さらに不可解なのは、この話と和幸との関係性だ。和幸が今生きているということは、少なくとも和幸の心

臓を移植したわけではない。なぜ、彼はこんな話を始めたのだろうか。
その疑問に気づいたかのように正義は胸から手を離して、一切の躊躇を感じさせない滑らかな口調で続ける。
「そのときの俺は、何も疑問に思ってはいなかった。なぜすぐに手術ができたのか。ドナーがなぜそんなに簡単に見つかったのか。他にも大勢の子供たちが移植を待っているのに……なぜ、俺だけすぐに移植ができたのか」
正義はそこで間を置いた。一呼吸おいて、「高校にはいって、母は病の床に付いた」と哀しげに話を切り替える。
「死期が近づき、母は怯えるようになった。これは罰だ、呪いだ、と騒ぐようになって病気も悪化した。病気のせいで頭が狂ったのかと俺は思っていた。だが……死ぬ間際、まるで懺悔をするかのように、俺に全て明かしたんだ」
「全て？」
カヤが続きを促すと、涙を堪えるようなつらい表情で正義は見つめてきた。
「俺の心臓は闇ルートで買った孤児の……それも、生きた子供のものだった、と」
「！」
思わず、カヤは立ち上がりそうになった。あまりに恐ろしいカミングアウトにどうしたらいいのか分からない。こんな展開になるとは、予想だにしていなかった。どんなリアクションが適当だかも判断しかねて、カヤは硬直した。

「俺のために、両親は他人の子供を殺したんだ」言って、正義は握り締める拳に力を入れる。そして興奮したように、熱っぽく言葉を連ねた。「衝撃だった。俺の命は、非人道的な行いで救われた。この心臓のために、殺された子供がいる。俺が生きるために犠牲になった人間がいる」

やはり、何も言葉は出ない。カヤは黙っていることしかできなかった。何かを言おうにも、全部不適切に思える。正義の言っていることは、残酷だが事実だ。ここで優しい言葉を並べて慰めても、事実を否定することにしかならない。誰よりもその事実と向き合ってきたのは正義だ。ここで自分が何を言おうと、それは軽率で薄っぺらい言葉にしかならないだろうと思った。

「俺は呪った」と、正義は低い声で言う。「両親よりも、そんなことができる世の中を。人を救うために、当たり前のように人を殺せる世界に、だ。両親は良い人間だった。ただ、俺を救おうと必死になって、そんな方法を見つけてしまっただけなんだ。

だから、変えたいと思った。この心臓のためにも……国を変えたい、と。せめて、この心臓が動き続ける限り、正義の行いを貫いていこう、と。それが、俺にできる償いだと思ったんだ」

そこまで早口で言い切ると、正義はずっと足元に向けていた視線をカヤに戻した。

「皮肉にも、正義（せいぎ）という名前を背負っていたしね」

その笑みは、せつなくもあり、哀しくもあり、そして疲れ果てていた。そこに隠されているのは、一生消えることの無い罪。生きている限り、背負わなければいけない重い十字架。波打つ一つ一つの

鼓動こそ、その罪の証明。
カヤはただ呆然として、思いもしなかった過去を抱える青年を見つめる。
――俺はこの国を変える男だ。

そういえば、以前も彼はそんなことを言っていた。あのときは、高慢な男の独りよがりの野望かと思っていた。戯言にしか聞こえなかった。だが、今なら分かる。正義は本気で言っていたのだ、と。そして、ずっと感じていた彼の異常なまでの正義への執着も合点がいった。全ては心ではなく、彼の心臓がから生まれていたのだ。彼の命は罪そのもの。だからこそ、一つ一つの行動で罪を償うように正しいことを追い求めているのだろう。彼の人生は、罪深い男の孤独な贖罪の旅――カヤはそう感じた。

「すまない」正義は鼻で笑って、姿勢を正した。「つい熱くなって余計なことを話してしまった。話がだいぶそれてしまったな」

そういえば、質問は和幸についてだった。カヤもそれをすっかり忘れていて、ハッとした。

「不思議だな。君と話していると、つい懺悔をしたい気分になる。きっと、話しやすい雰囲気をもっているんだろうね。こうして一緒にいると、落ち着くよ」
「！」

思わず、顔が赤らんだのを感じた。同時に、藤本の顔がカヤの頭に浮かぶ。そういえば、似たようなセリフを藤本にも言われたことがあった。自分と話していると救われるような気分になる、と藤本も言っていた。自覚は無かったが、二人に言われれば、そうなのか

もしれない、という気になってくる。もし、そうなら……思いもしなかった長所だ。ぽろりとこぼれた笑みを隠すようにカヤはうつむいた。

そんな彼女を横目に、独り言ほどの小さな声で正義はつぶやく。

「そういうところに、俺のクローンは惹かれたのかな」

分かる気がする――その言葉は、唾と一緒に飲み込んだ。

＊　＊　＊

「心臓の話を母に明かされたとき」と長谷川さんはおもむろに語りだした。「俺は初めて裏世界の存在を知った。そして同時に、そこでは当たり前のようにクローンが製造されていることも聞かされた。母はそれを話した上で、こう言ったんだ。もしものときのために、クローンを『発注』した、と。万が一、この心臓が合わなかったときのためにな」

ドクン、と心臓が大きく揺れた。呼吸の仕方を一瞬忘れて苦しくなった。

「つまり、和幸くん？」とおそるおそる尋ねると、長谷川さんは視線を落とす。

「ああ」

おぞましい考え方だけど、理解はできる。臓器のスペアとしてのクローン。誰でも考えることだろう。長谷川さんのお母さんの気持ちは、決して異常ではない。息子を心配するあまり、道徳的な判断ができなくなっていただけだ。

長谷川さんの言っていた意味が分かった。恐ろしい選択をしてし

まったご両親よりも……そんな選択肢が実際に存在しているこの世界のほうが問題なのかもしれない。ただ、なんだろう。理解はできるけど、何かがひっかかる。しっくりこない。

とにかく……それ以上にひっかかることが他にある。長谷川さんの話は少しおかしい。確か、和幸くんは言っていた。彼のＤＮＡはどこからか盗んできたもので、『発注』されたクローンとは違うんだ、て。オークションで売るためだけに創られたはず。長谷川さんの言っていることが本当なら、和幸くんは『発注』されたことになる。砺波ちゃんと同じように。それなら――ええと、なんだっけ。商業用のクローン……だったっけ――和幸くんはそれではないはずだ。だったら、体を改造されてるのもおかしいし、オークションで売られたというのも変だ。

私が眉をひそめていると、その疑問に答えるかのように長谷川さんはこう語った。

「だが、父親に止められてすぐにキャンセルしたらしい」

「キャンセル？」

「というのも……父は、政治家でね。孤児を買って心臓を取り出したことさえ、漏れればとんでもないスキャンダル。それ以上、リスクを背負いたくなかったんだろう」

「……」

つまり、和幸くんのＤＮＡは盗まれたわけじゃなくて……キャンセルされたＤＮＡ？　『発注』したときに渡したＤＮＡが勝手に使われて、オークション用に創られた。そういうことかな。

それにしても……関係ないことだけど、長谷川さんのお父さんって政治家だったんだ。意外……ではないけど、驚きだ。なるほど、贖罪として「国を変える」という発想がでてくるのも頷ける。実際に国を変える力を持つ人が傍にいるからなんだ。

あれ……そういえば、政治家ってことは……もしかしたら長谷川

さんのお父さんとおじさまは知り合いだったりするんだろうか。名前くらいは聞いたことあるかな。

「ところが……」と長谷川さんは表情を曇らせた。「三週間ほど前だった。友人に、ネットで俺によく似た奴の動画があるって言われてな。興味本位でのぞいてみたんだ」

私は、あ、と声をあげそうになった。平岡くんのホームページのことだ。

「すると、似ているなんてもんじゃなかった。数年前の俺がいた。そこで、すぐに気づいたよ。キャンセルしたはずのクローンは、なぜか完成されていたんだ、ってな。手違いでもあったのか、キャンセルしたという母の言葉が偽りだったのか……知る由もないが」

たぶん、どちらでもない。私は余計なことを口走らないように口をつぐんだ。長谷川さんのＤＮＡは、金儲けの素材にされたにすぎないんだ。

「さらに調べると、なんと裏世界の殺し屋だという。それを聞いて絶望したよ。俺は生きるために他人の心臓（いのち）を奪い、その十字架を背負って生きてきた。いや、生き続けなければならない。それを償うために必死になっているというのに……俺の分身は人を殺して生きている、というんだ。耐えられなかった！」

溜め込んでいたものを全て吐き出すような勢いでそう言って、長谷川さんは口元を押さえた。吐き気でもするかのような表情だ。呼吸を整え――声を荒らげたことにだろうか――「すまない」と一言置いてから、彼は落ち着いた様子で続きを話し出す。

「だから、せめて正しい道に導いてやろう、と思ったんだ。彼もまた、俺の罪だと思ったから」
「正しい道？」なんとなく、話がつながってきた気がした。私は眉根をよせてこう尋ねる。「それが、大野さんを殺すこと？」
「ああ」と長谷川さんは低い声で答えた。「彼が殺し屋だという事実は俺にはどうにもできない。だから、それならせめて、正義のための殺し屋になってくれれば……そう願った」

つまり、悪い人を殺す殺し屋に育てようとしたってこと？　それが……長谷川さんがあの夜に訴えていた、正義（せいぎ）の殺し屋？
でもその長谷川さんの定義からすれば、カインだった和幸くんはもとから正義の殺し屋なんじゃ？　だって、彼らは人身売買で売られた子供たちを助けるために人を殺してるんだから。……和幸くんは、殺したことは無いけど。もしかしたら、長谷川さんはカインのことは知らない？　いや、カインのことは知っていても、和幸くんがカインだとは知らないのかも。ただの殺し屋だと思ってる？
かといって、ここでカインのことを伝える必要もないだろう。話したところで何かが変わるわけでもないだろうし、余計なことを話して新たな事件が起きても困る。とりあえず、今は話を聞かなきゃ。

「それで、あの事件？」と、私は遠慮がちに尋ねる。
「開き直るしかないと思ったんだ」

長谷川さんは鼻で笑ってそう答えた。

「国を変えるのだって一筋縄じゃいかない。いつか手を汚さなきゃいけなくなる。彼はそのために神が俺に与えた武器なんだ――そう自分に言い聞かせた。そして大野は、そのための最初の試練だと思った。だから……君をおとりにして……」

長谷川さんが口ごもって俯いて、急に気まずい空気が流れた。こうしていると忘れてしまいそうになる。理由はどうあれ、この人は私を大野という男に……殺したくなるほど恐ろしい男に渡そうとしたんだ。和幸くんを操るために。

長谷川さんは指を絡めて両手を組んだ。

「直接話したところで説得できるとも思えなかったから……恋人である君を利用しようとしたんだ。大野に、若い女を連れて来い、と丁度言われていたしね。それで、君をつけていた」

「つけてた？」

「といっても、一日だけ」言って、長谷川さんは私を見つめてきた。

「運よく、尾行を始めた夜に君は一人になってくれた。クローンも傍にいなかったし……今しかないと思った」

まるで昨日のことのように、ファミレスで長谷川さんが迎えに来たときの情景が鮮やかに頭の中で再生された。和幸くんに電話するという私を気遣って曽良くんは席を離れ（遠くから見守っていてくれたらしいけど）、その隙を見て長谷川さんは和幸くんのふりをして私の前に現れた。これっぽっちも疑わなかった。だって、まさか和幸くんのオリジナルが現れるなんて思わないもの。こんなに似ている人が現れれば、本人だとしか思えない。

「必死だった」と長谷川さんは呆れたような笑みを浮かべる。「今じゃ、あの夜のことをよく覚えていないんだ。何分、初めてのことだったから。とにかく必死だった。失敗するわけにはいかない、と」

その言葉に、つい苦笑した。

「……そんな感じがしました」

私の腕をつかむ手は、力加減が全然できていなかったもの。
長谷川さんは恥ずかしそうに「そうか」とつぶやいた。
「でも、あのときのことはよく覚えている。君が俺をかばって被弾したときだ」
気のせいだろうけど、胸がズキッと痛んだ。傷跡はすっかり消え去っても――なぜかは分からないけど――痛みだけは体に植え付けられて残っているようだ。
「あいつに言われたんだ。救急車を呼べ、と。俺はそのとき、一番に保身を考えた。君の命より、自分の未来を心配したんだ。
醜い自分に気づいた。いつのまにか、俺は自分が一番嫌う連中と同じ考えをするようになっていたんだ」
「……」
確かに、そうかもしれない。言われて、長谷川さんの矛盾に私も気づいた。人を救うために、平気で人を殺す世界。それを嫌っているはずの彼がしようとしたことは、恋人のために大野さんを殺すこと。同じだ。結局、彼もまた狂った世界に囚われていたんだ。なんて皮肉だろう。
「正しいことをしていると思っていた。でも、目の前にあったのは、血の海に横たわる瀕死の君とそれを救おうとしている一人の少年だった。
絶望感に襲われた。自分の正義（せいぎ）に自信が持てなくなったんだ」
そこまで言うと、長谷川さんはおもむろに立ち上がった。どうしたのかと不思議に思っていると、部屋の隅にあるぎっしりと分厚い本がつまった本棚に向かっていった。

「もう一度、自分の正義を見直さなくては、と思ったんだ」長谷川さんは私に背を向けたまま、話を続ける。「あれは俺の正義じゃない。そうであってはいけないんだ、と思い直した。だから、違う方法で……俺が正義だと思える方法で、大野をいつか裁こうと決めたんだ」

「いつか？」

背中越しでも、本棚から何かを手に取ったのが動きで分かった。

「そのために……正しいことを貫くために、俺はまず、最初の過ちを正すことにした」

最初の過ち？

くるりとこちらに振り返った長谷川さんの手には、写真たてがあった。さびしい笑顔を浮かべて私のほうへ近づくと、おもむろにその写真たてを差し出してくる。何の写真だろうか、と首をかしげて受け取って……私は目を丸くした。

そこに写っているのは、さくらちゃんと……そして、素朴で美しい女性。日本人形のように、まっすぐに毛先が整えられたショートヘア。ややつり目の小さな瞳。鼻筋が通って、すっきりとした顔立ちだ。変な言い方だけど、クレオパトラはこんな女性だったんじゃないか、と思ってしまった。さくらちゃんにはあまり似ていないけど……それはきっと、痩せこけた頬のせいだろう。

この人が真紀さんなんだろう、と確信した。さくらちゃんと写っているし、長谷川さんが部屋に飾っているのだから、そうとしか考えられない。でも……偏見かもしれないけど、とても娼婦には見えない。大野さんに苦しめられてきた女性とも思えない。長谷川さんの話にでてきた女性とは思えない。写真の彼女は、自然な笑顔を浮かべて実に幸せそうだ。

「……そっか」

唐突にはっきりと分かった。写真からつわたってきた。彼女が二年もの間、大野さんのことを長谷川さんに話さなかった理由。彼女は、この幸せを守ろうとしたんだ。長谷川さんとさくらちゃんと過ごせる、愛にあふれた時間。その間だけは、彼女は普通の女性になれる。娼婦でもなく、かつて大麻に手を出した罪人でもなく、大野さんの奴隷でもなく、ただの幸せな女性に。だって言わなければ、少なくとも長谷川さんといる間だけは、悪夢のような現実も幻になるから。彼女が守ろうとしたのは、普通の幸せなんだ。

じっと見つめている間に、長谷川さんはソファに腰を下ろしていた。そして、静かにこう告げる。

「真紀に自首させた」

「！」

思わぬ告白だった。

正義の告白　―３―（後書き）

区切りが悪くてすみません。
正義の告白も、残すところあと……一話ですかね。

正義の告白　―４―

自首。いきなり転がり込んできたその言葉に、カヤはハッと目を見開いて正義に振り返る。つまり、ここに真紀がいないのは、警察――もしくは刑務所にいるからか。それも、自首させた？

「最初から、そうすべきだったんだ。彼女の罪を庇おうとしたときから、全て狂っていたんだ」

正義は穏やかな表情でそう語った。はっきりとした口調で、一切の迷いも感じられない。

「でも……」とカヤはつぶやいて、そして口をつぐむ。何を言おうとしたのか、自分でも分からない。真紀が大野につけこまれるようなことをしたのは事実だ。冤罪ではない。確かに彼女は罪を犯した。それなら、自首はいい知らせのはずだ。これでようやく彼女は浄罪することができるのだから。正義の言葉を借りれば、正しいこと、なのだろう。だが、カヤはすんなりと受け入れられなかった。といって、でも、のあとになにを続ければいいのかは見当もつかない。

もしかしたら、ただの同情なのかもしれない。そう思うと、自己嫌悪に襲われる。

「真紀が自首したことで、大野は強請るネタを失った。さくらも狙われることはない」

そうだ、さくらちゃん――カヤは思い出したように、ぎゅっと写真たてを握り締めて口を開く。

「さくらちゃんは、どうなるんです？　お母さんしか身寄りがいな

いんですよね？」

何を隠そう、それこそ真紀が大野の奴隷になった原因だ。さくらを残して刑務所にはいるわけにはいかない。孤独な母は、娘を守るために牢屋ではなく茨の道を選んだのだ。なのに、どうして今更、娘を置いて自首したのか。

すると、正義は目を細めて慈しむように笑む。それは見覚えのある優しい笑顔で、カヤの胸が軋んだ。

「俺がいる」なめらかに口を動かして正義は静かに告げた。

「え」

「自首する前の日に、あの子の父親になったんだ。書類上のね」

カヤは唖然とした。回りくどい言い方だが、何を示唆しているかは明らかだ。

「結婚したってことですか？」

目をまん丸にして確認に近い質問をなげかけると、ああ、と正義は照れながら頷いた。

「おめでとうございます！」と、思わずカヤは身を乗り出して声をあげていた。結婚したからといって、二人の状況が変わるわけではない。正義が人を殺そうと画策した事実は消えないし、真紀は今後刑務所で暮らすことになる。だが経緯はどうあれ、結婚はめでたいもの。二人が愛し合っているのなら、なおさら。暗い気持ちが一転、胸が高鳴っていた。結婚の一言でここまで気持ちが変わるのだから、とカヤは単純な自分に呆れた。

新婚の夫は、しかし、「ありがとう」とは答えなかった。自分のことのように喜んでいるカヤに、パッとしない表情を浮かべて、参

ったな、と頭をかく。

「初めて祝福されたな」

「初めて？」思わぬ返しに、カヤは目をぱちくりとさせた。「ご家族は？」

孤児院出身の真紀に家族がいないとしても、正義にはこんな贅沢なマンションを与えてくれる父親がいる。祝福されていないということは、まさか結婚を報告していないのか。それとも、反対でもされているのか。カヤは表情を曇らせた。

「真紀は子持ちの娼婦。しかも、大麻所持に売買で牢屋に入る身。そんな女との結婚は、父にとってはとんでもない話でね。婚姻届を提出したその夜に、離婚しろ、とせがまれたよ。

しかも、俺の一族は代々政治家だ。俺も行く行くはそうなろうと思っている。だから余計なんだろう」

「……」

祝福されない事情に、カヤは不本意だが納得してしまった。正義の父の心配も最もだ。政治家の妻が、前科のある元娼婦。世間からすれば、聞こえがいいわけではない。正義の将来のキャリアに確実に影響がでるだろう。

それだけではない。正義は口にしなかったが、もう一つ理由があるように思えた。さくらの存在だ。真紀は一度子供を出産している。つまり、正義との子供は一生生めないということだ。正義自身はもちろん、その父からすれば、血の繋がった孫を諦めることになる。子持ちの娼婦……反対されるのも当然かもしれない、とカヤは視線を落とした。代々政治家という歴史あるお家柄なら、なおさらだ。

だが、厳しい境遇を語る正義の声は明るかった。晴れ晴れとした表情で一切の負の感情を感じさせない。彼はきっと一切後悔してい

ない。未来に不安もない。それが伝わってくる。

「真紀が釈放されたら」と、正義は頬を緩めて遠くを見つめた。「認めてもらえるまで二人でしつこく父につきまとうつもりだ」

「認めてもらう……？　でも、もう結婚したんですよね？」

さっきの話で、正義の年齢は分かった。二十年前に四歳なら、今は二十四。婚姻届に親の同意が必要な歳ではない。もうそれを提出したというのだし、一体何を認めてもらうというんだろうか。カヤが不思議に思っていると、正義は肩をすくめて微笑んだ。

「書類上は、ね。でも、ちゃんと祝福してもらいたいだろう。真紀は俺が惚れた女だから、俺の家族が気に入らないはずはないんだ。それに……」そこで言葉をきると、正義は力強い口調で付け加える。

「やっぱり、真紀にも俺の家族を知ってほしい。贅沢を言えば、愛してほしいと思う」

「！」

カヤはギクリとして体を強張らせた。なぜか、和幸に言われているような錯覚を覚えた。針でつっつかれたような痛みが胸を刺し、カヤは無意識に眉を曇らせた。

「確かに父は、恐ろしいことをした。赦されることじゃない。でも、どんな家族であれ、俺の大事な家族なんだ。俺の一部なんだ。だから……真紀にも、その一部になってほしいと思う」

明るい未来を信じて疑わない。正義の眼差しはそんな希望に満ち溢れていた。

その斜め横で、カヤは浮かない表情を浮かべている。錯覚は続いていた。カヤは責められているような気さえして、うつむいた。

「父が真紀を認めてくれたら、そのときには晴れて式を挙げようと思っている」

正義はそう締めくくり、「これで、俺の話は終わりだ」と几帳面に終止符を打つ。

じっと話を聞いていた少女は、浮かない表情を浮かべていた。予想外の反応だ。結婚と聞いてあれほど瞳を輝かせて興奮したというのに、結婚式には無反応。まあ、「ぜひ呼んでくださいね」なんていわれたらどうしようかと心配していたから、丁度良かったかもしれない。正義はそう心の中でつぶやいて、声の調子を変えて尋ねる。

「何か、まだ聞きたいことはある？」

突然そう聞かれ、カヤはハッと我に返り顔を上げた。

「聞きたいこと……」

何かあるだろうか、とカヤは天井を振り仰いだ。正義が和幸を利用して大野を殺そうとした理由も、真紀が何者かも、和幸の存在を知った理由も……そして、彼の正義（せいぎ）への渇望の源も分かった。知りたかったことは全部聞いた。いや、期待していた以上だ。まさか、正義がここまで洗いざらい話してくれるとは思っていなかった。――まるで閉店セールの勢いだった。カヤはそんな陳腐な例えがうかんで苦笑する。

「もう、ないと思います」カヤはそう答えて首を横に振る。「気が済みました」と冗談交じりに付け加えて。

「なければ」正義は身を乗り出して、食い入るような視線でカヤを

見つめる。「これでお別れにしたいんだ」
「……へ」
お別れ？　いきなり出てきたその言葉に、カヤはきょとんとした。もう夜も遅い。帰ってほしいということだろうか。だが、それにしては正義の表情は深刻だ。
「俺が君と会うのを承諾したのは」と、まっすぐにカヤの瞳を見つめて正義は言う。「一つは、直接謝りたかったから。もう一つは……」
不自然にそこで言葉をきると、正義は一瞬だけ躊躇した。カヤの表情があまりに不安そうで、言うのがはばかられたのだ。だが、これはお互いのためだ。言わなくてはならない。正義は甘い考えをばっさりと切り捨てるように、勢いをつけて言い放つ。
「君と……いや、君たちと関係をきるためだ。今夜で、連絡をとるのも会うのも最後にしたい」
＊　＊　＊
「これが最後の夜？」いきなりフラれる女は、こんな気持ちなんだろうか。それくらい、唐突に告げられた。「何の話だ？」
曽良は諦めたようなため息をついて、鋭い視線を向けてきた。
「父さんと話し合ったんだ。リーダー代理としてね。この前例のない事態にどうすればいいか」
前例のない事態？　俺は理解に苦しみ、顔をしかめて鶏のように

顎をひいた。

「カインノイエを抜ける兄弟はかっちゃんが初めてだから」と、曽良はポケットに手をつっこんで視線を落とした。「どうすればいいか、父さんとティコと三人で話し合って決めたんだよ」

「……！」

そのことか。俺は腕を組んで「そうか」と小さく呟いた。話が読めたな。

ティコは、もちろん、曽良のつけたセンスの無いニックネームで、本当の名前は茶々（ちゃちゃ）。一つ年下のカインだが、とてもしっかりしていることで昔から有名だった。俺が曽良のサポート役を断って、彼女が代わりに曽良の右腕となったと聞いている。つまり……親父、曽良、茶々は今のカインノイエのスリートップ。その三人でわざわざ俺の今後について話し合ってくれたわけか。はは。光栄この上ない。

大きく息を吸い込むと、冷たい空気が気道を通り抜けた。厳しい冬がそこまで来ている。それを感じた。

「それで？　何を決めた？」そう促すと、曽良は心情を読み取りにくい複雑な笑顔を浮かべる。

「新しいルールを決めたんだ。それが……『勘当』。カインノイエを抜ければ、それから一切の家族（カイン）との接触を禁ずる。もちろん、父さんともね」

曽良は俺の反応を注意深くうかがっている。心配してるみたいだな。俺は肩をすくめて微笑し「妥当だよ」とかばうように答える。

こうなるだろう、とは思っていた。カインを辞めると宣言してから、普通に曽良や砺波と会っていることが不思議だったくらいだ。まるで以前と何も変わっていなかった。いや、カインだったとき以

上に曽良とは会っていた気がする。『実家』にも自由に出入りしていたし。銃を手放した以外、変化はなかった。
そうか、やっと分かった。今まで誰もカインノイエを自ら抜けた奴はいなかったから、その後の指針がなかったんだ。俺は宙ぶらりん状態だったわけだな。それが、やっと決まったんだ。『勘当』――カインノイエの新しいルール。親父や兄弟姉妹たちと完全に縁を切る掟か。

「断腸の思い」曽良は不意にそう言った。「それが、父さんの言葉だった」
「！」

何を言い出すのかと思ったら……よっぽど俺が心配なんだな。言われなくても、親父が喜んで俺を『勘当』するわけじゃないことくらい分かってる。そのくらいの絆は築いてきたつもりだ。
俺はため息混じりに「ああ」と微笑んだ。

「でも、ケジメは必要だから」なおも、曽良は言い訳のように続ける。「きっちり俺たちと縁をきらなきゃ、結局こっちの世界から抜けられない。だから……」
「今夜で、そのケジメをつけようとしたんだな」

慰めるような声色で、俺はあとを引き継いだ。曽良は驚いたように目を丸くしたが、すぐに眉をひそめて暗い表情を浮かべた。断腸の思い……こいつもそうなのかもな。馬鹿で能天気だが、昔からいい奴なのは変わらない。
さっきの電話で、シズル姉さんは『勘当』とはっきりと口にしていた。まだ間に合う、とも言っていたし……今夜俺が『勘当』されることは、カインの皆にすでに連絡がいっているんだろう。
思い返せば、今朝の砺波の様子も変だった。

――私ら家族を捨てるんだから……ちゃんと、幸せになってよね 。

言われたときは深くは考えなかったけど……そうか。意識してみると、別れの言葉に聞こえなくもない。いや、あいつにしてみれば、かなりちゃんとしたはなむけの言葉だ。

こうなってくると、今夜葵を連れてきてしまったことが心の底から悔やまれる。バタバタして、砺波とちゃんとした別れができなかった。今までは当たり前のように会えていたからな。まさか今夜が最後だとは思ってもいなかった。全く……サプライズパーティってのは厄介だな。まあ、厄介にしたのは俺なんだろうけど。

「それで……」と、一つだけ気がかりなことを尋ねる。「カヤはどうなる？」

カインの兄弟たちと会えなくなることは、覚悟の上だった。今更、ショックを受けたりはしない。寂しくないといったら嘘になるが、これが俺の選択――カインを辞め、表の世界でカヤと生きること――に対する結果なら快く受け入れる。

ただ、心配なのはカヤだった。

「どうなるって？」俺の質問の意図が分かっていないようで、曽良は顔をしかめて首を傾げた。「口止めなんてしないよ？」

「カヤもお前らと会えなくなるのか？」

曽良はハッとして、珍しく哀しい表情でうつむいた。その反応で十分答えは伝わってきた。

「会えないんだな」

胸が締め付けられた。俺をカインノイエから引き離すための『勘当』。それで俺の彼女がカインと会っていたら、結局、繋がりは残ったままだ。予想はついた。そうだろうとは思ったが……

「どうにかならないのか？」

気づけば、わがままな子供のように曽良にせがんでいた。俺のこの反応は、曽良にとってかなり意外だったようで、顔を上げてぎょっと目を丸くした。

「どうにかって……？」

「カヤだけでも、友達としてお前らと会うわけにはいかないか？」そこまで言って、俺は降参するように両手の平を曽良に見せる。「俺は一切関わらない。カヤだけだ。約束する。なんなら、俺がバイトのあいだだけでも……」

「ダメに決まってるでしょ、かっちゃん」

俺の言葉を遮って、曽良は苛立ったような声を出した。

「俺だって、そうしたいけど……」と言うと口ごもり、つらい表情を浮かべて俺を睨んできた。「それじゃ、キリが無い！」

静まり返る夜道に、曽良の声が響き渡った。

こんなにムキになる曽良を初めて見た気がする。そりゃ、中学からほとんど会ってないからそうなのかもしれないが……こいつらしくない、と思った。

「切るときには、きっちり切らなきゃ……特に、こっちの世界とは。中途半端が一番危ないんだよ」

悔しそうに曽良は拳を握りしめてそう呟いた。
反論の言葉はない。その通りだ。分かってる。無茶な提案だったってのは、重々承知だ。それでも、カヤから曽良や砺波を奪いたくはなかった。気づいてしまったんだ。さっき、曽良に聞かれたときに。

――よく行く場所とか……誰か、友達の家とか？　カーヤの学校の友達、誰か知ってるでしょ　。

分からない、とあのときは答えたが、言葉を濁したにすぎなかった。本当は――

「でも、お前と砺波しか……あいつに友達はいないんだ」
「え？」

ぼやきのような俺の一言に、曽良は唖然とした。

居場所

「関係をきる？　どうして、急に？」

思わぬ正義の言葉に、カヤは動揺を隠せなかった。一週間前の事件以来、直接会うのはこれが初めてだ。しかもやっと落ち着いて話ができたというのに。正義の話を聞いて事情も分かった。過去は水に流して、これからいい関係を育めればいいと思っていた。できれば、和幸も一緒に……。だが、その考えは正義の一言で崩れ去った。これで最後にしたい――容赦ない別れの言葉だ。

「君も分かったはずだ」と、正義は身を乗り出して力強い口調で切り出した。「彼と俺の世界は、交わってはいけない。俺たちは何も共有してはいけない。そういう気がするんだ」

「でも……」

戸惑った表情で言いかけるカヤの言葉を右手で制し、正義は説得するように続ける。

「あんな事件を起こした俺が言うな、と思うかもしれないが……だからこそ言えることもある。俺はもう少しで取り返しの付かないことをするところだった。あんなはずではなかった。俺はただ、大野さえ死ねば……」

そこで言葉をきると、正義は邪念を取り払うかのように首を横に振った。

「とにかく、これ以上は関わるべきではないと思うんだ。勝手だと罵ってくれても構わない。ただ……俺はさくらを守らなきゃいけな

い。二度と、危ないことに巻き込みたくは無いんだ。だから……」

正義はぐっと堪えるような顔でカヤを凝視する。必死に許しをこうような視線だ。カヤは一瞬たじろいだ。自分が正義に押し売りをしているような気分になった。

カヤは諦めたようにため息を一つつくと、にこりと微笑んで穏やかに告げる。

「分かりました」

さくらの名前を出された時点で、反論の余地はなかった。正義の懸念は最もだ。彼はまだ和幸が殺し屋だと思っている。いや、殺し屋を辞めたと知っても、決意は変わらないだろう。引退したといっても、彼は裏世界で殺し屋として生きていた。そんな人物と関わっていたら、また厄介ごとに巻き込まれる――そう思っても不思議ではない。まして、彼は今や父親。大事な、それも幼い娘がいる身だ。どんな小さな危険でも完全に排除したいはずだ。そして、真紀が自首したことで大野と縁がきれた今、彼にとってその危険とは、自分と和幸に他ならない。カヤはそれを悟った。

「ありがとう」

緊張が正義の体から抜けていくのが見て取れた。ホッと肩をなでおろし、頬をゆるめる。

カヤはふと、閉店セールのようだ、と思った自分の感覚は正しかったのかもしれない、と思った。正義の過去の告白。あれほどまでに根掘り葉掘り話してくれたのは、これで会うのは最後と決めていたからだろう。疑問を全て取り払うことで、今後会う動機を無くしたんだ。

「でも」と、正義は真剣な眼差しでカヤを見据えながら付け加える。
「何か困ったことがあればいつでも頼ってくれて構わない。君には大きな貸しがあるんだから」
「……はい」

そうは言ってもそれはないだろうな、とカヤは思った。さくらのために関係を切りたい。そう訴える人に、わざわざ助けを求めるようなことはしたくない。よっぽどのことでもない限り。
話が一段落つき、すっかりさめた紅茶に手をのばしてカヤは一口啜る。真剣な会話を続けていたせいか、喉がカラカラだった。それに今の今まで気づいていなかったのだから、相当集中していたようだ。食道をなめらかに液体が通っていくのを感じた。

「ところで」と正義は声色を高くして、話題を変える。「気になるのは、君の理由だ。なぜ、連絡してきたんだ？　俺は憎まれていて当然だと思っていたのに」

そのことですか、とカヤは紅茶をテーブルに戻して苦笑した。

「事情があったんじゃないか、て思ったからです。悪い人とは思えなくて」

事件の翌朝だった。体育倉庫で顔中アザだらけで倒れていた正義を見つけて駆け寄ると、朦朧とした意識の中、彼は涙を流して女性の名前をつぶやいた。表には出さなかったが――特に和幸の前では――ずっと気にかかっていたのだ。したことはともかく、悪い人ではないはずだ、と信じていた。
すると正義は不思議そうに首をかしげて鼻で笑う。

「それだけで、会おうと思ったの？　あんなことがあったのに？」

「もし、私に何かできることがあれば……と思って。つい、連絡しちゃいました」

それと、もう一つ。カヤは心の中で付け加える。関係を切りたいと言われてしまった後では言えないが……和幸と和解してほしかった。できれば、友達として仲良くなってくれれば。カヤはそう願っていた。ドッペルゲンガーは会うと死ぬ。あの夜、和幸はそうつぶやいていた。だが、クローンはドッペルゲンガーではない。会うべきじゃない、という考えは彼女にはなかった。それよりも、助け合えればこんなに力強い味方はいない、と思っていた。こうして本人に会いたくないと言われてしまうと……それが第三者の自己満足にすぎなかったことを思い知らされるが。

「君は……」正義はソファにもたれかかって、ため息混じりにつぶやく。「呆れるほど、お人よしなんだね」

「そう、ですか」

まさか、お人よし、と言われるとは思ってはいなかった。カヤは、きょとんとして目をぱちくりと瞬かせる。正義は、そうだよ、と力強く肯定すると苦笑いを浮かべた。彼女の人が良いことは――人が良すぎることは――この状況を考えても明らかだった。一週間前に自分を騙して連れ去った男の部屋にいるという現状。警戒心がなさすぎるというか、世間知らずというか……正義は呆れたような表情でカヤを見つめる。

「一度君を騙した人間を信じて、こうして部屋までついてくるし……君はもっと人を疑ったほうが――」

そこまで言ったときだった。カヤの表情が一変したことに気づいて、正義は言葉を詰まらせた。さっきまで穏やかな表情を浮かべて

いた彼女は、険しい顔で睨むようにこちらを見ている。

「どうかした？」とソファから背を離して柳眉を寄せて尋ねる。

カヤは咄嗟に目をそらすと、苛立ったような口調で質問を返してきた。

「長谷川さんまで、どうしてそんなこと言うんですか」

正義はいぶかしげな表情で小首を傾げる。長谷川さんまで……つまり、他にも誰かにそういわれたのか。まさか、あのクローンだろうか。そんなことを考えつつ、正義はつとめて落ち着いてカヤの問いに答えようと口を開く。

「どうしてって……」どうしてだろうか。正義は答えに詰まった。そもそも、軽い気持ちで口にした言葉だ。まさか、彼女の気分を害すとは思ってもいなかった。「深い意味はなかった。言われて嫌なことだったのなら、すまない。ただ、そう思っただけで」

正直に告げると、カヤは潤んだ瞳をこちらに向けてきた。荒い息遣いで肩が上下している。すうっと息を吸い込むと、深刻な表情で問う。

「人を信じて責められる世の中ってなんなんですか？」

「！」

正義がすぐに答えられずにいると、カヤはうつむいた。髪がその横顔にかかって表情はうかがえない。ついさっきまでは元気そうに話していたのに、この変化はなんだろうか。正義は戸惑いつつも、さくらに話しかけるように優しく問いかける。

「何かあったの？」

カヤの様子に変化は無い。「なんでもないです」といわれるよりはマシか、と正義は言葉を続ける。

「実を言うと」とじっとカヤを見つめて語りだす。「ずっと気になっていたんだ。どうして急に今夜会いたい、と言ってきたのか。明日会う約束を繰り上げてまで。それも突然。気まぐれってわけじゃないんだろ？」

電話は突然やってきた。明日会うはずの、クローンの恋人からだ。予定を変えたいのか、と思って電話に出てみると、様子が変だった。ひどく落ち込んだ声で張りがない。言葉もしどろもどろで、動揺しているようだった。何度か電話をしているから、彼女らしくないことは正義にも分かった。話を聞いてみれば、今すぐに会いたい、とのこと。わけを聞くのもはばかられて、言われた通り迎えに行ったのだ。だが会ってみれば変わった様子はなく、部屋で話しているときも普通だった。気にしすぎだったのか、と思いきや、これだ。

「話したくないならいいけど……話したいから、会いに来たんじゃないの？」

その言葉で、やっとカヤに動きがあった。ハッと顔をあげて正義に振り返った。口は開いているが、言葉がでてこないようだった。あてずっぽうで言ってみたが図星だったか、と正義は微笑する。

「俺の話を聞くのは、会うための口実だった？」

「そんなことないです！」あわててカヤは今にも立ち上がらん勢いで否定する。「長谷川さんの事情を知りたくて、私……」

正義は冷静にカヤを見据えていた。どうかな、と試すような表情だ。カヤは言葉を失った。正義に指摘されずとも、それは嘘だ、と自分で気づく。勢いをなくして、カヤは呆然とした。最初に正義と会おうと考えたときは、確かに事情を知りたかったからだ。人を殺す以外の方法で、自分に何かできることがあれば助けたい。そう思ったからだ。だが……

「ケンカしたんです」と、カヤはぽつりとつぶやいた。

正義はソファに座りなおして姿勢を正すと「彼と？」と尋ねる。カヤは視線を落としてうなずいた。

「ちょっとひどいのを」

「それで、俺のとこに来た？」

すると、カヤは切ない笑顔を浮かべて正義を見つめてきた。

「他にいくところ、思いつかなかったんです」

＊　＊　＊

和幸くんとケンカして、気づいたことがある。こんなこと、長谷川さんに言うべきことではないなんて分かってる。彼は和幸くんのオリジナルだってだけで、本来私とは何の関係もない人。出会ったきっかけだって、言うなれば『暗殺計画』の一部。ついさっき、もう関係は切りたいとまで言われたばっかりだ。けど……誰かに聞いてほしかった。喉の奥につまっている毛玉を吐き出したくて仕方がなかった。誰かにそれを手伝ってほしかった。――きっと、そのために私はここに来たんだ。

「居場所がないんです」

長谷川さんの優しさにつけこんでいる。最低だと分かっていても、あふれる不安を抑えきれない。

「こんなときにどこに行けばいいのか、全然思いつかなくて……思えば、両親が死んで和幸くんが代わりに傍にいてくれてた。だから、寂しさもごまかせてた」

恥ずかしいことだと思う。自覚していなかったのだから。ケンカをして彼と離れたそのときまで。どれほど私が彼に依存していたのか、分かっていなかった。

彼を信じてはいけないのかもしれない――そう思った瞬間、ひどい喪失感に襲われた。孤独に凍えそうになった。立ち上がろうとしても、どこに手をかければいいのか分からなかった。彼だけを信じていればいい。そう思っていた自分がいたんだ、と気づいた。どんなに恐ろしいことが起きても、彼の言うことを信じてれば大丈夫。何があっても平気。そう言い聞かせて、不安や疑問をうやむやにしてきたんだと思う。それが、崩れてしまった。愚かにも、自分が彼に投げかけた問いのせいで。

聞かなければよかった。そしたら、彼が答えを隠していることにも気づかないですんだのに。過去なんて振り返らなければよかった。信じればいい、と心に決めていたのならそのまま進めばよかったんだ。なぜ……疑うことを思い出してしまったんだろう。意識してしまった疑惑は、もうごまかせないのに。

私は軽い眩暈に襲われて、頭を抱えた。

「彼に寄りかかりすぎて……自分でどうやって立てばいいのかもう分からないんです。いざ、彼が傍にいなくなったらって考えただけ

で、もう自分を支えられなくなってて」

長谷川さんは頷きもせずにじっと私の話を聞いている。真剣な目で。それだけでも、救われる思いだった。

「私には、他に世界がないんです。彼の傍しか……私の居場所はない」

だから、それを失ったら……私に行き場はない。そう思ったら、孤独に首を絞められて息苦しさを感じた。いつか、私は彼に言った。彼の『存在の証明』になりたい、て。大間違いだ。彼に存在を認めてもらっているのは、私のほうだった。

「居場所がないって……でも、新しい家があるだろ？　本間だっけ。養女にはいったって、前に電話で話してくれたじゃないか」

「ありますけど……まだ、何でも話せる仲じゃないですから。余計な心配もかけたくないですし」

おじさまのことは尊敬しているし昔から大好きだ。でも、だからといってすぐに父親と思えるわけではない。さくらちゃんの父親になったばかりの彼の前ではそんなこと口にはできないけど……。正直に言えば、本間の家でもまだ気を休めることはできない。ルールも違うし、環境も違う。なにより、両親がいない。おじさまと会っていると、父の顔が浮かぶ。長方形のような輪郭、黒縁目がね、ほがらかな表情を浮かべる父。そのたびに、ここにはもう父はいないんだ、と思い知らされる。もちろん、そんなことおじさまに言えるわけもない。逃げるように、ただただ、自然と距離をあけてしまうだけ。だからいつまでたっても他人行儀はぬけないし、「おじさま」と呼んでしまう。

「友達は？」

聞かれて、首を横に振った。今、友達といえるのは、砺波ちゃんと曽良くん。私の友達、というよりは……和幸くんの家族。二人とも、和幸くんを介して知り合って仲良くなった。交友関係にしても、和幸くんが軸になっている。おんぶにだっこだ。

「それで、俺のとこにきたんだ？」

なるほどね、と長谷川さんは肘を膝にのせると手を組んだ。

「……ごめんなさい」

何に対してか、と言われたら即答はできない。思い当たることがありすぎて、どれから謝ったらいいのか分からないから。

しばらく重い沈黙が続いた。部屋の端で空気清浄機がかすかに低音を鳴らしている。音が出ていることに、ついさっきまで気づいてさえいなかったのに。長谷川さんの言葉を待ち焦がれる鼓膜は、些細な音までひろいあげてしまうようだ。

「そうだな」ようやく彼は口を開いた。思わず私が顔をあげると、彼は苦渋の表情を浮かべていた。「俺に言えることは、ここも君の居場所じゃないってことだけだ」

「え」

予想もしていなかった言葉に、私はあっけにとられた。長谷川さんは真っ直ぐに私を見つめて諭すように続ける。

「俺は藤本和幸じゃない。そう言ったのは君でしょう」

「そういうつもりじゃないです！」

必死に声をあげていた。これは真実だ。決して、長谷川さんを和幸くんの代わりにしようとしたわけじゃない。別人だってちゃんと分かってる。ここにいない和幸くんにも訴えるように、私は「違います」と繰り返した。

そんな私に、長谷川さんは困ったような笑顔を浮かべて右手の平を出してきた。落ち着いて、という意味だろう、と思った。

「ここはね」と、長谷川さんは穏やかに切り出して、あたりを見回した。「さくらの……さくらだけの居場所だ。俺にはそれを守る義務がある。さくらは子供で、俺しか頼れる人間がまだいないから」

どうして急にさくらちゃんの話？　私が首を傾げていると、一通り部屋を見回した彼の瞳が戻ってきた。

「でも、君はもうそんな子供じゃない。誰かに居場所を創ってもらう歳じゃないはずだ」

どういう意味か、分からなかった。何も答えられずに、ただ顔をしかめてしまった。すると、長谷川さんは立ち上がり、中腰になった状態で私の頭に手をおいた。

「！」

その行動は、和幸くんとは全く違っていた。こんなときに、歳の差、というものを感じて照れくさくなった。

「居場所がない、なんて文句を言っている間は、何も見つからないよ」

まるで幼いころに戻ったような気がした。明らかに子ども扱いされている、と思った。それほど、優しい声色だった。
付け足した彼の言葉も理解できずに、眉間にしわを寄せる。すると、頭におかれた手はポンポンと優しく頭を叩いた。彼は和幸くんじゃない。あの夜とは違った意味で、それを感じた。

「冷たいと思われるかもしれないけど、ここで君を慰めるのは俺じゃないと思う」

背筋をのばし、彼は私を見下ろしてそう言った。というより、と顔をしかめると言葉を続ける。

「俺ではいけないと思うんだ。こうしていると、背中をさすってやりたくなるし、肩を支えてやりたいとも思う。だから、余計に恐い。すまないけど……」
「……はい」

作り笑顔しかできなかった。もっと自然に笑顔を浮かべられればいいんだけど……頬の筋肉が言うことをきいてくれなかった。
はっきりとした口調で放たれた彼の言葉。精一杯、彼は真摯に伝えてくれた。何を言いたいのかは分かる。クローンである和幸くんとオリジナルである長谷川さんの世界は交わってはいけない。長谷川さんはそう信じている。だから、和幸くん側にいる私と、これ以上関係を深めたくないんだろう。話を聞いてくれただけでもありがたい。長谷川さんがくれたアドバイスの意味は分からなかったけど……

「追い出すようで悪いんだけど、そろそろ帰ったほうがいい。また誘拐だと思われたら、困るしね」
「そうですよね」

立ち上がったときから、そう言われるだろうとは思っていた。特に驚くこともせず、私も腰を上げる。

「すまない」

申し訳なさそうな長谷川さんの表情を見て、良心が痛んだ。余計な気苦労をかけてしまったようで申し訳ない。

「いえ、こちらこそ」

「家まで、送っていくから。ちょっと待ってて」

そう言って、長谷川さんはくるりと背を向け、車の鍵を取りにキッチンへと向かった。

私はその背中を見つめ、自分の家がどこか頭の中で問いかけていた。

居場所（後書き）

長くてすみません！　次からストーリーがちゃんと動きます。お待たせいたしました。

帰る家

「ここがお家？」

正義は車の窓から顔を出し、カヤの背後にそびえる屋敷に目をやる。高級住宅街の一角にそびえる立派な豪邸だが、真っ暗で人気がしない。

カヤは門を背にして正義に微笑んだ。

「ここです」言って、ぺこりとお辞儀をする。「送っていただいて、ありがとうございました」

「そんなことはいいんだけど」

やはり幽霊屋敷のように不気味な屋敷が気になって、正義は顔をしかめた。

「お養父さんは、もう寝たのかな？」

もう時刻は十一時。こんな時間まで養女（むすめ）が帰ってきてないのに、のんきに眠る父親がいるだろうか。

カヤはちらりと後ろの屋敷を一瞥し、「たぶん」と愛らしく首を傾げた。

「本当に大丈夫？　玄関まで送ろうか」

正義が車から降りようとシートベルトをはずすと、カヤは慌てて首を横に振った。

「ダメです！　おじさまは和幸くんに会ってますから、万が一長谷

川さんの顔を見たら……」

そう言われると動きはぴたりと止まる。正義は眉間にしわを寄せ、しぶしぶシートベルトを付け直した。

カヤは安堵したようにため息をつき、「それじゃあ」とあらたまって姿勢を正した。

「これで……お別れ、なんですよね」

「といっても」正義は冗談っぽく微笑むと、ガーゼだらけの自分の顔を指差した。「この顔には、君はこれからも付き合わなきゃいけないんだろうけどね」

さっき部屋で取り乱していた少女とは別人かのように、カヤはほがらかに笑んだ。

「じゃあ」と、ため息混じりに言って正義は車のエンジンをかける。

「元気で」

車の窓から真剣な表情で見つめる青年に、カヤは頷いて答えた。これで会ったのはたったの二回だというのに、別れが想像以上につらい。肺が押し上げられ喉が締め付けられる感覚がする。言葉が出てこない。何を言っても、あとで後悔する気がした。もっと気の利いたことを言えれば……と。

だから、カヤは何も言わないことにした。ただ、微笑んでいよう、と。心配はない、と正義が思えるように。

熱気が車の底から発せられて、居心地悪くカヤの足元にただよう。エンジン音があたりに木霊する中、正義はこれで見納めとばかりにじっと美しい少女を見つめた。そして、かみ締めるようにしっかりとした口調で唐突につぶやく。

「すまなかった」

何に対する謝罪なのかは、聞かずとも分かる。やはりカヤは何も言わず、深々と頷いた。その笑みはどんな罪をも赦すかのように神々しく高潔で、正義は気づけば見とれていた。笑顔を見ているだけでで癒され心が洗われるようだ。洗礼を受けて生まれ変わる――今の自分は、そんな気分なのかもしれないと思った。

後ろから車のライトがせまり、正義はハッとしてハンドルに手を置く。せかされるようにしてアクセルを踏むと、「元気で」ともう一度言って車を発進させた。

カヤはゆっくりと手を挙げて、遠ざかっていくセダンに小さく手を振る。赤いランプがついたのが見えたが、自分に対する何らかのシグナルなのか、偶然ブレーキを踏んだだけなのか。カヤはとりあえず、車が見えなくなるまで、笑顔を浮かべていようと思った。

「お幸せに」

ふとこぼれた言葉に、カヤはハッとする。ぴったりな言葉があったじゃないか。そう言えばよかった、と後悔して苦笑した。

＊　＊　＊

玄関の前に立って、私は目を丸くした。ハンドバッグから鍵を取り出そうとした手を戻し、首をかしげて金色の取っ手をつかむ。

「開いてる……？」

鍵がかかっていないだけじゃない。ドアはすでに少しだけ隙間が開いていた。それもよく見れば、鍵が壊されている。無理やりこじ開けたかのようにひしゃげて……いや、そんなわけはない。鉄の鍵

をだれがこじ開けられるのか。特殊な器具でもあるんだろうか。でも、誰が？　警察？　それとも、泥棒？　　まさか、今、中にいたりはしない……よね。

取っ手をつかみながら家を見上げた。改めてこうして見上げると巨大な屋敷だ。暗くて今は分からないが、外観は白くゴシック調の窓が特徴的。三人家族が住むには、贅沢すぎる家だった。

恐る恐る中に入り、玄関にあがる。窓から差し込む月明かりだけが頼りだ。真っ暗でほこりっぽい。玄関では床に視線を落とさないように、まっすぐに前だけを見つめて歩いた。壁に手を当てて、記憶を頼りにリビングまで歩いていく。

一歩一歩歩くたびに、懐かしい声や音、香りが戻ってきた。幼い頃から屋敷を守っていてくれたガードマン――彼らは違う家に雇われたんだろうか。乳母のような存在だった家政婦の田中さん――行方不明だというけどどこにいるんだろう、無事だろうか。ここに暮らしたのは四ヶ月ほど。育った家ではないけれど、ここに居た人々とは一緒に育ってきた。

リビングのドアにたどり着き、ゆっくりと開く。

カーテンが取り払われた窓から月光が惜しみなく注いでいる。何も変わらないリビング。ただ、寂しげで哀しい。一歩足を踏み入れ、あたりを見回した。

リビングの奥にあるダイニングテーブル。いつもなら、あそこで母は紅茶を飲んで、父は新聞を読んでいた。幻影のようにその姿が浮かび、二人はこちらに振り返る。

――おかえり、カヤ。学校はどうだった？

母の懐かしい声が頭に響いた。もう二度と、聞くことはできない声。一生、答えられない質問。

ぼんやりと立ちすくみ、「ただいま」と私はつぶやいた。――そのときだった。

「おかえり」

＊　＊　＊

予期していなかった返事に驚いてカヤは振り返った。声は横のソファから。よく目をこらせば、確かに誰かが座っている。頭のてっぺんがちょこんと背もたれから飛び出ている。

「誰？」と震えた声で尋ねると、頭はゆらゆら左右に揺れて笑い出した。

「嫌ですねぇ。声だけじゃ分かりませんか？」

陽気で間延びした声。聞き覚えがある。カヤはハッとしてソファにゆっくりと近づいた。

「一応、一週間ずっと一緒に居たんですけどねぇ」

言って、頭はひょっこりと伸び、やがてくるりと振り返った。月光を背にしているが、暗闇に慣れたカヤの目にはなんとか顔が見える。誰だかをはっきりと確信すると、カヤはあっと驚いた。

「望さん！？」

そこに居たのは紛れもなく、自分のボディガードだった。

椎名はにんまりと笑むと、ちょいちょいとカヤを手招きする。

「座って話しませんか？　久しぶりのお家なんでしょう」

「……」

いろんな疑問が頭に浮かんで、カヤはすぐには行動できなかった。しばらく呆けていると、「ほらほら」とおもしろがるように椎名は言って、太陽が沈むように背もたれに消えていった。カヤは失笑し、戸惑いつつもグルリとソファを回って椎名の隣に腰を下ろす。

座った途端、ほこりが舞って咳き込んだが……ふわっと自分を抱きとめるソファに懐かしさがこみ上げて、笑みがこぼれた。

「いいソファじゃないですか」と隣でだらしなくグテッと座る椎名がそう漏らす。眠りそうな姿勢だ。カヤも姿勢を崩し、ソファに深く座って背もたれによりかかった。

しばらくそうしてから、いぶかしげな表情を浮かべ、カヤは隣でくつろぐ椎名を見つめる。

「どうして――」と問いを言いかけると、椎名は最後まで聞くことなくさっさと答える。

「落ち込んだカヤちゃんが行くとしたら、ここくらいだろうな、て思いまして。ずっと待ってたんですよぉ」

それを聞いたところで、カヤの質問は同じだ。

「どうして――」と再び尋ねると、椎名は顔だけこちらに向けてきた。

「気持ち、分かるんです」

「え？」

あまりにじっと見つめられ、カヤは落ち着かずに上体だけ椎名から離れるようにずらした。

「僕も同じなんですよ」と椎名は続ける。「両親を、幼い頃に亡くしてるんです」

「！」

カヤはハッとして目を見開いた。そんなことは本間からも聞いたことはない。どう言葉を返せばいいか分からず呆然としていると、椎名は顔を前に向きなおして月光に誘われるように窓を見上げる。

「カヤちゃんと違うのは……どう亡くしたか、ですけどね」

「どういうこと、ですか？」

椎名は話の内容に似合わない薄ら笑みを浮かべている。

「カヤちゃんのご両親は自殺されたんでしょう」

椎名は躊躇もせず、すんなりと口にした。

カヤはつらそうに顔をゆがめ、椎名から目をそらす。殺人事件と疑われた両親の事件は、心中自殺で幕を閉じた。自殺するとは到底思えなかったが、父の遺書も見つかったということでカヤは認めざるを得なかった。納得できない答えを押し付けられ、カヤは未だにそれが現実とは思えずにいた。こうしてはっきりと口に出されると、胸を深々とひっかかれるようだ。

表情を曇らせるカヤを横目で見ながら、椎名は余裕の笑みで続ける。

「僕の両親は殺されたんです」

突然の告白に、さすがに胸の痛みを忘れ、カヤはハッとして椎名を見やった。

「殺されたって……」
「僕と義妹（いもうと）の目の前で、いきなり殺されたんです」
「いもうと？」

震える声で言葉を繰り返すカヤに、椎名は目を細めた。

「血は繋がってませんよ」
「あ……ごめんなさい」

ということは、連れ子か養子縁組か。カヤはとりあえず、こんな話の最中に細かいことを気にしたことを後悔していた。兄弟姉妹がいる時点で、何らかの訳があることは想像できる。わざわざ聞かなくてもよかったのに。

「なぜ……」殺されたのか、という言葉までは出なかった。残酷すぎて口にするのもはばかられる。

それを悟ったかのように、椎名はあっさりと答える。

「盗みに来たんですよ」
「盗む？」
「ええ。両親が命よりも大事にしていたものを……」

それが何かは気になっても、そこまで詮索する気にはなれなかった。カヤは次に何を尋ねればいいのか。はたまた、ここで話を終わらせるべきなのか。判断つかずに困惑していた。
すると、椎名は人差し指を突き出して、指揮をするかのようにリズムよく空中を切った。

「ま。だからですかねぇ。分かったんですよ。カヤちゃんがここに来るだろう、て。
僕も義妹を連れて……寂しいとき、昔の家に帰ったこともありましたから。行っても結局はつらいだけでしたがね」

それはまさに、カヤの今の気持ちを言っていた。つい、暖かい家が懐かしくなって戻ってきたが……心に沸き起こったのは哀しみだけだった。ただ、恋しい。余計に孤独が増してしまった。もし、椎名がいなければ自分はどうなっていたか分からない。カヤは横で微笑を　浮かべる青年を見つめる。

「ありがとうございます」と無表情でつぶやいた。

突然言われて、椎名はぱちくりと目を瞬かせる。

「何がです？」
「迎えに来てくれて……」
「いえいえ。仕事ですから」

陽気にそう言い放って、椎名は足を組みなおした。そして冗談交じりに付け加える。

「でも、このまま本間の家に帰ってくれないと、僕はクビなんですけどね」

クスリとカヤは微笑んだ。「ちゃんと帰りますよ」と諦めたように言うと、椎名は同情するような表情を浮かべてカヤを見つめてきた。

「本間先生は、カヤちゃんに心から感謝してるんですよ」

「え」

＊　＊　＊

感謝してる？　おじさまが私に？　感謝しないといけないのは、私のほうなのに？

望さんは優しげな瞳で私を見つめている。

「先生はいつも言っていますよ。カヤちゃんこそ、先生がずっと探していたものだ、て」

「ずっと探していたもの？　私が？」

「そうです」と望さんは力強く頷いた。「先生が長年待ち望んでいたものを、カヤちゃんが運んできてくれたんですよ」

もしかして、幸せ、とか……そういうことだろうか。そうだと嬉しいけど、それは良く考えすぎだろうか。でも他には思いつかない。何か本間家に持ってきた物もないし。抽象的なものとしか考えられない。

「それって、なんなんですか？」とつい直接尋ねていた。

望さんはだらしなかった姿勢を正すと、真剣な目で私を食い入るように見つめてきた。

「そのうち……いえ、すぐに分かりますよ」

すぐに？　戸惑って眉をひそめていると、望さんの手が伸びて私の髪に触れた。思わずびくっと肩が揺れる。

「だから」つぶやく望さんの手が髪をなでて毛先を指にからめた。

「先生にとって、カヤちゃんは本当に本当に大切な義娘(むすめ)なんですよ。幸運の天使……そうも言ってました」

望さんに髪を触れられるのが落ち着かなかったけど、話が気になって私は彼を凝視していた。

「幸運の天使？」

おじさまが私のことをそう思っているの？　胸が熱くなった。迷惑をかけているんじゃないか、と心配していたのに。厄介者だったらどうしよう、なんて不安だったのに。それに……私はおじさまを避けていた。両親を思い出してつらいから、距離を縮めるのを躊躇(ためら)っていたんだ。それなのに、おじさまは……。私はこみ上げてくるものをごまかすように微笑んだ。目が潤んでしまっている。

「本当ですか？」と尋ねると、望さんは髪を弄んでいた手を私の肩においた。整った顔立ちが微笑を浮かべる。男性だというのに、絵になるほど美しいと思った。

「だから」とゆっくりと丁寧に望さんは口を動かす。「もっと心を開いて、先生を頼ったらどうですか？」

心を開く？　頼る？　養女に引き取ってもらった上に、そんな負担はかけたくない。その気持ちを汲み取ったかのように、望さんは私の肩をさすって囁くように言う。

「遠慮はいらないんですよ。カヤちゃんの家は、今は本間なんですから」

「！」

ハッとして望さんをじっと見つめた。彼は自信に満ち溢れた笑みを浮かべている。

「僕も、先生には助けてもらってるんです」

「え？」

月の光が彼の顔に淡い影を落としている。そのせいか、笑みが妖しく見えた。

「僕と義妹は両親を殺した犯人を見ていた。だから警察に訴えたんです。でも、子供の言うことだ、と相手にしてもらえませんでした」

いつかの、藤本さんの言葉が浮かんだ。

――警察は、もう機能していません。腐敗しているんです　。

望さんのそれも、その例の一つにすぎないのかもしれない。子供だからって相手にしないだなんて。子供だからこそ、力になってあげなきゃいけないはずなのに。当時の望さんの気持ちを思うと、胸が痛んだ。犯人を知っているのに、何もできないなんて。やるせない思いだったに違いない。

「絶望の淵にいたとき、本間先生と出会ったんです。そして約束してくれた。犯人を必ず見つけ出してくれる、と」

「そうだったんですか」

お決まりの相づちしか出てこない。どんな顔をしてもいいのかさえ分からず、私は眉根を寄せた。

「その約束もあって、僕はこうして先生の下でボディガードとして

働かせてもらってるんですがね」急に明るい口調になって、望さんは肩をすくめた。「今は、カヤちゃんの護衛ですけど」

だから、と望さんは腰を少し上げて私のすぐ隣に移動してきた。

「先生は頼りになる人だって僕がよく分かってます。カヤちゃんも、少しは甘えたらいい」

「……そうかもしれませんね」

といっても、甘えられるのはだいぶ先になるだろう。望さんの心遣いは嬉しい。きっと、私が本間の家に馴染めていないことに気づいて、こんな話をしてくれたんだろう。おじさまは信用できるぞ、て安心させるために。でも、それは私も分かっていた。おじさまを信用していなかったわけじゃないんだ。ただ……時間がかかるだけ。今すぐには本間カヤにはなれない。おじさまを父としては、まだ見れない。親子の絆は、そう簡単には築けてはいけないものだと思うし。

じっと押し黙っていると、望さんの手が頬にのびてきた。私は驚き飛びのいて、ぎょっとして彼を見つめる。そういえば……さっきから、やたらと触られているような……。

「どうかしました?」と、望さんは何事もないかのように薄ら笑みを浮かべている。そんな落ち着きはなった態度を取られたら……私が変に意識してしまったみたいで恥ずかしい。暗くてよかった、と思った。今の私の顔は真っ赤だ。

「あ、えと……」慌てて何か話をしよう、と話題を探す。沈黙は、危ない気がした。「犯人は捕まったんですか?」

思わず口をついて出ていたのは、不躾な質問だった。あまりに咄

嗟で……つい、本当に気になっていることを口にしていた。――気になっても、尋ねるべきではない、と思っていた質問が。

私は、あ、と表情を曇らせて顔をそらした。

「ごめんなさい。答えなくて、いいですから」

「もう少し」望さんの低い声が聞こえてきた。「もう少しで、捕まえられそうなんです」

「え……」

きょとんとして彼を見つめると、不敵な笑みでこちらを見ていた。真剣な眼差し。思わず、心臓が大きく飛び跳ねた。

「やっと手がかりを見つけたんですよ」

そう言ったときには、すでに彼の表情は陽気で、刺すような眼差しは消え去っていた。虫を捕まえて喜んでいる少年のような、嬉しそうな声色。私は「そうなんですか」と微笑んだ。

「捕まるといいですね」

決して、社交辞令じゃない。心からそう思う。そう願う。子供の目の前で両親を殺すなんて……人間業じゃない。ひどすぎる。望さんと妹さんが負った心の傷は、想像もできない。そんな残酷なことが起こるなんて、トーキョーはなんてひどい場所になったんだ。きっと犯人が見つかっても傷は癒されない。それでも――長谷川さんじゃないけれど――せめて正義の裁きが下れば、と思う。

「ありがとう」と望さんは言って、今度は私の首元に手をのばしてきた。

「え」

「本当に……」

囁くようにつぶやき、そして彼は手を私の首の裏に回してきた。ハッと気づいたときには、望さんは腰をあげ、上半身をねじり、今にも私に覆いかぶさろうとしていた。もう一方の手が私の頬に伸び、あまりのことに硬直していた体がびくんと震えた。その瞬間、金縛りがとけたように私は咄嗟に両腕を突き出して彼の体を押しのけた。

「何するんです！？」

即座に立ち上がって怒鳴ると、望さんは苦笑して両手を挙げた。

「あれぇ？」ととぼけた声で首を傾げる。「てっきり、カヤちゃんはもうフリーなのかと……」

フリー？　私は「違います！」とムキになって答えていた。

「まだ付き合ってます！　こんなこと知れたら、和幸くんに怒られますよ！？」

それでなくても、彼は望さんが嫌いなんだから。怒られるというより、殴られるだろう。

「あ、そうなんだ」感心したような声をあげて、望さんはにやけて腕を組む。「別れたわけじゃないんだね」

くつくつと笑っている彼を見て、私はハッと気づいた。そして、ジト目で彼を見つめて問う。

「からかったんですか？」

すると望さんは笑いを止め、肩をすくめた。
「確認したかっただけですよ」
「確認？」
「ケンカしたって聞いたんで」言うと望さんはおもむろに立ち上がる。「心配していただけです。別れてないならよかった」
「それなら、そう聞いてくれればいいじゃないですか」
なにも、襲うように見せかけなくても……未だに心臓が騒いでいる。どうしようかと思った。恐くて動けなかったほどだ。
望さんはあっけらかんと笑いながら、首をかいた。
「エンターテイメントというか。せっかくなんで、楽しんでもらおうかと思いまして」
「楽しくありません。今度したら、おじさまに言いつけますから」
ぴしゃりと言うと、望さんは顔をしかめた。
「それは困ります。クビ確実だ」
思わず、ため息がもれた。あれが冗談だったと分かってホッとしたのと、望さんの悪戯に呆れたので、張り詰めていた気持ちが和らいだ。
「家に帰ります」と私は微笑する。「送ってくれますか？」
「そりゃ、もちろん。そのためにわざわざ来たんですから」
望さんは腰に手をあてがって、自慢げに答えた。

解決策

「どうしたんですか、その顔？」

燦燦と窓から光がさしこむ晴れやかな朝。冬が近づき肌寒くなった教室。突然現れた先輩に、オレは呆れ笑いでそう尋ねた。朝の憩いの時間をことごとく邪魔しにくる彼は、目の下にクマをつくってどこかげっそりとしていた。

前の席に許可なく座ると、オレの机にバンと勢いよく手を置く。

「こんなこと、お前には言いたくないが……」と、すわった目で声を押し殺して言ってきた。

「はい？」

「助けてくれ」

思わず、きょとんとして……そして、オレは堪えきれずに噴出してしまった。騒がしい教室の音に、オレの笑い声が溶け込む。

「何がおかしいんだ、リスト！？」相変わらず、低く押さえた声。その必死さがおかしさを倍増する。

「すみません、和幸さん」

とりあえず、ごまかすように手をパタパタさせて謝る。

まさか、夕べの出来事を全部オレが知ってるなんて思いもしないだろうな。クバティムの話をしにいったあの朝に、懲りずに彼にケットを宿しておいたんだ。天使を貸すには相手と会う必要があるからな。『人形』の元彼の話はいい口実だった。

さて。助けてほしい、てのは……恋愛相談かなぁ。ケットによれば、ひどいケンカだったみたいだし。どうすることやらと思ったら、

まさかオレのとこに助けを求めに来るとは。なりふり構わずか？
真っ直ぐと言うか、青春真っ盛りと言うか。微笑ましいったらない。

「どうかしたんですか？」

気を取り直して尋ねると、和幸さんは不服そうな顔でため息をつき、「カヤに全部話したいんだ」

「はい！？」

予想もしていなかったことに、教室に響き渡る声で叫んでいた。
さすがに世間話をしていたクラスメートもいぶかしげな表情でこちらを見てきた。オレは何事もなかったかのように、爽やかな笑みをあたりにまきちらす。

「もう、隠しきれない。カヤを苦しめるだけだ」と、和幸さんはかすれた低い声で訴える。
「何、寝ぼけたこと言ってるんですか」その顔だと、寝てないみたいだけど。「ダメにきまってるでしょう」
「カヤは答えが欲しいんだ。安心させてやりたい」

オレは和幸さんを睨むように見つめ、声をひそめて反論する。

「それで、言うんですか？　お前は世界を滅ぼす人形だ、て？　安心すると思います？」
「愛してる、よりは安心するだろ」
「……はい？」

愛してる？　いきなり、なんでその言葉がでてくるんだ？
和幸さんは急に眠気に襲われたかのように、目元を押さえて苛立

ったため息をついた。口を滑らせた、てわけじゃないみたいだな。それか……恥ずかしがるほどの気力もないのか。

「愛してる、ですか？」といぶかしげな表情で尋ねると、「そうだよ」と吐き捨てるように答えた。

表情を隠すように、和幸さんは額を手でおさえて俯（うつむ）く。

「やっと、ちゃんと面と向かって言えたってのに……それは答えじゃない、と一蹴された」

「……わお」

それはケットから聞いていなかった。愛の告白して否定されるって……拒絶よりきつい。悲惨だ。からかう気すらおきずに、オレはひきつり笑顔を浮かべた。

「初ゲンカだよ」皮肉そうに鼻で笑って、和幸さんは言う。

「へえ」

知ってますよ。とは言えない。オレは自慢の演技で、あたかも今聞いたかのように目を丸くした。

「とにかく」と、和幸さんはやっと顔をあげて疲れた表情でオレを見据える。「それなら、答えをやるしか俺にできることはないだろ」

「そう言われても、『はい、どうぞ』てわけにはいきませんよ」

同情はするけど、だからといって話せばいいってもんじゃない。オレは肩をすくめて首を横に振る。

「忘れたんですか？　『収穫の日』が終わる前に『人形』に全てを

バラすと……」
「罰が下る、だよな」と和幸さんはまるで待っていたかのようにつぶやいた。
「分かっているなら……」
「どんな罰だ？」
「！」

間髪いれずに聞いてきた和幸さんに、オレはあっけにとられて言葉を失くした。切羽詰った表情で、瞳には決意が見て取れる。嫌な予感がして、オレはためらいがちに尋ねる。

「まさか、罰を受ける気ですか？」
「必要なら、そうする」
「……」

なんの迷いもない、はっきりとした口調だ。どうやら、彼は一線を越えたみたいだ。不安とか戸惑いとかそんなものが存在しないところに行き着いた。そう感じた。それならば、オレも頭ごなしに否定するスタンスはやめよう。

「一晩中考えたんだ」と、和幸さんは苦渋の表情を浮かべた。「あいつのために何が一番いいのか。『人形』のことを隠し通すことか、全部話してしまうことか」
「答えはでました？」

静かに問うと、「ああ」とせつなげな笑みが返ってきた。

「罰のことは置いといて、『人形』のことを隠そうと思ったのは……話せばあいつが苦しむと思ったからだ。知らないほうがいいと信じていた」

その言い方だと……オレは続きを待たずに口をはさむ。

「それは違っていた？」

「かもしれない、と思った」

和幸さんは頬杖をつき、窓の外を眺めた。澄んだ黒い瞳は、ずっと遠くを見つめている。

「隠しても、結局あいつを苦しめる。それなら、いっそのこと全部話して……一緒に背負ってやるべきなのかもしれないと思った」

それはどうだろう。肯定することも否定することもできず、オレは押し黙る。いきなり、世界を滅ぼす資格があると言われて、あの純粋な少女は受け止められるだろうか。受け止められたとして、『収穫の日』まで正気を保っていられるか。目の前に座る、この一人の人間に、絶望に打ちひしがれる彼女を支えきれるだろうか。

いや、その前に……

「罰で、命を落とすかもしれませんよ」オレは冷たい口調でズバリと言った。「そこまで考えて言ってます？」

「！」

流石に、その言葉には和幸さんは動揺をみせた。ハッとしてオレに振り返り、眉根を寄せる。

「正直言って、和幸さんがそれでもいいというなら……オレは止めません」

もっと正確に言えば、止められない、だな。この人の目を見れば、

どれだけ本気かは分かる。オレの神の遺伝子には人を従わせる力が備わっているが……人の断固たる堅い意志を曲げることはできない、と言われている。和幸さんの決意は、まさにそれだ。オレは見守ることしかできない。

「罰がどんなものか、誰も知らないんです。今まで、それを確かめようとした無謀な奴はいなかったから」

和幸さんは深刻な表情でオレをじっと見つめている。気持ちが先行して、罰のことを冷静に考えていなかったかな。それが命を賭けるようなものだとまでは想像していなかったんだろう。

「よく考えてください」と、オレは脅すような声色で言った。「死んでしまったら、元も子もないでしょう」

＊　＊　＊

憂鬱だ。カヤは下駄箱の前でため息をついた。

上履きに履き替えて廊下を歩きだすと、自然と視線が足元に落ちていく。周りでは「おはよう」と活気ある挨拶が交わされて、楽しげな声が聞こえてくる。それが心の傷に塩を塗る。孤独には慣れているつもりだったのに……と、カヤは歩きながら虚しく微笑んだ。一度、温（ぬく）もりを知ってしまった。誰かの傍で温まる快感を。肌と肌を寄せ合って得る安心感を。もう戻れない。孤独を受け入れる術を忘れてしまった。あの安らぎが恋しくてたまらない。

でも……と、階段の前で足を止める。一晩中考えてもダメだった。何も思いつかなかった。今日、学校で和幸と会ってどうすればいいのか。どんな顔をして会えばいいのか。なんと言えばいいのか。自分はこれからどうしたいのか。別れたいわけではない――はっきりと分かっているのはそれだけだ。ただ、何事も無かったかのように

以前の関係に戻ることはできないと思った。以前とは違う。和幸に不信感を抱いている自分がいるのだから。そしてそれを和幸は知っている。夕べ、はっきりとそう口にしたのだ。だからこそ、もうごまかせない。

表面上では水に流すことはできても、結局心の中で渦巻く疑問はずっと消し去れないだろう。いつかまた、同じケンカをする気がしてならない。

カヤは、今朝だけでも何度目かは分からないため息をもらした。目の前の階段を上れば、二年の教室（一組から三組だけだが）。和幸はもう教室にいるだろうか。これから来るのだろうか。もしかして、廊下で自分を待っているかもしれない。会いづらい。足が動かない。

「神崎！」

階段を上るのを躊躇っているときだった。丁度良かった、と言いながら近づいてくる人影があった。職員室から早歩きで向かってくるのは、小さな目に大きな鼻、餅のような垂れた頬――通称ブルドッグと言われる担任の野村だ。深刻な面持ちでふさふさの真ん中わけの髪を揺らしている。

「ちょっと話せるか？」

「はい？　今ですか？」

とりあえず、階段の前に突っ立っていては邪魔だ。カヤも野村に歩み寄ると、二人は職員室へと歩き出す。

「荷物、置いてからじゃだめですか？」と、カヤはカバンを持ち上げる。

「いや、そんなに長い話じゃないから。すぐ済むんだけど……」

言いにくそうに、こんがりと焼けた顔をくしゃっとゆがめる野村。威嚇するブルドッグそっくりに、鼻の周りに皺が寄った。

「ショックは大きいかもな。変な言い方だけど、心の準備をしておいたほうがいい」

カヤは「はあ」ととぼけた返事をして首を傾げた。

＊　＊　＊

死んでしまったら、元も子もない。あいつの言ったことは最もだ。『収穫の日』が過ぎるまでに、『災いの人形』に全てを明かすと下るとされる罰。それが、俺の命を奪うものだとしたら……。カヤを崖から突き落として姿を消すようなものだ。

でも……このままってわけにもいかないだろ。昨日のケンカで分かったじゃないか。あの秘密のせいで、俺たちにはごまかせない溝ができている。食い違っている。放っといたら離れていくだけだ。もし今回は仲直りができたとしても、いつかまた同じ問題が浮上して亀裂が生じる。そして……いつか、全部崩れ落ちる。そうなったら、あいつを守れない。たとえ生きていても、あいつの傍にいられないんじゃ、いざというときに支えられない。それじゃ意味ないだろ。

あいつのためだ、と隠している秘密で、あいつとの関係が滅茶苦茶になったんじゃ、それこそ元も子もない。

「ああ、くそ」

頭をかきながら、二年の教室への階段を下っているときだった。ガヤガヤと騒がしい朝の校舎で、誰かが慌しく走ってくる音がして

俺は顔を上げた。
こちらに向かって廊下を駆けてくる人物に、俺はハッとして目を見開く。
他でもない、カヤだった。
「カヤ！」と思わず声をあげ、階段を飛び降りる勢いで駆け下りる。周りで歩いていた男子生徒に「あぶねぇな」と文句を言われたが、振り返りもせずにカヤに駆け寄った。
カヤは俺の姿を認めるなり立ち止まって、表情を曇らせた――って幸先悪いな。
「よう」と、歩み寄りながらぎこちなく声をかける。
「おはよう」
カヤは沈んだ表情で目を背けた。通り過ぎる奴がいちいち俺たちをちら見しながら歩いていく。神崎カヤと、目立たないどっかのクラスの男子が話しているのが物珍しいんだろう。
「夕べ、心配したんだぞ」これが第一声として適切かは分からない。だが、最初に頭に浮かんだ言葉なのだから仕方がない。「帰ったかと思ったら、椎名が迎えに来て……どこ、行ってたんだ？」
すぐに答えはなく、カヤは髪を耳にかけるとうつむいた。まさか、まただんまりか？
「曽良と探してたんだ」とりあえず、話を続ける。「椎名から電話くるまで……」

なんでこんな説明してんだ、俺は。頭をかいてため息をつく。どうやってカヤと話してたか、まるで忘れたみたいだ。

「無事でよかったけど――」

「ごめんね」

「！」

急にカヤはつぶやいた。ハッとして見つめ、そしてあることに気づく。よくよく観察してみれば、気分でも悪いように青ざめた表情。俺は腰をかがめて顔をのぞきこんだ。

「どうした？　体調悪いのか？」

カヤはびくっと体を震わせ、咄嗟に顔を上げた。俺と目があうと、にこりと微笑む――ひきつった笑顔だった。

「大丈夫。なんでもない」

なんでもなくはないだろう。明らかに、動揺してる。体調が悪いのか……それとも、夕べのことで気を病んでいるのか。ま、当然後者だよな。

「カヤ」周りの視線も構わず、俺は真剣に彼女を見つめて肩に手を置く。「話が……」

「あとででもいい？」

「え」

言い終わらぬうちに、カヤは無理した笑顔でそう言ってきた。

「今は、ごめん」

急に震えた声を発した。ふと、彼女の目に何かが浮かんでいるのが分かった。涙だ、と気づいたときには「あとにして」と言い残して彼女は俺の横を通り過ぎていった。あっという間だった。俺はぽつんと取り残される。

かすかだが、嘲笑が聞こえた。さては俺がフラれたようにでも見えたか。ま、いいけど。よもや俺があいつと付き合ってるとは誰も思うまい。

そんなことより……と、俺はカヤの背中を追うように振り返った。丁度階段を登っていくところだった。さっき俺が下ってきた階段だ。一年の教室と屋上しかないが……何しに行くんだ？　涙を浮かべて……。

神の子と『人形』（前書き）

前の章の終わりとつながっています。長かったので変なところで区切ってしまいました。

神の子と『人形』

「藤本！」

唐突に、元気よく張りのある声が聞こえてきた。誰かは振り返らずとも分かる。俺にとっては、鶏の鳴き声と同じようなものだ。この声を聞くと、朝が来たな、としみじみ思う。今朝も何か新しい噂話でも入荷したのだろうか。

「どうした、平岡」

教室から飛び出してきた、がっしりとした体格の坊主頭に俺はそう尋ねた。

「神崎さんと話してたみたいだけど」と嬉しそうににやけて近寄ってくる。「どうだった？　いい感じ？」

さては、教室からこっそり覗いていたんだな。俺は呆れたように苦笑してさらりと答える。

「先週から付き合ってる」

「……」

平岡は凍ったように固まった。しばらくしてから、「は」と声をだして憫笑を浮かべてきた。

「妄想の話はいいからさ」と俺の肩をたたく。「どうなの？」

「……どうだろうな」

やっぱ、こうなるか。カヤが言わない限り、誰も信じそうにないな。俺がストーカーと思われかねない。別に周りに言いふらしたいわけじゃない。ただ、こうして平岡に毎朝のように進展を尋ねられるのは面倒だ。騙してる気もするし。こいつが信じないのが悪いんだが。

「てかさ」と平岡は唐突に切り出す。「さっき、神崎さん泣いてた？」

おい。どこまでしっかり観察してたんだよ。くりっと大きな目は意外と性能も良いようだ。

「昨日、ケンカしてな」どうせ信じないだろうが、とりあえずそう答える。「そのせいだと思う」

「藤本が泣かしたわけじゃないだろう。とすると……」

聞こえてないわけはない。こんな至近距離なんだから。ガン無視か。もう、勝手にしろ。

「もしかして、アレかな？」

「アレ？」

なに、もったいぶってんだ。一応相づちをうつものの、俺は相手にしていなかった。

平岡は腕を組んで、眉間に皺を寄せる。その姿だけは、部の今後を考える野球部主将に見えなくもないが、どうせその口から出てくる言葉はくだらないことに決まってる。

「盗撮写真が出回ってること、先生から聞いたかな」

ほらな。……って、は！？

「盗撮写真！？」

思わず大声をあげていた。廊下でたむろってしゃべっている奴らがぎょっとして俺に振り返る。

「どういうことだ、それ？」

声を低くして脅すように平岡に尋ねた。予想を大きく裏切り、とんでもない爆弾発言をしやがって。普段はくだらない噂話しかしないってのに。もはや狼少年だな。

盗撮写真――聞き覚えがある。そして、見覚えがある。

「ほら、先週だったっけ？　熊谷（くまがや）のＳＤカード壊しただろ、お前」

「ああ、壊した。だから、写真はもうないはずだろ」

あれは、正義にカヤが連れ去られた日。熊谷という、ウチのクラスの悪ぶったイケメン気取りが、カヤの盗撮写真を回してきたんだ。以前から違う女子の写真が回ってくることはあったが、くだらなすぎて相手にしてなかった。だが、あの日は……カヤは両親を亡くした（ことを知った）直後だったし、何よりカヤを守ってやりたかった。売りさばかれる前に写真を葬り去ろうと――それも騒ぎにならないように――熊谷を屋上に呼び出して写真が保存されているＳＤカードを目の前で折ってやったんだ。

なのに、なんでその写真が出回ってるんだ？　まさか、また新しく撮られたのか？

「そのはずだったんだけどさ、なんか知んないけど……あの写真、今じゃ皆持ってるらしい。特に、神崎のクラスの男子は。誰かが回

したんだな」

「誰かって一人しかいないだろ」

俺は苛立ったため息をつく。――熊谷だ。まさか……あのＳＤカードの他にも予備があったのか？

「なんで、もっと早く言わないんだよ！？」

毎朝必要のない噂話をもちかけてくるくせに、なんでこんな大事な話は懐に暖めとくんだよ。

「早くも何も、俺も今朝知ったんだよ」と平岡は不満そうに口をとがらす。「なんか金曜の放課後に誰かの携帯が取り上げられてさ、それで教師にバレたんだとよ。部活さぼって写真見てたんだろ、どうせ」

自分が悪いことをしたかのように、平岡は必死に早口で説明した。血がたぎっているのを感じた。細かいことはもうどうでもいい。表情を曇らせる平岡をその場に残し、俺は足早に教室に駆け込んだ。廊下側、真ん中の席を、見覚えのあるスキンヘッドとスポーツ刈りが囲んで立っている。その中心、席に座って話している長髪の男を見つけるなり、拳を握り締める。

もう俺はカインじゃない。騒ぎを起こして目立っても問題ないと思った。

＊　＊　＊

一気に駆け上がって屋上の扉を勢いよく開く。心臓の鼓動が早い。苦しい。カヤは息をきらせながら屋上に足を踏み入れ、全身に刺すような太陽の光を浴びる。二、三歩よたつきながら進んでその場に

へたりと腰をおろした。誰も居なくてよかった、とカヤは心の底から思った。両手をついて、一度咳き込む。コンクリートの地面を見下ろす視界がぐにゃりと歪んだ。涙のせいだ、とカヤは気づいて瞬きをする。ぽつりと一粒、雫が落ち、手で顔を覆った。

あたりにチャイムの音が響き渡る。カヤはじっと座り込んで、最後の一音まで聞き届けた。もう一時間目に出る気力はなかった。

カヤは顔から手を離し、自分の肩を抱く。教室に帰りたくない、誰とも会いたくない、誰からも見られたくない――声にならない叫びをあげて体を丸めた。今まで様々な嫌がらせを受けてきたが、こんな辱めは初めてだ。考えただけでも気分が悪くなる。周りの視線が全て邪なものに思えて仕方が無い。

野村から思わぬ事実を聞き、まっすぐ教室に戻ったのだが、居ても立ってもいられなかった。携帯をのぞいているクラスメートを見るだけで動悸がして息苦しくなった。こちらを一瞥する男子生徒が不気味で恐ろしかった。視線だけで穢されているような気分になった。ミニスカートをはくことさえ抵抗がある彼女にとっては、写真とはいえ、下着姿を和幸以外の男に見られたことは、とても耐えられない恥辱だった。

再び動悸がして、カヤは胸をおさえた。熱でもあるかのように、頭がぼうっとする。体が焼けるように熱い。なにより……苦しい。このまま、気を失うんじゃないかとさえ思った――そのときだった。

「あれ、神崎先輩？」

いきなり背後から声がして、カヤはハッと顔を上げた。聞き覚えのある、愛嬌たっぷりのかわいらしい声。慌てて振り返ると、愛らしい金髪碧眼の男の子が立っていた。アクアマリンのような瞳が日差しを受けて一段と輝きを放っている。

「リストくん？」

一つ下の後輩、カヤと同じく今学期転入してきたリスト・ロウヴァーだ。劇では主役――つまり、カイン役――を務める人懐っこい少年。

カヤは涙を隠すことも忘れて呆然と彼を見上げていた。

「どうしたの？　一時間目、始まってるよ」

カヤがそう尋ねると、リストはゆっくりと歩み寄って、くすりと微笑する。

「こっちのセリフですよ。神崎先輩こそ、何してるんですか？」

「……」

返す言葉が見つからず、カヤはとりあえず笑顔を浮かべた。しかし――本人は気づかなかったが――それはとても笑顔といえるものではなかった。頬は痙攣したようにひきつって、唇は震え、なにより瞳には大粒の涙がたまっている。

リストは憫笑を浮かべると、カヤの前でしゃがんでおもむろにポケットからハンカチを取り出す。

「使います？」

薦められたハンカチに、カヤはやっと自分が泣き顔のままだということに気づいた。「あ」と弱弱しく声をだすと、一気に溜め込んでいた涙がこぼれだした。

「ごめんね」といいながら、カヤはハンカチを受け取らずに泣き出した。行き場の無くなったハンカチをひらひらと揺らし、リストはその場に腰を下ろす。

「彼氏とケンカですか？」

苦笑しながら小首を傾げ、リストはぽつりとそう尋ねた。

＊　＊　＊

一時間目は英語。いちいち教科書を読ませられるので、面倒で毎回さぼって屋上にきてるのだが……まさか、『人形』に出くわすとは驚いた。これも神のお導き、かな。しかも……大泣きしているし。絶妙のタイミングだ。きっと和幸さんとのケンカが原因に違いない。となれば、だ。話を聞き出して……あとはうまく言いくるめて和幸さんと仲直りさせる。これしかない。成功するかは分からないけど、試してみて損はない。運がよければ、和幸さんの無謀な計画を止められるかもしれない。あの人は『人形』と仲良しこよしがお望みだ。仲直りして円満になれば、大人しくしてくれるはず。

「彼氏とケンカですか？」と、オレはさりげなく話をそっちの方向へ誘導した。

オレと『人形』……いや、神崎先輩との仲はそこまで深くない。劇の相手役ってだけで、先輩後輩だし、当たり障りの無い話しかしたことない。普通なら、彼氏とのプライベートな話なんてオレには打ち明けないだろうけど……こういう落ち込んでいるときは別だろう。きっと、話してくれるはずだ。

『人形』にはオレの力――神の遺伝子に宿る力は使えないって話だからな。こういう弱みにつけ込むような手しかない。

ところが、オレの作戦は出鼻から挫かれることになる。『人形』は思わぬ言葉を口にした。

「彼とケンカはしてる。でも、それが原因じゃないの」

鼻をすすり、涙を拭いながら『人形』はそうつぶやいた。オレは「は？」ととぼけた声を出していた。原因は違う？

「リストくんは……」と『人形』は怯えるような表情をこちらに向け、か弱い声を漏らした。「写真持ってる？」

「はい？　写真？　何のですか？」

「私の……」と言って、頬を赤らめて『人形』はうつむいた。「私の、着替えてる写真」

「え？」

着替えてる写真？　『人形』の？　なんでオレがそんなの持ってるんだ？　そういう趣味はない。見たかったら、まずはそういう関係になるし。いや、そもそも、どんなに魅力的だとしても『人形』の体は所詮粘土だってオレは知っている。正直、興味すらない。

何の話か分からず顔をしかめていると、『人形』は「ごめん」とさらに頬を紅潮させて口にした。

「知らないなら、いいの。気にしないで」

「気にしないで、と言われてもですね」和幸さんとのケンカに何か関係はあるのだろうか。なかったら、話を聞いても意味無いんだけど……「それが一時間目をさぼっている理由ですか？」

とりあえず話の全貌が見えてくるまで話を続けてみよう。オレはそう思って詮索するように尋ねた。『人形』は言いにくそうに表情を曇らせてぎゅっとスカートを握り締める。

「皆、持ってるんだって。少なくとも、同じクラスの男の子は皆……」

「は……はい？　先輩の着替え写真をですか？」
「盗撮されてたみたいで……」

哀しげに微笑んで『人形』はまた涙を浮かべた。
オレは言葉が出てこなかった。使命を知らない『人形』――つまり、人間であるときのパンドラが、どんな性質を持っているかは知っている。先代マルドゥクの王、リチャード・ハノーヴァーから言い伝えをいやと言うほど聞かされたからな。珍魚落雁（ちんぎょらくがん）。才色兼備。純真無垢。純情可憐。清廉潔白。様々な言葉で言い表された彼女の特徴。かいつまんでいえば、見も心も穢れの無い美しさということだ。とにかく、純粋。そうなるように、神によって創られた。そんな彼女にとって、下着姿（着替え写真ってことはそうだよな）を恋人でもない男に――しかも不特定多数の人間に見られたというのは、この上ない苦痛だろう。オレにその話をすることさえつらいはず。始終ひきつっている表情がその証。見ているだけで、心の痛みが伝わってくるようだ。
『人形』に同情なんて、マルドゥクの王として失格だが……憐れまずにはいられなかった。
オレが押し黙っているから『人形』は心配したのか、ごまかすように明るい調子で続ける。

「私も、今朝知ったの」そう言う彼女の表情はやはり硬い。声だけが虚しく元気なふりをしている。「私の写真が男の子たちの間で回ってるんだ、て先生から聞かされて。それも、ＳＤカードで」
「ＳＤカード？」
「そう、びっくりだよね」と、涙が残る目を細め、にこりと微笑んだ。今度はしっかり笑顔になっているが、それでも作り笑顔には違いなかった。明らかに無理している。オレには、泣いているようにさえ見えた。「ちょっと驚いて取り乱しちゃっただけだから。変な話してごめんね」

「いえ」と、言いつつ……オレは何かひっかかっていた。

デジャブのような感覚を覚えて、小首を傾げる。前もこうして屋上でＳＤカードがどうのって話したような気がしてならない。それも、最近。なんだっけ？

「先生もどこまで出回っているのかは分からないみたいで。だから、気になってリストくんに聞いちゃったの。一年生にも回ってるのかな、なんて……」

「それはないんじゃないですか」と、オレはすかさず答える。「とりあえず、オレは聞いたこともないです」

「そっか」『人形』は、それならよかった、と力なく言ってうつむいた。

冷たい風が通り過ぎ、「肌寒くなってきましたね」と間をもたせるようにオレはつぶやいた。頭の中では、デジャブの正体を探ろうと脳が忙しく記憶を掘り起こしている。もう少しで何か見つかりそうな気がするんだけど……。

「実を言うと……迷ってるの」と『人形』は唐突に口を小さく開いて言った。「彼に言うべきかどうか……」

「！」

彼、という言葉にオレはハッとする。待ってました、と微笑みそうになるのを必死に堪える。諦めかけていたが、ここにきて話がいい方向に進みそうだ。

「何でですか？」と身を乗り出す勢いで尋ねると、『人形』はうつむいたまま、疲れ果てた笑みを浮かべた。

「昨日彼に言われちゃったんだ。何でもかんでも受け入れられない。

次から次へと困る……て」
「え」
そんなこと、あの人が言ったのか。話をうまく促すつもりが、オレは唖然としてしまった。あの人も、結構ストレスたまっていたんだな。ま、それもそうか。いきなり、世界の終焉のゴタゴタに巻き込まれたんだから。てか、オレが巻き込んだんだけど。
しかし、本人に直接ぶつけなくてもよかったんじゃないのか。『人形』はまだ何も知らないんだし。オレにあたればいいものを。
「だから……言いづらくて。また迷惑かけたくなくて」
風が彼女の髪を揺らして肩を撫でている。気を抜くと、その儚げな美しい横顔に見とれそうになって――ダメだ、とオレは顔をしかめる。彼女を殺すのがオレの使命だ。彼女に情でもうつって、いざというときに心に迷いが出るようなことはあってはいけない。そもそも、彼女の姿も心も、神の計算あってのもの。美しい姿も清らかな心も、すべてはエンリルの罠に違いないはず。彼女に惹かれる――それはオレにとって、悪魔に魂を抜かれるようなものだ。オレは気を引きしめて、彼女は『災いの人形』なんだ、と自分に言い聞かせた。ただの土人形なんだ、と。
「呆れられるのが怖いんだ」と彼女は髪を耳にかけながらつぶやくように言う。「いつもいつも厄介ごとをもちこみやがって……なんて思われるんじゃないか、て。――ううん、きっともう思われてる。だから、言えない」
もうオレに話しているという意識はないんじゃないか、と思った。まるで独り言のようで、言葉を返すべきか否か迷う。いや、何か言わないとだめだよな。オレの目的は、会話でうまく彼女の気持ちを

操作して和幸さんと仲直りさせることだ。とはいうものの……別に『人形』は和幸さんを嫌いになったというわけではないみたいだ。和幸さんだって、『人形』を依然として大切に想ってる。罰を受けるのを覚悟で全部話そう、と思い立つくらいだ。ってことは、何が原因なんだ？　確か、和幸さんは、『人形』が答えをほしがってるって言っていたけど……それか？　うーん、ケットに詳しく聞いておくべきだったな。単なる痴話ゲンカだと思って軽く流してしまった。

後悔先に立たず。それなら今聞けばいいよな。本人から。

「何が原因だったんですか？」とオレはズバリ尋ねた。「彼氏さんとのケンカ」

『人形』はハッとしてこちらに振り返り、それから哀しげな微笑を浮かべた。

「彼、何か隠し事をしてるの。きっとすごく重要な……それも、私に関わること」

「隠し事……」

「そう思ったら……なんだか、何を信じればいいのか分からなくなっちゃって」

それが原因ね。なるほど、話が読めた。和幸さんの隠し事ってのは『災いの人形』のことだな。確かに、すごく重要で神崎先輩に関わることだ。『人形』もさすがに身の回りの異変に気づいたか。いや、もしかしたら和幸さんが何かやらかしたのかもしれない。口を滑らしたか、素晴らしい演技でヘマをしたか。とにかく、何らかのきっかけで和幸さんが何かを隠していることに勘付いて『答え』を求めたんだろう――和幸さんが口が裂けても教えられない『答え』を。で、ケンカになったわけか。

ふーむ。とりあえず、ケンカの原因ははっきりと分かったけど……どう修復すればいいかなぁ。

――リスト！

突然、天の声が頭に響き、ハッとして目を見開く。紛れもなく、和幸さんに宿しているオレの守護天使の声だ。緊急事態でもない限り、オレに連絡（テレパシー）をしないようにと言い含めておいた。つまり、何かあったんだな。

「リストくん？　どうかした？」

オレの表情の変化に気づいたんだろう。『人形』は目をぱちくりとさせて不思議そうに声をかけてきた。

「いえ、なんでもないです。彼氏さんの隠し事ってなんだろう、と思いまして」

言いつつ、オレは頭の中で「どうしたの？」と天使に話しかける。

――かずゆきが人を殴ったの！

「え！？」

あまりに唐突な驚きの報告。思わず、仰天して声をあげていた。

「な、なに？」と、『人形』はぎょっとして身を引く。いきなり叫んだんだから、そりゃそうだよな。

「いや……」

うまくごまかす余裕もない。オレは心の中でケットを質問責めにする。殴った？　どういうこと？　誰を？　いつ？

――一時間目が始まる直前。写真がどうのって口論になって……。熊谷っていう人。リストも会ったことあるよ！　覚えてない？　一週間くらい前、屋上で……

写真、熊谷、屋上？　オレは何かが繋がりそうな感覚を覚えて、眉間に力を入れて視線を落とした。『人形』の視線を感じる。きっと心配して見つめているに違いない。

――ほら、かずゆきに乱暴して、リストが神の力で抑え込んだ人だよ。

その瞬間、フラッシュバックのようにいつかの出来事が頭の中に蘇った。オレははっと息を呑む。思い出した。そして……繋がった。

そうだ。一週間前、ここで和幸さんはとんだ茶番を繰り広げた。熊谷って男とその付き人のような二人組みを相手に。『人形』の写真を売るとか売らないとか、何やら口論になっていた。そして……SDカード。あのときは、一体何をめぐって争っていたのか分からなかったけど、『人形』の話を――出回っているという盗撮写真のことを聞いた今なら分かる。

オレはゆっくりと顔を上げ、頭の中に響く天使の声を無視して『人形』に話しかける。

「話さなきゃいけないことがあるみたいです」

突然のオレの言葉に『人形』は戸惑った表情を浮かべた。オレは構わず続ける。

「一週間前なんですけど、藤本先輩がここで熊谷って人ともめてたんです」
「和幸くんが！？」
さすがにその名前には無条件で反応するようだ。急に興味を示して目を丸くした。オレはゆっくりと頷いて、もったいぶるように間をおいてから核心に触れる。
「それも……ＳＤカードのことで」
「ＳＤカード？」神崎先輩の表情が一変した。真剣な表情で身を乗り出し、オレを凝視する。「……詳しく教えて」

神崎の彼氏

一時間目が始まる直前だった。ばらばらと散らばって話している二年三組の生徒の視線は、ある一点に集中していた。

「何してるの？」という不安そうな声がちらほらと聞こえ、「馬鹿じゃないの」と誰かが小声で囁いた。

廊下側の列。その真ん中にどっしりと構えているのは、鋭い目つき、すっきりとした鼻筋、細い顎、短い眉、さらりとなびく肩までの長髪。学年一かっこいいと女子からもてはやされる熊谷だ。見た目は確かにいいのだが素行は悪い。喧嘩っ早いし、気弱そうな男子生徒を見るとちょっかいを出して笑いものにする。気に入った女子がいるとすぐに手を出すし、気に入らないことがあると女相手でも平気で手をあげるという噂だ。よくない噂しかないのだが、それでも外見のおかげで女子には人気が高い。といっても、さすがに彼に近づこうという女子はいない。無論、男子もだ。触らぬ神に祟りなし。皆、遠目で見るだけで、なるべく関わらないように努めていた。

ところが、今朝は妙なことが起きていた。

彼の周りにはいつも二人の男がいる。見るからにガラの悪い、ひょろりとやせ細ったスキンヘッドの石井。そして石井とは対照的に、がっしりとたくましい体つきのスポーツ刈りの林。熊谷、石井、林――この三人がたむろっているのはいつものことだった。他の生徒もその風景には見慣れていた。だが、今朝は違っていた。もう一人、無謀にもそこにつっこんでいく男子生徒の姿があったのだ。それも、意外な人物――クラスで特に目立たない、窓際でいつもぼーっと座っている生徒。

「藤本くんだよね、あれ？」と、どこかで女子が誰かに尋ねた。

熊谷と他二人も、近づいてきた人物に気づいていぶかしげな表情で顔を見合わせる。

「何の用だよ、藤本」

石井と林の間にわけいって目の前に現れた彼――藤本和幸に熊谷はそう言った。馬鹿にしたような笑みを浮かべて。

「写真のことだよ」和幸は冷たい表情で無機質な声を放つ。「分かってるだろ」

熊谷は前髪をかきあげると、含み笑いをしながら「さあ、なんのことだよ」と答える。石井と林もせせら笑っている。

和幸は全く気にする様子もなく、熊谷をじっと冷たい視線で見据えて小首をかしげる。

「ああ、そうか」

わざとらしくそう言って、顔色一つ変えず、熊谷の机の上にある携帯電話をすばやく手に取った。

「いいケータイだな」と涼しい顔で携帯を開く。

「おい、なんだよ、さわんじゃねぇよ！」

どすのきいた声があたりに響く。クラスがざわついた。「何してんの？」という不安そうな女子の声が聞こえてくる。

和幸の不可解な行動に石井と林が顔を見合わせていると、熊谷は苛立った声で「お前ら取り返せよ」と怒鳴る。

「返すよ、返すよ」鼻で笑って熊谷を見下ろして、和幸は携帯を両手で持つ。「二人に渡せばいいんだな」

なめきった態度だ。一週間前に感じた苛立ちが蘇ってくる。熊谷は怒りでわななき何かを言おうと口を開けた。

そのときだった。

熊谷の目の前で、和幸は携帯を思いっきり真っ二つに折った――というより、まるで引きちぎった。唖然とする三人を尻目に、何事も無かったかのように二つに分かれた携帯を石井と林にそれぞれ手渡す。

「ほら」と、和幸は得意げに笑んだ。「仲良く半分こだ」

石井と林は怒(いか)るのも忘れ、放心状態で和幸から携帯だったものを受け取る。コードが虚しくぶら下がって、なんとも憐れな姿だ。二人とも、青ざめた顔で無謀な男子生徒をじっと見つめる。恐ろしすぎて、熊谷の様子を伺うことができない。命知らずだ。こんなことをしたら、どんな目にあうか。二人にはよく分かる。熊谷はキレたら手に負えない。限度を知らないのだ。何かというと二人が止めに入って、大事(おおごと)になるのを防いできた。だが……一週間前のこともある。今回は二人に熊谷の暴走を止める自信はなかった。

「知らねぇぞ」とスキンヘッドの石井がひきつった顔でつぶやいた。

丁度タイミングよくチャイムが鳴り、二人はそれぞれ携帯のパーツを熊谷の席において逃げるように去っていく。何も言わずにちらちら何度か振り返り、我先にと教室から出て行った。

教室は不気味に静まり返っていた。「どうなってんの？」とこそこそ囁く声があちらこちらで飛び交っている。三人が熊谷を囲んで立ちはだかっていたせいで、和幸が何をしでかしたのかは離れた席

に座る生徒には分からなかった。だが、近くに座る生徒は悪夢を見ている思いだった。顔を真っ青にして、いつでも席を立てるように用意していた。
熊谷は「なるほど」と、沈黙を破り落ち着いた様子でつぶやく。目頭をおさえ、裏返った声で「はっ」と笑うといきなり立ち上がった。

「調子に乗ってんじゃねぇぞ！」

先刻までの落ち着きはなんだったのか、いきなりぶち切れたように怒号をあげて、熊谷は和幸の胸倉を左手でつかみ、右拳を大きく振りかぶった。教室に甲高い悲鳴が響き、緊張が走る。誰もが次に目にする惨劇を想像して身震いした――ある生徒は恐怖で、ある生徒は興奮で。ただ一人、和幸だけは冷静な表情を浮かべていた。

「こっちのセリフだよ、一般人」そうつぶやくと、自分の胸倉をつかんでいる熊谷の左手首を掴み、筋肉を収縮させる。何が不安かといえば、力加減を誤って熊谷の骨を砕きやしないか、ということくらいだ。

「……！？」

味わったことの無いほどのすさまじい圧力が左手首を締め付ける――熊谷は目を見開いた。意志に反して左手が小刻みに震えながら開いていく。力が入らない。じわじわと和幸の胸倉から手が離れる。殴ろうとしたことも忘れ、愕然とした。和幸は依然として涼しい表情を浮かべている。力をいれてるようには見えない。だが……尋常じゃない握力が確かに左手首に襲い掛かっているのだ。

「なんなんだよ、お前」と痛みを堪えて震える声で熊谷はつぶやく。

和幸は口元だけ笑みを浮かべ、筋肉を緩めて熊谷の手首を解放する。熊谷は咄嗟に腕を引っ込め、痺れるような痛みが残る左手を食い入るように見つめた。手首には赤いあざがはっきりと浮かび上がっている。

「神崎の彼氏だよ」

「！？」

吐き捨てるような和幸の声が聞こえ、次の瞬間、目の前が真っ暗になった。いきなり頭が大きく揺れて耳が遠くなる。声も出せずに、背後の壁に頭から倒れるようにぶつかる。あまりに唐突なことに、見守るクラスメートも熊谷本人も何が起きたのか一瞬把握できなかった。

まさか、熊谷が藤本和幸に殴られるなんて、誰も予想はしていなかったのだ。

和幸は邪魔になる机を蹴り飛ばしてスペースをつくると、熊谷の左手首を再び掴み、右ひじを彼の背中に叩きつける。そのまま熊谷を顔面から壁に押し付けると、右手で熊谷の肩甲骨を押さえつけ、左手で彼の左腕を後ろに引っ張りあげた。

全ては、まるで『作業』のように手際よくあっという間に行われた。熊谷は気づけば、クラスメートに押さえつけられ、腕に激痛が走っていた――折られる、と瞬間的に思った。

熊谷の悲痛な叫び声が木霊する。それを皮切りに、観客はやっと我に返ったようにざわめきだした。

和幸は力をゆるめることなく、そのまま熊谷の耳元に顔を近づけて脅すように低い声で言う。周りには聞こえない、囁くような小さな声で。

「儲かったみたいだな」

「は！？」と、熊谷は苦しそうな声をだす。「何の話だよ！？」

和幸は呆れたように苦笑し、熊谷の左腕をさらに本来曲がるべき方向とは逆に引き上げる。注目されていることも忘れ、熊谷は痺れるような痛みに声をあげる。

「少しくらい分けてくれよ」と和幸は押し殺した声で熊谷に皮肉を囁く。「俺の女の写真なんだから」

「！」

熊谷は寒気を感じた。壁に頬ずりしているような体勢で押さえつけられ、どちらにしろ振り返ることはできないが……たとえできても、背後にいるクラスメートの顔を見ようとは思わなかっただろう。背筋が凍るという感覚を、熊谷は初めて味わっていた。まさか同級生に――それも眼中になかった目立たないクラスメートに、自分が怯えているなんて。

「俺の女、だ？」と熊谷は震える声でかろうじて言葉を出す。「何言ってんだ、お前。頭おかしいんじゃねぇか」

「かもな」と残酷な冷たい声が後ろから返ってきた。「よく聞け。今度ふざけたマネしてみろ。次はお前の腕だ」

熊谷は目を見開いた。次……その言葉に、ごくりと唾を飲み込む。SDカード、携帯電話、ことごとく真っ二つに折られてきた。次は、腕。脅しではないだろう。事実、たった今、左腕は折られる寸前なのだから。こいつは本気だ、と確信して背筋に戦慄が走った。なんでこんな危ない奴が今まで注目も浴びずに埋もれていたんだ――熊谷は心の中でそう叫んだ。

そのときだった。思わぬ声が教室に飛び込んできた。

「何やってんだ！？」

ガタガタと慌しく席に座る音が響き、和幸と熊谷も声のしたほうに目をやる。教室にズカズカと大またで入ってきたのは、白衣を着た定年手前の高齢の化学教師。はげあがった頭。牛乳瓶の底のような分厚い目がね。丸く大きな目が食い入るように和幸と熊谷に向けられていた。学年主任でもある坂井だ。

和幸は諦めたようにため息をついて、熊谷から体を離す。

「何やってんだ！？」と坂井は二人の前に仁王立ちしてもう一度尋ねた。

熊谷は殴られた左頬を腫らして、和幸を睨みつける。「こいつに聞いてくださいよ」と吐き捨てるように言うと、大げさなほど痛そうに顔をゆがめて被害者面。和幸は呆れてため息をついた。

「藤本？」坂井は目を大きく見開いて、和幸を見つめる。「何やってたんだ？」

和幸は肩をすくめると、悪びれた様子もなく答える。

「ただのケンカです。何も問題ないです」

「殴った上に腕折ろうとしたんですよ、センセー」

熊谷はすかさず横槍をいれる。和幸は「お前が……」と声をあげたが、それは学年主任の怒号に遮られた。

「藤本は生徒指導室！　今すぐだ！」

「え？」坂井に視線を戻すと、和幸は眉をひそめる。「俺だけ？」

＊　＊　＊

「つまり」と『人形』は落ち着かない様子で立ち上がった。「和幸くんは一週間前に、私の盗撮写真のことで熊谷くんとケンカしてたってこと！？」

オレはあぐらをかきながら穏やかに笑んで、頷く。

「だと思いますよ」

よっし。オレは勝利を信じて疑わなかった。うまくいった。日ごろのよい行いはちゃんと自分に返ってくるものですよ、和幸さん。

まさか、彼氏が自分の知らないところで自分のために戦っていたなんて。こんな胸を打つ話はないじゃないか。女の子は守ってくれる白馬の王子に弱いもの。コロッとケンカの原因なんて忘れて、ありがとう、と抱きつくんだろうな。

これで二人は仲直り。和幸さんは未知のリスクを冒して『人形』に全部明かすようなことはしないだろう。万事オッケー。

オレが満足げに微笑んでいると、

「信じられない！」と『人形』は声を荒げた。

「？」

……荒げた？　いや、違うだろ。もう胸がいっぱいで嬉しすぎる――そんな声色のはずじゃ……。

オレは眉をひそめて『人形』を見上げる。表情が曇っている。オレは「あれ」と苦笑した。やはり予想とは違う反応だ。恋する乙女の笑顔を期待していたんだけど。なんか、様子がおかしい。

「一週間も前に知ってたってこと！？　全部彼は知ってて黙ってた

の！？」
「……はい？」
明らかに、雲行きが怪しいぞ。
「また、隠しごと！？　一体、いくつあるの！？」と取り乱し、『人形』は頭を抱えてしまった。ちょっと待て待て。違う違う。この流れはまずい。オレは慌てて立ち上がり、顔を覗き込む。
「神崎先輩？　どうしたんですか？　らしくないですよ」
そう、らしくない。人間であるときの『災いの人形（パンドラ）』はお人よしの代名詞。優しさと憐れみの結晶。憎しみを知らない神聖な魂。なんでそんなひねくれた受け止め方をする？　そもそも、こんなに負の感情をあらわにすること自体、変だ。いや、負の感情なんて彼女は知らないはずなのに。
「！」
そうだ。よく考えたら……誰かとケンカすることすら、あり得ないはずなんだ。
オレはハッとして『人形』を凝視する。
不安と苛立ちが混じった表情。口元を押さえて落ち着かない様子。オレは思った――目の前にいる『人形』は、まるで……
「ごめんね、リストくん」と、オレの視線に気づいて『人形』は無理した笑顔を浮かべた。「実は、彼氏って和幸くんなの」
「！」
ほかの事で頭がいっぱいで、瞬時に言葉がでてこなかった。そう

いえば、オレは『人形』と和幸さんが付き合っていることを知らない設定だったな。つい「あ、はい」と気の抜けた返事をしてしまった。

「だから……ごめんね。ちょっと、私……」

困惑して視線を泳がす『人形』を呆然と見つめて、オレは虚脱状態でつぶやく。

「藤本先輩、生徒指導室ですよ」

「え！？」

弾かれたように『人形』はハッとしてオレを食い入るように見つめてきた。

「生徒指導室？」

「話しに行ったら……どうですか」

微笑を浮かべてオレはそう促す。『人形』は目をぱちくりとさせ、不思議そうな顔を浮かべた。

「きっと、答えてくれますよ」

自分で何をしようとしているのか、分からなかった。気づけば、そう言っていた。言葉が勝手に漏れていた。

そんなオレに、『人形』は何かを言おうと口を開き、そしてすぐさま閉じた。しばらく黙ってから「ありがとう」と微笑む。

スカートをひらりとなびかせて『人形』はオレの横を通り過ぎる。ほんのりと甘い香りがした。きっと、シャンプーの香りだろう。その背中を見送ることもせず、オレは立ち尽くしていた。

背後で、ドアが閉じる音がする。真っ直ぐに会いに行くんだろう。
オレは深い深いため息をもらした。
さっきの『人形』の様子を思い出し、オレは苦笑する。
和幸さんのことで動揺して取り乱す『人形』は――まるで普通の人間だった。
鼻で笑ってオレは空を見上げた。青く澄んだ空。遠い遠いその先には、この世界と、そして『災いの人形』の主（あるじ）である偉大なる種族が旅をしている。
もしかして……とオレは思っていた。もう、彼女は単なる『神の人形』じゃなくなっているのかもしれない、と。
さっきの彼女は――神崎先輩は、パンドラというより、和幸さんの彼女だった。
「人間としての、自我……？」
オレは無意識にそうつぶやいていた。
とにかく、もう和幸さんに任せよう。オレはそう思ってその場に座り込んだ。肌寒い風がオレの頬を撫で、オレは故郷がなつかしくなった。ナンシェは今頃、どうしているだろうか。元気だといい。それだけでいい。オレは目をつぶり、風を感じた。瞼の裏にナンシェの太陽のような眩しい笑顔が思い浮かび、拳に自然と力が入る。
ナンシェを守らなきゃいけない。だから、神崎先輩を……オレは殺さなきゃいけない。そのために、オレは創られたんだから。
何があっても何を犠牲にしても、マルドゥクの王としての使命を全うする――ナンシェの代わりに。それが、きっとこの罪深い命の贖罪になる。オレはそう信じていた。

大事な話

「自宅謹慎！？」俺は小さな教室に響き渡る大声で叫んでいた。「俺が！？」

「お前に決まってるだろ！」

机に手を思いっきり叩きつけ、担任の羽田が嗄れた声で怒鳴り返してきた。

俺は初めて生徒指導室に来ていた。狭い教室は閑散としていて、日当たりも悪い。教室の隅には受験用の本と大学のカタログが並ぶ本棚。真ん中には向き合わせて並べた二つの机。俺と羽田はそれを挟んで向き合うように座っていた。

羽田は二十代後半の若い国語教師。父親がどっかの高校の校長らしく、コネで入ってきたくせに偉ぶっている。自分では男前のつもりなのか、無駄に長い前髪を横に流して雑誌のモデル気取りだ。ミリ単位で形を調整していそうな左右対称の眉毛。痩せこけた頬。目は細くて切れ長で、唇はやたらと薄い。鼻は低く、のっぺりとした顔つきだ。

正直、俺はこの教師は好きではない。見境なく女子にちょっかいをだすし、授業も退屈で、なにより……むかつく。くそ。なんでこいつ、一時間目授業ないんだよ。担任とはいえ、こいつに説教されるのは心底気に食わない。

「クラスメート殴っといて、問題にならないとでも思ったのか！？」

ああ、ならないと思った。一般人になったし普通にケンカしていいものだと思ったんだが……どうやら、校則かなにかにひっかかったようだ。

何考えてるんだ、と呆れた羽田の声が木霊する。俺はつい苦笑し

てしまった。それに気づいたようで、羽田は低い鼻の周りに皺を寄せる。

「なにがおかしいんだ、藤本？」

「いえ」と、俺は肩をすくめる。「手加減したので、大丈夫かと」

一週間前、体育倉庫で大野を殴ったとき、どれくらいの強さだと『一般人』でも大丈夫かはなんとなく計れた。個人差はあるだろうけど、熊谷も鍛えてるようだったし、一発くらいいいだろう、と思ったんだ。というか……我慢できなかっただけだけど。

「手加減？　そういう問題じゃないだろう！　暴力事件を起こしたんだ、分かってるのか！？」

羽田は俺の言葉（いや、態度か？）に怒り心頭のようで、顔を真っ赤にして憤怒の声をあげた。

『それも俺のクラスで』――セリフの最後にそういう言葉が続きそうだ。これだけ取り乱しているのは、自分のキャリアが傷つくことが恐いだけだろう。監督不行き届きなんて非難されかねないもんな。だが、悪いが俺はこいつの名誉に興味はない。

「分かってますし、後悔もしてませんよ」と冷静に返す。「それより、熊谷のほうが問題でしょう」

「問題」馬鹿にしたような言い方でつぶやき、羽田は机の上で無残な姿で横たわるある物を手に取った。「神崎の盗撮写真か？」

羽田が持ち上げて俺に見せてきたある物――それは、俺が真っ二つにへし折った熊谷の携帯電話だった。つい、見せしめにと思ってやってしまったのだが……こうして壊れた携帯を見ると罪悪感にかられる。携帯に罪はなかった。物を大切に、という広幸さんの諌め

る声が蘇ってくる。

「熊谷がアレを回した。お前はそう考えてるわけだな」

頭痛でもするかのようにこめかみを押さえ、羽田は冷静な口調でそう言った。

アレ……無意識に、眉がぴくりと動いた。さては、こいつも見たんだな。そう思うと腸(はらわた)が煮えくり返る思いだ。平岡の話だと、誰かが携帯を取り上げられ、その中にカヤの写真が入っていて――ってことだった。それなら、取り上げた教師と担任は少なくともその写真を見ていておかしくはない。

だが、無関係のこいつも見てるってのはどうなんだ？　まさか、教師の中でも回してるんじゃないよな。一部の生徒に見られただけでもあいつにとっては耐えられない辱めだってのに。くそ、腹が立つ。こうなるのを恐れて、一週間前、大人しく熊谷に殴られてやったってのに。熊谷が予備を持っていること、なんで考え付かなかったんだ。詰めが甘すぎる。

「何度も言ってるじゃないですか」と、俺は苛立った声をあげた。「熊谷が神崎の写真を売りさばいたんです。推測でもなんでもなくて、真実です。だから、まずはあいつをなんとかするべきだろ！？」

ここに呼び出されてから、それを何度も説明しているのだ。なのに、こいつは一向に信じようとしない。敬語を使うことも忘れ、俺は夢中で訴えていた。

「証拠がないだろう」

また、それか。何度繰り返せばいいんだ。

「だから、携帯に写真のデータを入れてた奴に聞けばいいだろ！？
誰から買い取ったんだ、て。そしたら、熊谷って言うはずだ」
「知らない、と言うんだから仕方ないだろう」
「知らないわけねぇだろ！　口止めされてるだけだよ！」

俺はため息をついて背もたれによりかかった。話にならない。なんで「知らない」が通じるんだよ。

「とにかく」羽田は落ち着かない様子で机を指で叩きはじめた。モールス信号でも送っているような動きだ。「今はまず、自分の心配をしなさい。後悔してももう手遅れだけどな」
「は？」

意味深な言葉に俺が小首を傾げると、羽田は身を乗り出して脅すような低い声で告げる。

「熊谷の親はＰＴＡの会長だ。息子が殴られて黙ってはいないだろう」

ＰＴＡの会長！？　思わず鼻で笑ってしまった。あんな奴の親が？　冗談だろ。どうなってんだよ。

「お前は事の重大さが分かってないな」

俺の眉を読んだのか、呆れたように首を横に振って羽田はそうぼやいた。

「いいか、藤本。覚えておけ」言って、羽田は携帯を机の上に戻し、睨むように俺を見つめてきた。「親の権力が全てを決める世の中だ。お前みたいな孤児には希望はない」

「！」

思わず、ハッとして言葉を失くした。ショックだったわけじゃない。俺は裏の世界で生きてきた。汚く醜い世の中ってのを嫌と言うほど見てきたつもりだ。羽田に言われずとも、トーキョーがそういう世界だということは知り尽くしている。ただ、こいつはそれを知らない。俺を孤児院出身の普通の生徒だと思っている。その上で……よくそんなことを言えるな。どんな教師だよ、と呆れ返った。

「波風立てないように大人しく生きていくしか孤児には道はないんだ」

熱のこもった口調で、羽田はまるで説得するかのように言ってきた。俺は唖然として何の反応もできずに硬直する。

「もうこんなことを言っても後の祭りだがな。とにかく、今日のところは自宅謹慎」羽田は満足したかのように姿勢を正してまとめに入った。「帰りなさい」

「……大人しく、ですか」

俺は羽田を睨みつけ、皮肉たっぷりに吐き捨てるように言った。

＊　＊　＊

「羽田の奴、何様なんだよ」

和幸はぶつくさ文句をいいながら、生徒指導室から階段へ向かって廊下を進んでいた。生徒の今後を考える教室で和幸が学んだことといえば、やはり担任は気に食わない――それだけだった。

「波風立てずに大人しく、だ？」と鼻で笑って馬鹿にしたようにつぶやく。「狸寝入りしろってのかよ。冗談じゃねぇよ」

自宅謹慎がなんだ、ＰＴＡ会長がなんだ、引く気はさらさらない。カヤの写真を回したのは熊谷だ。あいつが処罰を受けるまではどうあってもあがいてやる。和幸は決意を胸に廊下を闊歩する。今朝のカヤの様子と平岡の話からして、彼女が盗撮の件を知ってしまったことは明らかだ。もう隠し立てる必要はなくなった。堂々と戦えるってもんだ、と和幸はほくそ笑む。

不謹慎かもしれないが、少し安堵していた。今朝、顔色の悪いカヤを見たときは自分のせいだと思い込んだ。ケンカのことを引きずっているのだろう、と。話を後にして、と言われたときは避けられているのかとさえ思った。それが全て、盗撮写真のせいだったというなら……少なくとも、二人の仲はまだ――

考え込みながら歩を進め、階段への曲がり角にさしかかったときだった。

「きゃっ！」

いきなりだった。かなりの勢いで階段を駆け下りてきたのか、誰かが突然飛び出してきて和幸に思いっきりぶつかってきた。咄嗟のことに、考えるより先に体が動いて、和幸は無意識によろめく女子生徒の腕をつかんでいた。

「大丈夫か！？」と尋ねて、少女の腕を引き寄せ――和幸はハッと目を見開く。

＊　＊　＊

どうして？　どうして何も言ってくれないの？　また隠し事？

なんでいつも隠すの？
私は夢中で階段を駆け下りていた。和幸くんと今すぐ話がしたかった。今すぐワケを聞きたかった。今すぐ――
転げ落ちそうになりながらも、足を忙しく動かして一階まで一気に駆け下りる。
屋上でリストくんが教えてくれた。和幸くんは今、生徒指導室にいる、と。なぜ彼がそれを知っているのかは不思議だったけど、どうでもよかった。
最後の一段を降り、あとは左に曲がれば生徒指導室は目の前だ。はやる気持ちを抑えきれず、階段を降りてきた勢いのまま角を曲がり――

「きゃっ！」

いきなり、何かにぶつかった。目の前が一瞬真っ暗になって、体に衝撃が走り後ろに弾かれる。何が起こったのか考える暇もなく、足がよろめき頭がふらついた。倒れる――と思ったのもつかの間、今度は急に左腕が引っ張られ前のめりになる。頭が忙しく揺らされて、何がなにやら分からなかった。
やっと我に返ったのは、声が聞こえたときだ。

「大丈夫か！？」という……優しい声。ハッとして顔をあげると、驚いた顔で彼もこちらを見ていた。

「和幸……くん」

乱れた髪を直そうという考えすら浮かんでこなかった。呆然と私は彼を見上げて硬直していた。彼に会うためにここまで来たというのに、いざ会ってみると……緊張して言葉が出てこない。そもそも、こういう出会い方は想像していなかった。突然すぎる。

「大丈夫か？」

和幸くんはぎこちなく同じ言葉を口にした。ぶつかってきたのが私で、彼もあっけにとられているようだった。なんだか恥ずかしくなって思わずうつむいて顔を隠す。

「大丈夫。そっちは？」

言って、やっと身だしなみを気にする余裕が出て髪を手で整える。

「ああ、俺は全然……」

やはりぎこちない。和幸くんは私の左腕から手を離すと、そのまま自分の頭をかいた。

「今、一時間目じゃないのか？」

「うん。さぼっちゃった」

「……そっか」

「……」

付き合ってるはずの私たちの会話はそれだけで途切れた。階段の前で向かい合って立ちすくみ、居心地の悪い沈黙を許す。彼の目が見れず、私はひたすら自分の上履きを見つめていた。その間も自分を説得する――話さなきゃ。話があってここまで来たんじゃない。

でも、頭に浮かぶ言葉はシャボン玉のように忽然とどこかへ消え去ってしまう。話したいことがあるはずなのに、何を言えばいいのか分からない。どう切り出したらいいのか分からない。夕べのせいか……いつも以上に、慎重になってしまう。勢いに任せて言葉をばら撒いたらどうなるか、二人とも身をもって知ったもの。

「座ろう、か」

私が躊躇(ためら)っていると、彼が遠慮がちにそう提案してきた。おずおずと顔を上げると、和幸くんは変わらない優しい笑みを浮かべていた。

「階段でよければ、だけど」

私の好きな彼がそこにいた。胸が締め付けられて、息苦しくなる。彼はすぐ目の前にいるのに……どうしてこんなに寂しいんだろう。

＊　＊　＊

俺たちは階段の二段目に並んで座った。一時間目の最中だ。人気はなく、静かなものだ。

ちらりと壁側に座るカヤを横目で見やる。深刻な面持ちで何かを考えている。こいつが授業をさぼるなんて……やっぱ、写真のこと、相当堪えてるんだな。それを思うと、自分に腹が立って仕方が無い。一週間前のアレはなんだったんだ。全くの無意味だ。殴られただけじゃないか。結局、写真は出回ってしまったし、カヤもそれを知ってしまった。防ごうとしたことは全て起きてしまった。自然と拳に力がはいった。熊谷を殴ったというのに、気持ちが全然晴れていない。余計に苛立ちが増しただけだった。

「写真のこと……」

「！」

貝のように堅く閉じられていたカヤの口が開いた。俺はハッとして振り返る。

「写真？」つい、何も考えずに鸚鵡返ししていた。聞くまでもないだろ、とすぐに気が付いて焦る。盗撮写真のことに決まってる。カヤの口からそれを言わせるつもりかよ。俺は慌てて「いや、分かってる。言わなくていいから」

カヤはぐっとスカートを握り締めた。表情が曇る。

「そう、分かってたんだよね……一週間前から」

一週間前……？　俺は顔をしかめて彼女を見つめた。

「なに、言ってんだ？」嫌な予感をごまかすように俺は苦笑して尋ねる。すると、カヤはこちらに顔を向けて見覚えのある表情を浮かべた――夕べと同じ、俺への不信感を宿らせた表情。

「リストくんに全部聞いたの」

リスト！？　俺はぎょっとして眉をひそめる。なんであいつの名前が出てくるんだ？

「一週間前、屋上で熊谷くんともめてたんでしょう？　私の写真のことで」

「！」

俺はハッとして目を見開く。そうだった。そういえば、あのときリストもあの場にいたんだった。

だが、だからといってなんであいつがカヤにそのことを話す？あいつには関係ないことだろう。そもそも、カヤとあいつが会話をしたこと自体不思議だ。劇の打ち合わせでもしたのか？　まさか…

…あいつ、またついでで重要なことを話したんじゃないだろうな。俺にカヤが『災いの人形』だとバラしたときみたいに。

「それに」と、カヤは俺の答えを待たずにうつむいて言う。「SDカードがどうのって話してた、て」

「それは……」

リストの野郎、余計なことを話しやがって。なんのつもりだよ？　これ以上俺たちの仲をこじらせてどうする？　カヤは俺が隠し事をしていることにストレスを感じてる。そんなときに、熊谷のことまで隠してたなんてバレたら……

「また、隠しごと？」

「……」

ほらな。こうなるだろ。予想通りの展開に、ついため息がでた。一気に疲労感が襲ってくる。

「全部、知ってたんだよね？」とカヤは視線を俺に戻し、確認するように語調を強めて尋ねてくる。「盗撮写真が回されてること……一週間前から知ってたんだよね？」

何かを言おうにも、言葉が出てこない。何を言ってもカヤには言い訳に聞こえるだろうと思ったからだ。全てが悪い方向へと転がる終わりの無い連鎖。そこから抜け出そうという気力すら俺には無かった。

「ああ、知ってた」

詳しく言えば……回されようとしていることを知っていただけだ。

俺は防ごうとしただけ。でも、違いはないだろ。結局、俺が失敗して回されたんだし。
あまりに俺がはっきり答えたので、カヤはあっけにとられていた。なにより、それ以上何も言わないことに戸惑っているようだ。
「どうして？」と、苦しそうにカヤは言葉をしぼりだす。「どうして、ずっと隠してたの？」
「何でだと思う？」
俺はカヤを真っ直ぐに見つめ、そう尋ねた。質問で返され、カヤは驚いて目を丸くする。
「なんでって……」
「お前を守りたかったからだ、と言ったら……納得するか？」
「え」

＊　＊　＊

私を守りたかったから？　どういうこと？　私を守りたいから、隠し事をするの？
あまりにじっと見つめられ、私はたじろぎながら首を横に振った。
「分からないよ」
そう答えると、和幸くんは悲しい表情を浮かべた。「そうか」と言って顔を正面に向ける。
「知らないほうが幸せかと……思ったんだ」
手を組んで視線を落とす彼の横顔は、切なげで苦しそうだった。

見てられなくなって私も顔を正面に向けた。私が彼にこんな顔をさせてるんだと思うと、自分が嫌になる。大好きな彼の笑顔を奪っているのは、他でもない私。最低だ。
でも、心のしこりはごまかせない。大きくなるばかりでどうしようもないんだ。このままだと肺を押しつぶして息ができなくなりそう。

「知らなくても」と、私は不安と罪悪感を抑え付け、勇気を振り絞って反論を口にする。「それが事実である限り、何も変わらない。私が知らない間にも、学校の誰かはあの写真を見ているし、盗撮だってされてる。だから――」
「……そうだな。知らなくても、いつかは『収穫』はくる」
「え？」

しゅうかく？　唐突に、聞きなれない単語がでてきて私はあっけにとられた。聞き違いだろうか。でも、確かに彼ははっきりと言った。収穫、と。何の収穫？
眉根を寄せて彼を見つめると、険しい表情で荒い呼吸をしていた。組んでいる手にもやたらと力が入っている。手の甲に血管が浮き出ていた。

「和幸くん、どうかした？」

調子が悪いんだろうかと思って、彼の背中に手を回してさすろうとしたときだった。いきなり、彼は上半身をひねって私に倒れかかるように抱きしめてきた。

「え、え！？」

慌てて周りを確認してしまう。学校でこんなこと……しかも、背

中に回る彼の腕はいつも以上にきつい。胸が苦しいのは圧迫されてるせいか、ときめきというものなのか分からなかった。

「もうごまかさない」

「え？」

いきなり、何？　耳元ではっきりとつぶやかれた言葉。ドクン、と鼓動が大きく鳴った。これだけ密着していたら彼にも伝わったんじゃないか、と思うほど。

「落ち着いて聞いてほしい。大事な話なんだ」

和幸くんは私を抱きしめたまま、真剣な声でそう続けた。大事な話？　一気に緊張が高まる。心臓が徐々に早くなっていく。私は戸惑いつつも、こくんと頷いた。

「いつからお前のことを『普通』じゃないと思っていたのか。そう聞いたよな」

私は緊張で乾いた唇を舐め、「うん」と小さくつぶやいた。

「あのな……」

背中に回る手がぎゅっと私のブレザーをつかむ。彼の荒い息が耳にかかる。彼も緊張しているようだ。

続きを言うのを躊躇っているのか、なかなか次の言葉が出てこない。ほんの数秒だったかもしれないが、焦らされる時間は永遠のように長く感じるものだ。

「初めて一緒に帰った次の日……俺は知ったんだ」

心なしか、声が震えているようだった。暗雲が立ち込めるように私の心を不安が覆う。嫌な予感がした。

「お前が――」

「藤本！」

虫の知らせだったのだろうか。私の予感は的中した。思わぬかたちで。

和幸くんの言葉を遮って、突然階段に意外な声が響いた。私はハッとして振り返る。和幸くんも咄嗟に体を離した。私たちの目に飛び込んできたのは、スラっとした長身の若い教師。確か……国語の、羽田先生だ。

校長の苦悩

「なにやってんだ、こんなとこで。帰れ、と言っただろう」言いながら、羽田はズカズカと和幸とカヤが座っている階段へ歩み寄る。
「まあ、丁度よかったけど」
「丁度良かったってなんスか」

このタイミングで……とやるせない思いに襲われながら、和幸は仕方なしにだるそうに立ち上がった。カヤも和幸につられるように、スカートをおさえながら慌てて腰をあげる。
すると、和幸を見ていた羽田の目がカヤに移り……そして細い目が大きく開いた。

「神崎！？」

え、とカヤはたじろいだ。気づいてなかったのだろうか、と不思議に思う。中東系の生徒は学校でカヤだけだ。一目見れば、神崎カヤだと分かるはず。薄暗かったから色黒の女子生徒と勘違いしただけだろうか。

「はあー」と羽田はカヤと和幸を見比べて感心したような声を出した。「そういうことか、藤本。驚いたな」
「え？」

そういうこと？　カヤはいぶかしげな表情を和幸に向ける。彼はカヤに一瞥もくれることなく、不機嫌そうな表情で羽田を睨みつけていた。

「あんたには関係ねぇだろ」

あからさまに反抗的な口調に、カヤはぎょっとした。わざとなのか、無意識なのか、敬語が苦手なだけなのか……いずれにしろ、カヤには衝撃的だった。当の本人は悪びれた態度は一つもなく、しれっとして教師にガンを飛ばしている。その隣で、カヤは身が縮こまる思いで彼を見つめていた。自分には到底マネできない。教師に向かってそんな言動……自分には無理だ。カヤは表情を曇らせて心の中でそう呟いた。

「あんた、とは何だ」と羽田は腕を組んで和幸を睨み返す。

「何か用デスカ」

面倒くさそうにため息をつき、和幸はわざとらしく敬語を使った。とりあえず、和幸が敬語を使ったので、カヤは安堵した。が、反抗的な声色は消えてはいない。馬鹿にしているようにさえ聞こえる。敬語は敬語でも、これでは変わらない気がした。

「ああ、そうだった」と羽田は思い出したかのように真面目な表情に戻って言う。「校長が帰る前に話したいそうだ。すぐに校長室に行け」

「校長！？」

和幸の驚く声が階段に響く。カヤも目を丸くして羽田に振り返った。

どうして、校長室？　いや、それよりも……とカヤは眉をひそめる。そういえば、和幸はなぜ生徒指導室にいたのだろうか。それも、一時間目の最中に。授業中に呼び出されるなんて……何かしでかしたのだろうか。カヤの心を不安が覆った。

「早く行け」羽田は腰に手をあてがって和幸にそう言うと、カヤに

も視線を向け「お前も授業だろ！」と怒鳴ってきた。
カヤはハッとしてあわてて「体調が悪いんです」と嘘をついた。
羽田はいぶかしげな表情を浮かべ、呆れたようなため息をつく。
「それなら階段じゃなく、保健室だ。つれていくから来なさい」
「え……あ、大丈夫です！　治りました」
さらなるカヤの嘘に、羽田の表情は曇る。カヤはごまかすように微笑を浮かべた。
「じゃあ、教室に戻りなさい」と羽田はため息混じりにカヤに言って、忙しく和幸にも怒鳴り声を上げる。「お前は校長室だ！　行きなさい！」
「……」
和幸は、くそ、と心の中で悪態をつく。どれだけ気に入らない教師だとしても、教師は教師だ。さすがに教師を殴ってはいけないという常識はある。和幸には何も出来ない。このままカヤについていてやりたいが……校長の呼び出しを無視するわけにもいかないし。仕方がない。和幸はわざとらしくため息をついた。
羽田を横目に、カヤに振り返ると小声でつぶやく。
「あとで話すから」
唐突に言われ、カヤはハッと目を見開いて彼に振り返った。心臓が大きく揺れる。そうだった、大事な話。
「うん」とカヤが緊張の面持ちで頷くと、和幸はせつない笑顔を見せる。まるで、これがお別れのような――カヤはそんな印象を受けた。なんだろうか、胸騒ぎがする。カヤが不安で眉根を寄せると、

和幸は憂いに満ちた表情を浮かべ、

「ごめんな。いつも、うまく隠し通せなくて」

「！」

和幸はそれだけ言うと、カヤの反応を見ることなくさっさと階段を下りていく。

羽田の横を通り過ぎ、角を曲がる彼の背中を見つめながら、カヤは呆然としていた。耳に残る和幸のさっきの声色……思い出しただけで胸がえぐられるようだ。なんて哀調を帯びた声を出すんだろう――苦しそうに顔をゆがめてシャツの胸元を握り締める。カヤは明らかに今、自分が和幸を傷つけていることを実感した。

「お前が藤本に頼んだんだな、神崎」

いきなり、羽田が意味深長な言葉をつぶやいた。カヤはハッと我に返って顔を上げる。

気づけば、羽田が自分を凝視していた。それも、汚いものを見るような目で。好奇の目にさらされることはよくあったが、羽田のそれはまったく違っている。カヤが今まで受けたことの無い視線だ。軽侮の眼差し――それも、口元には嘲笑が浮かんでいる。カヤは自分が震えていることに気づいた。単純に、恐いと思った。

カヤは怯えた表情で「何がですか」と小声で尋ねる。

「うまく、取り込んだもんだ」

羽田は呆れたように鼻で笑った。カヤはますます困惑し、「何の話です！？」と教師に向かって声を荒げていた。

「藤本とお前？」と羽田は肩をすくめて首を横に振った。「まさか」

はき捨てるようにそう言うと、羽田はくるりとカヤに背を向け歩き出す。

「藤本もまんまと騙されて……これで退学じゃ、報われないな」

カヤはまたも、背中を見送っていた。一体羽田が何を言っているのか結局分からず、眉をひそめて立ち尽くす。

「退学……？」

まるで泣いているような、弱弱しい声が漏れた。

＊　＊　＊

校長室は職員室の奥にある。

一時間目の最中で、職員室は閑散としていた。何人かは羽田のように授業がないのだろう、イスに座って教科書を読んでいたり、ぼうっと窓を見ている奴もいる。俺が暴力事件を起こしたことはまだ聞いていないのか、俺が後ろを通り過ぎても無反応だ。

校長室への扉の前に来て、俺はため息をついた。どうせ、ルールのなんたるかを演説されるに決まっている。人を殴ってはいけないんだ、と物知り顔で言うんだろうな。俺だってそれくらい分かってるさ。

ただ――と、俺は右手を見つめる。ぐっと握り締めて拳をつくった。ただ、他にいい解決法が思いつかなかったんだ。俺がカヤのためにできることは……情けないほど少ない。

堪えるように目をつぶってから、気を取り直し、顔を上げて瞼を開ける。握った拳を高々と挙げると、校長室の扉を叩いた。

「入りなさい」と高らかな声がして、俺は扉を開ける。

一人が使うには広すぎる部屋。日差しが燦燦とそそぎこんで、眩しいほど明るい。部屋をぐるりと囲むように置かれた棚には様々なトロフィーが飾ってあり、部屋の真ん中には黒い皮のソファがオーク材の机をはさんで二つ置かれている。

「おはよう、藤本くん」

はきはきとした口調の女性の声。窓際に目を向けると、座り心地の良さそうな社長イスに座り、几帳面に整理された広い机の上で手を組む五十代くらいの女の姿があった――白石校長だ。

「おはようございます」

言って、校長の机に歩み寄る。

校長は穏やかな笑みを浮かべ、フレームの無い眼鏡を滑らかな動きで外して机に置いた。気品のよさが動き一つ一つからにじみ出る。薄化粧だし、香水もつけていない。スーツもシックで、飾り気が全く無い。年齢を感じさせない透き通るような白い肌。艶やかな短い黒髪。若いころは（いや、もしかしたら今もか？）さぞモテたんだろうな、と思わせる。

「率直に言いましょう」と俺が机の前で立ち止まるなり、校長は薄ピンクの唇を動かした。「馬鹿をしましたね」

「！」

いきなり率直過ぎるだろ。俺はぎょっとして顎をひいた。だが……言葉とは裏腹に、校長は涼しげに微笑んでいる。口調もやんわりとしていて、怒っているとは到底思えない。

「理由はあえて聞きません。後々、報告を受けますし、第一、聞いたところで何も変わりません」言って、俺を食い入るように校長は見つめてきた。「今まで築き上げてきたもの全てを棒に振った気分……どうですか？」

笑みは消え、校長は厳しい表情になっていた。尋ねられ、俺はぽかんとした。質問の意味が分からない。

「は……はい？」と目を瞬かせると、校長は目の前に置かれている紙切れに目を落とした。

「成績も優秀。全国模試の結果も素晴らしい。出席率も良いし、素行も良い……いえ、良かった」

言われてハッとする。どうやら、あの紙切れは俺の資料のようだ。成績表？　調査書？　そうっと覗こうとして、急に顔を上げた校長と目があった。

「自宅謹慎ならまだいい。ただ、それで済むことはないでしょう」

「……え？」

校長は身を乗り出して手を組みなおし、俺をじっと見据える。真剣な眼差しだ。色素が薄いのだろうか、緑がかった茶色い目が真っ直ぐに俺に向けられている。

「熊谷くんのお母さまはＰＴＡの会長です。教育委員会にもつながりのある方で、はっきり言って、わたしも歯向かえません」

「！」

はっきり……言いすぎだろう。俺は半ば呆れて苦笑した。いや、

笑うしかない。

「ついさっき、そのお母さまから電話を頂きました。明日、話をしにこちらに来られるそうです。あなたの処分の件で」

俺はつい鼻で笑ってしまった。

ＰＴＡの会長サンは、息子が裏で何しているか分かってるのか？

校舎内で起きる嫌がらせは大体あいつが糸を引いているんだぞ。隠し撮りだって今に始まったことじゃない。被害にあった女子はカヤの他にもいる。ただ、明るみになっていないだけだ。教師にバレることもなかったし、被害者はもちろん、他の女子も未だに盗撮写真のことは知らないだろう（カヤが誰かに話していなければ）。今回は――幸か不幸か――偶然、教師がカヤのソレを見つけて明らかになっただけ。じゃなかったら、これまでみたいに、本人の知らないところで男共が勝手に楽しんで終わっていた。

まあ、俺も一連の盗撮事件が熊谷の仕業だとは今まで知らなかったが。てか、誰が犯人だろうとどうでもよかった。カヤが標的になっていなければ……。

とにかく、そんな奴の親だぞ。偉そうに俺の処分に口出しして欲しくはない。そもそも、ＰＴＡの会長として適格か？　いや……だからこそ、の熊谷の横暴な行動なのかもしれない。親が守ってくれるから、というくだらない免罪符をかざして好き勝手しているだけかもな。無能な鶏が先か、馬鹿な卵が先か。

「藤本くん？　聞いてますか？」

校長は、まるで耳の遠い老人を相手にしているかのような口調で声をかけてきた。俺は「聞いてます」と即座に答える。

「それでなんですか？　ＰＴＡ会長のお望みは？」とため息混じり

に促すと、校長は苦渋の表情を浮かべた。
「おそらく、あなたを退学にしろ、とおっしゃられると思います」
は！？　俺は一瞬固まって息を呑んだ。いやいや、待て！
「退学！？」思わず机に手を叩きつけて叫んでいた。
「そうほのめかしておられました。大変、お怒りのご様子でしたし……」
「待ってください！　一発殴っただけで……」
「一発でも二発でも、暴力は暴力です。あなたに非があるのは確かです。それで退学が妥当だ、とＰＴＡ会長に言われれば、わたしもなんとも言えません」
校長はまるで自分のことかのようにつらそうにそう言った。その憐れむような瞳を見つめ、そうか、と分かった。校長は俺を諌めるために呼び出したんじゃない。俺に覚悟をさせるために……。
俺は机に置いた手をぐっと握り締める。脳裏に浮かぶのは、親父の言葉。
――高校は卒業してくれ。頼む　。
カインノイエを抜ける、とそう告げたあの日。親父は懇願するように俺にそう言ったんだ。高校を卒業すること……それは、俺が親父に最後にできる『おつかい』なんだ。
「退学は困ります」と搾り出したような声でつぶやく。
「分かっています。わたしも出来る限りのことはするつもりです」
出来る限りのこと……俺は苦笑して机から手を離す。たかが知れてる。トーキョーでは権力が全て。どれだけ偉い奴とつながりがあ

るかが物を言う。公立高校の校長と、教育委員会と繋がりがあるＰＴＡの会長。勝敗は目に見えてる。そして俺は……そのＰＴＡ会長の息子を殴って、校長に情けをかけてもらってる孤児。絶望的だ。
にしても……嫌な奴ほど、コネがあるもんだ。トーキョーは、よくもまあ、不公平に出来ている。

「藤本くん」校長は唐突に強い語調で俺の名を呼んだ。「わたしも、孤児院出身なんです」
「！」

思わぬ言葉が飛んできた。俺はハッと目を見開き、校長を見下ろす。まじまじと白石校長を見つめ、まさか、と思う。見た目や言動から、てっきり生粋のお嬢さまかと思っていたのに……いや、それより、孤児院出身の人間が校長になれるか？　羽田は嫌いだが、あいつの言っていたことは事実だ。権力が支配するこのトーキョーで、孤児に明るい未来は無い。コネも金もないんだ。女は娼婦となり、男は裏世界で泥にまみれる――それが、典型的な孤児の行く末。高校の校長なんてのは、オプションにないはずだ。
愕然として見つめていると、校長は微笑んだ。

「孤児に対する差別があるのも、苦しい立場にいるのも分かっています。わたしも、経験してきました。我慢できないほどつらいこともあるでしょう」

良心が痛んだ。俺は正確には、校長の言っている「孤児」ではない。確かに、両親はいないが……孤児院で育ったわけではないし、血のつながりはなくとも家族がいた。校長が経験した苦境を俺は知らない。

「ただ、だからといって世界は物事を公平にはしてくれない。どん

な人間に対しても、ルールだけは平等に課せられるんです」

言われている意味が分からず、俺は眉をひそめて小首を傾げる。
校長は神妙な面持ちで、ゆっくりと口を動かした。

「暴力は未来の可能性を狭めるということ。それは孤児だろうがなんだろうが、同じなんですよ。
たとえどんな事情があったとしても、暴力はルール違反なんです。分かりますね？」

俺は何も答えられず、ただ突っ立っていた。分かることといえば、校長は確信しているということ。熊谷の母親が俺の退学処分をもちかけることを。そして……それを止められないことも。

新たな事実

カヤは結局教室には戻らず、一時間目が終わるまでトイレの中で隠れていた。鏡に背を向けてずっとぼうっとしていた。考えたいことはたくさんあった。時間が足りないくらいだ。

とりあえず、和幸の「大事な話」というのが気になる。階段で抱きしめてきた和幸の様子は尋常ではなかった。極度の緊張と不安が感じ取れた。そして……

――ごめんな。いつも、うまく隠し通せなくて。

あれはなんだったんだろう。カヤは小首を傾げる。悔しそうで哀しげで……そして、深い愛を感じた。カヤはうつむき、胸元を押さえた。

自分は一体何をしているのだろうか。明らかに、和幸を困らせている。苦しめている。罪悪感で身が引き裂かれそうだ。なのに、引き下がれない。和幸が何を隠しているのか――不安で仕方が無い。気になって自制できない。

苦しげなため息をつき、カヤは頭を抱えた。

丁度そのとき、終業を知らせるチャイムがあたりに鳴り響く。カヤはハッとして目を見開いた。授業が終わった……ということは、和幸と話せる。続きが聞ける。

ごくりと唾を飲み込み、深呼吸をする。

覚悟を決め、おもむろに足を一歩踏み出すと、出口へ向かってゆっくりと歩き出した。

トイレは廊下の端。三組の教室の目の前にある。廊下にでるなり、まっすぐに三組に向かい、カヤは教室をのぞきこんだ。黒板には化学反応式がびっしりと書かれ、化学の授業だったことが伺える。白衣を着た坂井が教科書を脇にはさんで、騒がしい教室から逃げるよ

うに出て行った。
カヤは緊張で早くなる鼓動を感じながら、授業が終わってざわつく三組の教室を見回す。点々と四、五人が固まって話し込んでいる。一通り見回して、カヤは表情を曇らせた。注意深く見るが、どこにも彼の姿は見えない。まだ校長室から戻ってないのだろうか。
落胆のため息をついて、カヤは後ずさる。そのときだった。

「あれ、神崎さんじゃない！？」

急にそんな甲高い声が教室の中から聞こえ、カヤはハッとした。少女の声を皮切りに、三組の教室がざわめきだす。皆の視線が廊下に立ち尽くすカヤに集まっている。
カヤは胸騒ぎを覚え、その場から離れようと体の向きを変えて歩きだす。すると、誰かがバタバタと向かってくる足音がした。それも、一人ではない。

「神崎さん！」と茶髪の女子生徒がいきなり教室から飛び出してきて、カヤの腕を掴んだ。「藤本くんと付き合ってるの！？」
「え……」

いきなり投げかけられた問いに、カヤはぎょっとして振り返る。なぜ急にそんなことを聞かれたのが分からない。戸惑いで答えられずにいると、巣をつつかれた蜂のように、次から次へと三組の女子が教室から現れた。
カヤが目を点にしてその様子を見つめていると、現れた少女たちは興味津々でカヤに質問責めを始めた。

「マジなの！？」
「なわけないじゃん」
「嘘だよねぇ？」

「でも、藤本くん、『神崎の彼氏だ』ってはっきり言ってたじゃん」

先頭でカヤを食い入るように見つめている茶髪の少女は「ねえ、どうなの！？」と急かすように答えを促す。カヤはパニックで呼吸を荒くしながらも、不安そうな表情で頷く。

「付き合ってるけど」

それは消え入りそうなほどの小声だったが、ゴシップに飢える少女たちの耳には十分な音量だった。歓声のようなものが上がり、少女たちは顔を見合わせにやついた。

「それじゃ」とリーダー役になっている茶髪の少女は瞳をギラギラと輝かせ、あらたまって違う質問を口にする。「熊谷くんとはどういう関係なの！？」

カヤはぎょっとして目を丸くした。熊谷……それは、和幸が自分の写真のことでもめていたという人物の名前だ。そういえば、なぜ和幸は彼ともめていたのだろうか。カヤはふと疑問に思った。そしてすぐに答えを思いつく。考える必要もない。明らかだ。熊谷こそ――

「浮気したんでしょ、熊谷くんと！」

いきなり飛び出してきた邪推にカヤは心臓が止まるかと思うほど驚愕した。バッと声の主を見つめると、「え？」と聞き返す。茶髪の少女の隣で、ツインテールの生徒が侮蔑を含んだ笑みを浮かべて、

「だって、それ以外なくない？　彼氏が他の男を殴る理由なんてさぁ」

殴る？　カヤは顔をしかめた。何の話だ？　だが、それを聞く暇もなく、周りの女子が楽しげに騒ぎ出す。

「確かにぃ！　それなら納得だよねぇ」

「ってか、どっちが本命か分かんなくない？」

「言えてる、言えてる。藤本くんが浮気相手なんじゃないの？」

「それ、うける！　かわいそー」

少女たちの無邪気で、そして残酷な笑い声が響いた。カヤは困惑とパニックで目が回りそうになった。頭がぼうっとして耳が遠くなっていく。

「ねえ！」という茶髪の少女の声がくぐもって聞こえた。耳に膜が張っているかのようだ。「どうなの！？」

カヤは眩暈を覚えながらも、「何のこと？」と声を絞り出す。すると、「とぼけてるよー」と誰かが後ろのほうで嫌味っぽく言った。茶髪の少女は冷笑し、「だから」と呆れたように説明する。

「藤本くんが熊谷くんを殴ったじゃない？　その理由を聞きたいわけ」

「殴った！？」

カヤの大声が廊下に響き渡った。カヤの周りを囲む少女たちは鼓膜に痛みを感じて顔をしかめる。

「殴ったってどういうこと！？」とカヤは茶髪の少女に迫った。「いつ！？」

「今朝よ。熊谷くん、頬めっちゃ腫らしちゃって。今、保健室」

いきなり血相を変えたカヤに戸惑いつつ、茶髪の少女はそう答える。
カヤの顔が一気に青ざめた。和幸が熊谷を殴った……だから、生徒指導室にいたんだ。だから、校長室に呼び出されたんだ。全ての『答え』が見つかった。心臓が壊れそうなほど早く動いている。胸が痛い。カヤは胸元を押さえ、シャツを握り締める。

「あ、そうそう。藤本くん、自宅謹慎だってぇ」

おもしろがるような声色で誰かがそう言った。カヤはハッとして顔を上げる。

「うそ！？」と茶髪の少女は興味深げに声をあげた。「だから、さっき帰ってたの！？」
「帰り際、中村くんに言ってたの聞いちゃったんだ」
「自宅謹慎って、学校さぼれんじゃんねぇ」
「うらやましぃ」

きゃっきゃ、きゃっきゃ、と少女たちは忙しく言葉を交わしてゴシップを楽しんでいた。カヤは顔面蒼白で愕然とする。今にも気を失いそうだ。和幸が自宅謹慎……呼吸が早くなり、吸っても吸っても息が入ってこない。
そういえば……と、さっき羽田が捨て台詞のようにはいていった言葉を思い出す。

――藤本もまんまと騙されて……これで退学じゃ、報われないな。

「退学……」

カヤはうつむき、声にならないほど小さな声でつぶやいた。まさか、自宅謹慎は一時的なもので、和幸はこれから退学になるのでは。寒気がして、体が震えだした。

「ねえねえ」と、そんなカヤを心配する様子もなく、取り囲む女子の一人が高らかな声をかける。「何があったの？　三人の間でさぁ。何かあったんでしょ？　やっぱ、浮気しちゃったの？　教えてよぉ」

名前も知らない同級生が、いかにも親しげに肩に触れてきた。カヤはびくっと肩を震わせ、ロングヘアーの少女に振り返る。

「浮気なんて……」

こみ上げてくるものがあった。涙が今にもあふれだしそうだ。これ以上言葉を出せば、確実に声をあげて泣き出してしまう。カヤは中途半端に言葉を切り、少女たちのバリケードを破って足早に自分のクラスへと向かった。

「え？　ちょっと！」
「逃げるの！？」
「やっぱ、やましいことあんじゃね？」
「美人はこわーい」

後ろから不平不満の声と嘲笑が聞こえてきた。カヤは一切構わず自分のクラスに駆け込むと、周りに見向きもせずまっすぐに自分の席へと向かう。机の横にかけてあるカバンを乱暴に取り、クラスメートの視線を感じながらもクラスを飛び出した。

そのときには、すでに涙はこぼれていた。それを隠すために顔を伏せ、廊下を駆ける。

和幸が熊谷を殴った理由。明らかだった。

――お前を守りたかったからだ、と言ったら……納得するか？

「私を守るため……いつも、私を守るため」

涙声の独り言が口から漏れる。

通り過ぎる生徒に変な目で見られながら、カヤは泣きながら階段を駆け下りていた。

熊谷くんこそ……！　と唇をかみ締める。彼こそ、あの写真をばら撒いた本人。そして、和幸が彼を殴ったのは、その報復。自分を守るため。カヤは確信した。

和幸は自分のために熊谷を殴り、生徒指導室に呼ばれ、自宅謹慎を受けた。つまり、自分のせいでそんな処分を受けることになってしまった。それなのに……と、カヤは踊り場で立ち止まり、涙をぬぐった。それでも、階段で愚痴も泣き言も恨み言も何も漏らさなかった。誰かを殴ったなんて、自宅謹慎を受けたなんて、一切匂わせなかった。まるで、何事もないかのように隣で話を聞いてくれた。

そんなこととは露知らず、自分は難癖ばかり――なんて自分勝手だったんだろう。なんて愚かだったんだろう。いつから、自分はこんなにも醜くなっていたんだ。カヤは恥ずかしくて情けなくて、どこかに隠れて大声で泣きたくなった。

「あ、カヤッち！」

ふと、明るく陽気な声が踊り場に響いた。ハッとして真っ赤な顔を上げると、そこにはぱっちりとした瞳をいつも以上に大きく開けたアンリがいた。ショートヘアはところどころ寝癖が見受けられる。右手にはバッグを携えて、一目で今登校してきたことが分かる。どうやら、遅刻してきたようだ。

「どうしたの？」と怪訝そうな表情でカヤに歩み寄ってきた。「号泣？」

なんでもない、と言おうとしたが、言葉が出てこなかった。カヤは笑顔を浮かべたが、それはアンリを余計に心配させるだけだった。まるで製作途中の人型ロボットだ。笑顔の作り方は知っているが、笑顔のもつ意味を理解できていない機械。今のカヤはまさにそれだった。

「何かあった？」

カヤはボロボロと涙を零し、嗚咽を漏らして答える。

「ごめん」

かろうじて出てきたのはそんな言葉だった。今、一番言いたい言葉。だがそれは、アンリに対して用意していたものではなかった。

アンリは「は？」と眉をひそめる。当然だ。彼女には謝られる覚えはないだろう。

「ごめんね」とカヤはもう一度言うとアンリの横を通り過ぎ、階段を駆け降りて行った。今度はアンリへの謝罪だ。今日は、劇の練習に出れそうに無い、ということへの。

＊　＊　＊

下駄箱について、私は下穿きに手を伸ばす。そこで……限界だった。私はその場に崩れるように座り込み、口元に手を当てて泣き出す。罪悪感が重くのしかかる。和幸くんにどう謝ったらいいのか分からない。ううん、もう彼に合わせる顔がない。

私は、和幸くんにばかり苦労をさせている。和幸くんにばかり迷惑をかけている。和幸くんはいつだって私のことを考えてくれてる。知らないところでも守ってくれてる。
それなのに……それなのに、私は！？　私は一体彼に何かしてあげた？　彼のために何か……しようとした？

「！」

打ちひしがれていたときだった。ふと、虫の羽音のような低い音がブレザーのポケットからして、かすかに腰のあたりに振動を感じた。携帯だ。ハッとして私は慌ててそれを取り出した――和幸くんかも。そんな期待を胸に。
だが、サブディスプレイに表示されていたのは、意外な名前。

「砺波ちゃん？」

なんだろう。こんな時間に電話なんて珍しい。何かあったんだろうか。
咳払いして声を出す準備をする。深呼吸して息を整えて、私は電話を耳に当てた。心配させないようにしなきゃ。いつも通りの声を出すんだ。私は声が震えないように注意して、

「もしもし、砺波ちゃん？　どうかした？」
「は？　朝っぱらから泣いてるわけ？」
「え！？」

砺波ちゃん……すごい。バレバレだ。それとも、私が分かりやすすぎなんだろうか。

「さては和幸と仲直りしてないのね？」

「！」

それも、分かっちゃうんだ。私は返す言葉が見つからず、押し黙った。

「沈黙。てことは、やっぱそうなのね。だろうと思った」と電話の向こうでため息が聞こえた。「実は、そのことで電話したのよね」

「え？」

「渡したいものがあるのよ」

渡したいもの？

「昼休みにでも、そっち行くから。昇降口にでてきといてよ」

「こっちに来るの？」

驚いてそう声をあげると、砺波ちゃんは不機嫌そうに「なに？嫌なわけ？」と間髪入れずに言ってきた。

「あ、違うの！　そういうわけじゃなくて……あの……」

昼休みまで学校で待ってることは出来ないと思った。それに……今すぐ、砺波ちゃんに会いたかった。

「私がそっち行っちゃだめ？」

「……うちの高校に？　別にいいけど」

珍しく、砺波ちゃんが戸惑っている。失礼かもしれないけど、新鮮だった。私はホッと安堵して微笑する。

「今から行くから。空いた時間にでも正門に来てくれるかな」

「今から!?」耳に刺さる甲高い声がした。「授業ないの？」
「あるけど……いいの」
本当はよくない。一時間目も授業サボっちゃったし。今日一日学校をサボることになる。おじさまに知られたら、一気に信頼を失っちゃうな。
砺波ちゃんはしばらく沈黙してから、「あっそ」と軽い調子で言った。
「了解。とりあえず、着いたらメールして」
「うん」
砺波ちゃんに話せる。それが分かっただけで、だいぶ気持ちが楽になった。

カヤの決意

「退学はまずい……」

部屋に戻るなり、俺はブレザーを脱ぎ捨てベッドに突っ伏した。枕に顔をうずめて、どこからでてるのかも分からない変なうなり声をあげる。

しばらくそうしてから、俺は顔を上げた。ぐだぐだ考えていても仕方が無い。今、俺に出来ることは何も無いんだ。あるとすれば、熊谷をもう一発殴って確実に退学になることぐらい。てか、退学になったら思う存分あいつを殴れるな。

あいつを殴ったことを後悔はしていない。あの一発に値することをあいつはしたんだ。当然の報い。いや、足りないくらいだ。後悔はない。後悔はないんだ。ただ……

――高校は卒業してくれ、頼む。

ふとした拍子に、気分が沈む。親父の言葉が頭をよぎるたびに胸が痛む。

親父は、どう思うだろうか。俺がもし退学になんてなったら……落胆するよな。最後の最後に、俺は親父を裏切るのか。ここまで育ててもらっといて勝手に家を出るし、今度は退学。最低な息子だ。もちろん、事情を話せば親父はきっと分かってくれると思う。俺を責めるようなことはしないだろう。だが、悲しむに違いない。せめて、万が一のときは親父の耳に入らないようにしよう。いや、『勘当』された今、親父との連絡は禁じられている。俺が退学になっても、親父がそれを知る術はない――はずだ。

「……」

カヤは大丈夫だろうか。俺はごろんと仰向けになって天井を見つめた。真っ白な天井をじっと見つめて思う。一番問題なのはカヤではないか、と。俺が熊谷を殴ったこと……あいつが知ったらどう思うか。あれだけクラスメイトの前で派手にやらかしたんだ。隠すことはもはや不可能だ。カヤの耳にはいるのも時間の問題。もう誰かから聞いたかもしれない。神崎の彼氏だ、なんてつい言い放っちまったし。あの暴力事件にカヤが関わっていることを公言したようなもんだ。今思えば、軽率だったな。

ケンカ中といっても、カヤはカヤだ。リストの話で熊谷が盗撮事件の黒幕だと分かっただろうし、俺が熊谷を殴ったと聞けば……自分のせいだ、と責任を感じるだろう。思いつめるに違いない。これで俺が退学になろうものなら、自分も学校を辞める、と言い出しそうだ。そしたら、なんと言って止めればいいだろう。「気にするな」と言っても気にするだろうし、抱きしめたところで「またごまかすの？」と言われかねない。「愛してる」？　……いや、それはもう無理だ。「答えになってないよ」――トラウマだ。

部屋に、俺の息遣いと時計の針の音が響く。

ケンカより厄介かもしれない。どう元気付ければいいのか分からない。無力だ。

あいつに何も言わずにさっさと逃げるように帰ってきたのも、悲しむあいつを見たくなかったからかもしれない。こうして電話に手がのびないのも、あいつのつらそうな声を聞きたくないからかもしれない。俺は、逃げている。

そのときだった。俺はあることに気づいてハッとした。それは、まるでどこからともなく飛んできた矢のごとく、唐突に俺の頭に突き刺さった。

「あ……」と情けない声が漏れる。

思わず、俺は笑ってしまった。なんて皮肉だ。笑うしかない。
カヤを守ろうと熊谷を殴って……結局、一番傷つくのはカヤだ。

「情けねぇ」

浅はかだった。俺は、またあいつを泣かすんだ。
目を閉じれば瞼の裏にカヤの姿が浮かび上がる。頬を涙で濡らし、潤んだ瞳をこちらに向け、その艶やかな唇をこう動かす――ごめんね、と。容易に思い浮かぶ、打ちひしがれたカヤの姿。俺はそれを見たくない、と思った。瞼を開いて瞳に写るのは、いつだって彼女の笑顔であってほしいと思った。
でも、きっと次に会うときにはカヤは泣いている。そう確信していた。
ああ、カヤの笑顔が恋しい。その思いが込み上げてきて他の雑念を覆い隠した。一瞬だけだったが、心が温まり安らぎが不安をごまかした。
そういえば、夕べはほとんど寝ていない。瞼がだんだんと重くなり、俺の意識は遠のいていった。

＊　＊　＊

砺波は二時間目が終わるなり、机の横にかけておいた紙バッグを手にし、教室を飛び出した。「廊下を走るな」という教師の叱責を無視して階段を駆け下り昇降口へと向かう。すばやく下穿きに履き替えると、上履きを下駄箱にしまうことなく校庭へと走り出した。
それは二時間目の途中だった。携帯電話が振動するのを感じて、教師の目を盗んで携帯をのぞくと、メールが来ていた。
――今、正門に着きました。時間ができたら来てね。

本当にあれからすぐ来たのか、と驚きつつも居ても立っても居られなくなった。二時間目の後半は全く集中できなかった。
グラウンドを砂ぼこりをあげながら風のように疾走する。丁度体育が終わった体操着の生徒たちは、駆け抜けていくセーラー服の少女をぎょっとしながら目で追った。
正門をくぐってブレザー姿の少女の姿を見つけるやいなや、砺波はいきなり怒鳴りつけた。

「来るの早いっての！」

少女はハッとして砺波に振り返ると「ごめん」と反射的に謝る。

「人を待たせるのは嫌いなのよ！　わたしが二時間目の途中だってわかってたでしょ！？　もっとゆっくり来なさいよね、カヤ」

肩で息をしながら、砺波はまくしたてるように言う。
人を待たせるのは嫌い――相手を思いやってのことではない。理由は単純だ。自分が待たされるのが嫌いだからだ。

「ごめんね」と再び謝るカヤの目は赤い。決して、砺波に怒鳴られて泣きそうなのではない。今まで泣いていたからだった。
カヤの瞳は、まるで迷子の子犬のよう。救いを求めるような視線で自分を見つめている。どうやら、まずは彼女の話を聞いたほうがよさそうだ。砺波はやれやれとため息をつく。

「なにがあったのよ」

すると、カヤは沈んだ表情を浮かべてうつむいた。泣きすぎて涙が枯れたのかもしれない。胸が締め付けられるほど痛いのに、もう涙はでてこなかった。

「あんま、時間ないんだからさ。話したいことあるなら、さっさと吐きなさいよ」紙バッグを腕にさげ、砺波は腰に手をあてがう。「ま、どうせ、葵のことなんでしょうけど。まだひきずってんのね。もう心配いらないってのに」

唐突に言われてカヤはきょとんとして顔をあげた。

「葵？」

「ほら、夕べの泥棒猫よ」

泥棒猫、と言われてカヤの頭に浮かんだのは、確かに猫のような愛らしい少女だ。エレベーターの中で和幸と見つめあっていた、あの小柄な少女。和幸はコンタクトを直していただけだ、と言っていたが……思い出すだけで、カヤの表情は曇る。しかし、心配はいらないとはどういうことだろうか。そういえば、躾をするとか言っていたが。砺波はカイン――それを考えると、違った意味でカヤの表情はさらに曇った。

「と、砺波ちゃん……」とカヤは思わず震える声で砺波に迫っていた。「あの子に、何かしたの！？」

すると砺波はきょとんとし……そして、「はあ？」と苦笑した。

「人をなんだと思ってるのよ」

「殺し屋」

ポツリとカヤは不安そうな表情でつぶやいた。砺波はぱちくりと目を瞬かせてから、頬を赤らめてわざとらしく咳払い。

「何もしてないわよ！　てか、実はあの泥棒猫と意気投合しちゃって。あれから夜中まで話し込んだのよね」
「え」
意気投合？　カヤの頭の中で、夕べ繰り広げられた砺波と葵との罵りあいが浮かび上がった。砺波と葵？　一体どうやったら、あの二人が仲良くなるというのだ。信じられずにカヤは眉根をよせた。
カヤが困惑する理由は砺波にも理解できる。なにせ葵は砺波の大嫌いなタイプだ。仲良くできるはずはなかった。だが……。砺波は言いにくそうにぎこちなくつぶやく。
「負け犬同士、話があうというか……」
「負け犬？」
カヤが小首を傾げると、砺波はごまかすように「なんでもない、なんでもない」と繰り返した。
「とにかくさ、安心していいってこと。あの子には、別の男を紹介することになったからさ。バイト辞めるのを条件にね。だから、もう和幸にちょっかいだすようなことはないわよ」
「別の男？」
「そ。和幸よりずっとイケメンをねぇ。今日のお昼にさっそくデートをセッティングしてやったし。もうばっちり」
砺波はにんまりと怪しげな笑みを浮かべる。別の男とは誰だろうか、と気になりはしたが、自分が首をつっこむことではないだろう、とカヤはとりあえず微笑んだ。ずるい考えかもしれないが、確かに、葵が他の男を見つけて和幸から離れてくれるというなら安心だ。
それにしても……と、カヤはまじまじと目の前で腰に手をあてがって堂々としている童顔の少女を見つめた。

「砺波ちゃんってすごいな」と感心した声をだす。
言われて砺波は「は？」と顔をしかめた。
「誰とでも仲良くなれるから。羨ましいな、て」
どこか寂しそうな表情でカヤはそうつぶやいた。すると砺波はけろっとした様子できっぱりと答える。
「あんたのほうがすごいわよ」
まさかそんな答えが返ってくるとは思ってもいなかった。カヤはあっけにとられて口をぽかんとあけた。
「わたしとこんだけ仲良いんだから」
「は……」
まるでそれが世の中の常識のような、そんな当たり前のような表情で砺波は言い放った。カヤは唖然として彼女を凝視する。
「もっと自信もちなさいよ。あんた、試してないだけだって」
「……試す？」
「これでもカイン一の自己チュー女って言われてるんだから。わたしと付き合えれば、大体の女とはうまくいくわよ」
言っている内容とは裏腹に、砺波は自慢げだ。
カヤはしばらくきょとんとして……そして、思わず噴出した。砺波が自己チュー女かどうかはカヤには分からなかったが、それでも彼女の言葉には説得力があった。確かに、砺波ほどはっきりと物を

言う人物に今まで会ったことはない。そして、今やそれに慣れている自分がいる。

「ありがとう」とカヤは笑いながら砺波に言った。

その笑顔に満足したように砺波はため息をもらし、持っていた紙バッグをカヤに突き出した。

「まったく、世話が焼けるんだから。ほら、これ」

戸惑いつつもカヤはそれを受け取る。何の変哲もない紙バッグだ。いや、言うなれば、お洒落な紙バッグだ。ネイビー色を基調として、そこに薄いピンクの線画が描かれている。

「これ、なあに？」と尋ねながらも、紙バッグをまじまじと見つめた。そして気が付く。紙バッグの隅にあるブランド名――ｍａｃａｒｏｎ（マカロン）。それだけで中身は予想がつく。ｍａｃａｒｏｎは最近トーキョーの女子高生に大人気の靴専門のブランド。つまり、砺波がただの入れ物としてこの紙バッグを使っているのでないならば、中身は靴しかあり得ない。

ブランド物には興味の無いカヤだったが、ｍａｃａｒｏｎだけは別だった。え、と目を丸くして砺波を見やると小首を傾げた。

「これ……」

「そ。シンデレラの靴よ」

その言葉に、カヤはハッとした。やはり……と思いつつも、なぜ？　と眉をひそめる。

砺波の高校は、クリスマスに盛大なダンスパーティをひらく。毎年、異なるテーマを設定して、それに合わせたイベントを行うのだ。

今年はシンデレラ。女性は実行委員会が定めた靴を用意して、片方をパートナーに渡すことになっている。パーティ当日、男性はその靴を頼りに相手を探す――もちろん、（女性は仮面で顔を隠すことになっているが）御伽噺と違って姿かたちで判断がつくはずだ。誰も本気で靴を頼りに探せ、とは言っていない。あくまでただの余興だ。

カヤも砺波に誘われて、参加しようと思っていた。そのために、砺波に指定の靴を取り寄せてもらった――ｍａｃａｒｏｎの銀色のパンプスを。ただ、すでに頼んだ靴は砺波から受け取っていた。つい、一昨日のことだ。今それは玄関においてある。だからカヤには不可解だった。なぜ、こうしてまた砺波がｍａｃａｒｏｎの靴を渡してきたのか。

いぶかしげな表情で砺波を見つめていると、彼女はつんとした表情を浮かべて目をそらした。

「それ、和幸の。てか、あんたの、か」

「！」

カヤは一瞬、何を言われたか分からなかった。え、と眉をひそめる。すると砺波は申し訳なさそうな表情を浮かべて腰に手をあてがった。

「夕べさ、わたし葵を送ったじゃない？　そしたら、あの子が途中で気づいたわけよ。持ってる荷物の中に、あいつのが混じってるって事に」

カヤは目を見開いて持っている紙バッグを見つめる。砺波は苦笑すると頷いた。

「そ。それよ」

「どうして……」と困惑した表情でカヤが口を開くと、砺波はさらりと答える。
「わたしが教えたのよ」質問を最後まで聞かずとも、カヤの疑問は予想できた。「昨日の朝、『実家』で偶然会ったときに。シンデレラの靴のことも、どの靴かも、あんたの靴のサイズも」
「……」

砺波の言葉に、ただ呆然とすることしかできなかった。
カヤはダンスパーティに行くのを諦めていた。事の起こりは一昨日の夜だ。和幸に『誘拐』された夜。和幸はイベントごとが嫌いだと砺波から聞き、念のためにダンスは好きか尋ねた。すると明らかに嫌そうな表情を浮かべたので、カヤは誘うことすらやめて砺波から受け取ったシンデレラの靴を自ら履いた。クリスマスは二人で何かすればいい――そう自分を納得させて。
しかし、その和幸がシンデレラの靴を買ったという。それはまるで……

「あいつ、ダンスパーティとか嫌いなはずなのに」砺波は呆れたような笑みを浮かべてそうつぶやいた。「行く気満々みたいよ。どうすんの？」

＊　＊　＊

和幸くんが私にｍａｃａｒｏｎの靴を買っていてくれた。シンデレラの靴を。私は紙バッグを持つ手に力をこめる。また……私に秘密で。そう思うと、胸に込み上げてくるものがあった。今までと違う。嬉しい、と思った。彼の隠し事に、温かい愛を感じた。優しさを感じた。ぽろりと涙がこぼれる。気持ちのいい涙が。
「うそ！　泣くの！？」

砺波ちゃんが、信じられない、と呆れた声を出した。確かに、これじゃ靴を買ってもらったのが嬉しくて泣いているみたいだよね。私は恥ずかしくなってあわてて涙を拭いた。

「これは、違うの」と弁解しようと声をだしたが、それは砺波ちゃんの言葉に遮られた。

「にしても……あいつがダンスパーティに行くか」どこか寂しげな声色だった。空を振り仰いで、大人びた笑みを浮かべている。「わたしが去年誘ったときは、興味ない、の一言だったのにな」

「！」

私はハッとした。まるで別人のような、か弱い声。せつない表情。それに、誘った？　まさか……と思った。もしかして、砺波ちゃんって……。ううん、そんなわけない。だって曽良くんははっきり言ってたもの。和幸くんと砺波ちゃんは幼馴染で、恋愛感情はない、て。

じっと見つめていると、そのまん丸の目が私に戻ってきた。

「ねえ、カルパッチョってなに？」

「え！？」

いきなり、料理の話？　きょとんとしていると、砺波ちゃんは苛立った声を出す。

「画家のカルパッチョよ。あんたの趣味？」

画家の……カルパッチョ。

「あ！」と思いつき、遠慮がちに私は訂正する。「それ、カラヴァッジオのことだと思う。養父の趣味で私のじゃないけど……和幸くんから聞いたの？」

そうだ。昨日の朝、カラヴァッジオとカルパッチョを彼は勘違いした。思い出すと、ほほえましいな。笑ったら失礼だけど、かわいかった。

「葵から聞いたのよ」と砺波ちゃんは意外な答えを返す。「夕べ、あいつ……あの和幸がよ？　絵画の展覧会のポスター見て立ち止まったんだって。カラなんちゃらがどうのって言って。あいつは棒人間さえまともに描けないのよ？　絵画に興味を示すなんておかしいと思ったのよ。だから、どうせあんたの影響かなってさ」

「……」

砺波ちゃんは相変わらずの早口で一気に言い切った。私は呆然として立ち尽くす。和幸くんが……絵画に？

「オークションにも行くって言うし、ダンスパーティも乗り気だし」砺波ちゃんは腕を組んで呆れた声を出した。「あいつ、変わったのね。カインを辞めて」

つい、持っている紙バッグに目がいった。

和幸くんは単に変わっただけ？　違う。彼は彼のまま。ただ……私に合わせようとしてくれてるだけ。私の世界を知ろうと無理してくれてるだけ。絵画もオークションも、そしてダンスパーティも……。

――合わせなくていいよ！　合わせる必要なんてない。

夕べ、エレベーターの前で彼に怒鳴った言葉。今思い返すと、恥ずかしくなる。私は目を固く閉じた。何も分かってなかった。何も見えてなかった。

私が間違ってた。合わせなきゃいけなかったんだ。合わせる必要があったんだ。たとえ無理してでも。私が、彼の世界に。彼にばかり負担をかけていた。彼がこちらに来ようとしているのに、私は待っているだけだった。私も彼を迎えに行かなきゃだめだったんだ。

彼に甘えすぎてた。彼に任せきりだった。こっちの世界では私が彼を守るんだ、て誓ったのに。何も出来ていなかった。気づけば、彼を苦しめて追い詰めていた――気晴らしに他の女の子とでかけたくなるほどに。彼が退学の瀬戸際に立たされているのだって、私のせいなんだ。私が頼りないから……和幸くんに陰で私のために戦わせてしまう。彼に……隠し事をさせてしまう。それなのに、私は彼を責めてばかり……。自分のことを棚にあげて、彼の気も知らないで。

これじゃだめだ。このままじゃだめだ。いい加減、強くならなきゃ。彼のために一人ででも戦えるようにならなきゃ。彼のために、何か……

「！」

私は目を見開いた。そのとき、ふと脳裏によぎった声。それは心の奥深くにずっと引っかかっていた言葉。和幸くんのようで……少し違う。そっくりだけど、ほんの少しだけ大人びた声。

そうだ。私には、しなきゃいけないことがあった――彼のために、彼の恋人として。

「カヤ、どうしたの？」

私が急に黙り込んだので心配になったのだろう。砺波ちゃんの怪

訝そうな声が聞こえてきた。私はゆっくりと顔を上げた。
「砺波ちゃん」はきはきとした口調で私は尋ねる。「本当に、カインの中で一番性格悪いの？」
「は！？」
あからさまに砺波ちゃんは不快な表情を浮かべた。
「なに、それ！？　失礼すぎじゃない！？」
「だって」と私はあわてて弁解する。「さっき、そう言ってたから」
「わたしはカイン一自己チューだって言ったのよ！」
「同じような気がするんだけど……」
「違うわよ！」
そっか。私は眉をひそめて視線を落とす。それはそうだ。だって、砺波ちゃんはいい人だもん。これで性格悪かったらカインの人達は聖人の集まりだ。ぎゅっと紙バッグの取っ手を強く握り締める。ということは、カインの中にはきっと恐い人もいる。だって殺し屋だもんね。私の想像もつかないような、とんでもない人だっているんだ。たぶん。
「突然、なんなのよ？」
困惑した声だ。砺波ちゃんにしては珍しい。
「でも！」と唐突に顔を上げて裏返った声をあげた。「自信もっていいんだよね？　試してみる価値あるよね？」
「は？」
なんだろう。不安だけど……緊張するけど……胸が高鳴る。晴れ

晴れとした気持ち。やらなきゃいけないことが、やっと分かった気がする。私はつい笑みがこぼれていた。

「ありがとう、砺波ちゃん！　私、やってみるから！」

「は！？　やってみるって……何なのよ！？」

校舎のほうからチャイムが聞こえ、砺波ちゃんは弾かれたように振り返った。

「やばっ！」

「じゃ、またね。砺波ちゃん」

言って、彼女に背を向けて私は歩き出す。行く場所はもう分かってる。彼のために私ができること、一つ気づいたんだ。彼のためにしなきゃいけないこと、思い出したんだ。

「あ、こら、カヤ！　何するつもりなのよ！？　てか、『またね』じゃないのよ！」

砺波ちゃんのあわてふためいた声が後ろからした。

パンドラの箱

男は夢を見ていた。遠い昔の夢。三十年以上も前の幻のような日々。夢の中でしか会えない家族。それをいい夢というべきか、悪夢というべきか。男には分からない。

ただ、夢の中で男は幸せだった。小学校にはいりたての愛娘が「お父さん」と言ってかけてくる。茶髪がまじった長い黒髪。ニホン人離れした顔だち。ひろいおでこ。つぶらな瞳にくっきりとした二重。太めの眉毛がまた愛らしかった。ロシア人の母親によく似て肌が雪のように白かった。

少女は「行ってきます」と元気よく言って家を出て行った。男は妻と並んでその後姿を見送った。その赤いランドセルが、ものの数十分後、血で染まることになるとは知らず。

娘は、二度と帰ってこなかった。

男は娘を取り返そうとしただけだった。たった一人の愛する娘。その死を受け止めることはできなかった。今にも娘のもとへ自らを誘おうかという妻を見ていられなかった。だから、どこからともなく現れた妙な女の口車に乗り、その身を、その魂を、裏社会に売った。

天才と謳われるほどの名医であり研究者であった男は、闇医者に成り下がった。そして、没頭した。娘を取り返すために、研究に没頭した。やがて男はある物を創り出した。生命を創り出す奇跡の機械――人工子宮。男は振り返って思う。あれは『パンドラの箱』だった、と。人が決して開けてはならない災いのつまった箱。世界に混乱と不幸をふりまく箱。男の研究はまさにそれだったのだ。男の画期的な人工子宮は、一度に大量の胎児を製造することを可能とし、裏社会ではやりつつあったクローン製造・売買を一気に発展させた。

男は自覚していた。自分が『パンドラの箱』を開けたことを。だが、当時の男にはどうでもよかった。男にとって重要だったのは、

娘だった。男を裏社会へ誘い込んだ女は、人工子宮が完成すると、約束通り男の娘のクローンを無償で創って男に与えた。そして、今後、クローン売買で女が得る利益の二十パーセントを男の口座に振り込むことを約束し、二人は別れた。女はその手に『パンドラの箱』を抱え、男はその手に娘のクローンを抱いて。

男は夢を見ていた。家に帰り、その腕に眠る娘を見て喜ぶ妻。以前と変わらない、笑顔の絶えない三人家族。もう一度、三人であの幸せな日々を送れると信じていた。ところが、現実は残酷だった。妻は蘇った娘に発狂し、ひどく拒絶した。これは自分の娘じゃない、と叫び、男にその赤ん坊を捨てるように告げた。男はなんとか妻を説得しようとしたが、無駄だった。仕方がなく、男は断腸の思いで赤ん坊をあの女に返した。女は言った。大丈夫、私に任せてください、他に赤ん坊を欲しがる親はたくさんいるから、と。男はそれでいいだろう、と思った。このトーキョーのどこかで娘が幸せに暮らしてくれるなら、自分の元でなくても構わない。そう思ったのだ。

ところが……

男は気づいた。これは悪夢だ、と。自分は悪夢を見ているのだ、と。気づけば、頬を涙がつたっているのを感じた。ゆっくりと瞼を開くと、まぶしい光がとびこんでくる。歪んだ視界の中、神々しく光を身にまとった若い女性がこちらを見ているのが分かった。男は思った。彼女は自分を迎えに来た天使か。いや、そんなわけはない。自分を迎えくるとすれば、それは悪魔。もしくは――

「フィリオ」

男は震える声でそうつぶやいた。

＊　＊　＊

私は息を切らせながら筒井クリニックの玄関に駆け込んだ。一週

間ぶりに会った筒井先生は私を見るなり目を丸くして「どうしました？」と心配そうに声をかけてきた。全速力で走ってきて、汗はびっしょりだし顔は真っ赤だし。何事かと思ったのだろう。

「藤本さんにお会いしたくて」

そう告げると、筒井先生は頬をほころばせて「お見舞いですか」と病室まで案内してくれた。

もしかして、カインの誰かがいるかもしれない。そう思ったのだが、病室に入ると静かなものだった。確かに、多くのカインが見舞いに来ていたようで、床やテーブルの上にたくさんの花や果物、手紙が置いてある。愛されているんだな、と思った。

広い個室で、さびしくベッドが窓際に一つだけ。燦々と差し込む光を浴びて、安らかに一人の男性が眠っている。私は足音を立てないようにそうっと近づき、その寝顔を見つめた。頭を薄く覆う真っ白な髪。繭のような白い眉毛。一つ一つ深く刻まれた皺。この皺の数だけ、苦労をしてきたんだろう。いや、きっともっとだ。

私はただ見つめていた。カインノイエの創立者。『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たちを束ねるリーダー。そして……和幸くんのお父さん。藤本マサルさん。

ふと、閉じられている瞼がぴくりと動いたように思えた。目を覚ますのだろうか、と食い入るように見つめていると、その瞼から……一筋の涙がこぼれおちた。

私は驚いてハッと息を呑んだ。藤本さんが、泣いている？

そのときだった。ゆっくりとその瞼が開いて、あの野心に満ちた瞳が姿を現した。いや、野心に満ちていたはずの瞳。私をじっと見つめる一週間ぶりの藤本さんの瞳は、弱弱しく虚ろで、燃え尽きた灰のようだった。絶望と深い哀しみ。それを感じて私は言葉が出てこなかった。一体、どうしてしまったんだろう。

藤本さんはゆっくりと口を開いた。そして震える声で私に呼びか

ける。

「フィリオ」

フィリオ？

＊　＊　＊

突然、フィリオと呼ばれてカヤは唖然とした。誰かと見間違いでもしているのだろうか。カインの子供か。カヤは遠慮がちにおずおずと答える。

「神崎です、藤本さん」

藤本はいぶかしげな表情を浮かべ、そしてハッとした。瞳に残っていた一粒の涙が転がり落ちるように頬を伝った。

藤本は「ああ！　神崎さん」とあわてた様子で上半身を起こす。カヤはそれ以上にあわてて藤本の体を押さえた。

「だめですよ、寝ててください」

「いや、すみません」と藤本は恥ずかしそうに破顔する。「みっともないところを」

カヤに促されるままベッドに横になり、藤本は頬を濡らす涙をぬぐう。

「子供みたいですが、悪い夢を見まして」

カヤは毛布を藤本にかけながら、「悪い夢」とつぶやくように繰り返す。藤本は枕に頭をうずめつつ、こくりと深く頷いた。

「カインノイエをはじめるきっかけになった事件です。それを思い出してしまいました」

そういえば、以前、藤本が自分にカインノイエについて語ったとき、きっかけになった『ある事件』については何も言わなかった。話したくないことなのだろう、とカヤはそのときあえて聞かなかったのだが、今の藤本はまるで聞いて欲しいかのようだ。

「わたしは知らなかったんです。創られたクローンがどのような末路を辿るのか」

天井の一点を見つめるその目には哀愁が漂い、その声色には力強さも威厳も感じられない。

「皆、幸せに暮らすのだと思っていました。そう信じていたからこそ……」

そこまで言って、藤本は言葉に詰まった。眉がぴくぴくと動き、頬が痙攣している。カヤが「藤本さん？」と心配そうに声をかけたときには、藤本の目から次から次へと涙が零れ落ちていた。藤本は感情の波を抑えるのを諦め、静かに目をつぶった。その間にも涙は目じりの皺を伝って枕へとしみこんでいく。

「大丈夫ですか？」というカヤのやんわりとした声が藤本の身に沁みる。やはり不思議な少女だ、と藤本は思った。なぜか、彼女には話してしまいたくなる。墓場まで持っていこうと思っていた罪をも懺悔したくなる。

藤本は浅く深呼吸をすると、擦れた低い声でつぶやく。

「わたしはふさわしくはない」
「はい？」

この純粋な少女に話したところでどうなる。彼女はカインでもなければ、裏世界に生きる人間でもない。言ったところで困らせるだけだ。そうは分かってはいても、藤本は止められなかった。ベッドに長い間横たわり、精神まで弱くなってきたんだろうか。単に年を取っただけなのか。この少女に救って欲しいと思っている自分がいた。少女の包み込むような雰囲気が自分にそう思わせるのだ。

藤本はゆっくりと瞼を開き、ベッド横にある小さな机に目を向ける。そこには花瓶に収まりきらない花束が横たわっている。すべて、彼の『子供』たちが置いていったものだ。

「どの花もどの果物もどの手紙も、わたしには受け取る資格はない」
「え……」
「わたしは決して赦されない罪を犯しました」
「罪……？」

カヤがいぶかしげに見つめる先で、藤本はじっと花束を眺めて悲しげに微笑んだ。

「わたしの罪を知れば、あの子たちはわたしを赦さないでしょう。わたしはそれを分かって隠しているのです。彼らをさも助けているようにふるまっている。偽善者だ」

そこまで言って苦しげに藤本は目をつぶった。判決を待つ罪人のような表情で。

「わたしはあの子たちの父親にふさわしくはない。わたしはあの子たちをだましている」

男の罪。それは『パンドラの箱』を開けたこと。人工子宮という発明で、神の領域に人の侵入を許した。命の創造は男の研究によって製造へと変わってしまった。人が自由に、そして大量に命を製造することが可能になったのだ。『子供』たちはもちろん、神も自分を赦すことはないだろう。藤本は覚悟を決めていた。天国への扉は閉ざされている。おそらく、殺し屋となってしまった『子供』たちも同じだ。それならそれで構わない。『子供』たちとともに地獄へと堕ちよう。ただ、それもまた自分の勝手な自己満足に思えて仕方がない。もし、自分の犯した罪を知ったら――彼らがクローンとして創りだされた原因が男にあると知ったら――『子供』たちは真っ先に自分を殺そうとするような気がして仕方がなかった。それで彼らが救われるならいい。いや、そうするべきだとも思った。

だが、『子供』たちの愛を失うのが何よりも恐ろしかった。神の救いを望めない男にとって、『子供』たちの愛こそが神といえるものだからだ。身勝手な男は、自分が救われることを選んだ。『子供』たちに真実を隠し、父親のように愛を注いで。藤本はそう思い悩み、常に罪悪感と戦ってきた。

まるで女神のように美しい少女はしばらく黙っていた。藤本は目をつぶったまま、少女の聖母のような穏やかな声を待っていた。自分でもこの少女に何を期待しているのか分からない。ただ、少女の言葉がどうしても欲しかった。

「藤本さんが何を隠されているのか、私には分かりません。聞き出そうとも思いません」

カヤは落ち着いた声で優しくそうつぶやいた。藤本はゆっくりと瞼を開けるとカヤを見つめる。窓から差し込む光を浴びて、カヤが一段と崇高な女性に見えた。すべてを見透かすような漆黒の瞳。なめらかで穢れのない浅黒い肌。鋼のような黒髪は、光を反射させて

天使の輪をつくっている。

「でも」とカヤは慰めるように微笑んだ。「こんなに愛されてるじゃないですか」

そう言って、カヤは机に横たわる花束を一つ手にとった。色とりどりのガーベラの花束だ。赤、黄色、ピンク。にぎやかで可愛らしい。

「いまさら藤本さんが何を隠していようが、皆さん気にしないですよ。藤本さんが大事なお父さんであることは、何があっても変わらない。和幸くんや砺波ちゃん、曽良くんを見ているとそう思います。それだけのことを藤本さんはされてきたんじゃないですか」

藤本はガーベラの香りをかぐ少女をじっと見据えた。女神、天使、聖女……そのすべてが当てはまるようで、それだけでは足りない気もした。

カヤは微笑を浮かべながらガーベラを藤本の枕元にそっと置く。ふわりと風となってガーベラの芳しい香りが藤本を包んだ。

「きっと」とカヤは麗しい唇をなめらかに動かす。「藤本さんはもうその罪を償ったんですよ。ここにある花束も果物も手紙も、その証だと思います」

カヤの一つ一つの言葉が心に沁みていく。自分の罪が溶かされていくように思えた。藤本はかみ締めるように固く目を閉じる。息を吸えば、ガーベラの香りが心を癒す。耳をすませば、聖女の赦罪（しゃざい）の言葉が心を浄化する。

「だから、受け取っていいんですよ」

自然と、涙がこぼれた。彼女は自分の罪を知っているわけではない。すべてを知らない少女の言葉は慰めにしか過ぎないのだろうが、それでも救われた気がした。これで、安らかに眠りにつけると思った。

もう自分は長くはない、とどこかで藤本は気づいていた。だからこそ、曽良に早々とリーダーの役に就かせたのだし、だからこそ、この不思議な少女に告解をしようと思い立ったのかもしれない。といっても、罪自体を告白していないのだから不完全な告解だ。だが、二十年以上も藤本の心を覆っていた暗雲は確かに晴れ間を見せていた。晴天となることは一生ないのだろう。それこそ、自分が背負わなければいけない罪の代償なのだから。

目を開けば、小さく愛らしい花びらが視界に広がる。色とりどりの鮮やかなガーベラの花。藤本はそっとその花びらに触れた。ちょっとでも力を入れればちぎれてしまいそうな、脆く美しい神の創造物。見ているだけで心が癒される。ただそこに在るだけでその場の雰囲気を変えてしまう。まるで――目の前の少女のようだ、と藤本は思った。

「ありがとう」

男は震える声で少女に言った。少女は少し照れたような笑みを見せて頷く。

男は決して知ることはない。目の前に立つ少女もまた、男の開けた『パンドラの箱』によって呼び出された存在だということを。男が世界に招いた災いの一つ。神の『裁き』――それを世界に知らしめる存在、パンドラ。

少女もまた知らずにいた。なぜ自分がここにいるのか。その本当の理由を。何も知らずに、ただ朗らかな笑顔を浮かべて、男を見つ

めていた。神の領域に土足で踏み込み、神の怒りを買った罪深い人ル間ル を。今はまだ、慈悲深い瞳で。

パンドラの箱（後書き）

なんだか重くてすみません。
ちなみに、人工子宮はそう簡単には実現できません（と思います）。
あくまでフィクションですので。

カインの花嫁　―１―

「すみませんね、変な話をしてしまって」

ベッドの上半身を起こし、それを背もたれにして藤本さんは座っていた。

すっかりもとの藤本さんに戻っている。涙も消えて、顔には以前のように穏やかな笑顔。やっぱり、一時的な気の落ち込みだったのだろうか。一週間も入院してるんだもんね。ストレスもたまるはず。私と話して少しでもそれが和らいだのならいいんだけど。

「それで……何か、わたしにご用でしたか？」

藤本さんは布団の上で手を組み、興味深げに目を大きく開けて尋ねてきた。私は、そうだった、とハッとして姿勢を正す。藤本さんへまっすぐに視線を向けると、ごくりと唾を飲み込んだ。

今日はお見舞いに来たわけじゃない。とっても大事な『報告』をしに来たんだ。

「あの……」

第一声が重要だ。そう思うと緊張が高まって、いきなり言葉に詰まってしまった。どう言おう。どんな風に言ったら適切なんだろう。当たり前だけど、こんなこと初めてのことだし、周りで経験者もいない。

とにかく、礼儀正しく。印象を良くしなきゃ。

そのとき頭に浮かんだのは、カインノイエの『実家』でお会いしたシスター・マリア。あの、上品で凛としたお手本のようなお辞儀。あれだ、と思った。あのお辞儀こそ、この場にふさわしい。ぼやけ

た記憶のもやを必死に取り払って、あの立礼を思い出しながら、私も同じように手を体の前で組んでゆっくりと頭を下げた。そして息を吸って思い切って、

「息子さんをください！」

言った。ちゃんと言えた。私は頭を下げたまま、笑みをこぼした。喉にひっかかっていた魚の骨がとれたような、そんな爽快感。

ただ……ちょっと違和感があった。セリフ、これでよかったのかなぁ。なんだか少し違うような……事実、藤本さんからの返事は無いし。

間違ったことを言ったのだろうか。ふと、不安になり始めたときだった。

「はい？」

藤本さんの寝ぼけたような声が降ってきた。ぽかんとした表情が頭に浮かぶ。もしかして、唐突すぎたんだろうか。それは、そうか。息子さんをください、てだけじゃ意味分からないよね。ちょっと飛ばしすぎたかな。まずは挨拶を、と思ったんだけど……。

とにかく、それなら事情を話すだけ。私は顔を上げて背筋を伸ばし、藤本さんの瞳を食い入るように見つめる。

「和幸くんにプロポーズされたんです」

藤本さんはぎょっと目を見開いた。驚愕して声がでないようだ。

どうやら、これはこれで直球すぎたみたい。って、そういえば藤本さんって心臓発作が原因で入院してるんだよね。あまり驚かせたら体に良くないかな。

でも、ここまでもう話しちゃったし。とりあえず、もう少しゆっ

くり穏やかに話してみよう。藤本さんをそこまで驚かさないような些細なことから順に。なにがあるかな、と私は慌てて思考を巡らし、ハッとする。

「今日は学校だったんでつけてないんですけど」満面の笑みでそう切り出して、私は左手の薬指をさする。「婚約指輪のようなものももらったんですよ」

藤本さんはぱちくりと目を瞬かせた。そして「婚約指輪、ですか」と口元をゆるませた。

やった。これまでの中では一番落ち着いたリアクションだ。私は手ごたえを感じて「そうなんですよ」と身を乗り出した。

「カインノイエからお借りした小型カメラつきの指輪。実はあれなんですが……」

一瞬にして藤本さんの表情が曇った。

「一つ足りないと思ったら……」と藤本さんが顔をしかめてぽつりとつぶやく。

私はその言葉に自分が失態を犯したことに気づいた。そうだった。よく考えたら、あの指輪はカインノイエの所有物であって、和幸くんが盗んだようなものなんだ。それをこんなに堂々とカインノイエのリーダーに話しちゃうなんて。

もう、なにやってるんだ。さっきから全然うまく『報告』できてないじゃない。とにかく、指輪の話は流さなきゃ。和幸くんが怒られちゃう。私は多少パニックになりながらも、ごまかすように微笑んで言葉を続ける。

「それで……私も和幸くんと結婚できたらいいな、て思っていまして」

話しているうちに、段々と頬が熱くなる。これは……絶対、顔が赤くなっている。自然と視線が藤本さんからずれていった。

「なので、和幸くんのお父さんである藤本さんからも許可を頂きたいな、と思いまして、こうして参上した次第で……」

ああ、どうしよう。ここぞというときに、緊張で言葉が変。いきなり時代劇？　とにかく、最後まで伝えなきゃ。本当の本当に言いたいことは、まだ言えてないんだから。

そう、ただ『報告』しに来たわけじゃないんだ。もっと重要な目的がある。それは――

「藤本さんにも……祝福していただきたいんです」

ぎゅっとカバンを握り締めて私は力強く言った。

気管の途中に結び目が出来てしまったかのように、酸素がうまく入っていかない。不安と緊張が呼吸を邪魔しているんだ。

藤本さんならきっと大丈夫――そう信じている自分と、もしかしたら藤本さんも私をよく思ってはいないかもしれない、と心配している自分がいる。そういえば、和幸くんがカインを辞めてからは藤本さんとお会いしていなかった。藤本さんだって、和幸くんの件で私に不満を抱いている可能性だってあるんだ。藤本さんはお優しい方だから、隠しているだけかもしれない。

気づけば、私はうつむいていた。藤本さんの答えを待つ間、時計の針が一秒を刻むごとに不安が膨張していった。どうして待たされているときって否定的になっちゃうんだろう。

「神崎さん」

おっとりとした藤本さんの声が聞こえてきた。私はハッとして顔を上げる。藤本さんとばちりと目があい、その瞬間、藤本さんはその白髪が乗っかった頭を私に見せてきた。

頭を下げられている――そう気づくのに、少しだけ時間がかかった。

「息子をよろしくお願いします」

藤本さんはゆっくりと一語一語丁寧に声にした。まるでドミノをそっと並べていくかのようにじっくりと慎重に。

心臓が大きく揺れて、鳥肌が立ったのを感じた。私は一瞬、呼吸が出来なくなった。望み通りの返答だというのに、私はあっけにとられていた。

「あ」と声がもれ、やっと我に返った。あわてて再び私も頭を下げて「こちらこそ！」と口走る。

すると藤本さんの笑い声が病室に響いた。

「そうですか、結婚ですか。あの子が」

驚きと嬉しさに溢れた声だ。顔を見ずとも、その表情は笑顔でいっぱいなんだ、と予想がつく。思わず、安堵のため息がもれた。よかった。藤本さん、喜んでくれている。私たちの結婚に賛成してくれている。心強い。頼もしい。

とりあえずは、第一関門は突破……かな。

ゆっくりと顔を上げると、やはり藤本さんの満面の笑みがあった。

「和幸はうまくプロポーズ出来ましたか？」
「プロポーズ、ですか？」

突然聞かれて戸惑いつつも、虹の橋の光景を思い浮かべる。トーキョーの煌く夜景を前に、彼は私の薬指に指輪をはめて唐突に言い放ったんだ。誕生日に結婚しよう、て。

「はい」私は照れ笑いを浮かべながらはっきりと答えた。「いきなりでしたけど」
「なんて言ったんですか？」
「え」

藤本さんは興味津々。子供のように目を輝かせて身を乗り出している。涙を流して横たわっていたあのときの暗く重苦しい雰囲気が嘘のようだ。爛々とする瞳には、野心の炎は影も形もなかった。そこにあるのは、果てしない愛。

つい、頬がほころんだ。いいお父さんだね、てあとで和幸くんに言おうと思った。

「私の誕生日に、結婚しようって言ってくれたんです」と私は恥ずかしさを捨てて堂々と口にした。
「誕生日にですか」

藤本さんはこぼれる笑みを止められないようで、ほくほくとしながら「あの子にしては気が利きますね」なんて冗談を口にする。私はつい噴出した。

「といっても、和幸くんはまだ十七歳ですから、結婚はもう少し先になると思いますけど」
「ああ、そうですね。わたしもうっかりしていました」

言って藤本さんは声を上げて笑った。喜びが全身から溢れている。オーラとなって目に見えるようだ。私の中にあった緊張や不安、すべての負の感情が藤本さんの笑みに吸い取られる。

そっか、これなんだ。この気持ちなんだ。二人の幸せを大切な人に祝福してもらう喜び。これを、あの人――長谷川さんは、愛する真紀さんに味わって欲しいんだ。しみじみとそう実感した。

「和幸は幸せものだ」笑い声が止んだと思ったら、いきなり藤本さんはそうつぶやいた。「神崎さんのような素直で優しいお嬢さんがお嫁さんで、本当に幸せものだ」

そう言われて、照れるより先に「いえ」という否定の言葉が出ていた。

「幸せものは、私のほうです」

目を丸くする藤本さんに、私はそれ以上なにも言わずに微笑んだ。すんなりとそんなセリフがでてきたのは、それが本心だからだ。

そういえば……と、目の前できょとんとしているおじいさん（というにはまだ早いかな）を見つめて思い返す。この藤本さんこそ、和幸くんと私を出会わせてくれた張本人だ。いわば、恋のキューピッドかな。藤本さんが彼に私に近づくよう命じてくれたから、私たちは仲良くなれた。その『おつかい』がなかったら、今頃どうなっていたんだろう。劇で顔を合わせるくらいだったかな。廊下ですれ違うくらいだったかな。

それとも――結局私たちは愛し合う関係になっていたんだろうか。

そんなことを考えてぼうっとしていると、藤本さんの真剣な声が聞こえてきた。

「どうか、二人で普通の幸せをつかんでください」

ハッと我に返って目を向けると、藤本さんがどこか切ない笑顔を浮かべていた。

「ありきたりでいい。平凡でいい。笑顔が絶えなければそれで十分ですから」

今にもどこかへ消え去ってしまうような、そんな笑顔だった。私は何も言葉がでずに藤本さんの言葉に聞き入っていた。

「元気な子供をつくって、三人で仲良く暮らしてください」

そう言って、藤本さんは視線を落とした。何かを思い出すようにじっと一点を見つめている。

子供なんて言われて一瞬動揺した。そこまで考えたことないし、考えると……頭がゆであがりそう。ただ、照れる状況ではない、と頭が冷静に判断した。藤本さんは真剣だ。本当に、心から私たちにそれを望んでいる。哀しげなその表情を見れば、一目瞭然。だから――

「約束します」言って、布団の上に置かれている藤本さんの手を取った。「必ず、幸せになります。ちゃんと子供も産んで、二人で守ります」

藤本さんの手は……思ってた以上にか細かった。

「だから安心してください、お義父さま」

冗談交じりにそう言って微笑むと、藤本さんもどこか照れくさそ

うに失笑した。

＊　＊　＊

それはカヤが藤本の手をそっと離したときだった。

「いやいや、これで安心して『勘当』できるというものです」

「かんどう？」

照れ隠しのようにぽろりとこぼした藤本の言葉はカヤの心に見事にひっかかった。

かんどう……思い当たる言葉といえば、感動か勘当だ。話の流れからいって、感動ではおかしい。それならば、勘当か。だが……と、カヤは眉をひそめる。

「勘当って、どういうことですか？」

ずばりと尋ねると、藤本はきょとんとして目をぱちくりとさせた。

「和幸か、曽良から聞きませんでしたか？」

「いえ……何も」

カヤの表情には困惑の色が見受けられる。まったく身に覚えのない話らしい。藤本は「参ったな」と苦笑した。カヤがこうして結婚の報告に来たのは『勘当』のことを聞いたからだと思っていた。礼儀正しいお嬢さんだ。最後に挨拶をせずにはいられなかったのだろう、と自然に納得していたのだ。だが、この様子だと『勘当』とは関係なしに話しに来たようだ。

「夕べ、和幸の卒業パーティをしたんですよね？」と藤本は遠慮が

ちに尋ねる。

カヤは「あ」と顔をこわばらせ、そしてぎこちなく微笑んだ。

「いろいろあってしてないんです」

していない？　藤本はぎょっとした。卒業パーティーのことは見舞いに来た曽良や砺波から聞いていた。二人とも、どうやって和幸を盛大におちょくろうかと張り切っていたものだ。それをしなかったとは何があったのだろうか。理由を尋ねようかとも思ったのだが、居心地悪そうなカヤの表情がそれを止めた。話したくないことだろう、と容易に想像がつく。

藤本はやんわりと笑みを浮かべ、「なるほど」とつぶやいた。

「『勘当』の件は曽良がパーティーであなた方に話す予定でした。そのパーティーがキャンセルされたのなら、知らなくて当然ですね」

そう話したところでカヤの不安が消えるわけはない。少女は依然として心配そうに柳眉を寄せていた。勘当……その言葉の意味を知らないわけはない。どういうことか予想はついているはずだ。知らなかったとはいえ、口を滑らせたことを藤本は後悔していた。いつか彼女はそれを聞くことになっていただろうが、誰の口からか、というのが重要だ。少なくとも、藤本が告げるべきことではなかった。

「すみません、神崎さん」と藤本は申し訳なさそうに眉間に皺を寄せる。「すぐにでも曽良か、もしくは和幸から話がいくでしょう。それまでは、聞かなかったことにしてください」

カヤは「え」と戸惑いの声を漏らし、そして黙り込んだ。納得いかなくて当然だ、と藤本は思った。聞かなかったことにしろ、なん

て無理な話だろう。だが、彼女なら……と考えてしまう自分がいる。ろくに知りも知ない――今となっては息子の婚約者だが――娘に、どうして自分はここまで期待してしまうのだろう。藤本はその得体の知れないカヤへの信頼感が不思議でならなかった。だが、悪い気はしない。見たことも無い神という存在を無条件に崇拝する信者はこんな気持ちなのかもしれない、と思った。

「分かりました」

ややあってから、藤本の予想通り、カヤは屈託の無い笑みを浮かべてそう言った。藤本はほっと肩を撫で下ろす。ただ、予想外だったのはそのあとの言葉。

「その代わり、と言っては難なんですけど……」

カヤは伏せ目がちにそうつぶやいた。意外な返しに藤本は目を瞬かせる。

「なんでしょうか？」と戸惑いつつも尋ねると、カヤはためらいがちに口を開いた。

「和幸くんと仲の良いカインの皆さんを紹介して頂きたいんです」

「……はい！？」

カインを紹介する？　これまた思ってもいなかったお願いだ。藤本が仰天して厚い瞼を目一杯持ち上げると、カヤは慌てた様子でとっさに補足する。

「紹介といっても、連絡先とか、どうやったら会えるかだけ教えていただければいいんです」

付け足された説明を聞いても、カヤの狙いがさっぱり分からない。藤本は混乱するだけだった。いぶかしげな表情を浮かべて「とは言われましても」とくぐもった声で言う。するとカヤは懇願するような瞳を浮かべて、早口で訴えはじめた。

「私、いつも和幸くんに守られてばかりなんです。いつもいつも、彼に迷惑かけて苦労をさせて……だから、私も彼のために何かしたいんです！　何かしなくちゃいけないんです！」

やはり話が見えない。藤本は何も言わずに眉をひそめた。つい先刻、にこやかに婚約発表をした少女とは思えない取り乱しようだ。

「それで」とカヤは身を乗り出してベッドに手をつく。「夕べ失敗した卒業パーティーを出来たらな、て思ったんです。今度は、ちゃんとカインの皆さんにも来てもらって」

その瞬間、藤本の表情が強張った。卒業パーティーをもう一度開くというのは一向に構わない。だが、カインを呼ぶ、ということに問題があった。そうか、それも曽良たちからは聞いてはいないか。いや、聞くはずもないか。藤本は重いため息をつくと、言いにくそうに顔をゆがめた。

「カインの兄弟は、おそらくパーティーには……」

「参加したくないんですよね。私と会うのが嫌だから」

「！」

少女はさらりと藤本のセリフを奪い取った。しかも、それが何でもないかのような口ぶりで。そこまで平気な顔で言える内容ではないはずなのだが。藤本はぎょっとして固まっていた。どう反応していいか分からなかった。

カヤは変わらず落ち着いた様子を維持して、冷たくも思えるくらいの凛とした口調で続ける。

「全部聞いています。カインの皆さんが私のことを嫌っていること。その理由も」

「知っているなら」と藤本はおずおずとつぶやいた。彼らとの接触は控えるべきだ、と言おうとしたが、カヤはそれを許さなかった。

「だからこそ、私が直接会って話したいんです」

鬼気迫る勢いで言われ、藤本は気圧された。カヤの目は真剣そのもの。もうただの純粋なお嬢様ではないのか、と藤本はのんきに思った。果たしてそれが和幸の影響なのか、他の要因があるのか。いずれにしろ、つい一週間前の彼女とはどこか変わっていた。

「このままじゃ……和幸くんの家族に嫌われたままじゃ、結婚なんてできません。和幸くんだって、皆から祝福されたいはずなんです。それに、家族はその人の一部だってある人に教えてもらったんです。だから、私も和幸くんの家族を知りたい。その一部になりたい。ならなきゃいけないんです」

そこまで言うと、カヤは藤本を睨みつけるように見つめ、張り詰めた表情を浮かべて言った。

「今度ばかりは、何もせずに嫌われたまま引き下がれないんです！」

藤本は呆気に取られた。一体、何が彼女をここまで熱くさせているのか。『ある人』がどうやら何かを吹き込んだようだが……分かることといえばそれくらいだ。とりあえず、彼女がどれだけ本気かは十分伝わってきた。思いつめた表情や射るような眼差し、熱のこ

もった口調から明らかだ。それに、引き下がれないと言うからには、カインを紹介しない限り帰らないのだろう。
　曇りの無い澄んだ瞳でしばらくじっと見つめられてから、藤本は観念してため息混じりに笑みをこぼす。

「そこまで言うのでしたら」そう言って深くうなずいた。「教えましょう」

　カヤの表情は一瞬にして晴れやかなものに変わった。「ありがとうございます」と言おうと口を開けたが、藤本の「ただし！」という力強い声に遮られる。

「曽良を連れて行くことが条件です」
「え」

　これっぽっちも予想していなかったのだろう。カヤは間の抜けた声を漏らした。
　藤本はどこか困ったような顔で鼻をかいて、カヤにある確認をする。

「カインの中で会ったことがあるのは和幸、曽良、砺波の三人ですよね」
「はい、そうです」

　それがなにか？　と言いたげな表情でカヤは小首を傾げた。一方で藤本は、そうだろうな、と心の中でつぶやく。そして言いにくそうに口を開いた。

「カインの『子供』たちはいい子ばかりです。皆、自慢の『子供』たちだ。ただ、ちょっと変わった『子供』もいる。初めて会ってま

ともに話すことすら難しい場合もあるでしょう」
「そんなに、変わってるんですか？」
みるみるうちにカヤの表情が曇っていくのが見てとれた。
だが、これでも藤本は事実をやんわりとオブラートに包んで話しているほうだ。本当は、カヤの知っているカイン――特に和幸がカインの中で特殊であって、ほかのカインは皆、相当の変り者だ。偶然カヤが、和幸繋がりでまともなカインとしか出会っていないだけ。
しかも、皆、カヤを嫌っている。暴力的な『子供』もいるのだ。カヤが一人で会いに行って無事に済むとも限らない。それに、藤本は知っていた――和幸をカヤの監視につけた頃から、「神崎カヤは黒幕の娘だ」という噂がカインノイエで広まり、未だにその悪い印象が消えていないことを。中には、今もその噂を信じて彼女に不信感を抱いている『子供』もいるだろう。だから余計に不安なのだ。
そこで曽良の出番だ。顔も広く、リーダー代理である彼なら、カヤをうまくサポートしてくれるはず。というより、カヤを護ってくれるはず。藤本はそう考えていた。
藤本は真剣なまなざしでカヤを見据えると、語調を強めて念を押す。
「いいですね？　曽良を必ず連れて行ってください」
カヤは妙な間をとりはしたが、にこりと微笑み「はい」と元気よく返事をした。

カインの花嫁　―２―

千葉県内、とある寂れた駅前。駅自体は大きく立派なのだが、周りは駅ビルもなく、あるのは駐車場とファストフード店だけ。その東口で、一台の赤い軽自動車が停まっていた。運転席には二十代後半のふくよかな女性。たった一つのシミさえ許さないかのような厚い化粧が顔を覆っている。彼女は名残惜しそうな瞳で助手席に座る少年を見つめて、念を押すように確認する。まるで初めておつかいを頼む母親のように。

「この駅から、夕べ話した通りに電車に乗れば、トーキョーに着くからね」

少年の視線はラジオへと向けられている。軽快なポップミュージックがさわがしいほどの音量で流れている。女はいらだったようなため息をつき、ラジオをきった。

「ユリィくん？　話を聞いてくれるかな」

いきなり静まり返った車内に、女性の金切り声が響いた。
パーマがかった茶色い短髪を揺らし、ユリィは女へ振り返る。くりっとした茶色い瞳が女性を射抜いた。その目には不思議な魅力がある。見つめられているだけで、すべてを見透かされているような錯覚に陥ってしまう。そう、たとえ服を着ていても裸を見られているような、そんな錯覚――女は身震いして頬を赤く染めた。

「『お持ち帰り』してくれて、ありがとう。あと、地図とかいろいろありがとう」

ユリィはじっと女を見つめたまま、薄い唇を小さくもごもごと動かした。まるで最低限のエネルギーで済ませたいかのような動きだ。

「本当にもうお店に戻っては来ないの？」

女は諦めたようなため息をつき、そう尋ねた。ユリィは表情を一切変えることなく、唇だけ器用に動かす。

「夕べだけ、て約束だったから。とにかく、トーキョーに行くお金が欲しかっただけだし。あと旅費」

「そんなことのために、一晩だけホストをやったのよね」言うと、女は呆れた笑顔を浮かべる。「まったく……どうやって、お店に許可もらったのかしら。短期バイトで選ぶ仕事じゃないでしょうに」

「人と話すだけでお金いっぱいらもらえた。いい仕事」

相変わらずの、のんびりとした話し方。幼い子供のような舌足らずなしゃべり方。これが母性本能をくすぐるためのテクニックならば、大成功だ。ただ、女は確信していた。彼は何も創ってはいない、と。すべて彼の素なのだ――年齢を除いて、だが。おそらくは、ホストクラブの要望だったのだろう。本人は二十二歳だと言い張っていた。色気があるのはその瞳くらいで、他は――見た目も行動も――すべてが彼を十代の少年であることを示している。サバを読んでいることは明らかだった。

おかげで、『お持ち帰り』したところで何もできなかった。家に連れ帰ると、テレビゲームに興味を示し、一晩中遊んでいた。自分に弟がいたなら、こんな感じだったのだろう、とゲームに熱中する彼を見て女は思った。

結果的には本来の目的は果たせなかったが、彼と一緒にいるだけで不思議と癒されて心が和らいだ。もしかしたら、自分が必要としていたのはまさにこんな時間だったのではないか、とさえ思えた。

「また、会えるかな」

ユリィが助手席のドアを開け、車から降りようかというとき、女はぽつりと寂しげにつぶやいた。ユリィはぴたりと動きを止めると、振り返りもせずに答える。

「うん。もし、世界が滅びなければ」

「え？」

その声は、二十二歳といってもおかしくはないほど、大人びていた。

きょとんとする女を車内に残し、ユリィは車から降りた。じゃりっと靴の裏で小石が悲鳴をあげる。

「そのために、ここに来た。オレは、神を試す」

静かに車のドアを閉め、ユリィは駅へと一歩足を踏み出した。

＊　＊　＊

電話の回数、二十五。その内、怒鳴られて切られた回数、十。無言で切られた回数、二。つながらなかった回数、三。なんとか、待ち合わせができたのは……たったの四人。

期待はしていなかった。努力が必要だろう、とは思っていた。だから、まずは四人のカインと仲直りをするところから始めればいい。焦らなくていい。大丈夫、きっとうまくいく。話せば分かってくれる。砺波ちゃんだって言っていたじゃない。私は、試していないだけだ、て。

そうやって自分を励ましながら、最初の待ち合わせ場所――白亜女子医科大学の正門に立っていた。一人目のカインは、ここの大学に通っているアリサさん。二十歳の女子大生。

「……アリサさん、か」

カインの中には変わり者もいる、と藤本さんは言っていたけど……一体、アリサさんはどんな人なんだろうか。アリサさんも変わり者なのかな。それとも、和幸くんみたいに優しいカイン？

緊張で乱れる呼吸をなんとか落ち着かせて待っていると、そこに一人の女性が現れた。

自信に満ちた笑みを浮かべてキャンパスから出てきたその女性は、きらびやかな輝きを放ち、周りの景色をモノクロに変えてしまう――それほど、美しい女性。

赤いカチューシャが映える漆黒の髪は真っ直ぐに胸まで伸びている。白いブラウスにリボンのついた紺のスカート。見るからにお嬢さまだ。目鼻立ちがはっきりとしていて、ふっくらとした唇は女の私から見ても官能的だと思えた。切れ長の目には茶色いアイシャドウ、頬骨のあたりにはオレンジ色のチーク。眉尻までしっかりと形が整えられている山を描く眉。女優さんかと思うほどの美しさで、私は息を呑んだ。

「神崎カヤさん？」と女性は、私の前で立ち止まると鈴を転がすような声で尋ねてきた。

私はハッと我に返って、慌てて「初めまして」と頭を下げる。

この人が、アリサさん。そう思うと、心臓の鼓動がみるみるうちに早くなっていった。

私はおずおずと顔をあげて、アリサさんを食い入るように見つめる。とてもじゃないけど……裏世界の殺し屋には見えない。スポッ

トライトをあびてキャットウォークを颯爽と歩いているほうがずっと似合う。
つい見入って、言葉を発するのを忘れていると……アリサさんは「ふーん」と瑞々しい唇をすぼめた。そして、まじまじと私を見つめ、
「あなたが私のかわいい弟を穢してくれたクソ女」
「！」
一瞬にして、アリサさんの表情が険しくなった。私はぎょっとして後ずさった。さっきまでの気品に満ち溢れた女性はどこにいったのだろうか。整った眉はつり上がり、瞳には黒い炎がくすぶっているように見える。
「てゆーか、なに？」とくぐもった声でアリサさんはつぶやいた。
「意外と超絶美女……」
「え……あの？」
ぐいっと顔を寄せられて、私は思わず後ずさる。苺のような甘い香りがただよってきた。
アリサさんはその秀麗な顔立ちには似合わない脅すような低い声で、さらに言葉を並べる。
「つまり、和幸は見た目で落ちたわけ？　ありえないわよ。あの子は見た目で女を選ばない。だって、それなら、私にすがりついて僕（しもべ）になっているはずですもの」
「はい！？」
思わず私は眉をひそめていた。し、しもべって……僕って言った、今！？

アリサさんは私の声に眉一つ動かさない。無視、というよりも、聞こえていないみたいだ。どうやら、アリサさんは私に話しているようで、そうじゃない。これは独り言なんだ。
アリサさんは何か苦いものでも食べたかのように顔をしかめて、ぶつぶつと早口でひとりごちる。

「私はカイン一の美女。カインだったら一度は私に恋をするっていわれてるのよ？　なのに、和幸は私の誘惑をはねのけた。つまり、天然記念物ものの純粋男子。いえ、ツチノコ並みの珍生物。いつかは私が調教して立派な豚野郎にしようと思っていたのに、どうして……」
「ちょ、調教？　ぶたやろう？」
「あの子には痺れるような素質を感じていたの。きっと大物になる。最高の豚野郎になってくれるってずっと目をつけていたのに」
「あの……」
「それがいきなり、変な女の飼い犬に成り下がるって聞いて、どうして豚よりも犬の道を選んだのか、私には分からなくて……。家畜よりもペットがよかったのかしら。でも、私なら豚でもペットにできるわ。豚ってかわいらしいもの。ああ、どうしてかしら……どうして、あの子は私じゃなくてこんな小娘を……」

アリサさんの話が、まったく分からない。唖然としていると、アリサさんはやっと私から目をそらして頭を抱えた。憂いに満ちた表情を浮かべるその様は、今にも倒れてしまいそうなか弱いお嬢さまにしか見えない。
私は、カインの皆さんと仲良くなろう、という目的をすっかり忘れて、ただ呆然としていた。
しばらく考え込んで、アリサさんはハッと目を見開いた。そして、勢いよく私の両肩をつかむと緊迫した表情で迫ってきた。

「あなた、さてはとんでもない調教テクニックをお持ちなのね！？」
「何の話ですか！？」
どうしよう。仲良くなるどころか、会話が……できない。

アリサさんとは結局、有意義な会話はできなかった。次の待ち合わせもあるから、とりあえず無理やり別れて……駅前のゲームセンターに来ていた。
私の隣には、もう十二月も近いのに、タンクトップ姿の元気な高校生が立っている。久徳（ひさのり）くん、十六才。この辺の工業高校に通っているカインだ。坊主頭に鼻ピアス。明らかに鍛えていそうながっちりとした体格。細長い目はつりあがり、ごつごつとした印象の顔。一見、恐そうな彼は、和幸くんの弟分らしいのだが……失礼かもしれないけど、和幸くんよりずっと年上に見える。
そんなことを彼の横顔を見つめてぼうっと考えていると、
「ばっか！　いきすぎだよ！　なにやってんだよ！？」
「あ、ごめんなさい！」

私は思わずボタンから手を離して後ずさった。すると、「ああっ！」と久徳くんはガラスに顔をなすりつけるようにして、ＵＦＯキャッチャーを覗き込む。
私がぼうっとしていたせいで端っこのほうまで進んでしまったクレーンが、何もないスペースへ虚しく降りていく。どうせ何も取れはしないのに、アームは律儀に最後まで手順を踏む。私たちの目の前に、何も掴んでいないクレーンがなめらかな動きで戻ってくる。
久徳くんは悔しそうに体を震わせている。それが横目で見えた。恐くて、振り返れない……。

「俺のにゃんちょび……」と、弱弱しい声が聞こえてくる。
「ご、ごめんなさい」

ＵＦＯキャッチャーの中では、にゃんちょびと呼ばれるかわいらしい猫のぬいぐるみが並んでいる。目が大きくてキラキラして、幼い女の子みたいだ。ううん、もしかして女の子なのかな？　女の子に猫みたいな耳と尻尾が生えている？　それとも、猫の顔が人間……人面猫？　私は無意識ににゃんちょびを見つめて首を傾げていた。

私は今までその名前すら聞いたこともなかったのだが、久徳くんの話だと一部で流行っているらしい。

「いいか、神崎カヤ！」と百八十センチはあるかという長身の高校生が声を荒げる。「にゃんちょび一個で会話一往復だ」

私は久徳くんを見上げて苦笑するしかできなかった。そう、これが彼の提示した条件。にゃんちょびの数だけ、彼と話ができるというルールだ。でも……私は、ゲームセンターに来たのもこれが初めて。ＵＦＯキャッチャーなんて今まで触ったこともなかった。一つ取れる気すらしない。

「ほら、早く。次の待ち合わせまでに、俺と話したいんだろ？」

高圧的にも聞こえるセリフだが、その表情は駄々をこねる子供みたいだ。坊主頭と鼻ピアスが浮いている。

私は財布から四百円を取り出すと、慣れた手つきで機械に飲み込ませていった。

「和幸兄ちゃんは、一発で取ってくれたんだ」
「！」

彼はかろうじて聞こえるくらいの小声でぽつりとつぶやいた。

それから三十分の死闘の末、にゃんちょびを三匹（三人？）獲得。でも……話にならなかった。三往復の会話で一体何が話せるの？もしかしたら、最初から彼は私と話す気はなかったのかもしれない。ただ、にゃんちょびが欲しかっただけなのかも。

私は深いため息をついた。そのときだった。

「神崎カヤか」

ハッとして振り返ると、学ランを着た少年がゆっくりと歩いてくるところだった。こちらへ――正門へと向かってくる。

ぱっちりとしたつり目。きめ細やかな白い肌。染めてずいぶん経つのだろうか、毛先のあたりだけ茶色い短い髪。百六十センチあるかないかの小柄な体。女の子みたいにかわいらしい男の子だ。

「留王（るおう）……くん？」

遠慮がちに尋ねると、彼は無表情で頷いた。

三人目のカイン、留王くん。中学三年生。中学時代の、和幸くんの後輩らしい。つまり、ここの中学に彼も通っていたんだ。私はちらりと留王くんが出てきた校舎を見つめる。ここが彼の母校……そう思うと、校舎が見れただけで嬉しくなって頬がゆるむ。

「話はなんだ？」

ズボンのポケットに両手をつっこんで、留王くんは唐突にそう言った。私はハッとして彼に振り返る。

「あ、ごめんなさい！」
「用件は？　時間をつくってやったんだ。早くしろ」
声変わりがしていないかのような、高い声。攻撃的な口調だけど、そのせいで可愛くも聞こえてしまう。って、そんなこと考えてる場合じゃない！　留王くんの言う通りだ。せっかくこうして会ってくれたんだから、早く本題に入らないと。
「和幸くんの卒業パーティーをしたいと思っているんです。だから、留王くんにも来て欲しくて」
留王くんの表情が曇った。狐のように鋭い目をこちらに向けてくる。
「曽良の馬鹿にもう言ったと思ったんだが」
「え」
曽良の馬鹿……？　あれ。留王くんって年下なんじゃ？
「卒業パーティーには行かない。理由は、あんたが気に入らないからだ。てか、夕べやったんじゃないのかよ」
ずきっと胸が痛んだ。分かってはいたけど……やっぱり、こうして直接言われると、ちょっときついな。でも、落ち込むために来たんじゃないんだ。私はごくりと唾を飲み込み、真剣な表情で留王くんを見つめる。
「夕べ、中止になったの。だから、いつかやり直したくて」
「日にちが変わろうが同じだ。あんたが居るなら俺はいかない。媚

を売られたって俺はあんたを好きにはならない」

私はぎゅっと紙袋の取っ手を掴む。砺波ちゃんから受け取った、和幸くんの荷物――ｍａｃａｒｏｎの紙袋。

「媚は売りません！」と私は叫んでいた。「チャンスが欲しいだけです」

「チャンス？」留王くんは嘲笑のようなものを浮かべて私を睨みつけてきた。「カインノイエを潰すチャンスかよ？」

「え？」

カインノイエを潰す……？

「何の話？」

「とぼけるなよ。黒幕の娘」

「！」

ドクン、と心臓が大きく揺れた。重い石が胸に落ちてきたかのような衝撃。一瞬、呼吸が止まった。

「お前の狙いは分かってる。和幸の馬鹿に取り入って、カインノイエを探ること。そうだろ？」

留王くんは視線を一ミリたりとも動かさずに私を凝視していた。中学生とは思えないような、冷酷な声。私のことを微塵も信用していない――それが、はっきりと伝わってきた。

否定すればいいのに、私は言葉が出なかった。この小柄な少年に怯えていた。

「和幸や曽良の馬鹿が騙されても、俺は騙されない」言って、留王

くんは一歩私に近づいた。「次に俺の前に現れたら、殺すからな。神崎カヤ」

「！」

私は……絶句した。中学生の言葉に、背筋が凍った。ただの言葉なのに、今にも殺されるんじゃないか、と思った。殺気というものがあるとしたら、きっとこれだ。今、留王くんから放たれているプレッシャー。きっとこれを殺気というんだ。

でも、ここで怖気づいたら何も変わらない。私は恐怖心を振り払うかのようにぎゅっと拳を握り締め、大きく息を吸った。

「私は黒幕の娘じゃない！　和幸くんの恋人――」

「違う！　お前は黒幕の娘だ！」

留王くんは有無を言わさず、はっきりと断言した。私の言い分を聞こうという気はさらさらないようだ。もしかして、彼がこうして私と会ったのは、ただ念を押すため？　近づくなって脅すため？

「和幸の恋人気取りはやめろ。利用してるだけなんだろ」

「……」

恋人気取り？　利用？　そんな風に思われてるの？　愕然としていると、留王くんは呆れたように首を横に振る。

「慣れ慣れしく連絡してきやがって。これじゃなんのために『勘当』したんだか」

勘当……さっき、藤本さんが言っていたこと？　ハッとして留王くんを見つめたときには、彼は背を向けて歩き出していた。

待って、話は終わってない――喉まできたその言葉を、口にする

勇気が出なかった。

「じゃあな」

留王くんははき捨てるようにそう言って、校舎へ向かって歩いていく。

残された私は、呆然と立ち尽くした。動けなかった。哀しいんじゃない。絶望しているわけでもない。どうしようもない憤りを感じていた。

私を黒幕の娘だ、と疑うことは構わない。神崎の両親が黒幕だったかどうかはまだ闇の中。どちらにしろ、証拠はない。疑惑が晴れていなくて当然だ。ただ……ただ――！

まだ弱い自分が消えてくれない。しつこく心の闇に隠れている。手が震えて、涙が浮かんできた。

「私は、和幸くんの恋人だよ……」

彼への気持ちを否定されることだけは、どうしても嫌だった。許せなかった。

私はしばらく気持ちが落ち着くのを待って、それから歩き出した。へこたれてる場合じゃないんだ。あと一人……カインとの待ち合わせがある。

何があっても、何を言われても、諦めたくない。なんとか、一人でもいい、彼の家族と分かり合いたいんだ。私が本当に、心の底から彼のことが好きだって、分かってもらいたいんだ。

どこか、私は意地になっていた。カインに認めてもらえなきゃ、彼への愛が証明できない――そんな思いさえ抱き始めていた。

カインの花嫁　―３―

「もっしもーし。はいはい。そのことだと思ったよ」

平日のランチタイム。ファミレスには大学生やＯＬの姿が目立つ。その中で学ランを着て陽気な声を響かせる少年がいた。アヒル口が楽しげに横に縦にと忙しく動いている。彼と向かいに座る少女はさっきから何度も何度もかかってくる少年の携帯電話にうんざりしていた。すねた猫のような表情で少年をじっと見つめている。せっかく昼休みにこうして抜け出してきたというのに、初デートは少年の携帯電話でぶちこわしだ。

苛立ちながら、赤なのか紫なのか緑なのかもよく分からない、濁ったどす黒いドリンクにストローを差し込む。

「これ、飲めると？」と少女がつぶやくと、少年はタイミングよく携帯電話を切った。

「飲めるものを混ぜたんだから、大丈夫だよ」

「そういう問題っちゃろか」

不満そうに少女は口をとがらせる。

砺波という少女に紹介してもらった男は、確かに聞いてた通り格好良かった。顔もスタイルも身長も、まさに理想的。学ランのせいでまだ二の腕は確認できていないが、それでも他の要素は合格点以上だから構わない。性格も良さそうだし、絶対物にしてやる――彼女はやる気に満ち溢れていた。出会って五分、彼の携帯電話があまりに騒がしいことに気づくまでは。

「それで」と少年は微笑みつつ、身を乗り出した。携帯電話をテーブルの上に置いて。「葵上（あおいのうえ）はどこの高校なの？」

「なに、あおいのうえって……」
「光源氏の妻だよ。葵上」
嬉しそうに答える少年に、少女――葵はぽかんとした。だから、何だ？　と思った。まさか、ニックネームだろうか。普通に、葵、と呼んだほうが早いのではないか。
まあ、いい。葵は「好きに呼んで」とため息混じりにつぶやき、彼の携帯電話を睨みつける。
「なあ、曽良くん。しばらく、ケータイ切ってくれん？」
少年――曽良はぱちくりと目を瞬かせた。
「なんで？　電磁波、気にしてるの？」
「そういうことやないと！　せっかくデートしとうのに、さっきから……」
電話が鳴りっぱなしで話ができてないやん！　という葵の言葉はまた遮られた。曽良の携帯電話がまた鳴り出したのだ。呆れたように首を横に振り、葵は立ち上がる。
「ああ、もういいわ！　無し無し」
「あれ、帰るの？」
曽良は携帯電話を手にしつつ、目を丸くして葵に声をかけた。その間も、携帯電話は曽良の注意をひくためにうるさく音楽を鳴らしている。
「その曲、うんざりなのよ！」と葵は曽良に怒鳴りつけた。「悪いけど、砺波に伝えてくれる？　やっぱ、あたしは諦めないわ。あん

たとのデートがうまくいかなかったんだから、バイト辞めるのも取り消し！」
「あら」
「あたしは欲しいものは奪い取ってでも手に入れるの！　九州女、馬鹿にするんじゃないわよ」

その細い体のどこからその怒号は出ているのだろうか。葵の啖呵は気持ちのいいほど、レストランに響き渡った。
言ってやった、と言わんばかりの清清しい表情を浮かべ、葵は曽良に背を向けて去っていく。相当頭に来ていたのか、振り返る素振りすら見せずにさっさと店から出て行った。

「馬鹿にしたつもりはなかったんだけどなぁ」彼女の背中を見送って、曽良は微笑を浮かべる。「にしても、欲しいものは奪い取るか」

いいこと聞いた、とつぶやくと、携帯電話を耳にあてる。アヒル口をぱかっと開くと、開口一番「もっしもーし。神崎カヤ対策委員会ですが」と冗談交じりに尋ねた。

「ふざけてないよぉ。こっちはおかげさまでフラれちゃったんだからね、ティコ」

＊　＊　＊

私、何してるんだろう。まだ三人にしか会っていないのに、この疲労感。根性無いのかな、私。
ブランコに腰を下ろして大きくため息をつく。幼い子供を連れたママさんたちが砂場の周りで何やら話している。ベンチにはサンドウィッチを食べているＯＬらしき女性。住宅街にある小さな公園で、ブレザーの制服姿の私は一人浮いていた。

公園の時計は十二時半を指している。そろそろ、四人目のカインが来るはずなんだけど。

「神崎カヤさんですね？」

いきなり背後から声がした。鼻にかかった可愛らしい声。とっさにブランコから腰を上げてはじかれたように振り返る。

「初めまして！」と顔を確認するよりも先に頭を下げた。

すると、「挨拶は結構です。用件はなんですか」と冷静な声色が聞こえて、じりじりと砂を踏む足音が近づいてくる。

私は顔を上げると、「すみません」と反射的に謝っていた。

目の前に立っていたのは、白いブレザーの制服を着た少女。お団子にした後ろ髪を頭にのせ、つるっとしたおでこが太陽の光を反射している。前髪は？　とよくよく見れば、ばってんにクロスさせた黒いピンが頭のてっぺんで前髪を止めている。留王くんよりもちょっと背の低い、砺波ちゃんよりも童顔の女の子だ。卵のような輪郭。メイクはしていないはずなのに、おしろいでも塗ったかのように白い肌。頬はどことなく桃色に染まっている。緑色のフレームのメガネの奥には、ぱっちりとした二重の大きな瞳。

かわいい――思わず、胸がきゅんとしてしまった。

「謝罪も興味ないんです。用件はなんですか」

ただ、その見た目に似合わず、口調は大人びている。

「茶々……さん？」

ここに来て私の名前を呼んだのだから、本人には間違いないんだ

ろうけど、私は念のために名前を確認する。
ぴくりと細い眉毛が動いた。お団子頭の少女は私を睨みつけるように、二重の目を薄める。
「藤本茶々です。初めまして。これでご満足いただけました？」
不満いっぱいの表情だ。めんどうくさそうに顔をしかめている。
私は苦笑して「はい」と頷いた。
「ご用件は？」
「あ。そうですよね」一つ年下って聞いたんだけど、なんだろう、この風格？　大人っぽい、の一言じゃ済まされない気がする。戸惑いつつも、私は本題に入る。「和幸くんの卒業パーティーをしたいんです。それで、よかったら茶々さんにも来て頂きたくて」
「あなたが主催ですか？　行きません」
そ、即答。私はついたじろいでしまった。断られるのを分かってて誘っているのに。ほんっとに……嫌になるほど、私は弱い。そんな自分を変えたくて、こうしてカインに会ってるのに。そうだ、ここで引いちゃだめなんだ。いくら断られたって、何度だって説得する。
「私、カインの皆さんとお知り合いになりたいな、と思いまして」と微笑みかけると、茶々さんは無表情ですぐさま答える。
「その必要はありません」
また、即答。考えようという気持ちすらないみたいだ。
「でも、私は……」
「あなたがどう考えようが知りません。迷惑です。皆、困惑してい

ます。やめてください」

やめてくださいって言われても……。私は懇願するように茶々さんをじっと見つめて力強く言う。

「でも、話くらいさせていただきたくて」

「その必要はありません」

「必要、あるんです」

「ありません。私たちの連絡先と居場所、和幸兄さんから聞き出したんですか？」

やっと茶々さんの声に感情が出てきた。でもそれは、強い怒り。私が期待していたものとは程遠い。そしてその怒りは、どうやら私でなく和幸くんに向けられているようだった。私は慌てて首を横に振って訂正する。

「違います。藤本さんにお聞きしたんです」

言うと、茶々さんは二重が見えなくなるほど目を見開いた。

「父をもたぶらかしたんですか、あなたは。守備範囲が広いですね」

「たぶらかしてなんか……！」

どうしてそんな受け取り方をするの？　私は耳を疑った。藤本さんを私がたぶらかしたなんて……どこからそんな考え方がでてくるの？　私は……一体、どんな人間だと思われてるの？　私、何かした？　和幸くんを利用してるとか、カインノイエを潰すとか、今度は藤本さんをたぶらかしてる？

「私は……和幸くんのことが好きなだけです」

擦れた声でそうつぶやいた。茶々さんが器用に片方の眉毛だけをぴくりと動かしたのが分かった。そして、その小さな唇は意外な言葉を発する。

「私たちもです」

「！」

公園が、静まり返ったかと思った。遊んでいたはずの子供たちが一瞬にして消え去ったかと思った。肩の力が一気に抜けた。ついさっきまで確かに心に突き刺さっていたはずのトゲが、どこかに飛んでいった。

そうだ。そうだった。彼のことを想ってるのは、私だけじゃないんだ。

「茶々さん」と弱々しい声で言って、うつむく。「あの……」

そのときだった。背後から、思いもよらない声が飛んできた。

「カーヤ！」

＊　＊　＊

カヤがハッとして振り返ると、アヒル口を大きく開けて駆けてくる学ランの少年の姿があった。傍らに赤いスクーターを連れて。

「曽良くん！？　どうして、ここに？」

カヤは驚愕した表情を浮かべて、スクーターをひいてくる曽良を迎える。

「なんでだと思う？」呆れたような声で言って、曽良はスクーターを停めてそれによりかかる。「心当たりあるはずだけど」

言われてハッとした。カヤの脳裏に藤本の言葉が蘇る。

――いいですね？　曽良を必ず連れて行ってください。

忘れたわけではなかった。わざと曽良に連絡しなかったのだ。どうしても、カヤは自分一人で成し遂げたかった。曽良の力を借りるのも嫌だった。だから、曽良には告げずに一人でカインに連絡して、待ち合わせ場所にも一人で向かった。

心優しい藤本のこと。心配して曽良に連絡をいれたのかもしれない。うまくいっているかどうかを確かめるために。きっと、驚いたことだろう。曽良は自分とは一緒に居なかったのだから。それどころか、自分がカインに挨拶回りをしていることさえ知らなかったはず。これで信用を失ってしまったな。そう思うと、カヤの気が沈んだ。

「藤本さんから、聞いたんだ？」

申し訳なさそうにそう尋ねると、意外にも、曽良は「へ？」ととぼけた声を出す。

「父さん？　なんで？」

「曽良兄さんをここに呼び出したのは私です」

高い周波数で放たれたその声は、カヤの背後から聞こえてきた。

「茶々さんが？」と振り返るや否や、今度は曽良が口を挟む。

「てか、苦情はカインの皆から来てるんだけどね」

カヤは忙しく顔の向きをまた曽良のほうへ戻す。曽良は肩をすくめて歯を見せて微笑んだ。同情しているような笑顔だ。

「皆さんから、苦情？」

「神崎カヤがしつこく連絡してくるから、どうにかしろってさ。新聞の押し売りでもはじめたのかと思ったよ」

嫌味の無い曽良の冗談に、カヤは顔を赤くする。そんな連絡が曽良のもとに寄せられていたのかと思うと、恥ずかしくてたまらない。それも、皆から。

「だから、言ったでしょう。迷惑だ、て」

メガネをくいっと上げながら冷静にそうつぶやくと、茶々はカヤの横を通り過ぎて曽良の前に立ちはだかる。

「曽良兄さん、あとはよろしくお願いします。リーダーはあなたなんですから。これ以上、カインの皆が混乱することのないようにうまく処理してください」

「……はーい」

赤面してうつむくカヤをちらりと見やって、茶々は何も言わずに去っていった。曽良はその背中を見送りながら、微笑を浮かべて音を立てずにため息をつく。

「まじめだよねぇ。ティコは」

「ティコ？」

頬を赤らませたまま、カヤは顔を上げて曽良を見つめた。タイミングよく曽良も振り返り、二人は視線を交える。

「茶々のあだ名だよ」言って、スクーターから体を離してカヤの元へと歩み寄る。「で？　どういうことなの？　カインノイエのリーダー代理としては、事情聴取をしなきゃいけないんだけど」

曽良は透明の手帳を開いて、そこにペンで書き込むような素振りを見せた。カヤは、相変わらずだな、と思いつつ、その優しさに救われた。心の角が削がれて丸くなったような気がした。

二人は並んでブランコに座った。子供の安全のためにできる限り地面に近く調節されたブランコは、とてもじゃないが漕ぎにくい。できることといえば、足を地面につけたままゆらゆらと揺れることくらいだ。

「和幸くんのために、何かしたかったんだ」

鉄のチェーンに頭をあてると、血のような匂いが漂ってきた。握っている手にも、この匂いは染み付いているに違いは無い。

「それで考え付いたのが、兄弟との交流ってわけ？」

曽良の言葉に、カヤは照れ笑いを浮かべる。そう言われると、変な話だ。だが、その通り。和幸のために何かしたい。そう思ったとき、頭によぎったのは正義の言葉だったのだ。

――どんな家族であれ、俺の大事な家族なんだ。俺の一部なんだ。だから……真紀にも、その一部になってほしいと思う。

もちろん、正義が和幸とは別人とは分かっているし、あの言葉を

和幸のものだと考えたわけではない。二人が同じ人間だと思うことは和幸を裏切るようなものだ。ただ、彼の言い分は一理ある、と思った。確かに、家族はその人の一部。結婚とは、その家族の一員になること。

「私も、藤本家に入りたかったの。和幸くんのためにも」

殺し屋だろうがなんだろうが、カインは和幸の家族。彼らに嫌われたまま結婚しても、自分も、そしてきっと和幸だっていい気分ではないだろう。彼の未来の妻として、完璧な『嫁入り』をしたかったのだ。彼の兄弟と仲良くなれれば、和幸も喜んでくれるはず。そう思った。

「でも、うまくいかなかった」

悲しそうに微笑んで、隣のブランコに座る曽良に視線を送る。曽良は、そうみたいだね、と苦笑した。カヤに対する苦情はすべてリーダー（代理）である彼のもとへ行き着いたのだ。うまくいかなかったことは彼が一番よく分かっている。

「話がしたかったんだけど、話を聞いてもらうこと自体が難しいみたい」

足元の地面は、何度も何度も蹴られて他の土よりも色が濃くなっている。これが人間の体だったら、痛々しい擦り傷といったところか。カヤはそんなことを考えながら、足で回りから砂を運んで、慰め程度だが、傷を隠しはじめた。

「だろうねぇ」言いながら、曽良はぴんと張っていた足を地面から浮かせた。ブランコが小さな弧を描いて揺れる。「まずは話を聞か

せないと」
「でも、電話もろくにできなかったし」
すっかりカヤは弱気になっていた。和幸のために一人ででも何かできるところを見せたかったのだが……選んだ課題は思っていたより難易度が高かったようだ。
しょんぼりしているカヤを横目に、曽良は「よっ」と言ってブランコから飛び降りる。
「組織を崩すには頭を倒さなきゃ」
「え？」
足元に影が伸び、カヤは顔を上げた。気づけば、曽良が太陽を遮って自分の前に立ちはだかっている。
「頭って」と、カヤは困惑した表情を浮かべた。曽良が暗示していることは分かる。組織とはカインノイエのことだろう。だが、その頭というと……「曽良くんじゃないの？」
曽良はアヒル口を台形に開いて、屈託の無い笑みを浮かべる。
「公式には、ね。でも、俺よりももーっと恐い人がいるんだよね。いわゆる、裏番長？」
「裏番長？」
小首を傾げて尋ねるカヤに、曽良は腰に手をあてがって自慢げに頷く。
「あの人に直接対決すれば、一番いいかも」
「あの人？」

「鶴の一声ってやつかな。あの人を味方につければ一発だよ」

しつこいくらいにもったいぶる曽良に、カヤは好奇心旺盛の子供のような瞳を向ける。

「それって、誰？」

「シーズンだよ」

「し、しーずん？」

一風変わった名前だ。間違いなく、曽良のつけたニックネームだろう。一体、元の名前はなんだろうか。不思議そうにしているカヤに、曽良は不敵な笑みを浮かべた。

「そ。静流（しずる）お姉さま。あの人が言えば、みーんな、文句なくカーヤの話を聞くよ」

「しずる……さん？　でも、藤本さんからそんな名前のカイン、紹介されなかったけど……」

尋ねられ、曽良は表情を曇らせる。嫌な記憶を思い出したかのように、顔色を悪くした。

「いやぁ、それは多分……父さんもさすがに危険だと思ったんじゃないかなぁ」

「き、危険？」

「いろいろ無茶苦茶な人だから。ま、それだけ他のカインへの影響力もあるってことだけどね」

「影響力……！」

カヤが勢いよく立ち上がると、ブランコのチェーンが鈍い金属音を発した。

「じゃあ、ほんとに、その人に認めてもらえれば……」
「うん。ばっちり、カインに嫁入りできるよ」

カヤの表情がみるみるうちに晴れやかになっていく。それに反比例して、曽良の表情は曇っていった。それを隠すように、曽良はふいとそっぽをむく。怪しまれないように、と声だけは明るく取り繕った。

「じゃ、今からシーズンのところに行こっか」

くるりと踵を返してスクーターへと向かう曽良だったが、後ろからついてくる気配がなくて「あら」と振り返った。思ったとおり、カヤは浮かない表情で立ち尽くしている。さっきまでの希望に満ちた表情はどこにいったのだろうか。

「どうしたの、カーヤ？」

歌でも歌うかのように抑揚をつけてそう尋ねると、カヤは言いにくそうな表情を浮かべ、ゆっくりと曽良に歩み寄ってきた。

「住所、教えて？」
「は？」
「そしたら、私……一人で行けるから」

曽良を安心させようとしているのか、その笑顔は落ち着き払っていた。悟りを開いた僧侶のような眼差し。覚悟はもう決まっているから――そう言われているようだった。
曽良は渋い表情でため息をつき、腕を組んだ。

「どうしても？」
「うん。どうしても。一人でやらないと、意味がないんだ」
頬を赤らめて恥ずかしそうにそう言った彼女を、曽良は寂しげな視線で見つめた。もう、隠そうとも思わなかった。隠さなくても彼女は気づかないだろう、と思った。彼女の頭の中は、和幸でいっぱいだ。今、自分に見せている笑顔も、和幸へ向けているに違いなかった。ここにいる自分ではなく、どこかにいる彼女の恋人へ。
それでも、彼女を愛おしく思っている自分がいることに、曽良ははっきりと自覚していた。
「分かったよ」諦めたような声で、曽良はそう答えた。

カインの花嫁　―４―（前書き）

多少ですが、暴力的な言葉、行為があります。苦手な方はご注意ください。

カインの花嫁　―４―

私はとある駅前のマンションに来ていた。オートロックもない、エレベーターもない簡素なマンション。その三階、三つあるドアの真ん中の前で立っている。濃い緑色のドアがまるで金庫のドアのように強固に見える。

震える手をインターフォンに伸ばすと、ごくりと唾を飲み込んでボタンを押した。ネームプレートには何も書かれていないが、誰が住んでいるかは分かっている。といっても、名前と性別と、この人が裏社会の殺し屋だということくらいだけど。

しばらくすると、ガチャガチャと鍵を開けるような音が響いてきた。その瞬間、私の背筋はぴんと伸びる。今日、五人目のカイン（曽良くんもいれれば六人目だけど）。今までで一番緊張していた。リーダー代理である曽良くんが、裏番長と呼ぶカイン――静流さん。

緑色のドアがゆっくりと開いていく。緊張のあまり、出てきた人を確認する前に、私は頭を下げて大声を上げていた。

「初めまして！　神崎カヤです！」

そういえば、同じ失敗を茶々さんのときもしたっけ。

確かに、誰かが私の後頭部を見つめている視線を感じる。息遣いが聞こえる。でも……何も言わない。

曽良くんは、無茶苦茶な人だって言っていたし。今までとは比べ物にならないような拒絶をされるかもしれない。嫌な汗が背中を伝っていくのを感じた。

いつまでも、こうして頭を下げているのも変だし、失礼だ。私はごくりと生唾を飲み込んで、ゆっくりと顔を上げる。

扉を開けた人物を足元からじっくりと見上げていく。黒いレギンス。膝まであるだぼっとした黄色いワンピース。カラフルな石を連

ねた、みぞおちまで垂れる長いネックレス。かわいらしい服装だ。
背筋を伸ばしたときには、その人物とはたりと目が合っていた。
百七十五センチはあるかな。長身のすらりとしたお姉さん。あごまである長い前髪を真ん中わけにして、ゆるいウェーブがかった後ろ髪をシュシュで一つにまとめている。たれ目が特徴的な、おっとりとした印象の女性だ。大きめの口は、弧を描いてにこやかな表情。
この人が……静流さん？　とてもじゃないけど、無茶苦茶な人には到底見えない。
話しかけるのを忘れて、ぽかんと見つめていると、女性は小首を傾げて三日月形に目を細めた。

「やっぱり、来たぁ。噂の神崎ちゃん」
「え？」
「ようこそぉ」

想像していたより一オクターブ高い声があたりに響いた。そして……想像していたより、ずっと反応が優しい。喜ぶべきなんだろうけど、今まで散々嫌がられてきたから、逆に戸惑ってしまう。

「中、入んなよぉ」
「え……い、いいんですか？」

静流さんと思しき人は、私の腕を引っ張って玄関に押し込んだ。

「さ、さ、靴脱いで。中でお話しましょ」

言いながら、静流さんは後ろ手に扉を閉めて鍵をかける。一気に玄関が暗くなった。線香の香りがほのかにした。どこかで焚いているのだろうか。

「ほらほら」と静流さんは玄関に上がると私の腕をひっぱった。私は言われるままに靴を脱ぐと、揃える暇もなく中へと誘導される。
廊下はエスニック調の布があちらこちらに飾られていた。それを見回しながら歩いていると、目の前に扉が現れた。

「リビングだよ」と静流さんはおっとりした笑顔を浮かべて振り返った。そしてドアノブに手をかけて、おもいっきり開く。その途端、さっきまで漂っていた香りとは違う、甘い果物の香りが私を包み込んだ。中で、別のお香でも焚いているんだろうか。
リビングもまた、エスニック調で統一されていた。壁、ソファ、テーブル。いたるところに、エスニック調のカバーがかけられている。にしても、一人暮らしにしては大きな部屋だ。長谷川さんの部屋よりは小さいけど、それでも十人以上がゆったりと床で眠れるスペースはある。
ぼうっと突っ立っていると、静流さんはやっと私の手を離して部屋の中に入っていった。そして、

「神崎ちゃんが来たよぉ。しずるん」
「！？」

え？　思わぬセリフを耳にして、私はぎょっとした。部屋の鑑賞をやめてとっさに静流さんと思っていた人物を見やる。彼女は確かに誰かに向かって話しかけていた。その『誰か』は私のほうからは死角で見えない。慌ててリビングに入って、その人物――『しずるん』さんを確認する。

「神崎？」

まるで風邪をひいているかのような、ハスキーボイス。それを発したのは、彫りの深い顔立ちをした女性だった。リビングの隅っこ

であぐらをかいて、林檎にナイフをあてている。半分ほどまで一つなぎで皮はむかれていた。大根のかつらむきのようにきれいに螺旋を描いて垂れている。

女性は私に気づいたようで、細長い切れ長の目でこちらを睨みつけてきた。左目の下には泣きぼくろ。擦れた声をだす唇は厚く、逆三角形の輪郭は痩せこけている。肩までの黒髪は、きつめのウェーブ。Tシャツにジーンズというシンプルな服装だけど、ワイルドな印象の彼女にはよく似合っていた。

『しずるん』……曽良くんがつけるあだ名よりも、分かりやすくて助かる。間違いない。この人が、静流さんなんだ。

「神崎カヤ？」二日酔いで頭痛でもあるかのような表情を浮かべ、本物の静流さんはおもむろに立ち上がる。「なに、勝手に人ん家にあげてんだよ、美月（みずき）」

「だって、留王ちゃんもさっき電話で言ってたじゃない？　一度、会って欲しいって」

私が静流さんだと思っていた人は、美月さんというらしい。美月さんは静流さんとは対照的に、ニコニコと楽しげだ。この二人……雰囲気が正反対。

それよりも、留王くんからの電話？　私に会って欲しい？　さっきってことは……私が彼に会いに行ったあとだよね？　どういうことだろう、と不思議に思っていると、ナイフを片手に静流さんがこちらに歩み寄ってきた。

「何の用だ、神崎カヤ？」

「え……」

ゆらりと燃える炎のように、静流さんは力を抜いて目の前にたたずんでいた。厚い唇はうっすらと笑みを浮かべている。でも、鋭い

瞳に宿っているのはあくまで敵意だ。
私は緊張のあまりに収縮しそうな喉を無理やりこじ開けるようにして声を出した。
「私、皆さんのこと知りたいんです。私のことも知ってほしいんです。それで、分かり合えたらな、て。いろいろ、誤解もあるみたいで……それも、解きたいんです」
静流さんは筆で弧を描いたような眉をぴくぴくと動かしつつ、黙って聞いていた。その後ろでは美月さんが、どこからかスポットライトでも浴びせられているように、たれ目の瞳をキラキラと輝かせている。どうやら、もう少しスピーチの時間はもらえるようだ。
「それで、皆さんと和幸くんの卒業パーティーを開けたらな、て思いまして。和幸くんも、カインの皆さんと会いたいでしょうし。だから、朝から皆さんに連絡をとっていたんです。
ただ、中々思ったようには話ができなくて。そんなとき、曽良くんが、静流さんなら力になってくれるって教えてくれて」
不安をごまかすように、無理やり笑顔をつくって明るくそう言った。静流さんは右手でバトンのようにナイフをクルクルと器用にまわしている。どういう指の動きだか、目で追うのも難しい。
「あたしが力になってくれる？　どういう思考回路でそんなことを言ったんだろうね、あの馬鹿は」
「ほら、曽良ちゃんはいい子だからぁ」美月さんはパンと手を叩いて口を挟んだ。だが、静流さんはそれに微塵も反応せずに、私をじっと見据えている。
「あんたはあんたで、どうしてあたしらカインと仲良しこよしになれると思っちゃったわけ？　能無しなの」

それは、と私はうつむいた。学校のカバンと一緒に提げている紙バッグを見つめる。

「私は、和幸くんのことが好きだからです」

ぽつりとそうつぶやくと、「は！？」という擦れた静流さんの声が聞こえてきた。一気に機嫌を悪くさせてしまったことがはっきりと分かった。でも、今度こそ……今度こそ、今度こそ、引き下がりたくない！　今度こそ、ちゃんと気持ちを伝えなきゃ。

私は顔を上げると、まっすぐに静流さんを見つめた。

「私は、彼のことが好きなんです。カインの皆さんと同じように。それが原因で嫌われていることも、もちろん知っています。でも……それって、共通点にはなりませんか！？」

決して笑顔を消さなかった美月さんまできょとんとしてしまった。静流さんはといえば……

「はあ！？　頭おかしいのか、お前？」

「私、静流さんにもきっと気に入ってもらえると思うんです！」

言い終わったその瞬間、静流さんは一歩、二歩、三歩、と大またで近寄ってきて私の胸倉を掴んだ。思わぬことに、カバンと紙バッグから手が離れる。

「なに、ふざけたこと言ってんだ！？」

怒鳴り声が空気を切り裂いてカマイタチのように私に襲い掛かってくるようだった。思わず肩をすくめて身を引いた。美月さんは「

あらあら」と目を丸くしている。巻き込まれる気はさらさらないようだ。

「あんたをあたしが気に入ると思ってんのか、てめぇは！？」

胸倉を掴む手はいつ喉元を切り裂くのだろうか。自然とそんな不安がよぎるほど、静流さんからは『殺気』が溢れていた。留王くんから感じたものとは比べ物にならないほど、はっきりとした戦慄。私の中にある野生の勘が、逃げなきゃいけない、と私に告げていた。体中がそれに反応して、足は震えるし、鳥肌は立つし、心拍数は上がるし。でも、私の中の『女』としてのプライドだけは、それに反抗していた。

「思ってます！　だって……」

「だってもクソもねぇんだよ！」

静流さんはいきなり胸倉を掴む手に力を入れて、勢いよく私を背後の壁に押し付けた。背中に味わったことの無いほどの強い衝撃が走り、思わず目をつぶった。内臓にくる鈍い痛み。一瞬、喉に何かが詰まったような息苦しさ。あの細い体にどこにこんな力が――そう疑問を抱いた瞬間、悟った。そうか、静流さんも商業用の……。

「表でのうのうと生きてきたお嬢さまに、何が分かるってんだよ！？」

「私は――」

ハッとして目を開いた瞬間、飛び込んできた何かに息を呑んだ。一瞬のことだった。キラリと何かが目の前で光ったかと思ったら、それは一筋の風を起こしながら、私の頬をかすって壁に突き刺さった。吐息とともに「え」という声が漏れ、汗ではない液体が頬を伝

うのを感じた。そして、ふわりと舞う何か……地面にパラパラとシャーペンの芯のようなものが落ちていく。呆然とそれを見下ろし、しばらくしてやっと気づく。私の髪だ、と。
そうっと視界の端に見える突起物に目をやれば、それはさっきまで静流さんが弄んでいたナイフだ。それが、頬の横スレスレに刺さっている――いや、スレスレだったのだろうか。おそるおそる、左頬に手をやれば、ぬるっと気味の悪い感触。見なくても分かる。自分の血だ。
ほんの少しずれれば、私の左頬を突き刺していたに違いない。ごくりと唾を飲み込み、依然として力強く私の胸倉をつかむ女性を見つめる。
不思議と、恐怖を感じてはいなかった。

＊　＊　＊

「警告、したからね。お嬢さま」

血に飢えた吸血鬼のような妖しげな笑みを浮かべ、静流はおもむろにナイフを壁から抜いた。
カヤの左頬からは血が流れ、ナイフの道筋を示すかのように左側の髪は不自然にところどころ短くなっている。ほんの少しでもずれていれば、ナイフは左頬を貫いていた。それを分かっているはずだが、少女の瞳には不思議と恐怖は浮かんではいなかった。それよりも、何か確かなものを一つ見つけたかのように、しっかりと一点を見据えている。フラフラと歩いていた迷子がやっと帰る道を思い出したかのような、そんな表情を浮かべていた。
お嬢さまのくせに怯えないのか、と静流は眉をひそめる。そのときだった。
「壁に穴あけたら、敷金全部かえってこないよぉ？」

子犬が鳴くような声で、美月が背後から口を出してきた。
敷金？　最もな指摘だが、正論過ぎる。こんな状況で、なぜそんな心配をする？　静流は、美月の戯言はすべて無視しようと決めていたが、さすがにこれには知らんふりができなかった。頬をぴくりとひきつらせて振り返る。

「お前は黙ってろ！　外野で大人しくするのか、巻き込まれたいのか、はっきりさせとけ！」
「あらあら。私も警告してあげたのよぉ」

美月は不思議そうに小首を傾げると、ぱちくりと目を瞬かせる。なぜ、静流が怒っているのか理解できない、といった様子だ。静流は「マジ、空気よめよ」とぼやいて、カヤに向き直る。

「空気は吸うものよ、しずるん」という美月の暢気な声を消し去るかのように「とにかく！」と静流はカヤに怒鳴った。

「痛い目にあいたくなかったら、さっさと帰んな。次に顔を見せたら、カインがどんなものなのか、体で知ってもらう」

はき捨てるようにそう言って、静流は乱暴にカヤの胸倉から手を離した。一歩下がると、舌打ちをしてナイフについたカヤの血を人差し指でぬぐう。
愛用のナイフは窓からの光を反射して銀色に煌いている。静流は切っ先を惚れ惚れと見つめた。が、すぐにその恍惚感は消え去ることになる。ナイフの向こう側で突っ立っている少女。ぴくりとも動かないカヤが目に入ったのだ。

「帰れっつってんだよ。あんたを殺して和幸に恨まれるのも厄介だ」

腰に手をあてがって、見下すような視線をカヤに送る。獲物を狙う蛇のような鋭い瞳だ。おびえて顔を青くしてもよさそうなのだが、少女はひるむ様子を微塵もみせずにまっすぐな視線を返してきた。
頬からひたたる血も、一切気にしていないようだ。あごまで伝って床に落ちる赤い雫に、静流のほうが気になってしまう。シミになったら、敷金が……と頭の中でぼやいた。

「私は」とカヤは真剣な表情でやっと口を開く。「静流さんに気に入ってもらえる自信があるんです」

その言葉に、静流は一気に頭に血が上った。やっとおさまりかけていた怒りが大波となって戻ってくる。

「まだそんなことを……」
「どれだけ痛めつけられても構いません！」

静流はこめかみで何かが切れるような感覚を覚えた。全身の血が逆流してくるようなざわめきを感じる。ナイフを勢いよく床に突き刺すと、カヤの喉元を目指して腕を伸ばした。

「よくも、そんな大風呂敷を！」怒鳴りつけるのと同時に、カヤの喉を親指と人差し指で挟むようにつかんでまた壁に押し付ける。その二つの指は正確に彼女の動脈を圧迫し、呼吸と血の流れを遮っている。
カヤは喉がつぶされるような圧力に顔をしかめつつ、必死に静流を睨むように見つめる。条件反射のように動いた両手は静流の右手首を掴んでいた。だが、止めようという意思は彼女にはなかった。ただ、話を聞いて欲しい――それだけが、思考の栄養である酸素と血が薄れていく頭で考えられることだった。

「私はただのお嬢さまじゃない！」夢中で叫ぶ彼女の両手に力が入り、静流は掴まれている右手首を一瞥した。「十六年愛していた両親に売られそうになった娘が、ただのお嬢さまだと思いますか！？」

その瞬間、静流の顔つきが変わった。ぴくりと頬が痙攣したように微動し、切れ長の目がカヤを見やる。

「売られそうになった？」男のような低い声で静流は尋ねた。カヤは目を反らすと、一瞬にしてしぼんだ風船のように弱々しく覇気のない声で答える。

「確かめようとしたときには、両親は自ら命を絶っていて、未だに真相は分かりません。でも、証拠となる会話はしっかりと聞きました。妙な男と、金と引き換えに私を渡す算段をしている会話を」

「……」

「それなのに」と震える声をだすカヤの瞳には涙が浮かぶ。「それでも……両親が恋しいんです。悪い人たちだったかもしれないってどんなに思っても、恋しいんです。まるで、永遠にとけない催眠術をかけられたみたいに……憎めないんです」

怪訝そうな表情を浮かべる静流は、カヤの首を絞める手を無意識に緩めていた。

カヤの瞳からこぼれた涙は頬の血と合流して、水気の多い絵の具のような雫をつくった。潤んだ瞳は静流へと向けられ、唇には冷たい微笑が浮かぶ。

「がっかりしました？」と、消え入りそうなか弱い声がつぶやかれた。「『神崎カヤ』は、その程度の女なんですよ。たとえ私が本当に『黒幕の娘』だったとしても、カインが恐れるに足る女じゃありません」

静流はハッと目を見開いた。耳にかけていた黒髪がパラパラとはずれて頬にかぶさる。後ろでぼうっとしていた美月も、真剣な表情を浮かべて腕を組んだ。

「大風呂敷じゃないです。どれだけ痛めつけられても私は平気です」

静まりかえった部屋で、カヤのどこか冷たくも感じられる声が淡々と流れる。吹っ切れたように、瞳には決意が満ちて、表情にはなんの迷いもない。

「ナイフで突き刺されようが、首を絞められようが、もう恐くないんです」静流の手からはすっかり力が抜けていて、カヤは楽々と声をだせるようになっていた。「私はもっと、もっと恐い目にあってきたんです。彼と出会って、いろんなことに巻き込まれてきたんです。

警官に殴られて気を失って、目が覚めたときには血だらけで、何があったかは未だに分からない。麻薬の売人に襲われそうになって噛み付いて逃げて、銃で撃たれて死にかけて、生きていることがおかしいくらい重傷だったのに、どうして助かったのかさっぱり分からない。デート中に変なお婆さんに、悪魔だ、ていきなり叫ばれるし、エレベーターで彼氏が他の女の子といちゃついてるの見ちゃうし……」

「は？」

カヤは静流のトゲのある声に、自分の話が脱線したことに気づいた。ハッとして頬を赤らめると「だ、だから」と無理やり話をつなげる。

「私はただのお嬢さまなんかじゃないんです！　カインに……裏世

界の殺し屋に恋した、変な女です。だから、気に入ってもらえると思うんです」
「はあっ！？」

静まっていた血がまた沸騰するように騒ぎ出す。やっと仕事を思い出したかのように静流はカヤの首に巻きつく手に力を入れた。

「本物の能無しか、てめぇは！？　言っている意味わかんねぇよ。それとも、ただの自意識過剰の妄想女か！？　さっきから馬鹿の一つ覚えみたいに、同じことを。なんで、あたしがあんたなんかを――」
「私はあなたの弟が惚れた女だからです」

カヤはきっぱりと言い放った。首を絞められていることに気づいてすらいないかのような、純粋でまっすぐな瞳で見つめられ、静流はゾンビ映画でも見ているような気分になっていた。へこたれない真っ直ぐな少女――ゾンビよりも厄介かもしれない、と顔をひきつらせる。

出す言葉が見つからない口はあんぐりと開き、静流は呆然とカヤを見つめていた。カヤは居心地悪そうに視線を泳がせてから、遠慮がちにぽつりとつぶやく。

「あと……砺波ちゃんと仲がいいんです」
「へ」静流と美月の呆けた声が重なった。「砺波と……仲がいい？」

ぽかんとしながら、静流はぼそりと言う。いきなり、なんだそれは？　とひどい脱力感に襲われた。

不自然な沈黙がしばらく続き、静流と美月は呆然としていた。そんな二人の目を覚ますかのように、静流の腕時計が二時を知らせる電子音を鳴らした。それを皮切りに、美月が声を上げて笑い出す。

そして、静流も呆れたように目をぐるりと回して、カヤの喉元から手を離した。

「砺波と仲がいいか」静流はため息混じりに言う。「なるほど、一番説得力あるな」

静流の手から開放され、カヤは腰をかがめると喉元をさすりながら咳き込む。ふと床に目をやれば、まだ乾いてもいない真新しい血痕が。静流の足元のほうに視線をうつせば、そこにはナイフが突き刺さっている。ついさっき、自分の頬と髪を切り裂いたナイフだ。だが、不思議と恐くはなかった。いつのまにやら自分は一線を越えていたことに、カヤはこの日気づいた。そう、ただのお嬢さまが踏み越えるべきではない一線。それをとっくに飛び越えていたんだ。自分は決してそこまで弱くは無い。自分もいつの間にか、変わっていたんだ――静流との口論の末、それを導き出していた。試していないだけ……砺波の声が唐突に蘇る。

違和感ある喉をごまかすように咳払いをし、カヤはゆっくりと背筋を伸ばす。

顔を上げた彼女の視線の先には、静流が待ち構えていたかのように腕を組んでいた。そして、やれやれ、と髪をくしゃくしゃと掻くと「こうしよう」としゃがれた声で切り出す。

「花嫁修業ってのはどう？」

「え？」

目をしばたたかせるカヤに、静流は腰に手をあてがって不敵な笑みを浮かべる。

「『おつかい』、行って来てくれる？」

「おつかい……」

「そう。カインといえば『おつかい』だろ」

カインの花嫁　―４―（後書き）

ナイフを人には向けないように。危険ですので。

悩みの種

「さ、これかぶってぇ」

美月さんは半透明のゴミ袋をばさっと開いた。その底には私の頭が入る程度の穴が開いている。タイルが敷かれたバルコニーに、キャンプ用のイスが一つ。私はそれに座って、美月さんにされるがまま、ケープ状になったゴミ袋をかぶった。窓に映る自分はまるで照る照る坊主。くすりと失笑してしまった。

「さって。チョキチョキするよん。そんなみっともない髪じゃ『おつかい』行けないもんねぇ」

みっともない髪。それは、左側だけところどころ短い私のヘアスタイルだ。アシンメトリーもここまでくると、おしゃれとは言えない。

美月さんは右手にすきバサミ、左手に木製のクシを持って、左右に振った。くるりと私の背後に回ると、慣れた手つきで私の髪をクシですく。特に、ナイフで減らされた左側の髪を念入りに。

「しずるんったら、女の命をなんだと思ってるんだろねっ」子供みたいな高い声でそう言って、美月さんは私の左側に移動してしゃがんだ。「一番短い髪にあわせるけど、いいかなぁ？」

「あ、はい」

戸惑いつつもうなずくと、美月さんは満足げににこりと微笑んだ。

「じゃ、始めるねぇ」

立ち上がると、再び私の背後に回ってすきバサミを躊躇無く入れる。ばっさりと髪がゴミ袋に落ちて、すべっていく音が聞こえてきた。リズムを刻むように軽快なハサミの音。楽しげな美月さんの鼻歌。

私はある疑問を抱いて、「あの」と美月さんに声をかけた。「よく、こういうことするんですか？」

「こういうことってぇ？」

「カインの髪を切ったりとか」

そもそも、当たり前のようにすきバサミをバッグから取り出したときから、不思議だったんだ。殺し屋といっても、まさかすきバサミを護身用に持ち歩くとは思えない。

「カインの子の髪も切ってあげるよぉ。これが私の専門だもの」

「専門？」もしかして、カインの中で役割分担でもあるのかな。

「私ね、美容師の専門学校通ってるんだよ」

「え」

美容師の専門学校……？　殺し屋（カイン）が！？　私はぎょっとして目をむいた。でも思い返せば、アリサさんも医科大学に通っていた。高校を出ると、カインは自分の道を選べるんだろうか。それとも、藤本さんに指定されるのかな。どの進路にいけ、て。

「腑に落ちない？　殺し屋が専門学校なんて」

まるで私の心を読んだかのように、美月さんはずばりと言った。私は思わず飛び跳ねそうになった。

「いえ」と口をついて出たのは、嘘だった。

美月さんは私の髪にハサミをいれながら、クスクスと笑った。嘘だなんてバレバレみたい。

「結局は、私たちも表の世界のルールに従わなきゃいけないの。表裏一体とでもいうのかなぁ。表と裏は、切り離せないものだから。裏でうまくやっても、表でほころびがでることもある」

美月さんの言っていることがよく分からず、私は眉をひそめた。背後で髪を切っている美月さんにはそれが分からないのだろう。なめらかな口調で言葉を続ける。

「だから、私たちも権力を創る必要があるの」

「権力を創る？」

「そうよぉ。表の世界では権力がすべて。表で闘おうとしたら、権力で立ち向かうしかない」

「……」

権力がすべて？　私は思わず黙り込んでしまった。私の世界って、そんなところなの？

「だから、高校を卒業したら、カインはそれぞれ権力創りに励むのよ。いろんな方面でね。機械工学とか情報処理とかが特に多いかな。あと、警官とか政界を目指したり。

ちなみに。私の場合は、権力というよりも便利だから、だけどね。お医者さんや歯医者さんも同じ。何かあったときに助かるじゃない？」

「そう、なんですか」

純粋に驚いていた。藤本さんのリーダーとしての能力。先見の明

というのだろうか。あの人は、カインだけじゃなく、カインノイエという組織自体も、将来に向けて計画的に育ててるんだ。私はてっきり、高校を卒業したカインは、殺し屋として生きていくんだとばかり……。

「殺し屋の仕事はね」と、また私の心を読んだかのように、美月さんは切り出す。「表の世界で仕事に就いたら引退することになってるの」

「え！？」

思わず、私は振り返っていた。美月さんは目を大きく開けて、「こらこら」と怒ったように口をとがらせてハサミを動かした。「どんどん短くなっちゃうよぉ？」

「すみません」言って前に向き直るや否や、私は尋ねる。「じゃ、カインは皆、殺し屋じゃなくなるんですか。表の世界で職を見つけたら？」

「そうよぉ。それまで生き残れば、だけどねぇ。

だって、昼に仕事して夜に殺し屋なんてできると思う？　自殺行為よ。二兎を得るものは一兎を得ずってね。昼の顔に集中するのよ」

「てことは……皆、いつかは裏世界から抜けられるんですね」

和幸くんみたいに――と私は心の中で付け加える。私は自然と微笑んでいた。なんだ。和幸くんは早かっただけ。皆、あとから日向に出てくるんだ。

よかった、と肩を撫で下ろす私に、しかし、美月さんの言葉が現実をつきつける。

「いいえ。昼の仕事は、ただのスパイ活動よぉ。情報のリークが目的。言ったでしょ？　権力創りだ、て」

「！」

私の期待はあっさりと切り捨てられた。足元で黒い絨毯のようにひろがる髪のように。スパイ活動……？　つまり、表の世界の仕事も、結局はカインとしての『おつかい』？

「そうやって、地道に私たち自身でコネを築いていく必要があるの。長い年月はかかるだろうけど、いつか必ず実を結ぶわ。それほど、重要なの。表の世界で権力を掴むことは。特に、裏世界に暮らす私たちにはね」

私は美月さんの言葉に聞き入っていた。どこかつらそうなお義姉さんの声を。

「私たちは表に出れば、無防備な赤ん坊。裸の兵士同然。頼れるものも、守ってくれるものも、何も無い。自分たちで創るほかないのよね」

頼れるもの……守ってくれるもの……権力。私は美月さんの言葉を、ずっと頭の中で反芻していた。そして、「権力」とぽつりとつぶやく。表の世界で、何よりも重要だといわれる武器の名前を。

＊　＊　＊

――リスト。

唐突に頭に響いた愛らしい声にオレはハッと目を覚ました。カーテンも締め切った部屋で、置時計の文字盤だけが緑色に光っている。ソファに横になったまま、暗い天井を見つめた。そして、どうしたの？　と尋ねた。自問ではない。どこかで和幸さんを守っているオ

レの天使（エミサリエス）への問いだ。

――気配がする。

その言葉に、オレはむくりと起き上がった。気配……それは、他のエミサリエスが近くにいる、ということ。ごくりと生唾を飲み込み、オレは核心に迫った質問をする。

「どのエミサリエス？」

思わず、口に出していた。心臓がドクン、ドクン、と低い音を鳴らしている。ソファの背もたれに置いた手が震えている。武者震いなのか、怯えているのか、自分でも分からない。

――この気配は……シャカンのエミサリエスだ。

シャカン？　オレは目を丸くした。聞き覚えの無い神の名前だ。眉をひそめながら、どっち派の神？　と心の中で唱える。

――シャカンは、エンキ派の神だよ。一応、味方。もちろん、贈り物（ラ）の持ち主次第、だけど。

「エンキ派……か」

肩の力が抜けた。とりあえず、エンリルの気配がする、と言われなくてよかった。それはつまり、オレの宿敵であるニヌルタの王が現れたことを意味するからな。

アトラハシスのせいで『裁き』のしきたりは滅茶苦茶になっている。ルールも分からないゲームを闇雲にプレイしているようなものだ。この状態で、今、ニヌルタの王が現れたら、オレは正直どうす

ればいいのか分からない。とりあえずは、神崎先輩を奪われないようにすればいいんだろうけど。

そういえば、そろそろ考えなきゃな。ニヌルタの王をどう対処すればいいのか。今回は、オレたち自身でルールを創る必要がある。本来なら、『収穫の日』、オレとニヌルタの王が『パンドラの箱』を前に決闘をし、勝者が『テマエの実』を獲得する――そんなシンプルなルールだった。なのに、アトラハシスが『パンドラの箱』を持ち出したせいで、どこで闘えばいいのかも分からない。そもそも、アトラハシスがこのまま勝手に『テマエの実』を『収穫』する可能性だってあるんだ。オレもニヌルタの王も『テマエの実』を得られない可能性だってある。

あぁ、もう……何度もいうが、ぜーんぶ、アトラハシスのせいだ。

――あのー、リスト？　愚痴ってる最中悪いんだけどね。ケットはどうしたらいい？　気配がするといっても、贈り物（ドラ）だと知らずにルルが持ち歩いている可能性もあるし。

困ったような声が脳に直接送られてくる。

どうするもこうするも……と、オレは鼻で笑った。ケットが今、言ったじゃないか。贈り物（ドラ）は見た目はただの骨董品やアクセサリー。エミサリエスの存在を知らずに、人間（ルル）が所有していることもある。そこまで警戒する必要もないだろう。ただ、念のため、もし気配が近づいてくることがあれば、そのときはオレに教えてくれる？

――うん、分かった！

弾けるような声が頭の中に響いた。まるでゲームでもしているかのような元気な声だ。やれやれ……と、オレは微笑を浮かべた。本当に、子供なんだから。見た目と性格は。

ちらりと時計を見れば、六時を指している。いつもなら劇の稽古

で帰りはもっと遅いのだが、今日はヒロイン不在で練習にならなかった。アンリ先輩は不満そうではあったが、さっさと稽古を切り上げたのだ。

ケットの話だと、和幸さんはまだ神崎先輩に『人形』のことを打ち明けてはいないみたいだけど……それじゃ、なんであの人は練習に現れなかったのだろうか。例の盗撮写真のこと、よっぽど堪えてるのか。それとも、和幸さんとのケンカで落ち込んでるのか。

「……参ったな」

いずれにしろ、危険な状態なのは……オレだ。苦笑して、またソファに横になる。

神崎先輩を心配している自分を、諌めようとも思わなかった。

＊　＊　＊

「何しに来たんだ、新人」

閑静な住宅街にこじんまりとたたずむ一軒の焼き鳥屋。巨大なマンションに挟まれて、今にもつぶれてしまいそうな木造の家屋。昼は食堂、夜は飲み屋とその姿を変える。昼と夜で顔を変える――まるで、『無垢な殺し屋』と呼ばれていた頃の俺みたいだ。

『すすむちゃん』と書かれた赤い暖簾（のれん）の下で、『すすむちゃん』という愛称とは程遠い、俺よりもずっと殺し屋みたいな容貌の男が腕を組んで仁王立ち。額の左に残る古傷をぴくぴくと動かしている。

「何って……バイトですけど」と俺は遠慮がちに答えた。

すると、店長――真田進（通称、組長）はへの字の口に力をこめて、富士山のように変形させた。額には青筋。鋭く細い目は、カッ

と見開かれている。
「お前は自宅謹慎なんだろう？」
「え……」
馬頭観音が降臨したのかと思った。眉はつりあがり、皺には濃い影が落ちている。組長の怒りで地響きでも起きるんじゃないかとさえ思った。俺は初めて、人の顔をみて恐怖を覚えた。思わず、後ずさる。
「何の話っすか」
「学校からちゃんと連絡がきてるんだよ。阿呆が」
やべ。俺は言葉を失った。そういえば……俺がバイトしていることを学校は知ってるんだったな。孤児は無条件でバイトの許可をもらえるから、軽い気持ちで申請してしまった。こそこそと隠れて裏で何かをやるのはもう嫌だったし。それに、まさか自宅謹慎になるとは思っていなかったからな。
「帰れ、この大馬鹿野郎が」
「いや、大丈夫です。バレませんから」
「そういう問題じゃねぇ！　俺は曲がったことが大嫌いなんだよ！」
怒鳴り声で吹き飛ばされるかと思ったのも、これが初めてだ。俺は顔をひきつらせて、さらに一歩後ずさる。この人……本当にただの焼き鳥屋の店長か？　そういえば、昔はヤクザだった、とかいう噂があるんだったな。俺は段々とそれを信じ始めていた。じゃなきゃ、ここまでの迫力は出せないだろう。
てか、曲がったことが嫌いって……見た目と言っていることのギャップがありすぎだ。

「今日はもう店は開けねぇ」舌打ちしてから、組長はそう吐き捨てるように言った。「葵も辞めちまったからな」
「辞めた！？　葵が！？」
「ああ。今朝、急に電話があってな。参ったよ」

言って、組長は唸り声が混じったため息をついて背を向けた。剣山のような頭が暖簾をくぐり、店へと入っていく。勢いよく戸が閉められ、周りの通行人までその音に驚いて振り返った。
残された俺は、呆然と突っ立っていた。葵が……辞めた？　心が一気にかき乱される。夕べのいざこざが鮮やかに思い出されて、思わずうつむいた。耳に蓋をしたかのように、周りの喧騒が聞こえなくなった。聞こえるのは、自分の心臓の音。罪悪感から必死に逃げるように、駆け足で波打つ鼓動。
俺と会うのが気まずくて、辞めた……？　それとも、まさか砺波に何かされたんだろうか。脅された？　しつける、とか言ってたもんな。何か、ひどいことでもされたのか。いや、そうだとしても……結局は、俺のせいだよな。やっぱ、夕べ、電話の一つでもいれておくべきだった。まさか、あれで葵とはお別れか？　あんな別れ方？　最悪だ。悔しさがこみ上げてきて、ぐっと拳を握り締めた――そのときだった。
ドン、と背中を思い切り叩かれて、俺はつんのめった。通行人とぶつかったのかと思いつつ、とっさに振り返る。すると、
「やっほ。夕べはどうも」

ヒラヒラと手を振り、白く細長い足をショートパンツで惜しみなく見せている少女。くりっとしたつり目。グロスで光る唇。ふんわりとしたショートヘア。

「葵……」

＊　＊　＊

葵はぎこちなく微笑んで八重歯を見せる。

「なに、突っ立ってんの」

首を傾け、髪を揺らす。和幸は呆然とそれを見つめていた。まるで、幽霊でも見るかのように。

「見つめすぎ」からかうように葵はいたずらっぽい笑顔を浮かべる。

「それとも、見とれてるのかな」

「あ、いや……」和幸はやっと我に返って、落ち着かない様子で頭をかいた。「辞めたって聞いたから。ついさっき」

葵の表情から笑顔が消えた。ふっと真顔になると、「まあね」と目を背ける。

「気が変わったっていうか……やっぱり気持ちは変わらない、ていうか」

「え？」

もごもごと口を動かす葵に、和幸は目をしばたたかせる。聞こえなかったわけではないが、何を言っているのか意味が分からなかった。分かることといえば、葵の口調から、あの聞き慣れない独特なイントネーションと言葉遣いが消えていることくらい――。

「とにかく」と、葵は和幸に近寄る。「手に入らないものほど、燃えるっていうか？」

じっと自分を上目遣いで見つめる少女に、和幸は「あ」と顔をしかめて声を漏らす。いくら鈍感な彼でも、夕べの騒ぎで葵の気持ちにはさすがに気づいている。彼女の瞳に宿る期待が何を示しているのかくらい予想はついた。

「あのさ、葵」和幸は言いにくそうにそう切り出した。「俺はカヤが……」

「さて、バイトバイト」

「え」

和幸の話を聞こうという気はさらさらないのか、葵はすばやく顔を背けて和幸の腕をつかんだ。

「組長に怒られちゃうよ」

言いながら、店の中へ引きずろうとする。和幸は慌てて「いや、俺は今夜は無理なんだ」と引き止めた。葵は不思議そうな表情で振り返ると小首を傾げる。

「無理って？」

「自宅謹慎中なんだよ。組長に帰れって言われた」

「じ、じたくきんしん？」初めて聞いた単語のように、葵は不自然に発音した。「和幸が？　嘘でしょ。何したの？」

「自宅謹慎になるようなこと、だよ」

がっくりと肩を落とす和幸に、葵は目をぱちくりと瞬かせる。本当なんだな、と心の中でつぶやくと、和幸の腕を捕らえている手を離すことなく、じっと何かを考える。そして、ニヤリと微笑んだ。

「つまり……またあたしに借りを作るわけだ」
「は？」
「そうでしょう？　今夜はあたし一人で和幸の分も働くわけなんだし。借り一！」
「いや、まあ、そうだけど」

夕べの一連の騒動は、そういえば、この葵の『借り』発言が発端だった。和幸はどこか嫌な予感を覚えて、頬をひきつらせる。
葵はその様子にどこか満足そうに笑んで、和幸の腕から手を離すとくるりと後ろ手を組んだ。

「じゃ、今度じっくり返してもらおうかな。和幸の部屋で」
「……は！？」
「大丈夫、大丈夫。浮気も本気になれば、浮気じゃなくなるって、よく言うじゃない？」

葵は腰をかがめて和幸を下から覗き込む。和幸は返す言葉も見つからないようで、ただ呆然と葵を凝視する。やっと出てきたのは「え」という呆けた声。葵の言葉をやっと理解したかのように、急に耳まで赤くして「言わないだろ！」と慌ててつっこんだ。
葵はケタケタ楽しげに笑って、「自宅謹慎中に部屋片付けとくのよ」と言い残してくるりと踵を返す。和幸の反応を確認することなく、さっさと店の中へと入っていった。
愕然として立ち尽くす和幸。これは表の世界の洗礼か、と脈絡も無いことを頭の中でつぶやいた。今の会話さえ、カヤに聞かれたらまた一騒動起きそうだ。そもそも、現時点でカヤとはうまくいっていない。他にも心配することは山積みなのに、これからどうなるんだ、と顔を青くして頭を垂らす。
そんな和幸を元気づけるかのように、明るい音楽が和幸のポケットから流れ出した。

＊　＊　＊

葵が元気だったのはよかった。バイトも続けてくれるみたいだし、一安心だ。ただ、あそこまで堂々と『浮気』を肯定されると……俺は一体どう反論すればいいのか。『彼女もち』カードはもう使えないようだな。

やれやれ、砺波の『しつけ』はどうなったんだ？　いや、まあ、あいつが妙なことをしたわけじゃなくてよかったけど。そうだよな。これは俺と葵の問題なんだ。行く行くは俺がきっちり話をつけなきゃ。とりあえずは、部屋にあげないようにしよう。今度葵と何かあったら、カヤは気でも狂いそうだな。もう修復できなくなるだろう。てか、失神してムシュフシュに葵ともども食い殺されるか――って、最悪な冗談だな。

ふうっと一つため息をついて、俺はさっきからうるさく自己アピールをしている携帯電話をポケットから取り出した。誰だろうか、とサブディスプレイを見つめ、そして息を呑んだ。

「静流姉さん？」

どうして、静流姉さんが？　ぱちくりと目を瞬かせてケータイを見つめる。その名前を見ただけで、カヤや葵のことが頭から吹っ飛んだ。背筋が凍りつくような戦慄を覚える。

「なんで……静流姉さんが？」

俺はもう『勘当』されたはず。カインの人間から連絡が来ることは不自然だ。何か重大なことでもあったのだろうか。親父の身に何か……？　いや、それだったらリーダー代理である曽良から連絡が来るだろう。なぜ、静流姉さんなんだ？

そこで俺はハッとする。そういえば、夕べ静流姉さんと電話で言い合いになったっけ。まさか、その件でまだ怒っている？　心なしか手が震える。通話ボタンを押した瞬間、鼓膜が破れそうだ。
てか、静流姉さん、しつこいな。もうそろそろ留守電につながりそうなものだが。

「ううん」と俺は唸った。留守電に静流姉さんの擦れた怒号が残るのも恐い。「仕方が無い」

覚悟を決めるか。
恐る恐る通話ボタンを押し、耳に当てる。怒鳴り声に備えて、数センチ離しておく。「静流姉さん？」と、見えるわけでもないのに作り笑顔を貼り付けた。

「和幸、出るのおせぇよ」

あれ？　大人しいな。穏やかにも感じる。

「どうしたんだよ、姉さん？」油断は禁物。丁寧な口調でそう尋ねた。「『勘当』された俺に電話したらまずいんじゃ……」

すると、電話の向こうで豪快な笑い声が聞こえた。「暢気だねぇ」というハスキーボイスが囁かれる。

「陳腐なセリフで悪いんだけどね」珍しく上機嫌にも聞こえる声でそう前置きして、「お前の女は預かった。返して欲しかったら、あたしの部屋に来な」
「……は？」
「あたしは辛抱強くねぇんだ。早く来たほうがいいよ」

質問する暇も与えられず、容赦なく電話は切られた。
無機質な電子音が鼓膜を揺らす。いつのまにか、ケータイは耳にぴたりとくっついていた。俺はただただ放心状態で立ち尽くした。
「は！？」と、とりあえずもう一度叫んだ。

サプライズ

静流は壁にもたれかかり、ナイフを鉛筆回しの要領で右手で転がしていた。弟に意味深な電話を入れてそろそろ二十分。どんな顔をして現れるのか、楽しみで仕方が無い。廊下で息をすえば、線香の香りが肺に入っていく。香りが彼女を落ち着かせてくれる――厚い唇に微笑を浮かべた。

そのときだった。突然、玄関の扉を乱暴に叩く音が辺りに響いた。和太鼓でも叩いているかのような、力の入りようだ。静流は壁から背を離すと、「開いてるよ！」としゃがれた声で怒鳴る。

すると、間髪いれずに扉が開き、血相を変えた少年が倒れこむように入ってきた。相変わらずの美しい黒髪。目立った特徴はないものの、母親は美人に違いない、と思わせる整った顔立ち。懐かしさに、静流は目を細めた。

だが、感動的な再会――とはいかないようで、愛すべき弟は「静流姉さん！」と、文字通り土足で上がりこんで静流の胸倉につかみかかってきた。「カヤはどこだ！？」

小姑は嫁には勝てないか、と静流は呆れたようにため息をつき、すばやく弟のみぞおちに、持っていたナイフの柄を突き刺した――いや、めりこませた。このまま刃の部分まではいりこむんじゃないか。そう思わせるほど食い込んで、和幸は目をむいて咳き込んだ。思わず、静流の胸倉から手が離れ、うずくまる。

「涙がでるほど嬉しい挨拶だね、和幸」

「カヤはどこだよ？」和幸はみぞおちを押さえながら、睨むように静流を見上げる。「何が気に入らないのかは知らねぇけど、あいつに何かあったら、姉さんでも……」

ひるむ様子は一切ない。俺は本気だ、と言わんばかりの真剣な表情。怒りに満ちた瞳。

静流は、「ふぅん」と妖しげな笑みを浮かべてナイフを口元にあてる。この子があたしに反抗するか――寂しいような、嬉しいような、複雑な感情がこみ上げてきた。怯えた表情で、何でも「はい！　はい！」と兵隊のように言うことを聞いていた幼い弟はもういないのだ。いつのまに……と懐かしむような眼差しで弟を見つめる。

吐き気がしたのか、一瞬顔をゆがませつつも和幸はむくりと起き上がり、自分を睨んでくる。背筋を伸ばした弟は、自分を見下ろしていた。しばらく見ないうちに、背も随分高くなっていたようだ。

静流は彼を見上げて、ふと思う。広幸が死んでふさぎこんでいた弟は、すっかり一人で立てるようになっていたのだ、と。もう、張り手で気合をいれてやる必要もない。手放すときはとっくに来ていたようだ。

「静流姉さん！」和幸の怒号が静流を現実に引き戻す。「カヤはどこだよ！？」

「うるさいねぇ。ガキじゃないんだから」

言いながら、静流は腰に手をあてがった。

「そろそろ帰ってくる頃だよ」

「え？」和幸は目を丸くして、きょとんとした。「帰ってくる？」

すると、それが静流の予言だったかのように、和幸の背後でドアノブをひねる音がした。ハッとして振り返ると、扉が勢いよく開き、一人の少女が飛び込んできた。

「遅くなりました」と少女は息を切らせながら叫び、崩れるように玄関にしゃがみこむ。両手には大量の買い物袋。細い腕でよくこれ

だけ運んでこれたな、と思うほどの量だ。
和幸は目をしばたたかせながら、少女を見下ろす。耳を隠すように覆うふんわりとした髪は、毛先がぴょんぴょん跳ねている。うなじがはっきりと見えるほど、短い髪。肌の色には見覚えがあるが、そのショートボブには見覚えは無い。
和幸は視力が悪いかのように目をほそめて、うつむいて息を整えている少女をまじまじと見つめる。
少女は苦しそうに咳をし、「飲み物買って来ました」と汗と笑顔を浮かべて顔を上げた。そして、ぎょっと目を見開く。
「あれ」と肩で息をしながらつぶやく。あまりに急いで入ってきたため、少女は彼の存在に気づいていなかった。目が合う今の今まで。
「か、和幸くん？」

＊　＊　＊

「カ、カヤ！？」
半ば気づいてはいたが……まさか、本当にカヤだとは。状況と髪型的に、カヤであるはずはなかった。俺の声はかっこ悪く裏返っていた。
「な……なんで、買い物？」
俺はどこからつっこめばいいのか分からず、とりあえずそうつぶやいた。カヤは……いきなり、ショートヘアになっていたカヤは、
「ああ」と微笑んで買い物袋を見渡す。
「『おつかい』してきたの」

「お、おつかい……？」

いやいや。全然説明になってないだろ。どうなってんだよ？　なんで、普通に買い物袋ぶらさげて静流姉さんの部屋に入ってきたんだ？　俺……何しにここに来たんだ？　確か、カヤを助けにきたはずなんだけど。カヤは見るからに元気そうだぞ。危ない目に遭ってる様子はないし、傷一つ無……くはないな。

「どうしたんだ、その頬！？」

髪に気を取られてうっかりしていた。声を荒げてそう尋ねると、カヤはハッとして左頬を押さえた。そこには、ガーゼが貼られている。つい今朝までなかったはずのものだ。

「あ、これは」とカヤは口ごもった。だが、続きを言おうとはしない。目をそらして口を閉ざした。

「誰にやられたんだ！？　まさか……」

ハッとして振り返れば、静流姉さんが得意げにナイフを右手の中で回している。

「姉さん！？」と怒鳴ると、姉さんは肩をすくめて唇の片端を上げた。

「うるさいよ」

「姉さんがやったのか！？」

「だったら何だよ。やり返すか？」

苛立つ俺をあざ笑うかのようにケロッとそう言って、姉さんは俺の横を通り過ぎる。さっさとカヤの前にしゃがむと、袋の中に手をつっこんで物色を始めた。

「ビールにチューハイ。ちゃんとメーカーもあってるねぇ。上出来、上出来。あれ？　梅酒は？」
「あ、こっちの袋です」
「あぁ、こっちね」

静流姉さんが袋から取り出すのは、どれもアルコールだ。もしかして、カヤが運んできたビニール袋は、すべて酒か？

「ちょ、ちょっと待て！」と俺は思わず叫んでいた。「カヤに……酒、買わせたのか！？」
「そうだけど？」まるでなんでもないかのように、静流姉さんは答える。
「カヤは未成年だぞ？　ってか……カヤ、どうやって買ってきたんだ！？　未成年がいつからアルコール買えるようになった！？」

どこから手をつけたらいいのか分からない雑草地帯みたいだ。質問を選ぶのも一苦労だ。
カヤは尋ねられて、ごまかすように微笑んだ。俺はそれを見て……とりあえず、ショートヘアはよく似合っている、とそれだけは結論付けた。フェイスラインにかかる髪が、カヤの小顔を余計に小さく見せている。髪に邪魔されることのない首筋が、一段と色っぽい。
って、そんなこと考えてる場合じゃない。

「おい、姉さん！」
「もう、ぎゃあぎゃあうるさいねぇ。クソ真面目なんだから」言って、静流姉さんは缶ビール片手に立ち上がって、俺に振り返る。「こんな可愛い子が頼めば、どんな成人男性も酒くらい買ってくれんだよ」
「は？」

どんな男でもって……どういうことだよ？　さっぱり分からない。カヤを見つめれば、相変わらず笑顔でごまかすだけ。

「カヤに何させたんだよ、姉さん！？」

「何って……楽な生き方を教えてあげただけだよ」

「楽な生き方？」

「こんだけの容姿を持て余してたから。一つの活用法を教えてあげたわけ」

まさか、色仕掛けでも教えたのかよ。俺はジト目で姉さんを睨みつける。すると、一切気にする様子もなく、缶ビールを開けて一口飲んだ。

「てか、姉さんもまだ未成年だろ。飲んでいいのかよ」

「殺し屋に向かって、なに堅苦しいこと言ってんだよ。脳無しか？」

もっともだ。それに関しては、放っておこう。

「こんなに酒買ってどうする気なんだ？」

再び、ビニール袋に目を向けたとき、ちょうどカヤが立ち上がった。おもむろにロングコートを脱ぐと、浅黒い素足が俺の目に飛び込んで……って、おい！

「な、なんつー格好で！？」

思わぬものを目にして、慌てて俺はカヤに駆け寄った。だが、駆け寄ったところでどうすることもできない。砺波を彷彿とさせる――いや、それ以上に短い黒いミニスカートのワンピース……ここで

脱がすわけにもいかないし。
唖然としていると、カヤは頬を赤らめてはにかんだ笑みを浮かべた。
「静流さんに薦められて、アリサさんからお借りしたの」
「……え」聞き間違いだと思った。いや、そう信じたかった。「アリサ？」
まさか、それはアリサ姉さんじゃないよな。俺は頬をひきつらせた。その名前を思い浮かべただけで、背筋が凍る。頭に思い浮かぶのは、調教、調教、と人を追いかけるあの変態女王……なんでカヤからその名前が出てきたんだ？
「皆さん、待ってるよ」
「！」
ふと、カヤの優しい声が聞こえてきた。ハッとして見つめると、懐かしい……随分見ていなかったような、朗らかな笑みがそこにあった。どんな傷をも癒してくれるような、悩みも哀しみも打ち消してくれるような、全てを包み込むような、美しい笑顔。髪型がかわっても、その笑顔は変わることは無い。ってか、一段と可愛いと思った。
俺は呆気にとられた。てっきり、この笑顔はしばらく見れないと思っていた。次に会うとき、カヤは泣いているだろう。そう思っていたのに。どう慰めればいいのか、どう元気付けたらいいのか。それば かり考えて思い悩んでいたのに。カヤは……俺のカヤに戻っていた。
「待ってる？」と戸惑いつつもつぶやくと、カヤは「うん」と深々と頷く。

誰が？　そう尋ねようとしたときだった。

「かっちゃーん！」

俺の疑問を全て吹き飛ばすような勢いの、弾けるような声が廊下に響いた。驚いて振り返れば、廊下の突き当たりのドアから、水色のロングTシャツに細身のジーパンを着たアヒル口の男がスキップで駆けてくる。

「曽良？　なんで、お前がここに？」

「愚問！」と叫んで、勢いよく俺に飛びついてくる。げ！　と俺は声をあげた。

「だから、なんで抱きつくんだよ、お前は！？」

これで頬ずりでもしてきたら、本気で殴ろう。

曽良は俺に抱きついたまま、後ろにいるカヤに「お帰り」と声をかける。すると、カヤも「ただいま」と当たり前かのように答える。

そのやり取りがあまりに自然で、まるでこの二人が同棲でもしているかのようだった。妙に……イラつく。俺は曽良の頭をつかむと乱暴に引き剥がす。

「どうなってんだ！？　俺はてっきりカヤが静流姉さんにさらわれたのかと……」

「兄ちゃん！」と、突然、思わぬ声が俺の言葉を遮った。聞き覚えのある声。聞き覚えはあるが……こんなところで、『勘当』された俺が聞くはずのない声。

ハッとして声のしたほうを見やる。

「和幸兄ちゃん、久しぶりー！」

わーい、と子供のような声をあげてリビングから出てきた鼻ピアスの中学生。筋肉質の体を自慢するような冬のタンクトップ姿。つりあがった細い目。角ばった輪郭。中学生とは思えない迫力のある顔つきだ。こいつと初めて会った奴は、百パーセント不良だと思うだろう。だが、ポケットからはみ出ている、俺には理解できない趣味のキーホルダーがそれを否定している。懐かしいな……にゃんちょび。

俺は曽良の頭から手を離すと、久々の弟を笑顔で迎える。

「久徳（ひさのり）」と呼ぶと、久徳は今にも泣きそうに顔をゆがめた。

「兄ちゃん！　クレーンゲームみたいに、女もうまいことひっかけたんだね。さすがだよ」

「は……」

会って早々、なんつー挨拶だ。思わず、俺は笑顔を消し去った。目の端で、静流姉さんの頬がぴくりとひきつったのが分かった。なにくだらねぇことを言ってやがんだ、能無しか――静流姉さんの心の声が聞こえてくるようだ。

だが、こいつはうまいことを言ったと思っているのだろう。満足げに頬を赤らめて微笑んでいる。

「ありがとう」

とりあえず、ひきつった笑顔ではあるが、礼を言うことにした。見た目で誤解されがちだが、こいつは『ガラスのように繊細な心』ってやつを隠しもっている。狼の皮をかぶった羊だ。人見知りなのか、心を開くまではとんがった態度をとっていたが、一度懐いた途端、ころっと純真な少年に早変わりした。

「久徳」と、落ち着いたハスキーボイスが横から入ってきた。「カヤが帰ってきたよ」

じっくりと脅すような声色だった。カヤが帰ってきているのは見れば分かる。わざわざご丁寧に口に出して知らせることもないだろうが……。言われた久徳は一瞬にして表情を凍らせると、ぶるっと体を震わせた。さも、今カヤに気づいたように俺の背後に目を向ける。

「そ、そうでした」上擦った声でぎこちなくそう言って、「カヤ義姉(ねえ)ちゃん、お帰り」

ひきつり笑顔を浮かべながら、久徳は俺の横を通り過ぎてカヤの元へ向かった。

「俺が持っていくよ」

久徳は違和感のある笑い声をあげながら、カヤの足元においてある買い物袋を持ち上げた。

「ありがとう、久徳くん」

屈託の無い笑顔を浮かべるカヤとは対照的に、くるりとこちらに振り返った久徳の笑顔は怯えているようにも見えた。なんか……様子が変だな。まるで、脅されてカヤに親切にしているみたいだ。ちらりと静流姉さんを見やると、呆れたような微笑を浮かべている。姉さんが何かしたのか？

ってか、その前に、なんで久徳までここにいるんだ？

「ほらほら、かっちゃん！」

困惑して表情を曇らせる俺を、曽良が肘うちしてきた。振り返ると、アヒル口がにぱっと開いている。相変わらずの能天気な笑顔だ。

「ぼうっとしてないで。中に入って」

中って……リビングか？　リビングに何がある？　不気味にさえ感じて、いぶかしげな表情でリビングを見つめる。

すると、くいっと袖がひっぱられるのを感じた。ハッとして振り返ると、

「和幸くん、行こう」

「……」

つい、呆けてしまった。穏やかで、優しくて、暖かい笑顔。カヤが帰ってきた——滑稽な表現だが、そう感じたんだ。

俺は何も答えられず、カヤに引っ張られるままリビングへと足を進めた。

＊　＊　＊

曽良くんのアドバイスは的確だった。静流さんはあっという間にカインの兄弟姉妹を集めてしまった。電話一本で。しかも、久徳くんやあの留王くんまでわざわざ私に謝りに来てくれたのだ。今朝は失礼なことをしました……て。一体、静流さんは電話で皆さんに何と言ったのだろうか。とても気になるけど、そこまで詮索する権利はない。

というより……もう、今となってはどうでもいい。

私はちらりと横で立ち尽くす和幸くんを見つめた。目をまん丸に

してきょとんとしている。こんなにぼけっとしている彼は、初めて見る。私はつい笑ってしまった。

「お、放蕩息子！」

「お先食べてまーす」

そんな声がリビングに響いて、そして和気藹々（あいあい）とした笑い声が溢れた。

リビングには、十人ほどの、中学生から大学生までの様々な人々の姿があった。テーブルの上のピザを囲んでいる四人の中には、アリサさんや茶々さん、留王くんの姿もある。

皆、見た目はまったく似ていない。和幸くんともこれっぽっちも似ていない。それでも、彼らは繋がっている。藤本という苗字で。

「久徳、こっちビールちょーだい」と、アリサさんがテーブルの一番奥で手をあげた。

「あ、はいはい」

まるで居酒屋の店員のようなはきはきとした声でそう返事をして、久徳くんが私と和幸くんの間を通り抜けて買い物袋をぶらさげてリビングに入っていく。

和幸くんは依然としてぽかんとしていた。私はそんな彼を見ていることに快感さえ覚えていた。だって、大成功ってことだもん。これこそ、サプライズパーティー。夕べは……私が驚かされちゃったもんね。

「和幸！　お前、土足じゃん！？」

ピザを片手に大学生くらいの男性がそう言って笑い出した。確か、平良（たいら）さん、だったかな。あごひげを生やした体格のいいお兄さんだ。

「あ、ほんとだわ。静流にケンカを売ってるのかしら。やっぱり痛めつけられたいのね！　やん、たまらなーい」

久徳くんからビールを受け取って、アリサさんが高らかな声でそう言った。「アリサ姉さん、相変わらず品が無い」と誰かがぼそりとつぶやいたのが聞こえてきた。

和幸くんは皆に笑われているというのに無反応だ。ちらりと足元に目をやると、確かに土足。よっぽど困惑させてしまったのだろうか。

「そういえば、平良兄さん、健康診断行きました？」

雰囲気にあわない冷静な声が聞こえてきた。茶々さんだ。そういえば、彼女は一人だけ始終真顔だったな。クールな少女なんだろうか。

「健康診断？　何の話だよ？」と平良さんが答え、それをきっかけに、皆は和幸くんの靴から目を離してそれぞれ内輪の話を始めた。

これが最後だっていうのに、全然しんみりとした雰囲気はないんだな。それはそれで、絆を感じた。皆、分かってるんだろう。離れ離れになっても関係は変わらない、て。会えなくなっても、家族は家族。裏の世界で苦楽を共にしてきたんだもんね。私が想像もつかないくらい、固い絆で結ばれているに違いないんだ。

しばらくしてから、やっと「どうなってんだ？」という彼の声がした。振り返ると、和幸くんは眉間に皺を寄せて呆然としていた。

「他にもいっぱい来るって」

「……え？」

間の抜けた声をもらし、彼はこちらに振り返った。私はじっと彼の目を見つめて告げる。

「『勘当』のこと、静流さんから聞いたよ」

「！」

「だから、いっぱい楽しんでね」

そのための、卒業パーティーなんだから――私は微笑みながら、そう心の中でつぶやいた。やはりまだ状況がつかめていないのだろう。彼は依然として放心状態。どこから質問をしたらいいのかも分からないのかな。

ごめんね、今は我慢してね。説明している時間ももったいないから。

私は「さ、靴脱いで」と微笑みかけた。

「玄関に置いてきてあげる」

「カヤ」と和幸君は眉をひそめた。「まさか、お前が皆に……」

その質問はまたあとで。私は何も答えずに微笑して、手を差し出す。

「靴、脱いで」

彼の靴を預かって私はリビングを後にした。ドアを閉める直前にちらりと振り返ると、彼が子供みたいな笑顔で平良さんに話しかけているところだった。見たことも無い表情だった。平良さんに肩を叩かれて、嬉しそうに何かを言っている。

静かにドアを閉め、私はため息をついた。もちろん、安堵のため息。

今日一日、本当にいろいろあった。盗撮写真の騒ぎに始まって、髪まで切った（切られた？）。心身ともに疲れがたまっていたはずだけど、部屋からもれてくる彼の楽しそうな笑い声を聞いただけで、そんなの吹っ飛んでしまう。

静流さんから『勘当』のことを聞いたとき、胸が引き裂かれそうになった。これで本当の本当に、最後なんだよね。和幸くんは二度とカインの皆とは会えない。

私はドアにもたれかかって、リビングの音に耳を傾ける。

だからね、たっぷり皆と話してね。悔いが無いように、たくさん話してね。

それで――と、私は靴をじっと見下ろした。祈るように目をつぶると、心の中で彼に話しかける。

カインの皆と気が済むまで話したら……そしたら、その後は、独り占めさせて。私の相手、してね。それまで我慢してるから。いろいろわがままを聞いてね。抱きしめて欲しいし、キスもしたいし、それに……

ううん。その前に、大事な話があるの。とてもとても、大事な話。あとでゆっくり、二人きりで話そうね。

ドアから背を離し、私は玄関へ向かって歩き出した。玄関には、向かい合う曽良くんと静流さんの姿があった。

＊　＊　＊

「気が乗らないのはあんただけじゃないよ、曽良」

リビングへ向かう和幸たちの背中を見送りながら、静流は唐突につぶやいた。曽良はハッとして静流に振り返る。姉の鋭い眼差しは、弟とその恋人へ向けられたまま固定されている。

「でも、家族の中にあの女を疑う人間が居る限り、あたしらも疑わなきゃならない。ここまでリスクを負っちまったんだ。あたしらも保険はかけなきゃね」
「保険、ね」

曽良は冷笑して視線を落とす。静流は皮肉の混じった声色に気づいて、ちらりと視線を曽良に向けた。

「曽良」と酒やけのような声で注意をひく。脅すようなトーンではなく、諭すような声色だ。「お前はリーダーだ。和幸とは違ぇんだよ」

言われて、曽良は睨むように静流を見上げた。反抗的な彼の視線に構うことなく、静流は低い声で続ける。

「カインか、あの子か。そんな選択肢はあんたにはない。あんたの選択肢は、いつだって家族だけだ」
「……」
「もし、あの子が『黒幕の娘』……もしくは『黒幕』の息のかかった女なら」

段々と、静流の表情は険しくなっていった。ナイフを持つ手に力がはいる。曽良はそんな姉に気づいて、心配そうに眉をひそめた。

「姉さん」とつぶやくと、ため息を漏らす。「分かってるよ」

先ほどまでの反抗的な目つきは消えて、優しげに静流を見つめていた。アヒル口は静流の見慣れた形に開いている。あっけらかんとした笑顔だ。

「もしものときは」と低い声で言って、曽良は涼しげな表情でリビングのほうに目をやる。「カーヤの『お片づけ』は俺がやる」

お片付け――その言葉に、静流は目を薄めた。カインは確かに殺し屋と言われているが、基本的に身を守るためにしか人を殺さない。だから、その暗号はカインの間ではあまり使われないものだった。その意図することは、暗殺。

静流は観察するようにじっと曽良を見つめ、おもむろにポケットからある物を取り出した。

「皆にも言ったけど……これは、あたしらにとってもチャンスだ。もし、あの子が『黒幕』につながっていれば――」

静流が取り出したものは、大きめの十字架がついたネックレス。厚さのあるシルバーの十字架だ。

「あの子を通じて『黒幕』に辿り着けるかもしれない」

言って、静流はネックレスを曽良に渡す。

「この餌にかかってあの子が行動を起こせば、あたしらの勝ち」

餌……静流の言うそれが何か。曽良には分かっている。今、そして、これからここに集まってくるカインだ。命を狙われるのを覚悟でパーティーに参加することを承諾した兄弟姉妹たち。

受け取ったネックレスをぐっと握り締めると、曽良はぽつりと尋ねる。

「行動を起こさなければ？」

「和幸の勝ちだ。女を見る目がある、て認めてやらねぇとな」

ここにきて冗談めいたことを口にした静流に、曽良は鼻で笑った。

「たとえ勝っても……かっちゃんは怒るだろうねぇ。このパーティーが、カーヤを陥れる罠だって知ったら」

「陥れるんじゃねぇ。試すだけだ」

言いながら、静流は反対側のポケットから黒い携帯電話を取り出した――いや、正確には携帯電話に似せて造られた機械だ。曽良はなにも言わずにそれを受け取って、ネックレスと一緒にポケットにつっこむ。

「それに」ちょうど、誰かが近づいてくる気配がして、静流は声を落として言う。「あいつが知ることはない。知らなくていい。万が一、神崎カヤが『黒幕』に通じていたとしても、あの子は知らなくていい」

曽良はぴくりと眉を動かした。

「かっちゃんにバレないように、フィアンセを殺せってこと？」

「それが、一家の大黒柱のすることだよ、曽良」

ふうっと大きくため息をつくと、「曽良くん」と微笑みながらこちらにむかってくる少女に笑みを浮かべて手をふった。

「分かってる」と、静流に聞こえる程度の小声でつぶやく。「彼女のことは俺が責任をもつよ」

サプライズ（後書き）

未成年の飲酒は法律で禁じられています。まねをしないように……。

和幸との約束

「和幸ちゃん、楽しんでるね」

美月さんが鍋をおたまでかきまぜながら、目を細めてそう言った。鍋からはゆげとともに食欲をそそる香りがあふれ、のぞけば辛そうな赤で染まっている。キムチ鍋らしい。ちょうど寒くなってきた今の季節にぴったりだ。

静流さんのキッチンは、リビングと壁を隔てて独立したかたちになっている。といっても、ドアはないからリビングの音はつつぬけだ。さっきから皆はなにやら大騒ぎ。和幸くんの声も聞こえてくる。

ただ、美月さんは「楽しんでる」と言ったが、私には悲鳴に聞こえて仕方が無かった。一体、何してるんだろう？

「お腹すいた？」

美月さんは小皿に汁をほんのすこしだけ注ぎながら、そう言って私に微笑んだ。薄桃色のエプロンがよく似合っていて、台所に立つ姿は旦那さんを待つ新妻さんみたい。

「少し、すいてきました」

「そう。もうちょっと待ってねぇ」美月さんは愛くるしい垂れ目を細めて、満足そうに頷いた。「よかったら、そこの林檎食べていいからね」

言われて、まな板にのっかる林檎に目をやる。ルビーのように真っ赤な林檎。いい具合に熟していそうだ。

「しずるん、林檎むきが大好きなの。だから、いっぱい林檎あるん

だよ」

趣味は林檎むき？　そういえば、今日初めて会ったときも、綺麗にナイフで林檎をむいていたっけ。

「さて、どうかなぁ」とつぶやくのが聞こえて美月さんに振り返ると、ちょうど小皿に注いだ汁をすするところだった。小皿から口を離すと、「うーん」と悩ましげな表情を浮かべる。どこか曽良くんを思わせる横に伸びた唇には、落とし忘れた口紅のように赤い汁がついている。それをぺろりと舐める仕草に、私は見入ってしまった。

二つしか歳は違わないのに、なんでこんなに色っぽいんだろう。動作一つ一つに色気が漂っている。う……うらやましい。

じっと見つめていると、美月さんが「ん？」と不思議そうな表情でこちらに振り返った。私の視線を感じたみたいだ。

「どうかしたぁ？」

「い、いえ！」私は恥ずかしくなって慌てて目を反らす。すると、赤い林檎が目に入り、「林檎、真っ赤ですよね」

咄嗟に変なごまかし方をして、私は林檎を手に取った。美月さんは「そうだね」と、特に疑う様子もなく笑む。私も負けじと笑顔を浮かべた。そのときだった。

「どうにかしてくれよ、もう！」

「！」

突然、そんな疲れ果てた声をあげてキッチンに現れたのは、

「和幸ちゃん、どうしたのぉ」

和幸くんだった。げっそりとした表情で、顔色が悪い。悪夢でも見たかのようだ。なぜか痛そうに肩をおさえて、ぎこちなく回している。やっぱり、楽しんでたわけじゃなかったんだ。あの悲鳴は、本当に悲鳴だった――そう直感した。

「アリサ姉さんだよ」言って、キッチンに入ってくる。美月さんの影になっているからか、私には気づいていないようだ。「覚えたての関節技を次から次へと……。なんで親父があの人に医学の道をすすめたのか、よく分かるよ。悪い意味で、あの人は人体に興味があるんだ。ろくな医者になりゃしない」

彼にしては珍しく長々と愚痴を並べ、美月さんの背後の冷蔵庫によりかかる。肩が気になるようで、ぶつぶつ何かを言いながら肩をさすっている。そしてため息をついて顔を上げ――私とばちりと目があった。そして幽霊でも見たかのように、ハッと目を見開く。やっと私の存在に気づいて驚いたかな。

「台所にいるとは思わなかった？」と照れ笑いを浮かべて言って、美月さんを見やる。「美月さんのお手伝いしようと思って。といっても何もしてないけど」

「ちゃーんと手伝ってくれてるよぉ」

言いながら、美月さんはさい箸で器用に豆腐を掴んで持ち上げた。湯気を立てながらぷるぷると震える豆腐。崩さずにお箸で持ち上げるなんて、微妙な力の入れ具合が必要とされるに違いない。美月さんの豆腐を見つめる目は真剣だ。

そんな美月さんの横顔に見とれていると、ふと、和幸くんが近づいてくる気配がして私は彼に視線を戻す。そのときにはすでに彼は目の前に立ちはだかっていて、「え」と思わず後ずさってしまった。

それも、まるで怒っているかのような、張り詰めた表情。いきな

り、なんだろう。

「和幸……くん？」と震える声で呼びかけた途端、彼は力強く私の右手首を掴んだ。「痛っ！」

悲鳴に近い声が出て、思わず持っていた林檎が手から転がり落ちる。あ、と思ったときには足元に赤い林檎がころころと揺れていた。

「どうしたの？」怪訝そうな表情で、美月さんは豆腐を箸で掴んだままこちらに体を向けた。

私と美月さんの間で立っている彼は、美月さんに背を向けた状態になっている。だから、美月さんには分からないだろう。彼の……この、鬼気迫る表情は。

私の手首を掴む彼の手が若干だが震えていた。林檎を落としてから、力は弱まったけど……それでも、まだ痛い。長谷川さんに誘拐されたときのことが頭に浮かび上がった。

「神崎ちゃん、怖がってるじゃない」

いつもよりほんの少しだけ低い声で、美月さんは和幸くんの背中に呼びかける。余計な力が入っているのだろう、さい箸にはさまれている豆腐が今にも逃げ出しそうだ。美月さんはもしや、豆腐を掴んでいることを忘れているんじゃないか、とさえ思った。

「和幸、手を離しなさい」

ぴくりとも動かない彼に、さっきよりも強い語調で美月さんはそう命じる。

それでも、彼は見向きもしない。ただ、じっと恐ろしいほど真剣

な瞳で私を見つめていた。美月さんは正しい。私は……怯えている。

「和幸くん……ごめんなさい」

消え入りそうな声で私は謝っていた。彼が今何に対して怒っているのかは分からない。でも、何かを責められているような気がして仕方が無かった。無言で罪を問い立たされているような、そんなプレッシャーを感じたんだ。

その感覚が正しかったのかは分からない。でも、事実、和幸くんはやっと我に返ったようにハッとした。一つ瞬きをすると、ゆっくりと私の手首を離してくれた。私は右手を胸の前に持ってきて、そうっとさする。あざが残るほどではなかったけど……それでも、まだ痛みを感じるほどの力だった。

彼は思いつめた表情でうつむくと、頭を抱えた。よくよく観察してみると、彼の額には汗が噴き出ている。息遣いも荒く、たった今、階段を駆け上がってきたかのよう。

彼の背後では、美月さんがいぶかしげな表情でじっとこちらを伺っている。

「どうしたの？」と彼の顔をのぞきこんで尋ねる。「私、何かした？」

謝って彼が手を離してくれたのだから、きっと私が何か悪いことをしたのだろう。それも、ここまで動揺させるほどのことを。

和幸くんはじっと下を見つめて動かない。ただうつむいているだけではないのかも。そう思って視線をたどると……そこにあったのは、林檎。

「食べなきゃいい」

「え」

ぽつりとつぶやいたかと思うと、彼はすばやく落ちていた林檎を拾い上げた。見えない亡霊から奪い取るかのように、乱暴に。背筋を伸ばすと、林檎を片手に私を真剣な眼差しで見つめてきた。さっきとは違って、懇願するような表情だ。

「二度と、林檎に……こういう実には近づくな」

彼は低い声で脅すように言ってきた。美月さんは彼の背後でぽかんとしている。おそらく、私も同じような表情を浮かべていることだろう。

こういう実には近づくな？　一体、何の話？

「頼む、カヤ」

「！」

きょとんとしている私に、彼は一歩近づいて熱のこもった視線を向けてきた。

「頼む。絶対に……何があっても、変な実を食べないでくれ」

「は……い？」

自然と小首を傾げていた。変な実？　和幸くんが持っている実は林檎だよ？　静流さんが買った林檎だよ？　まさか、私が変なものを拾って食べるとでも思っているのだろうか。そこまで子供じゃないよ。

でも……彼は真剣そのもの。決して冗談を言っているわけではないみたい。彼が何を考えているのかは分からないけど、でも、和幸くんがそこまで言うなら私の答えは一つ。

「分かった」と戸惑いつつも頷く。「変な実は……食べないようにする」

といっても、そう簡単な話じゃない。私は遠慮がちに彼に尋ねた。

「でも、変な実ってどんな……」

「林檎に似た実だ！　いや、とにかく、林檎は食べないでくれ」

急に彼は声を荒げた。ますますワケが分からない。美月さんも、あのおっとりとした印象がどこかへ行って、怪訝な表情を浮かべている。とにかく、今は彼を落ちつかせるためにも、「分かったから」ともう一度はっきりと告げる。

すると、和幸くんはまじめな表情で、自分で確認するように何度も頷いた。

「それなら、いいんだ。それなら、いい」

ため息をついて、狂ったように同じセリフを繰り返している。その視線はいつのまにやら、彼の右手に収まっている林檎に向けられていた。

「食べさせなければいいんだ」

彼によからぬものが取り憑いているのではないだろうか。私はそうとさえ思った。

心配になって「和幸くん」と声をかけようと口をあけたときだった。ぐっと彼の手の甲に血管が浮き出たかと思うと、指が林檎にめりこんだ。思わずぎょっとして後ずさる。血のように林檎から果汁があふれ出し、彼の指にからみついていく。

リビングではまだお祭り騒ぎが続いているはずなのに、私の耳に

は何も入ってこなかった。無音の世界にいるようだった。私はゆっくりと彼の手形のついた林檎から彼の顔へと視線を移す。
親の仇でも見るかのような眼差し。悔しそうな表情。全ては、たった一つの無害な果実に向けられていた。

「和幸くん」気づけば私はそう言って、林檎を今にも潰しそうな彼の右手に手を添えていた。「大丈夫」

ハッとして彼は顔を上げて、充血した瞳をこちらに向ける。私は意識することなく、何かに導かれるかのように彼に囁きかけた。

「食べないよ。林檎も、それに似た果物も、絶対に口にしない」
「……」
「信じて、和幸」

理由は分からない。彼がどうしてそこまで林檎（に似た果実）にこだわるのか。でも……彼がそれを望むなら、それだけで私には充分な理由なんだ。一生、林檎を諦めたって構わない。彼がそれを望むなら……。
私はもうあなたを疑ったりしない。詮索もしない。ただただ、あなたを信じ続ける。そう決めたんだ。だって、分かったもの。あなたは、隠し事まで優しいんだ、て。私はあなたの全てを――隠し事も嘘も全部、愛する覚悟をしたの。
彼は何も言わずにじっと私を見つめていた。瞬き一つすることなく、私を凝視している。
私は彼から目を離さずに、彼の手から林檎をそうっとはずす。色も形も完璧だったはずの林檎は、いびつな形に変形して果汁まみれになっていた。私は彼を刺激しないように、ゆっくりとそれを流しの三角コーナーへと運んだ。ＵＦＯキャッチャーのアームのごとく、躊躇無く私は林檎を落とす。

「大丈夫」

そう言って微笑むと、彼はやっと瞬きをした。安堵したかのようにふうっとため息をつき、肩を撫で下ろす。表情は和らいで、力が抜けたようだった。そして――

「カヤ」と苦しそうな声を出して、彼はいきなり抱きついてきた。勢いよく迫ってきて、私は倒れそうになったのを流しに手を置いて食いとどまる。あまりのことに、心臓が大騒ぎ。ちらりと顔を上げれば、美月さんが「あらあら」とつぶやいてまじまじとこちらを見ている。私の頬は一気に紅潮した。

「カヤ」

彼は私の名前を何度も繰り返し、私の背中を必死に抱きしめていた。まるで、しがみつくかのように。悪夢に目を覚ました子供が甘えてるみたい。

「大丈夫」とりあえず私はそう言って、彼の背中をさすった。「大丈夫だよ」

「この子、よっぱらってるのぉ？」

呆れたような美月さんの声がした。

＊　＊　＊

俺は我を失った。カヤが林檎を手に立っているのを目にした瞬間、いつかのリストの声が蘇ったんだ。

――十七年経つと、『パンドラの箱』の中に、『テマエの実』と呼ばれる林檎に似た実が現れる。

まだカヤは十七にはなっていない。『収穫の日』も来ていない。彼女が持っている果実が、『テマエの実』であるはずはなかった。――だが、それでも我を失ったんだ。それほど、俺には恐ろしい光景だったんだ。

気づけば、彼女の手首を掴んで必死に懇願していた。変な実を食べるな、と。今となってはそのときのことはぼんやりとしか覚えていない。

『テマエの実』――カヤと世界の運命を変える運命の果実。カヤがそれを口にすれば、カヤは人でなくなり、世界は終焉へと確かな一歩を踏み出すことになる。そうなったら、残る未来は二つだけ。リストがカヤを殺して世界が残るか、カヤが世界を滅ぼすか。

俺は、どちらも嫌だ。そんな選択しかない未来は願い下げだ。だから……カヤと世界、どちらも在る未来――カヤのいる世界を得るためには、『テマエの実』をカヤに与えないことだ。逆に言えば、カヤから『テマエの実』を遠ざければいい。要は、カヤがそれを食べなければいい。

それが、俺がしがみついている希望。喉から手がでるほど欲している未来。

だから……だから、林檎を持つカヤなんて、今の俺にとって何よりも見たくない光景だったんだ。不吉で恐ろしい、悪い冗談に思えた。こんなものを俺に見せてどうしようっていうんだ――俺はそんな憤りを感じた。カヤへではない。得体の知れない『神』というものに、だ。この世界を『運命』の連鎖で縛り付ける連中。カヤを『使命』という鎖で牢獄に閉じ込める連中。これもまた、そいつらの仕組んだ悪戯なのか？

そう思ったら腹が立って、カヤの手首をつかんでいた。さっさと

このふざけた実をカヤの手から遠ざけなければ――その意思だけが俺の体を動かしていた。力加減とか、カヤの気持ちとか、そんなことを考えられるほど冷静ではいられなかった。目の前にある果実が『テマエの実』か林檎かも、どうでもよくなっていた。とにかく、「食べさせなきゃいいんだ」という言葉だけが頭の中で繰り返されていた。

食べさせなきゃいい。カヤに『テマエの実』を食べさせなきゃいい。そしたら、俺はカヤと一緒に未来の世界を生きられる。

『テマエの実』さえ、なければいい。

そんな憎しみにも似た気持ちがこみ上げて、俺は体の制御ができなくなった。気づけば、林檎から果汁がにじみ出ていた。長年、この（改造強化された）体と付き合って得た力加減の術（すべ）を失ったような気がした。理性が消えていく――そんな恐怖にさえ襲われた。

そのときだった。やわらかい『何か』が、暴走する俺の右手を包むのを感じた。柔らかくて暖かい『何か』。懐かしい感触。

「和幸くん」と、居心地のいい音がした。それが俺の名前であることを思い出し、それが声だと理解する。

「大丈夫」

優しくて甘美な声。段々と右手から力が抜けていくのを感じた。それとともに、右手に乗っかる果実しか見えていなかった視界が徐々に広がっていった。ゆっくりと顔を上げると、微笑を浮かべる女が俺を見つめている。

「食べないよ。林檎も、それに似た果物も、絶対に口にしない」

「……」

「信じて、和幸」

じっと俺を見つめる美しい女――女神か天使か。彼女が俺の目を見て名前を呼んでいる。包み込むようなオーラ。暖かい声。彼女の全てが、俺の体から緊張や不安、恐怖を取り除いていく。そのときになって、やっと俺は思い出した。手の中に在るそれは、ただの林檎でしかないことを。

彼女は俺の手から林檎を取ると、俺から視線を反らすことなく、それを棄てた。全ての動きに迷いは一切無かった。

そして彼女は優しさに満ち溢れた笑みを浮かべて言った。「大丈夫」と。その瞬間、体から一気に力が抜けた。冷静さを取り戻し、俺はやっと自分が取り乱していたことに気づいた。記憶が戻ってきて、俺はどういう経緯でどうしてここにいるのかを思い出した。

目の前にいるのは、まだカヤであることを思い出した。

その途端、体はまた勝手に動き、カヤを抱きしめていた。「カヤ」と確かめるように何度も呼んだ。俺のカヤ……彼女はまだここに居る。まだ手の届くところにいる。それを確認するように背中を強く抱きしめた。彼女の存在を実感したくて、そうやって自分を安心させたくて、狂ったように夢中で抱きしめた。まだ……まだ……まだ……頭の中で同じ文章が何度も何度も繰り返された。

「大丈夫」やんわりとした声が耳元で囁かれ、俺はいつのまにか閉じていた瞼を開く。背中を優しく何かが撫でるのを感じた。「大丈夫だよ」

心臓が大きく波打ち、彼女の背中を抱く腕がゆるんだ。大丈夫……その言葉が全身をかけぬける。――そうだよな。まだ、希望はある。

背後から「この子、よっぽらってるのぉ？」という美月姉さんの声が聞こえてきた。俺はおもむろにカヤから体を離すと、心配そう

な表情を浮かべるカヤを見つめた。「悪い」と謝って、「酒は飲むものじゃないな」と美月姉さんの言葉に乗っかった。

カヤは小首を傾げて微笑して、「そう」と小さな声でつぶやく。俺の嘘なんてバレバレだろう。でも、それ以上何も聞かないでくれた。俺は踵を返して、逃げるようにキッチンから出た。リビングの端で立ちすくみ、ため息をついてぐっと右手を握り締める。

何も解決したわけではない。カヤが棄てたのは林檎だ。『テマエの実』じゃない。『テマエの実』はあと一ヶ月と一週間もすれば否応無く現れる。でも……彼女の「大丈夫」という甘くせつない声が、俺を支えてくれる。そんな気がした。その言葉にすがって『収穫の日』を迎えようと思った。

「和幸、ちょっといいかい？」

唐突に聞こえてきたその声に、俺はハッと我に返って顔をあげる。腰に手をあてがって俺を見つめていたのは、静流姉さんだった。ぎゃあぎゃあと騒ぐほかの兄弟たちを不快そうな目つきで一瞥してから、「会わせたい人がいるんだ」と俺につぶやく。

「ってか、あんたに会いたい人……かな。玄関で待ってるから。会いに行ってくれる？」

静流姉さんにしては珍しく、つつましくも聞こえる落ち着いた声だった。

カインの十字架

あと二週間もすれば師走。ジャケットを羽織ってもさすがに肌寒い。曽良はリビングからもれる光を背にして手すりに寄りかかっていた。その手には月の光を浴びて銀色に輝く十字架。ネックレスのチェーンを指にからめると、十字架を手の平から滑らせる。このまま、ここから――三階のベランダから――この十字架を落としてしまえれば……。曽良は指に絡めたチェーンをぎゅっと握り締める。

リビングから漏れる騒ぎ声がいきなりはっきりと聞こえるようになったのは、そのときだった。誰かの影が伸びてくる。曽良は振り返ることもなく、ため息混じりに声をかける。

「君がパーティーに来るとは思ってなかったよ、カリー」

呼ばれた人物は後ろ手に窓を閉めて、曽良の背中をつり目で睨みつける。再び、兄弟たちの笑い声が遠くなった。

「その呼び方はやめろって言ったはずだ、曽良。俺はあだ名はいらない。特にお前の考えたやつはな」

言われて曽良はクスリと笑んで体ごと振り返り、手すりにのけぞるようによりかかった。

「はいはい。分かったよ、留王。その代わり、曽良お兄ちゃんって呼んでくれる？」

留王はぴくりと頬をひきつらせる。「相変わらず馬鹿だな、お前は」と吐き棄てるようにつぶやいた。曽良は弟の暴言を特に気にする様子もなく、「それで？」と微笑を浮かべる。

「お兄ちゃんに何か相談事？」
「ああ！」と皮肉たっぷりな声をあげると、留王はじりじりと曽良に歩み寄った。「静流姉貴からアレは受け取ったのか？」

アレ……と曽良はとぼけた顔で空を振り仰ぐ。留王は苛立ちをあらわにして肩をいからせた。

「ふざけんなよ！　何のことか、分かってるだろ」
「ああ」さも、たった今分かったかのように声をあげ、曽良は「これか」と右手に持っていたネックレスを留王に見せる。
その途端、留王は目を血走らせて押し殺した声で怒鳴りつける。

「お前、渡す気あるのか！？　このふざけたパーティーが始まって二時間経ってるんだぞ！？」
「ふざけたパーティー……ねぇ」言って、曽良は窓の向こうで楽しそうに騒いでいる兄弟たちを見つめる。「皆、楽しんでるみたいだけどな」

カヤが鍋を持ってリビングに入ってきた。皆が「おお」と声をあげるのが聞こえてくる。こうして外から見る分には、彼女はすっかり家族の一員だ。曽良は悲しげに微笑んでいた。

「楽しんでるフリだろ」容赦なく、留王はずばりと言った。「あの女をはめるために、皆は集まったんだ」
「かっちゃんに会うために、集まったんだよ」

曽良は目をつぶって諭すように訂正する。

「カーヤをはめるのは、そのついでさ」

「どっちでもいい。俺はとにかく、あの女の化けの皮をはがせたら満足だ」

言って、窓を隔てた明るい部屋を睨みつけるように覗く。そこには、皆に鍋をよそい始めた妖しいほどに美しい女の姿がある。気に入らない兄の婚約者だ。惜しみなく振りまいている笑顔が余計に留王をいらつかせた。

「留王は、カーヤを『黒幕の娘』だと信じてるんだね」

落ち着いた声でそう尋ねられ、留王はハッとして振り返った。だらしなく手すりによりかかりながら、曽良は刺すような視線をこちらに向けている。珍しく、真剣な表情だ。留王はポケットに手をつっこむと、ガンつけるように顎をひいた。

「当然だ」きっぱりとそう言うと、曽良の片方の眉がぴくりと動く。留王はそれを見逃さなかった。責めるような瞳で見つめると、淡々と続ける。「あやしいと思わないのか？」

「……」

「なんで親父まで、あの女を信じてるんだ！？　俺にはさっぱり理解できない！

和幸がカインだと名乗って、その夜に神崎は自殺した。タイミングがよすぎるとは思わないのか！？」

曽良はじっと留王のつりあがった目を見据えていた。アヒル口はぎゅっと閉じられている。開かれようという様子は一切無い。

「なあ」と曽良の返事を待たずに留王は低い声で切り出す。「神崎は本当に死んだのか？」

曽良はいぶかしげな表情を浮かべた。何を言い出すんだ？　と驚いているようだ。留王は構わず推理を続ける。

「神崎の死体を和幸は確認したのか？　いや、していない。和幸はあの女から話を聞いただけだろう。先週の葬式にもあいつは行かなかったらしいし。

こうは考えられないか？　神崎の死は、あの女をこちらに送り込むための――和幸の同情を買うための、大掛かりな芝居で……」

「かっちゃんはそれにまんまとひっかかった？」

軽くあしらうように曽良はそうつぶやいた。留王は、しかし、鷹の目のように鋭い視線で曽良を凝視する。

「お前たちが、まんまとひっかかったんだ」

「！」

さっきまでの余裕の微笑は消え去り、曽良は目を見開いて留王を見つめた。留王はその反応に、自分が立てていたある仮説があたっていたことを確信し――落胆した。

「やっぱりか」と鼻で笑う。ちらりと曽良の右手に握られている十字架のネックレスを見やった。「ソレを渡せない理由がよく分かった。お前があの女の肩をもつのは和幸のため――そう信じたかったが……もっと、個人的な理由があるみたいだな」

曽良は何も言わない。真剣な表情で留王を見据えているだけだ。

「このパーティー。皆、命がけで来てる。あの女が『黒幕』の手下なら、俺たちはこれで全員アウトだ。顔も名前も知られたんだからな。そのリスクを分かって皆来たんだ。和幸のためじゃない。これ

は、あの女もろとも、『黒幕』を消せるチャンスだからだ。そのために、皆こうして集まった。俺たちが神崎カヤをもう疑っていない――そうあいつに信じ込ませて、油断させるために。

どうして皆がそこまでのリスクを冒していると思う？」

「……」

熱く語る留王とは対照的に、責められている曽良はどこか冷めた表情を浮かべていた。ちらりと留王から目をそらし、リビングの様子を伺う。窓の向こう側では熱い鍋を囲んで皆が楽しげに笑いあっている。外はこんなにも寒くて心まで凍りつきそうなのに。そう思うと、虚しくなる。

曽良は諦めたようにため息をつくと、留王に手を差し出した。ネックレスをもっていないほうの手だ。留王は眉をひそめて「んだよ？」と困惑の声を漏らす。すると、曽良は落ち着いた様子で言う。

「銃。渡して」

「！」

「持ってきてるでしょ。カーヤを殺すために」

それは、恐ろしいほどに冷静な声だった。さっきまでとは違う。冷酷にも思える表情。留王は一瞬たじろいで、後ずさった。

「留王。銃、渡して」と語調を強めて曽良はもう一度言う。

「なんで、渡さなきゃならない！？　俺の勝手……」

「今、彼女を殺されたら困る。分かってるでしょ。彼女はしばらく泳がせるんだ」

その言葉に、留王は目をむいた。あの女を騙すのをしぶっていたのではないのか、という疑問がうずまく。

「もしものときは、彼女の『お片づけ』は俺がやる。皆にもそう伝えてある。いや、約束した。だから……皆、リスクを承知で来てくれた。そうだよね？」
「！」

それはまさしく、さっきの質問の答えだった。留王はつり目をめいっぱい開いて曽良を見上げる。いきなりたたき起こされたような表情で。
曽良のアヒル口はフッと笑みを浮かべ、穏やかな眼差しが留王に向けられていた。

「分かってるよ、留王。兄ちゃんを信じて」

言われて、留王は呆然とした。豆鉄砲をくらった鳩――その例えがまさに当てはまるような顔だった。

「……誰が、兄ちゃんだ。気持ち悪ぃんだよ」

我に返ったように顔をしかめると、ぼそりと悪態をつく。しばらく唇をかみ締めながら曽良の左手を見つめ、そしてゆっくりと腰に隠しておいた銃を取り出した。どこか腑に落ちない表情を浮かべつつも、曽良の目をみることなく、おもむろにそれを手渡す。
曽良は目を細め、「ありがとう」とつぶやいた。

「『もしものとき』が、手遅れじゃないといいな」曽良が受け取った銃を腰に差すのを見つめながら、留王はぼそりとつぶやいた。「もう、手遅れかもしれないけど」

曽良は難しい表情を浮かべて、またリビングへと目を向けた。そして、はたりと少女と目が合う。にこりと穏やかな笑顔を浮かべる

愛らしい少女。笑顔を返すと、少女は立ち上がってこちらに向かってきた。
曽良は右手の中に眠る十字架を、ぎゅっと握り締める。
家族か、彼女か。自分にはそんな選択肢はないんだ――そう自分に言い聞かせた。

＊　＊　＊

「お鍋、食べないの？」

ベランダに足を踏み入れ、私は開口一番そう尋ねた。皆の熱気とお鍋のゆげで汗ばむほど暑い部屋の中と違って、外はすっかり冬の寒さに近づいていた。思わず、両腕をさすって震えた。
ベランダで何やら話し込んでいた二人――曽良くんと留王くんはしばらく黙ってから視線を交わした。そして曽良くんがいつもの明るい笑顔を浮かべて、

「留王、食べておいでよ」

その瞬間、留王くんはハッと目を見開いた。すぐには答えず、曽良くんを睨むように見つめている。なんだか……張り詰めた空気が漂っていた。この二人、もしかしてケンカでもしていたのかな。私、まずいときに来ちゃった？　どうしよう。今からでも、部屋の中に戻ろうかな――そう思ったときだった。

「そうだな」と留王くんは微笑んで頷いた。さっきまでの神妙な面持ちは消え去っている。「腹減ったし。お前の分も食べとくよ」

曽良くんは苦笑して「そうして」と答えた。曽良くんは食べないんだろうか。体調でも悪い？　じっと彼を見つめていると、「カー

ヤ」と甘い声で呼びかけられた。儚げなその笑顔は、あまりにも色っぽくて私は思わず顔を赤らめた。

「渡したいものがあるんだ。向こうで話そう」

向こう、と言って曽良くんが視線を向けたのは、リビングの隣にある静流さんの寝室のベランダ。境がないから、歩いていける。でも、リビングの光があふれるこちら側と違って、真っ暗。わざわざ、なんで場所を変えるんだろう。どちらも同じベランダなのに。戸惑いつつも、私は頷いてベランダを歩き出す。丁度、入れ替わるように留王くんはリビングに入っていった。

「渡したいものって？」

静流さんの寝室はカーテンで締め切られていて、中を伺うことはできない。でも、きっとエスニック調の小物であふれてるんだろう、と予想がついた。ちょうど真ん中あたりにきたところで立ち止まり、私は曽良くんに振り返った。リビングから溢れる光が逆光となって彼の表情はよく分からない。でも、「これなんだけどね」と答えた彼の声色はいつも通り明るくて、とりあえずホッと安堵した。さっきの切なげな笑顔……なんだったんだろう。

「じゃーん」と言って、彼はネックレスを私に差し出した。暗がりで細部までは見えないが、それが十字架がぶらさがったネックレスだということは分かった。

「ネックレス？」

そう尋ねると、曽良くんは深々と頷く。

「カインの皆からのプレゼントだよ」
「え」耳を疑った。カインの皆から？　私に？　「うそ」
「ほんと」

アヒル口がにぱっと開かれたのが分かった。胸が苦しくなって、感情の波が――溢れてしまいそうなほどの嬉しさが襲ってくる。曽良くんは気づいてるだろうか。私の瞳が……潤んでしまってること。だって、あれほど嫌われてた皆さんから私にプレゼントだなんて……だめだ、泣いてしまう。

「つけてあげるね」

思わずうつむいた私に、優しく彼はそう言った。気遣うような声色で、彼が私の涙に気づいたことを悟った。もう隠すこともせずに、私は「うん」と涙声で答える。
私の背後に回った彼は、頭上からネックレスを私の首元におろした。月明かりに照らされる十字架が目の前に降りてくる。神秘的にも思えた。

「約束して欲しいんだ」

背後から、彼の真面目な声が聞こえてきた。

「約束？」私は胸元の十字架に触れながら尋ねる。
「お風呂に入るとき以外、絶対にはずさないで」
「！」
「お守りだから、いつも身につけておいて欲しい。カインの兄弟たちからのお願いなんだ」

言いながら、彼は私の目の前に戻ってきた。真剣な表情が、月光

に照らされている。高い鼻の影が濃く落ちて、ニホン人離れした顔立ちが強調されていた。

「誓える？　カインのお嫁さんとして」

ぎゅっと十字架を掴んだ。カインの皆からのお守り。彼らから認められた証。これを片時も離さない――そんなこと、きっと言われなくてもしていた。

「もちろん」と私は曽良くんに微笑んだ。「誓うよ」

「ありがと」

丁度、彼がそう言ったときだった。冷たい風がベランダを通り抜け、痺れるように体中が震えた。「寒っ」と思わずつぶやいて、身を縮こませる。さすがにコート無しでこのアリサさんのワンピースで外にでるのは無理があったな。

「カーヤには、かっちゃんを好きでいて欲しいんだ」

唐突に曽良くんはそう言って、着ていたジャケットを脱いだ。「え？」と戸惑う私に、彼はそのジャケットを私に羽織らせる。そのまま、ジャケットの上から私の両肩をつかみ、食い入るように見つめてきた。

真剣な眼差し。視線で焦がされてしまいそうだ。ただでさえ人並み以上にキレイな顔立ちが、より一層魅力的に見えた。なんだか、曽良くんじゃないみたい。雰囲気が、全然違う。

そして彼はまじめな表情でこう言った。

「俺はかっちゃんを好きなカーヤが好きなんだ」

「！」

「だから、カーヤがかっちゃんを好きでいる限り、俺もカーヤが好きだよ」

なに……言い出すの？　何を言ってるの？　曽良くんの言っている意味が分からなかった。解けもしない謎かけをされているようだった。

「曽良くん？　何の話……」言いかけたとき、肩をつかむ彼の手に力がはいったのを感じた。ぐいっとひきよせられ、気づけば私は彼の胸の中にいた。

「！」

ぎゅっと背中を彼の腕が包み込む。

私は状況がつかめずにいた。どう反応すべきか判断しかねて硬直する。

確かに、曽良くんに抱きつかれることは今まで何度かあったけど……それとはどこか違う。今までなら、抱きしめられてもいつも胸元には卵一個分くらいの隙間はあった。おそらく気を遣っていたんだと思う。でも、今は違う。息が苦しいくらい密着している。彼の心臓の音まで伝わってきそうだ。

これはただの挨拶のハグなんかじゃない――そう悟った。と、同時に「どうしよう」という気持ちが心の中を覆い尽くす。心臓が慌てて血液を体中に送り出す。さっきの彼のセリフが脳裏によぎる。私を好きだと言った彼の声。

「曽良くん、困るよ」かろうじてそんなセリフが口から漏れた。「和幸くんに見られたら……」

なに言ってるの、私。もっと他に言うことあるでしょう。これは

……ここで和幸くんの名前を出すことは、卑怯だ。

「私は、曽良くんとはいい友達でいたいから」

言い直し、私は密着している二人の体の間に手を滑り込ませる。彼の胸元に到達すると、やんわりと押した。それだけで、簡単に彼は離れてくれた。でも……二人の距離は依然として近くて、彼の顔が目と鼻の先にある。そんな距離で熱のこもった瞳で見つめられ、私の鼓動は勢いを増した。思わず、息を呑む。

「もう友達ではいられないよ」

「！」

幼い子供を諭すような言い方だった。私は思わず「そんなことない」と考えもせずに口走っていた。――言ってすぐに気づいた。そんなことあるんだ、と。『勘当』という言葉が脳裏によぎる。そう。和幸くんが『勘当』されれば、私もカインとの関係は絶たれる。静流さんからそう聞いたじゃないか。

つまり、曽良くんや砺波ちゃんとも会えなくなるんだ。自然と視線が落ちた。胸が締め付けられる。

「かっちゃんを裏切らないでね」

聞いたことのない、寂しげな曽良くんの声だった。眉をひそめて顔をあげると、やはりつらそうな表情が浮かんでいた。別れを惜しんでいる――そんなものじゃない。どこか、藤本さんに似ていると思った。赦されたいと切望する罪人のような表情。どうして、曽良くんがそんな顔するの。そもそも、言ってることだって彼らしくない。

「裏切るわけない。曽良くん、どうしちゃったの？」

曽良くんの様子が、明らかに変だ。怖くなってきて、責めるような口調でそう尋ねた。曽良くんは何も答える様子はなく、ただじっと見つめているだけ。私はまくし立てるように続ける。

「何かあったの？　私でよければ、話聞く――」

それは……一瞬の出来事だった。想像もしていなかった出来事だった。体が反応できないほどに、唐突だった。

言葉を続けることはできなかった。気づいたときには口が塞がれていた。いつも愛らしく微笑んでいた彼の唇に。

混乱して、感覚まで麻痺しているようだった。彼の唇の感触も伝わってこない。すぐにも彼を突き飛ばすなり何なりしなきゃいけない。抵抗しなきゃいけない。そう分かっていても……体が動かなかった。目も瞑れずに、ただ硬直した。身をかがめて私に口付けをする彼の長い睫毛が目の前にある。

自分の心臓の音が直に聞こえてくるようだった。ドクンドクン、と一つ一つ大きくゆっくりと波打っている。不思議と落ち着いていた。心臓も状況がつかめていないのかもしれない。

何十分にも、何時間にも、思えるほど長い口付けは、きっと数秒だったんだと思う。彼はゆっくりと唇を離すと、悲しそうな微笑を浮かべた。

「もう二度と、会えないといいね」

「！」

ぼそりとつぶやいた彼の言葉に私は驚愕して目を見開いた。キスしてから言うセリフ？　言ってることとやってることが滅茶苦茶だよ。そもそも、和幸くんを裏切るな、て言ったのは曽良くんじゃな

い。他の人とキスするのって、裏切りにははいらないの？　私は……一体、どうすればいいの？　何を言えばいい？　どう反応すればいい？　やっとここにきて、心臓が大慌てで働きだした。体が熱くなっていく。

とりあえず何かを言わなきゃ、と口を開けてはみるものの、結局言葉は出てこない。エサを求める金魚のようにパクパクと虚しく動かすだけだ。

そんな私を愛おしそうに見つめて、彼は「サヨーナラ」と軽い調子で言った。

丁度そのときだった。リビング側の窓が開く音がして、誰か人影が出てくるのが目の端で見えた。

兄弟ゲンカ

静流姉さんに連れられて玄関に着くと、そこにはスーツ姿の男が立っていた。二十代後半……だろうか。やや天然パーマの髪。妙に凛々しい濃い眉毛。細長い目。長方形の輪郭。見覚えの無い顔だ。俺は思わず顔をしかめた。

「翔太さんだ」と静流姉さんが横から口を出した。「あんたは初めて会うんだろ。挨拶しな」

翔太……さん、か。年上のカインを、兄や姉と呼ばずに「さん」付けするのは、相手が『出稼ぎ』に出ている場合だ。たとえそれまで「兄さん」「姉さん」と呼んでいても、『出稼ぎ』が始まった途端「さん」付けになる。それが藤本家の決まりだ。

『出稼ぎ』は、殺し屋を引退して表の世界で働くことを意味する。といっても、単に働くんじゃない。要はスパイだ。カインはカイン。殺し屋でなくなっても、裏社会の人間であることは変わらない。表の顔は、いつだってはりぼて。日向では、仮面をかぶり嘘を着飾ってしか生きていけない。

この人も、偽りだらけの生活を送っているに違いない。きっちりとしたスーツを着込んで、パッと見、まじめなサラリーマンでも、裏では親父に情報を漏らしているんだ。そして……と、俺は翔太さんの左手を見つめた。薬指にはシルバーのリング。婚約……もしくは、結婚している。相手は翔太さんの正体を知っているのか？　いや、知らないだろう。結婚もまた武器。情報を得るための、権力を得るための、有効な手段だ。恋愛結婚であるはずはない。

翔太さんの、あっさりとした所謂(いわゆる)しょうゆ顔を見上げ、俺は「和幸です」と軽く会釈する。

「初めまして、和幸くん」はきはきとした口調でそう言って、翔太さんは静流姉さんを見やる。「ありがとう、静流」

静流姉さんは愛想笑いのようなものを浮かべて頷くと、踵を返して去っていった。気持ち悪いほどしおらしくて俺は眉をひそめてその背中を見送った。さすが、仁侠映画好き。年上には従順だな。

「突然、お邪魔して悪いね。パーティーの最中なんだろう」

優しげな声でそう言われ、俺は弾かれたように振り返った。

「いえ。でも、俺に何の用ですか？」

俺も全てのカインに会ったことがあるわけではない。正直、全部で何人のカインがいるのかなんて分からない。特に、『出稼ぎ』に出ているカインとは接点はない。知り合えるはずもない。多分、カイン全員を把握しているのは親父くらいだろう。あとは……曽良か。リーダー代理なんだ。連絡係もしていたし、あいつは少なくとも全員の連絡先は知っているだろう。

だから、この人が俺を訪ねてきたのが不思議だった。会ったことの無い弟の卒業パーティーに顔を出すわけはない。俺がカインを抜けることで文句でも言いにきたのだろうか。いや、それにしては表情は穏やかで怒ってる様子はないし。

俺がいぶかしげな表情で返事を待っていると、翔太さんはどこか恥ずかしそうに鼻をかいて微笑んだ。そして、つぶやいた。予想もしていなかった一言を。

「アンリは元気か？」

「！？」

＊　＊　＊

曽良くんが行っちゃう。どうしよう。何か言わなきゃ。このままお別れなんて……嫌。でも、何て言えばいいの？　たくましい背中が遠ざかっていく。私は彼のジャケットを握り締め、体を震わせていた。寒いんじゃない。混乱と焦りだ。

「曽っ良ぁー！」

リビングから突然出てきた人影。シルエットと透き通るような美しい声で、誰だかすぐに分かった。アリサさんだ。

曽良くんに倒れ掛かるように抱きついて、持っている飲み物の缶を曽良くんの頬になすりつけている。

「アリサ姉さん、飲みすぎ。ここらへんでやめといてよ～。あとが大変なんだから」

曽良くんはいつもの能天気な声でそう言った。アリサさんの肩をつかんで、優しく引き離す。ついさっき、私を見つめていた彼とは別人。元の曽良くんだ。私の知っている曽良くん。

「あ！　神崎カヤ、みーつけた」

突然、アリサさんはこちらに振り返って、指差す代わりに缶をこちらに向けて突き出した。きゅっとひきしまったウエストに、細長い手足。シルエットまでモデルみたいに様になっている。

「逃げるんじゃないわよぉ。まぁだ、話は終わってないんだからっ。調教のこと、聞かせてもらうわよ」

そう言って、千鳥足でこちらに向かってくる。その背後で、曽良くんがこちらを見つめていた。どこか遠くへ行ってしまうかのような、哀しげな表情。喉が締め付けられるように苦しくなった。

「ほら、神崎カヤ！　あんたも飲みなさいな」

いきなり、がばっとアリサさんがよりかかってきて、私はハッとして曽良くんから目を離した。倒れそうになるアリサさんの肩を支えて、「大丈夫ですか」と尋ねる。今朝感じた苺のようないい香りは、鼻につんとくるアルコールの匂いでかき消されている。

「あ、アリサさん？」

返事が無いので顔を覗き込む。あんなに大きかった瞳はうつろで半開き。すぐにでも眠ってしまいそうだ。

「もう、お家に帰られたほうがいいんじゃいですか？」

「だいじょーぶよ」

そうは言っても……大丈夫とは思えないほど、ろれつが回っていない。私の肩を借りてまっすぐに立つと、アリサさんは持っていた缶を突き出してきた。

「飲みなさい」

「え」飲みなさいって、それビールじゃ……。「私は、アルコールはちょっと」

やんわりと断ると、不機嫌そうにむすっとした表情を浮かべ「あっそ」と言って、アリサさんは自ら開けた。私はハッとして、今にも缶を口に運ぼうとする右腕を掴んで止める。

「もう、飲まないほうが……」
「なめんじゃないわよぉ。まだまだ、若いんだから」

この状況に、若さって関係あるかな。私は苦笑するしかできなかった。どうしよう。きっと何を言っても飲んでしまう。でも、止めたほうがいいんだよね。曽良くんだって、さっき……

そうだ、曽良くん――ハッとして、リビング側のベランダに振り返ると、そこには誰もいなかった。ズキン、と胸の奥が痛んだ。きっと、曽良くんはリビングにもいないだろう。そう思った。もう彼は私に会うつもりは無い。まっすぐに帰ったに違いない。

結局、何も言えなかった。

私は唇をかみ締めた。ついさっき、彼と口付けを交わした唇。和幸くんを裏切った唇。

つい、アリサさんの腕をつかむ手に力が入っていた。

「ちょっと、離しなさいよ」と苛立った声が聞こえてくる。

もう、いい。どうにでもなれ――私は目を見開いてアリサさんを睨みつけた。

「だめったら、だめなんです！」
「は？」

私は勢いよくアリサさんの手から缶を奪い取り、その口を唇に当てた。ひんやりと冷たい感触。一気に缶を持ち上げると、苦い液体が舌の上を滑り喉へと入っていく。

「あら！　空気読めるじゃないのぉ」

嬉しそうなアリサさんの声が横から聞こえてきた。

＊　＊　＊

アンリ？　俺は目を見開いて言葉を失った。何秒間か、確実に思考が停止した。

「父さんから、アンリの劇のことを聞いたんだ。君、参加しているんだろう？」

尋ねられても、俺は答えられなかった。というより、反応できなかった。ぱちくりと目をしばたたかせて、目の前で姿勢よく立っている男を見つめる。

アンリの劇……それは、カインの劇だ。あいつを救い出してくれたカインの話。

俺はごくりと生唾を飲み込み、心を落ち着かせて尋ねる。

「あなたが、アンリを『迎え』に行ったカイン？」

すると、翔太さんは懐かしむように目を細めて頷いた。

「『迎え』に行ったとき、あの子は怪我をしていてね。両親に返す前に、入院させていたんだ。一週間ほどだったけど、毎日見舞いに行って、すっかり仲良くなって……だから、名前も覚えていた」

それを聞いて、俺はフッと失笑していた。

「知ってます。劇に、そのシーンがありますから」

といっても、だいぶ脚色されているけどな。劇では、確かそこで

二人が愛の誓い……まあ、どうでもいい。
翔太さんは声をあげて笑って「そうか、そうか」と嬉しそうにつぶやいた。

「二ヶ月前に、父さんから聞いたんだ。驚いたよ。まさか、カインの一人と彼女がクラスメイトになっているとはね」
「俺もです」

苦笑してそう相槌をうつ。明るいだけが取り得みたいなアンリが、まさかカインと関わりのある人間だったなんて驚愕の事実だった。
そもそも、カインに救われた経験をもつ人間と知り合うなんて、奇跡に近い。『迎え』に行った子供がその後どうなったかは、親父でさえ分からないことなんだからな。
だから、いつだったかアンリのことを親父にも話したんだ。劇が恥ずかしすぎるっていう愚痴と一緒にな。
しかし……まさか、親父の奴、アンリを『迎え』に行ったカインを探し出していただなんて。まあ、あの人のオフィスには今まで『迎え』に行った子供に関する資料が全部残っている。『迎え』に行ったカインの名前も記録に残っている（らしい）。探し出すのは簡単か。だが、俺に一言あってもいいんじゃないのか。……確かに、聞いたところでどうなるってわけでもなかっただろうけど。アンリに会わせるわけにもいかないしな。余計なことをさせないために、俺に知らせなかったのかもしれない。

「なかなか、君に会えずにいたんだ。今更、アンリのことを聞いたところで、どうなるってわけでもない。会いに行くわけにもいかないし」
「ですよね」
「でも」と、翔太さんは視線を落とした。「父さんから、君の『勘当』のことを聞いて、もうアンリの話を聞くことができない――そ

う思った瞬間、惜しいことをしたな、と後悔したんだ」

そこまで言って、翔太さんは顔を上げて明るく微笑む。その視線は俺を通り越して、リビングへと向けられていた。

「そんなとき……正確には、今日の昼なんだけど、静流から連絡が来てね。このパーティーが最後のチャンスですよ、と言われたんだ」

俺はハッとして、「静流姉さんが？」と間抜けな声を出していた。翔太さんは優しい笑顔のまま、俺に視線を戻す。

「ああ。静流とは長い付き合いでね。俺が『出稼ぎ』をはじめてからも、いろいろ相談する仲だ。アンリのこともよく話していた」

静流姉さんと相談？　全然想像できない。俺が落ち込んだときなんか、張り手で終わりだったけどな。やっぱ、年上には態度が違うんだな、きっと。縦社会の僕か。

「それで」と、翔太さんは興奮した様子で俺をじっと見つめていた。「アンリは、どうしてる？　どんな子になった？」

まるで子供みたいに頬を赤らめ目を輝かせている。俺はそんな翔太さんが微笑ましかった。つい、頬がゆるむ。

翔太さんの気持ちはよく分かる。これだけアンリを気にかけるのは不思議じゃない。俺だって、できるなら、俺が『迎え』に行った子供たちが元気にやってるか知りたい。幸せに暮らしているのか、ずっと気になっている。でも、それを知ることは赦されない。子供たちを探し出してはいけない。そこまで関わるべきじゃないからだ。俺たちと関わるということは、裏社会とのつながりを残すということ。子供たちの将来のためにも、俺たちとの関係はばっさり切った

ほうがいい。彼らを両親の元へ返した時点で、俺たちの役割は終わり。子供たちのその後は俺たちには関係ないんだ。
でも、翔太さんにはチャンスがある。俺を通して、アンリを知ることができる。

「元気すぎて、いつも迷惑してますよ」

俺は苦笑してそう答えた。

＊　＊　＊

翔太は「背はどのくらいになった？」、「なにに興味を持ってる？」、「趣味はなんだ？」などと、まるで長年単身赴任の父親のような質問を繰り返した。和幸は照れながらも一つ一つ丁寧に答えていった。そんな和幸に、翔太はある考えが浮かんで唐突に尋ねる。

「和幸くんは、アンリとは深い関係なのか？　もしかして、付き合ったことある？」
「は！？」なぜ、そうなる？　と和幸は耳まで赤くして首を横に振った。「そんなわけないでしょう！」

すると、少し残念そうに翔太は苦笑い。

「いやぁ、アンリをよく知ってるみたいだったから。つい」
「クラスメイトですから」呆れたように和幸はため息をついた。「まあ、二年も同じクラスなんで、いろいろ知ってますよ」

それと、やたらと付きまとわれて面倒ごとにまきこまれてきたし――和幸は心の中でそう付け足した。
暢気な高い声が廊下に響いたのは、丁度そのときだった。

「翔太さん！　何してるんですか？」

ドアが閉じる音がして、誰かが駆けてくる足音が迫ってくる。和幸はぎょっとして背後に振り返った。やはり予想通り、絵に書いたような満面の笑みがこちらに向かってくる。

「曽良くん。元気そうだね」と、翔太は顔をほころばせて、勢いよく廊下を走ってきた少年に声をかけた。

曽良は和幸の背中にとびつくと、「仕事のほうはどうですか？」と尋ねる。前のめりになりながら、和幸は苦しそうに「だから、なんで抱きつくんだよ、お前は！？」と怒りの声をあげている。

「順調だよ。専務の娘さんとの結婚も決まってね」

そう言って、翔太は左手を二人に見せる。その途端、騒いでいた和幸は大人しくなり、「専務……」とぽつりとつぶやいた。曽良もまじめな表情に戻って、和幸の背中から降りると「おめでとうございます」と大人びた声で言う。

和幸は背筋を伸ばして翔太を見つめる。専務の娘と結婚。明らかに、権力目当ての結婚だ。無意識に、同情するような視線で翔太を見つめていた。

その視線に気づき、翔太は「勘弁してくれ」と苦笑して隠すように手を下ろす。

「セイクリッドは、トーキョー中の防犯システムをほぼ独占している企業だ。俺の出世次第で、君たちの『おつかい』もしやすくなる」

セイクリッド――和幸は聞きなれたその企業名にハッとした。今

まで『おつかい』で潜入してきた屋敷のほとんどは、その会社の防犯システムを取り入れていた。そうか……と、改めてじっくりと翔太を見つめた。かっちりとしたスーツに身を包むサラリーマン。もし、彼がセイクリッドのお偉いさんにでもなってくれれば、機密情報に手が出せる。防犯システムへのハッキングも可能だろうし、穴を見つけるのも容易くなるはず。もしかしたら、『出稼ぎ』に出ているカインたちの中で、彼こそが最重要人物かもしれない。そうとさえ、和幸は思った。

「そのためには、俺はなんだってするよ」

指輪を見下ろす視線は哀しげではあったが、その声には迷いは微塵も感じられない。

「期待してます」と曽良がにこりと微笑んで言った。場の空気にはあわない、緊張感のない声で。

おいおい、という視線で和幸は曽良を睨む。が、そんな視線をはね退けるように、満面の笑みを浮かべ、曽良は和幸の肩をたたいた。

「じゃ！　元気でね、かっちゃん。俺、帰るから」

「え……は？　帰る？」

曽良の言い方は、放課後の同級生が交わす挨拶のようにあっさりしている。和幸はあわてて、靴をはこうとした曽良の腕を掴んだ。翔太には申し訳ない気もしたが、このまま「じゃあな」というわけにもいかない。

「待てよ！　今夜で最後なんだ。もう少し、話しておかなきゃならないことが……」

「ないない」と、曽良はあっけらかんと答える。「思わず、カーヤに無理やりキスしたこと口走ったら大変だし」

「……え？」

翔太は居心地悪そうに顔をしかめて、一歩後ずさった。ピリッと嫌な空気が走ったのを瞬時に察知したのだ。しかもそれは、自分にはまったく関係のない争いごと。むざむざ巻き込まれて体力を消耗するのも御免だ。

和幸は目を細めて明らかに無理した笑顔を浮かべる。

「冗談だよな？」

言われて、曽良はわざとらしく「しまった」と頭を抱えた。「つい、口走った」と、靴を履きながらいたずらっぽく笑う。

和幸はなんとか深呼吸でキレそうなのを押し止めていた。何が気に入らないかといえば、おちょくられていることだ。どこの世界に、あんな口の滑り方をするアホがいるんだ、とわなわなと体を震えさせた。

こうやってからかわれることは昔もよくあった。特に恋愛となると、曽良や砺波にいいように遊ばれたものだ（それが原因で中学を別にしたほどだ）。これが最後の夜だし、カヤとキスをしたと嘘をついて動揺する自分を見て楽しみたかっただけなら、許そう。和幸はそう思っていた。ただし、それが嘘でないならば……

和幸は大きく息を吸い、努めて落ち着いた声で曽良に尋ねる。

「カヤにキスしたのか？」

翔太はどこか興味深げに腕を組み、まるで行司のように二人を見守っていた。

曽良は靴のつま先でトントンと地面を叩くと、得意げに笑んだ。

「したよ」と、和幸をまっすぐに見つめてさらりと答える。「嫌がったから、無理やり」

その言葉を聞いた瞬間、和幸の頭から思考というものが消え去った。何歩進んだかも分からない。気づけば、曽良の胸倉を両手でつかむと背後のドアに勢いよく叩きつけていた。鈍い銅鑼(どら)のような音があたりに響く。曽良は余裕の笑みを浮かべて、ドアに自分を押さえつける和幸を見下ろしていた。

「馬鹿だが、いい奴だと思ってたんだ」憎しみと困惑が混ざった瞳で、和幸はそんな曽良を睨みつける。「いつから、兄弟の女に手ぇ出すようになった」

「手は出してないよ」と曽良はあっけらかんと答える。喉が締め付けられているはずだが、苦しそうな様子は一切ない。「言うなれば、唇を……」

ここまで来て冗談を、と和幸の表情は一気に険しくなる。乱暴に曽良の胸倉から手を離すと、一歩下がって右手を振りかぶる。

その瞬間、曽良はクスリと笑んだ。まるでこの展開を待っていたかのような表情だ。

だが、和幸はぴたりと止まった。今にも繰り出されそうな右拳は宙で行き場を失っている。ねじった上半身を元に戻せば、その勢いで右拳は確実に曽良の左頬に当たり、無防備な曽良は頭からドアに叩きつけられることになるだろう。

その光景を想像し、そして冷静に考える。――それでカヤは喜ぶだろうか、と。

曽良はいつまで経ってもやってこない和幸の右拳に小首を傾げる。隣で傍観している翔太も目をぱちりと瞬かせた。

「兄弟ゲンカはこれで終わりなのかな？」

腕を組んで翔太は和幸にそう尋ねる。和幸は「すみません、翔太さん」と放心状態でつぶやいて、右拳を下ろした。さっきまで曽良に向けられていた視線は、足元に落ちている。一体、何が彼の燃え盛る怒りを鎮火したのだろうか。それも、唐突に。曽良は突如として意気消沈した彼に眉をひそめる。

「かっちゃん？　殴らなくていいの？」そう言って、左頬を差し出す。「殴っといたほうがいいと思うよ」

妙なことをいぶかしげな表情で言う曽良に、翔太は顔をしかめた。心配しているようにも聞こえる声色から、それが皮肉でも挑発でもないことは明らかだった。和幸はといえば、曽良の声が聞こえていないかのようで、茫然としたまま唇だけ動かす。

「暴力はルール違反」

「へ？」

おもむろに顔を上げると、きょとんとしている曽良に「帰れ」と告げる。

「お前を殴るより、俺にはしなきゃいけないことがある」

「……それだけ？」

責めるような口調で曽良が尋ねると、和幸は乱暴に一歩踏み出し曽良に近づく。目の前で立ちはだかると、はっきりとした口調で言い渡す。

「二度と、カヤに近づくな。それだけだ」

曽良は食い入るように和幸の瞳を見据え、怪しげに笑んだ。「元から、そのつもりだったけど」

「じゃあ、そうしろ」

きつく言い放ち、曽良に鋭い視線を浴びせる。

曽良はしばらく納得いかないような表情を浮かべたが、急にハッと目を丸くして「そっか」と噴出した。いきなり笑い出した曽良に和幸は眉をひそめる。

「なんだよ？」と不機嫌そうに尋ねると、曽良は口を大きく開いて答える。

「かっちゃん、もうパンピーなんだね」

「は！？」

「――殴ってはくれないか」哀しげにひとりごちると、後ろ手にドアを開ける。「カーヤとお幸せに」

屈託の無い笑みでそう言うと、ひらりと身を翻して外に足を踏み出す。和幸は一気に顔を赤くして咄嗟に口を開くが、「お前に言われる筋合いは……」と途中で口ごもった。目の前には曽良の姿は無く、虚しく閉まるドアの音だけが辺りに響く。

和幸と翔太だけが残った玄関で、和幸は拳を握り締め、苦しそうにため息をついた。後悔しているような表情だ。それが、殴らなかったことに対する後悔なのか、こんな別れになってしまったことへの後悔なのか……翔太には分かりかねた。

とりあえず、翔太は和幸に時間をやることにし、押し黙る。

和幸が「すみません、翔太さん」とついさっき聞いたセリフを口にしたのは、一分ほど沈黙が続いてからだった。しかし、その謝罪

の意味はさっきとは違うようだった。
和幸は翔太に振り返ると、
「やらなきゃいけないことができたんで。そろそろ」
実に大人びた笑顔だった。疲労の色は伺えるが、それでも苦しさは見受けられない。義務を喜んで受けれいれる――そんな覚悟が伝わってきた。
翔太は組んでいた腕をはずすと、和幸にやんわりと笑む。
「そうだね。ありがとう」言ってから、「帰る前に一つ」と人差し指を立たせる。真剣な表情になって、和幸をじっと見据えた。
「劇のことなんだが……アンリは大丈夫なんだろうか」
聞かれてすぐ、何のことを言っているのか和幸は悟った。カインをヒーローに仕立てた劇。それは、カインを悪者にしておきたい連中にはよからぬ劇だ。恐ろしい連中の怒りを買う可能性もある。
和幸はひとまず曽良のことは頭の片隅に置くことにして、翔太を安心させるように微笑んだ。
「大丈夫です。脚本からはあいつの名前を消しときましたし、本人にも口止めしときました。なんで！？　と散々文句は言われましたけど」
和幸の頭の中に浮かんだのは、そのときのアンリの様子だ。お前が脚本を書いたことは内緒にしろ。そう言うと、それじゃ意味無いのよ、と歯向かってきた。謎めいているほうが客を引くだろ、と自分でもよく分からない理論を展開して言いくるめたのだ。

「俺以外の劇の参加者も、脚本を誰が考えたのかは知りません」

詳しく言えば、和幸とカヤ以外、だ。カヤはアンリ本人から脚本がアンリの実話を基にしていることを聞いている。だが、ここでカヤの名前を出す必要もないだろう、と和幸は判断した。いらぬ心配をかけるだけだ。

「さすがに、しっかりしてるね。噂通りだよ、和幸くん」

感心したように翔太はそう言って二度ほど頷いた。和幸は照れくさそうに苦笑すると、「どうでしょう」と謙遜の言葉を口にする。

「君がカインを辞めるのは残念だな。『人を殺さないカイン』の将来を楽しみにしていたんだけど」

「これが、その将来だと思います」

間髪いれずに、皮肉ともとれる翔太の言葉に和幸は切り返した。翔太はぱちくりと目を瞬かせ、「なるほど、最もだ」と笑みを浮かべる。

「友達としてでいい。アンリを守ってやってくれ」

熱のこもった口調で言われ、和幸は深々と頷く。

「はい。そのつもりです」

和幸の言葉に満足したかのように翔太はため息をつき、ドアノブに手を伸ばした。

「頼んだよ」と言い残し、ドアを開ける。その向こうには、やはり

曽良の姿はない。当たり前のことだが……和幸の表情は自然と沈んだ。

容赦なく閉じられたドアの前で、和幸は壁にもたれかかった。

「良くも悪くも」と切ない表情でこぼす。「人は変わる、か」

それにしても、曽良の奴、まるで俺に殴られたいみたいだった――いや、まさか。和幸は鼻で笑って踵を返した。

兄弟ゲンカ（後書き）

未成年の飲酒は法律で禁じられています。一応、念のため……。

悪役の素質

ううん。頭がぼうっとする。ビールって全然おいしくない。どうしてアリサさんはあんなに夢中で飲めるんだろう？　やけになって、アリサさんに薦められるまま一本飲んじゃったけど……体が熱くて頭がぼんやりして体がうまく動かせない。あまりいい気分ではない。やっぱり未成年がお酒を飲んじゃいけないんだ。きっと二十歳にならないと良さが分からないんだ。

静流さんに「能無しか」と怒られちゃったなぁ。

ふかふかのベッドに横たわり、私は鼻で息を吸う。部屋のどこかで焚いているお香の香りが入ってくる。なんの香りなんだろう。果物みたいだけど。私は寝返りをうって壁にかけられているエスニック調の布を見つめる。やっぱり、思ったとおり静流さんの寝室はエスニック調でまとめられていた。

隣のリビングから笑い声が聞こえてくる。まるで子守唄のように心地よい。和幸くんも皆と楽しんでくれてるかな。

おかしいな。眠くなってきた。うとうとし始め、瞼を閉じると、出口の無い真っ暗闇が広がっている。不意に、そこに一筋の光が入ってきた。

あれ、と目を開くと、暗い部屋にどこからか光が漏れてきている。ガチャン、と扉が閉まる音がして、誰かが入ってきたことに気がついた。

誰だろう、と目を向けるが、暗闇でよく分からない。

「アリサ姉さんに酒飲まされたんだって？」

心配そうな、聞き覚えのある声がした。私は「あ」と声を漏らす。ふらつきながらもベッドに両手をついて上体を起こす。すると、「寝てろ」と慌てて彼が駆け寄ってきた。この暗闇ではっきりと物が

見えているかのように、迷うことなくベッドまで来て私の肩を押さえた。いや、もしかしたら、ちゃんと見えているのかもしれない。それもまた、虚しくも、商業用のクローンとして創られた利点か。ふと、そんなことを考えながら、私は彼を見つめた。といっても、ぼんやりと輪郭くらいしか分からない。私の目はまだ暗闇に慣れてはいなかった。それでも、誰かは分かる。

「和幸くん」

なんて元気のない声だ、と自分でも分かった。

彼はベッドに腰をおろして「寝てろって」と優しく私の肩を押す。でも、私は抵抗した。決して体を横にしようとはせず、彼の手を押し返すように前のめりになった。

「あの……」

酔いがまわって頭がぼんやりとしているといっても、さっきあったことを忘れたわけじゃない。というか、忘れようと思ってアリサさんからお酒を奪い取ったのに……効果は無かった。酔いがまわっていくにつれて、罪悪感が増して、余計にあのキスを思い出してしまう。ぼんやりとした意識の中、間近に迫った曽良くんの顔が思い浮かぶ。それだけで――和幸くん以外の男の子が心の中にいるってことだけで、浮気をしているような気分になる。ううん、違う。私は、事実、浮気をしたんだ。唇をしっかりと重ねたんだもの。それも、彼の兄弟とも言える幼馴染と。

言わなきゃ。和幸くんに謝らなきゃ。

でも……そんなこと言って、曽良くんは大丈夫かな。和幸くんはきっと怒るに違いない。私だけじゃなく、曽良くんにも。嫌だ。二人がケンカするのなんて……それも、私のせいで。

どうしよう。どうしたらいいの？　このまま、罪を胸の奥にしま

って、何事も無かったかのように彼と過ごす？　でも、そんなこと赦されるんだろうか。
心臓の鼓動がうるさいくらい響いている。お酒のせいだけじゃない。困惑、罪悪感、恐怖、不安……そんなものが全身をめぐっているんだ。このまま狂ってしまえたら、楽かもしれない。
言葉が出てこなくなってしまった。発声法を忘れてしまったかのようだ。代わりにでてくるのは、涙。目元が熱くなって、それを冷やすように涙がぽろぽろと落ちてくる。
和幸くんは何も言わずに、そんな私の髪に手を伸ばした。そうっと撫でられ、余計に胸が苦しくなる。うっと嗚咽がもれて、「ごめんなさい」と言おうと口を開いた。でも、その言葉は口から出るより先に、耳に入ってきた。

「ごめんな」
「！？」

彼の手が私の頬をさすり、涙をぬぐった。ぱちくりと目を瞬かせ、彼を見つめる。夜目がきいてきた瞳に、彼の苦しそうな表情が映った。

「嫌な目にあわせたな」

嫌な目……？　何の話？
頬を撫でる彼の手は私の唇へと移動した。彼の親指が唇をなぞる。まるで、唇についていた何かを拭うような動き。
そして、おもむろに彼は顔を近づけてきた。キスされる――そう悟って、私は慌てて彼の胸に手を置き腕を突っ張った。

「今はだめ！　私、さっき……」
「曽良にキスされたんだろ」

「！」

目を見開いて彼を見つめる。彼は穏やかな笑みを浮かべていた。

「知ってるの？」

「ああ。本人に聞いたよ」

本人！？　って、曽良くん？　曽良くんが和幸くんに言ったの？

和幸くんは顔をこわばらせて眉根を寄せた。嫌なことを思い出すかのような表情だ。

「嫌がったのに、無理やりされたんだよな」どこか確認するようにそう言って、視線を落とす。悔しそうな表情だ。「そんな奴だとは思ってなかったから、安心しきってた。悪い」

私は言葉を失った。嫌がった？　無理やり？　違う。確かに、あまりに唐突だったけど……力ずく、てわけでもなかったし。それに、私は……驚きのあまり、何も抵抗できなかった。されるがままだった。嫌がるような素振りは見せなかった。もし私がちゃんと抵抗していたら、彼もキスなんてしなかったかもしれない。

心臓が変なリズムを刻み始めていた。

そもそも、どうして曽良くんはわざわざ和幸くんに言ったんだろう？　言わなかったら、和幸くんに知られることはなかったかもしれないのに。もしかして――知って欲しかった？　なぜ？　別れさせたかった？　まさか。彼は言ってたもの。和幸くんを好きな私が好きだ、て。それに、別れさせたいなら、本当にあったことを言ったほうが効果的だ。私は抵抗することなく、キスを受け入れた、て。

「恐かっただろ」と、優しく甘い声が耳に届いた。「もう大丈夫だから。二度と近づくな、てはっきり言っといた」

彼に怒っているような様子はかけらもない。それよりも、彼は心配している。愛おしそうな視線を向けてくれている。他の男と――それも兄弟同然の友人とキスをした私に、だ。

そのとき、私はハッとしてうつむいた。もしかして……と、思った。曽良くんが和幸くんにわざわざキスのことを話した理由。それも、自分が悪者になるような言い方で打ち明けた理由。私をかばうため？　和幸くんの怒りの矛先が私に向かないため？

「カヤ？」

「……」

「カヤ！」強い口調で呼ばれて、慌てて顔を上げる。黙りこくる私に、さすがに不審に思ったようで、和幸くんは疑うような視線で見つめてきた。そして、眉間に皺を寄せて尋ねる。「お前、嫌がったんだよな？」

「！」

ぽつりと放たれた言葉に、心臓が打ち抜かれたようだった。ビクンと体が動き、和幸くんはさらに顔色を曇らせる。

「抵抗したんだろ？　無理やりってそういうことだよな」

心拍数が異常に上がっていく。元々、アルコールで上がっていた脈拍がさらに急上昇する。

「黙って、キスさせたわけじゃないんだろ？」

「……あ」

核心に迫った質問だ。心臓が大きく飛び跳ねる。もう、勘付かれてる。かすかに、彼から苛立ちを感じる。もうだめだ。正直に言お

う。だって、このままじゃ、和幸くんは曽良くんを誤解したまま……力ずくで私にキスするような人だと思ったままになっちゃう。それは真実じゃないもの。彼だけに非があるんじゃない。

覚悟を決め、私はごくりと生唾を飲み込んだ――そのときだった。

――かっちゃんを裏切らないでね。

曽良くんの声が脳裏に蘇った。その瞬間、違う、と誰かが心の中で叫んだ。曽良くんはきっと、真実を望んでない。曽良くんが望んでるのは……

じっと前を見つめれば、思いつめた表情を浮かべる和幸くんがいる。つらそうに、私の言葉を待っている。そんな彼の様子を目にして、私は悟った。曽良くんは私をかばったんじゃない。彼が傷つけたくなかったのは、私じゃなくて……。

それまでの弱気だった私の考えはどこかへ飛び去り、別の覚悟が生まれた。私は唇をかみ締めると、和幸くんに抱きついた。

「カヤ？」と突然の私の行動に、彼は戸惑いの言葉を漏らす。「おい……」

私は構わず、彼の肩に顔をうずめて背中を抱きしめる。

「抵抗したのに」と、初めて人を陥れるような嘘をついた。「抵抗したのに……」と自分に言い聞かせるようにもう一度言う。

和幸くんはしばらく黙ってから、私の頭を撫でて「そっか」とつぶやく。「悪い」と謝ったその声は、どこか安心しているようだった。

私は心の中で何度も何度も曽良くんに謝っていた。もう二度と会えることはない、大切な友人に。吐き気がするほどの罪悪感に襲わ

れ、涙がこみ上げてきた。

＊　＊　＊

「今はだめ！　私、さっき……」
「曽良にキスされたんだろ」
「知ってるの？」
「ああ。本人に聞いたよ」

月明かりが照らす路地で、少年は電柱によりかかって黒い携帯電話（に似た機械）を耳に当てていた。そこから聞こえてくるのは、二人の男女の会話だ。
少年は長い睫毛に覆われた茶色い瞳に憂いを宿し、じっと聞き入っていた。トレードマークのアヒル口もぎゅっときつく締めている。
「恐かっただろ」と聞きなれた柔らかい声が聞こえてくる。「もう大丈夫だから。二度と近づくな、てはっきり言っといた」

しばらく沈黙し、少年は心配そうに顔をしかめた。

「カヤ？　カヤ！」

男のほうは、苛立った声を出し始めた。少年は、大きくため息をつき、落ち着かない様子で背後に聳え立つマンションを見上げる。機械から聞こえてくる会話……いや、男の一方的な尋問に、少年は悩ましげに眉をひそめた。
丁度、そのときだった。内臓までしびれそうな轟音を響かせて向かってくる一つの光が現れる。徐々にその光は大きくなって少年を包み込んでいく。その間も、右耳に神経を集中させて会話を聞き逃すまいと少年は必死になっていた。

やがて光は少年の前で停まり、その全貌をあらわす――それは一台の中型バイク。黒いライダースジャケットを着込んだ女がバイクから降りて、おもむろに赤いヘルメットを脱いだ。ウェーブがかった髪がふわりと解き放たれ、少女は首を左右に振る。いかついバイクには到底似合わない童顔の少女だ。

少女はバイクを停めて、ヘルメット片手に腰に手をあてがった。少年は唇の前に人差し指を立てて、「シーッ」と静寂を要請する。少女は少年が耳を傾けている黒い携帯電話を睨みつけると、呆れたようにため息をつく。

そのころ、機械の向こうで動きがあった。

「カヤ？」という戸惑った男の声がする。「おい……」

頼むから、俺をかばわないでくれ――少年は祈るような表情を浮かべて、右耳にあててある機械のほうを見やる。すると、

「抵抗したのに。抵抗したのに……」

涙声に近い声でそう訴える少女の声。少年は大きく安堵のため息をつき、肩を撫で下ろした。なぜ自分が事実にスパイスを付け加えて彼に伝えたのか、その意図を汲み取ってくれたようだ。よかった――その言葉がどこからともなく、心に沸き起こる。それとともに、余計な気苦労をかけて申し訳ない、という気持ちが襲ってくる。全ての原因は、自分が欲求を抑えられなかったからだ。とはいえ、彼女が大人しく身動き一つしなかったのには驚いた。キスもそうだが、熱く抱きしめたときも、もっと激しく拒絶されると思っていた。そのせいで、期待をしたのか、調子に乗ったのか。何にせよ、自分がしたことが最低なのは分かっている。

「そっか。悪い」

男のその二言を聞いて、少年は携帯電話をおろし、パタンと折りたたんだ。

「さっそくなわけ？　ほんっと、悪趣味。最低よ」

いきなり、少女は軽蔑の眼差しで少年を睨みつけ、そう言い放った。

「悪趣味なのも、最低なのも、ょぅく分かってるよ」言いながら、携帯電話をポケットに突っ込む。「電話して二分で来てくれるなんて。実はこの辺うろちょろしてたのかな、トミー？」

ニヤニヤとからかうような笑みでそう言うと、砺波は頬を赤らめて視線を反らした。

「うっさいわね、曽良！　せっかく快く来てやったってのに」

「せっかくなら、パーティーに顔出せばよかったのに」

そう言い返すと、砺波は鼻から勢いよく息を噴出し、血相変えて怒鳴りつける。

「冗談じゃないわよ！　あのパーティーは最悪よ！　夕べ、私らがしようとしたものとは違う！　和幸の卒業を祝うパーティーなんかじゃない！！」

珍しく涙声になっていることに気づき、曽良は心配そうに顔をしかめた。砺波は曽良の背後に佇むマンションを指差し、息もつかせぬ勢いでまくしたてる。

「和幸が知ったらどう思う！？　兄弟たちが皆して、自分の恋人を陥れようと企んだなんて……それも、あいつのためのパーティーと思わせて！　わたしはその一員になんてなりたくないわ！」

そもそも、と曽良に怒鳴り、さっき彼が耳に当てていた黒い携帯電話がひそむポケットを睨みつける。

「カヤは何も知らずに、これからあんなもの首にぶらさげて過ごすのよ！？　あんたからの贈り物だと思って、大事にするわよ！　自分を殺すための道具だとも知らずにね」そこまで言って息継ぎをし、砺波は皮肉そうに鼻で笑う。「下手したら、あいつの記念すべき初殺しはあんたになるわよ」

すると、曽良は冷めた目で地面を見つめ、ぽつりとぼやいた。

「無理だよ。かっちゃんはパンピーになったんだもん。人を殴れもしないんだ」

砺波はぴくりと細い眉を動かし、じっと曽良の様子を伺う。しばらくそうしてから、苛立ったため息をつき、ヘルメットを右手に持ち替えた。

「どいつもこいつも、世話が焼ける」

吐き棄てるようにそう言うと、曽良から三歩ほど離れたところで砺波はヘルメットを大きく振りかぶる。妙な気配に気づいて曽良が顔をあげたときには、赤いヘルメットが目前に迫っていた。「え」と声がもれたときには、勢いよくそれがこめかみ周辺にぶち当たり、視界が歪んだ。まるで遠くで除夜の鐘が鳴ったかのような音がする。まさかそれが至近距離で投げられたヘルメットによるものだとは、

数秒ほど気づかなかった。
バランスを崩したものの、なんとかその場に食いとどまる。頭がふらつき、ちらつく視界で地面に転がる赤いヘルメットを捉えた。
「トミー！　いくら、俺たちでも頭部は強化されていな……」
状況を把握して咄嗟に顔を上げてそう怒鳴ったが、そのときには砺波は左足を軸に、コンパスのようにくるりと一回転しているところだった。大きく弧を描き、回転による勢いをつけた右足の踵が、曽良の頭部を目にも留まらぬ速さで直撃する――ように思われたが、曽良は瞬時に動いた右腕でそれを防いでいた。
あと少し遅かったら、見事にさっきとは逆方向に吹っ飛ばされていただろう。
曽良の右腕に食い止められた砺波の右足は、ピタリと静止している。砺波は気に食わない顔でそれをちらりと見るなり、足をおろした。
「殴られたいんじゃなかったの？」くるりと体を曽良に向けると、腰に手をあてがって責めるように言う。
曽良はひきつった笑顔を浮かべると、地面にころがるヘルメットを手に取った。
「一発、済んでるじゃないか！　回し蹴りはいらないでしょ」
「左に一発いれたから」言って、砺波は自分の左のこめかみを指差し、次に違うほうの手で右のこめかみを指差す。「右に一発いれてバランスとったほうがいいかと思って」
「……そういう気遣いはできるんだね」
ジト目で呆れたように見つめると、砺波は「どういう意味よ？」

と睨み返した。
曽良は頭を垂らすと大きくため息をつく。それを横目に見ながら、砺波はバイクの収納スペースから傷だらけの黒いヘルメットを取り出す。
「夕飯食べてないのよ。付き合って」
ヘルメットを頭に押し込みながら、砺波は曽良の返事を待たずにバイクにまたがる。赤いヘルメットを手にしながら、ぼうっと突っ立つ曽良の横で、バイクは雄たけびをあげて息を吹き返す。
「何してんのよ！？　嫌なわけ？」
砺波は振り返りざまに、バイクのエンジン音にも負けない大声をあげる。曽良は緊張の解けた穏やかな表情を浮かべ、「嫌だったら、電話しないよ」と言ってヘルメットをかぶった。小顔の彼にはゆるいくらいで、すんなりと入ってしまう。
砺波の後ろにまたがろうかというとき、砺波はぽつりとつぶやいた。
「あんた、悪役向いてないわよ」
「！」
ハッとして、曽良は上げかけた足を止める。砺波はそれ以上何も言わずに、前を向いて押し黙った。もう少しぼうっとしていたら「乗るの、乗らないの！？」なんて言われそうだ――曽良はヘルメットの中で微笑した。
「俺もそう思ってたところだよ」

殺し屋の時点で、充分悪役なんだろうけど。そう心の中で言い添えると、砺波の後ろにまたがった。

帰ろう

「抵抗したのに……」と、カヤが俺の胸の中で泣きじゃくる。

不謹慎かもしれない。俺は最低の男かもしれない。だが、ホッとしていた。泣いているカヤに、俺は安堵しているんだ。

曽良にキスされて、もしもこいつの気持ちが変わっていたら……そんな不安が心をかき乱していた。いや、その前に、もしも曽良の言っていたことが嘘で、カヤが望んであいつのキスを受け入れたんだとしたら……そんなこと、あるわけないって分かってる。でも、思いつめた表情で黙りこくるカヤを見ていたら、そんなくだらない疑心がどこからか沸いて出てきた。信用しきっていた曽良の思わぬ一面に動揺し、不安定だった俺の心は、不意に現れたその疑惑を無視することはできなかった。

怯えていたんだ。カヤの心が少しでも他の男に奪われるのが嫌でたまらなかった。

華奢なカヤの背中をぎゅっと抱きしめた。この体に触れられるのは、俺だけでありたい。他の男に、髪の毛一本触って欲しくは無い。

初めて、生まれて初めて、そんな強い独占欲がうずまいていた。

「和幸くん、ごめんね」ふと、首元でそう言うカヤの吐息を感じた。キスのことかと思い、「カヤは悪くないだろ」と即座に言葉を返すが、カヤは首を横に振った。

「そのことじゃないの。ケンカのこと」

ケンカ。あ……そういえば、正式に仲直りしたわけでもなかったな。いろいろ起きて仲直りした気になっていた。泣いているんじゃないか、悩んでいるんじゃないか、なんて思っていたが、会ってみ

たら髪も切っていつもの笑顔が戻っていたし。でも、実際何も解決してないんだよな。
俺が黙っていると、カヤは申し訳なさそうに「ごめんね」と改まってもう一度言った。
「和幸くんの優しさに、いつも守られているっていうのに。私、何も分かってなかった。ひどいことも、たくさん言ったよね」
「ひどいこと……？」
なんだろうか。何か、言われたっけ。ええと、と考えていると、カヤはしっかりとした口調で言う。
「私、強くなるから」
「へ？」
「和幸くんが隠し事しなくていいくらい、強くなるから」
カヤは、いつのまにか泣き止んでいた。
隠し事という言葉に、ドクンと心臓が大きく鳴った。そうだった。葵がもたらした口論で気づいてしまった、俺たちの溝。それは、俺の隠し事――カヤが世界を滅ぼす『人形』だという残酷な事実。カヤは答えを求め続け、俺はそれを拒絶し続けていた。知らないほうが、カヤは幸せだと思っていたからだ。
でも、その考えは間違いだったんじゃないか、と思い始めていた。だから打ち明けようと決意した。俺が嘘をつくたびに、真実を隠そうとするたびに、こいつが苦しむなら……それならいっそのこと、全部話してしまおう、と腹をくくったんだ。
思い返せば、羽田に邪魔されてまだ打ち明けていなかった。ドクンドクン、と心臓の低い音が早まっていく。今がチャンスかもしれない。言うときがとうとう来たんだ。

「カヤ……その、隠し事のことなんだけど」

言いかけたときだった。カヤはおもむろに体を離して、俺の両頬にはさむように両手を添えた。涙が目の端で真珠のように輝いている。

「いいの。無理して言わなくていい」

俺は「え」と戸惑った。そりゃ、言わなくていいって言ってくれると助かるけど……

「なんで？　あんなに知りたがってたのに」

「知りたいよ」カヤは穏やかな笑みを浮かべた。「でも、今じゃなくていい」

「！」

「今朝、階段で聞いたよね。私を守るために隠していると言ったら、納得するか？　て」

そういえば、そんなことも言ったな。生徒指導室から出て、偶然カヤとぶつかって、階段で話したときだ。でも、あのとき確か、「分からない」と言われたんじゃなかったか。俺は柳眉を寄せながら「ああ」と答える。

「それね、今なら納得できるの」カヤは俺の頬から手を離し、俺の右手を握り締めた。「いつもそうだもんね。いつも、知らないところで私を守ってくれてる。今日だって、私のために人を殴って自宅謹慎になっちゃうし」

「あ」

俺はつい頬をひきつらせた。多分、顔はやや赤らんでいるだろう。

自宅謹慎……改めてカヤに言われると、なんか恥ずかしいな。てか、俺、全然謹慎してない。

「私を守るために隠してるんだよね？」と、カヤは小首を傾げて尋ねる。その仕草があまりに可愛くて、思わず抱きしめたくなった。

「だからね、強くなろうと思うの」

そういえば、さっきもそんなこと言ってたな。

「別に、強くならなくても」俺が守るから……と心の中で付け足す。

「ううん。もっと、強くなりたいの。それで、和幸くんが頼れるくらいの女になる。静流さんみたいな」

その瞬間、ゾッと背筋が凍った。

「そこまで強くならないでくれ」

カヤはクスクスと肩を揺らして笑った。いや、本気だって。

「じゃあ、和幸くんが丁度いいと思ったら教えて」

「丁度いい？」

「うん。それで……そのときがきたら、全部話して欲しいの」

急に、カヤはまじめな表情になった。じっと俺を見つめている。

「私ね、多分、和幸くんと初めて出会ったときより、ちょっとだけ強くなったんだよ」

なんて……可愛いんだろう。のぼせたように頭がぼうっとしてしまう。少し酔っているからか、たまにろれつが回っていないのがま

たたまらない。って、真剣な話をされてるってのに、俺はロクなことを考えていないな。男丸出しだ。カヤが人の心を読める力を持っていなくてよかった、と心底思った。

「だから、いつかきっと、和幸くんを守れるくらいたくましくなれると思う」

たくましい、か。さっきの一言で、頭に浮かぶのは静流姉さんみたいにナイフを持ち歩くカヤの姿だ。やめてほしい、と本気で思う。

「守られてばかりは嫌だから。隠し事ばかりさせるのは嫌だから」

だって、とうつむいて、カヤは胸元にぶらさげてある十字架を握り締めた。十字架を手に、憂いを含んだ表情でうつむくその姿は崇高な美しさがある。まさに聖女。『実家』のステンドグラスで微笑む、青い外套に身を包んだ女性を思い出した。

「だって、隠し事をするのも……つらい。今なら、それがよく分かる」

何かあったんだろうか、と思わせる意味深な言葉。でも、詮索しようとは思わなかった。カヤに隠し事があったって構わない。正直であってほしいとは思う。けど、大切な人を想うがゆえに隠さなきゃいけないこともある。それは俺が誰よりも分かってる。

「カヤ」と俺は彼女のあごをつかんで、顔をあげさせた。「大事な話があるって言ってたの、覚えてるか？」

カヤは戸惑いつつも十字架から手を離し、こくんと頷く。

「いつからお前のことを『普通』じゃないと思っていたのか。その答えを言うよ」
「え？」
眉根を寄せて、どこか不安そうな色が見受けられた。俺はそれを拭い去るように穏やかに笑んで続ける。
「お前を好きだって気づいた日から」
カヤは目を見開いた。「へ」と気の抜けた声が唇から漏れる。「その日から」と言いながら、俺は彼女の髪を撫でた。
「俺にとって、カヤは何よりも『特別』な存在なんだ」
「……」
間抜けにも見えるカヤの驚いた表情に、俺はつい笑ってしまった。
「答えになったか？」と照れながらも尋ねると、カヤは泣きべそをかく子供のように顔をゆがめる。こくりと頷くと、潤んだ瞳から小さな真珠の粒が零れ落ちた。
「完璧」と涙でぬれた頬をゆるませる。「完璧な答えだよ」
夕べのトラウマが、やっと癒えそうだ。俺はほっと肩を撫で下ろした。「愛してる」と言って、「答えになってないよ」と言われた心の傷。結構、深かったんだぞ――そう、文句を言ってやりたいくらいだ。
もちろん、ごまかしに近い『答え』だった。カヤもそれには気づいていると思う。本当は……一緒に帰った次の日、こいつが『災いの人形』だと知ったときから、全てが変わったんだ。カヤを『普通』

だとは思えなくなっていた。
そりゃそうだ、カヤは『普通』じゃないんだ。世界を滅ぼす力をもった人間を、誰が『普通』だといえる？　俺は思わない。カヤは『普通』ではない――それを否定するのはもうやめにする。
ただ、せめて俺の傍にいる間だけでも、『普通』の女としての幸せを与えてやりたい。かりそめでもいい。こいつが自分を『普通』だと思える時間を与えてやりたいんだ。それが俺に出来ることだよな。
隠しきろう。やっぱり、知らないほうがいい。
カヤは隠し事を認めてくれた。それに耐える決意をしてくれた。俺も隠し切る決意をしよう。彼女から『普通』の幸せを奪っちゃいけない。俺はそれを与えるためにここにいるんだから。

「カヤ」つぶやいて、顔を近づける。艶やかなその唇の感触を味わいたくて仕方がなかった。いや、単に早く奪い返したかっただけかもしれない。少しでもカヤがあいつの感触を覚えているのが嫌だった。
だが、「あ、あの！」とカヤは慌てた様子で身を引いた。「ほら、さっき、曽良くんと……」
「……」

いくら俺とでも、すぐに違う男とする気にはならない、か。気持ちは分からないでもないが、ここまで拒否されるとさすがに落ち込んでくる。ま、こういうところもカヤなんだ。尊重してやらないと。
「そうだな」と俺も顔を離して苦笑する。「悪い」
「ありがとう」

カヤは安堵したようにそうつぶやいた。やっぱ、こいつの安心した顔を見ると俺もホッとする。心が温まる。

おもむろに手を伸ばし、ばっさりと切られた髪を撫でる。カヤははにかんだ笑顔を見せて、目を瞑った。指から零れ落ちる一本一本の髪。全てが愛おしく思える。顔がほころんでいるのが自分でも分かった。

「帰ろう、カヤ」

ぽつりとそうつぶやいていた。カヤはハッと目を開いて、不安そうな表情を浮かべて俺を見てくる。

「もう、いいの？」

遠慮がちにそう尋ねられ、俺は深く頷いた。ああ、もういいんだ。壁を隔てた隣の部屋からどっと沸き起こる笑い声に耳を澄まし、心の中で別れを告げる。ここはもう俺の居場所じゃない。俺の居場所は……

「パーティー、ありがとうな」

「うん」

嬉しそうに眩しいほどの笑みを浮かべる少女。ずっと見ていたいと思った。この笑顔をずっと守り続けたいと思った。彼女を幸せにするのが、俺の使命。それが、この命が『創られた』理由だと思いたい。俺はこいつの傍にいられればいい。カヤこそ、俺の世界なんだ。

この笑顔が見ていられるところ――それが、俺の居場所なんだ。

＊　＊　＊

静流の寝室から二人の人影がぬっとでてくる。まるで泥棒のよう

に二人は忍び足で廊下へと出てきた。背の高いほうの人影は、ちらりと光が漏れるリビングの扉を見やった。たまに叫び声のようなものが聞こえて、苦笑する。自分の代わりに誰かが関節技を決められているのだろう、と心の中で同情する。

「挨拶していかなくていいの、和幸くん？」と小さいほうの人影が心配そうに尋ねる。「これで最後なんだよ？」

「ああ」言って、和幸は振り返る。「カヤが構わないなら、だけど」

カヤはすぐさま首を横に振る。「和幸くんの好きにして」

その瞬間、和幸は頬を赤らめた。「そ、そうか」と不自然に言ってカヤから目を反らして玄関へと向かう。ほろ酔いの彼女の表情は、扇情的だった。とろんとした目に、紅潮した頬。ぼうっとした表情。そんな顔で見上げられ、「好きにして」と言われたら、和幸の頭の中は関係ない想像で忙しくなる。

そんなこととはつゆ知らず、急にぎこちない動きになった彼に、カヤは小首を傾げつつもついていく。

「寒くないか？」

靴を履きながら、和幸はカヤに尋ねた。カヤはハッとして自分の服を見下ろす。そういえば、まだアリサのワンピースを着たままだ。自分の制服や荷物は全てリビングに置いたまま。慌ててリビングに振り返る。取ってきたほうがいいだろうか。でも……と、和幸を見つめた。

彼は別れの挨拶をしたくないようだった。その意思を尊重したい。静流に怒られるだろうが、荷物は明日にでもこっそり取りに来よう。カヤはおもむろに和幸の手を取ると、指を絡めて握り締める。

急になんだ？　と目をぱちくりとしばたたかせる彼に、カヤははにかんだ笑顔を浮かべた。

「こうしてれば、あったかいから」
「……あ、そう」
気のない返事はしてみたが、その表情はまんざらでもないようだった。首まで赤くして「じゃあ、帰ろうか」という声はイントネーションが不自然だ。カヤはいたずらっぽく笑った。
「そういえば、椎名はどこにいるんだ？」
思い出したようにそう尋ね、和幸はドアを開ける。手をつないでついてくるカヤに目を向けながら、外に出て――いきなり飛んできた何かに「ひっ」と声を上げた。それは目の前を通り過ぎ、ドア枠に突き刺さった。キラリと光る刃。和幸は引きつり笑顔で飛んできた方をおそるおそる振り返った。
「家主に挨拶なしか？」
部屋の真正面、四階へとつながる階段で、ジャンパーを羽織り、大また開いて座っている女が一人。
「美月の勘は大当たり。待ってて正解だったね」言いながら、パーマのかかった肩までの髪をゆらしてむくりと立ち上がる。
「静流姉さん」ぶるっと和幸の体が痺れるように震えた。「危ねぇだろ！」
和幸はカヤから手を離すと、慌てて突き刺さっているナイフを抜き、静流に足早に歩み寄る。カヤも遅れまい、と閉まりかけたドアを押し返し、外に出た。

腰に手をあてがい佇む静流に、和幸はナイフの柄を突き出す。
「カヤにあたったらどうすんだよ！？」
「あんたの声が聞こえたから、投げたんだろ。能無しか」
「……」
ああ言えばこう言う――まさにこの人の性格そのものだ、と和幸は悔しそうに押し黙る。そんな和幸から視線をそらすと、静流は後ろで微笑を浮かべる少女を見やった。
「神崎」と呼んで、持っていた大きな紙袋を持ち上げる。「あんたの制服と荷物。全部まとめていれといた」
言われてカヤはハッとして静流に駆け寄る。「すみません」と紙袋を受け取ると、静流は呆れたため息を漏らす。
「こういうときは、礼だろ。無駄に謝るんじゃねぇよ、胸くそ悪ぃ」
カヤは一瞬顔をしかめ、言葉に詰まった。見かねて、和幸は「姉さん、そんな言い方は」と責めるように言いかけたが、カヤにぐっと腕を掴まれて口を噤む。なんだ、とカヤに振り返ると、彼女はじっと静流を見上げていた。きりっと引き締まった表情で、
「ありがとうございます」
はっきりとした口調でそう言うと、頭をぺこりと下げる。唖然としている和幸の前で、静流は満足そうに微笑んだ。
和幸の頭の中で、静流のようになりたい、と言っていたカヤの声が蘇る。着実に静流の信者になりつつあるのか、とあからさまに嫌そうな顔を浮かべた。

「ね、姉さん」和幸は気を取り直し、ナイフを突き出す。「ほら、ナイフ」

すると、静流は腕を組んで「それ、神崎にやるよ」とさらりと言った。カヤはぎょっとして胸元に光る十字架に触れる。

「でも、もうカインの皆さんからこんな素敵な……」

「いいから！　もらえるもんは、もらっときゃいいんだよ」

どすのきいたハスキーボイスが辺りに響いた。鬼のような剣幕は、決して人にプレゼントを渡すときの表情ではない。カヤはぽかんとしながら、「はい」と力弱く言って和幸の手からナイフをそうっと抜き取る。だが、カヤ以上に顔色を悪くしていたのは和幸だった。静流の迫力におされたのもそうだが、それ以上にカヤが静流の愛用のナイフを手に入れるのが恐ろしかったのだ。これからずっと静流の生霊にまとわりつかれるような気がしてならない。

「これ、ケースな」さっきとは打って変わって落ち着いた声でそう言って、静流はポケットからシンプルな黒い皮のナイフケースを取り出してカヤに差し出した。

カヤはぺこりと小さくお辞儀をして受け取る。それを、どこか申し訳なさそうに静流は見つめていた。和幸はそんな静流に小首を傾げる。静流の哀しげな表情がものめずらしくて仕方なかったからだ。広幸が死んだ日以来、静流は弱い一面を一切見せることはなかった。表情にだすことさえしなかったのに。

「姉さん、大丈夫か？」心配そうにそう尋ねると、静流は額に青筋をたてて和幸を睨みつける。

「お前に心配されたくねぇんだよ！　さっさと帰れよ、のろまか！？」

体に染み付いた習慣なのか、反射的に和幸は背筋を伸ばし「はい！」と返事をする。即座にカヤの腕を取って逃げるように階段へと歩き出した。カヤは「え？　え？」と名残惜しそうに静流を見つめながら、引っ張られていく。

「静流さん、あ、ありがとうございました」

いつまでも後ろを見ているものだから、カヤは階段で転げ落ちそうになり、和幸に抱きとめられている。静流はそんなカヤに苦笑して、階段を下りていく二人を見守る。見えなくなっていく二人の姿に段々と表情を曇らせると、

「和幸、けじめはちゃんとつけるんだよ！」と思い出したように階段に向かって叫んだ。「あんたは女を選んだんだ。最後まで、何があってもその子を選べよ」

しばらく階段を下りていく足音だけが響き、「はぁい！」と喉から無理やり出したような投げやりな怒鳴り声が聞こえてきた。静流は雑な返事に眉間に皺を寄せ、首を横に振る。

「たとえ、あたしらを敵に回してもね」それだけは、聞こえないようにぽつりとつぶやいた。

「ナイフ、神崎ちゃんにあげたのぉ、しずるん？」

ふと、飄々とした声が聞こえてくる。ハッとして慌てて振り返る

と、ドアを半分開けて顔を出している美月の姿が。

「なにしてやがんだよ、お前は？」呆れたように腰に手をあてがって尋ねると、美月はえへへと笑った。

「盗み聞きかなぁ」

「だろうな」

やれやれ、とため息をついて美月が開けているドアへと歩み寄る。

「どうして神崎ちゃんにナイフあげたの？　一応、あの子を疑ってるていなんじゃないのぉ？」

「まあね」静流は真面目な表情に戻ると、鼻で笑った。「あれは落とし前だよ」

「おとしまえ？」

美月は道をあけて、静流を玄関へと導いた。バタンとドアが閉まり、暗い玄関で静流はサンダルを脱ぐ。

「あの子は『黒幕』と関わりがあるかもしれないし、無いかもしれない」

「知ってるよ」美月はぴょんと床にあがるとくるりと半回転して、静流に向かって小首を傾げた。「それで？」

「『黒幕の娘』にはあのネックレスをあげた」

ネックレス――その言葉に、美月は表情を曇らせる。手を後ろに組むと視線を落とす。「うん」と暗い返事が聞こえて静流は眉をひそめて美月を見つめた。

「だから」言って、美月の頭を叩くように撫でて廊下を歩き始める。

「『和幸の嫁』にはあのナイフをあげたんだよ」

あ、と美月は目を丸くした。ズカズカとリビングに向かう静流の背中を追いかける。

「それが、落とし前なの？」

「ああ。いざ、あの子が真っ白だったときに、言い訳ができるだろ」

「もしかして、ご祝儀のつもりだった？」美月は言ってから、苦笑する。「あのナイフ」

「つもりもなにも、それだよ。あたしからの祝儀だ」

自慢げに静流は豪快に笑う。

世界広しといえど、結婚の祝儀にナイフを贈ろうと思いつく人間はこの女性しかいないだろう。お茶目なんだから、と美月は垂れ目を細めた。

静流はリビングのドアの前で立ち止まると美月に振り返る。

「あの馬鹿にしたり顔されるのは嫌だからね。保険だよ」

「はいはい」

静流の隣で立ち止まると、美月はあしらうようにそう返事をした。静流はその反応が気に入らなかったようで、「んだよ？」と眉根を寄せた。

美月は「んーん」と首を横にふり、悲鳴が聞こえてくるリビングのドアを一瞥する。

「またアリサ姉さんが誰かの関節外してる」

すると静流はげっそりとした表情を浮かべた。

「あの人は、関節外すことだけに興味あるから困るんだよ」

「そ。だから、ほら、しずるんの出番だよ」言って、美月は静流の背中を後ろから押す。「皆の関節戻してあげて」

静流は「しゃあねぇな」とリビングのドアを開けた。見るも無残に散らかった部屋で、二十人近くの悲鳴やら笑い声やらが飛び交っている。静流は頬をひきつらせると、舌打ちをした。「ったく。猿山か、ここは」

「結局、普通のパーティーになっちゃったねぇ。お片づけが大変だ」

美月は楽しげにそう言った。その言葉に、静流は筆で描いたような眉をぴくりと動かす。

「ああ、……お片づけはいつも大変だよ」

秘密の番号

「カヤさま！」

玄関を開けるなり、悲鳴に近い声で叫んで現れたのは、昨日会ったメイドのおばさんだった。相変わらず質素な服装。控えめなメイク。だが、その顔は今にも倒れそうなほど青ざめている。

そりゃそうだろう。カヤに駆け寄ったメイドさんを見つめながら、俺は心の中で呆れたようにつぶやいた。驚いたことに、カヤは椎名に何も知らせずに学校を早退し、今までずっとケータイの電源を切ってあいつの捜索から逃れてきたらしい。とんだおてんば娘になったもんだよ。

出会ったときより強くなった……か。そうかもしれないな。俺は苦笑した。

にしても、今頃椎名は必死になってカヤを探しているんだろうな。それを想像すると、なんだか気分がいい。このままボディガードをクビになってくれたら言うこと無いんだが。

「和幸さま！」それまでカヤの全身をくまなくチェックしていたメイドさんがいきなり俺を睨みつけてきた。「これは一体どういうことですか！？」

「はい？」

どういうことって？　ぽかんとする俺にメイドさんは肩をいからしてじりじりと近寄ってくる。

「門限の九時はとっくに過ぎております！　連絡もいれずにこんな遅くまでお嬢さまを連れまわすなんてどういうことです！？　それも、こんなはしたない洋服を着せて……しかも、なんですか？　こ

のガーゼは！？　怪我までさせたんですか！？」
「え……え？　いや、これは」

やべ。そっか、この状況……俺がカヤを夜遊びに付き合わせたってことになるのか。メイドさんの言うとおりだ。傷はついてるわ、娼婦みたいな格好だわ、髪は短くなってるわ。って、全部、静流姉さんの仕業　（らしい）じゃないか。これで紙バッグの中探られたら、ナイフが出てくるぞ。まずい。

「ええと」と口ごもっていると、「真麻（まあさ）さん！」とあたふたとカヤが横から口を出してきた。

「和幸くんは関係ないんです。彼は私を迎えに来てくれただけで。これは、その……」

カヤは結局言葉を詰まらせた。時が止まったかのように停止する。俺たちは困り果てて顔を見合わせた。その様子に、メイドさん――真麻さんというらしいな――は怒りで目をつりあげた。

「お嬢さま！　男をかばう必要はありません」
「かばってるわけでは……」

俺、信用ないなぁ。言い訳するのも面倒になってきた。俺は頭をかいて黙り込んだ。俺が怒られて終わるならいいか。といっても、何をしていたかは聞かれるよな。それらしい話を考えなきゃ。そういうの大の苦手なんだが。

「和幸さま？　聞いていらっしゃいます！？」

砺波を思わせる甲高い声が玄関に響き、俺はぎょっとして頭から

手をはずす。そのときだった。

「おや、お帰り」どこからともなく、穏やかな声が聞こえてきた。

ハッとして見上げると、玄関の目の前にある階段から一人の男が降りてきた。

「おじさま」

「遅い帰りだったじゃないか」

笑顔を浮かべても、眼鏡の奥の鋭い瞳だけは厳しさを残している。四角い輪郭の、まるで武士みたいなおっさんだ。本間秀実。国の大臣であり、カヤの養父。

俺は思わず背筋を伸ばした。居心地悪い緊張感がはしる。

「お邪魔してます」と頭を下げると、階段を降りきった親父さんは綿みたいな眉をくいっと上げた。「今度はちゃんと玄関から入ってきたね」

皮肉ではなく、冗談のようだ。親父さんは笑い出した。俺は恥ずかしくなって苦笑する。

「本間先生」

困り果てたような声を出したのは真麻さんだ。さすがにはっきりとは言えないようだが、その表情から「何か言ってやってください」という心情がよく分かる。

そんなメイドを落ち着かせるように親父さんは右手で制す。

「下がっていいよ、沖野さん。今夜はおそくまで悪かったね」

沖野っていうのか。てっきり真麻が苗字かと思ってた。
沖野さんは納得いかないような表情を浮かべたが、親父さんに深々と頭を下げるとそそくさと去っていった。さすが上流階級のメイドだ。従順というかなんというか……
感心していると、「和幸くん」と低い声が耳に入った。ハッとして親父さんに振り返ると、

「今夜はもう遅い。泊まっていったらどうだね？」
「はい！？」

泊ま……泊まる！？　またか！？　と思った。昨日だって、この人は怒られて当然のことをした俺に「朝食を食べていきなさい」と誘ったんだ。おかしすぎるだろ。なんもお咎めなしか？　これが……大臣レベルの器の大きさか？
思わず横を向くと、はたりとカヤと目が合った。カヤが頬を赤らめているのに気づいて、俺も焦って顔を背ける。

「い、いえ、その、今夜はもう遅いんで」って、だから泊まっていけ、て言われたんだろうが。「あの、制服とか全部家ですし」

よし。俺にしてはうまい理由だ。心の中で自画自賛して、俺は思わず微笑んだ。が、それはすぐに引きつり笑顔に変わる。あれ、と疑問が浮かんだのだ。――なんで俺、必死に断ってるんだ？　別に泊まっていっても構わないよな。てか、ラッキーじゃないか。カヤと一晩過ごせるんだ。まあ、多分別の部屋で寝かせられるだろうけど。
撤回しようと口を開けたが、「そうか」という残念そうな親父さんの声に遮られた。

「じゃあ、家まで送らせようか？」

どんだけ、この人は器がでかいんだよ。俺は慌てて顔を横に振る。

「大丈夫です。男なんで」いや、男なのは見て分かるだろ。親父さんを馬鹿にしてんのか、俺は。

「遠慮しなくていいんだぞ。父親だと思って甘えてくれていいんだ」俺にそう言って、親父さんは自信満々の表情でカヤを見やった。「カヤもな」

横目でカヤが遠慮がちに微笑んだのが見えた。

そうか。さすがにまだ打ち解けているわけじゃないんだな。先週、神崎の両親の葬式が終わったばかりだし。すぐに「父親」と思えるわけもないか。

でも……と、俺は親父さんに目をやった。一見、堅苦しそうだが、今のトーキョーには珍しく心の広いいい人じゃないか。大臣ってもっと腹黒いイメージがあったんだが、偏見だったかな。悪い政治家もいれば、いい政治家もいるか。

よかったな、カヤ――俺はそう心の中で言った。

「あの、本間先生」

俺は唐突に声をかける。本間先生、て呼んでいいものか迷ったが、それ以外に呼び方も分からない。カヤが「おじさま」て呼んでいる以上、俺が「親父さん」と呼ぶのも変だし。

親父さんは「ん？」と目を丸くした。

「今度、上野の美術館で何かの展覧会があるみたいなんですけど、一緒に行きませんか？」

俺の口からこんなセリフが出てくるなんて、自分でも気味が悪い。カヤが驚いてこちらを見ているのが目の端で確認できた。ここに砺波がいたら、大爆笑だろうな。

「カラヴァッジオの絵はないみたいなんですけど」とぼそりと付け足すと、親父さんは「構わない」と微笑んだ。

「そうか、絵画に興味をもってくれたか。嬉しいな。来週にでも行こう」

「私も行きます」急にカヤが高らかに声をあげ、満面の笑みで俺の腕をつかんだ。「三人で行こう」

カヤも嬉しそうにしているのが分かって、達成感に顔がほころんだ。といっても、誘っただけで何をしたってわけでもないんだが。カヤが俺にしてくれたことに比べたら……いや、比べものにもならないか。

それでも、とりあえずは一歩くらいは踏み出せたよな。

「金曜日のオークションも楽しみにしているからね」

念を押すようにそう言って、親父さんは携帯電話を取り出した。

「さて、わたしは望に帰ってくるように電話しないとな」

「あ！」と、カヤは血相を変えて親父さんに懇願するような瞳で見上げた。「おじさまのお話が終わってからでいいので、私にも代わってくださいませんか？」

「もちろんだ。ちゃんと謝るんだよ」

カヤはぎこちなく笑って「はい」と返事をする。

いや、謝る必要ないだろ。てか、クビになればよかったのに。しぶとい。思わず、舌打ちをしたくなった。

「それじゃ、俺はそろそろ」一歩後ずさってそう言うと、親父さんはケータイを耳にあて、軽く左手を振った。

「もう？」と咄嗟に振り返ったカヤの肩に手を置き、耳打ちする。

「あとで電話する」

恥ずかしいのと嬉しいのが混ざったような不自然な笑顔を浮かべ、カヤは頷いた。

＊　＊　＊

複数の立方体が、縦に横にと連なった、近代アートのような屋敷。和幸はそれを見上げながら、監視カメラを二つ抱えた門へと向かう。妙な視線を感じて庭を見やると、黒いスーツを着た大男がこちらに睨みをきかせている。和幸は愛想笑いを浮かべて手を振った。が、もちろん、反応はない。和幸は手を振ったことを恥ずかしくも感じて、その手を隠すようにポケットに突っ込んだ。

誰かが監視カメラで見張っているんだろう。和幸が近づいた途端、門が独りでに開いていった。

「要塞だよ」と呆れてつぶやく。

門から出て、夜道にぽつんと立つ。カヤと一緒だったときは感じなかったが、暗がりの路地というのは寂しいものだ。静流のマンションから本間の家まで、かなりの距離があったはずだが、カヤと他愛もないことを話しながら手をつないで歩いていると、短いくらいだった。

ポケットから右手を抜いてじっと凝視する。柔らかくて暖かいあの感触が懐かしい。今は、ぐっと握り締めても、虚しく空気さえも

逃げてしまう。触れるものがない――こんな当たり前のことに物足りなさを感じている自分は、贅沢者なんだろうか。

「和幸くん！」門が閉まる音に混じって、そんな高い声が聞こえてきた。「忘れ物」

言いながら駆けてくるカヤは、閉まりかけている門の間をするりとすり抜け、振り返った和幸の胸に飛び込んできた。

「忘れ物？」と目を瞬かせると、カヤは「こっち、こっち」と和幸の服を引っ張る。

戸惑いながらも連れて行かれた先は、門から一メートルほど離れた塀の前。カヤは塀に背をしっかりとつけて辺りを見回している。

「忘れ物って？」と尋ねると、カヤは上目遣いでちょいちょいと指で招く。その仕草に心はくすぐられるものの、理解はできない。和幸は照れているのを隠すように「なんだよ？」とくぐもった声で尋ねた。

「ここなら、監視カメラに写らないから」内緒話をするように、カヤは小声でささやく。

「……だから？」

「それに、もう……いいかな、て思って。その……時間もあいたし」

もじもじとそうつぶやくカヤに、和幸は眉をひそめる。するとカヤは諦めたようにため息をつき、腰に手をあてがった。

「もう。分からないの？　能無しか？」

「は？」

明らかに誰かをマネした口調だった。だが、本人とは違って随分可愛らしい。和幸がぼうっと呆けていると、カヤはいたずらっぽく笑って、彼の胸倉をつかんで引き寄せる。ぐいっといきなり引っ張られて、「なんだ？」と思ったときにはカヤの唇が下唇に触れていた。急なことに目を瞑るのも忘れていると、カヤの手が胸倉から肩にうつる。まるでしがみつくように掴まれ、和幸はカヤが背伸びをしていることに気づいた。

愛おしさに、つい目を細める。そういえば、今日はずっと背伸びをしていたのかもな――今日一日のカヤの奮闘ぶりを想像しながら、和幸は目を瞑り、身をかがめた。カヤの踵が地面につくように。

何度か唇を重ねあい、二人は気恥ずかしそうに顔を離した。

慣れないことをしたせいか、カヤは顔を真っ赤にして俯いている。そんな態度を取られると、和幸まで恥ずかしくなって目をそらした。

「じゃあ」というカヤのこわばった声が聞こえ、和幸は視線をカヤに戻す。依然としてカヤは俯いていたが、唇はしっかりとその言葉を発した。

「おやすみ、和幸」

「！」

和幸はハッとして目をしばたたかせる。カヤはにこりと照れ笑いを浮かべ、その場から逃げるように去っていく。その背中に「おやすみ」と和幸は答えるが、動揺しているせいか、声は上擦っていた。

「気のせいじゃなかった……のか」

一人で呆然と立ち尽くし、ぽつりとつぶやいた。パーティーの最中、台所でカヤと林檎のことでもめたときだった。カヤは自分を「

和幸」と呼んだ気がした。といっても、一度だけだったが。てっきり、聞き違いかなにかだと思っていた。

呼び捨てにされただけで胸が高鳴っている自分に、和幸は呆れたように苦笑した。

「中学生か」

もうそうつっこんでくれる幼馴染とは会えない。和幸は自らつっこんだ。

＊　＊　＊

ずいぶん、短くなったんだな。シャワーを浴びて髪をタオルでふいていると、乾きの早さにそれを実感した。ここまで短くしたのは初めてで、髪を洗っているときも違和感があった。でも、楽になったのは確かだ。

私は鼻歌交じりに軽い足取りで階段をのぼり、ビリヤード台のある二階へたどりつく。ふと、おじさまの書斎へ入ろうとする見覚えのある背中を見つけ、私は声をかけた。

「前田さん！」

その瞬間、背中はびくっと震えた。

「カヤさん？」

振り返ったのは、爽やかなお兄さん。つぶらな瞳に、海苔のようなくっきりとした眉。かっちりとワックスでかためられた黒髪。こけた頬が多忙さを物語っている。おじさまの秘書である前田さんだ。学生時代はバスケットをしていたらしく、すらっとした長身だ。私

は顔を見上げながら歩み寄る。

「こんな時間までお仕事ですか？」

尋ねると、「あ、まあ」と居心地悪そうに顔をそっぽに向けた。気のせいかもしれないけど、顔色が悪い。

「あまり、無理しないでくださいね」

「あ、いえ……お気遣いなく」

そう答える前田さんは、やはり様子がおかしい。私と決して目を合わせようとしない。普段は、ニコニコと微笑んでくれるのに。よほど疲れてるんだろうか。

邪魔しちゃ悪い、かな。まだお仕事あるみたいだし。

私は「おやすみなさい」とおずおずと言って、踵を返した。いつもなら、「おやすみなさい！」とお腹から出したような太い声で返してくれるんだけど……背後からは書斎の扉を開く音しか聞こえてこなかった。

もしかして、今日の私の失踪で前田さんにも迷惑をかけたのだろうか。そう思うと、部屋のドアノブに伸ばした手がぴたりと止まる。

「……」

ドアの前で足元を見つめて突っ立っていたときだった。部屋の中から音楽が聞こえてきて、私は顔を上げた。軽快な呼び出し音。

――あとで電話する。

和幸くんの声が頭に響いた。大急ぎでドアノブをまわして中に飛び込んだ。机に一直線に向かうと、暗い部屋で必死に光を放ってい

るケータイを手に取る。
「和幸くん！？」耳に当てるなり、はじけるような声を出していた。
すぐには返事は無く、不思議に思っていると、
「戻ってる」
いぶかしげな声が聞こえてきた。
「何のこと？」
「いや、なんでもない」
なんでもなくなさそうだ。声色ですぐに分かる。そして、彼が何のことを言っているのかも本当は分かってる。――呼び方のことだ。私は苦笑しながら、机の上でチェーンにくるまっている十字架を手に取った。ぎゅっと胸の前で握り締め、ベッドへと歩み寄る。
だって、ずっと「くん」付けだったんだもん。すぐには呼び捨てには変えられないよ。徐々に慣れていこうとは思ってるけど。
「もう部屋、ついた？」
尋ねながらベッドに腰をおろした。
「ああ」と答える彼の声に耳を傾けながら、そういえば……とあることが気にかかった。
「和幸くんって、自宅謹慎中だったんだよね？」
「一応な」

それにしては、自由に外に出ていたな。といっても、私が彼を誘い出したようなものか。私はケータイを耳に当てたままベッドにごろんと横になった。

「いつまでなの？」

「さあ」

そのとき、退学、という言葉が脳裏をよぎった。十字架を握り締め、ごくりと生唾を飲みこんでおそるおそる聞く。

「退学……にはならないよね？」

しばらく沈黙が続いた。電話の向こうで困ったように頭をかいている彼の姿が思い浮かぶ。

「熊谷の母親次第さ。明日、校長に直談判しにくるみたいでな」

「熊谷くんのお母さんが？」

＊　＊　＊

床に座り、俺はカヤに熊谷の母親のことを説明した。退学になるかもしれない――その可能性をカヤが指摘したのには驚いたが、それ以上に、泣きじゃくるわけでもなく毅然とした声でそれを尋ねてきたことに驚いていた。もう無闇に隠し事をするのはやめよう、と思った。カヤは強くなった。守られるだけのお嬢さまじゃなくなったんだ。甘やかすのはやめよう。カヤのためにならないし、カヤもそれは望んでいないんだ。

「じゃあ、明日、決まるんだね。和幸くんが退学になるかどうか」

全部聞いて、カヤは落ち着いた声でそうまとめた。俺は目に付いたカーペットのゴミを取りながら、「ああ」と答える。近くのゴミ箱にそれを入れたときだった。

「大丈夫だよ」とカヤが明るい声で言ってきた。

「あ、ああ。ありがとう」

勇気付けてくれてるんだろうか。それにしては自信満々だが。にしても、本当に変わったな。てっきり、「和幸くんが退学になったら、私も辞める！」て言うかと思ったんだが。

「ねえ、和幸くん」

「ん？」

「権力がこの世界の全てなら、私はそれをあなたにあげる」

唐突に、カヤはそんなことを言い出した。俺はきょとんとして言葉が出せなかった。

「私が、世界の全てをあなたにあげる。だから、安心して」

安心して……皮肉に聞こえた。胸騒ぎがした。どうしてそんなことを急に言ってきたのかは分からない。でも、カヤのその言葉は不吉に聞こえた。世界の終焉の鍵を握る彼女から、そんな言葉が出てきたのが恐ろしかった。

「あ、ああ」

カヤに他意はないはず。単に俺を元気付けたかっただけだろう。なのに、俺は余計なことを考えて、素直に礼も言えなかった。

「そうだ！　もう一つ、あげなきゃいけないものがあったんだ」
カヤはパッとしない俺の返事を気にしていないようだった。元気のいい声で嬉しそうにそう言った。
「あげなきゃいけないもの？」ごまかすように、すかさず相槌を打つ。
「うん。秘密の番号だよ」
秘密の番号？　また、何を言い出すんだ？
「メモしてね」
「いや、暗記力はいいから。言っていいぞ」
「〇四〇……」
カヤは丁寧に一つ一つの数字を読んでいった。結局俺の頭の中には十一桁の番号が並ぶ。
「電話番号か？」
そうつぶやくと、カヤは「そう！」とまるで俺がクイズに正解したかのように弾けた声を出す。
「今日、こっそり買ったの。『おつかい』のついでに」
おいおい。なんて活動的な。本当におてんば娘になったもんだな。
俺が唖然としてると、カヤは恥ずかしそうに付け足した。
「和幸くんしか知らない番号だよ」
「！」

体に電流のようなものが走り、一瞬で俺は頬を赤らめた。ああ、くそ。やっぱ泊まればよかった――無性に後悔して俺はがっくりと頭を垂らす。

「ほら」と悪いことをしたわけでもないのに、カヤは必死になって言い訳を始める。「この携帯は、ＧＰＳで望さんに居場所見つかっちゃうでしょ。電源きらなきゃ二人でこっそり会えないから。だから……」

「なるほど」

カヤ、賢いな。俺は顔を上げてにんまりと笑んだ。これで椎名を撒けるってことか。実に気分がいい。

「今日、『おつかい』行ってるとき、ケータイ使えなくて不便だったし。家出したとき、和幸くんに連絡できたほうがいいから」

俺はつい笑っていた。「家出する気あるのかよ。すっかり不良娘が板についてきたな」

「もしものときだよ！」とカヤは慌てて訂正する。

まあ、家出するほどのケンカを親父さんとできるようになったら、それはいいことだろう。俺はくつくつと笑いながら、そんなことを考えていた。

「それにしても、カインの皆さん、おもしろい人ばかりだったね」

カヤの懐かしむような声に、俺は心が温まるのを感じて目を細めた。

「変人、の間違いだろ」
「そうかもね」クスクスとおもしろがるように笑うのが聞こえてきた。「でも、みーんな好き」

ありがとう――そう言う資格はもう俺にはないんだろうな。『勘当』された今、あいつらと俺は関係ない人間なんだ。
でも、だからこそ、本当によかった。最後に皆に会えて。もちろん、仲のいいカイン全員に会えたわけじゃない。何人か、姿が見えなかった。砺波もいなかったしな。それに、夜遅かったからだろうが、ちびっこたちもいなかった。せめて、俺が『迎え』に行ったカインとは会っておきたかったが……仕方ないよな。それは贅沢な後悔だ。カヤの奮闘がなかったら、俺は誰とも会えずに『勘当』されていたんだから。なんだかんだ強がっても、一生後悔していた気がする。

「ありがとな、カヤ」

結局、そう言っていた。家族を褒めてくれたからじゃない。カヤが今日してくれたことに対する礼だ。その意図が伝わったかどうかは分からないが、カヤは「どういたしまして」と満足げに答えた。
丁度、話に区切りがついたときだった。扉を乱暴に叩く音が玄関から聞こえてきた。いきなりで体が大げさにびくついた。なんだ！？　と玄関に振り返って立ち上がる。

「誰か来たみたいだ」ぽつりとそう言う。
「誰か？」カヤが驚いている。そりゃそうだよな。俺も驚いているよ。「こんな時間に？」
「ああ」

夜遅くに俺の部屋に来る人間なんて、カインの兄弟くらいしか有り得ない。学校の人間で俺の部屋を知ってるのはカヤくらいだ。

「悪い。また明日、学校でな」

「う、うん。おやすみ」

心配そうな声ではあったが、俺はとりあえず電話を切った。

玄関では相変わらず、ドアが手荒く叩かれている。俺は振動するドアを見つめながら、小首を傾げた。ちょっと待てよ。こんなことする人間は、カインの中でも一人くらいしか……

「和幸！　いるんでしょ！？」

「！」

甲高い声が聞こえてきて、俺は慌てて裸足で玄関に降りるとドアを開けた。

そこに立っていたのは、想像通り、

「砺波？」

愛か狂気

男は苦しげな表情でソファでうなだれていた。ガタガタと手が震えている。ポケットのある機械につないだイヤホンは、若い男女の会話を男の耳に届けていた。

心臓が不規則なリズムを刻む。罪悪感とストレスが男の全てを狂わせていた。体調も良心も正義感も、そして男の輝ける未来も、全てが崩れ去りそうだ。いや、もう崩れ去ったのかもしれない。

それでも、鈴が鳴るように美しい彼女の声を聞いていると、病んだ心も慰められるようだ。男は哀しく微笑んでいた。

不意に、男はハッとして顔を上げた。

「メモしてね」と女は言い、「〇四〇……」

なにやら番号をつぶやき始めたのだ。男はまるで自分が言われているかのように、微笑みながら「ゼロヨンゼロ……」と繰り返して頭に刻み込んだ。忘れないように会話をそっちのけで暗記する。何度も何度も十一桁の番号を頭の中で繰り返した。すると、気分が楽になった。そうか、と男は頬をゆるませた。彼女が自分に話しかけていると錯覚すれば、このおぞましい作業も楽しくなるかもしれない。

だが、男のそんな慰みもすぐに消えさった。男の心臓に激痛が走る。会話の中で、女がこんな言葉を漏らしたからだ。

「それにしても、カインの皆さん、おもしろい人ばかりだったね」

男は目を見開いた。痙攣したように手が小刻みに震えだす。喉が砂を飲み込んだかのように渇いていく。会話は虚しくも淡々と続く。

「変人、の間違いだろ」
「そうかもね。でも、みーんな大好き」
男はガタガタと顎を震わせた。頭が真っ白になり、絶望に襲われ、聞こえてくる会話を必死で否定しようと首を左右に振り続ける。
「そんな」と体を丸めて頭を抱えた。「本当に……」
そのときだった。いきなり部屋が明るくなって、男は心臓が飛び出るほど驚いた。条件反射で立ち上がり、部屋に入ってきた男を見ると、体中の穴から汗が噴出した。
「電気くらいつけたらどうだね、前田くん？」
そう言って、初老の男が後ろ手にドアを閉めて入ってくる。
「カヤの部屋に盗聴器は仕掛けたんだろうね？」
脅すような口調で言われ、前田はイヤホンを即座に外して「は、はい。本間先生」と吐きそうになりながらも答える。
「うまく作動しているかね？」
本間はデスクへと歩み寄る。それを目で追いながら、前田は震える手を止めようと握って開いてを繰り返していた。
「丁度いいから、和幸くんを泊まらせようとしたが……今時、理性的な少年で困ったよ。すんなり断られてしまった。二人きりで会話させれば、ボロがでてくると思ったんだがね」

鼻で笑いながらそう言って、本間は黒い上等な皮のイスに腰をおろす。眼鏡の奥の瞳を鷹の目のように鋭く光らせ、「まさか」とつぶやいた。

「警戒でもしているんだろうか」

デスクに置いた指で、苛立ったようにトントンと机を叩く。それにあわせるように、前田の鼓動も早くなっていった。「そうだ」と言って、ギラリと獲物を見つけたかのような瞳が前田に向けられる。

「彼は電話すると言っていたが、電話は来たかね？」

前田の体がびくんと震えた。

「は、はい？」と顔をこわばらせると、本間は不機嫌そうに顔をしかめる。

「カヤは和幸くんと電話していないのか？」

「あ……」前田が口ごもると、本間は声を荒げる。

「しっかりしてくれ、前田くん！　わたしはすぐにでも欲しいんだよ。彼がカインだという確たる証拠が！」

段々と早口になった本間の口調に、前田は震え上がった。明らかに苛立っている。焦ってでもいるのだろうか。

「それが……」と汗だくになりながらうつむいた。そんな彼を見るなり、本間は机に手を叩きつける。

「前田くん！　君はいつになったら、一人前になるんだね？　足を引っ張る以外にできることはないのか！？　この仕事は君の目標だったんだろう！？　ちゃんとまともな仕事をしてみせなさい！」

前田の心臓が狂ったような速さで脈を打ち出した。ガタガタと震える手。恐怖じゃない。怖気づいているわけではない。悔しい。これは怒りだ。積もり積もった怒り。前田はごくりと唾を飲み込むと、ゆっくりと顔を上げた。

「すみません」

震える声でそうつぶやく。言い慣れた言葉だ。そして本間にとっても聞きなれた言葉だ。本間は眉間に皺を寄せて前田を睨みつける。

前田は咄嗟に視線をそらし、相変わらずはっきりとしない口調で続ける。

「盗聴器、うまく作動してないみたいで……その、まだ、会話は聞き取れていな――」

「なにやってるんだね！？」

本間は顔を真っ赤にして、あからさまに怒りをあらわにした。思いっきり机を叩きつけると、「もう下がりなさい！」と怒鳴りつけた。

「明日の夜までには聞こえるようにしておきなさい」

「はい」

弱々しくそう言って、前田は踵を返した。

書斎をあとにし、顔を上げると、とある部屋のドアを見やった。そこは未だにダンボールが積まれている生活観のない部屋だった。家具もまだそろってない寂しげな部屋。ただ、空気には彼女の香りが漂っていた。息を吸うだけで、彼女の傍にいるような気がした。

女の子だから、と本間が選んだ薄桃色のシーツと布団がかけられたベッド。盗聴器は言われた通り、その下にしかけた。この手で―

―前田は顔をしかめると、ぐっと拳を握り締めてドアにゆっくりと歩み寄る。
目の前に佇んで、ごくりと生唾を飲み込んだ。このドアの向こうには、憧れの少女がいる。自分に優しく微笑みかけ、体調の心配までしてくれる心優しい女性だ。三年も仕える自分をないがしろにする本間とは違う。一人の人間として尊敬の眼差しを向けてくれる。
勇気を振り絞り、前田はノックしようと手を挙げた。

「夜這い、ですか？　前田さん」

いきなり間延びした声が聞こえてきた。ぎょっと目を見開いて、勢いよく振り返る。
壁に寄りかかりにんまりと笑んでこちらを見ている男。人を侮蔑することしか知らないような眼差し。見栄えする容姿をしているから余計に腹立たしい。
前田は飛び退くようにドアから離れ、「椎名くん」とくぐもった声を出す。

「こ、今夜は大変でしたね」

咄嗟に当たり障りのない話をふる。椎名はじっくりと前田を観察し、鼻で笑った。

「まあ、あのお嬢さまもやっと『帰る家』がどこか覚えてくれたみたいですから。進歩じゃないですか？」
「帰る家？」

近づいてくる椎名に、前田は愛想笑いで問う。

「どこか……というよりは、どっちか、ですかね」

何を意味不明のことを話しているんだ？　前田は眉をひそめる。椎名という男は話をもったいぶる癖があるようだった。そして、いつも遠まわしに人を馬鹿にしたような口調で話す。それは前田にとって不快以外のなんでもない。

「それよりも」と椎名は言って、前田の肩に手を回した。まるで円陣を組む野球選手のように身をかがめ、前田に顔を近づける。香水でもつけているのか、男にしては不自然ないい香りがしてくる。

その薄い唇は笑みを浮かべているが、切れ長の目は鋭く前田を捕らえている。

「我慢ですよ、前田さん」

かろうじて聞こえるくらいの囁き声で唐突に椎名はそう告げてきた。

「なんのことですか？」苦しげにそう問うと、椎名は冷笑する。

「カヤちゃんを見る目が危ないんですよ、前田さんは」

言われて前田は顔を赤らめた。「何の話ですか！？」と深夜にもかかわらず叫んでいた。椎名は前田から離れると、降参するように両手を挙げる。

「怒らないでください。僕はアドバイスをしようと思っただけですよ」

「アドバイス？」

この男にカヤへの気持ちが知られていた事実だけで、この場で切腹でもしたいほどの屈辱だというのに、アドバイスと言い出した。

前田は悔しさと怒りで爆発寸前だ。だが、彼が本間のお気に入りである以上、前田には何もできない。文句一つ言うことも赦されないのだ。

「和幸くんがカインなら」と椎名は前田にだけ聞こえるように小声で切り出す。「日曜日にはカヤちゃんはフリーになります」

「……」

「婚約者を亡くして落ち込んでるところを狙えばいいですよ」

前田は言葉を発せずに、目をむいて硬直した。そんな彼の様子に満足したように椎名は笑んで、前田の肩に手を置く。

「傷心中の女ほど、落ちやすいですから」

軽い調子でそう言って、椎名は前田の横を通り過ぎて本間の書斎へと向かった。

残された前田は呆然と立ち尽くした。心臓までが言い知れぬ恐怖で震えているようだ。握り締めた拳にはじんわりと汗がにじんでいる。

和幸くんがカインなら――椎名の言葉が、前田の頭の中で何度も何度も繰り返された。前田は前にも後ろにも進めず、その場に立ち尽くした。

＊　＊　＊

「秘密の番号、かぁ」少年はアヒルのような口をにぱっと開きながら、頬杖をついてそうつぶやく。「かわいいなぁ」

ほんわかとしながら、デスクの上にある黒い携帯電話に目をやる。そこからはスピーカーフォンで少女の鼻歌が聞こえてきている。少

年――曽良は優しげな眼差しでそれを見守る。

「でも……二人だけの番号じゃないんだな、これが」

そうぼやいて、部屋の中を目だけで見回す。壁に並ぶたくさんの写真。微笑む子供たちと父親――一見、平和な家族写真だ。曽良は一つずつじっくりと眺めて、すぐに見飽きた。今度は天井の木目を数え始めたが、やはりすぐにつまらなくなった。

がっくりとおでこを机にぶつけるように突っ伏す。「あ～」と唸ってから、顔を横に向けた。目に入るのは、携帯電話の姿をした悪魔の機械。

大きくため息をつくと、目を瞑る。

頭の中に浮かぶのは、十一桁の数字。曽良はいたずらっぽくと笑って「かけちゃおうかな」とひとりごちる。

だが、言ってすぐに、最悪だ、と自己嫌悪に陥った。

頬に机のひんやりとした冷たさが伝わってくる。それが寂しさを助長して、泣けてくる。

「トミー、どこまで買い物行ったんだ？」

曽良は弱々しい声を漏らした。

＊　＊　＊

「砺波？」

俺はぱちくりと目を瞬かせた。幻でも見ているのかと思った。

「なんで二回も呼ぶのよ？　うざいわね」

ああ。砺波だな。

「入れてくんない？　あんたと会ってるの見られるとまずいんだから」

言ってきょろきょろと辺りを見回す。この階には他にカインは住んでいないが、別の階には何人か住んでいる。そいつらに見られるのを警戒しているんだろう。

「ああ」と戸惑いつつも、部屋に入れる。

わざわざ、お忍びで会いにくるとは。パーティーに来れなかったから個人的に挨拶に来たんだろうが……砺波らしくないよな。

「いつから、律儀になったんだ？」

玄関に上がりながらそう言って、ふと、砺波がついてこないのに気づいて振り返る。どこか浮かない表情で玄関でじっと立っている。珍しいな。どうしたんだ？

「『カインノイエ』が『クローンを救う会』だったころのこと。どれくらい知ってる？」

唐突な砺波の質問に、俺は苦笑した。

「いきなり、なんだよ？　卒業試験か？」気の利いた冗談を言ったつもりだったが、砺波は真剣な表情で睨みつけてきた。

「答えなさいよ！」

答えろって……俺は肩をすくめた。「興味なかったから、基本しか知らないけど」

『クローンを救う会』はカインノイエの前身であって、まったくの別物。共通している点といえば、親父がリーダーを務めていたことと、クローンを助けていたこと。メンバーは親父がかき集めた同志。『無垢な殺し屋』が誕生するずっと前の話だ。助け出した子供を育てる、という考えすらまだ生まれていなかった。やっていたことといえば、クローン製造工場の爆破くらいだったらしい。

当時のメンバーは、親父との意見の相違で散らばって現在は消息不明。親父は彼らの名前すら俺たちには明かさない。『クローンを救う会』については語りたがらないのだ。だから俺もわざわざ聞こうとは思わなかった。

「なんでそんなこと聞くんだ？」尋ねると、砺波ははりつめた表情を浮かべる。

「『クローンを救う会』のメンバーは、皆、あるネックレスを身につけていたんだって」

「あるネックレス？」

いきなりアクセサリーの話かよ？　まさか、最後に何か買えっていうんじゃないよな？　別にいいけど。

それがなんだ？　と小首を傾げると、砺波は目を反らした。

「そのネックレスは、パパが創ったらしいの。中には、盗聴器と小型の爆弾がしかけられてる」

「爆弾？」

思わず顔をひきつらせた。親父が頭が良いというのは噂に聞いていた。だが、小型爆弾？　それも、ネックレスでカモフラージュ？

そんな恐ろしいものを創っていたのか？

唖然としている俺をよそに、砺波は珍しく暗い表情で話を続ける。
「爆弾は遠隔操作で起爆できるようになってる。起爆スイッチは見た目はケータイにそっくりで、電話するみたいに盗聴できるし、決められた十一桁の番号を押すと起爆するようになってる」
「何のために、そんなネックレスを？」
「万が一メンバーの誰かが敵に捕まっても、情報を漏らす前に消せるように、よ。盗聴器も、捕まったメンバーの状況を把握するため。起爆スイッチを押すタイミングを見計らうためね」
「口封じか」

親父がそんなことをさせていたなんて、意外だ。
俺たちカインは、捕まりそうになったら自分で命を捨てるように教えられてる。拷問でもされて、カインノイエの情報を喋ったら、他の兄弟姉妹が危ないからな。でもそれは、親父からの指示じゃない。兄さんや姉さんたちから伝わってきたカインの心得みたいなもの。
親父は嫌がっていた。俺たちの命を大事に思ってくれているからな。『おつかい』から帰ってこない子供が現れるたびに、『実家』で十字架に向かって祈りをささげているのを何度も見たことがある。
事実、今、カインはそんな危ないネックレスを身に着けてはいない。それが何よりの証拠だ。親父は何があっても俺たちに「死ね」とは言わない。
「それで？　それがどうかしたのか？」
砺波はしばらく黙りこみ、神妙な面持ちを浮かべてこちらを見やった。童顔だからか、悪いことをした子供みたいだ。
「そのネックレスは、パパのオフィスに隠してあったの」

「オフィスに！？」

冗談だろ。親父はオフィスに爆弾を溜め込んでたのか？　危ないだろ、普通に。まさか、それが爆発して『実家』が吹っ飛んだ、とかそういう話じゃないよな？　それなら、砺波の暗い雰囲気も頷けるが。

「でも」と砺波は苦しそうに切り出す。「今日の昼間、一つ消えた。誰かが持ち出したの」

「ぬ、盗まれたのか！？」

ぎょっとしてそう尋ねると、砺波は唇をかみ締め、首を横にふる。

「ある人物にあげたのよ。プレゼントとして」

「……」

その瞬間、家の中が急に冷え込んだ気がした。ネックレスのプレゼント――聞き覚えがあるフレーズだ。それも、つい最近。いや、ついさっき。ぞくっと嫌な予感がした。

砺波はおもむろに胸元に手を当て、つぶやく。

「銀の十字架のネックレス。見覚えあるでしょ」

「……十字架」

ごく自然に、そのネックレスが頭の中に浮かんだ。不吉なことに、細部まではっきりと想像できる。

血の気が引いて、急に心臓が絞られるようにキリキリと痛みだした。

夜の帳に

「落ち着きなさいよ！」

今にも外に飛び出そうかという和幸の服をひっぱり、砺波は必死に止めていた。

「冗談じゃない！　どういう神経してるんだ！？　カヤに爆弾渡すなんて！」

「カインの皆は、あの子をまだ疑ってるのよ」

「それなら、そう俺に言えばいいだろ！　あいつの無実はいくらでも俺が証明してやる」

「馬鹿なこと言ってんじゃないわよ。そういう問題じゃないのよ」

「どうでもいい！　皆、どうせまだパーティー続けてんだろ！　静流姉さんの部屋に行って……」

和幸の力に砺波はずるずると引きずられる。和幸はドアノブに手を伸ばし、今にも外に出んとしていた。砺波は「ああ、もう！」と叫んだ。

「あんたに行動されたらわたしが困るのよ！！」

脳天を突き抜けるような金切り声。和幸は顔をしかめて動きを止めた。砺波はチャンスとばかりにまくしたてる。

「わたしがネックレスのこと、あんたにバラしたって分かったら、わたしが『勘当』される！　あんたとは違って、わたしにはカインノイエ以外に居場所がないの。そんなことになったら、のたれ死ぬわ！」

砺波の（聞いたこともない）懇願するような声に、和幸は冷静さを取り戻した。ばつが悪そうに頭をかいて、砺波に振り返る。

「……そう、か。悪い」

そう言う彼の額には汗がにじんでいた。とりあえず彼が落ち着いたので、砺波は服を掴んでいた手を放す。

「わたしはただ、忠告しに来たのよ」砺波は落ちついた声で言ってため息をつく。「わたしは、こんなやり方好きじゃない。そもそも、パパからの『おつかい』じゃないし」

その言葉に、ぴくりと和幸は反応する。

「親父からの指示じゃないなら、誰の指示だ？」

すると、砺波は力なく首を横に振った。

「正直、分からない。どこからともなくそんな話が出てきて、皆、流されたって感じ。多分、言い出したのは留王あたりだとは思うんだけど……」

「流されたって……曽良は？　止めなかったのか？　リーダーだろ」

「リーダーだからあいつはカヤの味方にはなれないのよ」砺波は苛立った声で返す。「流れを無理にせきとめようとすれば氾濫が起きる。それでなくても、あんたが辞めて、少なからず兄弟たちは動揺してる。不安定になってるの。曽良がきっちり示しをつけなきゃ、分裂しかねないわ」

言われて和幸は表情を曇らせる。砺波の主張は理解できる。カイ

ンの皆がカヤを疑ってるなら、リーダーである曽良はそれに付き合うべきだ。そうでもしなければ、示しがつかない――その通りだ。もし自分が曽良の立場で、カヤが見知らぬ女だったら同じ行動を取っていたはずだ。だが、和幸はそれでも理解に苦しむ。なぜなら……と、悔しそうに頭を抱える。

「でも、曽良はカヤを……」

言いかけ、口ごもった。その先を口にすることさえ憚られる。そんな彼の様子に、砺波はつまらそうに口をとがらせた。和幸の考えていることが手に取るように分かったのだ。

「キスのこと、ひっかかってるわけ？」

「え！？」

砺波が知っているなど、これっぽっちも予想していなかったのだろう。和幸は驚き飛びのいて背中を壁に打ち付けた。どんだけ驚いてんのよ、と砺波は不快そうに顔をしかめる。

「いいじゃない、キスくらい。ちっちゃい男ね」

「キスくらいって……」

反論しようとする和幸に、砺波は人差し指を突き出した。表情は真剣そのもの。和幸はたじろいで口を噤む。

「起爆スイッチを持ってるのは曽良よ」

「！」

「ま、リーダーにその役が回るのは当然よね。さすがのわたしも同情してんのよ。好きな子を『片付け』る羽目になるなんて、とんだ貧乏くじをひいたもんだわ」

言葉通り同情するような表情を浮かべ、砺波は人差し指を引っ込める。
和幸はいきなり衝撃的事実をさらりと聞かされて、反応ができないようだ。口をあんぐりと開けて固まってしまった。
砺波は腰に手をあてがうと、「だから」と勢いよく言い放つ。
「キスくらい、赦してあげなさいよ。減るもんじゃないんだから」
「……」
「あいつ、リーダーも向いてないのよ。まだ代理だってのに、ストレスでへばってる。へらへらその辺でスキップしてるほうがあいつらしいのに」
あいつらしい――独り言のように漏らした砺波の言葉に、和幸はぴくりと眉を動かした。顔を上げると、苦しげな表情を浮かべている幼馴染を見つめる。
「お前、曽良とは小学校からの付き合いだよな？　ずっと仲いいんだよな？」
砺波は顔をしかめた。確かに、和幸は中学以降、砺波と曽良から距離を置いた。その後の二人の関係を和幸が把握していないのも頷ける。だが、今、尋ねる質問か？
「だから、なんだっての？」
「お前もキスのこと、あいつらしくないって思うんだな？」
和幸の言っている意味がさっぱり理解できない。困惑して本物の馬鹿にでもなったのか。しかも、まだキスがどうのと言っている。赦せ、と言ったばかりだろ。砺波は靴を脱ぎすて、和幸の頭をそれ

で思いっきり引っ叩きたくなった。

「だったら、何よ！？」

殴りかかりたい右拳を腰に押し付け、砺波は怒鳴りつける。すると和幸は、なぜか、安堵のため息をついた。「そうか」と満足げに笑む。

「なら、いいんだ」

何がいいんだ？　砺波は理解できない言動の連続に狂いそうなほど苛立っていた。だが、まじめな話をしにきたのだ。ここで暴れだすわけにもいかない。

「とにかく」と大げさなほど語調を強めて和幸の注意を引くと、真剣な表情を浮かべて本題に入った。「注意事項、教えとくから。これを明日から一週間守り続ければ、カヤは死なずに済む」

「曽良がカヤを殺さずに済むってことだな」

間髪いれずに聞き返してきた和幸に、砺波は目を丸くして「ええ、まあ」と不思議そうにこくんと頷く。和幸は覚悟を決めたようで、腕を組むと「で？」と促した。態度の変わった彼に戸惑ったが、砺波は気を取り直してまくしたてるように早口で述べ始める。

「一。もし、カヤがあんた以外の誰かにカインの情報をもらすようなことがあれば、アウト。

二。入浴するとき以外でカヤがネックレスを外せば、それもアウト。一定時間以上、物音がしなかったら、曽良がカヤを探し出して『片付け』る。

三。今夜、カヤと会ったカインの身に何かあれば、アウト」

「なんて大雑把な……」

和幸は呆れたように頬をひきつらせる。なるほど、今夜のパーティーが決まって慌てて考えたルールなんだろう。付け焼刃のような粗雑さを感じる。砺波もこれが滅茶苦茶なのは分かっている。だが、皆がすでに決めてしまったことだ。どうしようもない。今できるのは、対策を打つことだけだ。

「とりあえず、カヤが『黒幕』とつながっていなければ大丈夫だから。信じましょう」

すると、和幸は豆鉄砲をくらった鳩のようにぽかんとした。じっと砺波の大きな瞳を見つめる。砺波はさすがに恥ずかしくなって頬を赤らめると「なによ？」と苛立った口調で言う。

「いや……お前の口から、信じる、なんて言葉がでてくるとは、意外で。意味分かって使ってるか？」

言われて、砺波の顔はさらに真っ赤に茹で上がった。

「うるさいわね！」怒鳴って顔を背ける。「だって、これであの子が『黒幕の娘』だったら、わたしの立場ないじゃない」

「は？」

「せっかくこっちが身を引いたってのに、騙されたとあったら死んでも死にきれない……」

全てを言い終わらぬうちに、砺波ははたりと言葉を切った。あまりに夢中で、口に出して話していることを忘れていた。「あ！」と赤面して、うつむく。

「身を引いた？」といういぶかしげな声が聞こえてくる。

さすがに、気づかれた――砺波は悪霊にでも取り憑かれたかのように何度も何度も髪を撫で、真っ赤な顔でどぎまぎする。

「砺波」という真剣な和幸の声に、びくっと体を震わせる。しばらく沈黙が続き、砺波はおそるおそる顔を上げた。和幸は目をまん丸にして――微笑んでいる。

「お前、やっぱ曽良のこと好きだったのか」

「は！？」

そうか、と和幸は晴れやかな表情を浮かべる。「大丈夫だって」と和幸は元気付けるように砺波の肩に手を置く。

「カヤは曽良のことどうとも思ってないし、お前と曽良ならお似合いだよ」

砺波の顔は一層赤く染まった。さっきとは違い、今度は怒りの表れだった。

「あんたとカヤは全然似合ってないわよ！　これっぽっちもつりあってないわよ！」

とうとう、ずっと抑え込んでいた不満が、玄関に――いや、もしかしたらマンション中に――響くほどの怒声となって腹の底から飛び出していた。

「な……」と和幸は耳の痛みに顔をしかめる。

「カヤと曽良のほうがお似合いだっての！　だから、わたしは曽良

をカヤに紹介したのに！　あんたが身の程をわきまえないから……」
「身の程！？」
「せいぜいフラれないように必死にすがりついて暮らせばいいわよ！」

喉がかれるほどの大声で怒鳴りつけ、砺波は勢いに背中を押されるまま外に飛び出した。

「どんだけ、鈍感なのよ！？　野生動物だったらとっくに死んでるわよ、あいつは」

ぶつくさと文句を言いながら砺波はエレベーターへと闊歩する。顔は熱くて、自分でも熱があるんじゃないか、と疑うほどだ。

「もう、最低。最悪。最後に……」

最後になんて別れ方したんだ、わたしは。急に冷静になると、砺波はぴたりと足を止めた。
最後……そうだ、これが最後だったんだ。これでいいの？　胸元に手を置いてぎゅっと握り締め、砺波は表情を曇らせる。
そのときだった。ドアが開く音とともに、「砺波」と後ろから声がして、脳天に雷でも直撃したかのようにびくついた。「一つ、言っておきたくて」

咄嗟に振り返るのも負けたようで悔しい。砺波は「なによ？」と背を向けたまま、問いかける。

「さっきのことだけど」
「さっき？」
「『勘当』されたら居場所がない、て」

足音が近づいてくるのが分かった。心臓が慌てだしたことに、砺波は腹立たしくさえ感じた。

「それがなによ？」

「俺がいるよ」

ドクン、と心臓が飛び跳ねた。砺波はごくりと生唾を飲み込む。苛立ちでしか震えたことのない体がわなないている。

「表の世界に来たら、俺がいるから」

こんなときにどう言ったらいいのか分からず、砺波は唇をかみ締めた。頭に浮かぶのは罵声ばかり。どれもこれも、使い物にはならない。

「いつでも、こっちに来たらいい」と言う声はすぐ真後ろから聞こえてきた。その息が髪にまで届きそうだ。「その頃には、俺も立派なパンピーになってると思う。助けてやれるよ」

振り返りたくてたまらなかった。でも、それをやったら自分でなくなる。そんな気がして仕方がなかった。砺波はこみ上げてくるものを押さえながら、肺に大きく息を吸い込んで深く吐いた。泣きそうだということが彼に悟られないように、呼吸を整える。

「……覚えとくわ」

「ああ。妹としてうちに居候してもいいからな」

からかうようなおどけた声。砺波は恥ずかしさを振り払うかのように、「そっちが弟でしょ！」とすかさず反論した。

「カヤと別れてたら、一緒に暮らしてあげるわよ」
「え？」
とぼけた老人のような声。また、肝心なとこは聞き逃したようだ。砺波は、「なんでもないわよ！」と怒鳴って、和幸をちらりとも見ずにエレベーターへと足早に進んでいく。
「おい、送っていく……」
「必要ないわよ、わたしはカヤじゃないんだから！」
さっさとエレベーターに乗り込み、扉が閉まるその瞬間まで、背を向けていた。「おい、砺波」と自分を惑わす声を必死に無視する。ほんの一瞬だけでも、顔を見ておきたい――その気持ちをがむしゃらに抑え込んだ。
これでいい。これがわたしなんだ。そう言い聞かせ、腰に手をあてがって息を吐き出す。エレベーターが下がっていくにつれて、自分の気持ちも落ち着いていく。そんな気がした。一階に着いたときには、あいつのことなんて忘れてる。目を瞑り、そうまじないのような暗示をかける。
でも、それまでは……
「俺がいる、か」
表の世界――それもアリなのかな。砺波は穏やかな微笑を浮かべて心の中でそうつぶやいた。
＊　＊　＊
俺は外に面した通路の手すりによりかかり、エントランスを見下

ろしていた。長い髪を揺らして出てくる女を見つけて、身をかがめる。バレないようにこっそりと、バイクに乗り込むのを見守った。女は赤いヘルメットをかぶりバイクにまたがり、エンジンをかける。きびきびとした動き。後ろ髪がひかれる――あいつの世界には存在しない言葉、かもな。あたりに轟音が響き渡り、赤いヘルメットのバイカーは颯爽と走り去った。マンションには一瞥もくれずに。

俺はその様子につい頬がゆるんだ。ほんっと、最後まであいつらしい。これからも、そのままでいてほしい。どんな世界になろうとも……そう願った。

「ありがとな、砺波」

ぽつりと言って、俺は踵を返した。

悪いけど、カヤと別れることは想像もしたくはないんだ。とりあえず、お前のためにも世界の終焉は止めるよ。それで赦してくれな。

＊　＊　＊

「リスト？」

急に呼び戻されて驚いている。可愛らしいこった。

「お帰り」言って、頭を撫でる。目がくらむほど美しいブロンド。手に金粉でもついてきそうだ。

「どうして、ケットを戻したの？　かずゆきはまだ気づいていないよ？」

おろおろとしている姿は迷子の子供みたいだ。これがバイオロボットとは誰も思わないだろうな。

オレは手を離してソファに寝転がった。

「例の気配。シャカンのエミサリエス……だったよね。今は近くにいる？」
「うん、まあ」ケットは、よいしょ、と勢いをつけてオレの足元に座る。「でも、さっきから動いてない」

そうか、と頭の後ろで手を組んで天井を見上げる。

「妙だったんだよ。最初は近づいてきてたんだけど、急に同じところをぐるぐるぐるぐる回りだして」
「なに、それ？」
「知らないよ」分かるもんか、とケットは口をとがらせた。「とりあえずは、それからは追ってこなくなったんだ」

ぐるぐるぐるぐる、ねぇ。どっかでメリーゴーランドでも乗ってんのか？

「ねぇ、リスト。ケットはかずゆきに憑いてなくていいの？」

身を乗り出して、ケットはオレの顔をのぞきこんできた。オレは「なんだ、ケット」といたずらっぽく笑む。

「すっかり和幸さんに懐いちゃった？　寂しいなぁ」
「違うよぉ」いじけるように頬をふくらませて、ケットはふいっと顔をそむける。「だって、『災いの人形』を見張ってなきゃいけないじゃないか。『人形』に一番近いのはかずゆきだもん。ケットがかずゆきに憑いていれば『人形』を監視できる」

へえ、ちゃんと分かってるじゃないか。遊び感覚で和幸さんに憑いているかと思ったら。ケットもしっかり考えてくれてるのか。感

心、感心。

「その通り」言うと、ケットは嬉しそうに頬を赤らめた。自慢げな表情だ。だが……「そうなんだけど」と、オレは極端に抑揚をつけて言う。「このまま和幸さんにケットを憑けていたら、シャカンのエミサリエスは和幸さんをオレだと勘違いする。それはまずいだろ？」

オレ――つまり、マルドゥクの王ね。

ケットは、でも、といじけたような表情で食い下がる。

「シャカンのエミサリエスは、ケットたちを探してるわけじゃないかもしれないよ？」

ぐるぐるぐるぐる……か。ケットの言うことも一理ある。こっちが向こうの気配が分かるということは、あちらもこっちの気配を感じている。こうしてじっとしているんだ。気配を辿っていつでもここに辿りつけるはず。だが、ケットによると今は動いていないという。最初に近づいてきたのは偶然で、全然関係ないルルが知らずにシャカンの贈り物（ドラ）を持ち歩いている可能性が高い。

でも……

「念のため」とオレはつぶやくように言った。「念のためだよ」

＊　＊　＊

茶色い癖毛の少年が人気のない真っ暗な改札の前で座り込んでいた。周りでダンボールを引き始めた老人たちが興味深げに少年をじろじろと見ていた。

「若ぇのに」
「世も末だ」

口々にそんな言葉を漏らしている。
少年の左手の中指には、美しく輝く宝石が。地球のように丸く青い玉。それを半開きの目でじっと見つめて、少年はおもむろに口を開く。

「ラピスラズリ」

その瞬間、少年の隣に光の粒子が飛び交った。徐々にそれは一つの形を成していく。老人たちの熱い視線を浴びながら、光の集合体はやがてホッキョクグマとなって少年の傍らに寝そべった。雪のように真っ白な毛並み。一本一本が煌いているかのように眩しい。大きな黒目はすいこまれそうな深みをもっている。

「はあ〜？」と感嘆のような声を漏らして、老人たちは何度も目をこする。「もう俺は駄目かもしんねぇ」
「白い熊が見える」
「俺もだぁ」

少年は気にする様子もなく、ホッキョクグマを枕代わりに寝転がる。

「今夜はここで寝るのですか、ユリィ？」

老人たちはぎょっとして辺りを見回した。どこからともなく声がした。それも包み込むような暖かい声。思わず母親を思い出して、老人たちは涙しそうになったくらいだ。

「あの電車、止まっちゃったから」

眠そうに目をつぶって、ユリィはそう答える。ラピスラズリはこれで何度目かという大きなため息をついた。あの電車……ね、と首を左右に振る。

「もう二度と、あれには乗らないでください」厳しく子供をしかる母親のようにラピスラズリはびしっと言った。するとユリィは目をぼんやりと開いて、「なんで？」と不思議そうに尋ねる。

「おもしろいんだ、あの電車。ぐるぐるぐるぐる同じところを回るから」

不可思議な電車だった。千葉からトーキョーに来るのに乗った電車とは違っていた。まっすぐに進むのではなく、延々と円を描いて同じところを回り続けたのだ。永遠に乗っていられる、とユリィは目を輝かせて座り続けた。しかし……

「だから！」とラピスラズリはため息混じりに指摘する。「先に進めてないんでしょう、ユリィ！　お願いですから、エンキのエミサリエスのところに早く行きましょう。時間がないんですよ」

まるで自分が叱られたかのように、周りで老人が血相変えて背筋を伸ばした。幼い頃に母親に怒られた思い出がありありと蘇ったのだ。当の本人はぱっとしない表情で「う～ん」と唸る。

どうやら、まだあの電車に乗り足りないようだ。電車に乗ったことがない彼にしてみれば自然な反応かもしれないのだが、状況を考えれば観光などしている暇はない。だが、これ以上言ったところで彼が聞く耳をもたないことはラピスラズリも重々承知。諦めたようにホッキョクグマは両手の甲に顔をのせる。

不意に、ユリィは思い出したかのように体を起こし、「ねえ」と

周りの老人たちに話しかける。
いきなり呼びかけられ、老人三人組は「へ？」と顔を見合わせた。
「俺たちか、坊主？」
うん、とユリィは頷いて、微笑を浮かべた。少年の雰囲気は穏やかで、広大な草原を思わせる。冬が近づく駅の構内で、老人たちは春風が吹いたかと思った。

「寒いでしょ？　クマ、あったかいよ。こっちで寝たら？」

クマ？　とラピスラズリは顔をしかめたが、ユリィの相変わらずのつかめない性格に愛おしそうに微笑んだ。気まま、破天荒、異端児……その全てが当てはまっていそうで、それだけじゃ足りない気もする。唯一つ、ラピスラズリが確実に感じているものがあった――それは、ルルへの深い愛。
こっちに来いってことか？　と老人たちはこそこそ相談事を始めた。幻覚かとも思い始めていた白いクマの少年が話しかけてきたのだ。老人たちは戸惑いながらも、遠慮がちにクマと少年に歩み寄った。

「本物か？」と老人たちはおのおのホッキョクグマを突っつき始める。ユリィはまるでわが子を見守る父親のような眼差しでそれを見つめていた。

異端児の誘い

朝の校舎。その屋上では、いつものように一人の生徒が階段室の屋根で寝転がっていた。金髪は朝日を受けて白に近い色に輝き、白い肌は、ちょっとでも日光を浴びたら溶けてしまうんじゃないか、と思うほど透き通っている。もし彼がこうして毎朝屋上で無防備に大の字で倒れているのを知ったら、学年の女子は放っておかないだろう。整理券でも配ってのぞきにきそうなものだ。

だからこそ、彼は誰よりも早く学校に来て、誰にも見られないようこっそりとここに陣取っていた。

何もかもいつも通り。ただ一つ、いつもと違うのは、彼の瞼が開いているということ。天に神がいるとすれば、今にもその手が伸びてきて奪いにくるんじゃないか。そう思ってしまうほど美しく光り輝く藍玉（アクアマリン）が二つ平行に並んでいる。

その藍玉に、ある一つの影が映った。太陽をくぐってすいっと青空を横切っていく。少年は瞼をやや閉じて、むくりと起き上がる。

「来た」

そうつぶやくと、少年の隣に、黄金に煌く光の粒子を纏った幼い子供が現れる。ハープの弦のごとく長く細い黄金の髪が風になびき、まるで美しい音色を奏でそうだ。

「うん。間違いない」言って、幼い子供も空を見上げた。髪と同じく金色に輝く瞳が、少年と同じ影を捕らえる。「シャカンのエミサリエスだ」

「やっぱ、オレたちに用があったみたいだな」

やれやれ、と少年は言いながらあぐらをかいた。

そして、待ち構える二人の前に、たくましい筋肉を麗しい白いドレスで隠した一羽の白鳥が舞い降りた。つぶらな瞳で少年をじっと見つめる白鳥は、孤高の強さと気高き美しさをかねそろえている。
羽根が遅れて空から降ってきて、少年の頬をかすめた。くすぐったさと、白鳥の優雅さに、少年は笑みを浮かべる。

「人の姿になったら、さぞや美しい姫君なんだろうね」

冗談交じりに言うと、白鳥は女性の腕のように細長い白い首を少年に向けて傾けた。

「お初にお目にかかります。マルドゥクの王」

白鳥の口は動いていない。だが、その上品な声は確かに聞こえてきた。そしてはっきりと理解した。その声は、この白鳥のものだ、と。

「シャカンのエミサリエスだね」と、少年の隣で金目の子供が真剣な表情で言う。
「はい」白鳥は首をくねらせて子供に顔を向けた。「ラピスラズリと申します。お久しゅうございます、エンキのエミサリエス」
「今の名前はケット。ケットって呼んで」

子供――ケットは自己紹介はそこまでにして、手の平を天に向け、その先で隣であぐらをかく金髪碧眼の少年を指した。

「エンキの末裔。マルドゥクの王、リスト・マルドゥク・ロウヴァーだ」
「よろしく。シャカンのエミサリエス、ラピスラズリ」

リストはにこやかに微笑んだ。
すると、「よろしく」と声が返ってくる。やはり白鳥の口は動いていないが、今度は彼女が言ったのではない。声は背後から聞こえてきた。リストは咄嗟に振り返り、屋上を見下ろす。
そこにはバックパックを提げたTシャツにジーパンというラフな格好をした少年が立っていた。天然パーマの栗色の髪。おっとりとした茶色い瞳。高い鼻。とがった顎。きゃしゃといっていい、すらっとした体格。

「エンリルの末裔……」

高貴な雰囲気を漂わせる女性の声がそうつぶやく。
リストがぎょっとして白鳥に振り返ると……そこには黒い影が佇んでいた。巨体はなめらかなラインで描かれて、屈強というよりも優美。鋼のような黒い毛並みは、光を全て吸い込んで辺りを闇へとひきずりこみそうだ。黒い影は蹄の音を鳴らして、リストの頭上を飛び越えて屋上へと降り立った。

「う、馬……？」

それも、黒い馬――リストは呆然としながら影の正体を導き出した。
黒い馬は突然現れた少年の後ろに回ると、鼻を鳴らす。少年はこちらから目をそらすことなく、馬の鬣（たてがみ）を慣れた手つきで撫でた。
「エンリルの末裔って……」言ったよね？　そうケットが言う前にリストは左手でそれを制す。ちらりと一瞥されて、ケットは押し黙った。
馬――いや、ラピスラズリは少年と同じように鋭い視線をこちら

に向けてくる。
「エンリルの末裔。ニヌルタの王が弟君、ユリィ・チェイスにございます」
誇りに満ち溢れた、堂々たる声がリストの内臓まで響いてきた。
「ニヌルタ……？」
リストは愕然とした表情で馬の前に佇む少年を改めて凝視する。ケットはそんな彼を心配そうな表情でじっと見つめた。
自分の宿敵、闘うべき相手、ニヌルタの王。その弟がいきなり目の前に現れた。それも、自分の祖先に遣える神の天使を引き連れて。
「何の用だ？」
ごくりと生唾を飲み込んで、低い声で尋ねる。
しばらくユリィは品定めでもするかのようにリストを見つめ、あっけらかんとした声で答える。
「オレは人間につく。お前はどうする？」
＊　＊　＊
何を言い出したんだ、こいつは！？　エンリルはルルを嫌う神。こいつがその末裔なら、使命はルルを滅ぼすことのはず。それが、いきなり現れて「人間につく」だ？　しかも、お前はどうする？　てな……オレはルルを創り出した神・エンキの末裔だ。元からルルの味方だよ。
オレは乱暴に立ち上がって、屋上へと飛び降りた。「リスト！？」

というケットの不安げな声を無視し、ユリィ・チェイスとやらを真っ向から睨みつける。

「何を企んでるんだ？」

ユリィはそれが意外かのように目を大きく開けて、ラピスラズリに振り返った。そして、不機嫌そうな顔つきで、

「何か企んでる？」

オレは思わず口をあんぐり開けてしまった。なんで自分のエミサリエスに聞いてるんだ？

「いいえ。わたしは何も企んではおりませんよ、ユリィ。おそらく、あなたが何か企んでいるのか。それをマルドゥクの王はお聞きしたいのかと思います」

まるで諭すかのようにラピスラズリは一語一句丁寧に告げる。すると「オレ？」とユリィは驚いて、オレに振り返った。

「何も企んでないよ」

「……」

なんだ、この人？　一気に緊張が解けた。てか、筋肉まで呆れ返ったみたいだ。全身から力がぬけたよ。こいつ、本当にニヌルタか？　表情もぼうっとしてるし、なんか頼りないんだけど。

「ルルにつくってどういうことだ？」とにかく、話を進めよう。調子を狂わせながらも、オレはなんとか質問を繰り出した。

「そのままの意味。神はうさんくさいから、見限った」

「な……」
「なんてことを言うの！？」
オレの代わりに大声をあげたのは、いつのまにやら傍らに現れていたケットだった。目を見開いている。
「君はニヌルタの子。神の一族だ。その君が……」
「神は崇高な存在ではない」
それまでぼうっとしいたユリィが、まるで覚醒したかのように瞼を全開にして腹から声を出した。やはり神の一族。眼力には人を圧倒させる力がある。オレは思わず息を呑んでいた。ケットもいきなり強く言われてたじろいでいる。
ユリィは何の迷いもないまっすぐな瞳でオレを見つめて、淡々と語りだす。
「争いは常に起きてきた。人がたくさん殺されてきた。救いを求める人間は何百年も、何千年も、溢れかえっていた。それでも神の『裁き』はずっと起きなかった。
それじゃ、なぜ今頃『裁き』が始まった？　理由はなんだ？」
「理由……」
重圧のかかった質問に、オレは言葉に詰まった。すると、ユリィは無表情のまま、さらに目を見開く。
「考えたことも無いか、マルドゥク。神の行いなら、受け止めるだけ。そう思っていたからか。そこまで信用するに値する存在か、神というものは？　それもまた、考える必要のないことか？　疑問をもたずにただ従う。それは愚か者のすることだ。お前は愚か者か？」

なんだ、こいつ。オレを愚か者呼ばわりするのは構わないけど……神を――創造主であり、祖先である神を否定しようとしている？
オレは反論もできずに茫然とした。そんなオレを横目に、ケットは頬を真っ赤にして小さな口をめいっぱい開ける。

「エンリルの子！　それ以上侮辱すると――」
「神こそ人を侮辱している」

ケットの言葉をすっぱり斬るように遮って、ユリィは言い放った。あまりに自信満々に言われ、ケットもあっけにとられて後ずさる。

「な、何を言ってるの！？　神はルルを侮辱なんて……」
「こんな勝手な『裁き』、人間への侮辱だ。なぜ、神に世界の価値を決められなきゃいけない？　なぜ、土人形（パンドラ）に怯えなければいけない？　ここは人間の世界だ。世界が滅びるかどうかは、常に彼らの選択の結果であるべきだ。神じゃない」

オレもケットも声を失った。目を瞬かせることしかできなかった。ユリィは気にする様子もなく、続ける。

「これは『裁き』だ、と高みで偉そうにふんぞり返って数多もの命を奪う。そんな連中にひれ伏す価値はない。破壊しかできない存在に、世界の価値を問われたくはない。
これは『裁き』なんかじゃない。ただの侵略だ、マルドゥク。オレたちはそれを防がなきゃいけない。世界を守らなきゃいけない。この世界で生きる名前を持っている以上、それがオレたちの使命だ」

どうやら、それでユリィの主張は終わりのようだった。瞼が段々と下がり、また半開きに戻った。電池切れの玩具の人形のように、ぼうっと突っ立っている。充電でもしてるんだろうか。

何か話しかけるべきなのだろうが、あまりな内容の演説にオレは言葉が出てこなかった。無論、ケットもだろう。
そんなオレたちに、どこか申し訳なさそうな声でラピスラズリが説明しだす。

「ユリィはルルを……ルルの世界を守りたいのです。だから、実兄であるニヌルタの王を探し出し、止めようとこうして故郷から出てきました」
「ニヌルタの王を止める！？」

ほ、本気か、こいつは？　オレはまじまじと間抜けにも見える顔で棒立ちする男を見つめる。こいつは本気で使命に逆らおうとしてるのか？　オレたちの体に、血に、遺伝子に刻み込まれた使命を？

「手がかりをもとにトーキョーまで来ましたが、エンリルのエミサリエスの気配はない。その代わりに、エンキのエミサリエスの気配を感じました。そこで、こうして参上したまで」
「アサルルヒのエミサリエスの気配も感じたでしょう？」

やっと我を取り戻したのか、ケットは確認するように尋ねた。アサルルヒのエミサリエスはバール。つまり、アトラハシスの守護天使だ。
聞かれてラピスラズリは困ったような声をだす。

「はい。ただ、追いかけようとしたのですが、どうも避けられているようでして。すぐに諦めました」
「やっぱりか」

残念そうにケットはため息をつく。ま、そりゃそうだろうな。アトラハシスは誰とも会う気はないだろうから。このまま、『パンド

ラの箱』を隠し持って『収穫の日』まで逃げ切る気か？　だが、なぜ神崎先輩を手放したんだ？　『パンドラの箱』と一緒に、かくまっていればよかったのに。こちらとしては、お陰で助かったけどな。神崎先輩をアトラハシスに奪われなければいいわけだから。だが……不気味だ。何か考えでもあるのか？

まあ、いい。今、考えたって仕方がない。

「ねえ」とユリィが再び口を開いた。さきほどまでの熱弁はどこへやら。気の抜けた声だ。「君もここにいて、しかも高校にまで通っていて……アトラハシスもこの辺りにいる。てことは……」

上半分隠された瞳が、キラリと光った気がした。オレはごくりと唾を飲み込み、頷く。

「『災いの人形』もここにいる」

＊　＊　＊

そうだろうと思った、とユリィは心の中でつぶやく。兄がトーキョーを目指したことからも、何かがトーキョーにあることは明らか。考えられうる『何か』は二つ。アトラハシスが持ち去ったとされる『パンドラの箱』とパンドラ。

とりあえず、パンドラはすぐに見つかりそうだ。エンキのエミサリエスの元へ来て正解だった。

「会える？」

尋ねると、マルドゥクの王はぎょっと目を見開いた。

「会って……どうするんだ？」

「全部、教えてあげるんだ」

その言葉に驚愕の声をあげたのは、マルドゥクの王とエンキのエミサリエスだけではなかった。己の守護天使さえ「ユリィ！？」と悲鳴のような声をあげた。

「何を考えているんだ？」という内容のことを三者三様の言葉で言われ、ユリィは小首を傾げて「だから、パンドラに『裁き』のことも全部話してあげようと思って」とまとめて答えた。

「そういう意味じゃない！」とマルドゥクの王は必死に声を荒らげる。

「神を軽んじるにも程があるよ、ニヌルタの子」頭を抱えてそう騒ぐのはエンキのエミサリエス、ケット。

「どうして、いつもそう無謀なことばかり」嘆いているのは自分の天使、ラピスラズリ。「『収穫の日』が終わる前にパンドラに全てを話すと、神の怒りが下るといわれています。命をおとすやもしれません」

「神の怒り？」ぼうっと寝起きのような声でユリィは聞き返す。「何が起きるの？」

「それは、分かりません！　誰も試したことはないんですから」

「じゃあ、神の怒りは下らないかもしれない」

その言葉に、一気に静まり返った。

「誰も、確かめていないんでしょう？　うそっぱちかもしれない」

しっかりとした口調でユリィはそう口にする。ラピスラズリは悟った。もう彼を止める術はない、と。きっと彼は元からそのつもり

だったのだ。パンドラを見つけたら、全てを告げるつもりだった。おそらく……神の怒りの有無を確かめるため。神の力を試すため。

「『災いの人形』は」とマルドゥクは気分でも悪いかのような表情で口を開く。「今、人間（ルル）として幸せに暮らしてる。それをぶち壊すことは、オレは赦せない」

「すぐにその幸せはぶち壊れるでしょう。嘘でかためられた幸せなんてまやかしに過ぎない」すんなりとユリィは言い返した。「だったら、人間として彼女にも選択肢を与えるべきだ」

「選択肢？」

「世界を滅ぼす存在になるかどうか、自分で選んでもらうんだ」

「！」

マルドゥクは目をむいた。顔面蒼白で、今にも気を失いそうだ。この国に黒船が現れたとき、得体の知れない恐怖におののいた国民たちは、こんな顔をしていたんだろう。ユリィはそう思った。

「彼女が決めてもいいはずだ」そう続け、ユリィは首を左右に振る。「いや、彼女が決めるべきだ。彼女が人間であるうちに。彼女に自由意志があるうちに」

自由意志。その言葉に、マルドゥクは眉をひそめた。彼の中に関心が生まれていることにユリィは気づいた。この調子、と言わんばかりに、言葉を連ねる。

「『テマエの実』を食べるかどうか。それも彼女が選択していいはずだ」

「なんてことを！？」

それまで大人しかったエンキのエミサリエスは悲鳴に近い声を出

した。取り乱すのも最もだ。ユリィの言葉はこの『裁き』全てを否定することになる。しきたり、ルール、掟……神の定めた『裁き』を根底から覆そうとしているのだから。

だが、だからどうした。ユリィの目的はまさにそれだ。この世界のために神に立ち向かう。それこそが、使命。どんな遺伝子を持とうが関係ない。自分はここに住む人間――それこそが自分を決めるのだ。

「オレは彼女に選択肢を与えたいだけ。生き方を選ぶのは、人として持つべき権利。それで神の怒りが下っても、オレは構わない。そもそも、恐くない」

けろっとした様子でユリィはしめくくった。

ラピスラズリはそんなユリィに呆れつつも、やはり愛おしいと再確認していた。神を否定する彼の言動は、すなわち、神の遣いである自分をも否定するものだ。だが、構わないと思った。こうして自分の道を見極めてまっすぐに進んでいく若き命を見守るのは楽しいもの。エリドーが滅んで、こんな子供が見れなくなるのは、確かに寂しい。

しばらく、沈黙が続き、マルドゥクはずっと重い表情で何かを考えていた。ユリィは催促することもなく、彼の言葉を待つ。

不思議だと思った。彼の使命はパンドラを殺すことのはず。なのに、先刻、パンドラの幸せを気にかけているかのような発言をした。エンキは人間（ルル）に味方する神。エリドーを滅ぼす『災いの人形』は、エンキの子孫であるマルドゥクにとっては悪しき存在のはず。それとも、パンドラが人間（ルル）である以上、情けをかけなければいけないのだろうか。難儀だなぁ、とユリィは暢気に考えた。

「分かった」

唐突に、マルドゥクは承諾した。青く澄んだ瞳には覚悟が見て取れる。睨むように見つめているが、敵意は感じられない。ユリィは無表情で頷く。

「リスト！？」とエンキのエミサリエスがマルドゥクの足にしがみついた。「自分が何をしでかそうとしてるのか、分かってる！？」

マルドゥクは幼いエミサリエスを暖かい目で見つめ、微笑んだ。

「ああ」と言ってしゃがむと、目線を同じにして頭に手を置いた。

「滅茶苦茶だけど、このニヌルタの言っていること……間違ってはいないと思うんだ。一理あるよ」

「ま、間違ってるよ！」

「そもそも、オレの存在がすでに、神を裏切っている」

沈んだ顔で放たれた言葉に、小さな天使はハッとした。

「よくよく考えたら、しきたりとか掟とか、もうとっくに破綻してるんだよ」

「……」

ニヌルタの王はアトラハシスを惨殺し、アトラハシスの王は『パンドラの箱』を持ち去って隠れている。そしてマルドゥクの王であるリストは……。確かに、神への忠誠心や使命、『裁き』そのものもぼろぼろだ。ケットはそれに気づかされて、うつむいた。

マルドゥクの王は元気付けるような明るい声で言う。

「だったら、とことん崩れさせて抗ってみよう」

異端児の誘い（後書き）

Ｗｅｂ拍手、メッセージ、本当にありがとうございます。メッセージの返信は活動報告のほうでしておりますので、よろしければご確認ください♪

真の名前

朝日の光がたちこめる校長室に、おしろいでも塗ったくったような真っ白い顔をした女がソファに浅く座っていた。四十代半ばにさしかかった彼女は目だってきた皺を何層ものファンデーションで隠していた。少し光沢（テカリ）のある灰色のスーツを着込み、首や耳たぶには金色に輝くアクセサリー。つりあがった目で、向かいに座る女性を睨みつけている。

「息子は今、病院で精密検査を受けておりますのよ？　もしも、脳に異常でもあったらどう責任を取ってくださるおつもりですか、白石校長先生？」

白石はひざの上で手を組んで、眼鏡の奥で輝く澄んだ瞳を怒り狂う女性に向ける。

「教室で暴力事件が起きたこと、心からお詫びを申し上げます、熊谷ＰＴＡ会長。こちらの監督不行き届き……」

「その通りですわ」

白石の言葉を遮って、熊谷はぴしゃりと言う。その真っ赤な唇は見た目も零す言葉も、白石の薄紅色のそれとは対照的だ。

「殴った生徒……誰でしたっけ？　羽田先生？」

細く鋭い目が、白石の隣に座る若い教師に標的を移した。可愛い息子を殴った憎き生徒の名前。まさか忘れたわけではないだろう。プレッシャーをかけるための作戦に違いなかった。

睨まれて羽田は背筋を伸ばすと強張った表情を浮かべて答える。

「藤本です。藤本和幸です」
「そう、藤本くん」すました声でその名を口にし、ＰＴＡ会長はまた白石に振り返る。「退学にしていただけますね？」

まるでそれが決まりきったことのような口ぶりだった。白石は慌てて「退学はいきすぎではありませんか？」と異論を唱える。姿勢を一切崩すこともなく、会長を見据えて淡々と語りだす。

「藤本くんによると、熊谷くんはある女子生徒の卑猥な写真を隠し撮りし、他の生徒に売りさばき……」
「証拠はあるんですか！？」

会長は目を見開いて、大声で怒鳴りつけた。息子のよからぬ疑惑など聞く気はさらさらないようだ。
これには毅然としていた白石の表情も曇る。眉をぴくりと動かし、気を落ち着かせるようにため息をついた。

「証拠はありませんが、藤本くんの主張も聞くべきです。理由もなく殴るような子ではないと思います」

すると会長は鼻で笑った。「校長先生」と呆れた声を出して首を左右に振る。

「彼は孤児なんでしょう？」

そのたった一言で充分だった。会長が何を言いたいのか、白石も羽田も悟った。そして熊谷も、自分が勝負の決め手となる切り札をテーブルの上に出したことを自覚していた。
落ち着きなくきょろきょろ視線を泳がす羽田とは違い、白石はぐ

っと堪えるように唇を結び、なんとか解決策をひねり出そうと頭を働かせる。わたしも孤児ですよ？　と言ってやりたいくらいだが、そんなことをすれば自分は校長の座から引き摺り下ろされるだろう。

「校長先生？」と熊谷は勝利を確信した表情で白石を見つめる。「私も時間がありませんの。早く決断をしていただかないと」

白石はなんとか微笑を浮かべた。凛とした一輪の花を思わせる優雅な笑顔だ。だがその内に秘められているものは、強い憤り。

羽田が隣で「校長」と急かす。どうやらこの教師は、己の生徒をかばう気はないようだ。それよりも会長の機嫌のほうが気がかりか。この場で彼を助けようとしているのは自分だけ――白石は組んでいる手に力をこめる。彼が孤児でなかったら、状況は違ったかもしれない。

悔しさに視線を落とし、固く目を瞑った――そのときだった。

「失礼します」

高々とよく通る少女の声がした。白石はハッとして顔を上げる。

「後にしなさい」と言い掛けたが、返事も待たずにドアは開かれ、一人の女子生徒が入ってきた。大事な話をしているから誰も入れるな、と教頭に言っておいたはずだが。

「今、取り込んでいます」

白石ははっきりとした口調で少女に告げる。髪をばっさり切ったようで一瞬分からなかったが、その人並みはずれた美しさには見覚えがある。いや、この学校で彼女を知らない人間はいないだろう。

白石の言葉を無視して颯爽と歩み寄り、向き合う二つのソファの間で立ち止まる。

熊谷会長は少女を初めて見たようで、少女の放つ不思議な魅力に吸い寄せられるように身を乗り出していた。

「熊谷会長」と少女は屈託のない笑みを浮かべて声をかける。「私が藤本くんに息子さんを殴らせました」

熊谷会長は、一瞬、何を言われたのか分からなかった。魅惑的な笑顔に気を取られていたからだろう。だが、「何を言ってるのです？」という白石の厳しい声に我に返って、思わず立ち上がった。

「殴らせた！？　あなたがですか！？」と鬼気迫る表情で迫ると、少女はやはり笑顔を浮かべて答える。

「熊谷くんに嫌がらせを受けたので、藤本くんに仕返しさせたんです」

悪びれた様子は少しもない。まるで当然のことのように、少女ははきはきと語った。挑発しているようにさえ見える。白石は言葉を失い、羽田は「やっぱりか」と言いたいのを必死に堪えて頬をひきつらせていた。

「嫌がらせ！？　息子があなたに嫌がらせをしたというんですか？」

「盗撮写真をまわされました」

盗撮写真、という言葉に、会長はたじろいだ。まさか、彼女が例の女子生徒か。乾いてきた唇を舐めて、会長は気合をいれるように息を吸い込む。

「証拠はあるんですか！？」決まり文句のように慣れた口調で言うと、女子生徒は「いえ」ときっぱり答える。

「証拠はないので、退学にされても仕方がないと思っています」

躊躇なく、さらりと少女は言ってのける。さすがの会長も言葉を失った。白石も彼女の考えが分からず、いぶかしげな表情で見守るしかできない。その隣で、羽田はせわしなく少女と会長を見比べていた。

「ただ」と少女は全員の疑問に答えるかのように、大きな声で切り出す。「父は黙っていないでしょう」

その瞬間、白石だけが目を見開いた。

「父？」

「はい」と、少女はわざとらしく悩ましげな表情を浮かべた。「私が退学になれば、父は必死になって事情を探るんじゃないか、て思うんです。そしたら、証拠もでてきますよね。そうなったら、熊谷くんがどうなるか。考えただけでも心配になります」

証拠……熊谷は柳眉を寄せた。何の証拠かお分かりでしょう？少女の試すような視線はそう言っているようだ。

「藤本くんを退学にしても、同じです」と彼女は脅すような声色で言う。「私が黙っていないので」

小娘だというのに、その鋭い眼差しに会長はたじろいでしまった。ＰＴＡ会長であり、教育委員会とも繋がりをもつ自分に恐れるものなどないはず。それなのに、怖気づいている自分がいる。不可解だ。そして気に入らない。ぐっと熊谷は口を噤んだ。

そんなＰＴＡ会長の代わりに、羽田が立ち上がって「神崎、いい加減にしないか」と裏返った声で叫んだ。

「ああ」と少女は思い出したかのように目を丸くして、羽田を見やる。「先生方はまだご存知ではありませんでしたね。私、もう神崎じゃなくなったんです」
「は？」
不思議そうな羽田を放って、少女は熊谷へと歩み寄り、にこりと微笑んだ。
「ご挨拶が遅れました」言って、右手を差し出す。「本間カヤと申します」
「……本間？」
こんがり焼けたような色をした手を見つめながら、会長は怪訝そうな声を出した。
カヤは笑顔を消し、真剣な表情を浮かべて会長を睨みつける。
「国家公安委員会委員長、本間秀実の娘です。――初めまして」

＊　＊　＊

「写真のこと、なんとお詫びしたらよいか。息子にはよく言って聞かせますので」
熊谷の母は、職員室の前で必死になってカヤに頭を下げていた。
「気にしないでください」
カヤは申し訳なさそうに微笑んだ。この会話をさっきからずっと繰り返している。別人のように腰が低くなったＰＴＡ会長は、カヤ

がなんと言っても謝り続けるのだ。

「いえ、本間さんの心の傷を考えると……」

また、始まった。カヤはため息をつき、苦笑した。そして不意に、気がついた。会長が欲しい言葉を自分はまだ言っていないのではないか、と。会長の謝罪の言葉そっちのけでしばらく考え、カヤはハッとする。

「あの、熊谷会長！」言って、にこりと微笑んだ。「父には言いませんから。安心してください」

すると、会長の表情にやっと笑顔が戻った。やはりそういうことか、とカヤは半ば呆れた。

何度も振り返っては頭を下げる会長を見送りながら、カヤは沈んだ表情を浮かべる。とりあえずは和幸を退学の危機から救えたのだ。喜ぶべきなのだろうが……このすっきりしない気持ちは今後も晴れることはないだろう。

「神崎さん」凛とした声が背後から聞こえた。「いえ、本間さん、ですね」

皮肉まじりな声だ。振り返ると、白石校長が厳しい表情を浮かべて佇んでいる。カヤは眉をひそめて、くるりと体を校長に向けた。

「卒業まで神崎で通したい。そうおっしゃったのはあなたでしたよね？」

「すみません」

カヤは深々と頭を下げた。校長の言う通り、余計な騒ぎを起こし

たくなくて、本間へ養女に入ったことも神崎の両親の死も隠してもらっていた。学校で『本間カヤ』を知っていたのは、校長と教頭、担任の野村、そして和幸だけだった（和幸が誰かに話していなければ）。

「わたしはあのようなやり方は好きではありません」

校長はぴしゃりと言う。あのようなやり方――大臣である養父の名前を出してＰＴＡ会長を脅したことだろう。カヤは哀しげに微笑むと「私もです」と微笑みかける。

「でも、それがこの世界のやり方なんですよね」

「はい？」

「私にそれを変えるほどの力はないから、従うしかないんです」

謝るどころか妙なことを言い出したカヤに、白石校長は気品あふれる顔立ちに困惑の色を浮かべた。カヤはそれに気づいてもいないようで、視線を落として独り言のようにつぶやく。

「この世界のやり方で、彼を守るしかないんです」

「何を言っているんですか？」

「お手数ですが」言って、カヤは顔を上げた。「私の記録……出席簿や成績表など、全部、本間に変えてくださいますか？」

お願いします、とまた頭を下げて、カヤは校長の顔も見ずに踵を返して階段へと歩き出した。

白石校長は遠ざかるその背中を複雑な表情で見つめていた。華奢な後姿は、無理して背伸びをしているようにも見えた。ちっぽけな自分を圧倒する理不尽な世の理になんとか立ち向かおうと必死になっている。どこか、若い頃の自分を見ているような気がして校長の

心は締め付けられた。

＊　＊　＊

これでいいのよね。和幸くんは退学にならずにすんだんだから。

私は首元のチェーンをたぐりよせて、シャツの中から銀の十字架を取り出した。それを胸の前でぎゅっと握り締める。これを見つめると、思い出せる。――私の責任。表の世界で和幸くんを守るという使命。カインの皆さんから家族を奪い取った私にできる贖罪。

たとえ泥にまみれようと、どれだけ醜くなろうと、私は彼を守る。私にできることは何でもする。利用できるものはなんだって利用する。神崎カヤだろうが、本間カヤだろうが。名前がどんなに変わろうとも、彼への気持ちは変わらないもの。

彼のためなら、私はなんだってする。

砺波ちゃんのように廊下を闊歩し、階段へたどり着いたときだった。一時間目はもう始まっている。誰もいないはずだったのだが、階段には降りてくる二人の少年の姿があった。

二人とも、思わず息を呑んでしまうほど美しい容姿。一人は神話の中から飛び出してきた天使のような金髪碧眼の美少年。もう一人は御伽噺の王子のような、茶髪の甘いマスクの少年だ。

「おはよう、リストくん」と私は一人に声をかける。ブロンドを揺らしてこちらに向かってくる彼は、深刻な表情を浮かべていた。

「おはようございます、神崎先輩」

今日から公式に本間になったんだけど……まあ、言うことも無いか。私はちらりと見慣れない『王子さま』に一瞥をくれた。

「お友達？」

尋ねると、リストくんは「ユリィ・チェイスです」と低い声で答える。
そのときには二人は階段を降りきっていて、リストくんとは違って（失礼かな）長身のユリィくんを私はまじまじと見上げていた。
「初めまして」
にこりと微笑んで声をかける。低血圧なのだろうか。眠そうな表情。ユリィくんは私を茶色い瞳でじっと見つめて、
「初めまして、パンドラ」
「……え？」
背後の昇降口から、生ぬるい風が入ってきた。私は妙な悪寒に襲われて気分が悪くなった。直感的に、雨が降る、と分かった。

＊　＊　＊

「さっきまで晴れてたんだけどな」
洗濯物でも干そうかと窓を開けたときだった。起きたときには晴れ晴れと青空がひろがっていたはずなのに、どこからか来た暗雲が太陽を遮っていた。
「参ったな」と俺は頭をかく。
自宅謹慎なんてズル休みみたいなもんだろ、儲けもんだ。なんてポジティブに考えていたのだが、いざここまで自由時間があると何をしていいのか分からない。ゲームも映画も興味ない人間だからな、

俺は。まだカインだったら『実家』に行って掃除でもしてるとこなんだろうが。

「暇だ」

カヤに電話？　って、馬鹿か。カヤは授業中だっての。

とりあえず部屋の掃除でもしようかと思ったが、そこまで散らかっているわけでもない。本気でやることがない。

がっくりと頭を垂らし、ベッドに倒れこんだ。

丁度そのときだった。ケータイが軽快な音楽を鳴らし始め、俺はむくりと起き上がって枕元に転がっているそれを拾う。

分かってはいたが、サブディスプレイに出ているのはカヤの名前ではない。見知らぬ番号だ。間違い電話だとは思ったが、どうせ暇だしとりあえず出てみる。

「もしもし？」

「藤本、元気か？」

上擦った声が聞こえてきた。男のくせに猫なで声のように甘えた声色。俺は吐き気すら覚えて、「誰だよ？」と不躾に尋ねる。

「羽田だ。担任の」

は、羽田！？　頭の中に浮かぶのは前髪をやたらと気にする若いいけ好かない教師。

「な、なんスか？」

「実はな」と調子よく言う声には、いつもの人を蔑むような印象はない。妙だ。気味悪い。「お前の自宅謹慎が解かれたんだ。学校来ていいからな」

「え！？」い、いきなり？　「じゃ、退学は……」

校長は退学の可能性を示唆していた。今日、熊谷の母親が俺の退学処分について話しに来るとかいう話じゃなかっただろうか。だが、羽田は「まさか」と裏返った声で言って笑い出した。

「そんなわけないだろう。いいから、学校においで。教室で会えるのを楽しみにしているからな」

「は……？」

背筋がゾッとした。あまりに気持ち悪かったからだ。電話を切って呆然とする。なんだ、あの羽田のごますりぶりは？　単に機嫌が良かっただけか？　いや、それにしてもテンションが高すぎだ。てか、好意的過ぎる。いきなり男色に目覚めて俺が記念すべき第一号に選ばれたのか？　――いくらなんでも、それはないよな。校長が何かした？

ま……まあ、いいか。学校で羽田と顔を合わせるのが嫌だが……カヤに会える。そう思うと自然と笑みがこぼれた。

初めて意気揚々と制服に着替えようと思った。

寝巻きを脱いで、ふと、雨音に気づいて窓を見やった。

「マジかよ……」

一気に気分が沈む。外は夕方なみに暗くなり、激しい雨が降り出していた。遠くを見やれば、別世界のように晴れている。どうやら、通り雨みたいだな。

少し待ってから行くか。どうせ、今行っても授業中だ。そう決めて、俺はのろのろと着替え始めた。

カヤと会ったらまず何を話そうか。そればかり考えていた。

幸福な終焉

「ねえ、お婆さん。起きて」

少女は雨に打ち付けられながら、水浸しのコンクリートの上に膝をついて必死に老婆を揺り動かしていた。長い長い一本橋の真ん中で、ぴくりとも動かない老婆を必死に揺らす。

「ねえ、お願い。話がしたいの」

少女の手は小刻みに震えていた。それは決して寒さのせいではなかった。恐怖と困惑。彼女は混沌(カオス)の中にいた。

「お願い……あなたも知ってたんでしょう？　だから、私を悪魔と呼んだんでしょう？」

ねえ、ねえ、とひたすらに、狂っているかのように少女は老婆の肩をゆすっていた。

「教えてほしいの。聞いて欲しいの。お願い」少女の瞳は充血し、潤すために分泌されるはずの体液は枯れてしまったようだった。「私は今すぐに死ぬべき存在なの？　誰かに殺されるべき存在なの？　だからあなたは彼に私を殺せと言ったんでしょ？」

白髪の老婆は白目をむいて、紫色の唇をあんぐりと開けている。生気はない。死臭すらするのだ。だが、それでも、少女は尋ね続けた。夢中で、必死に、『答え』を、『選択』を、この呪われた命の正しき『終焉』を求めていた。

「私は」と少女は老婆から手を離して、水溜りの上に力なく腰をおろす。「お姫さまじゃないのね」

空を見上げると厚い雲から容赦なく雨が次から次へと落ちてくる。少女は諦めたように微笑んだ。

「王子さまに退治される化け物」

がくりと頭を垂らして、力なく立ち上がる。下着まで濡れているのが分かったが、どうでもよかった。ふらりと身を翻し、顔を上げて「あ」と呆けた声を出した。

見覚えのある人物が傘をさして呆然とこちらを見ていたのだ。それも二人。

「神崎カヤ？」つり目を大きく開いて少年がぽつりと言う。

「驚きましたね」その隣で眼鏡をくいっとあげてお団子頭の少女がつぶやいた。

その二人をまじまじと見つめ、少女――カヤは「そうなのね」とひとりごちる。悔しそうに微笑んで横たわる老婆に目をやった。

「これが『答え』？」

それならば、とカヤは覚悟を決め、二人を見据えてはっきりとした口調で言う。

「留王くんに茶々さん。おはよう」

「なんで、お前がここにいるんだ？」

留王は眉をひそめてカヤを睨みつけた。そうっと手を腰に伸ばし、

今朝、曽良に返してもらったばかりの銃をつかむ。
その動きに敏感に反応し、茶々は「留王」と諌めた。「今は堪えなさい。曽良兄さんにも言われたでしょう」
茶々の押し殺した声がまるで耳に入っていないかのように、留王は銃を握る手に力をこめた。いつでも取り出して目の前の妖しい女を撃てる。それを想像すると胸が高まるくらいだ。すぐにでもこの女を殺すことこそ、家族のため。その考えは変わってはいなかった。

「答えろ、神崎カヤ。こんなところで何してる？」

幽霊のようにぼうっと突っ立つ彼女に、茶々も警戒していた。
留王の質問は最もだった。ここを神崎カヤがうろついているのは不気味だ。この橋は都心とスラム街をつなぐ一本道。ここを渡れば、お台場スラムだ。そして――ヴィーナス教会がある。密かにカインノイエと手を組んでいる教会だ。留王と茶々がやってきたのも、その教会のシスターに会うためだった。今朝、留王の銃を受け取りに『実家』に訪れ、リーダー代理である曽良から『おつかい』を頼まれたのだ。といっても、小切手を渡す程度の簡単なものなのだが。
なんにせよ、スラムともカインとも関係のないはずの彼女が、こんな場所にいるのは確かに怪しい。

「神崎カヤさん。答えていただけますか？　なぜ、ここにいるんです？」

茶々も落ち着いた声でそう問い詰める。
カヤは、彼女には珍しく、鼻で笑った。

「なぜだと思う？」びしょびしょに濡れた細い足を動かし、二人に歩み寄る。「なぜ、私はこの世界に現れて、あなたたちと出会ったのか」

一メートルほど離れたところで、カヤは立ち止まった。疲れ果てたような表情を浮かべ、哀しげに微笑んだ。

「あなたたち皆を殺すためよ」

たった一言。雨音にかき消されそうなほどのか細い声。――それだけで、留王の決意を固めるには充分だった。引き金を引かせるには充分だった。

激しい雨音の中に乾いた破裂音が辺りに響き、「留王！」という子供のように高い声が叫ばれた。

＊　＊　＊

「フォ……フォックス」

鏡を持つ手が小刻みに震えていた。ふっくらとした艶やかな唇も上下に細かに揺れている。

「フォックス！」分厚い睫毛に覆われた漆黒の瞳を見開いて、妖美な女は台所に振り返った。「あなたの『お人形』が！」

その言葉に、ばたばたとあわただしい足音を響かせて浅黒い肌をした青年が台所から現れる。

「カヤがどうしたんですか、バール！？」

そう叫ぶ端正な顔立ちには不安の色が浮かんでいる。バールが鏡を携えて座っているソファに駆け寄ると、背もたれに手をかけた。

「それが……」

バールは放射線状に広がる上下の睫毛をぱちぱちとあわせながら、フォックスを食い入るように見つめた。こんなに緊張しているバールを見るのは初めてだ。

「ごめんなさい」とバールは甘美な声を弱々しく零す。「あまりにも唐突でしたの。声を出す暇すらなかったのよ。様子はおかしいとは思ったけど、普通に話していたし、夕べ見た顔だったから、てっきり友達かと……」

珍しくうろたえている。フォックスは激しい胸騒ぎを覚えて、勢いよく彼女の手から鏡を奪い取ると、その中を覗いて目をむいた。汗が一気に噴出して、足が――いや、全身が震えだす。

鏡の中の光景をただじっと見つめて、髪をかきむしる。嘘だ、とつぶやいて血が出るほど唇をかみ締めた。

ソファから立ち上がり、バールは「フォックス」と不安げに呼んでおもむろに彼を抱きしめる。フォックスにとってこの事態がどういう意味をもつのか――バールは痛いほど分かっている。それは神の『裁き』がどうのという問題ではない。もっと個人的で虚しくも深い執着。

バールは露出した肌をフォックスによせつけて、彼を想って抱きしめていた。彼がぽつりとつぶやくように彼女の名を呼ぶまでは。

「バール」

意外にも落ち着きはらった声だった。当然取り乱すだろう、と予想していたバールは「え」と戸惑った声を漏らして彼の体から離れる。「はい？」と顔を覗き込めば、さっきまで動揺していた表情は驚愕のそれに変貌していた。

「これを……」

言って、フォックスは鏡をバールに見せてきた。『人形』に何が起きたかは自分も分かっている。今更見なくても……そう思いつつも、フォックスの心中は荒れに荒れているはずだから、とバールは促されるまま鏡を覗いた。

そして――天使は短い悲鳴のようなものを出してあとずさった。

「ど、どういうことですの？」

＊　＊　＊

足音。水がはねる音。「逃げないと！」という幼い少女のような声。――全てが遠ざかっていく。

よかった、と思った。気を失う前に逃げてくれないと……私の中から、怪物が現れて二人を食べてしまうらしいから。二人の音が聞こえなくなるまでは、意識を保っておかないと。

ああ、冷たい。体が冷えていくのを感じる。不思議と、痛みがない。

水溜りに赤い液体が混じっていくのが目の端で見えた。私から出てるんだろうか。馬鹿にされているようにさえ感じる。土人形から血が出るなんて。偽物なんだよね。血に見せているだけ。本当は土……ううん、泥なんだ。

ぐっと拳を握り締める。

目頭が熱くなり、瞳から何かがこぼれだした。涙、という体液。ううん、それに似せたもの。これもどうせ泥。全部、全部、全部、偽物。

私は人間のふりした土人形。人間を殺すために創られた存在。

じゃあ、心も？　感情も？　粘土なの？　偽物なの？

ここで……この場所で「結婚しよう」と言ってくれた彼への気持ちは？

彼に出会うんじゃなかった。恋なんて覚えるんじゃなかった。愛なんて知るんじゃなかった。

そしたら……世界のためだ、と胸を張って、冷たくなる仮初（かりそめ）の体を愛せたのに。ここまできて、彼に会いたい、死にたくない、て嘆く醜い自分に気づかずに済んだのに。

でも、これで……あなたに殺されることはない。あなたが死ぬことはない。あなたが苦しむことはない。だから、いいんだよね。

ねえ、この気持ちは本物だよね？　神が創ったまがいものなんかじゃないよね？　この想いだけは……土になって消えたりしないよね？

そうであってほしい。そう信じたい。この愛は、私がこの世界で生きた証――それがあなたの中で生きていればいい。

世界が良いか悪いなんてどうでもいい。ただ……あなたのためなら、世界を守る価値はあると思ったの。たとえそれが、この身の消失を意味しているとしても。

これで……きっと、幸福（ハッピーエンド）な終焉なんだよね？

＊　＊　＊

「雨だよ、まさよし」窓にへばりついてフランス人形さながらの大きな目をぱちくりと瞬かせる。「雨、雨！」

「さくら、風邪ひいてるんじゃなかったのか？」呆れたような声を

出して、正義はさくらの部屋に入ってきた。「そんなに元気なら、学校行けただろ」

そう言った瞬間、さくらは急に咳き込み始めた。だが、明らかにわざとだ。嘘だというのは明らか。なぜ、今朝はこれに騙されてしまったのだろう。いや、分かって騙されたのかもしれない。さくらが学校に馴染めていないのは知っている。心を鬼にすることができなかったのだ。正義は頭を抱えてため息をついた。

「ほら、仮病なら仮病らしく、ベッドの中で寝てなさい」

語調を強めてそう言って、正義はさくらをひょいっと抱き上げてベッドにつれていく。

とりあえず、仮病なら安心して昼の授業に行ける。そう思うと、肩の力が抜けた。

「おはなしして、まさよし」

さくらは布団にもぐりこみ、鼻から上だけ出して甘えた声をだす。「仕方がないな」と言いつつも、正義はどこか嬉しそうにさくらの傍らに横になって、茶色が混じった黒髪を撫でる。細い髪を指にからめると、しばらく会っていない愛しい人を思い出した。

「なんのおはなしがいい？」

尋ねると、すぐにさくらは答えた。

「しゅうえんのうたひめ」

正義は予想はしていたが、またか、と苦笑する。

「カヤお姉ちゃんの教えてくれたおはなし！」
「ああ、分かってるよ」

言いながら、正義は一昨日の夜に別れを告げた少女の顔を思い浮かべた。美しさの中にも、今にも消えてしまいそうな儚さがあった。崩れかけの太古の遺跡に眠る女神の彫刻。正義はそんな印象を受けていた。

「あるところに、土からできたお姫さまがいました」

正義は一昨日の夜、別れたあとに、彼女からメールで教えてもらった御伽噺を語りだす。

「お姫さまは神さまに愛されていました。神さまのかわいいお人形です。

しかしかわいそうなことに、お姫さまが生まれた世界はとても邪悪で、神さまは悲しみました。

そこで神さまは、お姫さまにある詩（うた）を教えました。

その詩は、世界に終焉をもたらすものです。

神さまはお姫さまに言いました。

『つらくなったらいつでもこの詩を詠（うた）いなさい。汝を苦しめる世界は破壊され、汝は楽園へと導かれるだろう』

お姫さまは十七歳になるまで、世界に耐えました。

しかし、とうとう、お姫さまは憎しみに病みました。

そして世界を壊すことにしました」

そこまで話すと、さくらがひょっこり顔を出して自慢げに続きを引き継ぐ。

「ところが、そんなお姫さまのもとに白馬に乗った王子さまがやって来ました。お姫さまを迎えに来たのです。
王子さまはお姫さまを連れ去って世界を見せました。それまでお姫さまが知らなかった世界――愛にあふれた世界を。
お姫さまは世界を愛するようになりました。王子さまのおかげです。
お姫さまはお礼に王子さまに口付けをしました。
永遠の愛を誓う、長い長い口付け。
それから二人はずっと一緒に暮らしました。ずっと、ずっと、永遠に」

永遠に、とさくらは頬を赤らめてつぶやく。正義は愛おしそうに微笑んで、娘のふっくらとした頬を撫でた。

「カヤお姉ちゃん、また遊びに来る？」

人見知りする彼女がまん丸の目を輝かせてそんなことを尋ねてきた。ほんの数十分ほどしか一緒にいなかったはずなのだが、もう懐いたのだろうか。正義はぱちくりと目をしばたたかせ、言いにくそうに顔を背けて仰向けに寝転がる。驚きと、そして残念な気持ちが交錯する。

「もう来ないと思うな」

いや、二度と来ないだろう。来るな、と言ったのは自分だ。だが、そんなことをさくらには言えない。

「どうして？」と不思議そうなさくらの声が聞こえてきたが、正義は天井を見つめて何も答えなかった。

「なんだぁ」いじけたようにさくらはぼやいて、さくらは布団の中にもぐっていく。「続き、教えて欲しかったのに」

続き……その言葉に正義は眉をひそめた。脳裏によぎるのは、暗い屋敷を背に微笑む少女の姿。最後に目にしたクローンの恋人の姿。どうか、幸せになってほしい。二度と現れないで欲しい。

ハッピーエンドに続きはないはずなのだから――正義は祈るように心の中でつぶやいた。

幸福な終焉（後書き）

三章はここで終わりです。ここまでお付き合いくださって本当にありがとうございます！　次話からは四章となります。徐々に暗くなっていくかと……。

第一話はいきなり始まりますが、驚かずに読みすすめていただけると話が読めていくように組み立てる予定ですので。今後ともよろしくお願いいたします。

前夜祭　―1―

トーキョーの都心に、夜な夜な豪華なパーティーが開かれる洋館がある。トーキョーの各地にちらばるオークション会場の一つ、『フィレンツェ』。そこは上流階級の社交場。情報を交換しあい、見栄を張りあう会場だ。

『明治』と呼ばれた時代をイメージしたデザイン――かつて、外国からの使者をもてなすために建てられた鹿鳴館に似せた外観に、知識人を気取った人間は「ほう」と感嘆の声をあげる。

ドアマンが開く巨大な扉をくぐれば、両腕を失った女神像――の有名なヴィーナス像のレプリカ――が出迎え、辺りを見回せば、大理石の柱の間をぬうようにあちらこちらに高価そうな骨董品が並んでいる。

エントランスを抜けた先には広々としたレセプション会場が広がり、フランスの王宮を彷彿とさせる巨大なシャンデリアがゲストを俯瞰している。そして女性たちの煌びやかなドレスと光り輝く宝石が会場のフロアを鮮やかに彩る。せっかくのロココ調のイスやキャンドル、華美な花瓶に生けられた背の高い花々も、見劣りして大して目に入ってこない。女性たちが――いや、女性たちが身に着けているものが会場の装飾そのものといっていい。

点々と会場に置かれた円形のテーブル。まるで蜜にむらがる虫のように、それを囲んでゲストたちは談笑している。和気藹々と話しているように見えるが、腹のうちではどう相手を出し抜こうか企んでいる。自分の権力をちらつかせて優位に立つ――それがここでの会話のコツだ。

ギラギラと野心に燃える瞳を浮かべる紳士たちと口元をおさえながら上品に微笑む貴婦人たち。その間を踊るように軽やかに通り抜ける配膳人――彼らは銀の盆にシャンパンを載せて、貴婦人たちに微笑みかける。中には妖しげな笑みを交わしあう貴婦人と配膳人の

姿も。毎週のようにここに通ううち、若い配膳人と禁断の関係を育んでしまう女性も少なくはない。

それが理由ではないだろうが、トーキョーのオークション会場で働くためには――掃除係さえも――ある程度地位の高い人物の推薦が必要になる。それゆえに、バイト感覚で仕事をしているとはいえ、ここで働く人間はそれぞれ由緒ある家柄の出だ。さらにいえば、見た目の良さもいくらかは考慮される――との噂だ。

「おい！」とそんな配膳人の一人が、柱に寄りかかって辺りを見回している同僚に声をかけた。「さっきから、なにそこで突っ立っている？」

ワックスでオールバックにした髪がシャンデリアの光を浴びて輝いている。ラメでもつけているかのようだ。すばやく動いても、右手で支える盆に乗ったシャンパンはこぼれることはない。ここで働き始めて三年。彼の身のこなしはすでにベテランの域に達していた。

「お前だ、お前！」と、自分とまったく同じ格好――白いワイシャツ、黒いベストとズボン――をした同僚に近寄ってその肩を叩いた。

それでやっと自分のことだ、と分かったようで、同僚はハッとしてこちらに振り返る。さらりとした黒髪が揺れて、深みのある茶色まじりの黒い瞳がこちらに向けられた。母性さえ感じる優しげな顔。目立つような格好良さはないが、なんとなく、綺麗だという印象を受ける。女性だったら美人ともてはやされていたに違いない。ただ……見覚えがない。オールバックの配膳人は顔をしかめた。

「なんですか？」と少年はとぼけた声を出す。

「お前、新人か？」ちらりと少年の右胸に目をやると、そこには『田中』と書かれた名札がつけられている。「田中？」

よくある苗字だが、この職場では聞いたことはない。眉根を寄せていると、少年は頭をかいて照れたような笑みを浮かべた。

「ああ、はいはい。今夜からです。田中はじめです」

どうも、と田中は頭を下げた。怪しむような表情を浮かべつつ、「俺は益子雄一(ましこ)だ」と面倒くさそうに名乗り、益子は持っていたシャンパンの盆を田中に渡す。「とにかく、ぼうっとしてないで飲み物配れよ」

田中はあしらうように「すんません」と軽く言って盆を受け取った。

「初めてで物珍しいのは分かるが」

新人め、と心の中で愚痴りつつ、益子は辺りを見回す。びっしりと敷き詰められるようにゲストが溢れる会場。このパーティーはオークションの前座のようなものなのだが、ほとんどの人間はこのパーティー目当てで来ている。どれだけ自分が裕福かを自慢できる絶好の機会なのだ。その証拠に、オークションが始まっても大半の人間(特に女性)はここで会話を続けている。配膳人の忙しさは、オークションが始まっても変わることはないのだった。いや、忙しさは増す。<ｒｕｂｙ><ｒｂ>なぜか</ｒｂ><ｒｐ>(</ｒｐ><ｒｔ>・・・</ｒｔ><ｒｐ>)</ｒｐ></ｒｕｂｙ>、数人の配膳人が仕事の途中で貴婦人たちとともに忽然と姿を消すからだ。そのせいで人手が足りなくなっててんてこまいになるのはいつものこと。だからこそ、新人にはしっかりしてもらいところだ。

益子は田中に視線を戻すと、脅すように告げる。

「あまりきょろきょろしていると田舎者だと馬鹿にされるぞ」
「いやぁ」と田中は特に気にする様子もなく苦笑して、辺りを見渡した。「元カノを探してるんですよね」
「……元カノ！？」

ここに元カノが？　てことは、相当のお嬢さまか……もしくは人妻だぞ。いや、と益子は自分を諌めるように首を横に振った。そんなことはどうでもいい。こいつは仕事中に何を考えているんだ？先輩としてびしっと言ってやらなくては、と益子は勇んだ。

「お前な……」
「いきなり、フラれたんスよ。それからろくに口も利こうとしないんで、どうすりゃいいのか……」

益子の言葉を遮って田中がぽろっともらした愚痴に、益子は口を噤んだ。注意しようという気が一気に失せて、代わりに仲間意識が芽生えた。

「俺もそういうことあったな」益子は仕事を忘れて、遠い目でかつて本気で愛した女性の面影を思い出す。「狂ったように電話かけては、ことごとく留守電にされたなぁ」

哀しげな先輩の言葉に、田中は苦笑して何度もうなずいた。

「左に同じです」
「女は皆、悪魔だよ」
「……そうかもしれませんね」

急に田中は神妙な面持ちで視線を落とす。口元には笑みが浮かん

でいるが、笑顔とは程遠い表情だ。益子はそれに気づいて眉をひそめ、「ああ、そうか」と憫笑した。

「よっぽどひどい女にひっかかったんだな、お前」

すると田中は益子に振り返り、「は？」と目をしばたたかせる。なんともとぼけた表情だ。ここまできて悪女に遊ばれたことを否定したいんだな――益子はさらに同情して、泣きそうになった。全ては経験だ、次に生かせ。口に出して伝える代わりに、益子は田中の肩を力強くつかむ。

田中は柳眉を寄せて、唇をかみしめて自分を見つめる先輩を見つめた。――そんな二人に、小柄な茶髪の少年が駆け寄ってくる。

「益子先輩！」

銀の盆を脇にはさんで、愛嬌のある顔を赤らめて走ってくる。益子は田中の肩から手を離すと、「なんだ、松本？」と声をかけた。

「やばい、すんげぇ美人！」

松本は二人の前で立ち止まるなり、息を切らせてそう言い放つ。いくら騒がしいパーティー会場とはいえ、興奮したまま放った声は辺りによく響き、周りの貴婦人がいぶかしげな表情でこちらに振り返った。中には自分のことか、とそわそわしている女性の姿も見受けられる。

益子は「声でけぇよ」と松本の腕をひっぱり、そそくさと柱の影につれていく。

「美人って誰だよ？」

しかし、美女と聞いて知らんふりをするわけにはいかない。期待に胸を躍らせながら、益子は松本を食い入るように見つめて尋ねた。松本は「聞きたいですか？」ともったいぶって、押し殺した声で益子に耳打ちする。

「噂の本間代議士の娘ですよ。いやいや、ほんっと噂以上っすよ！」

「本間の娘！？」と益子は驚愕のあまり、目を見開いて大声を出していた。「来てんのかよ！？」

本間代議士――本間秀実は国家公安委員会委員長を務める国務大臣だ。オークションの常連で、ここ『フィレンツェ』にも毎週のように顔を出している。政治的手腕もさることながら、最近では、絶世の美女を養女に迎えたという噂で有名だ。一体、いつ本間代議士は娘を社交界デビューさせるのだろうか、と『フィレンツェ』の配膳人の間でも話題だった。トーキョーでの社交界デビューとは、すなわち、オークション会場にドレスアップさせて連れてくることを意味する。美少女のドレス姿……『フィレンツェ』の従業員は今か今かと、毎回オークションが開かれるたびに待ちわびていたのだ。

そんな彼女がなんと今夜来ているという。益子は目を輝かせて、松本に迫る。

「で、一人で来てるのか！？」

もちろん、一人なはずはない。父親である本間代議士も一緒だろうが、そんなことを聞いているのではなかった。つまり、連れはいるのかどうか。フリーかどうか、だ。松本も益子の意図は汲み取っていた。益子の期待の眼差しを一身に受けつつも、だが、「いえ」と苦笑して首を振る。その瞬間、益子は舌打ちして頭を垂らした。

「男いるのかよ。夢がねぇ」

「それが」と松本は渋い表情を浮かべて、陰口でもたたくかのようにひそひそと報告を始める。「連れてる男も、有り得ないくらいのいい男なんですよ。つい、俺も見惚れちゃいました。あれなら仕方ないかな、て諦めがつきますね。お似合いっすもん」

それを聞いて、益子はゆっくりと顔を上げた。「まあ」と呆れたように鼻で笑う。

「ゲストとして来る人間と配膳してる俺たちじゃ、元々つり合わないもんな」

「そうですよね」松本は肩をすくめてあっけらかんと同意する。「目の保養させてもらって、満足しましょう」

そんな二人の話を後ろで盗み聞きしていた田中は、唐突に「どこに居るんですか？」と口を出してきた。

話に夢中で田中の存在に気づいてもいなかった松本は、びくっと肩を震わせて慌てて振り返る。

「お、お前誰だ？」

「田中はじめです」と田中はへらっと微笑んだ。

「新人か？」

「はい、今夜からっす」

そんなことより、と田中は松本に歩み寄り、不敵にも思える微笑を浮かべて低い声で尋ねる。

「本間代議士の娘、どこにいったら会えますかね？」

＊　＊　＊

パーティー会場の視線がある一点に釘付けになった。膝丈のホルターネックドレスに身を包んだ少女がハイヒールを鳴らして入ってきたからだ。ただの少女だったなら、ここまでの注目は浴びなかっただろう。彼女がもし、男も女も関係なく、一瞬にして目を奪われてしまうほどの美しい少女でなかったならば、皆、見向きもしなかっただろう。まさに傾国の美女とは彼女のこと。会場が一気に静まったようにも思えた。

ワインレッドやゴールドなど派手な色のドレスが溢れる中、たったひとり真っ黒な質素なドレスで現れた彼女は会場で一際目立つことになった。ドレスの背中は腰の辺りまでぱっくりと開き、浅黒くなめらかな肌があらわになっている。そのせいで、彼女の後姿にさえ、視線が集中してしまう。

少女はおずおずとパーティー会場の中を歩き出した。ぱっちりと大きい黒曜石のような瞳が落ち着かない様子で辺りを見渡す。長い睫毛はせわしなく上下に動き、薄紅色の唇からは吐息が漏れる。手持ち無沙汰なのか、必要もないのに短い黒髪を耳にかけたり、胸元に光るシルバーの十字架を握ったり、その右手はまるで何かを探しているかのように動き続けている。

注目から逃れようと会場の端へと足を進めるが、視線は自分を追いかけてくる。どれだけ早歩きをしようとも、どれだけ背の高い貴婦人の影に隠れようとも、それは彼女を捕らえて離さなかった。特に、男性からの熱い視線――舐め回すように上から下まで鑑賞

・・

するような視線が少女を動揺させた。

自分をここに連れてきた養父は、大事な用事があると言ってどこかへ行ってしまった。先に行っていなさい、と言われてこうして足を踏み入れたのだが、エントランスで待っていればよかった、とひどく後悔していた。彼女は一度、幼いときにこうしてオークションに来たことがあった。だが、そのときは――子供だったからだろう――こんな落ち着かない視線を浴びせられることはなかった。

少女はなんとか会場の隅までたどり着き、柱に身を寄せて胸元に手を置いた。ひんやりとした銀色の十字架に指が当たり、少女は安堵したような笑みを浮かべる。――そのときだった。

「お飲み物いかがっすかー？」

唐突にそんな鼻にかかったような声が背後からして、少女はハッとして振り返った。条件反射のように「ありがとうございます」と言い掛けて――息を呑んだ。

「噂どおり、お美しいことで。本間のお嬢さま」

そこには、シャンパンを乗せた銀の盆を右手で持って、配膳人の少年が怪しげな笑みを浮かべて立っていた。その右胸には『田中』と書かれた名札。少女は顔をしかめた。彼が『田中』であるはずはないからだ。

少女は幽霊でも見ているかのような青ざめた顔で彼を見上げ、震えた声を漏らした。

「……なにしてるの、和幸くん？」

「やっと目を合わせたな、カヤ。別れたとき以来か」

和幸は笑顔を消し去り真顔になると、高々と掲げていた盆を下げてカヤを睨みつける。

「で？　連れはどこだ？」

前夜祭　―２―

「連れって……あなたには関係ないでしょう」

カヤは咄嗟に目を背け、踵を返してその場から逃げようとした。その腕を、配膳人――のふりをした和幸がつかむ。

「本当に関係ないのか！？」

盆にのったシャンパンがこぼれるのも構わず、和幸はカヤの腕をひっぱり引き寄せた。「離して！」とカヤは身をよじって逃げようとするが、男の――それも、商業用のクローンである彼の力に対抗できるはずはない。和幸はぴくりともせず、カヤを真剣な眼差しで見下ろしていた。

「俺はまだ納得してない」

和幸の言葉に、カヤは抵抗をやめてぴたりと動きを止める。

「何かあったんだろ」

心配しているようにも聞こえる優しい声だった。カヤは胸が熱くなり、涙がこみあげてくるのを感じた。それを隠すためにすばやく顔を背け、「離して」とだけつぶやく。もちろん、そう言って大人しく引き下がるような男ではないことはよく知っている。カヤは針を飲み込むような痛みに襲われつつも、ぐっと堪えて毅然とした態度で口を開く。

「私たちはつり合わない」唇をかみ締め、カヤは覚悟を決めて和幸

に振り返る。――それでも、目を見ることはできなかった。自然と視線は口元で止まる。「あなたは私にふさわしくない」

きっぱりとそう言うと、和幸は鼻で笑った。まるで相手にしていないかのように。

「聞き飽きたんだよ、お前の嘘は」

「嘘じゃない！」

カヤはとうとう声を荒らげた。いくら柱の影になっているといっても、これだけ騒げばさすがに周りのゲストたちも気づく。ちらちらと覗かれている視線を背中に感じた。ここで騒ぎなんて起こせば、養父である本間に迷惑がかかる。カヤはばつが悪そうに目を泳がせ、「お願い、離して」と小声で懇願した。

和幸はしばらく難しい表情を浮かべて考えていたが、しぶしぶカヤの腕から手を離す。――どういう事情であれ、カヤのつらそうな顔を見るのは耐えられなかったのだ。

「カヤ」と、和幸はせつなげな声を漏らした。「何があったんだ？頼む、教えてくれ」

「……」

「力になりたいんだ」

カヤの呼吸は荒くなっていた。今すぐにもその胸に飛び込んで抱きしめてもらいたい。泣き喚いて心のうちをすべてぶちまけてしまいたい。慰めて欲しい。「大丈夫だ」と包み込むような温かい声で言ってほしい。そしたら、たとえ気休めだとしても、ずっと楽になることだろう。でも、それは自分勝手な望みだ。彼のためにはならない。彼を苦しめることになる。だからこそ――

カヤはごくりと生唾を飲み込み、張り詰めた表情で和幸を見上げ

た。愛おしい澄んだ瞳が自分に向けられている。胸がきしんだ。自分がその気になれば、すぐにでも彼の愛を、その身で、その心で、味わうことが出来る。彼はすぐそこにいる。手に届くところにいる。手を伸ばすだけで、自分のものになる。その誘惑が恐ろしくて、一秒も経たずにカヤは目を反らす。そして、かすかに震える唇から言葉を漏らした。

「他に好きな人ができたの。何度も言わせないで」
「は」と、和幸は馬鹿にしたような笑みを浮かべる。「嘘だ」
「嘘じゃない！」
「お前はそんな女じゃないだろ」
「そんな女になったの」

和幸の苛立ったため息が聞こえてきた。胸が突き刺されるように痛む。こんな気持ちを味わいたくなかったから、必死に避けていたというのに。

「もう私に関わらないで」

涙声にならないようにするので精一杯だった。
カヤは今すぐここから逃げたかった。和幸から遠ざかりたかった。このまま彼の傍に居たら、甘えたくなってしまう。彼への溢れんばかりの気持ちを抑えることができなくなる。せっかくの覚悟が崩れ落ちてしまう。

「カヤ」

呆れ果てたような、それでいて愛のこもった声色。そんな彼の声を聞くだけで息苦しくなる。カヤは、もうやめて、と心の中で叫んで目を瞑った。もう嫌なの。もう、これ以上、嘘をつかせないで。

あなたを傷つけさせないで。いっそのこと……嫌いになって。

「カヤ」と和幸は再び名を呼ぶ。さっきとは違い、どこか警戒しているような低い声で。「こいつが、新しい男か？」

「！」

思わぬ言葉を耳にし、カヤは目を開いた。遠慮がちに顔を上げて和幸を見る。その視線は自分を飛び越えて背後へと向けられていた。カヤは気まずさに顔をしかめながらも、ゆっくりと振り返る。

＊　＊　＊

俺はバイトに行く前に本間の家に寄ることにした。カヤの見舞いのためだ。

空はすっかり晴れ渡っていたが、道路にはまだ水溜りが残っている。今朝、急に降り出した通り雨の名残だ。ズボンの裾には泥がこびりついている。俺は顔をしかめてそれを睨みつけた。こういうとき、制服ってのは厄介だよな。すぐに洗えるわけでもないし。

にしても、自宅謹慎が解けたのは嬉しいが……クラスの連中の視線が痛かった。カインだから、というのもあって、今まで目立たないように暮らしてきたわけだが、昨日の熊谷との一件で瞬く間に『噂の人』だ。平岡いわく『三流グループ』である俺が、学年一のイケメンの不良を殴り飛ばしたんだもんな。まさに、何も知らない奴ら（カヤ以外全員か）にとっては革命だよ。てか、平岡まで今日はびくびくして話しかけてきたな。何を今更怯えてるんだよ、あいつは。

とりあえず、俺を退学間近まで追い詰めた昨日の暴力事件のお陰で、俺がカヤと付き合ってることは証明できたみたいだ。どうやら、昨日、カヤがクラスの女子に俺との関係を明言してくれたようで、ひそひそと「神崎さんが藤本くんと？　ありえない」という誉れ高

い噂話があちらこちらから聞こえてきた。やっぱ、砺波の言う通り、周りから見れば、俺とカヤはつりあってないんだろうな。
そりゃそうか。神の最高傑作である彼女と、人が犯した罪の代表作ともいえる俺(クローン)じゃ、つりあうわけもない。
でも、だからなんだ。誰がなんと言おうと、たとえ神が反対しようとも、俺はカヤが好きだ。これからも何が起ころうとそれが変わることは無い。カヤを守り抜いて、『収穫の日』を乗り越えて、あいつを幸せにしてみせる。人間として。一人の女として。俺はそのために生きる。それが俺が選んだ使命だ。

「！」

不意に、目の前にそびえる玄関のドアがおもむろに開きだした。緊張がはしって、咄嗟に背筋を伸ばしていた。もしかしたら、本間の親父さんが出てくるかもしれないからな。平日の夕方なんて、普通は仕事だろうが……カヤが体調を崩したのだ。心配して家に帰ってる可能性もある。念のためだ。
だが、俺の予想を大きく裏切り、開いたドアから顔を出したのは――

「カヤ！？」

学校を早退して家で休んでるはずのカヤだった。寝巻きにカーディガン。元気のない沈んだ表情。大げさかもしれないが、生気すら感じられなかった。いつもの笑顔は陰も形もない。まるで笑い方を忘れてしまったかのような冷たい女がそこに立っていた。
さらに不思議なことに、夕べまであったはずのガーゼがない。左頬は傷一つ無く、肌理細やかな肌が顔を覆っている。にきび一つつくったことのないような肌だ。美月姉さんによると、静流姉さんにナイフで斬りつけられたって話だったんだが……まあ、かすった程

度らしいし、たいした事なかったのかもな。傷跡が残らなかったなら、それに越したことは無い。
そんなことより……と、俺は今にも倒れそうなカヤの代わりに玄関の扉に手をかけ、大きく開いた。

「大丈夫か？」いや、見るからに大丈夫じゃないんだが。「調子悪くて早退したって？　風邪か？」

言って、俺はカヤの肩にそっと手を置いた。

「わざわざ出迎えてくれなくてよかったんだ。部屋に戻って休め」

バイトの時間まで、部屋で付き添うから――そう言いかけた俺の腕を、カヤは乱暴に手で払った。一瞬、何が起きたか分からなかった。きょとんとしている俺に、カヤはゾッとするほど冷たい声で言う。

「帰って」
「！」

『帰って』？　俺はまゆをひそめてカヤを見つめた。視線を落として黙っている彼女は、美しい彫刻かと思えるほどの無表情。感情がないかのようで、不安に襲われた。調子が悪い、て話だったが……本当にそれだけか？　何かひどい目にでもあったんじゃないのか？

「カヤ、何かあったのか？」語調を強めて尋ねると、カヤはおもむろに顔を上げて俺をまっすぐに見つめてきた。

「別れたいの」
「……は？」

あまりにも唐突だった。

「わ、別れたい？」

苦笑して聞き返すと、カヤはためらう様子もなく「別れたいの」と繰り返す。嫌になるほどはっきりとした口調だ。

「いきなり、なに言ってんだよ？」冗談だろ、と言い掛けて俺は口を噤む。それが愚問だということは、カヤの真剣な表情から明らかだった。代わりに、「俺、何かしたか？」と尋ねた。

カヤは目を背けて押し黙る。眉間に皺を寄せ、何かを考えているようだ。

正直、フラれる理由に思い当たる節は何も無い。確かに、一昨日の夜からケンカはしていた。バイト仲間の葵を俺のマンションにつれてきたことがきっかけで口論になり、『隠し事』やら『嘘』やらでカヤは珍しく取り乱していた。だが、夕べ、それは解決したはずだ。カヤは俺の『隠し事』を認めてくれたし、卒業パーティーから帰るころにはすっかり元通りになっていた。別れ際にキスもしてくれたし……

そうだ、キス！　まさか、曽良のことか？　曽良とのキスをまだ気にしてる？　いや、でも、それでなんで別れ話になる？　自責の念にかられて……って様子でもないし。そもそも、無理やりされたわけだから、カヤに非はない。夕べ、その旨はしっかりと伝えて、カヤも納得していたはずだ。

とはいえ、やっぱ、俺がカヤの機嫌を損ねるようなことをしたんだろうな。それで別れるなんて変なことを言い出しているに違いない。とりあえず、謝っておこう。カヤはずっと黙ってるし、このままじゃ埒があかない。男として情けないが、もう謝るしかない。背

に腹は変えられないというかなんというか……

「悪かった」と俺はぎこちなく謝罪した。「今のとこ、心当たりはないけど……お前を追い詰めるようなことをしたんだよな？　せめて、どこかで落ち着いて話し合えないか？」

「あなたと話すことなんて何もない」

「！」

間髪居れずにカヤはぴしゃりと言った。おいおい……俺、よほどのことをしたのか？　唖然としている俺を尻目に、カヤは家の中に振り返り、「望さん」と声をかける。

呼ばれて、椎名が姿を現した。「やあ、藤本くん」と、遠慮がちに声をかけてきた。いつもと違い、飄々とした雰囲気は無い。俺とカヤが別れ話を繰り広げているこの状況を、誰よりもおもしろがるのはこいつだと思っていたが。

「どうも」と戸惑いつつも返事をし、不意に、椎名の持っているある物に目がいった。椎名が玄関から降りてくるなりカヤに手渡したある物――紺色の紙袋。俺はいぶかしげな表情でそれを凝視する。見覚えがある、なんてもんじゃない。あれは……

「これ、砺波ちゃんから預かってたの。葵さんが間違って持ち帰ってたんだって」言って、カヤは紙袋を――ｍａｃａｒｏｎと隅に書かれた紙袋を渡してくる。「返す」

マカロンの紙袋に……葵！　やっぱり、そうか。葵と一緒に買いに行った『シンデレラ』の靴だ。砺波の高校で開かれるクリスマスパーティーの招待状代わりに使われる靴。俺はカヤを誘おうと思って、一昨日買っておいたんだ。失くしたと思っていたら、葵が持ち帰ってたのか。

って……『返す』？

「いや、それ、お前に渡すつもりだったんだ。返さなくていい」

俺は慌てて、そう言葉を返した。

いろいろと分からないことがありすぎて、頭の中が混乱している。なぜいきなり別れを告げられたのか。それも、もちろん一つだが……てっきりどこかに置き忘れてしまったと思い込んでいたプレゼントがいきなり戻ってきて、しかも、渡そうと思っていた人物から差し出されているこの状況。どう受け止めればいい？　しかも、砺波はなんで俺じゃなくカヤに預けた？　意味が分からん。

とにかく、今はそんな疑問に構ってる場合じゃないよな。ムードも段取りもめちゃくちゃだが、こうなったら仕方がない。

「カヤ」と俺は改まって真面目な表情で声をかける。「クリスマス、一緒に……」

「行かない！」

は……早っ。まだ最後まで言ってないじゃないか。どんだけ怒ってるんだよ？

って、あれ？　俺はあることがひっかかって、ちらりとカヤから隣に佇む男に視線を移す。カヤのボディガード、椎名望。いつも人を小ばかにした態度をとるこの男が、やけに大人しい。からかう絶好のチャンスだというのに、うんともすんとも言わない。嘲笑でも聞こえてきて当然の状況なのに、神妙な面持ちで黙っている。椎名を気にしてる場合じゃないんだろうが、こいつが静かだと気味悪い。俺は余計に不安になった。

「あなたと行く気はないの」カヤは強い口調でそう言って、紙袋を俺に押し付けてきた。「別れるんだから」

「……」

俺は今起きてる出来事が信じられなかった。嫌な夢としか思えない。すんなり受け取れるわけもなく、俺は呆然としていた。

別れるって……本気で言ってるのか？

「指輪も中に入ってるから」

「！」

指輪！？　ちらりと紙袋の中に目をやれば、確かに白い箱の上にキラリと光るものが見えた。安っぽい、おもちゃみたいな指輪。俺がカヤにあげた婚約指輪だ。

俺は愕然として言葉を失った。あんなに喜んでたじゃないか。どうしたっていうんだ？

「受け取らないのなら」冷酷とも思える声でカヤはつぶやき、紙袋を隣で立っている椎名に突きつける。「彼に預けておくから」

「はい？」

椎名もこの展開は予想していなかったようだ。珍しくぎょっとして驚いて、「僕ですか？」と受け取るのをしぶっている。どうやら……この別れ話にはマジでこいつは関わっていないみたいだな。こいつが仕掛けた悪ふざけかとも思ったんだが――いや、そう願っていたのかもしれない。

俺は大きくため息をつき、カヤの手から紙袋を奪い取った。椎名に預けられるよりは、自分で持っていたほうがマシだ。

そして、ちらりとカヤの胸元を見つめる。パジャマの第一ボタンは開かれていて、そこから十字架がのぞいていた。それだけ確認して安堵のため息をつく。なぜかは分からないが、カヤはカインの皆からもらったあの忌まわしいネックレスだけは手元に残すことにし

たようだ。指輪と一緒に手放されたらどうしようかと思った。
万が一、俺と別れたとしても、カヤにはあのネックレスだけはしててもらわなきゃいけない。あれは……カヤを裁く十字架。カヤの命を奪うために捧げられた十字架だ。皮肉なものだよな。人間を裁くために創られたカヤが、クローンに――人間が犯した禁忌の創造物に――裁かれようとしてるんだ。これも神が仕掛けた悪戯なら、ほんっと悪趣味だ。

「別れたいなら理由くらい言え」

とりあえず、カヤが今すぐ曽良に殺されるようなことにはならなそうだ。ほんの少しだけ余裕がでた俺は、きつい口調で尋ねた。
ここまで来たら嫌でもカヤが本気だと認めざるを得ない。どうせ椎名に預けるなんて言い出したのも、椎名を嫌ってる俺ならこういう行動をとると読んだからだろう。
カヤはしばらく黙り込んでから、迷いの無い瞳で俺を見つめてきた。

「他に、好きな人ができたの」

それは愛なんて知らない機械がだしたような、冷淡な声色だった。
目の前にたたずむ、カヤに似たこの女は一体、誰だ？　俺は混乱する頭の中で、助けを求めるかのように誰かに問いかけていた。
「そういうことだから」とカヤは作り笑顔を浮かべて言う。目だけは笑ってはいなかった。帰って、という心の声がはっきりと聞こえてくる。
正直、あきれ返っていた。そういうことって……俺が納得するとでも思ってるのかよ。好きな人ができた？　なんでそんな嘘をつく

んだ？　なんでそんな嘘をついてまで、別れようとする？　そこまでして別れたい理由は何だ？

だが、尋ねたところでこいつは答えないだろうと確信していた。話し続けても、結局こんな調子だろう。これ以上、馬鹿げた会話を続けたら、俺も我慢できなくなる。頭に血がのぼって何を言い出すか分かったもんじゃない。それだけは避けなきゃいけないと思った。思い出されるのは、一昨日の夜のこと。冷静さを失って思うままに言葉の撃ち合いをはじめたらどうなるか……俺は身をもって知った。今日のところは退こう。一晩寝たら、カヤも落ち着くかもしれない。そんな望みを抱いて、俺は何も言わずに踵を返した。

ほかに好きな男ができたなんて、苦し紛れの嘘だと俺は信じて疑わなかった。

前夜祭　―３―

ネクタイはだらしなくゆるみ、シャツはところどころズボンからはみ出している。黒いスーツの上着は前のボタンが全部開かれていて、その着こなしだけで彼の人となりが伝わってくるようだ。縛られるのを嫌い、わが道を行く気ままな性格――それが彼。腕に抱いているシャム猫はまるで彼のトレードマークのようにも思える。

「ユリィ」と、カヤはどこか不安げな声で彼の名を呼んだ。
「ユリィ？」

和幸はあからさまに嫌悪感を顔に出し、不機嫌な声を出した。
栗色のパーマがかった（おそらく天然だろう）短い髪は、西洋画に描かれるキューピッドを彷彿とさせる。ぼうっと半開きの瞳は、しっかりと開ければくりっと大きなものになるに違いない。高い鼻と日差しを知らないような白い肌が、彼がこの国の人間ではないことを象徴している。
和幸とカヤに見つめられる中、薄い唇が微々たる隙間を開けて、そこからのんびりとした声が漏れる。

「トイレ、見つからなかった」

和幸は「は？」と隠すこともせずに馬鹿にしたようなひきつり笑顔を浮かべた。第一声がそれかよ。てか、ずっとトイレ探してたのか？　確かに、目を見張る美しさを持った男だが、どうも頼りない。たった今起きたような惚(とぼ)けた顔をしているし。想像と大きく違う。和幸はそのギャップに対応しきれずにいた。
カヤは慌てた様子で彼に駆け寄り、「ごめんなさい」と謝って、鋭い三角の顔をしたスリムな猫を彼の腕から抱き上げた。大切そう

に胸元に抱くと、「やっぱり、私がついて行けばよかったね」と申し訳なさそうに声をかける。
ユリィという少年はゆっくりと首を横に振ると、カヤの背後で呆然と立ち尽くしている少年に目を向けた。

「誰？」

尋ねられ、カヤは「あ」と怯えた表情を浮かべて振り返る。「彼は……」と口ごもっていると、和幸はわざとらしく咳払い。自分の仕事を思い出したかのように、銀の盆を高々と揚げてユリィに歩み寄った。

「ただの配膳人の、田中はじめです」

いぶかしげな表情を浮かべるカヤと、透き通るような青い目を光らせるシャム猫の横を通り過ぎ、和幸はユリィの前に立ちはだかる。

「シャンパンいかがですか？」

ユリィはしばらくぼうっと和幸を見上げていたが、「シャンパン」とぽつりと呟いて、穏やかな笑みを浮かべた。

「もらう。ありがとう」

温かみのこもった声だった。新人の配膳人が到底かけてもらえるはずのない丁寧な言葉。もし、本当に彼が『田中はじめ』だったら、あまりの嬉しさに感激して涙をこぼしていたかもしれない。
だが、彼はただの配膳人ではなかった。
和幸は愛想笑いを顔に貼り付けながら、トレイを支えていた左手首の力を抜いた。トレイは光を四方へ反射させながら、ゆっくりと

斜めにずれ落ちていく。乗っていた三つのシャンパングラスは徐々に重力に押されて滑っていき、彼の手から離れたトレイとともに床に落ちていった。

会場にグラスが割れる音が響き、まるでそれが決闘の合図かのように、和幸は右手を振りかぶってユリィの頬にそれを思いっきりたたきつけた。それはたった一瞬のことで、カヤは瞬き一つできなかった。シャム猫は黒い耳をぴくりと動かし、咄嗟にカヤの腕から飛び降りて主人のもとへと跳ねるように駆けていく。

ユリィは吹き飛ばされ、グラスの破片が散らばる床にたたきつけられた。手を突いて上半身を起こすと、「あや」と痛む頬を撫でる。だが、困惑している暇もなく、和幸が馬乗りになって胸倉をつかんできた。ぐいっと体を引き寄せられ、真っ直ぐな黒い瞳が目の前に迫っていた。

「カヤに何をしたんだ？」

低い声で『田中はじめ』がそう尋ねてきた。ユリィはぴくりと茶色い眉を動かした。

さすがに人が殴られれば、会場の端だろうと、人々の注目は集まる。どよめきが沸き起こり、自然と二人の周りは闘技場さながらにスペースが空けられていた。興味はあるが巻き込まれたくはない――ゲストたちの気持ちははっきりと行動に表れていた。

しかし、そのおかげで、二人の会話を聞きとれる人間は誰もいない。ユリィは眉をひそめ、じっと自分を殴った少年を見据えた。怒りに我を忘れそうな実直な少年を。

「どんな弱みを握ってる？　何を企んでる？　カヤを脅してるんだろう？」

彼は胸倉を掴む手を大きく揺らし、早口でまくしたてるように問

い詰めてきた。
必死だ。何か誤解をされているようだが、彼は必死だ。ユリィは顔をしかめ、同情するような視線を向けた。そして、独り言のようにつぶやく。

「君が、彼女の恋人なんだね」
「！」

納得したような口調だった。その声色は憐れみに満ちている。茶色い瞳には恐れも怒りも浮かんではいない。そこにあるのは、果てしない優しさ。和幸は思いもよらない反応に――途方にくれた。全てを飲み込み洗い流す大海を前にしているような気分に襲われた。自分がちっぽけな存在に思えた。
ひるんだその瞬間、和幸は首根っこを掴まれ、いつのまにか背後に近づいていた同じ格好の男に引っ張りあげられた。やろうと思えばいくらでも抵抗できた。だが、そこまでの戦意はなくなっていた。根拠はない。ただ、なんとなくだが、ユリィというこの人物を『無実』だと思った。それは不思議な『信頼感』でもあった。

「何してんだよ、田中！」

怒鳴り声で、益子だ、と和幸は即座に気づいた。「すみません」とつぶやきながら、近寄ってきたシャム猫に「大丈夫だよ」と声をかける少年を見つめる。シャム猫を撫でようと床から離した手の平からは、ところどころ血が湧き出ているのが見えた。割れて散らばったグラスの破片で切ったのだろう。和幸は表情を曇らせた。ユリィも今気づいたようで、目を丸くして手の平を見つめている。

「何の騒ぎですか？」

床にぺたんと座っているユリィの背後から、四十代後半の面長な顔立ちをした男が現れた。黒いタキシードに身を包み、髪はピシッとオールバックに固められている。

益子は慌てて「大島さん」と姿勢を正した。ユリィは「誰？」と不思議そうに小首を傾げながらも、シャム猫を抱いてゆっくりと立ち上がった。

周りのゲストたちは口々に「何事でしょう」「喧嘩ですか？」などと囁きだした。だが、夢中で野次馬になっている姿を晒したくはないのだろう、わらわらと散らばって、すぐに他愛もない世間話を再開し始める。

落ち着いた雰囲気を取り戻した会場で、大島は「これは……」と青ざめた表情で粉々になったグラスとユリィの血が残る床を見回し、益子に目をやる。

「説明しなさい」

益子は「いや……」と隣で突っ立っている『田中』をチラ見する。問題を起こした当の本人は、悪びれた様子もなく、まるで第三者かのようなすました顔を浮かべていた。おい、コラ……そう言いたいのを益子はぐっと堪える。シャム猫を抱く少年を見れば、彼も何事もなかったかのような顔で猫を撫でていた。殴られたくせに、文句の一つも言わないのか？　益子は顔をしかめた。

「益子くん！」と大島が脅すような声を出す。「何があったんですか？」

そう言われても、益子も騒ぎを聞きつけて駆けつけてきただけだ。詳しい事情は分からない。「あ……の」と困りはてて口ごもると、『田中』の横で佇んでいた少女が一歩足を踏み出した。ハイヒールの音に益子が目をやれば、漆黒のドレスを纏った異国の少女がこち

らに振り返るところだった。益子は息を呑む。それまで彼女の存在には――そこに誰かいるということには――気づいていたが、騒ぎのせいで、その姿に目もくれていなかった。彼女の美しさに気づいていなかったのだ。思わず、ぽかんと口を開けていた。

目鼻立ちのすっきりしたその顔立ちは、彼女の聡明さを物語っているようだ。高嶺の花――その言葉が自然と益子の頭に浮かんでいた。言葉さえも通じないんじゃないか、という圧倒的な美。誰も寄せ付けない気高さまで感じる。

すぐに悟った。彼女こそ、噂の本間代議士の娘だ、と。

少女――本間カヤは、じっと『田中』を見据えて、瑞々しい唇を動かす。

「彼をクビにしてください」

いきなりの言葉に、益子はぎょっと目を見開き、大島も「はい？」とあっけにとられた。ただ、『田中』だけは予想がついていたかのように鼻で笑った。

カヤは大島に振り返ると、厳しい顔つきで冷たく続ける。

「いますぐ、クビにしてくだされば、ここで起きたことは父には言いません」言って、ぽかんとしているユリィに申し訳なさそうに一瞥をくれる。「私の婚約者への暴力、なかったことにします」

大島は戸惑いつつも愛想笑いを浮かべ、「失礼ですが……」とカヤに促す。カヤはすぐに大島の意図することを悟って、背筋を伸ばすとはっきりとした口調で名乗る。

「本間カヤです」

その瞬間、大島は電流でも走ったかのようにハッとして、「申し

訳ありません！」と深々と頭を下げた。そのまま土下座をしだすんじゃないか、という勢いだ。

「即刻、クビにいたしますので。くれぐれもお父様には……」

カヤはどこか哀しげな表情でそれを見つめ、「お願いします」とだけ言ってユリィに歩み寄った。「はい！」と大島は腹から声をだし、カヤと入れ替わるように足を踏み出して『田中』の前に立ちはだかる。

「クビだ！」という一言が辺りに響き渡った。

カヤは一瞬顔をしかめたが、堪えるように唇をかみ締める。猫を撫でるのを止めるようにユリィの右手首を優しく掴み、その手の平を向けさせた。手相を赤いインクでなぞったように血がにじんでいた。カヤは「ごめんね」と小さく呟く。

ユリィはじっとカヤを見つめ、責めるような口調で告げた。

「彼が来るとは聞いてなかった」

その言葉にカヤは苦しそうに眉をひそめ、今にも泣きそうな声を漏らす。

「私も……思ってもいなかった」

背後から大島が何やらガミガミ叱りつけている声が聞こえてくる。カヤはたまらなくなって、ユリィの腕を掴んで歩き出した。早くこの会場から抜け出したかった。

＊　＊　＊

「今からでも遅くないですよ、カヤちゃん！　藤本くんを追いかけて謝りましょう」

玄関の扉が閉まるなり、望さんはそう声を荒らげた。なぜか、焦っているようだった。

「撤回はしません。もう別れたんです」望さんを睨みつけるように見つめて、きっぱりと言う。「これでいいんです」

私は胸元の十字架に手を置いて、大きく深呼吸をする。そう、これでいい。和幸くんのために私ができることは、これしかないもの。本当はこの十字架も捨てるべきなんだろうけど……できない。これは和幸くんのお嫁さんの証。曽良くんと――ううん、カインの皆さんとの誓いがつまっている。和幸くんを守る、という誓い。これを持っていれば、自分の気持ちに惑わされて道を踏み外すことも無い。きっと、戒めになってくれる。そう思える。だから、これだけは持っていたい。大切な思い出とともに。

私が土となって消えても、これだけは残ってくれる。躯（からだ）もお墓もなく、和幸くんの心からも消えた私が、この世界に残していける唯一の生きた証。そうなってほしい。

本当はね、あの結婚指輪も持っていたかったんだ。でも、だめ。あれには、彼への愛が詰まり過ぎてるもの。持っていたら、彼が恋しくてたまらなくなる。おかしくなる。狂ってしまう。

本当は彼に覚えててもらいたい。私の愛を心の隅にでも残しておいてほしい。でも、それは私の我侭。私は彼に幸せになってほしい。そのためなら、なんだってする。そのためなら、彼に憎まれてもいい。

「前もって言っておいたじゃないですか。だから、紙袋も持ってき

てくれたんでしょう」

言いながら、サンダルを脱いで玄関にあがった。「いや、まあ、そうなんですけど」と困惑した声が背後から聞こえてくる。

「せめて、もう少し二人きりで話し合ったらどうですか？」

私の後をついてきながら、望さんは珍しく真剣な口調でそう説得を始めた。

「本当は藤本くんが浮気でもしたんでしょう？　今は赦せないかもしれませんが、一時の感情に任せて決断を急ぐとあとで後悔しますよ。浮気は男の甲斐性ともいうでしょう。せめて、もう少しだけでも付き合って……」

どうして、望さんがこんなに気にしてるんだろう？　和幸くんのこと気に入ってたんだろうか。そうは見えなかったけど。

「和幸くんが悪いわけじゃないんです」私は立ち止まって身を翻すと、望さんを真っ直ぐに見詰めた。「悪いのは……私なんです」

望さんは、まさか、と頬をひきつらせる。私はそれ以上何も言わずに微笑した。説明できたら分かってもらえるんだろうけど、世界の終焉に望さんまで巻き込むわけにはいかない。

「とりあえず」と、望さんは顔をしかめて私に迫ってきた。「金曜日のオークションまでは付き合っててもらえませんか？」

「え？」

一体、何を言い出すんだろう？　私はぎょっとして目をむいた。

「嫌です」ときっぱりと答えるが、望さんは困り果てた表情を浮かべて首を横に振る。
「わがままを言わないでください。あなたが婚約者を連れてくると本間先生はご友人にすでに伝えられているんです。これであなたが一人でオークションに現れたら、本間先生の立場がないでしょう」
思わず、言葉を失った。そういうものなんだろうか。考えてもみなかった。私が一人で行ったら、おじさまに迷惑がかかる？　おじさまを嘘つきにしてしまう？　自然とうつむいていた。
「だから、形だけでいいんです。オークションには藤本くんと一緒に行っていただけませんか？　彼を連れてきてくれるだけでいいんですよ」
じりじりと望さんは歩み寄りながら、懇願するような声色で言った。
私はしばらく考え、ハッとして顔をあげる。いい解決策を思いついたのだ。
「婚約者、連れて行きます」
望さんの表情が一気に晴れ渡る。ホッとしたのか、いつもの余裕の微笑が浮かんでいた。
そう、『婚約者』と一緒ならいいんだよね。私はにこりと微笑んで、付け加える。
「和幸くんじゃないですけど」
「は？」なぜか、望さんは表情を曇らせた。「それ……どういうことですか？」

「だから、新しい恋人です。さっき、和幸くんにも言ったじゃないですか。私、ほかに好きな人ができたんです」

段々と私の声は小さくなっていった。言ってて自分でも嫌になる。新しい恋人なんていない。和幸くんに諦めさせようと思って口から飛び出した真っ赤な嘘だった。でも、おじさまのためにそれを事実に変えることもできる。

こういう場合、嘘から出た真って……言えるのかな？

「あれ、本当だったんですか？」望さんはいぶかしげな表情で、そう尋ねてきた。「てっきり、はったりかと……」

ばれてたんだな。そう思うと、余計に恥ずかしくなる。

私はごまかすように微笑んで、踵を返して階段へと向かった。

明日、リストくんとユリィさんに相談しよう。体の異変についても、話さなきゃいけないし。――そう思うと、憂鬱でため息が漏れた。こんなとき、誰よりも傍にいてほしい人はもういない。差し伸べてくれた手を、私は払いのけてしまった。彼はもう、私を迎えにきてはくれない。

前夜祭　―４―

『田中はじめ』は初日でクビになった。大島にこっぴどく叱られた後、ベストを脱ぎ捨て、苛立ちを床にぶつけるかのような乱暴な足取りでパーティー会場の隅を歩いていく。まっすぐに、忙しく飲み物や食べ物が運び込まれるスタッフ用の扉を目指していた。そこからキッチンを通ってもう一つの扉を開けば、配膳人用のロッカーがある。そこで着替えて荷物を取ったらさっさとこんなとことはおさらばだ。

田中はじめ――いや、和幸の表情には憤りと困惑の色が浮かんでいる。彼には理解できなかった。愛する人の、カヤの気持ちが分からない。初喧嘩を乗り越え、二人の絆は深まったと信じていた。なんとしても彼女を守り抜いて、幸せな未来を築く――そう固く決意していた。それが、三日前、唐突に拒絶された。突然、別れをもちかけられたのだ。ほかに好きな男がいる、と言われて。それからというもの、避けられ、まともに話もできない。

「なんなんだってんだ、一体？」

和幸は苦しげにひとりごちる。

どうしちまったんだよ、カヤ？　心の中でいくら叫ぼうとも、その声は彼女には届かない。そう分かっていても、神に祈りを捧げるようにカヤに問いかけてしまう。まるで別人のように冷たくなってしまった愛する女性に。

「和幸くん！」

足元ばかり見て歩いていた和幸に、いきなり誰かが声をかけてきた。それも、ひどく動揺した、若々しくも気弱そうな声。足を止め、

和幸が顔を上げると、目の前には二十代半ばくらいの青年が立っていた。暖房で暖かいといっても、汗をかくほどの暑さではないはずなのだが、彼の額はまるでマラソンでもしてきたかのようにぐっしょり濡れている。いや、体調が悪いのかもしれない。顔色が悪い。

「はい？」と和幸は戸惑いつつも返事をする。が、ふと、妙なことに気づいて顔をしかめた。自分は今は『田中はじめ』のはず。なのに、なぜ彼は『和幸』と呼んだのだろうか。ここのスタッフではないのか？

「誰ですか？」

失礼かとも思ったが、和幸は不躾に直球で尋ねた。が、青年は嫌な顔一つせず、足早に歩み寄ると和幸の腕を掴む。そして、電気椅子を前にした死刑囚のように怯えた表情で尋ねてきた。

「なんで、来てしまったんだ」

和幸はぎょっと目を丸くした。質問を投げかけられたのか、責められたのか、判断がつかなかった。いや、独り言にさえ聞こえた。

「は？」

青白い顔で頬はこけ、多少不健康には見えるものの、外見はいたって普通の青年だ。が、明らかに挙動不審。さらに不気味なことに、自分の名前を知っていた。一体、誰だ、こいつは？　と和幸はあとずさる。

「今すぐ、帰るんだ」と青年は和幸がとった距離を詰め、低い声で訴える。誰かに追われているのか、辺りをおどおどと見回しながら。

「いや、何の話を……てか、誰？」

気味が悪くなって、和幸は青年の手を振り払った。

「僕は」と青年は必死な表情で和幸を食い入るように見つめる。心臓の鼓動が喉まで震わせているのかと思うほど、声は不安定に揺れている。「僕は、前田勝利（かつとし）。君とは直接会ったことはないけれど、写真で顔は何度か見てて、話もよく聞いてて……」

汗を流しながらまくしたてるように早口で話され、和幸は戦慄さえ覚えた。話の内容とこの様子……まさか、俺のストーカーか？と和幸は頬をひきつらせた。

「いや、俺、そういう趣味ないんで！」と、思わず、両手を出して首を振る。すると、前田と名乗る青年は「何言ってるの」と呆れと焦りが混じった声を出す。「とにかく、早くここから……」

続きを言おうと開けた口から言葉が出てくることはなった。前田の言葉をさえぎるように、間延びした声が前田の背後から聞こえてきたのだ。

「藤本くんじゃないか。ちゃんと来てくれたんだねぇ」

その瞬間、前田は飛び跳ねるように体をびくつかせて固まった。ひやりと冷たい汗が背中を伝う。

そんな彼の様子には気づかず、和幸はその聞き覚えのある声にあからさまに嫌そうな表情を浮かべた。ひょっこりと柱の影から現れてこちらにやってくる長髪の男。黒のシャツの胸元を大胆に開け、背広を肩にかけている。薄い唇は怪しげに笑みを浮かべ、切れ長の

目は鋭い視線をこちらに向けている。どこからどう見ても遊び人だ。夜中に駅前で女性をナンパしているほうがずっと似合う。――大臣の娘の警護よりも。

「どうも、椎名さん」と和幸は反抗的な口ぶりで挨拶した。

前田は決して振り返ろうとはしなかった。気づかれないように体の震えを抑えるのに必死だった。

そんな彼に背後から忍び寄るように近づき、椎名はぽんと肩に手を置く。

「前田さんも、ご一緒でしたか」

ハッと目を見開いたのは、前田だけではなかった。和幸も驚きに目をむいた。いぶかしげな表情を浮かべ「知り合いなのかよ？」と椎名に尋ねる。

椎名は「あ」と人差し指を出して、和幸に向かって何度か振る。

「言葉遣い、言葉遣い」

面倒くせぇ奴――和幸の表情から、そんな心の声が聞こえてくるようだ。軽く舌打ちをしてから、和幸は仕方なしに言い直す。

「知り合いなんデスカ？」

すると椎名は満足そうに微笑んで、前田の肩に寄りかかった。

「本間先生の秘書だよん。ねぇ、前田さん」

それを聞いて、和幸は「あ」と声をあげた。とっさに前田を見つ

め、「秘書のお兄さんか！」と納得したように晴れやかな表情を浮かべる。

「僕のこと、知ってるの？」

前田は青白い顔を上げると眉根を寄せた。か細い声で尋ねると、和幸は懐かしむような表情で頷く。

「カヤから、聞いたことあるんで。秘書のお兄さんは毎晩遅くまで仕事をしててすごいんだ……て」

「……カヤさんが！？」

予想以上に大きなリアクションが返ってきて、和幸はきょとんとしながら「はあ」と気の抜けた返事をした。

前田は魂でも抜けたかのように呆然とした。手の届かない存在だと思っていたカヤが、自分のことを話していた。それも、褒めてくれていた。これが中学時代の初恋であったならば、手放しで喜んでいたかもしれない。それだけで充分だ、と満足していたかもしれない。だが、現実は違う。そんな単純な話ではない。嬉しさなど微塵もなく、前田の心に津波のように襲いかかってきたもの――それは、身を引き裂かれるような罪悪感だ。

椎名は愕然としている前田を観察し、満足げにほくそ笑む。そして「よかったですね」と耳元に囁き、前田の肩から腕をどかした。

「！」

それは残酷なほどの皮肉だった。前田の心臓が大きく揺れた。怒り……いや、憎しみにわななく。咄嗟にうつむくと、眼球が飛び出しそうなほど目を見開き、血が出そうなほど唇をかみ締める。

椎名は知っているのだ。前田が遅くまでしていることが、胸を晴

れるような仕事ではないことを。今なんて、人として、男として、最低のことをしている。目元にくまをつくって夜な夜な部屋でしていること――それはカヤの部屋の盗聴だ。

それを知っていて椎名はそんな言葉を漏らしたのだ。

前田は隣で嘲笑を浮かべる男を殴り飛ばしたい衝動にかられたが、拳は震えるだけでそれ以上は動かない。結局、自分は何もできない――無力感に押しつぶされそうになる。悔しいのに、それでも行動に移せない。そもそも、どんな行動をしたらいいのかが分からない。今まで命じられることしか、したことがないからだ。意思がない。意志を貫く度胸もない。そして、おそらく椎名はそれも知っている。

だからこそ、こうして和幸と対峙していた自分を見つけても、椎名は動揺する様子も、疑う素振りさえも見せないのだ。悔しい。憎いほど悔しい。それなのに……ホッとしている自分がいる。椎名に小物扱いされているだけだというのに、馬鹿にされているだけだというのに、怪しまれていないことに安堵している自分が、何より情けない。

狂いそうなほど悔しい。それでも、何もできない自分が憎い。

前田は椎名に見えないように顔を下に向けたまま唇をかみ締め続けた。――彼にできることはそれだけだった。

「それでぇ？」前田をからかうことに満足したのか、椎名はころっと明るい笑顔を浮かべて和幸に振り返る。「カヤちゃんは取り返せそう？」

和幸は視線を逸らして苦笑した。首を左右に振ると、疲れ果てたような表情を浮かべる。

「さあ。もう、よく分からないです」

「諦めるわけ？」椎名はにたっと笑って腕を組んだ。「力ずくで奪い返すくらいしてみてよ、藤本くん」

すると和幸は椎名をジト目で睨んできっぱりと答える。

「しようとして失敗したんですよ」

あら、と椎名は眉をひそめた。「何したの？」

「お嬢様の婚約者を殴って、クビですよ」

「もうクビになっちゃったの？」

椎名は目をむいて声を裏返した。嫌味は感じられない。純粋に驚いているようだ。それもそうか、と和幸は肩をすくめて呆れた笑みを浮かべる。まだオークションも始まっていない前座のパーテーだ。クビになるには早すぎるだろう。

――たとえどんな事情があったとしても、暴力はルール違反なんです。

いつかの校長の言葉が頭に蘇る。そうだった、と今更ながらに思い出す。こうしてクビになってカヤと話すチャンスを失ったのも、そのペナルティか。先週末、曽良との兄弟喧嘩のときには自分を抑えきれたのに。まだまだ、パンピーになりきれてないな――和幸はこっそりとため息を漏らした。

「協力してもらったのに悪いんですけど」と、和幸は頭をかいて椎名を見上げる。反抗的な目つきではなく、素直な眼差しで。「今日は帰ります」

その言葉に、椎名は眉をぴくりと動かし、慌てた様子で腕組みを解いた。

「もう帰るの？　婚約者の正体はつかめたわけ？」

和幸は、それが……と言いにくそうに口をゆがめた。

脳裏によぎるのは、殴られておきながら、文句一つ言わずに慈しむような眼差しで見つめてきた少年。ユリィという名の、突如として現れたカヤの新しい婚約者。大海原を思わせる包み込むようなオーラをもった不思議な少年だ。

「あの婚約者、悪い奴じゃない気がするんですよ」言って、和幸は先刻大立ち回りを繰り広げた会場の端へ顔を向ける。当然だが、そこにはカヤもユリィの姿もなく、益子がそそくさと床に散らばったグラスの破片をちりとりで取っているところだった。和幸は申し訳なさそうに顔をしかめ、椎名に向き直る。「だから、余計に参ってるんですけど」

冗談ともとれる和幸の言葉に、椎名は「でもね」と返して落ち着かない様子で首元をかく。

「僕はあの新しい婚約者をどうも信用できないんだよ。カヤちゃんのボディガードとして、頼むよ」

椎名は若干腰をかがめて和幸の機嫌を伺うような仕草をしてみせた。今までのこの男からは考えられないへりくだった態度に和幸は寒気すら感じた。

「もう一回だけでも、話してみてくれないかな？」

そりゃ、いくらでもカヤと話してみるつもりだ。だが……と、和幸は反論する。

「今のあいつは聞く耳を持ちませんよ。何か他の方法を考えて、日を改めて……」
「それじゃ手遅れかもしれないよ」椎名は片方の眉を上げ、試すような視線で和幸を見やった。「あと一回、試してみてよ」

和幸はいぶかしげな表情を浮かべて黙る。なんでこいつはここまで必死になっているんだ？　そんな疑問に首を傾げつつも、確かに椎名の言うことは一理ある、と心の中で頷いていた。手遅れ……これまで頭に浮かんでもいなかったその言葉がズッシリと胸にのしかかる。このまま引き下がっていいものだろうか、と確認するように自問を始める。ユリィという男と接するカヤは決して脅されている風ではなかった。それよりも、秘密を共有しているような親密ささえ感じた。カヤは何か事情があって仕方なく自分と別れたいフリをしているだけ――もしその予想がはずれていたとしたら？

「さっき、階段上がっていくの見たから」椎名は呪文でも唱えるように、和幸に囁きかける。「二階に行けば会えるよ」

＊　＊　＊

「なんで部屋行っちゃだめなの？」
「だめに決まってるだろ！」

八時を回ってシフトが終わり、焼き鳥屋『すすむちゃん』を出たところだった。後ろからぴったりとついてきた葵がいきなり腕にしがみついて「部屋に連れて行け」と騒ぎ出したのだ。
俺は葵の手をなんとか振りほどこうと、腕をあらゆる方向に動かしていた。砺波とは違って、葵は普通の女の子だ。無理やり振り払うことはできない。

「彼女にフラれたばっかで寂しいでしょ？　慰めてあげるからさ」
「……」
つい、動きが止まった。ひきつり笑顔で葵を見下ろす。
「言うんじゃなかった」
すると、葵はいたずらっぽく笑みを浮かべた。
カヤに『別れたい』と言われた一時間後、俺はここで焼き鳥を焼き始めた。が、集中できるはずもなく、呆けてばかり。組長に何度、渇を入れられたことか。
バイト中、ぽっかり客の足が途切れて暇になる時間帯がある。俺と葵はその間、無駄話をして時間をつぶすのだが……つい、俺はそのときに口走ってしまったのだ。フラれた、と。軽率だった。こうなることは予測できたってのに。
「添い寝してあげるから」と葵は体を引っ付けて、内緒話のように囁く。
「添い寝！？」って、なに動揺してんだ！？　葵の思うつぼだろ。俺は顔をふいっと背けて平静を装う。「冗談に品が無ぇんだよ」
「かったくるしいなぁ」葵は小さな唇をつぼめて、頬を膨らませた。俺が焦っているのには気づいていないようだ。「だから、フラれたのよ」
き……きっぱりと言いやがって。砺波といい、アンリといい、こいつといい、俺の周りには口の悪い女ばっかだ。カヤは俺にとってオアシスだったのかもしれない。
「そんなに深く考えなくていいのに」苛立った口調でそう言って、

葵はやっと俺の腕を離した。「一回間違いを犯しちゃったら、あとは流れに任せるだけだから」
「は！？」
何理論だ、それは！？　慌てて葵に振り返ると、葵はクスクスと楽しげに笑っていた。
「冗談だって」
「……笑えねぇよ」
葵は腕を後ろに組んで、小首を傾げた。ウェーブがかったショートヘアがふわりと揺れる。
「じゃ、本気ってことで」
「……」
返す言葉が見つからずに、黙り込んでしまった。何を言っても諦めそうに無い。葵の真剣な表情からそれは明らかだった。かと言って、流れに任せるわけにはいかないだろ。俺はカヤと別れる気はない。
「あのさ、葵。俺はまだ彼女のこと、諦めてないっていうか……」
「どうでもいいよ、そんなこと」
「へ」
どうでもいい？　唖然として言葉を失っていると、葵は「分かってないな」とため息をついた。
「あたしに諦めてほしいなら、それなりのことを言わなきゃ」
「それなりのこと、だ？」

「そ。その言葉が出てこない限り、あたしは諦めないよ」

その言葉って……なんだ？　眉をひそめて戸惑っていると、葵は「それじゃ」と一歩あとずさる。「今日のところはこの辺で勘弁してあげる」

「勘弁って……」

困らせてることは十分自覚してるのか。呆れて俺は頬をひきつらせる。

「お客さんも待ってるし」

言って、葵は俺の背後を指差した。客？　と振り返り、俺はぎょっとする。そこに突っ立っていたのは――

「椎名？」

「や」へらっとゆるい笑みを浮かべて、カヤのボディガードは右手を挙げる。「さっそく、浮気かい？」

「違っ……！」

『さっそく』はお前だろ！　開口一番、嫌味か。

咄嗟に否定の声をあげるが、それは葵の「おやすみ」という弾けた声にかき消された。忙しく葵に振り返り、「ああ」と情けない声で返事をする。――テンパりすぎだ。椎名の笑い声があたりに響いているのも当然だな。

「何か用かよ？」と恥ずかしさをごまかすようにきつい口調で尋ねる。

椎名は「あ」と声をあげ、唇の片端をあげた。

「言葉遣い、忘れちゃった？　年上には……」

「何か用デスカ？　椎名サン！？」

面倒くせぇ奴だな、ほんとに！　苛立った声が閑静な住宅街に響き、犬の散歩で通りかかったおっさんが迷惑そうな表情でこちらを見てきた。刺すような視線に、居心地悪く目を泳がせていると、「これ、お土産」と椎名がつぶやき、いきなり何かを放り投げてきた。飛ばされた洗濯物のように、それは闇夜にひらりと舞い落ちてくる。

「は？」とりあえずそれを掴み取り、俺は小首を傾げた。「ワイシャツ？」

そう、シャツだ。椎名はいきなりシャツを投げつけてきたんだ。どこの国の挨拶だよ？

それも、新品のシャツじゃない。はっきり言って、汚い。暗がりの中、『すすむちゃん』から漏れる光だけが頼りだが、それでも分かる。皺だらけの白い生地のシャツは、ところどころ黒く染まっている。一見、血のようにも見えるが、光に当てて目を凝らせば、それがただの泥汚れだと分かる。

俺はシャツから椎名に視線を移し、答えを求めた。椎名は真剣な表情で土産を見つめ、感情が伺えない無機質な声でぽつりと漏らす。

「カヤちゃんのシャツだよ」

「え！？」

カヤの！？　ぎょっとして俺はもう一度シャツを見つめた。ついさっきまでゴミのように見えていたシャツが、いきなり高価なものに見えてきた。って、何考えてるんだ。そんなことより、なんで椎

名がカヤのシャツを持ってるのか……いや、それよりも――

「これ」と、俺は力ない声で椎名に問いかける。「これ、どうしたんだ？」

「これってのは……その汚れのこと？」

俺は何も答えずに、椎名に振り返る。頷く必要もないように思われた。

「僕も同じ質問をしたいくらいさ」困った顔で椎名は喉元をかいた。「お昼に急に帰ってきたと思ったら、全身びしょぬれで、しかも、見ての通り、泥だらけ」

泥だらけ……俺は再度、シャツに視線を戻す。まるで雨の中、野球でもしたかのような汚れ方だ。だが、カヤはそんなことしないだろう。てことは、何をしたんだ？

「ブレザーもスカートもそんな感じだよ。帰ってくるなり、ぜーんぶ、捨てちゃったんだから。お陰で、真麻さんは慌てて制服の買出しだ」

「捨てた！？　カヤが制服を？」

びっくりでしょう、と軽い口調でつぶやいて椎名は肩をすくめる。

「本人は水溜りで転んだ、て言ってるんだけど……ちょっと、気になってね。君にも見てもらおうと思って、ゴミ箱あさってとりあずシャツだけ確保してきたんだよ」

「ゴミ箱あさったのかよ？」

「ボディガードも最近は体当たりだよ。で、どうなの？　何か、心当たりある？」

心当たり？　カヤが泥だらけになる心当たりか？　あるわけないだろ。俺は何もいわずに首を横に振った。

「第三ボタンのあたり見てみてよ」思い出したようにそう言いながら、椎名が歩み寄ってきた。「変な穴があるでしょう」

「穴？」第三ボタン……とシャツをたぐりよせて食い入るように観察する。「本当だ」

確かに、そこには小さな穴が開いていた。タバコを押し付けた跡のような、焦げた輪郭の小さな丸い穴だ。

「背中にも同じ穴が開いてるんだ」

「何が言いたいんです？」

すぐ隣にまで近づいてきた椎名をちらりと見やり、すかさず質問を返した。

明らかに、椎名は何かを示唆している。俺にそれを言わせようとしている。だから、俺から言う気にはなれなかった。どんなことであれ、こいつの思い通りになるのは嫌だからだ。

椎名はじっと俺を見据えて、呆れたような表情を浮かべていた。

「何かが貫通したみたいだろ」

「何か……？」

「銃弾、とか」

「銃弾！？」何言い出すんだ、こいつ？　俺は思わず、大声を上げていた。「カヤが撃たれたって言いたいのか？」

「まさか、まさか」椎名は俺を落ち着かせるように両手の平を見せて、苦笑する。「もしそうなら、カヤちゃんは無事じゃないでしょう」

「……」

確かに、その通りだ。くそ。俺の反応を見て楽しんでやがる。完全に遊んでるな、こいつ。俺は舌打ちしそうになって、かろうじてそれを止めた。また、「年上には……」と腹立つ説教されそうだからな。

「とりあえず、僕が言いたいのはぁ」と、何事も無かったかのように、椎名はお決まりの間延びした口調で切り出す。「カヤちゃんの様子がおかしいってことさ。泥だらけの制服もそうだし、いきなり君に別れ話をもちかけたのもそう。それに、オークションに新しい恋人を連れてくるって言い出したし……」

「新しい恋人！？」

ふざけるな、と叫んで椎名に殴りかかりそうになった。またこいつの悪趣味な冗談だと思ったのだ。だが、椎名はいたって落ち着いた表情でこちらを見つめていた。いつもヘラヘラしている口元も固く閉じられている。その視線は真剣そのもの。それに気づいた瞬間、パンクしたタイヤのように握り締めた拳から力が抜けていった。

事実なんだ――そう確信して、俺は愕然とした。

確かにカヤは、他に好きな男ができたと言っていた。それが俺と別れたい理由だ、と主張した。が、俺は本気にしていなかった。でたらめに決まってる。俺を諦めさせるためのはったりだ。――そう信じていたんだ。

「君が僕のこと嫌ってるのは知ってるよ」唐突に、椎名は落ち着いた声でそう口火を切った。「でも、今回ばかりは僕を信用してくれないかな？」

「なにを……」

「思ったんだけどね」椎名は目を細めて低い声でつぶやく。「カヤ

ちゃんの様子がおかしいのは、その新しい恋人のせいなんじゃないかな、て」

どういうことだ？　俺があごを引いて眉をひそめると、椎名は「分からないの？」と鼻で笑った。こいつ……やっぱ、苛つくな。

「カヤちゃん、脅されてるんじゃないかな？」

「脅されてる？」

「そう」自信満々に椎名は頷いて、左手の人差し指で空を切る。「泥だらけにした犯人がその恋人だとしたら、辻褄が合うとは思わない？」

「何の辻褄だよ？」

「穴が何なのかは分からない。ゴミ箱に捨てられてからできた穴かもしれない。けど、泥だらけだったのは確かだ」言いながら、椎名は俺が抱えているカヤのシャツをちらりと見た。「妙な男に弱みを握られるようなことをされて、仕方なく、君と別れて彼の恋人になった。そう考えてもいいんじゃないかな？」

弱みを握られるようなこと……俺も椎名同様、汚れたシャツを見下ろす。薄々と、椎名が言いたいことが分かってきた。

「襲われた……て言いたいのか？」

俺はほぼ無意識にそうつぶやいていた。

目の端で、椎名が満足げに微笑むのが見えた。

「それも一つの可能性だよね。カヤちゃんは実に清純な子だから。一方的だったとしても、他の男に抱かれといて、平気な顔で君と付き合うなんてできないでしょう」

「誰なんだ、そいつは？」

心臓が焼けるように熱い。気づけば、シャツを引きちぎりそうなほどに握り締めていた。

「まあ、もちろん、それは極端な例だ。他にもいろんなケースが考えられるわけで……」

飄々とした調子で椎名はべらべらと話し出した。すべて、耳に入ってこなかった。何があったかはどうでもいい。細かいことはどうでもいい。カヤが変な男に何かされたなら、どんなことであろうと絶対に許さない。それだけだ。

「誰なんだ、そいつは！？」

椎名を睨みつけ、俺は辺りに響く大声で怒鳴りつけていた。

「年上には……」という決まり文句を口にすることなく、椎名は、待ってました、と言わんばかりの笑みを浮かべていた。そして、さらりと提案する。思いもよらない策を。

「オークションにおいでよ、藤本くん」

「オークション？」

椎名は「そう」と力強く相槌を打ち、ポケットから右手を引き抜いて俺の肩に置いた。そして白い歯を見せてヒントを出すように囁きかける。

「カヤちゃんは新しい恋人をオークションに連れてくるって言ってた。つまり……？」

「オークションに行けば、そいつに会える？」

「そういうこと。一番手っ取り早い方法だよ。探す手間も省けるし、

カヤちゃんに問い詰める必要もない」
「……そうだな」

大発明でもしたかのようにテンションが高い椎名とは対照的に、俺は沈んだ声で答えた。
椎名の言うことは最もだ。間違ってはいない。だが、オークションに会いに行けばいい――そんな簡単な話じゃない。俺はカヤの婚約者として出席するはずだった。あいつが別の男を婚約者として連れて行く以上、ただの孤児である俺はオークション会場に足を踏み入れることもできない。カインのときみたいに潜入することは可能だが……面倒なことになったら厄介だ。
表情を曇らせて考え込んでいると、椎名がけろっとした声で俺に告げる。

「田中はじめ、て新人くんと話はつけといたから」

田中はじめ？　いきなり、誰の話だよ？　柳眉を寄せて顔を上げると、椎名にしたり顔があった。

「今度の金曜日に配膳人としてオークションデビューする子さ。そのお給料の倍を払って、交渉しといた」
「交渉？　なんの交渉だ？」
「それは……」と、椎名は俺の肩から手をはなし、ポケットにまた手を突っ込んだ。そして今度は、ある物を携えて手を抜く。ギラリと鈍い銀色の光を放つそれは……

「名札？」

『田中』と書かれたネームプレートだった。素材は確かに高価そうだが、それ以外は何の変哲もない名札だ。これを俺に渡してどう

しろっていうんだ？　馬鹿にしてんのか、と文句を言いかけ――声を出す寸前、唐突に俺は椎名の考えを悟った。
まさか……と、ハッとして俺は『田中』の名札から椎名へと視線を戻す。椎名は不敵に笑み、唖然とする俺の手にネームプレートをねじこませた。

「金曜日の夜、待ってるよ。――田中はじめくん」

耳元で怪しげな声で囁かれ、俺は取り付かれたようにじっと名札に見入った。ごくりと生唾を飲み込み、早まる心臓の音に耳を傾ける。別人になりすましてオークションに忍び込む。それはまるでカインだったときにしていたことと、ほとんど変わらない。表の世界に出てきてまで、そんな犯罪じみた行為をするのは抵抗がある。それに、椎名の思い通りになるのは嫌だ。こいつの言うことを聞くのは何がなんでも嫌だ。
だが……もし、万が一、このままカヤが何も答えてくれなければ……俺は『田中』になるしかないと思った。椎名の好意に甘えるしかないと思った。

前夜祭　―４―（後書き）

長すぎてすみません！　どうしても二つに分けるわけにはいかなかったので。
Ｗｅｂ拍手、いつもありがとうございます。大変励まされております♪

前夜祭　―５―

「病院に行こう、ユリィ」

カヤはユリィの右手の平を食い入るように見つめ、そう促した。

エントランスの階段を上がって左に曲がると、とある小部屋がある。二人はその中で、金糸で刺繍がなされた二人がけの赤いソファに座っていた。目の前には一輪のバラが生けられた花瓶がマホガニー材の机に乗っている。それぞれ、かなりの値のはる家具なのだろうが、部屋にあるのはその二つのみ。寂しいほどに物がない。――それもそのはず。ここはゲストが一休みするためだけの個室。二階にはこんな小部屋がいくつも用意されていた。

幼いころ、慣れないハイヒールで挨拶回りをして足を痛めたカヤを、神崎の母がここに連れてきたことがあった。その幼い記憶をたどり、カヤは怪我をしたユリィをここに連れてきたのだ。

どこかにスピーカーが隠されているようで、居心地の良いクラシックミュージックがちょうど良い大きさ――かすかに聞こえる程度の音量――で流れている。甘いバニラの香りが漂い、このままソファに横になりたくなる。以前ここに来たとき、カヤはひどく気に入って、結局オークションが終わるまでここに座っていたものだ。

扉に鍵がかけられるため、最近では、貴婦人と若いスタッフとの逢引にも使われているようなのだが、そんなことをカヤが知る由も無い。

「病院？」ととぼけた声でつぶやいて、ユリィはガラスの破片がラメのように輝く手の平を凝視する。出血は少なく、ぽつりぽつりと赤い液体が小さなマグマのように湧き出しているだけだ。ユリィはしばらく何やら考えてから、首を横に振る。「いいよ」

「よくない！」

すかさず声を張り上げてカヤが身を乗り出すと、その膝の上にちょこんと座っていたシャム猫が落ちそうになって慌てて立ち上がった。

「ガラスって危ないの、ユリィ。今すぐ病院に行って手当てしないと」

「そう言って、本当はここから逃げ出したいんだよね」

カヤはハッと目を見開いて身を引いた。

「ユリィ」と諌めるような声を出したのは、カヤの膝の上で青い瞳を輝かせるシャム猫だ。「失礼ですよ」

猫にやんわりと叱られ、ユリィはふいっと顔を背ける。

「いいの、ラピスラズリ」猫――いや、猫の姿をした天使の背を撫でて、カヤは哀しげな笑みを浮かべた。「ユリィの言ってること、多分、本当だと思う」

「パンドラさま」

ラピスラズリは黒く鋭角の耳を水平に倒し、カヤを見上げた。姿かたちは猫だというのに、同情しているのが手に取るように分かる。

カヤはラピスラズリを撫でる手を休めることなく、沈んだ表情でうつむく。そう、ユリィの言う通りだった。無論、ユリィの怪我を心配しているのも事実。早く病院で手当てをさせたい。だが、それと同じくらい、ここから逃げ出したいという気持ちもあった。もっと正確に言えば、和幸から逃げ出したかった。

一体どうやって配膳人として潜り込んだのかは分からない。いや、彼が元『無垢な殺し屋』だったことを考えれば、それだけで説明が

つくことかもしれない。とにかく、そこまでして彼は自分に会いに来たのだ。そこまで、自分を想ってくれている。――それは、今のカヤにとっては傷口に塩を塗るようなものだった。つらくて悔しくて、苦しい。和幸と顔を合わせるのも苦痛でしかない。彼女は分かってしまったから。彼の愛を受け止めてはいけない、と。彼を想えばこそ、その愛を拒絶しなくてはならない、と。

「ごめんね、ユリィ」

上目遣いでユリィの横顔を見つめ、カヤは元気の無い声で謝った。真っ白な肌に、まるでチークでも塗ったかのようにその左頬は腫れている。和幸に殴られたところだ。

上下の長い睫が重なりそうなほどユリィは目を薄め、どこか不機嫌そうな表情を浮かべて答える。

「パンドラが謝らなきゃいけないのはオレじゃない」

「え？」

きょとんとするカヤにユリィは振り返り、睨みつけるような鋭い視線を向けた。

「君は彼を傷つけてる。せっかく君を愛してくれてるのに、どうしてひどいことをするの？」

「！」

「オレは彼を傷つけるために、君の頼みを聞いてここまで来たわけじゃない」

ひどいこと――胸にその言葉が突き刺さり、カヤは視線をそらす。唐突に別れを告げてから、会うたびに和幸が見せる苦悶に満ちた表情。それが頭をよぎる。それでも……と、奥歯を噛みしめる。

「彼のためなの」喉から搾り出したような苦しそうな声でつぶやき、カヤはソファをぎゅっと強く握り締めた。「彼に幸せになってほしいから」

「幸せ？」ユリィはいぶかしげな表情を浮かべ、小首を傾げる。「でも彼は今、幸せじゃない。苦しんでる。君が彼を不幸にしてる」

「それは……！」

カヤはユリィに顔を向けると、今にも泣きそうな表情で声を荒らげた。が、ユリィの真っ直ぐな視線と交錯した瞬間、まるでその茶色い瞳に勢いを吸い取られたかのように消沈して肩を落とした。

「ねえ、パンドラ」ユリィは彼女の顔を覗き込み、優しい声で問いかける。「彼の幸せって何？」

その問いに、カヤは押し黙った。目立たない程度に流れているはずのＢＧＭがやたらと大きく聞こえる。

自分を落ち着かせるように深呼吸をして、カヤは目を瞑った。おもむろに右手を動かし、首元に輝くシルバーの十字架を――約束や想いが詰まった贈り物を――握り締める。

「ありきたりでいい。平凡でいい。笑顔が絶えなければそれで十分」

透き通るような声が、小川のせせらぎを連想させるクラシック音楽と重なった。ユリィが「え？」と目をしばたたかせると、カヤはゆっくりと瞼を開く。

口から零れた幸せの定義。それはカヤの心から沸いてきたものではない。記憶から引き出されたものだった。一週間ほど前に彼女が聞き届けた、和幸の父親である藤本マサルの『願い』。

「素敵な女性と結婚して、子供をつくって……三人で仲良く暮らす」

顔を上げたカヤの表情には笑顔が浮かんでいた。鏡で写して彼女にそれを見せたら自覚するだろうか。それがどれほど、切なく痛々しい笑顔か。

「それが彼の幸せ」言って、カヤは十字架から手を離す。もう取り乱す様子もなく、恐ろしいほどに落ち着いていた。「そのために、私はこの世界を残す」

満足したように口を閉じたカヤに、ユリィは表情を曇らせる。そして、「分からない」とぼんやりと漏らした。

カヤは目をぱちくりとさせ、小首を傾げる。カヤにはユリィが「分からない」と口にした理由が分からない。いや、そもそも、何が分からないのかが分からない。ラピスラズリも同じ気持ちなのか、不思議そうに主を見つめていた。

ユリィはしばらく黙り、ゆっくりと慎重に口を開く。そして尋ねた。

「なぜ、君は彼に言わないの？」

「……言う？」ユリィの刺すような視線に、カヤはつい身を引き眉根を寄せる。「何を？」

「君が全てを知ったことだよ」

カヤはハッと目を見開いた。全て――それは、神の『裁き』のこと。自分が世界を滅ぼすために創られた『災いの人形』であるということ。ほんの三日前にユリィに聞かされた過酷な運命。

「そんなにも彼を想っているなら、それを伝えるべきだ」

確信に満ちた熱い口調だった。ユリィの目は大きく開かれ、穢れのない茶色い瞳がカヤの不安げな顔を映し出している。

「マルドゥクに口止めまでして、どうして隠すの？　彼は全部知ってるんだろう？　『裁き』のことも、君の正体も。君がそれを知るよりもずっと前から知ってたんだろう？」

始めからカヤに返事を期待していなかったのか、ユリィは呆然としているカヤに責め立てるように言葉を続ける。より力のこもった口調で。

「だったら、言えばいいじゃないか。彼も君も、もう何も隠す必要はないんだ。なぜ、わざわざ苦しめるようなことをするの？　二人で支えあうことだって……」

「彼はまだ知らない！」

たった今意識を取り戻したかのように、いきなりカヤは大声を張り上げた。ユリィはまさかの反応にあっけにとられて目をぱちくりとさせる。「知らない？」と困惑した表情を浮かべ、助けを求めるようにシャム猫に目で合図した。シャム猫――彼の守護天使は、カヤの表情をちらりと伺ってから、低い声で主に助け舟を出す。

「リスト・マルドゥク様がついた嘘のことでは？」

「マルドゥクの嘘？」

なんだっけ、それ？　とユリィはぽかんと口を開けて天井を振り仰いだ。ラピスラズリはおずおずとカヤの膝からソファに降り立ち、ユリィへと小さな足を進める。

「ほら、ユリィがパンドラさまに全てを明かした折に、マルドゥク

の王はパンドラさまにおっしゃったでしょう」

上品で穏やかな声で囁かれる『思い出話』に、カヤは唇をかみ締めて俯いた。

「マルドゥクがパンドラに言ったこと？」

えーと、とユリィは記憶を掘り出し始める。昨日……一昨日……そして三日前。ユリィはカヤに残酷な真実を突きつけた。全てを聞き、あっけにとられる彼女に、確かに、リスト・マルドゥクはまるで止めを刺すかのように（ユリィも知らなかった）新たな事実を打ち明けた。

「パンドラの恋人が、実は全てを知ってることと――あと、何か言っていたっけ？」

「ほら」ラピスラズリはユリィの膝にぴょんと飛び乗り、憐れむような目でちらりとカヤを見やった。「『テマエの実』のことです」

すると、「ああ、そういえば」とユリィはすっとんきょうな声をあげる。そして瞳と同じ色をした細い眉を器用に動かし、困った表情を浮かべた。

「神の子が嘘をつくなんて、世も末だよね」そこまで言って、ユリィはハッとする。「世も末だから、『裁き』が始まったのか」

「不謹慎な冗談を……！」

ラピスラズリの背中を覆う雪のような白い毛が逆立った。こんなときに、と呆れたような声を出して頭を垂らす。それとほぼ同時に、カヤはおもむろに口を開いた。

「それだけじゃない」

寂しさに満ちた消え入りそうな声だった。ユリィとラピスラズリが振り返ると、カヤは俯いたまま「彼は知らない」と震える声でつぶやく。

「私は……」と、膝の上でしっかりと手を組み合わせ、固く目を閉じる。その姿は、世界の行く末を憂んで祈りを捧げる聖女のよう。だが、この見目麗しい彼女こそ、世界に災いをもたらすべく生まれた少女に他ならない。

「私は、もう『人』じゃない」

少女はか細い声で、だが、はっきりとそう言った。

「パンドラ」ユリィは一瞬にして表情を曇らせる。心配そうな愛猫の視線を感じつつも、カヤをじっと見据えてつぶやく。「ごめん」

その謝罪は、恐ろしい事実を口にさせてしまったことに対してではなかった。発明の末に化け物を創りだしてしまった狂科学者のそれに近いだろう。ユリィはそんなことを考えてカヤをじっと見つめていた。自分の『実験』のせいで、『人』としての最後の証ともいえる権利を失った彼女を。

＊　＊　＊

晴れ晴れとした青空。朝日はその恵みを惜しみなく平等に、地上に生きる全てのものにそそいでいる。息を吸い込むと、冷たい空気が気管を通り肺に入っていく。

今日は昨日のように、冷たい雨がいきなり襲いかかってくること

はない。太陽が皆を光で包み込んでくれる。月が静かに眠りに落ちる街を見守ってくれる。私には分かる。直感的に分かってしまう。昔から、そうだった。

やがて、辺りに一時間目の始業を知らせるチャイムが鳴り響き――私の足元に黒い影が伸びてきた。ゆっくりとコンクリートの地面から顔を上げ、階段室から出てきた人物を見つめる。

「神崎先輩」私の姿を認めるなり、彼は目を見開いた。そして慌てて訂正する。「いや、本間先輩」

もう『先輩』だなんて呼ぶ必要ないのに。私はもう神崎ではない。本間でもない。世界を滅ぼす『災いの人形』――パンドラ。そして彼は、私を殺す使命をもった神の子孫。

「おはよう、リストくん」

予想通り、彼は屋上に来た。一昨日、盗撮写真の騒ぎで私がここに逃げてきたときと同じ。といっても、確信があったわけじゃない。ただ、この高校は隔日で時間割がよく似ている。だから、もしかしたら……と思っただけだ。もしかしたら、水曜日の一時間目も英語で、彼はサボってここに来るかもしれない、と。

「おはようございます」

そうぎこちなく返す彼は、罪の意識に押しつぶされそうな咎人のような表情を浮かべていた。

そういえば、昨日も彼はこんな顔で見守っていた。突然降り出した雨音が響く、生暖かい風が吹き抜ける昇降口。そこで、ユリィさんは全てを私に明かした。私が何者で、どうしてこの世界に現れたのか。それを語るユリィさんの傍らで、彼はずっと心配そうな表情

で佇んでいた。

「約束通り、和幸さんには何も言ってませんから」

聞いてもいないうちに、リストくんはそう報告してきた。確かに、会って最初に確認したいことではあったけど……すっかり、気持ちを読まれてるんだ。そう思うと、なんだか恥ずかしくて苦笑してしまった。

「ありがとう」

もちろん、リストくんを疑っていたわけじゃない。きっと、約束を守ってくれる。和幸くんに黙っていてくれる。そう信じていた。でも、こうしてきちんと確認がとれると安心するものだ。私はほっと肩を撫で下ろした。

「ユリィさんは？」

あえて平静を装って、落ち着いた声で尋ねる。

昨日出会ったもう一人の神の子孫――ユリィ・チェイス。彼の兄、タール・チェイスは、言うなれば私の味方。私と同じ使命を――世界に終焉をもたらす、という呪われた使命を背負っている。ユリィさんは、そんなお兄さんを止めるために、わざわざ海を渡ってトーキョーに来たという。そして、そのユリィさんこそ、私に全てを打ち明けた張本人でもあった。

「オレの部屋で寝てます」そう言ってから、リストくんは小さく首を横に振る。「何も異変はありません。大丈夫です」

そう、と私は安堵のため息をつく。

私――『災いの人形』に、『収穫の日』が過ぎる前に『裁き』について明かすと罰が下る。それは古くから神の一族に伝わる言い伝えらしい。どんな罰かは分からない。命を落とすかもしれない。だから、ユリィさんは命がけだった。命がけで、私に全てを話してくれたんだ。でも……

「ユリィは正しかった」リストくんはおもむろに口を開き、神妙な面持ちでつぶやいた。「言い伝えは嘘だったんだ。神の罰は下らなかった。神の罰は存在しない。何事もなくてよかったけど……正直、戸惑ってます」

彼の言葉に私の胸元がえぐられるように痛んだ。目に見えない傷がうずくように騒ぎ出す。咄嗟にそこを――シャツの第三ボタンの辺りを――握り締めるように押さえ、私はうつむく。

無いはずの傷が私に何かを訴えかけるように痛む。

いえ、違う。有るべき傷だ。ここに有るべき傷が痛んでいるんだ。目には見えないけど、体は覚えてる。痕跡はなくても、もう感じることはないとしても、しっかりと覚えてる。人として得るべき『痛み』という感覚を。

「神の罰は下った」

言いたくないのかもしれない。認めたくないのかもしれない。だからこんなに喉が締め付けられて、声が出てこないんだ。

「はい？」

聞き取れなかったのだろう。リストくんはいぶかしげな表情で遠慮がちにそう聞き返してきた。

私は泣きたいのを必死に堪えていた。もう、涙が出るのか、それ

すら私には分からないけれど。
呼吸を整え、私はゆっくりと顔を上げる。リストくんを真っ直ぐに見つめ、覚悟を決めて打ち明ける。
「ユリィさんじゃなくて、私だったの」
結婚しよう。虹の橋でそう言ってくれた彼の顔が浮かんだ。そして、幻のように消え去っていく。
「神の罰は、私に下った」
リストくんはいきなりの私の告白に反応できずに呆然としている。
「どういうことですか？」と囁くような小さい声で尋ねてきた。
私は新品の制服を見下ろして、力なく微笑んだ。
そして、リストくんに語りだす。昨日、あれから何が起きたのか。ユリィさんとリストくんから真実を聞いたあと、取り乱して外に飛び出した私の身に起きた出来事を。――それから……「別れたい」と和幸くんに告げたことを。

前夜祭　―６―

扉を開け、廊下へ一歩足を踏み出したときだった。

「カヤ」

予想もしなかったその声に、カヤはハッとして振り返る。

声の主は丁度階段を上りきったところだった。廊下の赤い絨毯に片足だけ乗せ、金色に輝く手すりに手を置いた状態でこちらを見ている。さっきまで来ていた黒いベストはなく、ワイシャツに黒いズボンと革靴。それでも様になっているのは、彼が気品ある顔立ちをしているからだろうか。

「和幸くん」とカヤは目を丸くしてあとずさる。が、その背中をユリィが左手で――怪我をしていないほうの手で――止め、さらに部屋から追い出すように押し始めた。

「ユリィ！？」

思わぬユリィの行動に、カヤは仰天して振り返る。必死に足に力を入れるが、華奢な彼女が男――それも二つ年上の――に対抗できるわけはなく、されるがままに部屋から押し出された。その足元をすばやくシャム猫がすりぬける。ユリィはそれを確認し、カヤに続くように何食わぬ顔で部屋から出て扉を閉めた。

カヤは廊下に出てくるなりすぐさま俯き、赤い絨毯に視線を落とす。和幸が近づいてくる気配を感じたのだ。

「話がしたい」

彼の真剣な声がすぐ近くから聞こえてきた。きっと、すぐ傍に――手の届くところにいるのだろう。
胸が締め付けられ、緊張で息が荒くなる。また、彼を傷つけるようなことを言わなきゃいけない。それがつらい。でも、彼の幸せを思えば……
カヤは覚悟を決めて顔を上げ、和幸を厳しい視線で見つめた。

「話すことはなにもない。何度も言わせないで」
「ああ」和幸は冷たくも思えるような、真剣な表情で答える。「これで最後だ」
「！」

最後――その言葉に、カヤは目をむいた。胸に激痛が走る。
今までの和幸とは違う。どれだけひどいことを言おうと、しつこいくらいに食い下がってきたというのに……。彼もやっと諦める決意をしてくれたのだろうか。そう思うと、安堵すべきなのに……果てしない絶望と孤独に襲われた。だめよ、とカヤは自分を諌める。これでいいはずだ。これこそ、待ち望んでいた展開ではないか。彼が自分から離れ、全てを忘れ、もっとふさわしい女性と出会って幸せな家庭を築く。そのために、この身を犠牲にしてでも世界を守ろう。そう思ったのではなかったか。なのに、なぜショックを受けている？　なぜ、彼にすがりついて「全部嘘だから」と泣き叫びたい気持ちにかられている？
今、口を開けば、言葉が暴走する。封じ込めていた気持ちが言霊となってあふれ出してしまう。これまで必死に堪えてきたというのに――全てが水の泡になる。カヤは口を固く結んで心の荒波が収まるのを待った。
その様は、しかし、和幸からすれば、反抗的に黙りこくっているようにしか見えない。和幸はカヤを切なげに見つめ、ひっそりとため息を漏らす。そして彼女の傍らに佇む茶髪の少年に一瞥をくれた。

「借りるな」

低い声でぽつりとそう言い、和幸はカヤの腕をつかんで歩き出す。突然引っ張られ、カヤは転びそうになりながらも足をばたつかせてなんとか体制を立て直す。「ちょっと、和幸くん」と頼りない声を漏らすが、彼がどんな性格は分かっている。こう熱くなってしまった彼は、なんとわめこうが止まらないだろう。カヤは不安げな表情を浮かべつつも、諦めたように唇を閉じて和幸に掴まれている腕の力を抜いた。――そのときだった。

「待って！」

それまで大人しかったユリィがいきなり声を張り上げた。

さすがに驚いて和幸は足を止め、弾かれたように振り返る。カヤも、聞いたことのないユリィの怒鳴り声に目を丸くして上半身をひねった。

追いかけてくる様子はなく、ユリィはただ直立不動で佇み、和幸を真剣な表情で見つめている。そして、その薄い唇がいつも以上に大きく開かれ、

「君の幸せって、何？」

ユリィを知っている者なら、そのはきはきとした口調にあっけにとられていたことだろう。いつものらりくらりとしている彼にしては珍しく、歯切れのある言葉だった。

「は？」

和幸は訝しそうに眉をひそめ、ユリィを睨みつける。ユリィの視

線から、自分に問いかけていることは明らか。が、ろくに知りもしない人間にするような質問ではないだろう。いきなり、何言い出したんだ？　と和幸は気味悪くも感じた。

「君の幸せが何か、教えてほしいんだ」

ユリィは落ち着いた声で再度丁寧に質問を繰り返す。

不快そうに顔をしかめる和幸の隣で、カヤは呆然としていた。ユリィの質問には聞き覚えがあった。何を隠そう、自分も同じ質問をユリィにされたのだ。ついさっき、休憩室の中で。

――ねぇ、パンドラ。彼の幸せって何？

そして、ちゃんと覚えている。そのとき、自分はきちんと答えたはずだ。なのに、なぜこうして本人に同じ質問をしているのだろうか。答え合わせのつもりだろうか。

「俺の幸せ？」ふと、貝のように閉じられていた和幸の口が開き、苛立ったような声が出た。「お前に関係ねぇだろ」

ユリィは「え」と、まるで意外そうに目をむいてきょとんとした。どうやら、回答を拒否されるとは思ってもいなかったようだ。誰が知らない奴に、自分の幸せを語るんだよ――和幸は呆れたように首を横に振り、踵を返して歩き出す。

「あ」

和幸に急に腕を引っ張られ、カヤは力の抜けた声を漏らす。乱暴な足取りの彼に、半ば小走りになりながらもついていく。いや、引きずられていく。後ろ髪をひかれるように何度もユリィに振り返り

ながら、和幸とともに角を曲がって姿を消した。

＊　＊　＊

和幸は扉を勢いよく蹴り飛ばし、鍵ごと壊して中に入った。「ここ、なに？」と戸惑うカヤの声を無視して、部屋の奥へと突き進む。その背後で、やや「く」の字に曲がったドアがぎこちなく閉じていく。が、変形した扉がドア枠にうまくはまるはずもなく、完全に閉じることは無かった。窓もなく、電気もつけていない暗い部屋で、その隙間から漏れる光だけが頼りだ。

縦長の六畳ほどの狭い部屋。辺りを見回すと、掃除用具とねずみ色のつなぎ（おそらく清掃係用だと思われる）が木製の棚にびっしりと敷き詰められている。倉庫？　と、カヤは眉をひそめる。

部屋の奥にたどり着き、和幸はやっとカヤの腕から手を離した。そして、くるりとこちらに体を向け、いきなり問いかける。

「脅されてるわけじゃないんだな」

「え？」質問の意味が分からず、カヤは目を瞬かせた。「何の話？」

「てっきり、あの男に弱みを握られて……仕方なく、俺と別れたんだと思ってたんだ。お前の意思じゃなく、全部、無理やりさせられてることなんだ、て信じてた」

あの男とは、ユリィのことだろう。そんな風に思っていたのか。カヤは思わぬ事実を知って目を見開いた。そして哀しげに柳眉を寄せる。彼のことだ。さぞやひどく心配していたに違いない。それで、いきなりユリィに殴りかかったのか。また、自分を守ろうとしてくれたんだ――カヤは罪悪感と、そんな彼の愛を受け入れられない苦しさに唇を噛み締めた。

「そういうんじゃないの」せめて、安心させなきゃいけない。カヤ

は微笑を浮かべて和幸を見上げた。「ユリィはいい人だよ」
「ああ、そうみたいだな」

間髪入れずに返ってきたのは、和幸とは思えないほど冷たい声だった。カヤはゾクッと悪寒が走るのを感じた。思わずあとずさると、背中に棚が当たる。驚いて反射的に振り返ったカヤの目の前に、唐突に何かが伸びてきて視界を遮った。それが和幸の腕だと気付き、「え」と声を漏らす。

後ろは棚。右は壁。そして左は――棚を押さえるように伸びた和幸の腕にふさがれている。逃げ場は無い。和幸はここでケリをつけるつもりなんだ。カヤは震える手を胸元に伸ばして十字架を握り締めた。

「これが最後だ」和幸は真剣な表情で脅すような声で告げる。「もう一度だけ聞く」

カヤは動揺していることを悟られないように呼吸を整え、顔を前に向きなおす。毅然とした表情をなんとかつくり、ゆっくりと顔を上げ――そして、目に飛び込んできた彼の表情に息を呑んだ。和幸が別人のようだった。そこにあったのは腹をくくった男の顔。眉間に若干皺をつくり、殺気さえも感じさせる鋭い眼光を瞳に宿らせている。和幸というよりも、正義に近い表情。カヤはそんな印象を受けた。

十字架を握り締める手に力がこもる。

その瞬間、彼に怯えている自分に気付いて、カヤは強い自己嫌悪に襲われた。いつも真面目で優しくて、自分を何よりも大事に思ってくれる彼。つい三日前まで、未来を共にすると信じていた愛する人。運命の人と心に決めた男。そんな彼が、見知らぬ人間のような雰囲気を放って目の前に立ちはだかっている。何を隠そう、彼をそこまで変えてしまったのは自分だ。こんな表情をさせているのは自

分に他ならない。全て自分が引き起こしていることだ。怯える資格なんてない。
ギシッと木がきしむ音が耳元でした。棚にかけている彼の手に力が入ったのだ。そして、押し殺したような低い声がつぶやかれる。
「本気で、俺と別れたいのか？」
カヤはおもむろに十字架から手を離し、真っ直ぐに和幸の瞳を見つめる。今度ばかりは、どれだけ胸が痛もうと、目をそらすわけにはいかないと思った。それが自分にできるせめてもの責任だと思った。
カヤはすうっと息を吸い、睨みつけるように見つめて答える。
「私たちはつりあわないし、私はユリィのこと――」
「いい加減にしろ！」
言い終わらぬうちに、和幸は怒号をあげた。カヤは思わずびくっと体を震わせ、眉根を寄せる。
「もうたくさんだ」
「たくさんって……」和幸の迫力に気圧され、カヤの声は消え入った。
和幸は腰をかがめ、カヤに顔を近づける。今にもうめき声を上げそうな苦悶の表情だ。体中の痛みを堪えているかのようにさせ見える。カヤはそんな顔で見つめられ、口を噤んだ。
「好きな人ができた？　つりあわない？　ふさわしくない？　逃げてるだけだろ！」

耳元でする棚の軋む音が激しくなっている。和幸がまた力のコントロールを失っているのだ。――カヤの心に不安がたちこめ、「和幸くん」となだめるように呼びかける。が、その声が今の和幸に届くはずもなく、彼は鼻で笑って視線をそらした。

「俺も人のこと言えねぇな」吐き捨てるようにそう言って、呆れたような笑みを浮かべる。「葵の言っていた意味、やっと分かった」

「葵？」

聞き覚えのある名前に、カヤはつい声に出して鸚鵡返しをしていた。

だが、どうやらそれは独り言だったようで、和幸は特に説明する様子もなく、また熱い視線をカヤに戻すと力強い口調で言う。

「本気で別れたいなら、ちゃんと言え」

「言うって……何を？」

「俺のことが嫌いになった。二度と会いたくない。そう言え」

その言葉に、カヤはぎょっと目を見開いた。何も言葉がでない。言いようの無い複雑な感情が、戸惑いとともに心の中で暗雲となって立ち込めている。強い覚悟も決意も覆い隠してしまうかのような分厚い雲だ。

「和幸くん……」やっと出てきたのは、そんな弱々しい声だった。

「そしたら、目の前から消えてやる。二度と現れない。約束する」

カヤの喉が焼けるように熱くなっていった。水分が全て蒸発してしまったみたいだ。カラカラになった喉からは声は出そうに無い。

「それくらいじゃなきゃ、俺はお前を諦められない」

つっかえ棒のように棚に押さえつけている手にぐっと力がはいる。今にも尋常でない握力で壊してしまいそうだ。和幸はなんとか力を制御してそれを防いでいた。だが、そんな理性が吹っ飛ぶのも時間の問題のように思えた。――それほど、苦しかった。

「カヤ」救いを求めるような瞳でカヤを見つめ、かすれた声を出す。

「なんで俺はお前を困らせてる？」

ハッと目を見開くカヤに和幸は「頼む」と懇願する。

「聞きたいことは他にもある。分からないことだらけだ。でも、どうでもいい。とにかく、俺が今聞きたいのは……お前の気持ちなんだ。お前が俺をどう思ってるのか。俺にとって重要なのはそれなんだ」

カヤは今にも泣きそうな表情で俯いた。その間も、和幸はまくし立てるように言葉を続ける。

「フるならちゃんとフッてくれ。俺のことを嫌いになった。顔も見たくない。目の前から消えてほしい。ちゃんとそう言ってくれ！」

ここまで彼が早口で話したことがあっただろうか。彼自身にもそんな覚えはないだろう。一気に言い切って、和幸は若干だが息を切らせていた。カヤの答えを待つ間、夢中で忘れていた緊張が戻ってくる。

時計もないのに秒針の音が聞こえてくるようだ。静まり返る小さな倉庫に、二人の息遣いだけが響いていた。

そして、すうっとカヤが息を吸う音が聞こえた。和幸はごくりと生唾を飲み込み、カヤの唇を見つめた。そこから出てくる言葉に、

儚い望みを抱いて。

「私は……」カヤはおかしなリズムで呼吸をしながら、おもむろに顔を上げる。和幸を充血した瞳で見つめ、震える唇を動かした。「もう会いたくない」

和幸は心臓に激痛が走るのを感じた。聞きたくない言葉だった。聞くことになるとは思っていなかった言葉だった。心のどこかで、「そんなわけはない」と高をくくっていたのかもしれない。

カヤは呆然とする和幸を見詰めながら、「もう」と掠れた声を出す。

「あなたを愛せません」

「！」

いきなり口の中に手をつっこまれて心臓を鷲掴みにされた――そんな気分だった。

和幸は大きく息を吐き、カヤの行く手を阻んでいた腕を下ろす。力の抜けた体は、まるでため息とともに魂がぬけたかのようだ。

「そうか」

和幸は視線を落としてそう答えた。それが、今できる精一杯の返事だった。

「……」

カヤはそんな和幸を見つめ、激しい焦燥感にかられていた。これでいい、よく言った。そう慰めている自分と……今ならまだ間に合う、と必死に訴えている自分がいる。せっかく守り抜いてきた強固

な決意を蹴り飛ばし、声を大にして叫んでいる自分がいるのだ。
今ならまだ……彼に手が届く。今なら、まだ間に合う。心の声は何度も何度もそう訴えている。――耳を貸しては駄目だ。そう強く思っても、愕然として立ち尽くしている彼を見ていると、居ても立ってもいられなくなる。抱きしめたい。「愛している」と叫びたい。決意の陰に隠した彼への想いを引きずり出したい。自分の本当の気持ちを伝えたい。
今なら出来る。手を伸ばせば、彼に触れられる。まだ、彼に届く。
今ならまだ……幾度も繰り返される悲鳴に近い声。まるでそれに思考を乗っ取られたかのように、カヤは我を失いかけていた。欲望が絶望を飲み込もうとしていた。愛が理性に打ち勝とうとしていた。呼吸が荒くなり、体が勝手に動き出す。

「か……ず……」

それは空気が気管を通る音か、掠れた声なのか。判別できないほどの弱い声だった。打ちひしがれ、頭をかかえてうつむく彼に、そんな小さな声が聞こえるわけもない。彼はぴくりともしなかった。
たまらず、カヤは和幸のもとへ踏み出そうと、ほんの少しだけ踵を床から離し――そしてぴたりと止まった。
いきなり、扉が勢いよく開かれ、部屋が明るくなったのだ。

「！？」

和幸とカヤは同時に振り返り、突如現れた人影に眉をひそめた。
廊下の光を背にしているため、はっきりと顔は確認できないが、シルエットから女であることは分かった。それも、ずいぶん華奢な体つきの女――いや、少女かもしれない。腰までまっすぐに伸びる茶色に近い黒髪。ゆらりとふらつく長い足。だらんと垂れ下がる細い腕。その左手首にはブレスレットのような輪がかかっている。簡

単に折れてしまいそうな首元には、何かキラリと輝くもの。おそらく、ペンダントだろう。膝を隠すかどうかの短めのドレスはぴたりと体に張り付いて、その不健康にも見える細い姿態を強調している。

人影は、がたんと音を立てて扉に倒れ掛かった。苦しそうに顔を上げると、それまで逆光で見えなかった秀麗な顔立ちがあらわになる。肩まである前髪を真ん中でわけ、ひろい額をさらけだしている。そのせいで太い眉毛が余計に際立って、彼女の整った顔立ちにあどけなさを添えている。うつろな瞳は灰色がかった緑色。すっきりと真っ直ぐに伸びた鼻は小さくて愛らしい。なにより、青白くさえ見える肌の色は艶かしくも見える。

ペンダントは光を反射し、青く輝いている。サファイアのようにも見えるが、遠くからでは本物かは判別できない。ドレスはその色に合わせたような濃い青だ。

和幸は突然飛び込んできた少女に目を奪われていた。もちろん、彼女の妖精のような妖しげな魅力も原因の一つだが、それ以上に、言い知れぬ懐かしさを感じていた。彼女を昔から知っているような気がしてならない。見たことがある。彼女を目にして沸き起こったのは、疎遠になった幼馴染にばったり出くわしたような感覚だった。それも、とても大切な。

一方で、カヤは和幸とは違う理由で少女に目を釘付けにしていた。彼女の肢体に斑点のようなものが広がっていることに気付いたのだ。体調も悪そうだし、病気だろうか。そう思って目を凝らし、そしてはっと息を呑んだ。

「……アザ？」

和幸が「え？」と我に返ってカヤに振り返った――丁度そのとき、少女は震えながら薄桃色の唇を動かした。

「……助けて」

今にも消えてしまいそうなか細い声だった。

行かないで

助けて……て、どういうこと？　この人、一体誰？　体中のアザはなに？　それに……と、私はドアにもたれかかっている女性の左手首に目をやる。そこには銀色に光る輪がかけられていた。てっきり、ブレスレットかと思っていたけど、違う。しっかりと目を凝らせばすぐに分かる。途中で断ち切られたような鎖が垂れるそれは――手錠。

今にも倒れそうなほどフラついてるし、恐怖に怯えた表情は尋常じゃない。事情はさっぱり分からないけど……助けを求めているのは確かだ。放ってはおけない。私はたまらなくなって、彼女に駆け寄ろうと一歩足を踏み出した。

そのときだった。

「まさか」と、隣から震えた声が聞こえて私は動きを止めた。振り返れば、和幸くんが深刻な表情を浮かべている。緊張しているのだろうか、額には汗がにじんでいた。

「和幸くん？」

心配になってそう声をかけるが、彼の耳には届いていないらしい。和幸くんは私に見向きもせずに、じりじりと女性に歩み寄りながら尋ねる。

「お前、地下から逃げてきたのか？」

その瞬間、女性は瞼をこれでもかというくらい開き、薄い緑色の瞳を小刻みに震わせた。「いや」という消え入りそうな声を漏らして、扉に背中をなすりつけながら後退さる。白い肌に青みが帯びて、

怯えているのは一目瞭然だった。それも、その恐怖が宿った瞳は和幸くんに向けられている。
地下……て、何のことだろう。
「そうなんだな」
その口調は質問というよりは確認に近かった。女性の反応で和幸くんは何かを確信したようだ。彼女を驚かさないように、との考慮なのか、彼は月面でも歩くかのようにゆっくりと女性に近寄る。
「オークションから逃げてきたんだな」
オークション！？　突然、彼の口から飛び出したその単語に、私はぎょっとして目をむいた。すぐさま彼の背中から彼女へと視線を移す。
しなやかな肢体に広がる真新しいアザ。細い手首をしめつけている銀色の手錠。今にも悲鳴をあげそうなほど恐怖にゆがんだ表情。そして……元カインである和幸くんの、この反応。
もし、私の予想があっているとしたら――嫌な予感が全身をかけめぐった。よからぬことが起こる。恐ろしい未来が近づいてくる。そんな足音が聞こえてくるようだった。
「嫌」と、女性は首を横に振って後ずさりを続ける。和幸くんはその様子に、近寄る足を止めて落ち着かせるように両手の平を見せた。
「大丈夫だ。俺は……」
「あなたも奴らの仲間！」
あまりの恐怖に聞く耳をもっていないようだ。女性はひどくパニックを起こしている。

「違う！」すかさず、和幸くんは否定の声をあげた。「俺は……」
「来ないで！」

甲高い声が辺りに響き、彼女はすばやく身を翻して部屋から出て行った。押さえていた彼女がいなくなり、変形したドアがゆっくりと閉まっていく。

「待て！」和幸くんは条件反射のように叫び、走り出そうとした。

でも、彼は立ち止まった。ううん。立ち止まらざるを得なかった。彼はおもむろに振り返り、

「カヤ？」

私は思わず、彼の腕を掴んでいた。

静まり返った部屋。ドア枠にはまらずに隙間を残して閉じた扉から光が零れている。ゆっくりと顔を上げても、そのせいで――逆光で――彼の表情は伺えなかった。それでも想像は出来る。きっと彼はいぶかしげな表情を浮かべているに違いない。

私はぎゅっと彼の腕を掴む手に力をいれ、ぽつりとこぼす。

「行かないで」

ぴくりと彼の体が動いたのを感じた。

「行かないでって……」戸惑っているのがはっきりと声色から分かる。「さっきと言ってることが違うだろ」

反論の余地もない。その通りだ。ついさっき、「もう会いたくない」と言ったばかり。その舌の根も乾かぬうちに、今度は「行かな

いで」。和幸くんが困惑するのも最もだ。分かってる。矛盾してるよね。そんなの、分かってる！　でも、矛盾して当然なんだよ。さっき言ったことは、全部嘘だもの。真実を――本当の気持ちを伝えても、彼を苦しめるだけだから。私たちに未来は無いって分かってて、「愛してる」なんて伝えられない。世界か私か……彼にそんな選択肢を与えるわけにはいかない。――でも違うの。そういうことじゃない。今はそういう問題じゃないの。

彼を引き止めたのは、別の理由。

「いいか、カヤ」和幸くんはそんな焦りと苛立ちが混じった声を出した。「この建物の地下で闇オークションが行われてる。放っとけばあの女は今夜、競りにかけられる！　もし、俺が『迎え』に行かなければ……」

「和幸くんはもうカインじゃない！」

暗がりに目が慣れたらしく、和幸くんがハッとしたのが分かった。

「『迎え』に行くのはカインの役目。和幸くんじゃない」

頭に何度も繰り返されているのは、曽良くんの言葉だった。

――かっちゃんを……俺たちの大事な兄弟を、よろしくね。

誓ったんだ。私はこの人を新しい世界で守る、て。たとえ、もう恋人でないとしても、みすみす彼を日陰に戻したりはしない。

だめなの。彼はここに居なきゃだめ。彼は日向の世界で幸せな家庭を築く。そのために私はこの世界を残すの。

「曽良くんも言ってたじゃない。中途半端が一番良くない、て。一般人らしく生きなきゃだめだ、て。あとは、カインの皆に任せるべ

きだよ！」
「……」
「だから、行っちゃダメ」すがるような声でそう言って、彼の腕をくいっと引っ張る。「行かないで」

願うようにうつむいて、私は固く目を閉じた。
喉が痛いほどに乾いている。緊張、不安、恐怖。全てが一気に襲い掛かってくる。あの女性への罪悪感と一緒に。
彼を引き止めるということは、助けを求めてきた彼女を見捨てるということ。あの様子だと「奴ら」に追いかけられているに違いない。どこかに繋がれていた手錠をどうにか断ち切って、必死に逃げてきたんだ。以前、和幸くんは話していたもの。闇オークションで売られたクローンはろくな目にあわない、て。もちろん、彼女がクローンかどうかは分からないけど……。たとえクローンで無いとしても同じだろう。もし、また捕まってオークションで売られたら、彼女に待っているのは恐ろしい未来だけ。
でも、もしかしたら、誰か別のカインが『迎え』に来るかもしれない。カインを辞めた和幸くんが今、危険を冒して行動を起こすことも無い。――そんな調子のいいことを考えて、正当化しようとしていた。他人を見捨て、愛する人を選択することを。

「カインノイエは今、休止中だ。誰も『迎え』には来ない」
「！」

和幸くんは落ち着いた口調で私の儚い希望をあっさりと斬り捨てた。胸がキリキリと締め付けられる。休止中？　誰も『迎え』に来ない？　ってことは……じゃあ、和幸くんがあの人を『迎え』に行かなければ、誰も彼女を助けてくれない？
「カヤ」と温かみのある声がした。彼の声色にいつもの心地よい優

しさが戻っていて、それが余計に私の心を苦しめる。呼びかけられても、顔を上げることは出来なかった。和幸くんはそれでもかまわず続ける。「お前がもう俺を必要としていないなら……」

ざわっと胸騒ぎがした。嫌だ……それ以上、言わないで。咄嗟に顔を上げ、「和幸くん」と止めようとしたときだった。彼はさらりと言い切ってしまった。

「日向(こっち)にはもう俺の居場所はない。だから、帰るだけだ。ふさわしい場所に」

行く末を悟ったような、大人びた笑顔がそこにあった。私は言葉を失って、呆然と見つめていた。

嫌だ。違う。そんなつもりじゃなかった。だめ。行っちゃだめ。あっちに戻らないで。

心の中では洪水のように言葉が溢れるのに、どれも声にはならなかった。パニックになっていた。どう言ったらいいのか全然分からなかった。

「愛してる」と言えば全て解決するのかもしれない。恋人としての私の言葉なら、彼は聞き入れてくれる気がした。でも、どうしても言えない。言いたいけど、できないよ。今はよくても、いつか……彼を苦しめることになるもの。この場しのぎで恋人に戻るなんて、彼を罠にはめるみたいで嫌だ。

でも、止めなきゃ。なんとかして彼を止めなきゃ。どうやって彼を止めればいいの？　なんて言って止めればいいの？

途方にくれている私を彼は熱い眼差しで見つめ、体をこちらにくるりと向けてきた。そして、おもむろに両腕を私の首元に伸ばしてくる。抱きしめられる――そう思って、私は力なく彼の腕から手を離した。

でも、彼は私を抱きしめはしなかった。首元に回ってきた両手は

私の肌に触れることも無く、うなじのあたりで何かをいじってすぐに引っ込んだ。何だったんだろうか、と訝しげに彼を見つめていると、

「これ、もらってく」

そう言って私の目の前にかざしたのは、銀色の光を放つ十字架。ハッとして胸元に手を置くと、そこには無かった。曽良くんからもらったネックレスが。

「え」と戸惑いの声をあげる私をよそに、彼は器用にそれを自分で首につける。

「カインのお守りなんだろ？」

ついさっきまで私の首にかけてあった十字架が、目の前にあった。いたずらっぽく笑む和幸くんの胸元で鈍い輝きを放っている。

何も言葉が出てこなかった。彼の落ち着いた声、優しげな笑顔、迷いの無い瞳。悟ってしまった。もう彼を止める術はない、て。私は彼に決意させてしまったんだ。カインに戻ることを。再び、日の当たらない暗い世界に身を沈めることを。

和幸くんはしばらく黙って私を見つめていた。まるで瞳に焼き付けるかのように、じっと。

そして、おもむろに口を開く。きりっと表情を引き締めて。

「約束通り、二度とお前の前には現れない。これでお別れだ」

「……」

はっきりと言い放たれた言葉は、私の心をばっさりと切り裂いた。頭が真っ白になった。体中に鳥肌が立つのを感じた。そして、どこからともなく声が聞こえてきた。悲痛な叫び声。こんな別れ方は嫌

だ、と子供みたいに泣き叫んでいる。
彼の胸元の十字架が跳ねるように揺れたのが目に飛び込んできた。気付けば、彼は踵を返し、私に背を向けていた。「待って」とやっと出てきた声は、弱々しくて、勢いよく扉を開く彼を止めることは出来なかった。

「待って」

やっと足が動いて踏み出した一歩は小さすぎて、外に飛び出す彼に追いつけるはずはなかった。

「待って、和幸くん！」

そう叫んだ私の声は、重い扉の向こうに姿を消した彼に届くことは無かった。
ぽつんと残され、私は立ち尽くした。漠然とした恐怖に襲われ、足がすくんだ。体中が震えだし、私は自分の身を抱くように小さくなった。
嫌な予感がする。私はとてつもなく大きな間違いを犯した。そんな気がして仕方が無い。震えながら、じっと彼が出て行った扉を見つめる。

「行かないで」

私は……この夜を、永遠に後悔するような気がしていた。

＊　＊　＊

倉庫から飛び出し、和幸は目に飛び込んできた人物に足を止めた。部屋の斜め前で、壁を背もたれにしてあぐらをかいている少年。そ

の膝の上には綿毛のようなふわふわとした毛並みの美しいシャム猫。

「話は終わった？」と微笑んで彼は立ち上がった。猫はまるで追い出されたかのように慌てて膝から飛び降りる。

和幸は彼に対峙し、「ああ」と切ない声を漏らした。「終わった」

「そう。それはよかった」

それ以上は何も言わずに頬をゆるめて立っている少年に、和幸は居心地悪そうな表情を浮かべてつぶやく。

「ユリィ……とかいったな」

「うん？」

「殴って悪かった」

真っ直ぐに自分を見つめてそう謝る彼に、ユリィは目を丸くする。まさか謝罪を受けるとは夢にも思っていなかった。そもそも、ユリィにとっては殴られたこと自体どうでもいいことだった。こうして話題に出さなければ、おそらく彼は忘れていたことだろう。

「気にしないで」ユリィは朗らかな笑顔でそう答える。こういう人間がいるから味方したくなるんだ、とラピスラズリに心の声で話しかけながら。「大したことないから」

それに、マルドゥクに頼めば怪我なんて一瞬で治るし。ユリィは言葉に出さずに自分の中でそう付け足した。

和幸は安堵したように微笑を浮かべ、「それで……」とあたりを見回した。

「蒼いドレスを着た女、出てきただろ？　どっち行った？」
「蒼いドレスの女？」

そういえば……と、ユリィは天井を振り仰ぐ。確かに、アザだらけの妙な女が和幸とカヤが居た部屋に飛び込んで、そしてすぐに出て行った。何やらもめていたようだが、ユリィは気にしていなかった。部屋を間違えただけだろう、と心配するラピスラズリをなだめたものだ。

「あっち行ったけど」とユリィは右を指差した。「どうかしたの？」

ユリィの指差すほうを見つめ、和幸は腰に手をあてがった。しばらく何やら考えてから、顎をひいてぼそっとつぶやく。

「フィレンツェ、東側の庭を抜けて外に逃がす」
「は？」

急に独り言？　いや、それにしては声が大きすぎる。が、自分に話しかけたにしては意味不明の台詞だ。ユリィはきょとんとして首を傾げた。

そんなユリィに気付いて、和幸はごまかすように微笑み、胸元に光る銀色の十字架を掴んでユリィのほうへ向ける。

「お祈り」
「……お祈り？」
「悪いんだけど」ユリィに質問する暇を与えないかのように、間髪いれずに和幸はそう切り出した。「すぐにカヤを家に連れ帰ってほしい」

いきなり神に祈りを捧げたかと思えば、今度は自分にお願い事か。

忙しい人だな、とユリィは目を瞬かせる。

「家に？　どうして？」

「ちょっと……な。まあ、念のためだ」

和幸はそっぽをむいて苦笑を浮かべた。念のため？　何に備えてのことだ？　気にはなるが、これ以上詮索されたくはなさそうだ。無理やり人を問い詰める趣味はない。ユリィはとりあえず頷いた。

ただ、一つだけ聞いておきたいことがあった。ユリィはくりっとした茶色い瞳で和幸を見つめると、「ところで」と低い声で切り出す。

「彼女とはどうなっ――」

「いろいろ、あるとは思うけど……あいつのこと、頼むな」

「！」

和幸はユリィの言葉を遮って、さらりと告げた。睨むような真剣な眼差しがこちらに向けられている。脅されているような気さえした。

そんな彼の言動に、ユリィは、まさか……と眉をひそめる。ここにきて、和幸の「終わった」という言葉の真意を悟った。そうか。結局、そっちの方向で話がついてしまったのか。ユリィはなんとも言えない無力感に襲われた。

「たとえ何が起ころうと、あいつを幸せにしてやってくれ」

「……」

「頼む」

力強い声で言われ、ユリィは顔をしかめた。軽はずみに「分かった」と言うことは憚られた。これからパンドラを幸せにできるかど

うか、なんてユリィには分からない。少なくとも、和幸が想像しているようなことにはならないだろう。彼女に恋慕の情など抱いていないのだから。そう、婚約者として彼の前に現れたときから、自分は彼を騙し続けている。これ以上嘘をつきたくはなかった。
ユリィが押し黙っていると、和幸は恥ずかしそうに視線をそらして頭をかいた。

「俺の幸せは……」唐突にそう切り出し、ちらりとさっきまでこもっていた倉庫に目をやる。「あいつが幸せになることだ」
「！」

それは間違いなく、先刻ユリィが彼に投げかけた質問の答えだった。「お前には関係ねぇだろ」と一度は一蹴された問いへの回答。
思わぬことにユリィが唖然としていると、和幸は視線を戻して「だから」と念を押すように語調を強めて言った。

「頼む」

その言葉を聞いたのはこれで何度目だろうか。ここまで言われては、無視するわけにもいかない。とりあえず、ユリィは小さく頷くことにした。
それを見届け、和幸は安堵したような、悔しそうな、複雑な笑顔を浮かべた。そして、不意に何かを思い出したかのようにハッとして、「それと……」と言いづらそうに顔をゆがめた。
「変に聞こえるだろうけど……あいつに、林檎は食べさせないでくれ」

林檎――その単語を耳にした瞬間、ユリィは目を見開いた。その足元で、自分が猫のフリをしているのも忘れ、ラピスラズリもあか

らさまにショックを受けた表情を浮かべる。青い瞳に憐れみの色を浮かべて、少年をどこか申し訳なさそうに見上げた。
ユリィとその天使には分かっていた。和幸の言う『林檎』が真に意味する物を。

「アレルギー！」そうとは知らず、またも言葉を失っているユリィに、和幸は声を裏返していきなりそう叫んだ。「林檎アレルギーで……」

必死になってそれらしい理由をつけようとしている。それも、みっともないほどに下手な嘘だ。ユリィはそんな彼を直視することができなかった。ぎゅっと拳を握り締め、心の中でくすぶる熱い炎を抑え込む。ユリィはひどく憤慨していた。この真っ直ぐな少年に偽りの希望を与えたマルドゥクに対して。
だが、カヤが彼を遠ざけることを選んだ以上、ここで自分に出来ることは何も無い。真実を彼に伝えるかどうか。それもまた、彼女の選択であるべきだ。ユリィはそう決めていた。
だから、せめて……彼が安心できるように、彼の求める言葉を与えてやろう。ユリィは不安げな和幸を見つめると、しっかりとした口調で答える。

「大丈夫。彼女を林檎には近づかせない」

その言葉に安心したようで、和幸は肩を撫で下ろし「頼む」と最後に残して走り去っていった。蒼いドレスの女を追いかけるように、ユリィが指差した方向へ。
角を曲がり、その姿が見えなくなるまで、ユリィは彼の後姿を見つめていた。なんともいえない憤りに胸を焼かれながら。

「違う」心配そうな天使の視線を感じながら、ユリィはぼやくよう

にそう漏らす。「こんなことのために、オレは命を懸けようとしたんじゃない」

幸せの定義

私、一体何をしたんだろう。どうして、こんなことになっちゃったの？　私はただ、彼を巻き込みたくなかっただけ。これ以上、苦しめたくなかっただけ。幸せになってほしかっただけなのに。

喉が痛い。締め付けられる。息が……出来ない。

「和幸くん……」

祈るように目をつぶってその名を呼んだ。戻ってきてくれるんじゃないか……そんな一抹の期待を胸に抱いて。

すると、それに答えるように部屋の中に光が差し込んできた。私の心のように歪んでしまった扉がゆっくりと開いていく。

「和幸くん？」

麻痺したように動かなかった体がぴくりと動き、私はふらりと足を一歩前に出した。

想いが届いた？　考え直してくれた？　そのとき私の体を動かしていたのは、夢見る子供のような幼稚な期待だった。

開いた扉の向こうで、光を背にして立っている人影。それを彼だと確認する時間さえもったいなく思えて、私はかまわず駆け寄って抱きついていた。

ぎゅっと彼の背中をつかんで、目をつぶる。

でも、その体に触れて……その胸に頬を寄せて、すぐに違和感に気付いた。安心感がない。心が温まらない。それに――ゆっくりと目を開けば、華奢にも思えるほど白く細い腕が視界に入ってきた。その先――右手の平は赤く染まっていて、キラキラと光る欠片が見える。そして足元に、ふわりと柔らかい羽毛が触れたような感触が

した。ハッとして視線を落とすと、まるで人間のような哀しげな瞳をこちらに向けている猫。
まだ夢を見ていたかった。扉を開けてくれたのは和幸くんで、彼が私を迎えに来てくれた。そんな自分勝手で有り得るはずもない空想にもう少しだけでも浸っていたかった。でも、瞼を開けば、必ず現実が待っている。そして……こうして現実と目が合ってしまった以上、もう逃げることは出来ない。

「和幸くん！」と叫ぶはずだった唇からは、落胆の声が漏れる。「ユリィ……」

おもむろに私は彼から体を離し、「ごめんなさい」と弱々しい声で謝った。
ユリィは特に反応する様子もなく、相変わらずぼんやりとした眼差しで私を見つめている。そして、薄い唇がわずかに動き、ねぼけたような声で彼は告げた。

「帰るよ、パンドラ」
「え？」

帰る？　いきなり言われて不意に後退さった。足元で慌ててラピスラズリが踏まれないように避けたのを感じた。

「さっき、君の恋人に頼まれたんだ」言って、ユリィは私の右手首をとる。「すぐに君を家に連れ帰ってくれ、て。これ以上彼に嘘つくのは嫌だから、引きずってでも連れ帰る」

私の恋人って……和幸くん！？

「彼に会ったの？」開けたばかりの間合いを詰めて、私はユリィに

迫った。「他に、なにか……言ってた？」

私の問いに、珍しくユリィは渋い表情を浮かべ、不機嫌そうに口をすぼめた。

「君のことを頼む、て。幸せにしてやってくれ、て」

「！」

ずきんっと胸が痛んで、私は息を呑んだ。どうして、そんなことをユリィに？　その言葉はまるで……

――約束通り、二度とお前の前には現れない。これでお別れだ。

お別れ。そうだ、彼はそう言っていた。これでお別れ。

本気なんだ。彼は、本当の本当に……

馬鹿だ、私。これを望んでいたはずなのに、彼を遠ざけたのは私自身なのに……後悔と不安で胸が押しつぶされそう。飲み込まれて我を失いそうになる。自然と動いた手は、胸元に伸びて――はたりと動きを止める。そこには無かった。彼への想いが暴走しそうになるたびに、私を抑えてくれていた、あのネックレスが。和幸くんを守る――彼の家族と交わした誓いが詰まった十字架。それがいつも私を止めてくれた。彼に泣きつきたくなる衝動を、本当の気持ちを伝えたい衝動を、全部抑えてくれていた。

私と一緒に居ても、待っているのはつらい未来だけ。だから……別れることが、彼を守る唯一の手段だと思った。彼を本当の意味で幸せにできる方法だと思ったんだ。

でも……

「嫌……」私を止めていた釘が消えた胸元で拳を握り締め、私はそう漏らしていた。「嫌」

「パンドラさま？」

心配そうな声が足元から聞こえた。天使の声だ。

私はユリィを睨みつけるように見上げる。

「お願い、ユリィ！　和幸くんを止めて！」

「は？」

「彼は裏の世界に戻ろうとしてる！　せっかく、表に出てきたのに！　全部、元通りになっちゃう。止めなきゃ……今、止めなきゃ、彼は二度と戻ってこない」

表だとか裏だとか、ユリィに分かるはずも無いのに、そんなこと考えている余裕さえなかった。夢中になって、私はつかみかかるように彼の胸にしがみつく。

「彼は武器もなにも持ってないの！　こっちに来るために彼は銃を手放したの」

「……」

彼は丸腰であの人を『迎え』に行った――自分で言いながら、それに気付いた。もしかしたら、彼との別れ際に感じた嫌な予感は……

これでお別れ――彼の言葉が、不吉な含みを持って私の頭の中で響いた。

「お願い、ユリィ！」胸騒ぎを消し去るように、必死に大声を出してユリィに懇願する。「彼を止めて！」

情けなく裏返った声はあたりに響き、そして虚しい沈黙があとに続いた。彼のワイシャツをぎゅっと掴み、私は彼の返事を待った。

しばらくユリィは私を見つめ、不意にため息をつく。そして、

「嫌だ」
「！」
思わぬ返事に――彼が快諾するとふんでいたところがあったのだろう――私は言葉が出なかった。愕然としている私を見つめるユリィの眼差しは、責めるような厳しいそれに変わっていた。
「君は勝手に彼の選択肢を狭めて押し付けたんだ。君に彼の選択を邪魔する資格はないよ」
ユリィが一体何を言い出したのか、皆目見当が付かなかった。そんなことより、早く彼を止めなきゃ手遅れになる――焦りが募るばかりで、ユリィの言葉を注意深く考察しようという気にもならなかった。
そんな私を落ち着かせるかのように、ユリィは両手を私の肩にがっしりと置き、射るような鋭い視線を向けてくる。
「君が彼に真実を話していれば、彼にはもっと他にも選択肢があったはずなんだ」
「！」
「君は彼が幸せになる可能性を取り上げた」
相変わらず、ユリィの言っていることは理解しがたい。でも、一つだけ、明らかにおかしいことを言っている。幸せを、取り上げた！？　私は咄嗟にユリィの胸から手を離し、首を横に振る。
「何を言ってるの！？　私は……」
「彼の幸せは、君が幸せになること」
「え……」

「彼、そう言っていたよ」

時が止まったかのように、私は硬直した。

彼の幸せは……私が幸せになること？　それがどういう意味なのか、しばらく理解できなかった。

ユリィの表情からは、先ほどまでの責めるような色は消え、同情と憐れみが浮かんでいる。

「違う」と、私はやっとのことで声をしぼりだす。眉をひそめて首を横に振り、自分に言い聞かせるようにつぶやく。「彼の幸せは……素敵な女性と結婚して、子供をつくって……」

「彼がそう言ったの？」

呆れたような口調で投げかけられたユリィの問いが私の言葉を遮った。考える必要もない。答えは、否、だ。彼から聞いたわけではない。私が……勝手にそう思っていただけ。ううん、もっと正しく言えば――

「言ってないでしょう。それは、君が彼に押し付けようとした幸せだ」

「……」

まるで私の心を読んだかのように、ユリィはずばりと指摘した。

「他人（ひと）の幸せを勝手に決め付けるのは……『裁き』だと言って世界を滅ぼそうとする奴らとなんら変わりは無いよ、パンドラ」

最後のおつかい　―１―

「いや！　離して」

少女がたどり着いたのは、廊下の終わり――逃げ場のない行き止まり。壁を背にして、彼女は張り裂けんばかりの甲高い声で叫んだ。縄跳びのようにぶんぶんと腕を回すが、その華奢な手首を掴んでいる手は離れる気配はない。手錠のごとくしっかりと締め付けているゴツゴツとした大きな手。それをたどると、広くたくましい肩に行き着く。黒い背広に身を包み、感情を隠すかのようにサングラスで瞳を隠した男。このフィレンツェの警備を担当するガードマンの一人だ。

「大人しくしろ」割れた顎を大きく上下させ、ガードマンはそう怒鳴りつける。「来るんだ！」

自分より背が二倍はあるかという男から怒号をあびせられ、少女は震えながら身をすくめて目をつぶった。

「どうして、来ない？」と、少女は男に聞こえないような小さく低い声でつぶやく。そして、祈るように固く目をつぶると、かすれた声を漏らした。「カイン……」

そのときだった。

「伏せろ！」

どこかで聞いたことのある声が少女の耳に飛び込んできた。ハッとして目を見開き、声のしたほう――ガードマンの背後に目をやる。

そして、息を呑んだ。勢いよく走ってくる人影があったのだ。どこかで見覚えのあるその人影は、あっという間にガードマンのすぐ背後まで距離を詰めると、力強く地面を蹴った。そして飛び上がった少年の右足が、ガードマンの後頭部目掛けて繰り出される。少女の目には、すべての動きがコマ送りのように一つ一つゆっくりと映る。新しいのか、まったく磨り減っていないその革靴の底まではっきりと確認できた。

すべては一瞬の出来事。少女は瞬き一つしていなかった。

異様な気配に慌てたように振り返ったガードマンの顔面に、少年の足がめり込んだ。鈍い音があたりに響いたかと思うと、男の手が少女の手首から離れる。

「！」

その瞬間、少女は今更になって、さっき少年が言い放った言葉を理解した。――伏せろ。

咄嗟にその場にしゃがみこみ、頭を抱えた。

すると、頭上で何かが衝突する音がして、少女はびくっと肩を震わせる。見上げずとも何が起こったか分かる。勢いのついた少年の足が、あのまま男の顔を壁にぶち当てたのだ。

「が……」

喉に何かつまったかのようなうめき声が少女の頭上から降ってきた。そしてズリズリと擦れる音。自分を濃い影が覆っていくのを感じて、少女はぎょっとして顔を上げた。壁にほお擦りするようなかたちで、意識を失った男の巨体が自分に崩れ落ちてこようとしている。少女は慌てて横に飛びのいた。と、同時に、全身から力が抜け切った男の体は、巨大なマリオネットのように床に崩れ落ちる。――ついさっきまで、少女がしゃがみこんでいた場所に。

「あ……」と怯えた声を漏らし、少女は硬直する。さっきまで自分を追い詰めていた男は、うつ伏せに倒れ、顔だけ壁に頬を寄せたままこちらに向けている。骨が折れたのか、鼻は『く』の字型に曲がり、おびただしい血が流れている。歯がかけ、血を涎とともに垂れ流している口元は――顎がはずれたまま失神したのだろうか――不自然なほどに大きく開かれている。

まさか、死んでいるのではないか。少女の心にそんな不安さえよぎった。

「大丈夫か？」

不意に、優しげな声が横から流れてきた。この状況には似つかわしくない、落ち着き払った穏やかな声色だ。おずおずと振り返り、少女はそこに佇む少年と視線を交わらせた。さらりとした黒い短髪。目立った特徴はないものの、整った顔立ち。首元には銀色に輝く十字架。何の変哲もない、いたって普通の少年に見えた。いきなり、大男の顔に飛び蹴りを食らわせて失神させた事実を除けば――。

少女は眉をひそめて少年を見つめ、乾いた唇を小さく動かす。

「あなた、誰なの？」

少女の薄緑色の瞳には警戒の色が浮かんでいた。茶色い太い眉の間には、妖しくも美しい顔立ちを台無しにするような深い皺。

少年は困ったような表情を浮かべて頭をかき、おもむろにしゃがみこんだ。少女と目線の高さを合わせるように。

「俺は、和幸」

少年はさらりとそう名乗った。少女はぱちくりと目を瞬かせ、小

首を傾げる。

「かずゆき……」

抑揚のない声で少女がその名をつぶやくと、彼はどこか照れたような苦笑を浮かべて頷く。そして――そっと少女に右手を差し伸べた。

「君を迎えに来たんだ」

「迎え……？」

少女は薄紫の血管が浮かぶ真っ白な瞼をめいっぱい開いた。傷だらけの白い腕がそっと首元に伸び、深い海を思わせる青いペンダントに触れる。

「俺は……」

急に和幸は表情を曇らせ、視線を落とした。緊張でもしているかのように、深く息を吸う。少女の翠石（エメラルド）のような瞳が食い入るように見つめる中、彼は苦しげな表情で「俺は……」ともう一度つぶやく。独り言に近い弱々しい声だった。

ほんのわずかな沈黙を置き、彼はおもむろに顔を上げた。そしてまっすぐに少女の瞳を見据え、しっかりとした口調で告げる。

「俺は、カインだ」

＊　＊　＊

「カイン？」

女は目を見開いて、そう聞き返してきた。俺は何も言わずに微笑んだ。

初めてだ。カインだと名乗ることに、ここまで緊張したのは。今までは覚悟なんていらなかった。俺はいつだってカインだった。カイン以外の生き方なんて考えたこと無かったから、当たり前のように『無垢な殺し屋』を名乗っていたんだ。それを躊躇ったことも、嫌だと思ったことも一度もなかった。それは、親父がくれた使命。禁忌から生まれた――いや、『創られた』命に与えてくれた存在理由。

それでよかった。満足していた。俺の人生に、「カインだ」と名乗る以外の選択肢なんてなかったから。疑問を持つことも知らなかったんだ。あいつと……カヤと会うまでは。

「本当に？」

女の震えた声が俺を現実に引き戻した。我に返ったときには、潤んだ女の緑色の瞳が目の前に迫っていた。「え」と戸惑いの声を漏らす俺に、彼女はさらにぐいっと体を前のめりにして、顔を近づけてくる。

「本当に、あなたがカインなの！？　『無垢な殺し屋』！？」

気のせいかもしれないが……歓喜の色が顔いっぱいに広がっているように見えた。青白かった頬に赤みが帯びて、健康的な女性の色艶に近づいていた。

「ああ」と戸惑いながらも頷くと、彼女はいきなり俺に抱きついてきた。

「！？」

こんな展開を微塵も予期していなかった俺は、押し倒されるような形になってバランスを崩してしりもちをつく。「おい！？」と無意識に上擦った声が飛び出した。が、それでも俺の首をしめるようにからみつく彼女の腕はゆるむこともなく、逆に息苦しいほどにきつくなった。

「ちょ……え？」

十三のころからいろんな奴を『迎え』に行ってきたが、こんなことは初めてだ。ど……どうすりゃいいのか、分からない。いや、こんな美女に抱きつかれるって……喜ぶべきなのかもしれないが、状況を考えればそんな暢気なことを考えている場合じゃない。それに、ついさっきカヤと（正式に）別れたばっかりだ。鼻の下を伸ばしているわけにはいかないよな。

「おい……」と、俺の肩に顔をうずめている女に声をかける。「早くここから、逃げないと」

言って、女を引き離そうとその肩に手を置いた、そのときだった。

「ずっと、待ってたんです」

俺の右首筋で囁かれたそれは、今にも消え去りそうなか細い声だった。

「ずっとずっと……カインに会えるのを待っていたんです」

俺の両手は、しっかりと感じ取っていた。彼女のひんやりと冷たい体温。滑るような滑らかな手触り。そして……その骨ばった華奢な肩が小刻みに震えていることを。

「やっと……会えた」それは間違いなく、涙声だった。彼女は俺の首をさらにきつく締めるように強く抱きしめてきた。まるで、必死にしがみつくかのように。「嬉しい」

「……」

ゆっくりしている場合じゃないのは分かってる。すぐにでもこの女を抱きかかえて、ここから逃げ出さなきゃいけない。

俺はちらりと壁に頬ずりしてノビている大男に目をやった。幸運にも、まだ一人にしか見つかってないみたいだが、他にもこの女を捜している奴らはこの洋館中にうじゃうじゃといるはずだ。もしかしたら、あの男は、すでに他の連中にこの女をここで見つけたことを伝えていたかもしれない。

だから、早くこの女を連れて立ち去らなきゃいけない。――そう頭では分かってはいても、心は納得してはくれなかった。

気付けば、俺は彼女の背中に手を回して、落ち着かせるようにしっかりと抱きしめていた。指に触れる茶色い髪は、恐ろしいほどに細くて、さすっただけでもちぎれそうに思えた。

「もう大丈夫だ」

囁くようにそう告げると、女は「はい」とかろうじて聞こえるくらいの声で答えた。

「……」

蒼いドレスの上からその背中をさすり、俺は考えていた。なぜ、彼女は俺たちカインのことを知っていたのだろうか、と。カインだと名乗って、ここまで喜ばれるなんて……初めてのことだ。たとえ売られた子供だとしても、カインの真の姿――売られた子供たちを

取り返していること――を知っているなんて珍しい。カインについて聞いたことがあっても、都市伝説として語られるカインしか知らないはずだ。つまり、裏世界で殺し屋として育てられた少年少女、て知識くらいしか持っていないはずなんだ。だから、いつもカインだと名乗った後に、その誤解を解いていた。そして伝えていたんだ。カインは君の味方だ、て。だが……今回はその必要はなかった。それは、奇妙なことだった。

俺はちらりと横目で彼女を見つめた（といっても、この角度からじゃ後頭部しか見えないが）。もう平静を取り戻したのか、震えている様子はない。

初めて会ったときに感じた、どこか懐かしく親しみのあるオーラ。それは相変わらずで、こうして一緒にいると、それだけで心地よくて安心する。初めて会った気がしない。ずっと、長い間、傍にいたような……そんな気すらしていた。

「君、名前はある？」

不意に、俺は彼女の耳元にそう問いかけた。彼女の頭がぴくりと動き、ゆっくりと俺から体を離した。俺の首の周りに巻きついていた、白蛇のような細い腕がほどかれていく。

目の前に現れた、雪のように白い顔。そこには、さきほどまでの恐怖の色はもうなかった。彼女は俺を翠色に輝く瞳で見据え、薄い紅が塗られた口元に微笑を浮かべた。

「鼎（かなえ）といいます」

その笑顔には、やはり見覚えがある気がしてならなかった。

最後のおつかい　―２―

フィレンツェの東側には伝統的なニホン庭園を思わせる小さな庭がある。洋館から伸びる石畳の小道は青々と茂る芝生の上を這い、錦鯉が揺らす池の水面を囲む。夜になると、その小道の両側に点在する灯篭が道しるべとなるかのように辺りをぼんやりと照らし、その様はあの世へといざなう火の玉のよう。

フィレンツェの二階には、その庭を見下ろす石造りのバルコニーがある。眼下に広がる景色とは大きく異なり、まるでそこだけが古代ギリシャの神殿のような趣がある。柱列には繊細なレリーフが施され、一定の間隔を置いて鉢に植えられた薔薇が置いてあった。

和幸はしゃがんで柱列の間から下を覗き込む。ぱちりと一つ瞬きをして、大きく目を見開くと、その漆黒の瞳はカメラのレンズのように瞳孔をぐんと開く。

頼りない灯篭の光だけが照らす庭を、それでも和幸の瞳はしっかりと細部まで脳に映像として送り込む。これもまた、商業用に『創られた』クローンである利点。商品、あるいは実験台として、体の隅々まで改良され、さらにナノマシンというテクノロジーの力を借りて得た、特異な能力。それは、人体の完全なる覚醒。秘められた人間の可能性を最大限に引き出した結果。

「一人……二人、三人」と、和幸は庭をうろつく人影を数える。さっき蹴り飛ばした男と同じような格好の男たちだ。唯一違うのは、彼らが装着している眼鏡――いや、小さな双眼鏡のようなもの。それをぶらさげる特殊なバンド――上から見るとT字型になっている――を頭につけ、辺りを注意深く見回している。

「暗視装置（ナイトビジョン）？」和幸は馬鹿にしたように鼻で笑った。「そこまでするなら、庭を明るくすりゃいいのに」

暗視装置は、暗がりでも視界を確実に得るためのもの。こんなにぼんやりとした照明では、たとえ夜目が利いたとしても、裸眼で庭の隅々まで行き渡るほどのはっきりとした視界を確保するのは不可能だ。和幸のように特別な体を持っていない限り。身体に眠る潜在能力を最大限にまで引き出せる脳と、そのリスクをカバーするために身体に巣食う数多ものナノマシン。それこそ、彼が十二年前、闇オークションで『成功作』として売られようとした所以である。

「カナエ」低い声で和幸は言って振り返る。「下準備するから、ちょっと待っててくれ」

和幸の背後で正座をして控えていた鼎は、不安げな表情で頷いた。「お気をつけて」と祈るように手を組み合わせてつぶやく。

和幸は安心させるように微笑んで、すっくと立ち上がる。顔を庭のほうに戻し、バルコニーの手すりに片足を乗せた。冷たい風が彼の前髪を撫で、三日月の淡い光が冷酷にも思える彼の鋭い眼差しに映りこむ。

彼はすっと息を吸い込み肺を膨らませ、首元に輝く十字架に手をやった。撫でるようにそれをさすると、短く息を吐き出してから囁くように告げる。

「ヤハウェのご加護を」

伝言を伝えるだけのような、感情が感じられない事務的な口調だった。

手すりに乗せていた足に力を入れ、軽い身のこなしでそのまま手すりを飛び越える。ここは二階だということを忘れているかのような、なんの躊躇もない動きに、鼎は「あ」と声を漏らした。慌てて身体を前に倒し、四つんばいの姿勢で手すりの柱の間から下を覗き

込む。すると――丁度、彼が両足でしっかりと着地をしたところだった。無事に降り立ったのを確認したのも束の間、鼎はぎょっと目をむいた。彼のすぐ目の前に、さっきの大男とよく似た格好の警備員が立っていたのだ。

＊　＊　＊

「なん……だ」と、ガードマンの一人は間抜けな声を漏らす。暗視装置の向こうで、驚愕に目を見開いているに違いない。いきなり頭上から人間が落ちてきたんだ。そりゃ、驚くよな。

「なんでしょう？」

言って、俺は姿勢を正し、両手を前に構えた。すると、やっと仕事を思い出したのか、銃を取ろうとガードマンは手を腰に回した。それを合図に、俺は男の暗視装置目掛けて、右足を高々と蹴り上げる。鈍い音とともに、双眼鏡のような形をしたゴーグルが宙を飛び――その音に、離れたところで見張りをしていたガードマンも、こちらの異変に気付いて振り返った。

構わず、戻した右足を軸にして、今度は左足で男の顎を砕く勢いで蹴りを繰り出した。弓のようにしなった左足は見事に男の顎を弾き飛ばし、男はのけぞるような形で後ろに倒れていく。と、男が勢いよく引き抜いた銃がその手を離れ、弧を描いて地面に落ちた。それは石畳の小道を滑って俺の足元で止まる。

すぐにでも次の行動にでるつもりが、久々に見たその鉄の塊に気を取られ、俺は一瞬硬直してしまった。ざわっと胸騒ぎがして、嫌な……思い出したくもない光景が脳裏をよぎった。それは、血だらけで横たわる瀕死の女。――その隙に、後頭部に何か固いものがつきつけられる。すぐに分かった。それは足元に転がっている凶器と同じものだ、と。

「動くな！」とどすのきいた声があたりに響く。おそらく、さっき気付いたガードマンだろう。

ふと、背後で近づいてくる足音がした。三人目の奴か。やけに遅かったな。とろい……さては、新人か？　だと、助かるんだけど。

俺は苦笑してとりあえず両手を挙げた。

「子供……」俺に銃を突きつけているガードマンは唸るようにそう言って、緊張と確信に満ちた声を漏らす。「カインか」

俺は鼻で笑って「正解」と答えた。それと重なるように「先輩！」と、はきはきとした声がすぐ後ろから聞こえてくる。だいぶ若い声。やっぱ、新人だ。

「お前は無線で連絡を――」

応援を呼ぶ？　それは困る。

『先輩』が言い終わらぬうちに――俺はすかさず身を翻して男の銃を持つ手首を掴み、その腕を抱え込むように懐に運ぶ。「な……！？」と呆けたおっさんの声が肩のあたりで聞こえた。俺は別の手で拳をつくると、振り返るように上半身を半回転させ、勢いよくその鼻先めがけてそれをぶち当てる。「がっ！」とガードマンは苦しげな声を漏らした。

力が抜けたその手から銃をかすめとるのは容易だった。

奪い取った銃を、すばやく、『三人目』に向けて構える。

対峙した男は――暗視装置のせいで目元は見えないが、それでも分かる――思った通り、随分若いようだった（といっても、もちろん、俺よりも年上だろうが）。緊張しているようで、呼吸とともに肩が上下に揺れている。それでも、俺に銃口を向けるその姿勢は、

まるでお手本のように様になっていた。両手で固く握り締められた銃はぴたりと固定されて微塵も動かない。地面を踏みしめる両足は肩幅に開かれ、脇はきゅっと締められている。美しい――そう賞してもいいと思った。

それに比べて……俺はぎりっと奥歯をこするように強く噛み締める。

若い警備員に向けた銃口は、小刻みに震えていた。いや、正しくは、銃を構える俺の手が震えているんだ。

「くそ……」と小さく悪態をつく。

まるで痙攣でもしているみたいだ。痺れまで感じる。銃を持つ右手が……怯えている。言うことを利かない。震えるだけで、俺の指示通りには動かない。人差し指が引き金に近づこうともしない。

理由は分かってる。俺は眉根を寄せ、頭の中に蘇らんとする光景を必死に消し去ろうとしていた。脳裏にやきついて離れない、悪夢のような光景――カヤを撃ったあの夜の惨劇。

だめだ。俺は……撃てない。

気付いたときには、麻痺したように言うことを利かなくなった右手から、銃がこぼれおちていた。

銃が足元に落ちる音と、「え」と戸惑うガードマンの声が耳に入る。

俺は力なくだらんと腕を垂らし、ただ呆然と、向けられている銃口を見つめた。

――銃もなくて人も殺せない。そんな奴が、コッチで何の役に立つのさ？

いつかの、曽良の声が頭に響いた。

考えてもいないことだった。俺に戻る場所はあるのかどうか。カ

インに戻れるのかどうか。銃を持てない俺に、何が出来る？　裏の世界に戻ったところで、居場所は残されているんだろうか。もし……日陰にさえ戻れないとしたら、この世界に俺の生きる場所は――

自分でも、何を考えているのか分からなかった。いや、今、なぜ自分がここに立っているかさえも分からなくなっていた。ただ、心は凪のように穏やかで、不気味なほどに落ち着いていた。

「なんで」と引き金に置いた指に力をいれ、若い警備員は苦しげな声を漏らす。「なんで、君みたいな子供が……」

なんてくだらない質問だ。俺はため息混じりに苦笑した。――俺が聞きたいよ。

警備員はぎりっと唇を噛み締め、「せめて……」とつぶやいた。男がそのあとなんと言ったのかは聞こえなかった。鼓膜がはりさけんばかりの、破裂音にかき消されたのだ。それが銃声だ、と理解したときには、視界を赤いしぶきが舞っていた。

＊　＊　＊

何度、せめておじさまに先に家に帰ることを伝えたい、と訴えたことか。ユリィはこれっぽっちも耳を貸してくれなかった。問答無用でぐいぐいと腕を引っ張られ、とうとうフィレンツェを出てきてしまった。

もう諦めるしかない。あとでおじさまに電話でもいれよう。私は大きくため息をついた。

フィレンツェの敷地から出るなり、ユリィは道路わきで慣れた様子で手を挙げた。すると、待ってました、と言わんばかりのタイミングで黒いタクシーが滑るように目の前に入ってくる。ぴたりと私の前で停車すると、黒いドアが自動で開いた。

「乗って」

ユリィは喜怒哀楽のどれともつかない無機質な声で言う。

私はタクシーの中をじっと見つめ、立ち尽くした。目の端に、訝しげな表情でこちらを見ている運転手さんの姿が映った。乗らないのか？　と言いたげだ。

視線を落とすと、今度は足元でラピスラズリが心配そうな瞳でこちらを見ている。私はつい苦笑していた。

「乗って、パンドラ」きつめにユリィはそう言って、タクシーに押し込むように私の背中に手を当てた。「君の恋人と約束したんだ」

その言葉が胸をちくりと突き刺す。そう、ユリィがここまで強情に私を家に帰そうとしている理由。それはただ一つ。和幸くんとの約束だ。すぐに私を家に連れて帰ってくれ――和幸くんはユリィにそう頼んだらしい。

和幸くん……彼の笑顔が頭に浮かぶだけで、寂しさと不安に心が押しつぶされそうになる。私は後ろを振り返り、さっきまで自分がいた洋館を見つめた。和幸くんと別れた洋館。

――これでお別れだ。

また、彼の不吉な言葉が頭に響いた。胸が苦しい。怖い。

彼は丸腰であの女の人を『迎え』に行ってしまった。ううん、行かせてしまった。止められなかった。もし……もし、彼に何かあったら――考えたくない。でも、考えずにはいられない。不安で仕方がない。嫌な予感がするの。怖いの。

私はぎゅっと目をつぶって胸元に手を置いた。

「パンドラ」そんな私に、今度は心配そうな声でユリィが話しかけ

てくる。さっきまで圧力をかけていた手は優しく私の背中をさすった。「今、君が彼に出来ることは……大人しく家に帰ること」

ハッとしてユリィに振り返ると、彼は憐れむような笑みを浮かべていた。

「彼はそれを望んでいた」

「……」

「だから、オレは君を今すぐ家に送り届ける。彼のために」

私は何も言えなくなってしまった。そんな風に言われたら……もう、何も言い返せない。

力なく頷いて、促されるままタクシーに乗り込む。白いシーツの座席に腰を下ろすと、その膝にラピスラズリがすかさず飛び乗ってきた。ゴロゴロと喉を鳴らして私を見つめてくる。元気付けてくれてる――それが伝わってきた。運転手さんがいる前ではしゃべれないものね。私は「ありがと」と囁くように言ってその背を撫でた。

その間も、不安が全身に絡み付いて私を逃そうとしない。

大丈夫……だよね、和幸くん？　大丈夫だよね？

目を固くつぶり、口癖のように彼が言ってくれたその言葉を思い出そうとする。――『大丈夫だ』。いつもいつもそう言って私を安心させてくれた彼の優しい声。それが……聞こえない。

「和幸くん……」

迎えに来て。この不安から私を連れ出して。

あっさりと、私の覚悟は崩れ落ちていた。世界がどうとか、運命とか、使命とか……そんなことは頭から消え去っていた。ううん、どうでもいい、と思っている自分がいた。ただ、私は……彼を失いたくない。不安に全てが飲み込まれる中、その気持ちだけが、はっ

きりと心の中に残っていた。

最後のおつかい　―３―

声を出す暇もなく、目の前で男が崩れ落ちた。
何が起きたのか。自分が今、何を見たのか。まるで記憶が飛んでしまったかのように、理解できなかった。ただ、顔にべっとりと不快な液体がついている。それだけはしっかりと感じていた。
足元に倒れている男を見下ろすことも憚られ、和幸はただ前を見ていた。呼吸は乱れ、体中が震えている。さらに開かれた瞳孔は、今が夜だということも忘れてしまいそうなほど、はっきりとした視界を彼に与えていた。そして、その視界の中で佇む一人の少年の姿も、その輪郭までくっきりと映し出していた。
火を放った竜のごとく煙を吐く拳銃。それをゆっくりと降ろすと、少年は口元に笑みを浮かべる。アヒルのように愛らしい唇はおもむろに隙間を開け、そこから風鈴のように澄んだ音が漏れた。

「『お迎え』に来たよ、かっちゃん」

たった今、人の頭を撃ち抜いた人間とは思えない、のんびりとした声だった。遊びに行こう、と誘う小学生のような暢気な声だ。和幸はその声にハッと我に返り、思い出したかのように大きく息を吸う。

「曽……良」と、息を吐き出すのと一緒に震えた声を溢した。

どこからともなく現れ、背後から男の脳天を銃弾で貫いた少年。薄い茶色い瞳に長い睫。筋の通った高い鼻。ほっそりとした輪郭に横に伸びた薄い唇。東洋と西洋の特徴が混ざりあった顔つきは異彩を放ち、月夜に妖しくも思える美しさをかもし出している。彼のそれは、同性をも魅了する姿だ。黒いロングTシャツに、ぴったりと

ひきしまった黒のジーンズ。全身黒ずくめの地味な格好でも目を引いてしまうのだから、『暗躍』という言葉は彼には似合わない。右手に握り締められている銃のほかにも、腰には警棒をぶらさげ、両手には皮のグローブ。さらに、万が一のためにナイフが仕込まれているミリタリーブーツ。愛くるしい顔立ちからは想像できないものばかり身に着けている。

彼もまた、和幸と同じく、裏の世界で育った少年。和幸の幼馴染であり、兄であり、弟であり、親友だった。今では『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たちをまとめている若干十七の少年。――藤本曽良。

曽良は微笑を浮かべ、一歩ずつ和幸に近寄る。

「ほんっと、あぶなっかしいんだから。放っとけないなぁ」

和幸は曽良のくっきりと大きな茶色い瞳から目が離せなかった。いや、目を離すな、と言われているようなプレッシャーを感じていた。

「俺がもうちょっと遅れてたら、今、ここに転がっているのはかっちゃんだよ」

和幸とある程度距離を置いて、曽良は立ち止まった。和幸には分かっていた。その距離が示すもの――それは、さっきまで自分に銃を突きつけていた青年の背丈。それ以上、曽良は近づくことはできないのだ。足元に、動かぬ肉の塊となった青年が転がっているから。

「間に合ってよかった」

にこりと屈託の無い笑みを浮かべる幼馴染に、和幸はぞっと背筋が凍りつくような感覚を覚えた。

そういえば……と眉根を寄せて思い返す。曽良とは中学に入って

以来、疎遠になった。無論、『おつかい』でタッグを組んだことも無い。つまり、『殺し屋』としての彼を、和幸は今の今まで知らなかったのだ。

「それで？」と、曽良は和幸の瞳を食い入るように見つめたまま、穏やかな声で尋ねる。「あっちの二人に、顔、見られた？」

誰にいじめられたのか――息子にそう尋ねる母親のような慈愛に満ちた声色だった。

その瞬間、和幸は目を見開いた。ぎくりとして、みぞおちに拳を食らったような衝撃を感じた。あっちの二人。それはついさっき、和幸に蹴られ、あるいは殴られ、気を失っているガードマンたちだ。

曽良の質問が意図することが何か。顔を見られた、と正直に答えればどうなるのか。明白だった。和幸は「いや……」と顔をしかめて口ごもった。

曽良の右手に握られている自動式拳銃（オートマチック）は、すでに次なる咆哮に備えている。曽良はそれを倒れている男たちに向け、引き金を引けばいいだけだ。曽良は躊躇しないだろう。その凶行を止めるもの――世の中で、常識や倫理と呼ばれるもの――は、この『無垢な殺し屋』には無い。彼の命こそ、それらを捻じ曲げて創られたものなのだから。そしてなにより、彼は……いや、カインと呼ばれる子供たちは、『疑問』を持つことを知らずに育ってしまった。それが和幸と彼らの決定的な違いだった。

「そう」言葉を詰まらせる和幸に、曽良は不意にそう言って涼しげに微笑んだ。そして唐突にこう促す。「かっちゃんは、あの子を『迎え』に行って」

「え？」と和幸が困惑した声を漏らすと、曽良はちらりとバルコニーに視線を向けた。和幸もつられるように、顔を上げてバルコニー

に目をやる。
その瞳に飛び込んできたのは、柱列の間から顔をのぞかせている一人の少女。心配そうに緑色の瞳をこちらに向けている。
和幸は彼女の姿を確認すると、そうだった、と心の中でつぶやいた。今更、自分が何をしようとしていたのか、思い出したのだ。そして、自分がしなければいけないことも。

「さすがにさっきの銃声は、近くのガードマンに聞かれてるでしょう。いろいろ話したいこともあるけど、またあとにしよう。さっさとここを離れないと、まずいことになるからね」

曽良の真剣な声に、和幸は視線を戻して「そうだな」と苦しげな表情で答えた。曽良は満足げに微笑むと、目をつぶってそっと呟く。

「ヤハウェのご加護を」

誰が言い出したのか、それはカインの子供たちの間で使われる合言葉だった。特に『おつかい』に向かう兄弟姉妹に送る祈りの文句。
ヤハウェとは、初めて人（それも実の弟であるアベル）を殺したカインに情けをかけた神。人々からの迫害を恐れるカインに、『カインを殺せば七倍の復讐がある』、と刻印を押して守った情け深き神。――少なくとも、『無垢な殺し屋』と呼ばれる子供たちは、そう信じていた。だから彼らは、そんな神とある人物とを重ね合わせていた。
彼らが陰でヤハウェと呼んで崇めるもの。彼らの罪深い命を許し、救い、居場所と『使命』を与えてくれた存在。それは藤本マサルに他ならなかった。
それこそが、カインの子供たちの中での『常識』だった。
だが、和幸だけはその『常識』に違和感を覚えていた。確かに、藤本マサルは恩人であり、自分や兄弟たちにとっては神に等しい存

在。いや、神よりも偉大な存在かもしれない。和幸も藤本マサルを誰よりも慕っているつもりだ。だが……その合言葉だけは引っかかっていた。彼には、それが兄弟たちの内なる悲鳴に聞こえて仕方が無かったのだ。本当にヤハウェとは藤本マサルを意味しているのだろうか。本当は、弟（アベル）を殺したカインと同じく、罪に怯え、本物の神の救いを求めているのではないだろうか。本当は、兄弟たちも自分と同じく、命を奪うという行為から逃れたいのではないだろうか。

兄弟たちのヤハウェへの祈祷を耳にするたびに、和幸はそんな疑問を抱いていた。

「すまない、曽良」

気付けば、和幸はそう謝罪していた。自分を守るために、その手を更なる血に染めた兄弟に。

曽良はゆっくりと瞼を開くと、不思議そうに和幸を見つめた。

「なにが？」

その表情は、やはり普段と何も変わらなかった。和幸は何も答えられずに、首を横に振った。寂しさと言い知れぬ虚しさが心をえぐった。

和幸はその場から……いや、曽良から逃げるようにあとずさると、バルコニーを見上げて下半身にぐっと力を入れて地面を蹴った。一時的に筋力強化された両脚は、強力なバネとなって彼の身体を軽々と夜空に跳ね飛ばした。

＊　＊　＊

「和幸さん！」

バルコニーの手すりに着地した途端、カナエは血相変えて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？　お怪我はありませんか？」

大きな緑色の瞳を左右上下に忙しなく動かし、俺の体中をなめ回すように見つめてくる。俺は苦笑しつつ、「大丈夫だ」とバルコニーに降り立った。

にしても……庭から二階（ここ）まで跳びあがってきたってのに、驚く様子を見せないのな。カヤだったら「どうやったの？」なんて言って、目を丸くして呆然としそうなものだ……て、何考えてんだ、俺は。カヤはもう関係ないだろ。未練たらしい。

「あの、さっき話されていた方は？　お知り合いなのですか？」

あたふたとしながら、カナエはそう尋ねてきた。

そういや、ここからずっと様子見てたんだよな。てことは、曽良が人を殺すのを見ていたはずだが……。別段、取り乱してもいない、か。不思議な女だ。ま、カインが『殺し屋』と呼ばれていることは知っているだろうし、こういう展開も予想はしていたのかもな。覚悟の上、か。それとも……殺しを見ても平気なほど、よっぽどひどい目にあってきたのだろうか。これくらいの年頃の女が売られるとしたら、その目的は大体、性玩具。あまり考えたくは無いが……。

まあ、いい。なんにせよ、ろくな理由ではないだろう。人が殺されるのを目の当たりにして平気でいられるなんて……まっとうな理由があるはずもないんだ。

俺は手すりを背にして頭をかいた。

「ああ。知り合いってか、あいつもカインで……」

そのときだった。あたりに銃声が鳴り響いた。衝撃が空気を震わせ背中に伝わる。ぞくっと背筋に悪寒が走った。

目の前で、カナエがびくっと身体を震わせた。「また……」と彼女が怯えた声を漏らしたのと同時に、もう一つ。ほんの少しだけ間を空けて、二つ目の銃声が鳴る。

これで、二人目。

俺は諦めたようなため息をついて視線を落とした。曽良の暢気な笑顔が頭に浮かぶ。人を殺したあとだとは思えないほどの、いつもと変わらない笑み。まるで何事もなかったかのような、それが当然かのような……。普通であることが、これほどまでに恐ろしいと感じたことは今までない。あの笑顔に恐怖を覚えることになろうとは、思いもしなかった。

もう……曽良（あいつ）を知っている、と言える自信がない。俺はきっと、随分昔に、大切な幼馴染を失っていたんだ。蟻を踏むのも躊躇った『無垢』な弟は、とっくにいなくなっていたんだ。

俺はちらりと庭に振り返り、銃を片手に辺りを見回す男を見下ろした。

あれが誰なのか……俺にはもう、分からない。

最後のおつかい　―４―

「うう……」とうめき声を上げ、男は身体をむくりと起こした。口の中で血の味がして、石ころのようなものが舌の上にごろごろと横たわっているのを感じる。ぼうっとする頭を左右に振り、男はそれを血が混じった唾とともに吐き出す。

男の口から勢いよく飛び出してきた物体は石畳の上に散らばった。男はかすむ視界でそれを確認する――粉々になった自分の歯だ。

「くそ」

いくつの歯を台無しにされたのか。もはや調べる気にもならない。あのガキ、と心の中で悪態をつく。決してガタイがいいわけではなかった。背もそこまで高くはなく、高校生の平均といったくらいだ。だが、あの蹴りは普通ではない。目にも留まらぬ素早さ。重力を感じさせない軽い身のこなし。その上、あの体からは想像できないほどの脚力。一瞬にして気を失ってしまった。どこからあんな力が出てくるのか。気に食わないのと同時に不思議でならなかった。男は悔しげに眉間に皺を寄せ、痛む顎に手をやった。

カイン。『無垢な殺し屋』。裏世界で育てられた少年少女。噂に聞いていたその存在が脳裏によぎる。どうやら自分は都市伝説の証人となってしまったようだ。男はそんなことを考えながら、いきなり頭上から舞い降りてきた少年を思い出す。見た目は至って普通の子供。それも、『殺し屋』と呼ぶには程遠い真面目そうな外見だった。人は見かけによらず、とはよく言うが……おぞましい世の中になったものだ。欠けてとがった奥の歯を舌で撫でながら、男はそう心の中でつぶやいた。――と、そのときだった。まるで男の心の声に答えるかのように、無邪気な声があたりに響く。

「気づく前に、と思ったんだけど」

人の気配など感じなかった。が、その涼しげな声はすぐ近くから聞こえてきた。男はハッとして顔をあげ、そして目を見開いた。

そこにいたのは、またも子供だった。といっても十代後半。先刻、自分に蹴りを食らわせた少年と同じくらいの年頃だろう。だが、さっきの少年とは違い、どこか恐ろしくも思える美しさがある。ただの子供というには完璧すぎる容姿だ。月の光と灯篭の、ぼんやりとした照明のせいだろうか。それとも、感情が伺えない冷たい眼差しのせいだろうか。その立ち姿は蝋人形にさえ見える。「美貌」という形容を少年に使おうと思ったのは初めてだ、と男は思った。まるで絵に描いたような美少年。気味が悪いほどの、妖しげな魅力。目を奪われるほどの麗しいその姿が、こちらに向けている拳銃とミスマッチして、男に奇妙な快感さえ与えた。

そう、彼の見目形に気を取られ、男はすぐには気付けなかった。自分が死の危険にさらされていることを。

男は何度か目を瞬かせてから銃口を見つめ、そしてようやく自分の置かれている状況を理解した。

「な……」と、男はすっとんきょうな声をあげ、硬直した。立ち上がって逃げるべきなのかもしれないが、どうやらあまりのことに腰がぬけたようだった。いや、少年の殺気という目に見えぬプレッシャーに気圧されていたのかもしれない。いずれにせよ、体が動かない。

「カイン」

自然と、男の口からはその単語が零れていた。なぜ、別のカインが現れたのか。さっきのカインはどこに行ったのか。そんなことは分からない。だが、考えている場合ではなかった。

「待ってくれ！」気づけば、男は少年を見上げ、泣き叫ぶように懇願していた。「殺さないでくれ」

少年は大きな目を強調するかのように、瞼をぐいっと引き上げた。驚いているようだが、その口元はぴくりともせず、言葉が出てくる様子はない。

男はごくりと生唾を飲み込み、震える唇をこじ開けるようにして続きを叫ぶ。

「娘が生まれるんだ！」

それはだめもとの『命乞い』だった。『殺し屋』がこんなことで気持ちを動かされるわけはない。そんなことは重々承知だ。ただ、それでも頼まずにはいられなかった。藁にもすがる思いだった。

だが、銃口はぴくりと動いた。咄嗟の『命乞い』に『殺し屋』が反応したようだ。どうやら、無駄な抵抗といわけではないらしい。

「なあ、頼む」と男は肩で息をしながら、少年に必死に投げかける。緊張で麻痺しているようで、顎の痛みはすっかり感じられなくなっていた。「助けてくれ」

心臓が今にも爆発しそうなほどに熱く燃え滾っている。男はこのまま心臓発作で命を落とすんじゃないかとさえ思った。

じっと見つめる先で、少年の唇がやっと動きを見せた。高い鼻が落とす影でやや見にくいが、うっすらと笑んだようだった。男を見下ろす眼差しには、ようやく感情が浮かんでいる。――それは、憐れみだった。すべてを達観し、何かを諦めたような笑み。子供とは思えない、残酷なほど大人びたものだった。

「でも」と、そんな少年の唇から穏やかな声が漏れる。「見ちゃったでしょう」

何の話か、男には見当もつかなかった。「み、見た？」と掠れる声で尋ねると、少年は「顔」と簡潔に答える。誰の？　と尋ねようとして、すぐに男は理解した。ぎょっと目をむいて、慌てて首を左右に振る。

「こんな暗がりじゃ、お前の顔なんて見えない！　暗視装置をしていないんだ！」

言って、無残に転がっている暗視装置に視線をやった。最初に現れたカインに蹴り飛ばされたものだ。

「な！？」と男はその瞳にかすかな希望の光を宿らせ、少年を再び見上げる。実際のところ、ぼんやりだが彼の顔は見えている。が、見えていない、と言い張る限り、彼がそれを知る由もないだろう。子供だましで構わない。勝機はあると思った。所詮、相手は子供なのだから。

「頼む」今にも土下座でもしそうな勢いで前のめりになって、あと一押し、とばかりに男は声を張り上げた。「家族がいるんだ！」

「俺もだよ」

「は……」

思わぬ『殺し屋』の返事に間の抜けた声を出し――男はぴたりと動きを止めた。まるで、彼の周りだけ時が止まったかのように。

口はあんぐりと開かれたまま静止し、空気の行きかう音さえも消え去っていた。やがて見開かれた両目の間に、赤い液体がだらりと流れる。それは鼻骨を境に二手に分かれて滴り落ちていく。

男の耳に、果たして処刑を知らせる破裂音は届いたのだろうか。ただ間違いなく、それが何かを理解する前に、彼の思考は止まったことだろう。

司令塔を失った体はだらりと力なくその場に崩れ落ち、そこから溢れる鮮血がみるみるうちに少年の足元を赤く染めた。

少年はゆっくりと腕を降ろし、硝煙を吐き出す銃口を地面に向ける。そしてその後を追うようにおもむろに視線を落とし、血塗られた石畳に突っ伏す男を見下ろした。

「俺も、家族がいるんだ」落ち着きはなった穏やかな表情で、少年はひとりごちる。「だから――」

無論、男が返事をするわけはない。少年は言いかけた言葉を飲み込むと、一歩後ずさり、何事もなかったかのようにあたりを見回し始めた。

しばらくそうして、不意に、背後で物音がした。重い何かが芝を勢いよく押しつぶした音。そして、「曽良」と彼の名を呼ぶ声がした。

＊　＊　＊

庭に着地するなり、「曽良」と俺は声をかけた。それとほぼ同時に、「きゃ」と背中に乗っかっているカナエの悲鳴が聞こえてきた。

まさか、変なところでも触ったんじゃないだろうか。カナエの太ももを抱える両手に緊張が走り、「悪い」と俺は反射的に謝っていた。そして、何を思ったか――たぶん、自覚していた以上に焦っていたんだろう――俺は手を離していた。首に巻きついていた白い腕はするりと視界から消え去り、背中が一気に軽くなる。ドスンと音がして、「きゃ！」と今度はカナエの悲痛な叫びがあたりに木霊した。

って、何やってんだ、俺は！？　瞬時に、何が起きたのか……てか、何をやらかしたのか悟り、慌てて振り返った。「大丈夫か！？」と（俺のせいで）尻餅ついたアザだらけの少女に声をかける。いや、このアザは俺が落としたからできたわけじゃない。まあ……もしかしたら、今ので尻にひときわでかいのが出来たかもしれないが。

「大丈夫です」

さらりと顔にかかった細い髪をしなやかな手で払い、カナエは俺に微笑みかけた。文句一つ言わず、まぶしいほどの笑顔をみせる彼女に胸が痛んだ。

彼女は今にも売られそうだったところを、必死になって逃げ出してきた。どんな経緯で売られることになったのかは分からないが、ひどい目にあってきたことは間違いない。肢体に広がるアザや手首の手錠がその証拠。決して、笑顔なんて作れる心情じゃないはずなんだ。いくら助けが来たと言っても――たとえカインを名乗ったところで――俺だって得体の知れない男。これからのことを考えて怯えていたって不思議じゃないのに。いや、そのほうが自然だ。なのに、こうして愛くるしく微笑みかけてくれる。その姿が、あいつと重なった。

手を差し伸べるべきだったのだろうが、そのせいで俺は動けずにいた。はだけたスカートを直すこともなく、へたりと座って俺を見上げるカナエを、ただじっと見つめていた。いや――彼女を通して、俺はカヤを見ていた。

「かっちゃん、最低」

不意に、あっけらかんとした声が耳に届いて、俺は我に返った。振り返ると、けたけたと楽しそうに笑う曽良がこちらに歩いてくるところだった。人を殺したばかりの凶器を隠すように腰にしまい、

「王子さま失格だよ」といつもと変わらぬたわ言を口にして近寄ってくる。
その減らず口は子供のときと何も変わらない。人並みはずれた顔立ちを台無しにするへらへらとした間抜けな表情も、変わっていない。ガキのころと何も成長してないようにさえ見える。
だから、気づけなかったんだ。もっと奥深く、心の根底で起きたこいつの変化に、微塵も気づかなかった。人を殺すこいつを目の当たりにするそのときまで。
もう、あの頃とは別人なんだ。目の前にいるこいつを、きっと俺は何も知らない。それは恐ろしくもあり、とてつもなく寂しく虚しい気分だった。
分かっていたつもりだった。『殺し屋』と呼ばれる家族のこと、理解しているつもりだった。それはとんだ思い上がりだったのかもしれない。俺は何も分かってなかったんだ。『殺し屋』――それが意味することを、これっぽっちも分かっていなかった。人殺しは嫌だ、と駄々をこねるだけで、何も見ていなかったんだ。
どんな表情をしていたのか分からない。その悔恨と困惑が混ざり合った心情をあからさまに顔に出していたのかもしれない。曽良は俺の目の前で立ち止まるとため息混じりに微笑んで、俺の肩をぽんと叩いた。
「あとで」
ハッとする俺にそうつぶやき、曽良は横を通り過ぎていった。唖然としていると、「初めましてぇ」と調子の良い声が聞こえてきた。
「あ、は、初めまして。鼎と申します」
カナエの弾けんばかりの高い声が後に続いた。振り返れば、曽良がカナエの前で方ひざを立て、彼女を頭から足元まで注意深く見回

していた。舐め回すような視線に（怪我の具合を診てるだけだろうが）カナエはほんの少し頬を赤らめ、思い出したかのようにはだけたスカートを直した。そして、

「あなたも、カインなんですよね？」

カナエはどぎまぎとしながら、曽良にそう尋ねた。その様は、まるでアイドルと出くわした女子高生みたいで、俺は失笑してしまった。まあ、曽良はカイン一のイケメンと言われている。こいつの出生を考えれば、それは当然なんだが……とにかく、そこらのアイドルよりもずっと質はいいはず。カナエが曽良を興味津々に見つめているのは、カインだから、て理由だけじゃないかもな。つっても、カナエも充分、容姿端麗。カヤに劣らず……て、だから、いちいちあいつを引き合いに出してどうするんだよ。未練がましい……。

「そうだよ。カインの曽良。松尾芭蕉の弟子。よろしくね」

お決まりのセリフを言い切り、曽良は実に満足げだった。だが、カナエはきょとんとして「芭蕉の弟子？」と不思議そうにつぶやく。

俺はひっそりとため息を漏らした。だから、そのキャッチフレーズはいい加減やめろって。自己紹介をややこしくするだけだ。

そして、もう一つ。お決まりの儀式が行われようとしていた。

「白雪（しらゆき）！」

いきなり、曽良の嬉しそうな声が耳に突き刺さった。またもカナエはきょとんとしている。目をぱちくりと瞬かせ、「はい？」と小首を傾げた。

俺は俺で、再度ため息が零れるのを止められなかった。

白雪……ね。相変わらず、センスが無い。ま、曽良にしてはマシ

なほうか？　由来はよく分からないが。

「君のニックネーム」と、曽良は満面の笑みで告げる。

当然のごとく、カナエは状況がつかめていないようで「はあ」とはっきりとしない返事をした。それが普通の反応だ。会って早々、ニックネームをつけるのはこいつくらいだろう。それも、こんな緊迫した状況で、だ。って、そうだった。こんなにゆっくりしていていいのか？

「おい、曽良」ひとまず、白雪というニックネームが良いか悪いかはおいといて。「さっさと、ここから離れるんだろ」

すると、曽良は「そうだね」と落ち着いた声で答え、おもむろに立ち上がった。

「どうも、今夜は不気味だ」

そうつぶやいてこちらに向けた顔は、どこか不安げに見えた。

「不気味……？」と聞き返してはみるが、その意味はなんとなく分かっていた。俺も感じていたからだ。妙に簡単すぎる、この不気味な状況に。

曽良は腰に手をあてがうとあたりを見回した。

「銃声が三発だよ。それでも、誰も駆けつけてこないんだ。おかしいでしょう」

「確かに」

そういうリスクを分かっていて、三発もぶっぱなすお前もおかし

いが。

「それに」と曽良は訝しそうに俺を見つめてきた。「どの監視カメラも作動してなかった」

その言葉に、俺はぎくりとした。眉をひそめ、「中もだ」と俺は洋館を見上げた。「全部、動いていなかった」

とにかく、カナエを連れ出さなきゃいけない――それに必死で、深く考えないようにしていた。だが、当然気づいてはいたんだ。あちこちで見当たった監視カメラがただの飾りと化していたことに。

『商業用』のクローンとして体のあちこちをいじられ、（有難いことに）『改良』された俺は、聴力も人並みはずれている……ようだ。意識すれば機械のほんの些細な作動音だって拾い取ることができる。おそらく、曽良もそうだろう。つまり、監視カメラが作動しているかどうかは音だけで分かる。そして……今夜のフィレンツェは、静かすぎた。そう、不気味なほどに。

こんなこと、今まで無かった。そもそも、その監視カメラは俺たちカインを警戒してのもの。『おつかい』のときは、それらを『殺す』ことが第一。停電させたり、ハッキングしたり、いろいろと手を尽くす。面倒くさい、と言って潜入してから対策を練る無謀なカインも居なくはないが……。

とにかく、今夜に限って、その監視カメラは全滅していたんだ。

曽良が何かしてくれたのか、とも考えたが……そうじゃないんだな。

「不気味なほどに、おいしい状況だよね」

曽良の珍しく低い声に、俺は何も答えられなかった。嫌な空気が流れ、沈黙が降り立つ。と、意外な人物が口をはさんできた。

「あ、あの」と、遠慮がちに割って入ってきたのは、他でもない、カナエだった。小鹿のように細い足をふんばって立ち上がり、俺たち二人を交互に見やる。「監視カメラは……たぶん、私を助けてくれた人の仕業だと思います」

「は？」

俺と曽良の声が重なった。助けてくれた人？

カナエは、「ほら、これ」と焦ったように左手首を見せてきた。いや、正しくは、そこにぶらさがる鎖のついた環を。

「私、地下で監禁されてたんです。手錠でつながれてて逃げられなくて……でも、その人が鎖を撃って、私を逃がしてくれたんです」

緊張しているのか、カナエは視線を泳がせて俺たちに必死にそう訴えた。

確かに、こんな華奢な女の子が一人で鉄の鎖を断ち切れるわけもない。監禁されていた彼女の周りに凶器になるようなものがあったわけは無いだろうし。誰かがカナエが逃げ出すのを手助けしたと考えるのが自然だ。まあ、彼女が『商業用』のクローンだったら話は違ってくるが……それはないだろう。おそらく彼女は、普通のクローン、もしくは『盗まれた』子供。単なる俺の勘だが。

「誰？」と隣で単刀直入に曽良は尋ねた。

すると、カナエは「え」と口ごもり、首を横に振った。

「名前を聞いてるわけじゃない。どんな格好だったか、とか、特徴だけでいい」

俺がそう補足しても、カナエは「暗かったから」とあいまいな返事をする。様子が変だな。そいつをかばってるのか？　いや、なんで俺たちからかばう必要がある？　カナエを逃がしてくれたなら、俺たちの味方だ。そこまで考えが回っていないだけだろうか。

「白雪は、その人が監視カメラを止めた、とそう言いたいの？　君を逃がすために？」

白雪……さっそく使うか、そのあだ名。真剣な口調に不釣合いで、調子が狂う。俺は曽良をジト目で見つめた。

一方、適応能力があるほうなのか、カナエは気にしていないようで「はい」とすかさず答えた。

「そう」と曽良はカナエに微笑んで、俺に視線をよこしてきた。「どう思う？」

どう思うって……丸投げか。俺は肩をすくめて、とりあえず分かることを答える。

「カナエを逃がして監視カメラまで止める。少なくとも、ただのスタッフじゃないだろう」

「そうだね」と、微笑するアヒル口は相変わらずだが、その目はいたって真剣だ。「おそらく、『王子さま』は警備員の誰か。ここに誰も駆けつけてこないのも、その人の采配のお陰……かなぁ」

「かもな」

って、もう予想がついてるんじゃないか。俺はつい苦笑していた。どうやら、曽良は俺に答えを求めたわけでなく、確認したかっただけのようだ。まどろっこしいことを……。

「これから、気をつけなきゃなぁ」

曽良はしばらく何やら考えてから、そう頭を捻ってつぶやいた。

「気をつける？」いきなり、何の話だ？　「なにを？」

すると、曽良は「ほら」と背後にちらりと一瞥をくれた。その視線に促されるように俺も背後を振り返る。そこには倒れている三体の身体。意識的に瞳孔を開けば暗がりでもはっきりと見える。地面に広がる、赤黒く染まった三つの水溜り。

庭に横たわる警備員の死体……そうか。俺はハッと目を見開いた。曽良の「気をつける」という意味を理解して、呆然とした。

カナエを助けたということは、『王子さま』は俺たちの味方。カナエに同情したのか、恋心でも抱いたのか、事情は分からないが、感謝すべき相手だ。

気をつける……それはつまり、そんな恩人を殺さないように気をつける、ということ。警備員を殺す日常を送っているからこそ、出てきた発想だろう。胸が押しつぶされそうになった。一体、こいつは今まで何人の――

「かっちゃん」

「！」

いきなり呼ばれ、俺はぎくりとして振り返った。目の前には、冷たい笑みを浮かべる曽良の顔があった。いや、もしかしたらいつも通りの微笑なのかもしれない。それが冷酷に見えるのは、俺の意識の問題。俺がそんなフィルタをかけているからかもしれない。

「白雪は俺が連れ出す。かっちゃんはごくフツーに帰って」

「は？」

いきなりの提案に俺はあっけにとられた。ごくフツーにって……このままおとなしく中に戻って、ただ帰宅しろ、てことか？　文句を言おうと口を開けたが、言葉を発する前に曽良の鋭い視線がそれを止めた。

「内部に裏切りものが居る。奴らがそれに気付かないわけはない。すぐにでも狩りは始まるよ」

「だからなんだ？　俺とどう関係がある？」

言うと、曽良は呆れたようにため息をつき、「自分の格好見てみなよ」と苦笑した。

俺の格好？　言われるままに身体を見下ろし、「あ」と呆けた声を漏らす。俺の柄じゃない、ピシッとしたワイシャツに黒いズボン、黒い革靴。そうだった。俺は今日、配膳人『田中はじめ』として潜入してるんだった。

「スタッフだって疑われる。当然、配膳人も。このまま、忽然と姿を消したら、怪しまれるよ」

一理ある。俺は口をゆがめて「そうだな」と観念したように答える。運がいいのか悪いのか、俺は正式にクビになってる。このまま真っ直ぐに帰っても不審がられることは無い。そこは、カヤに感謝しなきゃな。俺はそんなことを考え、鼻で笑った。

「じゃあ、カナエのことは頼む」と俺はカナエに一瞥をくれ、曽良にぎこちなく微笑んだ。「あとで『実家』で会おう。話があるんだ」

その瞬間、曽良の口元から笑みが消え去った。妙な雰囲気に「ど

うした？」と尋ねるが、曽良は何も答える様子もなく――いきなり、俺の頬に手を伸ばしてきた。そして親指でくいっと頬骨をなぞるようにこする。皮手袋のざらりとした感触がした。

「は……？」

今のは、なんだ？　あっけにとられる俺をよそに、曽良は手を引っ込めその親指をじっと見つめた。その視線の先――親指の腹――には、赤いシミがついている。俺はハッとしてあわてて頬を自分の手の甲でこすった。

「血……」

思ったとおり、しっかりと乾きかけた血がついてきた。そうか……と、目の前で殺された若い警備員を思い出した。あのとき、頬に感じたあの感触。べっとりと気味の悪い液体がつく、不快な感覚。――あの人の額から飛び出した血だ。ずっとついてたのか。

顔をしかめてそれを見つめていると、

「やっぱり、かっちゃんに赤は似合わないね」

「！？」

確信に満ちた、恐ろしく落ち着いた声だった。俺は疑わしげに眉をひそめて曽良を見つめ、押し黙った。こんなときに、何を言い出してるんだ？　色の話？　それも、血を見て？　しかも、『やっぱり』？　一度も言われたこと無いぞ。もはや、こいつが考えていることがさっぱり分からない。昔から何考えているのか分からない奴だったが……それとはまた違う。今一番不気味なのは、目の前にいる幼馴染だと思った。

「『実家』の近くの公園。分かるよね？　あそこで落ち合おう」
急にきりっと顔を引き締め、曽良は俺を睨みつけるように見てきた。
「公園？」
『実家』じゃないのか？　いぶかしげに見つめる俺に、曽良はそれ以上何も言わず、カナエに振り返った。
「用意はいい？」
いきなり話しかけられ、カナエはびくっと身体を震わせ「はい？」と小首をかしげる。曽良は構わずカナエに歩み寄ると、有無を言わさずその身体を抱き上げる。あまりに勢いよく膝を持ち上げられ、カナエの足はばたつき、スカートが大胆にめくれあがる。俺は慌てて顔をそらした。
「あ、ごめん」と曽良のおどけた声が聞こえてくる。反省の色はまったく無さそうだ。「スカート、自分で抑えててくれる？」
「は、はい！」
「大丈夫、俺は落としたりしないから」
な……それを今更掘り返すのか！　俺は恥ずかしさと苛立ちで顔が熱くなったのを感じた。「あのな」と続く文句を考えてもいないのに言い出して、俺は振り返る。
と、振り返って目に飛びこんできた光景に、俺は言葉を失った。勢いも同時に失って、唖然とする。
曽良は抱きかかえているカナエの顔を食い入るようにじっと見つめていた。それもかなりの至近距離で。今にもキスでもしかねない

雰囲気。なぜか俺が恥ずかしくなって、たじろいでしまった。耳まで赤くなっている自信がある。こんなときに、我ながら緊張感がないと呆れてしまうが……見詰め合う二人は絵になっていると思った。なるほど、この横抱きが『お姫様抱っこ』と呼ばれる所以が分かった気がした。って、何考えてんだ、俺は？

「あの？」と、カナエは目をぱちくりとさせて曽良に遠慮がちに尋ねる。「なんでしょう？」

「いや」曽良は珍しく難しい表情を浮かべ、小首を傾げた。「どっかで、会ったことある？　なんだか、見覚えがある気がして仕方無いんだけど」

その言葉に、カナエよりも俺が反応してしまった。

「お前もか？」

空気を読んでいない、と砺波に非難されかねないタイミングだったかもしれない。だが、口をはさまずにはいられなかった。

曽良はカナエから目を離し、柳眉を寄せて俺を見つめてきた。

「かっちゃんも？」

しばらく俺たちは視線を交わし、そしてどちらが先か、カナエへ目を向けた。

二人の熱い眼差しに、カナエは落ち着かない様子で翠色の瞳をきょろきょろとさせている。

「私は……無いのですが」

妙なのは、その声には懐かしさを感じない、ということ。ただ、

彼女の見た目には明らかに見覚えがある。茶色まじりの髪と太めの眉。雪のような白い肌。おっとりと優しげな灰色がかった翠の瞳。柔らかな輪郭の丸い顔。どこかで見たことがある。いや、というより……誰かの面影がある――そう思えてならなかった。

最後のおつかい　―５―

「後悔してるの？」

ぴたりとラピスラズリの背を撫でる手が止まる。

運転手さんが喫煙者なのか、前に乗り込んだお客さんがそうなのか、タクシーの中はほんの少しだけ煙かった。眩いトーキョーのネオンが窓から差し込んで、ラピスラズリの白い綿毛を様々な色に彩らせている。

隣に座るユリィの視線を確かに感じながらも、私は振り返ることもできずに黙り込んだ。――図星だからだ。

「後悔してるんだね」ユリィは確認するようにそうつぶやいた。「何のために、君に全部話したと思っているの？」

今度は責めるような口調だった。

「後悔してもらうためじゃない。諦めてもらうためじゃない。君に選択肢を……希望を与えようと思ったんだ」

選択肢？　希望？　ざわっと気分の悪い感情が心の中で渦巻いた。それが何かは分からない。でも、きっと邪悪なものだ。抱くべきでない感情だ。ぎゅっと拳に力がはいった。

「希望なんてない。他に選択肢なんてない」

悪魔でも乗り移ったかのようだった。得体の知れない感情に突き動かされ、私はユリィを睨みつけ、気付けば怒鳴りつけていた。

「私か世界か、選択肢は二つに一つ。それ以外に、選択肢なんてない。あの日、そう教えてくれたのはユリィじゃない！」

申し訳程度の音量で流れるラジオの野球中継がにぎわいだした。点でもはいったのだろうか。

ユリィは何か反論するわけでもなく、涼しげな表情で私をじっと見つめていた。あまりに冷静な視線に、自分が取り乱したことが恥ずかしくなって、顔を前に向きなおす。と、運転手さんとバックミラー越しに目があった。一気に恥ずかしさが増して、私はうつむいた。

「私は世界を選ぶ」運転手さんに聞こえないように（といっても、当然聞こえてはいるだろうけど）、小声でそう囁いた。「そして……土に還る」

避けられない『未来』を口にする私の声は震えていた。

私はぎゅっと自分の腕を掴んだ。夜風にあたったせいか、ひんやりと冷たい。彼が抱きしめてくれたら、きっとすぐにでも温まるんだろうな。そんなことを考えて、苦笑していた。粘土が、人肌を恋しく思うなんて……。腕をつかむ手に力が入り、爪が食い込んだ。

この身体も心も、彼との思い出も、彼への想いも、あと一ヶ月も経てば消えてなくなる。人の形を失い、粘土に戻って眠りにつく。

「だから……私は彼と別れようと思ったの」

彼を苦しめたくなかった。彼をこれ以上、『神の裁き』なんてものに巻き込みたくなかった。なにより……彼に、私か世界か、そんな残酷な選択肢を知って欲しくなかった。彼はまだ知らないから。

『テマエの実』の真実を……。

この世界のどこかで彼が生きていてくれるなら。誰かと幸せに暮

らしてくれるなら。そのためなら、この身を犠牲にしてでも世界を残す価値はある――それでいいと思ったんだ。だから、嘘もついて、彼を傷つけるようなことも言って、無理やり引き離した。私のことも、『裁き』のことも全部忘れて、幸せになって欲しいと思ったからこそ……！

「なのに」こみ上げてくるものがあった。胸が熱くなり、息苦しくなって、私はぐっと堪えるように目をつぶった。「なのに……」

それは重くのしかかる後悔。何度も何度も頭の中で繰り返される糾弾の声。積もり積もる自責の念。

なぜ、彼を行かせてしまったんだろうか。死と隣り合わせの世界に、なぜ彼を行かせてしまったんだろう。

「もし、彼の身に何かあったら……！」

それ以上、口にすることも憚られた。

もし万が一、彼の身に何かあったら……そう思うだけで、身が切り刻まれるかのように痛む。苦しくてたまらない。不安でたまらない。彼が恋しくてたまらない。

こんなことになるとは……彼がカインに戻ることを選ぶなんて、思いもしていなかった。

情けない。いつも甘い。強さも覚悟も、全て中途半端。これのどこが世界を滅ぼす女？　なんて、無力なの。後悔に打ちひしがれて、身体を丸めた。――そのときだった。

「君を慰めることはしないよ、パンドラ」

思わぬ言葉にハッとして顔を上げる。慰めてほしいと思っていたわけではない。でも……意外な返しだった。

「君が選んだことだ。その結果を君は受け止めなきゃいけない」

ユリィは窓の外を見つめていた。感情がまるで無いかのような無表情で。

「この世界で、君だけが苦しいわけじゃない。生きることさえ選べない人だっている。生まれることさえ許されない命もある。何かを選べるということは、贅沢なことなんだ」

ネオンに照らされる彼の横顔は、どこか寂しげに見えた。あまり感情を表には出さない彼には珍しくて、私は心配にさえなった。

「ユリィ？」と声をかけるが、彼は返事をすることなく視線を落とす。そして、かすかに聞こえる程度のくぐもった声でつぶやく。

「兄さんだって、本当は愛したい人がいるんだ」

兄さん――その言葉に心臓を掴まれたかのようにどきりとした。ユリィのお兄さんといえば……タール・ニヌルタ・チェイス。人を嫌う神であり、私を創りだしたという神、エンリル――その子孫であるニヌルタ一族の当主。私と同じ使命を持つ人。そして、ユリィが探している人だ。

「愛したい人？」と遠慮がちに聞き返すと、ユリィはつらそうに眉を曇らせた。

ふと、膝の上で座っていたラピスラズリが立ち上がり、ぴょんと飛び降りた。とことことシートの上を渡り、ユリィの膝に飛び乗る。自分はここにいるぞ、と訴えるように喉を鳴らし、ユリィのお腹に

顔をすり寄せる。まるで慰めているみたいだ。ユリィは目を細め、その背中を撫でた。手が動くたびに、中指の指輪が四方に蒼い光を反射させた。

じっとその様子を見つめていると、

「でも、アナマリアは殺されてしまった。兄さんは彼女を愛せない」

「！？」

殺された？　思わぬ言葉が飛び出して、私は息を呑んで硬直した。いきなり、何の話を始めたの？

「兄さんだって」とユリィは悔しげに顔をしかめた。その表情も、ユリィらしくはない。こんなに表情を変える彼を初めて見た。「愛する人との未来を望みたいはずなんだ。その選択肢があるなら……」

そこまで言ってユリィはこちらに振り返った。窓から差し込むネオンがまるで後光のように、彼を照らしている。神々しささえ感じた。

「だから」と厳しい顔つきで、ユリィは薄い唇をわずかに動した。

「どんなに君が後悔しようとオレは同情しない。これは君が選択した結果だから」

はっきりと言い切られ、ズキリと胸が痛んだ。

「君が悪い、とかそういう話をしているんじゃないよ」

まるで私の心を読んだかのように、すかさずユリィは優しげな声でそう付け加えた。慰めない、と言っていたはずなのに、その声色にはそんな意図が感じられた。

「ただ、もう一度、よく考えて欲しいんだ。後悔から学んだことがあるはずだから」
「学ぶ？」ユリィの茶色い瞳をじっと凝視して、私は頭を捻る。「何を？」
「君が本当に望む選択肢は何か」

私は眉をひそめていた。同じところを堂々巡りしている気がした。世界を残して消え去るか、世界を滅ぼして生き残るか。私に残されている選択肢はそれだけ。ユリィこそ、それをあの日、昇降口で私に打ち明けた人物ではないか。

「だから――！」と私は声を荒らげてそれを言いかけた。が、ユリィのすばやい切り替えしにさえぎられる。

「無いものは、新しく創ればいい。人間はそうやって世界を築いてきたはずだ」

その口調も、私を見据える瞳も、確信と自信に満ちていた。私はあっけにとられて言葉を無くした。

「このまま、パンドラとしての運命を全うするのか。それとも、別の選択肢を創るのか。選ぶのは君だ」
「選択肢を……創る？」考えもしなかったその『選択肢』に、私はただ呆然としていた。「そんなこと、できるの？」

ぼんやりと尋ねると、ユリィは真剣な表情で首を横に振る。

「分からない」とはっきりと言い、でも、と付け加えた。「信じてみても損はない」

何の根拠もないんだ。ただ、その可能性に賭けてみよう、という提案にすぎない。でも……ユリィの自信に溢れた眼差しに見つめられていると、あり得るかもしれない、という気持ちになってくる。信じてみたい――そう思えてくる。

「だから、もう一度、よく考えて」ユリィはぐいっと身を乗り出し、私を食い入るように見つめてきた。「君は、この世界でどんな未来を望むのか。まだ時間はあるんだ」

「みらい……」

タクシーのエンジン音も、ラジオの歓声も、全て聞こえなくなった。無音の世界にいるようだった。

未来――私とは無縁なものだと思っていた。諦めていた。自分が世界を滅ぼすために創られた人形だ、と分かったあの日から、未来を望むことを辞めていたんだ。未来を考えることもしなかった。考えても無意味だと分かってしまったから。来ることの無い未来に思いをはせて何になる？

でも、もし、望んでいいとしたら……もし、未来を欲していいのなら……。

腕を掴む手が小刻みに震えていた。

「私は……」

その望みを言うことも憚られた。叶うはずも無いのに、虚しくなるだけだ、と思ったから。口にしてはいけないのだ、と思っていた。

「私は、彼と一緒にいたい」

ありきたりでいい。平凡でいい。完璧でなくたっていい。彼と一

緒にいられるなら、どんな形であっても構わない。ただ……傍にいたい。彼の傍にいられれば、それでいい。
じんわりと目の周りが熱くなっていく。喉からは水分がなくなって、息苦しい。たまらず目をつぶり、大きく息を吐いた。

「そう」とユリィが囁くようにつぶやいた。「それが、君の幸せなんだね？」
「！」

ハッと瞼を開き、ユリィを見やる。

「幸せ？」

言われて、そうかもしれない、と思った。それが、きっと私の願う幸せなんだ。
不意に、彼は「それなら」とつぶやいた。その瞬間、彼の膝の上にちょこんと座っていたラピスラズリが黄金の光を放ち、そして跡形もなく消え去った。まるで今まで見ていたものが立体映像だったかのように、文字通り、姿を消してしまった。
ぎょっとして「ラピスラズリ！？」と叫ぶ私をよそに、ユリィはいたって落ち着いた様子で背もたれによりかかる。

「君を幸せにしろ、と彼に頼まれたから」
「え？」
「オレは約束は破らない」

ユリィは眠たそうな微笑を浮かべ、窓の外を眺めた。
だから……なに？　彼って、和幸くん？　意味が分からず呆然とユリィを見つめていると、車が信号で停まり、ふと、窓の外で白い何かが落ちてきたのが見えた。ちらりとしか見えなかったし、錯覚

かもしれない。でも、それは白い羽根のように見えた。まるで天使の羽根のような真っ白い美しい羽根。

最後のおつかい　―６―

カインが『実家』と呼ぶ教会から一キロほど離れた小さな公園。そこは昼も夜も変わらず人気がない。遊具といえるものが、砂場と鉄棒しかない上に、鉄棒は一回逆上がりをすれば折れそうなほど錆びている。鬼ごっこができるほど広くもなく、木登りができるような高い木もない。子供がよりつかないのも無理は無かった。

それでも、彼にとっては思い入れのある場所に違いはない。幼いころ、『実家』が近いということもあって、兄弟たちと学校帰りにここで遊んでいたのだ。兄弟といっても、（苗字は同じだが）血のつながりはない。共有していたものといえば、境遇や秘密、生業――そんな一風変わったものだけだ。だが、彼は自信を持って言える。それは血縁以上に固い絆だ、と。

特に、同じ年のある二人とはどこに行くにも一緒に行動していた。勝気な少女と気ままな少年。毎日問題を起こす二人のせいで、彼は小学生ながらに気苦労が耐えなかった。そのお陰で、精神的に早く成熟したといってもいい。が、中学入学とともに、さすがにこれ以上振り回されるのは御免だ、と彼は彼らと距離を置いた。

そして――

一つの電灯が砂場にしゃがむ少年をぼんやりと照らしていた。フードつきのジャケットを羽織り、なにやらせっせと砂をいじっている。十年ほど前とは違い、随分大きくなった背中に、それでも懐かしさを覚え、和幸は目を細めた。

「その年で砂遊びか、曽良？」

ゆっくりと歩み寄りながら、彼はそう声をかける。言葉と一緒に、初冬の肌寒さを象徴するような白い煙が口から漏れた。

「トンネルでもつくろうかと思って」曽良は楽しげにそう答え、振り返る。砂をいじり始めてまだ時間は経っていないようで、両手の平や爪はまだ綺麗だった。「かっちゃんもやる？」

「遠慮しとくよ」

子供に話しかけるようなやんわりとした口調で言って、和幸は彼の背後で立ち止まる。電灯の光を彼がさえぎって、曽良の全身を大きな影が覆った。

「よく、ここで遊んだよねぇ」

水分が無いせいで固まる様子のない砂を、それでも曽良はせっせと山の形に積み上げる。和幸からはその表情は伺えないが、懐かしむような声色で彼がどんな顔をしているかは大体予想がついた。

「そうだな」と答える自分の声も、曽良のそれによく似ている。和幸は照れくさそうに苦笑して、曽良の隣に腰を下ろした。

いろいろと話さなきゃいけないことがあるのに、なぜか和幸は言葉が出てこなかった。隣で砂と格闘する曽良の気配を感じつつ、ただじっと前を見詰めていた。何から話したらいいのか分からないわけではない。こうして兄弟の隣で何も考えずにぼうっとする時間を――幼いころは当たり前のようにしていたことを――じっくり味わいたかったのかもしれない。

しばらくそうして、「だめだ」とぼやく曽良の声が聞こえてきた。どうやらやっと諦めたようだ。どさっと横で音がして、やっと和幸は横に目をやる。丁度、曽良が砂に座り込んだときだった。涼しい表情で夜空を振り仰ぐその横顔は、男の和幸でさえ色気を感じるほど様になっている。

「カナエはどうした？」と和幸はやっと口を開いた。曽良は振り返

ることもせず、「ひとまず『実家』に置いてきた。外は寒いからね」と答える。特に感情の感じられない口調だった。

「そうか」と言って和幸はまた顔を前に向ける。その方角の先には、かつて（といっても二週間ほど前まで）自分が『実家』と呼んでいた教会がある。和幸の表情は曇った。

――　日向（こっち）にはもう俺の居場所はない。だから、帰るだけだ。ふさわしい場所に。

カヤに放った別れの言葉が脳裏によぎる。そして疑問がそれを追いかけた。――果たして、自分にとって『ふさわしい場所』とはどこなのだろうか、と。

カインに戻る気だった。視線のずっと先にある教会を再び『実家』と呼ぶつもりだった。隣にいる少年を、また『兄弟』と呼ぶつもりだった。『無垢な殺し屋』を名乗るつもりだった。

だが、もうその自信はなくなっていた。あの教会はまだ自分にその扉を開いてくれるのか。いや、その前に、自分にその扉をくぐる気があるのか。大切な家族……果たして自分はその一員に戻れるのだろうか。和幸には分からなくなっていた。

それを確かめる方法は一つ。この心の中で渦巻く黒いもやを消し去るためには、吐き出す他はなかった。

「なあ、曽良」肩膝を抱える手に力がこもる。自分が今から何をしようとしているのか――考えただけでも、恐ろしくなる。心の臓も必死に脈を鳴らして和幸に「やめろ」と訴えかけていた。聞くべきではないことは分かっている。だが、聞かずにはいられない。おそらくは、『無垢な殺し屋』と呼ばれる兄弟たちに最も尋ねてはいけない質問だ。それでも、和幸は問いかけた。

「なぜ、『殺し屋』なんてしてるんだ？」

一瞬だったが、視線を感じた。唐突な、それも思いもしなかった質問に、驚いてこちらを振り向いたのだろうか。和幸は曽良を見ることは出来なかった。眉を曇らせ、視線を落とす。

「お前は……」と、首でも絞められているかのような苦しげな声を漏らす。「蟻も殺せなかった。延々と蟻の行列を眺めて、楽しそうにしてる馬鹿な奴だった。だから……」

和幸はそれ以上は口には出来なかった。ぎゅっと唇を結び、押し黙る。

ショックだったのかもしれない。お互い『殺し屋』と呼ばれるようになる前に――真に『無垢』であったときに――遠ざかってしまった。だから和幸の中で、曽良は小学生のころから成長していなかったのだ。ただの『馬鹿な良い奴』。それが、目の前で人を殺した。言い知れぬ恐怖を覚えた。大切な何かを失ったような気分だった。

分かっているつもりだった。自分以外の家族が『殺し屋』と呼ばれるに値する行いをしていることを。理解している上で、家族と呼んでいたつもりだった。だが――。

「もし」と曽良が口火を切るまで、随分長い間、沈黙が続いた気がした。

ようやく和幸は曽良に視線を向ける。曽良はやはり涼しげな表情でそこに座っていた。とんでもない質問をしたはずなのに、動揺は見当たらなかった。

そして曽良のアヒル口がおもむろに開き、

「もし、かっちゃんが蟻アレルギーで、命に関わるというなら、俺

は世界中の蟻を殺して回るよ」
「……は？」
思いもよらなかった返答に、和幸は無意識に間の抜けた声を漏らしていた。蟻アレルギーというものが実在するのかすら和幸には分からない。曽良らしいといえばそうなのかもしれないが、何を言い出したのか、全く理解できなかった。
曽良はそんな和幸の様子を楽しむようにくすりと笑んで、愛しそうな眼差しを月に向けた。
「俺が『殺し屋』なのは……ただ偶然、家族を脅かす存在が人間だったから」言って、曽良は視線だけ和幸によこす。「家族の脅威は全て取り除く。俺がしているのはそれだけだよ」
和幸の眉がぴくりと動いた。曽良の（やはりセンスの無い）喩え話の意図を汲み取ったのだ。途端に、曽良の視線を避けるように苦い表情を浮かべて顔をそらす。罪を糾弾されているような気分だった。胸が締め付けられるように痛む。それを堪えるように固く瞼を閉じ、「俺は」と悔しそうな声を漏らした。
「俺は、そんな考え方はできない」
閉じた瞼の裏に浮かんだのは、全く関係のないはずの少女の笑顔だった。和幸はそんな彼女の幻影から逃れるように目を開く。それでもやはり、はっきりと残ってしまうのだった。これから先、何が起きても消えることはないのだろう、彼女への想い――。
「危険だから、殺せばいい。そんな考え方はできないんだ。たとえ、それが……」

世界を守るためだとしても――和幸はその言葉を喉の奥に押し込んだ。
曽良の話とこれは無関係だ。見当違いの返答をした、と自覚している。ただどうしても、曽良の言葉から彼女を連想せずにはいられなかったのだ。
曽良の言う家族の脅威。間違いなく、カヤもそんな存在に含まれることを和幸は知っていた。
冷たい風が容赦なく吹き付けて、曽良が創り上げた小さな山がさらさらと砂の海へと消えていった。――そのときだった。
「そんなかっちゃんだからこそ、カーヤは好きになったんだろうね」
いきなりその名が飛び出して、和幸は目を見開いた。確かに、カヤのことを考えてはいたが……まるで心の中を読まれたような気がして、和幸はあわてふためいた。
「なにを……急に！？」歯切れ悪くそう怒鳴って、和幸は不機嫌そうに顔をしかめる。「カヤの話はやめてくれ」
口ごもり、和幸はそっぽを向いた。落ち着かない様子で、胸元の十字架に手をやる。
そんな和幸を横目で見ながら、曽良は慰めるように話しかける。
「かっちゃんは彼女の傍にいるべきだよ」
「は！？」一度はそむけた顔を戻し、和幸は曽良を睨みつける。「お前……これで聞いてたんじゃないのかよ！？　カヤと俺は別れたんだ」
和幸は掴んでいた十字架をひっぱり、曽良に見せ付けた。何も知らない人間が傍からこの様子を見れば、和幸がネックレスを見せび

らかしているように思うかもしれない。が、彼の真意はそんなことではない。
和幸の胸元にぶら下がるネックレス――一見、それはただのロザリオだが、中には盗聴器と小型の爆弾が仕組まれている。何を隠そう、曽良が和幸と鼎を『迎え』に行ったのも、その仕込んだ盗聴器を通して和幸のメッセージを聞いたからだ。

――フィレンツェ、東側の庭を抜けて外に逃がす。

それが、曽良へ届くように和幸が十字架にこめた『お祈り』だった。

「どうせ、俺とカヤとのケンカも全部筒抜けだったんだろ！？」呆れと苛立ちが混じったような声色でそう怒鳴り、和幸は大きくため息をつく。本当なら、こうして口に出したくも無い出来事だ。「カヤはもう俺を必要としてない」
「必要としてるよ」間髪いれずに曽良はそう反論した。「これまで以上に」

そう言う曽良の声色にはからかっている様子は一切ない。いや、真剣そのものといっていい。和幸はそれに気付いて、眉根を寄せて曽良を見つめた。その瞳には怒りも照れもない。ただ純粋に不思議だった。

「知ってるんだ」

ぽつりと曽良はそうつぶやいた。憐れみの混じった神妙な面持ちで。
和幸は妙な胸騒ぎを感じて、ひきつった笑みをこぼす。「なにを……」と尋ねる声は不安定に揺れていた。曽良は覚悟を決めた厳し

い眼差しで和幸を見据え、そして――

「カーヤはもう全部知ってるんだ、かっちゃん」

最後のおつかい　―７―（前書き）

具体的な地名がでてきますが、実際のものとは全く関係ありません。
あくまでフィクションです。

最後のおつかい　―７―

「君の本当の名前はパンドラ。世界を滅ぼすために創られた神の人形なんだ」
「は……はい？」
「アルメニアのレバノンに、アトラハシスという一族が管理している神殿がある。太古の昔に神から授かった箱を保管している神殿だ」
「えっと……ユリィさん、でしたよね。ごめんなさい、何の話をされているのか……」
「それは、『パンドラの箱』と呼ばれている。君はその箱に眠っていた土。それが魂を得て意思を持った土人形だ」

俺はただ唖然として、その会話に聞き入っていた。曽良の持つ携帯電話（によく似た機械）からスピーカーフォンで流れてくる会話――カヤと、もう一人……あいつの婚約者として突然現れたユリィという男の声だった。

「信じられないかもしれませんが、落ち着いて聞いてください、神崎先輩」

不意に、聞き覚えのある子供みたいな声が聞こえてきた。リストだ。あいつも居るのか。

「これ、新しい劇の話なの？」と尋ねるカヤの声は、困惑している。
「神話の劇でもするの？」
「劇じゃない。真実を話してる」容赦なく、ユリィがそう答えた。会ったときもそうだったが、今にも眠ってしまいそうなほどぼんやりとした口調だ。「君は知るべきだ。自分が何者か。なぜ、君がこの世界に現れたのか……その本当の理由を」

思わず俺は身を乗り出し、会話を再生しているケータイに手を伸ばした。何をしようとしたのかは自分でも分からない。ただ、気づけば腕が勝手に動いていた。が、指がその黒い機械に触れる前に、会話は止まった。いや、止められた。曽良の親指があるボタンをすばやく押し、パタンとケータイを閉じたのだ。

ハッと我に返って曽良を見上げると、

「ここからは有料でーす」そんな冗談めいたことを言ってはいるが、表情には気遣っている色がはっきりと浮かんでいた。「全部聞くことも無いでしょう」

低い声でつぶやくように言って、曽良はケータイをポケットにしまった。

俺は言葉も出ずに、呆然とそのポケットを見つめることしかできなかった。

「火曜日の朝に盗聴した会話だよ」慰めるような声色だ。曽良の視線を感じる。それでも俺はうつむいたまま、曽良のポケットから目を離せずにいた。正確に言えば、ポケットの中のもの――首にかけたロザリオと電波でつながっている機械から。

「火曜日……」とつぶやき、俺は焦りにも似た緊張を感じた。みぞおちで得体の知れないものがうごめいているよう感覚がした。

忘れるはずもない。三日前のあの日。自宅謹慎が（なぜか）解けて、学校に復帰した日。カヤが早退したと聞いて見舞いに行った日。そして――

「カヤにふられた日だ」

ひどい脱力感に襲われた。俺はがくりと頭を垂れて、唇をかみ締める。「あのとき、様子がおかしかったのは……」

「カーヤはかっちゃんを嫌いになったわけじゃない。大好きだからこそ、引き離したんだよ」

言われて、俺は顔が熱くなるのを感じた。こいつは、よくそんなセリフをさらりと言える。

「今まで盗聴した会話、全部聞いたら分かるよ。カーヤは、かっちゃんをこれ以上巻き込みたくなかったんだ。だから、必死に引き離そうとした。それが真相だよ」

「……」

真相……か。確かに、謎は解けた。カヤの不可解な行動全てに合点がいった。俺を巻き込みたくない……か。あいつらしい。――なのに、これっぽっちもすっきりしない。悔しさと憤りばかりつのっていく。

俺はぐっと砂を握り締める。

リストの奴、何を考えてるんだ？　俺がカヤに全部打ち明けたい、と提案したときはあんなに抵抗を示していたのに。命を落とすかもしれないから、とかなんとか言って。なのに、なんで急にカヤにぶちまける気になったんだ？　それも、俺の知らないところで……。なぜ、俺に何も言わない？　あのユリィって奴も、何者なんだ？『裁き』のことを知っている。カヤの正体を知っている。神の一族なのか？

なにがどうなってるんだ！？

「ごめんね、かっちゃん」不意に、曽良が珍しく弱々しい声でそうつぶやいた。「どんな突拍子も無い話でも……兄弟の言うことは全て信じる。そう決めてたのに……」

俺は顔を上げ、「は？」と眉をひそめる。急に何を言い出したんだ？　曽良の横顔は苦悩でゆがんでいた。俺の視線を恐れているような印象さえ感じた。

「カヤは世界を滅ぼすかもしれない――かっちゃんのその言葉を、真面目に取り合おうともしなかった」

俺の言葉……？　なんの話だ、と言いかけ、ぎくりとして俺は目をむいた。「あ」と間抜けな声が漏れる。脳天にしびれるような衝撃が走った。そういえば……！

「俺に助けを求めてくれたのに……心の病だ、なんて疑って」

「いや、それは……」

俺は口ごもり、頭をかいた。

そうだった。俺は曽良につい言ってしまったことがあった。葵のことでカヤとケンカをしたあと。

――カーヤは普通の女の子だよ。

そう言った曽良に嫉妬のようなものを抱いて、つい口走ってしまったのだ。カヤは世界を滅ぼすかもしれないんだぞ、と。何の考えもなしに。やけくそに近い勢いだった。今思うと、呆れるほどに子供じみた行動だった。曽良はそのとばっちりを食らったに過ぎない。

「だから」と俺の言い訳を聞くこともせず、曽良は低い声で言う。

「これはお詫び」

お詫び……か。言えないな。相談したかったわけじゃない、なん

て。
そんな俺の心中をよそに、「にしても」と声のトーンを変えて曽良は呆れたような笑みを浮かべた。
「参ったよ。『黒幕の娘』かどうか確かめるために盗聴してたのに、まさか……」
曽良はそこで口を噤んだ。何を言おうとしたのかも、なぜ言うのを躊躇ったのかも、容易に分かる。
「よく、信じる気になったな」
頭の中は混乱を極めているが……ひとまず気を落ち着かせ、俺はそう尋ねた。曽良はこちらに一瞥をくれ、「まあね」とため息混じりに答える。
「最初は信じてなかったよ。新手の宗教か、悪徳商法か、イタズラか……そんなとこだと思った。カーヤは人が良いから騙されても不思議じゃないし」
それが普通の反応だろうな。『災いの人形』、神の『裁き』、『収穫』の日……非現実的すぎて、信じるほうがおかしいくらいだ。神の血をひくリストに、反則的な力で信じ込まされた俺とは違う。
曽良はふと顔をしかめて「でも」と低い声でつぶやいた。
「信じざるを得ないことが起きちゃったから」
「信じざるを得ないこと？」つい、ぎこちない発音で鸚鵡返しにしていた。「何が起きたんだ？」
「ちょっとね」

軽い調子でそうごまかして、曽良は肩を竦める。「それより」とすかさず、言葉を続けた。まるで俺に口をはさむ暇を与えないかのように。

「早く、『迎え』に行ってあげなよ」

「……迎え？」

ぱちくりと目を瞬かせていると、「もう」と曽良はわざとらしくため息をもらす。

「今すぐにでもカーヤに会いたいくせにぃ。明らかに、そわそわしてるよぉ」

「な……」

ぼうっと頭のてっぺんまで熱くなるのを感じた。顔をそらして、「別に」と条件反射で言いそうになったが――ここでそんな照れ隠しはみっともないように思えた。いや、無意味だ。

「ああ」と俺ははっきりと口にした。からかわれるのを覚悟で、素直に笑顔をこぼす。「会いに行きたいよ。今すぐ」

会って、話したい。その思いが心の中に充満していた。細かいことは、この際どうでもいい。今すぐあいつのところに行って、とにかく話がしたい。やっとちゃんと話し合える。もう俺たちの間に、溝は無い。お互い、今度こそ隠すものは無くなったんだ。

曽良は満足そうに目を細めて頷いた。と、いきなり、親指をぐっと立てて（周りには誰もいないのに）小声で囁きかけてくる。ついさっきまでの大人びた表情はどこへやら。珍しい虫でも見つけた子供みたいな意気揚々とした表情だ。

「今夜は特別に、盗聴しないであげるから。存分に仲直りして。あ、録音もしないよ」
「な……なに、言ってんだ？」
眉根を寄せて尋ねると、曽良は「いやだなぁ」と演技じみた声をもらす。
「この際、勢いで卒業しちゃえば……」
そ、卒業――ざわっと胸焼けのようなものを感じ、一気に頭に血が上った。
「お前はこんなときでも、そうなのか！」と怒鳴って、曽良の頭を勢いでひっぱたいていた。顔が熱いのは、怒りのせいだ……そう自分に言い聞かせる。「いい加減、ほっといてくれ」
「ほっとけないんだよぉ、おもしろいから」
叩かれたというのに、気持ち悪いほど嬉しそうに曽良は笑っていた。さっきまでの真剣な雰囲気はどこいったんだ？
「ああ、ったく！」俺で遊びやがって……昔と何も変わって無いな。苛立ちに身を任せるように乱暴に立ち上がり、曽良を睨むように見下ろす。「これだから、別の中学に行ったんだよ、俺は」
「ええ？　そうだったの？」
気付いてなかったのか、こいつは。
「てか、お前」出し抜けに、重要なこと――今までうっかり忘れていたことがおかしいくらいの大事件――を思い出し、俺は眉間に皺を寄せた。「カヤに……キスしたよな？」

「げ」と、曽良はわざとらしく口をゆがめてそっぽをむいた。「このタイミングでそれ持ち出すかなぁ」
「お前もカヤのこと好きなんだろ！？　よく平気で俺にカヤとやれ、て言えるな」

言った瞬間、「あ！」と曽良は人差し指を夜空に向かって突き出した。やたらと嬉しそうな声に、俺は身の毛がよだつほど嫌な予感がした。曽良はすっくと立ち上がると、振り返り、人差し指を俺に向ける。

「誰も、やれ、とは言って無いよ」
「……は！？」なんだ、その勝ち誇った表情は。「言っただろ！卒業しろ、て」
「何を卒業しろ、とは俺は言ってないよ。かっちゃんったら変なことばっかり考えて、いやらしぃ～」
「……っ！」

体中の血が沸騰するようにたぎった。この馬鹿は……小学生と同じノリじゃねぇか。砺波もこいつも、なんでいつまでたっても成長しないんだよ！？
といって……昔と同じような手にかかる俺も俺だな。実際、何の反論も出来ないし。
成長してないのは、俺も同じか。思わず、ため息が漏れた。

「ま」と悪びれた様子は一つもなく、曽良は満面の笑みを浮かべる。
「かっちゃんがそういうつもりなら……初体験の思い出にこっそり録音しとく？」

言って、曽良はポケットからさっきのケータイを取り出して俺に見せてきた。

ああ、もう……こいつの冗談に品がないのは誰のせいなんだ。明らかに親父ではない。静流姉さんか、アリサ姉さんか、あのへんだな。もしかしたら、こいつのＤＮＡに問題があるのかもしれない。

とにかく、何を言っても無駄だな。これで怒っても、こいつが調子付くだけだ。俺の反応を楽しんでるだけなんだからな。

「いいや」と、俺は平静を装い、首の裏に両手を回す。「これは返すよ」

言いながら、ネックレスをはずし、左手に十字架を収めると曽良に差し出した。

「もう必要ないだろ？　カヤの正体は分かったんだ」

自虐的な皮肉を含め、俺は冷笑する。

曽良はすんなりと受け取るわけでもなく、じっと俺を見つめていた。さっきまでの無邪気な雰囲気は消え去り、冷たくも感じる落ち着いた表情を浮かべている。

「どうした？」受け取る気がないようにしか思えず、俺は遠慮がちに尋ねる。「もう……これは必要ないだろ？」

ちらりと曽良の視線が十字架に落ちた。ふうっと息をつき、「そうだね」と低い声でつぶやく。が、すぐさま「でも」と続けて俺を睨みつける。

「受け取るわけにはいかない。かっちゃんには、これをカーヤに返して欲しい」

「は！？」冗談じゃない。盗聴は……百歩譲っていいとして、爆弾が仕込まれてるんだろ。そんなもの、誰がカヤに渡すか。「なに言

ってんだ！？」
「トミーのためだよ！」
思わず、はっと息を呑んだ。目を見開いて、言葉を失う。
そんな俺を見て、曽良は「やっぱりね」と、怒るわけでも、呆れるわけでもなく、納得したようにため息をついた。
「かっちゃんにこれをバラすとしたら、トミーくらいだろう、とは思ったんだ」
「あ、いや……」
やべ。うっかりもいいとこだ。背中に冷や汗が伝う。
この十字架がカヤへのプレゼントなどではなく、カヤの正体を探るための盗聴器――それも、万が一のための小型爆弾つきの――であることをわざわざ知らせに来てくれたのは（曽良の予想通り）砺波だ。その行為は、カインへの裏切りと取られてもおかしくはない。
――わたしがネックレスのこと、あんたにバラしたって分かったら、わたしが『勘当』される！
事実、砺波は怯えているようだった。だからこそ、俺はカヤにひた隠しにしてきたんだ。といってもまあ、カヤは俺と口を利こうとしなかったから、話すチャンスもほとんど無かった。隠していたという意識はないが。
「頼む」と俺は十字架を握り締めて、曽良に迫った。「砺波はお咎めなしにしてくれ！　俺とカヤを心配してくれただけなんだ。あいつにしては珍しく」
一言余計だった、と我ながら思ったが、無意識に出てきてしまっ

た本音なのだから仕方ない。

「分かってるよ」呆れたようにそう答え、曽良は腕を組む。「だからこそ、それをカーヤに返して、て言ってるんだ」

「だからこそ……って、どういうことだ？」

「今夜のこと――つまり、白雪のことは、何かしらでっちあげてごまかすよ。でも、さすがに俺がそのネックレスを持ってたらまずいでしょう。なんでカーヤがそれを持ってないんだ、どうやって取り戻したんだ、てことになる。そうなったら、ごまかしようがないよ」

「そう……だな」

曽良の言うことも一理ある。カヤにこれを渡すのは気がひけるが……『勘当』のリスクを負ってまで俺にこのことを伝えてくれた砺波を裏切るようなことはしたくない。いや、まあ、こうして曽良にバレたんだから、結果的には裏切ったんだろうが。砺波に知れたら、何をされるか。想像しただけでも恐ろしいな。

「期間はあのパーティーの日から一週間、てことになってる。あと二日だけだよ」

曽良は慰めるような声色でそう付け足した。俺はなくなく頷いて、十字架をとりあえずポケットにつっこむ。って、これ……爆弾なんだよな。こんなにがさつに扱ってて大丈夫なんだろうか。

「最後の『おつかい』だね」

ぽつりと曽良がそうつぶやいた。急になんだ？　と目を丸くすると、曽良はケータイごと手をポケットにつっこんでぎこちなく微笑んだ。

「その十字架を、神崎――じゃなかった。本間カヤに渡すこと。それで、最後。二度と、カインの真似事はしないで」

途中から脅すような低い声に変わっていた。責めるような、それでいて心配そうな眼差し。こいつは……と、俺は苦笑を禁じえなかった。

十字架の秘密を知らせにきたとき、砺波は言っていたな。曽良はリーダーには向いていない、と。確かに、そうなのかもしれない。こいつは、リーダーにしては優しすぎる。

「分かってるよ」安心させるように、俺は微笑みかける。「もう二度と、カインごっこはしない。今度こそ、約束する」

だが、曽良の表情は曇ったままだった。「かっちゃんは」とかすれた声でつぶやいて、視線を落とした。

「かっちゃんは家族の希望になる」

「き、希望……？」いきなり転がってきたその単語に、俺はつい顔をしかめた。「いきなり、なんだよ？　気持ち悪いな」

また何かからかうつもりだろうか、とも思って冗談交じりにそう言ったのだが……曽良の顔は真剣だった。

「人を殺さない生き方がある。幸せを選ぶ生き方がある。そのために、カインを辞めた人間がいる。それは、いつか弟たちの希望になる。

クローンでも、表の世界で生きられる。かっちゃんはそれを証明しなきゃいけない。だから、かっちゃんは帰ってきちゃだめなんだ。表の世界でどんな惨めな目にあっても、たとえ死体になっても、こっちの土は踏ませない。リーダーとして、俺はどんな手を使ってで

もかっちゃんを追い返すよ」

あまりにも曽良の言っていることが意味不明で、俺はぽかんと呆けてしまった。

俺が理解していないことに気付いていないのか、元々期待していなかったのか、曽良は気にする様子も無くころっと表情を変えた。いつもの間抜けにも思えるへらっとした笑顔だ。

「そんなわけで」言って、ひらりと右手を挙げる。「さっさと帰った、帰った。こっちにはかっちゃんの居場所はないんだから」

「ひどいことを、はっきりと言ってくれるな」

「銃も使えない『殺し屋』は需要ないんだよ」曽良は暢気にそう言ってくるりと身を翻した。「んじゃ、俺は帰るねぇ」

また明日、と言わんばかりの軽いノリで手を振り、曽良は俺に背を向け歩き出した。

「帰るって……」

てっきり暑苦しい別れの抱擁でもあるのかと思ったが……あっけないもんだな。

俺は複雑な気持ちを抱きつつ、その背中を呆然と見守っていた。

たとえ死体になっても、俺を受け入れない。そこまで言うんだ。本気で二度と俺と会う気はないんだろう。何か、言っておきたいことは今のうちに……そうは思うものの、特に気の利いたことは思いつかない。このまま、いっそのこと何も言わずに別れたほうがいいのかもしれない。何を言っても、中途半端になる気がして……

「カーヤは世界を滅ぼさない」

「！」

聞き覚えのあるセリフ。それが唐突に飛んできた。公園の出口の一歩手前で、曽良はこちらに振り返る。

「やっぱり、俺はそう言うよ」

悠然としたその笑顔に、俺はつい頬がゆるんだ。なるほど――ガキのころの面影があっても、なんだかんだで成長はしたんだな。それでいて、芯の優しさは変わってない。たとえ『殺し屋』でも、その根底にあるのは、家族を思う純粋な気持ち。昔と何も変わらない家族への愛情。

単純に、安心した。

「ああ」と俺は力強く返事をする。「守ってみせる。カヤも世界も」

世界のために、カヤを殺すことは俺にはできない。だが、まだ可能性はあるんだ。どちらも守る方法が、たった一つだけ。俺はその希望に最後まですがる。

『テマエの実』さえカヤに食べさせなければ、カヤは人間のまま。世界も残る。家族の生きるこの世界を守れる。

「だから……」俺を信じろ、と言いかけた俺を、曽良がさえぎった。

「かっちゃんのこと、信じてるよ」

心を読まれたかのような言葉に、俺は絶句した。その隙に、曽良はジャケットをなびかせて公園から去って行く。

「……」

残された俺はといえば――妙な胸騒ぎを感じてうつむいていた。

耳に残った曽良の声は、苦しげで、それでいて不安そうで……。その表情は、ひどくこわばっていた。怯えているような、痛みに耐えているような……

唐突に、何かがひっかかりだし始めた。なんだ？　と小首を傾げて、

――家族の脅威は全て取り除く。

不意に、曽良の声が脳裏によぎった。ゾッと悪寒が走り、俺は身震いをした。

「家族の脅威……」

曽良と別れた今になって、その違和感に気付いてしまった。

間違いなく、カヤは家族の脅威だ。曽良はそれを知った。なのに、見逃すのか？　何もしないのか？　友達だから？　特別な感情があるから？　カヤは世界を滅ぼさない――そう本気で信じているから？

いや、あいつがそんな甘い理由で家族の命を危険にさらすとは思えない。

「！」

ズキリと胸に刺すような痛みが走り、息が詰まった。

ハッとして、ポケットに手をつっこみ、そこから十字架を取り出す。ひんやりと冷たい無機質な感触。ただの十字架にしか見えない、恐ろしい機械。盗聴器と、もしものために、カヤを殺す爆弾が仕込まれている。

まさか……と俺はごくりと生唾を飲み込んだ。心臓が急に熱を放って暴れだす。

あいつは、これをカヤに返せ、と俺に言った。砺波のため、と。

その主張は最もだった。これをカヤに返さないと、カインの皆は疑問を抱く。砺波の信用を守るためには、これをカヤに返さなきゃいけない。

だが……俺はぐっと十字架を握り締めた。

――かっちゃんのこと、信じてるよ。

俺は邪念を取り払うように頭を左右に振る。そうだ、俺も曽良を信じるべきだ。これを返すのは、砺波のため。それが、あいつの真意だ。他に目論見（もくろみ）なんてない。兄弟を疑うなんて最低だ。

心臓の鼓動がうっとうしいほどうるさい。俺は不安を吐き出すように「曽良」と十字架に語りかける。

「カヤを……殺す気じゃないよな？」

誰もいない公園で、俺は姿の見えない兄弟にそう尋ねた。今夜は盗聴はしない――少なくとも、その言葉は真実だと分かっていたのに。

「もう、お話はお済みになりましたか？」

「！？」

どこからともなく、やんわりとした女の声が聞こえてきたのは、そのときだった。

インターミッション：戸籍登録

「分かってる、分かってる」曽良はくすんだシルバーの携帯電話を耳にあて、机の上に腰を下ろしていた。鼓膜につきささるような金切り声が電波に乗って送られてくる。曽良はげっそりと疲れた表情でため息をつく。「そう怒鳴らないでよ、トミー。こっちにも事情が……」

あ、と頬をひきつらせ、おもむろに携帯電話を下ろす。「まったく」と呆れたようにつぶやくと、恨みがましい眼差しでそれを睨みつけた。携帯電話は、息絶えたようにすっかり大人しくなっていた。

「相変わらず自分勝手だなぁ」

とりあえず携帯電話を木製のデスクに置き、くるりと振り返る。電話していたときとは別人のように、ころっと愛くるしい笑顔を浮かべて。

「書けた？　白雪」

尋ねられ、ソファに座っていた少女は弾かれたように顔を上げた。ふわりと細い茶色がかった黒髪が揺れる。蛍光灯の下では、少女の真っ白な肌は若干黄みがかかって見えた。これ以上明かりに当たっていては、溶けてしまうんじゃないだろうか。そう不安になってしまうほど儚い雰囲気を持つ少女は、雪の妖精――そんな喩えがしっくりくる。

「あ、えっと」灰色交じりの翠石（エメラルド）が上に下に、と睫の間でころころ転がる。その視線は、目の前の少年と、そして、手元にある一枚の

紙を往復していた。「これで、良いのでしょうか」
「見せて」言って、曽良は机から飛び降りて少女のもとに歩み寄る。
「ごめんね、一人で書かせて」

少女は無理した様子もなく微笑んで、「いえ」と首を横に振った。近づいてくる曽良を暖かい眼差しで迎えつつ、不思議そうに尋ねる。

「それより……和幸さんは？」
「帰った」
「帰った？」思わぬ返事にぎょっとして、少女は頭を捻る。「でも、ここがカインのお家なのではないんですか？」
「お家っていうか……ここは、溜まり場に近いかな」

曽良は暢気にへらっと笑みを浮かべて少女の隣に座った。少女は「たまりば」と不思議そうにつぶやいて、辺りを見回した。
ここはカインノイエの隠れ家。カインが『実家』と呼ぶ場所。古びた教会だ。二人は、その奥――リーダーである藤本マサルがオフィスとして使っている部屋に居た。目に付くのは、壁に飾られたいくつもの写真。そこには屈託の無い笑みを浮かべる子供たちと、そして一人の男が写っている。写真が撮られた時期が違うのだろう。男の髪には顕著な変化が見られた。海苔のように黒い髪から絹糸のような白髪へと移り行く様子がよく分かる。

「はい、貸して」

曽良の跳ねるような声に少女は我に返る。二人が並んで座って少し余裕がある程度のソファ。少女が横を振り返れば、曽良の顔はすぐ近くにあった。
曽良と目が合うなり、「あ、すみません！」と少女はあわてたように持っていた紙を差し出した。

「分からないところがいくつかあって、書いていないのですが」
「いいよ、空欄のままで」

痛々しいアザが残る少女の白い手から紙を受け取ると、曽良は「どれどれ」と茶色い瞳で紙をスキャンするように眺め始めた。
そこには、いくつかの項目が並んでいる。名前、年齢、性別といった基本情報から、『売られるまでに至った経緯』、『特記すべき身体能力』など奇妙な質問もある。
書類をチェックし始め、曽良はすぐに目を丸くした。「へえ」と感心したような声を出し、名前の項目を指差す。

「『鼎(かなえ)』って書くんだね、名前。初めてみたよ、この漢字」

少女――鼎は、懐かしむように目を細め、「ええ」と答えた。

「父がちょっと変わり者で……」
「お父さん？　お父さんがいるの？」

鼎は目が覚めたかのようにハッとして、ぎこちなく微笑む。「養父です」と肩をすくめ、曽良の持つ書類にちらりと視線をやる。

「そこにも書いておいたのですが、生まれてすぐ養女にもらわれて……」

言われて曽良は紙の上に視線を滑らせる。「あ、ほんとだ」と鼎の言葉を遮ると、ある項目を読み始めた。それは『売られるまでに至った経緯』。お手本のような綺麗な字で簡潔に綴られた鼎の過去。曽良はそれを黙読しつつ、目を細めて考察する。直接的には書かれていないが、その内容から彼女が『発注』されたクローンであるこ

とが分かる。どうやら『発注』した人物が、何らかの事情でまだ赤ん坊だった彼女を捨てたようだ。そんな彼女を、ある夫婦（後の養父母）が買い、そして――

「なるほど」と、曽良は重いため息をもらす。「その養父母が亡くなって、こうしてオークションで売られることになったわけだ」

「はい」

鼎は目を伏せ、肩を落とす。長く伸びた睫がそっと光を遮断し、翠色の瞳に陰りを創る。膝の上に乗せた骨ばった手が蒼いスカートに深い皺を刻み、ほんのりと淡い桃色に染まった唇がきゅっと締まった。

そんな彼女に、曽良は弔辞を述べるわけでもなく、

「二度と、そんな目にあわせないよ」

ぽつりとつぶやかれた言葉に、鼎は目を見開いた。青白い顔をばっと上げ、曽良を食い入るように見つめる。その視線に――気付いてはいるのだろうが――応える様子もなく、曽良はただ、書類を見つめていた。

「二度と、家族を失わせたりしない」

宣誓ともとれる、力のこもった声だった。

鼎は凍ったように硬直し、喜怒哀楽のどれともつかない表情を浮かべる。

「君に新しい家族をあげる」不意に曽良の唇がゆるみ、その視線が紙からそれた。彼の見つめる先には、主の留守を寂しげに過ごす黒い皮のイス。曽良の顔には穏やかな笑みが自然と浮かんでいた。「

父さんが俺にしてくれたように」

「父さん？」と、今度は鼎が顔をしかめた。「曽良さんもお父さんがいるのですか？」

「うん。白雪のお父さんになる人だよ」

「はい？」

「明日、会わせてあげるからね」

それだけ言って、曽良は再び書類に目を戻した。鼎はしばらくきょとんとしていたが、ぼんやりと「お父さん」とつぶやき、眉根を寄せる。

「カインのリーダー……ですか？」

艶やかな唇が滑らかに動き、風鈴のように心地よい音色を奏でた。曽良は振り返りもせずに「そうだよ」と答える。

鼎はちらりと壁に並ぶ写真を見つめた。すべての写真で子供たちの横で微笑む一人の男。視界が悪いかのように目を細め、ごくりと生唾を飲み込む。――と、そのときだった。

「に……っ！」いきなり曽良が身を乗り出して奇声を発した。「にじゅうよん！？」

書類を持つ手は、今にもぐしゃりと握り潰してしまうんじゃないかというほど力が入っている。何事かと唖然としている鼎に、曽良は仰天した表情で振り返り、

「二十四歳なの！？」

鼎は目をぱちくりとさせ、ぽかんとしたまま頷いた。曽良はしば

らく硬直し、ひきつった笑みをこぼす。

「年下かと思ってた」

「よく、言われます」

鼎は頬を緩ませ、申し訳なさそうにつぶやいた。

「参ったなぁ」ショックが収まるのにほんの数分ほどかかったが、ようやく曽良は我に返って立ち上がった。「これからは『鼎姉さん』って呼ばなきゃ」

鼎から受け取った書類を手に、藤本のデスク――今は暫定的に曽良のものだが――へと向かう。そんな曽良の背中を、妖しく煌く二つの翠石（エメラルド）が追っていく。「いいですよ」と照れくさそうに微笑むと、鼎もおもむろに腰を上げた。

「あまり年齢のこと、気にしませんから」

「いやぁ、でも」と躊躇う曽良の後を追うように、鼎は華奢な脚を一歩一歩前へと進めてデスクへと歩み寄る。「言葉遣い、言葉遣い……て、うるさく言われて育ったんです。だから、逆にそういうの嫌になっちゃって」

曽良が「そう？」と鼎に振り返ると、ちょうど二人はデスクを挟んで向かい合っていた。

「だから、白雪、のままで結構ですよ」

その美しい瞳が隠れるほどに目を細め、鼎は屈託のない笑顔で答えた。

そんな笑顔に後押しされるように、曽良はため息交じりに「じゃ

あ」と照れくさそうに微笑む。「そうする」

「そうしてください」

「その代わり……というのも変だけど、俺のことも『曽良』でいいから。敬語も終わりね」

思わぬ提案だったのだろうか、鼎はぎょっと目をむいた。今まで見せたことのない、どこか間抜けにも見える鼎の顔に、曽良は失笑する。

「白雪のほうが年上なんだから、当たり前でしょう」

「そうですが……」

「そうだよ。敬語は禁止」

ぴしゃりと言われ、鼎は諦めたような笑みを浮かべる。

「……分かったわ」

どこかぎこちないタメ口だったが、一気に親しみが増したのには違いなかった。

「うん、そのほうがいい」満足げにそう言い残し、曽良はデスクの陰に消えた。――少なくとも、鼎からはそう見えた。単にしゃがみこんだだけなのだが。「空欄のところは、明日父さんに会って話してからにしよう。とりあえず、今日はここまで。疲れてるだろうしね。これから妹のとこに連れて行くよ。今夜はそこで休んで……」

デスクの向こう側から流れてくる声とともに、ガタガタと物音が聞こえてくる。その音に鼎は小首を傾げ、

「なにしてるの？」デスクに近づき手を置くと、身を乗り出して曽良を覗き込んだ。「それ、さっきの紙だよね？」

鼎の瞳に映りこんだのは、デスクの一番下の引き出しを開けている曽良の姿。しゃがんでいる彼の手には、さっき鼎が書き込んだ書類がある。

「そうだよ」

さらりとそう答え、曽良はその紙を引き出しの中に差し入れた。そこにはびっしりと同じような白い紙が、いくつかの色違いのフォルダに分けられてつまっている。それを鼎が視界に捉えるや否や、曽良はさっさと引き出しを閉じ、鍵を閉めた。親指ほどの小さな鍵――それをポケットにしまいつつ、すっくと立ち上がり、鼎に微笑みかける。

「どうかした？　じっと見つめて？」

尋ねられ、鼎は咄嗟に背筋を伸ばして両手を挙げる。

「ううん」と首を横に振ると、輪郭を隠すように左右に垂れた前髪が彼女の頬をさすった。「今更なんだけど、あの紙はなんだったんだろうな、て思って」

「『戸籍』」

けろっとそう答える曽良に、鼎は眉根を寄せた。「こ、戸籍？」と疑い深げに尋ねると、曽良は「俺たちがそう呼んでるだけ」と肩を竦めて付け加える。

「『迎え』に行った子供たちの記録だよ。こうして、一人一人書類

に残しておくんだ」

そう言う曽良の視線は、先刻鍵を閉めた引き出しへ向けられている。へえ、と興味深げに鼎はそんな曽良を正視し、静かな口調で尋ねる。

「カインも、書くの？」

「もちろん」自慢げにそう言って、曽良は鼎に振り返る。「カイン全員、一度は書き込んでるはずだよ」

鼎は唇に浮かべた微笑を崩すことなく、「そう」とつぶやいた。体の横で大人しくしていた真っ白い腕がぴくりと動き、彼女の胸元へと伸びる。鎖骨の間で蒼く輝くペンダントに触れると、撫でるようにそれをさすった。

「カイン全員の『戸籍』……便利そうね」

それはまさに、『無垢』といっていい愛くるしい笑顔だった。そしてその笑顔に、やはり心に染み渡る懐かしさを覚え、曽良は目を細めた。

運命の夜　―1―

――もう、お話はお済みになりましたか？

そんな女の声が確かに聞こえたはずだが……辺りを見回しても誰もいない。いや、見回すほど広くもない公園なんだが。

廃れた公園に一人突っ立ち、頭をかく。空耳……だったんだろうか。はっきり聞こえた気がするんだが。

まあ、いいか。そんなことより、早くカヤの元へ――と、足を進めて、すぐに立ち止まった。公園の入り口（出口でもあるが）から、ぬっと妙な影が現れたからだ。妙な影……といっても、不審者でも幽霊でもない。四本足で歩くシルエット。鋭角にツンと立った耳。鼻から噴き出される白い息。一歩進むたびに、ジャリッと地面を削る鋭利な爪。

曽良と入れ替わるように、公園に入ってきたのは……

「犬？」

そう、一匹の犬だった。といっても、ただの犬じゃない。大きな口。たくましい体つき。鋭い目。警察犬……いや、シェパードって犬種だったか。

「捨て犬？　迷子か？」

下に垂らした尻尾を左右に揺らし、俺にまっすぐに向かってくる。その瞳は外灯の光を反射し、魔物のように妖しげな光を放っている。きれいな毛並みだ。まるで作り物みたいに美しい。どっかの金持ちの犬か？　でも、首輪はしていない。

ぴたりと俺の前で立ち止まると、犬はその場に座り込んだ。きっ

ちりした動きに、俺は感心すらしていた。この行儀のよさ……よほど訓練でもされてるのだろうか。
俺はしゃがんで犬を真っ向から見つめる。

「何か用か？」

って、なんで犬に話しかけてんだよ、俺は？　周りを見渡しても、誰もいない。散歩の最中ってわけでもないか。
犬はじっと俺を見つめて動かない。その瞳は爛々と輝いて、何かを期待しているようにも見える。腹でも減ってるのだろうか。食い物なんて持ってないんだが……まさか、俺を食おうとしてるわけじゃないよな。
それにしても、不思議な魅力のある目をしている。まるで未来まで見抜いているかのような眼差し。
吸い込まれるように見つめていると、犬はゆっくりと大きな口を開いた。鋭い犬歯がキラリと光る。そして、

「初めまして、というべきでしょうか。探しましたよ」

しゃべった。

「……」

いや、待て。

「なんで、しゃべるんだよ！？」

思わず、大声を上げて立ち上がっていた。

「会話をするためですよ」

犬は落ち着いた様子で俺を見上げて微笑んだ。――って、犬が笑うわけがない。そういう風に見えただけだ。

「なんで、犬がしゃべるんだ？」と犬に尋ねている時点でおかしいんだが。

「犬ではないからです」

「は！？」

ダメだ、頭がおかしくなりそうだ。もしかしたら、すでにおかしくなってるのかもしれない。俺は頭を抱え、とりあえず平静を取り戻そうと深く息を吐く。

落ち着け。落ち着いて考えたら分かるはずだ。こういう意味不明の奇想天外な現象が起きたとき、大体絡んでくるのは……

「『災いの人形』、パンドラさまのことでお話しがあります」

俺はがっくりと肩を落とし、半笑いを浮かべていた。

「……だろうな」犬もしゃべれば神の『裁き』、か？　ったく、今からカヤに会いに行こうってときに。「話ってなんだ？」

いや、その前に……俺はじろりと犬を睨みつける。

「お前はなんだ？　犬じゃないんだろ？」

『災いの人形』と口にした時点でただの犬じゃないのは明らかだ。って、いや……しゃべった時点で、犬じゃないよな。

言われて、そうでした、と犬はゆっくりと頭を下げる。ニホン舞踊を思わせるしなやかな動きに、俺は頬をひきつらせる。上品な犬

――妙だ。違和感に酔いそうだ。

「ユリィ・チェイスに遣える天使、ラピスラズリと申します」

「ユリィ・チェイスの天使？」

はい、と犬は顔を上げて俺を見つめた。

ユリィ・チェイスといえば……カヤの婚約者としていきなり現れた男。曽良の盗聴した会話から察するに、カヤに全てをぶちまけてくれやがった張本人だよな？　神の『裁き』に関わりのある奴だろう、とは思っていたが……天使まで持ってるのか。一体、何者なんだ？

「我が主、ユリィから伝言がございます」

もし、俺に母親がいたら……この犬の声を懐かしい、と思ったのだろうか。優しさにあふれた、包み込むような声色。聞いてるだけで心地がいい。カヤのそれに似ているとさえ思った。

って、聞きほれてる場合じゃない。伝言？　あいつから俺に？

「なんだ？」と訝しげに――若干、警戒しつつ――尋ねると、ユリィの天使は愛おしそうに目を細めた。

「『オレは約束は破らない。何が起ころうと、彼女を幸せにする』、と」

「約束？」

そんなものしたか？

「たとえ何が起ころうと、あいつを幸せにしてやってくれ。そう、我が主におっしゃいませんでしたか？」

俺の問いを予期していたかのような、素早い返しだった。それでいて、やんわりと柔らかい声。脳細胞までほぐされるような気分だ。絡まっていた記憶の糸がほどけて、ある記憶がするりと引っ張り出された。その途端、俺はハッと目をむいた。「あ」ととぼけた声を漏らし、眉を曇らせる。「言った」

それは、カヤと別れ、カナエを迎えに行こう、というときだった。倉庫から飛び出した俺はユリィと出くわし……

――たとえ何が起ころうと、あいつを幸せにしてやってくれ。

ああ、言った。確かに言った。

そうか。あいつはあれを約束だと思ってるのか。思ってた以上に、誠実な奴みたいだな。――と暢気に感心し、そこではたりと思考が止まった。じわりと嫌な汗が背筋を伝う。

ちょっと待て。

「幸せにするって……」

そう頼んだのは、確かに俺だ。何度も、頼む、と繰り返した。この天使の伝言を聞く限り、あいつはそんな俺との『約束』を素直に果たそうとしている。

カヤを頼む、幸せにしてくれ――そんな俺の願いを叶えようと決意してくれたわけだ。

それなのに（事情が変わったとはいえ）今更、やっぱり俺がカヤを幸せにしたい――なんて言い出すのは、さすがに気まずい。こうしてわざわざ天使を遣わせて、決意表明までしてくれたんだ。あいつも本気なんだろうし……

「！」

そういえば……と、今の今まで気付いてもいなかった疑問が浮かび、ざわっと胸騒ぎを覚えた。心臓が暴れだし、息苦しさに胸元をつかむ。

考えようともしていなかった。――カヤとユリィは、お互いをどう思ってるんだ？

曽良の話だと、カヤが俺と別れた理由は、俺を神の『裁き』に巻き込みたくなかったから。だが、だからといって、カヤがユリィをなんとも思っていない、とは限らない。俺を引き離して寂しい思いをしているときに、ユリィに優しくされて……とか、有り得るパターンだよな。事実、カヤはあいつのことを信用しているようだった。

婚約者うんぬんが嘘だという確証はないんだ。そんな嘘をついてまで、カヤがユリィをオークションに連れてくる理由も思いつかない。

もしかしたら、ユリィは本当にカヤと……。

思いもよらなかった不安が一気にこみあげ、俺は黙り込んだ。しゃべる犬……もとい、犬の姿をした天使のことも忘れ、自分の世界に入り込み――いや、迷い込んでいた。

――あなたを愛せません。

あの言葉が嘘だという確証もない……んだよな。

「まだ、話は終わっていませんよ？」

「！」

いきなり叩き起こされたような気分だった。ぎょっとして下を向くと、天使がまっすぐに俺を見上げていた。心の中まで覗かれているんじゃないか、と恐ろしくなるほどの突き刺すような鋭い眼差し。

思わず、ごくりと生唾を飲み込んでいた。

そんな俺の緊張を和らげるように、天使は口元を緩めておっとりとした声を流す。

「『オレは約束は破らない。何が起ころうと、彼女を幸せにする』」

それはさっき聞いた、と言いかけた俺を、「『だから』」と天使は遮った。

「『だから、君に彼女の傍にいて欲しい』――だ、そうです」

言われた意味が、分からなかった。「は？」と呆けていると、天使はフフッと控えめな笑い声を漏らした。

「あなたが傍にいることがパンドラさまの幸せだ、と伝えたかったのだと思います。パンドラさまご本人が、そうおっしゃっていたように」

「カヤ……が？」

ずしりとみぞおちに圧力を感じ、心臓が収縮するような感覚がした。そして――初冬の寒さを忘れてしまいそうなほど、頭まで燃え上がるように熱くなった。

そんな俺をからかうわけでもなく、天使は安心したかのように鼻から息を吹き出した。

「我が主は嘘偽りを好みません。婚約者のふりもお気に召さなかったようです」

「ふり？」

「はい」天使は力強く頷く。「ふり、でございます。ユリィとパンドラさまの間には、特別な感情などないのですから」

まるで俺の不安を読み取ったかのような台詞だった。俺は全身から嫌な緊張感が抜けていくのを感じつつ、まさかこの犬は俺の心を読めるのか、と頬をひきつらせた。もしくは単に、俺の思考が単純すぎて簡単に読めてしまうのか。どちらにしろ、恥ずかしいのは変わらないが。

「それをあなたにお伝えするために、我が主はこうしてわたしを遣いに出しました。ですから……」ユリィの僕(しもべ)は、どうか、と懇願するように言って深々と頭を下げた。「パンドラさまのもとへお戻りください」

犬に頭を下げられて居心地悪さを感じつつも、「言われなくても」と苦笑してしゃがみこむ。見た目は犬でも、天使。不適切かとも思ったが、つい条件反射のようにその頭を撫でていた。

「言われなくても、そのつもりだったよ」

嘘じゃない。こいつが現れる前から、カヤのもとへ戻るつもりだったんだ。夢中だったから、ユリィのことで悩む余裕すらなかっただろう。まっすぐにあいつのところに行っていたに違いない。だから、天使が頭を下げてまで頼み込むことじゃない。

「天使の助けは要りませんでしたか」

そうつぶやくと、天使は頭を上げて俺をじっと見据えた。その声色に落胆は感じられず、嬉しさと誇らしさがつまっているように感じた。

「ああ」ときっぱりと答えると、天使は「それなら」と目を細める。犬の笑顔がどんなものかは分からないが、それでも、微笑みかけら

れているような気がした。「わたしの出番はもうありませんね」

唐突に犬の体がまばゆい光に包まれた。というより、犬自体が金とも銀ともつかない光の集合体に変化した。あまりのことに驚いて天使の頭から手をどけ、身を引いた勢いで俺はしりもちをついた。

見覚えのある光景だ。ケットが姿を消すときと同じ。つまり――と慌てて、俺は「ちょっと待て！」と呼び止めていた。

蝋燭の火が消えたかのように、ふっと光を失って、不思議そうにこちらを見つめる犬が目の前に立っていた。

「どうかされました？」と目を瞬かせる天使に、俺は姿勢を正して冗談っぽく笑んだ。

「『おつかい』、頼んでもいいか？」

＊　＊　＊

「そのくらいのことでしたら」和幸の話を聞き終え、ラピスラズリは深く頭（こうべ）を垂れた。「承知いたしました」

和幸が見守る中、ラピスラズリは犬の姿を借りたその身体を光のベールで包み込む。光の粒子が飛び交って、輝く天使の周りにまばゆい衣を紡いでいく。やがて、光の塊となったラピスラズリは徐々に小さくなり、両手ですくえるかどうかの大きさまでに縮小した。

唖然としている和幸の前で、光の繭は消え去って、中から姿を現したのは――

「……はと」

突然目の前に姿を現した白い鳩に、和幸はあっけにとられて口をあんぐりと開けた。当然、この鳩がラピスラズリであることは察し

ているのだろうが、それでも信じられない出来事に言葉が出ないようだった。
ラピスラズリはくりっと小首を傾げ、どこか申し訳無さそうな声で伝える。

「エリドーに生きるものたちの姿と恵みを借りる――それがわたしの力なのです。さきほどまでの犬の姿も、匂いをたどってあなたを探すために借りていたにすぎません」
「へえ」と、和幸は気のない返事をした。目をぱちくりとさせている様子からも、まだ困惑しているのは明らかだ。

ラピスラズリのしとやかに笑う声が、静まり返った公園に響く。

「では、のちほどお会いしましょう」

さらりとそう言って、ラピスラズリは真っ白な翼を羽ばたかせた。跳びあがり、二回、三回……と羽根を動かし、夜空に浮かんですいっと飛翔していく。
頭上に広がる無限の暗闇を泳ぐ白い影。それを感慨深げに眺めていると、不意に何かが落ちてきた。和幸の目の前に降りて来たもの――それは真っ白い羽根。一見、鳩の羽根のように見えるそれは、紛れもなく天使が落とした羽根だった。
和幸はその手に羽根を受け止めて、すっくと立ち上がる。穢れのない白い羽根は、ふわりと柔らかく優しい感触がして、それでいてすぐにでも消えてしまいそうな儚さがあった。
和幸は懐かしむような眼差しでそれを見つめて、ため息交じりに微笑した。
やがて、木々を揺らして向かってきた風が彼の手から羽根を盗んでいった。飛ばされ、闇の中に消えていく天使の羽根を見届けると、和幸は「さて」とつぶやき踵を返す。

「『お迎え』の時間だ」

おそらく、これで最後の――と、和幸は心の中で付け加えた。

運命の夜　―２―

明かりをつける気もおきず、真っ暗な部屋の中、私はじっとベッドに座っていた。何もする気がおきない。ドレスを脱ぐ気力もない。

ただ、想うのは彼のことだけ。

私はぐっと目をつぶった。お願い、と何度目かも分からない祈りを捧げる。

お願い。無事でいて。どうか、無事でいて。

ぎゅっとシーツを握り締める手に力がはいった。

「和幸くん」

その名を呼んでも、届くわけはないのに。どれだけ想っても、伝わるわけではないのに。なぜ、彼を想うことをやめられないのだろう。どれだけ諦めようと思っても、どれだけ自分を納得させようと思っても……気付けば、彼を想ってしまう。気付けば、彼の名前を呼んでいる。

波のようにおそいかかる後悔と、吹き荒れる嵐のような彼への想い。

苦しい――私はぐっと胸元をつかんだ。

傍にいたい。彼に触れたい。彼に触れて欲しい。彼を愛したい。彼の愛を感じたい。わがままな欲望ばかり募っていく。彼が欲しくてたまらない。

「和幸くん」と、頭を垂らして唱えるように囁く。

お願い。無事でいて。お願いだから……

――約束通り、二度とお前の前には現れない。これでお別れだ。

最後に聞いた彼の声が、不吉な予言のように私の心にまとわりついて離れない。私はそれを振り払うかのように首を左右に振った。

「どうして……」

体が震えだし、それを抑えるように体を丸めて腕を抱きしめる。どうして、私は彼を行かせてしまったの？　どうして、止めなかったの？　分かっていたのに。カインの世界がどういうものか、どれほど危険な場所なのか、知っていたのに。どうして、あの手を離してしまったの？　どうして……

――でも、アナマリアは殺されてしまった。兄さんは彼女を愛せない。

いや。そんなの、いや。私はまだ愛していたい。この身が崩れ落ちるその瞬間まで、あなたを愛していたい。だから……

「生きていて」

お願い。どうか、誰か……誰か、彼を迎えに行って。彼を日向（こっち）に返して。彼を守って。

「神さま」

無意識に唱えていたその名前に、私はハッと目を見開いた。――そのときだった。

月明かりが差し込む部屋の中、虹色の光が突然辺りを照らした。軽快な音楽とともに。

びくんと体が大きく揺れた。全身が粟立つのを感じた。

その音楽を私は知っている。その音楽が意味することを知っている。だからこそ……だからこそ、信じられなかった。なぜ、この音楽が聞こえてくるのか。なぜ、まだその音楽を鳴らしてくれるのか。もう二度と、鳴いてはくれないと思っていたのに。そう覚悟していたのに。

呼吸が荒くなり、唇が震える。瞬きも忘れ、私はゆっくりと顔を上げた。

まばゆい虹色の光が曲に合わせて踊っている。それに誘われるように、私はふらりと腰を上げ、おぼつかない足取りでその光に向かって歩き出した。

血液まで蒸発しそうなほど、体中が燃えるように熱くなっていた。

部屋の端に置かれた勉強机。そこにぽつんと寂しく放置されたそれは、何かを訴えるように必死に光を放って音楽を奏でている。

それを前に、私は呆然としていた。

この音楽を鳴らせるのは彼しかいない。秘密の番号――それを知っているのは彼だけ。

でも……そんなわけない。有り得ない。たとえ彼が無事だったとしても、この音楽が鳴るはずはないんだ。だって……

――これでお別れだ。

彼はそう言ってたもの。

――もう会いたくない。

そう……言ってしまったもの。彼を巻き込みたくなかったから。彼を引き離すことが最善だと思ったから。

極寒の地にでも居るかのように全身が震える。

高まる期待は暴走してしまいそうで、不安に脚が竦む。この期待が裏切られたら、と思うと恐ろしくて体が動かない。

ただの間違い電話かもしれない。期待が……希望が裏切られるのが怖い。でも、もし……もし、彼だったら――それは儚い希望。分かってる。私がそれを願う権利なんて無い、てこと。私が彼を引き離したんだから。嘘もついた。ひどいことも言った。彼にわざと嫌われようとした。彼の想いを踏みにじった。私は最低だ。彼にふさわしくはないなんて分かってる。でも、声を聞きたいの。会いたいの。やっぱり……彼の傍に居たいの。彼が恋しくてたまらないの。この世界で、彼を愛していたいの。

だから、お願い。私にもう一度だけ、未来を選ぶチャンスをください。彼との未来を選ぶチャンスを。限られた時間だって構わない。あと一ヶ月……それでもいいの。やっぱり、彼の傍にいたい。

そのわがままが許されるなら……どうか……

腕がひとりでに動いていく。震える手が虹色の光に照らされる。そっと指先がそれに触れた。ごくりと生唾をのみこんでボタンを押すと曲が止み、代わりに、私の荒い息遣いがあたりに響く。

お願い。お願い。何度も何度も、心の中でそう唱えた。そして、ゆっくりと希望を耳元に運んだ。

「和幸……くん？」

祈るように固く目をつぶり、その名を呼ぶ。どうかこの声が彼に届きますように――そう祈りながら。

こんなにも、たったの一秒が長いと感じたことはない。こんなにも、沈黙が恐ろしいと思ったことはない。

信じることが、希望を抱くことが、これだけ苦しみを伴うことだと私は初めて知ったんだ。

「やっと、出たな」

そして、それが報われたときの喜びを……私は初めて知ったんだ。

＊　＊　＊

カヤはハッと目を見開いた。言葉に関わる知識を、一瞬、全て失ったような気がした。思わず、携帯電話を落としそうになった。

「これで、いったい何度目だろうな」呆れたような声が聞こえてくる。「俺しか知らない番号でも、通じなきゃ意味ないだろ」

カヤは覚えてる。これが何度目の電話なのか。別れを告げたあの日から、和幸がこの番号にかけてきた回数を、しっかり覚えている。無視してきた電話の回数を、無意識に数えてきた。

また体中が震えだした。聞こえてくるその声が、愛おしくてたまらない。抱きしめるように、携帯電話を握り締める。もっと、もっと聞かせてほしい。そうすがるように、頬をすり寄せる。

生きていた。彼は無事だった。それが分かっただけでも心は歓喜に奮えた。

「よかった」自然と弱々しい声が漏れる。「よかった、無事で」

「カヤ」カヤの言葉に答えるわけでもなく、彼はすかさず口火を切った。「ユリィの天使が、全部話してくれた」

唐突にそんな言葉が送られてきて、カヤは目をむいた。体中にこもっていた熱が一気に冷め、現実に引き戻されたようだった。

ラピスラズリが彼に全部話した？　なぜ？　いつ？　全部とは一体どこまで？　カヤの心の中が、不安と困惑で荒れ狂い始めた。麻痺したように言葉が出てこない。そんな彼女を労るように、「カヤ」と苦しげな声が小さな機械を通して送られてくる。

「もういいんだ」

ざわっと鳥肌が立った。カヤは呆然として立ち尽くす。見開かれた瞳は、どこを見ているわけでもなかった。彼女自身、自分が何を考えているのか、もはや把握していなかった。

「もう下手な芝居は必要ない」

諭すように囁かれたその言葉に、胸がきゅうっとしめつけられる。何かがこみ上げてくるのを感じた。みぞおちが引き締められるように痛む。苦しい、と思った。だが、嫌な気分はしなかった。それは心地よくも感じる痛み。懐かしくも感じる、愛おしくも思える痛み。

「大丈夫だ」

力強く言い放たれたその言葉は、ずっと待ち望んでいたものだった。ずっと彼の口から聞きたかった言葉だった。

じんわりと目の周りが熱くなっていく。視界が歪んでいく。喉からは水分がなくなって、息苦しい。

「だから」と、搾り出したような声が聞こえてくる。「もう一度だけ、聞かせてほしい。お前の気持ちを」

その瞬間、ぽろりと何かが頬を伝うのを感じた。

それは、神の罰が下ったあの日から、失ったと思っていたものだった。もう自分にはないものだと思っていた。あの日、神に取り上げられたもう一つの『人間の証』だと思っていた。

涙だ――カヤは思わず笑みをこぼし、肩をおとした。毛布につつまれるような暖かい安堵感が心の中に満ち溢れる。生きている心地がした。

「人間でいたい」と、カヤはつぶやいていた。「たとえ、心だけでも……ずっと……」
「……」

ぎょっと驚いている彼の顔が浮かんだ。頭をかいて、ぎこちなく微笑む。そんな彼の様子がありありと思い浮かぶ。
カヤは目を細め、「だから」と涙声を漏らす。

「だから、傍にいさせてください」

最期のそのときまで――カヤはそう心の中で言い添えて、冷笑する。なんて自分勝手な……そう思いつつ、満ち足りた気分を否定しようとは思わなかった。
使命から逃れることはできないかもしれない。希望をつかむことはできないかもしれない。それでも……この世界で見つけた大切なもの――この愛を、最期のそのときまで抱いていたいと思った。その欲望こそが、最期までしがみついていられる人間らしさだと思った。

「そうか」しばらくしてから、彼はため息混じりにそうつぶやいた。
「じゃ、鍵開けてくれ」
「え……？」
「だめもとで電話して正解だったな。窓割ったら、本間の親父さんもさすがに怒るだろうから、どうしようかと思ってたんだ。印象悪くするのはちょっとな」

先ほどまでの真剣な雰囲気はどこにいったのか。彼は世間話でもするような軽い調子でそう言った。
状況がつかめず突っ立っていると、ふと、背後からコンコンと何

かが当たるような物音がした。まるで、ノックのような――その瞬間、カヤはびくっと身体を震わせて、息を呑んだ。全身が強張って、体の芯から熱がこもるのを感じた。

もう込み上げてくるものを抑えようとは思わなかった。流れ出てくる涙を拭うこともせず、ゆっくりと振り返る。そこにあるのは、丹念に拭き掃除がされた透明な窓。その向こうのベランダで誰かが立っている。月光を全身に浴び、くっきりとシルエットが浮かび上がっていた。腰に片手をあてがい、もう一方の手で何かを耳にあてている。

携帯を持つ手から自然と力が抜けた。それはするりとカヤのしなやかな指先から零れ落ち、足元で物音を立てて飛び跳ねる。その音が先か、カヤが走り出すのが先か。カヤは黒衣をなびかせ窓へと――いや、彼の元へと駆け出した。

運命の夜　―３―

俺はケータイを持つ手をゆっくりと下ろし、ポケットにそれをつっこんだ。

彼女がこちらに向かってくる。その光景に、高鳴る鼓動を抑えようとも、こぼれる笑顔を隠そうとも思わなかった。心は歓喜に染まり、そして彼女への言葉で満ち溢れていた。

最初になんて言おうか。言いたいことが山ほどある。聞いてやりたいことが五万とある。とにかく、やっと話せる――それが単純に嬉しい。

死の間際でもないのに、この一週間の出来事が頭の中を流れていく。正直、悪夢だった。別れたい、と突然言われ、意味も分からずシカトされ、挙句の果てには新しい婚約者。どうすりゃいいのか、途方にくれた。

もし、椎名のアドバイスがなければ――あいつがオークションにもぐりこむことを提案してなければ……こうしてカヤを取り戻すことはできなかったかもしれない。

認めたくはないが……椎名に借りが出来た。あいつの勝ち誇った顔を思い浮かべるだけで胸糞悪いが、それでも感謝しなきゃいけないだろう。俺はため息混じりに苦笑した。

そして、待ち望んでいた声が辺りに響き渡る――

「和幸くん！」

窓を割って飛び出してくるんじゃないか、という勢いだった。慌しく鍵をはずし、窓を開けるなり、彼女は俺の名を叫んで飛びついてきた。

その頬は涙に濡れ、声は悲鳴に近かった。

おっと、と俺は一歩あとずさりつつ、カヤを胸に抱きとめる。

わきの下にするりともぐり込んできた彼女の腕は、俺の背中を力強く締め付けている。俺の胸に顔をうずめる彼女の表情を確認することはできないが、聞こえてくる嗚咽でなんとなく想像はできた。

話したい、と思っていた。彼女ととにかく話をしよう、と。そう思ってここまで来た。でも……どうでもよくなった。

俺は震える彼女の背中に手を回し、暖めるようにそっと抱きしめる。

やっぱり、カヤはきれいだ。――彼女の体温を、感触を、香りを、五感と全身で感じながら、そんなことを心の中でつぶやいていた。単に見た目のことを言っているんじゃない。たとえどんな姿をしてようと、俺はカヤを美しいと思うだろう。この感覚を生み出しているのは、視覚とか脳とか、そんなんじゃない。彼女を愛しいと思う心――きっとそれが、カヤを美しく映しだしているんだ。

彼女が胸の中にいる――その事実を噛み締めるように、時の流れも忘れ、華奢なその身体を強く抱きすくめていた。全身が、痺れるような懐かしさに高揚している。身体の中に熱気がこもっていく。たまらなくなって、思わず深いため息を漏らすと、彼女の髪が揺れてふんわりと甘い香りとともに俺の鼻をくすぐった。

何かが蠢(うごめ)くようなむずがゆさを、みぞおちのあたりに感じて――こんなときに、やばい、と思っている自分に呆れた。

「いいの？」

不意に、ぽつりと今にも消え去りそうな弱々しい声が聞こえてきた。もう落ち着いたのか、いつのまにか嗚咽はなくなっていた。

「いいって……？」

体内でうずく、よからぬ興奮を抑えつつ、俺は平静を装って聞き返す。明らかに声が上擦っていて、怪しいことこの上ない。だが、

カヤは気にもしてないようで、顔を上げて俺を見つめてきた。

「全部、聞いたんだよね？」

潤んだ瞳は、俺をさらに動揺させるのに充分なほど魅力的だった。俺は自己嫌悪に襲われつつも理性を保つのに忙しく、とりあえず、よく考えもせずに「ああ」とぎこちなく微笑んだ。

カヤは上目遣いのままじっと俺を見つめ、

「それでも、いいの？　後悔しない？」

薄く口紅が塗られた唇――そこから漏れたのは、風の音にすらかき消されそうなほどか細い声だった。

俺は言葉を失った。あまりにも……痛々しかった。

いつのまに、彼女はこんなにも深い傷を負っていたんだ？　いつのまに、彼女はここまで病に蝕まれていたんだ？　そう思ってしまうほど、彼女の表情も声も、何もかもが痛々しく――そして、儚く感じた。

不安が一気に邪念を追い払い、凪いだ海のように俺の心は落ち着きと冷静さを取り戻していた。

「当たり前だ」力強く言って、彼女の頬に手をあてる。柔らかくて滑らかな肌……この感触は、何も変わってなどいないのに。「後悔なんてしない」

俺の言葉を信じてないわけじゃないだろう。だが、カヤの表情は晴れることはなかった。やはりまだ不安そうに、救いを求めるような視線で俺を見つめている。

こんな表情じゃない。俺は胸が締め付けられるような痛みに顔をしかめた。こいつのこんな顔が見たいわけじゃないんだ。俺がいつ

だって見たいのは……

「もう、無理しなくていい。俺を守ろうとしなくていい」

カヤはハッとして目をむいた。下睫に残っていた真珠のような涙の雫がぽろりと落ちた。

「お前はまだ……俺を守れるほど強くない」涙に濡れた頬をそっと拭い、俺は目を細める。「だから、今はまだ、守らせてくれ」

びくん、とカヤは肩を揺らした。

胸の奥でうずまく不安に一瞬だけ蓋をして、俺は頬をゆるめて微笑んだ。彼女を安心させるように。彼女が思い出せるように――あの笑顔を。俺が何度も見とれた、春風を思わせる暖かい笑顔を。思い出して欲しい……そう、心の中で願った。

「そのために、俺はここにいるんだ」

「……」

「守られるのは、性に合わないしな」

冗談交じりにそう付け加えると、ほんの少し、カヤの表情が和らいだ気がした。唇が笑みをこぼそうとしている。そんな気がして、ここぞ、とばかりに彼女の両肩をつかんで、ぐいっと引き寄せる。

「必ず、守ってみせる」

「……」

大きく見開かれた彼女の瞳には、また涙が浮かび上がっていた。カヤの身体が震えている。俺はたまらなくなって、勢いよく彼女を抱き寄せた。

恥ずかしさとか照れとか……そんなものを気にしてる時間さえもったいないと思えた。今はこうして……カヤの存在を全身で感じていたい。まだ、彼女に手が届く――それは奇跡にさえ思えて、しっかりと確かめておかないと、不安でおかしくなりそうなんだ。

「『テマエの実』なんて食べさせない」カヤの耳元で、俺は噛み締めるようにそう言った。「この世界で……ずっと一緒に生きていこう」

カヤの身体の震えが一瞬で止まり、「え」と戸惑う声が耳元に聞こえてきた。

＊　＊　＊

違う。おかしい。そんな……どうして？

――『テマエの実』なんて食べさせない。この世界で……ずっと一緒に生きていこう。

違う、違う。なんで？　だって、さっき……全部、聞いた……て。そう言ってたじゃない。なのに、どうしてそんなこと言うの？

「和幸……くん」

もしかして、彼は知らない？　まだ、何も知らないの？　『テマエの実』の真実も……私の身体のことも……全部知らない？

じゃあ、一体ラピスラズリから何を聞いたというの？

「全部……聞いたんじゃ……」

「ああ、全部聞いたよ」さっきも言っただろ、と言いたげな呆れた

声が、耳元で囁かれた。「ユリィと特別な関係じゃないんだろ。あいつ、いい奴みたいじゃないか。かわいそうに、茶番に巻き込まれて」

からかうような口調で和幸くんはそう言った。

私は愕然とした。全部って……それだけ？

彼は……何も聞いてない。ラピスラズリは何も言ってないんだ。彼は何も知らない。何も変わってない。前と何も状況は変わってない。

目の前に突然闇が広がった――そんな感覚だった。きっと、これは絶望……そして、現実……。心細ささえ感じて、孤独に凍えそうになって、彼の背中を抱く手に力がこもる。胸に顔をよせれば、彼の鼓動が聞こえるのに……私を包み込む彼の体温は、こんなに暖かいのに……なぜか、彼が傍にいる現実に自信が持てなかった。まるで、目の前にいる彼は幻のような気がしていた。

どうしよう。言わなきゃ。言わなきゃ……。もう、隠しちゃだめだ。ちゃんと言わなきゃ。

――君が彼に真実を話していれば、彼にはもっと他にも選択肢があったはずなんだ。

ユリィの諌めるような声が頭に響いた。ユリィがここにいるわけでもないのに、私は思わず頷いていた。覚悟を決めて、息を吸い込む。そう、真実を……話さなきゃ。

「和幸くん！」ぐっと彼の胸元に手を置いて腕をつっぱり、怒鳴るような大きな声で切り出した。「話さなきゃいけないことがあるの」

いきなり私が声を荒らげたので、和幸くんは驚いたようだった。目をぱちくりとさせ、「ああ」と戸惑った声で返事をした。

目を合わせているのがつらくて、私の視線は自然と彼の胸元に落ちた。真っ白なシャツに添えた私の手は、わずかに震えている。

「あのね……」これは緊張？　それとも不安？　恐怖？　きっと……全部だ。喉が引き締まり、唇は震えて、足が竦む。身体中が彼に真実を言うことを拒絶しているみたい。でも、言わなきゃ。彼に……覚悟を決めてもらわなきゃ。私がそうしたように……。「『テマエの実』を食べなければ、私は――」

勇気を出して顔を上げ――和幸くんの不安げな表情が目に飛び込んで、私はひるんでしまった。言葉が出なくなった。

「どうした？」嫌な予感でもしてるんだろうか、彼はぎこちなく微笑んで、私の肩に手をおいた。優しくさすられ、余計に胸が苦しくなって私は口を噤んだ。

言えない――ふがいなさと悔しさと悲哀……すべてが混ざり合って心の中がよどんでいく。どうしようもない苦痛に唇を噛み締め、彼にしがみつくようにシャツをぎゅっと握り締める。

――お前はまだ……俺を守れるほど強くない。

そうかもしれない。和幸くんの言うとおりかもしれない。彼を巻き込まないように、と始めた茶番劇だって、結局演じ切れなかった。少しは強くなれた……そう思ってたのに。とんだ思い上がりだったんだ。

私はまだ……強くない。全然強くない。

情けなさと無力さに打ちひしがれて、今にも膝から崩れ落ちそうになった。――そのときだった。

目の前を、白く輝く何かが遮った。雪のように降ってきたそれは、

左右にゆらゆらと揺れて足元へ落ちていく。――羽根だ。それも、あまりに美しい羽根。月の光を反射して煌く白い羽根。

不思議なことに見覚えがあって、私は眉根を寄せる。あれは確か……タクシーに乗っていたとき。窓の外に見えたんだ。鳥の翼から抜け落ちたとは思えないほど、真っ白で綺麗な羽根が落ちてくるのを。私は直感的に思った。あれは――

「まさしく、天使の羽根……か」

親しみをもった声色で、和幸くんがそうつぶやくのが耳に入った。その瞬間、ハッとして私は我に返った。

顔を上げると、彼は夜空を振り仰いでいた。彼の視線を追ってみると、そこには、暗闇の中、月を背にはばたく影（シルエット）……まるでそれは、全身から光を放つ気高い天使のようで、私は息を呑んだ。ひざまずいて祈りを捧げ、助けてください、とすがりたい衝動にさえ襲われた。どうか、私を自由にして。この忌まわしい使命を消し去って。そう……叫びたくなった。

じっと見つめる先で、天使は徐々に高度を落として降りてきた。近づいてくるにつれ、それが白い鳩であることが分かった。そして……何かを口にくわえていることも。長方形のバッグのような……なんだろう？

「お待たせしました」ベランダの手すりに舞い降りるなり、鳩はやんわりとした声でそう鳴いた。聞き覚えのある暖かい声。すぐにそれがラピスラズリであることを悟った。「探すのに少し時間がかかりまして」

お待たせしました？　探す？　なんのことだろうか。私は小首を傾げ、天使――ラピスラズリに問いかける。

「どうしたの？　ユリィに何かあった？　伝言？」それとも、と私はラピスラズリが嘴に提げている紙バッグに目をやる。暗くてよく見えないが、それでもなんとなく見覚えのある紙バッグだった。「それ、ユリィから？」

タクシーに何か忘れ物でもしただろうか。ううん、まさか。荷物なんて特になかったもの。ユリィからの贈り物？　それも……妙だよね。

思い当たる節が全くない。意味が分からず柳眉を寄せていると、ラピスラズリが上品に笑う声が頭の中にしみこんできた。気高き白い鳩は豆粒ほどの目を細めて、私を見つめてきた。

「ユリィからではありませんよ、パンドラさま」

「え？」

じゃあ、誰から？　そう言いかけたとき、和幸くんが私の肩から手を離し、ラピスラズリへと歩み寄った。

「悪かったな。俺の天使でもないのに」

「お気になさらず。あなたの力になること――それが我が主から受けた命ですから」

ラピスラズリは首を伸ばして、和幸くんに紙バッグを差し出した。

「そうか」照れくさそうに答え、彼は紙バッグの取っ手をラピスラズリの嘴からはずす。「ユリィによろしく伝えてくれ」

「はい、喜んで」

どう……なってるの？　状況が全くつかめず、二人のやり取りを私はただ呆然として見守っていた。

そんな私に、和幸くんは紙バッグを手に振り返る。
柔らかな月の光でぼやけた輪郭。そのせいか、彼の笑顔がいつにも増して穏やかに見えた。
私に向けられる彼の笑顔――見ているだけで、心が温まる。さっきまでの不安が溶かされていく気がした。そう、これなんだ。この暖かい感じ。包み込まれるような安心感。これだから……彼の傍にいたくなるの。
ぼんやりと見とれていると、彼はおもむろにしゃがみこんだ。
「え？」と戸惑う私をよそに、彼は紙バッグをベランダの床に置き、中に手をつっこんだ。「なに……してるの？」
尋ねても、彼は何も答えない。紙バッグの中をごそごそとなにやらいじっている。暗くて中身はよく見えないけど……って、勝手に中を見てもいいの？　ラピスラズリが運んできたんだよ？　私は心配になって顔を上げ、ラピスラズリにおずおずと問いかける。
「これ、一体、誰から？　ユリィじゃないなら……」
いつもなら懇切丁寧に答えてくれるのに……このときばかりは「さあ」とわざとらしく惚けて、ラピスラズリはくりっと首を傾げた。
な……なんだろう？　さっぱり状況が分からず、呆然としていると、
「足」
いきなり、そんな声が下から聞こえてきた。ぎくりとして視線を落とすと、私の足元で、和幸くんがひざまずき、手を差し出していた。
たくましくて大きな右手……それが目に飛び込んできて、頭の中

をぐるぐると回っていた疑問が一瞬で消え去った。懐かしさと愛おしさが身体中を駆け巡る。
同じ。あの日、私を神崎の家から連れ出してくれたときと。あの日、廃校の教室で怯えていた私を救い出してくれたときと。
また、あの暖かい手が私に差し出されている。
つい、手を伸ばしそうになって、「あ」と我に返った。

「あ……足？」

そういえば、彼はそう言ったっけ。確かに、ほんのすこし足を上げる程度の高さに手が差し出されている。
でも……まさか、手に足を乗せろってこと？

「ど、どうして……」
「いいから」

ため息交じりにそう言う彼の左手はまだ紙バッグに差し込んだままだ。なんだろう？　何が入ってるの？　私の足と何か関係あるの？
戸惑って動けずにいると、「ああ、ったく」と和幸くんはイラだったような声を漏らした。怒らせた？　と焦る間もなく、彼は差し出していた手を伸ばして私の足首を掴んだ。

「！？」

いきなり片足を持っていかれ、バランスを崩しそうになったのを、なんとか背後の窓に手をついて食い止める。一体、何が起きたのか一瞬分からなかった。ただ、ひんやりと冷たい何かが足を包み込む。
それが分かって――

「あ……」

その瞬間、混乱する頭の中で、何かが閃光を放ったような気がした。
胸が熱くなり、頬が赤らむのを感じた。まさか――高まる期待に促されるように、息を呑んでおもむろに視線を落とす。そこには、愛しいほどに懐かしい、かたっぽだけの銀色のパンプス……

「シンデレラの……靴」

嬉しさで破裂しそうな胸を抑え、私はそうつぶやいていた。強張っていた頬が和らいでいく……笑みがどこからともなく溢れ出た。
和幸くんはそうっと私の左足から手を離し、私を見上げて満足げに微笑んだ。

「やっと、笑ったな」
「え……」
「これは、俺から、だ」言って、彼はおもむろに立ち上がる。「この天使に俺の部屋まで行って取ってきてもらったんだ」

ちらりと彼が視線をやると、ラピスラズリは会釈のようなものをしてみせた。
胸が苦しくなって、我慢できなくなった。こんなに涙もろいはずじゃなかったのに、それは勝手に瞳から零れ落ちていく。ぽろりぽろりと次から次へと頬を伝って落ちていく。
そうだった。彼をフッたあの日……指輪と一緒に紙バッグに詰めてこの靴を返したんだ。怒って捨てられていても仕方ないのに。あのまま、取っておいてくれたんだ。そして、こうして……履かせてくれた。
思わず、嗚咽が漏れそうになって口元を抑えた。この胸の痛みが罪悪感から来ているものなのか、喜びなのか……自分でも判断がつ

かない。

「カヤ」不意に、彼は手を伸ばして私の髪を撫でた。「『収穫の日』だろうがなんだろうが、どうでもいい。クリスマス……お前の誕生日、砺波のくだらないパーティーに行こう」

「！」

冗談めいた彼の言葉。それでも『収穫の日』……その単語はズキリと胸に深く突き刺さった。その痛みは夢見心地だった私を現実へと引き戻すには充分で、心に灯っていた悦びは突然の吹雪に消し去られたようだった。はたりと涙が止まる。最後の一滴が虚しく睫の間をぬって流れていったのを感じた。

そんなこと、彼は知る由もない。ただ純粋に私を想ってくれる彼は、いつもの優しい笑顔を浮かべてつぶやいた。力強く、覚悟に満ちた口調で。

「なにがあっても、『テマエの実』を食べさせたりしない。必ず、守る」

胸が軋んだ。全身が切り裂かれるように痛い。

彼の背後で、ラピスラズリが気まずそうに顔をそむけたのが見えた。

出来ることなら、私もそむけたい。現実から。真実から。使命から……。

「だから、傍にいろ。俺が必ず――」

それ以上、もう聞いていられなかった。――私は彼に抱きついていた。片足だけ背伸びして、彼の首に腕を回す。ぎゅっと強く抱きしめる。

「カヤ……？」

いきなりで、それも話の途中で、こんなことになって、きっと驚いているに違いない。声も明らかに動揺しているようだった。

それでも、彼は何も言わずに私の背中を抱きしめてくれる。そして、言ってくれるの。

「大丈夫だ」

いつもいつもそう言ってくれる。そのたびに、胸が熱くなって苦しくなる。私は彼の肩に顔をうずめて、固く目を瞑った。

このまま……何も言わずに、希望に満ちた時間を彼と過ごしたい。今夜だけでいい。今夜だけ……許してほしい。真実を隠して、彼を騙すことを。自分を偽り、彼との甘い幻想に浸ることを。十二時の鐘の音が鳴るまでいいから。――そう、願った。

わがままだとは分かってる。自分勝手だとは分かってる。でも……それが、すごく人間らしい願いにも思えた。

運命の夜　―４―

「へえ……本当に怪我がなおった」

ニヌルタの王、タール・チェイスの弟・ユリィは、窓際に立ち、ぼうっと半開きの目で右手の平を食い入るように見つめていた。そこには、つい数分前まで細かいガラスが突き刺さって出来た傷がいくつもあった。今は跡形もないが。誰かさんのありがたい剣のおかげでな。

「すごいんだねぇ、『聖域の剣』って」

感心したような声でそう言ってこちらに振り返る。

って、そんなセリフをニヌルタの奴に言われたくないんだが。いや、そもそも、なんでエンリルの子孫の怪我をエンキの力（メ）を使って治してやらなきゃいけないんだ。てか、その前に、なんでニヌルタの王の弟が、オレの部屋に居座ってるんだ？

ああ、もう……言い始めたらキリがないよ。

オレはソファに腰を下ろし、呆れてため息を漏らす。

「いったい、どこでそんな怪我できるの？　本間先輩とオークションにでかけただけでしょ」

「元彼とトラブルになって」

まるでそれがなんでもないかのようにさらりと言って、ユリィは窓の外を眺め始めた。

が、そんな涼しげに言えることじゃないだろ。オレはぎょっとして、思わず、ソファから立ち上がっていた。

「元彼って……和幸さん？　トラブル？　オークションで会ったの？」
「そう」振り返る素振りすら見せず、ユリィは相変わらず力の抜ける声で答える。「ちなみに、今彼だけど」
「……は！？」

な……何言ってるんだ、こいつは？　今彼？　あの二人、ヨリを戻したってこと？
ちょっと待って。だって、本間先輩は……
困惑して言葉を失っていると、ユリィはくるりとこちらに顔を向けた。やはり感情の伺えない無表情で。

「希望を与えたんだ」

希望？　突然、何の話だよ？
ユリィと同居（認めたくないが）を始めて間もないが、それでも、こいつの意味不明の発言には慣れ始めていた。それくらい、多いからね。だから突拍子もない言葉が飛び出してきても、そこまで驚くことは無くなった。だけど、希望？　それはあまりにも違和感のある単語だ。本間先輩……いや、『災いの人形』について話しているときは。

「愛する人と生きる希望」ぽつりと言って、ユリィはまた窓の外を見やる。まるで、誰かを待っているかのように。「彼女には、諦めてほしくないんだ」

「諦めてほしくないって……」オレはふらりとユリィに向かって歩み寄っていた。「何言ってるの、いまさら？」
「いまさらかな。まだ、『収穫の日』まで一ヶ月はある」
「日にちの問題じゃないでしょ」

ユリィの背後まで近づいて、オレは立ち止まった。カーテンが全開にされた窓に、自分の姿が見えた。窓の奥に立つオレは、白々しくも苦しそうな表情を浮かべていた。本間先輩に同情する権利さえ、ないはずなのに。オレはぎゅっと拳を握り締めた。

「諦める、諦めない、とかいう話でもない。本間先輩に、そんな選択肢はない。そういう運命なんだ」

ユリィは特に返事をする様子もなかった。ただじっと窓の外に目を向けて動かない。

黙ればいいのに、オレの口は勝手に動いて言葉を並べだす。まるで、良心の呵責に駆られて懺悔でもするかのように。

「たとえ、和幸さんとヨリを戻したところで、一緒にいられるのはあと一ヶ月だ。それが希望だっていうの？　残された和幸さんの気持ちはどうなる？」

そうだ。だからこそ、本間先輩は和幸さんと別れたんじゃなかったのか？　和幸さんを傷つけたくなかったから。残された未来が少ないことを知り、愛する人を遠ざけたんだ。これ以上、愛が深まらないように。想いが募れば、それだけあの人を苦しめることになる。そう思ったから。なのに……その気持ちを踏みにじるようなことをして、ユリィはどういうつもりなんだ？

「じゃあ、聞くけど」

不意にユリィは身体ごとこちらに向け、口を開いた。珍しく、その眼差しは鋭く、睨みつけられているようにさえ感じた。

オレは、悔しいかな、たじろいだ。ごまかすように「なんだよ？」

と尋ねると、

「彼は彼女を『テマエの実』から守ろうと必死だよ。君が与えた『偽りの希望』を信じてね」

その瞬間、ハッと目を見開き、オレは呼吸を乱した。心臓に寸分の狂いも無く刃が突き刺されたような、そんな激しい痛みが走った。オレの胸を貫いた鋭い刃――それはきっと、罪悪感だ。

窓に映るオレまでが、軽蔑するような眼差しでオレを見つめている気がした。

「それは……」と目をそらし――ユリィからなのか、光の反射で創り上げられた自分からなのか――口ごもった。

恥ずかしいほどに動揺していた。それでも、ユリィは容赦なく続ける。いつも通り、まるで感情がこもっていない声色で。

「『収穫の日』、『テマエの実』を食べなければ、彼女は土に還る」

「！」

「それを知ったとき、彼はどう思うだろうね？　考えたことある？」

ざっくりと傷をえぐられた。そんな気分だった。

それは、正しく……一ヶ月前から――和幸さんに全てを話したあの夜から――オレが自分自身に問い続けてきたことだった。

考えたことないわけないだろ……！　オレはそう怒鳴ってユリィに八つ当たりしそうになった。ユリィが言っていることは全て正論だと分かっているのに。ユリィの言葉に苛立つ権利さえ、オレにはないというのに。自業自得なんだ。オレが和幸さんに嘘をついたんだ。それがどんな結果を招くか、分かっていて……。いや、だからこそ、嘘をついた。

『テマエの実』を食べなければ、彼女は人間として生きられる――そう言えば、和幸さんは、必死で『テマエの実』から彼女を遠ざける。そう思ったから。

『テマエの実』を食べて『終焉の詩』を詠う以外、彼女に生き残る道はない。それを知っていて、わざと嘘をついたんだ。

――リスト……。

心配そうな天使の声が頭の中に響いた。いつもだったら、呼んでもいないのにでてくるくせに……さすがに、この張り詰めた雰囲気に空気を読んだかな。やっと、天使らしくなったじゃないか。

オレは、大丈夫、と心の中でケットに告げる。

でも、本当は……大丈夫じゃない。きっと、ケットもそれに気付いているだろう。なんて無意味な嘘だ。

オレは苦笑した。今更ながら、神の高潔な血でも騒いでいるのだろうか。激しい後悔。自責の念。それらが身体を蝕んでいる。

「とは、言ったものの」ふと、さっきとは違い、のんびりとしたユリィの声が聞こえてきた。「君を責めるつもりはないよ」

責めるつもりはない？　責められて当然だよ。どんな言い訳だって、オレがしたことを正当化することはできない。

オレは、嘘で和幸さんの気持ちを利用して……あの人に、恋人を殺させようとしていたんだ。

眉根を寄せて見つめる先で、ユリィは壁際の棚へと歩み寄っていった。背の高さほどある備え付けの棚。六段ほどあるのだが、すっからかんだ。一番下の段でガイドブックが三冊ほど倒れていて、あとは真ん中の段に……写真が飾ってあるだけだ。――ナンシェの写真が。

棚の前に立ったユリィは、じっとその写真を見つめていた。そし

て、おもむろにつぶやいた。

「君は君で、守りたい人がいる。それだけだ」

「！」

ユリィの口から零れたのは、慰めるような優しげな声だった。今まで聞いてきたどの突飛な言葉よりも、それはオレを驚かせた。

「は……」と、すっとんきょうな声が漏れた。「それだけ……て」

「使命だからってわけじゃないんでしょ」そう切り出し、ユリィは振り返る。そして、ちらりと棚に飾ったナンシェの写真に一瞥をくれた。「彼女を守りたかったから、嘘までついて、世界の脅威を取り除こうとした。君が考えて選んだことだ。だから、オレは責めないよ」

『だから』……て、やっぱり、こいつの考えてることは分からない。オレはあっけに取られて言葉をなくした。

でも、なぜだろう。なんとなくだけど……ほんの少しだけど……楽になった――気がした。

「パンドラの恋人は、そうはいかないだろうけど」

急にまた眠そうな声でそうぼやき、ユリィはのっそりと歩き出した。

言ってくれる――オレは冷笑を浮かべた。気の利いた冗談のつもりなんだろうか。まあ、いいや。オレはユリィを目で追いながら、肩をすくめる。

「だろうね。覚悟してるよ」

といっても、オレはマルドゥクの王。不死の身体だ。王位を継承しない限り、死ぬことはない。不老不死ってわけじゃないから、身体は老いるけど……。とにかく、どれほど憎んでも和幸さんにオレは殺せない。まあ、痛みは感じるから……それになりに、うっぷんは晴らせるはず。――そういう意味の、覚悟だ。あの人の怒りを、死に匹敵する痛みをもって受け止める覚悟。

「本間先輩は、和幸さんに話すと思う？」

ヨリを戻したっていうなら、今頃一緒にいるんだろう。何があったのかは知らないが、彼女の心に何かしら変化があったのは確かだ。真実を打ち明ける気になったと考えてもおかしくはない。

「話す……とは思ったけど」ユリィは再び窓際に立ち、外を眺め始めた。さっきから、何を見てるんだ？　尋ねようかとも思ったが、それをユリィの言葉が遮った。「やっぱり、話せないみたいだ」

「話せない……みたい？」

なんだか、妙な言い方だな。何か深い意味でもあるんだろうか。だが、ユリィはそれ以上説明しようとはしなかった。マネキンのように突っ立って、窓の外――夜空を見上げている。

「まあ」調子が狂って――ユリィと暮らし始めてからは、いつものことだが――オレはそっぽをむいて腰に手をあてがった。「そりゃ、そうだよね」

って、なに、他人事みたいに言ってるんだ、オレは。本間先輩をつらい立場に立たせているのは、ほかでもないオレじゃないか。

――リスト、あまり自分を責めないで。

ふわりとそよぐ風のようにケットの声が流れてきた。オレは頭を振って、それを否定する。
慰める必要はないよ、ケット。オレは最低のことをした。ちゃんと、分かってる。
もし、弁明の機会が与えられたなら、オレは「怖かったんだ」と言うよ。『テマエの実』を食べることが、彼女が生き残る唯一の方法。『テマエの実』を食べなければ、『収穫の日』の終わりを告げる十二時の鐘と共に、彼女の身体は土へと還り、魂は記憶を奪われ浄化される。そんなことを知れば、あの人がどんな行動を取るのか、目に見えるように分かったから。たとえ、それが世界を滅ぼす行為だとしても、あの人はきっと……

「天使!?」
「!」

いきなり、ユリィが驚いたような声を出した。って、こっちが驚くっての。心臓の鼓動が早まって、不自然に呼吸が荒くなった。

「なに?」

またどうせ不可解なことを言い出すんだろうが。半ば呆れながらも尋ねたオレに、ユリィは素早く振り返る。その表情は真剣……いや、どこか緊張しているようにも見えた。

「現れた、て」らしくない早口でそう言って、ユリィは顔をしかめた。「アトラハシスの天使」
「ア……」

さすがにこのとんでも発言には、居ても立ってもいられなかった

ようで、

「アトラハシス！？」

オレの言葉を遮って、そんな高い声が辺りに響いた。それは確かに、鼓膜を通して脳に伝わってきた。頭の中に響いたわけじゃない。

オレはちらりと横に目をやる。そこには血相変えたブロンドの子供が立っていた。ふっくらとした頬は赤く染まり、真っ直ぐにユリィを見上げる金色の瞳は光線でも放ちそうだ。その容姿は、八歳ほどの少年。彫刻のような白い肌、腰まで伸びた真っ直ぐな金の髪。繊細な美をかねそろえた少年だ。その周りを、金粉のようなものが舞っている。それらはやがて、花火の火の粉のように一つずつ跡形も無く消えていった。――天使の鱗粉……だろうか。

「現れたって……どういうこと？　どこに？」

ずいっと前に出て、オレの天使、ケットはそう声を荒らげる。こうして、他の奴にここまで興奮されると、こっちは冷静にならざるを得ないよな。

オレは腰を曲げ、ぽんっとケットの頭に手を置いた。視線はユリィから逸らさずに。

「その言い方……もしかして、ラピスラズリ？」

ユリィはこくりと頷き、左手に視線を落とす。その中指には、古びた指輪にはめられた蒼い瑠璃（ラピスラズリ）。――彼の天使が宿る『贈り物（ドラ）』だ。

「今、パンドラたちのところに居るんだ」

それを聞いてオレは目を丸くし、そしてすぐに納得した。

そっか、遣いに出してたのか。通りでラピスラズリの姿が見えないと思った。てっきり、ドラの中で休ませているのかとも思ったけど。まさか、ずっと窓の外を眺めていたのは……遣いにやった天使を心配していたからか？

「じゃあ、『人形』の前に、アトラハシスの天使が現れたっていうの？　ちゃんと説明して、ニヌルタの子！」

ケットは声を張り上げてユリィに問いかけた。て、こらこら。興奮しすぎだ。

そんなケットをじっと見据え、ユリィはゆっくりと首を横に振った。

「そういうわけじゃないみたい」

じゃ、どういうわけだよ？　こんなときまで、曖昧な返事をしないでほしいよ。

「ラピスラズリは会ったの？」

すかさずそう尋ねると、ユリィは不自然な間を開け、「うん」と答えた。

「今、会うように命じた」

運命の夜　―５―

「来てやったわよ、曽良！」耳を貫く金切り声でそう怒鳴り、幼い顔立ちの少女がドアを蹴破るようにして勢いよく入ってきた。「なんなのよ、こんな夜遅くに呼び出して！？　くだらない事情だったら、ただじゃおかないから！」

寒さのせいか、怒りのせいか、少女の頬は赤く染まっていた。それが余計に彼女を幼く見せている。いわゆる、童顔――それは周りの男たちを虜にして止まない彼女の魅力の一つなのだが、本人にとってはただのコンプレックスだった。だからこそ、彼女は真っ黒の髪を伸ばし、何度もウェーブをかけてきた。少しでも、女性らしさを引き出すために。服も露出度の高いものばかり選んで、女の色気を出来る限り押し出してきたつもりだ。

だが、彼女はその努力を止めた。一週間ほど前から――細かくいえば、卒業パーティーの翌日から――彼女は髪をしばるようになった。服装もぐっと控えめになり、特にジーパンを履く姿がよく見かけられるようになった。いつも、見せびらかすように、その自慢の細い足をミニスカートで惜しみなく晒してきたというのに。

今夜も例外ではない。パーマがかった髪をポニーテールに縛り、上はパーカー、下はタイトジーンズ。

変わってないのは、その甲高い声と口の悪さだけだ。

「あれ？」と、デスクに腰をかけていた曽良はわざとらしく声をあげる。「なんだ、来てくれたんだぁ。電話ではあれだけ文句言ってたのに。なんだかんだ言って優しいんだから、トミーは」

「うるさいわね！」

吐き捨てるようにそう言って、砺波はずかずかと部屋の中に入っ

てきた。木造の床に穴があくんじゃないか、という勢いでハイヒールを叩きつけながら、デスクまで歩み寄る。

「それで、事情ってなによ？」

曽良に向かい合うなり立ち止まり、砺波は腰に手をあてがった。細い眉は険しく吊りあがり、パッチリとした大きな瞳には苛立ちの色が浮かんでいる。

曽良は怖気づく様子もなく、「ああ、それね」と言って肩をすくめる。「彼女が事情だよ」

曽良のアヒル口は不敵な笑みを浮かべ、その視線は砺波を飛び越え、その背後へ向けられていた。

砺波は訝しげに眉をひそめ、「彼女？」とつぶやきながらも振り返る。曽良の視線の先に何があるのかを確かめるために。

「こんばんは」

その姿を確認する前に、か細くも可憐な声が聞こえてきた。

砺波はその声の主を見るなり、くっきりとした二重が消えてしまうほどに、ぎょっと目を見開いた。

夢中で部屋に入ってきたためか、全く気付いていなかった。この部屋にもう一人いることなど。それも、ところどころアザはあるものの、透き通るような白い肌をした、妖精のような少女。灰色がかった翠色の瞳は、奥ゆかしい輝きを放っている。カラーコンタクトなどではないだろう。

砺波が唖然としていると、少女はすっくとソファから立ち上がり、遠慮がちに頭を下げる。細長い茶色交じりの黒髪がぱらぱらと肩をすべって、前へと落ちていく。それはまるで暖簾のように彼女の顔を覆った。

「鼎（カナエ）といいます」

それだけ言って、鼎は顔を上げて砺波に微笑んだ。

砺波はただ呆然として、曽良よりもニホン人離れした容姿の少女を見つめていた。

嫌な沈黙が部屋に蔓延し、曽良は居心地悪そうに苦笑する。「実はね」と事情を説明しよう、と口を開いた瞬間、砺波が顔を向きなおし、「ねえ」と深刻な表情で迫ってきた。

滅多に見せない砺波の真剣な表情に、曽良は恐ろしささえ感じて身を引いた。が、その間を埋めるように、砺波は顔を近づける。そして、ぼそりと小声で尋ねた。

「あの子、誰だっけ？」

「へ？」

このまま殴られる、とでも思っていたのだろうか。曽良はあっけにとられたような表情を浮かべた。そして安堵したようにがくっと肩を落とす。

「誰……もなにも、初対面だと思うよ」

そう指摘すると、「え」と砺波は目を瞬かせる。戸惑い気味に眉をひそめ、くるりともう一度鼎に振り返った。

こんなに見目麗しい少女、一度会ったら忘れることはないはずだが……砺波は思い出せずにいた。どこで彼女と会ったのか。それなのに、ただはっきりと、妙な懐かしさを感じていた。見覚えがある――そんな気がして仕方ない。

鼎は鼎で、じっと見つめられて落ち着かないのか、頬はひきつり始めていた。

そんな二人の様子を傍から見ているのは、たまらなく居心地が悪いはず。曽良は口元をゆがめ、「さっそくなんだけど」と切り出して、デスクから飛び降りる。この不穏な空気を取り払うかのような明るい声だった。

「彼女を今晩だけでもいいから、泊めてほしいんだ」

「は！？」ようやく、らしさが戻ってきた。そう思わせるような、あからさまに嫌そうな声をあげ、砺波は勢いよく振り返る。「いきなり、なによ！？」

「だって、俺の部屋に泊めるのは、ちょっとしたスキャンダルじゃない」

「あんたのスキャンダルとか、どうでもいいんだけど」

とにかく、と曽良は砺波の肩をつかんで、くるりとデスクの方向へ身体を向けさせた。そのまま、二人で鼎に背を向け、ひそひそと話し出す。

「なんでわたしが？　とは言わせないよ」脅すようにそう言って、曽良は人差し指を砺波の鼻に向ける。「これはトミーにも責任があるんだから」

「どういうことよ？」

不穏な空気を察知して、砺波は不安そうに眉を曇らせた。曽良は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、さらに低い声でつぶやく。

「十字架のこと、かっちゃんにバラしたでしょ」

「！」

砺波はびくんと身体を震わせ、目をむいた。小さな唇の間にぽっかりと隙間が開く。そこからおなじみの甲高い声が飛び出すわけで

もなく、ぽかんとして凍ったように固まった。
曽良はにんまりと笑むと、腕を組む。
「大丈夫。ここだけの話にするから」
その言葉に砺波はようやく我を取り戻し、わざとらしく咳払いをして目をそらした。
「当然よ」
こんなときでも勝気な彼女に、曽良は失笑し、「そのかわり」とため息交じりに口火をきる。「彼女を泊めてあげてよ」
さすがに「いやよ！」と声を荒らげることはなかった。砺波は気に入らないような表情を浮かべたが、「分かったわよ」と、さも面倒くさそうに返事をした。だが、このまましおらしく了解するような少女でないことは、周知の事実。
「そのかわり！」と砺波は曽良に言い返し、きっと睨み付ける。「借りはなしよ」
曽良は慣れた様子で「分かってるよ」と軽く答え、肩をすくめた。
「それで？　和幸の奴、あんたにチクったわけ？」
瑞々しい唇をすぼめ、砺波はぽつりとそう尋ねる。珍しく、弱々しい声色だった。悩ましげに眉間に皺を寄せるその表情は、怒りというよりも哀愁を帯びていた。曽良は不思議そうに砺波を見つめつつ、「いいや」と首を横に振る。

「あの十字架を使って、連絡してきたんだよ」言って、ちらりと背後に――きょとんと立ち尽くしている蒼いドレスの少女に一瞥をくれた。「フィレンツェに来て、彼女を助け出すのを手伝え、てね」
「はあ！？」

耳元で放たれたその甲高い声は、曽良の鼓膜に破らんばかりに突き刺さり、曽良は顔をしかめた。

「助け出すって……どういうこと！？　まさか、あいつ、勝手に『迎え』に行ったわけ！？」

砺波は顔を真っ赤にして曽良に詰め寄る。傍から見れば、その様は曽良に怒り狂っているようだ。曽良は、まあまあ、と両手を挙げて苦笑する。

「しっかり、叱っておいたから」
「そういう問題じゃないでしょ！」

砺波はここ一番の大声でそう怒鳴りつけ、ふいっとそっぽを向いた。

「信じらんない……」

掠れた声でつぶやかれたその言葉は、悔しげで、それでいて寂しそうにも聞こえた。が、そのか細い声は誰に届くわけでもなく――いや、届けるつもりは元からなかったのかもしれない。砺波は大きくため息をつき、くるりと踵を返す。くりっとした瞳に鼎の姿を捉えると、腰に手をあてがって、顎でくいっと出口を指した。

「行くわよ」

「え！？」と鼎は目をぱちくりと瞬かせる。「行くって……」
「ついてくれば、いいのよ」

それだけ言って、砺波はずかずかと歩き出す。突然の展開についていけず、あたふたとしながらも、鼎は助けを求めるように曽良に視線を向けた。

曽良は穏やかな笑みを浮かべてその視線に応え、「明日、迎えに行くから」と告げて、促すように砺波の背中に目をやった。

鼎は安心したのか、薄桃色の唇をゆるめ、「うん」と微笑む。ぺこりとお辞儀をすると、ひらりとドレスをなびかせて砺波の後を追う。待ってやろう、という気はさらさらないのか、砺波はとっくに部屋から姿を消していた。

「待ってください」と慌てた鼎の声が聞こえてくる。曽良は疲れ果てた表情で苦笑して息をついた。

それからしばらく、曽良は一人、ソファに寝転がっていた。眠りにつくわけでもなく、たまにあくびをしてはぼうっと天井を見上げ、物思いにふけっていた。――ある人物が、突然、彼を訪ねてくるまでは。

それは砺波と鼎が出て行ってから十分ほど経ったころだろうか。鼎が閉じ忘れて開けっ放しになっていたドアがいきなりバタンと閉じて、曽良はハッとして身体をびくつかせた。窓は全部閉まってる。風で閉じたわけじゃないだろう。

誰か来たのか、と曽良はゆっくりと身体を起こし、そして――そこに立っていた人物に目を丸くした。

怯えたような青白い顔で、曽良を見つめている少年。百五十七センチほどの小柄な身体。つりあがった瞳。毛先だけ、茶色く染まった髪。

「留王」と曽良は神妙な面持ちで声をかけ、ソファに座りなおした。
食事を充分に取っていないのか、頬はこけ、睡眠が足りないのか、目元にはクマがある。若干十五歳の少年にしては、実に痛々しい姿だ。
曽良は憐れむような視線を向け、「座ったら？」とソファを叩いた。だが、留王は動こうとはせず、何も言わずに唇を噛み締め、拳に力をいれた。
「俺は」と搾り出すような声で言い、救いを求めるような視線で曽良を見つめた。「俺は……ちゃんと殺したんだ」
「……」
「ちゃんと、撃ったんだ」
それは、この一週間、曽良が何度も聞いてきた彼の告解だった。
あの日から――曽良の言いつけを破った日から――留王は、まるで狂ったように、こうして曽良に訴えてきた。そのたびに、曽良ははぐらかしてきた。留王の心に巣食う疑問に答えるわけにはいかないことを、よく分かっていたから。真実を伝えることは、彼の心の闇をさらに深めることにしかならないと分かっていたから。
兄としてできることは他にある、と彼は信じていた。そしてそれを実行する覚悟ももう決めていた。
「座って」と、曽良は落ち着きはなった表情を浮かべ、やんわりと説得するように促す。「何度でも、話は聞くから」

運命の夜　―６―

「パンドラさま、和幸さま」

不意に、遠慮がちにそうつぶやかれる声がして、俺は我に返った。そういえば……と身体中が熱くなるのを感じた。忘れかけていた、照れとか羞恥心とか、そういうものが戻ってきて、慌ててカヤを引き離した。

突然、俺の身体から引き剥がされて、カヤは潤んだ瞳で俺をぽかんと見上げていた。

多分、俺は今、赤面していることだろう。それを隠すように、すぐさま振り返り、

「どうした、ユリィの天使？」

平静を装ったつもりだが、声は上擦っていた。

そう、ここにもう一人（一羽？）、いたことを忘れていた。ユリィの天使……たしか、ラピスラズリ、だったか。

ったく、黙ってないで何か一言くらい言えばいいだろ。ずっと見られていたと思うと、鳥肌が立つほど恥ずかしい。

「お邪魔して申し訳ありません」ベランダの手すりで、鳩……いや、天使は頭を下げるような仕草をしてみせた。「急用ができましたので、わたしはそろそろ失礼いたします」

「そ……そうか」

世話になっといて失礼だが、ガッツポーズでもしそうになった。やっと正真正銘二人きりになれる。って、元は俺がこいつをここに呼んだんだよな。

とりあえず、もう一回くらい、礼を言っとこう。無茶な頼みをしたんだ。
俺はカヤの肩から手を離し、くるりと身体を天使に向ける。
「いろいろ、ありがとな」
って、まんまだな。もうちょっと気の利いた言い方ができないのか、俺は。
「礼なら、どうか我が主に」
さらりとそう返され、俺は豆鉄砲を食らった鳩のごとく、きょとんとしてしまった。
「ああ」と、苦笑しつつ頭をかく。「そうするよ」
にしても……あのユリィって奴は、結局何者なんだろうな？　あとでカヤに聞けばいいか。
「それでは」
相変わらずの穏やかな声でそう言い残し、ラピスラズリは翼をはためかせた。あっという間に飛び立って、屋根の陰へと消えて行く。まるで質量を感じさせない軽やかさだ。
それをぼうっと見上げていると、突然ぎゅっと腹がしめつけられるのを感じた。
「へ？」
いきなりベルトを思いっきり締め付けられたような感覚。なんだ

？　と見下ろしてみれば、ほっそりとした腕が目に入った。背後から回されたその手は、しがみつくように、しっかりとシャツを握り締めている。そして、背中に感じるぬくもり。柔らかな感触。
今更ながら、ざわっと胸騒ぎのようなものがして、身体の芯から熱くなる。……まずい、と思った。意味もなく、思いっきり叫びたくなった。じゃなきゃ、このまま爆発しそうで……って、何言ってんだ。

「和幸くんの匂いがしない」
「に、におい？」

冷静に、冷静に、と暴走しかねない感情を抑えるので必至だった。だから、カヤが何を言っているのかなんて考える余裕もなくて、とりあえず鸚鵡返しするので精一杯だった。

「うん」どこか、楽しげにカヤはそう答える。「このシャツ……違う人の匂いがする」

カヤは俺のみぞおちのあたりで、シャツを握り締める手に力をこめた。
他人の匂い……と、自分の身体を見下ろし、「ああ、そうか」と理由を理解して鼻で笑う。頭に浮かんだのは、あの夜、俺に『田中はじめにならないか？』と持ちかけてきた椎名の顔。あの腹立つ――だが、今回ばかりは感謝しなきゃならない――余裕と自信に満ちた笑顔が脳裏によぎり、ようやく、俺の高ぶっていた感情が収まった。

「このシャツ、『田中はじめ』のでさ」言って、俺はカヤの腕をそっとつかんだ。「椎名がいろいろ裏工作をしてくれたんだよ」

カヤの腕を解いて、俺は身体を回す。向き合ったカヤの頬には、涙の跡が残っていた。でも瞳にはもう涙の影はない。なんとなく、ホッとした。

「望さんが？　裏工作？」とカヤは目を瞬かせて尋ねてくる。「じゃあ、今夜オークションに忍び込めたのって……」

「そう。あいつのお陰だよ」

自分で言ってて胸糞悪い。だが、事実なんだから仕方ないよな。

「そうなんだ」カヤは不思議そうにそうつぶやいてから、にこりと微笑んだ。「じゃあ、感謝しないとね。望さんに」

ああ、それだよ。まさに、それが問題なんだよ。椎名に感謝しなきゃいけないんだ。

俺はがっくりと頭を垂らした。

だが……と、ちらりとカヤを見つめる。――こうして、こいつの笑顔が見れるようになったんだ。屈辱に耐えてでも礼を言う価値はあるよな。

「それにしても」と、カヤは両手を胸の前に合わせた。「いつの間にそんなに仲良しになってたの？」

「な、仲良くなってない！」

つい、ムキになって怒鳴っていた。「あ」と、恥ずかしくなってそっぽを向くと、くすくすと笑うカヤの声が聞こえた。

「分かった。仲良くないんだね」

子供をあしらうような言い方だ。俺はわざとらしく咳払いをして、

「そういえば」と無理やり話題を変える。

「椎名といや……お前、制服どうしたんだ？」

唐突にそう尋ねると、カヤは笑みを消して「制服？」とぎこちなく小首をかしげた。

「ああ。制服、捨てたんだって？」言って、俺はあさっての方向を見つめ、あの夜のことを思い出す。椎名がオークションへの潜入を提案してきた夜だ。焼き鳥屋からでてきた俺を出迎え、あいつはシャツを投げてきた。泥だらけの、カヤのシャツだった。「月曜……お前が学校を早退した日だよ。泥だらけで帰ってきたんだろ？　椎名が心配してたぞ」

何があったんだ？　と聞こうとして、俺ははたりと口をつぐんだ。見たこともないほど、深刻な面持ちをしたカヤの顔が目に飛び込んできたからだ。

「どうした？」顔色が悪いようにも思えて、俺は支えるようにカヤの肩に手を置いた。「体調でも悪いのか？」

すると、カヤはその言葉が信じられないかのようにハッとして、疑るような顔で見てきた。思いもしない反応に、俺はたじろいだ。

「な……なんだ？　変なこと言ったか？」

カヤは不自然に微笑んで、「ううん」と慌てたように首を左右に振る。そしてすぐにうつむいてしまった。

明らかに、「ううん」じゃない。

やっぱ……まずいこと聞いたんだろうか。でも、体調を聞いただ

けだし。っと、待てよ。そういえば、砺波に同じようなこと聞いて、蹴り飛ばされたことがあったな。

――生理に決まってんでしょ、気付きなさいよ！

ああ、そうだ。調子悪そうだから心配してやっただけなのに、そんな理不尽この上ない理由で激怒されたことがあった。アレのときのあいつは、逆鱗だらけの竜みたいで、面倒くさくて仕方なかった。今となっては、それも懐かしいが。

とにかく――と、意識を記憶の海から引き上げ、目の前のカヤへと戻した。この反応も……同じ理由、か？

「とりあえず」それなら、これ以上聞くべきじゃない。カヤは砺波じゃないから、蹴り飛ばしてきたりはしないだろうが。「部屋に戻って、休むか？　身体も冷えただろ？」

そういえば、よく肩や背中をさらけだしたこんな格好で寒くないな。ドレスの生地も薄そうだし。十二月が近づいているこの夜。さすがの俺だって、肌寒さを感じている。まさか、ずっと気を遣って我慢していたんだろうか。いや、でも……

不意に疑問が浮かび、俺は眉をひそめてカヤの肩を見つめた。そこに置いた手に、意識を集中させる。それでも、感じられなかった。――こんな寒空で、こんな薄着で……震えてもいない？

「ありがとう」

「！」

いきなり澄みきった声が聞こえ、俺はぎくりとした。

「なにが！？」

反射的にそんな質問が口をついて出ていた。明らかに挙動不審だ。
だが、カヤは気にする様子もなく、口元を緩め、寒さなんて忘れてしまいそうなほど、温かみに満ちた笑みを浮かべた。

「身体のこと、心配してくれて」
「……は」笑顔に見とれていたこともあっただろうが、それ以上に、カヤの言葉が不可解で、すぐには反応できなかった。ややあって、俺は頭を捻り、「いや」と戸惑った声を漏らす。「当然だろ」

訝しげにそう言うと、カヤは「うん」と懐かしむような眼差しで足元を見下ろした。
冷たい風が吹き荒れ、カヤの短い髪を揺らした。ふんわりと漂ってくる彼女の香りに、心をくすぐられるようだった。
カヤは何かを諦めたような寂しげな笑みを浮かべ、風の囁きよりも小さく儚い声でつぶやいた。

「そんな当然だったことが、今はすごく嬉しいの」

＊　＊　＊

正方形の箱が、上下左右に積み重なるようなデザインの屋敷。高級住宅街が立ち並ぶこのあたりでも特に有名な、国務大臣・本間秀実の自宅だ。その平坦な屋根の上で、月明かりのもと、妖しく佇む人影。シルエットだけでも男を魅了してしまいそうな、扇情的な身体（ボディ）。豊満な胸にひきしまったウエスト。闇と同じ色に染まったドレッドヘアが風になびいている。その瞳はマグマのように紅い輝きを放っていた。やがて、そのマグマに一つの影が飛び込んできた。――それは一羽の白い鳥。
まばゆい輝きを放ちながら、聖霊を思わせる白い鳥はみるみるう

ちに形を変えていく。小さな鳥だったはずのそれは、今や大の大人を押し倒せるほどの巨体に変貌していた。翼は光の粒子となって散り、変わりに現れたたくましい四肢が、浮力を失った身体を受け止めるように地面を踏みしめた。

黄金の身体は月光を眩いばかりに反射して、風にそよぐたてがみは燃え盛る炎のようにゆらいでいる。

女はふっくらとした唇に笑みを浮かべ、ふくよかな胸を強調するかのように腕を組んだ。

「獅子（ライオン）」とつぶやいて、紅い瞳を細める。「わたくしへの威嚇のおつもりかしら？　シャカンの遣い」

黄金の獅子は「いいえ」と、見た目にそぐわない優しげな声を漏らした。

「最低限の、誠意を見せているつもりです。アサルルヒの遣い」

「バール、と呼んでくださる？」アサルルヒの遣い――バールは艶のある色黒の腕を上げ、宣誓でもするかのような姿勢でそう告げた。

「ところで、誠意とはどういう意味ですの？」

すると、獅子はほんのすこし牙が見えるほどに口を開き、そこから白い息を吐き出した。――どうやら、ため息をついたようだ。

「百獣の王だから、だそうです。わたしにも理解できません。我が主のきまぐれでしょう。お気になさらず」

どこか呆れたような口調だった。バールは眉根を寄せ、「あら、そう」と戸惑いがちに答えた。

「バール」急に、獅子は――気を取り直し――鋭い目つきでバール

をにらみつけた。「アトラハシスは一体、何を考えているのですか？」

その問いに、バールは顔色を変えた。厚い唇から笑みは消え、きゅっと固く結ばれた。

「『パンドラの箱』をどうなさるおつもりなのです！？」

責めるように問いかけ、獅子は鋭い爪でコンクリートをひっかくようにして、一歩一歩バールに歩み寄る。

「本来ならば、パンドラさまを『収穫の日』までお傍でお守りすることが、あなたの主・アトラハシスの役目のはず。なぜ、『パンドラの箱』とともに姿をくらましておられるのです？　一体、何を企んで……」

「フォックスは愛する人を全て失いましたの」

ぽつりとつぶやかれたバールの言葉に、獅子は脚を止めた。「はい？」とたてがみを揺らして小首をかしげる。

バールは眉を曇らせ、紅い瞳を睫の陰に隠した。

「『裁き』が始まったあの日……ニヌルタの王が、アトラハシスの一族を皆殺しにしましたわ」

その瞬間、ハッと獅子は息を呑む。たまらず目をそむけ、「知っています」と苦しげにつぶやいた。

「……我が主から聞きました」

不意に、バールは遠くを見つめた。それでも、紅い瞳に映るのは、

果てしない闇。肌寒く、寂しいほどに無限に広がる冬の夜空。

「愛する者のいない世界は、ルルにとって地獄と同じ」だから、とバールはそっと瞼を閉じた。「あの方はお人形を守りたいの。あのお人形しか、この世界であの方が愛せるものは残っていないから」

バールの言葉が理解できず、獅子は「はい？」と聞き返す。

バールはゆっくりと瞼を開き、哀しげに微笑んだ。

「愛か世界……選べるものではないのだわ。ルルの愛こそ、命を創り、世界を創造するのだから」

獅子は訝しげにバールを見つめ、何も言葉を発しようとはしなかった。バールは獅子にちらりとも視線を向けることなく、独り言のように続ける。諦めに満ちた表情で。

「わたくしの愛では、あの方を慰めることも出来ない。だから、わたくしには何も出来ませんわ。あの方を止めることも、諌めることも……だから、あの方の望みを叶えるだけ。それが、エリドーを滅ぼすことになっても」

屋根を滑るように風が通り過ぎていった。

獅子はしばらくバールを見つめ、それから呆れたように首を横に振った。そして、「バール」と子供を諌めるような声で鳴いた。

「わたしたちは天使。特にあなたは、ルルの王であられる賢者アトラハシスを導き、このエリドーを守るという尊き使命を帯びた天使」そこまで言って、獅子はぎらりと鋭い眼光をバールに浴びせる。「ルルに心を奪われ、その使命を見失えば、どうなるか。女神ティアマトのこと、お忘れではないでしょう？」

バールの赤い瞳がぎろりと獅子を睨みつけた。だが、獅子はひるむことなく続ける。

「ルルの男を愛し、ルルに味方し、神々に反旗を翻した女神ティアマト。その罰として、その身は引き裂かれ、エリドーの天と地に封じられた」

そして……と、獅子は憐れむような眼差しを浮かべて目を側める。

「ティアマトとその男との間に生まれた娘、エノクは、その魂に永遠の呪縛をかけられ、今もどこかで生き続けている。不滅の魂を抱え、躯(からだ)を乗り換え、預言者として孤独に彷徨っている。永遠に……」

「無駄話はもういいかしら？」

獅子が話を終える前に、バールはさらりと一蹴した。まるで気にも止めていないような様子に、獅子はぎょっとしてバールを見上げた。

「無駄話では……」

「わたくしがこうして現れたのは、あなたに尋ねたいことがあるからですの」

バールは獅子の言葉を遮って、真剣な表情でそう切り出した。くねらせた腰に手をあてがい、刺すような視線を獅子に向けている。本気でこれ以上『無駄話』をする気はないようだ。雰囲気の変わったバールに戸惑いつつも、獅子は「わたしに？」と尋ねる。

バールはにんまりと笑み、人差し指を夜空に向けて突き出した。

「あなたの主人は何者ですの？　かわいらしい坊やみたいですけど」

「……」

獅子は顎をひいて黙り込んだ。――いや、正しくは会話を始めていた。遠く離れた主と思考を繋げて、指示を仰いでいたのだ。無論、同じ天使であるバールもそれに気付いている。せかすことはせず、しなやかな両脚を肩幅に開き、大人しく答えを待っていた。

ややあって、獅子は首を横に振った。

「我が主は、自己紹介は面と向かってしたい、と言っています」

「あら、紳士だこと」

元から、答えを期待はしていなかったのだろうか。それ以上追求することはせず、バールは「それなら」とあっさりと次の質問へと移った。

「『お人形』に何があったのか、教えてくださる？　あなた、知っているのでしょう？」

獅子は「何の話です？」と訝しげに問い返す。すると、バールは人差し指を厚い唇に押しつけ、妖しげに笑んだ。

「わたくしの『贈り物（ドラ）』が何か、ご存知ありません？　あの『お人形』をどんなに遠く離れたところからでも観察できる『守護者の鏡』。もちろん、あの日の出来事も、ちゃんと見ていましたのよ」

「あの日の出来事……」

たてがみから突き出た獅子の耳がぴくりと動いた。それに何か確信を得たように、バールは目を眇める。

「月曜日……と言えば、分かるかしら？　シャカンの遣い」

獅子は頭を下げ、威嚇するようにバールを睨みつけた。第三者から見れば、今にも女性が猛獣に襲われそうな恐ろしい場面だろう。が、女は微塵もひるむ様子を見せない。胸を張り、はっきりと言い放つ。

「あの『お人形』、なぜ死なないの？」

運命の夜　―７―

「ちゃんと撃ったんだ」留王は真っ青な顔で右手を見つめ、これで何度目かも分からないセリフを口にした。「胸を貫通したはずなんだ」

その右手を額に置いて、身体を丸める。どこからか冷たい隙間風が入り込む古い教会だ。ヒーターをつけているといっても、肌寒い。だが、留王の額からは汗がにじみ出て、まるで熱でもあるかのようだ。

カインの『実家』。その奥にある藤本マサルのオフィスで、留王はソファに腰掛けていた。その隣に座り、憐れむような視線を留王に向けているのは、彼の兄であり、この組織のリーダー代理でもある曽良だ。

彼は何も言わずに手を伸ばし、ひどく塞ぎこんでいる弟の背を慰めるようにさすった。

普段の留王なら、すぐさまその手を払いのけ、罵声の一つでも浴びせるところだろうが、このときばかりは違っていた。ぴくりともせず、思いつめた表情で一点を見つめたまま、固まっていた。ただ、その困惑に震える唇だけは、動きを止めずに迷える言葉を吐き出し続ける。

「心臓を撃ちぬかれて、なんで生きてるんだ？」おかしい、と留王は怯えたような表情で二、三度繰り返した。まるでよからぬものにでもとり憑かれているかのような様子だ。「茶々は、俺が手元を狂わせたと思ってる。心臓に当たってはいなかったのだ、と思い込んでる。いや、そう思いこんで自分を納得させてるんだ。じゃなきゃ……」

そこまで言って、やっと留王は口を噤んだ。
茶々は、留王と同い年のカインであり、リーダー代理をしている曽良の右腕でもある。そして、あの日、冷たい雨が打ちつける『虹の橋』で、曽良の言いつけを破らんとする留王を止めようとした人物でもあった。――本間カヤには手を出すな、というリーダー代理の命令を。
だが、茶々は止められなかった。留王はその銃口を本間カヤに向け、引き金をひいてしまった。熱風に押し出された鉛の弾は、彼女の胸を撃ちぬき貫通した。
茶々は止められなかった。――少なくとも、彼女はそのときはそう思っていた。だから、すぐさまその場から逃げ出した。たった今、表の世界で人を殺した留王を連れて。
だが、助言と赦しを求めに赴いた曽良のもとで、二人は思わぬ事実を聞かされることとなった。

「なんで……あの女、生きてるんだ！？」

留王は叫んだ。初めて、その事実を聞かされたときのように。
相当、混乱しているのだろう。息は荒く、肩は上下に激しく揺れ、髪をかきむしるように両手で頭を抱えている。

「なんで、何事もなかったかのように生きてるんだ！？」

曽良は苦渋の表情を浮かべ、「留王」と優しく声をかけた。すると、留王はばっと曽良に振り返り、鬼気迫る表情で訴えかける。
「見たんだ」その目は血走り、元々白い顔は死人のように青白く、生気がなくなっていた。「あいつを撃って、茶々と逃げ出したとき……俺は振り返ったんだ」

曽良は顔色ひとつ変えなかった。そのあと、留王が何を言うのか、すでに知っているからだ。それは、この一週間、何度も何度も留王に訴えかけられてきたことなのだから。だが、曽良は何も言わない。何度でも話を聞く――その約束は、ごく単純で、それでいて、今の留王には何よりも必要なことだと分かっているからだ。彼がこの話を出来る相手は、曽良しかいないのだから。――誰にも言うな、と口止めしたのは、ほかでもない曽良自身ではあるのだが。

「あれは……血じゃなかった」

留王は焦点のあっていない目であらぬ方向を見つめた。

「あいつの身体から漏れていたのは……」留王の声は段々と小さくなり、それに比例するかのように身体からも力が抜けていった。落ち着いたのではないだろう。それはおそらく、諦めの境地に近い心境。そして留王はぽつりとつぶやく。「あれは、泥だ」

留王は力無げに首を左右に振り、肩を落とす。

「あの女は……なんなんだよ？」

それだけ言うと、がっくりと頭を垂らして留王は黙り込んだ。

ずっと大人しかった曽良の唇がわずかに開き、「この話……」と、その隙間から感情の伺えない無機質な声が零れてきた。「茶々（ティコ）以外には誰にも言ってないよね？」

「……」

留王は何も言わずに小さく頷く。それを確認して、曽良は安心したように頬を緩めた。

「安心して」と囁くように言い、「もう手は打ったから」

その言葉に、留王は今まさに正気に戻ったかのように目を見開いて、顔を上げる。怪訝そうな表情で振り返れば、そこにあるのは普段と変わらぬ曽良の能天気な笑顔。留王の表情はさらに曇った。

「手は打った……？」

戸惑いをあらわにする留王に、曽良はすばやく言葉を返す。

「殺せないなら、他の方法で止めればいいだけだよ」

曽良は口元の笑みだけはそのままに、冷めた眼差しで窓のほうを見やった。

「愛する人が傍にいる限り、彼女も世界（ここ）を滅ぼそうとは思わないでしょう」独り言のようにそう言って、曽良はひとつため息をつく。

「あと一ヶ月……かっちゃんにはもう少し、泥遊（…）びをしててもらうよ」

「……は？」

曽良の意図することが理解できるはずもなく、留王は顔をしかめて呆然とするしかなかった。

＊　＊　＊

とあるマンションの最上階。その角部屋の一室を、もう十六年ほど一人の男が借りている。が、そこはまるでモデルルームのように閑散として、最低限の家具しかない。生活観のない部屋、という言葉がここまでしっくりくることもないだろう。

そんな薄暗い部屋に冷たい風が吹きこんで、分厚い遮光カーテンを撫でた。大きく口を開けた窓は、今か今かとベランダに佇む主人の帰りを待っているようだ。

月明かりが落とす彼の影は、部屋の中、フローリングの床にまで伸びていた。ふと、その影に浅黒い肌をした足がふわっと降り立つ。

「フォックス」麻布(あさぬの)でえつらえたビキニのような衣装に身を包み、妖艶な姿態をあられもなく晒した女は、ベランダに向かってそう呼びかけた。その燃えるような紅い瞳は、寂しくも見える男の後姿を映しだしている。「シャカンの天使がおもしろいほどに惜しみなく話してくれましたわ。彼女の主はただの間抜けか、それとも何か企んでいるのか……どちらにしろ、事情は分かりましたわ」

ドレッドヘアを揺らしながら、女は素足をひたりひたりと鳴らして、ベランダへと歩み寄る。

「あなたの『お人形』、もう全てを知っていますわ。そして……」

月光が、ベランダに出てきた女の顔を照らした。どこか浮かない表情を浮かべる、異国の女だ。傷一つない、こんがりと日焼けしたような肌は、上質なショコラを思わせる。ともすれば、その唇はラズベリーといったところだろうか。扇情的な体つきに加えて、妖しげな美しさを漂わせるその顔つきは、一度虜にした男を逃がすことはないだろう。

だが、この魅力をもってしても虜に出来ない男をどうすればいいのか。それは、この妖美な天使――バールを創り上げた神すらも分からないに違いない。

「ねえ」と嬌声にも似た声を漏らし、バールは腕を組んだ。「聞いてらっしゃる？」

「……」

振り返る様子のない主の背中をじっと見つめ、バールはひっそりとため息を漏らす。

「『お人形』は神の罰を受けたのですわ」

「神の罰？」

やっと、耳に心地よい低い声が聞こえてきて、バールはぶるっと身体を震わせた。うっとりと目を細め、「ええ」と答える。そうっと腕を伸ばして主の背に手を置くと、身体を寄り添わせる。豊満な胸を押し付けるように身体を密着させて、バールは主の耳元に息を吹きかえるように囁きかける。

「不死……になったんですの」

その瞬間、バールの主、フォックス・エン・アトラハシスは、はっと目を見開き――そして、ほくそ笑んだ。満足そうに瞑目し、「そうですか」と味わうようにつぶやく。

バールはその反応に、「あら」と落胆したような声を漏らして、身体を離す。

「驚きませんのね」

「予想はついていたことでしょう」言って、フォックスは瞼を開く。

「あの日、カヤは胸に銃弾を受けて、死ななかった。それがすでに答えです。不死になったという可能性以外、何か思いつきますか？」

「それはそうですけれど」バールは頬に手を置き、呆れたようにそう答えた。「それでも驚くくらいの愛嬌があってもよろしいんじゃありません？　せっかく確認してきたというのに、つまりませんわ」

甘えるようなバールの声にフォックスは特に言及するわけでもなく、「しかし」と相変わらず冷静な声で切り出す。

「神の罰、とはどういうことです？」

無視されることに慣れているのだろう。「ああ、それでしたら」とバールはけろりと答える。

「ほら、言い伝えがありましたでしょう？　『収穫の日』が過ぎる前に、『災いの人形』に全てを明かすと神の罰が下る、と。てっきり、明かした者に災いがふりそそぐのかと思っていましたけれど」そこまで言って、不思議そうな表情でバールは唇に人差し指を押し当てた。「どうやら、罰が下るのは『お人形』だったようですわね」

すると、くつくつと笑う声が聞こえてきた。バールは小刻みに揺れる主の背中を訝しげに見つめる。

「なにか、おかしいかしら？」

不服そうに尋ねると、「すみません」とフォックスは穏やかにつぶやいて、くるりとこちらに振り返る。

眉目秀麗な青年は、誇りと知性をかねそろえた気品漂う笑みを浮かべていた。バールと似た色の肌。さらに、目を見張る整った顔立ちである、という点では、二人はよく似ているのかもしれない。だが、フォックスには、天使であるバールをも魅了してしまうオーラがあった。高貴なる魂から放たれる、凛として落ち着きはなったオーラ。王たる風格、とでも言い表せばいいのだろうか。陳腐な言い方をすれば、カリスマ性とでも言えるだろう。フォックスは、確かにそれを持ち合わせていた。

その漆黒の瞳に囚われて、バールは硬直した。ほんのりと頬を赤

らめると、うっとりと見とれるような視線を送る。
風がフォックスの前髪を揺らし、目元をくすぐっていった。フォックスはそっと前髪をかき上げると、「罰はカヤに下ったのではないでしょう」と唱える。

「どういうことですの？」とバールが興味津々に尋ねると、フォックスはもったいぶるように微笑んだ。

「これで」と口火を切って、トーキョーの街を見渡す。「ルルの唯一の希望は消えたわけです」
「唯一の……希望？」ぱちくりと目を瞬かせてから、バールは苛立ちをあらわに唇をとがらせる。「はっきりと言ってくださらない？
さっぱり、分かりませんわ」
「罰はルルに下ったんですよ、バール」

再びバールに視線を戻して、フォックスはさらりと答えた。嬉しそうに頬をゆるめて。

「分かりませんか？　もう、ルルにカヤを殺すことはできない。つまり、彼らに『裁き』を止める術はなくなったのです。ただの一つも……」

それを聞くなり、バールは「あ」と目を丸くした。その反応に、フォックスは満足げに頷くと、「これで、だいぶ安心しました」と吐露した。本当に安堵しているのだろう。その表情からは、緊張や不安といったものは微塵も見受けられない。

「安心……ですの？」

一方、そう聞き返す彼女の顔には困惑の色が浮かんでいた。フォ

ックスは貴公子を思わせる上品な微笑を浮かべて、そんなバールを見つめた。

「正直、不安だったんです。あの少年の気が変わり、カヤを殺すようなことがあったら……と。最もカヤの近くにいるのは彼だ。彼がカヤを殺す気になれば……さすがに、わたしたちにそれを防ぐことは不可能でしょうから」

思わぬ主の告白に、バールはぎょっとした。

「そんな……」と、取り乱した声を漏らして、食い入るようにフォックスを凝視する。「そんな心配をしていらしたの！？　それなら、やはりさっさと取り返して、わたくしたちであの『お人形』を保護すれば……」

すっとフォックスは右手を出して、バールを制す。凛々しい眉に力を入れ、きっと厳しいまなざしを向けた。それだけで、バールの動きははたりと止まる。不満げな表情を浮かべたものの、一瞬にして大人しくなった。

「何度、繰り返せばいいのですか、バール？　彼は必ず必要になります。『収穫の日』に」

「分かっておりますわ」ため息混じりにそう答え、バールは肩を竦める。「彼は布石……耳にたこ、とはこのことですわね」

もうこれ以上は聞きたくない、と言いたげに手をぱたぱたと振り、バールは「彼といえば」とすぐさま話を変えた。

「『お人形』とのラブラブな会話をちょっと立ち聞きしたのですけれど、どうやら彼はちょっと勘違いをしているようでしたわ」

「勘違い、ですか？」
「ええ」とぼんやりと答え、バールは思い出すように夜空を振り仰ぐ。「『テマエの実』なんて食べさせない、この世界でずっと一緒に生きていこう――とかなんとか。どうも、変ですわ。あの子、『お人形』が『テマエの実』を食べなきゃどうなるか、まるで理解していないようで……」

その瞬間、フォックスは目をむいた。驚愕した表情を浮かべ、凍りついたかのように動かなくなった。

「どうしましたの？」

主の不穏な様子に気付いて、バールは顔をしかめて彼を注視する。すると、彼の唇がふっと怪しく微笑んだ。「そうですか」とそれは囁くような声を漏らし、止めることができない、と言わんばかりに笑みを広げていく。

さすがのバールも不気味に思ったのか、一歩あとずさり、ひきつり笑顔を浮かべた。

「ど、どうなさいましたのよ、フォックス？」
「素晴らしいですね」

突然、フォックスは高らかに声を上げた。もはや悦びを隠せないのか、満面の笑みを浮かべている。だが、それでも――どこか、影があるように見えて仕方のない不完全な笑みだった。

「これで、もう一つの懸念も消えました」

はっきりとそう言い放つフォックスに、バールは眉を曇らせ、「はい？」と小首をかしげる。

「彼は完璧です」

それは、自信に満ち溢れた発言だった。しかし、彼の天使は戸惑うのみ。

「完璧って……」と、バールはぎこちなく言葉を搾り出す。「確かに、母性をくすぐられる魅力的な坊やですけれど……」

そんな彼女らしい切り返しにフォックスは失笑し、再びトーキョーの夜へと顔を向けた。

冷たい風に打たれながらも、人々の生活が生み出す灯りをその目に焼き付ける。夜空に浮かぶ星の輝きを打ち消してしまうほどに増幅した人々の光。フォックスは冷然とそれを眺め、不意につぶやく。

「もう少しだ、カヤ。もう少しで、君に楽園を与えてやれる」

煌くネオンをも吸い込んでしまいそうな漆黒の瞳。そこには、狂気にも似た激しい執着の色が浮かんでいた。

運命の夜　―８―

「あれ！？」

ベランダで靴を脱ぎ、カヤの部屋に足を踏み入れたときだった。先に部屋の中に入っていたカヤが目をまん丸にして俺を凝視し、驚いたような声をあげた。

「な……なんだよ？」

後ろ手に窓を閉めつつ、俺は戸惑いがちにそう尋ねる。あまりにも見つめられ、一瞬、チャックでも開いているのかと、ズボンに視線を落とした。だが……特に異常はない。――と、慌てたようにカヤが歩み寄ってくる足音が聞こえて顔を上げた。

「ない！」

俺の目の前に立つなり、カヤは不安げな表情を浮かべてそう言いはなった。そして、俺の胸倉に手を伸ばし、シャツを破きそうな勢いでそれをつかむ。って……え？　なんだ、この状況？

「……カヤ？」

カヤに胸倉を掴まれる日が来ようとは、思ってもいなかった。俺はひきつり笑顔を浮かべて、無意識に怯えたような声を漏らしていた。おそらくこれは、身体に染み付いた幼いころの記憶によるものだろう。非常識な姉をもった後遺症、とでも言うべきか。

――和幸くんが頼れるくらいの女になる。静流さんみたいな。

いつかのカヤの言葉が脳裏をよぎる。静流姉さんみたいな……か。まさか、着実にその道を歩んでいるんじゃあ……と、恐ろしい未来のシナリオを思い浮かべていた、そのとき。

「ネックレスは？」
「へ？　ネックレス？」
「カインのお守り！」

カヤは血相変えて、今度は両手で俺の胸倉を掴んだ。いや、胸倉を掴むつもりではないのだろう。ただ、首元を確認したいだけだ。
カインのお守り――その言葉に、俺はやっと状況を把握した。
俺はため息をもらし、カヤの手首をつかむ。

「大丈夫だ」言って、俺は若干腰を曲げ、手に持っていた紙バッグをカーペットに下ろした。「失くしたわけじゃないよ」

カヤはぱちくりと目を瞬かせ、力なく俺の胸倉から手を離す。それに合わせて、俺もカヤの手首から手を離した。苦笑しつつ、ポケットに手をつっこむ。

「ちゃんとここに……」

ポケットの中で、固く冷たい物体に指先が触れ、ざわっと鳥肌が立ったのを感じた。金縛りにでもあったかのように、身体が硬直する。

――家族の脅威は全て取り除く。

どこからともなく、曽良の声が聞こえてきて、ぞっと背筋に悪寒

がはしった。ひんやりと嫌な汗が背中を伝う。
俺は固唾を飲んで、カヤへと視線を向けた。
カヤは不思議そうに小首を傾げて、俺の様子を伺っている。
「どうしたの？」
遠慮がちに尋ねてくる彼女は、穢れのない無垢な少女、そのものだ。とても世界を滅ぼす災いには見えない。家族を脅かす存在には見えない。
でも、彼女は――いつのまにか、ポケットにつっこんでいた手は、ロザリオを握り締めていた。
俺は視線を落とし、早まる鼓動の音に耳を澄ませる。そうしていくうちに、自分の世界に入り込んでいくのを感じた。記憶の奥深くにもぐりこんで、ついさっき別れの言葉を交わした弟と意識の中で再会する。
相変わらずのアヒル口に浮かぶ笑み。何も考えていないかのような、能天気な声。それでも、今や裏世界の一組織を動かせる権力を（代理ながらも）持っている。そして、その組織を……いや、家族を守る責任を背負っている。
単に兄弟だ、と言える相手じゃなくなったんだ。
――カーヤは世界を滅ぼさない。やっぱり、俺はそう言うよ。
あれは、本音なのか？　信じていいんだろうか。
俺は顔を上げ、再びカヤを見つめた。
まるで自分の腕じゃないかのように、十字架を握り締める右手が動かない。
兄弟を疑うなんて最低なことだ。――分かってる。でも……
「顔色、悪いよ？」おずおずとカヤは口を開き、俺の頬に手を当て

てきた。「汗、かいてる。調子悪い？　怪我でもしてる？」

本気で身体の心配をしているようだ。カヤは注意深く俺の全身を見回し始めた。

「そうじゃないんだ」と、緊張で喉に詰まっていた空気を吐き出し、俺はゆっくりとポケットから手を抜く。金属がこすれる音とともに、ネックレスのチェーンが一緒にこぼれでる。

手の中に、ひんやりと冷たい物体を感じる。力をこめれば簡単につぶせそうな、ちっぽけな金属の塊なのに。この中には、カヤを裁くからくりが仕掛けられている。どれほどの殺傷能力かは不明だが、胸元に提げている限り、爆発すれば命に関わるだろう。

これを……カヤに渡せ、ていうのか。

「あ」と、カヤの明るい声が聞こえてきた。「ポケットに入れてたんだね」

カヤの満面の笑みに、ひどく胸が軋んだ。「あ、いや」とはっきりしない返事をこぼす。

「感謝しなきゃ」急に、カヤは声を落としてそうつぶやいた。愛でるような視線で俺の右手を見つめ、安堵した笑みを浮かべている。

「こうして、ちゃんと和幸くんを守ってくれたんだもの」

「！」

ハッとする俺をよそに、カヤは合掌し、冗談っぽく「ありがとうございます」と俺の右手――いや、その中に握られている十字架に、一礼してみせた。

十字架に合掌、という組み合わせに違和感を覚えつつも、俺もじっと右手を見つめた。そっと拳を開き、銀色に鈍い光を放つ十字架

に視線を落とす。

「守ってくれた……か」

俺は目を細め、ぽつりとつぶやいていた。確かに、そうかもしれない。

頭の中に浮かぶのは、俺を射殺しようとした男の亡骸を前に、間に合ってよかった、と笑みを浮かべた幼馴染。少なくとも、あいつは俺をまだ家族と思ってくれている。それだけは、確かだ。

十字架を凝視してぼうっとしていると、「和幸くん」とカヤが顔を覗き込んできた。

「つけて」

「『つけて』？」

カヤはいたずらっぽく笑んで、踊るようにくるりと俺に背を向けた。

腰まであらわになった背中に、俺の心臓が大きな鼓動を打って反応した。月の光だけが頼りだが、それでも……いや、それが余計に彼女の背中を艶かしく見せて――つい、ごくりと生唾を飲み込んでいた。

「どうかした？」

露出された彼女の素肌に気を取られていると、カヤがくるりと顔だけこちらに向けてきた。やべ、と俺は「なんでもない」と慌てて返事をして、ロザリオのチェーンを手に取る。

カヤは安心したように微笑んで、再び顔を前に戻した。

チェーンを指にからめ、十字架を垂らす。風もないのにそれは揺れ、四方におぼろげな光を反射させている。

それをじっと見つめていると、催眠術でもかけられているような気分になる。

俺は固く目をつぶって、首を横に振った。――情けないが、どうしようもないんだ。迷える状況でもない。カヤにこれを返さなければ、砺波に迷惑がかかるだろうし……きっと、カヤの疑いを深めることにもなるだろう。入浴以外でこれを外せば、暗殺される、て話だったし、カヤを危険な立場に追い込むだけだ。このまま、あと二日間堪えて、カヤはシロだとカインの連中に納得させるほうが利口だろう。

ただ、それでも俺の手を躊躇わせるのは……曽良なんだ。カヤが『黒幕の娘』だとは思ってはいないだろうが、あいつはとんでもない事実を知ってしまった。カヤが『黒幕の娘』以上に、家族にとって危険な存在であること。

あいつは、このロザリオをカヤに返すのは砺波のためだ、と言った。カヤは世界を滅ぼさない、そうも言ってくれた。俺を信じている、とも言ってくれた。だが、本当なのか？　もし、全部嘘だとしたら……あいつの狙いがもし、これでカヤを殺すことだとしたら……

俺はぐっと奥の歯を噛み締めた。

くそ。こうなったら、もう思いつく方法は……

「なぁ、カヤ」と瞼を開くなり、その華奢な後姿に声をかける。「今から、俺の部屋に泊まりに来ないか？」

出し抜けだったとは我ながら思う。驚いたのだろう、カヤはびくんと身体を震わせた。

「お……おと、まり？」

不自然なイントネーションでカヤは繰り返した。俺は「ああ」と短く返事をし、両手でチェーンの両端を持つ。背後から腕を回し、

カヤの首に『お守り』を下げた。
心臓が不規則に波打っている。それを感じつつ、彼女の首の後ろでネックレスの留め具をはめる。その指先も心なしか震えていて、留めるのにてまどった。それでも、カチンと音を鳴らして、二つの輪はつながった。
まるで爆弾の配線を手伝わされた気分だ。
俺は嫌なため息をもらし、そっと留め具から手を離す。

「できたぞ」と知らせるが、カヤはなぜか、ぴくりともせずに俺に背を向けたまま動かない。「どうした？」

尋ねると、弾かれたようにカヤは振り返り、ぎこちない笑顔で「ううん」とごまかす。「ありがとう」と慌てたように付け加え、首もとの十字架にしなやかな指をあてた。
カヤにそんなつもりがないとは分かってはいても、皮肉にしか聞こえなかった。俺はつい苦笑していた。

「あの……それで」おもむろに、カヤは目を伏せ、緊張しているような声色で切り出した。「泊まりって……」

ああ、そうだったな。
余計な心配はかけたくない。俺は努めて落ち着いた態度を保つ。

「あと二日……この土日は、出来る限り傍にいてほしいんだ」そこまで言って口を噤み、「いや」と目を側め、抑えた声で訂正する。
「片時も、俺の傍から離れないでくれ」
「かたとき……」

カヤと話しつつも、俺の意識は別のところにあった。
悪い、曽良――そう、心の中で唱える。

兄弟を疑うなんて最低だ。でも、不安なんだ。あいつははっきりと口にした。家族の脅威は取り除く、と。そのためなら、『殺し屋』になることも厭わない、と。だから、どうしても保険をかけずにはいられないんだ。

あいつがどれだけ家族想いかは分かっている。だからこそ、これだけは信じられる。あいつは、たとえどんな事情であれ、家族を――俺を傷つけたりはしない。俺を危険な目には合わせたりはしない。つまり……俺がカヤの傍にいる限り、あれを起動させたりはしないはずだ。

だから――

「土日ってことは……つまり、二泊？」

「え？」カヤの声にハッとして、俺の口からはすっとんきょうな声が飛び出していた。「あ、ああ。無理か？」

そういえば、本間の親父さんに許可をとらなきゃいけないんだよな。さすがのあの人も、娘を男の部屋に二泊もさせるのは……てか、もしかして、椎名の奴がついてきたりするのか？　――それだけは絶対に嫌だ。

「もし、難しいなら」とカヤの返事も待たずに言い出していた。「俺がこっちに泊まるとか……こうして、また忍び込めばいいわけだし」

って、忍び込むって……俺、一応、彼氏なんだよなぁ。冷静さを取り戻すなり、がっくりと頭を垂らした。なんだ、この虚しい気分は？　なんでこんなに肩身が狭い思いをしなきゃいけないんだ。

いや、その前に……カヤは事情を――ロザリオの秘密を――知らないんだ。これじゃ、理由も無く、ただ泊まりたい、てしつこくしているみたいじゃないか。

って、ちょっと待て。それって……妙な誤解を生むんじゃ？

俺はちらりとカヤの様子を伺う。カヤは顔を真っ赤にして、落ち着かない様子で視線を泳がせていた。

嫌な予感が確信へと変わって、さあっと血の気が引いた。――やっぱ、勘違いされてる。

「いや、そういうつもりじゃねぇから！」反射的に両手を挙げて、裏返った声で弁解を始めていた。なんとも……典型的なリアクションだ。「別に、やりたいってわけじゃ……」

そう言った瞬間、カヤはぎょっとして目を丸くした。頬がさらに紅潮して、「えっ」と聞いたこともない間の抜けた声を漏らす。そして、固まってしまった。

俺の頬は自然とひきつった。もしかして……自爆した？　余計なことを口走ったのかもしれない。

「下心があるわけじゃなくて、ただ、その……」

言葉を連ねるたびに、変な空気になっていく。釈明するにつれて、袋小路に迷い込んでいくみたいだ。いっそのこと、下心があったことにしたほうが話がスムーズに進んだんじゃないだろうか。そんな気までしてきた。

カヤはかあっと耳まで赤くして、うつむいてしまった。さっきも恥ずかしそうではあったが、ここまでひどくはなかった。

最悪だ。俺はこれ以上余計なことを言う前に、口を閉じた。

しばらく居心地悪い沈黙が続き、俺はたまらず「悪い」とつぶやき頭をかいた。

すると、

「いいよ」それまで黙りこくっていたカヤがぽつりとつぶやいた。

「下心……あっても」

一瞬、自分の耳を疑った。思わぬ返しに唖然としていると、カヤは胸の前で組んだ手をせわしなくもじもじと動かし始めた。

「ただ、ね……心配なの」

途切れ途切れに言うカヤの声は、頼り無げで、不安そうでもあった。

「心配？」

話は想定外の方向に転がっていっているが、そんなことどうでもよくなっていた。いや、もう冷静に考えられる状態ではなくなっていた。

下心があってもいい、て、つまり……ＯＫってことだよな。

俺もカヤに負けず劣らず赤面していることだろう。心臓の激しい鼓動が体中を震わせているようだ。

カヤは「うん」とうつむいて答え、顔にかかった髪を耳にかけた。その動き一つ一つさえ、色っぽく見える。

ああ、何が下心がない……だ。自覚してなかっただけだろ。

自分に呆れかえっていると、「からだ」と消え入りそうな声がかすかに聞こえてきた。幻聴にも思えたが、それは確かにカヤの声だ。

「からだ？」と聞き返すと、カヤはこくんと頷く。

「私……」

瑞々しい唇は何かを言いかけ、そしてぎゅっと結ばれた。俯いているせいで、前髪が目元を隠し、表情がよく分からない。

そして再び、あの嫌な沈黙が戻ってきた。
どこにあるのか、時計の秒針の音が聞こえてくる。それが一体、何回刻んだ頃だったろうか。不意に、またあのハイテンション女の甲高い声が脳裏によみがえってきた。

――生理に決まってんでしょ、気付きなさいよ！

「あ」と、つい間抜けな声がでた。これはもはや、あのおせっかい野郎のお告げかなんかか？　生霊？　なぜだろう、あいつならそれも有り得なくもないと思えてしまう。とにかく、やっぱそういうこ‥‥‥とんだろうか。

「カヤ、忘れてくれ」やんわりと言って、カヤの肩に手を置く。「本当に、そういうつもりじゃないんだ」

はっきりとそう言いきると、カヤはやっと顔を上げた。訝しげにぱちくりとさせる目は、潤んでいるようにも見えた。
まさか、泣かせるほど追い詰めていたんだろうか。それほど、必死に見えた？　すげぇ情けないな。

「ほら」と、ぎこちなく笑って、ごまかすように明るく切り出す。
「お前、そういうことできる身体じゃないんだろ」

‥‥この件に関しては、どんなセリフが女を怒らせるか分かったもんじゃない。直接的に言うと、デリカシーが無い、と責められるし（砺波調べ）。

「そんな状態じゃ、俺もする気は起きない……つーか」

俺は慎重に言葉を選んで、つっかえつつもそう締めくくった。

すると、カヤは思いつめたような表情を浮かべ、

「聞いたの！？」

「は？」いきなり、なんだ？　「聞いたって……？」

「私の身体のこと！」

ついさっきまで、はにかんでいたというのに、なんだろうか、この変わり様？　まるで糾問されているような気分だ。って、やっぱ怒らせたのか？　かなりオブラートに包んだつもりだったんだが。

「いや」と、俺は口をゆがめて頭をかく。「なんとなく、分かったっつーか……」

カヤは愕然として、「そう」と意気消沈してしまった。そのまま うつむいて、押し黙る。

「……」

また、沈黙かよ。俺はかける言葉も見つからず、ただ苦笑いを浮かべるしかできなかった。

＊　＊　＊

――お前、そういうことできる身体じゃないんだろ。そんな状態じゃ、俺もする気は起きない……つーか。

ズキン、と胸が痛んだ。

はっきり、言われてしまった。たまらず、私は顔を伏せた。

「そう」

まさか、彼の口からそんな言葉がでるとは思ってもいなかった。期待していたのかもしれない。「大丈夫だ」なんて優しい言葉をかけてもらえることを。

私はぎゅっとスカートを握り締める。

和幸くん……まさか、気付いていたなんて。私の身体の異変のこと。もう、普通の身体じゃなくなってること。

一体、どうやって分かったっていうの？　私の態度？　発言？　それとも、勘？　なんにせよ……分かっちゃったんだ。バレていたんだ。この身体のこと……もう私が人間じゃないってこと。

「どうした？」和幸くんの動揺した声が聞こえてきた。私の肩に置かれた手に力がはいった。「悪い。俺、余計なこと言ったか？　言葉、選んだつもりだったんだけど……」

申し訳無さそうな声が、余計に私の胸を苦しめた。

「いいの」気付けば、強い語調でそう言い放ち、彼の手を払っていた。「本当のことだから」

払われた手と私を不思議そうに交互に見つめ、和幸くんはきょとんとしていた。

「わ……悪い」

戸惑いつつも、彼は素直に謝った。それが……それが、余計につらい。私はこれ以上彼と対峙しているのも耐えられず、くるりと身を翻して背を向けた。

「謝らないで」言葉が勝手にこぼれでてくる。「和幸くんは悪くな

いんだから」

なに、この刺々しい口調？　私、もしかして怒ってるの？　彼に？

「いや、まあ……そうなんだけど」

振り返らずとも分かる。きっと、彼は困り果てた表情を浮かべて頭をかいているに違いない。

なにしてるんだ、私は。こんなの、ただの八つ当たりじゃない。でも、無理。言葉が……気持ちが溢れでてきてしまう。

「仕方ない……よね。私の身体、もう普通じゃないもの。嫌だよね。こんな身体……気味悪いよね」

「は？」彼は呆けた声をだし、それから鼻で笑った。「いや、普通だろ。大げさな……」

普通？　大げさ？　咄嗟に私は振り返り、彼を睨みつけるように視線を向けた。

「普通なわけない！　人間じゃないんだから」

自分でも驚くような、悲鳴にも似た声だった。和幸くんはハッと目を見開いて、言葉を失ったようだった。私は気まずくなって、すぐに顔を背ける。

「だから……いいの」彼と顔を合わせて、一気に頭が冷えたみたい。冷静になった途端、どれだけ理不尽な態度を彼にとっていたのか嫌というほど分かってしまった。恥ずかしくてたまらなくなった。でも、それでも……やっぱり、哀しいの。彼に拒絶されるのが。たと

え、どんな理由であれ、たまらなく哀しい。「当然だよね。誰も、粘土で出来た身体なんか……」

沈黙が、さらに私を惨めにさせた。ぎゅっと自分の腕を掴み、堪えていた。心の中でうごめくよからぬ感情を、必死に抑えていた。この嫌な気持ち、なんなんだろう。自分でも分からない。でも、吐き出したくはなかった。それを自覚してはだめだ、とさえ思った。

「何言ってんだ？」唐突に、彼の困惑した声が聞こえてきた。「誰がそんな話してるんだよ？」

「そんな話……？」

ハッとして顔を向けると、彼は眉を曇らせ目を眇めていた。

「お前……」と言いにくそうに切り出して、「生理なんじゃないのか？」

「は？」

せい……え！？

「ちがっ――」

爆発しそうな恥ずかしさが脳天までかけめぐった。慌てて否定しようと声を上げた――そのとき。

「カヤさま？」

ノックの音とともに、はきはきとした声が聞こえてきた。ぎょっとしてドアを振り返る。

「本間先生からお電話です。入ってもよろしいでしょうか？」

メイドの真麻（まあさ）さんだ。

「あ、はい！」と反射的に答えてしまったものの……しまった、と気付いて私は彼に振り返った。

運命の夜　―９―（前書き）

後半に、ほんの少しだけ大人な描写があります。苦手な方はご注意ください。

運命の夜　―９―

「失礼します」

本間の屋敷でメイドを始めてもう六年になる沖野真麻は、電話の子機を片手に扉を開いた。そこは、つい二週間ほど前から養女としてこの屋敷に住み始めた、見目麗しい少女の部屋だ。この世のものとは思えない――そんな表現がしっくりくるほどの、カヤという名の美しい娘。

「カヤさま？」入るなり、部屋が真っ暗であることに気付き、真麻は遠慮がちに呼びかける。「申し訳ありません。起こしてしまいましたか？」

「いえ、横になっていただけですから」

特に無理した様子もない声がベッドのほうから聞こえてきた。嘘をついているわけではないようだ。真麻は「そうですか」とやつれた頬をほころばせ、扉を開けたまま、そこから漏れる明かりを頼りにベッドのほうへと歩み寄る。

「あら？」ベッドの傍に立ち、真麻は小首をかしげた。上半身だけ起こしてこちらを見ているカヤ。その姿をまじまじと見つめて、真麻は訝しげな表情を浮かべる。「ドレスのままでお休みになられていたのですか？」

言われてカヤは、今気付いたかのようにハッとした。自分の身体を見下ろして――確かに、ホルターネックのドレスのままだ――慌てたように毛布を胸まで引っ張りあげた。今更、隠す必要もないのに、と真麻はさらに不審に思う。ここまで動揺する彼女を初めて見

た気がした。

「す、すみません。あの……あまりに疲れていたものですから」

どうも説得力に欠ける。だが、執拗に問い詰めるほどのことでもないだろう。真麻は「ちゃんとお着替えになってくださいね」とだけ言い、持っていた子機の保留ボタンを押す。

「相当、ご心配されているようですよ」

そうっと小声で囁いて、真麻は子機をカヤに手渡した。

カヤは不安げな笑みを浮かべて「ありがとうございます」と真麻に告げ、おそるおそる子機を耳にあてる。

「おじさま？」

屋敷の主と会話を始めるカヤの傍で、真麻は姿勢よく直立不動で控えていた。眠気を一切感じさせない、きりっとした眼差し。ゆるやかな弧を描いた、ほぼ左右対称の眉。髪の毛一本はみ出ていない、ぴっしりと後ろでまとめたお団子ヘア。そのたたずまいといい、身なりといい、神経質で完ぺき主義な彼女の性格をよく表している。

「ごめんなさい、勝手に帰ってしまって。ちょっと体調が悪くなって」

申し訳無さそうに少女は言い訳を始めた。真麻はぴくりと眉を上げ、特に体調が悪そうにも見えない彼女を一瞥する。

彼女が早々と帰宅したときには、てっきり本間も知ってのことだと思っていた。本間から、カヤの姿が見えない、携帯もつながらない、と心配そうな電話がきたときには飛び上がって驚いたものだ。

こんな上品で、育ちもよく、本間が溺愛するほどの才女が、なぜ不良のような行いを？　そういえば、つい先週もいきなり行方をくらまし、藤本和幸とかいう孤児と夜遅くに帰ってきたことがあった。

真麻は眉根を寄せた。まさか……と、再び、カヤに視線を向ける。

「パーティーだから、と思って、携帯も電源を切っていて……はい、すみません」カヤはしゅんと身体を小さくした。どうやら、今回はこっぴどく叱られているようだ。「もう二度と、こんなことはないようにします」

最後に、安堵したような笑みを浮かべて「はい」と返事をし、カヤは子機を耳から離した。ふうっと一息ついて、真麻を見上げる。

「怒られちゃいました」恥ずかしそうにそう言って、真麻に子機を返す。「わざわざ、運んでいただいてありがとうございました」

「いえ」子機を受け取りつつ、短く答え、真麻はジト目でカヤを見つめる。「ところで、まさか今回のことも、あの少年が絡んでいるのではないでしょうね？」

「……はい？」

カヤはきょとんとして「あの少年？」ととぼける。真麻はわざとらしく咳払いをし、「藤本和幸、とかいう不良です！」ときっぱりと答える。

「別れた、とお聞きして、大変安堵していたのですよ。これでもうカヤさまが非行にはしられることはないだろう、と」

「非行って……」

苦笑して反論しようとするカヤを、真麻の早口がさえぎる。

「あんな、どこの馬の骨か分からないような孤児と関わってもろくな目にはあいません！　たとえ、どんなにしつこくされようと、決してあの孤児とヨリを戻そうなどと考えませんように。カヤさまと孤児がつりあうわけなどないのですから。いいですね！？」

怒涛のようにまくしたてられ、カヤはぐうの音も出ないようだった。ひきつった笑みを浮かべて、「はあ」と生返事をする。

「ユリィさまという素敵な婚約者もできたのですから」そう付け加え、真麻は気がすんだように鼻から息を噴出した。「今や、大臣の娘なんです。孤児に現をぬかしている場合ではありませんよ。もっと身の振り方を考えていただかないと」

忠告するようにそう言い残し、真麻はくるりと踵を返す。が、不意にあることが気になって、ぴたりと立ち止まった。獲物を見つけた鷹のように鋭い視線で、カヤのベッドを舐めるように見回すと、

「だいぶ、ベッドが乱れていますね」

「え！？」カヤはぎょっと目をむいて、胸元で掴んでいた毛布をさらに引き寄せた。「そんなことありませんよ」

そうは言われても、明らかにベッドは乱れている。掛け毛布の下で毛布がくるまっているのだろうか、妙な盛り上がりが気になって仕方がない。

真麻はベッドに歩み寄ると腰を曲げた。そっとベッドに手を置き、

「すぐ済みますから。ベッドメーキングを……」

「お風呂！」

必要以上の大声が、真麻の耳を貫いた。頭痛でもするかのように

顔をしかめ、「はい？」とカヤに振り返る。すると、カヤはにこりと屈託のない笑みを浮かべて、今度は落ちついた口調で言う。

「お風呂、沸かしてくださいますか？　すぐに、入りたいんです」

「それは構いませんが……」

「その間に、自分でベッドメーキングは済ましますから、今は結構です」

まるで命じるような強い語調だった。カヤにしては珍しいことだ。真麻は面食らいつつも、「分かりました」と不承するしかない。

カヤのほっと安堵した表情がやはり気になったが、真麻は大人しく子機を手にカヤの部屋をあとにした。

＊　＊　＊

真麻さんがそうっと扉を閉めて、私はやっと肩の力を抜くことが出来た。

「危ないところだったぁ」

ため息混じりにそうひとりごちる。すると、もぞもぞと毛布がひとりでに動き出し、「誰が不良だよ」とくぐもった声が聞こえてきた。まるで毛布がしゃべっているみたいだ。私は失笑しつつ、近づいてくる毛布の波を見つめていた。

「先週の誘拐事件が響いてるみたい。だから、また不法侵入したって知れたら……」

「分かった、分かった。玄関を使う癖をつければいいんだろ」

吐き捨てるように言って、和幸くんは毛布の中から出てきた。暑

苦しかったのか、乱暴に毛布を投げ飛ばすように剥ぐと、後ろ手に身体を支えて天井を振り仰いだ。そして、疲れたようなため息を漏らす。――その横顔をじっと見つめ、私はさっき彼が口にした言葉を思い返していた。

――お前、生理なんじゃないのか？

男の子から、あそこまではっきりと聞かれたことなんて無い。思い出すだけでも恥ずかしい……ううん、そんなことはいいの。

てっきり、彼は私の身体のこと……神の罰のことに気付いてしまったのかと思った。でも、違う？　彼が私を拒もうとしたのは、単に体調のことを気にして？

「ねえ、和幸くん」うつむいて、私はおそるおそる唇を動かした。

「さっきのこと……」

言いかけたときだった。隣で動く気配がして振り返ると、

「！」

彼の顔が目の前にある――それに気付いたときには、唇が奪われていた。

彼の右手は頬を撫で、やがてうなじへと回る。そのまま、彼は私に体重をかけるようにして、私をベッドに押し倒した。キスで口を塞がれ、何も言葉を発せず、「んん」と漏れる声で戸惑いを表すことしかできない。それに気付いていないわけはないのに、彼は息継ぎさえ出来ないほどに、さらに激しく唇を重ねてくる。

不意に、するりと何かがスカートの中に潜り込んできたのを感じた。思わずびくんと身体が反応する。それは這うように太ももを撫で、そしてゆっくりと、まるで焦らすように徐々に上にのぼってく

る。
何が起きてるのか、あまりに突然のことに判断できなかった。
ただ、足をまさぐっているそれがショーツにかかって、やっと目が覚めたかのように状況を理解した。それが彼の右手であること。そして、彼が何をしようとしているのか。――思わず、彼の腕を掴んで、それ以上の侵入を拒んでいた。
すると、ようやく彼は唇を離し、私を見つめてきた。私の困惑した表情が、深みのある黒い瞳に映し出されている。あまりに真っ直ぐに見つめられ、たまらず目をそむけた。

「嫌じゃないんだよな？」

こんな状況にそぐわない、けろっとした声で彼はそう確認してきた。私はハッとして、彼に視線を戻す。飛び込んできたのは、穏やかな笑顔。いつも通りの、優しい笑顔。
胸が苦しくなった。さっきまで彼に塞がれていた唇をきゅっと噛み締める。
スカートの中に忍び込んだ彼の手。それを捕らえている私の左手が震えている。
嫌じゃない。そう、嫌じゃない。それは本当。彼なら……て、そう思ってる。でも、違うの。そういう問題じゃない。だって、この身体は……

「和幸くん」言いたくない。でも、言わなきゃ。「私の身体は……」
「アレでもないんだろ？」

まるで聞く耳を持っていないかのように、彼はすかさず問いかけてきた。
彼の言うアレが何を意味するのか。もう分かってる。

「そう……だけど」と私は震えた声で答える。「でも、そういう問題じゃ――」
「そういう問題だ」
彼はきっぱりと言い放った。何の迷いもない、はっきりとした口調だった。

＊　＊　＊

彼女の身体が土で創られたものであることは否定しない。その事実を否定することは、彼女を否定するようなものだ。
だが、それでも……せめて、俺の傍にいるときだけは、人間としての幸せを与えてやりたい。使命とか、神とか、『裁き』とか、くだらないことは忘れて、一人の女でいられるようにしてやりたい。そう思ったんだ。
俺は神の子孫でもないし、そもそも神が創った人間でもない。世界のルールに反して創られた命。人の罪そのものだ。本来、カヤに裁かれるべき存在なんだろうな。だから、きっと神サマにとっては気に入らない光景だと思うよ。こうして、俺が彼女に触れているこの状況は。神の怒りがあるとすれば、俺は今まさにその矛先にいることだろう。
俺はじっと、カヤの顔を見つめていた。困惑した色がはっきりと浮かんでいる。その表情も、愛おしくてたまらない。
こんな暗闇でも、はっきりと彼女の顔を眺めることができる。これほどまでに、この改造された身体をありがたいと思ったことは今までない。
「そういう問題なんだ」
俺はもう一度、そう囁きかけた。一語一句、噛みしめるようにゆ

っくりと。
カヤの唇が震えている。大きく見開かれた瞳には、うっすらと涙が浮かび上がっていた。
その涙がこぼれる前に拭ってやりたい。だが、右手は彼女に掴まれていて、動かせない。無理やり振り払うこともできるが……しがみつくように力強く握りめる彼女の手を乱暴に引き離すのは気がひけた。

「カヤ」

俺は暴れだしそうな心臓を必死に抑え、平静を装って微笑んでみせた。だが、その頬もぴくぴくと痙攣しているのを感じる。情けないが、緊張しているみたいだ。ったく、もういい加減、ふっきれろっつーの。――俺はすうっと息を吸い込んで、

「愛してる」
「へ……」

カヤの艶やかな唇から、間の抜けた声が零れてきた。そのあっけにとられた顔に、俺はつい苦笑していた。

「また、『答えになってない』か？」

からかうようにそう尋ねると、カヤはハッとした。まるで、何かを思い出したかのように――いや、思い出してくれないと困るんだが。
思い返せば、俺はちゃんと伝えていなかったんだ。いや……伝えたんだけど、受け止めてもらえてなかった、てのが正しい言い方だな。
一週間前、生まれて初めて、この歯の浮くようなセリフを彼女に

言って、もらった返事は……

――答えになってないよ。

その声は、今でもはっきりと思い出せる。哀しみを、責めるような口調でごまかしたような声色だった。

「お前が何者だろうと、どんな身体だろうと、どうでもいい」力強くそう続け、俺はそうっと彼女の耳元に顔を寄せた。万が一、あのロザリオが会話を録音していたときのために……彼女にだけ聞こえるように低い声で耳打ちする。「だから、大人しく抱かせろ」

俺はただのクローンで、神の『裁き』には関係ない。神サマからのありがたい使命があるわけでもない。天使もいないし、摩訶不思議な力があるわけでもない。銃だって手放してしまった。無力な存在だ。

だから……俺に出来るのはこれくらいなんだ。一人の男として、彼女を愛してやること。

パンドラだろうが、土人形だろうが、終焉の詩姫だろうが、どうでもいい。どんな名前で呼ばれようと、関係ない。俺の前では、ただ、カヤであってほしい。せめて、一人の女としての幸せくらい、与えてやりたい。そう思ったんだ。

＊　＊　＊

「お前が何者だろうと、どんな身体だろうと、どうでもいい」彼は熱のこもった口調でそう言って、不意に私の耳元に顔を寄せた。そして、囁きかけるようにつぶやく。「だから、大人しく抱かせろ」

痺れるような感覚が全身を襲った。思いっきり胸に木槌でも打ち

付けられたような衝撃が走り、息が出来なくなった。
視界が潤んで、胸が熱くなる。身体中が火照っていく。顔が真っ赤だと、鏡を見ずにも分かった。
ため息が漏れて――目を瞑ると、涙が目じりを伝っていくのを感じた。

私は左手を緩め、スカートの中に潜む彼の右手を解放する。そして――彼の侵入を赦した。

運命の夜　－９－（後書き）

『運命の夜－１０－』は短編小説として、別に掲載しています。Ｒ１５要素が強い描写があるため、そういった描写が苦手な方は、このまま『運命の夜－１１－』におすすみください。話が分からなくなる、といったことは起きません。

それ以外の方で、この続きが読みたいな、と思われた方のみ、お手数ですが、下のリンクをコピー＆ペーストでお願いします。（そこまで過激な描写はありませんので、ご安心ください）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４２４７ｐ／

運命の夜　－１１－（前書き）

『運命の夜－１０－』は短編小説として別に掲載しています。詳細は、『運命の夜－９－』の後書きにてご確認くださいませ。

運命の夜　―11―

「信じられる？　普通、勝手に他の女に服貸す？　無許可よ、無許可」キンキンと耳鳴りを起こしそうな高い声でそう愚痴りつつ、砺波は部屋の扉に鍵を差し込んだ。「無神経もいいとこよ！　その女にばったり出くわしたわたしの身にもなれってのよ」

がちゃんと音を立てて鍵が開き、砺波はくるりと振り返る。

「ねえ、鼎（かなえ）！？」

それは同意を求めているのか、脅しているのか。怒気のこもった声と鋭い眼差しに襲われては、鼎は「はい」と追従するしかない。

延々と愚痴を聞かされ、おしろいでも塗ったかのような真っ白な顔には、戸惑いの色が浮かんでいる。誰かがこの様子を傍から見かければ、鼎が砺波に責め立てられているようにしか見えないだろう。

だが、もちろん、砺波が他人の顔色を気にするはずもなく、

「あいつは、なぁんも分かってないんだから！　今夜のことだって、どうかしてるわ」

どうやら、まだ愚痴はあるようだ。鼎はひっそりとため息を漏らした。

砺波はぶつぶつと悪態交じりに文句を続けながら、ドアを開けて部屋へと入っていく。

ここは、カインノイエの隠れ家である教会から、さほど離れていないところにあるマンション。三階建てでエレベーターもなく、鉄筋コンクリート造の小ぢんまりとしたマンションだ。オートロックもないことから、女性の入居者は少ないのだが、そこを砺波は気に

入ったようだった。もっといいマンションに住んだらどうだ、という藤本の催促も跳ねのけ、高校入学とともにここに――二階の真ん中の部屋に――引っ越してきた。
鼎は辺りを一度見回してから、さらりと長い髪をなびかせて砺波のあとへとついていった。

「ああ、もう！　なんで、またあいつに腹たてなきゃいけないのよ！？」

鼎が玄関に上がると、そんな雄たけびのような声が聞こえてきた。ぎょっとする鼎の前には、腰に手をあてがい、リビングへの短い廊下を闊歩する砺波の後姿。

「どうして」と鼎は遠慮がちにその背中に尋ねる。「和幸さんのこと、そんなにお嫌いなんですか？」

その瞬間、砺波は足を止めた。鼎もつられたように立ち止まる。しばらく砺波はそのまま静止していたが、「砺波さん？」という鼎の呼びかけに勢いよく振り返った。

「だいっきらいよ！　悪い！？」

そう怒号を発する砺波の頬はほんのりと赤らんでいた。心なしか、怒鳴りつける勢いも落ちている。どうも説得力に欠けていた。それを不思議に思ってか、鼎は小首を傾げて、「はあ」と生返事をする。

「とにかく！」と、砺波は苛立ったため息とともに乱暴に言葉を吐き出した。「曽良の奴、明日、迎えに来るとか言ってたけど……あれ、なに？　どこか行くわけ？」

話題が変わっても、不機嫌そうな表情もとげとげしい口調も変わりはしない。鼎はあたふたとしつつ、

「カインのリーダーのところ、かと思うの……ですが」

徐々に砺波の表情が険悪なものになっていき、それにつれて鼎の声も小さくなって、終いには消えいった。

「……明日の朝、ねぇ」

砺波は頬をひきつらせて、ぼそっと言った。それは、幼い顔立ちをした少女の口から出てきたとは思えない低い声。さらに、「ったく」と舌打ちにも似た声を吐き、砺波はパーカーのポケットから携帯電話を取り出す。カラフルな装飾がなされた真っ赤な携帯電話だ。それをぱかっと開いて、なにやらいじりだす。

放っとかれて唖然としている鼎をよそに、砺波はそれを耳に当て、天井を振り仰ぐ。かすかだが、三、四回コール音が静まり返った廊下に響く。そして、

「何考えてんのよ、あんた!?」今までとは比べものにならないほどの怒鳴り声が、マンション全体を揺らす勢いで飛び出した。「明日、補習じゃなかったの!?　進級する気ないわけ？　学業をおろそかにするな、ていつもパパは言ってるじゃない。リーダー代理だからって、甘えてんじゃないわよ!」

鼎はあっけにとられて目をぱちくりと瞬かせる。そんな彼女に目もくれず、砺波はくるりと顔を前に向きなおしてリビングへと歩いていく。

「いいわよ、わたしが連れて行くから」呆れたような声色でそう言

って、砺波は髪をポニーテールにまとめたゴムをはずす。ふわりとウェーブがかった髪が華奢な背中を撫でた。「興味ないことは、すぐ忘れるんだから。あんたの悪い癖よ。ダブって、弟たちと同級生になったらどうするのよ。示しがつかないでしょう」

まるで子供を叱る母親だ。それから三言ほど小言を付け加え、砺波はようやく携帯電話をおろした。「まったく」と吐き捨てるように言って、それをベッドに放り投げる。

「さっきの、曽良ですか？」

薄桃色のベッドカバーの上を跳ねる携帯電話を目で追いつつ、鼎はリビングに足を踏み入れた。

「そうよ」と砺波はため息混じりに肩を竦める。「ほんっと、勉強に関心がないんだから。あいつ、殺し屋で一生を終えるつもりかしら」

「リーダー代理って？」

「そのままの意味よ」やれやれ、と言いたげな表情を浮かべ、砺波はパーカーのチャックに手をかけた。マッチでもこするような勢いで引きおろすと、投げやりにそれを脱ぎ捨てる。「パパが入院してるから、あいつが今、リーダーやってんのよ。アレでも、一応わたしたちのボスなわけ」

「曽良が……ボス」

寝言のようにぼんやりとつぶやく鼎に、砺波は怪訝そうな眼差しを向ける。

「そんなに不思議？」

「え！？」唐突にずばりと聞かれ、鼎は慌てたように首を横に振る。

「あ、いえ、そういうつもりじゃ……」
「いいのよ、隠さなくても。自分のスケジュールも把握してない奴が、組織をまとめられるのか、ての」

独り言のようにぶつくさ言って、砺波は「ねえ？」と今度は柔らかく同意を求めた。が、やはり鼎は「はあ」と苦笑を浮かべてぱっとしない答えを返すのみ。その反応につまらなそうに唇をとがらせつつも、「まあ、いいわ」と砺波は腰に手をあてがった。

「わたし、今からお風呂はいるけど。あんたも一緒にはいる？」
「え！？」突然の申し出に、鼎は目を見開いた。動揺もあらわに、首をぶんぶんと横に振る。「いえ、そんな……」

挙動不審の鼎の様子に失笑しつつも、砺波は「あんた、カヤみたいね」と呆れたようにつぶやいた。「なるほど。和幸が『迎え』に行っちゃうわけだ」

「はい？」
「なんでもないわよ」とにかく、と砺波は語調を強めて口火を切る。「アザだらけのその体じゃ、サポートが必要でしょ？　わたしが体洗ってあげる、て言ってんのよ」
「あ……」

言われてやっと気付いたかのように、鼎は自分の身体を見下ろした。砺波は頭痛でもするかのように頭を抱えた。

「あ……じゃないわよ。てか、よくそんなに落ち着いてるわよね。ひどい目にあったんでしょうに」

鼎は相変わらず、「はあ」と生返事を繰り返す。さすがに慣れて

きたのか、もはや相手にしていないのか、砺波は「それにしても、珍しいわよねぇ」とさっさと次の話題を持ち出した。
鼎に歩み寄り、まじまじと身体を見回す。その大きな瞳は、腕や脚にひろがるアザを吟味でもするかのように注意深く観察していた。

「殴るなり、蹴るなり……普通、見えないところにやるもんなんだけど。こんなの初めてよ。これじゃ、売り物にならないじゃない。なんか、わざと見えるところに傷をつけたみたい――」
「それは」とすかさず、鼎は口をはさんだ。「逃げだしたとき、ガードマンともみあったんです。そのときの傷なので、そんなことを考える余裕もなかったんじゃないでしょうか」

珍しく、鼎ははっきりと答えた。それも、ずいぶんしっかりとした口調だ。

「ふぅん、そういうものかしら」合点がいかないのか、砺波は不服そうな返事をこぼす。真剣な表情でしばらく間をおき、ややあってから「別にいいけど」と背筋を伸ばした。

「で、どうするの？　お風呂」

さっきまでの曇った表情は嘘のように、にこりと微笑む。その笑顔は、あどけない少女そのもの。マシンガンのように毒舌を放っていた人物とは思えない。

「せっかくなんですが……あの、一人で大丈夫です」

もじもじとしながら鼎はしおらしくそう断った。砺波は「あ、そう」とごり押しすることもなく、あっさりと納得した。

「じゃ、わたしはちゃっちゃと入ってくるから。てきとーにくつろいでてよ」

鼎は「はい」と安堵したように頬をゆるめる。

「別に、寝ててもいいし」

本音は、自分が寝たいのだろう。砺波はだるそうにあくびをしながら彼女の横を通り過ぎ、まっすぐにリビングを出て行った。

パタンと扉が閉められて、鼎の背後から廊下を歩く足音が聞こえてくる。それが、一歩、二歩、三歩、四歩。そして、扉を開ける音。閉める音。

リビングに一人残された鼎は、瞑想でもしているかのように瞼を閉じてじっとしていた。

「……」

微動だにせずに立ち尽くす鼎の姿は、まるで精巧に創られた彫刻のよう。もろく崩れさってしまいそうなか細い身体のラインと美しいその容姿が、さらに彼女を作り物に見せてしまう。

じっと息をひそめる彼女は、もはや呼吸を止めているのかもしれない。息遣いさえ聞こえない――リビングはそれほどの静寂に満ちていた。

やがて、廊下のほうからシャワーの音が響いてきた。鼎の瞼がゆっくりと開き、流れる雲の合間から現れた満月のように、その翠の瞳が姿を表す。

ばっと素早くベッドに振り返ると、その細い髪一本一本が流れるようになびく。透き通るような灰色交じりの翠石（エメラルド）に映りこんだのは、真っ赤な携帯電話。

足元に落ちているハートのクッションを蹴り飛ばし、鼎はベッド

に駆け寄って、ソレを手に取った。二つ折になっている携帯電話を開け、目にも止まらぬ早さでしなやかな指先が十一桁の番号を打ち込む。

「ふっ」と興奮とも、緊張ともとれる短い息を吐き出して、リビングの扉に振り返った。その眼差しは蛇のように鋭く、その表情は感情のない人形のよう。その様は雪の妖精とは程遠く、全てを凍りつくす雪女に近い。

コール音が鳴り出して、鼎はそれをおもむろに耳にあてた。その視線は扉に固定させたまま、ぴくりとも動かさず。

待つ必要はなかった。すぐにコール音は止み、かすかに聞こえてくるシャワーの音と、鼎の息遣いだけがリビングに残る。

そして、鼎の艶やかな唇がそっと開き――

「どうなの？　彼の『自白』は……」

携帯から聞こえてくる声に遮られたのか、鼎は途中で言葉を切った。しばらくじっと耳を傾け、妖しく目を細める。「そう」と満足げにつぶやくと、痛々しいアザが残る腕をくいっと上げ、胸元に輝く蒼いペンダントに触れた。

「ちゃんと録れたのね」

長い上下の睫を重ね、「あぁ」と嬌声にも似た声を漏らす。

「やっとここまで辿りついた」

感極まったような震えた声を漏らし、鼎は瞼を開く。笑みがこぼれてしまうのか、口元は緩んだままだ。

「大丈夫、問題ないわ。アドバイス通り、健気に振舞ってるわよ」
ペンダントから離れた手は、輪郭を隠すように垂れた長い前髪を指先でいじりはじめる。
「ええ。ちゃんと通話履歴は消す。平気よ。そっちが行動を始める前に、リーダーのとこまで案内させるわ。で、そのあとなんだけど……」
鼎はほのかに甘い香りがする部屋を見回した。十二畳ほどの長方形の部屋。なんの変哲もない『女の子の部屋』だ。かわいらしい小物が並ぶ棚に、脱ぎ捨てられた衣服。机の上にはアクセサリーが無造作に置かれ、友人と思われるセーラー服の少女との写真が飾られてある。まさかこれが『無垢な殺し屋』の部屋だとは誰も思わないだろう。鼎は皮肉そうに鼻で笑った。
「そのあとは……彼以外のカインなら、好きに始末していいのよね？」
心地よい音楽でも聴いているかのようにうっとりとした眼差しを浮かべ、鼎は携帯電話に耳をそばだてる。やがて、「分かったわ」とほくそ笑んだ。
そこに愛くるしい『少女』の姿はなく、翠に輝く瞳には憎しみの色が浮かび、その微笑には狂気が滲みでていた。そして、澄み切った声で鼎は囁く。
「本間のじじいによろしく。望兄(のぞむ)さん」

運命の夜　―１２―

もう真夜中も近いというのに、トーキョーの道路は混み合っていた。クラクションの音、酔っ払いの騒ぎ声、客引きの女の嬌声、それらが混ざりあって都会の喧騒を創りだしている。

目が痛くなるほどの眩い光を放つネオンを防弾ガラスで跳ね返し、夜のトーキョーを泳ぐように走っていく一台の車。夜の闇に溶け込んでしまいそうな漆黒の車体。防音対策がとられたその車内は、そこだけが別世界のように静かなものだ。

「言葉遣い、気をつけろよ。カナ」

そんな静まり返った車内で、優しく子供を諌めるような声が響いた。囁くような音量だというのに、この静謐な狭い空間ではたとえ望まずとも耳に入ってきてしまう。

助手席に姿勢よく座っていた前田勝利（かつとし）は、緊張した面持ちで、肩越しに後部座席を一瞥した。斜め後ろで携帯電話を片手に座っているのは、長髪の整った顔立ちをした男。モデルのような容姿で、清潔感漂うさわやかな青年なのだが、どうしても遊び人に見えてしまう。スーツを着ていても、ホストにしか見えないのだからよっぽどだ。着こなしの問題なのか、髪をきれば、少しは硬派に見えるのか。彼が国務大臣に仕えるボディガードだ、と明かしても、おそらく大半の女性は信じないだろう。

「ああ、おやすみ」

そう言って、ボディガード――椎名望は不敵に微笑み、携帯電話をおろした。

「鼎か？　望」

唐突に、そんな低い声が背後からして、前田は慌てたように顔を真正面に戻した。背筋にぞっと悪寒が走る。この男の声を聞いただけでもこのザマだ。前田は眉を曇らせ、キリキリと痛む胸をおさえた。

彼の背後に座っているのは、本間秀実。国務大臣にして、警察庁を管理する国家公安委員会のトップ。前田は、そんな本間の秘書だ。若干二十七でそんな役職につけたのだから、誇りに思うべきなのだろうが……本間秀実には、とんでもない裏の顔があった。彼がそれを知ったのは、秘書となって一年経ってからのこと。今思えば、あの一年は、自分を見極めるためのものだったのだろう、と前田は振り返る。たとえなにがあろうと、本間を裏切ることができないほどの腰抜けかどうか。そして、自分は合格したのだ。だから、こうして――前田はぐっと膝をにぎりしめた。

そんな彼の背後で、「ええ」と椎名は背広の内ポケットに携帯電話をしまいながら、余裕の笑みを浮かべた。「これで明日の連絡先は分かりました。それと……ちゃんと『自白』は録れたのか、と」

「そのことか」本間は眼鏡の奥でぎらりと鋭い眼光を煌かせる。「さすがの鼎も慎重になっているな」

「そりゃそうですよ。僕たち兄妹は、この日のために……」

急に椎名が言葉を切ったので、前田はちらりとバックミラーで後部座席の彼の様子を伺った。椎名はじっと窓の外を見つめていた。珍しく真剣な、それも憂いすら感じ取れる表情で。

この椎名望という男が、カインに何かしら私怨を抱いていることは本間から聞いていた。だが、具体的にそれが何なのか、彼とカインの間に何があったのか、前田は知らない。いや、知ろうとしなかった、というのが正確かもしれない。知らぬが仏――そんな諺を、前田は嫌というほど思い知ってきた。このトーキョーで生き残るコ

ツは？　と誰かに聞かれれば、前田は迷うことなく、その諺を引用するだろう。

「前田くん」

そう声をかけられたのは、車が渋滞につかまったときだった。前田はびくっと怯えたように身体を震わせて振り返る。

「はい！」

静まり返った車内でそこまで声を張り上げる必要もないのは明らかなのだが。恐怖は記憶となって体に根付くもの。もはや意識的にコントロールできるものではなくなっていた。ずっと後部座席で不穏な雰囲気を漂わせて会話を続ける二人の様子に、それでなくても緊張は高まっていたのだからしかたない。

本間は呆れたようにため息を漏らしつつ、「『フィレンツェ』の防犯システムは？」と訊ねてくる。

「あ、はい」と前田はあたふたとしながらも、つい先刻連絡がきた事実を報告する。「全て、復旧したようです」

その前田の言葉に反応したのは、本間ではなく、その隣で窓の外を眺めていた椎名だった。くつくつと笑いだすと、「いくら、払ったんです？」とからかうような口調で本間に問いかける。

本間の口角がくいっと上がった。失笑を禁じえない――そんな心境だろう。

「なに、はした金だ」

あれがはした金だというのか。思わず、前田はぎょっと目を見開

いた。
　それが、どれほどの大金を指しているのか、彼は知っているのだ。なぜなら、その『はした金』を手に交渉をおこなったのは、ほかでもない彼だからだ。
　それは、二日前のこと――前田はその夜のことを思い出す。『フィレンツェ』の館長である城嶋昇（のぼる）に、「金曜の夜、監視カメラも含めてすべての防犯システムを切るように」、と現金のつまった皮の鞄を手土産に直談判に赴いたのだ。彼もまた、カインをひどく憎む人間の一人。そんなことを誰がするか、とひどく憤慨した。さらに事態を紛糾させたのは、理由を言おうとしない前田の態度だっただろう。

「なぜ、城島館長にも秘密にされたんです？」前田はもごもごと口元を動かしてから、遠慮がちに本間に訊ねた。それは、あの夜からずっと疑問に思っていたことだった。理由さえ言えば、おそらく自分は胸倉を掴まれて怒鳴り散らされることもなかっただろう。「あんな大金を払わずとも、理由さえ言えば協力してもらえたのでは……」
「あの男も信用できる人間ではない」本間は前田の素朴な疑問に、苛立ったような早口で返した。「藤本和幸がカインである、とあいつに知られるのは、こちらにとっても不都合だ。奴もカインをひどく恨んでいるからな。たとえ金を積んだとしても、その怒りまでコントロールできるとは思えんよ。ここまできて、彼を殺されたらたまったものではない」
　つまりは、藤本和幸を城嶋から守った――そういうことだろうか。前田はまだ釈然としないまでも、とりあえずは本間の考えは理解した。
「それで……防犯カメラまで切らせたんですか」

「そうだ」低い声でそう言って、本間は隣で涼しげな表情を浮かべる椎名に目をやる。「しかし、お前の読み通りだったな。これでもし、彼に警戒されたら、と心配していたが……」

「言ったでしょう？　藤本くんはそこまで慎重な子じゃない。目の前に助けを求めている女の子がいたら、後先考えずに助けてしまう。そんな、情熱的な子ですよ」すらすらと言いきると、椎名は冷笑する。「嫌いじゃないんですけどね、僕は」

「向こうはお前を毛嫌いしているようだがな」

本間がずばっと指摘すると、椎名はイタズラが成功して喜ぶ子供のように無邪気に笑った。

「片思いも楽しいですよ」

「くだらん冗談を」

付き合いきれん、と言いたげに、本間は冷たく言い捨てた。

その様子を助手席からじっとながめつつ、前田は不服そうな表情を浮かべていた。どうしても、ひっかかっていることがあった。どうしても、納得いかないことが残っている。それを本間に聞けば、また怒鳴られるだろうか。確実に、ため息まじりに「前田くん」と落胆したような声をもらすに違いない。

だが……前田は携帯電話を握り締めていた右手に力をこめる。緊張で手の平がひどく発汗していることが自分でも分かった。

「でも」と苦しげな声で切りだすと、本間の眉がぴくりと動いた。条件反射で体が震えた。喉が絞まる。それでも、それをこじ開けるようにして声をしぼりだす。「なぜ、ガードマンは退かせなかったんです？」

珍しく、本間は驚いたようにつぶらな瞳を大きく見開く。思わぬ

問いに言葉を失ったのか、細かな皺に囲まれた唇はぎゅっと締められ開く様子はない。

「ガードマンもいないんじゃ、さすがの彼も怪しみますよ」

本間の代わりにため息混じりにそう返したのは、椎名だ。そんなことも分からないんですか、と続きそうな口調だ。

「でも」前田はそれでも食い下がる。勇気をだしてじっと椎名を見つめ、とうとう核心に触れる。「三人も亡くなった、と報告が――」

「三人で済んだ――そう言ってくれませんか、前田さん？」有無を言わさず、椎名は強い口調で前田の言葉を遮った。ハッとする前田に、鋭く、睨みつけるような視線を送りつける。「一応、人員は減らさせたんですから。努力は認めてほしいですね」

脅すような低い声に、前田は息を呑む。この男に怯えるのは、耐え難い屈辱だ。だが、震えてしまう体はどうしようもなかった。

「すみません」

気付けば、そんな言葉が口をついてでていた。もうすっかり口癖だ。前田は椎名から目をそらすと、ぐっと堪えるような表情を浮かべる。

さすがに、本間の前では言えないが……本心を明かせば、まだ納得できていなかった。カインである藤本和幸をけしかけ、不要な騒動を引き起こしたのは自分たちだ。それで奪われた三人の命――その責任は、果たしてカインにあるのか。カイン以上に、罪深いのは自分たちではないのか。彼ら三人を見殺しにしたのだから。いや、自分たちが彼らを殺したといってもいいのかもしれない。

『フィレンツェ』からの報告を受けてから、そんな罪悪感にさい

なまれ、前田は自責の念に押しつぶされそうだった。そして、唐突に浮かび上がった思わぬ疑問が追い討ちをかけてきた。――いったい、自分はこうして何人、殺してきたのだろうか、と。

「やだな、前田さん。そんな思いつめた顔しちゃって」ふと、さきほどとは違い、柔らかい口調で椎名は話しかけてきた。まるで、慰めるような声色だ。だが、それでも嘲るようなニュアンスは拭いきれていない。「そろそろ、慣れてくださいよ」

前田は「慣れる？」と目をしばたたかせる。一体、椎名は何の話を始める気なのか。

「罪のない命を奪う――彼らの十八番（おはこ）でしょう」だからこそ、と椎名は独り言のようにつぶやいた。「彼らを駆除しなきゃならないんですよ。より良い世界のために」

前田の凛々しい眉がぴくりと動く。駆除……それは今、自分たちが取りかかっている計画のことを意図しているのだろう。――いや、計画と言えるのだろうか。自分たちがしようとしているのは……

前田はごくりと生唾を飲み込み、視線を落とした。糸くず一つ落ちていないフロアカーペットが目に入る。

「『無垢な殺し屋』……なぜ彼らがそう呼ばれるのか。考えたことあります？」

急に、椎名がそう訊ねてきた。「え」と顔を上げて戸惑った声を漏らすと、ずっと黙っていた本間が鼻で笑うのが聞こえて、前田はぎくりとした。何か答えなければ、と思考をめぐらせるものの、焦りで気の利いた返しは思いつかない。

すると、前田の注目を引くように、わざとらしく椎名が咳払い。

「彼らはね、成長しないんですよ」とさらりと述べた。「いつまでたっても、世間知らずで幼稚な子供。彼らの『無垢』はそういう意味だと僕は思うんです」

どうやらそれが答えのようだが、前田には理解できない。眉根を寄せて、「はあ」と生返事をするしかできない。

車が急にスムーズに走り出した。どうやら、渋滞をぬけたようだ。

椎名は神妙な面持ちで窓の外へと目を向ける。対向車線を過ぎ去っていく車のライトが、その端整な顔立ちを照らしていく。

「人は制限された世界の中で、もがき苦しんで生きていく。だから人は考え、成長する。限られた選択肢の中で、解決策を導きだすために。

でも、カインは違う。あの子供たちは、堂々と『殺し屋』を名乗り、邪魔だと思えば好き勝手に殺している。人を殺してはならない――それはこの世界で、最低限のルールだというのに」

そこまで言って、椎名は呆れたように鼻で笑った。ニヒルな笑みを浮かべて、前田へ視線を戻す。

「彼らはルールの外に逃げ出した卑怯な子供たちなんです。考える力も、苦境の中で生き抜く力もありませんよ。ずっと、反則で勝ち抜いてきたんですから」

まるで自分が責められているような錯覚に陥って、前田はたじろいだ。それほど、椎名の瞳には怒りや狂気といったものが満ち満ちている。

返す言葉が見つからずに押し黙っていると、

「なかなか興味深い説法だったよ、望」

嬉しそうにそう横槍をいれたのは、本間だった。

「ルールを破れば罰(ペナルティ)があるのだ、と教えてやるのが、大人の務め、というわけだな」

「そういうことです」

大正解、と言いたげに、椎名は身を乗り出して本間を指差した。

その行動は、前田にとっては冷や汗ものだ。ぎょっとして身を引いたが、本間はくくっと笑うのみ。

分かってはいたが、本間はよほど椎名を気に入っているようだ。椎名の身体能力を考えれば当然か。生身でカインに対抗できる――それもここまで従順な――ボディガードはそう簡単に見つかるものではない。自分とこうまで扱いが違うのも納得できる。

だが、そう頭で理解はできても、エリートとしてここまでのぼりつめてきた彼の自尊心はひどく傷つけられていた。自分はただの使い走りでしかないのだ、と思い知らされる。それも、頼まれる仕事といえば、決して胸を張れるようなものではない。いや、人に言えるものでもない。

こんな屈辱を味わうために、ここまで生きてきたわけではない。

前田は耐えられなくなって顔を前に向きなおした。気分が悪いのは、走行中の車内でずっと後ろを向いていたからだろうか。それとも……

「それで」急に、椎名が明るい声を発した。「証拠はとれたわけですから、次は……」

「ああ。名乗りでてもらうよ、和幸くんに」本間はにんまりと笑み、椎名のセリフを奪い取る。「逃げられても困る。自ら命を絶たれても困る。仲間に悟られても困る。だから、彼には大人しく自首してもらう必要がある。穏やかにね」

「しっかし、うまくいきますかね？」

そんなやる気のない声に驚いて、前田は再びバックミラーで彼の様子を確認する。椎名は頭の後ろで手を組んで、あくびをしている。緊張感のかけらもない。

そして、「ま」と本間の答えも待たずに続けた。「失敗しても、こっちは彼の弱みを握っているわけですし」

「！」

どくん、と前田の胸に激痛が走った。「はっ」と浅い息が漏れ、頭が真っ白になった。取り乱しそうになる自分を抑え、呼吸を整える。落ち着け、と自分に言い聞かせ、なんとか我に返り――と、そのときだった。バックミラー越しに、不敵な笑みを浮かべる椎名と目が合って、呼吸が止まった。

しまった……前田は直感的にそう思った。

「カヤを傷つけるのは赦さん」

そんな二人の無言のやりとりに気付いているのか、いないのか。椎名の提案を一蹴したのは、意外にも本間だった。これには椎名も驚いたようで、きょとんとして「はい？」と本間に振り返る。

本間は険しい表情を浮かべて、椎名に視線を返す。

「十七の誕生日。無傷で健康なあれを引き渡すこと。それがあの男の条件だ。カヤになにかあれば、わたしを殺す、とも言ってきている」

「あぁ、そういえば……そうでしたね」面倒くさそうに椎名はため息を漏らした。「それにしても、礼の電話の男……信用できるんですか？　会ったことないんでしょう？」

「もしでまかせなら、他の奴に売ればいいだろう。あれはいい品物だ。高値で売れる」
「どう転んでも、彼女を売るおつもりですか……」呆れ果てたように、椎名は苦笑する。「もうお金はじゅうぶんあるでしょうに」
「金の問題じゃない」本間は不機嫌そうに腕を組んで顎をひいた。
「カインと関係のあった娘を手元においておきたくないだけだ」
「……なるほど」

否応なく耳にはいってきてしまう会話に、前田の顔色はみるみるうちに青くなっていった。奥歯はガタガタと震え、全身が粟立つのを感じる。無意識に目は見開いて、嫌な汗が背中を伝う。耳をふさぎたくてたまらない。この車から飛び出して、そのままどこかへ消え去ってしまいたい。
自分は逃げ出したいのだ。前田はそれに気付いて、瞼を固く閉じた。悔恨と自己嫌悪を一体何度くリ返せばいいのだろう。前田はぐっと拳を力強く握り締めた。それでも、右手に握られている携帯電話がミシっと軋むわけでもなく、非力な自分をさらに実感するのみだった。
そろそろ、本間の屋敷に近づいて、見慣れた景色が窓の外を流れていく。

「ようやく、か」と感慨深げにそうつぶやいて、本間は実に満足げな笑みを浮かべた。ふと、意味ありげな視線を椎名に向けると、低い声で告げる。「約束通り、お前たち兄妹にカインの首をやる。彼らを表にひっぱりだす以上、生きててもらってはこちらが困る。分かってるな？」
「ご心配なく」椎名はさらりと言って、口元に妖しい笑みが浮かべた。「『アベル』の無念は必ず果たします」

その椎名の言い方は、おどけているようでいて、珍しく、皮肉も

嫌味も一切感じさせなかった。ただ純粋に、求めている――復讐を。
前田はなぜ自分がここにいるのか、分からなくなった。迷子のような漠然とした不安を感じ、ごくりと生唾を飲み込みうつむく。
ぽたりと額から落ちた汗が落ちて、ズボンに滲んでいくのが見えた。

夜明け

瞼を開けるのもおっくうだ。もう陸に立つ感覚さえ、思い出せない。そもそも、トイレに行くとき以外、この倉庫から出してはくれないのだから、日の光さえ懐かしい。

空腹がこんなにも苦痛をともなうものだとは知らなかった。喉が渇いて声をだすのもつらい。身体を起こす力さえ湧かない。力なくかび臭い床に横たわるのみ。

それでも、あの人はわたしを死なせたくはないのだろう。わたしが生き延びられる程度の食事と水は与えてくれる。

口答えをすれば、殴られ、頭を床に叩きつけられる。そのたびに、あの人の中にくすぶる憎しみを感じる。あきらかに、あの人はわたしを恨んでいる。それがはっきりと分かる。

でも、なぜ？　わたしがマルドゥクの女だから？　あの人の一族――ニヌルタの宿敵だから？　それだけ？　使命だから？　ううん、違う。あの人から感じるのは……私怨。人間くさい怨念を感じる。

本当はわたしのことも殺したいに違いない。仕方なく生かしているんだ。けど、なんのために？　わたしをつれまわして、一体、何を企んでいるの？

不意に、あたりが明るくなったのを感じた。瞼を閉じていても、光が差し込んできたことが分かる。

誰かが扉を開けたのだ。そして、聞こえてくる足音。ゆっくりと近づいてくる。

「ついだぞ、ナンシェお嬢さま」

人を見下したような口調だ。

ぼうっと瞼を開けば、目の前には見慣れた黒いブーツ。

「ニヌルタ……」

そうつぶやいたつもりだったけど、それがちゃんと声になっているのかは自信がない。

「トーキョーだ」しぶい声で言って、彼は愉快そうな笑い声をあげる。「愛しい『リストちゃん』に会えるかなぁ？」

ばかにしている。ぎりっと奥歯を噛み締めるけど、やはり力がでない。

「なにを……するつもりなのです？」

かろうじて声をしぼりだす。喉から血がにじんできそうだ。

甲板　（おそらく）から、騒がしい声が聞こえてくる。「積荷をおろせ」と誰かが叫ぶのが分かった。トーキョーについたというのは、本当なのね。

「愚問だな、ナンシェお嬢さま。俺はニヌルタの王だ。目的は決まってるだろう？」くつくつと笑いながら、ニヌルタはさげすむような口調で言った。「『災いの人形』を手に入れ、世界を滅ぼす――そのために、俺は生まれたんだ」

そして、とニヌルタはしゃがみこんだ。そのおかげで、ほんのすこし顔を上げるだけで、その顔が確認できる。角ばった輪郭。顎の無精ひげは長さはばらばら。長髪はぼさぼさ。相変わらず、だらしない身だしなみ。それでも、神の子孫のはしくれ。そんな不清潔な姿でも、その顔立ちは美しさを感じさせる。彫りが深いせいか、目元には濃い影が落ち――一見、たれ目の優しげな印象だが――その暗闇に嗜虐性を宿した茶色い瞳を潜ませている。

もう三十代半ばだというのに（レッキによれば）、若々しいエネルギーに溢れ、目じりにも口元にも大して皺も見当たらない。二十代と言われても信じてしまうだろう。

「そして」舐めるようにわたしの身体を見回して、再度、ニヌルタはつぶやく。「お前はそれを止めるために生まれてきた……てのに、だらしねぇざまだな。マルドゥクの女」

ずきん、と胸が痛んだ。辱められているような気分に陥って、思わず視線をそらす。それと同時に、ふつふつと湧くよからぬ感情――憎しみだ。でも、堪えた。ぎゅっとかさかさに乾いた唇を結び、ただ沈黙を守った。

わたしのそんな反応がつまらなかったのか、チッと舌打ちしてニヌルタは立ち上がった。

「くだらねぇ」

彼がそう吐き捨てた――そのときだった。

「おい、兄ちゃん」聞き覚えのある声がして、誰かがあわただしく入ってきた。「トーキョーについたぞ。はやくその子を連れて、出て行ってくれ」

この声、誰だっけ？　ぼうっとする頭で思い出しつつ、わたしは顔を上げた。首に痺れをともなう痛みがはしって顔をゆがめた。ニヌルタに殴られたときにひねったんだろう。

「早く出てけ？　つれないねぇ。一緒に旅をした仲じゃねぇか」

面倒そうにニヌルタはため息を漏らす。本心ではないのはあきら

か。右を向け、と言われれば左を向く。彼はそんな人間。

「取引相手の部下たちがくるんだ。そんな傷だらけの女の子が船の中にいたらまずい」

責めるような口調でそう続けて近寄ってきたのは、四十代半ばほどの中肉中背の男だ。やたらと早口なのは、焦っているからだろうか。

えらのはった輪郭。横に細長い目に、やや大きめの鉤鼻(かぎばな)。ふさふさと揺れる短い黒髪。アジア人……ニホン人だろうか。その手には厚地のブランケット。外は寒いんだろうか、なんて疑問に思って、開け放たれた扉を見やる。外はもう朝を迎えていたようで、赤みを帯びた光が差し込んでいた。それは暗闇に慣れたわたしの目には刺激が強すぎて、眼球の奥がちくりと痛んだ。

「なんでまずいんだよ？　こうして密輸している時点で、すでにまずい立場にいるんだろ、あんた」

どちらにしろ、トーキョーについたらさっさとこの船を下りるつもりだったはず。こうして焦らすのは、単にこの人を困らせたいからに違いない。

「彼らを知らないから、そんなことが言えるんだ」憤慨した様子でそう返し、ニホン人らしき人物は横たわるわたしを一瞥した。「万が一、人身売買に関わっていると勘違いでもされたら……」

人身売買？

真っ青な顔で男が口走った言葉にわたしは眉をひそめる。どうやら、それがひっかかったのはニヌルタも同じだったようで、

「人身売買だ？」とまるでわたしの気持ちを代弁するかのように、訊ねた。「そんなものがはやってんのか、ここは」
「とにかく、このブランケットを彼女に羽織らせて、アザを隠すんだ。衰弱したアザだらけの美少女なんて、彼らに見せるわけにはいかない。取引がパアになるだけじゃない。わたしの命も危なくなる！」

強い語調で言い切って、男はニヌルタにブランケットをつきつけた。その表情はこわばって、額には汗がにじみでている。どうやら、彼は相当『彼ら』に怯えているようだ。
ニヌルタは「ふぅん」と気のない返事をしつつ、それを受け取る。
「分かったよ」

「彼らに、何か聞かれたら、適当にごまかすんだ。船酔いで気分が悪い、病院に連れて行く、とでもなんでも言って、さっさと立ち去れ。とにかく、彼らと面倒は起こさないでくれ」

押し殺した声で「頼んだぞ」と念を押し、男はわたしをちらりとだけ見て、船倉を出て行った。

「なんだろうね？」

突然、幼い子供の声があたりに響いた。はっとしてニヌルタの隣に目をやれば、そこには八歳ほどの少年が立っていた。ついさっきまでいなかったはずの、愛くるしい顔立ちをした少年だ。神々しい光を放つ麟粉のようなものが彼の周りを舞っている。真ん中でわけた前髪も、腰までまっすぐにのびた後ろ髪も、目を見張る漆黒。黒いだぼっとしたワンピース（のようなもの）の上に、真っ白な布をたすきのように巻いている。古代ギリシャを思わせる服装だ。

「俺は呼んでねぇぞ、レッキ」

ぴしゃりと言われ、「ごめん」とレッキと呼ばれた少年は舌をだして首を竦めた。

こうして見ると――服装は変だけれど――普通の子供にしか見えない。まさか、彼が天使だとは誰も想像すらしないだろう。

ルルを嫌う神・エンリルの遣い、レッキ。『冥府の剣』に宿る、ニヌルタの守護天使だ。

リストちゃんが持つ『聖域の剣』に宿るケットさまとは、髪と目の色は違えど、双子のようにそっくり。ニヌルタと共にいるレッキを見ていると違和感を覚えてしまうほどだ。

「ま」と、急に軽い調子でニヌルタが声を発した。「やばいテロリストと契約を結んじまったんだろうな」

「テロリスト！？」

「それしか考えられねぇだろ」言って、ニヌルタはぐるりとあたりを見回す。わたしたちを取り囲んでいるのは、大小さまざまな木の箱だ。「こんだけの銃器を売るっつーんだからよ」

レッキもつられたようにぐるりと顔をめぐらせる。もし身体が自由に動かせたならば、わたしも同じことをしていたことだろう。

銃器……わたしはごくりと生唾を飲み込んだ。そう。インドで船を乗り換えたときに、この船の船長が漏らしたのだ。この積荷はすべて、銃器と弾薬、そして火薬だ、と。それも、銃器は、比較的安い、古いタイプのものを揃えているらしい。取引相手……つまり、『彼ら』の要望だそうだ。

その話を聞いたときの光景を思い出し、ふと、ある名前が思い浮かんだ。――レオン・リャン。香港の密輸専門の武器商人。積荷について口をすべらせた船長の名前。そして……さっきの鉤鼻の男の名前だ。

うっかり、忘れていた。どうりで、顔も声も覚えがあったのね。

「リャン！」

いきなり、しゃがれた怒鳴り声が聞こえてきた。甲板のほうからだ。びくっと驚きに身体が震えた。そして、バタバタとあわただしく駆け回る足音が続く。

「『彼ら』が現れたかな」

楽しんでいるような声色で、ニヌルタはそうつぶやいた。

リャンのアドバイス通り、ニヌルタはわたしをブランケットに包み込み、まるで介抱でもしているかのように身体を支えて甲板まで連れ出した。頭からブランケットをかぶっているせいで、顔のいたるところにあるアザは他の人からは見えないだろう。そのかわり、わたしの視界も奪われて、周りの様子が分からない。見えるのは足元だけだ。

「積荷を運び出すよ！　きびきび動きな！」

かすれた声がすぐ近くからした。さっき聞こえた怒鳴り声と同じだ。口調は乱暴だけど、どうやら女性みたい。

「おい、立ち止まるな」

ぼそりと、ニヌルタがそう囁きかけてきた。反射的に身体がびくっと揺れる。わたしの肩を掴む彼の手に力がこもったのを感じた。

「痛……」

そこに、一昨日、彼に蹴られてできたアザがあることをしっかり覚えているのだろうか。そう思ってしまうほど正確に、彼はアザの上から圧迫してきた。
運動不足と栄養失調でふらつく足を、それでも必死に動かし、わたしは前に進む。
もしかしたら、ここで大声を出して助けを求めるべきなのかもしれない。でも……

「なに、ぼうっとしてるんだ」
「誰がトラックの鍵もってるの！？」

どうやら、頭からブランケットをかぶった怪しい人物も、あまりに忙しくて『彼ら』は気にならないようだ。というより、もともと海賊のような怪しい人たちばかりの船。たいして目立っていないのかもしれない。
かけ声や怒鳴り声、甲板を走り回る大勢の足音。あたりは混乱を極めているのだろう。
こんな状況の中、注目をひくほどの大声を出せる力はわたしにはない。それに、『彼ら』はテロリストかもしれないんだ。そんな人たちに助けを求めたところで、何か変わるとも思えない。もしかしたら、もっとひどい目にあうかもしれない。いえ、その前に助けてくれるとも思えない。
しかし……なんだか、妙だ。ニヌルタに誘導されるままに甲板を進みつつ、わたしはその違和感に眉を曇らせた。
テロリストだろう、とされる『彼ら』。その声は、どうも若い。武器商人と取引するような人間にしては、幼い、といってもいいだろう。

「久しぶりだね、シズル。今朝は君がしきっているんだね」

背後で、そんなリャンの声がした。さっきあんなにも怯えていたのが嘘のように、すっかり落ち着きはらっている。というか、どこか懐かしむような親しみ深ささえ感じられた。その声色に、わたしの胸が軋んだ。旅行から帰ってきたわたしを「おかえり」と迎え入れたリチャードお祖父さまを思い出してしまった。こんなときに……寂しさが胸いっぱいにひろがっていく。

「まあね」と答えたのは、ずっと辺りに怒鳴り散らしていたしゃがれた声だった。「親父は入院しているし、本当は受け渡しは延期したかったところだけど……弾薬も足りなくなってきたし、しかたねぇな」

「フジモトさんはまだ良くならないのか」

なにやら、リャンは『彼ら』の一人と――それも、おそらくはリーダー格の女性と――世間話を始めたようだった。それが徐々に遠ざかっていく。

やがて……

「久々の陸地だな、ナンシェお嬢さま」

わたしは、トーキョーに足を踏み入れた。

＊　＊　＊

とあるトーキョーの高級ホテル。最上階に位置するその一室で、男はソファに座り、なにやらノートパソコンをいじっていた。

「先生」

時刻は十時を指していた。部屋の隅で佇んでいる女は壁にかけてあるその時計を落ち着かない様子で何度も見ながら、ソファに座る男の後頭部に声をかける。

「よく落ち着いていられますね」

くいっとふちなしメガネをあげ、女は朱色に塗られた唇を滑らかに動かす。三十代にさしかかった彼女は、最近、成熟した女の色気がでてきた、と男にほめられるようになった。凛とした佇まいも、彼の目には艶かしく映るらしい。肉付きがよい扇情的な身体を、シックなスーツで隠そうとしているから、余計にそそられるのだ、と彼に力説されたこともある。どうやら彼は気の利いたことを言ったつもりだったようだが、それはセクハラですよ、と忠告すると、それ以後何も言わなくなった。

「君は落ち着かないのかな、渚(なぎさ)くん？」

ゆったりとした声でそう訊ねられ、渚とよばれた女は筆で書かれたような眉を上げる。「当然ですわ」と胸まである長い黒髪をさらりと後ろへはらった。メガネの奥で輝く鋭い眼光は、聡明さと芯の強さを感じさせる。

「ふぅむ」と男はあやふやな返事をし、黙り込む。

心、ここにあらず。そんな雰囲気が漂っている。話を聞いているのかも怪しい。渚は訝しげな表情を浮かべ、男の背後へと歩み寄る。

「さきほどから、何を調べていらっしゃるのですか、先生？」

厳しい口調で言いながら、渚はソファの後ろから男のパソコンを

覗き込み、

「って、オンラインゲーム！？」

驚きと落胆からか、その声は裏返っていた。

男のパソコン画面では、中世ヨーロッパを思わせる甲冑を着た勇者たちが広大な草原で殺し合いをしていた。画面のいたるところで血しぶきが舞い、彼女には意味の分からない単語や数字が飛び交っている。

渚の気品漂う美しい顔立ちは、怒りにゆがむ。

「てっきり、お仕事をされているのかと思えば……またですか！？そんな場合ではないでしょう！　今日、多くの子供たちが命を落とすというのに――」

気付けば、渚は本音を口走っていた。はっとして口を噤んで身を引くと「申し訳ありません」と頭を下げる。

男は何も言わずにパソコンの画面を見ていた。ぐさり、と甲冑を着た勇者が別の勇者を殺し、喜んでいる。その様子に、男の凛々しい眉が曇る。やれやれ、とつぶやくと背もたれによりかかった。

「彼らは『殺し屋』を名乗ってしまった」ぽつりと男はそう漏らす。「もう、被害者だと甘やかすわけにはいかないんだよ」

その言葉に、渚は「はい？」と顔を上げて小首を傾げる。「どういうこと、でしょうか？」

男はすぐには答えなかった。眉間に深い皺を刻んで、深くため息をつく。

「彼らもまた、罪を償う必要がある、ということさ」

夜明け（後書き）

これで四章は終わりになります。ここまでお付き合いくださってありがとうございます！　次章もよろしくお願いいたします♪

アベル　―1―

二十四年前、少女は生を受けた。その命は神からの贈り物ではなく、人間の技術によって創られたものだった。それは、三十年前に天に召した小さな命を呼び戻すための儀式。ある男が望んだ偽りの奇跡。

しかし、少女はその男の顔も名も何も知らずに育った。自分を欲したはずの男は、まだ赤ん坊だった彼女を手放したのだ。

理由は知らない。ただ、物心がついたころには、血のつながりも何も関係のない夫婦のもとで幸せに暮らしていた。

椎名宗助（そうすけ）と、その妻、環（たまえ）。子宝に恵まれなかった彼らは、知り合いから紹介された女から赤ん坊を買い取って、実の娘のようにたっぷりと愛を注いだ。椎名鼎（かなえ）、という彼女だけの名前を授けて。

そして彼らは、まだ幼い彼女に、過酷な現実も残酷な事実も包み隠さず教えた。彼女がクローンと呼ばれる存在であり、誰かのコピーであること。そんな彼女を望んだ男がいること。そして、その男が彼女を捨てたこと。しかし、まだ幼かった彼女が把握できたことといえば、どうやら自分が普通でないということくらい。全てを理解することはできなかった。だが、それでもよかった。十分だった。彼女は幸せだった。自分が何者だろうと気にならないほどに。

やがて少女が四才になると、彼らは彼女に兄を与えた。似たような境遇の六才の少年――誰かの生き写し（コピー）として創られた幼い命――を、当時流行りだしていた闇オークションで競り落としたのだ。彼らは彼に椎名望という名を与え、少女と同じように実の息子として大切に育てた。

六年間、裏の世界で育った望にとって表の世界で見るもの全てが真新しく、なかなか家族になじむことはできなかった。しかしそれでも、十三になるころにはすっかり打ち解け、妹である鼎とも仲の良い兄妹として周りにもうらやまれるほどになっていた。

そして、望が家族の一員になってから七回目のクリスマス。一風変わった絆で結ばれた家族のもとに、思わぬ来訪者が現れることとなる。それはサンタクロースというよりも、不吉を運ぶ死神に近いもの。それが届けにきたのは悲惨な運命。

しかし、兄妹はまだそれを知らなかった。

＊　＊　＊

「ねえ、お兄ちゃん。サンタさんはいないって本当？」

小学校からの帰り道、沈みかけた太陽が明々と路地を橙色の光で照らす。そんな夕焼けに似た色をしたランドセルを背負い、隣で歩く学生服姿の兄を涙目で見上げる小学生――彼女こそ、十一年前に椎名夫婦に買い取られた赤ん坊、鼎だ。

小さな歩幅で進む彼女は、早歩きをしなければ二つ年上の兄に追いつけない。ぺたぺたと急ぐその歩調に合わせて、二つに結った茶色まじりの黒髪が、前へ後ろへ、とその華奢な肩を撫でる。

「サンタ？」

きょとんとしながら彼女の兄は鼎に振り返る。さらりと黒い髪がその目元で揺れた。

鼎の自慢の兄、望。血縁関係はないものの、七年前に彼が椎名家に養子に来てから、ずっと一緒に育ってきた。鼎をまるでお姫さまのようにいつも大切に守ってくれる、兄というよりは騎士のような存在。その整った顔立ちは周囲から羨望の眼差しを集め、空手で鍛えたたくましい体つきは学校の不良たちを遠ざけるのに一役買っていた。

「いるよ、いるよ」

思わぬ妹の問いに、一瞬妙な間をおいたものの、望は思い出したかのように薄い唇を左右に伸ばして微笑んだ。だが、そのごまかしたような高い声が、声変わりのせいで不自然にかすれて、彼の言葉はどうも嘘っぽく聞こえた。鼎は顔をしかめ、ふいっと顔をそむけた。

「やっぱり、いないんだ」

いじけたようにぽつりと言った鼎に、あわてた様子で望は「いるって！」と力強く反論する。

「毎年、プレゼントが枕元にあるだろ？」

ほらほら、と明るい調子で納得させようとするものの、鼎はぱっとしない表情で「でも」と口をすぼめてしまった。

「伊藤くんに言われたんだもん。ちゃんとサンタさんを見たことあるのかよ、て。プレゼントはお父さんが用意してるんだぞ、て……」

もちろん、伊藤というのが誰なのか、望は知る由もない。だが、おそらく鼎のクラスメイトであることは想像がつく。望の頭に浮かんだのは鼻水を垂らした生意気なガキ大将。チッと舌打ちをすると、「くそガキが……」とぼそりと悪態づいた。もちろん、鼎に聞こえないような小声で。

サンタの正体が何者か、望は誰かにはっきりと聞いたわけではない。なんとなく、成長していく上で悟ってしまったにすぎない。だから、望が「今年は俺がサンタになるから、父さんは休んでいい」と父親である宗助に告げたときには、彼は目をむいて驚いた。

「いつから父さんの正体を！？」

三十半ばの父親はまだまだ若々しく、いや、幼いといったほうがいいかもしれない。夢中になってそう問い詰めてくる様子はまるで子供だった。望は呆れつつも、そんな父親を心底愛おしく思った。きっと両親にとっては、自分はいつまでも子供なんだろう、と嬉しくもなった。

「伊藤とかいう奴がさ、サンタなんていない、てカナにふっかけたみたいだ」

本棚が四方を囲む宗助の書斎で、望は頭の後ろで手を組んでため息混じりにそう告げる。すると、宗助は回転イスから飛び上がらん勢いで顔を真っ赤にして憤慨した。

「なんて悪ガキだ！　担任に電話をして……」

「いやいや、そこまですることないっしょ」

苦笑しつつ、望は両手を掲げて父親をなだめる。放っといたら、このまま伊藤家に殴り込みにいくことは、彼の子煩悩さ加減を知る人間なら容易に想像がつく。

「とにかくさ」と自慢げに微笑んで、望は腰に手をあてがった。「今年は俺がサンタの衣装着て、カナの部屋に忍び込むよ。で、ちゃんと起こして、プレゼントを渡す。しっかりサンタから受け取れば、あいつも信じるだろ？」

「なんだ、そんなことなら、父さんでも出来るぞ」

毎年恒例の行事を奪われて寂しいのだろうか、哀しげに反論する父親に望は失笑した。

「今年は俺に任せてよ。いろいろ考えてるんだ」
「そうかぁ？」

諦めきれないようで、宗助の表情はすっきりしなかった。望はそれから二言、三言、付け加えて説得し、ようやく宗助を説き伏せた。
宗助はポケットから皮の長財布を取り出すと、サンタの衣装とプレゼントを買うだけの小遣いを望に渡す。しかし、わざとなのか、金銭感覚がないだけか、その金額は十一歳の少女のプレゼントを買うにしては不適切で、望は呆れて絶句した。

「ところで」と、宗助が切り出したのは、望が書斎を後にしようと踵を返したときだった。「なに？」と長めの黒髪をなびかせて振り返った望に、宗助は背を向けたまま問いかける。

「弟と妹、どっちがいい？」

望はハッと目を見開き、書斎のデスクに向かう父の背中をじっと見つめた。蛍光灯にぼんやりと照らされるその背中は、ずいぶん大きくたくましくも見えた。
ややあってから、望はふっと微笑む。「そうだなぁ」と感慨深げに切り出して、懐かしむような眼差しを浮かべた。

「弟かな」

望が答えると、「そうか」と満足げに宗助はうなずく。
宗助の質問が意図することがなにか、望には聞かずとも分かった。また宗助は誰か養子を取ろうとしているのだ。それも、望や鼎と似た境遇にある子供。クローンと呼ばれる存在。そして、望と同じく、人体実験で体を散々いじられた挙句、闇オークションで出品される

こととなった不遇な命。
宗助は、望と鼎に隠し事をすることはなかった。彼らの出生も、宗助が知っていることは全て明かしたし、この世界に表と裏があることも全て話した。だから、今もトーキョーのどこかで、自分と同じ目にあっている――いや、自分よりひどい目にあっている子供たちが存在していることを望は知っていた。そして、そんな子供たちを宗助が助けようとしていることも。
鼎と望を育てていくうち、宗助はどうやら裏世界で売買されている子供たちに単なる興味以上のものを抱くようになったようだった。特に望から、彼が幼いころどんな仕打ちを受けていたかを聞くにつれ、彼らを救いたいという気持ちが膨らんでいったらしい。
何かできないものか――宗助がたまにつくる眉間の皺は、その苦悩をよくあらわしていた。そんな父の様子を目にするたびに、申し訳ないと思いつつも、ありがたい気持ちで胸が熱くなり、望も自分にできることはないのか常々頭を悩ませていた。だからこそ、せめて長男として家族を支えてやりたいと思っていたし、鼎が誰かにいじめられようものなら、小学校の教室に学ランで乗りこんだ。結局は、両親に迷惑をかけることにしかならなかったのだが。
書斎に沈黙が落ちて何度か古い鳩時計の秒針が時を刻んだあと、「情けないな」と、不意に宗助はつぶやいた。

「父さんには金しかないから、これくらいしかできないんだ」

どこか恥ずかしそうな、それでいて申し訳なさそうな声色だった。望は「なにを……」と顔をしかめて言いかけた。が、宗助は望に言葉を続けるすきを与えず、

「はやく買いに行かないと、店が閉まるよ」

いつもの父親らしい温かみのある口調が戻っていた。

だが、望の心にはさっきの彼の言葉がひっかかったまま。伝えたい言葉が心の底から喉まで行列となって並んでいるのに、肝心の父親が、早く行きなさい、と追い出すように急かすものだから、出すタイミングを失ってしまった。

結局、それ以上会話を交わすことなく、望は書斎をあとにした。

廊下に出ると冷たい風がどこからか吹き込んできて、望は身震いをした。フローリングの床がやたらと冷たく感じる。

古いものの、豪邸と呼んでいいほどの立派な屋敷。だが、ぜいたく品は一切見当たらず、家政婦やガードマンの姿も見られない。それは、椎名夫婦の人柄のあらわれに違いなかったが、ほかにも理由があった。

宗助の家は先祖代々侠客（きょうかく）の一族。将来は、長（おさ）として組を率いることになっている。だからこそ、彼は裏ルートで赤ん坊（鼎）を手に入れることができたのだし、闇オークションへも参加することができた。だが、彼自身の性格は温和で平和主義。特に子供好きで慈愛に満ちた人物だ。争いごとを好まず、できるならば、侠客としての道を抜けたいとさえ考えていた。だが、宗助の父親はそれを許さず、鼎が二十歳になるまでという期限付きで自由な暮らしを許されているにすぎない。

ただ、それを知っているのは、父親や彼の腹心の部下たちのみ。もし、こうして椎名家の跡取り息子が無防備に暮らしていることが知れれば、敵対している組の人間から狙われることもありうるからだ。そのため、金はあっても、椎名一家は目立たぬよう質素に暮らしていた。

だが、そんな静かな暮らしが望にとって何より幸せに思えた。たとえ金がなくても、この幸せは変わることはないだろう、と肌寒い廊下でたたずみながらしみじみ思った。

「望？」

一階のほうから、高らかな声が聞こえてきた。望ははっと我に返って「二階！」と答えて、階下へと足早に向かう。
階段を降りてきた望を迎えたのは、長い黒髪を一つにまとめた、おっとりとした顔だちの三十代前半の女性。望と鼎の育ての母、椎名環だ。決して美人とはいえないまでも、優しさが表情からあふれ出ている。誰も彼女が任侠の世界に嫁入りした女だとは思わないだろう。

「お夕飯できたわよ」

嬉しそうにそう告げられ、望は「あ、ごめん」と口をゆがめた。

「ちょっと、買い物行ってくる」

階段を降り終えても、立ち止まることなく、母の前を通り過ぎて玄関へと向かう。「ええ、今から？」と驚く母の声を背に、望は颯爽とコートを着て靴を履く。

「さき食べてていいからさ」
「もう……クリスマスイブなのよ？　デート？」

不満げな母の声に、望は「まさか」とくつくつと笑った。靴ひもを縛ってから体を起こし、母に振り返ると安心させるように満面の笑みを浮かべた。

「すぐに帰ってくるから。母さんのクリスマスディナー、楽しみにしてるよ」

呆れたような笑顔を浮かべる母にそう言い残し、望は玄関から寒空の下へと飛び出した。

これからこの家で起きる悪夢のような出来事など、知る由もなく

――

アベル　―2―

「お、望じゃん！」

それはちょうど、必要な買い物を終え、帰路に就こうというときだった。クリスマスのイルミネーションで彩られる街角で、聞き覚えのある声がして望は振り返った。

「なにしてんの？」と駆け寄ってきたのは、同じクラスの円谷裕作（つぶらやゆうさく）。中学校入学直後、髪を茶色に染め、先輩や教師たちからも悪い意味で注目を浴びた。髪の長さは変わったが――ハリネズミのようなツンツンとした短髪になった――相変わらず茶色のままだ。それでも、根はいい奴だ、と約八か月間、共に過ごして望は悟った。確かに、真ん丸のその瞳はキラキラと光り輝いて穢れがなく、見つめていると星空を見上げているような気分にさえなる――ような気がした。

「買い物だよ」

微笑んで、望は両手にぶらさげていた紙袋を掲げる。すると、裕作は二重のラインがくっきりと入った瞼を大きく開き、「なに、彼女にプレゼント！？」とあたりに響くクリスマスソングを打ち消すような大声で叫んだ。

横を通り過ぎていくカップルの好奇な視線を感じつつ、「違う違う」と望は唇の片端を上げた。

「妹にだよ」

「鼎ちゃん！」大仰に、ぽん、と右拳を左手の平に叩き付け、裕作は瞳を爛々と輝かせる。「かぁわいいよなぁ。お人形さんみたいでさぁ。ほんっとうらやましいぜ、妹！」

うらやましい――よく聞く言葉だった。一人っ子政策に縛られる今のご時世、兄妹がいることはそれだけで特別なことで、さらに鼎のような可愛らしい妹がいるとなると、同級生（特に男）に嫉妬されるのは自然な流れだった。

だが、実のところ、妹のことでどうこう言われるのはうんざりしていた。あまりに騒がれると、その存在がどれほど特異なことか思い知ることになる。鼎と血がつながっていない事実をつきつけられているような気がしてならなかった。

望は苦笑して、「お前はなにしてるんだ？」と早々に話を変えた。

「これからクラスの奴とカラオケだよ」特に気にする様子もなく、裕作はけろっと答える。「てか、お前も来いよ！」

晴れやかな表情で、裕作は望の肩に手を置いて提案した。それが名案だと信じて疑わないような、確固たる自信を感じる。

確かに、いつもの望ならあっさりとオーケーしていただろう。しかし、今夜は特別。誘いに乗るつもりはなかった。すぐさま、「やめとく」と言いかけた――のだが、思わぬ言葉がそれを遮った。

「遠山もくるぜ」

にんまりと笑んで囁きかけてきた裕作に、望は「え！？」と動揺もあらわに聞き返す。

遠山……同じクラスの遠山杏子（きょうこ）のことに違いない。陸上部の遠距離選手で、体育祭のときからなんとなく望が気になっていた女子だ。

裕作には何度か話したことだが、同じクラスだというのになかなか話す機会が見つからず、どうにかならないものか、と気をもんでいた。才色兼備でお嬢様気質の彼女は、男を近づかせないバリアのようなものを張っていて、話しかけるのも気を遣う。そういえば、

そんな彼女がカラオケに出てくること自体、かなり珍しいことではないか。それもイブの夜に。
望はしばらくためらって、それから「んじゃ、ちょっとだけ」と後ろめたさを感じつつも答えた。

「そうこなきゃなぁ！　お前が来たら女子どもも喜ぶぜ」

大喜びでガッツポーズをしている裕作。実は彼にうまいこと乗せられたのではないか、という気もしたが、これもギブアンドテイクだ、と自分を納得させる。
とりあえず、ポケットから携帯電話を取り出して自宅に電話を入れた。内容はもちろん、すぐに帰れそうにはないことと、今夜は母の手料理は諦めるしかなさそうなこと、そして鼎をしっかり寝かしつけておいてほしいこと。
だが、肝心なこと――どれほど遅くなるか、は伝えていなかった。
まさか、カラオケが想像以上に盛り上がって（杏子ともいい雰囲気になり）、結局終電に乗って帰ることになるとは、思ってもいなかったのだ。

「やべぇ、やべぇ」

予定していたよりもずいぶん遅い帰りになって、望は慌てていた。さすがに、ここまで遅くなったら両親は怒るだろう、と思った。せめて、途中で電話をするべきだった、と振り返る。
さらりとした長めの黒髪を風になびかせて、望は全力疾走。
駅から家までの帰路、止まることはなかった。それでも、息はあがらないし、汗もかすかにじとっとする程度だ。
並外れた身体能力を持っていることは自覚していた。父親から、自分の身体が改造されている可能性があることを告白されたときも、たいして驚きはしなかった。そうだろうな、と思った。体育の授業

で手を抜いていればいいだけの話だろう、と思った。ラッキーだとさえ感じていた。

事実、こうして、駅から徒歩三十分のところ、十分程度で着いてしまえそうなのだから。

目の前の角を曲がれば、家は目前――そう思って、すっと息を素早く吸ってラストスパートをかけようとしたときだった。

ポケットの中で何かがブルブルと震えだしたのを感じて、「うわっ」と望は転びそうになった。

片足で何度か地団駄のようなものを踏んで、つんのめるかたちで立ち止まる。

「びびった」

誰もいない路地で、望はぼやくように独りごちた。

心臓が派手に暴れている。走ったからではないだろう。最後の加速だ、と集中力を高めたその瞬間だったから、驚いてしまったのだ。ぴたりと張り付くようなタイトパンツをはいていることも相俟ったのだろう（振動がまるで肌に直接伝わってくるようだった）。

しつこく震えるそれを、ポケットからだすのを数秒だけためらった。なんとなくだが、誰からの電話だかは予想はついていた。

困ったような表情を浮かべ、首元をかく。

家に帰って怒鳴られるよりは……と、ポケットに手をつっこんで、小刻みに震える機械を取り出す。

「わりぃ、母さん」と、開口一番、軽い調子で謝った。つとめて明るく弁明を始める。「友達に誘われちゃって、ちょっとだけ付き合うつもりが、こんな時間まで……」

「望……」

予想通り、その声は母のものだった。だが、やけに震えて、か細

く、様子がおかしい。
今夜はクリスマスイブ。だというのに、夕飯をパスして、家族団らんの機会をつぶしてしまった。そんなわがままを許してもらったのに、友達と遊びほうけて真夜中に帰宅とは……怒られないほうがおかしいだろう。
わなわなと肩を震わせて怒る母親の姿が思い浮かんだ。
望は、やべぇ、と頬をひきつらせつつも、せめて反省していることを伝えようと必死な声で続ける。

「あと数秒で家、着くしさ。ほんっと、目の前まで帰ってきてるんだよ。超つっぱしってきたんだから」

だからなんだ、と怒鳴られるのを覚悟した。が……

「帰ってこないで、望！　早く、お義父(とう)さんのところへ、逃げ――」
「へ……」

母の声は途中で途切れた。そして、耳をつんざくような破裂音が続く。母の悲鳴。父の怒号。
望はわけもわからず、ただ茫然と突っ立っていた。
通話の終了を知らせる無機質な音に耳を傾け、妙な胸騒ぎを感じて眉をひそめた。
心臓の鼓動がはやまる。走っていたときには感じなかった息苦しさが、それを追う。脂汗が頬を伝った。
望はごくりと生唾を飲み込んで、ゆっくりと携帯電話をおろした。
今のはなんだ。悪趣味な冗談だろうか。夜遊びの罰に、びびらせようとしているのだろうか。
心臓が不規則なリズムを刻みだしていた。
望は「はは」とぎこちなく笑った。こんなのに騙されるかよ、と重い足を持ち上げ、家へと歩き出す。しかし――余裕を見せていた

その歩みは、やがて早まって、道路にハンマーを打ち付けるような乱暴で力強いものに変わっていった。

家についてすぐ、望は異変に気付いた。玄関が開いている。鍵がかかっていない、とかそういうことではない。こじあけられていた。

扉は不自然な弧を描き、鍵の部分はひしゃげている。

内側から強硬な車か何かが突っ込んで飛び出していったような、そんな変形の仕方だ。

いったい、何が起きているんだ。望は荒い息遣いで、自分の家を見上げた。なぜか、全く見知らぬ家に見えた。どす黒いもやがかかった魔女の館のように見えた。よからぬものにとりつかれているようで、扉に触れることも躊躇われた。

足がすくむ。寒気がする。

――帰ってこないで、望！

母の悲鳴のような声が耳に残っている。

望は勇気をしぼりだし、扉に手をかけた。ゆっくりとそれを開いて、息をひそめて中に侵入する。

家の中はやけに冷えていた。外よりもずっと冷え込んでいるように感じた。ぶるっと身震いをして、望は靴のまま玄関にあがった。

――胸を突き刺すような嫌な予感が、そうさせた。

玄関をあがれば、目の前には階段がある。明かりがついていないと、二階は真っ暗で何も見えない。じっと見上げていると、闇をのぞいている気分になる。そのままあの世につながっているんじゃないか、とさえ思えてしまう。和製ホラーの映画によくでてきそうな光景だ。お化け屋敷のようで、鼎は夜になると必ず、一緒に二階までついて来て、とせがんだ。

両親はどこだろうか。さっきの電話は二階の寝室からか。時間を考えれば、そうだろう。とっくに両親の就寝時間はすぎている。

望は玄関で拾ってきた野球のバットをぎゅっと握りしめ、一段目に足をかけた。
ギシッと木がきしむ音があたりに響く。――そのときだった。聞き覚えのある破裂音があたりに響き渡った。
思わず、「うわっ」と叫んで腰をぬかす。
「やめろ」だの「何をするんだ」だの、父の荒々しい声が聞こえてくる。まるでそのバックグラウンドミュージックのように、母の泣き叫ぶ声が流れてくる。――すべて、一階のリビングからだと確信した。そして、両親の身が危険にさらされていることも明らかだった。
壁に背をつけ、バットを抱きしめるようにして座りこんだ。
助けに行かなければ。自分は長男なんだ。自分がしっかりしなくては。そうは思っても、背筋に襲いかかる戦慄――それは望から闘争心を奪い取り、立ち上がる力さえも吸い取ってしまっていた。
体中が震えている。こんなことは初めてだった。バットを握りしめる手も汗で濡れ、木が湿ってきている。
自分の息遣いがやけに耳につく。
あまりの恐怖に、目をつぶっていた。瞼を開けば、ベッドの上で、「いつまで寝てるの？」と母がしかりつけてくる。そうに違いない。これは夢なのだから、と祈っていた。――だから、気づかなかった。とぼとぼとおぼつかない足取りで階段を降りてくる小さな影に。望と同じように恐怖に震えながら、勇気を振り絞って下りてくる幼い少女に。
「お兄ちゃん……」
震えた声に、望ははっと目を見開いた。階段を見上げると、パジャマ姿の妹が手すりにしがみつくようなかたちで、階段を下りてくるところだった。

「お兄ちゃん」と、再び鼎はつぶやいて、転びそうになりながら駆けおりてくる。真っ暗だというのに、その瞳が涙で潤んでいることがはっきりと分かった。

そんな妹の姿を目にして、兄としての勇気が湧き出てきたのだろう。恐怖にとりつかれ、さっきまで金縛りにかかったかのように動かなかった身体に自由が戻った。

すばやく立ち上がると、鼎を抱きとめるように迎え入れる。

「鼎、大丈夫か？」

ケガはない。両親の身に何が起きているのかは分からないが、とりあえず、鼎は無事だった。安堵しつつ、カタカタと震える妹を抱きしめる。

幼いといっても、ここで何かとてつもなく恐ろしいことが起きていることは悟っているのだろう。

望は今にも泣きそうな鼎を胸に抱き、おもむろに階段を見上げた。

たった一人、あの暗闇の中、両親の悲鳴に震えていたに違いない。そして、こうして下りてきたのだ。一度だって、夜に一人でこの階段を下りれたことはなかったというのに。

独りで、よく下りてきた。どれほどの勇気を要しただろうか。どれほど恐ろしかっただろうか。

望はぐっと唇をかみしめ、鼎を抱く腕に力をこめた。

「……ここで待ってろ」

兄として、男として、覚悟を決めた瞬間だった。

嫌嫌、と引き止める鼎を説得し、望はバットを片手にリビングへと進む。やはり母の泣き声は続いていて、それが今にも望から闘気を奪い取ってしまいそうだった。

暗く肌寒い廊下を進み、すりガラスから光が漏れる扉の前で立ち止まる。

父が誰かを説得……いや、責めている声が聞こえてくる。怒りに満ちた声だ。こんな父の声を聞いたことはない。おそらく、父自身、こんな声を今までだしたことはないだろう、と思った。

深呼吸をし、バットを握りしめる。

こんなときに役に立たないでどうする――望は己の身体を叱咤した。人体実験で創りだされた、並外れた身体能力を持つ特別な身体。今まで、本気、というものを出したことはない。全力を出せばどうなるか、望も分かっていなかった。ただ、とんでもない力を備えている自覚はあった。たとえるならば、鬼のような――。もちろん、漠然とした意識ではあったが。

今こそ、それを発揮するとき。両親への恩を返すとき。この化け物じみた身体を有効活用する絶好のチャンスが訪れたのだ――望はそう自分に言い聞かせた。

そして、恐怖を取り払うように雄叫びをあげて、扉を蹴破り、中へと突入する。

その行動は無謀。浅はかで考えなし。愚かな過信が悲劇へのトリガーを引いた瞬間に他ならなかった。

リビングに足を踏み入れ、バットを構えた十三歳の少年。その目に飛び込んできたのは、フローリングの床に這いつくばるように倒れる母の姿。その両足、太ももからは大量の血がどくどくと流れ出て、血の池をつくりだしている。その傍らには、銃口をつきつけられている父。彼もまた、苦痛の表情をうかべていた。左腹のあたりで赤いしみがひろがっている。撃たれたのだろう、とすんなり理解できた。

二人は顔面蒼白でこちらを見つめていた。その顔には絶望の二文字が張り付いている。

「……」

恐ろしい光景を目の当たりにすることは予想していたというのに、現実(それ)は十三の少年が想像できる範疇を超えていた。
バットを握りしめる手からは自然と力が抜け、身体が再び震えだす。言葉が何もでてこない。
やがて、凍てついたその場に、嫌味なほどに落ち着いた声が響いた。

「おかえり」

甘く優しい声。
望は目を見開いた。
不思議なことに、その声の主――父に銃を突き付けているその男の姿を、知覚しようとしていなかった。もしかしたら、それはせめてもの防衛本能だったのかもしれない。見えているのに、脳が認識を拒んで、その男の姿をぼやかしていた。そんなことがあり得るのかは分からない。だが、そんな気がしてしかたなかった。
回転式拳銃(リボルバー)を父につきつけている男――いや、少年、といったほうがいいだろう。決して趣味がいいとは言えない、全身黒ずくめの格好をした少年だ。ブーツのまま部屋に上がっている。自分とそれほど年は変わらないように見えた。といっても、いくつかは年上だろう。高校生か。
顔を隠すこともせず、堂々とこちらを見ている。誇らしげにさえ見えるその態度が、余計に恐ろしかった。さらに、優しげなまなざしと、穏やかな微笑が拍車をかけている。
決して、つい先刻、銃で人の身体を撃ちぬいた人間には見えない。

「よかった、帰ってきてくれて。電話させて正解だった」

瑞々しい唇から零れでたのは、心の底から安心したような声だっ

た。
望は意識が遠のいていくような感覚を覚えていた。思考が止まる。自分の鼓動の音さえ聞こえない。ただ、その恐ろしくも魅惑的な少年から目が離せない――見つめられて石にでもされてしまったかのような、そんな感覚だった。
父親が何かを叫んでいる。だが、何と言っているのか理解できなかった。
望の心臓は今にも発火してしまいそうなほど熱くなり、寒いはずなのに汗が噴き出し背を伝った。緊張と恐怖で体が硬直して、動けない。
少年には圧倒的な存在感があった。ひしひしと肌に伝わってくるようなプレッシャーだ。
サンタクロースにしては若いと思った。泥棒にしては落ち着きがあると思った。侠客の殺し屋にしては愛嬌があると思った。
「俺はカイン」と少年は微笑んだ。「君を迎えに来たんだ」

アベル　―３―

頭にまで響く耳障りな音に少年は目を覚ました。一つ向こうの通りで道路の拡張工事が行われている。もう半年以上もその騒音と付き合っているのだが、いつまでたっても慣れない。薄い窓でも閉めていれば多少はましなのかもしれなかったが、真夏に冷房も扇風機もない部屋ではそれもかなわない。

六畳一間の部屋はどこかかび臭い。一応、掃除はしているのだが、築三十年の歴史あるアパートでは、焼け石に水、といったところだろう。雨漏りもひどいから、梅雨は最悪だ。とりあえず一年半も暮らせば、対処のあれこれは身に着く。

窓からは容赦なく昼下がりの日が差し込んでいる。遮るカーテンがないので遠慮がない。むくりと布団から起き上がり、枕もとの時計に手を伸ばす。――二時半。

少年は、深いため息をついた。無造作に伸びた栗色の前髪をかきあげ、すぐ隣においてある姿鏡に目をむけた。

そこに映っているのは、十七の少年――のはずだ。明るい未来に胸はためかせ、色恋沙汰に一喜一憂し、些細なことで不平不満を漏らす、そんな少年のはずだ。だが、鏡の奥でこちらを睨みつけるその少年は、夢や希望なんてものを信じているとは思えなかった。切れ長の目に、若さを象徴するような煌きは無い。未来を望んでいるとは思えない、全てを諦めきったような眼差し。

目が死んでいる、と彼の同僚はよく注意する。その通りだ、と彼は思っていた。自分はきっと死んでいる。四年前、自分は死んだのだ。いや、殺された。じゃあ、今の自分はなんだろうか。そうだな、きっと亡霊だ、と少年はほくそ笑む。怨念に縛られ、成仏できずに彷徨う亡霊だ。

事実、半年前に出会った、中学時代の同級生――確か、名前は裕作だったか――にばったり出くわしたとき、悲鳴をあげられた。真

っ青な表情で「生きてたのかよ」とつぶやかれたのを、今でも鮮明に覚えている。

四年前、ある事件をきっかけに、彼は『失踪』した。名前を変え、家を移り、新しい人生を始めた。当然、学校も変えた。一応、『転校』になっていたのだが、挨拶もせずに消え、携帯もつながらくなったことから、学校の連中は彼が死んだと思い込んだようだった。悲しむよりも呆れてしまった。あっけなく人を殺すものだ。机の上に花瓶でも置かれたかな、と思うと笑えた。

まあ、どちらにしろ、あのまま学校に通い続けたところで、自分は死んだも同然だったに違いないだろう。久々に出会った友人の反応がそれを物語っていた。怯えた表情で「無事でよかった」ととってつけたように言って、尻尾を巻いて逃げていった。あの事件が原因で、自分の父の出自が公になってしまったのだ。仕方のないことだろう。あんなに仲が良かったのに――そんなことを言うほど自分は幼稚ではない。

のっそりと起き上がり、伸びをした。閑散とした部屋を見回し、喉元をかく。電話もパソコンも、外に繋がるものは何もない。もっといえば、トイレも風呂もない。トイレは共同トイレ、風呂は仕事場のものを借りて暮らしていた。月三万の都内のアパートにこれ以上望むのは世間知らずというものだろう。

あるものといえば、敷布団と姿鏡だけだ。その二つは、最低限、彼が生きていくために必要なものだった。身体を休める寝床と、身だしなみを確認する鏡。とりあえず、それさえあればこの世界で生きていける。

ワイシャツと黒のジーンズをはき、姿鏡の前に立つ。誰だか分からないが、自分を創りだした連中にこれだけは感謝しておこう、と思っていた。――この優れた容姿しか、彼には頼れるものは残ってはいなかった。

＊　＊　＊

「なんで、こんなことしてるの？　十七でしょう」

シャツのボタンを留めながら、三十代半ばくらいの女はそう尋ねてきた。キングサイズのベッドに腰をおろし、黒のタイトスカートから伸びるしなやか足をストッキングに差し込んでいく。その様子をドレッサーの鏡越しでちらりと見、彼は「え？」と聞き返す。

女に背を向けるかたちでドレッサーのイスに腰かけ、彼女が今夜稼いだ札束を数えているところだった。滑らかに札をめくっていた指がぴたりと止まる。金勘定に夢中になって、女性との会話をないがしろにすると痛い目をみる。――一年半の経験で学んだ教訓だ。

「だから」と、たらこ唇をとがらせて、女は不機嫌そうに眉――ノーメイクの今、あるかどうか微妙なのだが――をひそめる。「なんで、こんなとこで働いてるのよ？　高校とか行かないの？　もっと他に有意義なことあるでしょう」

そこまで言って口ごもると、彼女は「あたしも人のこと言えないけどさ」とばつが悪そうに目を側めた。彼はくすくすと笑うと、「ありがと、帰蝶（きちょう）さん」と振り返る。「知り合いの紹介なんだ。他に当てもなかったし……」

「知り合い？　こんなとこを勧めるなんて、嫌な友達持ってるわね」

言われて彼は表情を曇らせた。札束を握る手に力がこもる。

「友達じゃなくて、親だよ」皮肉そうに笑んで、彼はため息を漏らす。「ま、名ばかりの親だけど」

苦悩に満ちたその表情は、十七とは思えないほどの大人びている。まだ幼さが残る顔立ちと、たまに感じさせる妖しげな色気。そのギ

ャップこそ、ここで働く女性たちを虜にするのだった。

帰蝶はしばらく彼に見惚れていたが、やがて心配そうな表情で「そう、だったの」と慰めるような声色でつぶやいた。こうみえても一児の母だと主張していたが、やっと信じる気になった。初めて彼女から母性というものを感じた瞬間だった。だからだろうか、自分の事情を話したくなってしまったのは。

「本当の両親が死んで引き取られたんだ」気付いたら、口が勝手に動いていた。「父親の実家と関係のある夫婦なんだけど……ま、子育てができるようなタイプじゃなかったんだよ、元から」

だからこそ、こうして中学を卒業した途端、無理やりひとり立ちさせられたのだ。――とはいえ、追い出されずとも、自ら出ていくつもりではあったが。いつまでも処分に困る粗大ごみのような扱いを受けては、よく二年半もあの家で耐えたものだ、と自分を誉めたくなる。

卒業と同時に紹介された働き口。それは、江戸時代でいう遊郭――一言で言えばそれだ。ホストクラブが立ち並ぶ夜の街、歌舞伎町にそびえる、一見地味なホテル。その中には、年齢も見た目も様々な娼婦たちが控えている。元々はラブホテルだったらしいのだが、改装して、内部は高級ホテルに見間違うほどになった。改装といっても、もともと、一室ずつ形は違えど、広さは充分ある上に、ランプやベッド、ドレッサーなどの家具は上品なデザインで、壁一面に張り巡らされていた鏡を取り払って落ち着いた色の壁紙を貼るだけで充分だったらしいが。

「じゃ、これが今夜のお給料」帰る支度が済んだ帰蝶に、さっきの札束がつまった封筒を手渡す。「お疲れさま」

「何枚、抜いたの？」

帰蝶は封筒を受け取り、中をちらりと覗いてから彼を睨んだ。口元には笑みが浮かんでいて、彼女がただ冗談を言っていることはあきらかだった。

「オーナーに聞いてよ。俺は言われた分を抜いてるだけなんだから」

肩を竦めてそう返すと、帰蝶は「少しはくすねてポケットに入れるくらい、やりなさいよ」と助言でもするかのように言ってきた。そして、いつものように、封筒から三枚ほど万札を取り出して彼の手に握らせる。

「お小遣いよ」と、耳元で囁いて帰蝶は部屋から出て行った。

彼はため息混じりに笑むだけで、何も言わなかった。ありがとう、と言うのも情けないし、かといって、遠慮するほど生活に余裕もない。事実、こうして娼婦たちからもらうお小遣いに頼っている部分もあった。

生きるためには金が必要で、だから働く。媚も売る。何のため、とか、誰のため、とかではない。ただ生きるため。彼の人生はそれだけだった。

帰蝶が出て行った部屋で、彼はぼうっと突っ立っていた。

一体、何のために――そう考え出すと、止まらなくなってしまう。娼婦たちから、夢はないのか、とよく聞かれるが、答えられたことはない。強いてあげるならば、引き離された義妹との再会。そして……あの事件の真相をつきとめること。しかし、どう叶えろ、というのか。金もコネもない彼は、このトーキョーで生き延びることで精一杯だった。

急に疲労感が襲ってきて、彼はドレッサーのイスに腰を下ろす。

いつまで、こんな生活を――ノックする音が聞こえたのは、そう心の中でぼやいたときだった。

「野沢直人くんだね？」

扉を開くなり名前を呼ばれて、あっけにとれらた。そこに立っていた人物に柳眉を寄せる。てっきり、清掃係のおばさんが掃除に来たのかと思っていた。「ご苦労さま」と言いかけた口は開いたままだ。

「こういうものなんだけど」と、骸骨のようなやせこけた顔をした男は、胸ポケットから取り出したそれをちらりと彼に見せた。「聞きたいことがあるんだ」

もったいぶって、男はさっさとそれをしまった。一瞬しか確認できなかったが、彼にはそれで充分だった。きらりと光ったバッジ。しっかりと見覚えがあった。四年前に見たあれだ。忘れたことなどない。初めてあれを見たときの、頼もしさと希望に満ちた気持ち。そして……それが裏切られたときの絶望感と憎悪。どこからかふつふつと怒りがこみ上げてくるのを感じた。自分の中で、ここまで感情がはっきりと顔をだすのは久しぶりだと思った。

「何の用だよ？」

男を睨みつけ、彼はつっけんどんに訊ねる。腕を組み、男の首をしめたくなるのを抑えた。

警察――彼が何よりも嫌う人間たち。四年前、自分と義妹の話を笑い飛ばした連中。被害者が――父が侠客の出だと分かるなり、捜査を打ち切り、挙句、必死に真実を訴える自分を『イカれている』とあざけ笑った。そういえば、義妹と引き離され、別々の家庭に引き取られたのも、そのせいではなかっただろうか。

殴りたい、と思った。せめて、この顔に拳をぶつけられれば、成

仏できるかもしれない。そんなことを考えている自分に気付いて、彼ははっとした。もしかしたら……自分はもう終わりにしたいのかもしれない。そのきっかけを求めているだけなのかもしれない、と漠然と思う。

「この人物に見覚えはあるかな？」

さすがに彼の棘のある態度に気付いているのだろう。若干不機嫌そうな表情を浮かべつつ、男は胸ポケットから今度は一枚の写真を取り出した。

男に協力はしたくなかった。とりあえず写真は見て、もし見覚えがあっても、嘘でたらめを言ってやろう。そう決めると、「どれどれ」なんて白々しく言って、写真を受け取った。

「なんだ、あなたの母親じゃないですか」

用意していたその言葉が、口から出ることはなかった。娼館の下っ端として働いている自分をたずねてきたのだ。きっと娼婦の誰かを捜しているんだろう、と思っていた。ここで働く娼婦たちは皆、わけありの女たち。危ない連中が捜しに来るのも日常茶飯事だ。

だが……

「……！」

そこに映っていたのは一人の男だった。かっちりとしたスーツに身を包み、こわばった表情を浮かべてこちらを見つめている。

写真を持つ手が震えた。息が荒くなる。心臓の鼓動が、一つ一つ、ゆっくりと重い音を響かせる。額から、背中から、いたるところから嫌な汗が噴きだした。

――おかえり。

鼓膜に取り憑いて消えることのない、あの声が蘇る。

脳裏に焼きついてはなれない、あの夜の光景が蘇る。

――俺はカイン。君を迎えに来たんだ。

思わず、写真を握りつぶしていた。

「カイン……」

彼は四年ぶりに口にした。忘れたことなどない、その名前。しまいこんでいた憎悪がマグマのように湧き上がる。その瞳には、狂気混じりの生気が戻っていた。

「こいつ、どこにいる？」

十七の少年とは思えない、低くおどろおどろしい声だった。

男は彼のそんな様子にほくそ笑み、「死んだよ」とあっけなく答える。

思ってもいなかった言葉に、彼は目をむいた。死んだ？　彼は絶句した。あいつが死んだ。喜ぶべきことなのかもしれない。だが、なぜか、悔しい気持ちに胸が締め付けられた。

男は、彼の手から皺だらけになった写真を引き抜き、「その件でこうして会いに来たわけだよ」といやらしく滑らかな口調で言う。

「横井サエコという少女を知っているかな？」

芋虫のような太い眉をくいっと上げて、男は訊ねてきた。ヨコイサエコなんて名前は聞いたことがない。「いや」と訝しげな表情で

答えると、男はわざとらしく「しまった、しまった」と額に手を当てた。

「そっちの名前じゃ、分からないか」と苦笑して、彼に射るような視線を向ける。「それじゃ……椎名鼎、といったら分かるかな？」

その瞬間、ざわっと全身が粟立つのを感じた。四年ぶりに聞いた名前だ。とことこと小さな歩幅でついてくる少女の姿が思い浮かんだ。懐かしさと恋しさが一気に襲いかかってきた。

「知っているよね？」男はくつくつと笑う。写真を丁寧に伸ばすと、彼の目の高さにあわせてそれを掲げた。「彼女は、彼……風間颯太（そうた）殺害の容疑で拘束されている」

目を見開き、息を呑んだ。耳を疑った。頭が真っ白になった。「え」と呆けた声が漏れる。

男は満足げに笑むと、写真を胸ポケットにしまった。「一緒に来てくれるかな？」と低い声で確認するように誘う。「君を待っている人がいるんだよ」

アベル　―４―（前書き）

残酷表現、気分を害される可能性のある描写が含まれています。苦手な方は、ご注意ください。（避けたい方は、＊＊＊の後からお読みください）

アベル　―４―

「逃げなさい！」唐突に、父の怒号が鼓膜につきささった。「早く、鼎を連れて……」

片腕で床をつっぱり身体を支え、もう一方の手で血がにじむ左下腹部を押さえ、父は必死に口を動かしていた。顔色がみるみるうちに青白く変わっていっているような気がした。おびただしい失血のせいだろう。その横で、母も苦しげな表情でこちらを見ている。血まみれになって床に這いつくばるその姿に、ぞっと寒気がした。恐ろしい、と思ってしまった。

だから、動けなかったのだろうか。前にも後ろにも、進むことも退くことも、出来なかった。

「ああ、そうだ」

父に銃口を向けてこちらを見つめていた少年（カイン）が、くすりと笑んだ。自分の些細なミスに気付いて、参ったな、と微笑む――そんな感じだった。

「弟とこうして会えたわけだから」と静かにつぶやき、視線をゆっくりと父親へ向ける。「もう協力は必要ないんだ」

カインは父親へつきつけている回転式拳銃（リボルバー）の撃鉄を起こした。その眼差しは、夕焼けに染まる海を眺めるように穏やかだった。

「なぜ」と父の震えた声が聞こえた。恨み言も命乞いもなかった。ただ、「なぜ」とつぶやいた。――それが、父の最期の言葉だった。

突然、空気が鋭い刃となって鼓膜に突き刺さり、父の後頭部から

小さな肉片とともに血が飛び出して床を染めた。
ぐらりと父の身体が揺れ、うめき声一つださずに、カインの足元へうつぶせに倒れる。
心臓が鷲掴みにされたようなショックが襲ってきた。思わず、バットが手から落ちる。それが床にぶつかる音が先か、鉄の塊が再び雄たけびをあげるのが先か。気付いたときには、母も血だまりに顔をうずめて動かなくなっていた。
静かなものだった。恐ろしいほど、静寂に包まれていた。
あたりに焼け焦げたような匂いが漂う。瞬きをするのも忘れて立ち尽くしていた。
おかしい、と思った。こんなものなのか、と思った。あまりに、あっけない。
とっくみあいも何もない。「やめろ！」と叫んでもみあったり、両親とカインの間に分け入って盾になって一騒動起こしたり――そんなものも何もなかった。いや、しなかったのか。
自分は何もしなかった。突っ立っていただけだ。
がくん、と膝から崩れ落ちた。不思議なことに、震えは止まっていた。
鮮血でできた池に顔をうずめる二つの躯。仲良く並んで横たわる、血に浸かった肉と骨の塊。その一つ、こちらに顔を向けて倒れている父だったもののうつろな目。それが恨めしそうにこちらを見ている気がした。何をしていたんだ、と責められている気がした。助けにきたんじゃないのか、と。恩を仇で返してどういうつもりだ、と。
胸焼けのようなものがして、何かがこみ上げてきた。胃の奥から食道をのぼって口まで逆流してきたそれを、こらえることはできなかった。口元に手を伸ばしたが、間に合わず、それを床にぶちまける。鼻をつく甘ったるい臭気に、さらに気分が悪くなって、再び吐いた。
胃がしめつけられる。まだしぼりだす気なのか、と思った。もうこれ以上、何も入っていないだろ。

胸に手をあて背中を丸める。口の中に残った粘り気のある液体を全て吐き出すように咳き込む。それでも気持ちが悪くて、息が出来ないほどに咳き込んだ。このまま血を吐くんじゃないかというほど咳き込んだ。

不意に、背中を誰かがさするのを感じた。

「大丈夫？」と滑らかな声が耳元でした。「君は避難させておくべきだったね」

いつのまに、というのが最初の感想だった。気配など感じなかった。気付けば隣で座り込み、自分の背をさすっていたのだ。

心臓の鼓動が早まる。さすられる背中に悪寒が走った。振り返ることもできない。

床に落ちているバットは手に届くところにある。すぐそこだ。手を伸ばしてそれを掴んで振り返り、カインの頭にぶち当てればいい。たったそれだけのこと。

なのに、なぜ……またしても、自分は動けない？

これが恐怖というものなのだろうか。呼吸は乱れ、穴という穴から汗が噴出し、酸素が充分に行き届かない脳は冷静な判断力を欠き、ある疑問だけを何度も繰り返している。――自分も殺されるのか、と。両親と同じように、物言わぬ物体として横たわるのか、と。

「ところで」と、カインが切り出したのは、死を受け入れかけたそのときだった。「ドアの向こうに隠れているのは誰？」

「！」

ぎくりとして目をむいた。

その瞬間、とても大事な存在を――今となっては、この世にたった一人となった肉親の存在を――思い出した。なぜ失念していたのかも理解できないほど、かけがえのない少女。この家で得た、妹と

呼ばれる存在。
階段で待っていろ、と言い含めたはずだったのに。まさかついて来てしまったのか。まさか全てを見ていたんじゃないだろうか。いや、そんなことより……この男に気付かれるなんて。緊張と更なる恐怖に、また吐き気をもよおした。しかし、すでに胃の中に吐き出すものもなく、それがさらに情けなくも感じた。
また、何もしないのか。怯えて縮こまっているつもりなのか。このまま、妹も見殺しにする気なのか。

「小さい女の子だったみたいだけど……」

カインの視線を感じた。こちらの様子を伺っているようだ。
ぐっと唇を引き締め、堪えるように黙り込む。しばらくそうして、彼がふっと笑ったのが視界の端で分かった。

「大丈夫だよ」なぜかそう言って、彼は立ち上がった。持っていた銃を腰に差しながらつぶやく。「彼女も連れてってあげるから」

どこからか、熱いものが湧いてくるのを感じた。やっと拳に力がはいった。目が覚めたような気分だった。
何も考えてはいなかった。とにかく、夢中で――彼はバットを勢いよく掴んだ。

＊　＊　＊

「野沢くん」

はっと気付くと、車は停まっていた。いつのまに、眠っていたのだろうか。嫌な夢を見ていた気がする。目をこすり、後部座席の窓から外の様子を伺う。どうやら、住宅街のようだ。それも、高所得

者層が住まう一帯だろう。街灯が照らす路地には人っ子一人見当たらない。娼婦や客引き、麻薬の売人で溢れる歌舞伎町とは正反対だ。

しかし、と眉をひそめる。てっきり、警察署に連れて行かれると思っていたのだが。

「野沢くん」と再び、男の声が聞こえてきた。苛立ちが感じられる。おそらく、何度もこうして名前を呼びかけていたのだろう。「着いたよ。降りなさい」

男は運転席から身体をひねってこちらを睨みつけていた。黒目が大きいせいか、全体的に目が小さいせいか、暗いせいなのか。男の目は黒く塗りつぶされているように見えた。骨格に皮だけはりつけたような顔が、男をさらに不気味にしている。宇宙人なんじゃないか、と想像して、彼は苦笑した。

「なに笑ってる。覚せい剤（シャブ）でもやってんのか」

男の声に蔑むような色はなかった。呆れたようではあったが、純粋に疑問に思ったような言い方だった。

男が車から降りるのを見届けて、彼も後部座席のドアを開けて路地に降り立つ。

目の前に佇んでいたのは、角砂糖のような白いキューブがいくつも重なったようなデザインの屋敷だった。趣向を凝らした豪華な住宅が立ち並ぶ中で特に異彩を放っている。はたして、このデザインの狙いが何なのか。頭を捻るべきなのか、感嘆の声を発するべきなのか。彼にはさっぱり分からなかった。

やがて、大人の背丈ほどの門がゆっくりと開いていく。かすかな耳鳴りを感じて顔を上げれば、二つの監視カメラがこちらを睨みつけていた。門の両脇から仲良くこちらを見下ろしているその様は、神社を守る狛犬のようだ。

「野沢くん」監視カメラを睨み返していると、また男が苛立ちをあらわに呼びかけてきた。いつのまにか、隣に並んでいた。「何をぼうっとしているんだ？　入りなさい」

彼は肩をすくめ、開いていく門にいざなわれるように屋敷へと向かった。

表面上は平静を装ってはいたが、内心、心の中は荒れ狂う海のようだった。妹に会えるかもしれないという期待と、そして……

――彼女は、彼……風間颯太（そうた）殺害の容疑で拘束されている。

自然と彼の表情は曇った。彼の頭の中では、彼女はあどけない笑顔を浮かべて遊ぶ幼い少女。いじめられて泣いて帰ってきた、弱虫な子供のままだ。そんな彼女が人を殺した？　まさか、と鼻で笑いたい。だが、風間颯太の顔写真を思い出すと、自信がなくなるのだ。妹はあの男を殺したのだ。そんな確信が絶望とともに襲ってくる。

それは不思議な気持ちだった。自分だって、『カイン』を見つけ出して仇を討ちたかったはずだ。つまり、殺したかったはずだ。その念願を妹が果たしてくれた。喜ぶべきじゃないのか。妹を誇りに思って微笑むべきじゃないのか。

なぜ、こんなにもやるせない思いに満ち満ちている。

「野沢直人さま。お待ちしておりました」

玄関に上がると、質素な服装の女が深々と頭を下げて迎えた。おそらく、家政婦だろう。こんなへりくだった態度をとられたのは初めてだ。落ち着かずに、眉を曇らせた。

顔を上げた女は、五十ほどに見受けられた。皺だらけの顔にやんわりと笑みを浮かべ、「さ、こちらへ」と男とともに彼を屋敷の二

階へと案内する。
　そして連れてこられたのは、二階の奥。父の書斎を思い出させるその部屋は、しかし、父のそれよりもずっと広い。彼が以前住んでいた家のリビングほどはあるだろう。正方形の部屋の一辺全てが窓になっていて、日中はさぞ眩しいのではないか、と思った。
　そして、部屋の奥にはマホガニー素材のデスク。これもやはり父が使っていたものとは比べ物にならないほど大きく立派なものだ。その端にちょこんと立っているのは、ステンドグラスのような色とりどりのデザインが施されたガラスを被ったデスクランプ。それが、デスクにひじをついてこちらを見ている男を、ぼんやりと照らしていた。

「君が……」と、その男は小さくつぶやいた。やがて、怪しい笑みが浮かび上がる。「ずいぶん、捜したんだよ」

　その言葉を合図にしたかのように、部屋の明かりがついた。デスクランプの幻想的な光は打ち消され、今ではついているのか消えているのかも分からない。

「ありがとう、行平（ゆきひら）さん。もう下がっていいよ」そう言って、デスクに座っていた男は大儀そうに腰を上げる。「ああ、蟹江（かにえ）くんは残ってくれ」
「はい」

　隣で骸骨が――いや、刑事が素直に応答した。

「それでは、失礼します」

　おっとりとした声が背後から聞こえて振り返ると、ここまで案内してくれた家政婦――どうやら、行平というらしい――がぺこりと

腰を折ったところだった。ふと視線を上げれば、照明のスイッチが目に入った。自動でついたように思われた部屋の明かりは、どうやら彼女がつけたようだ。

行平はこちらに一瞥をくれると、何も言わずに部屋を出て行った。どこか汚いものでも見るような、蔑む視線だった。

「自己紹介といこうか」窓際のソファに向かい合わせに座るなり、男は唐突にそう言い出した。「わたしは本間秀実。これでも、国会議員、なんてものをやっている」

いきなりのことにきょとんとしていると、本間秀実は「そう見えないかな」と苦い笑みを浮かべる。

「そのうち、大臣になるつもりでね」

コンビニのバイトを始めるんだ、とでも言わんばかりの軽い調子で本間は言った。フレームレス眼鏡の奥でこちらを見据える小さな瞳には、鋭い眼光が宿っている。冗談を言っているのではないようだ。

本間は五十代くらいだろうか。四角い輪郭の顔にはあちこちに深い皺が刻まれている。髪の色は不自然に黒く、おそらく、染めているのだろう。その証拠に、芋虫のような眉の中に白い毛がいくつか混じっている。

訝しげな表情を浮かべてじっと黙り込んでいると、本間は眉をくいっと上げ「ふむ」とため息にも似た意味ありげな声を漏らす。

「見た目に似合わず、慎重のようだ。安心したよ」

それはやけに見下したような言い方だった。

苛立ちがつのっていく。こちらは妹のことが気になって仕方がな

いというのに、本間といいう男はなかなか本題に入らない。

「国会議員が俺に何の用だよ？」と、やっと彼は口を開いた。「俺に話があるんだろ？　さっさとしろよ」

その反抗的な口調に、本間は顔色を悪くすることは無かった。逆に嬉しそうに微笑むと、「蟹江くん」と刑事に視線でなにやら合図した。

隣に座る蟹江は何も言わずに手を胸ポケットに入れると、シルバーの機械を取り出した。小さなリモコンにも思える長方形のそれは、音声レコーダーのようだった。

会話を録音するつもりか。すぐさま本間を睨みつけ、「どういうつもりだ？」と怒鳴りかけた。が、それは思わぬ声に遮られる。

『あたしは全部、見てたわ』

隣から聞こえてきたその声に、彼の心臓が大きく波打った。

『四年前、あの男が父と母を撃ち殺すところ。あの夜、扉の隙間から……全部……一部始終、見てた』

舌足らずな口調は抜けきって、声も心なしか少し低くなったような気もしたが、それでも分かる。この声は――

『あの男よ。間違いない。あの男が犯人。あの男がカイン。風間颯太（そうた）だなんて偽名に決まってる。教育実習も全部、嘘なのよ。あいつはあたしを迎えに来たのよ。四年前、殺し損ねたあたしを迎えに来たの。なんで……なんで、信じてくれないのよ！？』

心臓の鼓動が早くなる。久しく聞いていなかったその声に、懐か

しさと愛おしさがこみ上げてきたのもつかの間、彼の表情は曇っていった。これは本当に彼女なのだろうか、と不安と恐怖が襲いかかってきた。まるで別人のようだ。こんな風に声を荒らげるような子ではなかったはずだ。緊張と焦燥感に似たもの、それらが混じりあって胸の中に立ちこめた。

『あんたたちは四年前もそうだった。兄さんのこと、全然信じなかった。兄さんは本当のことを言ってたのに。あんたたちは信じてくれなかった。助けてくれなかった！　あんたたちが悪いのよ！　あんたたちが――』

そこで声はぶつりと切れた。蟹江が停止ボタンを押したのだろう。声の様子から、どんどん彼女の感情が高ぶっていったことが分かる。おそらく、この後、彼女は暴れだしたんじゃないだろうか。そんなことを容易に想像できた。

「一昨日、だったかな」という本間の落ち着いた声が彼を現実に引き戻す。すぐさま、「一昨日です」と蟹江が答えた。

「この少女……横井サエコは、教育実習に来た風間颯太を彼のマンションで刺殺。自ら警察に『カインを捕まえた』と電話を入れて、警察がマンションに来るまで大人しく待っていたそうだ。もちろん、そのまま拘束。しかし、取調べを始めてみると、『正当防衛だ』と言い出した。彼が自分を『迎えに来た』んだと思った。殺されると思った。だから、殺したんだ、とそう主張した。もちろん、刑事は誰もそんな話を信じようとはしなかった。風間くんは実に優秀な学生でね。――ああ、もちろん、資料の上で、だけど」

本間が話を区切ったことにも気付かなかった。呆然としていると、「聞いてるかね？」と問いかけられ、そこで我に返った。

気付かぬうちに俯いていたようだ。顔を上げると、食い入るように本間がこちらを見つめていた。目が合って満足したように口角を上げ、「この証言は」と話を続ける。

「精神的な問題があるのではないか……つまり、彼女は狂っているんじゃないか、と刑事が漏らした直後のものだよ。それまでしおらしく泣きながら訴えていたのが一変し、怒鳴りだした。その変わりようといったら……。

だから、余計に刑事たちからの信用を失ってしまってね。今では何を言っても相手にされてないようだよ」

手が震えだした。堪えるように膝をつかむ。息が上がっていた。本間はただじっとこちらを凝視している。自分が必死に自制している様子を眺めて楽しんでいるようにも見えた。だが……

「わたしは違うよ」と本間は静かにつぶやいた。「わたしは彼女の話にとても興味がある」

思わぬ言葉に、彼は「え」とすっとんきょうな声を漏らす。

すると本間は頬をゆるめ、ソファの背もたれによりかかった。

「蟹江くんから彼女の話を聞いて、すぐに調べてもらったんだよ。四年前の事件とやらを」

そこで急に言葉を止め、本間は苦しげな表情を浮かべた。今まで見せたことのない哀れみに満ちた眼差しでこちらを見つめ、ゆっくりと口を開く。

「つらかったね、望くん」

心臓に激痛が走った。呼吸が止まった。それは、四年ぶりに聞く名前だった。自分の名前。本当の両親がくれた、自分の真の名前だ。

「君の証言の記録もちゃんと残っていてね。聞かせてもらったよ」重々しい口調で言って、本間は首を横に振る。「痛々しかったね、実に。必死に君が真実を訴えているというのに……なぜ、誰も信じようとはしないのか。聞いていて胸がえぐられるようだった」

初めての、同情の言葉だった。望は唇を噛み締め、視線を落とす。思い出されるのは、四年前の事情聴取。両親を殺したのは、見たこともない『カイン』と名乗る十代の少年で、両親の頭を撃ち抜く直前、自分に『迎えに来た』と微笑んだ。妙な話だと自分でも思った。だが、事実なのだから仕方ない。

『迎えに来た』と言ったなら、何か心当たりはあるだろう。そう刑事に尋ねられ、こう答えた。自分は闇オークションで売られたクローンだから、犯人はそこの関係者かもしれない、と。すると、刑事たちは――笑いだした。クローンはすでに過去のもの。廃絶された今、製造されいるわけがない。しかも、闇オークションときた。子供の想像力は素晴らしいものだが、迷惑だ。よくも両親が殺されて、そんな嘘で大人をからかえるな。そんなことを、刑事たちは口々につぶやいた。

本当なんだ、と反論した。その証拠に、身体は改造されている。信じないなら、屋上から飛び降りてみせる。脚はきっと折れない。ぴょんぴょんと跳ね回れる。そうわめいて立ち上がった自分を、刑事たちは取り押さえ――誰かが『頭がおかしいんだろう』とつぶやいたのが聞こえた。

「あんたは信じてくれるのか、俺の……俺たちの話」

疲れきった声で訊ねると、本間は満足げに「もちろんだ」と頷い

た。「クローンは今も製造されているし、闇オークションもある。そして、『カイン』も存在している」

膝に置いた手に力が入り、腕が震えた。じんわりと胸が熱くなるのを感じた。目の奥からにじんできたものを隠すように、うつむいた。四年間溜めこんできたものがあふれてきそうだった。やっと、救われる気がした。この瞬間を、ずっと待っていたような気がした。

そんな感情の高ぶりに気付かれているのだろう。本間も蟹江もしばらく何も言わなかった。

ややあってから、「妹を……」と望は苦しげな声をぽつりと漏らした。深く息を吸って心を落ち着かせると、顔を上げて本間を見据える。

「妹を助けてくれ。正当防衛だ、と証明してくれ」

脅していると取られてもおかしくはない、強い語調だった。

本間は蟹江をちらりと一瞥してから、眉尻を下げて首を横に振った。「残念だが」と重々しい口調で切り出す。「横井サエコ……いや、君の妹が殺した風間颯太には、四年前の十二月二十四日、犯行時刻……ちゃんとしたアリバイがある。当時付き合っていた女性と、トーキョー湾のクルーズにでかけていた。船内の防犯カメラにもしっかり映っているよ。

つまり、彼は君たち兄妹の親の仇じゃない」

思わず、望は立ち上がっていた。ガタン、とローデスクに脚があたったが、痛みも何も感じなかった。

「そんな……わけが」隣で気配を消して座っていた蟹江を見下ろした。いや、その視線は、正しくは彼の胸ポケットへと――その奥に隠れている写真へと向けられている。「あの写真……間違いない。

あの男なんだ！　妹は間違ってない。他人の空似なんかじゃない！
　あの男なんだよ！」
「落ち着きなさい」呆れたように本間はため息をつき、望を見上げる。「君を信じている、そう言っただろう」
　心拍数が、これでもかというほど上がっていた。すっかり頭に血がのぼっていた。望は本間に振り返り、飛びかからん勢いで怒声をあげる。
「それじゃあ――」
「その時間に同じ人間が二人いた、ということだろう」
「は……」
　怒りと興奮で暴走しかけていた望の動きが止まった。そんなこと有り得るわけがない、と言おうとして、できなかった。何かがひっかかった。それを言ってしまえば、とてつもなく大事なものを否定するような気がした。
「本当に、君たち兄妹には感謝するよ。お陰でやっと謎が解けたんだ」
　本間は笑みを抑えきれないようで、怪しげな含み笑いをこぼしていた。それは、先刻まで見せていた優しげな表情が全て偽りである、と望に確信させるほど……『人間らしい』ものだった。
「九年前から現れたあのガキどもが一体何者なのか……ずっと分からなかった。なぜ、邪魔をするのか。目的は何なのか。ただの『正義の味方』気取りなのか。誰かに雇われているのか。雇われているなら、雇っているのは誰だ。私の成功を妬む奴の仕業か。同期の斉藤あたりがあやしいと思っていた。だが、どうもしっくりこなかっ

た。――当然だな」

本間はそこで一息置いて、望を見上げた。うっとりと絵画でも眺めるような眼差しで。

「なるほど。彼らは『迎え』に来ていただけなんだ。仲間を」

「仲間……？」

本間は咳払いをし、背もたれにうずめていた身体を起こす。ぐっと両手の指を絡ませると、真剣な面持ちで睨みつけるような視線を望に浴びせる。

「どうだね。取引をしようじゃないか」

アベル　―４―（後書き）

すみません、あと一話、と宣言していたのですが、思いのほか長くなってしまったので……あと一話です。今度こそ、おそらく……

＊Ｗｅｂ拍手へのお返事は、活動報告でさせていただいております♪

アベル　―５―（前書き）

すみません！　とんでもなく長くなってしまいました。

アベル　―５―

「わたしも『カイン』と名乗る連中に借りがあってね」本間は含み笑いを混じらせてそうつぶやいた。「とてもとても、大きな借りだ」

いやらしいほどにゆっくりと強調させるような言い方だった。

望は眉を曇らせた。借り？　なぜ、国会議員のこの男が？　どんな借りだ？　自分と同じく、誰かを殺されたのだろうか。いや、それよりも……

「連中？」

「おや、そうか。知らないか」仰々しく、本間は驚いたような声で言った。自慢げに微笑を浮かべると、試すような視線を向けてくる。

「カインは一人じゃない。何人もいる」

「何人も……」幼さの残る顔に似つかわしくない皺が眉間に刻まれる。望は目を薄め、首を捻った。「どういう……意味だ？　カインはあの男のことじゃないのか」

望の頭に浮かぶのは、四年前に突如として現れ、両親を殺し、彼の人生を狂わせた少年だ。『カイン』と名乗った一人の少年。あのとき目にした彼の笑みは記憶の中で薄れることはない。四年経った今でも、はっきりと思い出せる。あの、穏やかな笑み。

心臓が騒ぎ出し、身体の中が熱くなった。くすぶっていた憎悪の炎が燃え上がるのを感じた。

「そうだな」本間は食材でも吟味するかのように唸ってから、「組織名……とでも考えたほうがいいのかもしれない。九年ほど前から、ぽつりぽつりと現れたんだよ。『カイン』と名乗る子供たちがね。最初は暗号かなにかかと思ったが……」

本間の口ぶりから、まだ彼が『カイン』についてそこまで把握しているわけではないことが分かった。想像の域を出ない――といった曖昧さが感じられる。はっきりしていることは、過去に『カイン』と名乗った子供たちがあの男のほかにもいる、ということくらいなのだろう。

「組織名……」

もしそうなら、両親の殺害は組織ぐるみの犯行、ということになる。だが、やはり腑に落ちない。なぜだ？　なぜ、両親は狙われた？　そして……なぜ、あの男は自分を殺そうとしなかった？

そう。あの夜、自分は逃げ出した。いや、逃げ出せた、のだ。

無我夢中であの男の頭をバットで殴り、すきをついて走り出した。振り返りもせずに部屋から出て、茫然自失で座りこんでいた鼎を抱えて家から飛び出した。後ろから苦しげな声で「待つんだ」と叫ぶのが聞こえた。だから、彼は気を失ってはいなかったのだろう。なのに、彼は何もしなかったのだ。背中を向けて走っていた自分に、銃弾をあびせることはなかった。ただ必死に、「待て」と叫ぶだけだった。

それが、不思議でならないのだ。

「盗賊団、というのがいいのかもしれない」

突然、本間がそうこぼした。

「盗賊団？」

「そうだ」と、本間は悦に入った笑みを浮かべて頷く。どうやら、盗賊団、という自分の説明が思いのほかしっくりきたようだ。

しかし、こちらとしては意味不明だ。望は苛立ったように顔をし

かめて、「何を盗むって言うんだよ？」と訊ねた。盗賊団、というからには盗みをはたらく連中、ということなのだろう。果たして、四年前の『カイン』は何かを盗んでいっただろうか。いや……『カイン』が奪ったものといえば、両親の命だけだ。

「命、とか言うなよ」と、望は鼻で笑って忠告した。

「あいにく、わたしはそういうセンスは持ち合わせていなくてね」皮肉そうに答え、本間は声の調子を変えて付け加える。「子供だよ。彼らが盗むもの……それは、子供だ」

思わず、ぎょっと目をむいた。

その反応に本間は満足げに笑み、淡々と語りだす。「『カイン』と名乗る連中は人身売買の被害者を助け出している。あるときは闇オークションに現れ、またあるときは買い取った人間の前に現れ、子どもたちを連れ去るんだ。つまり……四年前、君のもとに現れた『カイン』は盗みにきたんだよ――君をね」

いきなり冷水でもぶっかけられたような心境だった。

じわじわと得体の知れない感情が沸き起こってきた。もやもやとしたそれを言い表すことは難しい。言うなれば、違和感。何かが釈然としない。曇った窓から外を眺めているような、苛立ちにも似ていた。焦燥感さえ感じた。

望は力なくソファに座り込み、「人身売買の被害者……」とつぶやいた。確かに、そうだ。自分はそれに当てはまる。そもそも、両親が自分を買い取ったのも、裏で当たり前のように行われている『人身売買』というものに心を痛めたからだ。自分を救うために両親は自分を競り落とした。金しかない自分には子どもたちを買い取ることしかできない、と寂しそうにつぶやいていた父の背中が思い出された。

まさか、カインはそんな自分を助けにきたというのか。人身売買

の被害者だと思って。

「そして、どうやら……」と、本間が苦々しい声を漏らした。「彼らは連れ去ったクローンを『カイン』にしているようだな。ドラキュラ……いや、ゾンビか？」

独り言のような本間の言葉に、ぎくりと望の肩が震えた。

「クローン……」

そうつぶやいて、やっと理解する。切れ長の目が見開かれた。

頭に浮かんだのは、写真の男。風間颯太（そうた）という男。

――その時間に同じ人間が二人いた、ということだろう。

先刻の本間の言葉が蘇る。今なら、理解できる。その言葉が意図すること。だからこそ、愕然としてしまった。

風間颯太はカインじゃない。全く同じ姿をした別人。本間が正当防衛を証明できるはずはなかったのだ。正当防衛などではないのだから。妹が殺したのは無実の男なのだから。

「ようやく、全部飲み込めたみたいだね」一仕事でも終えたかのように鼻から息を噴出し、本間はぎらりと小さな瞳を光らせる。「さて、そこで取引だよ、望くん」

取引……嫌な予感がした。一気に部屋の温度が下がったような気がした。冷房が強くなったわけではないだろう。この感覚を彼は以前も味わったことがある。

年端もいかない少女を、ある部屋に連れて行ったときだ。自分よりも年下のあどけない少女だった。彼女は何も知らなかった。その

部屋で、見知らぬ男が彼女を待っていること。これから、その部屋で自分が何をさせられるのか。彼女は、娼婦として売られたことを知らなかったのだ。案内した自分に、何も知らずに「ありがとう」と戸惑いがちに微笑んだ。

あのときと、同じ感覚だ。なぜだろう。なぜか、悟った。自分は罪を犯すのだ、と。この、野心を瞳の奥に閉じ込めた男――本間秀実という男のもとで。

「残念ながら、君の両親を殺した犯人はまだどこかにいる。捕まえたいとは思わないかね？　罪を償わせたいとは思わないか？　君が望むかたちで……」含みを持たせた言い方だった。本間は、分かってるよな、と言いたげに、片方の眉をくいっと上げる。そして望の返答も待たずに続ける。「わたしなら、君の望みを叶えてやれる。欲しいものはなんでも与えてやる。もし、君がわたしのもとで働いてくれるのなら」

「……」

望み――その言葉を反芻する。そういえば、自分の名前――望――は、そういう意味でつけられたものだった。母の名が環（たまえ）、妹が鼎（かなえ）だから、とつけられた名前だ。三人そろえば、「望み、叶え給え」になるんだ、と父が嬉しそうに言っていたのを覚えている。本当は女の子を買い取って、『望（ノゾミ）』とつけるつもりだったに違いない。なんで男の自分を競り落としたのか、と訊ねたら、父は「お前が男だったからだ」と答えた。答えになっていない、と文句を言えば、「卵が先か、鶏が先か……てやつだな」と笑っていた。

「妹……鼎が欲しい」気付けば、そうつぶやいていた。覚悟を瞳に宿らせて、望みを叶えると言い出した男を睨みつける。「それから、『椎名望』を返してほしい」

本間はしばらく押し黙ってから、「いいだろう」とほくそ笑んだ。
「叶えてやろうじゃないか」
無茶を言ったつもりだったのに、あっさりと承諾した。望は柳眉を寄せた。騙されているんじゃないか、と心配にさえなった。『椎名望』という名前はまだしも、殺人罪で拘束されている妹をどうやって自分に渡すというのか。欲しい、とは言ったものの、自分でもそれがどういった意味を指しているのか分かっていなかった。会いたい、という意味なのかもしれないし、兄妹に戻りたい、という意味なのかもしれなかった。
果たして、本間はどう受け取ったのか。もしかしたら、単に『横井サエコ』から『椎名鼎』に名前を戻せばいいだけだと思っているのかもしれない。
本間はちらりと蟹江に目をやると、「一週間でできるね？」と確認する。隣で蟹江が立ち上がる気配がした。
「では、さっそく」
それだけ言って、蟹江は一礼すると去って行った。どうやら、望を家まで送るつもりはないらしい。
「というわけだ」と、蟹江が部屋から出るのを見送って、本間が急に切り出した。さっきまでの重い雰囲気はなく、すがすがしくも思える明るい口調だ。「一週間、待ってくれるかな」
望は躊躇いがちに頷いた。いや、それしかできないだろう。
「ああ、そうそう」と本間が思い出したような声をあげたのは、望が部屋を出ようとしたときだった。
扉に手をかけたまま振り返ると、本間の睨みつけるような鋭い眼

差しがあった。厳しい顔つきに、口元だけ笑みを浮かべている。

「わたしのもとで働くなら……」言って、人差し指の先を望の頭に向けた。「髪は黒に戻しなさい。地毛じゃないんだろう？」

まるで父親のような口ぶりに、望はさすがに苛立った。望はへらっと笑うと肩を竦め、本間の頭に視線をやる。

「じゃ、貸してくれよ。白髪染め」

すると、本間はしたり顔を浮かべて、今度は望の口元を指差す。

「その言葉遣いも直しなさい。命取りだぞ、この世界では」

顔を赤くして怒り出すかと思いきや、そんなことを言い出した。望は「は？」と眉根を寄せた。

「人間なんてものは、見た目と言動で決まる。逆に言えば、それだけでいくらでも自分を偽れるということだ。君の過去だって、薄っぺらい紙一枚で終わる。人の価値なんてそんなものだよ」

「何が言いたいんだよ？」

「この世界で生き残るコツを教えてあげよう」馬鹿にしたように鼻で笑って、本間は目を眇めた。「誰に頭を下げ、誰を見下せばいいのか。それをよく見極めなさい」

望は何も言葉が返せなかった。唖然としていると、本間は「そのうち分かる」とにこやかに微笑んだ。

「車を出させよう。門の前で待っていなさい」

＊　＊　＊

迎えに来たのは、一週間前と同じ車、同じ運転手だった。木造の趣深いアパートから出てきた望を見るなり、運転手は頭を深々と下げた。

「お久しぶりです。お変わりないですね。特に、その髪」と定年間近の運転手は苦笑した。その視線は望の頭へと向けられている。さらりとした長めの茶髪だ。

望は気まずそうに首を竦め、「よく似合ってるよ、おじさんのほうは」と人懐っこく微笑んだ。

「そうですかな」と照れたように運転手は頭に手をのせた。薄い黒髪だ。一週間前まではまばらに白髪が混じっていたのだが、今では満遍なく黒く染まっている。

「望くんが薦めてくれた白髪染めを使ったんですよ。助かりました」

一週間前。本間邸からの帰路、望は本間に「髪を染めろ」と言われたことを運転手に漏らしたのだ。それから、本間の白髪に話題は移り、やがて運転手のそれへと変わった。

最終的に望がオススメの白髪染めを紹介し、また来週、と別れたのだった。

「しかし、よく白髪染めのことなんて……」

車に乗り込みながら、運転手はそうぼやいた。すると、後部座席でシートベルトを締めていた望はくつくつと笑う。

「年上の娼婦と付き合いがあるとね、いろいろ詳しくなるんだよ」
「は……娼婦？」

ぎょっとする運転手の反応に、望はいたずらっぽく笑んだ。バックミラー越しに目があうやいなや、運転手はあわてて目を逸らす。
「それじゃ、出発します」と落ち着かない様子で車を発進させる。その後、会話はなかった。どうやら、本間秀実は娼婦遊びはしていないらしい、と望は結論付けた。
本間邸に到着し、車を降りるときも、運転手は目を合わせなかった。よほど、「娼婦」がインパクトが強かったらしい。
望はガレージへと向かう車を見送りつつ、喉もとをかいた。娼婦が世間一般でいいイメージがないのは分かっていた。が、まさかここまでとは。彼にとっては娼婦たちは今や姉のような存在。かつて持っていたはずの悪いイメージも、すっかり払拭されていたのだ。その辺でへらへらしている女よりもずっとたくましく美しく感じるようになっていた。

――人間なんてものは、見た目と言動で決まる。

一週間前に本間に言われた言葉がよぎった。そうなのかもしれない、とぼんやりと思う。娼婦にどんな事情があるかなんて、誰も考慮しようとは思わないのだろう。事実、自分がなぜ娼婦と付き合いがあるのか、運転手は気になる素振りも見せなかった。気を遣ったわけではないことは、態度からもあきらかだ。望は表情を曇らせる。やるせない気分になった。視界の中でゆらゆらと風に揺れる茶色い髪をつまんでため息を漏らす。
屋敷にはいると、一週間前と同じく、行平という家政婦が出迎えた。
「お待ちしておりました」と頭を下げて、微妙な間を空けてから、

「椎名望さま」

外国人か。そう言いたくなるような、おかしな発音だった。なんで先週と名前が違うのよ、と言いたげな雰囲気が漂っている。顔を上げた行平の表情は、案の定、怪訝そうだった。

先週と違い、今度は一階のリビングへと案内され、そこで待つように指示された。二十畳ほどのリビングは、奥のダイニングとひとつなぎになっている。さらに向こうのキッチンまでしっかり見える。その間にドアや壁はない。段差もないから、これはバリアフリーの一貫なのか、と望は小首を傾げた。

待っていろ、と言われても、確かにリビングのソファは座り心地が良さそうで、そそられるが……ゆっくりくつろげるほど、気持ちに余裕はない。

あの本間という男がどう自分の望みを叶えたのか。想像もつかない。いや、それよりも……本当に、叶えてくれたのだろうか。

果たして、妹に会えるのだろうか。それを考えると、期待と不安で狂いそうだ。留置所だろうが、刑務所だろうが、構わない。せめて、一目会いたい。たった一人だろうが、家族がいる事実、それがこの四年間、彼を支えてくれていたのだから。

「久しぶりだね」

いきなり、背後からのんびりとした声が聞こえ、望ははっとして振り返った。

リビングに入ってきたのは、フレームレス眼鏡をかけた初老の男、本間秀実だ。そのぎらりと輝く眼光が自分の頭に――茶色のままの髪に――向けられているのに気付いて、望はそ知らぬ顔でそっぽを向いた。「まあ、いい」と鼻で笑うのが聞こえた。

「正当防衛にしたよ」ソファへと歩み寄りながら、本間はそうつぶ

やいた。「今朝、蟹江が迎えに行った。もうすぐ、帰ってくるだろう」

本間がソファに腰を下ろす。望はぼうっと呆けていた。本間が何を言っているのか理解できていなかった。

「は？」

やっとのことで出てきた声は、なんともまぬけだった。

本間はそんな望を訝しげに見つめてきた。「君がわたしに頼んだんだろう。忘れたのかね」と不服そうに言って、眼鏡をくいっと上げた。

「『椎名』の戸籍も新しく創っておいたよ。妹くんもそこに入れておいた。それでよかったかな？」

話に全くついていけていなかった。「ちょっと待てよ」と、望は必死に頭の中を整理する。動揺もあらわに、「正当……防衛？」とつぶやいた。

そう、この男はさっき「正当防衛にした」と口にした。そして、蟹江が妹を迎えに行っている、と。

「どういうことだ？　だって、カナは……」

正当防衛ではない。そう言おうとした望を、本間がすかさず遮った。

「正当防衛を証明することはできない。でも……正当防衛にすることはできるんだよ」

望は硬直した。本間の意図することを、理解したくはなかった。
厚い雲が太陽をさえぎったのだろうか。窓から差し込んでいた日の光が一気に陰った。
望はごくりと生唾を飲み込んで、本間に射るような視線を向ける。
「……でっちあげた、てことか？」
そう訊ねると、「好きじゃない言い方だが」と前置きして、本間は「そういうことだ」と頷いた。
「事件の前、彼女はさんざん周りに『殺される』と訴えていた。おかげで、助かったよ。四年前の事件との関連性を創るのはさすがにできなかったが……とりあえず、横井サエコは教育実習生に暴行を受け、身を守るために包丁を手に取った、と。その後、精神的ショックで失踪、今もまだ見つからず……といったところだったかな。まあ、詳しい筋書きは蟹江くんに確認しておきなさい」
望は唖然とした。確かに、妹が欲しい、とは言ったが……
「望くん」と低い声が聞こえて、望はびくんと身体を震わせた。我に返ると、本間が恐ろしいほど冷静にこちらをじっと見据えていた。ややあって、口元がゆるみ、怪しげな笑みが浮かび上がる。「この世界は、君が思っているよりもずっと素晴らしいんだよ」
全身が粟立った。この男は、いったい何者なんだ？　その疑問をとうとう無視できないところまできてしまったことを悟った。だが、聞くのが恐ろしくてたまらない。勘のいい彼は、その答えにうすうす気付きつつあったのだ。そして、もう後戻りはできないことも……。
そのときだった。不意に、背後であわただしく扉が開く音がして

――

「お兄ちゃん！」

背中から心臓を一突きされたようだった。心臓が大きく跳んで、一瞬止まった気がした。

「お兄ちゃん」

再び聞こえた。高い天井を突き抜けていくような、高らかな声。泣いているのだろうか、震えているその声を、懐かしいと思った。記憶がぐるぐると引き戻されていく。自分のいる空間だけ時をさかのぼっているように思えた。

素足がフローリングにすれる音が近づいてくる。

振り返ることが恐ろしかった。幻聴なんじゃないか、と疑った。

四年だ。四年、待ち焦がれていたんだ。期待が膨らんで当然だ。怖気づいて当然だ。

すぐ後ろで、フローリングの床がみしっと鳴いた。鼻をすする音が聞こえる。

深く息を吸い、ゆっくりと振り返る。景色が流れ、やがて――

「カナ……」

頬がゆるんだ。

確かに、立っていたのだ。簡素なワンピースを着た少女。相変わらずの白い肌。夏の日差しの中に立っていては溶けてしまうんじゃないか、と心配になるほどの、雪を思わせる美しい肌。その頬はほんのりと赤らんでいる。灰色混じりの翠の瞳からは、次から次へと雫が落ちている。

開け放たれた窓から一筋の風が吹きこんで、細い髪をふわりと揺

らした。顔にかかった髪を慣れた手つきでよけて、耳にかける。その仕草は、すっかり女性らしくなっていた。背もだいぶ伸びた。だが、あの太い眉はそのままだ。よく学校でからかわれて、泣いて帰ってきたな、と思い出す。本人はそのせいで気に入らないようだったが、彼にとっては幼い彼女の名残――愛しいくらいだ。しかし、相変わらず華奢な体つきは、心配だ。もう少し、肉付きがよくなってもいい歳なのだが。

そうだ。いくつになった？　十五か。きっと、子ども扱いをすれば怒る年頃だろう。

そんなことを考えていると、手を伸ばしてその頭を撫でるのも、どうも躊躇われる。なんと声をかければいいのか。硬直したままじっと見つめていると、やがて、少女はくすりと照れたように笑んだ。

「チャラ男になってる」

こちらを指差しそう言って、少女はくすくす笑った。「チョー似合ってるし」と付け加えて、目じりの涙をぬぐう。

どっと力が抜けた。けたけた笑う様子は、四年前と変わっていない。ああ、鼎だ、と思った。

薄い唇に笑みが浮かぶ。安堵のため息を漏らし、望は鼎の頭に手を伸ばした。

「お前もギャルじゃないか。何が『チョー』だ」

言って、ぐしゃぐしゃに髪をかき乱すように撫でた。「ああっ、チョーむかつくぅ」と鼎は嬉しそうに憎まれ口を叩く。

そんなはしゃぐ鼎を愛しそうに見つめ、今度はその細い髪の感触を味わうように指に絡ませて、優しく撫でた。すると鼎は俯いて、いきなり望に抱きついた。薄いシャツに顔をうずめ、「ごめんなさい」とくぐもった声を漏らす。「あたし、間違っちゃった……」

望は目を見開き、そして痛みをこらえるように顔をしかめた。喉に詰まった息をゆっくりと吐き出すと、震える華奢な肩をさする。

「無事でよかったよ」

それしか、言えなかった。

望は鼎を抱きしめたまま、ふと顔を上げた。扉の前でスーツを着た骸骨のような男がこちらを見守っている。怪しげな微笑を浮かべてじっと立っているその様は、まるで死神のようだ。蟹江、とかいう刑事。おそらく、『正当防衛』をでっちあげるのに右往左往した男。

再び、しがみつくように抱きついている妹を見下ろす。

認めたくはないが、彼女は殺人罪の被疑者……いや、犯人だ。『正当防衛』をでっちあげて、釈放するなんて、どうやったというのだ。魔法を目の当たりにしたような気分だ。

「同じ顔だったんだ」

ふと、ぎゅっと背中にまわされた手に力がはいるのを感じた。望は何も言わずに、水玉のワンピースの上から彼女の背中をさすってやる。

ああ、そうだ。彼女は有罪だ。人殺しだ。罰せられるべき人間だ。

しかし――かつて両親を殺した犯人と同じ顔の人間が現れたら、怯えるに決まっている。殺される、と不安になるのは当然だ。そして、何より……警察が助けてくれないことを彼女は知っていた。誰も頼れない。だから、自分で身を守ろうとしただけだ。だから、極端な手段に出てしまっただけだ。

自分だけは理解してやろうと思った。赦してやろう、と思った。その恐怖を、彼女の気持ちを理解してやれるのは自分だけなのだから。

「だからね」と、か細い声が聞こえてきた。「少し、すっきりしたの」
「！」
望は思わぬ言葉に目をむいた。聞き間違いだと思って、「え？」と聞き返す。すると、鼎はおもむろに望から体を離して、少しだけ涙が残る瞳でこちらを見上げてきた。
「別人だって分かってちょっと残念だったけど……でも、同じ顔だったから、すっとしたの」
「……」
「苦しんでるところを見られたから」
穏やかな表情だった。無実の男を殺した人間が見せる表情とは思えなかった。罪に怯える様子はなかった。
ぞっと背筋に悪寒が走った。その表情に、見覚えがあったからだ。四年前の、イブの夜。同じような表情を浮かべていた男がいた。
「ねえ、お兄ちゃん」言って、鼎は望の手を取り、指を絡めた。「家に、帰ろう？」
寂しげで、懇願するような声だった。
望は果てしない喪失感と闘いながらも、鼎の小さな手を握り返す。まだ彼女が幼かったころ、無垢だったころ、そうしてやったように。
そして、「帰ろう」と微笑んだ。本当はもうあそこに帰ることなどできないことを、身が引き裂かれるほどに実感しながら。

＊　＊　＊

「ここで暮らしなさい」玄関先で、本間は望に鍵を差し出した。「佐藤さんに……ああ、君を迎えに行った運転手だよ。彼に住所は教えておいた。車に乗れば連れて行ってくれる」

望は何も言わずに鍵を受け取った。本間は眉をひそめ、望の顔色を伺う。

「どうした？　せっかく、妹と暮らせるのに……嬉しそうじゃないな。これが君の望みだったんだろう？」

望は何も言わずに門のほうへと視線を向ける。その先で、ワンピースを着た一人の少女がくるくると踊ってはしゃいでいる。

諦めたような表情でしばらくその様子を眺め、「カインの首」と望はつぶやいた。消え入りそうな小さな声だった。本間は「なんだって？」と聞き返す。

望は顔を向きなおすと、親の仇でも見るような鋭い視線を本間にあびせ、迷いのないはっきりとした口調で言った。

「四年前の……あのカインの首がほしい」

本間は一瞬ぽかんとしたが、弾かれたように笑い声をあげた。「まるで、サロメみたいだな」とひとりごちてから、「もちろん、そのつもりだよ」と力強く答えた。

「さて……そうだな」咳払いをしてから、本間は天を振り仰いで切り出した。「手始めに……君にある噂を流して欲しい」

「ある噂……？」

いきなり、噂とはどういうことか。カインと関係あることなのか。望が目を瞬かせていると、本間は内緒話でもするかのように低い声

で言ってきた。

「『カイン』という殺し屋がいる、と……それだけでいい。あとは、ほら……若者の君に任せるよ。皆が興味を持つように、好きに脚色してくれていい」

「なんで、そんなこと……」

本間はウインクでもしそうな具合で片目を薄め、「真実が広まるほうが都合が悪いからだよ」と囁いた。「わたしにとってはね」と言い添えると、唇の片端を上げた。

真実――本間が漏らしたその単語が頭に繰り返される。

本間の言う真実とは何か。考えるまでもない。カインが人身売買の被害者を助け出していることだ。そして……この男は、それが知れたらまずい立場にいる。

――わたしも『カイン』と名乗る連中に借りがあってね。とてもとても、大きな借りだ。

頭痛のようなものがした。自分の予想が――違っていてほしい、とずっと願っていた嫌な予感が――当たっていたことを確信した。

やっぱ、そういうことか、と心の中で吐き捨てるようにつぶやく。

「ああ、そうだ。ところで……」本間はわざとらしく思いだしたように口火をきった。「鼎ちゃんなんだが……心のケアが必要だろう？　カウンセリングを受けさせるべきじゃないかな。どうかね？　わたしの知り合いなら、事情も分かってくれる。紹介できるよ。わたしの名前をだせば、金もとらんだろう」

望はぐっと拳を握り締めた。右手の中の鍵が食い込む。本間の顔

をまっすぐに見ることはできなかった。浅く息を吸い、

「お願い……します」搾り出したような声で言う。本間の顔はもう見えない。見えるのは、格子状のタイルだった。そして、自分の薄汚れた靴。「本間サン」

そう付け加え、かたく瞼を閉じた。どれほど、そうしていただろうか。やがて、満足そうなため息が聞こえ、水平になった背中をぽんと叩かれた。

「本間先生、にしなさい。望」

ああ、自分も死んだ。とうとう、死んだ。その瞬間、望はそう思った。すると、思いのほかすっきりした。瞼を開くとうすら笑みを浮かべ、「はい、先生」と軽い口調で言って背筋を伸ばす。今度は真っ直ぐに視線を交わすと、本間は愛でるように目を細めた。

「君には期待できそうだ」

満面の笑みを浮かべて、本間はそう言った。

望は何も答えず、不敵に笑って首を竦めた。

卵が先か、鶏が先か――どっちが先かなんて考えてもしかたない……そういうことだよな、父さん。望はそう心の中で語りかけた。もう後戻りはできないのだから、やるしかないのだ。この復讐を終えない限り、自分は成仏できないのだから。そして……父の望みも叶えよう。それはきっと、自分たち兄妹に託された使命なのだから。

アベル　―５―（後書き）

『卵が先か、鶏が先か』。ラストの望の解釈は間違ってます。彼なりのユーモアです。念のため（＾＾；）

アベル、これにて完結でございます。すみません、すごく長くなってしまって！　次話から主人公が戻ってきますので～。いつも応援していただいて、まことにありがとうございますーっ！！

ボディガード

「朝練があるので……先に学校にいきます。夕べはすみませんでした。――カヤ」

和幸くんは抑揚のない声で読み上げて、「ふぅん」と鼻にかかった意味ありげな声を出す。

「ふぅん？」とマネして、私はダイニングテーブルに上半身を乗せるように身を乗り出した。「何か言いたそう。なぁに？」

「え？」私が訊ねたのが意外なような声を出し、和幸くんは慌てて持っていたメモ用紙を私に差し出す。「いや……いいんじゃないか」

「もう……相変わらず、嘘が下手」

そこがまた好きだったりもするんだけど――とは言わず、和幸くんから手の平サイズのメモ用紙を受け取る。そこにボールペンで書かれているのは、ついさっき彼が読み上げた文章だ。

寝静まった屋敷。誰もいないダイニング。普段から広いな、とは思っていたけど、こうして二人だけでいると余計にそう感じる。不気味なほどの静寂の中、リビングの時計の針が刻む音がよく響く。声を潜めていても、二階で眠っているおじさまや休んでいるガードマンに聞こえてしまうんじゃないか、と心配になる。

そんな中、電気をつけるわけにもいかなくて、キッチンの窓からこぼれる月明かりを頼りにメモ用紙をながめて、私は小首を傾げた。あきらかに、彼は言いたいことがあるみたいだった。でもなんだろう？　漢字が間違ってるわけでもないし。

メモ用紙とにらめっこをしていると、斜め横で立っている彼が「いやぁ」と頭をかくのが視界のはじで見えた。

「確かに、不良みたいだな、と思ってさ」
「不良みたい？　なんのこと？」

やっぱり思うところがあったんだ。つい、笑いそうになるのを堪えた。かわいい、て言ったら、怒るよね。

「ほら」と苦笑して、和幸くんも私と同じように上半身をあずけるようにダイニングテーブルに寄りかかった。「沖野さん……だっけ。あのおばさんが言ってただろ。俺はカヤを非行に走らせる不良だ、て」

確かに、真麻さんはそんなことを言っていた。あれは……そうだ。和幸くんがベッドにもぐって隠れていたとき。おじさまから私を心配する電話がかかってきて、真麻さんが取り次いでくれたんだ。それで、そのあと……そのあと……

「カヤ？　聞いてるか？」
「はい！？」びくっと大げさなほどに反応してしまった。背筋を伸ばし、メモ用紙を今にも破りそうなほど力強く掴んでいた。和幸くんは訝しげな表情で「大丈夫か？」と見上げてきた。
「ダ、ダイジョウブ」

本当は……大丈夫じゃない。どうしよう。顔が熱い。さっきのこと、思い出しちゃった。ベッドの上で彼に抱かれ……て、だめ、だめ。思い出しちゃだめ。二時間かけて、やっと落ち着いたんだから。
身体の奥からじんわりと熱がこみあげてくる。私は和幸くんから顔を隠すように横を向いた。

「こうして逃げるようなマネして、情けないっつーか。それもお前に嘘までつかせて……不倫でもしてる気分だ」

ちらりと横目で見ると、和幸くんは腰を折ってダイニングテーブルに頬杖をつき、悩ましげに眉間に皺をよせていた。疲れたような……ううん、呆れたような表情を浮かべてはいるけど、まるでいつも通り。私だけ、変に意識してるみたいで……恥ずかしいくらい。

じっと見つめていると、その視線に気付いたのか、彼の黒い瞳がこちらに向けられて、ばちりと目があった。

「あ」と間の抜けた声が漏れて、あわてて顔をそむける。「し、しかたないよ。時間かけて、真麻さんにも分かってもらえば――」

ごまかそうと適当に取り繕ったその言葉に、自分ではっとした。思わず、口ごもる。身体にこもっていた熱が一気にひいた。

なに、舞い上がってたんだろう。寂しさと情けなさが襲ってきた。読む気もないのに、メモ用紙に視線を落とす。

時間……なんて、ないじゃない。あと、一ヶ月。それで私の時間は終わり。和幸くんともお別れだ。あと……一ヶ月。

焦燥感と悔しさ。そして、きっと……苛立ち。思わず、唇を噛み締めていた。

「そうだな」

「！」

不意に、囁くような優しい声が背後からした。え、と振り返ろうとしたときには、ぎゅっと後ろから抱きしめられていた。

いつのまに、後ろに……？　全然、気配なんてしなかった。さっきまで、斜め隣で頬杖をついていたのに。

くびれにまわった彼の腕にぐいっと引き寄せられて、身体が彼に密着した。赤面するのを感じた。何も考えられなくなって、ぼうっと前を向いたまま、固まってしまった。

「時間をかければ、いいんだよな」つぶやく彼の吐息が首にかかる。
「俺たちには、これからがあるんだから」

噛み締めるような言い方だった。熱のこもった口調。力強く、言い聞かせるような……

ああ、そうなんだ。私を勇気付けようとしているんだ。大丈夫、俺たちには未来がある。そんな心の声が聞こえてくるみたい。

――『テマエの実』なんて食べさせない。この世界で……ずっと一緒に生きていこう。

彼のまっすぐな愛のこもった言葉が私を苦しめる。泣きそうになるのをこらえてうつむいた。

彼の腕がさらにぎゅっと私の身体を強く引き寄せる。彼との間に空気さえも入る余地はないように思えた。私たちを隔てているのは衣だけ。それが邪魔だと思ってしまう。脱ぎ捨ててしまいたい。そうしたら、また……彼に近づける。――あのときみたいに。

ついさっきなのに、すっかり遠い昔に感じてしまう。夢だったんじゃないかと疑ってしまう。ベッドの上で、彼の肌を、体温を、息遣いを、鼓動を、その全てを全身で感じたあの時間。

どうしてだろう。さっきまで、思い出すだけでも恥ずかしくてたまらなかったのに……こうして、抱きしめてもらっていると――どうでもよくなってしまう。いっそのこと、理性なんて奪いとって欲しくなる。あの感覚が恋しくてたまらない。身体ごと、全てを愛される感覚。彼に支配される感覚。また、味わいたいと思ってしまう。彼が欲しくてたまらない。あのときの自分に嫉妬してしまうほどに。

私はそっと彼の腕に手を這わせた。ふうっと息を吐き、彼に身を任せるように身体の力を抜いた。

そう、ずっとこうしていたいんだ。ずっと、彼の傍にいたい。彼

に包まれていたい。また、何度でも彼を肌で感じたい。でも……

「ねぇ、和幸くん」それは叶わない願い。「話さなきゃ、いけないことがあるの」

もう十二時は過ぎた。魔法は解けた。残っているのは現実だけ。私はもう『お姫さま』じゃない。

メモ用紙をきゅっと握り締めた。言おうと思った。いい加減、幻想に酔いしれるのはやめよう。私は『お姫さま』なんかじゃない。私は不死の化け物。世界を壊すしか能がない悪魔。彼には知る権利がある。知らなきゃいけない。

「あのね」と、振り返った。しぼりだした勇気と、無理やり固めた覚悟ともに。しかし――

「やべ……！」

突然、彼はするりと腕をほどいた。「へ」ときょとんとする私に「うまく追い出せ」と残して、彼は脱兎の勢いでダイニングテーブルの中に潜り込んだ。

って、なにしてるの？

「か……和幸くん？」と、身をかがめて覗き込もうとすると、イスとイスの間で小さくなりながら彼はあわてた様子で手を左右に振る。すごく……必死。その様子は、確かに不倫でもしているかのようだ。まるで、浮気相手の夫から逃げているようで――

そっか。私はハッとして身体を起こした。和幸くんは商業用に『創られた』クローン。身体は改造されてて、私なんかよりもずっと優れた身体能力を持っている。五感も例外じゃない。だから、暗闇でも全部見えてるし、どんなに小さな声でも聞こえてるからな――

なんて、さっきも言われて……て、やだ。また思い出したら……
顔が熱くなるのを感じて頬をおさえた。胸が苦しくなって、ため息が自然と漏れる。彼と離れた途端、こうなっちゃうの？　ずっと抱きしめててもらうわけにはいかないのに。我ながら呆れてしまう。砺波ちゃんがいてくれたら、子どもじゃないんだから、て喝でも入れてくれるんだろうな。

「！」

そのときだった。
リビングのほうで――といっても隔てている壁はないから、つながっているのだけれど――扉が開く音がして、私は弾かれたように振り返った。
そして、目にとびこんできた人物に、私は息を呑む。
やっぱり、そうだったんだ。彼が突然、隠れた理由。それは……近づいてくる人の気配を感じとったから。私には感じ取れない何かを、いち早く察したんだ。足音だったのかもしれないし、息遣いだったのかもしれない。とにかく、彼には分かったんだ。誰かがこの部屋に入ってくることを。果たしてそれが誰か、までは彼にも分からなかったのだろうけど。
だって、誰が姿を現すかを分かっていたら、彼はもっと不機嫌そうにしていたに違いないもの。舌打ちでもしていたはず。

「あれ、カヤちゃん？　こんな時間になにしてるんですか？」

間延びした、明るい声だった。
切れ長の目はぼんやりと半開き。しかも、夕べのままの服装だ。といっても、シャツのボタンは全部はずれていて、もはや袖を通しているだけ。鍛えられた肉体があらわになっている。そんな格好のせいなのか、だらしなく乱れた黒髪まで色っぽく見えてしまう。う

うん、色気が漂っているのはいつものことかも。
あきらかに、寝起き。てっきり、見回りでもしているのかと思ったけど……
「望さんこそ、どうされたんですか？」
ダイニングテーブルに近づけないように、と私はリビングのほうへ歩き出した。ひきつらないように気をつけつつ、なんとか笑顔を顔に貼り付けて。
よりにもよって、現れたのは、和幸くんが嫌う私のボディガードだった。

＊　＊　＊

「どうもこうも……調べものしてたら、寝てしまって。居眠りはするもんじゃないですね。嫌な夢をみちゃいましたよ。で、コーヒーでも飲もうかな……って、まあ……僕のことはいいですから」へらっと微笑んで、端整な顔立ちの青年、カヤの護衛人――椎名望は腰に手をあてがった。「カヤちゃんは、なにしてたんです？　制服なんか着ちゃって……」
さっきまで眠そうだったのが嘘のように、その眼差しにはいつもの鋭さが戻っている。ちらりと壁の時計を一瞥すると、「夜中の三時ですよぉ」と白々しく不思議そうにつぶやいた。
カヤの笑顔は自然とひきつる。夜中の三時に制服を着て、真っ暗なダイニングに一人。確かに、怪しまれるのも当然だ。まあ、不審に思われるだけなら問題ない。ここに実はもう一人いることさえ、バレなければ。
ダイニングテーブルの下に潜んでいる彼。その存在にもし気付かれたら、家政婦の沖野真麻が怒り狂うだけではない。おそらく、養

父である本間秀実もさすがに気を悪くすることだろう。先週の『誘拐』騒ぎや、先週末（卒業パーティーの夜）の『夜遊び』の件もある。これで、夜中に男を――それも、別れた、と言い張った男を――部屋に連れ込んでいたことが知れたら、最後通牒でもつきつけられて、今後一切信用してもらえなくなるかもしれない。高潔な本間の性格を考えれば、充分あり得るシナリオである。

カヤは望に気付かれないように、メモ用紙を右手の中でぎゅっと丸めた。こんなんだったら、和幸の言うとおり、置手紙なんて残さずに、また屋根の上から飛び降りるべきだったかもしれない、と後悔し始めていた。

いや、今さら後悔してもしかたがない。カヤは気を取り直し、

「今日の文化祭のことを考えたら、緊張して眠れなくなっちゃって……」

望に歩み寄り、滑らかな口調でそうごまかした。しかし、その言い訳は「なぜ制服を着ているのか」という疑問まではカバーしていない。望もそれに気付いているのだろう。「へえ」と不敵に笑んで、目を眇めた。

リビングにはコの字にローテーブルを囲んだ大きなソファが置いてある。カヤは望の前で立ち止まると、そのソファのはじ、背もたれの角に左手をかけた。

うまく追い出せ、と彼に言われたものの、どうやって追い出せばいいのやら。いい策が思いつかず、カヤは目を側めて黙り込んだ。

妙なことに、望も何も言わない。居心地の悪い沈黙がしばらく続き、カヤはちらりと望を見やる。すると、すました表情でこちらを見ている彼と目があった。やはり何も言わず、望はにこりと微笑む。――どうやら、ずっとこちらを見つめていたようだ。それを悟って、カヤは恥ずかしさにうつむいた。

そもそも、シャツは着てはいるものの、ボタンをしめていないせ

いで、まるで半裸状態。そんな男性と、真っ暗な部屋で向かい合っているこの状況。ついさっき男の体というものを知った……カヤには、刺激が強すぎる。目のやり場に困るし……落ちつかない。さらに、動揺している自分が、まるで望を意識しているかのようで、後ろめたささえ感じた。

「あのぅ」と遠慮がちに望を見上げた。おずおずと割れた腹筋のあたりを指差すと、申し訳無さそうに苦笑する。「よかったら……しめてもらえます？」

言われて、望はしばらくぽかんとした。なぜか、すぐにはしめようとはしなかった。何を考えているのか、自分の身体を見下ろし――ややあってから、「いやですねぇ」とカヤに呆れたような笑みを向けた。「そんな態度とられたら、そそられちゃうじゃないですか」

しめよう、という気配はない。いや、その前に、そそられる？カヤは「はい？」と目を瞬かせる。

すると望はくつくつと笑い、ゆっくりとカヤに近寄ってきた。

不穏な雰囲気を感じ取り、本能的にカヤはあとじさろうとした。が、カヤのその手首を掴み、望はぐいっと引き寄せる。

「え……っ！」

悲鳴をあげる暇もなく、景色が激しく流れる。ダンスで一回転でもしたかのようだった。ワケも分からないまま、気付けばソファに仰向けに押し倒されていた。その状況を理解したときには、大きな影が自分を覆っていた。誰かが自分に馬乗りになっている。

「！」

あまりの出来事に、頭が真っ白になっていた。抵抗することもできなかった。目を大きく見開き、呆然としてしまう。
そういえば、さっきもこんなことがあった。こうして、衣服の乱れた男が自分に覆いかぶさって……

「あ」

身体に緊張が走った。
違う。さっきとは最も重要なところが異なっている。――この男（ひと）じゃない。

「望さん、変な冗談は……っ！」

思い出したかのように身をよじり、逃げ出そうとするが、その肩をがっしりと押さえつけられ、カヤはぞっとした。身体がぴくりとも動かない。自分の護衛人の力強さに恐ろしくなるなんておかしな話だ。だが、確かに自分は怯えていた。自分のボディガードに。
望はそんなカヤの反応を悦んでいるかのようにうすら笑みを浮かべると、身をかがめて顔を近づけてきた。

「やっ……」

思わず目を瞑り、顔をそむけた。
今起きていることが現実とは、とても信じられなかった。ただ、これが現実なら……今、自分が何をされようとしているのかは理解できる。自分が何をすべきかも明白だ。――逃げなくては。しかし、肩を押さえられて上半身は動かないし、足をじたばたと動かしても、虚しく空気を蹴っているだけだ。

「任せてくれればいいから」

そっと囁く声が、すぐ耳元でした。

「いやっ！」

怯えきった震えた声が飛び出した。

望は確かに、軽い印象のある人間だった。女遊びをしている姿が容易に思い浮かんでしまうほどに。だが、まさか、自分がその対象になるとは……彼が自分を襲おうとするとは思ってもいなかったのだ。そういった意味では、信頼していた。だからこそ、余計に取り乱していた。――彼の存在を忘れてしまうほどに。

「椎名！！」

その怒鳴り声に、カヤはハッと固く閉じていた瞼を開く。急に、身体にのしかかっていた重圧が消えた。金縛りがいきなり解けたかのように、身体に自由がもどった。緊張の糸がゆるやかにほどけていく。そうだった、と思い出す。まだ自分には『王子さま』がいたんだ、と。それも、ダイニングテーブルの下に。

あわてて身を起こし――だが、目にした光景に愕然とした。

さっきとは違う緊張が身体を締め付ける。

思ったとおり、そこには彼がいた。二週間ほど前まで、裏世界で『殺し屋』をしていた少年。自分のボディガードだった恋人。和幸だ。

どうやら背後から望の右腕を引っ張りあげて、彼の身体をカヤから引き離したようだ。望はカヤを跨いだまま、ソファに膝立ちした状態で和幸に右腕をつりあげられている。

和幸のことだ。自分の悲鳴を聞いて、いてもたってもいられず出てきたのだろう。

冷静さを取り戻したカヤには、そこまでは理解できた。しかし、

いくら落ち着いて考えようとしても、一つだけ理解できないことがある。
なぜ……と、カヤは緊張で乾いた喉をごくりと鳴らした。――どうして、彼は望に拳銃をつきつけられているのだ？
「やあ、藤本くん。……かくれんぼは僕の勝ちでいいのかな」
まるで朝の挨拶でもするかのように、望は穏やかにくすりと笑んだ。どこから引っ張り出したのか、左手に回転式拳銃（リボルバー）を握り締めて。その銃口はまっすぐに和幸の頭へ向けられている。
「だから、君は子どもなんだよ」
カヤのボディガードは憫笑のようなものを浮かべ、そっと撃鉄を起こす。
和幸は言葉がでないようだった。望の腕を拘束したまま、じっと銃口を見つめて硬直している。その表情にははっきりと緊張の色が浮かんでいた。
「嫌いじゃないんだけどね」
残念そうに言って、望は引き金に指をかけた。

危険な同情

銃？　どこから出した？　持っていたのか？　気付かなかった。いや……確認しなかった。

なにやってんだ、俺は。凡ミスだ。相手が武器を持っているかどうか、確認もしないでつっこむなんて……ガキのケンカじゃねぇか。

まずい。頭が回らない。状況が整理できない。こんなこと……今までなかった。少なくとも、『殺し屋』をしていたときは……こんなミスはしなかった。こんな、短慮な行動はとらなかった。

「だから、君は子どもなんだよ」

ぎくりとした。薄暗いリビングで、かちりと聞き覚えのある音がした。俺を同情するような笑みを浮かべて、男が……椎名望が撃鉄を起こしたのだ。その銃口はしっかりと俺の頭を狙っている。

撃つ気か？　いや、まさか……

「嫌いじゃないんだけどね」

冷静な、それでいて落胆したような声色だった。

心臓が脈打つ音が早まる。味わったことのない緊張感が身体を走った。体が動かない。

撃つわけない。こいつに俺を撃つ理由はないはずだ。こいつは、カヤのボディガードだぞ。俺を撃つ理由なんてない。撃つはずがない。そうに決まっている。なのに、なぜ……確信がもてない？

撃たれる、と思っている自分がいる。殺される、と覚悟している自分がいる。こいつは――敵だ。その感覚は、いつもこいつに感じている嫌悪感とはまるで違っていた。苛立ちとか、腹立たしさとか、そんなものはなかった。ただ純粋に、危険だ、と思った。

椎名の指が引き金にかかる。俺は呼吸をするのも忘れて目を見開いた。やばい、撃たれる。そう覚悟した、そのときだった。

「ばん！」

「！」

思わず、びくんと体が震えた。カヤの小さな悲鳴が聞こえた気がした。何が起きたのか、一瞬分からなかった。

「……は」

安堵からなのか、困惑からなのか、すっとんきょうな声が浅い息とともに漏れた。

今のは……椎名の、声？

「あっはは」と、銃声を警戒していた鼓膜に届いたのは、高らかな笑い声。「冗談だよ、冗談！」

俺を睨みつけていた銃口がくいっと天井を向く。そして、

「ごめん、ごめん」と、言葉とは裏腹に、まるで反省している様子のないおどけた声が笑い声に続く。「いやぁ、藤本くん……いい顔してたぁ」

椎名は銃をさっさと腰にしまうと、立ち上がってソファから降りた。あっけに取られる俺の目の前に立ちはだかると、くいっと左手で右腕を――俺が掴んでいる二の腕のあたりを――指差す。

「腕、離してくれるかな」

人を見下すような目つきで見下ろし、口元に笑みを浮かべる。
俺は呆然として、身動き一つとれなかった。まだ心臓が騒いでいる。頭の中がごったがえしている。

「やりすぎちゃったかな」と苦笑して、椎名は俺に顔を近づけてきた。男のくせに、香水の（たぶん）匂いがした。そして、囁くように言う。「ところで……カヤちゃんと仲直りできたみたいだね。おめでと。手伝ったかいがあったよ」

その瞬間――カヤの名前が出た瞬間――俺は目が覚めたかのように我に返って、椎名の右腕を放り投げるように離し、今度は胸倉を掴んだ。

「っざけんなよ！」吐き捨てるようにそう怒鳴りつけ、胸倉をぐいっと引き寄せる。といっても、ボタンが全部しまってないから、大して意味はない。シャツの皺を伸ばしてやったようなものだ。何もかも、にくたらしい奴だ。
俺は肺にたっぷり空気を取り込んで、喉がはりさけんばかりの怒声を放つ。

「カヤを襲おうとしたのも、冗談だったってのか！？」

几帳面に整えられた椎名の眉がぴくりと動いた。
俺はぐっと唇を引き結ぶ。堪えるように鼻から息を吐き出し、椎名の答えを待つ。
そう、俺をからかったのは大目にみるさ。今に始まったことじゃない。どうでもいい。でも……
俺はちらりと横目でカヤを見やった。ソファにへたりと座り込み――俺が撃たれると本気で思っていたに違いない――怯えた表情でこちらを見ている。髪は乱れたまま。ブレザーのジャケットも皺だ

らけだ。
椎名のシャツを掴む手が震えた。怒りが爆発寸前だ。
ぎりっと奥歯を噛み締めて、眼球に痛みが走るほど、椎名を睨みつける。
俺のことはいい。でも、カヤにしたことは許せない。俺にカヤの悲鳴を聞かせたことだけは絶対に許さねぇ。
「なかなか、トリッキーな質問をしてくるね」
しばらく間をおいてから、悪びれた様子もなく、椎名は鼻で笑った。
「トリッキーだ！？」
「だって」と、わざとらしく困ったような表情を浮かべて椎名は口角を上げた。まるで挑発するような笑みだ。「冗談じゃなかった、て言ったらどうするの？」
「……なに？」
「本気だった、て言ったら、どうするの？」
思わず、言葉を失った。何が言いたいんだ、こいつは？
「想像してごらんよ。僕が本気だったら……カヤちゃんはいまごろ、僕の下で――」
何かが切れた。
考える前に、体が動いていた。
＊　＊　＊
それは本能的なもの。無意識だった。感情に突き動かされるまま、

和幸は身体を動かしたのだ。その結果が、禁じたはずの『暴力』につながることなど、考えている余裕もなかった。
左手で望の胸倉を掴んで、右腕をふりかぶる。脇をしめ、左足を前に出す。あごをひいて、腰の回転をつかって、勢いのままに右拳を繰り出した。
その一連の動きは流れるように、滑らかかつ迅速に行われた。望は防御の姿勢を取る暇もない――はずだった。

「和幸くん！」

悲鳴に近いカヤの静止の声。たった一瞬のことだった。ほんの一瞬、和幸の拳は失速した。
その隙を望は見逃さなかった。
カヤに気を取られてひるんだ和幸の拳を左手ですばやく払いのけ、胸倉を掴んでいる和幸の左手首を右手で掴む。ぐいっとそれを外側に捻りつつ、和幸が次の動きに入る前に、即座に左手で和幸の首を掴んだ。がっしりと、その手の甲に血管が浮き上がるほどに力強く。

「ぐっ……！」

望の胸倉をつかんでいた和幸の手が離れた。当然だ。人の胸倉をつかんでいる場合ではない。自分の喉が今にもつぶされようとしているのだから。だが、その手首も望に拘束されていて、首の救出へは向かえない。
あいている左手で、首を締め付けるそれを必死につかむ。片手で掴まれているだけだというのに、息苦しさは尋常ではない。そもそも、和幸は商業用のクローン。その肉体は改造強化されている。手が伸びてきたときに、瞬間的に首に意識を集中させた。首の筋肉は全力で抵抗しているはず。左手もそうだ。さっきから望の左手首をつぶす気で力をこめている。手加減はしていない。

だというのに、まるで効果がない。それどころか、圧迫感はじわじわと増している。大蛇が巻きついてくるようだ。

足元がふらつき、宙にでも浮いているような気分になった。今にも意識を失ってしまいそうだ。血がめぐっていない。顔が熱くなっていく。このまま血液が溜まって、頭のどこかで血管が破裂するんじゃないか、と思った。みしみしと軋む音が聞こえてくる。眼球が飛び出しそうになって、瞼をかたく閉じた。

力が入らない。抵抗する力が……

気が遠のく。

ぼんやりとする意識の中で、誰かが叫んでいるのが聞こえてきた。ずっと遠くで……いや、違う。香りがする。甘い香り。心地よくて、愛しい……彼女の香り。すぐ、そこに――

「望さん、やめて！」

悲鳴に近いその声が鼓膜を貫き、和幸はハッと目を見開いた。

その瞬間、首に巻きついていた大蛇がするりと逃げて、一気に酸素が戻ってきた。これでもかというほどに大きく息を吸い、そのままその場に崩れ落ちる。全身に力が入らず、立っていることもままならなかった。

「あッ……ぐ」

喉が圧迫されていたせいで、声もまともに出せない。四つんばいになって咳き込みながら、横隔膜に痛みが走るほど大きく空気を吸いこんだ。それでもまだ酸素が足りない気がして、咳きの合間に荒い呼吸を繰り返す。

「和幸くん！」

今にも泣きそうな少女の声。カヤだ、と分かっても、その名を口にすることも今はつらい。声を出す余裕さえない。
すぐ隣でしゃがみこむカヤの脚が視界の隅で見えた。

「和幸くん、大丈夫！？」

背中が暖かくなる。カヤがさすってくれているようだ。
大丈夫、と言いたいが、それも叶わない。とにかく、酸素が欲しい。

「殴りかかってくるから、つい」と、背後からのんきな声が聞こえてきた。「年上にそんな態度はいけないよ、藤本くん」

和幸はうずくまりながら、拳を握り締めた。
死ぬか、死なないか、そのぎりぎりで望は楽しんでいたようだった。和幸はそれをはっきりと感じ取っていた。
殴ってやりたい、と思うのが普通だろう。振り返って、全く同じことをしてやろう、といきりたっても不思議じゃない。
だが……和幸に先刻までの勢いはなくなっていた。怒りに我を忘れてしまいたいくらいだが、そうもいかなかった。食いとどめているものがある。理性ではない。それは『同情』だ。
段々と呼吸が落ち着いてくるにつれ、頭も冷静になってくる。それにつれて、ある予想が現実味を帯びてうかびあがってきたのだ。まさか、と思っても、それしか考えられない。否定しようにも、文字通り、痛いほど味わってしまった。

「まったく……最後まで聞いてほしいなぁ」と望はソファに腰かけ、ため息混じりに切り出した。「僕が言いたかったのは……男が本気で襲おうと思ったら、カヤちゃんみたいなか弱い女の子、簡単だってこと。だからこそ、こうして僕がボディガードをしているんだ。

感謝される覚えはあっても、殴られるのは心外だよ」

何事もなかったかのように、望は飄々と語った。

和幸はもはや反論する素振りもみせなかった。それを見かねてか、カヤはすっくと立ち上がり、「望さん！」としかりつけるように怒鳴った。だが、それ以上、カヤの叱責が続くことはなかった。その代わり――

「いったい、何事だね！？」

憤慨した低い声がリビングに響き渡った。

＊　＊　＊

混沌としていた空気を秩序の刃が切り裂いたかのようだった。あたりにぴりっと緊張感が走る。

リビングに姿を現したのは、寝巻き姿のおじさまだった。眉間に深く皺を刻み、鋭い眼差しで辺りを見回している。

さすがにこれだけ騒いでいたら、二階で寝てても起きちゃうよね。私は「ごめんなさい、おじさま」と努めて落ち着いた声色でおじさまに言って、それから望さんに視線を戻した。

望さんは左手をポケットに突っ込んでソファに座っている。あわてる様子もない。余裕の笑みで私を凝視している。私が何も言わない、と思っているのだろうか。

私はごくりと生唾を飲み込んで、すっと息を吸い込む。

「今夜のことはもう冗談じゃすみません」

望さんにだけ聞こえるように、そうつぶやいた。本気だ、と分かってもらえるように、声も低くし、睨みつけるような視線を浴びせ

た。それでも、望さんは特に顔色を変えることもなく、肩を竦めるだけだった。
脅しているだけだ、と思っているのだろうか。それとも、和幸くんをあんな目にあわせておいて、何も感じていない？　冗談ですむ、と思っているの？
やるせない気持ちになった。ぎゅっと拳を握り締め、キッとおじさまに振り返った。

「ボディガードはもういりません」

はっきりとそう言いきる。すると、おじさまは眼鏡の奥で小さな瞳を目いっぱい開けた。

「なにを……急に！？」
「詳しい事情は、望さんから聞いてください」

それだけ言って、私はしゃがんだ。喉をおさえてうずくまっている和幸くんの腕をとると、「行こう」と無理やり起こす。
もう少し、休ませてあげたいけど……彼をこれ以上、望さんの近くにいさせたくはない。

「悪い」と、和幸くんはふらつきながら立ち上がる。その声は……彼らしくなかった。掠れていて、苦しそうで……胸がしめつけられる。

「おい、カヤ？　どこに行くんだね？」

和幸くんを支えつつリビングを出て行こうかというとき、おじさまが立ちはだかった。困惑の表情が浮かんでいる。
それはそうだよね。突然、こんな光景を見たら驚くに決まってい

る。第一、和幸くんがここにいること自体、おじさまにとっては不可解なことなのだろうから。

「彼の部屋です」私は正直にそう言い切った。もう嘘をつくのも、くだらなくなってしまった。「文化祭には、彼の部屋から真っ直ぐ行きます」

「和幸くんの部屋から？　いや、待ちなさい。ウチで休んで、それから二人で行けばいいじゃないか。なにも、一度和幸くんの部屋に行かなくても」

「和幸くんにも用意がありますから。制服に着替えなきゃいけないですし。一度帰らないと」

おじさまは何も知らない。親切心で言ってくれているとは分かっていても、つい言葉に棘が……。八つ当たりをしているみたいで申し訳ない。おじさまは何も悪くないのに。

でも、今はとにかく彼をこの家から出さなきゃ。ううん、早く、あの人から引き離さないと。

「それに」と私は背後に振り返り、ソファに座ってこちらの様子を伺っているボディガード……いえ、元ボディガードに一瞥をくれた。

「ウチの中は危ないみたいですから」

望さんはやはり焦る様子もなく、微笑を浮かべただけだった。

普段から、人を軽視するような言動が多かったけど……ここまで危ない人だとは思っていなかった。冗談で人に銃口を向けて、おまけに首を絞めるなんて……。ちょっといじわるなだけで、本当は優しい人に違いない、て思ってたのに。

――もう少し、人を疑わなきゃだめだ。

いつかの、曽良くんの厳しい言葉がよみがえる。
こういうこと……だったのかな。
「勝手にあがりこんで、すみませんでした」
一晩、歌いあかしたようなつぶれた声が聞こえた。ハッとして振り返ると、和幸くんが神妙な面持ちでおじさまを見つめていた。その顔色には赤みが戻ってきていて、少しほっとした。おじさまを見つめる目は充血したままだけど……。
「いや……それはいいんだが」と、おじさまは顔をしかめた。「いったい、何があったんだね」
おじさまは本当に心配そうだ。まじまじと和幸くんの顔を見つめ、「まさか、望が何かしたのか？」と不安げな声で訊ねてきた。
私はぎゅっと和幸くんの腕をつかむ。望さんが自分で説明するべきかとも思ったけど……もういっそのこと、和幸くんが全て話したほうがいいのかも。もし、しゃべれるのなら。
私はちらりと和幸くんの顔色を上目遣いで伺った。そして、「え」と眉をひそめる。
なぜか、その横顔に浮かんでいたのは、寂しげな色だった。
「何でもありません」和幸くんは一度咳払いをして、さらりとそう答えた。「お騒がせしました」
「！？」
何でもない？
「和幸くん、何を言って……！？」

思わぬ言葉に驚愕する私を、和幸くんは視線で制した。首を横に振り、青ざめた唇に穏やかな笑みを浮かべる。
どうして……笑顔？
「行くぞ」と短く促し、彼は唖然としている私の腕を引っ張って歩きだした。
「え、あ……」
「和幸くん、待ちなさい」
私と同じくらい……ううん、私以上におじさまは困惑している様子だった。状況が把握できていないだけに、無理やり引き止める気にもなれないのだろう。「待ちなさい」とは言っているものの、声は弱々しく、何か行動しようという動きはない。呆然と立ち尽くして、通り過ぎる私たちを困り果てた表情で見つめているだけ。
「藤本くん」
リビングから一歩出たときだった。背後から、級友にでも呼びかけるような親しげな声が聞こえてきた。
ぞくっと背筋に悪寒が走る。――望さんだ。
その声に、謝ろうという気配はない。いつも通りの、軽い調子だ。何を言い出すつもりなのか、不安が襲って私はとっさに振り返る。
「望さん、もうこれ以上は――」
「今、幸せかい？」
「！」
急に何を聞くの？　それも……何事もなかったかのような、笑顔で。もう望さんのこと、全く分からない。相手にするべきじゃない

のかも。この人、危険だ。
私は和幸くんに振り返り、「行こう」と言おうと口を開けた。でも、その言葉が出てくることはなかった。振り返って目にした和幸くんの表情に気を取られたのだ。
ついさっき、首を絞められたっていうのに……不思議なくらい、落ち着き払った表情だった。冷静に、望さんをじっと見つめている。まっすぐに……憎しみも怒りもなく、ただまっすぐに望さんを見つめている。こんなときに、その深みのある瞳に私は見とれてしまった。

「あなたはどうなんです？」

和幸くんは感情の伺えない声でそう答えた。
リビングは不気味な静寂に包まれて、やがて望さんが鼻で笑うのが聞こえた。

危険な同情（後書き）

キャラクター人気投票を行っております。ぽちっとクリックしていただけるとほんとーに助かります♪　すでにご協力くださった方々、ありがとうございます！　大っ変参考になります。

そんなお礼もかねて、「拍手御礼小説」を開始しました。拍手ボタンを押していただくとリンクが張ってありますので（＾＾）和幸の兄、広幸が主役です。

インターミッション：孤独な怪物　―上―

「と、いうわけで……首を絞めてクビになったわけですよ、先生」

一通り説明しおわって、望はまるで他人事のようにさらりとまとめた。それも、冗談めいた言い回しで。

扉の前で仁王立ちし、じっと黙っていた本間はわなわなと震えている。怒りを堪えていたのだろう、かたく閉じていた瞼がかっと開かれ、獲物に牙をむく猛獣のごとき迫力で望に怒鳴りつけた。

「なにをふざけたことを言っている！　どういうつもりだね、望？　当日なんだぞ！　全てを台無しにするつもりか？」

肩をいからせて、本間は望が座っているソファへと歩み寄った。顔は真っ赤に染まっている。怒り心頭、といった様子だ。

望はくつくつ笑って、「まさか」と否定した。「見てください、眠そうでしょう」と白々しく哀しげな表情を浮かべ、目元を指差す。確かに、切れ長の目にいつもの鋭さはない。

「台無しにするわけがないですよ。なんのために、夜更かししてたと思ってるんです？　トーキョー中の『藤本』を調べてたんですから。まあ、途中で寝ちゃったんですけど」

「トーキョーに『藤本』は千四百十六人……本気で全員調べるつもりだったのか」

「できると思ったんですけどね」

本間は呆れたようにため息を漏らし、「とにかく」と首を横に振る。「カヤにうまくごまかして、謝りなさい」

言われて、望は目を丸くした。「なぜです？」と当然のように問いかけると、本間は床にたたきつけるように脚を一歩踏み出す。

「警戒されたらどうするんだ！？」

「ああ……そのことなら、多分、手遅れです」

「なんだと？」

「つい、本気だしちゃいました。もう警戒されてますよ、彼に」

本間は言葉を失ったようだった。ぴたりと硬直し、口をあんぐりと開けている。今にも、染めている黒髪が真っ白に変わってしまいそうだ。

「大丈夫ですよ」そんな本間の様子をおもしろがっているのか、望は失笑を漏らす。「さすがに、僕が同類だとは気付いたでしょうが……実際、カインじゃないクローンなんていくらでもいます。彼もそれは分かっているでしょう。僕もそのうちの一人だ、としか思いませんよ」

「だが……」本間は珍しく弱々しい声をこぼした。不安が声からにじみ出ている。「もし、これをきっかけにお前のことを調べだしたらどうする？」

「好きに調べさせればいいじゃないですか。どうせ、タイムリミットは今日の昼。今から探り出したとしても、先生の本性まで行き着くことはありませんよ。ご安心ください」

台本でもあるかのようにすらすらと言い切って、「それに」と望は長めの前髪を右手でかきあげた。「万が一何かあっても、僕たちは彼の弱みを握ってる。そこが重要です」

本間は腫れぼったい瞼をやや下げて目を薄める。疑るような表情で望を睨みつけ、「カヤか？」と相槌を打つ。すると望は嬉しそう

ににやりと笑んだ。

「最終確認をしたくなったんですよ。彼女のピンチに彼がどう反応するか」

興味がくすぐられたのだろう、本間はぴくりと眉を動かして、「どうだったんだ？」と腕を組む。望はもったいぶるように間をおいてから、「予想通り」と間延びした声で答えた。

「冷静な判断なんて出来ない。おもしろいほどに挑発に乗る。短絡的。軽率。無鉄砲。ただの子供でした」

「なるほど」やれやれ、と言いたげに本間は頬をかいた。だが、その表情は悦びを隠せていない。「いたずらに騒ぎを起こしたわけじゃないんだな。今夜の騒ぎも、計画の内、というわけだな」

望への呆れと誇らしさが混じった声色だった。おそらく、誇らしさのほうが強かっただろう。

しかし、望はそれを裏切るように鼻で笑って「まさか」と言い放った。

「僕に予知能力なんてないですよ。予想できていたのは、彼とカヤちゃんが仲直りするまで。こうしてここで会うとは思ってもいませんでした。

偶然、夜中に目が覚めて降りてきたら、ばったり……じゃ、ついでに、予行練習でもしておこう、と思ったわけです」

「予行練習……だと？」目をみはり、本間は疲れ果てたような声を漏らす。「練習でケガをして本番に出場できない——スポーツでもよくある話だぞ」

「さあ。僕はスポーツマンじゃないですから」

けろりと返して、望は「ま」と肩を竦めた。背もたれによりかかり、天井を仰ぎ見る。「結果オーライじゃないですか。クビになったおかげで、今日は動きやすい。朝から忙しいですからねぇ。カヤちゃんの登校に付き合わなくてすんでラッキーです」

「物は考えようだな」呆れたようにつぶやいて、本間は「だが」と低い声で切り出した。「そうはいっても、このままカヤを放っておくわけにはいかんだろう。お前も言ったとおり、カヤは必要だ。監視は続けてもらわなくては困る。カヤに謝らなくてもいい。とにかく、今から和幸くんの家に向かって、監視を――」

「いいじゃないですか」望は落ち着いた声で本間の言葉を遮った。背もたれから身体を起こし、髪をさらりと揺らして本間に顔を向ける。「最後くらい、二人きりにさせてあげましょう」

「そんな……そんなことを言っている場合かっ！」

「たった数時間ですよ」本間の怒号にひるむ様子もなく、望はにこりと微笑んだ。「幸せなひと時を与えてやってもいいじゃないですか」

ここまでさわやかに返されては、怒鳴りつける気も失せるというものだろう。本間は眉を寄せて絶句した。しばらく苦渋の表情を浮かべていたが、やがて、頭痛でもするかのように眉間を指で押さえた。唸り声にも似たため息を漏らす。

「何かあったとき、危ないのはお前の義妹だからな」

確認や注意とかいったものではない。その声色からはあきらかな脅しが感じられた。

「分かっています」と、本間を見据えて望は低い声で答えた。その真剣な表情に迷いの影はない。本間は諦めたように「まあ、いい」と半ば投げやりな言葉をこぼす。

「ところで、その鼎だが……大丈夫なんだろうな？」

気持ちを切り替えたのだろう、本間の面持ちは仕事へ向かうときの凛々しいそれに変わっていた。

「ここ数週間は落ち着いていました」少し間をおいてから、望は気落ちしたような声でつぶやく。「例の『パパ』とかいう人物が、あの子を挑発でもしない限りは大丈夫だと思います」

「あまりぱっとしない返答だな」

「すみません」と、望は苦笑する。

「まぁ……そのための和幸くんだ。リーダー代理の名前も所在も分かってる。保険はいくらでもあるさ」

本間は唇の片端をくいっと上げる。勝利を確信しているかのような、自信に満ちた笑みだ。

「リーダー代理――友人Aくんですね」と、望はくすりと憫笑のようなものを浮かべる。その表情には余裕が戻っていた。「朝から補習授業とは……『殺し屋』とは思えませんね」

「『殺し屋』なんぞをやっているから、学業に身がはいらんのだろう」

「なるほど、確かに」言って、望はちらりと本間を見やる。「でも僕は大学卒業しましたよ」

「書類上は、な」相手にできん、と言いたげに本間はため息をついた。「それにしても、十七の子どもにリーダーを代行させるとは……思った以上に、カインの年齢層は低いのか？　しかし、カインが現れてから十八年も経つ。当時、十二歳だとしてももう三十歳のはずだ。大人のカインがいてもいいだろうに」

本間は眉間に皺を寄せて黙りこんだ。「皆、死んだわけじゃないだろう」と独り言のように漏らす。

「死なれてたら困りますよ」

すかさず、望はぼそりとそうつぶやいた。まっすぐに前を見つめるその眼差しは真剣そのもの。そんな望の横顔を凝視し、本間は「そうだな」とほくそ笑んだ。

「しかし……お前にしては珍しいな。子ども相手にムキになるとは。本気で首を絞めることはなかったんじゃないのか」

「ああ、そのことですか」先刻までの神妙な面持ちは消えうせ、望の口許には柔らかい笑みが浮かんでいた。世間話でも始めそうな雰囲気が漂っている。「本気を出さざるを得なかった――というのが正直なところですね」

「どういう意味だ？」

望は姿勢を正すと、おもむろにポケットにつっこんでいた左手を取り出した。本間が訝しそうに見守る中、割れ物でも扱うかのようにそうっとシャツの袖をまくる。一つ、二つ、と折っていき、それは現れた。

本間はぎょっと目を見開いた。顔色が一瞬にしてがらりと変わる。

「先生の言うとおりですね」本間に視線を向けることなく、ぽつりと望はそう言った。「彼を無理やり捕まえるのは、文字通り、骨が折れそうです。大人しく自首してもらったほうがよさそうだ」

睨みつける視線の先にあるのは、骨ばった左手首。そこには、くっきりと手形が残っていた。まるで刺青のように青く刻まれた五指の跡。怨霊が残した呪いのような印。

望はニヒルな笑みを浮かべ、そのアザを隠すように右手でつつんだ。

「ちょっとでも力を抜いたら、左手をもぎとられていました」

「もぎ……」と本間はぎょっとして口ごもった。

望はそんな本間を脅すような目つきで見上げて、「大げさじゃないですよ」と釘をさすように言った。「あの子もあれで、怪物なんですから。――僕と同じく」

インターミッション：孤独な怪物　―下―

子どもは残酷なほどに敏感だ。特に、異質なものを探知する能力にかけては超一流。その拒絶反応といったら……恐ろしいほどに正直だ。

だから、すぐに分かる。いつのまにか開いた他人との距離。自分は何かが違う、と。

オークションから連れ出され、初めて『外』にでたのが五歳（ということにしている）。それから一年、『おけいこ』を受けた。『おけいこ』……誰がつけた暗号なのか、なんとも気の抜ける呼び方だが、カインノイエに連れてこられた子どもたちが最初にすることで、重要な行い――そうだな、通過儀礼のようなものだった。表のルールや常識を一から学び、そして俺のような商業用のクローンは『手加減』を学ぶんだ。

この『手加減』が一番難しい。教えるほうも、覚えるほうも。

俺のような特殊なクローンは、生まれたときから人並みはずれた筋力と五感を持っている。だから、それが当然だと思い込んでしまう。研究所なんていう外と隔離された場所に閉じ込められていれば、なおさらだ。なにが『普通』かさえ、学ぶ機会はないんだからな。

そんな状態でいきなり外に引っ張り出されても、すぐに適応できるわけがない。どこまで力を出したらいいのか、そのサジ加減が全く分からなかった。そのつもりはなくても、握手しただけで相手の指を折ってしまう。よくあることだった。

それだけじゃない。

なぜ、ベランダから飛び降りてはいけないのか。なぜ、わざわざ階段で降りなきゃいけないのか。なぜ、ドアをこじあけてはいけないのか。なぜ、鍵を開けなきゃいけないのか。

出来ることを我慢しなきゃならない。――それが理解できなかっ

た。

なぜ、なぜ、なぜ……頭の中はその言葉でいっぱいだった。研究所での生活しか知らなかった俺にとって、世界は未知数で、そして厳しすぎたんだ。

数ヶ月経って、なんとなくだが、『手加減』はできるようになった。どう例えればいいんだろう。生卵を割らない、ぎりぎりの握力を覚えたような感覚……だと思う。うまく説明できねぇや。

でも、完璧ではなかった。ふとした瞬間に、力が漏れた。コップも皿も、何枚割ったか分からない。うまくいかなくて腹が立って、さらに物を壊して迷惑をかけた。

それでも、一年間。辛抱強く、『おけいこ』をしてくれたんだ。俺を『迎え』に来たカイン、俺を育ててくれた人――広幸さんは。

そのおかげで、『おけいこ』を終えてすぐ、学校に通えるようになった。カインの子どもが必ず通うことになる小学校だ。親父の知り合いが校長をしているらしい。どういうつながりなのかは誰も知らない。親父も話そうとしないから、聞かないほうがいいのだろう、と皆思っていた。

最初はうまくいっていた。『普通』の子どもたちと接するのは初めてで、ひどく緊張していたが……転校生に、クラスの連中は優しかった。

とはいえ、質問攻めには苦労した。広幸さんに叩き込まれた『嘘』を、ごく自然に答えなきゃいけなかったからだ。

俺は世田谷のバプティスト教会で育った孤児で、孤児の援助をしているボランティア団体の助けでこうして学校に通えるようになった――その『嘘』は、すぐに『事実』に変わった。広幸さん仕込みの俺の『演技』がそれを『事実』にしたんだ。

しかし、うまくいった、と安堵したのもつかの間、やがてそれは重荷になっていった。

その『事実』をこれからずっと背負っていかなきゃならない。一

生、『演技』を続けなきゃならない。なんのためにそこまでしなきゃいけないんだ――という漠然とした不満がつのっていった。

たぶん、そのストレスもあったのだろう。ある日、つい……『手加減』を間違った。体育の時間、フォークダンスの練習中のことだった。なにがきっかけだったのか分からない。つい、力が漏れたんだ。相手役のクラスメイトの手首を折ってしまった。

その場は大騒ぎになったが、事情を知る校長がうまく丸め込んでくれたらしく、教師や保護者が騒ぎ立てるようなことはなかった。俺が足をすべらせて転びそうになった拍子に……確か、そんなシナリオだったような気がする。もちろん、でっちあげだ。だが、手をつないだ拍子に手首を折った――というよりも、信憑性があるだろう。

当然、怪我をした本人はそうはいかない。元々大人しい性格だったせいか、何も言おうとはしなかったが、その事故以後、俺と距離をおくようになった。そして、他のクラスメイトも徐々に離れていった。なんとなく感じ取ったのだろう、俺が異質な存在だ、と。

そのうち、俺は学校に行かなくなった。『世界』がうっとうしくなった。

「また、学校に行かなかったのか？」

責めるわけでもなく、からかうわけでもなく、広幸さんは明るい声でいつもそう訊ねてきた。

学校に行かなくなって、一ヶ月ほど経ったころだったか。冬の寒い夜だった。

広幸さんは高校から帰ってくるなり、学ランを脱ぎ捨て、「今日はなにしてたんだ？」と続ける。それも、いつものことだった。

くっきりとした二重に、やや垂れた目。下がり眉に特徴的な大きな耳。それらを全く隠さない短い黒髪。見た目も中身も、さわやかで優しさに溢れた人だった。どうやら、学校では『癒し系のお猿さ

ん』と呼ばれていたようだったが……。

「本、読んでた」

ベッドによりかかり、カーペットに座りこんでいた俺はそう答えた。――嘘だった。本当は、一日中、考えこんでいたんだ。幼いなりに、悩んでいた。自分の存在。なぜ、ここにいるのか。それを見失いそうになっていた。

でも、広幸さんにだけはそれを言っちゃいけない。なんとなく、そんな気がして、一言もその胸のうちを明かしてはいなかった。

ただ、今思えば……あの人のことだ。気付いていたんだろうな。俺が言わなくても、全てお見通しだったに違いない。だからこそ――

「会わせたい子がいるんだ。外に出るぞ」

そう言って、広幸さんは俺にコートを差し出してきた。

連れてこられたのは、古いアパートの前だった。二階建てで、今にも崩れてしまいそうな長屋型の木造アパートだ。

カインが住んでいるにしては、粗末過ぎるな、と思った。だが、広幸さんが俺を連れてくるとしたら、カインの部屋しか考えられない。

「ここ、誰の家？」

じっと目の前のアパートを見つめて、ぽつりと訊ねた。すると、広幸さんは思わぬ名前を口にしたんだ。

「坂本みゆちゃんのおうちだよ」

坂本みゆ――俺が手首を折ってしまったクラスメイトの名前だった。
ぎくりとしてとっさに振り仰ぐと、広幸さんと目が合った。広幸さんは白い息を漏らす口許にやんわりと笑みを浮かべて、「そう」とつぶやいた。「謝らなきゃ」
俺の第一声は「なんで！？」だった。広幸さんから逃げるように後じさり、「なんで謝らなきゃいけないんだよ」とガキみたいなこと……いや、ガキらしいことをわめいた。
それでも、広幸さんは嫌な顔一つしなかった。俺を無理やり引き寄せるようなこともせず、その場にしゃがみこんだ。俺と目線を合わせるように。

「やっぱり、まだ謝ってないんだな」呆れたような口調だったが、それでもその眼差しは暖かみのあるものだった。「悪いことをしたら、謝らなきゃいけないんだよ」
「悪いこと……しようとしたんじゃない。わざとじゃ……」

口ごもって俺はうつむいた。
罪を逃れよう、とか、弁解しよう、とか……そういう気はなかった。ただ、悔しかったんだと思う。無性に悔しかった。そんな俺の気持ちを量ったかのように、

「手をつなごうとしただけだよな」

慰めるような、柔らかい声だった。ハッとして顔を上げると、広幸さんは「分かってるよ」とだけつぶやいた。
こみ上げてくるものがあって、俺は両手を固く握り締めた。やはり力が漏れて、血がにじむほど手の平に爪が食いこんだ。
「表の世界は」と、広幸さんはおもむろに語りだした。目を側め、

どこか憂いに満ちた表情で。「表の世界は、俺たちには暮らしづらいところだ。たくさん嘘をついて、たくさん我慢しなきゃならない。理不尽なことばかりだ」

聞いたことのない広幸さんの声だった。苦しげで、怒りすら感じられた。それでいて、今にも消えてしまいそうな儚さまであった。不安になって、俺は引き寄せられるように広幸さんに歩み寄ろうとした。

そのときだった。

「でも」と、いつもの広幸さんの明るい声がして、足が止まった。優しげなとろんとした目で俺を見つめ、広幸さんは晴れやかな笑みを浮かべて言った。「でも、いいところなんだ」

説得するような、力強い一言だった。

俺はぎょっと目を丸くした。いいところ？　どこが？　そんなの嘘だ、と思った。

首を横に振ると、広幸さんは苦笑して、

「そのうち、そう思える日がくる。じゃなきゃ、俺は……」

口ごもって広幸さんは視線を落とした。

何かを言いかけたようだったが……何を言おうとしたのか、俺は今でも分からない。ひどく不安そうな表情だったのをよく覚えている。

だからこそ……あのとき、なにを言おうとしたのか――ずっと訊ねられなかった。

「それに」と、弾けた声で切り出したときには、広幸さんの表情にもう影はなかった。「お前には俺がいる。他の兄さんや姉さんもい

る。表で我慢したぶん、俺たちにぶちまければいい。どうしても我慢できなくなったら、俺が『迎え』に行ってやる」

広幸さん――広幸兄さんはそこまで言って、俺に手を差し伸べた。

「な」と兄さんは掠れた声で言った。「そのための兄貴だろ」

頼む、と言いたげな熱のこもった口調だった。懇願するような眼差しだった。

「一緒に謝ろう」

納得したわけではなかった。答えがでたわけではなかった。でも……いいところだ、という兄さんの言葉を信じたいと思った。

俺は差し出された手をしっかりと取った。外に出よう、と誘われたあの夜のように。『手加減』せずに握っても、兄さんの手が壊れることはない。受け止めてくれる。顔をしかめることもない。握り返してくれる力が嬉しかった。

兄さんには我慢しなくてよかった。そんな存在があったから、表の世界で演じ続けていられたんだと思う。

広幸兄さんがいる。その事実がずっと支えていてくれたんだ。

まあ、そのあと、曽良と砺波が現れて……もはや自分のことで悩んでいる場合じゃなくなったこともあるんだが。あいつらのおかげで、ずいぶん精神的に鍛えられた。良くも悪くも……。

＊　＊　＊

「曽良くんと砺波ちゃん……うん、分かる気がする」と私はくすりと笑って、彼の背中に問いかける。「それで……その子に謝ったの

？」

「ああ。なにをいまさら、て顔されたけどな」

振り返る様子はない。二歩先を歩きながら、彼は感慨深げに答えた。

「そっか」

丁度、短い橋にさしかかったところだった。街灯もない、真っ暗な闇にかかった橋。彼と私の足音だけが辺りに響いていた。

彼がどうしていきなりこんな話を始めたのか、正直さっぱり分からない。

本間の屋敷を出てから、彼はずっと黙り通しだった。あんなことがあったあとだもの。動揺していて当然。無理に話しかけてもよくないだろう、と私も黙っていた。

すると、突然、彼は思い出話を始めたのだ。それも、彼が小学生のときの話。

意図は分からなかったけど……彼が自分の過去を語ることは珍しかったから、嬉しかった。特に、自分から広幸さんの話をしてくれたことは初めて。

育ててくれたお兄さんだもの。彼にとって特別な存在のはずなのに、広幸さんの話をしてくれたのはたった一度だけだった。料理を誰に教わったのか――私がそう訊ねたときだけ。それも、ほんのちょっと。

聞いちゃいけないことなのか、と思ってたんだ。私は首をつっこんじゃいけないのかな、て。だから、嬉しい。なんだか、やっとお兄さんに紹介してもらえたような気分。つい笑みがこぼれてしまう。

「和幸くんが優しいの、広幸さんに似たんだね」

できれば、会ってみたかったな。さすがにそれを口にすることは憚られて、心の中で言い添えた。広幸さんに一番会いたいのは、和幸くんに違いないもの。

遠くでバイクの轟音が木霊していた。暴走族……かな。もう四時前。夜明けまで走り続けるつもりだろうか。ぼんやりとそんなことを考えていると、

「俺は運がよかっただけだ」

急に彼は立ち止まり、深刻そうな低い声でつぶやいた。「え」ときょとんとする私の前で、彼は鉄製の手すりに手をかけた。

「どうか……した？」

私も立ち止まり、遠慮がちに訊ねた。

彼は手すりによりかかって遠くを見つめている。暗くて彼の表情は伺えない。もう少し近づこうかとも思ったけど……彼の雰囲気がそれを阻んだ。なぜだろう、今の彼は近づきがたい。縮められない距離を感じる。

「この世界にクローンの居場所はない。クローンとして生まれて、この世界で生きようとすれば……必ず壁にぶちあたる。どこにいっても必ず、阻まれる。必ず、だ」

私を見ようともせず、彼は淡々と語った。私は口を挟むことも出来ずにそばで立っていることしか出来なかった。

「あいつもきっと、そうだったんだ。世界との溝に苦しんで生きてきたはずだ」

悔しそうな口調だった。

「あいつ……？」

一台のバイクが近づいてくる音が聞こえてきた。足元に影が落ちて、それは徐々に長く伸びていった。やがて耳をつんざく音が通り過ぎ、一瞬だけ、つらそうな彼の横顔がはっきりと見えた。

見覚えがあると思った。どこか影のあるその表情……カインだった彼のものだ。

不安にかられて、焦ったように訊ねていた。

「誰の話をしているの？」

まるで責めるような口調になっていた。しまった、と思ってももう遅い。言い直すのも変だし……。

彼はすぐには答えなかった。

表情が伺えないのがもどかしい。

「和幸くん？」辛抱強く待つことができずに、つい呼びかけてしまった――そのときだった。

「兄貴……だったかもしれない」

和幸くんは消え入りそうな声でつぶやいた。

「あにき？」

思わぬ言葉に目を瞬かせ、私はそう聞き返す。

「誰かが『迎え』に行っていれば……」と息苦しそうに言って、和幸くんは首をひっかくようにつかんだ。「あいつも俺の兄貴だった」

悔しさを噛み締めるような言い方だった。胸が張り裂けそうなほど、痛々しい声。

「足りないんだ」と彼は搾り出したような声で続ける。「俺たちだけじゃ足りないんだ。三神さんの言っていた通り。カインだけじゃ、どうにもできない。兄弟を救いきれない」

私は何も声をかけられなかった。ただ黙って、立ちつくした。

なぜかは分からない。でも……できれば、彼が口にした今の言葉を全て、聞きたくなかったと思った。

黒幕の娘

物音がして、女はむくりと起き上がった。白に近いブロンドの髪をかきあげながら、不機嫌そうに厚い唇をとがらせる。

暗くてよく見えないが、人影がなにやらせわしく駆け回っている。誰かは確認せずとも分かる。いつのまにやら、自分ひとりで占領していたダブルベッドがなによりの証拠だ。

女は「ああ、もう」と苛立った声をもらし、ベッドサイドランプに手をのばす。銀色のチェーンをひっぱると、帽子をかぶったランプがオレンジの光で辺りを照らした。

「何時だと思っているのよ？」

毛布を放り投げ、女はベッドから飛び降りる。真っ赤なベビードールをひらりとなびかせながら、腰をくねらせ手をあてがった。

いつもの奥二重は、寝起きだからか、一重になっている。腰まであるロングヘアーは、しかし、寝癖ひとつない。流れるようなストレートだ。

特徴的な大きな黒目は、普段以上に鋭い眼光を放って右へ左へとせわしく動いている。その視界に捉えているのは、泥棒のように部屋を駆け回る青年だ。

馬の尻尾のように、一本にまとめた長い黒髪がひらひらと目の前を横切っていく。女はそれを何度か目で追ってから、その小さな鼻からは想像できない、まるで闘牛のような鼻息をたてた。

「ちょっと、答えなさいよ、三神！」

とうとう、声を荒立てて、青年――三神の（もはや目障りな）黒い尾をぐいっとつかむ。

三神はいきなり後ろに重心をうばわれ、「痛っ」と顔をゆがめて立ち止まった。反射的に頭をおさえたために、腕いっぱいに抱えていた衣服がどさっと落ちる。

「あいかわらず、朝から激しいね、ユラ」

からかうような笑みを浮かべ、三神は振り返った。手の平を黒髪がさらりとすべっていくのを見送って、ユラは三神を睨みつける。

「冗談はいいわよ。いったい、どうしたっていうの？」

ちらりと足元を見れば、スーツケースがぱっかりと口を開け、そこに無造作に荷物が詰め込まれている。スーツケースが気の毒にさえ思えた。

「荷造りなんてしちゃって、なんなのよ？　あと一日あるでしょう？」

裏世界の若き企業家と付き合い始めて三年。そろそろ結婚も本気で考えるようになって、やっとこぎつけた海外旅行。

きっかけは、ある雑誌で読んだ記事だった。海外旅行でこそ、カップルの真の絆が試される――そんな見出しで始まった記事は、眉唾もののうんちくやうさんくさい屁理屈のオンパレード。くだらない、と思いつつも、ユラは無視できなかった。

思えば、三神とまともなデートなどしたことはなかった。いつも彼は何かを警戒しているようだったし、連絡がつかないこともしょっちゅうだった。二人きりで丸一日過ごしたことさえない。記事の真偽は確かではないが、ニホンを――いや、仕事を離れて、二人きりで水入らずの時間を過ごすのはいいアイディアかもしれない。

そう考えたユラは、三神を根気強く説得したのだ。

――わたしは辛抱してきたほうだわ。このままじゃ、いつまでたっても結婚は夢の話よ。ねえ、結婚する気、あるんでしょう？　ちょっとくらい、わたしに付き合ってくれてもいいじゃない。どうするの。旅行か、別れるか。二つに一つ。

そんなことをまくしたて、ユラはごり押しした。三神は最後まではぐらかそうとしていたが、さすがに「別れる」とまで言われてしまっては、承諾するしかなかったようだ。――丁度、『お得意さま』の一人が病で倒れたことも、契機になったのだろうが。

とにかく、この旅行はユラにとっては特別なものなのだ。だからこそ、予定より早く帰り支度を始める三神に、不信感さえ抱いていた。

無論、三神もそれはよく分かっているだろう。

三神は深刻な表情を浮かべてユラと向き合った。その細い肩を両手でしっかりとつかみ、真っ直ぐにユラを見つめる。それは思わずぞくっとしてしまうほど熱い眼差しで、ユラの頬は自然と赤く染まった。

「いいかい、ユラ」低く落ち着いた声で切り出して、三神はユラの肩に置く手に力をこめる。「僕はとんでもない事実を見逃していた。情報屋としてありえないミスだ。それを、すぐにでもある人物に伝えたい。電話は危険だ。伝言も禁じられてる。彼の部下たちには言わないように、と口止めされているからね。だから、直接、その人物に伝えなきゃならない。至急だ」

珍しく、三神の表情に緊張の色が浮かんでいて、ユラは不安にかられた。左肩に置かれた三神の手にそっと触れ、心配そうな眼差しを送る。

「とんでもない事実って？」

おずおずと訊ねると、三神はユラの肩から手を離し、くるりとドレッサーに体を向けた。

じっと一点を見つめるその横顔は涼しげで、知性を感じさせる。しかし、眼差しだけは鋭く攻撃的。熱く燃え滾る炎を瞳の奥に隠しているかのようだ。

ユラはそんな三神の視線を追って、ドレッサーに目を向けた。そして――

「なっ……！」

視界に飛びこんできたものに、ぎょっとする。怒りの熱風が身体の中で巻き上がった。

鏡の前に置かれていたのは、一台のノートパソコンだった。三神が持ってきたパソコンだ。――ユラが隠しておいた三神の商売道具。

「ちょっと……」と、ユラは頬をひきつらせた。眉をつりあげ、背後から三神の肩をつかむ。「どうやって見つけだしたのよ！？　てか、どんだけ言えばいいの！？　この旅行中は仕事は無ぁしぃっ！」

怒鳴って三神の肩をひっぱる。――しかし、三神の体はぴくりとも動かない。銅像でも相手にしているかのようだ。まるで手ごたえがない。

「三神？」と訝しげに声をかけるが、三神は振り返る素振りさえ見せず、腰を曲げてキーボードを一つたたいた。するとパソコンが目を覚まし、真っ暗だった画面が青い光を放つ。

「ねえ……」

恋人の異様な気配にたじろぎつつも、ユラは三神の肩から手を離せずにいた。離したら、そのまま三神がどこかに行ってしまうような気がした。

そんなユラの不安もよそに、三神は素早くパスワードを打ちこんで、背筋を伸ばす。

パソコンが寝起きの第一声を放って、画面に――スリープ直前まで三神が見ていたであろう――インターネットのあるページを映し出した。

ユラは三神の肩に手を置いたまま、それを注意深く見つめる。

「ブログ？」

なんてことはない、誰かのブログだった。それも、テンプレートをそのまま使ったような簡素なデザイン。さらりと目を通しただけだが、書いてある内容も大したことはなさそうだ。授業とバイトの愚痴ばかり。学生だろうか。それとも、全てカモフラージュで、暗号化されたメッセージでも隠されているというのか。

「これがどうしたのよ？」

訊ねると、三神はちらりとユラを一瞥してから、「ついさっき、見つけたんだ」とつぶやく。

やっぱり、隠れて仕事してたのね。ユラはむっとしたが、そんなことを口にできる雰囲気ではない。言葉を喉の奥に押しこんで堪えた。

「夕べの記事。そこに画像が貼ってあるでしょう」

三神に顎で促され、ユラは「画像？」とブログに視線を戻した。

表示されている記事の日付を確認し――日本時間、夜中の二時に投稿されている――画像を探す。確かに、『バイト中だったけど（笑）、盗み撮りに成功！』という文章の下に画像があった。
そこに写っているのは一人の少女。どこか不安げな表情を浮かべる、浅黒い肌をした中東系の少女だ。黒いホルターネックドレスに身を包み、胸元に垂らしたネックレスを握り締めている。
気付けば、三神に手をひっかけたまま、ユラは身を乗り出して食い入るようにその画像を見つめていた。

「きれいな子ねぇ」

自然と感嘆の声がもれる。
目の錯覚じゃないか。加工された画像じゃないか。そんな疑心を抱いてしまうほど、その少女は神秘的な美しさを放っていた。
ほっそりとした身体。輪郭をなぞるように流れる短い黒髪。彫りの深い顔立ち。深みのある漆黒の瞳。ふっくらとした唇。
化粧っ気もなく、宝石も身に着けていない。ドレスも地味だ。決して派手な見目形ではない。それなのに、目が奪われてしまう。彼女を囲むゲストたちのきらびやかな衣装が見劣りしてしまう。抗えない不思議な魅力がある。

「夕べ、『フィレンツェ』のパーティーで撮られた画像らしい」
「フィレンツェ？」

ユラは弾かれたように首をひねって三神を見上げる。フィレンツェといえば、トーキョーのオークション会場の一つ。もちろん、闇オークションも行われている場所だ。
雲行きが怪しくなってきたのを感じて、ユラは眉根を寄せた。
「彼女は……」三神はパソコンを睨み詰めたまま、苦しげな声はも

らした。「彼女は、本間秀実の養女(むすめ)。――本間カヤだ」
「むすめ？」ユラは目をぱちくりと瞬かせる。「本間秀実に娘なんていたの」

どことなく、興味の無さそうな声色になってしまった。仕方ない。興味が無いのだから。
裏での情報屋稼業は、彼女にとっては副業のようなもの。裏社会につま先だけ踏み入れている程度だ（三神に言わせれば、彼女は『アマチュア』らしい）。彼女の稼ぎは、表での探偵業がメイン。仕事は、もっぱら、浮気調査だ。政治家なんて関心がない。
しかし、三神は気にする様子もなく、独り言のように続ける。

「養女だよ。十日前に養子縁組を済ましている」そこまで言って、悔しげに顔をしかめた。今にも舌打ちでもしそうな表情だ。「旅行に向かう前に、正式な依頼を片付けておく必要があった。依頼もない本間秀実の養女を気にかけている暇はなかった」

言い訳でもしているような口調だった。よっぽど、何かを悔いているのだろう。
ユラは顔をしかめて小首をかしげる。
情報屋は中立、執着は命取り。そんなことをいつもユラに言い聞かせているのは、他でもない三神だというのに。あきらかに、本間秀実に執着している。依頼もないことを自ら調べるなんて、三神らしくない。金のための情報収集――それを貫き通すことが、身を守る方法。情報屋としての一線を越えれば、命を落とすことになりかねない。その危険性を三神はよく分かっているはずだ。
依頼を受けての仕事である限り、情報収集の過程で危険に巻き込まれても守ってくれる人間がいる。情報屋(みかみ)に死なれては困る人間――つまり、依頼人だ。事実、報酬の交渉とともに、三神は必ず依頼人に『必要とあれば護衛を用意すること』を要求している。

もちろん、元依頼人から命を狙われることもある。だからこそ、の中立だ。次から次へと止まり木を変え、味方もつくらなければ、敵もつくらない。あるときは味方で、あるときは敵。『厄介だが利用価値のある存在』になること――それが三神流の生き残る術だった。

そのはずなのだが……。

「いったい、なんなのよ？　なんで、本間秀実にこだわるの？」呆れたようにユラは言って、姿勢を正した。ちらりとパソコンに目をやって、ため息混じりに苦笑する。「娘がいたって別にいいじゃない」

「もちろん、いいさ。僕にとっては、ありがたいくらい。――情報屋としては、ね」

「なに、それ？」

ユラがじとっと睨みつけると、三神は肩を竦め、「二週間前……だったかな」と軽い調子で語りだした。「あるお得意さんのところに、今後の相談もあって見舞いに行ったんだ」

まるで遠い日を思い出すかのように、三神は天井を振り仰ぐ。

「そこで、言われちゃったんだよ。『今回ばかりは君の情報は間違っていた。彼女は、今や息子の大切な存在。だから、もう調べるな』、て。依頼人の希望だから従うしかなかったわけだけど……」

ユラは豆鉄砲をくらった鳩のようにぽかんとしてしまった。なんの話だか、さっぱり分からない。皆目見当もつかない。完全に迷子だ。

まあ、今に始まったことでもない。お互い情報屋だと話す内容に制限もでてくる。こうして内容の読めない愚痴のようなものを長々

と聞かされることはよくあった。もちろん、お互いに、だ。
しかし、それにしても、今朝の三神はよくしゃべる。これは、思わぬ情報をつかんで興奮しているときの症状だ。
だが、なにがそれほどのビッグニュースなのだろうか。本間に娘がいたこと？　それだけで、ここまで興奮するだろうか。ユラが釈然としない様子でいると、三神は「残念ながら」と皮肉そうに笑った。

「僕の情報は正しかった。――あの子は『黒幕の娘』だ」
「くろまくの娘？」ユラはきょとんとして聞き返す。「って、何の黒幕よ？　何かの暗号？」
「そんなとこ」と三神はさらりと流して、「そうだ」と思い出したようにさっさと話題を変えた。「そのブログなんだけど、さっきの画像の下に、もう一つ画像があるでしょう。ちょっと見てくれるかな。ユラにも確認してほしいんだ」
「は？」ととぼけた声を漏らし、ユラは柳眉を寄せる。「なに、突然？　また、画像？」

三神は何も言わずにこくりと頷く。口許には笑みが浮かんでいるが、目は真剣だ。急かしているようにさえ見える、射るような眼差し。ユラは「なんなのよ、もう」と頭痛でもするかのように顔をしかめた。とりあえず、三神に背を向けパソコンに向かうと、マウスを手の平におさめる。
それにしても、三神が自分に確認を求めるだなんて不気味だ。
総括して、今朝の三神はおかしすぎる。いったい、何事だろうか。ユラは首を捻りつつ、言われたとおりに画面をスクロールして――
「あら……」
はたりとマウスが止まる。ぱちりと瞬きして、ユラは突然近眼に

でもなったかのように、画面に顔を近づける。じいっと見つめて、「やっぱり、そうだわ」と不思議そうにつぶやいた。
ユラの瞳に映りこんでいるのは、一枚の画像だ。先刻の『本間カヤ』の画像の下に貼り付けてあった画像。こちらも、やはり『本間カヤ』の隠し撮りではあるのだが……今回ばかりは、ユラの注意を引いたのは彼女の美しさではなく、その背後に写りこんでいる人物だった。

「これ……長谷川正義くん、よね」画面にかじりつきながら、ユラは独り言のようにぼやいた。「どうして、配膳人なんてしてるの？
ゲストに呼ばれていいくらいのお家柄のはずよ」

誰かと会話をしている『本間カヤ』の背後で、むすっとした表情で立っている配膳人の少年。その顔にはっきりと見覚えがあったのだ。三週間ほど前だっただろうか、ある人物の調査を依頼してきた少年だ。名前は長谷川正義。捜していたのは、彼のクローン、藤本和幸だった。
彼の調査は難航し、困り果てたユラは三神に助けを求め、藤本和幸の住所とその正体――裏社会の『殺し屋』であること――を教えてもらったのだ。

「！」

そこまで思い出し、ユラははっとした。あることに気付き、口をへの字にまげる。頭が混乱し始めていた。
再び、画像の少年をねめつける。
そして、自問した。この少年は、どちらだ？　と。

「やっぱり、ユラもそう思うんだね」

背後から、落ち着きはらった三神の声がした。ユラは視界を邪魔するブロンドの前髪をさらりと耳にかけながら、振り返る。

「『やっぱり』？　じゃ、確認してほしいことって……」

三神は答えなかった。意味深な笑みを浮かべるだけ。ユラはさすがに我慢ならずに、くるりと三神に向かい合い「ちょっと」と腰に手をあてがって怒声をあげた。「ここまで来て、だんまりなわけ？　いい加減にしてよ。いったい、なんなの？　なにが起きてるっていうのよ？」

「分からない。――分からないから、落ち着かないんだ」

「！」

ユラはびくんと肩をふるわせ、目を見開いた。自分の耳を疑った。

『分からない』――それは情報屋にとって屈辱的な言葉。特に、情報屋として絶対の自信を持つ三神が言うはずもない言葉だ。

ごまかすための嘘ではないだろう。三神の神妙な面持ちがそれを物語っている。

「僕が戻るまで活動は休止のはずだった。なのになぜ、彼はオークションに潜入してる？　まさか、バイトじゃないだろう。彼らがオークションに好んで赴くはずはない。本間カヤは……」

三神はそこまで言って、言葉をきった。思いつめた表情でふっと息をつき、

「ごめんね、ユラ。このまま、じっとしてはいられない。朝一の飛行機で帰りたいんだけど、いいかな」

申し訳なさそうに笑む三神に、ユラはもはやあきれ返ってしまっ

た。事情を言う気があるのか、ないのか。情報の寸止めばかりだ。どっと疲れがおそいかかってきた。

とりあえず、三神の様子がおかしいのはたしかだ。――それだけ分かれば、答えは一つ。

「いいかな、なんて……選択の余地ある？　いいわよ、帰りましょう」額を押さえ、ユラはげんなりとする。「でも、朝一……か。香港まで行かないと早い飛行機はないわね。てことは、フェリーがでるまで待たないといけないし……」

嫌そうな表情を浮かべつつも、ぶつぶつと帰りのプランを立て始めたユラ。そのさまに、三神は愛しそうに目を細めた。すっとユラとの間を縮めると、彼女の背中に腕を回していきなり体を引き寄せる。ユラに驚く暇も与えず、額に口付けをすると「ありがとう」とささやいた。

ユラは少しの間、面食らった表情を浮かべていたが、くすりと笑みをこぼして三神の背中に腕を回した。たくましい胸に顔をうずめて瞼を閉じる。ふわりといい香りがした。ユラが一番、安心する場所だ。

すっかり大人しくなったユラの背中を撫でながら、三神はパソコンを見据えていた。その画面に映る、麗しき少女と『無垢』な少年を目に焼き付けるように凝視する。――約二ヶ月前、三神自身が（間接的ではあるが）出会わせた二人だ。

「運命の女（ファム・ファタル）……か」

三神は複雑な表情を浮かべ、ぽつりとつぶやいた。

朝の会　―上―

「和幸と砺波、前、付き合ってたんじゃないの？」
「まさか。少なくとも、曽良兄さんからはそのような話は伺っておりません」
「ええ？　だって、しょっちゅう、砺波は和幸の部屋に泊まってたじゃない。絶対、できてるのかと思ってた。やだ。じゃあ、和幸の誕生日に避妊道具をごっそり送ったの、無意味だったわね」
「アリサ姉さんらしい、卑猥なギフトセットですね」
「あら。かわいい弟たちの健全な性生活を守るのも姉の務めよ？　茶々」
「アリサ姉さんにだけは、わたしの性生活にぜひとも関わらないでいただきたいです」
「やだ！　あんた、留王といつのまに、そんな関係に！？」
「そ……そういう意味ではありません！　なぜ留王がでてくるのですか」

ごほん、とわざとらしい咳払いが響いた。
夢中で話しこんでいた二人――赤いカチューシャをした美女と、前髪を頭のてっぺんで留めている幼顔の少女――は、弾かれたように振り返る。

「お前たち……父親の前で、なんて話をしているんだ」

太陽が顔を出し始めたトーキョー。その朝日が差し込む小さな病室で、一人の初老の男がベッドに腰を下ろしていた。その頬がほんのりと赤いのは、傍らにある窓から注ぎこむ陽の光によるものか、はたまた……。
そんな男の背後で、くすくすと笑う声がした。ベッドに膝立ちし

て男の肩をマッサージしていた、おっとりとした顔つきの女だ。ベージュのシュシュで一つにまとめた黒髪を揺らしつつ、楽しげに笑っている。

「そうだ、いい機会です。報告させていただきます」ぴしっと姿勢を正して、お団子髪の少女――曽良の右腕、藤本茶々――は緑色のフレームに手をかけ、眼鏡をくいっとあげた。「アリサ姉さんの卑猥な発言は、他の兄弟たちに悪影響を与えています。この際、お父さんからきっちりと言ってください」

「悪影響？」茶々の隣で、ロングヘアーの女はあっと驚く。「いやぁねぇ、お父さまの行き届かない教育をわたしがしているだけじゃないの。実技まできっちり面倒みてあげてるんだから」

「ふ……不潔ですっ！」茶々は眼鏡の奥で、くりっとした大きな瞳をめいっぱい見開いた。振り返った勢いで、ズレ落ちそうになった眼鏡をかけなおしつつ、言葉を続ける。「そのような調子で、医師がつとまるとお思いですか？　すぐにセクハラで訴えらるのがオチです」

「こんな美しい女医にセクハラされて、嫌がる男がどこにいるっていうの？」

漆黒に染まった長い黒髪を指先に絡めつつ、女は高らかに笑った。

無茶苦茶なことを言っているようだが、的を射ていた。彼女にはそれを堂々と言えるだけの美しさがある。

トーキョー中の才媛が集まる白亜女子医科大学のマドンナにして、カインの美姫（びき）――藤本アリサだ。

艶やかなロングの黒髪に映える、赤いカチューシャ。知性を漂わせる切れ長の目には、夕陽のようなオレンジ色のアイシャドウ。朝日をはねかえして輝く白い肌。薄桃色の瑞々しい唇。目鼻立ちの整った、まさに理想的な顔立ちに、ばっちりと完璧なメイクが乗せられている。

さらに視線をずらせば、ほっそりとしなやかな肢体。柔らかな曲線を描く、女性らしいくびれ。通り過ぎる男は皆振り返るだろう、とその様が安易に想像できる。
男のカインなら、一度は彼女に恋をする――そう言われているのも納得だ。しかし、そんな彼女も完璧ではない。
カインは彼女に恋をするが、それは『一目ぼれ』に限定される。なぜなら――

「てゆうか、そんなにマジになるってことはぁ……やっぱり、留王とデキてるのね」

にんまりと笑んで、アリサは声高らかに言い放った。

「違います！　いい加減にしてください、アリサ姉さん」
「もぉ、照れなくていいのにぃ。姉妹じゃない。アドバイスしてあげるわよ」
「いりません」
「意外とツンツンしてる奴が、夜に赤ちゃん言葉で甘えてきたりするのよね。留王はどうなのかしらぁ？」

アリサは人差し指を頬にあて、妖しげな含み笑いを漏らした。
一気に、茶々のふっくらとした頬が紅潮する。

「品がない冗談はやめてください！　想像したくもありません」
悲鳴にも似た茶々の怒号が病室に響いた。しかし、アリサはひるまない。
「そうだ、どうせなら録音してよぉ。ばらまいてやろうかなぁ」

しなやかな指先で笑みがこぼれる口許を隠し、アリサはしとやかに笑った。――そう。カインの男たちがアリサに一目ぼれしかしない理由は、この中身と外見の不一致だ。

やがて、アリサと茶々の言い合いが始まった。といっても、一方的にアリサが茶々をからかっている具合なのだが。

もはや、彼女たちの父親――藤本マサルは止める力もわかず、ぐったりとして頭を垂らしていた。しかし、このまま時間が流れるのをのんびり待っていることもできないだろう。大事な『待ち合わせ』があるのだから。

藤本は困った表情を浮かべつつ、ちらりと窓際に佇む女に目をやる。

「なんとかしてくれ、静流。そろそろ、本題に入りたい」

藤本が助けを求めたのは、Tシャツにジーンズというラフな格好をした女だった。しかし、モデルのように様になっているのは、そのスレンダーなスタイルのせいだろう。

肩にふれる、きついウェーブがかった黒髪。背にした窓から差しこむ光が、彫りの深い顔立ちに濃い陰影を落としている。不機嫌そうではあるが、その落ち着きはらった表情には、十九とは思えない貫禄がある。

カインの裏番長とおそれられる、藤本静流だ。

低レベルな口論を繰り広げる姉妹を冷めた眼差しで見つめ、

「了解」

そうつぶやいて、面倒そうにため息をついた。

そんな静流の（カインなら震えあがるべき）様子も、ムキになって言い合いを続ける二人に届くわけは無く――

「アリサ姉さんは女としての自覚がないのですか。もうすこし、品性を磨くべきです」
「茶々にしてはやたらとつっかかるじゃないの。やっぱり、デキてるんだ」
「何度言えばいいのですか。いい加減にしてください！」
「だから、なにムキになってるのよぉ。あ……もしかして、他に意中の殿方がいるの？」
「ちがっ――」

ぎょっと茶々が目を見開いて、否定の声をあげようとした、そのときだった。――いきなり、耳をつんざく破裂音が衝撃とともにかけぬけた。

「！」

騒いでいた二人は目を点にして見つめ合い、硬直した。
ようやく静けさが戻った病室に、ぱらぱらと石ころのような欠片がどこからともなく落ちてくる。

「……」

長い沈黙。誰も声を出そうとはしなかった。
やがて藤本が、嫌な予感に胸の痛みを感じつつ、おずおずと振り返る。その瞳に映ったのは、朝日を背にした自由の女神像……いや、違う。天へと突き出した右手に抱かれているのは、たいまつではない。硝煙の匂いを撒き散らし、熱い息を立ち昇らせているそれは、鈍い光を放つ鉄の塊。――銃だ。

「冗談でしょ、静流」

呆れ果てたようなアリサの声がした。
自由の女神――否、カインの女帝は「さて」としゃがれた声を鳴らし、高々と掲げていた銃をゆっくりと下ろす。集まる視線の中、くるりと右手でそれを回して、ベッドテーブルの上に置いた。
「銃と言えば……」低い声でそう切り出して、静流は鋭い眼光を藤本へと向ける。「今日のレオン・リャンとの取引だな、親父」
藤本は言葉がでてこなかった。呆然として、それからがっくりと肩を落とす。
「ありがとう、静流」
もはや諦めたような声だった。
その背後では、この場でたった一人、始終にこにこと暢気な笑みを浮かべていた女が。
「相変わらず、がさつなんだからぁ。しずるんは」
弾むような声で言って、静流の幼馴染、藤本美月は満面の笑みで肩をすくめた。真ん中で分けた前髪をふわりと揺らし、両手をぱんと合わせる。
「さ、朝の会を始めましょう」

朝の会　―中―

「お台場に到着後、二手に別れ、港と倉庫で待機。港の班は、レオンの船が到着次第、トラックに積荷を移し、倉庫に搬送。倉庫の班は、それまでに搬入の用意。搬入時には、レオンを立ち合わせること。倉庫内に残っている銃器や火薬の整理、点検を手伝ってもらいなさい。

ここまでで何か、質問はあるかな？」

白い眉の下で、ぎろりと黒目が動く。その場にいる娘たちの頼もしい顔つきを確認し、藤本は「よし」と頷いた。

「免許を持っている者を中心にチームを編成。人数も人選も静流に任せる。必要だと思う数だけ、好きに兄弟を呼び出しなさい」

言われて、窓際で腕を組んで聞いていた静流は肩を竦めて応えた。口をはさむ気はないようだ。

藤本は満足げに微笑を浮かべ、ちらりと静流の隣で後ろ手を組んで立っている美月に目をやる。

「倉庫のサポートは美月。お前に頼むよ」

「はぁい」にっこりと眩しい笑顔を浮かべる美月。「しずるんだけじゃ、倉庫を荒らして終わっちゃうものね」

「どういう意味だ！？」

青筋を立てて振り返った静流に、美月はくすりと笑んで、人差し指を天井に向けた。「ね」と愛らしく頭を傾ける。美月の黒髪についていた白い破片が、粉雪のようにさらりと落ちた。

「せっかく手に入れた弾薬も、その場でなくなっちゃいそうだもの」

くすくすと楽しげに言う美月に、静流は涙ぼくろをぴくりと動かして頬をひきつらせる。「ちっ」と舌打ちをして、美月から顔をそらした。

藤本はその様子に、つい苦笑を漏らす。おそらく、カインの中で静流を丸めこめるのは、美月だけだろう。静流とは長い付き合いだから、ということもあるが、美月には読心術のような心得がある。静流の手綱を握らせるのはうってつけの人物だった。

「港のサポートは……」と藤本は視線を左にずらす。ベッドに腰を下ろしてこちらに顔を向けているアリサと目を合わせ、「アリサ、お前に頼むよ」

「任せて、お父さま」キラリと瞳を輝かせ、アリサは猫なで声のようなものをだした。「遠路はるばるいらっしゃる殿方たちに精一杯のおもてなしを――」

「異文化交流は、ほどほどに、な！」

悦に入るアリサの言葉を、藤本は強い語調で遮った。アリサはきょとんとして、「分かりましたわ」と不思議そうな表情でつぶやく。

なるほど、茶々の言っていたことはこのことか。藤本は心の中で納得する。

「その間に」と藤本は気を取り直して、姉たちの中で、一人大人しく控えている少女に目をやる。「茶々には『実家』の整理を頼みたい。わたしの部屋の備品や書類をリストアップして、あとでわたしに渡してくれ」

「はい、承りました」と、茶々ははきはきと答える。さっきまで姉とみっともない口論をしていた少女とは思えない凛々しい態度だ。

藤本は安心したように微笑んで、「それとね」と続けた。「わた

しの部屋に古いロザリオのネックレスがたくさんあっただろう。あれはもういい。全部、処分してくれ」
「は」と茶々は目を瞬かせる。「処分……ですか？　でも、あれは――」
「もう、いらないんだ」

感慨深げにそう答え、藤本はベッドサイドテーブルに目を向けた。そこには、色紙や人形、手作りのマフラーなど、子どもたちからの様々な贈り物が置いてある。

――藤本さんはもうその罪を償ったんですよ。ここにある花束も果物も手紙も、その証だと思います。

いつかの、少女の言葉が頭をよぎる。
ああ、そうだ。あのとき、自分は解き放たれた気がしたのだ。
藤本は心が温まるのを感じた。
部屋の棚に保管してあるロザリオのネックレス――それは、藤本が自分への戒めにとっておいた十字架だった。
『クローンを救う会』を率いていた頃の自分。破壊によって自らの罪を償おう、としていた自分。犠牲の上に成り立つ正義を信じていたころの自分。同志さえ犠牲にすることを正当化できてしまった自分。そんな自分を省みるために、そんな自分に戻らないように、その戒めにとっておいたものだ。
しかし、もういいだろう、とやっと思えるようになった。
「そろそろ、部屋もすっきりさせないと。今のままでは、お前たちからの大事な宝物を保管する場所がないからね」
穏やかな笑みを浮かべて、藤本はそうつぶやいた。すると――

「でも、処分、てどうすればいいんですか？」

困惑した茶々の声が聞こえて、藤本は顔を向きなおす。

「どうするもこうするも、捨ててくれればいい」

さらりとそう答えると、「捨てるって……」と茶々はぎょっと目を見開いた。「でも、爆弾が仕込まれているのに、そのまま捨ててしまっては、危険ではありませんか？」

「爆弾！？　何を言ってるんだ？」思わぬ言葉に、藤本は失笑してしまった。「そんなもの、とっくに取り外してある。もうあれには発信機と盗聴器しかついていないよ」

その瞬間、「え！？」とその場にいる娘たち全員が、驚愕したように声を上げた。

「なんだ、その驚きようは？　爆弾なんて危ないものを、お前たちの近くにおいておくわけがないだろう」

しかし、娘たちはあっけにとられた様子で何も答えようとはしない。

藤本はがらりと表情を変えた。不審な匂いを嗅ぎとったのだ。警戒する野犬のような鋭い眼差しを浮かべ、四人を見回す。

「あのネックレスは持ち出し厳禁。決していじるな、と全員に言い含めておいたはずだ。なんで、お前たちがそこまで気にする必要がある？」

四人は口々に「いや」とか「別に」とか、ごまかそうとしている。あの静流までもがばつが悪いような表情を浮かべている。

明らかに様子がおかしい。
藤本は確信した。父親としての勘が告げている。これで何度目かも知れないため息がもれた。
「正直に言いなさい」呆れと怒りが混じった声色だった。「今度は、なにをやらかしたんだ？」
姉妹たちは顔を見合わせ――やがて、観念したのか、「実はね」と最年長のアリサが言いにくそうに口火をきった。
アリサの説明を聞いている間、藤本の顔はみるみるうちに赤くなり、体はわなわなと震えだした。まるで火にかけられたやかんのようだ。怒りはふつふつと高まっていった。
さて、五分もかかっただろうか。
やがて怒りが沸点に達すると、「何を考えている！？」と怒号が病室を揺らした。
こうなることは予想していたのだろう。四人の娘たちはぴくりともせず、気まずい表情を浮かべて突っ立っている。
「神崎さんは、和幸の大切な人だろう！　それを、お前たちは……」
藤本はあまりに興奮しすぎて、唾を喉にひっかけた。苦しげにむせると、美月がかけよってきて、背中をさすろうと手を伸ばしてきたが、それを藤本は右手で断った。
「確かに彼女には、『黒幕の娘』ではないか、という疑いはあった。だが、それは三神くんの情報が間違っていただけだ。そう説明しただろう。
それでも不安になる気持ちは分かる。だが、あの子を『黒幕の娘』だと疑うのは、和幸の人を見る目を疑うのと一緒だ。和幸を信じて

いないのか？」

すると、「和幸のことは信じてるさ」と静流が髪をかきむしりながら、気が進まない様子でつぶやいた。「ただ……」

「『ただ……』、なんだ？」

静流は「アリサ姉さん」と腰に手をあてがって、唐突に呼びかけた。くるりと振り返った姉に、静流は細いあごをしゃくる。

「その時計、誰からもらったんです？」

「時計？　なんで、急に？」

「いいから、教えてください」

何が始まるのか、と訝しそうに見つめる藤本の前で、アリサはちらりと左手首に視線を向けた。細い手首には、細かなダイヤモンドがしきつめられたバンドがからみついている。その輝きで、肝心の時計の文字盤が見えないのではないか、と心配になるほどだ。

「大学の教授だけど」けろっとそう答えて、アリサは再び振り返る。

「それがなぁに？」

「その教授とはどういう関係ですか？」

「金づる」

藤本は予期せぬ単語に、ぎょっとする。お茶でも飲んでいたら、勢いよく噴きだしていたところだろう。

かまわず、静流は質問を続ける。

「その指輪は？」

「これ？」と、アリサは自分の右手に視線を落とす。その小指に輝

くのは、真っ赤なルビー。それも、まるでおもちゃのような大きさだ。「大学の後輩。バレンタインに、失敗したチョコあげたらくれたのよねぇ。義理以下なのに、わざわざ貯金くずして買ってくれたの」

茶々の軽蔑の眼差しに気づいているのか、いないのか。アリサは感心したような声で「律儀よねぇ」と言い添えた。

もはや、藤本は言葉が見つからない。額を押さえて頭を左右に振る。

「こういうわけだよ、親父」

「どういうわけだ？」

しめくくろうとする静流に、藤本は疲れたような声で訊ねる。

「つまり」と、相変わらずにこにこして控えていた美月が、静流よりも先に口を開いた。「あんな美女が和幸ちゃんと付き合うなんて、裏があるとしか思えない――そう言いたいのよね、しずるん？」

静流は「ふん」と鼻を鳴らして腕を組む。「そう考える兄弟も多い、てことだよ」

朝の会　ー中ー（後書き）

上、下、で終えるつもりが、長くなりすぎました。区切り悪いところで切ってしまって申し訳ありません。次で朝の会も終了です。

朝の会　一下一

「くだらないことを」あきれた声で藤本はつぶやいた。「いったい、誰が言いだしたんだ？　兄弟の恋人に首輪をつけるなど……お前たちがしてきたイタズラの中でも最低だ」

藤本は真剣に怒っている。ぴりぴりと張りつめた空気がなによりの証だ。『おつかい』のミス以外で叱るなどめったにないというのに。今回は、よっぽどのことだ、ということだろう。

「分からないのよ、お父さん」そんな空気をやわらげるように、美月のおっとりとした声が返答する。「どこからともなく、そんな提案が持ち上がった……そんな感じだったの」

「じゃあ、お前たちは、誰が言いだしたことかも分からない作戦に無条件で賛同した、というわけだな。どうなんだ、それは？　神崎さんのことは置いておいても、胸をはって言えることか？」

「今回ばかりは、しかたねぇ、て言わざるを得ねぇよ」と、美月の横から静流が口をはさむ。

「しかたない？」

「ああ、そうさ」静流は腕を組み、開き直ったような強い口調で返した。「兄弟が一人、家族を抜けたんだ。それも、神崎カヤになびいてな。皆が不安になるのは当然だ。今回は、集団心理に流されてもしかたねぇ」

「不安なのは分かっている。だが、何度も言うが、神崎さんは『黒幕の娘』じゃあないんだ」

「それでも、三神さんはあの子を『黒幕の娘』だと疑っていたんだろ。一度は」

藤本は思わぬ言葉に眉間に皺を寄せる。

その場の雰囲気ががらりと変わった。肩にのしかかるような重苦しい空気が漂う。

「三神さんの情報は正確だ。あの人の情報がはずれたことなんて、一度もなかった。あたしらがこうして無事でいるのが、その証じゃねぇか」

そこまで言って、静流は藤本から目をそらして苦々しい表情を浮かべた。

「あたしらにとっては」と、押し殺した声をしぼりだす。言うのをためらっているのが、はっきりと見て取れた。「あたしらにとっては……三神さんが一度はあの女を疑った――それが脅威なんだ。皆、口にはしねぇし、もしかしたら自覚して無ぇのかもしれねぇ。けどよ、深層心理にあるんだ。あの人の情報への絶対的な信頼、てやつがよ。あたしらがあの女を信用できない一番の理由は、そこなんだよ」

「特に……留王は」

ぽつりと弱々しい声が静流のあとにつづいた。

全員がハッとして、その声の主に目を向ける。

前髪を頭のてっぺんで留めた、お団子頭の少女だ。眼鏡の奥には、輝きを失った宝石のような曇った大きな瞳。俯くその姿は、いつもぴしっと凛々しい茶々には珍しく、頼りなく見えた。

「たぶん、言いだしたのは、留王だと思うんです」と語りだす声にも彼女らしい覇気はない。「留王は、特に三神さんのことを信用していますから。きっと、誰よりも。だって、留華兄さんは‐‐」

「へっくしょんっ！」

いきなり、天井をつきぬけていきそうな甲高いくしゃみが、どんよりとした空気を吹き飛ばした。

「ああ、ごめんなさい、ごめんなさい」とすらりと白い腕を上げて皆の注目を引いたのは、アリサだ。形のいい鼻をちょいちょいと人差し指でかきながら、不思議そうな表情で小首を傾げる。「なにかしら、花粉症？　ちょっとお化粧室に行ってきますわ」

おほほ、とでも言い出しそうなほど可憐な笑みを振りまいて、アリサはさっそうとベッドから降りて茶々の腕をつかむ。

「あなたもおいでなさいな、茶々」

「え？　なぜ、私まで……！？」

あからさまに嫌がる茶々を問答無用で引きずって、アリサはふわふわと長い黒髪を揺らして病室から出て行った。

引き止める暇さえも与えない、まるでスコールのような勢い。

空気までもがあっけにとられたように静まり返る病室で、美月が物憂げに頬に手を置きため息を漏らす。

「茶々、最近、元気がないよねぇ。たしか、おとといあたりから……」

「留王もな」それだけ言って美月の言葉を遮ると、静流はちらりと父親に目をやる。「すみません、なるべくあの話はださないようにしたかったんですが。茶々と留王は双子みたいなもんだ。黙ってられなかったんだと思います」

言葉は返ってこない。

斜めに照りつける朝日を浴びながら、初老の男はじっと目を瞑っていた。橙色の光が男の顔に深い影を落としている。涙を堪えてい

るかのような表情だ。
静流も美月も、何も言おうとはしなかった。いや、純粋に、何を言えばいいのか分からないのだろう。
「すまないね」ようやく、藤本は疲れ果てた声をもらす。「お前たちに気を遣わせてしまうなんて、情けない。――すまない」
目が痛むかのように、藤本は目頭をおさえた。
「そうだな、留王のことも考えてやるべきだった。そうだな……あの子は不安だっただろう。ああ、そうだな。そうだな」
同じ言葉ばかり繰り返す藤本に、静流と美月は顔を見合わせる。
美月はじっと静流の切れ長の目を見つめ――その奥にある彼女の考えを読み取って――こくりと頷く。
「親父」静流はジーンズのポケットに手をつっこんで、一歩前に進んだ。「いろいろ勝手をして悪かった。曽良にはあたしから連絡して、盗聴はやめるように言うからよ」
「そうしてくれ。ありがとう」
「それじゃあ、わたしたちは……」
美月が遠慮がちに言うのを、藤本は「ああ、頼んだよ」と微笑んでさえぎる。
二人は心配そうな表情を浮かべていたが、それ以上は何も言わず、病室をあとにした。
＊　＊　＊
もうあれから何年経っただろうか。――藤本は誰もいなくなった

病室で、一人物思いにふけっていた。
たしか、三神がまだ十七のときだから、六年前か。留王が八歳のときだ。
そして……留華(るか)が十九のとき。
藤本は大きくため息をもらして、体を倒した。
決して忘れてはならない、父親として彼が犯した大きなミス。ほとんどの子どもたちはその事件を知っているだろう。しかし、藤本の前で口にすることはない。皆、知らないふりをする。
子どもたちが気を遣うほどの、過ちだということだ。
ぼんやりと窓の外をながめる。赤らみ始めた空がにじんで見えた。

「歳をとると、自制がきかなくなるな」

目を押さえ、藤本は憫笑した。
あと少しで、娘たちの前で泣きだすところだった。そういえば、神崎カヤの前でも涙を見せてしまったな。
ああ、本当に歳をとったものだ。
藤本は目じりを伝う涙を感じて、そう心の中でつぶやいた。

＊　＊　＊

「初めまして」とブレザーの制服姿の少年はいきなり現れた。襟首のあたりで束ねられた短い髪がちょこんとつきでている。妙な髪形の若者だ、と思った。「もしかしてなんですけど、今度の土曜日に『ヴェネチア』に誰かを潜入させようとしてませんか？」
教会の前ではき掃除をしていた藤本はぎょっとして「なんだって？」と目を薄めた。
「今、なんて言った？」

「いや、ですから、今度の土曜日に行われる『ヴェネチア』のオークションに、部下を送ろうとしていませんか、てお聞きしたんですよ。『無垢な殺し屋』のおとーさん」

思わず、藤本は持っていたほうきを落としていた。目を見開いて硬直する。

「ああ、やっぱり。そうなんですね」と、藤本とは対照的に、少年は晴れやかな表情を浮かべた。といっても、そのややつった目には侮れない鋭い眼光が宿っている。

「留王！」

藤本は少年からは目を離さずに、背後で遊んでいる幼い少年に怒鳴った。ふわっとした髪に大きなつり目の少年――留王だ。

「教会の中に入っていなさい」

道路にチョークで落書きしていた留王は「え？」と興味に瞳を輝かせて顔をあげる。

「安心してください、僕は無害ですから。忠告しに来ただけですよ」

にっこりと少年は笑って肩をすくめた。

よれたシャツはズボンからはみでて、ブレザーのボタンもしめられていない。その身だしなみもだが、表情からもゆるい雰囲気がただよっている。敵意や、殺気、などというものは感じられない。街中で遭遇したなら、どうせ学校をさぼってふらついている不真面目な高校生だろう、としか思わなかっただろう。

しかし、少年の発言は、彼がただの高校生ではないことを示して

いた。

「何者だ？」

なに、なに？　とそわそわしている留王を隠すように立ちはだかって、藤本は少年を睨みつけた。

「そうですねぇ」少年は南中にさしかかった太陽を眩しそうに見上げ、「三神、とでも名乗っておきます」

「名乗っておく、だと？」

ふざけるな！　と叫びたいのを抑えた。子どもたちのお手本にならねばならない自分が、取り乱すわけにはいかない。

三神、と名乗った少年は子どもっぽく微笑んだ。

「今はしがないインチキ占い師ですけど、そのうちトーキョー一の情報屋になるつもりです」

藤本はあっけにとられた。

「情報屋だと？」

しかも、トーキョー一、といったのか？

「結構、腕はいいんですよ。この通り、『無垢な殺し屋』のアジトを突き止めてしまうくらいに」

にんまりと笑む彼の目は笑ってはいなかった。

藤本はごくりと生唾を飲みこむ。

確かに、その通りだ――そう言わざるを得ない。自分の正体を…

…いや、その前に、藤本マサルが生きていることを暴いた時点で彼はただ者ではない。
少なくとも、ただの高校生ではないだろう。
「近い将来、きっと藤本さんにもお世話になるかな、て思って、こうして借りという名のコネをつくりにきたわけです」
じっとりと手の平に汗がにじんでいた。藤本は青いジャージのズボンを握りしめるようにしてそれをふく。
「借りとはどういうことだ？」
仕掛けたルアーに魚がかかったかのような、しめた、という表情。三神はそれを隠せなかったようだ。
子どもなことは子どもなようだ。藤本は少し安堵した。
「今度の土曜日、『ヴェネチア』では闇オークションなんて行われません」
藤本はぴくりと白い眉を動かす。「まさか」と鼻で笑って口を挟もうとしたが、三神はさっと右手で制す。
「確かに、そういう情報は流れています。でも、それはブラフ。トーキョーという暗い海にまかれた餌（え）です。獲物がなにか、お分かりですか？」
藤本は表情を曇らせた。
当然、彼が何を言わんとしているか、容易に分かる。だが……
「わたしもね、だてに長年裏で駆け引きはしていない。ちゃんと信

用できる情報屋を雇っている。君よりもずっとキャリアも付き合いも長い人物だ」

すると、三神は唇の片端を上げ、試すような視線を向けてきた。

「でも僕のほうが腕は上です」

「帰りなさい」

きっぱりと藤本は告げた。脅すような低い声で。

そんな態度を取られるとは思っていなかったのだろうか。三神は目をぱちくりと瞬かせ――それから、小バカにするように鼻で笑った。

「後悔しますよ？」

「こちらのセリフだよ、三神くん」

言って、藤本はくいっとあごをしゃくる。

三神ははっと目を見開いて、ちらりと背後を一瞥した。

「ウチの前でなにしてんの？」

そこに佇んでいたのは、チェック柄のシャツを着た茶髪の少年だった。染めているのだろう、髪が痛んでいるのがよく分かる。ほっそりとした顔立ちで、狐のような印象がある。

さらりと目にかかる髪をかきあげて、「迷子なら送っていくよ？」と不敵な笑みを浮かべた。

「留華（るか）兄ちゃん！」と藤本の背後で、留王が飛び上がって声をあげた。今にも飛び出していきそうな留王を、藤本はあわてて振り返って引き止める。

「あのさぁ」にこりと満面の笑みで弟に手を振りつつ、留華は低い声でつぶやく。留王に顔を向けてはいるが、三神に話しかけているのは明らかだった。「あんたの情報の中に、俺が行く、て事実ははいってんの？」

三神は小首を傾げて、「いいえ？」と素直に答えた。すると、留華は鋭い目つきで三神を睨みつける。

「そんじゃ、情報不足だね。俺が行くからには、罠だろうがなんだろうが関係ない」

「……だといいですけど」呆れたような笑みを浮かべ、三神は肩を竦める。「とりあえず、僕は忠告しましたからね」

しつこく主張を押し通す気はないようだ。――いや、と藤本は柳眉を寄せる。

この状況だ。さっさと退くのが利口というものだろう。冷静な状況判断ができている。見た目に似合わず……否、まさか、その格好は計算か。

不審そうにねめつけていると、三神はひらりと手を挙げた。

「それじゃ、また会いましょう」

にっこりと微笑んで、バレエでも踊るかのように軽やかに身を翻して去っていく。

無防備な背中。軽快な足踏みにあわせてぴょんぴょんと跳ねる黒髪。鼻歌まで聞こえてきそうなほどの、なんとものんきな態度だ。振り返ろうという気配もない。背中を撃たれてもおかしくない状況だというのに。無用心なのか、こちらが撃たないことを読んでいるというのか。

藤本は、結局、三神という少年をつかみきれなかった。まさに、謎の少年、だ。
しかし、敵意は感じなかった。それだけは確かだ。突然現れた妖精にいたずらでもされた気分、といえばいいだろうか。
「あっさりだなぁ」肩透かしだったのだろう、留華はどこか物足りなさそうな声でぼやいた。「このまま逃がしちゃっていいんですか？　追います？」
「かまわんよ。無害、というのは本当だろう。すきだらけだった」
呆れたようにそう答え、藤本は留王の肩をおさえていた手を離す。
ようやく拘束を解かれた留王は、ゲートが開いて飛びだす競走馬のように留華へと駆けだした。留華はしゃがみこみ、タックルをかますように突進してくる弟を抱きとめる。
「おう、待たせたな。バスに乗り遅れちまって……」と遅刻の弁解を始めたものの、
「さっきのお兄ちゃん、なんのはなしをしていたの！？」
留王は留華の胸倉にしがみつくようにして突然訊ねた。好奇心と不安が入り混じった表情が浮かんでいる。幼いながらも不穏な話がされていることに気づいていたようだ。
「忠告って言ってたよね？　なんの忠告だったの？」
「なんでもねぇよ。あの兄ちゃんはただの大嘘つき。人が不安になるのを見て楽しんでるだけだ」
説得するように強い語調で言ってから、留華はよからぬことを企んでいるかのような怪しげな笑みを浮かべた。

「そうだ。茶々と寧々(ねね)姉さんのところに押しかけようぜ。カレーでもつくってもらおう」

すると、留王の表情から不安の色が一瞬で消え去った。つり目を大きく見開いて、嬉しそうに「うん」と頷く。

見ているだけで癒される、天使のような純真な笑顔。藤本はついつい頬がゆるんだ。

「父さんも心配しないでよ」

留王の右手を取って立ち上がり、留華は屈託のない笑みで藤本にそう言った。力強い口調。俺は大丈夫、信じてよ――そう訴えているようにさえ見えた。

不吉な『予言』を聞いても毅然としている息子を誇りに思いつつも、しかし、胸騒ぎを覚えてならなかった。

「念のため、木田くんや他の情報屋にも確認してみるよ」

険しい表情でそう告げると、留華はくつくつ笑った。

「まったく、心配性というか過保護というか。まあ、父さんの気が済むなら、俺はなんでもいいよ」

「そうさせてもらうよ」

「そうしちゃってください。んじゃ、留王、預かってくれてありがとな」

あっけらかんとした調子で言って、留華は踵を返した。「カレー、カレー」と間の抜けた歌を口ずさんで、留王と手を繋ぎ去っていく。

もう兄弟など存在しないはずのこの世界で、まるで本物の兄弟のような二人。その後姿を、藤本はただただじっと見つめていた。

留王の甲高い笑い声が遠くから聞こえてきた。

＊　＊　＊

「親父は、そんとき、ひいきにしていた情報屋――木田、だったけ。そいつ以外にも、知っている限りの情報屋に確認したらしい。でも、三神さんが主張していたブラフ説は浮き上がらなかった。だから……」

「『おつかい』を決行したのよね」

沈んだ表情で美月は静流の言葉をひきついだ。

藤本の病室を出てから、二人は廊下の奥で向かい合って話していた。お互い壁に背を当て、藤本に聞こえないように、と声を押し殺して。

「でも、三神さんが正しかった。三神さんだけが正しかったんだ」

舌打ちでもしそうな、悔しげな声で静流はつぶやいた。

「留華兄さんは帰ってこなかった」

美月はぎゅっと自らを抱きしめるように両腕をつかむ。静流は頷く代わりに視線を落とした。

「もしものときは、自ら命を絶つこと――それは、あたしら『カイン』の掟。たぶん、留華兄さんも……」

「わたしたちが中学に入ったばかりの頃だったよね。香月（かづき）姉さんが言ってたな。初めてお父さんが取り乱すところを見た、て。大変だったみたいよね、あのときの姉さんたちは……」

「だから、広幸さんが親父の代わりに、留王に説明したんだ。あた

しも一緒に行ったよ」
懐かしむような表情で天井を振り仰ぐ静流。美月はくすりと意味深な笑みをもらした。
「いつのまに、そんなことしてたの？　広幸さんにメール一つ送るのも、わたしがいないとできなかったくせにぃ。しずるんってば、積極的」
「う、うるせぇ！」
静流は顔を真っ赤にして、美月に怒鳴りつけた。髪を振り乱してあたふたとする様は、美月をよけいに喜ばせた。
「広幸さんがからむと、すーぐ乙女になっちゃうんだからぁ。かぁわいい」
「いい加減にしろ、殴るぞ、美月！」
だん、と足を地面にたたきつけ、静流は拳をつくってふりかざした。
しかし、美月は「は～い」とにっこり微笑むだけ。まったく本気にしていないようだ。
調子をくずされたのだろう、静流は「ちっ」と舌打ちして行くあてのなくなった拳をポケットにしまいこんだ。
「ほら、さっさとアリサ姉さんと茶々のとこに行くぞ」
めんどうそうにそう言って、静流は身を翻して歩きだす。美月は「あ」とあわててそのあとを追い、
「忘れないうちに、曽良ちゃんに電話しないと。作戦中止、て」

追いつくなり、美月は静流の腕にするりと自分の腕をからめた。そうして歩く様子は、後ろから見ればまるでカップルだ。

「起きてんのか、あのバカは？」

美月に拘束されていないほうの手をポケットにつっこんで、静流は携帯を取り出す。

「ちょうどいいかも。起こしてあげなよ。ほら、今朝は補習でしょう。これ逃したら、留年リーチ、て言ってたもの。寝坊しちゃったら大変」

「なんで、あいつはいっつもギリギリなんだ。学校行けよ」

「学校は行ってるんだけど、授業にでてないらしいのよぉ」

「じゃあなにしてんだよ、あいつは」

「遊んでる、て言ってた」

「……いっぺん、『手加減』なしで殴ろうか」

「とにかく、電話してあげて。しずるんからの電話なら確実に起きるから」

「どういう意味だよ？」

「第六感、ていうのかな。しずるんがらみだと、それが働くらしいよ」

「あたしは幽霊かよ」

「どちらかというと、鬼？」

「今なんつった、美月！？」

わいわいと騒ぐ姉妹の声が徐々に遠ざかっていった。

朝の会　―下―（後書き）

更新が遅れてしまい大変申し訳ありません！　お待ちいただいていた方には心からのお詫びと感謝の気持ちを届けさせていただきたいと思います。ありがとうございます！
それにしては、ストーリーが動かず……すみません。
次話からは、文化祭が始まります♪　ようやく主人公も戻ってきますので。
Ｗｅｂ拍手をくださった方々、アンケートにご協力してくださった方々、本当にありがとうございます。いつも励まされております！

祭りの前に　―1―（前書き）

朝っぱらから……いえ、しょっぱなから、大人な表現があります。苦手な方はご注意ください。（ストーリーに支障はないので、その部分だけ読み飛ばしていただいても構いません）

祭りの前に　―1―

どこからか、朝を知らせる鳥の声が聞こえてくる。いつにも増してうるさい。ベランダに巣でもつくってるんだろうか。

「んー……」

眠い。頭がぼうっとする。

寝たの明け方だったもんな。部屋に帰ってきて、とりあえず風呂はいって制服に着替えて……で、さすがに疲れがピークに達して仮眠をとることに。それが五時くらいだったか。どれくらい眠ったんだろう。今、何時だ？

文化祭は九時からだが、遅刻したって問題はないだろう。出席はとらないし、それぞれ自由行動だ。とりあえず、劇が十時からだから、その三十分前には学校に行っとくか。

てことは、何時に家を出ればいいんだ？　ええっと……ああ、だめだ。そんな単純な計算ももはやままならないほどに――眠い。

だるさがまるで金縛りのように身体をしばりつけている。

この感じ……懐かしいな。カインだったころを思い出す。

カインだったときは、『おつかい』で明け方まで命の綱渡りをしていた。睡眠時間をけずって、神経すりへらすようなことをしていたんだ。毎朝眠くてしかたなかった。それでも、「カインといえど、学業はおろそかにするな」という親父の教えがあるもんだから、学校を休むわけにもいかず、無理して登校していた。結局、授業中は眠気のせいで上の空。意味がなかったような気もするが。

とにかく、睡魔との闘いには慣れてはいるんだ。だから――

怨霊でもおいはらうかのように眉間に力をいれ、ぐっと重い瞼を持ち上げる。すると、目の前に真っ白な光の世界が広がった。

朝日は遠慮ってものを知らないようだ。ようしゃなく寝起きの眼

に光線をそそぎこんできた。思わず目をつぶり、光を避けるように顔を横に倒した。
そのときだった。
「おはよう」
遠慮がちな、かすれた声が聞こえた。すぐそば。耳元で。
はっと目を見開いて、とびこんできた画に息を呑む。心臓がつかまれたような――たとえるなら、そんな衝撃が走った。
光に順応した視界に浮かび上がったのは、やわらかな輪郭。どこか、照れたような笑みを浮かべる少女の顔だった。俺の右肩――右腕の付け根あたりに頭を乗せて、上目遣いで俺を見つめている。
カヤだ。
艶やかな浅黒い肌。ほんのりと熱を帯びた頬。月を待つ宵闇(よいやみ)のような深みのある黒い瞳。夜の女神はきっとこんな瞳をしているのだろう、と思った。
密着して横になっているせいで、彼女の感触が右半身に生々しく伝わってくる。身体の芯から熱がこみあげてくる――やばい、と直感的に思った。
俺のそんな非常事態に気づくわけもなく、
「前も、こんなことあったよね」カヤは瞼を閉じて唇にうっすらと笑みを浮かべた。今にも眠りに落ちてしまいそうな、穏やかな表情だ。「初めて、泊めてもらったとき。覚えてる?」
もちろん、覚えてる。俺は苦笑をこぼしていた。
二週間ほど前になるだろうか。寝ぼけたまま、誤ってカヤが寝ていたベッドにもぐりこみ……彼女の顔を見るなり、文字通りベッドから飛び出したんだ。
あの朝のテンパり具合といったら、笑いものだよな。微笑ましい

なんてもんじゃない。思い出したくないくらい恥ずかしいんだが……

「あのとき……」そっと瞼を開き、カヤはぽつりとつぶやいた。「あのときにはね、もう和幸くんのこと、好きだったと思うの。だから、嬉しいんだ。こうして……今、和幸くんの腕の中にいられること」

思わぬ、告白だった。

胸がきしんだ。心臓に爪を立てられたような痺れにも似た痛みがかけぬけた。

一瞬にして睡魔が消え去り、だるさが抜けた。激しい電流が神経を走りぬけ、全ての感覚を覚醒させる。

ただ、頭だけはぼんやりとしたまま。のぼせたような、熱でもあるかのような、そんな感じだ。脳だけ寝ぼけているのだろうか。もはや冷静に感情や思考なんてものを処理する機能を忘れている。理性が薄れる。

体が勝手に動いていた。

「か……和幸くん？」

か細い声が下からした。

気づけば、俺は彼女に覆いかぶさっていた。朝日を遮り、カヤを影の中に閉じこめていた。

じっと見下ろしていると、カヤの頬が一段と赤く染まっていくのが分かった。さざ波立つ水面（みなも）のように、戸惑いに揺れる潤み色の瞳。あきらかに動揺している。

だが、それでも、抵抗する気配はない。

俺も本能に抵抗する気はなかった。心臓が陣太鼓のように低い音を鳴り響かせている。緊張感からなのか、神経は研ぎ澄まされて、高揚感からなのか、息が上がっていた。激しい感情がみぞおちの奥

で燃え盛っているのを感じた。
おもむろに身体をかがめ、右手を彼女のスカートの下に潜りこませる。太ももに指を滑らせると、びくんと彼女の脚が反応した。とたんにカヤは耳まで赤くして、堪えるように目を瞑った。
そういえば、夕べもこんな反応だったな。つい、頬がゆるんだ。
さらに右手を奥へと侵入させると、「や……」と甘い悲鳴のようなものが彼女の唇からこぼれた。
引き寄せられるようにその唇を塞ぎ、激しく重ね合わせる。隙間からときおり漏れる弱々しい吐息のようなものが聴覚を刺激し、高まる衝動をさらにあおった。
やがてカヤの身体から緊張が抜けていくのを感じた。
もう無理だ、と思った。
うるさく騒いでいた鳥の声も、すっかり聞こえなくなっていた。
右手をスカートから取り出して、服の上からその柔らかな感触を味わうように、彼女の体に手を這わせる。みぞおちまできたところでブレザーのボタンをはずし、シャツをスカートから荒々しく引き抜いた。そのまま、隙の出来た真っ白なシャツの下に手を忍びこませて――

「おはよ、かずゆき――て、わあっ！」

いきなり、あどけない悲鳴が真横から突き刺さった。ぎょっとして、反射的にカヤのシャツから手を引いて、振り返る。そして、仰天して目を瞠った。

「け……」と喉の奥から乾いた声が漏れでる。「ケット！？」

ベッドの横に突っ立っていたのは、八歳くらいの子ども。
黄金に輝く長い髪。琥珀をはめこんだような瞳。大理石で創られた彫刻ではないか、と思ってしまうほどの白い肌。しかし、ふっく

らとした柔らかそうな頬が、彼が彫刻ではないことを物語っている。
袖も裾も有り余るほどのだぼっとした白いワンピース（みたいなもの）の上に、黒い布を左肩から身体にまきつけている。古代ギリシャを思わせる衣装だ。仮装パーティーにでも行くのだろうか、と思ってしまう。さらに、彼のまわりに舞う金粉のような光の粒子。
ただの子どもではないことは、一目瞭然。
そう、お取り込み中の人様のベッドルーム（といってもワンルームなんだが）に勝手に舞い降りてきたのは――天使。リストの守護天使、ケットだ。
ったく、どういうタイミングなんだよ。普通、天使って困ったときに現れてくれるものじゃないのか。こんなにありがたくない天使、他にいるだろうか。
もはやあきれ返っていた。

「なんの用だよ、ケット？」

俺はのっそりと体を起こし、カヤの上から退いた。カヤもあわてた様子で体を起こして、乱れた服を直す。ちらりとケットを一瞥するその表情には申し訳なさそうな色が浮かんでいた。
放っといたら「ごめんね」と言い出しそうだ。あきらかに向こうに非がある気がするんだが。
ケットはしばらく固まっていたが――それこそ、彫刻のように――突然、我に返ったように「ごめんなさい」と叫んだ。両目を小さな手で覆い、あたふたと後退さる。
いや、遅いだろ。

「ケットはなにも見てないよ！　ごめんね、だってまさか朝からそういうことになってるとは思わなくて。ルルのそういった本能についてはよく分かってるつもりだったんだけど、まさか朝からそれが目覚めるなんて思ってなくて。責めてるわけじゃないんだよ。ルル

は性的な誘惑には屈服しやすいんだよね。分かってるんだよ、だから、いいんだ。でも、まさか朝から屈服してるなんて……」

はいはい。悪かったな、朝から人間の本能を丸出しにして。

てか、誰か、神サマと天使にこの世のルールを教えてやってくれよ。人の家には勝手に上がらない、とか。なあ、出来るだろ、それくらい。

「いいから。なんの用なんだ？」

自然とため息がもれる。めんどうそうに頭をかき、ケットをジト目で睨んだ。

するとケットはおずおずと視界を遮っている指をひらき、その間から二つの黄玉（トパーズ）をのぞかせた。

怯えた子犬のような目がじっと俺を見据えている。その純真でまっすぐな眼差しが、鋭い刃となって胸につきささった。

なんだろう。この落ち着かない気持ちは。

年齢制限に気づかずに、卑猥なシーンがもりだくさんの映画を茶々に観せてしまったときと同じ罪悪感が……

ええい、くそ。調子が狂う。気を取り直すように咳払いをし、「リストから伝言か？」と強い語調で訊ねた。

「うん、そうなんだ」

ケットはようやく手をおろし、遠慮がちに頷いた。言いづらそうな表情を浮かべ、黄金色の瞳を落ち着かない様子で泳がせている。

「えっと……あのね、リストとニヌルタ弟が、今から……」

今から？

その不吉な言葉にぴくりと眉を動かした――そのときだった。
ピンポーン、と間抜けにも思えるほど空気を読まない呼び鈴の音がして、
「今から、朝ごはんを食べに来る、て」
開き直ったのか、ケットはイタズラが見つかったような笑顔を浮かべて言った。

祭りの前に　―２―

「なんで、いきなり朝飯をたかりに来るんだよ？」
「だから、朝ごはんは建前ですって。ユリィ・チェイスを預けに来たんですよ」

部屋に通されてからそろそろ十分。一応、オレなりに誠意のこもった謝罪はしてみたんだけど……和幸さんの機嫌が直る様子はない。
むっとした表情で床に座り、白のローテーブルに頬杖をついている。その視線がオレに向けられることはなく、窓の外を眺めている。別段、ベランダに何かあるわけでもないんだけど。
要は、オレと目を合わせたくないってことかな。

「まだ怒ってるんですかぁ？」

苦笑して訊ねると、和幸さんは落ち着かない様子で咳払い。「当たり前だ」と吐き捨てるように言って顔を赤らめる。

「でもねぇ、和幸さん。こっちだって、被害を被ったんですから。よくも、朝から人間の罪深い行いを見せつけて、大事なウチの天使を穢して……」
「じゃあ、人の家に勝手に天使を入れるな！」

どん、と和幸さんはローテーブルを叩いて俺を睨みつけた。それから「天使って」とぼやいて頭痛でもするかのように眉間をもむ。
「ああ、もう……我ながら言っていることが奇天烈すぎてついていけねぇよ」
「すっかり、こちらの常識に慣れちゃいましたね」

クスクス笑って指摘すると、「そうみたいだな」と和幸さんは鼻で笑った。
ほんの少し、張り詰めていた空気が和らいだ気がした。オレのウィットの利いた返しがうまく働いたかな。
それにしても……と、目の前のルル――『災いの人形』の恋人をまじまじと見つめる。
予想通り、本間先輩はまだ和幸さんに何も言っていないみたいだな。
もし、和幸さんが『テマエの実』の真実を聞いていたら、今ごろオレはサンドバッグ並みに袋叩きにされてるだろうからね。
ケットのことで頭にきていると言っても、まだからかえる範囲……いや、話ができる範囲。たいしたことじゃない。
万が一、和幸さんが全てを知ったら……こんなお友達ごっこなんてしてられなくなる。そのときは、オレは完璧にこの人の敵。
それも、運命……か。構わない。受け止められる。そうやって、オレは生きてきたんだ。

「ところで」と、和幸さんは声色を変えて切り出した。苛立ちや怒りは伺えない。やっと話を進める気になってくれたみたいだ。「どうして俺がここにいる、て分かった？」
「は？」思わぬ質問に、オレは面食らった。しばらく間をおき、ぐるりと辺りを見回す。「あれ？　ここ、和幸さんの部屋じゃないんですか？」
「わざとらしい」と和幸さんは言い捨てる。「お前とユリィが一緒に暮らしてることはカヤから聞いてる。どうせ、夕べの俺とラピスラズリの会話、ユリィに生中継させてたんだろ？」
「生中継、ですか。嫌味の腕が上がりましたね」
「おかげさまでな」
「どういたしまして」

へえ。どうやら、本間先輩はユリィのことは説明したみたいだな。てっきり熱い夜を過ごしてそれどころじゃないかと思ったけど。

「ラピスラズリが帰ったあと、俺がカヤの部屋に泊まったとは考えなかったのか？」

「なるほど。そういうご質問なわけですか」

それなら、と肩を竦めて、オレは「ケット」と天使の名を呼ぶ。

すると、和幸さんの隣に、光り輝く塵のようなものが現れた。キラキラと舞いながら、それはやがて人の形へと収束していく。

和幸さんはいたって落ち着いた様子でその様子を眺めていた。

もう、天使が現れても驚かないんだな。なんだか複雑な気分だ。

オレ……本当にこの人間（ルル）を巻きこんだのか。

「かずゆき、ごめんね！」

光の繭から飛び出すなり、オレの守護天使はそう叫んだ。和幸さんの腕にとびつくと、すがるような眼差しで見上げている。

おいおい、また話題を戻すつもりか、ケット。

「ケットは嫌な予感がしてたんだよ？　だからね、勝手に部屋に入るのはまずいんじゃないか、てちゃんとリストに進言したんだ。でも……」

「まあ、こいつがそんなまともな助言を聞き入れるわけはないわな。プライバシーの侵害はこいつの得意分野だ」

和幸さんはすっかり機嫌が戻っているようだった。というか……諦めきっているような、そんな声色。

「そうなんだ！」とケットは、理解者が現れたことに黄金色の瞳を一段と輝かせた。「ケットはリストの天使だから、命令は無視できないし。それをいいことに、いっつも、リストはケットを使っていたずらするんだよ。こういうの、今に始まったことじゃないんだ！」
「ああ、よく分かってるよ。てか、たぶん、俺が一番よく分かってる」

うーん。居心地悪くなってきた。

「ケット！」立場がこれ以上悪くなる前に、オレはぴしゃりと鋭い声を張り上げた。「ラピスラズリを入れてあげて」

にこりと微笑みそう告げると、ケットは慌てて「ああ、そうだった」と身を翻す。

「ラピスラズリ？」窓に駆け寄るケットを見送ってから、和幸さんはオレに振り返った。「どういうことだ？」
「プライバシー侵害の件、オレだけ責められるのは不公平だ、てことですよ」

訝しそうに小首を傾げる和幸さんをよそに、ガラリ、とケットは勢いよく窓を開けた。よかった、鍵はかかってなかったみたいだな。

「ラピスラズリ、お疲れさま」

ケットがベランダに向かってそう呼びかけると、

「天使は疲れませんでしょう、ケットさま」

それはまさに天使の名にふさわしい、母性あふれる声だった。

ふわりとカーテンが揺れ、聖霊の化身たる白い鳥が姿を現す。はらりと一枚羽根をこぼしながら、優雅に宙を泳いで窓から入ってきた。

まっすぐに部屋の中心へと飛んできて、ローテーブルに着地する。

それを唖然と見つめる――和幸さん。

その間の抜けた顔に思わず笑いそうになったが、そんなことをしたら、せっかく矛先を変えようとしているこの人の怒りがまたオレに戻ってきてしまう。なんとか、こらえた。

「おはようございます、和幸さま」

「ラピスラズリ……か？」と鳩に訊ねる和幸さんの頬はひきつっている。嫌な予感でもしているのかな。「なんで、ベランダから……」

「申し訳ありません」

礼儀正しく鳩は和幸さんに向かって頭を下げる。そのさまは、時間を知らせる鳩時計の人形みたいだ。

「我が主に、あなた方の護衛を命じられておりました。なので……その、夕べからずっと見守っていた次第でございます」

「夕べから！？　て、つまり……別れたあとも――」

「ご安心ください！　鳥目ですから、暗闇では視界が悪く、お部屋の中で何が行われているかまで窺い知ることは出来ませんでした」

「鳥目か、そうか。それはよかった」と、和幸さんは皮肉たっぷりに言い放つ。ラピスラズリは首を竦めた。黒豆ほどの小さな目なのに、申し訳なさそうな色が浮かんでいるのが見て取れる。

それにしても、鳩に説教する人間……シュールだ。オレは興味深く観察していた。

「あの、今朝もですね、必死にわたしの存在を知らせようと鳴いて

はみたのですが、お気づきにならなかったようで。直接お声をかければよかったのでしょうが、タイミングを失ってしまい……」

「もう、いい」

鳩の言い訳を遮り、がくりと和幸さんは頭を垂らした。「そうか、あのうるさい鳥の声……」と疲れ果てた声でひとりごちる。

「もう出家したい」

和幸さんは怒りを通り越して意気消沈したようだった。

＊　＊　＊

「彼氏が丸坊主になったら、パンドラは悲しい？」

「ええ！？　い、いきなり、何の話？」

思わず、私は卵を落としていた。ぐしゃりと悲鳴をあげて、足元で白い殻が黄色い血しぶきを上げる。

「あ、やだ」

慌てて冷蔵庫の上に置いてあるキッチンペーパーを取り、しゃがみこんだ。床にひろがった粘り気のある液体をせっせとふき取る。

「どうして急に丸坊主？　彼氏って和幸くんのことだよね？」

「そういう話になってるから」

今にも眠ってしまいそうな声。予測のつかない発言。相変わらずね。

卵がしみこんで黄ばんだキッチンペーパーを丸めつつ、私は立ち

上がって彼と対峙する。
愛らしい天使のような、カールがかった栗色の髪。同じ色のたれ目はぼうっとしていて眠そうだ。
突然、リストくんと共に現れた、私の元婚約者（偽者だけど）、ユリィ。
彼ののんびりとした雰囲気は、一緒にいるだけで私の心を落ち着かせてくれる。和幸くんといるときとはちょっと違う安らぎ。なんだろう……静まり返った神社にいるみたいな、そんな感じ。

「そういう話って、どういう話なの？」
「パンドラの恋人、出家したい、て言ってる」
「出家？」くすっと私はふきだした。「ユリィも冗談を言うのね」
「冗談？　ううん。本当にそう言ってる」
「そう言ってる……て、聞こえないでしょう？」

ちらりと私は背後の扉を一瞥した。確かに、和幸くんとリストくんの話し声は聞こえるけど、何を言っているかまでは分からない。
冗談じゃないとすれば……ユリィの空耳か、なにかよね。

「和幸くんは出家しないから大丈夫よ、ユリィ」

安心させるように言って、私は流しに体を向ける。
キッチンペーパーを三角コーナーに捨て、手を洗うと、朝食の準備を再開した。
今度は落とさずに卵をボールに割って、さいばしで溶く。その間も、隣でじっと見つめるユリィの視線を感じる。手伝おうという気配はない。観察しているだけ。
和幸くんたちと一緒に部屋で待ってて、て言ったんだけど、黙ってついてきて……それからずっと私の傍らで立っている。
なんだろう？

「ねぇ、ユリィ、何か話でもある――」
訊ねようとした、そのときだった。
「ちゃんと、話した？　本当のこと」
ぴたりと卵を溶いていた手が止まる。一瞬にして、体が凍りついた。
「話してないんだね」
「……」
「もう、話す気はないの？」
ぎゅっとさいばしを握る指に力がこもる。
話す……って、何を？　何から話したらいいの？
私の身体のこと？　この肉体がもう泥に戻っていること？　もう死ぬことすら赦されない身体になっていること？　『テマエの実』の真実？　私たち二人には未来はないこと？
話さなきゃいけないことがありすぎて、もう分からないよ。
じっとボールの中で渦を巻く黄身を見つめる。
「話すよ」とやっとのことで弱々しい声を絞り出した。「話す……けど、今はまだ……」
「そう」
そっけない返事。まるで、落胆されたような……軽蔑されたような……そんな気がして胸が軋んだ。
ユリィが動く気配がした。フローリングの床がぎいっと音を立てる。

振り返ると、ちょうど、ユリィが歩きだしたところだった。和幸くんとリストくんがいる部屋のほうへ――

「ユリィ！」と、思わず、その腕をつかんでいた。

ユリィは足を止め、何も言わずに私を見据える。

「わ……私……」

何を言おうとしたんだろう。何を聞きたかったんだろう。何を言ってほしかったんだろう。

分からない。何も言葉が出てこない。

ただ、きっと怯えてる。私は怖いんだ。ユリィの腕をつかむ右手が震えているのが、その証。

ああ……きっと、私は言いたくないんだ。彼に真実を言うのがおそろしくてたまらないんだ。言わないでいれば、それは事実にならない……そんな錯覚におぼれているんだ。

何も知らない彼は、私を本間カヤでいさせてくれる。不死の土人形だということを忘れさせてくれる。私たちには未来がある――そんな幻想を抱かせてくれる。その幻を見せてくれる。その希望を信じさせてくれる。

魂だけになっても、私たちに未来はない――その運命しか、私たちを待ってはいないのに。

やっぱり、いや。そんなの、いや。言いたくない。彼に、そんなこと言いたくない。

ぎゅっとユリィの腕をつかんで、瞼を強く閉じる。まるで、彼にすがるように……

「もう君は彼との別れを覚悟してる」

急に、ユリィが珍しく低い声でつぶやいた。かろうじて聞き取れるほどの、小さな声で。
私はハッと目を見開いて、顔を上げた。
ユリィはまっすぐに私を見下ろしていた。吸い込まれるような茶色い瞳。滝つぼを覗きこんでいるような錯覚に陥った。全てを見透かされているような恐怖に襲われた。

「パンドラ、君はもう選んだんだね」

ユリィはせつなげに顔をゆがめた。
呆然とする私の背後で扉が開く音がした。

祭りの前に　―３―

「さて。じゃ、オレはそろそろ……」

そう言って立ち上がったリストを和幸は驚いた顔で見上げた。

「朝飯食べてくんじゃないのか？」

「だから、言ったじゃないですか。それは建前。本当は……」

「ユリィ・チェイスを預けに来ただけ――だったな」そうだった、と言いたげに和幸は頭をかく。「それにしても、だ。朝飯くらい食べる時間もないのか？」

食べていけ、ということだろうか。いつも自分を煙たがる和幸にしては珍しいホスピタリティだ。リストは気味悪く思いつつも、ちらりと時計に目をやった。

壁にかけられている時計の針は、まもなく八時三十分を指そうとしている。

「八時半。はい、ないです。じゃ！」

「じゃ、てな……」

「積もる話は劇の後にでも聞きますから」

どちらかというと、積もり積もった愚痴だろうけど。リストは、ユリィに振り回される和幸を想像してクスリと笑った。

「ラピスラズリ」

ふいに、落ち着き払った幼い声が部屋に響いた。

リストの足元に座っていた天使、ケットだ。ちょこんと正座をし

たまま、ローテーブルの上で休んでいる鳩を真剣な表情でねめつけている。

「あとは頼んだよ」

「かしこまりました、ケットさま」

鳩がぺこりと丁寧に頭を下げるのを満足げに見届けて、ケットは金粉となって消えた。瞬間、リストはざわりと全身が粟立つのを感じた。背中に冷たい息を吹きかけられたような寒気。そして、緊張となってのしかかる重圧。

戻ってきた、と直感する。するとそれに応えるようにして、どこからともなく聞こえてくる天使の声。

――のんびりしている場合なの？　待ち合わせに遅れるよ？

ああ、そうだった。幼い叱責の声にリストは苦笑をもらす。

思い出したように「それじゃ、またあとで」と和幸に言い残すと、部屋から勢いよく飛び出した。

そこまではよかった。

あとは台所（といっても廊下だが）でカヤに軽く挨拶し、ユリィに余計なことをしないように釘を刺して出て行くだけ。そう思っていたのだが……

「って、えっ！？」

扉を開けてすぐ、リストは目を見開いた。思わぬ光景に出くわしたのだ。

張り詰めた空気の中、見詰め合う男女。それがカヤとユリィだとすぐに理解して――和幸が気づく前に、と――あわてて後ろ手に扉を閉める。

ユリィがカヤの婚約者のふりをして和幸の前に現れたのが、つい夕べのことだ。こんなシーンを見て、和幸が妙な誤解をしないとも限らない。

これ以上、余計な気苦労をかけるのは可哀そうだからね。そう心の中でひとりごちたリストだったが、それはしっかりと天使に聞かれていた。

――どの口が言ってるんだろうねぇ。

にやにやと勝ち誇ったような笑みを浮かべる幼い少年の顔が思い浮かんだ。どうやら天使に嫌味を言われてしまったようだ。口に出しては言ってないさ、とリストは鼻で笑って反論した。

「……えぇっと、お取り込み中でした？」

気を取り直し、リストが苦笑して訊ねると、カヤは「なんでもないの！」と叫んでユリィの腕から手を離した。しかし、なんでもない、という雰囲気ではない。

「リストくん、もう帰っちゃうの？」

そう訊ねるカヤの笑顔はひきつっている。

また、ユリィが何かいらないことをしゃべったのだろうか。ジト目で睨むと、ユリィは相変わらずぼうっとしてそ知らぬ顔だ。何を考えているんだか。ラピスラズリがいれば、ずいぶん話がスムーズに進むのだが……。

まあ、ここでユリィにかまっていても仕方ない、とリストは同居歴一週間の経験から結論づける。何か言おうにも、話を聞いているのかさえ定かではないのだから。

「和幸さんには言ったんですけど」ころりとリストは愛想笑いを浮かべてカヤに切り出す。「ちょっと約束がありまして。早い話が、ユリィのお守りを和幸さんに押しつけにきただけなんですよね」
「朝ごはんくらい食べていけばいいのに」

残念そうに、和幸と似たようなセリフをつぶやくカヤ。夫婦は似る、とはこのことか。見せつけられた気分になって、リストはにやついた。

「また今度ってことで」

肩を竦めてけろっとそう言い、リストはさっさとカヤとユリィの間をすりぬける。

「いってらっしゃい」

今にもあくびでもしそうな、ぼんやりとした声が背後からした。ユリィだ。
やれやれ、とリストは玄関に向かいながらため息をつく。振り返る気にもならなかった。
ユリィ・チェイス。その名を、心の中で唱える。
何らかのスイッチが入ると熱く語りだすようだが、スイッチがはいらなければ、いつもぼうっとして眠そうにしている。警戒するのもアホらしくなるくらいだ。しかし、それでも、ニヌルタの末裔。しかも、王の実弟だという。天使は『沈黙』はするが、嘘はつかない。ラピスラズリがはっきりと『ニヌルタの王が弟君』と口にしたのだから事実だろう。
リストはまだ完全にユリィを信用したわけではなかった。いや、そもそも、マルドゥクの王として、ニヌルタの血筋の者を信用するなどあってはならないことか。

今朝も、ユリィの子守、というよりも、ユリィの監視を和幸に押し付けにきた――というのが正直なところだった。ユリィをカヤに近づけておくのは落ち着かないが、和幸が近くにいれば大丈夫だろう。ここにユリィを置いていくほうが、ユリィを一人で放っておくよりははるかに安全だ。安心できる。そう思ったのだ。

漠然とした根拠――和幸がいるから、という理由だけで。

――頼れる友達がいるのはいいことだね。

玄関で靴を履こうかというとき、クスクスと面白がるような笑い声とともに嬉しそうな声が響いた。

リストはきょとんとして、思わず「友達？」と口に出して訊ねていた。身に覚えのない単語だったからだ。

――かずゆきのことだよ。

なにとぼけているのさ、とでも言いたげな口調だ。

リストはしばらく呆けて、「まさか」と吐き捨てるようにつぶやいた。革靴にかかとを押しこんで、つま先で地面をたたく。

「オレは和幸さんを利用してるだけ。『友達』とは言わないでしょう」

「そうなの？」

「！」

なんの前触れもなく、突然、背後からやんわりとした声がした。

リストはぎょっと驚き、とっさに振り返る。

「残念だな。私、リストくんを頼りにしてるのに」

どこか哀しそうな、無理した笑顔。この地球（エリドー）でもっとも美しいとされる創造物は、今にも崩れ去ってしまいそうな儚さを纏ってそこに立っていた。

「頼り？」とリストは戸惑いつつも聞き返す。彼女が近づいてくる気配はおろか、ケットへの交信を口に出していたことも気づいていなかったのだ。動揺するのも当然だ。しかも――

「えっと……何の話ですか？」

頼りにしてる――よりにもよって、『災いの人形』に言われる日が来るとは思ってもいなかった。彼女は自分たちの立場をまだ理解していないのだろうか、とリストは疑問に思った。

彼女は『災いの人形（パンドラ）』で、自分はそれを滅する立場にあるマルドゥクの王だ。彼女は自分にとっての脅威で、自分もまた彼女にとっての脅威だ。本来ならば、和気藹々と高校生活を共有する間柄などではない。まして、頼るなど……。

居心地の悪い沈黙があってから、カヤは困ったような、照れたような、複雑な笑みを浮かべた。

あきらかに様子が変だ。ふと気になって、彼女の背後に目をやる。流しの前でこちらを見守っているユリィの姿があった。らしくもない神妙な面持ちだ。

ついさっきの光景が――ただならぬ雰囲気で見つめあう二人の様子が、脳裏によぎる。悪い知らせでもあるのか。嫌な予感がして、リストは緊張に顔をこわばらせた。

しかし、リストの不安は裏切られることとなる。思わぬ形で。

それは悪い知らせではなかった。少なくとも、マルドゥクの王である彼にとっては。

カヤはすっと浅く息を吸い、覚悟をその表情に滲ませて口を開く。

「私が消えてから……和幸くんのこと、お願いしたいの」

祭りの前に　―４―

「私が消えてから……和幸くんのこと、お願いしたいの」

は？　突然、なんだ？

わけが分からず、きょとんとしていると、本間先輩はちらりと視線で背後を示した。

「夕べね、ユリィが言ってくれたんだ。無いものは創ればいい。パンドラの使命とは違う、新しい選択肢を創ればいい。そう言ってくれたの」

「新しい選択肢……？」

ああ、そういえば、夕べユリィはそんなことを言っていたような気がする。パンドラに愛する人と生きる希望を与えた、とかなんとか……

そのとき、本間先輩を見つめるオレの眼差しはきっと憐れみに満ちていたと思う。ユリィの狙いは分からないが、これだけは言える。まず、そんな選択肢はない。偽りの希望なんだ。本間先輩に残されているのは――

「でもね、そんな選択肢は存在しない」

「へ？」

思わず、間の抜けた声をもらしていた。

本間先輩はそんなオレに、どこか寂しげな笑みを向けた。

「なんだか、分かっちゃった」

分かっちゃったって……そんな愛らしく言われても、こっちが分からない。訝しげに見つめる中、本間先輩は自分の身体を見下ろした。

「きっと、私が『災いの人形』だからなんだろうね。なんとなくね、悟ってたんだ。知ってたんだ。私の選択肢は二つだけ。それは絶対。変えることなんてできない。だから……気づけば、選んでたんだよ。もう覚悟していたの」

唇をぎゅっと引き結び、本間先輩は顔を上げた。その表情は真剣で凛々しくて、心底美しいと思った。神の人形なんだ――今さらながら、思い知る。

しばらくオレを見据えてから、本間先輩は大きく息を吸った。そして、

「私は『テマエの実』を食べない」彼女ははっきりとそう言った。「『裁き』はそれで終わり。――だから、リストくんはもう私を殺さなくていい」

「！」

その瞬間、時間が止まったようだった。転地がひっくりかえったような、目が回るような、滝つぼの渦に飲まれたような……動揺と混乱がうずまく、そんな混沌に飲みこまれた。

冷たい静寂の中、蛇口から漏れる雫の落ちる音が響いた。

――世界を滅ぼす存在になるかどうか、自分で選んでもらうんだ。

ユリィの言葉がよみがえる。本間先輩に全てを話そう、とあいつが持ちかけてきたときだ。

――彼女が決めるべきだ。彼女が人間であるうちに。彼女に自由意志があるうちに。

あのとき、ユリィはそう言っていた。今になって、その意味に気づく。

彼女が『テマエの実』を食べない、と決めたのなら、もう終わりなんだ。オレとニヌルタの決闘も意味を成さない。勝ち負けなんて関係ない。彼女が『テマエの実』を食べなければ、そこまで。世界は滅びない。

神の仕組んだ『裁き』が崩れたんだ。今や、全ては彼女の自由意志。彼女の選択次第。オレやニヌルタの使命は意味を失った。

でも……と、オレは拳を握りしめる。

――『パンドラの箱』が開かれ、エンリルの『裁き』が始まった。お前がここにいる理由は、マルドゥクの王となり、一族の使命を果たすこと。そして、ナンシェを守ること。分かってるな、リスト。

それは、記憶にこびりついた呪詛。幼いころ、あいつは何度と無くオレに言い聞かせた。気に食わないけど、懐かしいと思ってしまった。オレを創った男、先代マルドゥクの王、リチャード・ハノーヴァーの声。

忘れたことなんてない。思いあがったことなんてない。

オレが創られた理由。それは『災いの人形』を殺すため。『災いの人形』が『テマエの実』を食べ、世界を滅ぼすことを防ぐ。そのために、彼女を殺める罪を神の剣とともに背負う。――それがオレの人生。この世に存在したその瞬間から、そう運命づけられた。

構わない、と思った。ナンシェを知って、彼女のためなら、と思えるようになったんだ。納得させたんだ。

それが……もう、『災いの人形』を殺さなくていい？　そんな未来を、考えたこともなかった。

いきなり見知らぬ土地に放り出されたような不安が押し寄せた。

「『テマエの実』を拒絶すれば、この身は滅んで土に還る。私は消える。和幸くんを残して」苦しげにつぶやき、本間先輩は胸元を握り締めた。「心配なの。彼のことが。彼にはもう支えてくれる家族はいないから。今の彼には私だけ」

だから、と彼女は力強い口調で続けた。懇願するような表情をオレに向けて。

「だから、知っておきたいの。『収穫の日』のあと、私が消えたあと……彼を助けてくれる人がちゃんといること。私のこと、『裁き』のこと、全てを知った上で、彼を支えてくれる人がいること」

「……分かりません」本音がこぼれた。思考回路が混線している。視線が泳いでしまう。「すみません。オレは……」

「『テマエの実』のこと？　あの嘘のことを気にしてる？」

『テマエの実』の嘘――ぎくりとした。ハッとして本間先輩を見ると、黒曜石のような瞳がオレの姿を映し出していた。曇りも迷いも、そこにはない。あるのは、確固たる覚悟。

本当に、この人は決めたんだ。漠然とそう悟った。

「大丈夫」と本間先輩はやんわりと頬をゆるめる。「今夜、私が全部話すから。和幸くんは分かってくれる。怒ったりしない。私が消えて、彼がリストくんを恨むようなことはないから」

「全部、話す？」

思わず、眉をひそめた。

視界の隅で、ユリィが動いたのが見えた。ちらりと一瞥すると、ユリィは驚いたような表情でこちらを見つめていた。何か言いたそ

うだ。
今度ばかりは、あいつの考えも分かる。オレはユリィの代わりに問う。
「本当に、全部言うつもりなんですか？　今夜」
本間先輩はにこりと微笑んだ。その笑みはぎこちなくて、今にも泣きだすんじゃないかと思った。
「だから、お願い。パンドラとか、使命とか、そういうんじゃない。友達として、リストくんに頼みたいの」
友達として……『災いの人形』がそう言った。
「和幸くんをお願い」

＊　＊　＊

「遅いな。なにしてんだろう」
リストが出て行き、しばらく経っても、カヤとユリィがリビングに来る気配はなかった。話し声が聞こえてくるから、廊下にいることはいるんだろうが。
様子を見に行こう、と立ち上がりかけた俺を鳩――いや、ラピスラズリが「和幸さま！」と引き止めた。
「なんだよ？」
それにしても、鳩に名前を呼ばれるって……妙な気分だ。どうでもいいが、焼き鳥屋でバイトしている、と言ったらどんな反応をす

るんだろう。やっぱ、嫌な顔をするんだろうか。
「今は、行かないほうがよろしいか、と」
行かないほうがいい？　嫌な響きのセリフだな。俺は鳩を試すような視線で睨みつける。
「なんでだ？」
「いえ」鳩はぎょっとして俺から目をそらした。「今は、深刻なお話をされているようですから」
そういや、天使とその主はテレパシーみたいなものができるんだったな。ユリィが何をしているのか、離れていてもラピスラズリには分かるのか。
俺は廊下のほうをちらりと見やった。深刻な話、ね。やろうと思えば、聴力を引き上げ、会話を盗み聞きすることもできるが……
「またどうせ、神サマがどうの、『裁き』がどうの、て話なんだよな」
「はあ」とラピスラズリは生返事をする。「そのようなお話のようですが」
「なら、いい。興味ない」
ため息をもらし、俺は天井を振り仰ぐ。
「興味がない……ですか」
「当たり前だろ。俺はパンピーなんだ」
「ぱんぴー？」
「あ、いや、なんでもない」と俺はラピスラズリに苦笑する。「とにかく、『裁き』に関する説明会はもうたくさんなんだよ。俺はカ

ヤを守るだけだ。それだけ分かってれば十分だ」
「そうですか」
鳩は感慨深げに目を細めた。
まるで子どもを見守る母親の視線。落ち着かなくて、俺は「そういえば」と話を変えた。
「お前の主人、ニヌルタとかいう一族の一人なんだよな？　リストの実家と敵対する一族って聞いたが、なんでその二人が仲良く同居してるんだ？」
「仲良く、というのは肯定しかねますが」ラピスラズリは苦々しくそう前置きし、「おっしゃる通り、ユリィはニヌルタの出です。人類（ルル）を嫌う神、エンリルの血を引く者。人類（ルル）を創り出した神、エンキの血を引くマルドゥクとは相容れない存在。ですが、ユリィは言うなれば、異端児。彼の意思は一族のそれとは異なるのです。ユリィは……」
急にラピスラズリは言葉を切った。逡巡してから、決意したかのように深刻そうな面持ちで――いや、鳩にそんな表情はないか。
「ユリィはただ、兄君を救いたいのです」
「救う？」
はい、とラピスラズリは頷いた。
「ユリィの兄君はニヌルタの王、タール・チェイス。ユリィはタールさまを追ってここまで来ました。残念ながら、まだタールさまの所在はつかめておりませんが、代わりにマルドゥクの王とお会いすることが出来ました。マルドゥクの王は、ユリィの主張をお聞き届けくださり、快く――とはいきませんでしたが、寝床を提供してく

ださることになったのです」
「……なるほど」

そういう経緯で同居が始まったわけか。詳しいところはまだ曖昧としているが、とりあえず流れは把握した。

しかし……それよりも、だ。

俺はある単語が気にかかって仕方なかった。当たり前のようにさっきからラピスラズリは違和感のある単語を繰り返している。

「兄貴って……」と俺は目を眇めて切り出す。「血は繋がってるのか？」
「もちろんですよ？」

なぜそんなことを聞くのだ？　と言いたげな調子でラピスラズリは答えた。その反応に調子が狂った。

今のご時世、血の繋がった兄弟がいるのはおかしな話なんだが……天使が俺たちの事情に疎くても仕方ない、か。

「一人っ子政策、ていうのがあるんだが……」
「ああ、そのことですね」ラピスラズリはあっと目を丸くした。「ニヌルタは特別なのです」
「特別？」

神の子孫だから、免除ってことか？　まさか、な。神の血をひいてるだなんだ、と言って誰が信じるんだ。

「ニヌルタはルルを毛嫌いしています。ルルは下等生物――それが、ニヌルタの考え方なのです。ルルに従うことなど、彼らにとっては恥ずべきこと。それも、懐胎（かいたい）は、彼らにとって神（エンリル）からの恩恵です。全ての命はエンリルの意思によってこのエリドーに授けられるのだ、

と信じています。ですから、それをルルに制限されるなど、屈辱以外のなにものでもないのです」

パンフレットでも読み上げるようにスラスラと言いきって、どうやら、とラピスラズリは低い声で付け加える。

「ユリィの話によれば、ニヌルタの血に宿りし偉大なる神の力、『メ』を使い、その規制をかいくぐってきたようです」

神の力って、リストと同じやつか？　人を従える力……だよな。それで役人をごまかしてきた――そんなとこか。

じゃあ、タールとかいう奴とユリィは本当に血が繋がっている？

「よく分からないな」

頭をかいてぼそりと言うと、ラピスラズリは小首をかしげた。

「なにがでしょうか？」

「俺はあいつのことをよく知らないが……カヤは『いい人だ』と言っていた。リストも一応、居候を認めたわけだし……とりあえず、世界を滅ぼそうとはしてないんだろ」

「もちろんです」と間髪いれずにラピスラズリは肯定する。「ユリィはルルの世界を守るためにここまで来たのです」

話を聞く限り、そういうことだろうな。――だからこそ、腑に落ちない。

「それは実の兄貴を裏切ることになるんじゃないのか？」

俺が指摘すると、ラピスラズリはしゅんとし、身を縮ませた。

「裏切る……そういう表現の仕方もあるのでしょうね。しかし、あくまでユリィの目的は、兄君を救うことなのです」
「救うって、何から？」
「使命からです」

余計、意味が分からない。

「もっと具体的に事情を教えてくれないか？」

すると、ラピスラズリは目を逸らし、「できません」とつぶやいた。

「わたしにも分からないのです」
「は？」おかしな答えが返ってきて、俺は目を瞬かせる。「分からないって……お前はあいつの天使だろ？　心が読めるんじゃないのか？」
「全てが読めるわけではありません。和幸さまがパンドラさまに隠し事をするように、ユリィも天使（わたし）に隠し事をすることもあるのです」
「俺は、カヤに隠し事なんて……」言いかけ、口ごもる。――脳裏をよぎったのは、銀色に輝く十字架のネックレス。「いや、そうだな。してるわ」

一気に疲労感が押し寄せ、ため息が零れた。

「心は底なしのように深く、その奥底まで天使でも潜ることはできません。特に、ユリィの心には、どす黒いもやがかかった部分があるのです。強い拒絶の匂いが漂う暗く冷たい深淵。そこには、わたしは決して立ち入ることはできません。おそらく、兄君に関することは、その奥に隠されているのだと思います」

「つまり……天使にも言えないような理由で、あいつは兄貴を救おうとしているってことか？」
「そういうことになります」

ラピスラズリは真っ白な羽毛に覆われた首をもたげた。どこか寂しげだ。たとえ一部だけでも、主に心を閉ざされるというのは天使にとっては哀しいことなんだろう。

「兄貴を救う……か」

その言葉を反芻し、俺は視線を落とす。
兄貴、か――。
喉元が締め付けられるような息苦しさを感じ、俺は首筋を押さえた。自然と眉間に力がこもる。

「和幸さま、どこに行かれるんです？」

俺が腰を上げたときだった。ラピスラズリはあわてた様子で訊ねてきた。

「安心しろ。『深刻なお話』を邪魔しないよ」言って、ベランダを指差す。「俺も兄弟に用があるのを思い出したんだ」
「はい？」

ラピスラズリは不思議そうに目をぱちくりとさせた。その様子はまさに『豆鉄砲を食らった鳩』。俺はつい失笑してしまった。

祭りの前に　―５―

「結局、マルドゥクは答えを出さなかったね」

カヤは今まさに目を覚ましたかのようにハッとして振り返った。いつのまに歩み寄っていたのだろうか。気配を感じなかったことが不思議なほど、ユリィはすぐ背後に佇んでいた。

その深みのある茶色い瞳は自分を通り越して、玄関の扉へと向けられている。

「仕方ないよ」とつぶやいて、カヤは諦めたような笑みを漏らした。

「いきなり言われても、困るもんね。リストくんにだって、使命を終えてからの生活があるもの」

カヤは自分でも驚いていた。いきなり、リストにあんなことを頼むだなんてどうかしている。

しかし、今のうちに、確認しておきたかった。文化祭が始まれば、話す時間もないかもしれない。今が最後のチャンスのように思えた。なんとしても、知っておきたかったのだ。自分が消えても和幸は大丈夫だ、と。自分が去った世界で、彼を助けてくれる誰かがいる、と。――和幸に全てを打ち明ける前に。

「ユリィのおかげで、気づけたんだ」

自然とため息がもれた。諦めのため息なのか、安堵のため息なのか。すっと力が抜けた。

色とりどりのネオンが差し込む暗いタクシーの車内。そこで、ユリィは言ってくれた。信じてみよう、と。パンドラとしてではない未来。それを望んでもいいのだと思わせてくれた。その可能性に賭

けたいと思った。
和幸の傍にいたい。その気持ちから逃れることはできない、と悟ったから。
慰めにも思える些細な希望を抱いていた。――はずだった。
――もう君は彼との別れを覚悟している。

ユリィの言葉がよみがえり、カヤは憂いを帯びた表情を浮かべた。
ついさっき、ユリィにそう言われるまで自覚もしていなかった。
自分がすっかり諦めていたこと。いや、諦めることさえしていなかったのかもしれない。変えようの無い理を前に、自分は無力。従うしかないのだ、とカヤはいつのまにか『思い出していた』。
希望など無い。選択肢は二つしかない。揺らぎの無い確信を抱いていた。それはまた、自分が『災いの人形』だという証でもあるのだ、と漠然と気づいた。

「そうなんだよ」とカヤは力なく微笑んで、誰に言うわけでもなくつぶやいた。「私は自分勝手。彼に事実を伝えようともせず、勝手に別れを覚悟して……。彼は私との未来を信じてくれてるのに」
喉が締め付けられる。胸が引き裂かれる。そんな息苦しさと痛みを感じて、カヤは固く瞼を閉じた。

「だから、言わなきゃって思った」覚悟からなのか、悔しさからなのか、きゅっと自然と手に力がはいった。「私、また彼に甘えてたんだよ。何も知らない彼が見せてくれる笑顔に夢を見てたんだ。その夢が決して叶うことなどないと知りながら」
ユリィの言葉が返ってくることはなかった。ただ、こちらをじっと見つめる視線だけはしっかりと感じる。

彼がなにを考えているのか。カヤには予想もつかない。そもそも、ユリィの狙いが何なのか。なぜ、ニヌルタの血をひく彼がリストや自分と行動を共にしているのか。そういえば、カヤは彼のことを何も知らない。

それでも、彼を信じてしまう自分がいる。理由もつけられない信頼感。家族に対するそれに似ていると思った。

「本当に……ユリィには感謝してるの」カヤは柔らかな口調でそうつぶやいて、顔を上げた。「この一週間、私のわがままにも付き合ってくれて……婚約者のふりまでしてもらっちゃった」

思えば、和幸のいない心の隙間を埋めてくれていたのはユリィだったような気がする。カヤは頬をゆるめ、ユリィをまっすぐに見つめた。

「ありがとう」

心を込めた感謝の言葉。胸のつかえがほんの少し、取れたような気がした。

しかし、ユリィの表情はこわばっていた。ありがとう、と言われた人物の顔ではない。まるで理不尽なことを言われて腹を立てているかのようだ。

やはり、ユリィは謎だ。考えが全く読み取れない。

カヤはつい苦笑をもらした。

「さて」と、気を取り直すように出した声は変に上擦った。「朝ごはんの準備しなきゃね」

シャツの袖をまくり、ユリィの横を通り過ぎようか、というそのとき。

「君と彼には使命を乗り越えてほしかった」

ユリィの苦しげな声がして、カヤは足を止めた。

え、と振り返ると、苦痛にゆがむユリィの横顔が目に飛び込んだ。

その表情に見覚えがあった。キラリと閃光が脳裏に走り、虹のようなネオンに照らされる彼の横顔が思い浮かんだ。

――兄さんだって、本当は愛したい人がいるんだ。

声が聞こえた。記憶の海にぽつりと雫が落ちたように、静かに響きわたった。

「アナマリア……」

カヤは無意識にその名をつぶやいていた。

＊　＊　＊

ベランダに出て、俺は記憶に残るある番号を携帯電話に打ちつけた。

『勘当』されて、俺は電話帳の一つのフォルダを丸々消した。携帯電話に愛着がわかず、便利な機能もガン無視していた俺を見かねて、カヤがつくってくれたフォルダだった。――家族、と名づけられたフォルダ。

ケータイを耳にあててから、しばらくコール音が続いた。

足元にぽっかり開いた大穴を見下ろして、俺は懐かしさに苦笑した。下のベランダが丸見えだ。確か、大学生くらいの女が住んでたな。迷惑に思っていることだろう。早いとこ、修理しなきゃならないんだが、そんな暇もなかった。

ほんの数週間前なんだよな。あのころはまだ、俺はカインで、カヤは『黒幕の娘』（と疑われていた女）だった。俺は神を求めるただのクローンで、神は手の届かない存在だった。

それが――あの夜から、全てが変わった。

あの夜、俺は神の僕に出会った。ありがたいことに、呪いなんていう手土産までもらってな。そして……神の存在を知った。神の血がまだこの地上に残っていることを知った。

――オレは、神の血をひいている……といったら、笑う？

あいつはいたずらっぽく笑ってそう言ったんだ。人の気も知らないで、よくもまあ軽々と打ち明けてくれたものだ。

あれから……たった数週間で、俺の世界は変わった。

今じゃ、神の子孫に私生活をひっかきまわされるし、天使に覗き見されることにも慣れた。カヤは俺の恋人で、世界を滅ぼす『災いの人形』。そして俺はただの高校生で、裏社会は幻になった。

俺はカヤと生きる世界を選んだ。カヤの居る世界を欲した。だから、『無垢な殺し屋』を辞めた。カインの名を捨てた。家族を抜けた。広幸さんの形見の銃も手放した。

地面も空も空気も、何もかも同じはずなのに、世界は変わった。

そんなことを考えながら、いったい、何回コール音を聞いたことだろうか。ようやく、単調な電子音が途切れ、

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません』

「！」

そんなアナウンスが始まって、俺はあっけに取られた。鼻にかかったような高い声だ。機械でつくった若い女の声――に思わせようと男が演じているというのは明らかだった。

俺は呆れてため息をつく。

「分かってる。本当はもう連絡しちゃいけないんだよな。電話はこれで最後にする。答えなくていい。ただ、俺の話を聞いてくれ」

『……』

アナウンスは切れた。無言が続く。了解した、と受け取っていいのだろう。

「三神さんに頼んで調べてほしい男がいるんだ」言いながら、痛みを感じて俺は喉をさすった。「お前も会ったことがあるよな。カヤのボディガード、椎名望」

かすかだが、電話の向こうで呼吸が乱れたようだった。

関心のないことはすぐ忘れてしまうこいつも、椎名のことは覚えていたか。よかった、話は早い。

「夕べ……いや、今朝か。あいつとちょっとモメてな、殺されかけた」

その瞬間、何かが折れたような音が聞こえた。木の枝でも持っていたのだろうか。俺はあわてて「最後まで聞いてくれ」と注意する。

「俺は『手加減』なんてしてなかった。それでも、殺されかけたんだ。どういうことか分かるだろ？」って、訊ねちゃだめだよな。俺はすぐさま自分で結論づける。「あいつも俺たちと同じだ。商業用のクローン。だから……」

『だから、何？』

「！」

まさか、返事がくるとは思ってもいなかった。ぎょっとして、言

葉がすぐに出てこなかった。
たとえ姿が見えなくても、そんな俺の様子が想像できたのだろう、くすりと笑う声が聞こえた。
『まだ抜け切れてないの？』と、からかうような声が続く。『かっちゃんはもうこっちの人間じゃあないんだから。余計なことを心配してる場合じゃないでしょう』
「余計なことって……」
またか、と思った。そういえば前も、抜け切れてない、とこいつに叱られたことがあったな。
『別にあの人が俺たちと同類だとして、別に驚きはしないよ。俺たちが特別なんだから。俺たちは運がよかっただけ。『迎え』に来てもらえず、売られたクローンなんていくらでもいる』
「それはそうだが……」
『そんなことより――もうこうして会話しちゃったわけだから、ついでにこっちの用も済ましちゃおうかな』
そんなことって……それだけ？　まさか、こんな軽くあしらわれるとは思ってもいなかった。戸惑いつつも、「ちょっと待て」となんとか言葉を絞り出す。
「気にならないのか？」
『カーヤのネックレス、もう取っていいよ』
思わぬ言葉に遮られ、俺は目を丸くした。
ネックレスって……あの十字架、だよな？　カインがカヤを『裁く』ために渡した十字架。小型の爆弾が仕込まれていて、こいつがその起爆スイッチを持っている。カヤが『黒幕の娘』かどうか確か

めるため、一週間、肌身離さずつけさせるって話だったはずだが。

「一週間、まだ経ってないだろ。あと一日あるはずだ」

『あれ？』とわざとらしくとぼける声が聞こえた。『喜ぶと思ったのに、実はカーヤとのラブラブを盗聴されるの快感だった？』

一気に頭に血が上った。こんなときまで――と苛立ちと呆れが一緒くたになって膨れ上がって、「んなわけあるか！」と怒鳴っていた。

「怪しんでるだけだ！」

『ああ、そういうことなら安心して。実は父さんにバレちゃったみたい』

「親父に？」

そういえば……最後に会った夜、砺波が言っていたな。ネックレスのことは親父は知らない、と。誰の指示というわけでもなく、どこからともなく、そんな話が出てきたのだ、と。

『今朝、静流（シーズン）から直々に電話があって、作戦を中止しろ、て言われたんだ。文化祭に忍びこんで、こっそりカーヤからネックレスを奪いとろうかな、て企んでたんだけど……もうその必要はなくなったね。かっちゃんが電話してきてくれてよかった。うまいこと言って取り上げといてよ』

あまりのことに、俺はぽかんとしていた。考えなしに、「いいのか？」と訊ねていた。

『いいよ』と失笑混じりに慰めるような声が返ってくる。『よかったね』

「……」

よかった……そうだよな。よかったんだよな。

もう、いいんだ。カヤもこれで、ようやくカインから離れることができる。行動が監視されることはなくなるし、カヤが狙われることもない。これで俺たちと裏社会との接点は何一つなくなるんだ。

なぜだろう。あのネックレスを憎んでいたはずなのに。カヤを怪しむカインの兄弟に怒りを感じていたはずなのに。ほっと安堵すべきなのに。心にぽっかり穴が開くような、寂しさが残る。

『それじゃ』と急に弾けたような声が聞こえてきた。『そろそろ、先生の視線が痛いから切るね』

「え？」切るって……そんなあっさり？　「いや、待て」

あわてて、俺は何かを言いかけて――しかし、単語一つ出てこなかった。

何を言おうとしたのか。自分でも分からない。

ただ、虚しく無機質な音だけが残って、ひどく悔しい気持ちになった。きっとこれで最後だというのに、伝えなきゃならないことを言い忘れている気がした。それが何なのか、見当もつかないのに。

俺は携帯電話を下ろし、履歴を消した。もうかけてはいけない番号。早いとこ、記憶からも消さなきゃならない。もう必要のない情報のはずなのだから。

空を振り仰げば、晴れ晴れとした青空で、雲ひとつないことがひどく寂しく思えた。

「そういえば」ふと、俺は思い出したように小首をかしげた。「……『先生の視線』？」

＊　＊　＊

「藤本曽良！」

野太い声が教室に響いた。窓際に座る生徒は、特徴的なアヒル口をにぱっと開いて顔をあげる。

「どうかしましたか、先生？」

「どうかしましたか、じゃない！」初老の男は顔を真っ赤に染めて怒鳴ると、薄い黒髪を振り乱し、曽良の手から携帯電話を取り上げた。「授業中に堂々と電話する奴があるか！　それも、補習なんだぞ。分かってるのか？　進級ギリギリだという自覚はないのか！？」

すると、曽良は不思議そうな表情で辺りを見回す。

「そんな自覚がある人、どこにも見当たりませんけどねぇ」

授業中とは思えない騒々しさの教室。どうせ割られるから、という理由で取り払われた窓。そのお陰でいい風が吹き込んで、あちらこちらで紙飛行機が飛び交っている。補習だというのに、ほぼ全ての席が埋まり、色とりどりの髪が視界を埋め尽くしている。その中で、大人しくイスに座っているのは曽良と、その隣に座る地味な見た目の少年くらいだ。電話くらいでなぜ注意されるのだ？　と曽良が思っても不思議ではない。

教師は罰が悪そうな表情を浮かべ、ふん、と鼻を鳴らした。

「とにかく、これは没収だ。授業が終わったら職員室に取りに来なさい」

「え！？」と思わず、曽良は立ち上がっていた。「いや、それはちょっとまずいんですけど」

「授業中に電話は必要ないはずだ」

教師は胸を張って自信満々に言い放ち、携帯電話をポケットにつっこんだ。

「家庭の事情で……」と言いかけたが、自分は『孤児』という設定だったことを思い出し、曽良は口をつぐんだ。

観念して腰を下ろすと、教師は満足そうに微笑んで身を翻し、黒板へと歩き出した。相変わらず誰も聞いていない状況の中、講義が再開される。

曽良は「参ったな」とぼやいて、頬杖をついた。これから武器商人との取引があるというのに、リーダー代理の自分が連絡つかないというのは問題だろう。

鬼の形相で睨みつけてくる姉の姿が脳裏にちらつき、曽良はぶるっと身震いをした。青白い顔で深いため息をつく。

「運が悪かったですね、藤本くん」

遠慮がちな小さな声が隣から聞こえた。こんな騒がしい教室の中では大声を出しても目立たないというのに。

ちらりと目をやれば、どこにでもいそうな顔立ちの純朴そうな少年が同情の眼差しでこちらを見ていた。

「仕方ないですよ」と彼は落胆した声で続ける。「たぶん、先生たちが注意できるのは俺たちくらいなんですから」

曽良は「それもそうだねぇ」とため息交じりに肩をすくめた。

確かに、この教室の中、真っ当な格好をしているのは、彼と曽良くらいだ。まともに学ランを着ている生徒さえ珍しい。未だにリーゼントやパンチパーマといった類の髪形を見れるのはこの高校くら

いだろう。
曽良が通うこの学校は、トーキョーでも有名な不良高校。素行の悪さがたたって、他の高校に受け入れられない生徒がたどり着く場所だった。
もちろん、例外もある。曽良の隣に座る彼のように、単純に受験に失敗した生徒だ。
しかし、曽良はまた特別だった。彼は自ら進んでここを選んだ。この高校以外、願書を出すこともしなかった。
藤本が必死に止めようとしたときのことを、曽良は今でもはっきりと覚えている。
それでも、この高校を選んだのは、表の世界での自分の未来を見出せなかったからだ。
いつかはわたしの代わりに、皆を引っ張ってほしいと思っている――そう藤本に言われたのは、中学の頃だった。おそらく、父親代わりだった彼には曽良のリーダーとしての資質が見えていたのだろう。
曽良はその日から、表の世界への関心を失った。『無垢な殺し屋』を辞め、『出稼ぎ』をする気もなくなった。だから、大学へ行く理由も思いつかなかったし、必死に勉強する必要性も感じられなくなった。
とりあえず、高校だけは卒業してほしい、という藤本の頼みだけは聞き届けることにして、楽に卒業できそうなこの高校を選んだだけのこと。
卒業したら、すぐに藤本の傍らで裏社会のノウハウを学ぼうと思っていた。いつ、藤本が引退してもいいように。そうして、自分は裏の世界で一生を終えるのだ、と覚悟していた。
――かっちゃんは家族の希望になる。
夕べ、自分は和幸にそう言った。自分とは違い、表の世界で居場

所を見出し、そこでの未来を望んだ兄弟に。
クローンでも表の世界で生きられることを証明してほしいと思った。だから、たとえ何があってもこっちには戻ってこないでほしいと願った。そのためなら、自分は何でもする。何としても、彼にこっちの土は踏ませない。――そう誓った。
机に視線を落とすと、真っ二つに折れたシャーペンが、流血したように芯をばらまき倒れている。
――俺は『手加減』なんてしてなかった。それでも、殺されかけたんだ。どういうことか分かるだろ？
その問いに、曽良は「分かるさ」と今さらながらに答える。神妙な面持ちで、枠しかない窓から外をねめつけた。
「あっちも、かっちゃんの正体に気づいてるってことだ」
問題は……と、口許に手を置き、眉をひそめる。
和幸が『手加減』せずに抵抗したのに、殺されかけた。つまり、向こうも『手加減』していなかったということだ。果たしてそれが、本気で殺そうと思って『手加減』しなかったのか。それとも……
「元から、『手加減』せずともかっちゃんが死なないことを知っていたのか」
どちらにしろ、危険なことに変わりはない。――それだけはっきりしていれば、十分だった。
曽良はちらりと隣の席に座るクラスメイトに視線を向ける。
この学校では珍しい黒髪の、中肉中背の少年。
彼とは同じ中学に通っていた。知り合ったのは、中学を卒業する数日前だったのだが、それ以来ずっと、彼は曽良にとって表の世界

での一番の友人だった。
殿、とあだ名をつけた彼の本名は鈴木。どうやって、そのあだ名になったのか、曽良自身、もう覚えてはいなかった。
一緒に卒業したかったのだが……と、心の奥でぽつりともらす。
椎名望は、あれでも国務大臣の護衛人だ。さすがに、うまくいっても、ただではすまないだろう。思ったよりも早く、裏の世界にこもることになりそうだ。
ふと、残念に思っている自分に気づいて、曽良は苦笑した。開き直るようにため息をつき、黒ずんだ天井を振り仰ぐ。
――家族の脅威は全て取り除く。俺がしているのはそれだけだよ。
まるで自分自身を説得するかのように、その言葉が頭の中に響いた。

祭りの前に　－５－（後書き）

人気投票の中間発表を小説にして公開しております。（ｈｔｔｐ：／／ｍａｎａｈｍｉａ．ａｎｉｍｅ－ｍｏｖｉｅ．ｎｅｔ／Ｅｎｔｒｙ／１５／）

これからもいい作品になるように心がけていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします！

リストの望み

「あのぅ、砺波さん？」

遠慮がちに呼びかけてくる声。馴染みの無い、か弱くも聞こえる少女の声だ。誰だったかしばらく思い出せなかった。寝起きの頭はぼうっとして、つい夕べのことも曖昧としていた。

「そろそろ、出かけませんか？」

今にも「ごめんなさい」と続きそうなほど、自信無げな声色だ。礼儀正しいというよりも、腰が低いというか。まさか、二十四歳だとはとても思えない。

ああ、そうだった。――ようやく砺波は思い出し、瞼を開いた。

「なんですか、鼎姉（かなえ）さん？」

目をこすりながら、砺波は身体を起こす。「うーん」と唸って伸びをすると、ちらりと横に視線をやった。

朝一番に目にしたのは、まばゆい朝の光の中、ちょこんと床に座ってこちらを見ている少女――いや、女性、か。流れるような黒髪は茶色みを帯び、白い肌はまるで新雪のよう。砺波の姿を映し出す二つの硝子玉は、灰色交じりの翠色。小さな顔に華奢な体つき。異国の人形のような容姿は、夕べ貸したジャージが似合わないことこの上ない。

夕べ、突然現れた鼎という名の女性。『フィレンツェ』で売られそうになったところを和幸が独断で『迎え』に行ったらしい。曽良も一枚噛んでいるのか、巻きこまれただけなのか、砺波は曽良に頼まれ、彼女を預かることになったのだ。

「姉さんだなんてやめてください」と鼎は照れたような笑みを浮かべた。「タメ口でいいですし、鼎、で結構ですよ」
「そう言われても……これからウチの一家に仲間入りするんでしょう？　なら、私の姉さんになるんだし。タメ口なんか使ってたら、他の姉さんたちに怒鳴られますから。特に、ブチ切れしそうな姉さんが一人いますし。今のうちに慣れとかないと」
「でも、曽良は承諾してくれましたよ？」鼎が小首を傾げると、その細い髪が肩から滑り落ちた。「今後は白雪と呼んでくれる、て言っていましたし」
「白雪？」砺波は顔をしかめて嫌悪感をあらわにした。「また変なあだ名を……」
「そうですか？　私は気に入ってますが」

無理した様子も、嘘をついている風でもない。まさか本当に気に入っているのか。どうも調子が狂う。カヤを相手にしているような気分になった。
彼女から感じる懐かしさは、彼女がカヤに似ているからなのだろうか。だとすれば……ふと、砺波は思った。和幸もそれを感じたから、一人で彼女を助け出したのだろうか、と。
砺波はなんとも言えない腹立たしさを感じて、とにかく、と強い語調で話を切り替えた。

「曽良は例外なんです。あいつのことは別枠で考えといてください」
「ああ」と鼎は目を大きく見開いて、両手をぽんと合わせた。「曽良はリーダー代理ですものね」
「いや……そういう意味じゃないんですけど」
「違うんですか？　じゃあ、どうして例外なんです？」
「まあ、そのうち分かりますよ」疲れたようにため息をつき、砺波はベッドから足を下ろす。「さて……軽く朝ごはんつくりましょう

か」

すると、鼎は驚いたようにハッとして「いえ」と首を横に振った。

「お構いなく！」

構わないわけにはいかないでしょう、と砺波は心の中でぼやいた。

「お腹すいてないんですか？」と訊ねる声に苛立ちがにじんでしまった。「私はかなりすいてるんですけど」

「じゃあ、リーダーのところに行く途中にでも何か買って食べませんか？」

どうもそわそわしている鼎に、「別にいいですけど」と言いつつも、砺波はいぶかしげな表情を浮かべて頭をひねる。

「砺波さんや曽良の育てのお父さんなんですよね。お会いするの楽しみです」

鼎はにこりと満面の笑みを浮かべてそう言った。

＊　＊　＊

もともと、『災いの人形』に近づくためのカモフラージュにすぎなかったんだ。いつかどんな形であれ、殺さなくてはならない『災いの人形』――それがどんなものなのか、知っておきたかった。それがオレが背負えるせめてもの責任だと思った。

だから、『災いの人形』の通う高校に潜りこみ、彼女が参加している劇にも加わった。

使命を果たすための寄り道みたいなものだったんだ。

ただ、それだけだったのに……

「きゃー！　やっぱり、かぁわいい！」
「思った通りだったわねぇ。リストくんなら、完璧似合うと思ったのよ」
「リストくんがいれば、ウチらのメイド喫茶が売り上げ一位間違いなしっ！」

同じクラスの女子三人組は、オレを囲んでやんややんやとお祭り騒ぎ。その声が被服室に響き渡る。
オレは「そう？」と鼻高々に、目の前に置かれた姿鏡を見つめた。
そこに映っているのは、ナンシェ――いや、違う。ナンシェよりも長いブロンドのウィッグをつけ、ひらひらとしたメイド服を着た、神の騎士。
つまり、女装したオレなわけで。

――なにしてるのさ、リスト？

呆れた声が頭の中に響いた。主のミニスカート姿にショックを受けている天使だ。
でもさ、ケット。スコットランドの紳士たちだって、スカートをはいているじゃないか。

――あれは伝統衣装！　ぜんぜん、ちがうよっ！

短い両脚をだんだんと地面に打ち付けて、泣きわめく幼い子どもの姿が思い浮かんだ。
やっぱ、マルドゥク的にこの姿はアウト？

――男としてアウトでしょっ。

ずばりと言ったな。オレはくすりと笑った。

いやぁ、でも似合っちゃってるから。――腰に手をあてがって、心の中で言い放つ。もはや、ケットのため息すら聞こえなくなった。

先週だったかな。教室でのんびり午後のひと時を過ごしていると、いきなり彼女たちが突進してきて、「後生だから！」となんだか難しい言葉を叫んで頼みごとをしてきたのだ。

ニホン文化の一貫だ、とか言われてまるめこまれ――もちろん、嘘だとは分かっていたけど――こうして、メイド服を着ることに。

この学校の文化祭は、学年ごとに二、三個、大きな出し物を決めるようだ。どれに参加するかは個人の自由。参加しなくてもオーケー。あと、小規模なら部活やクラブ別に好きなことをしていいらしい。

結構、ゆるい文化祭だよね。オレなんて、一学年上の劇に参加するんだし。

「ねぇねぇ、こっちも着てもらおうよ」

「あ、いい、いい！」

なにやら、怪しい会話が聞こえてくるんだけど。

いつのまにやら三人組は、スポーツバッグを囲んでこそこそ話し始めていた。

皆、黒髪ロングの純和風の三人組だ。どうやら、茶道部らしい。部員不足に困っていて、この機会にイメチェンをはかって新入部員を募ろう、という計画だとか。で、なんだか知らないけど、オレに助っ人の白羽の矢が立ったようだ。

文化祭では劇以外に特にやることもないし、慈悲深い神の心で、快く引き受けた、てわけ。

しかし、メイド喫茶でどんなイメチェンになるんだろう。

「ね、リストくん！　こっちも着てみて」

三人組の一人がくるりとこちらに振り返り、眼鏡の奥で瞳を爛々と輝かせて見つめてきた。その手には、紺のセーラー服が。

「メイド喫茶じゃないの？」

にこりと微笑んで訊ねると、眼鏡少女は頬を真っ赤に染めた。

「……私の個人的な趣味です」

もじもじとする眼鏡少女の後ろで、他の二人がそれぞれユニークな衣装を携えているが――まあ、いっか。

「じゃあ、着替えるねぇ」

わあ、と盛り上がる三人組。そこまで喜ばれちゃうと、こっちも一肌脱ぎたくなっちゃう、てもんだ。

――そういうの、お調子者、ていうんだよ。

お人好し、て言ってほしいな。

「廊下で待ってるからー」

オレにセーラー服を手渡すと、三人組は、きゃっきゃきゃっきゃ、と騒ぎながら教室を出て行った。

誰もいなくなった被服室はやけに静かで、文化祭の朝だというのが嘘のようだ。

じっと姿鏡を見つめていると、やがて、そこに映る自分が、遠い故郷に残した彼女の姿とダブって見えた。

真っ白な肌に透き通るような青い瞳。その藍玉（アクアマリン）は見ているだけで

癒される不思議な魔力を持っている。煌くブロンドの髪は、収穫を前に祝福の黄金に染まる麦のよう。それが撫でる細い肩。微笑みはバラの花のように気高く可憐。それでいて、聖女のような神々しさがある。全てを許し、包みこむ――オレの罪をも浄化してくれるような、そんな圧倒的なオーラがある。

似ているんだ。オレたちは兄妹のように、そっくりなんだ。

でも、別人だ。決定的な違いがある。

彼女は神の子で、オレは……人の罪。

姿鏡からはナンシェの幻影は消えていた。

映っているのは、虚しく苦笑を浮かべる女装した少年。その手には、セーラー服。

なにをやってるんだろうな、オレは。笑えてしまった。

ナンシェを守るため、使命を背負い、それを全うするためだけに生きてきた。そのためだけに創られた。そのためだけに許された存在。

オレはなんとしても『災いの人形』を斬らなきゃいけないと思っていた。いつかどんな形であれ、殺さなくてはならない。だから、知っておこう、と思った。自分が滅ぼそうとしているものを。

だから、こうして普通の高校生のふりを始めた。だから、文化祭にも参加しようと思った。

全て、使命を果たすための寄り道だった。

ただ、それだけだった。それだけだったのに……

――リストくんはもう私を殺さなくていい。

彼女の言葉が脳裏をよぎる。あの覚悟に満ちた声が耳に残って離れない。

本当に、そんな未来があるのか。本当に、オレは使命を失うのか。

―?気づけば、そんなことばかり考えている。
おかしいな。もう覚悟は決めていたはずなのに。ナンシェのためなら、喜んで使命を受け入れる、と心に決めていたはずなのに。
どうして……そうだといい、と願っている自分がいるんだろう。
いつから、ただのルルとして過ごす日々を楽しんでいたんだろう。

リストの望み（後書き）

大変申し訳ありませんが、ここでしばらく更新を停止させていただきます。おそらく、更新再開は八月中旬になるかと思います。
それまでお待ちいただければ幸い至極です。
次話から、文化祭も始まり、そして物語は急展開を迎える・・・・・予定です！

記憶に残る忠告

「これが文化祭……」

物珍しそうに目を瞬かせ、ぼんやりとつぶやいたユリィ。その茶色の瞳に映りこむのは、すっかりお祭りムードの校庭だ。屋台が並び、騒がしいＢＧＭが響き、食欲をそそる香ばしい匂いや甘い香りが充満している。制服姿の高校生が歩いていなければ、到底学校とは思わないだろう。

ユリィは鼻をくんくん動かすと、

「お腹すいた」

「朝飯、人一倍食ったのは誰だ！？」

苛立ちもあわらに怒号をあげたのは、隣で不機嫌そうな表情で立っていた和幸だ。「それも人一倍遅いペースで」と憎らしそうに付け加えると頭をかく。

「あ」とユリィはぼんやりと口を開くと、和幸に振り向く。「怒ってる？　オレのせいでパンドラと二人きりになれなかったから」

「……別に、そういうわけじゃ」

口ではそう言ってはいるものの、赤らんだ顔が図星だということを物語っている。

朝のカヤとのひと時を邪魔された上、ユリィの『マイペース』な朝食のせいで、予定よりだいぶ遅れて学校に着くはめになり、カヤをすぐにアンリに誘拐されてしまった。おかげで、和幸はこうしてユリィと二人きり（と一匹）で文化祭を回ることに。

『一般人』としての初めての文化祭。椎名もいない、曽良の盗聴

もない、初めてのカヤとの二人きりのデート。……だったはずなのだが。

自然とため息が漏れるのも仕方ない。

――すみません、和幸さま。

心底申し訳無さそうな声が頭に響き、和幸はハッとして視線を落とす。足元にちょこんと座るシャム猫と目があった。

――どうかわたくしたちには構わず、パンドラさまのもとへ。ユリィはわたくしが面倒みますので。

面倒みるって……と、和幸は苦笑する。主人に対して使う言葉とは到底思えない。天使（かのじょ）の苦労が垣間見えた気がした。

「いや、気にするな。衣装合わせをする、て言ってたし、どうせ、カヤを見つけたところでアンリに邪魔者扱いされて終わりだ」

猫に小声でそう答え、和幸はちらりとユリィを一瞥する。

興味津々に辺りを見回している少年。確かに、リストと同じく、目を見張る美しい容姿をしているが、そのぼうっとした表情からは想像もつかない。まさか彼こそ、人間を嫌う神、エンリルの子孫だとは。

――だから、朝ごはんは建前ですって。ユリィ・チェイスを預けに来たんですよ。

今朝のリストの言葉が和幸の脳裏をよぎった。

預けに来た――その真意を和幸は悟っていた。リストは自分にこの男を　監視（・・・）してほしいのだ。『朝ごはん』という嘘も、和幸では

なく、ユリィやラピスラズリをごまかすためだったに違いない。それが分かっていて、むざむざユリィを野放しにするわけにはいかない。

ユリィがニヌルタの子孫である以上、そう簡単に気を許すわけにはいかない。和幸にもそれくらい分かる。

そもそも、こうして彼が自分たちと――特に、敵対する相手であるはずのリストと――行動を共にしている理由がはっきりとしていないのだ。信用しろ、というほうが難しいだろう。

――ユリィも天使（わたくし）に隠し事をすることもあるのです。

天使にさえ隠す理由とはいったい何なのか。それを知る方法が無いわけではない。ダメもとだが……

和幸は表情を強張らせた。緊張が走る。あたりの『お祭り騒ぎ』が嘘のように聞こえなくなった。

「なぁ、ユリィ」ごくりと生唾を飲み込んでから、ふと問いかける。

「お前の兄貴に何があった？」

ぴくりとユリィの眉が動いた。表情が一瞬だけ変わった。それは間違いなく『動揺』だった。和幸の拳に力がこもる。足元で暴れる猫に一言謝罪する気にもならなかった。

「お前の目的は兄貴を使命から救うこと。そうなんだよな？　使命から救うって、どういうことだ？」

――和幸さま！

とうとう、叱責の声が和幸の頭に響く。が、ほぼそれと同時に、

「パンドラと兄さんは似てるんだ」

ユリィがぽつりとそう言った。

＊　＊　＊

「似てる？」

思わぬ言葉に、俺は呆けた声で聞き返していた。ニヌルタの王とカヤが似てるって……どういうことだよ？　確かに、使命は同じなんだろうけど……。

「パンドラも兄さんも、愛してはいけないものを愛してしまった」

ユリィは喜怒哀楽のどれともつかない声でそうつぶやき、ゆっくりと視線を俺に向けた。その眼差しは、同情するような、責めるような、居心地悪いもので、俺は思わずたじろいだ。同時に感じる絶対的な何か。背筋がぞっとする――畏怖。

その瞬間、どこかで風船が割れる音がした。それをきっかけに、どっとあたりの喧騒が俺の意識の中に流れこんできた。そしてようやく思い出す。ここが校庭であること。文化祭の真っ只中であること。

いつのまにか止めていた息を吐き出し、俺は我に返って「どういう意味だ？」と訊ねる。

するとユリィは俺から目を逸らし、どこか遠くへ視線を戻した。

「兄さんも一度は人を愛した。だから、使命に歯向かおうとしたんだ」そこまで言って、ユリィは視線を落とす。「パンドラも同じ。パンドラも君を愛したからこそ、使命を捨てる覚悟を……」

急にユリィは口ごもった。なぜか、それ以上何も言わずに黙り込んでしまった。まるで凍ってしまったかのようにぴたりと動かない。ちらりと足元の天使の様子を伺うが、猫も不思議そうに主人を見上げているだけだ。

俺はそっとユリィに歩み寄り、

「ユリィ、どうした？」

そう声をかけたときだった。急にユリィは顔を上げ、俺を食い入るように見つめてきた。驚いて俺はあとずさる。が、そんな俺の肩をユリィはがっしりとつかんだ。

「君なんだ」とユリィは急に声を上げた。「君が鍵」

「……は？」

「アナマリアが死んで、兄さんは……だから、きっとパンドラも……」

「何の話だよ！？　アナマリアって……」

「この世界は君を失うわけにはいかない。君は死んじゃいけない」

何を言い出してるんだ、こいつは？　言っている意味も分からないし、さすがに……これは周りの目が気になる。

もともと、ユリィは目立つ容姿だ、ここに来たときから注目を浴びてた。それがこんな熱い演説を――しかも、妙な誤解を招きそうなシチュエーションで――始めてしまったら……。

俺は頬をひきつらせ、「とりあえず、場所を変えて話さないか？」と小声で促す。

が、そのときだった。

そんな俺の声をかきけす、悲鳴にも似た声が「ユリィ！」とあたりに響いた。

それは聞き覚えのある……しかし、こんな場所で聞こえてはいけ

ない声で、俺はぎょっとして声の主を見下ろす。

「おい、ラピスラズリ！　声に出てるぞ」

「申し訳ありません、和幸さま。急用ができました。説明はあとで」

ぴしゃりと猫は俺にそう言い、ユリィに目配せすると雑踏の中へと走り出した。

幸運にもあたりが騒がしいせいで、誰も『猫がしゃべった』ことには気づいていないようだ。

「おい、どこに行く……」

「マルドゥクを捜す！」と声を張り上げたユリィの雰囲気もがらりと変わっていた。「君はパンドラのところにいて」

戸惑う俺にユリィはそれだけ言って、ラピスラズリのあとを追う。って、ちょっと待て。

「ユリィ！　勝手に動くな」

あわてて追おうとするも、どこからともなく現れた女子高生の軍団に阻まれ、地団駄を踏むことになった。ユリィの姿はあっという間に雑踏の中へ消え、俺は「くそっ」と舌打ちする。

「もうリハーサルだってのに……」

ひとりごちて校舎の時計を見上げた。九時半……そろそろ、アンリが騒ぎ出すな。

しかし、あの様子、なんだってんだ？　ラピスラズリまで取り乱していた。

――マルドゥクを捜す！　君はパンドラのところにいて。

あいつが本当にリストを捜しに行ったのかは分からない。もしかしたら、俺を捲くためのでまかせかもしれない。何か企んでいるのかも……。

でも……なんだろうか、この感じは。あいつを追う気がしない。カヤのとろこに行かなくちゃ、という……あいつの言うことをきかなきゃならない、という……使命感。

ああ、そうだ。この感覚、身に覚えがある。

俺は鼻で笑って頭を抱えた。

リストと同じだ。あいつがこの世界の『真実』を俺に打ち明けたときと同じ。

「逆らえない」

参ったな。あいつも、本当に……神の血をひいてるのか。今さらながらに思い知る。

まあ、いい。どちらにしろ、俺にできることは、カヤの傍にいることだけ。あいつがたとえ何か企んでいるとしても、俺がカヤの傍にいれさえすれば大丈夫だ。

神の一族のごたごたは、もともとリストの管轄なんだし。

それよりも……と、俺は頭痛のようなものを覚えてこめかみをおさえた。

――君は死んじゃいけない。

あの言葉……記憶のどこかにひっかかる。前にもどこかで聞いたような気がする。

死ぬな、と以前も誰かに言われた。カインの誰かか？　親父？　リスト？　違う。そうじゃない。もっと、違う何か。だが、思い出

そうとするともやがかかる。眠気のような霞が意識を覆う。その奥に行けない。自分の記憶なのに、掘り出せない。引き出そうとすると……思い出そうとすると、誰かがそれを阻んで――

――お前は、絶対に死んではならない。

パチリと眩暈のようなものがした。俺はハッとして目を見開く。

――世界（エリドー）のためにも、パンドラのためにも、生きなければならない。お前がいなければ、全て終わりだ。

閃光のように一瞬通り過ぎたその声。懐かしい声。それは――カヤによく似た声だった。

記憶に残る忠告（後書き）

更新、長らくお待たせいたしました。ようやく、活動再開となりました。今後ともよろしくお願いいたします！

密告

「九時半……か。一時間もかかったな」

しゃがれた声でそうぼやき、静流は「ちっ」と舌打ちする。背後から潮風がふきつけ、彼女のカールがかった髪を散らした。

「まあまあ」と細い目をさらに薄めて、そんな彼女に歩み寄るのは鉤鼻の香港人。カインノイエが雇っている武器商人、レオン・リャンだ。「無事にこうして積荷は全て運びこめたわけだし。いいじゃないか、シズル」

「よかねぇよ。あいつら、もたもたしやがて。これが初めてじゃねぇのも居たっつーのに……何のために人選したと思ってやがんだ」

「厳しいね、相変わらず」リャンはくつくつ笑って、まるで孫でも見るかのような優しい眼差しで静流を見つめる。「だからこそ、フジモトさんは君を頼りにしているのだろうけど」

「あたしを頼りにしてるんなら、あたし一人に任せてほしかったがな」

「ミヅキがいるとやりにくいか？」リャンは思い出したように吹きだした。「ミヅキにからかわれる君を見るのは、こちらとしてはとても楽しいんだがね。さすがの君にも天敵がいるとは」

「黙らねぇと契約ぶちきるぞ、リャン！」

かっと静流は目を吊り上げて、リャンに怒鳴り散らす。が、リャンはものともせずに肩を竦める。

リャンはカインノイエとは長い付き合いだ。静流のことも幼いころから知っている。彼女の恐ろしさも重々承知しているが、彼女が『正当な理由』もなく、人を殺すような女ではないとも知っている。――殺しに『正当な理由』があるというのも妙な話なのだが、彼女

たちカインにはそれがある。
カインに殺されるに値すること――『人身売買』。
しかし、その禁忌さえおかさなければカインは無害ということでもある。リャンにとってはただの子ども。カインノイエとの取引に危険など微塵もない。

「そうだ」と、静流はじろりとリャンに睨みつけるような視線を向けた。「搬入んときに頼むはずだったんだが、うちの馬鹿どもがもたもたしてっから後回しにしてた。実は、あんたに銃器や弾薬のチェックに立ち会ってほしいんだよ。悪いんだけど、これから付き合ってくれねぇか？」
「そんなことか。お安い御用だよ。やけに低姿勢じゃないか。気味が悪いよ」
「うるせぇな」

静流の悪態に毒気はなかった。
リャンはにこりと微笑んで「そうだなぁ」とつぶやき、背後に振り返る。

「結構、あの中、ごった返していたからねぇ。整理しとかないと、いざというとき困るよね」

リャンの視線の先で重苦しく立ち並ぶのは、マンションの二階分ほどの高さの古びた倉庫。リャンの密輸船が寄航したお台場の港に面した倉庫郡だ。ここが貿易港として使われていたころは活気に溢れていたのだろうが、今やその物陰はない。密輸業者やスラムの住人が有効活用してはいるのだが。
その中の一つの倉庫に、一台のトラックがバックで入っていく。周りでは、まるでお台場スラムに似つかわしくない健全そうな若い少年少女たちが駆け回っている。何も知らない者が見れば、異様な

光景だと思うことだろう。

「いざというとき、か」ふいに、静流がぽつりともらす。「そんなの無いのが一番なんだがな」

「裏世界に生きる人間の言葉じゃないねぇ」

「確かに」

静流は皮肉そうな笑みを浮かべた。

リャンはそんな静流をちらりと見、「シズル」と神妙な面持ちで問いかける。

「表で生きてみたいと思ったことはないのか？」

静流はぎょっと目を丸くした。思わぬ問いに言葉もでないようだ。

「オーライ、オーライ」という弾けた声があたりに響く。やがて、静流は「くっ」と失笑し、やがて豪快に笑いだした。

「なにふざけたことぬかしてんだ？　あたしらが表で幸せになれるなら、はなっから裏世界にゃ来てねぇだろうが」

「……」

「あたしらが何なのか、忘れたわけじゃねぇだろが」

脅すような鋭い眼光がリャンを射抜く。

リャンは居心地悪そうに鼻をかき、再び倉庫へと目を向けた。単に、静流から目をそらしたかったからなのだが、元気に『おつかい』をしている子どもたちが視界に飛び込んできて、顔をゆがませた。

彼らがクローンだということは、藤本マサルと契約を結んだときに彼から聞かされていた。

静流の言う通りだ。彼ら、クローンの子どもたちが、表で暮らしたとしても幸せになれるわけはない。

興味本位で、彼女の傷をえぐるようなことを訊ねたことを、リャンはひどく後悔してため息をもらした――ときだった。

「でも、もしかしたら……」

「？」

らしくない切なげな声に、リャンはハッとして振り返る。

「もしかしたら、あの子は『希望』になるかもしれない。――情けねぇけど、そう思い始めてる自分がいるのも確かだよ」

初めて見るしおらしい彼女の姿に、リャンは唖然としてしまった。戸惑いつつも「あの子？」と聞き返すと、静流はからかうような笑みを浮かべて顔を上げた。

「表に義理の妹ができるってのも悪くねぇ、て話だ」

リャンは「は」と頭を捻る。

静流は「なんでもねぇよ」と髪をかきあげ、倉庫のほうへと顎をしゃくった。

「倉庫のチェック頼むわ。アリサ姉さんが立ち会う」

「アリサか……」

リャンは頬をひきつらせ、怯えた表情で倉庫を見やる。

「代わりに君が立ち会うってのは、無理なのかな？」

「悪いな」静流は肩を竦め、ちらりと視線を横にやる。「用ができたみてぇでよ」

静流の視線を追うと、『虹の橋』の方角からこちらに歩いてくる一人の少年が。リャンは「あれは……」とつぶやき、思い出したように咳払い。

「用が終わったらでいい。君も立ち会ってくれよ。わたし一人でアリサは無理だ」

いくら親しくなろうとも、いくら子どもだろうと、彼女たちが取引相手なのに代わりはない。「用ができた」と言われたなら、大人しく引き下がるのみ。詮索はしない。首をつっこめば、切り落とされるだけ。裏世界はそういう場所なのだ。

静流の返事も待たず、リャンはさっさとその場をあとにした。

＊　＊　＊

「カヤ」

遠慮がちな声が背後からして、私は「はい？」と微笑んで振り返る。

「よう」と照れくさそうな笑みをもらして、彼は後ろ手に戸を閉めた。あたりが再び暗くなる。「アンリに聞いたら、ここだって言うから……」

いぶかしげな表情で辺りを見回し、彼は「埃っぽいな」と愚痴をもらした。ぱたぱたと彼が手を振ると、埃がゆらゆら揺れた。小さな窓から差し込む光がそれを照らして、ダイアモンドの欠片が舞っているよう。

「ってか、体育倉庫が衣裳部屋ってどうなんだよ？」

彼は無造作に転がるフラフープやポールに足を取られながらも、「お前も文句の一つくらい言えばいいのに」とぶつくさ言って私のほうへ歩み寄る。

体育館のステージに一番近い小部屋といえば、この体育倉庫。だから、アンリちゃんはここを更衣室として使うことにしたのだ。私はいい案……だと思ったんだけど。確かに、マットやら跳び箱に囲まれて着替えるのは変な感じではあったかな。

「そう言う和幸くんは、さっきから文句ばっかり」

わざとらしくジト目で睨んで、腰に手をあてがう。

私の前で立ち止まった彼は……今さらだけど、たくましくて頼もしい。「似合ってるよ」と恥ずかしそうにぎこちなく笑うその仕草も、愛おしい。

「ありがと」と照れくさくなって私はうつむいた。真っ白のワンピースが視界に映る。

私が言わせたみたいだけど……和幸くんにそう言ってもらえると、やっぱり嬉しい。

彼なら、私が何を着ていても、きっと褒めてくれるんだろうな。たとえ、どんな変な格好をしていても。――たとえ……私がもう人間でないとしても？

きゅん、と胸が痛んだ。私はそうっと胸元に手を置く。指がひんやりと冷たい十字架に触れた。それをそっと握りしめ、私は唇を噛み締める。

「ねえ、和幸くん。今夜……」

「あ！」

いきなり和幸君は、体育倉庫に――ううん、体育館中に響くような大声をあげた。私はびくっとして顔をあげる。と、幽霊でも見たかのような表情の彼と目があった。

「どうか……したの？　和幸くん」

「やべ、忘れてた」

「忘れてた？　何を？」

「いや」と彼は声を裏返し、咳払い。明らかに動揺している。私が疑るような視線を送っていると、彼は無理した笑みを浮かべた。「それ……それ、無いほうがいいんじゃないかって思ってよ」

「え？」意味が分からず、私は目を瞬かせる。「それって……」

和幸くんの視線を辿る。それはまっすぐに私の胸元へと注がれていた。そこにあるのは……

「このネックレス？」

小首を傾げつつ、銀色のロザリオをくいっとつまむ。きらりと反射した光が彼の目元を横切った。

「そう、それ」と、和幸くんは違和感のある笑みで頷く。やっぱり、様子が変。「はずして、その辺に置いとけよ」

「どうして？」

「だから……服にあってないからだよ」

「は？」

思わず、呆けた声が漏れてしまった。このワンピースとロザリオがあってない？　少なくとも、私はそうは思わない。それに、失礼かもしれないけど、和幸くんはファッションを気にするような人と

は思えない。
きょとんとしていると、和幸くんは頬を赤らめ「とにかく」とごまかすように切り出した。

「それ、渡せって。なんつーか……ほら、不吉っつーか」
「不吉!?」何を言っているんだろう。正反対だよ。「これはカインのお守り。和幸くんのことも守ってくれたじゃない」

そう。これは、曽良くんからもらった大切なお守り。カインから……和幸くんの家族からもらった贈り物。
『フィレンツェ』で、あの女の人をたった一人で『迎え』に行った和幸くんを守ってくれた。和幸くんをこうして私のもとに返してくれた。
だから……
私はぎゅっと胸元で抱きしめるようにロザリオを握りしめる。

「片時も離したくないの」
「じゃ、劇の間だけ、俺が預かっとくってのは……」
「曽良くんとも約束したの。肌身離さず持ってる、て」
「いや、でも……ほら、劇の邪魔になるんじゃないか、と思って」
「そんなことないよ。これがあったほうが安心するもの。アンリちゃんもいいって言ってたから」

にこりと微笑みそう告げると、和幸くんはあんぐり口を開け、「いや」と頭をかいた。困り果てたような表情。
あきらかに妙だ。
さっきから主張が二転三転してるし、挙動不審だし。嘘ついているとしか思えない。どうにか、私にこのネックレスをはずさせたいみたいだけど……どうして?

「何か、隠してる？」

観察するようにじいっと顔を覗き込むと、和幸くんは「隠してない！」と大仰に両手を振った。

うーん、怪しい。

「……何かあるの、このネックレス？」

すると和幸くんは腹痛でもするかのような険しい表情を浮かべ、しばらく逡巡してから、

「爆弾……」

「ぼく……なに？」

「な、なんでもねぇよ」いいから、と乱暴に言い捨て、和幸くんは私の胸元に手を伸ばしてきた。「それ、渡してくれ」

「や、待っ……」

反射的に、彼の手を逃れるように身を退いていた。もちろん、足元に注意している余裕があるはずもなく――

「きゃっ！」

一歩さがった右足が何かに乗っかった。そのまま、ぐらりと視界が回り、「カヤ！」と和幸くんの叫ぶ声がした。

それから……大きな物音がして、目の前が真っ暗に。

「ん……」

何が起こったのか、一瞬、分からなくて――それから、ざわりと胸騒ぎがした。まさか、と思って目を見開く。

私……気を失ったんじゃ――

「和幸く――！」

あわてて叫んで身を起こそうとした、そのとき。

「カヤ！」

切羽詰ったような低い声が降ってきた。くぐもっていて、はっきりとは聞こえない。でも……

「大丈夫か？」

いつもの、その言葉。心配そうな声。間違いなく、彼。

全身から力が抜ける。ほっと肩を撫で下ろす。

冷静さを取り戻した頭が、状況を把握する。私は倒れていて……かび臭い何かが私を覆っている。暗いのはそのせいだ。柔らかくて大きくて……なんだろう、と思っていると、

「大丈夫か、カヤ！？」

私にかぶさっていた『何か』はどこかへ吹き飛んで、代わりに別の影が私を覆った。

「和幸くん……」

切羽詰った不安そうな表情……見覚えがある。長谷川さんに誘拐されたときを思い出した。

「頭、打っただろ。頭痛は？　眩暈は？　吐き気とか……」

放っといたら、このまま質問攻めにされそう。

「本当に平気だから」

って、いつまでも横たわっていては、彼を心配させるだけだよね。私はむくりと上半身を起こす。

ちらりと傍らに視線を向けると、二つ折りで倒れている体操マットが目にはいった。私に覆いかぶさっていたの、これかな。壁にいくつも並べてあったから……その一枚が倒れてきたんだろう。

「あー……俺、なにやってんだか」

どっかりとあぐらをかくと、重苦しいため息を漏らして和幸くんは頭を抱えた。

「私が勝手に転んだだけだよ」

「きっかけをつくったのは俺だ」

「そんな……」

そんなことない――て言っても、きっと無駄だろうな。私は喉まで来た言葉を押しこんだ。

しんと静まる体育倉庫。慌しい足音が体育館のほうから――扉一枚挟んだ向こう側から――流れこんでくる。アンリちゃんの怒鳴り声も聞こえてきた。そういえば、もうすぐリハだっけ。

ふと、傍に転がるボールに気づく。茶色く変色した野球のボール。我ながら呆れる。きっと、これにつまづいたんだ。私も不注意というか……

不注意……

――君の中には化け物がいる。

「！」

いつかの、ユリィの言葉が蘇った。

ぞくりと悪寒が走って、生唾を飲みこんだ。

化け物。ムシュフシュ――私の中に宿る化け物。私が気を失えば姿を現し、その場にいる者全てを喰らうというおそろしい化け物。

ただ……それは、私が自分の正体を知る前までの話だ。

今や、私は不死の身体。もう命を落とす危険はない。だから、私を守る存在も必要ないはず。今の私が、気を失うことがあるのかどうかも分からないのだし。もしかしたら、ムシュフシュももう消えたのかもしれない。

でも、確証はない。まだムシュフシュは私の中にいるのかもしれない。私に何かあったら、飛び出して、周りの人を傷つけてしまうのかもしれない。――和幸くんを襲うのかもしれない。

祈るようにかたく瞼を閉じる。

不注意だった、では済まされない。

もし、和幸くんに何かあったら……。

よかった――と、心の底から思う。和幸くんが無事で本当によかった……彼に何かあったら、私は――

「カヤッち、準備いい！？」

ガラリと扉が開く音とともに、天井を突き抜けるような甲高い声が飛びこんできた。私は思わず「きゃっ」と声をあげていた。

彼の背後、扉に手をかけ、はつらつとした表情で立っているのは……

「アンリ」と、和幸くんは呆れた表情で立ち上がる。「ノックくら

いしろよ」
「ノックしなきゃいけないようなことしてたの？」
「な……バカかっ、お前は」
「で、カヤっち」真っ赤になる和幸くんはすんなり無視し、アンリちゃんは爛々と輝く瞳をこちらに向けた。「リハ、始めたいんだけど」
「あ、ごめん」

あわてて腰を上げると、アンリちゃんは私を――それも、全身くまなく――まじまじと眺め、満足げにんまりと笑んだ。
「褐色の肌に白いワンピース。純粋さの中にも妖艶な魅力をかもしだしてて……んふふ、狙い通り！」
「はい？」

狙いって？

「これで観客の邪な心を鷲掴みよーっ！」
「どういう狙いだ、アンリ」

アンリちゃんは、よっしゃー、とガッツポーズ。意気揚々とくるりと身を翻して体育館の中へと戻っていった。
アンリちゃん、気合入ってる。はしゃぐ彼女の姿に、顔が自然とほころんだ。
「てか……マジであの劇やるんだなぁ」

体育倉庫から足を踏み出し、開口一番、和幸くんはそうぼやいた。
体育館にはずらりとパイプイスがしきつめられ、その間をぬうように平岡くんや町田さんたちが駆け回っている。ステージの上には

出演者。リストくんの姿が見当たらないけど……それ以外は準備万端。
和幸くんのテンションも下がるわけだ。
「今さら、中止になるとでも思ったの？」
「中止になるよう祈ってたんだけどな、もう叶わぬ夢みたいだ」
冗談っぽく言ってはいるけど、本心だろう。彼はこの劇にはずっと後ろ向きだったもの。きっと、気恥ずかしいんだ。彼は本物のカインだったんだもんね。
「本番はあと三十分後。手遅れ。そろそろ観念しなさい」
「そうだ」と、彼は不敵な笑みで振り返る。「ヒロインを『誘拐』したら中止になるかな？」
「え！？　やだ、もう……なに言ってるの？　だーめっ」
不意打ちだ。きゅん、としちゃった。
赤らんだ頬を隠すように、私はふいっと顔を背けた。
「この劇は成功させるの」
必ず――と、心の中で付け加える。
だって、この劇はアンリちゃんにとって、とても大事な……特別な劇だもの。
――この劇、実話なの！
劇への出演を断り続けていた私。そんなある日、神崎の屋敷に突然現れた彼女は、いきなりそう言った。

――私、会いたいの。私を『迎え』に来てくれたあの人に……私の王子様に。だから、協力して！　この劇がもし注目を浴びたら、きっと、また私を『迎え』に来てくれる。また会える。そんな気がするの。だから、お願い！

突拍子もない話だった。カインが実在することについてさえ懐疑的だった私にとっては特に。でも、疑おうとも思わなかった。土下座でもするかのような勢いで私に訴えかけてきた彼女の目は真剣で、その表情は――恋をしていたから。

だから、協力させてほしい、と答えた。

この劇は、アンリちゃんにとっての『恩返し』。彼女を『迎え』に来てくれた王子様（カイン）への贈り物。

私はきゅっと十字架を握りしめた。

カインに恋する少女の物語。もしかしたら、演技なんて必要ないのかも。――だって私には、少女（ヒロイン）Ａの気持ち、よく分かるから。

＊　＊　＊

「お前を呼んだ覚えはねぇんだけどな。何しに来たんだ、留王？」

腕を組み、蛇のように鋭い目つきで睨みつける静流。カインだったら顔面蒼白で震え上がっているはずだが、今回の獲物は違った。確かに顔色は悪いが、それは静流と会う前から。もはや、静流を見ようともしていない。思いつめた表情で足元を見つめている。

「曽良には、黙っていろ、と言われたが……我慢できない」

独り言のようにもごもごと言っている留王に、静流は苛立った様子で「ああ？」と聞き返す。

「んだよ？　言いたいことがあるなら、はっきり言え！　客が来てるんだ、あたしの時間を無駄に――」
「あの女、言ったんだ！」留王はつった目をかっと見開き、とうとう静流と真っ向から視線を交わした。「『あなたたち皆を殺す』って」
「……」

夢にも思っていなかった言葉だったことだろう。静流は硬直した。頬がひくつき、左目の下にある泣きぼくろがぴくぴくと動く。ようやくでてきたのは、「あの女って……」という――彼女自身も驚いただろう――弱々しい声だった。

「『虹の橋』で偶然会ったんだ」留王はこれまでのうっぷんでも晴らすかのように、早口でまくし立てる。「なぜここにいるのか、て聞いたら、あいつはそう言った。はっきりと言ったんだ。あなたたち皆を殺すためだ、と」
「あの女って……」
「曽良に、黙っていろと言われたんだ。俺に任せろ、手は打つ、皆には黙ってろ――そう言われてから、ずっと黙ってきた。だが……限界だ」
「あの女って誰のことだ……」
「曽良だってもう信用できない。手は打った、と何度も言うが、そんな気配なんてないじゃないか」
「――あの女って誰のことだ、留王っ！？」

雷でも落ちたかのような怒号があたりに木霊した。パニック状態でしゃべり続けていた留王も、はたりと押し黙った。
船の汽笛だけが虚しく響く。
「あの女ってのは……誰のことだ？」

わなわなと震えつつ、静流は押し殺したような声で再び問う。
「か……」留王は一つ深呼吸をしてから、ごくりと生唾を飲みこんだ。「神崎カヤだ」
その瞬間、静流の目は血走り、拳にははちきれんばかりに血管が浮き出た。ぎりっと噛んだ唇からは赤い鮮血が流れ出る。
留王はその様子に息を呑み、無意識にあとずさった。
「確かなんだね？」いつも以上に低いしゃがれた声が、留王の内臓にまで響くようだった。「確かに、神崎カヤがそう言ったんだな？あたしらを殺す、と？」
留王は緊張の面持ちで、だが、しっかりと頷く。
くそ、と静流は舌打ち混じりに悪態づいた。
「曽良のバカ野郎が」牙でも剥き出しそうな鬼の形相で、静流は憤怒のにじむ声を吐き出した。「何考えてやがる。なんで隠した？」
「あいつも、あの女に惚れてるようだった。もしかしたら……」
「惚れてる！？　そんな理由であの子が女をかばうか」
「和幸だって、それが理由でカインを辞めた！」
静流は言葉を失ったようだった。開いた口がふさがらない――まさに、その様。
時が止まったかのように辺りが静まり返る。
静流は青白い顔で口許をおさえた。「和幸……」と消え入りそうな声をもらす。留王にさえ聞こえないほどの小さな声だった。
「和幸も曽良もあの女に騙されてるんだ。姉さん、早く何とかしな

いと、手遅れに――！」
「まずは曽良に話を聞きにいく。本当に何かしら手を打っている可能性もある。てめぇは余計なことはすんな、大人しくここで待ってろ」

先刻までの取り乱した様子は嘘のように消え、静流は落ち着いた様子でぴしゃりと言って留王の言葉を遮った。

「曽良の答えようによっては、あの女の『お片づけ』はあたしがやる。――美月にあとは頼む、て伝えておけ」

感情の伺えない平坦なトーンで留王に告げると、静流はくるりと踵を返す。ジャラリと音を鳴らしてポケットから鍵を取り出し――ふと動きを止めた。

怪訝そうに留王が見つめる中、静流はくるりと振り返る。穏やかな――しかし、厳しさをも漂わせた表情を浮かべて。

「よく言ってくれた。あとは任せな」
「……！」

留王はしばらくぽかんとしてから、緊張の糸でも解けたのか、泣き出しそうに顔をゆがめた。悔しそうに奥歯を噛み締め、うつむくと、

「恐いんだ、姉さん」搾り出したような声で留王はつぶやく。「あの女がたまらなく恐ろしいんだ」
「恐ろしい？　おい、こら。情けねぇこと言ってんじゃ……」
「あの女……死なないんだ」

静流はぎょっとした。

「死なねぇ？」鼻で笑って、呆れたように顔を横に振る。「なに言ってやがる」
「本当なんだ、姉さん！」
そう怒鳴り、静流を睨みつける留王の表情は真剣そのもの。嘘じゃないんだ、と眼差しがそう必死に訴えている。静流がぞっとするほどに――。
「あの女は死なないんだ、姉さん」
血でも吐きそうな力んだ声で、留王はつぶやいた。

インターミッション：藤本くんのお陰（前書き）

というわけで、インターミッションです。読まなくても続きが分からなくなることはありませんが、読むと分かりやすくなる……かも？　といった補足的なお話になっています。（この『インターミッション』の使い方は拙作独自のものです）

インターミッション：藤本くんのお陰

参った。まさか、『そのネックレスには盗聴器に爆弾まで仕込まれているからはずしてくれ』なんて言えるわけがない。カヤにとっては、曽良からもらった大事なお守り、なんだもんな。俺が無事に『フィレンツェ』から脱出できたのも、その『お守り』のお陰だと信じてるみたいだし……まあ、ある意味、そうなんだけど。盗聴器で曽良と連絡がとれたからこそ、俺はこうして無事に帰ってこれたんだからな。

しかし、だ。だからといって、あのロザリオが危険なことに変わりはない。さっさと、はずさせないと……。

それに、あの声がカヤかどうかも聞けなかった。

――お前は、絶対に死んではならない。世界（エリドー）のためにも、パンドラのためにも、生きなければならない。お前がいなければ、全て終わりだ。

声そのものはカヤだ。声はカヤなんだが……カヤが言った、という確信がもてない。

口調は全然違うし、あいつが自分のことを『パンドラ』と呼ぶとは思えない。第一、あいつが自分の正体を知ったのはつい最近で、俺がそのことを知ったのは夕べだ。俺に向かって、エリドーだ、パンドラだ、と話したとすれば、夕べしかありえない。でも、そんなことを夕べ話しただろうか？　いや、そもそも、もっと前に聞いたような気がして……

「なに彼女に見惚れてるんだよ」

「は？」

いきなり現実に引き戻されて、俺はハッと目を見開いた。その瞬間、周りのざわめきがどっと耳に流れてくる。それまでカヤしか見えていなかった視界には、カヤを囲むようにして話しているアンリや他の出演者の姿が浮かび上がった。その向こう――こちらとは反対側のステージ袖では、俺と同じ裏方の連中が四、五人ふざけあっている。

「って、シカトか、おーい」

「！」

ふてくされた声に振り返ると、見た目だけは立派な野球部のような――ガタイのいい身体に坊主頭ってだけだけど――平岡が。さも、恨めしそうな顔で俺を見ている。

「で……ずっと見てただろ、神崎さんのこと？」

「……見てたら、なんなんだよ？」

その前に、どういう質問だよ？　一気に緊張感が解けた。

主役のリストは一向に姿を見せず、とりあえず出演者は段取りの最終確認を始めた。俺たち裏方はその様子をステージ端から見守るくらいしかやることがない。で、なんとなくカヤを見つめていたら、段々と考えこみだして……

とにかく、平岡には関係のないことだ。

「どうでもいいだろ、そんなこと」

「学校の外でも好きなだけあの美貌を拝めるってのに、欲張りだな、お前は」

「どういう嫉妬の仕方だよ」

「俺は嫉妬するほど身の程知らずじゃねぇよ」

どういう意味だ？

「じゃあ、なんでつっかかるんだ？」

あと、詰め寄るのはやめてくれ。ただでさえ、他の裏方の連中も居て狭いんだから。

「当然だろがよ」と平岡は鼻から息を噴出す。「俺はお前の神崎さんへの一途な片思いを応援してやってたってのに、付き合ってることを報告もしてくれなかったじゃないか。風の噂で知った俺の身にもなってみろ」

またそのことか。俺が「神崎の彼氏だ」と宣言してから、ことあるごとに平岡はこの件について文句を言ってくる。

「だから、俺はお前に報告したよ」

「してねぇよ」

初耳かのように、平岡はくりっとした目を見開いた。

はいはい、このやり取りもお決まりだ。

「まるっきり信じようとしなかったお前が悪いんだろ。とぼけるな」

「何の話だ？　俺は一度もそんな話は……」

「いい加減にしろよな。女みたいなことで機嫌損ねてんなよ」

やれやれ、とため息をもらす。

噂は好きだし、人の恋路に首をつっこみたがるし……見た目は体育会系なのに、中身はまるで、思春期の『女の子』なんだよな。どっかの自己チュー女を思い出す。

「あぁら、女みたいな、てどういうこと？」

さらに不機嫌そうな声が背後から聞こえて、今度は誰だ？　と振り返る。声から大体予想はついてるが。

「失礼しちゃうわ、藤本くん。そういうの、男女差別よ？　分かってる？」

「町田……」

厄介な奴に絡まれた。そんな気分だ。

染めた気配は一切ない長い黒髪。化粧っけのない顔。校則通りの丈のスカート。真面目で優等生、まさに『学級委員長』の名にふさわしい容姿。さらに――容姿は中身を映し出すとはその通り――曲がったことは大嫌いで、口うるさい。しかも、理不尽な文句をつきつけてくるどっかの童顔自己チュー女と違って、町田の場合は正論を並べてくるから、たまったもんじゃない。そんな町田コトミに糾弾されては、こいつを知る男なら誰でもしり込みする。たとえ、元・裏世界の殺し屋でも……。

「男女差別だ、男女差別だ」

平岡もどさくさ紛れに援護射撃。いい加減にしろ、と怒りを通り越して呆れてしまう。ま、こいつらしい、と言えばそうなんだが。

「神崎さん……じゃない。本間さんが心配になってきたわ。無理に料理させたりしてないでしょうね？」

「どういう心配してるんだよ？」

ってか、わざわざ言い直さなくても……教師以外は、未だに『神崎』って呼んでるんだし。律儀というか、面倒くさいというか。

理由は分からないが、俺の停学が解けたあの日から、カヤは『本間カヤ』と学校でも名乗るようになった。卒業までは『神崎』のままでいる、と言っていた気がするんだが……。直後に、別れる別れない、の例の騒動が始まって、理由を聞く機会がなかった。

ただの心変わり……かな。本間の親父さんの事情か。

まあ、いい。とにかく今は、町田の追及からどうにか逃れないと。

「そもそも、俺たちのことはお前に関係ないだろ」

「そうもいかないのよね。私もアンリの親友だし」

「なんでアンリがでてくんだ？」

「あんたって、ほんと……」ぎょっとした様子で町田は何かを言いかけ、口をつぐんだ。「ま、期待してなかったけど」

「何の話だよ？」

「女の話、よ」

ぎろりとねめつけられて、俺は言葉につまる。

やっぱ……女には口ではかなわないな。

「でもま、カミングアウトして正解だったんじゃない？　本間さん、藤本くんに救われたところがあると思う」

急に柔らかな口調になって、町田はちらりとカヤに一瞥した。

俺に救われた？　一瞬、ぎくりとした。が、冷静になってみれば……まさか、こいつが裏世界のことや、まして『神の裁き』について知ってるわけない。そっちの話じゃない、よな。

じゃあ、なんだ？　正直、それ以外でカヤを助けた覚えはない……って、彼氏として情けないな。

「和幸が神崎さんを救った？」がっくり来ている俺をカバーするかのように――当然、そんな意図があるわけないが――横から平岡が

口を挟んだ。相変わらず、好奇心丸出しだ。「ああ、盗撮写真の件か？　あの和幸が熊谷殴ったっつーんだから驚いたよな」

「盗撮写真？」

町田の正義感に満ちた瞳がぎらりと鋭い眼光を放った――ように見えた。

俺はあわてて「何の話をしてるんだ、平岡！？」と笑い声をあげる。ああ、我ながらわざとらしい。泣けてくる。

町田、すげえこっち見てるし。かなり疑り深い目で。

「藤本くんが熊谷くんを殴ったのって、熊谷くんがしつこく本間さんに言い寄ってたから……じゃなかった？　盗撮写真ってなによ？」

それを聞いて、ようやく平岡は思い出したらしく、「あ」と腑の抜けた声をもらした。

もう、遅いっての。

出回っていた例の盗撮写真が熊谷の仕業であることはここだけの話、となっている。

停学処分が取り消されて登校したその日、俺は校長に呼び出され、校長直々に口止めされたのだ。

――あなたが熊谷くんを殴ったのは、神崎さんが彼に言い寄られて困っていたから、ということにします。盗撮写真の件はこちらでなんとかしますから。これ以上、写真のことを騒ぎ立てても神崎さんのためにはならないでしょうし。

騒ぎ立てない、てのは、熊谷が表立ってお咎めを受けることはない、てことだ。

当然すっきりしなかったが、熊谷の親はＰＴＡ会長だというし、圧力があったんだろう。校長も妥協せざるを得なかったに違いない。

孤児院出身だという話を聞いたからだろうか、どうも校長には妙な信頼感を抱いてしまう。俺も単純だな。

そういうわけで――もちろん、ひょんなことから盗撮写真の詳細を唯一知っている平岡にも、その旨を伝えたわけだが……平岡の奴、うっかりもいいところだ。

「なんだか、裏がありそうね」町田はさらりと黒髪をはらい、呆れたようなため息をもらす。「ま、いいわ。私が言いたかったのはそのことじゃないし」

「違うのか？」

他になにがあるんだ？　とでも言いたそうな平岡。顔にですぎだよ。もしくは、俺の被害妄想でそう見えるだけか……

「本間さんが藤本くんと付き合ってる、て分かってからさ、あの現実味のない美女がようやく『同級生』に思えるようになったのよね。たぶん、他の皆もそう」

「は？」

ちょっと待て。どういう意味だ、それ？

「確かに！」と、平岡は声を弾ませる。「あれだよな。金持ちのお嬢さまが激安回転寿司にはいっていくのを見かけて、親近感がわくのと一緒だ」

「……俺は激安回転寿司、て言いたいのか」

「その喩えはよく分かんないけど」平岡をジト目でねめつけ、とにかく、と町田は仕切りなおす。「親近感、てのはその通りね。近づきやすくなったのよ。藤本くんのお陰で」

お陰、お陰、て……それ言われるたびに、なぜだろう、心が痛む。

「お前らな、すっげえ失礼なことを言ってるのに気づいてるか？」
「私、失礼なこと言ってる？」心外ね、と町田は眉間に皺を寄せる。
「激安回転寿司、とは言わないけど、藤本くんは本間さんに比べたら超庶民でしょう。もちろん、私たちも。本間さんは今や、大臣の娘。それも超がつく美少女だもの。
うまくいえないけど、私たちとは住む世界が違う、ていうか。別世界から来た人、て感じだったんだよね。そんな彼女が、私たちの中でも目立たない藤本くんと付き合いだした。これって、結構、革命的よ」
「革命的って……」
「藤本くんの存在が本間さんと私たちを近づけてくれたんだと思うの。そうね……彼女を『庶民派』にしてくれた、てところかな」形のよい眉が、どうだ、と言わんばかりにぴょんと跳ねた。「ね？私、失礼なこと言ってないでしょう？」

そこまで自信満々に言われると、「ああ、そうだな」なんてうっかり同意してしまいそうになるが……いや、やっぱ、失礼なこと言われてるよな。
俺はひきつり笑顔で「まあ」と生返事した。
でも――
俺は打ち合わせをしているカヤに目をやる。
台本を手に、他の出演者に囲まれ、談笑している彼女。
そう言われてみれば……
「自然……だ」

思わず、声に出ていた。
以前までなんとなく感じていた、彼女と周りとの溝。それがなくなっているように思えた。カヤも変わったのかもしれないが、それ

よりもきっと、周りの人間が……

――本間さんが藤本くんと付き合ってる、て分かってからさ、あの現実味のない美女がようやく『同級生』に思えるようになったのよね。

つい、口許がゆるんだ。

一理あるかもしれないな。

たぶん、皆、感じていたんだと思う。人は『異質なもの』に敏感だから。すぐに感じ取ってしまう。カヤは自分たちとは何かが違う、と。たとえ、『神の裁き』とか『災いの人形』とか、そんなものを知らなくても。それはやがて恐怖心となって、拒絶へとつながる。近寄りがたい、という印象に変わる。

そうだな。俺はきっと、そんなカヤと他の連中との『共通点』になったのかもしれない。『架け橋』、てやつか。

参ったな。町田の奴、やっぱ正論言いやがる。

――私、失礼なこと言ってないでしょう？

そうだな、と心の中で答えた。

「あ、そうそう。こんな無駄話をしに来たんじゃないのよ」急に声の調子を変えて、町田が切りだす。「これ、本間さんのよね？」

ぐいっと町田が俺の目の前に掲げたのは、革のバッグ。学校指定のスクールバッグだ。

ずっと片手に持ってたから、てっきり、町田のかと思ってたが……カヤの、なのか？　てか、なんで俺に聞く？　確かに、カヤはそれを持って学校に向かったけど、学校指定のバッグだぞ。皆、同じのを持ってるんだ。どれがカヤのか判別できたら、さすがにひくだ

ろ。

「本人に聞きゃいいだろ。すぐそこにいるんだから」

「本間さんは大事な打ち合わせ中。邪魔しちゃ悪いもの。一方、藤本くんは暇そうに平岡くんと無駄話。当然、こっちに来るわよね」

「来るわよね、て……」

「体育館の入り口に荷物をまとめて置いてたでしょう？　このバッグもそこにあったんだけどさ、ずっと着信音が鳴っててうるさかったのよ。――どうやら、目覚ましのアラーム音だったみたいなんだけど。たぶん、リハの時間にセットしてたのね」言って、町田はバッグを開けて中から携帯電話を取り出した。「ついでに、持ち主捜そうと思って……悪いなとも思ったんだけど、電話帳をのぞかせてもらったの。そしたら……」

ずいっと俺に見せつけるように差し出されたケータイの画面。そこにあるのは――

「藤本くんしか登録されてない」呆れたような声色で、町田はずばり言い放った。「そんなケータイもってるの、ここで本間さんだけでしょう？」

「……」

思わず、口ごもる。

登録されてる番号が俺だけ……あのケータイだ。

――和幸くんしか知らない番号だよ。

たしか、俺の卒業パーティーの夜だったよな。まだはっきりと覚えているあの声。初めていたずらでもした子どものような、無邪気で愛らしい声だった。思い出すだけで、耳元がくすぐったくなるく

らい……

「わ〜、耳まで赤らめやがって！　なんだか俺、ショックだよ、和幸」

「う……うるせぇな、平岡！」

俺だってショックだ。ここまで、恋愛慣れしてないのか、俺は。砺波にからかわれて当然だったな。

「やっぱり、本間さんので間違いなかったみたいね」冷静にそう結論づけると、町田はケータイをバッグにしまって、俺に突き出してきた。「はい」

「『はい』？　これは、どういう意味だ？」

すると、町田は驚いたように目を丸くした。

「どういう意味もなにも、預かってて、て意味。分かるでしょう？昔から、荷物持ちは男の役目よ」

その瞬間、平岡が口をあんぐり開けるのが視界の端で見えた。

「男女差別の話はどこいった？」

目を薄めて半笑いで訊ねると、町田は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「男女平等の世界にも、レディファーストは存在するでしょう」

やはり、自信満々に町田は言うのだった。

インターミッション：藤本くんのお陰（後書き）

コトミの言う『同級生』はここでは、『クラスメイト』ではなく、『同じ学年の生徒』という意味で使っています。こういった『同級生』の使い方は誤用とする説もあるようですが、他にいい言い方がおもいつかなかったのでご了承ください。

不吉な再会　―上―

病室のベッドに横たわる初老の男は、じっと窓の外を眺めていた。衣を脱ぎ捨て、寒そうに身を震わせる木々に、冬が近いことを感じて寂しさに胸を痛めた。つんとつきでた細い木の枝に、一枚だけ残った衣服――木の葉を見つけて、藤本はせつない表情を浮かべた。この冬を、果たして自分は乗り切ることができるのだろうか、と疑問がわく。

そんな不安に呼応するかのように、胸に激痛が走り、ぐっと心臓のあたりをつかんだ。

さすがに若いころから無理をしてきただけあって、身体にはがたが来ていた。とうとう、主治医である筒井にはっきりと、「もう長くはありません」と告げられてしまった。

驚きはしなかった。ずいぶん前から、忠告を受けていたからだ。早々と曽良に『後継者』としての自覚を持たせたのも、そのためだ。

覚悟はしているといっても、やはり心残りは山ほどある。できれば、あと一年、いや、半年でも一ヶ月でもいい……そうみっともなく願っている自分がいる。

二十一年前、『クローンを救う会』を立ち上げ、三年にわたって同志とともに数々のクローン工場を爆破した。多くの同志を失ってもなお突き進み、ただただ破壊行為を繰り返した。秘密漏洩を防ぐために、自爆用のネックレスまで創って。テロ組織、と呼ばれても仕方のないほど過激な集団だった。もしも、対象がクローン工場でなかったなら――裏社会の闇に隠された施設でなかったなら――おそらく自分は大々的に爆破犯として指名手配にでもなっていただろう。

やがて、思想の相違からそんな彼らとも離れ、一人でクローンの子どもたちを救い集め始めた。そうして出来上がった、新たな組織

『カインノイエ』。そこで彼は『父親』という任務を得た。よくよく考えれば、それは――『父親』になることは――ずっと夢見ていた『使命』だったのかもしれない。そう、三十年前のあの日から。

これまでの道のりを振り返り、藤本マサルは苦笑を漏らす。波瀾万丈。闇に呑まれた人生。今日まで生き永らえたことが奇跡というものか。これ以上望むのは、強欲なのかもしれない。

ふいに、壁にかけてある時計に目をやると、時刻は九時四十五分を指していた。

さすがにもう港のほうは片付いたかな、と今朝『おつかい』を頼んだ娘たちの顔を思い浮かべる。レオン・リャンは大事な取引相手だ。失礼がないよう、懇切丁寧に対応してくれてるといいのだが。

しかし……初めての、子供たちだけの『取引』。みるみるうちに、藤本の皺だらけの顔に渋い表情が浮かび上がった。

いやいや、と軽くかぶりを振る。

少々、不安要素もあるが……信じてやらないでどうする、と藤本は自戒する。どれほど問題児だろうと、皆、かわいい子どもたちじゃないか、と心の中で唱えて頷いた。

「パパ」

ノックとともに、そんな『かわいい子どもたち』の一人の声が聞こえてきた。藤本は、おや、と上半身を起こす。

「砺波か？　どうしたんだね、入りなさい」

たとえ病室といえど、彼の『子ども』がノックをするなど不気味なことだった。たとえ客が来ていようがなんだろうが、カインの子たちがノックするようなことはなかった。藤本もそれを咎めようと思ったことはない。

クローンとして『創られた』彼らにとって、この世界に居場所はないも同然。だからこそ創った『カインの家（カインノイエ）』。彼らの居場所だ、ノックなど必要ない。――それが藤本の方針だった。

しかし、こういった特殊な場所では少し注意したほうがいいのかもしれない、と入院してから思うようになった。――カインの一人が注射の最中に突入してきたせいで、看護士を驚かせ、えらい目にあいかけたことは記憶に新しい。他にも顔色が悪くなるような出来事は多々あった。

いつかはそれらも大切な思い出になるのだろうが。

「あのさ、パパ」ちょろっとだけ開いたドアから、幼い顔立ちの少女が顔をのぞかせた。「わたしは巻きこまれただけ、てことをまず知っといてほしいんだけど」

「……」

嫌な出だしだ。

藤本の表情がこわばった。口許の皺に濃い影が落ちる。

「今度は何をしたんだ、砺波？」

「だから」と、甲高い声を放って、砺波は病室に飛び込んだ。ふわりとウェーブがかった黒髪が揺れる。「わたしは何もしてないんだってば。巻きこまれたのっ！」

「じゃあ、何に巻きこまれたんだ？　いや、待て。その前に、誰に巻きこまれたのか聞いておこうかな」

藤本には、それで大体、どれほど心の準備をすればいいのか把握できる。

砺波は扉の前で居心地悪そうに頬をかくと、てへっとあどけない笑みを浮かべた。

「えっと……曽良？」
「まあ、そうだろうとは思ったが」思わず、大きなため息が漏れた。やはり、前もって聞いておいてよかった、と心底思う。「で、あの子と何をしでかしたんだ？」
「だから、わたしは何もしてないんだってば。巻きこまれた、て何度も言ってるのに」
口をとがらせ、ぶつぶつと自己弁護を続けながらも、砺波は扉に振り返る。
「パパに紹介したい人がいるの」そんな砺波の声をきっかけに、扉がゆっくりと開いていく。「『フィレンツェ』から、かず――じゃくて、曽良がひったくってきた鼎（かなえ）さんよ。売られるところだったみたい」
「『フィレンツェ』からって……勝手に『お迎え』に行ったのか！？　活動は休止するように、と言ったはず――」
今は自分が不在の上、情報屋の三神も休業中。そんな状況で『おつかい』なんて危険すぎる。曽良にもしっかりと釘をさしておいたはずだったのだが。
命に関わる問題なのだ。こればかりは、しっかりと叱らなくてはならない。
身を乗り出して、厳しい表情で説教を始めようとした藤本だったが、その気は失せた。――一瞬にして。
「！」
どくん、と藤本の心臓が大きく揺れた。いつも穏やかな眼差しで子どもたちを見守っている、その目が見開かれる。呼吸も忘れ、藤本は硬直した。

窓の外で、はらりとあの木の葉が落ちたことに、気づくこともできなかった。

「あの……初めまして。鼎、と申します」

病室に足を踏み入れ、ぺこりとお辞儀をした少女。

雪のように真っ白な肌。さらりと流れる茶色混じりの黒髪。同じ色をした、特徴的な太い眉。おずおずと自信無げにこちらを見つめる瞳は、灰色がかった緑色。真ん中わけをした前髪のせいであらわになっているひろいおでこ。

心臓が不規則なリズムを刻みだす。

「パ……パパ、どうしたの？」

驚愕した表情を浮かべて凍ったように動かない藤本。そのただ事でない様子に気づいたのだろう、砺波は血相変えて駆け寄った。

「大丈夫？　筒井先生、呼ぼうか？」

心配そうな砺波の声が、ずっと遠くから聞こえるようだった。「パパ」と必死に叫んで顔をのぞきこんでくる砺波が目に入らない。その視線は、彼女の肩越しに佇む別の少女を捉えて離さない。

見覚えがある――なんてものじゃない。

面影があるのだ。

「どうかされたましたか？」

その声が、記憶に残るあの愛おしい声と重なる。

――行ってきます。

最期に聞いたあの声。忘れたことなど一度もない、あの明るい声。思い出すだけで、ぽっかりと開いてしまった心の穴に、寂しくも温かい小さな灯火を点してくれる、あの懐かしい声。

全く同じではない。だが、自分には分かるのだ。自分には――。

間違いない。

なんてことだ、と全身が粟立つ。

ここにきて、と心臓が焼けるように熱くなる。

やっと……ようやく……とうとう……そんな言葉が頭の中で次から次へと連なり、視界がゆがんだ。目頭に熱がこもって、ぽろりと頬を何かが伝った。――それは、涙。彼の三十年越しの想いが形となったもの。

がたがたと震える唇から、ようやく声が漏れた。ひどくか細い、感極まった声。

「フィリオ……」

二度と呼ぶことはないだろう、とあきらめていたその名。三十年前に亡くした、実の愛娘の名。

底知れぬ哀しみと深い愛しさゆえに許されない過ちを犯し、『罪』を産み落としてしまった若かりしときの自分。その『罪』を捜し続けた二十一年間。贖罪のときを待っていた。

そして、とうとう――

裏世界で暗躍し続けた男の、積年の呪縛から解き放たれた瞬間だった。

＊　＊　＊

ステージの幕も閉め、最後のミーティング。てわけで、出演者もはじめ、裏方も全員、ステージ上に呼び出され、アンリの演説を待

っていた。
幕の向こうでは、がやがやと人が入ってくる音が聞こえてくる。
……思ったより多そうだ。
思わず、神サマ――と、その名を呼んでいた。中止にしてくれ、と渾身の祈りを捧げたそのときだった。
「いやぁ、遅くなっちゃってすみませぇん」
暢気にへらへら笑ってステージ上に現れた『神の子』。
はは。そうだったな。神サマの関係者は今や、こんなに近くにいるんだった。しかも、ロクでもないのが。
「なにしてたのよ、ロウヴァーくん！」当然、大遅刻の主演には監督の怒りの鉄槌がくだる。「本番まであと十分なのよ！？　リハなしのぶっつけ本番じゃないのよ！？」
今回ばかりは、アンリを応援しよう。たまにはリストも痛い目にあうべきだ。神の子だからって何でも許されちゃ不公平、というもんだ。
しかし……アンリ以外の女子からいっさい負のオーラを感じないのはなぜだ。遅刻して迷惑かけた奴に、なんで嬉しそうに頬を赤らめてるんだ。リストをこれ以上甘やかすな。
「そのことなんですけどぉ」
でた。あいつお得意の『天使の微笑』。あの笑顔をされると殴りたい気分も萎えるんだよな。証拠に、怒り狂ってるはずのアンリさえ「なに？」とたじろいでいる。
「実は、オレなしのぶっつけ本番になりそうなんですよね」

「……」

静まり返るステージ。

一瞬、リストが言った意味が分からなかった。たぶん、この場にいる全員そうだろう。

『オレなし』？　って……つまり、劇を降りるってことか？　つまり――主役なし？

「いまさら、抜けるってこと！？　冗談じゃないわよっ！」沈黙を引き裂いたのは、アンリの怒号。「無理無理！　ロウヴァーくん目当てで見に来る観客だって多い――って、その前に、主役が抜けたら劇が成り立たないじゃない！？」

待てよ。劇が成り立たない？　てことは……中止か！？

雨雲のすきまから一筋の光が降り注ぐイメージが脳裏をよぎった。まさか、俺の願いが叶う？　ここにきて、リストが『神の子』らしく、俺に手を貸す――わけないか。

「そうだよ」と、アンリに続いたのは、意外にもカヤだった。「ずっと一緒に練習してきたのに――何か、あったの？」

「！」

ぎくりとして、隣に佇むカヤに振り返る。

カヤはリストを凝視していた。その表情からは緊張がはっきり見て取れた。

俺には分かる。カヤが緊張してるのは、本番前だからじゃない。カヤが気にかけているのは……

ざわりと胸騒ぎがした。

そうだ。こいつを捜しに行ったはずのユリィの姿がない。

「何かあったのか！？」

脅すような口調で、俺はカヤの質問を繰り返していた。

周りの視線を感じた。あのアンリまで怯えたような顔でこちらを見ている。そうだな、あいつの前でこんなに声を荒らげるのは初めて、か。

「パスポートに不備があったみたいで、今すぐ大使館に行かないと、郷国（くに）に強制送還されちゃうみたいなんですよね」

「は……」

パスポートに不備？

俺はあっけに取られて、固まった。なんだ、その『神の子』らしからぬ事情は？

周りはざわつき、「大変そう」と同情の声もあがっている。

「今すぐじゃなきゃだめなわけ？」

諦め半分、困り果てた様子で食い下がるアンリ。リストは「すみません」と苦笑いで返した。

ふと、その藍い瞳がばちりとこちらに向けられた。一瞬にして走る緊張。駆け抜ける悪寒。こいつが『神の子』であることを問答無用で受け入れさせるプレッシャー――畏怖だ。

――リストの言ったこと、全部、嘘だからね。

「！」

頭の中に直接送りこまれた幼い声。反射的に俺は頭を押さえていた。

――普通にして。『人形』に気づかれたくないから。

言われて、カヤを一瞥する。残念そうな表情でリストを見ている。俺の異変には気づいていないようだ。

頭においた手をおろし、平静を装う。

――そ。その調子だよ、かずゆき。

子どもの声に褒められる、てのは変な感じだな。

で？　何かあったんだな、ケット？　ユリィか？

――ニヌルタの子は外で待ってる。

待ってる？

あいつが何かやらかしたわけじゃないのか。じゃ、なんなんだ？

――『あとで説明するんで、今はとにかく本間先輩の傍にいてください』、てリストの伝言だよ。

あとで説明する？　おいおい。そんなことが通じると思ってんのか？　なんで今、教えない？　それとも……教えられない、てことなのか？

――リストは……。

急に、ケットの声に元気がなくなった。口ごもり、しばらく黙りこむ。

その間にも、アンリが代役探しに躍起になっている。リストや他の連中となにやら相談してるみたいだ。まあ、俺が血祭りにあがる

ことはないだろうから安心だ。

――リストはね、君に……ううん、君たちに楽しんでほしいんだよ。

いきなり復活したかと思ったら、突飛なことを言い出した。

俺はぎょっと目を丸くする。って、顔に出しちゃいけないんだった。

――かずゆきやパンドラには、普通に文化祭を楽しんでほしいんだよ。だから、今は言いたくないんだと思う。今はこっちのことは心配しないで、リストやニヌルタの子に任せて。

心配しないでって……すでに気になってるっつーの。楽しむ気になんてならねぇよ。変なことに気をつかわねぇで、教えろ。

――リストは本当は残りたいんだよ。本当は……劇、やりたくてしかたないんだと思う。リストにとっては、最初で最後の学校生活だから。こんなこと、二度とないかもしれない。だから、本当は参加したいんだ。でも……リストはマルドゥクの王だから。立場があるから。『使命』があるから。行かなきゃいけない。

唖然とした。

最初で最後の学校生活って……あいつ、今まで学校行ったこと無いのかよ。

――無いよ。だから、リストは友達もいなかった。一族の皆も、リストをよく思っていなかったから。ナンシェと彼女のお母さん以外は……。

ナンシェ。その名前に、ある写真の少女が思い浮かんだ。リスト

によく似た、太陽のような笑みを浮かべる少女。確か、彼女こそ自分が『創られた』理由だ、とリストは言っていた。詳しい事情までは話してくれなかったが。

――だからね、リストは、せめて君たちには楽しんでほしいんだよ。自分にはできないことだから。自分の代わりに……。

「……」

そう言われてしまうと……

俺はなんとも言いがたい気持ちになって、再び、リストを見やった。ニコニコ微笑み、アンリたちと話している。どこにも、そんな『陰』なんて見えない。まるで、劇から降りることを気にもしていない様子なのに。

最初で最後の学校生活、か。

まさか、こんな当然なものがあいつにとって特別だったとは。

リストも、本当は『普通』になりたいのかもな。『神の子』とか、『使命』とか、そんなもの全部捨てて。俺が『カイン』を辞めたように。

俺を散々おちょくってたのも、甘えてただけなのかもしれない。きっと、はしゃいでいたんだ。

にこにこ振りまくあの笑みも、ああやって隠してるだけなのかもしれない。『神の子』として抱いてはいけない、自分の望みを。

『使命』に苦しんでるのは、カヤだけじゃない、か。

「そうだ、和幸さんがいいんじゃないかな。オレの代役」

俺を指し、大きな声でそんなバカげたことを言い放つのも、全て、重い『使命』を背負う苦痛から――って、え？

「ちょっと、待て！」と、慌てて声を張り上げる。「なんつった、今！？」
「冗談よしてよ、ロウヴァーくん。和幸には無理無理」
「そんなことないですよ、近江先輩」ブロンドの髪をさらりとなびかせ、アンリに振り返ると、ここ一番の笑顔を向ける。「オレが推薦します。和幸さんに代役を――」

アンリはぼうっとリストを見つめている。どこか、心ここにあらず、な遠い目。
その瞬間、ハッと気づいた。
まさか、あいつ……神の力を――！？

「そうね」とアンリは寝ぼけたような声でつぶやいた。「和幸に頼もっか。あいつ、記憶力いいし。セリフも大体覚えてるわよね」
「リスト、お前、反則――！」

取り乱しかけた俺の腕を、誰かがつかんで止めた。

「いいじゃない、和幸くん」俺と違って、落ち着き払った穏やかな声がした。「私も和幸くんが相手なら、やりやすいよ」
「……カヤ」

俺の勢いは一気にしぼむ。カヤに言われると、俺も弱い。しかも、そんな懇願するような目で見られると、余計に……。
その隙をつくかのように、「決まりだっ！」とリストが意気揚々と声をあげた。

「これで安心して、大使館に行けますよ～」

ひらひら手を振り、さっさとステージをあとにするリスト。名残

惜しそうな黄色い悲鳴があがる。

「あれのどこが『神の子』なんだ」

怒りにわななきつつも、俺は押し殺した声で悪態づいた。

やっぱ、俺をからかって楽しんでるだけだだろ、あいつ。

＊　＊　＊

外に出ると、体育館へと流れていく人の波ができていた。結構、観客いるんだな。近江先輩、相当告知したんだろう。たぶん、本間先輩とオレの名前を使って……。「リストくぅん、楽しみにしてるからね」と手を振ってくる同級生たちに事情を説明する時間もなく、罪悪感を押し殺して手を振り返す。

――そんなにのんびりされていて、よろしいのでしょうか。

不安と焦りに満ちた声が頭に響いた。ケットじゃない。別の天使だ。

「大丈夫だよ」と声に出して答える。「向こうから近づいてきてくれてるんだから。急ぐ必要はないでしょ」

人だかりに混じって、ユリィ・チェイスが珍しく真剣な表情を浮かべて立っていた。オレは口許だけ笑って、睨みつける。

「何か、罠でもあるなら別だけど？」

「まだ、オレを信じてないんだね」ユリィ・チェイスは責めるような口調でつぶやいた。「兄さんの天使・レッキの気配がある、て伝えたのはオレなのに」

「お前が来たときには、ケットも気づいてたよ」
「じゃあケットは、レッキに近づいているもう一つの気配には気づいてるの？」
もう一つの気配？　そんな話、聞いてないけど……どうなんだ、ケット？
――ちょっと待って。気配を探ってみる。
待つ必要はなかった。すぐにケットは「あ！」と、頭痛でも引き起こしそうな甲高い声を鳴らした。
――バール！
そう一言だけ、ケットはオレに告げた。それで充分だった。
「アトラハシスか」
嫌な予感がして、ぞっとした。同時に、そりゃそうだ、とうっかりしていた自分に腹が立った。
「ニヌルタの王に一番会いたいのは、アトラハシスに決まってる」
「仇討ち」
ぽつりとユリィ・チェイスが漏らした言葉に、オレは「無謀だよ」とすぐさま返す。
「ニヌルタの王もオレと同じ。不死だ。たとえバールでも、あいつを殺すことはできない。アトラハシスだって、それくらい分かっているはずだ。会っても、殺されるだけ」

「それでもいい、と思っているのかもしれない」ユリィは重い口調で唱えた。「彼にはもう、失うものはないんだから」

「！」

先代リチャード・マルドゥクの姿が脳裏をよぎった。「わたしのせいだ」と罪悪感に打ちひしがれ、苦渋に満ちた表情で祈りを捧げていたあいつの姿が。

『パンドラの箱』が開かれたあの日、アトラハシスの神殿に駆けつけたリチャードは思わぬ惨状を目にした。――横たわる、息絶えたアトラハシスの末裔たち。

身体には傷一つなく、全員、眠ったように死んでいたという。それであいつは確信したんだ。ニヌルタの王が『冥府の剣』でアトラハシスの一族を皆殺しにしたのだ、と。

だが、神託を受け、王を継いだはずの少年だけは見当たらず、リチャードはその身をひどく案じていた。『箱』とともに逃げ延び、どこかで身を潜めていてくれるといいのだが――いつもそう言っていた。

「止めなきゃ」

オレはぐっと拳を握りしめ、つぶやいた。

「今度は……手遅れになる前に」

リチャードの過ちは繰り返さない。アトラハシスの生き残りを、なんとしても守らなきゃ。

『使命』とは違う。オレにはその義務がある。

踵を返し、走り出そうとした――そのとき。

「パンドラは！？」

ユリィの鋭い声が背中に刺さってオレは足を止めた。振り返り、
「和幸さんに任せた」と簡潔に答える。
アトラハシスがニヌルタの王に接触しようとしている今、ラピスラズリの指摘通り、のんびりしている場合じゃないんだ。
だが、ユリィはすっきりしない様子で動こうとしない。ちらりと体育館に一瞥すると、

「パンドラの恋人、大丈夫なの？」
「何を、いまさら」しゃべっている場合じゃないってのに。「和幸さんは信用できるよ」
「そういうことじゃない。彼は普通の人。こんなときにパンドラと二人きりにして、彼が危険な目にあったら……」
「そっちの心配か」

そういえば、ユリィは和幸さんのあっちの顔を知らないんだったな。『殺し屋』だ、て言ったら驚くかな。いや……『殺し屋』だった、か。
今は、そこまで説明する暇もないけど。

「和幸さんは『普通の人』じゃあないから大丈夫」
「『普通の人』じゃない？」
「そ。あの人もクローンだしね」

へらっと笑って――そして、ハッとした。やばい、と全身に電流が走ったような衝撃がかけぬける。
――リスト！　何、考えてるの！？
天使の叱責が飛んだ。

ええっと……いや、たぶん、何も考えてなかった。
ユリィは訝しそうに顔をしかめて小首をかしげた。オレはごまかそうと満面の笑み。

「さ、早く行こ――」
「君もクローン、てこと？」
「！」

やっぱ、聞き逃してくれるわけないか。オレは目を側め、逡巡してから「まあ、そうなるかなぁ」と曖昧に返す。
神の一族がクローンに手を出すなんて、最大の禁忌だ。マルドゥク家の中でも、オレの正体を知ってたのはリチャードだけ。
まさか、ニヌルタの奴に知られるなんて。

――というか、リストがバラしたんでしょう。

ジト目で睨むケットの顔が思い浮かんだ。
う……言い返せない。その通りだ。和幸さんと関わってから、どうも『クローンは秘密』って意識が薄らいじゃって。

「誰のクローンなの？」
「誰でもいいでしょ」
「……」

ユリィは黙りこんでしまった。感情が伺えない、何も考えていないかのような顔に戻ってる。
視線が痛い。軽蔑の眼差し……ではないみたいだけど。観察されてる昆虫ってこんな気分なのかな。

「どうして」と、やっとユリィは口を開いた。じっとオレを見据え

たまま、「どうして、君が『聖域の剣』を持ってるの？」
「！」
痛いところを……。見た目に反して、鋭い奴。
マルドゥク、ニヌルタ、アトラハシス――それぞれの王は、神託によって選ばれる。神がそれぞれの天使の口を借りて継承者を名指しし、その人物に王が『贈り物（ドラ）』（マルドゥクは『聖域の剣』、ニヌルタは『冥府の剣』、アトラハシスは『守護者の鏡』）とともに王位を譲る。それがしきたり。
当然、神がクローンであるオレを選ぶわけはない。『マルドゥクの王がクローン』なんておかしな話ってわけ。
オレは何も言えずに、目を逸らした。
そんなオレの反応にユリィは悟ったらしく、「そっか」と憐れむような声を漏らした。
「……本当の継承者は、そのことを知ってるの？」
はっきり、言ってくれちゃうな。一番、触れられたくないところを張り手でもされたかのようだ。
喉につまっていた息がどっと流れ出て、大きなため息となった。
ここまで躊躇なく言われちゃうと、隠すのもくだらなくなっちゃうよ。
「知らないよ」と、半分やけくそであっさり答える。「オレが選ばれたんだと思ってる」
「そう」
ユリィは目を細め、息をついた。そして――
「マルドゥクもとんでもないことをやってのけたものだね」

嫌味でも皮肉でもないようだった。ユリィは、誇らしげにさえ見える笑顔を浮かべてそう言った。褒められたような錯覚にさえ陥った。

それ以上の詮索はなく、ユリィは「さあ、行こうか」と普段の眠そうな声で促した。

不吉な再会　―下―

「フィリオ？」

砺波は思わぬ名を耳にして、ぎょっと目を見開いた。

その名を知らないわけはない。カインなら。藤本マサルの『子供』なら。

しかし、なぜ？

砺波はごくりと生唾を飲み込みながらゆっくりと振り返る。父の視線を追うように。

「あの、どうかされたのですか？」

病室に漂う張りつめた空気に、ほんわかと柔らかな声色が混じる。

病室の入り口でおどおどとしているのは、砺波が曽良から夕べ預かった女性。自分が貸した黒いワンピースに身をつつんだ、儚げで気の弱そうな鼎という名の女性だ。和幸と曽良が『フィレンツェ』から盗んで来たという『競売品』。

そんな彼女を、父は「フィリオ」と呼んだ。

なぜ？　と、砺波は表情を曇らせた。

――なぜ、目の前の女性を、三十年も昔に亡くした娘の名で呼んだの？

「フィリオ」と再び、藤本は震えた声でつぶやいた。「ようやく……ようやく、お前にたどりついたんだな」

今にも立ち上がらんとする父の気配に気づいて、砺波は慌てて振り返った。

「パパ、休んでなきゃ――」
「ずっと捜していたんだ。お前に謝りたくて……二十四年前の過ちを、お前に謝りたかった。すまなかった、フィリオ！　わたしは『創られた』子供が裏でどんな扱いを受けるかなど、あのとき何も知らなかったんだ。だからお前を……まだ赤ん坊だったお前を手放してしまった！」

砺波は見たこともない父の様子に恐怖さえ覚えていた。自分の声など聞こえていない。夢中で鼎に訴えかけている。
藤本の身体をおさえる自分の腕が震えている。
たまらなく嫌な予感がしていた。

「なんのお話をされているんです？」

鼎の声が急に低くなった。冷たくも感じるような声。藤本の異様な様子に気味悪がっているのだろうか。

「いつか、いつかこうしてカインの子供が連れて来てくれるんじゃないか。そう信じて待っていたんだ。二十年以上も、ずっと……いつかお前にたどり着く、と。お前はどこかで生きて『迎え』を待っている、と信じていた」
「おっしゃっていることが分かりません」まるで感情がないかのような声が響いた。「私の名は鼎です。人違いではありませんか？　フィリオなんて、聞いたことも――」
「フィリオは三十年前に死んだ私の娘。そして君は……私が創った」

砺波は瞠目した。
心臓が激しく揺れて、刺すような痛みが走る。

「つくっ……た？」

藤本には娘がいた。本物の。
フィリオという名の少女。
藤本から直接聞いたことはない。だが、姉たちから聞かされたことがある。三十年ほど前に、藤本は幼い娘を亡くしたのだ、と。それがカインノイエができるきっかけだということも。
具体的な事情は誰も知らないようだった。交通事故で亡くなったようだが、それがどうカインノイエと関係しているのか。なぜ、それがきっかけで藤本はこんなクローンのための慈善事業のようなものを始めたのか。全ては謎に包まれていた。
ただ、藤本がその娘を今でも愛していることは、大事にデスクに置かれた写真からも明らかだった。

「！」

写真――砺波ははっとし、視線を横にずらす。
ベッドの横に置かれた机。花瓶に生けた花の陰で、こちらに微笑みかけている少女がいた。
全身から血の気が引くのを感じた。
砺波はとっさに藤本から離れ、よろめくようにあとずさった。
鼎と会ったときに感じた親近感のようなもの。どこかで見たことがあると思った……。

「砺波」

ようやく、藤本の視線がこちらに向けられた。しかし、それはもう砺波の知る父の眼差しではなかった。――赦しを請う罪人のそれ。

「……すまない」

重く苦しげな声だった。
だらりと頭を垂れた藤本の姿に、父の威厳はどこにもなかった。
砺波はぎゅっと唇を噛み締めた。
悔しさなのか。恐怖なのか。寂しさなのか。絶望なのか。はたまた、そのどれでもないのかもしれない。
ただ、涙がぽろりとこぼれていた。
人前で――たとえそれが藤本マサルであったとしても――涙を見せることは砺波にとって何よりも許せないことだ。だからうつむくことしかできなかった。
まさか、クローンである自分を救ってくれた父が……。
砺波はぎゅっと拳を握り締める。
こんなとき、一番会いたい奴はもう手の届かないところに行ってしまった――その事実が余計に砺波の心を孤独に染めた。唯一、自分が泣ける場所だったのに。

「いったい、なんの話だ！？」

急に鼎の口調が変わった。
カツカツとヒールを鳴らして近づいてくるのが分かった。
鼎は、砺波の隣――藤本のすぐ目の前に立ちはだかった。荒い息遣いが聞こえてくる。
よほど動揺しているのだろう。
目の前に、自分を『創った』人物がいる。どれほどのショックだろう。同じクローンである自分にさえ想像もつかない。それでも、今の砺波に他人を同情できるほどの余裕はなかった。

「わたしは一人娘を失った。三十年ほど前のことだ」

感動の親子の再会とは程遠い張り詰めた空気の中、冷静な藤本の声が流れた。

藤本はそっと写真に手を伸ばし、それを鼎に差し出した。
鼎はしばらくそれに目もくれようとはしなかったが、
「わたしの娘だ」
促されるようにそう言われ、藤本を睨みつけながらも震える手で受け取った。
覚悟を決めたのだろう、その翠色の瞳はゆっくりと手にした写真へと向けられ、そして――
「っ！！」
まさに、それは声にもならない悲鳴だった。
力の抜けた指先から写真たてがこぼれおちる。
鼎は吐き気をもよおしたかのように口許に手を当てよろめいた。近くの机に倒れ掛かるようによりかかり、真っ青な顔で足元を見つめている。
彼女の足元に横たわる少女。
鼎にしてみれば、それは自分の知らない自分。覚えのない場所で他人のように微笑む自分。
その笑顔は残酷なほど無邪気に彼女の存在を否定する。――それはクローンが最も恐れる存在。ホンモノ。オリジナルと呼ばれる存在。
あまりに痛々しい様子に、砺波は見ていられなくなって視線を逸らした。
「いや……」と鼎は消え入りそうな声を漏らす。
「わたしはどうしても娘の死に向き合えず、クローンに……手を出した。だが、事情があってお前を手放さなきゃならなくなった。すまなかった。わたしは何も知らなかった。裏の世界でクローンがど

んな扱いを受けているか、知らなかった。だから、わたしは組織を創ったんだ。お前を救い出すために。そして、お前のような子供たちを育て始めた。それがカイン。ここにいる砺波もその一人だ」

「……私を……救うため……？」

もしかして、これで終わりなんだろうか。砺波の脳裏に、そんな疑問がぽかりと浮かんだ。

自分はとうとう、居場所を失うのだろうか。

クローンである自分が唯一存在を許された場所、カインノイエという名の家。クローンである自分が手にした存在理由、それがカインだった。

でも……自分たちの父――神に等しい存在である藤本マサルは、今、求め続けていたものを手にしてしまった。本当の娘を手に入れた。彼が自分たちカインを創り出した目的は……達せられたということなのだろう。

そうだ、どうせ自分はまがい物。藤本の娘でもない。そのクローンでもない。ただ、彼女を……鼎を捜し出すために拾われただけに違いないんだ。

「私を……私を捜すためだったと言うの？　あなたが『無垢な殺し屋』を育てあげたのは、私を……」

「そうだ」

「……っ！」

その瞬間、鼎はいきなり机の上の花瓶を手に取り、藤本の頭を目がけてそれを叩きつけた。

散り乱れる花びらの中、透明のガラスが輝きながら舞い飛ぶ。

あまりの出来事に、砺波はすぐに反応ができなかった。

「うがっ……」

くぐもった悲鳴をあげて、藤本は頭を押さえて体を丸める。
そんな藤本の胸倉をつかんで、無理やり体を起こさせ、鼎は手に残ったガラスの破片を振りかざした。
そこでようやく、砺波は我に返って鼎に飛びつく。

「ちょっと、鼎！」

放り投げた砺波のバッグから、場違いな軽快な音楽が流れ出していた。
マナーモードにするのを忘れていたようだ。こんなときに……と苛立ちながらも、鼎の腕をつかんで思いっきり引っ張る。

「落ち着いてっ！　取り乱す気持ちは分かるけど、やりすぎだっての！　冷静に……」

なんとか藤本から鼎を引き離せた、と安堵した。
そのときだった。

「！」

砺波は焼けるような熱を腹に感じて、固まった。
なんだ？

「砺波！！」

ひどく取り乱した藤本の叫び声が聞こえた。だが、それもずいぶん遠くに聞こえるほどかすんでいる。
何が起こっているのか、さっぱり分からなかった。
下っ腹に感じる熱が徐々に増していく。これは……痛み？　そう

自覚した瞬間、全身に悪寒が走る。一気に体温が下がって、全身が震えだした。
足に力も入らず、砺波はがくりと膝からその場に崩れ落ちた。
「は……は……」
何が起きた？　何が起きている？
恐怖が忍び寄り、大蛇のごとく砺波の身体に巻きついていく。
砺波は救いを求めるように、目の前にたたずむ女を見上げた。
そこにいるのは、どこかカヤを思い起こさせる気弱そうな女……のはずだった。
「浅かったか」
「！」
侮蔑するような眼差しで自分を見下ろし、冷たい声で吐き捨てた女に、温かみなんてまったく感じられなかった。透き通るような灰色交じりの翠には、どす黒い炎が宿っている。それがはっきり見えた。
鬼……そんな言葉が自然と浮かんでいた。
ほっそりとした腕には、ナイフのようにとがった鋭いガラスの破片。そこから滴る血が、砺波の目の前にぽたりと落ちた。
ああ、そうか。砺波はかすむ意識の中で悟った。――刺されたんだ。パパの『娘』に。
「砺波！　大丈夫か、砺波！？」
「黙っていろ。一言でも喋ったら、このガキに止めを刺す。もちろん、動いてもな」
「……」

鼎は鼻で笑って、自分を跨いだ。コツコツとヒールの音が背後でする。
物色するような音がして、やがてそれまで騒がしく鳴っていた音楽がやむ。
「もしもし？　ええ。時間よね、分かってるわ。こっちは終わったから。あとは兄さんたちよ」
兄さん？
砺波は床にはいつくばりながら、眉をひそめた。
どういうことだ。あれは、間違いなく自分のケータイの着信音だった。なぜ、鼎の知り合いから電話が？
いや、そんなことより……なぜ、鼎は自分を？
てっきり、出生の真実を知ってパニックに陥ってしまっただけだと思った。――でも、違う。彼女からひしひしと感じる。恐ろしいほどの憎悪を。
なぜ？　同じクローンなのに？　助けたのに？
「分かってるわ」悦に入ったような鼎の声が聞こえた。「茶番劇はもう終わり。――さ、復讐劇を始めましょう」
パタン、とケータイが閉じる音が響いた。

不吉な再会　―下―（後書き）

更新がだいぶ遅れてすみません。ちょっと自信喪失しておりました。
そして、この展開……。賛否両論ありそうですが、ご感想、コメントなどいただけると大変助かります。
ここまで読んでくださっている方、本当にありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5199h/

終焉の詩姫

2011年11月12日10時42分発行